

IS 西の男性操縦者

チャリ丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女性にしか動かせないはずの『IS』。しかし、日本の少年―織斑一夏―は受験会場を間違え、なんと男性にしてISを動かしてしまう。

彼が『世界最強』である織斑千冬の弟だから、ISの開発者である篠ノ之束と親しい仲だから、という世間の声飛び交う中、関西に居るとある少年は冷静にツツコミを入れていた。

『…なんで試験会場間違えんねん。アホやろこいつ。あー、どうせイケメンやねんやろ？イケメンやったら何でもできるんやろ？いいなー！どっかにイケメンになれる薬とか売ってへんかなー!!…あ、クソでつかい鼻くそ取れた』

…これはそんな少年の物語……

目次

プロローグ

開幕 アホちやうかこいつ | 1

ああ〜心がぴよんぴよん…ああ!?!セーへんねんけど?! | 11

純粹と狡猾は純粹の勝ち | 19

副会長 | 24

原作開始

圧倒的コミユカの差 | 29

劍ちゃんの学力 | 34

ノリの違いと金髪ドリル | 38

金髪ドリ子と女共 | 46

同級生と寂しさ | 52

vsセシリア 専用機の名は | 58

所属と妹とオルコット | 67

お気に入り登録2000人突破記念閑話 ⅠS学園の職員室と | 75

日常

あだ名 | 82

パーチーとコンビ登場 | 89

鈴ちゃんなう!! | 96

微妙に続くシリアス

更識 簪 | 102

姉妹 | 107

また喧嘩 | 116

対抗戦へ | 123

お気に入り登録2500人突破記念閑話 Ⅱええ歳した女達と | 123

男子の夜	132
怒れる獅子	140
vs 侵入者	149
名探偵剣ちゃん『転校生とカオスな1日 前編』	158
名探偵剣ちゃん『転校生とカオスな1日 中編』	164
名探偵剣ちゃん『転校生とカオスな1日 後編』	173
特訓と想い	180
真実と想いと	189
黒兎	195
ペアとその後	203
合わせてくれる人がペアだとやりやすいという訳でもない。	
212	
決闘！vsラウラ	219
vs VTS 死闘と覚悟と告白と	225
33話だよ！全員集合!!	
時守剣、家を買う	247
原作3巻 臨海学校編	
悩みと真実	255
招かれざる客達	262
デート セシリア編	272
お気に入り登録3000人突破記念閑話 織斑千冬の1日	286
デート 簪編	292
デート 刀奈編	304
デート シャルロット編	320

臨海学校―開始	333
水着（拜見済み）と勇姿（馬鹿やってるだけ）	340
入浴と恋バナ	354
天災、襲来	363
ブリーフィング	369
一夏墜つ、時守	377
目覚めるヒーロー、散る英雄	385
再激闘と心層世界	396
波打ち際のデッドヒート	409
たった1人の最終決戦	420
帰還、帰還	430
原作4巻 夏休み編+α	
期末テストと（世）紀末テスト	439
弾蘭剣	449
大人のお姉さん's（笑）	462
極秘実験	474
女子会	483
ご挨拶（？） inイギリス	492
ご挨拶 inフランス	500
掃除と訓練	512
ご挨拶（大嘘） in更識家	520
関西人、襲来	532
原作5巻 文化祭編	
二学期、スタート	548
学生の…宴が始まるーッ!!	558

in the sky.	777
Nucleic of endless battle is	
765	
After to be decided partner.	754
established.	740
Equation of win is about to	
today.	740
None could start usual day	
rowth.	722
One of the determination to	
g	
原作7巻 全学年専用機持ちタッグマッチ編	
澱む意思	712
這い出る狂気	698
最速の決戦	690
束の間の休息	679
祭りの後に残るのは思い出と筋肉痛	670
原作6巻 キャノンボール・ファスト編	
閑話 〓第一次世界〇〇大戦〓	664
闘の式 続と後	647
闘の壺 始まり	629
灰被り姫と新たな男子	619
学園祭、スタート	608
日常と非日常	591
死闘? 金夜叉vs白式!	576
生徒最強の力	564

	Delivered Notification of tou
	rnament to his former.
	Occasionally, Hit is their bad
	premonition.
	No battle, no growth.
	Like the Lightning.
	Your power is.
原作8巻	ワールド・ページ編
平和な日常	
EOSと面倒事	
TAS	
原作9巻	運動会編
	乙女達の闘い、開幕
	乙女達の戦い、終幕
	慰労会という名のストレス発散
原作10巻	修学旅行編
帰省	
観光、後に	
京の夜に舞う光たち	
白	
ご褒美タイム	
新たな発見	
ブーメラン移動で再び京都へ	
明かされること	
原作11巻	エクスカリバー編
1015	
1002	
991	
979	
965	
953	
941	
929	
911	
893	
881	
869	
858	
847	
835	
821	
810	
799	
789	

やはりどこでも歳末は忙しい。	1031
恋人かそうでないかは大きく違う。	1042
いざ欧州へ	1055
師匠と弟子	1066
2度目のフランス	1077
幾度目のデユノア社へ	1087
金髪はとことん良い奴かそうでないかに二分されやすい	1099
2度目のイギリス	1101
200%	1111
激戦	1121
ようやくまともな誕生日パーティー	1132
原作12巻 セブンス・プリンセス／紅椿繚乱編	1144
彼らの冬休み	1156
穏やかな年越しのはずが無く	1168
ぶつちやけ初詣に晴れ着を着ていく人はそんなにいない	1180
彼と彼女の休日	1191
年始は案外めんどくさくない。	1203
本気	1213
時間は止められない	1225
決戦前夜	1237
いざアメリカへ	1248
原作13巻 対亡国機業編	1259
開幕一番	1270
削り、削られ	1280
陽炎	1291

隠されていた力
時間と世界

13031291

プロローグ

開幕　アホちやうかこいつ

キイイイイイイン

「……は？」

たった今、俺ことー時守ときもり　剣けんーはISを動かしてしまった。

「けんちやーん、どーしたー？」

「な、なんもないなんもない！何もなくてー！」

元クラスメイトの子が仕切りの外から聞いてくる…

何もあって!!なんでや！ISって女性しか動かさへんのちやうんか

！

「ど、どーゆーこつちや？せんせ。」

「し、知らんわ…時守くん……女？」

「何真剣な顔してゆーとんねん。ちゃんと付いてるわ。見せたらか？」

男性のIS適性検査が全国で行われることとなり、中学を卒業したにも関わらず、俺たちは強制的に学校に集められた。

「…彼氏でも無いのに見たくもない。」

「んなら俺がなつたらろかー？」

…殴られました。酷い先生やわ。こんなんやから彼氏できひんねん。

「セクハラ発言するからや。…真面目にやばいで、時守くん。」

「…せやな…」

こうなつたんも元は―織斑一夏―とかいう男子が受験会場間違つてISに触つて動かしたから、『それやったら全国でも探そーや』と なつたから。…はた迷惑な…頑張つて地元でトップの公立高校に受 かつたのに…こいつのせいで、俺は今猛烈に迷っている。

「IS学園入ったら何人彼女作ろかな。」

こ れ や。

「ほんま不純やな、動機が。」

「だつてハーレムやる!?男の誰もが羨む展開やねんで!」

「…でも東京の方つて女尊男卑流行つてるらしいで。」

「はいでたー。やっぱ東京行きたくないわー。な、先生知ってる?

デイズニ〇ランドつて東京に無いねんで?」

「それぐらい常識やで、時守くん。」

マジか。小学校の修学旅行で行つたとき『千葉県に入りまし たー。』つてバスガイドさんから聞いた時の絶望感の何たるや。これ からどこに連れていかれんねんつて思つたら『東京デイズニ〇ラン ド』つて…俺そん時初めて知つたのに…

「東京も悪いところちゃうつて。」

「そうは言うけどな…だつて向こう…阪〇ファン少ないやろ?ここ やつたら皆〇神ファンやから盛り上がったけど…」

「そこかい!まあ先生も分かるけど。」

「しゃーなし俺が布教してきたるわ。」

「え、もう行く気なつたん?」

「え?強制やろ?」

「うん。」

聞く必要ないやん、何やねんこの先生。3年間ずっと担任やつたけ ど全くつかみどころのない先生。唯一野球のことだけはひたすら語

れた先生。

「…多分今日中に時守くん家に政府の人かIS学園の人行くと思うから、ちゃんとお利口さんにしときや。」

「馬鹿にしてるやる先生。精々全裸で舞つとくわ。」

「ん、そうか。」

…ツッコミ入れろや！

「…多分IS学園これよりノリ酷いで。」

「は!?!…うーわー。無いわー、マジかー、まあええわ洗脳するし。」

「洗脳で…別に超能力持つてへんやる?」

「うん、無いよ。そんなん。」

ある訳無いやろそんな能力。ただこの俺のアホなテンションを思い知らせたるだけや!

「ドンマイやな。IS学園の生徒」

「そっちかい!!」

「当たり前やん。時守くんみたいな問題児…でもないか、まあとりあえず入学したら一発かましてきーや。」

「もちもち、クラス爆発させたるわ!」

「…笑いな意味で?…やめとき、時守くんめっちゃ滑ってるから。」

「失礼やな先生。…まあなんだかんだで楽しみやけど…」

正直不安や。これから何がある、とか全く分からんし、ISのことなんて全然勉強してないし。

「不安やったらまた電話してき、いつでも相談ぐらい乗ったるから。」

「おー、さすが一応先生なだけあるな。」

「一応は余計や。…でも気いつけや?何があるか分からんし。」

「おっけー。…彼女とかゆーたけど絶対無理やるな。」

「多分な、リア充爆発したらええのに。」

「初めて野球以外で先生と考え方合ったわ。」

モテ男は死んでしまえ。爆発でも可。これは我が中学の卒業生男子一同のスローガンであった。確か中二ぐらいの時に『時守ってまあ

まあやと思うけどな』って女子に言われたけど、どつかでそういう女子は『私とは釣り合わない』って思ってるっていうのを見た。

「話変わるけど時守くん家どないすんの？」

「あ……継げへんやん……」

俺んちは実家が定食屋である。高校は普通に通って大学に行くか継ぐかはその時決めろ、っておとんから言われててんけど……

「継ぎたかったなー」

「クラスでも有名やったしな、時守くんの手作り弁当。」

「皆に喜んで貰えるんやったらこつちが嬉しかったし……ああ……どないしょ、ほんま。」

「多分一生ISに関わることになるで。」

なんか急に真面目モードになってんけど、この先生。

「それやったらISで料理して定食屋開くわ。」

「ほんま何をどうしたらそんな考え出てくるんか分からんわ。」

「いや、おもしろいやん。デカイロボットが料理作んねんで？」

「……分からんわ。……とりあえず、一旦家帰って親御さんに事情説明し？」

「ハーレムにぶち込まれるってこと？」

「ちやうわ。」

「嘘や嘘。じゃ先生、行ってくるわ。今までありがとーな！」

……とりあえず、また勉強せな。

「IS学園から来ました、織斑千冬です。時守剣君はいらっしゃいますか？」

親いーひんから家で全裸で舞ってたらマジで来はった。

…今日定休日とか言って帰ってもらおかな。まあ店の方じゃなくて裏にある家のインターホン押した時点でもう無理やとは思っけど。とにかくまず服を着て、と…

「あー、すみませんねー。今日定休日なんですよー。」

「…君が時守剣、か。ISを動かしたのは知っている。そのことについて話があるんだが。」

え、無視っすか？つてかもうバレてんの？…来るん早すぎやろ。

「ISの特別使用許可が下りたのでな。問題ない。」

「…心読めるとかマジヤバイっすね、ええつと、千冬さん？」

「…今はそれでいいが学園では織斑先生と呼べ。」

入ること確定なんすね。

まあいつまでも玄関に、とはいかないので家の中に入ってもらおう。

…んー、良く見たらどっかで見たことあるような無いような。…無いな。

「もしかしてテレビ出てたり出てなかったりラジバンダリ？」

「…一応出てた、とは思うな。あれだ。ISの世界大会だ。」

「えーマジすか!?!めっちゃ有名人ですよん!?!あ、ちよつと、ちよつと待ってください!!」

部屋にダツシユー！えーつと、これとこれとこれと…あとこれ！

「す、すみません待たせてしまって…」

「ああ、別にいいが…なんだ？それは？」

「色紙っす、サインとか写真とか欲しいんですけど…」

「…まあいいか。」

よっしやあ!!

世界最強のサインと世界最強の写真と世界最強とのツーショットをゲットした。つぶやいたら絶対炎上するわ…んー…

「?どうした?」

「いや、店のどこに飾ろっかなって」

「…商人なんだな。」

「まあおとんと2人で切り盛りしてるんで。おかんは普通に働いてますし。」

「…仲はいいのか?」

その瞬間、千冬さんの顔が少し暗くなるのを俺は見逃さなかった。

「ええ、…幸いこの辺の府県は女尊男卑が広まって無いんで。誰かを貶すより自分で頑張ってるなんかした方が人生楽しいですし。」

「…そうか、いい考えだな。全く、関東の方もこちらのような人ばかりならいいんだが…」

聞く限り関東の方は女尊男卑の風潮が激しいらしい。ああ…

「…憂鬱だ…」

ですよね。さすがに被っちゃいますよね。

「あ、さき。どうぞ、お茶です。」

「む、ああ、ありがとう。」

ズズズ…

「はあ…」

「大変ですね、織斑一夏って…弟さんですか?」

「ああ、…仕事が増える…」

「…なんかすみません、俺まで動かしちゃって」

「いや、いいんだ。元々あいつが触らなかつたら適性検査等行われなかつたしな…はあ…」

「…だいたい疲れ溜まってますね?」

「ああ。世間一般では世界最強とは言われているが…私も人間なんだぞ…」

うん、せやな。世界最強が実は機械でしたー！とか笑えへんわ。

「愚痴…聞きますよ？」

「…何もかもな…っ!!何もかもあの兎のせいなんだ!!!アイツはいつもいつも私に——」

1時間後

「済まなかったな時守。おかげで久しぶりにスッキリした。…悪くないな。」

「ええ、俺もスッキリできたんで大丈夫っす。ストレス貯めるのは良くないですしね。」

あれから愚痴を始めた千冬さんを一旦外に連れ出し、金を払ってとりあえずドアの中に入り、2人で汗を流した。

「…にしてもナカナカの速さだったが…よく出来たな？」

「小学校ぐらいから足腰は鍛えてましたし、ちよつとやってたんで…自信はありますよ。」

「振るう速さも素晴らしかったぞ。」

「やったー！ブリュンヒルデに褒められたー！」

「あまりそう呼ばれるのは好きでは無いが、こういう所では悪い気は

せんな。」

「千冬さんって何かやってたんですか？なかなかよかったですけど。」
「ああ、剣道を昔な。」

へー、やっぱやってたんや。後恐らくこの人は天性の何か、を持つてる。じゃないと初めてでアソコまで振れへん。

「俺もやってたんですよ。剣道。まあ堅苦しいのがあわへんって思っ辞めたんすけどね。」

「…ということは剣術はそれなりか？」

「うーん、今は鈍ってますからねー。どうでしょ？」

「ふ、何。大丈夫だろう。こつちの方も良かったんだ。この目で見て、体感したこのブリュンヒルデが保証する。」

おおぅ…なんて説得力…

「今日は初めての体験だった。感謝するぞ時守。」

「どういたしまして、です。…俺も久しぶりに動いたなー。」

あんなに振ったのは久しぶりや。千冬さんもかなり振っていたが、最終的には俺がずっと振って、打っていた。

「1時間か、そろそろいい時間だな。戻るか。」

「はい。…ああ、俺のIS学園入りは…」

「そう悲観するな。まあお前なら好かれるさ。…向こうでまたやるか。」

「やったら良いんですけど。…そうですね、またやりますか。」

そう言っただけ俺たちは

バッテリーングセンターを出た。

「ところでストレス発散とは言えバッテリーングセンターに行く意味ありました?」

「ああ、何となくはお前の身体能力は分かった。」

「ほほう。いかほどで。」

「悪くは無いが…決して良すぎる、という訳でもない。必死にやれば、という感じだな。」

「なるへそ。」

必死に…か…、あんま今まで何かが続いたこと無いねんけど…

「参考書やら入学要項はしっかり読んでおけよ?入学式からいきなり

授業だからな。」

「キチガイですか？」

「そういうな。ISの授業に普通の高校の授業もあるんだ。…詰めなければ無理なんだ。」

「そ、それはそれは…」

千冬さん…めっちゃ傍若無人っていうか…ぱつと見分からんけどかなり苦労してそう。

…そんな時、千冬さんの携帯がなる。

いや、音量デカすぎでしょ。しかもなんでターミネーター○のテーマやねん。イメージ合いすぎて…

「ん？…ああ、山田くんか。」

山田くん？ののちゃんか？それとも笑点の人か？

「…は？…何？…ああ、…つまりは連れていけど。…全く…」

なんでしょ、嫌な予感しかしないんですけど。

「…分かった。では…、時守、IS学園に來い。」

「…え……」

ええええええー…

まだ服とか買ってないのに…

ああ、く心がびよんぴよん…ああ!?せーへんねんけど!?

「IS動かしちゃった…と、うわっ、一瞬で既読159とか…きつしよあいつら…」

トークアプリの学年のグループトークでIS動かしたってこと言ったらこれや。

＜ 剣ちゃんマジかよ!

＜ 剣ちゃああああああああん!!!

＜ …なんで時守が来るのよ…

＜ 剣ちゃんが彼女作れないと思う人とりま挙手

＜ ノ

＜ ノ

＜ ノ

＜ ノ

＜ ノ

「…彼女?作らねーよ、ハーレムだハーレム、つと…」

＜ じゃあそのうち1人俺に

＜ あ、俺も

＜ 俺剣ちゃんでもいいで!

＜ 俺も剣ちゃん!

＜ なんでホモが湧いとんねん!剣ちゃんは俺のもんや!

「悔しかったら学園来いや…と、」

＜ 別にええわ。

＜ それより今年の阪〇やろ。

＜ 補強失敗やろ?…幸先不安すぎる。

＜ 今年助っ人無しやろ?…大砲誰?

＜ 剣ちゃんがハーレム作るの成功するか〇神優勝するかどっちが確率高いと思う?

〈阪〇やろ。

〈剣ちゃんハーレムとか言って誰好きになつてええか分からんと結局崩壊しそう。

「崩壊してもきれない程おると思う…と、」

〈人間のクズめ。

〈剣ちゃんビビってるわ。これ内心マジで彼女できるか不安になつてるやつやで。

〈最終的に剣ちゃんやったら皆仲良くさせそう。

〈剣ちゃんの料理は胃袋掴むからなあ。

「胃袋掴むとか怖すぎやろ…」

〈え、ちよ…俺ら剣ちゃんに内臓掴まれてたん？

〈やめてや！怖いって剣ちゃん！

〈そのうち心臓とかも…？

〈アイエエエエ!? ナンデ!? ケンチャンナンデ!?

「とりあえず楽しんで来るわ、と…」

〈ん、二度と戻つてくんなや。

〈JKの水着撮ってきたら家入れたるわ。

〈彼女連れてきたら指輪買ったる。

〈ハーレム作ったら商店街でパレードやな。

〈んじゃ代表候補生になったらハワイ旅行な。

〈代表なったら世界旅行。

〈世界最強なったら商店街の全部の店半額にしたげる様におかんに頼んどくわ。

「マジか!? 商店街半額とかマジか! コロッケ30円やのに15円やで!？」

〈こーゆーところ流石剣ちゃんやんな。

〈うん。ほんまアホやな剣ちゃん。

〈でもそんなんやから皆に好かれんねんなあ…

「…なんて繋げよ。スタンプでいいか。」

〈スタンプを送信しました。

〈スタンプを送信しました。

✓スタンプを送信しました。
✓スタンプを送信しました。

アプリを閉じる。え？俺が今何してるか？

「…時守、お前よくこんな状況でそんな事できるな。」

「え？ダメなんすか？」

千冬さんが乗るISに抱きかかえられてんねん。めっちゃ速いで。
新幹線普通に抜いてるもん。

「別にダメでは無いが…」

「あー、じゃあゲームしてるんで着いたら言っして下さい。」

…無言で睨まれた。何でや？

「着いたぞ。」

千冬さんの胸が揺れること数十分、一瞬で東京着きました。…なんて言うか…

「空気汚ったな。」

「開口一番それか…」

え、だってめっちゃ汚いですやん。おばあちゃん家の周りくっそ綺麗やったし、ド田舎やから。

「お土産何買おかな。」

「お前は今からどこに行く気だ…」

「へ?…あー、そつすね。じゃあパンツとか買いに行きます?」

「…一人で行け。」

「道分かりません。」

「…着替えは後で親御さんに送ってもらえ。事情は説明しただろ?」

「まあしましたけど…」

千冬さんと家を出る前、丁度おとんとおかんが帰って来たので事情を説明した。

カクカクシカジカ…

「へー、じゃあ剣が有名だったらこの店も有名なるやん!」

「…あ、あの…すいませんが国家重要人物保護プログラムという物が…」

「ん?つまりはそのなんちゃらプログラムで店もできひんし私も働けへんゆーこと?」

「そうなります。援助は国や国連、IS委員会の方から出ますが…」

「母ちゃん!聞いたか今の!」

「ええ!!チケット買い放題や!どこ行く?まず韓国行きたい!アイドルに会いたい!」

「じゃあその次甲子園な!」

「あ、あの…目立った外出も…」

「なんやできひんの?…じゃあブルーレイでえつか」

「せやな。剣も楽しんどいでや。」

と言ったマイペースぶりを発揮。それを見た千冬さんは『関西に越したい』と呟いてた。…そんなに関東って冷たいんかな。

「…時守、お前には今日から…」

千冬さんが何か言おうとした時何かが降ってきた。

「ちーーーーーちやーーーーーん!!」

「…つちー」

そしてすぐさま千冬さんに抱きついた。…なんやこいつ。…うさ

耳…うさぎ!?

「全然ぴよんぴよんしてへんやないか!!?どないなつとんねん!!」

「え、ええ…ちよ、ちーちゃん何この子。」

「2人目の操縦者だ。」

「ほほう、君が…」

そう言つてこつちに駆けてくるぴよんぴよんしないうさぎ。…いや、一箇所。ちゃうな。二箇所だけぴよんぴよんしてる、いや、ぶるんぶるんしてる。

「…誰やうさぎがぴよんぴよんするとかゆーた奴。ぶるんぶるんしてるやんけ…」

「んー?どうしたの?」

「いや、何も無いつす。…あの、千冬さん、このうさぎさんは?」

「篠ノ之束、ISの開発者だ。」

「によほほほまたね?」

「どう聞き間違えたらそうなるのかな?」

え、だって…聞こえなくない?

「篠ノ之束だ。」

「篠ノ之束…ああ、ISの開発者…」

「さつきちーちゃんがそう言つたよね!」

「言つてくれはつたんですか?千冬さん。」

「ああ、言つたぞ?」

すみません、聞いてなかったつす。

「うん、によほほほまたねとか言われたの初めてだよ。」

「え、そうなんすか?結構間違われやすそうな…」

「無いよ!」

「え、マジすか…流石東京…」

「東京関係ないからね!」

嘘だあ。珍しい名前の人ならちよつとボケるって当たり前やん。

「…で、さつき千冬さん何か言おうとしてませんでした?」

「無視!」

「む、ああ。…お前には今日から寮生活してもらおう。それだけだ。」

え、いきなり？

「すいません、やつぱパンツだけ買ってきていいですか？」

「…分かった、また特別使用許可を貰って教師に荷物を取りに行かせる。」

「分かりました。…で、何でうさぎさんはこんなところに？」

うん、俺にはぴよんぴよんせえへんうさぎなんか要らん。

「え、何でって…何でだっけ？」

「まさかお前が忘れるとはな。」

「この子のテンションでおかしくなっちゃったんだよ!?…あ、そうだねーねー君さ、名前なんて言うの？」

「よほほほまたねです。」

「ふざけてるのかな!？」

はい。

「?ですが。」

「…急に冷静になったよ、何なのこの子。」

「時守剣です。」

「普通に答えるの!？」

ちやうわー、そこは『普通に答えるのかい!!?ボケるんやったらもつとボケろや!』つてもつと強く言わな。

「で、なんすか。ぶるんぶるんうさぎさん。」

「…何となく分かったよ。君のこと。…では、けんくん!」

「剣ちゃんお願いします。友だちにはそう言われてるので。」

「え、ええ?まあいつか。では剣ちゃん!君に専用機を作ってあげよう!君のことを気に入った!」

「…へえ。」

「反応薄っ!？」

やったね、専用機。どうせモルモット用だろうけどね。やったぜ。

「ま、まあ…剣ちゃんの要望とか無いの？」

「あ、じゃあ遠距離武装?とか要らないっすわ。自分で殴ったり蹴ったりするほうが好きなんです。」

「結構どぎついこと言うね。」

え、ISって相手ボコボコにしたりされたりするんちゃうん？

「…まあ近接の方がお前は良いだろうな。腕力はかなりあるし。」

「え、何でちーちゃんそんなこと知ってるの？」

「バツティングセンターだ。」

「…ねえ、どうしたの？ちーちゃん。剣ちゃんと関わっておかしくなったの？」

酷い言われようやな。…全く！

「で！なんすか！ぶるんぶるん!!」

「最早うさぎさんとも呼ばないんだね…分かったよ、じゃあ近接武器メインで作ってあげるよ。…じゃーねー!」

そう言つてやはりぴよんぴよんじゃなくぶるんぶるんさせて空へと消えていった。…ああ、いい奴だったよ。

「勝手に殺してやるな。」

「え、あそこまで飛んでったら普通死にませんか？」

「あいつは死なん、そう言う奴だ。さ、入るぞ。…と、その前に。」

IS学園の門に入る直前、千冬さんがこちらにくるりと向き直った。

「ようこそ、IS学園へ。」

うん、やっぱりそういうのやりたいよな。俺もやってみたいもん。

「…部屋どこなんすか？」

「…それなんだが…もう一人の男子とは別部屋でな。」

なん…だと…つまり、つまり！

「女子と一緒にすか!？」

「ああ、と言つてもただの女子ではないがな。」

ただの女子ちゃうやと…！そんなもん…

「期待してええんですよね…織斑先生。」

「何にか知らんがやりすぎるなよ。…しかしどういうことだ？向こうを出る前と今とで顔が随分いいものになってるぞ。」

「ああ、そりやあね。…俺にも色々あるんですよ。」

そりやそやろ。…なんせあの後皆から送られて来たメッセージ：あんなん読んだら気合い入らん訳ない。

「まあいい、心持ちが変わったのはいいい事だ。1027、ここがお前の部屋だ。それと…ほら、こここの鍵だ。」

俺の部屋の前まで連れて来られ、ポケットから出された鍵を渡された。…胸の谷間からとか期待した俺がアホやったんか。

「ありがとうございます！ちっふー先生！」

「…織斑先生だ。」

「？別にええや無いっすか。ほら、こんな感じであだ名付けられる先生って生徒に好かれてるって証拠になりますし。」

「…はあ、まあいい。お前には何を言っても無駄みたいだな。…皆がいる前では織斑先生と呼べよ？」

はいー、フリ貰いましたア!!

「分かりました！じや、3年間よろしくです！ちっふー先生！」

「う、うむ…ではな。」

ハツハツハ！楽しみだぜい！IS学園！笑いが止まらんわ！

純粹と狡猾は純粹の勝ち

「…とりあえず開けるか。あ、一応皆に聞いて。」
再びトークアプリ起動。

「今から中入んねんけど何かした方がええよな？あ、ちなみに相手は女子確定な。」

〈求婚しとき。

〈あなたが欲しいです、やで剣ちゃん！

〈多分な、あの、お風呂にします？…ご飯にします？それとも…わ、た、し？…ってやつ来るで。

「マジかよ…流石東京…やばいな。」

〈剣ちゃん純粹すぎて辛いわ。

〈まあ剣ちゃんの思うようにしたらええ思うよ？

へー、じゃ、開けよ。

「あら、おかえりなさい。お風呂にします？…ご飯にします？それとも…わ、た、し？」

閉めよ。

…やべえよ…

「絶世の美女がマジでやってきてんけど…」

〈東京ばねえな。

〈嘘やろ？…二次元の世界だけやおもてたわ。

〈剣ちゃんとりあえず『ドMですか？イジメられたいんですね？』って微笑みながら言ってみ？

おk、任せんしやい。もっかい開けてつと

「んもう…何よ…」

「…ドMなんですか？…イジメられたいんですね。」

ふふつとわろてまう。そりや今のシチュエーション誰でも笑うやろ。裸エプロンの美女がドMですか？て聞かれてんねんで？

「え、ち、違うわよ！そんなイジメられたいなんか…」

「なんや違うんかい。」

閉める。

「ドMちゃうって。」

〈聞いた剣ちゃんマジで尊敬するわ。

〈初対面の美女にドMですか？て…流石剣ちゃんやで…

〈ちよっ！男子！あんたら時守にふざけたことさせすぎでしょ！？

「別に何もふざけてないで。」

〈…

〈これなんだよなあ…

〈とりあえず剣ちゃん、相手の顔のめっちゃ近くで褒めてみて？

おkおk。

開けよ。

「わ、私にはイジメられたいなんて願望…」

「なあ…」

そう言つて美女の顎に持ち上げ、こちらを向かす。んでもってこつちも顔を近づける。

「ふえっ!？」

「可愛いな。それに綺麗や。…ふふっ、ほんまに貰いたいぐらいやで。」

「…えっ…ちよ、そんなこといきなり言われても…私でいいなら…」

ここで裸エプロンの美女が顔を赤くしていやんいやんと身体をくねらせると言う事案が発生したのでドアを閉める。

「とりあえず褒めといた。貰いたいぐらいやって」

〈剣ちゃん悪魔か。

〈俺は悪魔だあ…

〈剣ちゃんとりあえず今の顔写メって。

「はいよ」

〈あれ？剣ちゃんこんなスッキリした顔やつけ？

〈何かかつこよなってるやん。

〈えー!?!何よ時守！こんな優良物件になるんならはやなっといてー

や！

〈剣ちゃんはお前みたいな女にはなびかんで。

「そりゃあんなこと言われたらな。」

〈剣ちゃんあの後のつぶやき世界中で今話題なつてんで。

〈剣ちゃんのアカウントフォロワー12万突破したらしいな。

〈あのつぶやきRT25万やる？…流石剣ちゃん。

「まあとりあえずあの美女何とかするわ。」

〈これで剣ちゃんに指輪確定か？

〈まだ春休みやる？…早すぎひん？

〈そんな関係ないのが剣ちゃんやで。

〈こりやもう一人の男子とどっちがでかいハーレム作れるかの賭けやな。

人の人生を賭けに使うとかほんまアホやわ、あいつら。

また開けーの

「…ドMやんな？ほんまは。見ず知らずの男にそんな格好するなんて…イジメられたいんやろ？」

「だ、だから…違うの…ほら、ちゃんと水着、着てるでしょ？」

「そんな格好なんであんたみたいな美人がする必要あんの？そんな格好せんでも十分綺麗やし、可愛いと思うで？」

事実を述べる。嘘ついたらあかんで。

「き、綺麗…それに…可愛い、だなんて…」

「ほんまやつて。ほら、もつと自分に自信持った方がええで？」

「し、しかも…美人……貫きたい…」

なんかさつきからボソボソゆーとる。…ここですつと居られてもなあ…、あー…こんな時こそあれや！

「じゃ、失礼。」

「きゃっ！」

膝裏と肩に手を入れて持ち上げる。…何やつこれ。机とか椅子とか運ぶ時に似てるやつ。…お姫様抱っこか。…なるほど。

「こりや確かにお姫様やわ。」

「あうう…」

美女の顔が真っ赤になる。…そんな嫌やったんか…

「お、降ろそか?」

「う、ううん!このまま運んでちよーだい?」

おk。…おいおいおいおい。

「なあ、なんで首に手え回してんの?…胸当たってんねんけど。」

「ふふ、当ててんのよく。」

こりや後であいつらに報告やな。東京ヤバすぎやろ…

「更識楯無?すんごい名前やな。」

「ドMとか聞いたいてさらにそんな事言うの?おねーさん、ちよつとシヨックよ?」

は?おねーさん?

「もしかして年上?…まあタメ語でえつか。よろしく楯無。」

「なんでタメ語なのか何がよろしくなのか良く分からないけどよろしくね、剣くん。」

またかよ。楯無もぶるんぶるんとおんなじかよ。

「剣ちゃんでもよろしく。」

「…んー、私は剣くんって呼びたいんだけど…ダメ?」

「せやったらええよ。」

別に強要はせん。

「え、いいの?」

「ええよ。…つてかき、ドMって言われたとき満更でもない顔してたやんな?」

「あ、あれは!違うの!!別にそういうのに興奮したんじゃなくて…」

言葉に興奮せーへんかった…じゃあ…

「ドア閉められんの興奮すんの?」

「違う!!…一回ちゃんと自分の顔見た方がいいわよ?」

え…、何？もしかして肉書かれてたりすんの？…って！

「別になんも無いやん。」

「…資料より格好よくなってるじゃない…」

ん？…なんて？

「ごめん、もっかいゆーて？」

「いや♪」

おおう、皆、これが魔性の女と言うやつか。やっぱり東京に来る時には注意するよう言っとかな…

「んじやとりあえずよろ。楯無。」

「どんどん軽くなるわね…ま、黙っていられるよりかは断然いつか。よろしくね、剣くん。」

副会長

「なあ、楯無。部活作っていい？野球部。」

「ダメに決まってるでしょ？しかも1人で野球するの？」

「楯無入ってくれへんの？」

「…え？」

「え？」

嘘やん。入ってくれへんの？これ『磯野ー、野球しようぜー！』のパターンちゃうん？

「え、野球部入ってくれへんの？」

「魅力的なお誘いだけどごめんさい、これでも私、IS学園の生徒会長なの。」

は？生徒会長？…ってなんで一々扇子出さなあかんねん。…厨二？扇子かけえみたいなの？

「なんや、中学ん時の俺とおんなじか。」

「え？」

「え？」

2回目やぞこのやりとり。なんや、俺が生徒会長で文句あんのか？これでも一応全校生徒全員異議なしで通ってるぞ。

「…俺も中学ん時生徒会長やってんけど…何なんその反応。」

「い、いや…ちよつと意外だっただけで…」

「お、何やったらアドバイスしたるか？学校の皆に好かれるアドバイス。」

完璧やで、俺の政策。

「女尊男卑のこの御時世に凄いわね、皆に好かれるなんて…」

「校長のカツラに水風船思いつきりぶつけたんねん。始業式に。」

若干ずれてしかもびちよびちよ。『濡れワカメが砂浜から生えとるわー!!』って言ったたら生徒だけでなく先生まで爆笑してたしな。

「…よく何も無かったわね…」

「だって校長も『おー涼しなつたわ！あんがとーな！時守！』って言ったし。それから集会ある度に投げつけたつたわ。」

「楽しそうね……関西に越したいわ。」

お、関西に越したい人間二人目や。…先生、俺は無事洗脳出来てんで。…まあ俺ん中学が頭おかしいだけやねんけどな。

「来る？おもしろいで。」

「…行きたいのは山々何だけどねえ…生徒会や家の仕事がけつこう多くて…」

家？

「なんや、家…人に言いにくい仕事やったり？暗部とか対暗部用暗部とか対暗部用暗部用暗部とか？」

「…なんで分かるのかしら…まあ遅かれ早かれ言わなきゃならないしね。そ、更識家は対暗部用暗部ってやつなのよ。」

「…国がフリーザやとしたらドラゴンボールにあやかろうとするキュイが暗部で楯無はキュイをぶつ殺すベジータってこと？」

「…よく分からないけど分かるのはなんでかしらね…」

まあ最終的にはベジータもフリーザに敵対すんねんけどな。…あかんやん！

「もーちよいええ例え無いかな…とりあえず国の不安要素取り除き隊みたいなの？」

「まあそう捉えてくれて構わないわ。で、あなたの護衛を私が任されたのよ。」

ほー、そりやそうか。

「もう一人は？…あー、ちっふー先生が姉か。」

「ち、ちっふー先生？」

「織斑先生や。どや？可愛らしいやろ。」

「…ぶ、あはははっ！織斑先生にそんなあだ名付けられるのあなたぐらいよ？」

そか？…てか

「やっぱ笑ったら可愛いな、楯無。」

「…むう…急に言うのは反則よ…」

「反則？何が？」

「別に？」

そう言つてぶいっと顔を反らす楯無。やめい、余計可愛いやんけ。

「でき、やつは大変なん？仕事。」

「え？…うん。それなりには大変ね。」

「んじや俺手伝うわ。副会長でええ？」

「え？…生徒会に？」

男に二言は無いんやぞ？楯無。

「うん、入る。」

「…野球部は？」

「あんなンネタでゆーたに決まつてるやろ。」

「…そっか、分かつたわ、時守剣くん！あなたを生徒会副会長に任命しますー。」

「まつかせなさい。…あ。」

しもた。パンツも買うてへんけど…

「？どうしたの？」

「予習してへん。…間に合うか？」

「ふふ、じゃおねーさんが教えてあ、げ、る。」

楯無さんよお…その言い方期待しちゃうで？

「勉強出来るの？」

「これでも学年主席よ？」

マジか。また被つたな。

「また一緒やん、俺も中学3年間主席やで。」

「…剣くんよく分からなくなってきたわ。」

頭の良い悪いを性格で判断せんといひて欲しいわ。

「これでも頭はええんやで？行動でアホや思われてるけど。」

「なんで行動を直そうとしないの？…ま、それは今は置いといて、早速やりましょつか。」

美人と2人きりで部屋で勉強。…家庭教師みたいやな…

2日後

「今日入学式か。…とりあえず皆友だちになる。」

「皆つてもしかして学園の皆?」

「もちのろんや。友だち多い方が楽しいやろ?」

「…そうね、ねえ、剣くん。私は?」

「お?んなもんもう友だちやろ?」

「ふふ、そつか。」

「なんや急ににやにやして。」

「じゃ、私用意があるから先行くわね?」

「あれ?俺行かんでいいん?」

「まだ公式に決まったわけじゃないからね。あ、放課後ちゃんと生徒会室来てね?」

「おk、任せい。」

よくよく考えたら女子ばつかやったわ。どないしょ。講堂みたいなところでやってんねんけどさ、女子ばつか。ええ匂いするやつもおるけどオバハンみたいにくっさいやつもおる。

「なあ、飴ちゃんいる?」

隣の女の子にあげるのは大阪のおばちゃんの切り札『飴ちゃん』。

これあるだけでおばちゃん何時間も喋るからな。

「…え、今入学式だけど?」

「えーやんえーやん、ほら。」

やっぱりノリが違うらしい。飴ちゃん交換とかせーへんのかな。

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして。」

まあ俺色に染めんねんけどな！

原作開始

圧倒的コミユカの差

「（これは…想像以上にキツイ…）」

俺、織斑一夏は少々まずい事になってしまった。男なのに女しか動かせない筈のISを動かしてしまいその後見つかったもう1人の男性操縦者と女子ばかりのIS学園に強制入学させられたんだが…

「（視線が…それに…）」

まだ先生は来ていなくて、何人かの女子はこちらをじっと見つめてきている。…しかし、まだましな方なのだろう。何故なら――

「あははっ！時守くんおもしろ〜い。」

「いや、俺の友だちの方がおもしろいで？あ、せや。飴ちゃんいる？」

「あ、私欲しい！」

「私も〜、けんけん〜。」

「けんけん？…剣ちゃんの方がええねんけどな、ま、ええわ。んなら君にはお手製サーターアンドンダギーあげよ。」

「わ〜い。」

もう一人の男子のコミユカがおかしいのだ。…え、これは俺がおかしいのか？女子ばかりの中に放り込まれてしかもこんな注目あびて緊張してる俺がおかしいのか？俺もサーターアンドンダギー作ってきただ方がよかったのか…うーむ…



「全員揃ってますねー。それではSHRを始めますよー。」

SHR？…朝の会ちやうん？…シヨートホームルーム…ちつちや

い家の部屋？意味分からんわ。

「それでは皆さん、1年間よろしくお願ひしますね。」

「よろしくーせんせー。」

…あれ、俺だけ!?おいおいおい…冷たすぎるやろ東京!!

「は、はい！よろしくお願ひします！時守くん！」

「よろしゅう。」

なんで俺と山田先生だけの会話みたいになつてんの？

「…じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします…出席番号順で…」

お、自己紹介か。事故紹介やな。おk、任せんしゃい。

「織斑くん、織斑一夏くん！」

お、ついにもう一人の男か。…な、こ、こいつ…敵や。俺らの敵やでこいつはあ…ただのイケメンやないか…!

「は、はい！」

「あつ、あの、お、大声出しておめんね？お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね！で、でもね、自己紹介『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だからごめんね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

ペコペコしすぎやろ山田先生。…ん？山田…ああ、のちゃんか笑点の人でもなかったんや。

「いや、あの、そんなに謝らなくても…つて言うか自己紹介しますから、先生、落ち着いてください。」

お、すんのか!?

「期待してんぞー！織斑ー！一発ギャグやれー！」

「はあ!?…え、ちよ…。」

なんや、せーへんのかい。ほーらクラスしけたー。

「はあ…もうええわ。普通に自己紹介し？」

「あ、ああ…」

…山田先生や。なんで俺のことを救世主みたいに見てんの？

「えー…えつと、織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

「……かーらーのー?」

「ええ…、からのー…」

……

「はい時間切れー。残念ー織斑くん!」

「…え?じゃあ、……………」

お、マジかよ。この修復不可能な空気でボケんのかよ。

「……………以上です!」

「かーらーのー?」

「ええ!」

おもんな、こいつ。名前ゆーて終わりとか何が自己紹介やねん。

「あ、あのー?」

「…はい?」

瞬間!教室のドアが開いた!

パンツ!!

「正解はっ!!越後製菓!!」

「時守、貴様も喰らうか?」

ボケただけでなんで叩かれなあかんねん!!…あつ

「…さすがちっふー先生。…ボケにはツツコミが必要なことも分かってらっしやるんですね?はい、じゃあどうぞ思いつきりしばいてください。」

「…学園では織斑先生と呼べと言ったはずだ。」

え?

「アレフリや無かったんすか!」

「当たり前だ。」

な、なん…やと…

「げ、げえ!?!関羽!?!」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

スパァン!

「2へえ頂きました。」

「時守、20へえ程貴様の頭に叩き込んでやろうか？」

「え、いやいいです。流石に織斑の持ちネタ奪う訳にはいかないんで。」

あの一瞬で2回叩かれる。織斑の持ちネタは叩かれやな。ひたすら叩かれるだけ、それでもおもしろい人はおる。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな。」

…この変わりよう…関羽ちやうやろ…ブロリーやろ…

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと…」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで付き合ってやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、言うことは聞け。いいな？」

「キヤーーー！千冬様、本物よ！」

「ずつとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

おお…すげえ…こりや乗らんわけないやろ…！

「ちっふー先生ー！また写真撮ってくださーい！」

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですよ…つて写真！」

「今度またバツティングセンター行きましょ!!」

「私、お姉さまのためなら死ねます！…バツティングセンター!？」

「ならば死ねい！」

ふう…今はこんぐらいにしとくか。

「…毎年、よくもこれだけの馬鹿者を集められるな。感心させられる。それとも何だ？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「はーい、バーカでーす。」

ズパァン！

「ナイスツツコミです。」

「褒められて嬉しくなかつたのは久しぶりだな。」

「きゃあああああつ！お姉様！もつと叱って！罵って！」

「へいっ！」

「でも時には優しくして！」

「へいっ！！」

「そしてつけあがらないように躰をして！」

「イエア！！」

ズパアン！！

「もうつつこまんど。」

「そんな……！なんて生き地獄を……！つく……分かりました……。」

「なんでや……俺はただリズムに乗っただけやぞ……見事に韻踏めてた
ですよ。」

「で、貴様はろくに自己紹介も出来ないのか？」

「いや、千冬姉、俺は——」

パアンツッ！

「ツー丸見え！」

「下ネタに走るな時守。……織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生。」

……って千冬姉？……ガチのお姉様かよ。

剣ちゃんの学力

「では、ここままで何か質問はありますか？」

SHRなるものが終わってISの授業が始まった。授業内容はほぼ教科書なぞるだけ、…まあまあ簡単やな。

「お、織斑くんや時守くんは何かありますか？」

「あ、じゃあ先生。」

とりあえず聞いとく。中学時代もちよくちよくあつたし。

「は、はい！何でしょうか時守くん！」

「…授業内容間違ってますん？これ。」

「…えっ…えっとお…これがIS学園、の1年生の範囲なんですけど…」

「え？…こんなんが？…嘘お。」

拍子抜けですわIS学園。…教科書なぞるだけてな。

「あ、あの…時守くん？ほんとに大丈夫何ですか？」

「…先生、このアホなら大丈夫です。」

こ、この声は…！

「なんや、リコピンIS学園入ったんか!!」

「リコピン言うな！理子よ！岸原理子！」

リコピンやんけ。なんも問題無いやん。

「ええつと、岸原さん？…大丈夫とはどういう…」

「とにかく大丈夫です。このアホ、見た目に反して勉強は出来るんで。」

「アホ言うなやおぼはん。もう勉強教えへんぞ。」

「くっ……」

そワロタ、とか言っちゃう？リコピン。らしくないわー。そんな子に育てた覚えはありませんっ!!

「そ、そうなんですか…、つて！時守くん！ダメですよ？女の子にそんなこと言ったらー！」

「山田先生はお姉さん。リコピンはおぼはんです。」

「せめておぼちゃんにしなさいよー！」

「じゃあ理子。…いや、やっぱりコピンはリコピンや。」

それ以上でもそれ以下でもない。

「えっと…じゃあ織斑くんはどこか分からない所はありますか？」

「ほ、ほとんど全部分かりません…」

…は？

「え…ぜ、全部…ですか？」

「いやいやいや、流石にそれは無いやろ織斑。」

イケメンやからって何でも許される思うなよ！アホのイケメンとかちよつとちやらくしたらDQNやんけ！…あー、織斑一夏…一夏とかキラキラネーム？…俺もアウトか。

「みんな分かるやんな？あのアホのリコピンでもIS学園受かってんで？」

「私も勉強したのよ！」

後ろ見たけどリコピンの周りの女子もうんうん頷いてるやん。…ん？なんやあの金髪ドリル。めっちゃ睨んできよるやん…怖っ！マフィア!?なんであんな人相悪い奴入学させてんIS学園！

「時守、岸原、少し静かにしろ。…織斑、お前入学前に渡された参考書は読んだか？」

「さ、参考書…あー、あの電話帳みたいな分厚いやつですか？」

「そうだ。」

釘を刺して差し上げましょう。oh！俺ってやつさしくい！

「古い電話帳と間違えて捨てました。」とか無しやで織斑。そもそもなんで電話帳捨てんねん。勿体無いやろ。せめて古紙回収に出せや。」

「あ、そっか。次からそうしよ。」

アホ降臨や。自分で認めよったで。

パアンツ！

「…つくそ！ボケ思いつかんかったやんけ！織斑！叩かれすぎやねん！」

「い…いってえ…そんなこと言われても…」

「必読と書かれていただろう馬鹿者！…それと時守、ボケなくていい

から真面目に受ける。」

「おつす。」

おつすって便利やで。返事にも使えるやろ？あと挨拶とか気合い入れるのにも使えんねん。『おおつすう!!』ってバツクドロップしたりな？

「…微妙な返事をするな。返事は『はい』だ。」

「はいだ!!」

スパアーンツ！

「岸原、こいつは中学の時からこんな感じなのか？」

「は、はい。…先生も笑って許してたんですけど…」

「そうか…だが私は違う。ボケていい時と悪い時の区別は付ける。分かったな？」

あ、ボケてええんや。『ボケたら殺す。ツッコミ入れたら死なす』と
か言われるかと思たわ。

「分かりました織斑先生。」

「うむ、それでいい。…織斑。後で再発行してやる。一週間以内で覚
えろ。」

「さもなければ死ぬ。いや、顔イケメンやから直ぐ死ぬ。」

「い、いや…一週間であの分厚さはちよつと…、つて俺がイケメン？」

「やれと言っている」

…ちっふー先生とサムズアップ。息合ってきましたね？今度バツ
テリー組みません？先生ピッチャー、俺キャッチャー、織斑ボール、リ
コピンバツトで。

「ISは過去の兵器を遥かに凌ぐ。そのような『兵器』を深く知らずに
扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理
解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。」

せやな。…でもさ、ちよつとちやうで。

「…まあつまりはISの脅威をしつかりと理解しながら『競技』として
のISバトルの訓練をする、ゆーことですよ？兵器としては誰にも
扱わさせへんのですよね？」

「…ああ。ISの軍事利用はアラスカ条約で規制されているからな。」

「まあつまりはISを楽しむもんとして捉えつつ、その怖さを身を持って知ってもらいながら勉強する。それがIS学園ゆーことですか。」

「…そうだな。頭が切れるというのは本当らしいな。…時守、お前はどうか考えている。」

いや、考えたら分かることでしょ。

「そりゃ怖いっていうのもあります。誰でも直ぐに人殺しになれるモンですからね。…でもちゃんとした考え方と知識、自制心があったら『競技』として楽しくISバトル出来ると思いますよ。…俺もそういうもんこの3年間で身につけたいですしお寿司。」

「…そうか。」

ノリの違いと金髪ドリル

休み時間や！きーて、リコピン弄りに……ん？

「痛て……ああ、今日だけで何個の脳細胞が死んだのか……」

「残り3個ぐらいちやう？」

「じゃあ次叩かれたら脳細胞無くなるじゃないか……」

「ん、ご愁傷様。じゃあ葬式の日取りとか規模とか決めて、後は火葬か土葬か……身内だけでひっそりやる？それとも世界初の男性操縦者が死んだから世界中に盛大に報道してもらって各国のトップ招くぐらいの規模にする？」

「具体的すぎるだろ……つて、え？」

「なんやこいつ……ちっふー先生関わらんかったら普通におもしろいやんけ。」

「おつす織斑。……いい事故紹介やったで。」

「おう……ん？自己紹介だよな？」

「ん、見事な事故紹介やったで。」

「そうか、……あ、俺織斑一夏、よろしくな！一夏って呼んでくれ！」

「おけおけ。……じゃあとりあえず……」

皆……卒業生男子の皆……待たせたな!!

「一発しばかせろやこのイケメンがあ!!!」

「は、はあ!?!なんでいきなり!?!」

「なんでもクソもないわ！お前はなあ……やったらアカンことやっとなねん……、何イケメンでこんなところ入っとなねん！ハーレム確定やろが！」

「ハ、ハーレム!?!……いや、俺そんなの作れねえし……」

「死ね！」

「おわっ！あつぶね!!」

クソが！俺の渾身の右ストレート躲しよった！こいつ自覚無しのパターンかよ！しかも運動神経も中々良い……モテ男確定。惨殺すべし。

「そ、そういう時守だつて顔良いと思うが…」

「イケメンに言われてもなんも嬉しないわ。分かるか？俺りコピンに『時守くんの顔ってさー、10点満点で言ったら6・273点ぐらいだよねー。』って言われてんぞー！びみよすぎるやろ！しかも周りの皆もめっちゃ同意するし！なんやねんお前え!!」

「知らねーよー！」

「はあ!?!お前どーせそんな話題無しで『お、織斑くん…つ、付き合つて下さい!』とか言われてるんやろ…んでもって『おう!どこのシヨツピングモール行くんだ?』とかアホな事言うてみ…しばきまわしてどつきまわすぞ。」

「ま、まあ落ち着けよ時守…」

「時守ゆーな。剣ちゃんがいい。男子から時守言われたくない。」

「け、剣ちゃん?…剣、で良いか?」

「…まあええけど。」

…やっぱちやうねんな。向こうやったら地元の奴らとか多かつたし『剣ちゃん』つて皆呼んでくれてんけどな…そーういやまともにお別れもできてへんやん…

「な、なあ。さつきは何の話してたんだ?皆もう帰つたみたいだけど。」

「お?さつき?…ああ、^{たける}健くんがな、中学の修学旅行の時に鼻からサーターアンドギーとちんすこう爆発させた話。」

「は、はあ…」

「健くんがサーターアンドギーとちんすこういつぺんに食べてたからな?笑わせたつてん。そしたら鼻からブーッつてサーターアンドギーとちんすこう飛び出してん。あ、後で動画見せたるわ。」

「お、おう。サンキュー。あ、男子トイレつてどこにあるか分かるか?」

「ああ、男子トイレね。」

「男子トイレやったら教室出てクイツて左に曲がってそのままドローンつて行って、んで最後にピユツつて右に曲がったところにちつちやくポツンと置いてあるぞ。」

「わ、分かった。サンキュ。」

いやあ流石俺やで。道案内の分かり易さは地元No. 1。

「…ちよつとよろしくて?」

っーき、来た!!

「逃げろワンサマ!!こいつマフィアやぞ!」

「な!?ま、マジかよ!…てかワンサマ?」

「ち、違いますわ!!わたくしはマフィアなどでは…」

「嘘つけ!あんな人相悪い顔で俺のこと睨んどったやんけ!…あ、ワンサマはお前のあだ名な?」

「お、やったぜ。今まであんまりあだ名とか付けられなかったからな。」

「なんやねん…随分しょーもない人生やなそれ。」

「あだ名だけでそんなこと決めつけんなよ…」

「聞いてますの!?!」

「聞いてます!!喧しいな…こっちはこっちで話してんの。分かる?…ほら、飴ちゃん上げるから、な?落ち着いて、ステイステイ。」

「…で?なんだ?」

コイツ興奮しすぎて髪の毛逆立ちそうになってんで…っは!?!金髪…興奮…逆立つ…

「まあ!なんですそのお返事は!わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでから、それ相応の態度というものがあるのではないかしらっ…」

「せやでワンサマ…コイツマフィアなんかとちやうで。…興奮と怒りによつて目覚めた戦士…しかも髪の毛が金色ときた…分かるやろ?」

「あ、ああ…漫画の世界だけだと思っていたが…まさか実際に居るとはな…」

「…聞いてますの?」

っ、こいつ更にキレよつた!!ま、まさか…

「ワンサマ…コイツもう2になれるらしいわ。」

「ああ…注意しないと…なんせ…こいつは…」

「伝説のスーパーサイヤ○だからな！」

「わ、わたくしを知らないのですか!? このイギリス代表候補生にして入試主席のセシリア・オルコットを!」

…ま、マジか…

「カカロットやて…ワンサマ…どないする? お前ヤムチャしてや。」

「だが断る。…せめて神コロ様ぐらいの強さにしてくれ。」

「さつきから聞いてますの!」

「やから聞いてます言うてるやろ!!…まあボケはここまですて、なんやお前。」

「…なあ剣。代表候補生ってなんだ？」

…は??

「し、信じられませんわ…極東にはテレビもないのかしら?」

「テレビぐらいあるわアホ。こつち来てお前もテレビぐらい見たやろ。…読んで字の如くや。ISの国家代表になれるかもしれへん人間。」

「そう! つまりはエリートなのですわ!」

「まあオリンピックでいう補欠…ってか選ばれへんかった可哀想な人や。…傷心背負ってここまで強気で頑張ってきたんで。泣けるやろ?」

「そ、そうなのか…まあ頑張れよ、オルコットさん! 次は代表になれるって!」

可哀想に…そんなんじやなきや代表候補生でここまで威張れへんやろ…

「…あ、貴方達はわたくしを侮辱してますの?」

「してへんやん。…ほら、サーターアンドギーとジンギスカンキャラメルもあげるから、な?…元氣出しや?」

「あ、サーターアンドギー欲しい。」

「おー、ワンサマもサーターアンドギーの良さ分かってくれるか。」

「ん、んん! とにかく! 本来ならわたくしのような人間に話しかけ

られるだけでも光栄なのですよ？そのあたりを理解していただけるかしら？」

「へー、それはラッキーだー。」

「カカロットー、ジンギスカンキャラメルもう一個あげるわ。」

「オルコットですわ！セシリア・オルコット!!…というより貴方、先ほどからわたくしを馬鹿にしていますの？」

ええっ!?

「やからしてへんやん！なんで!?!俺なんかした!?!」

「…大体貴方達、…いえ、先ほどからお菓子をくれる貴方は授業での発言もありましたからともかくとして、もう一人はISについて何も知らないのによくこの学園に入れましたわね。男性でISを操縦できると聞いたものですから少しは期待していましたが、残念すぎますわね。」

「俺に何か期待されてもなあ…」

「俺に関しては自論言っただけやしな。」

せや。自分の思ったことを素直に言うのは大事なことやで?…まあ喉で止めなアカン時もあるけど。

「ふん、まあ、わたくしはエリートですから貴方達のような人間でも優しく教えて差し上げますのよ？まあ、泣いて頼まれたら、ですけど。何せわたくし、入試で唯一、教官を倒したエリート中のエリートですから。」

…ベジータやったか…

「ん？入試ってあれか？ISを操縦して戦う…それなら俺も教官倒したんだが。」

は？マジかよ…こいつやばいな。

「はあ!?!」

「スゲエなワンサマ。…アレで倒すんかよ…」

なんか俺の時はカオスすぎて死んだ。

「と言っても教官が自爆しただけなんだけどな。」

「なんやねんそれ。…ってか教官生きてんのか？」

「生きてるぞ。…そういう剣はどうだったんだ？」

「んなもん負けるに決まってるやろ。お前、相手世界最強やぞ？20分で落とされたわ。」

ちっふー先生強すぎたわ。なんやねんアレ。比喩無しで消えはるし、あの人やったら生身で斬撃飛ばせるんちゃう？

「お、織斑先生相手に20分も…？何をしてみましたの？」

「勘。後はく…勘やな。」

「あ、貴方一体…」

キーンコーンカーンコーン

「お、休憩か。おーいリコピーン！」

「今から授業だ馬鹿者。おい、お前達も早く座れ。」

えー、仲良くなりましょう的な時間ちやうかつたん？

「授業を始め…る前にだ。クラス代表を決めるのを忘れていたな。クラス代表とは対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会への出席など…まあクラス長とを考えてもらっていい。自薦他薦は問わん。誰かいないか？」

「はい！織斑くんがいいと思います！」

「お、俺え!？」

「私は剣ちゃんがいいと思います！」

「私もけんけんく。」

「賛成！」

「よっしや！任せー」

…その瞬間、絶望を俺が襲った。

「時守は事前に副会長として生徒会に所属しているからな。クラス代

表にはなれない。」

「…なん…やと…そんなルール…聞いてへんで…」

「さーらば愛しき俺の目立つチャンスよ…」

「「じゃあ織斑くんで！」」

「ちよ、ちよつと待った！俺はそんなのやら——」

「納得がいきませんわ！」

「え？…じゃあなんで自薦せえへんかったん？」

…

「……」

「……あれ？俺何か変なこと言うた？」

「と、とにかく！そんな選出は認められません！男がクラス代表などいい恥さらしですわ!!このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと!?!」

…なんやねんコイツ。うっぎ。

「大体文化としても後進的なこの国に暮らさなくてはならないこと自体耐え難い苦痛で——」

「イギ——」

悪いなワンサマ。…ちよつとキレてもたわ。

「じゃあ帰れや金髪ドリ子。誰も来てくれなんて頼んでへんやろ。しばきまわすぞボケ。イギリスが偉いとか知らんわ。植民地にできひんかったのよーそんなこと言えるな？日本が後進的とか言うんやったらIS生み出せへんくて、しかも世界最強にもなれへんかった

他の国はなんやねん。アホやろお前。もうちよい考えてから口に出せや。おぼはん。」

金髪ドリ子と女共

「な……あ、あなた今わたくしに何と言いましたの!？」

「帰れ、ゆーとんねん。…大体お前イギリス代表候補生とか言つときながらよー日本にそんなこと言えんな。…ちっふー先生と…あー、あの…あれや…IS作った人、あの人も日本人やのにな?世界最強と産みの親に対して後進的とかどんだけイギリス進んどんねん。」

「わ、わたくしは別にそういう訳では…」

…都合ええなコイツ。

「そういう訳では無いとか言えへんし言わせへんで?周り見てみいや。」

ほら、みーんな怖い顔しとる。

「日本人怒らせるわ侮辱するわ…お前何しに来たん?」

「わ、わたくしは…」

「学びに来ましたとか言うなよ?…そんなにイギリスが進んどるんやったらイギリスでやつとけや。それとな…あんま日本馬鹿にすんなや?別に愛国心とかそういうもんある訳ちゃうけど…あんなに言われたら日本人として黙ってられへんわ。」

クラスの日本人の皆が首縦に振つとる。

「…け、決闘ですわ!!わたくしとてそこまで言われて引けませんわ!わざと負けでもしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしますわよ!？」

「拳句の果てには逆ギレかい。…沸点低すぎやろが、すまんワンサマ。お前が何か言おうとしてるのに被せてもて。」

「いや、いいんだ。俺もお前が言ってくれて少しすつきりした。」

「んで?金髪ドリ子。決闘やったか?お断りじゃボケ。これからすんのはそんないそ的なもんちゃうわ。」

「ちよっ!時守アンタ!それ——」

リコピンも悪いな。…ちよい止めれそうに無いわ。

「ただの喧嘩や。」

スパンツ!

「やめろ馬鹿者。心は熱く頭は冷静なようだが生身の女子に手を出すな。」

「…どうせコイツもISがあるから女の方が男より強い思ってるんでしょ?…俺としてはなんで前向きに生きていけへんのか不思議なんすけどね。誰か貶して楽しむなんてアホ以下の畜生がすることやと思っくんすけど。」

「…だからと言って生身でやって良い訳無いだろう。ISでの決闘の場を設ける。日にちは——」

一応言つとくか。

「すみません織斑先生。あと1つだけ言わせて下さい。」

「…どうやら真剣なようだな。…構わん、許可する。」

あざます。…これ一応ちっふー先生と山田先生にも関わるんすけどね。

「…それでもまだ男貶したりする奴居るかもしれへんけどさ…

婚期逃しても知らんで?」

おー、見事に教室凍ったわ。

「…ど、どういうことだ?時守。」

「やからそんな傲慢で鬱陶しい女と誰が結婚したい思っくんすか。…そもそももうすぐ『女性優先法』も無くなりませすし。」

クラス中がざわめいとる。当たり前やろ。

「女による人権無視、しかも結婚率低下による出生率の低下、さらには産まれたのが男だからっていう理由だけで殺される赤ん坊。…今人口とんだけ減ってるんかお前ら知ってんのか?」

「…時守の言っていることは正しい。別に女性全員を優遇する必要は無いし、IS 国家代表や代表候補生は国からかなりの援助金を貰っているからな。それにお前らもこれからIS の開発等に携わっていくだろう、それも給料はかなりいい。『IS のために頑張る人間だけを応援するなら女性全員を優遇する必要はない。IS に関わる仕事自体が儲かる。金や国家代表などを目指す女性ならそんな法律を定めなくても自然とIS についての勉強を頑張る』からな。今ごろ国連と各国首脳、IS 委員会のトップが集まって世界中で『優先法』の廃止が進められているだろう。」

ちっふー先生ぐう正論。でもなんか焦ってるように見えんねんけど…

「ま、固い話はこのままでにして、だ。クラス代表すら穩便に決められんのか？ 貴様らは。…まあいい、オルコットと織斑の自薦、他薦同士。そしてお前もだ時守。一週間後の第3アリーナで試合を行う。しっかりと準備をしておくように。分かったな？」

まっかせなさいい。こーゆーお祭り事は大好きや。

「うっす、分かりました。」

「は、はいー！」

「くっ、わ、分かりましたわ…！」

放課後やで。

「あー疲れた。勉強疲れてへんのに変に疲れたわ。あー、楯無？ そっ

「ちにも噂行ってる?」

「お疲れ様。来てるわよ。：代表候補生に説教したって聞いたけど?」

「んー、あれ説教言うんかな?どう思う?のほほんさん。」

「ん?けんけんは、ただ正論言っただけだよ、ぐうせいぐうせい。」

圧倒的癒しパワー。凄まじいなほほんさん。

「で?どうするの?IS、まだあんまり動かして無いんでしょ?」

「仮にも代表候補生である生徒ですから：实力はあると思いますよ?

：はい、剣くん、紅茶よ?」

「あざっす虚さん。：んー、そりやあ分かってますけど：誰か強い人教えてくれへんかな?」

「：んん!」

ん?。

「どないした?楯無。」

「あ、あのね?剣くん。IS学園の生徒会長っていうのは学園最強を意味してるの。」

さ、最強やと!」

「え、じゃあ」

「うん、私で良ければ教えるわ。剣くん。」

「うお!マジか!!サンキュー楯無!」

礼はしっかり言うー!これ大事やからメモしときや。

「じゃあ早速明日から、ね?」

「おう!：ってあれ?」

…訓練機借りれんの？」



「…山田くん。」

「…どうしたんですか？先輩。もう結構今日飲んでますよ？」

「分かっているさ。…：関西の方は奇跡的に女尊男卑が広がっていなかったぞ。」

「っ!?!ほ、ほんとですか!!?」

「ああ。…それにいい街が多かった。…なあ山田くん。」

「はい?。」

「教師辞めたら関西の方で婚カツでもするか。」

「あ、良いですね。…私もそろそろ結婚とか考えなきゃなあ…子どもが何人欲しい!とか言ったら引かれますかね?」

「向こうではネタとして取られるんじゃないか?…それよりどうする?3対3とか…服装とか…」

「うーん…：こういうのもなんですけど…：やっぱり私と先輩って…：その、他の人よりも…」

「ああ、胸はデカイな。」

「でしよ?…：だから少し色気を出した方が…」

「ふむ、ポイントは高いだろうな。失う覚悟で少し積極的に行くか。」

「わ、私は…：攻められる方が好きなので…：まだ処女なんでやったことは無いんですが…」

「…わ、私は…：どっちなんだろうな…：ど、どっちも。というのはおかしいか?。」

「い、いやあ…別に居るとは思いますが…」

「そうか…良かった…お、もうそろそろいい時間だな。…山田くん。これから他の先生も交えて会議を開くか。」

「あ、良いですねそれ。女子会みたいな感じで。」

「全員婚期を逃すかもしれないから女子では無いがな。」

同級生と寂しさ

「…どないする？楯無。」

「うーん…やっぱり訓練機は借りれなかったから今こうしてるのよ。皆2年生に上がったばかりで練習したいだろうし…」

「えー、じゃあ俺けっこうマジでどないすんの？」

「…もう一度聞くけど先に吹っかけたのは？」

「金髪ドリ子」

うん、それは間違いないやろ。

「…剣くんが婚期とか言うからこつちも凄い騒ぎになったのよ？私のクラスメイトも『た、楯無く、よく考えたら男友達あんまりいなかったつす…結婚できるか心配つすー！』ってちよつと泣いてたわよ？」

「まあそりやそやろ。…楯無は？お前可愛いし綺麗し優しいし…すぐにええ相手見つけれる思うけど…」

うん、…なんか完璧超人って感じ…せーへんわ。なんか抜けてそう。

「も、もう……そんなに褒めないでよ、照れるじゃない…」

ほらこういうとことか。可愛い。…でもなあなんで…

「なあ、今さらやけどなんで俺らこんなところでこんな格好してるの？」

「なんでって…剣くんが今生身でどれだけ強いか、というのを知るためよ？」

武道場、道着、2人にて…

「…俺型とか大つきらいやで？」

「いいのよそれで。…ISバトルに型なんて無いわ。どれだけ自分のペース、戦い方に持っていけるか、よ。」

え、じゃあ…

「好き勝手殴ってええん!？」

「…その捉え方はどうかとは思うけどそうよ。」

「うーん…それやったらいけるかなあ？中学入ってからあんま身体動かしてへんし不安やけど。」

「大丈夫よ。おねーさん、強いし。」

むかちん。

「…じゃあちよい本気で行くけど…そんな装備で大丈夫か？」

「？大丈夫よ？今からやるのは組み手でしょ？」

…なんでや…向こうやったらクラス全員返してくれんに…

「…いつでもええんやな？」

「ええ。」

「…ほな。」

今の俺と楯無の間合いは…あー、一步じゃ無理か。…んなら。

「…あ、やっぱ楯無から来て。動くのめんどいわ。」

「め、めんどくさいって…じゃ、行くわよ！」

目の前に楯無の顔。……………ん？

「っ!?!はっや!!お前速すぎやろー！」

「今のアッパーを避ける剣くんも剣くんだけだね。」

勘やそんなもん。下手し顎吹っ飛んでたやろ今の。…まあでも。

「これで俺の間合いや。」

「え?？」

喰らえや楯無。…………秘技!

「目潰しー！」

「くっ!!」

あ、避けられましたわ。じゃあ距離詰めて…

「目潰し!!」

「くっ…しっく…!」

ん?道着に油污れでもついてたか?…あかんで、そういうのはその日の内に、や。

「金的!!…あ、無いか。」

「…さらっとセクハラ発言しない…の!!」

道着の襟掴まれた。…え、これってもしかして…一本背負い?それやったら!

「負けるかあ!!」

「え!?ちよ、ちよつと!」

とりあえず腕固定!投げられたくないもん!受身とか知らんし!!

「いきなり投げようとしやんといてや!!」

「え、だつてこれ…組み手じゃない。」

あ、せやつたな。

「よっ!」

「つと、いいパンチね。…実戦形式の戦い方のほうが向いてるみたいね。」

「まあ…自分の好きに動けるしな。…でも。」

まだや!まだ俺のバトルフェイズは終わってへん!!
楯無を押して壁際にやって…からの。

壁ドーーーーー!!

「…悪いけどな、俺負けたくないねん。」

あ、今これ見事な壁ドンやわ。

「っつ!」

「どないした?楯無。…まあええわ、悪いけど、ほんまに俺負けたくないねん。地元の皆に応援されててな、俺。確かにプレッシャーつてもあるけど…それ以上にな。」

あの時皆から送られて来たメッセージ。

「男で強くて勝ったら…それだけでカッコええやろ?」

皆…俺は負けへんで。男が勝ちたい思うなんてな、ただ負けず嫌いやから負けたくないか、皆のためや。…俺の場合はその両方。負けず

嫌いやし皆に応援されてるから。それ以外に理由なんていらんやろ。
「う、うん…かつこいいい…」

「あ、悪いな楯無。壁ドンとか織斑みたいなやつにやってもらいたかったやろ。んじや、また部屋で待つとくでー。」

ふいふ、いい汗かいたわ。風呂入りたい。

◇

え？…はい、お嬢様ですか？先ほど剣くんと組み手をなさってましたが…アレは惚れましたね、はい。壁ドンからのあの笑顔、そしてあのセリフ。かつこいいと私でも思いました。…でも確か1年1組の岸原さん曰く『顔はイケメンすぎるってことはないけどその行動が惚れさせてる場合が多い。…でもあのアホは馬鹿やる友達としてしか見てないし…環境が変わった今ならワンチャンあるかもよ？』と本音に言っていたそうです。…お嬢様？チャンスはあると思いますけど…同時にライバルも多そうですよ？

『負けたくない』と、その後の剣くんの信念…タイミングがタイミングなのでお嬢様は『楯無が教えてくれてんねんから』負けたくないねん』と聞き間違えたかもしれませぬ…

◇

「ふうー、さっぱりした。」

トランクス1枚。これが俺の寝るときの格好。

「うう…あんなの…かつこいいと思わない方がおかしいわよ…」

「お？楯無帰つとったんか。」

「ふえつ!?ちよ、ちよつと!剣くん!ちゃんと服着てよ!!」

えー、着てるやん。パンツ。

「いやや。」

「せ、せめて身体隠してくれないかしら…」

「…そんなに嫌やったら着るわ。」

なんかシヨック。

「ち、違うの！別に嫌な訳じゃないんだけど…その…」

「なんや、嫌ちゃうんか。…まあ着るわ。パジャマ取って！」

装☆着！

「ん、これでいいか？」

「うん…力、強いよね。」

ん？腕のことか？

「そりやな。中学入ってから野球とか全部辞めて家の定食屋の手伝いしとったからな。鉄鍋とか振ってたし。」

「どうりでたくましい腕ね。」

…でも、もう振ることは無い。…

「悪い楯無。」

「え？…きやつ！」

楯無を抱きしめる。…ごめん、こうでもしてへんかったら…

「…俺な、よう考えたら地元の皆に別れの挨拶もしてへんし…帰る家も無いし、下手したらもう皆にも会えへんねんやんな？」

「う、うん…」

「そう考えたらな…なんか無性に寂しくなってる。…こつちには俺とおんなじノリの奴とか少ないし…、やからごめん。ちよつと今だけこうさせて欲しい。」

「私で…私でいいならいつでもいいわよ。」

…ほんまに優しいわ。楯無は。…



「(え、ちよつと！いきなり抱きしめるなんて反則よ！…あつ、ボディソープのいい匂いがする。ちよつとぐらい嗅いでもいいわよね？ちやんと剣くん安心させてあげてるんだし。…でも剣くんもやつぱり不安なのよね。留学生組は何人か同じ国の子がいるけど、剣くんは同性の地元の友だちが少ない、しかも帰る場所もないし、仲の良かった友だちと騒ぐことももうできない。…だから、私達がこうして剣くんの居場所になってあげないと、ね？…そ、それを理由にして剣くんに抱きしめてもらったりだとか一緒に寝たりしたいとか思っつてないわよ!?!…あ、でもこの匂い…癖になりそう。それに腕もがっしりしてるし…私どうしちやつたのかしら…くんかくんか…」

V S セシリア 専用機の名は

「……俺なんもやってへんやん。」

楯無と組み手して一週間。ついに金髪ドリ子との対決が来てしまった。この一週間でワンサマがめっちゃ口論してたりドリ子が俺の方睨んできたりしたけど……やばい。今隣でワンサマと……? 誰やこいつ。とにかくワンサマと誰かが話してる。

「なあワンサマ。…そいつ…」

「ああ、紹介がまだだったな。しー」

「自己紹介ぐらい自分でできる。篠ノ之箒だ。よろしく。」

…どっかで…あ！

「あのうさぎの妹!?!」

「なっ!?!お、お前姉さんを知っているのか!?!」

「け、剣…お前どこで…」

「いやなんか I S 学園入る前門の前に居たら空から降ってきたからそのまま帰したった。」

なんかくれる言うてたよな、あのぶるんぶるん。

「か、帰した…」

「す、凄いな時守…」

「そっか? あ、俺の事は名前でもよろしくー。剣でも剣ちゃんでも好きに呼んでや。」

こつちに来て分かった。…誰も気軽に剣ちゃんなんて呼んでくれへんねん!

「うむ、よろしく、剣。…名前からして剣道でもやってたのか?」

「1、2年ぐらいな。…まあ堅苦しいのが合わんから辞めたけど。突きも合わせて四種類しか攻撃無いつてなんか嫌やってん。ほら、もつと暴れたい? そんな感じ。」

「そ、そうか…」

あれ? 熱弁しすぎた?

「で、ワンサマはこの一週間何しとったん?」

「剣道…」

「へえ。…まあ次頑張れや。」

「まだ負けてないし戦っても無いからな?」

お、コイツええツツコミになつて来たやんけ。

「そういう剣は何してたんだ?」

「…勉強だけ。後は身体軽く動かして…まあ何もしてへんな…」

お?どした?急に2人して顔合わせて——ん?肩に手え置かれてんけど…

「…まあ頑張れ。」

「しばきまわすぞお前ら。…箒か…モツピーでえつか。よろしくモツピー。」

「モ、モツピー?」

「おう。お前のあだ名。」

「わ、分かった…」

おう。箒やからモツプ。ダイレクトすぎるとあかんからモツピー。おけ?

「と、時守くん時守くん時守くん!織斑くん織斑くん織斑くん!」

別に3回ずつ呼ばんでええつすよ?山田先生。

「どないしたんすか?」

「どうしたんですか?」

ワンサマと言葉が被った。…関西弁にせえやワンサマ。

「と、届きましたよ!お二人の専用機!!」

あ、それやそれ。ぶるんぶるんがくれる言うてたやつ。…そういや先生が渡される言うてたな。

「これが、織斑くんのIS『白式』と時守くんのIS『金獅子』です!!」

…

「黄ばんでるやん。」

「言うなという視線を送ったはずだ。時守。」

いや俺ちっふー先生みたいなそんな人外スペックちやいますし。

「…白？…なんか小麦粉まぶしたみたいやん。」

「言うなど言ったただろう時守。…さて、どちらから戦う？」

やりたい事やったもん勝ち！早い者勝ち！

「はいはいはい！俺！」

「分かった。…ではフォーマットとフィッティングは試合中にやれ。」

…は？

「一夏。お前は時守が戦っている間に済ませろ。分かったな。」

「は、はい！」

えっ……

「さ、時守くん！早く乗ってください！」

「頑張れよ！剣!!ちゃんと見させてもらうからな！」

「剣、お前も男だろう。一時とはいえ剣道をやっていたのだ！負けることは許さんぞ！」

「私相手に20分もったんだ。…簡単に落とされるなよ？」

それって……

「では、時守くん、カタパルトへ」

ちよつ、乗ったらいきなり飛び出すとか拒否権無しか!?

…なんか時間稼ぎに使われてる感半端ないねんけど…まあえつか。

「レディを待たせるなんて紳士の風上にも置けませんわね。」

「え？…どこにレディなんかいるの？」

どこ？リアルガチで。

「……つくづく人を馬鹿にしますわね…」

「いやまずアンタレディなんて年ちやうやん。まだまだガールやろ。」

おにやにやの子や。

「…本当に腹が立ちますわ…では、お別れです!!」

ん?.....警告...ロック?..つて!?

「いきなり撃つてくんなや!」

「ふんっ! ISバトルに不意打ちも何も無いですわ!!油断しているあなたが悪いのです!」

油断してても避けれるビームを撃ってくれたアイツはもしかしたらいい奴かもしれないな。

「次ですわ!!」

「悪いけど簡単には喰らわんで。」

身体をひねってデカイ銃から出たビームを避ける。 : : :なんで撃ちますよとか一々言うんやろなアイツ。 : : :にしてもこいつは動かしやすい...けど...

「...武装が...棒?...いや、槍か?...使ったことないねんけど...まあええわい。」

棒みたいなのを拡張領域から取り出して構える。 : : :いや構えとか知らんねんけど。

「遠距離武装のわたくしに近距離で挑もうなど笑止千万ですわ!」

「アホ抜かせ。遠距離なんざ距離詰めたらこつちのものじゃ。」

ですわですわとビームが飛んでくる。 : : :けど軌道が読みやすい。 : : :ああ、型に忠実なタイプか。んなら...

「ほいさ!!」

一気に接近あるのみ!あ?ビーム?んなもん...: : :こうや!!

「なっ!?しよ、正気ですよ!?!真正面から突きで相殺するなんて!」

「油断すんな言うたのはお前やぞ?…相手が何するか常に読んどけや!」

ビームが飛んでくる。…けど、目の前に来たにも関わらず軽く避けられる。

…速い。この機体は速い。それに使いやすい。…ぶるんぶるん凄かってんな。…んじやとりあえず!

「初撃もらいつ!!」

先手必勝!アイツが焦ってる今、懐に潜り込んで!この槍みたいな棒か、棒みたいな槍かなんか知らんけど!強いやろ!多分!!一気に振りおろしたるわ!

ガンツ!!

「…ん?」

「……はこ?」

おいなんやこれ。…腕部装甲だけで防がれたぞ。

「…はっ!」

「ちよっ!?!今撃つなや!!」

え、マジ!?!なにこれ!

「…あの、もし一次移行が済んでいないのなら、一次移行するまで待つてあげましょうか?」

「…い、いや?別に?ええで?」

「待たせたな、オルコット。ようやくこいつの本気や。」

機体名『金獅子』

世代『第3世代』

国家『無所属』

分類『近距離』

装備

近接専用変化型ジャベリン『オールラウンド』×1

金獅子専用特殊武装『ランペイジテール』×1

オールラウンド使用可能モード

『ラグナロク』振るう速度が速ければ速いほど威力が上がる。

『グングニル』投げる速度が速ければ速いほど威力が上がる。

右腕部装甲、両脚部装甲が厚くなり、左腕部も少し厚くなる。

翼部スラスター4枚。

SE 162/200

へえ…黄ばんでるとか言うて悪かったな。カッコええ金色や。

「なっ!?……猿、ですか?」

「獅子や!!…ま、やらせてもらおか、『金獅子』い!!」

金獅子を呼ぶ。答えてくれる。ええやつや。

オールラウンドに青いビーム状のエネルギーがまとわりつく。…それはドンドン形を変え…整っていく…そして、一本の薙刀のような形をとる。

「これがラグナロクか。…基本戦う時はこれメインになりそうやな。」
「エネルギーを纏った?…でも、関係ありませんわ!お行きなさい!

ブルーティアーズ！」

オルコットの方からビットが4機程飛んでくる。…ビットが配置についたけど場所は分かる。2個は近くて2個は遠い。

「おらっ!!」

オールラウンドを振るう。すると、振った瞬間に刃が光る。その刃はビット2個に命中し、破壊した。

「くっ!!」

オルコットは残りビットを自分の元に戻し、ライフルを再び構える。…もう一個の方使ってみよか。

「『グングニル』!!」

青いエネルギーが黒く怪しく輝き出し、今度は完全な槍へと変化する。

「へ、変化ですって!？」

「ああ、せや。でも、これで終わりや。」

そしてもう一個の武装、『ランペイジテール』。オルコットが空中で止まっててくれてラッキーや。

「…ええ、あなたが…」

「俺ちやうわい。…足元お留守やで。」

『ランペイジテール』：腰の後ろから伸びる尻尾状の武装。

20メートルの範囲で伸び縮みを自由自在に操れる。速くすれば相手を吹き飛ばすこともできる。…でもまあ一番ええ使い方は。

「し、尻尾!?!いつの間に…!」

「さあて、これで逃げられへんで。」

こうやって相手の足にくくりつけて動き封じてから…

「んじゃ、終わりや!!!」

グングニル思いつきり投げるこやろ!!



「んー、出国手続きとかめんどくさいのよねー。」

所属と妹とオルコツト…

「いや弱かったなワンサマ。」

「剣があんな綺麗に勝ったりするからだろ!? おかげでオルコツトの奴油断して無かったし…ああ、ダメだ。相手に隙が無いなら作れるようにならねーと。」

結局、あの試合はグングニルがオルコツトの鳩尾に直撃して俺が勝った。…山田先生曰くスピードガンで確認したら450km/h軽く出てたらしい。わーお、びつくり。ISすげーや。オルコツトも逃げようとしてたけどランページテールで引っ張って戻したっし、相対速度的な? 感じてめっちゃすごいことなってたわ。

「せやな。…俺のもあれはラッキーって感じや。」

「…時守、お前なぜあそこまでオルコツトの攻撃を避けられたんだ?」

あー、それね。雰囲気似てたからやわ。

「中学ん時俺だけやたら水風船投げられたんすよ。しかも冬でも。風邪引かんように逃げまくってて、それ思い出したんすけど。…あ、後はドツチボールですね。痛いのか嫌やないですか、やからですねー。」

「そ、それだけでか?」

「後は勘っす。なんか俺とオルコツトの波長みたいなんがあったんすかねー。」

あっはっは! 愉快愉快!!

「驕るなよ?」

「分かってますよ。…今回はオルコツトが油断してた。しかもランページテールの効果もオルコツトはよう知らなかった。やから勝つても同然ですわ。」

「うむ、…時守、少し真剣な話がある。…通路に出ろ。お前と一夏の試合はアリーナの使用時間の都合上なしだ。」

「? はい。分かりました。」

なんやろ？

「…突然なんだがな、お前の日本国籍が無くなった。そしてお前は自由国籍を取得した。」

「…え？それって…」

「…一夏には私と束というバックアップが居るが…お前には何も無い。お前を守るためとはいえ無断でしたのはどうかとは思いますが、だからこそそのIS委員会の判断だ…、そして、ここからが本題だ。…所属を国連に移さんか？」

…え、ちよつと待って。規模でかすぎて分からんわ。

「こ、国連に所属を移す？できるんすか？そんなこと。しかも自由国籍って…」

「お前や一夏のような特例が出たのでな。…受け入れ体制をとつたらしい。籍は自由国籍、所属は国連。…つまりは、だ。お前に手を出そうとする愚かな輩共は国連に加盟している国の全てから敵視されるのだ。自由国籍に関してあまり今と変わることは無いだろう。ただ日本の法律に縛られることが少なくなる。…お前を守ろうとすれば日本の法律が邪魔をするのでな。」

…は？

「いや、俺にそんな守ってもらうほどの価値なんて…」

「あるさ。たった2人の男性操縦者の内の1人、しかもだ。どうやらお前のクラスでの発言をIS学園の生徒の誰かが自国に報告したらしくてな。そこからドンドン広まって今『優先法』の廃止がほぼ決定したそうだ。」

「それって…」

「ああ、お前が『優先法』廃止の立役者になったと言っても過言ではな

い。…男性操縦者で世界を変えた人間。そんな奴を襲ってでもしてみろ。それこそ世界中が敵だ。国家代表たちもお前の意見に賛成でな、『婚期を与えてくれた彼は私達が守る』と言っているそうだな。」

…つてことは。

「つまりは…？」

「お前を襲えば世界各国から攻められ、ISの国家代表クラスにも襲われるということだ。ああ、あとこれだと親御さんのバックもつくことになる。…まあ国連に所属すれば、の話だがな？」

んなもん…

「所属する以外に道無いんでしょ？」

「…まあな。後、モンドグロツソにも次から『国連代表枠』ができるそうだな。今はお前1人だけだが…頑張れよ？ああ、後…一夫一妻である必要も無いから一夫多妻にしてもいいぞ？…ではな。」

「は、はあ……」

…誰かに…聞いてみよかな。



「…彼らは一体、何なのでしょうか。」

シャワーから出る温水が肌に弾かれ、落ちる。浴びている本人はずっと何かを考えていた。

「…織斑…」夏さん…」

つい先程戦った男を思い出す。一回戦には負けたが二回戦は勝った。…勝ったのは勝った、だが、その眼にただならぬものを感じた。どれだけ撃とうと、どれだけ突き放そうと、食らいつき、自らに一撃

を喰らわそうとするあの眼。…男として負けられない。そんな意志を感じた。

「…時守……剣さん…」

一回戦で戦った相手を思い出す。一見ふざけているように見えて、自分の攻撃をひらりひらりと交わし、何故かは分からないがあまり攻撃が当たらず、焦り。さらに一次移行を済ませた向こうの機体にしてやられた。——そして何より…

「彼はなぜわたくしを助けたのでしょうか…」

その時は一回戦終了間際まで遡る…

「んじゃ、終わりや!!」

投げられた槍が凄まじい速度でこちらに向かってくる。避けようにも足を尻尾で固められ、さらに相手方向に引き寄せられる。

「きゃあっ!!」

槍が自らの鳩尾に直撃する。全力で放たれたそれは、ブルーティーズのSEをどんと削り…

『試合終了!!勝者、時守剣!』

「つしゃー!どんなもんや!!」

その言葉と同時に、尻尾がISから離れ、それと共に自身の敗北を知る。

そして——

『オルコットさん!』

『ちょ、ちよつと!!大丈夫!』

気が抜けたのか、身体から力が抜け、ブルーティアーズすらも解除してしまう。もちろん、動力等も働いていないわけ——

『ま、まずいよあれ!!』

重力に一切逆らわずに落ちていく——

が…

「よつと、…大丈夫かいな。」

「…え?」

先程まで戦っていた彼がISを装着したまま、いつの間にか自分の落下地点におり、自分を受け止めてくれた。

「な、なぜ助けたのですか?わざわざこのように…だ、抱きかかえなくても…先程の尻尾で…」

「女をそんな雑に扱えるかい。…それにな、別に殺し合う訳でもないねん。俺が勝って、んでお前が落ちたから助けた。文句あるか?」

「い、いえ…」

「ま、所謂スポーツマンシップってやつや。…立てるか?これからワンスアマと試合やけど。」

「え、ええ。…大丈夫ですわ。」

そう言うと彼は地面に立たせてくれる。そつと優しく、まるで割れ物が割れてしまわないように…

「腹、大丈夫か？けっこうエグいの入ったけど。」

「…はい、問題ないですわ。」

「そっか、あんなんしといて言うのも何やけど怪我無くて良かったわ。」

ニコリと笑う彼。…しかし、分からない。

「な、なぜあなたはわたくしにそんな態度が取れるのですか!？」

「あ？あー、まあそれは…アレや、お前も女やろ？…やから身体とか顔とかに傷付くの嫌ちやうんかなー？って。」

「で、ですが!？」

んじゃ、と、彼はバツの悪そうな顔で…

「俺もお前にあんなん投げてもたから、それでチャラにしてくれへん?。」

「…わたくしはあなたを…日本を侮辱したのですよ?。」

「んなもんちよくで言われた俺が許せばしまいや。」

「ですが!!それではわたくしが自分自身を許せないのです!。」

「…そんなら教室とかで皆には謝つとけ。俺とワンサマはもうええで?。」

だって、と彼は続ける。

「男も案外やるって…分かってくれたやろ?。」

—

—

—

「…知りたい。あの方の…信念をもっと…」

それは興味となり——

「その誰にも曲げられないであろうその意志を…」

そして――

「貴方自身を…時守…剣、さん…」

好意へと変わっていく――

◇

「妹お?」

「うん、簪ちゃんって言うの。日本の代表候補生なのよ?」

「これまた凄い名前やな。」

簪て。そりゃ『ちよんまげ』よりかはマシやと思うけど。ヘアピンちゃんとかよりも。

「む、簪ちゃんのことそんな風に言うといくら剣君でもおねーさん、怒るわよ?」

「冗談や冗談。…で?その妹がどないしたん?」

「織斑一夏くん、知ってるわよね?」

知ってるわい。

「おう、ワンサマやろ?」

「ワンサマ?...ま、それは置いといて、...彼の専用機『白式』ってあるでしょ?」

ああ、あの〜...

「おう、小麦粉まぶしたみたいなやつやろ?」

「...どんなかは知らないけど...彼のね、その白式の開発にスタッフを割いてしまったせいだ...」

「読めた。専用機の開発が止まったから手伝えと?」

「...そうよ、随分鋭いわね。」

あざアース。...でも待てよ?..

「どないして手伝うねん。俺そんな知識無いし。」

「操縦ログとかあるでしょ?」

「せやけど…足らんやろ?」

「これから足せばいいのよ。」

「えー、でもなー。」

…っつかそもそもなんで楯無が手伝わんの?…あー、あれか? 妹のこと大好きやけど恥ずかしいから言い出せないみたいな?…変なとこで乙女チックやなこいつ。

「…酷い…抱いた私のお願い、聞いてくれないの?」

「だ、抱いて無いやろ…いや、抱いたけども…抱きしめたやろ?…うわなんか自分で思い出して恥ずかしくなってきた。」

「乙女の純情を弄んで…酷いわ剣くん。」

…なんかもう永遠に終わらん気してきた。…ったく。

「しやーなしな?」

「ふふっ、ありがと。…これが簪ちゃんよ?」

お、写真か…へー。

「姉妹揃ってべっぴんさんとはな。…お前らのお母さん何もんやねん。」

「…なんで息を吐くかのようにそんな言葉が出てくるのかしら…」

ん?…なんか言うた?

◇

「May I help you?」

「何で中国—日本間なのに英語で聞いてくるのよ…。ええつと…」

Please give me soybean milk.

「Is it soybean milk?」

…Please do your best.

Does it become bigger?」

「Noisy!」

Then of you give it!」

お気に入り登録2000人突破記念閑話　　～ I S 学
園の職員室と日常～

朝：職員会議

「では、今日も1日頑張るとするか。」

各学年別に行われる職員会議では戦闘能力の高い者が会議を取り仕切っている。これはいざ、という時の状況判断の高さがあるからである。そして、1年はもちろんこの方…

「では行くか、山田くん。」

「はい、織斑先生。」

職員室から副担任を後ろに引き連れ歩くその姿…まるで定期回診に回るドクターと研修医、フリーザとその後ろを歩くザーボンさん、立てば將軍、座れば魔王、歩く姿はまさに破壊神。織斑千冬である。だが唯一そんな魔王…いや、破壊神？魔王にしておこう。そんな魔王に気軽に接することができる人物が…

「あ、織斑先生。…また顔怖くなってますよ？ほら、笑って笑って。」

「…はあ、この顔は生まれつきだと言っているだろう。山田くんのようなほにやっとした顔が羨ましい…」

大天使山田真耶である。

「むっ、私の顔がだらしないとでも言いたいんですか？」

「違うさ。もう少し柔らかい表情の顔に産まれたかかったと言っているんだ。…で？この間のはどうだったんだ？」

「あ！それですか！聞いてください!!じ、実は…連絡先交換できたんですー!!」

きやー！と頬を赤らめ身体をいやんいやんとくねらせる教師が1人…そして…

「そうか、…良かったな。」

その姿を絶対零度の視線で睨みつける教師が1人。

「あつ…すいません。…時守くんとかどうですか？」

「生徒に手は出さん。…はあ、一夏といい…どうしたものか。」

と、いつの間にか1年1組の教室に到着。…千冬は俯き、何かを考えていたので、教室が妙に静かな事にも、微妙にドアが開いている事にも気付かず――

「…おはよう諸く――」

ポコンッ

古典的な黒板消しのイタズラに気が付かなかった。

「えっ……」

「なんで……」

「まーやんだと思つてたのに……」

「ワンサマご愁傷様!!」

時守の一言で意識は現実に戻り…

「やったのは……どっちだ?」

と、標的を男子2人に絞った。

「織斑一夏くんでございます。ママ。」

「は?! 発案は剣だろ!」

「やったらおもしろいとは言ったけどな。しかもお前『一度でいいから千冬姉を出し抜いてみたい!』とか言うてたやんけ。」

「えっ…いい、いや待つてください!…俺そんなこと……」

といつもの通りの男子2人だがこれで分かった。

「…織斑、打鉄カラファール、どちらがいい?」

「え?! いい、いやだからアレは俺だけじゃ――」

「打鉄か。最高の調整をしてお前に挑んでやろう。…姉でも教師でもなく世界最強としてお前に挑んでやる。」

——死刑宣告を下す人物が…

一限目『現代文』

「では、二重否定を使った例文を考えてみてください。」

「むむう…難しいですわ…」

セシリア達留学生組が苦戦するなか、1人ものすごいスピードでペンを動かす者が1人…

「でーきたー！」

時守である。

「時守くん、ではお願いします。」

「うつつ。『放課後、織斑一夏が織斑先生に負けないことは絶対ない。』

2.ポンド賭けてもいいよ。絶対負けるもん。』」

「あ、いい例文ですね。」

「おい!?酷くないかそれ!時守!おま——」

スパアン!!

「授業中だ黙れ織斑。…それに、事実だろう?」

「…はい。」

二限目『数学』

「…この問題を…オルコット。」

「はい。ABの2乗が 2×3 と等しいので $AB \parallel \sqrt{6}$ です。」

「正解だ。…もう少しで終わるな。では少し難しめの問題をやってみるか。」

千冬がそう言うと、出てきたのは——

「積分だ。…織斑、答えは?」

「えっ…ええつと…こんなはまだ…」

「3／2です。」

…時守である。

「正解だ、時守。…よく知っていたな。普通なら高3でやる問題だぞ？」

「予習っす。」

…やりすぎである。

三限目『IS戦闘学』

「しばらくは専用機持ちの意見や考えを聞き、何が違うか、何が正解かを考えていくことにする。…ではまず、相手がブレードで斬りかかってきた…自分から見て左下からの切り上げとする。…どうする？織斑、オルコット、時守。」

「雪片式型で受け止め、相手に切りかかります。」

「…避けて、相手が空ぶった所を撃ち抜きますわ。」

「ラグナロクで攻撃すると見せかけといてランページテールを相手に巻き付けて行動できひんようにしてからグングニル投げます。もしグングニル避けられたらランページテールで相手地面に叩きつけまくりまします。」

…時守、ドSである。

四限目『家庭科』

なぜこの授業があるのか分からないが、とにかくIS学園、自由で

ある。

「今日は皆さんにお弁当を作ってもらいます。…今作ったお弁当が今日の自分達のお昼になるので、美味しく作ってくださいね。…味の合否は、私と織斑先生、2人の審査で行います。…では、始めてください。」

「ここは家庭科室。料理が苦手な人用に料理本が置いてあったり、あらかじめ米等は炊かれていたりする。…ここで女子は…」

「セシリアには悪いけどやっぱイギリス料理はねー。」

「うぐう…それは重々承知しておりますわ。どうしますの?」

「うーん、無難に和食でいいんじゃない?」

と言った具合。…しかし、たった二人の男子班は…

「タイ米とか使ってパエリアとかどうだ?」

「他の具材あるか?…俺的には簡単にコース料理とか作ってみたかってんけど…ほら、満漢全席とかな。」

「それこそ無理があるだろ。…お、エスカルゴなんてある。」

「へえ、凄いな。うわっ!!こつちにはモッツアレラあるで。…どないする?」

「フランス…スペイン…和食…タイ…」

「…中華はどうや?」

「拉麺は無理だから…酢豚とか…青椒肉絲とかか?」

「おう、後はアレや。フカヒレスープと、小籠包と…後それこそ軽く米入れときゃえーやろ。」

「デザートどうするよ。」

「…けっこう重ためやからなあ…プリンとかゼラートとか作れればええねんけど…」

「時間がきついか…ううむ…」

「中華にあうもんあんま無さそうやな…和食にするか。」

「そうだな。…魚でいいよな?」

「せやな。あんまり腹に入れすぎると眠なるし。」

「…じゃあ塩焼きと…」

「豚汁、後はタコときゅうりの酢のもと…」

「うん、普通に米でいいな。できるだけ塩分は控えめだよな？」

「おう。デザートはわらび餅でええやろ、ほなやろか。」

レベルがかけ離れていた…

昼休み

「あれ、皆まだなのか？」

「みたいやな。…あんなん直ぐ合格貰えるやろ。」

四限目、2人はすぐさま料理を完成させ、教師に出した。…すると、千冬はどこか何かを懐かしむような表情になり、真耶は涙を流した。結果はもちろん『合格』。

…この2人のせいで合格基準が跳ね上がってしまったのは言うまでもないだろう。

「…はあ、はあ…い、一夏…」

「お、箸じゃないか。どうした？」

「どうしたもこうしたもない！…お前たちが作った料理が美味しすぎて山田先生と織斑先生の判断基準が高くなったのだ！」

「お、やーりー。ワンサマ、俺らの料理女子よりうまいやって。」

「あ、そういうことか。…箸も和食か。」

「ああ。…というより弁当だからな。私の場合和食以外ありえん。」

「ははっ、箸らしいな。」

…セシリアの班は昼飯を食べられなかったとか？

放課後

「…副会長が来ましたよー。」

「おー、けんけんだー。」

「お疲れ様です…はい、紅茶ですよ。」

「おつすのほほん。虚さんもちつつすちつつす。…あー、うまいわー。」

…最早幼なじみレベルである。

「あ、剣くん。来てくれたのね。…はい！」

「…なんやねんこの書類の量…」

「副会長の片付ける分よ?…ほら、もう一人の男の子が今頑張ってるんだし…」

「…せやな。ワンサマ…いい奴やったわ。」

今頃アリーナでボコられている男子に頭の片隅で合掌しながら、書類を片付ける。

——これはIS学園のほんの一部の生徒のほんの一部の日常——

あだ名

「…んでき、なんで楯無がその…簪？を直接手伝わへんの？」

「あー、ええつと…えへへ…」

…そんなあざとく誤魔化しても無駄や！

「もしかして…喧嘩とか？」

「ぎくっ」

初めて見たで。口で『ぎくっ』って言うやつ。

「…で？なんで喧嘩したん？」

「実は……」

カクカクシカジカ

「へー、『あなたはあなたそのままでないさいな。』か…いやそりや怒るやろ。姉と比較されてる思てもしやあないで。」

「ううう…そうよねえ…」

…でもなあ…

「それ妹もやろ。楯無の性格からしてそんな直で言うような奴ちやうって分かつとかな。」

「でもだからって簪ちゃんのせいにする訳にもいかないの。」

まあとりあえず。

「コミュニケーションぐらいは取ってみるわ。」

「今まで聞いたどの言葉よりも頼りになるわ。…で？どうするの？」

「話聞くにワンサマよりかは嫌われてないから…普通に行けんのちやうっ。」

たぶんな！

「ね、ね、どんなことするの？」

「お前妹関わっただけで積極的になりすぎやろ…、まあ…わらかす…とか？えーつと、確かこの辺に…あつたあつた。」

「なら大丈夫ね。」
せやろな。

コンコン

「あ?」

「あら?…誰かしら。…もしかして剣くん…私以外を抱くの?」

「お前ちよつと黙つとけ。」

「うつ…?デコピン?…ふっふーん、そんなんじや私は…」

ベチン!!

「男子高校生の両手本気デコピン（※1）は普通のデコピンちやうわい。」

「くっつ!!」

「ははは、せいぜい痛がつとけ。…と、そろそろ出たらなかわいそうやな。誰やろ、リコピンか?ワンサマか?」

「うーい、だーれでーすかー。」

「わ、私ですわ。」

カカロット!?

「…なんや?」

「も、申し訳ございませんでした!!」

90度。…腰痛ならへん?

「?何に?」

「あなたを侮辱したことについてですわ…本当に―」

「もうええつて。な？俺もう許したし。…自分が許せへんねんやったら、これから変わっていけばええねん。」

「…分かりました。一つ、聞いても？」

「ん。」

「…なぜあなたは…それほどまでに自分を貫けるのですか？」

えっ……んー、うー…うー…うー…うー…

「…：負けたく、ないから？」

「はい？」

「いや、なんかさ。とにかく…負けたくないねん。あとは意地。俺負けず嫌いやから。」

「ふふっ、そうでしたの。」

そっすのよ。

「これからどないすんの？」

「…皆さんには明日、謝りますわ。剣さんにはもう一度謝っておきたかったのです。」

…なんで俺なんやろ…？

「そっか。んじや、早めに寝ろよ？セシリア。…やったらなんか嫌やな。…あだ名あだ名。」

「えっ、わ、わたくしに付けてくださるのですか!？」

「うん、ワンサマもモツピーもつけてるしな。」

あれ、楯無は…後で考えよ。

「セシリア…：セシ…：撰氏…いやこれはアカン。あ、セシリー。セシリーでええ？」

「はい！ありがとうございます！」

そ、そんなに喜ぶ？

「ど、どういたしました。…夜更かししたらアカンで？お肌に悪いから。」

「ご心配ありがとうございます。…では。」

スキップで戻って行きよった。…すごい幸せそうやな。良かった良かった。

「ねー、剣君。」

…来たか。っ!?ちよ、ちよちよちよ!!

「た、楯無?あ、当たってんねんけど…」

「当ててんのよ♪…で、私もあだ名付けて欲しいかなー、なーんて。押し付けんなや!!考えられへんやろ!!!」

「わ、分かった、考えるから!ちよい離れて…」

「…嫌なの?」

嫌ぢやうけど!!ありがとう!!

「…別にそうしときたいんやったら良いけど…」

「じゃあこうしておくわ。…で?考えてくれないの?」

「お、…そうやな…」

楯無…楯無………楯無?

「むっず。タテナツシーとか?」

「いや。」

ブツシヤアアアアア!!……鼻血ブツシヤアしそうやねんけど。

…待てよ?

「…楯無ってさ、本名?普通に考えてありえへんやろ。」

「…うーん、言えないけど…真名じゃないわね。」

「んじや真名じゃない名前から取ったあだ名とか嫌やろ?…気軽に教えれへんのか。」

「…うん。」

せやったら…

「うん、いつか真名聞きだしてみせるわ。んでもってその名前からだ名付けたる。」

「え?」

「やからー。いつかお前のほんまの名前を知りたいねん。」

そりや知りたい。

「……えっ!?!」

「いやそない驚くことでもなかるーに。あ、真名想像してみよか…」
妹が簪やる?

「『刀』…とか? いやないか。」

「っ!?!」

っ!?!また急に胸押し付けて来た!?!

「な、なあ…楯無。お前さ…何したいん?」

誘ってるとしか思えへんやろ!!

「べ、別に何でもない…」

「そ、そうか?…うーん、後は…『白虎』とか…?」

「…そんなんじゃない…」

なんか言ってるんねんけど、なんか抱きしめてくる力強なってんねん
けど!?!

「た、楯無?お前どつか具合とか悪いんか?」

「…違う。」

むっ。

「いいや、お前絶対体調悪い。…ほら、もうはよ寝ろ。な?」

「うん…」

楯無は俺から離れてトテトテベッドの方に向かって…

ボフッ

寝た。

「なんやってん…」

パーティーとコンビ登場

「それでは!!一夏くんのクラス代表就任と!」

「剣くんの副会長就任を祝って!」

『かんぱーい!!』

クラス代表決定戦が終わった次の日、セシリーはちゃんと皆に謝った。んでワンサマと俺に『しよ、しようがないですからわたくしが一夏さんに教えて差し上げますわ。…剣さんももちろん、ご一緒に。』とか言うてきた。…そういうやなんで俺『剣さん』なんて呼ばれてるんやろ…まあえつか。

「ほーい!たこ焼きやけたでー!!おばちゃん持ってってー!まだまだ若いし行けるやろー?」

「あいよ、任せとき…ほんまうまいな剣ちゃん。口も料理も。」

「どっちもほんまもんやで!ささ、ほら。おばちゃん達の間もあるからー!」

「ありがとーな剣ちゃん。…そろそろパーティー行ってきたら?」

「…せやな。お言葉に甘えるわ。じゃーな、お姉さん。」

「もー、うまいこと言っちゃって!ほら!持ってき!!」

食堂のおばちゃんが…なんやこれ…柿ピーとか…おっさんちやうねんぞ…まあくれたから貰つとこか。

「おっすーワンサマ。はいこれ柿ピー。」

「お、サンキュー、…ってか剣スゲエな。食堂のおばちゃん達と…」

「うん、仲良なったで。もう『いつもの』とか言ってもメニュー出てくるレベルで。」

寮に入った日から使ってるしな。

「マジかよ…あ、そうだ。剣は何作ってきたんだ?」

「俺?…チーズケーキやけど…」

「えっ!?時守くんケーキ作れるの!？」

「ちよーだーい!」

「チーズケーキ」

え、なんやこの反応…まさか…まさかな…

「ちよいワンサマ、…お前、これパーティーやんな？」

「ああ。」

「一品作ってきて持ち込みするんちゃうん？」

「…俺もそう思っただけこのタルト作ってきたんだけどさ…」

…あれ？

「…女子作ってないとか？」

「さ、さあ…？」

…あれえ？

「ちらりと見てみたり…」

「え、いやあ…一品とか作ってないっていうか…」

「作つとけやりコピン。女子力皆無か。」

「し、失礼な!!私だって女子力ぐらいあるわよ!アンタがおかしいのよアンタが!!」

なんやねん。何もおかしくないやろ。

「?何が？」

「休日は家でケーキ作ったり!お肌や髪の手入れは女子と同じぐらいしっかりしてたり!!バレンタインのチョコは誰よりも美味しかったり!!全部よ、全部!!」

「?肌とか髪の手入れぐらいするよな?ワンサマ。」

「ああ、普通はするな。」

やんなあ？

「もうやだ…私がおかしいの?」

「じゃ、リコピンとりあえず楽しめ、な?」

「にしても今日は派手に沈んだな。」

「やめてくれよ……」

今日のISの飛行操縦で、ワンサマは見事に犬神家してくれた。

「剣のアレはセーフなのか？」

「アウトかセーフかで言ったら……あれはエラーやな。」

俺も同じく犬神家しかけた……ところをランページテールで地面ぶつ叩いて体勢を強引に戻したった。

「……はあ、……クラス代表かあ……」

「そんな気負うことでもないやろ。」

あ、チョコ柿ピーあるやん……もーらい。

「はいはい！新聞部です！」

「嘘こけや！家新聞取ってへんわ！料金なら払わへんぞ！」

「え!?ちよ、違う違う。IS学園の新聞部よ。私は二年の黛薫子、よろしくね。副部长やつてるの。はいこれ名刺。」

あ、学園の新聞部か……集金か思ったわ。……ってかなんで一学生が名刺なんか持ってるの？

「ではでは、まずは織斑くん！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……」とりあえずブリュンヒルデ目指すらしいっすわ。……っちよー剣?！」

「おー！こりや捏造しなくていいね！」

やつぱこういうタイプか！

「じゃあ次は……時守くん！好きな女性のタイプは!？」

おい待てコラ、おかしいやろー俺だけ!!……皆俺の方見んなや！

「……一緒にいたいと思う人……っすね。」

「んー、曖昧だねえ……じゃ、これからの目標は?」

「なんか知らんうちに国連に所属してたらしいんで国連代表なってモンドグロツソ出ます。」

「お！いいねえ！頂き！」

「こんなんでええんかな？」

「織斑くんは？」

「えっと…：今度の対抗戦で…：頑張ります。」

「あ、そこは『相手を完膚無きまでに叩きのめして俺が優勝する！』って書いていてください。」

「おっけー、ありがとね、時守くん、織斑くん。」

「おーい、どないしたー？ワンサマ。そんな地べたに這いつくばって。」

「あ、そーいやあの子供…：無事保護してもらたんかな？」

◇

時は少しだけ遡る。

「ふう、ようやく着いたわ。…：あ、これお金です。お釣り？要らないです。ここまで運転してくださいっただんですから！」

「ようやくー！ようやくー一夏に会える!!」

「いざ行かん！IS学園ーたーのもー!!」

「どいよいっ！」

見事に迷った。…：衝撃砲で邪魔な建物吹き飛ばしてやろうかしら。
「迷子の迷子の風鈴音、総合事務受付はー、どこですか。…：ちよつと無

茶だったわね。」

むう…どこにあるのよ。あー、さっきのタクシーの運転手さん…知らないわよねえ…。あーあ！誰か道案内してくれる優しい子、居ないかなー。

「SHR…いや、数学の時間にちっふー先生座るから…その時にブーブークツションを…」

あ、居た。よし。

「ねー、そのアンタ。道教えてくれない？総合事務受付ってどこまでなんだけど。」

「…いや、ケツに吹き矢つてのもありか？」

…聞こえなかったのかしら…

「ね、聞いている？」

「授業中ずっと変顔しといたろかな…」

…

「聞いてんの!？」

「うわっ!?!なんやお前!びっくりするわー!。」

え!?!お、男!?!あ、ああ…コイツが…

「あ、あんたが時守剣ね?。」

「?せやけど…あー、俺も遂にモテ期来てもたか。うわー、辛い。」

「違うわよ!。」

「いや知らん奴に俺のモテ期について違うとか言われてもなあ…」

「ま、まあとりあえず…総合事務受付ってどこ?。」

「…えっと…中等部?。」

「違うわよ!!普通の!IS学園のよ!。」

「…いやちよつとそれは無茶あるわ。」

「…何がよ。」

「身長。…まあでもそんなぐらいの方が可愛げはあるけどな。」
「…そ、そう?」

「おう。…まあ中学生やったらそれぐらいやろ。」

「さっきから中学生中学生って…!」

「私は高校生よ!!」

「…マジみたいやな。えつと、総合事務受付やったつけ?…あ、そこ通るわ。一緒に来るか?」

「え、ほんと?ラッキー、ありがとね。」

ふふん、普段の行いが良いからね!

「ごこや。」

「あ、ほんとに着いた。」

「おいそれどういう意味や。」

「いや…アンタの性格からしてまともに連れて行かないかと…」

「失礼な奴やな。…水風船喰らわしてからしばきまわすぞ。」

「なんでそんなもん持ってんのよ!それに嫌よ!…ま、いいわ。ありがと。」

「ふふつ、礼には及ばんよ。」

「あははっ、アンタって面白いわね。」

「お前に言われたないわ。」

むっ!

「どういう意味よ!」

「そのまんまの意味や。…お前からは…俺と同じ匂いがする…」
えっ!?

「アンタシャンプー何使ってるの?」

「いち○」

同士よ!

「いい匂いよね!い○髪!!」

「当たり前やろ。ふわあ…っってくるあれな。」

「そうそう！…アンタとは仲良くやれそうね！あたしは凰鈴音！よろしくね。」

「お、じゃあ…俺は時守剣。剣ちゃんでも剣でも気軽によろしく。」

「じゃあ…剣、よろしく。」

「よろしく、鈴。」

…なんかコンビとか組めそう？

鈴ちやんなう!!

「転校生?」

「うん、確か…中国の代表候補生らしいよ?」

「マジか、リコピンどんな奴か知ってる?…って、中国?…あつ…」

あの子供そういや中国人っぽい名前やったな。

「ん?どうしたの?時守。」

「いや、そういや昨日中国人っぽいやつ案内したなーって。」

「じゃあその子で決まりじゃないの?」

「たぶんな。」

「その情報…古いよ。」

「あ!来たみたいよ!」

「お、じゃあちよつとちよつかい掛けてくるわ。」

後ろでリコピンがなんか言うてるけど無視無視。

「おつす子供。無事保護して貰ったか?一人でようこここまで来れたな。…お小遣いあげるわ。」

「誰が子供よ!!保護って何よ!!もう高校生なんだから一人で来れるわよ…:はあ…:はあ…:何くれるの?」

「飴ちやん。」

「味は?」

「豆乳」

「しばき倒すわよアンタ!!」

おー、すつげえツツコミとボケ。

「り、鈴?お前鈴なのか?」

「え、…ええそうよ。中国代表候補生の凰鈴音。今日はクラス対抗戦の宣戦布告に来たってわけ。」

「…身長の?やめとけ。のほほんさんにすら負けとるかも知れんぞ。」

ましてやワンサマなんて…父親と娘ぐらいかけ離れてるやん。」

「う、うるさい！」

「よーしよしよしよし、落ち着け落ち着け…」
なでなで

「ううー…子供扱いするなー！」

「なんでやねん。撫でただけやろ。…子供扱いってのは…よつと！」

こんな感じに高い高いしたり…

「あつ！凄い！高いい！！…っは！じゃ、なくて…下ろしなさいよー！」

「ノンノン。」

肩車したり…

「おー、アンタ結構力あるのね。あ、そうだ。昨日はありがと。おかげで部屋に早くつけたわ。」

「…授乳室？」

「違うわよ……って、下ろしてよー！！」

うわっ、ちよ…暴れんなや！

「…鈴、楽しそうだな。」

「これのどこが楽しそうなのよ！！おーろーせー！！」

えー、おもしろかったのに。

「しゃーなし下ろしたるわ。感謝せえよ。」

「何様よアンタ!？」

素質…ある…。

「ゴ、ゴホン！とにかく、一夏！クラス対抗戦、楽しみに——」

「後ろから来るぞ！気をつけろ！！」

あー…南無。

ガキンツ！

「い、いったあ!?!な、何すんのよ!!」

「SHRだ馬鹿者。…凰、お前は2組だろう。さっさと自分のクラスに戻れ。」

「ち、千冬さん…」

「織斑先生だ。…」

すつ…つと、ちっふー先生が構えたのは出席簿。

「っ!?わ、分かりました織斑先生!じゃあ一夏!それに剣!今日の昼!食堂で待ってるからね!!」

「さっさといけ。」

「は、はい!」

すげえやちっふー先生。…出席簿構えただけで生徒ビビらすとか…マジで人間辞めてるやろ。

「私は石仮面など被っておらん。それと、吹き矢で教師を後ろから狙うな。」

「いやなんで昨日考えたことまで分かってるんすか…」

…ブーブークッション仕掛けたら…

「殺すぞ?」

「ういっす。」

ですよね…

昼休みやねん。

「待ってたわよ、一夏!剣!」

「まあとりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、通行の邪魔だぞ?」

「お前それ酷いやろ……おばちゃん!!いつものー!!」

俺? 食券なんかいらんで。

「う、うるさいわね一夏…分かってるわよ。少しは剣みたいに気を使ったこと言えないの?」

「おばはんまだー?」

「もうできんで!…って誰がおばはんや剣ちゃん!!」

「あ、こりや失礼!お姉さまやったか!」

「もー…またうまいこと言って…ほら。」

「お、やーりー。結構うまそうやん。……あれ?なんか言うた?」

「言ったわよ!一応褒めたのよ!?!聞いておきなさいよ!」

「無理、ごめん。」

なんて褒められてんやろ。聞いてへんかったわ。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりか。元気にしてたか?」

「お、それやったら俺はちょうど1日ぶりか。どや?友だちできそうか?はよ寝なアカンで?ちゃんと歯磨きしいや?」

「げ、元気にしてたわよ。…ってなんで剣はお母さんみたいになってるの?」

「これが俺や。な?」

「ああ。」

「ええ、そうですわね。」

「うむ、そうだな。」

…今更やけど俺どんなキャラで定着してんの?

「ゴホンゴホンツ!い、一夏?注文の品、できてるぞ?」

「け、剣さんも…もうできたのでしたら座りませんか?」

「せやな、行くか。鈴のラーメン伸びてもアレやし。」

『……え?』

…え?どないしたん皆。声被らせて。

「け、剣？お前なんで鈴のこと鈴って呼んでんだ？」

「昨日友だち…ってかコンビ組んだ。」

「コンビって何よ!？」

「何のコンビですの!？剣さん!!」

「お笑い。」

「アタシはボケでもツツコミでもなーい!!」

嘘こけや。絶対それフリってか知っててやってるやろ。

「お、おい。四人共…」

「あ、せやな。モツピーの言う通りはよ行こか。」

席に…

着!!

陸!!

「アンタ何かしよーもないこと考えてるでしょ。」

「はあ?…いい、いや別に?」

やめとこ。心の中で考えて滑るやろな思ったら口にしたらアカンからな。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ?おばさん元気か?いつ代表候補生になったんだ?」

ワンサマの凄い質問責め。…面接かなんかと勘違いしとるんちやうかこいつ。

「帰ってきたのはごく最近、おばさんは…元気ね。代表候補生にはちよつと前になったわ。」

ちよつと前ってさすんごい便利な言葉やねんで?言うて1、2年もちよつと前で済ませる人居るし。

「ワンサマ、おばはんはな？いつも元気やねんで？」

「そうなのか？」

「せや。」

おばはん人類最強説あるからな。…ちっふー先生より強いんちゃう？色んな意味で。

「い、一夏…そろそろどう関係か話してもらいたいんだが…」

「剣さんもですわ。…どういう成り行きでコンビなど組んだのですか？」

どんな成り行きって聞かれても…

「どんなって…ただの幼なじみだけど？」

「…おもろかったから組んだだけや。ボケとツツコミ両方こなせる奴がようやく見つけたわ。」

こうとしか答えられへんやろ。

微妙に続くシリアス

更識 簪

「良かったんですの？わたくし達だけ早くご飯を食べ終わって…」

「ええねん。まさかワンサマとモツピーまで幼なじみやったとはなあ。セシリーには幼なじみとかおんの？」

「はい、今は…メイドをやっていますが。」

「どんな関係やねんそれ。」

メイドで幼なじみとかな、そうそう無いやろ。

「剣さんは？」

「ああ、おるよ。いっぱいいるけど…もう中々会えへんな。ちっふー先生に長期休暇は国連に向いとか言われてるし訓練やら勉強やらも忙しいし。…何より地元に戻っても家が無いって言うのがな…」

「…すみません…」

「いんや、セシリーは悪ない。」

まあ辛いことは辛い…けど、

「それならこつちでおもしろいこと見つけたらええだけや。地元の奴らへのお土産話にもなるし。」

「ふふつ、そうですね。…ですが剣さん？辛い時はわたくしに言ってくださいまし。お土産話を作るのにも一役買わせていただきますわ。」

おおありがたい、鈴みたいになってくれんのか。

「そつか…んじやま、あいつらに会ったときに馬鹿にされへんぐらいには強なりたいな。」

「むっ…次こそは負けませんわよ。」

「簡単には負けたくないな。…にしても『金獅子』、あいつなあ…」

『金獅子』がどうかしたんですの？」

いや、どうのこうの言う問題ちゃうねんけど…

「…もうちよいで教室着くけど…ええか。あいつな…使いこなせば弱点はほぼ無いんやけどな…それぞれの武器が使いにくすぎんねん。」

『オールラウンド』と『ランペイジテール』がですか?」

「おう。…まあ国連からむやみやたらに情報ばらまくな言われてるから簡単には言えへんねんけどな…」

「…そうですね。お役に立てると思いましたが…」

「やからセシリーが暗くなる必要なんて無い。…まあともかく――」

なんでか分からんけど。…これは昔からある俺の癖や。ハマるもんこそ少ないけど、そのハマったもんもすぐ飽きる。…理由なんて単純や。

どれもやっておもんない。

型やら公式やら使い方やら…そんな肌に合わんもん強制されて上手くなるわけ無いし元々なりたいとも思わんかった。…でも、このI Sだけは別や。自分で戦い方を決めれる。ルールは相手SEを0にするだけ。

こんな俺の方好みの競技…

「――もっと強なつたるわ。…無敗の男。負けたくない。俺が強くなりたいのはそんだけや。…ちよーなんて目しとんねんセシリー!!」

「い、いえ…剣さんがそのような野望を持つているとは…」

「あ、あんな?別に力をひけらかさうとかそんな事考えてへんで?競技としては、俺の敵は皆倒せるぐらいになる。でもヤバイ奴らとかが襲ってきた時とかに、負けたくないねん。おーけー?」

「剣さんは…なぜそこまでして負けたくないのですか?」

うーん…なんで言われてもなあ…ボケたらしばかれそうやし…うーん…

「…なんでやるな。自分が負けず嫌いっていうのはある。でもそれ以外にも多分なんかある。」

自分でもなんでここまで負けたくないんかまだ分かってへん。…

俺ってこんなに負けず嫌いやったか？

「…では、見つかるといいですわね。」

「せやな。…お、もう教室や。じゃ、午後も頑張るか。」

「はい！」

「…ランペイジテール…あれ使いこなすのキツついよな…、手とか足の操作ちやうくて頭の演算やしな…しかも最大限の力を発揮するには常にハイパーセンサー入れて全方位完全に把握してしかも相手をラグナロクの範囲に入れつつうまいこと立ち回りに隙見つけしだいグングニルぶん投げる…その2つもむっずいねんなあ…」

授業?…今んとこまだ余裕やから大丈夫や、問題ない。

「最初は牽制程度に緩く振る…アカン、あんまり露骨にやると相手に怪しまれるから……………」

スパアン!!

「専用機の使い方について研究熱心なのは関心するが今は授業中だ。授業に集中しろ。」

「…はい…」

…誰かと勝負しよかな…。今はちやうタイプとやりたいからセシリーはアウト。ワンサマと鈴もクラス対抗戦の訓練でアウト…むむう…

「けんけーん、かんちゃんどこ行こー。」

「かんちゃん？誰や？そいつ。」

「かんちゃんはかんちゃんだよお。さー、4組にれつつごー。」

「えっ！ちよ、ちよい待て…」

かんちゃんて誰やねん!!…つてあれ？いつの間に教室の外に出てんの!?

「お、おいのほほん。かんちゃんつて誰や？」

「かんちゃんはねー、日本の代表候補生なんだよおー。」

…ああ。

「楯無の妹か。専用機の開発が遅れてるつていう。」

「…けんけんつてたまーくに、鋭いよねえ。」

たまには余計や。いっつもボケもツツコミもキレイキレイな剣ちゃんや。

「…で？ただ遊びに行くだ…け、かと思たら俺元々アイツと友だちになろおもてたし。」

「おー、かんちゃんに友だち増える〜。」

「んじや行こか。」

「かーんちゃん、あーそびーましょー。」

「え…と、時守くん!？」

「嘘！なんで剣ちゃんがここに!？」

「簪ー！かもーん」

「へいへーい、かんちゃん。」

およ？4組の中からもんのすごいスピードでこっちに向かってくる水色の髪の少女が1人…

「本音…その…名前を…大声で…呼ばないで！…誰？」

天然かこいつ。

「おー、俺か？時守剣や。剣ちゃんでも剣でも好きに呼んでや。」

「…更識…簪。名字で呼ばれるのは嫌だから…簪でいい。」

「おっしや、よろしくな簪。…でき、いきなりやけど……」

日本代表候補生やもんな。相手にとって不足無しや。

「専用機の開発手伝うから終わったら模擬戦やってくれへん？」

姉妹

「いや。」

……えっ…。

【速報】二人目男性操縦者の時守剣くん、日本代表候補生更識簪さんに模擬戦を断られる。

…二ユースになりそう。てかかなりシヨック。

「せ、専用機の開発やったら手伝うから。な?」

「…1人でやる。」

…え?」

「できんの?」

「…できる出来ないじゃない。…やるの。」

言葉だけ聞いたらスポコン精神丸出しやけど…うん、全然簪からそんな感じさせへん。

「なんでそんなにこだわるん?」

「…あなたにいう必要は無い…ことも無いかな。あなたは織斑一夏とは違うし。」

おう? どういう区別の付け方や?…関東人と関西人?…いやちやうな。

「…白式か?」

無言で小さく頷く。…なーるほーどねー。

「んならやっぱ手伝わしてくれ。」

「…なんで?」

くっ…こ、こここまで強固やとは思わなかったぞ。なんであの姉でこの妹やねん。正反对やんけ。

「…なんでって…」

…あれ?」

「なんでやろ。」

「……………ぶっ、ぶっ、ぶっ…」

お、おい? 笑い方かなり怖いよ? 簪さん。周りの人からジロジロ見られてるよ?」

「…多分アレやな、代表候補生の力が知りたいねん。」

「…それなら打鉄かラファールでも…」

「やるなら簪も専用機の方がええやろ？」

「…それは…、うん。専用機を早く完成させたいっていうのも、ある。」
「せやったら—」

「でも嫌。…模擬戦はいいけど、専用機は…打鉄式式だけは自分で作りたい。」

おおぅ?!?まだアカンの!?!?…なんでなーんで？

「なんでそこまでこだわんの？」

「…あなたには関係ない話。」

俺には、ねえ…ってことはのほほんには関係あるってか？そうなる
と。

「楯無か？」

「っ—」

急に顔がこわばった。ビンゴ。

「ま、これから一旦部屋戻ってから簪んどこ行くわ。詳しいことはそ
ん時な。のほほんとおんなじ部屋やったっけ？」

「そーだよ。」

「んじやまた後でな。」



「…本音、お姉ちゃんと、…彼、剣に何か言った？」

「何も言っていないよ、かんちゃん。」

本音はいつもとは違う話し方で簪に返す。本音がこの話し方をす
る時は、簪とご主人様とメイド、という関係ではなく幼なじみとして
話す時である。

「かんちゃん、剣ちゃんなら大丈夫だよ。」

「…でも…」

それでも打鉄式式だけは自分の手で完成させたい。なぜなら…

「お姉ちゃんは1人で完成させたし…」
「かんちゃん…」

完全無欠の姉、楯無が自身の専用機を1人で完成させたと思ってるからである。そして…

「…負けたくないもん。」

「…でも剣ちゃんの話を聞いてみたいとも思ってたんでしょ？」

「それは…：うん。」

それはそうだ。なぜ一般人である彼が姉と自分が不仲なのを知っているのか、知りたいと思つた。

「それに、楯無お嬢様とも仲直りしたいんでしょ？」

「…：…：…：うん。」

あの言葉を言われる前は好きだった。2人で話し、遊ぶのが楽しかった。…それでも

「…でも、お姉ちゃんには負けたくない。」

「かんちゃんらしいねえ。じゃあ剣ちゃん呼んで整備室へゴー！」

「…本音も…来るの？」

「もちのろくん」

「…：…：まあ…いいか、な？」

なんだかんだで幼なじみに甘い簪であった。



お、いたいた。…にしても整備室って暗いな。…僕ちゃん怖い。ア
カンキモいわ。自分で考えといてめっちゃキモなってきた。

「ちっすーのほほん、簪。」

「けんけんちっすー」

「…」

いや返せよ!!そこはちっすーって!『…ちっす』でもええからさ!
「…：…ちっす。」

返すんかいっ!!

「で?どこまで進んでんの?」

「…外装や武装は大丈夫なんだけど……って、その前に…なんで剣がお姉ちゃんのこと知ってるの。」

…話を反らせませんでしたちくせう。

「同居人や。」

「…あつ、そつか。…護衛か。」

こいつマジの天然か。

「…で、剣から見て……お姉ちゃんって、どんな、人?」

「どんな、どんなかあ……」

…猫?アカン、怒られる。…乙女…って言ったら照れよるし…

「普通の女の子って感じか?」

「……真面目に答えて。」

割と真面目やってんけど…後は…ああ。

「…可哀想、やな。」

「…どういうこと?」

「自分を、殺してる。俺は『楯無』が真名ちやうこと知ってるし、あいつがどんなことしてるかも大体想像はつく。それにアイツ…お前のこと嫌ってないで?」

「…え?」

「いや嫌ってたら俺にどうやって仲直りしたらいいかとか聞いてこへんやろ。」

あの時の表情ガチ過ぎて引きかけたからなあ…

「…ほんとに?」

「おう。しかもお前のこと話す時めっちゃ楽しそうに話すしな。まあそれは…あつこにある本人から聞いたら?」

「え?」

「っ!」

え…後ろの扉からガチで楯無出てきてんけど。半分冗談やってんけど。

「あ、楯無マジで居てんや。」

「勘で当てたの?…時々剣くんのそういうの、本当に勘なのかどうか怪しいんだけど。」

「勘やって。…ほら、楯無、こっちこっち。」
「…うん。」

…

「…」

「…」

「…」

「…いや、喋ろ?」

なんでのほほんもそんな真剣な顔してんねん。

◇

「…か、簪ちゃん。」

「……」

先に切り出したのは姉であり…そして過去、簪を突き放してしまつた楯無である。

「…ごめんなさい!」

「えっ…」

簪は目の前の光景が信じられなかった。完全無欠、完璧、そんな存在だと思っていた姉が、自分に対して深々と頭を下げたのだ。

「…こんなことを言つてもすぐに信じてもらえとは思ってないわ。…でもね、私は簪ちゃんのこと、ずっと大好きよ。」

「…なら…なんで…!」

そんな今の姉にだからこそ聞きたかった。聞けるような気がした。…こんな自分でも。

「なんであんなこと言ったの!?!…わ、私だって…私…!」
「…」

楯無は黙って簪の言葉を聞く。

「…私は…無能なんかじゃ…ない！私にだって…出来ることぐらい…あるもん！」

「……………うん。分かったた…いや、分かっているつもりだったのよ。…だからこそ…」

「……………」

言葉を続ける楯無をじつと見つめる簪。それは睨んでいるようにも、続きの言葉を期待しているようにも見えた。

「…完璧であり続けようとした…か？」

「…剣くん…」

予想外の方向から声がしたため、2人共そちらを向く。そこには普段の様子とは違い、壁にもたれかかり、腕と足を組み、表情を真剣そのものにした時守がいた。

「お前見てたらそれぐらい分かるわ。…2人共、怖かってんやろ？」

「…っ…」

「楯無は完璧が崩れるのが嫌、んでもって妹に暗部としてののを仕事に関わらせたくなかった。…で、簪はさらに楯無に突き放されるのが怖かった。…やろ？」

「…それは…」

「何となく分かんねん。…あのな、1つ言わせてもらおうわ。」

真剣な表情のまま、時守は続ける。その隣に立つ本音も、どこか不安げな表情を浮かべている。

「アホ。」

「…は？」

「…え？」

「いくら姉妹でも言葉にせな伝わらんこともあるやろ。それにな、簪。…お前は楯無になる必要はないやろ。お前はお前や。楯無とおんなじ事で頑張らなアカン理由なんて1つも無い。んで楯無。もうちよい簪の立場に立って考えたれ。…お前ら2人共お互いのこと大切に思っでんねんやったらな、そんなしょうもないすれ違いで仲悪なったらあかんで？」

「……………」

2人は俯いたまま言葉を出さない。

「ま、簪が思う程楯無も完璧ちゃうけどな。…初日にあんなことしたもんな。」

「ちよ、ちよつと剣くー」

「裸エプロンで出てきてアレやもんな。」

「い、言わないでつてー」

「…お姉ちゃん?」

「他には…ドMやったりとか?」

「だからそれは違ー」

「…お姉ちゃん…何してるの?」

「ち、違うのよ簪ちゃん!」

「後は簪の魅力をひたすら語ったりとかやな。」

「…もう…やめて…」

「…お姉ちゃん…嬉しいけど…ね?」

「ははは。ほら、すぐ仲直りぐらいできるやろ?」

その言葉で気がついた。いつの間にか以前のように話せていることに。

「ま、後は2人だけで話し?専用機は明日からや。…ほら、のほほん、行く。」

「うん、じゃーねー、かんちゃん、お嬢様ー。」

そう言つて2人は整備室を出た。

…不思議と、さつきよりかは気が楽だった。

「…剣くんの言う通り、簪ちゃんに暗部の仕事に関わつてほしく無かったの。」

「…それつて…」

「うん、簪ちゃんが心配だったから、大好きだからよ。…ダメな姉ね、私つて…簪ちゃんに…あんなことをしないと…守つてあげられない…」

「…そんなこと…無いよ?」

「…えつ?」

先ほどまで黙っていた簪が口を開いた。

「…私も、何となく…分かったた。…楯無としてのお姉ちゃんと…刀奈としてのお姉ちゃん。…あの時の、言葉は…楯無の言葉だって。」

「簪ちゃん…」

「…お姉ちゃん、私も…謝りたい。今まで、ずっと意地になってた。…ごめんなさい。」

「で、でも…簪ちゃんを…」

「…お姉ちゃんのそういうところ、悪い癖、だよ？」

「え？」

「…なんでも自分でしょうとして…疲れてる…でしょ？…分かるよ？」

「…妹だし…お姉ちゃんのこと、大好きだもん…」

「簪ちゃん…！」

大好き、という言葉大好きな妹から貰い、顔がぱあつと明るくなる楯無。

「…ねえお姉ちゃん？」

「…なあに？簪ちゃん。」

自然と、完全に昔の2人へと戻っていた。

「ドMって……お姉ちゃん、剣にそういうことされて……嬉しいの？」
「ち、違うのよ！簪ちゃん！」

また喧嘩

「剣くん。本音ちゃん。」

「ん？」

「おー、お嬢様ー。…良かったね、かんちゃん。」

「…うん。」

整備室の外でのほほんと待つてたら意外とすぐ出てきた。二人共スツキリした顔をしてる。…あれ？なんかやばい言い方に聞こえる。

「…仲直りできたか？」

「うん、ありがとね、剣くん。」

「…あ、ありがとう。」

…ほえ？

「俺は何もしてへんで。2人が2人の力で仲直りしたんや。」

「おねーさんからの感謝の気持ちよ。受け取っておきなさい？」

「…私からも…」

なんでやねん。

「仲直りぐらいでそない言われてもこっちが困るわ。…ってかそんな直ぐ仲直り出来るんやったらなんでできひんかってん。」

「ぐさっ」

二人共おんなじ反応しておんなじポーズ…orzの体勢になった。

…ほんま仲ええなこいつら。

「言い過ぎた思たらごめんて終わりやろ。」

「…そうね。ごめんね、簪ちゃん。」

「…もういいよ。私もごめん、お姉ちゃん。」

「ううん、私が悪いのよ、ごめんなさい。」

「…だから、お姉ちゃんは、もう謝らなくていいの。…ごめんね。」

……………まさかな…

「だ、だから簪ちゃんは謝らなくていいのよ！私が悪いんだから！」

「…違う…！…お姉ちゃんのことをよく分かってなかった私のせいなの…!!」

「それはちゃんと伝えられなかった私が悪くて―」

「…だから違うって言ってるじゃん…！…お姉ちゃんの分からず屋…！」

「な…ふ、ふんだっ！もういいもん！そんなこと言うんだっいたら私も考え―」

「アホかお前ら。」

「ふぎゅっ」

チョップお見舞いや。

「何また喧嘩しようとしとんねん。アホ。…まあそんだけ言い合えるんやったらまださつきよりかはましか。」

「ふふっ。そうね、ありがと、剣くん。」

「…ありがとう。…でも、…なんで剣は私たちのためにこんなことしたの？…こんな言い方もアレだけど…関係ない筈…だし。」

あー、それな…

「…いや、恥ずかしいから言いたくないねんけどな…言わなあかん？」

「あら？…何かしら？…どんな恥ずかしい理由？」

「…私も、聞きたい。」

「私も。」

「私もですね。」

「え！虚さんいつの間にかいたんすか！」

「さつきです。それより、さあ早く。」

「早く。」

な、なんやねんこの息の合い様は…

「…あー、アレや。なんか嫌やつてん。楯無が変に苦しんでるのを見てるん。」

「…え？…それだけ？」

「おう。言うたやろ？…意地でも真名聞き出すって。お前あのままやつたらなんか永遠に抱え込みそうやったから。ぱっと。」

「そ、そう…」

「……………あれ？」

「けんけんく…」

「もしかして、まだ分かってらっしやらないのでは？」

あれ?どないした?

「ん?どした?」

「あ、いや。何でもないの。」

「:うん、何でもない。」

「何でもないよ」

「何でもありませんよ?」

嘘つけや!絶対なんかあるやろ!!

「ま、2人に笑ってて欲しかったのが一番やけどな。笑ってた方が絶対楽しいし、それに1人よりも皆の方がええやろ?ほら、四人共可愛いんやし、もっと笑って笑って!」

「二か、かわつ:~!」

「にひひ」

およ?川がどないした?:川流れてんのか!?IS学園!!敷地の中に!ヤバすぎるやろ!

「じゃ、もう今日は部屋戻るわ。:何かあったら頼れよ?簪も、楯無も。二人共色々と溜め込みそうやし。虚さんものほほんも、な?んじゃ、ばいちゃつす。」

::そーいやアリーナでワンサマが何かやるとか言うてたな。:乱入するか。

◇

「:ねえ、お姉ちゃん。」

「ん?どうしたの?簪ちゃん。」

彼、時守剣君が去るのを四人で見送った後、簪ちゃんが聞いてきた。

「:真名、教えるの?」

更識家の当主、『楯無』が自分の真名を教える異性、それは将来を共にする相手。つまり、真名を教えるということはその相手と結婚する、ということである。

「そうね…彼でも、いいかな？とは思わね。何ていうか…不思議な魅力があるのよ、剣くんには。」

「…そう。…：う、打鉄式式のところ行ってくる…！」

「…ねえ簪ちゃん。もし良かったら、私にも…：ううん、私たちにも手伝わさせてくれない？」

「…え？」

「簪ちゃんにはね、ちゃんと行ってなかったことなんだけど…」

楯無は告げた。自分の専用機『霧纏の淑女』を自分1人で作っていなかったことを。その際、様々な人に手伝ってもらい、アドバイスを受けていたことを。

「…：そうなの？」

「ええ。…：ごめんね、言うのが遅れちゃって。」

「…：ううん。大丈夫。…：ただ、お姉ちゃんが出来なかったなんて…」

「ISなんて物を1人で作れるなんてそれこそ篠ノ之東博士ぐらいよ？」

「…：うん、決めた。…：3人とも、手伝って…：くれる？」

簪の問いに、頷かない者は居なかった。

◇

「…：夏のバカアアアアア…」

「…：どないしてんこいつ。…：で、セシリー、なんでお前お母さんみたい

な感じになってるん?」

「い、いえ…。なんだか鈴さんを見ていたら無性にこうしたくなりまして…」

「バカア―!」

「やつかましいな…」

よくよく考えたら時間が時間やったから部屋に戻ろうとしたらベ
ンチでセシリーが泣いてる鈴を抱きしめてた。…どういうこっちゃ。

「喧しいって何よ!!」

「言葉通りや。うるさいねん、もうちよいTPOを考えろ。」

「…TPO?」

「時、場所、場合や。TPPでもOPPでも無いからな?」

「あ、やつぱり言ったわね。」

ま、まさかこいつ!俺の言うことを読んどったつちゆうんか!?

「…鈴さん、もう大丈夫なんですか?」

「うん、ありがとね、セシリア。…でもなあ…はあ。」

「なんやらしくない。腹痛いんか?」

「違うわよ!…はあ。」

「…頭…悪いんか?」

「違うわよ!失礼ね!!」

ふむ…ツツコミ良好…ん?原因が分からんぞ?

「…もしかして…ワンサマか?」

「ワンサマ?」

「一夏のことや。」

「…なんで分かったの?」

「勘や。」

うん、勘も運もこつち来てからもぜつこーちよー。校長先生絶好調
!

「…一夏さんがどうかしましたの?」

「あー、あんたはアイツじゃないのね。…はあ、あのね?…あたし、あ
いつのこと…好き、なのよ。」

「そりやイケメンやしな。死んだらええねん。」
「け、剣さんだつて一夏さんに負けてませんわ。」

ほう、そう言われたら嬉しいな。

「話を戻すわね?…あたしね、去年中国に戻る時に一夏にこう言ったの。『料理の腕が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』つて。」

『毎日私の味噌汁を』的なあれか。」

「そ、それは…大胆に出ましたのね、鈴さん。」

「うん。…あたしなりに頑張ったつもりだったんだけど…あいつ、『毎日酢豚を奢つてあげる』つて勘違いしてたのよ。」

…いやいやいや。

「酢豚タダとかいくら優しくてもありえへんやろ。」

「そこ!?!…まああいつはそう捉えたのよ。なんせキングオブ朴念仁、だからね。」

「そ、そこまでですか?」

「うん。中学ん時だつてね、あいつに告白した女子とか結構居たの。…でもその全てを『いいぜ?どこのシヨツピングモールだ?』つて付き合う、つて意味を履き違えてるのよ。」

「死刑やな。」

「…は、ははは…」

普段こんな笑い方せえへんぞ、セシリー。…いやにしても凄すぎるやろ。刺される。…つてか俺がこれは言わへんやろ思ってたこの言つとつてんな。しばきまわしてどつきまわす。

「はあ…あたしつて魅力無いのかなあ…」

「あるやろ、いくらでも。」

「え?」

「ちよ、ちよつと剣さん!」

「明るいし、おもしろいし、…多分優しいし。しかも可愛らしいし。…うん、全然変なことせえへんかったら普通にええ子やろ。」

「そ、そうっ?」

「…むう。」

お、おい？どないした？セシリー。急にほった膨らまして。

「せや。…ま、自分に自信持てや？な？」

「う、うん。ありがとう。」

「…鈴さんずるいですわ。」

「？何がずるいんや？セシリー。…あ、もうけっこうええ時間や。ん
じやな、セシリー、鈴。」

とりあえず…

久しぶりにあいつらに連絡とるか。

対抗戦へ…

「お前らどんな感じ？こっちはかなり楽しいで、…と。」

鈴とセシリーと別れてから自室に戻り、トークアプリのグループで皆の近況を知る。

＜剣ちゃんがいーひんくて死にそう。

＜健くん死んでたで。

＜…剣ちゃんどんな感じなん？

「こないだ喧嘩売られたから戦った。…と、」

＜そいつぶつ殺したるか。

＜俺らの天使にして神、剣ちゃんになんてことしとんねん。

＜いや、まずは爪を剥がして…

＜全身の皮をはいで…

＜歯も全部抜いて

＜全身をボコボコに殴ってから…

＜思いつきり…

＜つねる。

＜つねる。

＜つねる。

「…まあ勝って仲良くなってんけどな。」

＜流石歩くジャンプやな。

＜友情、努力、勝利の三文字は剣ちゃんのためにあるといつても過言ではないよな。

「あんまり努力はしてなかった。」

＜才能やな。

＜せやな。剣ちゃん変態やしな。

＜健くんと言われたら終わりや。人類滅んでも健くんの方が頭おかしい。

＜禿同

＜禿同

＜禿同

＜禿同

＜禿同

「相変わらずやなあいつら。」

トークアプリを閉じる。

「…こっちでも…楽しめるかな…」

ベッドの上に居る俺の頬を、冷たい風が撫でた。



「うわああああん!!一夏のバカア!!唐変木!!」

「デジャビュやけど今度はどないしたんやセシリー。」

「好きな殿方…いえ、女性が男性から言われて欲しくない言葉を言われたらしいですわ。」

簪と楯無が仲良くなってから数日後、また鈴がセシリーに抱かれな

がら泣いてた。しかもまた同じベンチ。もうセシリーが菩薩かなんかに見えてきたわ。

「死ねばいいのよ!」

「いや待ておかしい。飛びすぎやぞ。」

「言っつていいことと悪いことぐらいあるでしょ!!」

「まあ…せやな。」

何となくやけど鈴が何を気にしてるのかは分かっている。やから今まで一回も弄らんかった。…ほんまに相手が嫌なことは弄らん主義やからな。

「あつたま来た。今度のクラス対抗戦で絶対フルボッコにしてやるんだから。」

「が、頑張ってくださいまし。」

「えらい気合いの入りようやな。」

「…当たり前よ…、あたしと同じ世界中の女子の恨み、全部アイツにつけてやるんだから。」

…これはワンサマが悪いんか?…悪いな。アイツが全部悪い。

「クラス対抗戦…明後日、でしたわね。鈴さん、クラスが違う者が言うのもなんですけど、頑張ってください。」

「お、頑張れや。…学食デザートの半年フリーパス、か…」

「それもあるし、負けられないわね。」

なんとこのクラス対抗戦、学食のデザート半年フリーパスが優勝特典なのだ。…勝てよワンサマ。負けたらお前の居場所は無いと思っ
とけ。

「んじや、俺ちよいまた行ってくるわ。」

「日本の代表候補生の方…ですか?」

「おう。最近ようやく普通に喋れるようになってな、専用機の開発手

伝ってんねん。…じゃ、早い方がええし、行ってくる！」

怒りに燃える鈴と、不機嫌そうなセシリーに別れを言って簪の元へと向かう。…セシリーも笑ってたら可愛いのかなー。

「おつす簪、のほほん、虚さん、楯無。」

「…また、来てくれたんだ。」

「当たり前やろ。ISが完成するところ見てみたいし、代表候補生の実力も知りたいからな。何よりもまずお前が飛んでるところを見てみたい。」

専用機が完成せーへんから飛べへんなんて可哀想やしな。

「…そう、じゃあ今日、見せられる…かも。あ、最終チェック…行ってくる…」

トテテ…と簪は専用機の方に走っていった。…何あの小動物。

「かんちゃんねー、今から試運転するところなんだよ。」

「…長かったですね。」

「短い方よ？この人数でこのスピードは。…ねえ剣くん。」

簪の専用機について話してたのに楯無がやたらと真剣な表情で俺の方を向いてきた。

「…専用機持ち、代表候補生や国家代表と戦いたいのか？」

「おう。そりゃ戦わな強ならんし、何より戦ってみたいしな。」

「ふーん、…じゃ、クラス対抗戦が終わったら、おねーさんと戦いましょ?」

「…は?」

え、…なんで楯無と? ああ、そういや。

「学園最強、やったっけ?」

「そ、…まあそれだけじゃなくて、ロシア代表でもあるんだけどね。」

「…え? ……めっちゃ強いやんお前!」

「今更ですか…」

あのですね虚さん。そんなんいつ気づけ言うんですか。

「…よし、これで大丈夫な筈。…お待たせ皆。」

プログラムの最終チェックを済ませた簪が、『打鉄式』を纏ってこちらへやって来た。

「じゃ、クラス対抗戦が終わったら、ね? ……簪ちゃん…ようやく…ね。」

「…うん。…これで完成した、とはまだ分からないけど…皆、その……ありがとう…」

…なにこれ…ヤダこれ…何この感じ…涙出ちゃうよおじさん。…まあ流石に泣いては無いねんけどな…この――

「…うう…簪ちゃん…ほんとに頑張ったわね…」

「うわあーん…かんちゃーん…」

2人以外は。ほら、簪もちよつとは引いてるし、虚さんも頭痛そうにしてはるで。まだこれからやん。

「…じゃあ行ってくる…。」

「うん、行つてらっしゃい。…しつかり見てるわね。」

簪は楯無に言われ照れながらもピットへ向かい、飛び立った。

—なんや、ちゃんと仲良くやれてるやん。

◇

「…大丈夫。…お姉ちゃんや本音、虚さんや剣…皆が手伝ってくれた…この、打鉄式。…絶対に…うまくいく…！」

前回。というより、手伝ってもらう前は飛ばすことすら叶わなかった。…だが今は。…皆に手伝ってもらった今は—

「山嵐…大丈夫、他の武装も。…スラスターも…大丈夫。…えっ！」

全てが上手くいっていた。…しかし、不具合が起きてしまった。

「だ、だめ……静止が…効かない…！」

脚部についたスラスターが暴発してしまい、制御不能となつてしまった。…本来…いや、完成している機体ならば脚部スラスターが潰れても翼部スラスターを使い、立て直す事も出来るのだが、システムの不具合がここにもあつたのだろうか、上手く動かせず下に落ちてしまう。

「……なんで…お姉ちゃんや皆の力を借りても…私には出来ないの…？」

…やっぱり…私は無能…なの？

「簪いいい!!」

涙を流しながら落ちていると…声がした。

ふと声のする方を見ると、金の装甲を纏い、こちらに向かってくる人物が1人――

「…つぐ!!」

その人物はISの後ろから伸びる尻尾を私の身体に巻き付け、なおかつ抱きしめて…アリーナの壁に激突した。

「だ、大丈夫…!?!」

「…おう。そ、それより…簪は?」

「…わ、私は大丈夫。」

それもその筈。完全に固定された状態で彼がクッション代わりになってくれたのだ。

「…うぐっ…絶対防御がある言うてもやっぱ衝撃は響くな…」

「…ご、ごめんなさい!」

「謝らんでええ。…ほら、脚部をどうにかしたら後はもう少しやろ?」
「う、うん…」

そんな会話をしていると、アリーナに一機のISが降り立った。

「大丈夫!?簪ちゃん!剣くん!!」

「…私は、平気。」

「…俺も…まあ大丈夫。」

お姉ちゃんは胸をなで下ろし、ほっ、とため息をついた。

「…無事で良かったわ。2人とも、念のため医務室に行きなさい？特に簪ちゃん。明後日にはクラス対抗戦もあるんだし。」

「…うん。…でも…」

「打鉄式式やったら大丈夫やろ。…後は微調整で何とかなる。」

「剣くんの言う通りよ。虚ちゃんや本音ちゃん、それに私の力を信じてないの？」

「…おいこら楯無…なんで俺が入ってへんねん。」

「うふふ、何ででしょうか。」

…相変わらず…猫っばい。

「む、簪ちゃん…何か失礼なこと考えたわね？」

無言でブンブンと首を横に振る。…お姉ちゃんはこうしたら…

「……ま、いいわ。簪ちゃんだもん。」

という謎理論を持ち出す。…これは昔から。…私が知ってる唯一のお姉ちゃんの攻略法。

「…じゃ、簪。医務室行くか。」

「…う、うん。…ほんとに大丈夫？」

「ああ、大丈夫や。これからも付き合うで？…失敗しても、その度に俺が助けたるわ。やから、お前はお前が出来ることをしろ。」

なっ？…と、私に言い聞かせる彼。…私が出る…こと？

「あつ、剣くん…簪ちゃんを口説いてるの？」

「そんなんちやうわ。…まあ姉妹揃って魅力があるのは認めるけど。」

「…むう…」

お姉ちゃんが赤くなった。…あ、あれ？

「？どないした？簪。」

「な、何でもない…！」

なんで…？

「…そうか。…じゃあちよい行ってくるわ。」

なんで顔が熱いの…？

お気に入り登録2500人突破記念閑話　　くええ
歳した女達と男子の夜く

「うう…酷いですう…」

「ハツハツハ!!真耶らしいと言えば真耶らしいな!!」

「むう…先輩!私にとっては笑い事じゃないんですよ!」

「そうよ千冬。せっかく真耶に春が来そうだったのに。」

「そう言うな、フィアス。いやあ笑った笑った。」

「うう…フィアスさあん…先輩が虐めてきますう…」

「おーよしよし。」

現在…金曜日が土曜日になろうか、という頃…教職員は職員室で…
呑んでいた。それでいいのかIS学園。

「…だ、だめだ…思い出すだけで笑いが…ぷつ、あつはっは!!」

「先輩!!…はあ…」

「まさか真耶、大学生だと思われてたとはねえ…高校生に『家庭教師だ
と思っていました』って…」

「…言わないで下さい。…私も自分で自分が嫌になります。なんで高
校生を普通の男性だと思ったのか…」

そう、先日、真耶が連絡先を手に入れたと言っていた男性。彼はごく
普通の高校生であり、真耶を大学生か何かだと思い、『家庭教師とか
してくれませんか?』という連絡をしたいがために連絡先を交換した
のだ。…もちろん、真耶はれっきとした教師なので拒否、——結局、真
耶の彼氏候補は見事、消えてなくなつたのだ。

「ほら、呑め真耶。…というより不思議だな。そんな胸部装甲を持つ
ているのになぜ間違えられるんだ。」

「きよ、胸部装甲って…先輩…」

「あー、ダメだなこりゃ。千冬のおっさんモード突入だ。」

「誰がおっさんだ、フィアス。…私だって酒は呑むし、多少酒が強いぐらいの方が男受けは良いだろう。」

そう言い切り、グイツと一気飲み。…多少、どこの騒ぎではない。

「…もしかして…まだ小さい…とか？」

「それ以上言おうと嵐にぶち殺されるぞ。…胸で弄った時のあいつは何をするか分からん。」

「胸の大きさなんて関係ないでしょ。好きなら好きって言えば良いのよ。」

「…お前も大概、男気があるなフィアス。」

そう言い切り、千冬は再びジョッキを空にする。

フィアスもグラスの中を空にする。

真耶は…疲れが溜まったのか、伸びをし…

「んー。つぶは。あー、疲れました。」

戻した。…それは問題ではない。今ここで問題なのは…

「おい真耶…お前、付けてないな？」

「ふえ？何をですか？」

ぶるん、と揺れる兵器である。酔いが回ってきたのか、千冬が隠して言った事を理解しきれていない真耶。…だからこそ…だからこそなのだろう。

「…ノーブラか？」

「……えっ……、あっ！」

フィアスに唐突に言われ、酔いが覚めた。

「ふむ…よつ。」

「ひゃあ！ちよ、ちよつと先輩！や、やめて…」

「…柔らかいな。フィアスもどうだ？」

「じゃ、失礼するわね、真耶…おお…これは…」

…想像してほしい。ええ歳した3人が酔っぱらって胸を揉み、揉まれているのを…

さて、ここで問題です。

1. 他の教職員も混じり、乱○パリーになる。
2. たまたま書類を出しにきた織斑一夏に見つかり、社会的に終わる。（書類は消灯時間が過ぎてもいいから出せ、とのこと。）

3. 一夏と同じシチュエーションで女生徒に見つかる。

…この3つのうち、最も起きやすく、かつ最も弁解のしにくくにはどれか。もちろん…

「…お、織斑先生にフィアス先生…何を？」

『3』である。しかも…

「なんだ、更識姉か。何って…見れば分かるだろう？」

よりによって生徒会長。しかも開き直るといって何ともまあ教師の威厳もクソもない。

「ま、まあ…分かりますけど…」

「ええっ!?ちよ、ひあつ…あん…更…識さん…納得、しないでく…らはい…」

「あのか、もしかしてフィアス先生と、織斑先生って…」

「違うぞ？ 私達はノーマルだ。…こいつがノープラだったからな。ついで。」

「ええ…」

ノープラなら揉んでもいいのか。…否、である。…できれば揉ませてください。

「おつ、そうだ更識。お前、彼氏なんかは作る気は無いのか？」

「彼氏、ですか？…あ、ま、まあ…気になる人は…居ます。」

「ほう…一夏ではなく時守か。」

「なっ!?なんでそこで剣くんが出てくるんですか!?!」

「ほら、否定しない所を見る限りそうなのだろう。」

「…むうう…、と、とところでなんでこんな話を？」

楯無が疑問に思うのも無理は無い。真耶はともかく、千冬という彼氏など作る気があるのか、というような人物からそんな話題が飛んできたのだ。

「時守が婚期の発言をしてからな、そろそろ考えてみないか。と言う話が教職員達の中で出たしてな。」

「…遅くないですか？」

「言うな馬鹿。…これでも女子会だ。」

「…え、っ…」

「おいなんだ今の声は。お前からそんな声は聞いたことが…いや、あるな。布仏姉に絞られている時か。」

「虚ちゃんは良くも悪くも真面目で純粹ですから。」

本人が居ないところで話題にされる、というのは嫌な人はとことん嫌がる。…布仏姉がその1人、別にいいという1人は布仏妹である。

「ああ、そうだ更識。お前、結婚するために私に何が足りないと思う

？」

『女子っぽさ』という回答がすぐさま出た楯無を責める者は誰も居なかった。

そう、

質問した本人以外は——

そして…

その翌日の朝、やけに顔を赤らめた楯無を見て時守が不覚にもドキツときたのは言うまでもない。

◇

「…結婚、ねえ…私も考えてみようかしら。」
「な!?お、おいスコール!!そんな事できる立場だと——」
「あらオータム。…愛に立場も身分も関係ないのよ?」

◇

千冬達が呑んでいた頃、2人の男子は集まり、所謂男子会なるものを行っていた。

「…ワンサマ…」

「ん?」

「死ね。」

「は、はあ!?なんでだよ!?!」

「お前…そこはそんな反応するところやうやろ。あのな?『死ね』言われたら『…生きる!!』って返すねん。ほら、もっかい。死ねや。」

「…生きる!!」

「うっさいわ黙れ。」

「ひ、ひでえ…」

「やからそこはな?『…喋る!!』や。ええ加減自分でボケ覚えなアカンで?」

「おう。」

場所は時守の部屋。…楯無が『用事があるし今日は虚ちゃんの所に泊まるわ。』と言っていたのを思い出し、開いた男子会である。

「お、ほらもう始まるぞ。」

「な、なあ剣。」

「ん？」

「…なんでそんなに同じリプレイばかり見るんだ？ 阪○は勝ったんだろ？」

そう、今日は時守の応援する球団、阪神タイガ○スが勝ったのだ。…そして一夏の問いに対する答えは…

「アホ、勝ったから何回も見んねん。スッキリするやろ？ ちなみに明日の朝も『おはよう朝日で○』見るし。」

「へえ、やっぱり自分が応援してるチームが勝つと嬉しいものなのか？」

「まあせやな。…でも今はやばい。開幕5連敗した思ったら今度は怒涛の7連勝。一気に3位浮上でこのまま首位奪うってところやからな。」

「…俺もどこか応援してみようかな。」

「んじや阪○な。はいこれメガホン。あげるわ。」

「お、おう。」

「まあとりあえずスタメンと控えの名前覚えてから応援歌覚え？ そしたら見に行こや。東京ドーム。」

「あ、俺一回行って見たかったんだよな。野球観戦。」

「…出来たら甲子園が一番ええねんけどな…ホームやし。」

織斑一夏、いつの間にか○神ファンになってしまった。

「まあお前に阪○の何たるかを叩き込んだるわ。」

「…え？」

「んじやまず○神が初めて日本一になった頃からやな…。」

それぞれの夜は…賑やかに過ぎていく――

怒れる獅子

「…で、できた…！…私の…専用機！」

本日は日曜日。クラス対抗戦まで後数時間、と言ったところで、整備室に簪の声が響いた。その場にいた、全ての人が歓声を上げた。ま、もちろん俺もやけど。

「おおー！かんちゃん、おめでとー！」

「おめでとうございます、妹様。」

「おめでとう、簪ちゃん。」

「おめ簪。略しておめかん。」

「…ふふっ、何それ。」

しかし妹様で、虚さん。もうちよいなんかなかったん？ほら、簪様とか。…あれ？様付けること前提？

「…これで、クラス対抗戦も…大丈夫…かな？」

「大丈夫やろ。打鉄式式を一番分かっているのはお前や。…それに、簪は簪やろ？お前のやれることをやればええねん。」

「…う、うん…」

すっごい今更やけどなんで俺1組やのに簪を応援してるんやろ？
…ワンサマとか鈴とかあれからどないなってるんや？後でモツピーとセシリーとリコピンに聞いとくか。

「ま、頑張れや。応援してるわ。」

「…うん、ありがとう。」

…とつととアリーナ行くか。

◇

「むう。」

「あ、あはは…」

「…おいリコピン。セシリーは一体どないしたんや?」

「あんたが構ってあげないからでしょ…!」

「ちよ、ちよつと理子さん!」

ん? なんや、構って欲しかったんか。そういや最近簪の方に付きつきりやったしな…よし、簪の専用機も一段落着いたとこやし。

「んなら次の週末にでも買いもん行くか?」

「…は?」

「え? そ、それって…!? デ、デート…」

「んー、まあせやな。そうなるか。…あー、でも楯無との模擬戦もあるし…」

「えっ!? ちよ、時守ーアンタ今なんて!」

あん? どないしたんやりコピン。そんな大声出して。

「なんて? て…楯無っていうやつと模擬戦すんねんけど…お前楯無のこと知ってるの?」

「知ってるも何も学園最強でロシア代表よ!? 知らないわけないじゃん! ……そもそもなんで模擬戦することになったのよ。」

「そ、そうですね! わたくしともまだほとんど模擬戦をしておりますのにー!」

「いやなんかノリと流れで…あ、そーいや簪とも約束してたな。」

…あれ?なんでこんな多忙なんやろ。

「か、簪さんとも!?(デート的な意味で)」

「どういう事ですの剣さん!!わたくしの次に簪さんもとは!!(デート的な意味で)」

「?簪とは楯無の後にやる予定やけど?(模擬戦的な意味で)」

「や、やる!?(○○○的な意味で)」

「…な、け、剣…さん?いつの間にそんな関係に!?!…というより2人!?(○○○的な意味で)」

「やから楯無とやった後に簪とや言うてるやん。(模擬戦的な意味で)」

?…なんでこの2人はこんなうるさいんや?うるさいのなんかツツ
コミの時だけでええのに。

「模擬戦やるだけでなんでそんなうるさなんねん。」

「…あ、ああく…模擬戦…ね。」

「そ、そうでしたの…」

「…お前ら…何を勘違いしてたんや?」

割とマジで真剣に。…あ。

「お、もうちよいでワンサマと鈴の試合始まるやん。はよ座ろや。」

「…そうね。」

「…そうですわね。」

テンション下がりますぎやろお前ら!!

「…あ、剣。」

「ん？簪？…なんでここにいるん？ピット行かんでええん？」

「…うん、私の試合、この次だから。…ギリギリまで観客席で試合見ようかな？…つて…。」…「一緒に…いい？」

「おお、ええよ。ほな行こか。」

「お、お待ちください剣さん!!」

「…はっ!?!あの時守に美人が2人も!?!」

失礼すぎるやろリコピン、後でタオル喰らわすぞ。

「…いい、痛い…」

「お前があんなこと言うからや。」

リコピンにタオル喰らわせました。あー、スツキリ。しかも2発な。ははっ、観客席にめっちゃ座りにくそうや。爆笑。

「…あ、あのー、剣さんと理子さんって…どういう関係ですか?」

「…わ、私も…気に…なる。」

「ん?ただおんなじ中学や言うだけやで。リコピンわざわざ東京からこっち来てんやんな?」

「うん。一応有名私立だったし、IS学園にも行きやすかったから。」
「まあアホやったけどな。…おかげで俺がどんだけ必死に教えたったか…。」

「…というと?」

…イギリス出身のセシリーに言って分かんのかな?…これ。

「リコピン内申やばくてな、テストで稼がなあかんから俺が教えたつてん。」

「これでも一応3年間主席だもんね、あんた。…はあ、全く…なんであんな化物揃いの学校でそんなことできんのよ。」

「頑張ったからや。ええ点取れるだけの勉強したからな。」

「…素直にすごいと思うわ。あんたのそういうところ。」

「そうですわね、すごいですわ、剣さん。」

「…うん、すごい。」

こ、こんだけ褒められたら照れるわ。…あんま褒められた事とか無いしな。中学とか男友達とふざけてしかなかったし。

「まあやからISでも同じぐらい頑張るつもりやで。」

「そうですか…あ、鈴さんと一夏さんが出てきましたわよ。」

「な、なんか凰さんのIS…トゲトゲしいね…」

「…あれで刺せばいいのに…」

リコピン 簪 俺 セシリー

と並んでる観客席からアリーナを見るともう直ぐ試合が始まる、つてとこや。

「…な、何言い合いしてるの？あの2人。」

「理子さんは知りませんでしたわね。…あ、でも言っているのか…」

「まあ誤魔化して言おや。…まあとりあえずワンサマが鈴を怒らせただけや。」

「…刺されないかな…」

んな雑談をしてると試合が始まった。…つて…

「ワンサマ余裕こきすぎやろ…」

「ま、まあ織斑先生がお姉さんだし…才能とか？あるんじゃない？」

「そう言えば…放課後織斑先生と何かの特訓をしていましたわ。」

「……………」

な、なんかさつきから簪から殺気が…お！さつきから殺気が…や、やばい…笑えるわ…

「…あんたまた自分で考えたネタで笑ってんの？ちゃんと試合見ときなさいよ…」

「う、うっさいわりコピン…あー、おもしろ。」

「…試合が動きそうですわ。」

「…うん、どっちかが仕掛ける…」

代表候補生2人の言葉に俺とリコピンの気が引き締まる。…よく見させて貰おか、ワンサマ。男の意地——

ドオオオオオオオンツ!!

を。…と思ったら黒いのを見させてもらいました。…何あれ。ワンサマの意地って実体化すんの？怖っ!!

「と、時守…やばいよ!?!」

「何がや?」

「と、扉が全部閉じられてる!!」

「…なんやと?」

ほんまや。扉が全部ロック掛かってる。…しかも遮断シールドも実体シールドが降りてる。…

「…敵か。」

「みたいですね。」

「…うん。」

「う、うわあ…もしかして私かなりすごい所に居る？専用機持ち3人候補生2人って…」

「セシリア、パニックってる奴らを先導してくれ。簪もや。扉開かへんかったらぶち抜いても構わんやろ。」

非常事態や。…あだ名なんかで呼んで気を抜かすなんてこととしてられるかい。

「分かりましたわ。ブルー・ティアーズ!!」

「…同じく。…来て…打鉄式式!」

そうやって2人はISを展開し、セシリアは観客席の離れた扉へと向かった。…あれ？

どした簪。急に打鉄式式を解除して。

「…どないした？簪。」

「…ギリギリまで調整してたから…エネルギーが…」

「…足りへんのか。」

「…うん、…こんなんじや…候補生失格…」

「な訳ないやろ。このクラス対抗戦に間に合わせただけで凄すぎるわ。ほら、理子も簪も落ち着い——」

ドオオオオオオオンツ!!!

「なっ!?!」

「…嘘…!」

「やばっ!!」

2人を落ち着かせてパニックってる奴らを先導しようとした時、俺の直ぐそばに何かが落ちてきた。

否、何か。ではない。

「マジか……理子！簪！俺の後ろに！」

敵である。深い灰色の…手がやたら長いIS。
すぐ様『金獅子』を展開し、2人を隠して『オールラウンド』を展開する。

…って意味ないやんけ！観客席やしまだ皆閉じ込められたまま…
簪は専用機で戦えへんし…先生も近くに居らん。…ってことは…

「…俺がやらなあかん…か。」

「…だ、大丈夫なの？時守…」

「……剣…？」

ふと後ろを振り返ると俺の背中に居る2人が震えてた。

…そりやそうか、いきなり意味分からん奴が襲ってきてんもんな。
ビビって当然や。俺もなんでこんなに冷静なんか分からんし。

「…ああ、大丈夫や…とは言えへんな。まともな戦闘訓練はまだ全然足りてへん…」

けど、と言いかけた所で『プライベート・チャンネル』が飛んできた。

『時守!!観客席に行った敵はどうなっている!!』

「織斑先生つすか…今俺の目の前に居ますよ。」

『…任せられるか？こちらから増援ができんだ…』

「…やっ तरीますよ。…これでも俺、怒ってるんすから。」

プライベート・チャンネルをぶちぎる。…何に対して怒ってるかやと？んなもん決まってるわ。

「…皆をこんな目に…こんな怖い思いさせて…ただで帰れる思うなやカスが。簪、理子。できるだけ離れるよう皆に言っといてくれ。…もちろんお前らも離れとけや？」

「…あ、あんたもしかして…」

「…た、戦うつもりなの…？」

当たり前やろ。

「ああ。…お前らをそんなに怖がらせた奴にな、ちよつとお仕置きしてくるわ。」

そして俺は『ラグナロク』を発動させ、敵に突っ込んだ。

V S 侵入者

「…とは言ったもののやっぱキツイか？」

敵と相対しながら、時守は小さくつぶやく。

「…：…なんやよう分からんけど…様子見しとんのか？お前。」

時守の問いに敵は答えない。だが、答えないからといって放置しておいて良いものでもない。なぜなら――

「話聞いてんのかお前…：、ちっ、まあええわ。（問題はコイツが皆を狙うことや…：なんとかして俺に注意を引き付けな…：）」

ここは観客席。時守以外の生徒はもちろん専用機など持つておらず生身である。もし、そんな所にビームやらを打たれてしまえば大惨事になってしまう。よって――

「（心もとないけど…：）短期決戦や!!」

『オールラウンド』を自身の体の前に構え、敵に突っ込む。――が、その異常に長い手に阻まれ、弾かれる。…：そして…

「つくー！」

ビームが敵から放たれる。ギリギリで躲そうとしたが、僅かにかすり、SEが減ってしまった。

「…：遠近両用かよ…：ってことは老眼や乱視にも対応してんのか？…：っ

てボケてる場合ちゃう…か。…やばいな。」

『どうする』

その問いに対する答えを導くために、時守の脳は動き続ける。

『グングニル』—この短い間合いで振りかぶる時間も無い。

『ランページテール』—限られた空間の中では効果を発揮しにくい。そして何より…

『ラグナロク』だけでどれだけの威力が出るか、それとどれだけ引き付けるか…やな。…つやべ！」

作戦を考えている間も、敵は攻撃を続けてくる。…それが自分だけならまだいいのだが—

「くそっ！」

「…ひっ…」

「大丈夫か理子!!」

「…う、うん………」

避難しようとしてパニックになっている生徒まで攻撃されてはこちらからろくに攻撃できないのだ。今はなんとか『ラグナロク』でビームを弾いているが、このままいけばいつ『オールラウンド』が悲鳴をあげ、折れるか分からない。

故に——

「(思考を…止める。…感じるままに…ってやつや。(…はっ!!)」

己の本能に従って敵を落とすにいく…

「(ビーム以外では一撃で落とされることは無い…ビーム撃たれる前に近距離から離されずにひたすら…) …お、おとおおとおお!!!」

本来ならば相手を拘束、または距離を取るための武装『ランペイジテール』を防御のために使用する。

しかし対する相手もその異常な長さを誇る腕を人間で出せる速度の限界を大幅に振り切った速度で振り回す。『オールラウンド』と『ランペイジテール』の2本で防ぎ、攻撃に転ずるも、それも防がれる。という一進一退の状況になっていた。

そんな中、一本のプライベート・チャンネルが飛んでくる。

『時守！アリーナの方は織斑と嵐が落とした!!…その相手は無人機だ、遠慮など要らんから殺す気でいけ!』

「…人殺したことなんか無いんですけど…あ。…了解つす。」

『…くれぐれも無茶はするな。以上だ。』

そして一方的に切られた。

「(無茶するな…か、教師も楯無とかも来れへん時点で俺がやらなあかんのやろが…!) はあっ!!」

今度は『オールラウンド』一本で攻め、防ぐ。対する相手も今度は『オールラウンド』を掴むような動きで時守の動きを止めようとする。

…そして——その時は来る。

「(…かかった!) 『グングニル』!!」

時守は素早い動きで敵から離れ、『グングニル』を発動させ、構える。

…もちろん、相手もそれを止めようと追撃しようとするのだが…

「…セシリーの時の威力見て、こんな至近距離で投げたら人死なせてまうかも知れへんかったし…使えへんかったけど。無人機やったら構わんやろ。」

時守の背後から伸び、幾多もの柱を通り、『ランペイジテール』が敵に絡みつく。まるでトラップのように仕掛けられたそれは、敵の動きそのものと、腕の動きの全てを止めた。

「…おらっ!!」

かつてセシリアに投げた時は450km/h、今回はそれを遥かに超える600km/hの速度の『グングニル』が敵の頭部に命中し—

「…止まった…か。」

破壊した。頭部を跡形もなく粉碎された敵は、完全に動きを止めた。

『ランペイジテール』を解き、自身の背後に戻す。

「…お、終わったの?」

「ああ、多分な。2人共無事か?」

「うん。」

「…よ、良かった。…剣は?」

「お?俺か?...俺も無事や。はー、疲れ——」

が、ほっとしたのもつかの間、敵もただでは終わらなかった。

「…え？」

「くそがっ!!それが本来の目的かい!!!」

先程時守が沈めた筈の機体の胴体が急に光り出したのだ。

時守も人並みにはゲームをする。そして、この状況をいち早く察知したのだろう。…理子、そして簪、扉付近くに居る他の生徒の盾になるように両手両足を広げ、敵と皆の間へと飛んだ。

『ピピッ、自爆システム……起動』

無機質な女の声と共に、敵は爆発した。

——その爆発はアリーナの観客席の一部を吹き飛ばす程の威力であつた。



「ここは誰？俺はどこ？俺は時守剣ちゃんでございます。」
「脳は無事なようだな、時守。」

…あれ？ちっふー先生？

「…なんでちっふー先生が？つてかここリアルガチでどこすか？」

とりあえず体起こし——！！！！

「いつて！なんやこ…あ…あ…」

「馬鹿者…無茶をするなど言っただらうが…」

無茶？…俺何してたんやった…あ！！せや、思い出したわ！

「か、簪とか理子は！」

「無事だ。お前が盾になったおかげでお前の後ろにいた生徒は全員無傷だ。全く…心配掛けおつて。」

「…敵は？」

「完全にバラバラになった。…一夏の方に行った機体よりもエネルギーも少なく、パワーも弱かったんだがな。その分自爆の方にエネルギーが回されたみたいだ。…お前が居なければ何人が死んでいたか…、こんなことを言うのもアレだが、お前が居てくれて本当に助かった。」

「いいんすよ。…俺が自分の意思であいつらの壁になったんすから。」

今、すんごいありえへんぐらい…あ、いや、ダンスの角に足の小指ぶつけた方が痛いけど、それぐらい痛いけど我慢できるし。皆を最終的に守れてんやったら後悔はない。

「…そうか。あいつらには無事だと伝えておけよ？お前のことをずっと心配していたんだからな。」

「あいつら？」

織斑先生が指を差した方には扉、その扉から覗いてる眼が8つ。

「ふっ、モテる男は辛いな？」

「…ま、そうっすね。」

「…お、お前まさか気づいてるのか？」

「さあどうでしょう？…少なくともリコピンはそういうのちやうとは分かりませうけどね。」

これでもしちやうかつたら恥ずかしすぎるし…どうしよかな…

マジか…マジか…!?とつぶやきながらちっふー先生は出ていった。

…なんやあの人、なんか最近変わってへんか？…お、おおう!?

「剣くん!？」

「剣さん!？」

「…剣!？」

「時守い!!」

『大丈夫なの（なんですの）!？」』

楯無、セシリー、簪、リコピンが一瞬で俺の寝てるベッドまで詰め寄ってきて問いただしてきた。

…その大声が響いて今死にそうですねん。

「あ、ああ…大丈夫やで…つてかりコピン、声…おっさんみたいになつてる。」

「冷やかさないの。ほんとに心配したのよ?」

「ははっ、悪い。…皆もごめん。」

「…わたくしも、心配しましたわ。無事で何よりです。」

「…うん、…もう無茶、しないで…。」

「謝るのは私の方よ。…生徒会長なのに何も出来なかったわ…。」

楯無が俯き、それにつられる様に簪も俯く。簪は専用機のことを気にしてるんやろな。

「ええって。ほら、俺は生きてるし。」

そう言つて両手を広げる。…すると楯無と簪は苦笑いを浮かべ

「…剣…やっぱりヒーローみたい。…あの時も、カツコよかった…。」

「この場合『みたい』じゃなくて本物のヒーローよ。…でも、無茶しちゃダメよ?…まだ——」

安静にしろ、とかいうつもりやろうけど、そんなことは分かつてる。大事なんはこれからや。

「分かつてる。…まだ俺は弱い。今のセシリーや簪にも余裕で負けるやろな。…やから、皆頼む。」

頭を下げる。自分が強くなるために人に教えを請うねん、これぐらいして当たり前やろ。

「ふふっ、そういう男の子、おねーさん好きよ?」

「えっ!?ちよ、ちよつと楯無さん!?いきなり何を…!」

「…大丈夫、お姉ちゃんのはそう言う意味じゃないから…。お姉ちゃんの言う事は最初から信じちゃダメ。…疲れるから。」

「ううう…簪ちゃんが辛辣なの…慰めて？剣君。」

「頼む言うたよな!?!俺!話変わってへん!?!」

「時守がツツコミに回るって珍しいわね…」

おいこらリコピン!笑ってへんで切り替えてや!

「大丈夫よ。ちゃんと特訓には付き合っただげる。私と簪ちゃん、後セシリアちゃんと…理子ちゃんはどうする?」

「正直、今は自分の事で精一杯なんで…もう少し訓練機をまともに動かせるようになったら考えさせてもらいます。」

「うん、理子ちゃんならその道がいいと思うよ。ちゃんと実力を付けてから…ね?」

「は、はい!」

ほー、リコピンもちゃんと考えてんねんな。

「…あ、でも俺明日からどないなの?」

「まだ動いちゃダメ。…今のところ絶対安静なのよ?授業内容とかはセシリアちゃん、簪ちゃんに。身体を動かさなくてもできるイメージトレーニングとかは私や織斑先生に頼むわ。」

「…え、ちっふー先生来んの?」

「当たり前よ。…生半可な強さで『国連代表』を名乗らせる訳にもいかないらしいわ。じゃ、明日からよろしくね、剣くん。」

「よろしく願いますわ、剣さん。」

「よ、…よろしく…剣。」

「参加できないけど、応援してるからね。」

…頼もしいな。よっしや!頑張るか!!

「おう!」

名探偵剣ちゃん 『転校生とカオスな1日』 前編

「おっはよー!」

「お、岸原さん。おは……よ、う……」

「おーりこりこく、…お、おはよう。…どしたのけんけん?」

クラス対抗戦から数日後の朝、いつもの光景に異変が起きていた。

「……あ?…別に、ただ…生きてるって素晴らしいな…って…」

クラスのムードメーカー、時守剣が岸原理子に引きずられながら登校したのだ。

当の本人は顔に大量の絆創膏を貼っており、目も虚ろになっているので尚更違和感を覚えたのだ。

「け、けえええん!!大丈夫か!」

「大丈夫…ちやうわい。なんやねんあの昨日のアレ…ト、トラウマもんやわ…」

「?昨日?何かあったのか?」

「ああ、…ワンサマは知らんねんな…」

そして時守は昨日起きた事を全て話した…



「以上や。」

「…ち、千冬姉…容赦無いんだな…」

「お前の姉何もんやねんマジで。」

ふざけてるやろあの人。動けへんかったときのイメージトレーニングはまだよかったで?…でもその後や。…無事退院?してから—

『時守、武道場に来い。私と組み手をしろ。』

『は?』

『もちろん着替えてからだぞ?ではな。』

とか有無をいわさずに告げられて、んなもん拒否したら死ぬやん?…やから直ぐ行ったら…

『動きが遅い!』

『キレが甘い!』

『弱い!!』

つてな感じに罵倒されながらボッコボコにされました。セシリーと簪曰く『良く生きてた。』楯無曰く『また入院することにならなくてよかった。』リコピン曰く『織斑先生がおかしい。』ちっふー先生曰く『すまんやりすぎた。』

——だとき。ほんま…退院したのに身体中くそ痛いやんけ…

「なんで…?…俺、なんか悪いこと…した?そりゃ強なりたいし、強ならなアカンのは分かってるけど…」

「ど、どんまい…」

「なんか俺だけやられるのは理不尽や。よっってお前もしくわ、ワンサマ。」

「お前の方が理不尽だ!!」

は?…あー、なんかイライラしてきた。

「今日授業中ボケ倒したろ。まともな授業させたらへん。」

「い、陰湿な…」

「何が陰湿やワンサマ。俺にできるほんの少しの抗いや。」

HRの始まり始まり。

「今日ですね、なんと転校生を紹介します!!しかも2人です!」

よつしや餌食になってもらおか。ふはは、悪く思うなよ?今日転校して来たのが運の尽きや。お、入って来よつ……た……?

あ?

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では何かと不慣れなこともあると思いますがよろしくお願いします。」

「お、男?」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて転入を…」

……え?……いや、おかしいやろ。あ、一応耳塞いど。

「きや…」

「来るでワンサマ…」

「お、おう……」

ワンサマも耳塞いだな。…あ、山田先生とちっふー先生も塞いで

る。…何か笑える。

「きゃあああああーっ!!」

「男子! 3人目!」

「しかもまたうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!!」

あの一、1つ言わせてもらいまっせ?

「いや、お前女やろ。」

あれ、またクラスの空気が凍った。婚期以来やな。

「…へっ?! い、いやだなあ…僕は男だよ?」

「ふーん…ふーん?」

「お、おい剣、男子の制服来てるんだし…男子だろ?」

「でもよワンサマ。…なーんかおかしくないか?」

「…んー、俺はどこも違和感はないけど…」

「せやかてなあ…俺にはどうも…ま、ええか。」

『いいんかい!!』

うおっ!?! クラス全員からツツコミ来た!! やった!!

「あ、あの、まだ終わってませんよ!」

「あ、はい。すみませんでした山田先生。」

こらく、そこっ! ちっふー先生! 『私にもあ〜やくま〜れ〜』みた
いな顔しても、謝って上げないんだぞっ!

ゴリユツ

「時守：今何を考えたか大声で言ってみるか？」

「い…いえ…良いです…」

な、なんや今のは…出席簿？あれ出席簿!?嘘や！メリケンサツクか
なんか付けてるやろあの人!!

うわっ、またこつち睨んできた…め、女神ですね。

あ、良かった。銀髪の方向いたわ。くっそ怖いやんけあの閻魔。

「時守、後でお前にぴったりの教育をしてやろう。」

「すいませんでしたア!!」

「…つち、…ラウラ、挨拶をしろ。」

「はっ！教官!!」

おいこらお前何に共感しとんねんこら。人の不幸に共感するとか
こいつ人間かよ…

「…ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「…いい、以上ですか？」

「以上だ。」

異常やわこいつ。…なんかやたらワンサマの方睨んでるし。

「…っ！貴様が！」

睨んで…

パアアアアン！

叩きました。…ワンサマよ…お前はどれだけ叩かれたら気が済む
ねん。モツピーに叩かれ、鈴に衝撃砲を打たれ、転校生にビンタされ

…あ、イケメンやからか。

「大丈夫か？一夏。」

「お、おい剣…なんでいつもみたいにワンサマって呼んでくれないんだよ…」

「…なんかイラツと来たから。」

「なんで!?俺叩かれたんだぜ!?…剣、お前まさか…俺のこと嫌いになつたのか?」

「んなわけないやろ。お前の事嫌いやったらこんなところで漫才してねえよ。」

「ゴデへへへへ」

スパアン!!

「今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。各人すぐに着替えて第二グラウンドに集合!!それとお前ら。…何か言う事は?」

んなもん1つしか無いですやん。ナ…

「…ナイスツツコミです織斑先生…」

スパアン!!

名探偵剣ちゃん 『転校生とカオスな1日 中編』

IS学園の朝、一限目が始まる前…ある廊下で…

「うおおおおおおお!!!」

「こんな所で死ぬるかああ!!!」

「な、何がどうなってるの〜!!!」

3人は逃げていた。

〜時は遡る〜

「時守、織斑、同じ男子だろう。デュノアの世話をしなれ。」

「は、はい!」

「ウィツシユ!」

スパアン!

「ちよ、ちよいちっふー先生? ツッコミ…ちよい強すぎますわ。」

「真面目に返事をしろ。返事は?」

「はいd…:…い、いや待って!?! 『はいだ』言うてませんやん!! 『はい』で止めようとしてましたやん!?!」

「…っふん。まあいい、それより早く行けよ?」

「「「えっ?」」」

ちっふー先生が指を差した方には時計。 ……えっ…

「あと8分で授業を始めるぞ？それに…女子も」

「行くぞお!!」

「えっ！ちよ、ちよっと!?2人共!？」

俺がシャルルの右手を、ワンサマが左手を掴んで走り、教室を出る。
…あつぶな。もうちよいで覗きのレッテルを貼られるとこやったわ。

「ど、どうしたのさ2人共…」

「あのままでと女子が教室で着替えるのを見なきゃいけないからな。」

「…?あつ！ああ！そ、そうだね…」

「ははっ、変な奴やなお前。俺は時守剣。剣でも剣ちゃんでも好きに呼んで。」

「あ、俺も自己紹介がまだだったな。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ!」

「うん、よろしくね、剣、一夏。僕の話はシャルルでいいよ?」

「おう。よろしくな、シャルル。」

「んー、シャルルか…シャルルでええや。よろしくシャル。」

…涼しげに会話してる思てるやろ?読者の皆さん。

これ今かなりのスピードで廊下走ってんねんで?…やっぱIS学園入ってから基礎体力上がったよな…

「あ、そうだ。剣、さっきのあれは酷いよ?いきなり僕の事を女だなん」

「居たあ!!織斑くんに剣ちゃん!」

「転校生も一緒よ!!」

「者共出会え出会えー!」

き、来た!!腐女子ども!

「げ！」

「来よった！逃げるぞ！シャル！」

「…え？な、何？…なんで皆追いかけてくるの？」

「俺らが男やからやろ!!…つてうーわ…黛おるやん…」

最悪な奴がおった。楯無がやたらとスキンシップして来てその時の俺の反応をカメラに収めようとするまごう事無き変態。黛薫子、2年。ほんまにあの2人手え組んでるんちやうかつて思うぐらい息あつとんねんなあ…

「ぐへへへ…剣ちゃん！今日こそはたつちちゃんとの関係やら色んな話、聞かせてもらおうわよ!!」

後でええやろが！んなもん!!…つて良くないわ!!!

くそして時は文頭に戻るく

「逃げるんだよおお！」

「待てやこらワンサマごらボケカスウ!!」

「ひっ…」

「引くなやシャル！これが俺の普通やねん!!」

「か、関西弁…だっけ？」

「せや。…やつべ間に合わんわ。…シャル、体重なんぼ？」

「えっ!?そ、そんないきなり…失礼だよ!」

「なんでやねん…男やろがお前…ま、ええわ、反応見る限り軽いし。…よつとー！」

お姫様だっこ、やっけ?…いや、王子様だっこか。気持ち悪っ!

「「「きやあああああ!」」」

「沸くなや腐女子！…お前道まだ分からんやろ？」

鈴もせやったしな。

「う、うん…」

「んじや行くで。…んじやなワンサマ。俺を置いていこうとした罰や。」

「えっ、お前何を…！」

息を大きく吸って———…

「ワンサマが好きな人いるらしいっすよ!!!」

◇

ワンサマを餌に、無事女子共から逃げきれた俺とシャルは更衣室で息を整えていた。

「いやあワンサマ…ええやつやったわ。」

「あはは…剣もなかなかすごいことするね…」

なんでやねん。人間生きるためにはしなあかん事があんねん。

「剣!!」

うわあ、来よった。

「い、生きとってんな、ワンサマ…」

「当たり前だ！ってかなんで2人共先に着替えてるんだよ!？」

「は？…だって…ほら。」

時計を指さし、ワンサマに絶望を与えてやろう。ふはは、俺は悪魔だあ…

「げっ!?後2分!」

「んじやなワンサマー…グッドラック!」

「あ、あはは…」

お、おう…シャル…お前もなかなかえぐいな。苦笑いしながら普通にサムズアップしてるし。

パシーン!

パシーン!

パシーン!

「では本日から実戦訓練を開始する。」

さあ!織斑一夏、凰鈴音、セシリア・オルコットの頭に叩く音をチャイムに、ついに始まりました!IS実戦訓練!!実況、解説はわたくし、時守剣でお送りしたいと思います!

「時守、今日の放課後、晩飯を食べる前に武道場に来い。…今日は戦闘の実演を…凰、オルコット、前に出ろ。」

「…死んだわ、俺…頭の中でぐらいボケさせてや…」

「な、なんであたしが!?!」

「わたくしもですか…」

「専用機持ちで経験を考慮して、だ。…やる気が出ないなら耳を貸せ。」

…何されるんやろ…おつそろしいわ。つてか何やってんの？ちつふー先生に鈴にセシリ。そんな皆に聞かせられへん様な話でやる気が出るわけ…

「ここはイギリス代表候補生であるわたくしの実力を存分に発揮させていただきますわ！」

「ま、あたしも最近強くなってきたし？そうね、セシリアの言う通り、実力を見てもらうわ！」

出んのかい!!…ん？なんやあれ。上から…

「それで？相手は鈴さんですか？」

「望むところよ！」

「落ち着けお前ら、相手は——」

お、親方！空から女の子が降ってきた!!…あつ、女の子って言える年でもないか…

「ど、どいてくださーい!!」
「へ？」

あ、ワンサマに山田先生が激突した。…つてうわあ…すごい砂埃。あ、もちろん『ランペイジテール』で近くに居る女子を守るのも忘れてへんで？

「あ、ありがとう…時守くん…」

「ん？いや、別に当たり前の事をしただけやで？」

「あつぶねえ…白式の展開が間に合ってなかったら一瞬でお陀仏だったぜ…」

「お、織む…ひやつ！」

女子に返事をして視線をワンサマに戻す。

…は？

リアルToo loveるとか初めて見たぞおいこら。何山田先生の胸揉んどんねん！…ってかデカすぎやろあれ…マジ羨ま—

「…剣さん？今何を考えておりましたの？」

「ひっ、せ、セシリー？べ、別に？なんもやましいことなんか考えてへんで？」

「…わたくしは『やましいこと』など一言も言ってませんわよ？」
「あ。」

「…後で簪さんと楯無さんに報告ですわね。」

「そ、それだけはやめてく—」

「で・す・わ・ね。」

「…はい。」

「…わたくしも小さい方ではないと思うのですが…」

今日何回死ぬんやろか、俺は。…生まれ変わったら…しじみになりたい。…あれ？どないしたんやセシリー。口もごもご動かして、顔赤くして。あ、なるほど…セシリーの方がやましいやんけ!!

「いいちかああ!!」

「うおおおお!!」

あ、ワンサマも死にそうやな。どや？一緒にしじみになるか？

「2対1…ですか？」

「それはさすがに舐めすぎじゃ…」

結論から言う。ワンサマは死にませんでした。くそう…

「安心しろ。今のお前らならすぐに負ける。」

「むっー！」

結論から言う。鈴もセシリーも一瞬で負けた。ほんまもうおもしろいぐらい一瞬で。

「専用機持ちの織斑、時守、オルコット、ボーデヴィツヒ、デュノア、凰の六班に分かれて実習を開始しろ。」

ちっふー先生の一言で皆が散る。…最初は男子の方に集まりかけたけどちっふー先生が出席簿を構えたら蜘蛛の子を散らしたように皆一瞬で散らばったわ。

「やった！織斑君と同じ班!!」

クソ…こんなところにも違いが出てんのかい…

「と、時守くん!?!…あ、え、あの…その…」

「ん?どないした?」

「う、ううん!?!何でもないの!何でも…」

?…なんや、どないしたんやほんま。

「セシリアかあ…さつき負けてたもんなあ…」

「…凰さん、後で織斑君の話、聞かせてね?」

「よっし!時守じゃない!デュノア君だ!」

「……………」

あー、()で一句…まあ季語は無いけど。

リコピンよ

そんなに嫌か

テスト乙

「待って!?!ごめん!謝るから!!」

「ごめんで済んだら警察要らんよー。…もう一般科目教えへんで?」
「誠に申し訳ございませんでした…」

よっしや許したろ。

「学食のデザート一週間分な?」

「…はい…」

よっしやー。今日の飯が楽しみやで、…さてと。

「じゃ、始めるか。」

とりあえず今はリコピンなんかよりこっちやな。

名探偵剣ちゃん 『転校生とカオスな1日 後編』

「…どういうことだ…」

「ん？」

「…どういうことですか…」

「…なんで…皆、考えは…同じ？」

「は？何言ってるの？セシリーに簪。」

「…何でもありませんわ」

「…うん…」

あれから実習は無事終わった。…まあワンサマとシャルんところはなんかあったみたいやけど。なんかって言うかお姫様抱っこやねんけどな？

俺？してへんしてへん。皆俺の言うことちゃんと聞いてくれたし、いい子ばっかやったわ。

んでセシリーとワンサマに『昼飯を屋上で食べよ？』言われて、で今屋上。…まあメンツが…

「どないしたんや？皆。」

俺と

「どうしたんだ？箒。」

ワンサマと

「…何でもない。」

モツピーと

「…抜けがけは無しよ…！」

鈴と

「剣さんと一夏さんと箒さんだけの予定でしたのに…！」

セシリーと

「…オルコットさんも…抜けがけしようとしてたんだ……」
俺が誘った簪と

「んふふく、簪ちゃん居る所に私あり、よ？ね、剣くん♪」
何故か楯無と

「あ、あのおく、僕も居て良かったのかな？」

ボツチ確定しかけてたシャル——

というまあ何とも濃すぎる。キャラメルマキアートにキャラメル溶かしたぐらい濃い。…もはやキャラメル溶かしたやつやん…それ。

「当たり前だろ？今日転校して右も左も分かんないんだしき。」

「せやせや。代表候補生とか国家代表とかで親睦も深められるし、何より大勢の方が楽しいやろ？」

「…そ、そうだな…」

「…そうですわね。」

暗すぎやろお前ら！今から昼飯やぞ?!…あ、昼飯で思い出した。

「…ワンサマ、持ってきたか？」

「…ああ。もちろん。」

お互いの顔が真剣になる。…そして、俺とワンサマはある箱型の機械をポケットから取り出す—

「…狩り行こうぜ!!」

「馬鹿じゃないのアンタら!?!」

「馬鹿とはなんだよ！鈴！」

「せや！男子高校生なら普通やるやろが!…あ、鈴もやる？」

「うん、アタシ双剣だから。よろしくね。」

「…つてか持ってきてきてたんだな。あ、俺は大剣だけど剣は何使うんだ？」

「ガンランス」

「遠距離どうすんの…」

「私としてはなんで3人共ゲームを持ってきてるのが不思議ね。」

「…昼休み…終わるよ?」

楯無と簪に言われて渋々ポケットに戻す。あー…

「じゃあ放課後?」

「放課後は…剣さん、特訓と晩御飯の前に織斑先生の所に行かなければならないのでは?」

「……………」

「黙っててもダメよ? 剣くん。ちゃんと行きなさい?」

「……………やだ。」

「…剣、何したの?」

「…なんもしてへんもん。」

「…可愛く言ったってダメ。」

うう…皆がよってたかって俺のことを虐める…。ああ無情。

「…で、何したの?」

「授業中に脳内でボケただけ。…やのにちっふー先生に怒られるとか…はあ、憂鬱やわ。」

「いいじゃない、訓練に付き合ってくれるって思えば。あ、その卵焼きちようだい?」

「ん。ほら、あーん。」

「…なっ! あああああ!!!」

お、おおう!? か、簪にセシリー…いきなり大声あげて…どした? なんか忘れたんか? というより簪にビビった。そんな声でんねんな…

「んー、美味しい。ふわっふわで口の中で溶けて、しかもこのちようど

いい味付け…流石剣くんね、毎日作って欲しいわ。」

「お前それ意味分かって言ってるのか…」

「んふふー、さあくどうかしらねー。」

「…お姉ちゃん…!」

「…楯無さん…?」

「ちよ、ちよつと2人共…顔怖いわよ?ほら、もつと笑わないと…嫌われちゃうわよ?」

「…今はそれどころじゃ…」

「…ありませんわ…!」

こ、怖い!!ただひたすらに怖い!ほ、ほら見てみいや、ワンサマとモツピーと鈴を!俺らの方を見いひんようにして3人でご飯食べてるやん!シヤル見てみいや!めつちや気まずそうにしてるやん!!

……俺のせい!?…え、えつとえつと…

「じゃ、じゃあほら2人と—」

「あ…、ふふん。別にいいですわ。わたくしは週末の剣さんとのデートでもつといいことをしてもらいますから。」

貞操だけは守らせてな…?

「…わ、…私は…:う、うう…:」

「な、泣くなよ簪…:ほら、その…:お前さえいいんやったら…:行くか?」

…きつい…:周りの視線が…:きつい…:…:特に姉の…:誰の姉とは言わんけど…:

「…ほ、ほんとに…:?」

「お、おお…:ええで?」

「…うん…:うん!…:行く?」

「おけ。」

断れるかい！あの簪に上目遣いに首傾げられて…これで断れるやつがおつたらそりや悪魔やでえ…

「むう…剣くん？私は？」

「…はあ…分かった。でも俺もやることあるから週末も用事あること多いで？」

「はーい。あーあ、じゃあもうちよつと先になるのかなあ…」

せやなあ…かなり先にはなるやろなあ…なんせー

なんでか知らんけど国連での操縦訓練もあるしなあ…



晩御飯の後、俺はシャルと2人でお互いの部屋に向かっていた。

「ぐ、…ぐおお…」

「あはは…お疲れ様、剣。」

「さんきゅ、シャル。…いやあ…ちっふー先生容赦無いわ…これで通算354戦354敗や…」

「そ、そんなにやってるんだ…」

「1回がすぐ終わるからな。」

武道場でちっふー先生と組み手…つていうのかな。まあとりあえ

ず終わって更衣室に戻ったらシャルがスポドリとタオルを持ってきてくれた。ギザ優しす。

「あー、にしてもほんまキツついわ。…ほとんど遊んでへんもんなあ…」

「そうなの？」

「おう。国連代表とやらになってからずっと組み手か模擬戦か…やな。しかも相手は楯無かちっふー先生。死ぬわ、ほんまに。」

「…でもその分強くなれてるんでしょ？」

「自覚は無いねんけどなあ…楯無曰くかなり良くなってきたらしいけど…」

うん、全く自覚が無い。負けっぱなしやもん、ちっふー先生に。

「じゃあさ、いつか僕とも模擬戦やろうよ。」

「お、ええな。…ラファール・リヴァイブやったっけ？」

「うん、そうだよ。まあカスタムしてるけどね。」

「…シャルの会社か。」

「…うん、正しくは父の、だけどね…」

「そか。んじやスポドリとタオルありがとうな。じゃ。」

…父、か…ふーん。なんかありそうやな。…まあ勘やけど。

◆ 「…何？もう1人の男性操縦者が関西人だと？」

「はっ！隊長からの連絡だとそう聞いております。」

「そうか、ご苦労。関西人：か、ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長の人付き合いは少し懸念しているからな：よし、お前たち！今から『吉本新喜劇』なるものを見るぞ!!」

「ふ、副隊長！それはどのようなものですか？」

「うむ、『吉本新喜劇』はな、見るもの全てに笑いを届ける素晴らしいものなのだ。きつとアレを見ればラウラ・ボーデヴィツヒ隊長もきつと人との関わりを上手く取れるだろう。」

「さ、流石副隊長！日本の文化をこよなく愛しているだけのことはある！」

「それよりも日本！そんなものがあるなんて：私達でもあのラウラ・ボーデヴィツヒ隊長を笑わせるなんて出来なかったのに：…」

「そこに！」

「痺れる!!」

「憧れるウ!!!」

特訓と想い

「待て時守っ!!」

「嫌です!!なんすか鬼ごっこて!!」

「貴様のスタミナアップのための特別メニューだ!!」

「嫌だあああああ!!」

シャルが転校してきてから5日、土曜日の午後。

俺とちっふー先生は…ひたすら鬼ごっこをしていた。まあ半分フリーランニングみたいな感じやねんけど…

「つき、来た!!化け物!!」

「誰が化け物だ!…よし、捕まった時の罰を増やすか。」

「うわああああ!!」

この鬼ごっこは全校生徒に知られているので廊下でもアリーナ付近でも視線を気にすることなく走り続けられる。…まあ中には『織斑先生と鬼ごっこなんて羨ましい』とか言うアホもおったけど顔とスピード見た瞬間に俺の方に向かって合掌しよった。いや、これマジで怖いねんで？

「ははは!私はまだ全力の5割もだしていないぞ!!」

「はあっ!?マジで人間辞めてますやん!!」

「私は人間だ!!そして女だ!」

「嘘だっ!!」

俺の全速力と5割が一緒に最早人間ちやうやろ!!

心の中で届かぬ声を叫びながら走る。ああ…風景がどんどん後ろに流れていく…あー、やっぱ土曜の午後やから皆居るなー。

…いやセシリーに簪!?苦笑いしながら手え振らんといてや!助けて!!楯無…ああ、そーいや虚さんがブチ切れとったから今頃のほほん

と一緒に生徒会室か……。えーつと、シャルとワンサマが特訓言うてて
：モツピーと鈴も行くみたいで、リコピンは今度の中間テスト(仮)の
小テストに備えて勉強するとか言うてたな……

…あれ？

「誰か助けてー!!!」

「近接ブレード追加だ!!」

「へ?…ちよつ!!死んだらどないすんねん!!」

「『金獅子』の絶対防御があるだろう!」

理不尽や!!

「あと何時間逃げなあかんねん!!」

「私に聞くな!!」

…は？

「じゃあ誰に聞くねん!」

「答えなど無い!エンドレスだ!!」

「死確定やんけ!!」

「……」

黙らんといてくれませんか!?ほぼ死ぬこと確定してるやん!

「ま、まああれだ、時守。捕まるなら早く捕まって罰ゲームを受けた方
がいいぞ?」

「…その罰ゲームの内容とは如何に。」

「私と更識姉で決める。」

「捕まりたくないわ!!」

捕まったら罰ゲーム、捕まらなくても罰ゲームやんけ!!

「…もう遅いがな。」

「え?」

ポンつと肩に手が置かれる。…え、ちよ…はあ!?

「いつの間に!?!」

「ちよつと、な?」

いやちよつとてなんすか!絶対やばいもん吸ったか打ったかなんかしたでしょ!

「ふう…なかなか良い運動になったぞ時守。」

「あ、アレでなかなかつかすか。…俺結構本気で逃げてたんすけどね。」

「ふふつ、ではまだまだ伸びしろがあるところだな。休憩が終わればトレーニングルームに行つていつものメニューの倍だ。嫌ならしなくてもいいが?」

「ば…っ!?!…はあ…分かりましたよ〜つと。3倍ぐらいやってきますよ〜。」

ちっふー先生は息一つ乱さず去つていった。…いつかあれぐらいになれるのかな?

「あゝ、しんど。…行くか。」

まあちっふー先生世界最強やし、メニューに間違いは無いやろ。

◇

時守との鬼ごっこを終えた私は職員室に戻っていた。

…3倍か、身体を壊さなければいいが。

「…はあ。」

「?どうしたんですか?織斑先生。」

「山田君か。…いやなに、時守とのアレだ。」

「ああ、クラス代表決定戦の時からやつてるあれですか?」

「そうだ。鬼ごっこ、と言っているが…山田君、理由は分かるか?」

「…本人を楽しませつつ、足腰の筋肉をくまなく鍛えて色んな動きを違和感無くできるようにするため、ですか?」

「流石は先生だな。」

「い、いやあ…それほどでも。」

時守、あいつは『殴ったり蹴ったりするほうが好き』というぐらいだから恐らく近接戦闘が向いていると私は思う。

上半身の筋肉はあるが入学当時は足腰がまだ弱かったからな、このトレーニングをしながら更識姉との修行の効率も上がっているみたいでなによりだ。

「にしても時守くんすごいですね。この前の小テスト、IS関連は流石に低かったですけど、一般科目はオルコットさんとほぼ同じでしたよ。」

「ほう…まあ本人がISに関わることを楽しんでいるしな、そっち方面も直に上がるだろう。戦闘面もな。」

「え?」

そりやあそんな反応をするか。

「一夏もかなりの才能はあるがな、周りのコーチがダメだ。教えてくれと言われれば教えるものを…」

「時守くんは教えてほしい、と言ってきたんですか?」

「ああ、国連代表の話があった直ぐ後にな。『弱いまま代表なんて名乗りたくない』と言って元日本代表の私と現ロシア代表の更識姉に頼ん

で来た。頭まで下げられた時は少し驚いたがな。」

「…この御時世で強くなるためとはいえ、男性が女性に頭を下げる…なんてよくできましたね。」

「ああ、…だから、なのかもしれないな。あいつにはなぜか力を貸してやりたくなるんだ。」

「ふふっ、分かりますよ。先輩。」

ん？山田君が何やら勘違いをしているようだな。…よし、ここはいつも束にしているアレで…



「……………アアアアア!!」

「……………ん？な、なんか…聞こえ…：へんかった？楯無。」

「聞こえない。さ、まだ終わって無いわよ？あと10回！」

「おう……………ぐっ……………ううっ…！」

ちっふー先生と別れてトレーニングルームに入った俺を待ち構えていたのは同居人である更識楯無。

…そして今俺は彼女を上に乗せながら腕立て伏せをしてんねんけど…

「…なんかいつも、と、あんま変わらんで？」

「え？」

「…お前、ちゃんと飯食ってんのか？」

「う、うん。ちゃんと3食食べてるわよ？」

「ふーん、軽いな。」

「そ、そう…」

…否、まあ確かに軽いっちゃかなり軽いけど…あんま変わらんって

ことはない。…でも本人に言える訳ないやろ！

「9……………10…!!」

「はーい、お疲れ様ー。じゃ、休んだら今度はサンドバッグに打ち込みね?」

「りよーかい。」

ふう……………行くか。

◇

「…早い…体力の回復速度が…上がってる?」

以前はここまで早くなかった。しばらくは肩で息をするかのように激しく息切れをしていたが、今は少し休むだけで直ぐ動けるようになってる。

「(…やっぱり男の子だからなのかしら…) 剣くん?ほんとにしんどかったらまだ休んでていいのよ?」

「…大丈夫…や…!!まだまだ…動けるわ!!」

リズム良く突きと蹴りをサンドバッグに叩き込んでいく剣くん。
…大方のフォームなどは私と織斑先生で教えたけど…

「すごいわね…ここまでストイックになれるなんて…) 剣くん、軽くなってきたるわよ!」

「…くっ!!」

ドズンツ!!

回し蹴りでサンドバッグが揺れる。と、同時に剣くんの髪から汗が飛ぶ。

ってドズン？

かなり筋肉量と身体の使い方が上手くなってきた…かな？

…織斑先生と相談してそろそろ本格的にISでの模擬戦を入れた方がいいわね。

「剣くん、どうする？そろそろ身体作りは止めて、実践訓練に入らない？」

「…またちっふる先生呼んでくんの？」

「織斑先生とはまだ実力の差がありすぎるから、当面は私と、ね？」

「お前とも相当離れてると思うけど…」

ま、まあそうよね。つい最近成り行きで代表になった剣くんと自分で言うのもんだけど実力で代表になった私。

「ま、簡単には負けへんで？…男の意地つてもんがあるしな。」

「ふふつ、なら私には代表の意地があるわ。…さ、来なさい？」

男の子の意地つてやつ、見せてもらおうわよ？



あれからトレーニングルームを出て、武道場に入った。

…つてか毎回思うねんけどここの武道場誰も使つてへんやんな？

「さ、先攻はあげるわ。来なさい？」

「んじゃ、お言葉に甘えて。…っ!!」

一歩で楯無の懐に潜り込む。…あれ？いつの間にこんな速なった？

「…速…っ！」

「はっ！」

今回のルールは俺が続行不能になるか楯無を床に倒すか、で勝敗がつく。

「あら、そんな見え透いた攻撃じゃ私はこけないわよ？」

「分かつとるわ。…でもなあ…」

「ん？どうしたの？」

いや前から気になってんけどさ

「…もしさ、顔とかに突きとか当たったらさ…ほら…」

「？なに？」

「いや、傷とか付くの嫌やろ？」

「…え？」

「ほら、楯無も女やねんし、そんな綺麗な顔に傷付けたくないもん、俺。」

「…だ、だから狙ってなかったの？」

「…うん、…いや、別に楯無のことをなめてるわけちゃうねんけどな？」

どうも女子にそう言う事できひんねん。ISみたいにシールドとかあつて傷付かへんねんやつたらええねんけどな。」

「ふふつ、そっか。じゃ、次からはできるだけISを使つての訓練ね？」

え、そんな簡単に決められんの？

「じゃ、今日はもう戻りましょう？行くわよ、剣くん♪」

「おう、って、ちょ!!あ、当たってるから！」

「んふふ、当ててんのよ♪」

…
心なしか楯無の顔が赤いような赤くないような…まあ間違はなく

俺の顔は赤い。

真実と想いと

ブーツブーツブーツブーツ

「ん？俺の携帯か。」

「なんや？こんな夜に、しかもメールで。…ええつと何々？」

『シャルルが男が女ででででででで…とにかく俺の部屋に来てくれ!!』

「…嘘ん。」

マジかい。マジで女やったんかい、シャル。

シャワーを浴びている楯無に一声かけてから部屋を出る。…いや、もちろん外から声かけたで？

「——という訳なんだ。騙しててゴメンね、2人とも。」

「…愛人の子…か。」

息子やのにムスコが無いから実は娘やったと。

「…で、なんでワンサマはシャルが女やって分かったん？」

「…あ、あー…それはだな…」

「もしかしてシャル覗かれた？」

「………う、…うん…」

「…どんまい。んでどうするか、やな。まあ案はいくつかあるけど。」

うん、かなりヤバ目の方法やけどいくつか。

「案?…そんなの特記事項第21で—」

「俺らから見たらシャルは被害者や。…けど同時に学園とか社会から見たら犯罪者や。いわゆる上層部の人が許さへんやろ。」

「だ、だったら俺たちが—」

「…ただの男性操縦者2人の意見では通らんやろな。…ちっふー先生とか山田先生に言ってもワンサマの身に危険が迫ってたことと、白式のデータのうんぬんで犯罪者扱いになる思うで。」

「千冬姉はそんなこと—」

やからや

「やから学園ごと社会を黙らす方法がある。」

「…えっ?」

「は?な、なんだよそれ…」

「…ワンサマは今、どこの組織にも所属してないことになってる。個人でできることには限りがある。…これは分かるか?」

冷静なワンサマやったらここで分かってくれるはずやけど…

「…ああ、それは分かってるつもりだ。」

「おけ、で、シャルには良くも悪くもデュノア社が付いてる。2人ともここまではおけっ。」

「うん。」

「ああ。」

さてと、ここからが本題やな。

「なあシャル…お前さ、国籍捨てる気…ある?」

「…ど、どういふこと?」

「まあ端的に言うたらアレや、国連にこーへんか？つてことや。」

「こ、国連？」

「せや。自由国籍でどこの代表候補生でも居られるし、なんかあったら国籍とI S委員会が守ってくれるわ。」

「…待てよ剣、それこそお前がさつき言ったように誰が信じるんだよ。信じてくれなかつたらそれもー」

「やからシャルが言うたらええねん。命令された時の書類とかあるやろ？通話記録とか。」

上手く行くんかな。

「…あつ！うん、あるよ！」

「他アレや、ちっちゃい時にされたこととか、その他もろもろ。そういうのがあれば『精神的に辛すぎて命令に背くことができなかつた』つてなる…んかな。まあならへんかつても人権無視で国連が保護。んでそれを知られたくなかつたらフランスはシャルをフランス代表候補生にしたまま、シャルの身柄をこつちに寄越せ、言うたらいけるやろ。」

「…うん、多分それで大丈夫…かも。」

「な、なんか話のスケールがデカイな…」

「軽く国際問題やからな。まあ身柄さえ確保すれば後はそれこそ特記事項第2-1があるし。つてか、よー覚えてたな、ワンサマ。」

「おう。鈴や箒のおかげだぜ。」

胸張ってるけど自慢できないんだよなあ…

「まあI S委員会と国連の上の人にそうするように言っとくわ。あ、シャルの連絡先も教えとくで？」

「う、うん。じゃあ僕の連絡先、剣に教えておくね。」

「……ん。じゃ、ワンサマもこれで何も無いと思うし。」

…よし、帰ろ。あ、せや。

「シャル。気にせんでも大丈夫や。ちゃんと女の子として生きれるようにしたるからな。」

ふう、これでシャルも明るくなってくれるはずや。

立ち上がる、日本♂

ナニが立ち上がったかは言わない。

「そ、それは本当ですよ!!」

「嘘じゃないでしょうね!!」

「…ほ、ほんとに!?!」

「あん? なんやアレ。リコピンなんか知ってるか?」

「あー、何となくは…。」

シャルが女やと分かった次の月曜、いつも通り登校してたら教室からやたら騒がしい声が廊下まで届いてきた。

…つてかなんで鈴と簪が居るんや?

「マジもマジの大マジ! 今学園はこの噂で持ちきりよ? 今度の学年別トーナメントで優勝できたら、織斑くんかデュノアくん、もしくは剣ちゃんと交際でき「俺がどないした?」

「きゃあああああ!!!」

「うつわ、うるさすぎ…で? なんや? 俺の名前が出てきた気がしてんけど。」

る。ってかそんな言い方すんなや楯無。シャル警戒しとるやん。」

「あら、ほんとね。ゴメンね、デユノアちゃん。」

「い、いえ…それより協力してくださる…というのは？」

「まあ簡単に言えば私はIS学園生徒会長でロシア代表、その劍くんは国連代表。だからIS委員会にも連絡しやすいし、劍くんを通せば国連にも連絡できる。…流石のフランスとデユノア社も下手したらコアを失いかねないーなんて事態になったらこれぐらいの我が儘ぐらい通してくれると思うわよ？」

「ま、通さへんかったらO☆H A☆N A☆S Iやけどな。」

「…」

シャルは今の話を聞いて俯いてる。…泣いてるって訳じゃなさそうやけど…

「…して…」

「ん？」

「…どうして…剣はどうしてそこまでしてくれるの？」

「…は？」

いや、お前助けて欲しくなかったんか？

「んなもん助けたいし助けられたからや。…迷惑やった？」

「えっ!? う、ううん。…嬉しかったよ。…ちやんと、女の子として生きられるって…思ったら…ううっ…ひぐっ…」

シャルは涙を流し、俺の胸にもたれかかってくる。

「…今ぐらいは…泣いてええわ。」

黒兎

「はわわわわ……」

「い、いや…別に気にしてへんから…な？」

「そ、そうは言っても…」

シャルが泣きやんだ。そう思って安堵した俺は悪いのだろうか。

いきなり俺から離れた思ったら今度はあたふたしだしてずっとはわわ、はわわ言うとする。

なんやお前は。フランス人ちゃうくて、はわわ星からやってきたはわわ人か何かか？

「少なくとも剣くん、君が思ってるようなことは無いと思うわよ？」

「なんで考えてること分かんねん楯無。」

「そりやあずつと一緒にの部屋でほぼ毎日特訓も一緒だったら考えてることぐらい分かるわよ？」

「お、同じ部屋!？」

いきなりシャルが大声をあげた。俺の耳元で。ワンサマやったらしばきたおしてるぞ？

「おう、男性操縦者やしな。護衛的な意味で。」

「そ。私、ロシア代表だし、少しぐらいは出来ると思っただからね。」

「あ、ああく…そう言うことですか…」

「まあぶっちゃけ俺も自衛ぐらいできるようになってきたと思うねんけどな。」

「…まあ比較対象がおかしいのよね。初めてISを動かしてそのコーチが織斑先生って。どう？剣くん。勝ってる？」

首をこてん、と傾げて聞いてくる楯無。

お前…さあ…勝てると思ってるの？

「無理や無理。人外にどうやって勝てって言うねん。」

「じ、人外…」

「まあそれでも私との模擬戦は結構粘るようにはなってきたよね。」

「そりゃあ…な、ちっふー先生と比べたら悪いけど…その、…殺される気がせえへんから。」

「…織斑先生やりすぎ…」

今死んでへんだけましや。一回ちっふー先生 in 打鉄（魔改造）とやったけどマジでビビった。開始早々剣を投げってくるわグングニル投げてても掴むわ…、目え逝ったんかと思っただわ。

「まあ多分やけど強くなってるからええし。実感ないけど。」

「ほとんど私と織斑先生だしね…そろそろ他の子達ともやってみる？」

「おう。…あ、ちょうど今日第3アリーナ使えるしシャルやろや。」

「うん、いいよ。」

「じゃ、早速行くか。んじゃな、楯無。また後で来るわ。」

「あんっ、せつかく来たんだから愛の告白でもしてくれるのかと思っただのに。」

こいつ…。なんでこうもコロコロ変わるねん…。

「してほしいんやったらマジでするぞ?」

「んー、ならもうちよつとロマンチックにお願いしたいわね。」

「へいへい、分かりましたよ。じゃ、マジで行くわ。」

時間も無いしな。

生徒会室のドアが開くーおっと…

「ちゃんとここに戻ってくるからな、待ってけよ?」

「こうでも言わな楯無帰るし、何かと寂しがり屋やしな。」

「ん？おお！剣！生徒会室に居たのか!!」

出たらワンサマとモツピーがいた。校内デートか何かか？

「おう、一応副会長やしな。シャルに生徒会メンバー紹介しててん。」
「う、うん。そうだよ。」

「そう言えば剣は副会長だったな。…一夏、お前覚えていたか？」
「…悪い。すっかり忘れてた。」

「おっし、うまいこと合わせてくれたか。…つてかお前ら酷いな。」

「じゃ、じゃあ早くアリーナ行こうぜ。なあ、剣…」

「おう。師匠達からの許しも出たしな、そろそろお前らとも模擬戦で
きるわ。」

「よし！じゃあ俺とー」

「でも今日は悪いけどシャルが先客や。」

「しょーみワンサマとはもうちよい後でやりたい。えつと…あの…
アレや、朽木白哉じゃなくて…零落白夜？やったっけ？あんなんチー
ト過ぎるし、何よりお互いもつと強くなつてからやりたい。男同士
な。」

「あー、じゃあしようがないか。…ん？」

「ん？なんやえらい騒がしいな。どないしたんや。」

アリーナに近づくに連れて、廊下に居る女子生徒が騒いでるのが目
立ってきた。

「何かあったのかな？こっちで様子を見ていく？」

シャルが観客席へのゲートを指差す。俺とワンサマ、モツピーと続
いて駆け足で観客席へと向かう。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだけど…それにしても様子が――」

ドゴオオンッ!!

「!?!」

「あんのクソが…!」

◇

ドガアアアアンッ!

シュヴァルツエア・レーゲンを纏うラウラに、爆発が自らをも巻き込んでしまうほどの距離で、ミサイルを撃ち込んだセシリアとその傍にいた鈴は、地面へと叩きつけられる。

「無茶するわね、アンタ…」

「苦情は後で受け付けますわ。これで確実にダメージが…」

セシリアのセリフはそこで止まり…2人に絶望が訪れる――

「終わりか?…ならば私の番だ。」

言うと同時にラウラは瞬時加速で地上に急接近、鈴を蹴飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃を浴びせる。

さらにそれで終わることはなく、ワイヤーブレードが飛ばされた2人の身体を捉え、ラウラの元へとたぐり寄せられ、ただただ一方的な暴虐が始まる。

「きゃあああっ!」

「ああああっ!!」

腕、身体、脚、そして顔と…ラウラは殴り続ける。――そして――

「……………つふ。」

ラウラの無表情が周囲に愉悦を感じさせた瞬間、観客席の1人の男の『何か』のゲージが振り切り、もう1人の男に久方ぶりの『怒り』を感じさせた。

◇

「一夏。」

「っ!?! 応ー！うおおおー！」

自分でも驚く程の冷たい声が出た。

一夏は『白式』を展開すると同時に『雪片式型』を構築し、『零落白夜』を発動、アリーナの観客席を守っているシールドをぶった切った。キレた時というのは、恐ろしい程に頭が回転する。

——『零落白夜』はアリーナのシールドをも破壊する。

——今あの銀髪はセシリアと鈴に何をした。

——観客席には何人居るか。

——俺が今何をすべきか。

——銀髪は敵か味方か。

——セシリアと鈴は無事か。

——もし敵なら応援を呼ぶべきか。

——シャルはどうするか。

——俺になんとかできる相手か。

順番はバラバラだが、一瞬で大量の考えが浮かぶ。

ふと、横に目をやると一夏がアリーナへと飛び出していた、が、ラウラの右手により動きを止められていた。

——銀髪は…敵。

そう思った瞬間、俺の身体は観客席を飛び出し――

「やはり敵ではないな。この私とシユヴァルツエア・レーゲンの前では貴様も有象無象の一つでしか——」

銀髪の操るISを殴り飛ばしていた。

「つぐ!!き、貴様あ!!」

吹っ飛ばされた銀髪―否、ラウラが俺に向かって吠えとる。

「負け犬程良く吠える…つてか。お似合いやお、今のお前には。」

「私を愚弄するつもりか!!」

「事実を述べてるだけや。…一夏、シャル。2人を連れてけ。銀レウスぐらい一人で狩れるわ。」

多分、自然に口が動き…相手を煽っているんやろな。でもよ、許せへんわ。

「ふんっ！ISを動かしてたつた数ヶ月の人間、それも男に誇り高きドイツ軍人である私が負けるだと?」

「ははっ、ドイツ軍人ってド素人のパンチモロ喰らうんかい。爆笑もんやな。」

「…今のを自分の実力だと勘違いしているのか?貴様は。」

「今のをまぐれや思とるんですかあ?お前はあ。」

「…殺す!」

「沸点低すぎワロター。」

俺のその一言にラウラが瞬時加速で一気に接近してくる。

バチッ!

ラウラのプラズマ手刀と俺のラグナロクモードのオールラウンドがぶつかり、ラウラの加速が止まる。…が…

「あ？」

見えない力に俺の動きも止まる。…一夏を止めてた奴か。

ここでセシリアがシャルに、鈴が一夏によって助けられたのがハイパーセンサーで確認できた。

「ふっ、死ねえ！」

「…まあええわい。」

ドゴンツ！

何かを殴打した音が響く。その音の発生源は俺ではない。

「くっ…ちよこまかと鬱陶しい武装め…」

「これでもまだまぐれや言うんか？おい。」

ランペイジテールにより吹き飛ばされたラウラである。

ラウラは敵意を完全に俺に向け、姿勢を低くする。恐らく瞬時加速か何かするんやろ。

対する俺はオールラウンドをグングニルモードに変化させ、相手の突撃の迎撃の準備をする。

「行くぞー！」

「来いやこの雑魚がア!!」

ラウラが飛び出すその瞬間、1つの影がラウラを止めた。

ガギンツ！

金属同士が激しくぶつかり、音が響き、ラウラはその影に加速を中断させられる。

「…やれやれ…これだからガキの相手は疲れるんだ。」

「…織斑先生…」

影の正体は普段のスーツ姿でIS用近接ブレードを持った織斑先生やった。こういうところを見ると改めて俺のコーチの凄さを知る。

「模擬戦をやるのは大いに結構。だがな、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうぞ?」

「教官がそう仰るなら。」

ラウラは織斑先生の言うことに素直に頷き、ISの装備状態を解除する。…教官?

「時守、織斑、デュノア、お前達もそれでいいな?」

「…うっす。」

「あ、ああ…」

あーあ、やらかしたな。一夏。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい!」

「僕もそれで構いません。」

全員が返事をし終えたところで、織斑先生はアリーナ内にいるすべての生徒に向けて言った。

「ではこれより学年別トーナメントまでの間、私闘の一切を禁止する。解散!!」

織斑先生の一喝で一旦、この戦いは幕を閉じた。

ペアとその後

「しかし派手にやられたな、2人とも。」

「ワンサマ…お前もうちよい心配したれや。大丈夫か？セシリー、鈴。」

「うっさいわね…、ちょっとは剣みたいに心配しなさいよ。」

「…みつともないところをお見せしてしまいましたわ。」

銀レウスことラウラとの戦闘が終わったあと、俺、ワンサマ、シャルの3人はセシリーと鈴に付き添って医務室に来ていた。

…本人達は『俺たちのせいじゃない』とは言うと思うけど、やっぱり俺らがちよつとでも早く来ていれば2人とも怪我をしていなかったのではないか、と思う。

今では2人ともベッドの上で会話できるぐらいまで回復しているのが不幸中の幸いやと思いたい。

「…鈴もセシリアも、派手にやられた…だけで済んで良かった。後少し遅れてたら…」

「考えたくもないな…」

「一夏…」

「剣さん…」

「2人とも、今度のトーナメントは出ない方がいいよ？身体もだけど、機体の損傷も激しいんだし。」

シャルが優しく言うと、二人はガバツと勢いよく起き上がった。そんなことしたら…

「このくらい怪我の内に入らな——い、いたたたた!!痛い痛い!ギブ!!あ、ああっ!叫んだら…もつと…:…:…:いたい…」

何に対してギブやねん鈴。アホかお前。

「そもそもこうして横になってること自体無意味——ふぐうっ!?」

男が金タ○蹴られたみたいな声出てるで…セシリー。

「何が馬鹿よ一夏!!んで何がアホよ剣!」

「一夏さんの方が大馬鹿ですわ!それと剣さん!わたくしはそんな…:…:その…:…:下品な声…:は出していませんわ…:」

ワンサマよ…何を考えてたんや?つてかすごいな2人とも、考えること分かるなんて。…ちっふー先生と同じく人外の領域に達したんか?

「好きな人に格好悪いところ見られて恥ずかしいだね、2人とも。「ん?」

「…別に俺はカッコ悪いとか思わんで?セシリー。」

「な、ななななななななな何を言ってるのかさささささっぱり分からないわね!!こ、こ、こ、これだから欧州人は困るのよね!!」

「あ…:…:ありがとうございます…:剣さん…:」

鈴がなんか凄いことになって否定してる。セシリーは顔赤くして多分照れてる…

「はい、ウーロン茶と紅茶。2人とも飲むよね?」

「ふ、ふんっ!」

「ありがとうございます、デユノアさん。」

そういやシャルってラウラと同じタイミングで入ってきたやんな?…:…:銀レウスと金レイア…:?

「まあ先生も落ち着いたら帰っていいって言ってたから——」

ドドドドドドドツ!!

「な、なんだ?この揺れ。」

「じ、地震!?!」

「IS学園揺れてるなう…つと。」

「アンタなんでこの状況で眩けんのよ…」

「ほ、本当に地震なのですか!?!」

セシリーとシャルが焦ってる。いや、地震やったらこっちに近づいて来おへんと思うねんけど。

ドオオンツ!

飛んだ。

ドアが。

綺麗に。

…当たったら人死ぬでこれ。ISで死なずに医務室のドアが当たって死ぬとかかつこわる!

そのドアを飛ばした張本人達—数十人の女子生徒—が医務室の中に一斉に入ってきた。

「織斑くん!」

「デュノアくん!」

「剣くん!」

否、俺にはそれは女子には見えなかった。獲物を狙う獣…すらも甘い。鬼…修羅みたいな奴らやった。

「な、なんだ!？」

「ぼ、僕たち何か悪いことでもしたかなあ…?」

「…まさか最近ボケてないから!？」

…あれ?なんかワンサマと鈴にめっちゃ冷たい目で見られてんねんけど…

「「これ見て!!」」

「「?」」

なんでか知らんけどリコピンが居て、前に突き出してきた紙になんか書いてる。えーつと、何何?

「えー、『今月開催する学年別トーナメントはより実践的な模擬戦闘を行うため二人一組のペアで参加すること。なお、ペアが組めなかった者はランダムで抽選でペアをー』」

ペア戦?…あ、ナタルとかイーリとか元気かなあ…。こないだ模擬戦したとき負けてもたけど、…また招集掛かったときやるか。

「ああもうっ…そこはいいから!とにかく!!」

無数に手が伸びてくる。なんや、バトン渡せばいいんか?それでどっかに走って行ってくれるんやったら渡すけど。

「私と組もう!織斑くん!」

「デュノアくん!お願い!!」

「剣くん!よろしく!」

…あ、なるほど。男子と組んでお近づきになりたいと。ほほお…悪いけど俺あんま喋ったりしたことない奴と組もうとか思わんし…、…

ん？

あ。

「わ、悪いなみんな、俺シヤルと組むから。ワンサマは…抽選の方がええやろ？ほら、誰かと取り合いになるより抽選で当たった方が運命って感じるやん？」

「ま、まあそつか。男子が3人もいるんだもんね。」

「お、織斑くんと…運命…！」

「いい…良いよそれ！剣くん、それ採用！！」

シヤル実は女でしたー、つてバレたらあかんしな。ワンサマを誰かに押し付けたらモツピーとかキレそうやし。あともう一人も…

「じゃあねー！！」

皆が医務室から出ていく。…3

2

1

「一夏あつー！」

ほら来た。わっかかりやすいな、鈴。

「剣さんもですわ！！」

いやあ…俺もセシリーと出たいのは山々の山田真耶やねんけどな？ほら、言うてたら来たで。山田先生。

「ダメですよ、2人とも。お二人の専用機、ダメージレベルがCを超えているんですよ？当分は修理に専念しないと、今後重大な欠陥が生じ

る可能性が非常に高いんです。ISを休ませる意味でも、今回のトーナメントの参加は許可できません。…織斑先生にも話をつけてますからね!」

うわ…すげえ釘の刺し方。

「…わ、わかりました…」

「今回は、非常に、ひつつつじょうように、不本意ですが!トーナメントは辞退致しますわ…」

「…そう言えばなんで2人はラウラと戦ってたんだ?」

さつきから山田先生の胸をチラチラ見ながらも難しい顔を保つというイマイチ凄いかような分らんことをしてたワンサマが喋った。うん、それは俺も気になる。

「そ、それは…」

「ま、まあ…なんと云いますか…:女のプライドを傷つけられたから…ですわ。」

「ふうん?…あ、もしかして一夏と剣——」

瞬間、セシリーと鈴の身体がブレ、シャルを抑えていた。…えっ…はやつ!?

「あああああつ!いつも一言余計ね!デュノアは!」

「え、ええ!そうですわね!おほほほ…」

「まあええけど…:そろそろシャル離したらな…」

「…え?」

2人が抑え込んでるシャルの方を見ると…:っておい。タップしてるやん。

「つぶは!けほっ、けほっ…、そ、それじゃ僕たちは戻ろっか。」

「せやな。」

「おう、鈴、セシリア。ちゃんと休んでおくんだぞ?」



「よつす。」

「本当に来てくれたのね。おねーさん、嬉しいわ。」

医務室を出た後、俺は生徒会室へと直行した。約束は守らんな。

「はははっ、だって楯無俺居らんかったら寂しそうやもん。」

「…え?」

「前言うたやろ?楯無が辛そうにしたりするの見たくないって。…俺が居て笑顔になってくれるんやったらいくらでもいたるわ。楯無も一人の女の子、やしな。」

中学時代も男友達にそんな感じのこと言われてたしな。『剣ちゃんいたら毎日おもしろいわ』って。…あ、あれ?男友達…。…っ!い、今のなんか若干…!

「ず…ずっと私の傍に居てくれるの?」

楯無の顔が真っ赤になってる。

「やっぱ告白めいてた!!あ、あかん…生徒会室男女2人きりで…もう夜になりかけ…」

そんな狼狽えてる俺に楯無が近づいてくる。

「なーんてね、おねーさん、それぐらいじゃ落ちないわよ?」

「…顔真っ赤にして全く説得力ないで…」

「そ、そう言う剣くんだって顔真っ赤じゃない」

マジか。…マジやな。顔あつつ。

楯無が俺の目の前に来る。楯無の赤くなつた顔による微笑みがやけに艶めかしくて色っぽく見えてしまう。

「楯無…」

「…ねえ剣くん、楯無って呼ばないで？」

「え？…だって、あだ名は真名教えてくれたら付けるって…」

『『刀奈』。それが私の真名よ。更識刀奈、どう？』

…音だけ聞いたら合ってたんか。俺の予想。

「ん、いい名前やと思うわ。刀奈…か、じゃあ…カナ。あだ名はカナ…やな」

「ふふっ、ありがと♪」

そう笑うと楯無…カナは俺に抱きついてきた。

……は？…え、ちよ、ちよつとお!!

「カ、カナ？…なにしていますの？」

「…前に剣くんが寂しいって言ってたときにこうしてきたでしょう？…私もね、寂しかったの。…虚ちゃんと本音ちゃんは今日は整備室に行ってるし、簪ちゃんはアリーナで訓練してる。私は対暗部用暗部組織の長だけど…剣くんはそんな私のことをちゃんと一人の女の子として見てくれた…」

ステエイ!!我が息子よ!!ステイしろ!!IS学園来てから発散できてへんのも分かってる!…ってか出来るわけないやろこんな環境で!!長時間トイレに入る訳にも行かへんし部屋とか無理やし、そもそもカナとかそういう匂いに敏感そうやん?『…臭い』とか思われたくないしな!?

「…カ、カナ程の女子やったらいい男も居たやろ？」

「私を刀奈としては誰も見てくれなかつたわ…。皆楯無としての地位、とか…後は…イヤらしい目で見てきたり…ね。…ねえ、剣くん。剣くんは私のこと…どう思ってくれるの？」

顔がまだ若干赤い状態で、不安げに上目遣いで聞いてくるカナ。

「俺は…俺はちゃんとお前のことを刀奈として見る。…もつと色んなこと知りたいしな…」

「…ふふっ、そっか。ありがと、剣くん。」

満足したのか、カナは俺から離れた。その表情はどこか憑き物が落ちたようで、とても魅力的だった。

「…じゃ、じゃあ…部屋に…」

「お、おう…戻ろか。」

そして2人で生徒会室を出た。廊下を歩く俺とカナの距離は遠そうで近く、近そうで遠い、というなんとも言えない距離だった。

その日俺はIS学園に入って初めて、ドキドキして眠れない。というものを体験した。

合わせてくれる人がペアだとやりやすいという訳でもない。

—更衣室—

「…ふう、だいぶ合ってきたね、剣」

「おう…にしてもシャルって人に合わせるの上手いな。技術はかなり高いねんし、もうちよいワガママに攻めてもええんとちゃう?」
「そ、そうかな?」

6月末にあるタッグトーナメントに向け、周りが着々と準備を整えている中、俺とシャルもコンビネーションプレアの練習をしていた。

「せやせや。もつと自分勝手にいかな損するで?」

「うん、分かった。じゃあ頼りにさせてもらうね?」

「おう、…でもさ、あの作戦…考えたん俺やけどほんまにシャル良いん?」

「うん、大丈夫だよ。アレは今年じゃ剣とボーデヴィツヒさんにし
か出来ないし、相手の意表を突けると思うし。…後、あのAIC対策
にもなるしね」

「…Active Inertial Cancellerか。慣性停止能力で相手の動きを止める…ねえ…DIOの劣化版かよ」

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの第3世代型兵器。相手に手を突き出し集中すると、何と言うことでしよう、動きがピタリと止まるらしい。(セシリー、鈴、ワンサマの体験談)

うーん…そこまで強い…かな?まあランペイジテールなんて言う普通のISには無い装備がある俺やから言えるかも、やけどな。

「あはは…流石にISで時は止められないよ…」

「止めれたらそれこそチートやしな。…第4移行とかしたらあるかも…?」

「…:ありそうで怖いよ。打鉄が時止めたり…:ラファールが瞬間移動できるようになったり…:」

oh…:もうそれISバトルじゃねえよ…:

「…:ラ、ラウラのってまだましやんな?」

「うん、それに比べたらね。」

「よし。…:でき、シャル…:」

「ん?どうしたの?」

いや、アンタ…:こつちが聞きたいわ。

「なんで男子更衣室来てんの?」

「えっ!?い、いやあ…:っ!ほ、ほら!だって僕まだ周りには男の子ってことになってるから…:」

「あ、そっか…:いやでももうちよい離れたところでも…:」

「け、剣は…:嫌…:かな…:?」

ピピーッ!反則!!上目遣い+首傾げ+照れ…:耐えろ?無理じゃ!!
…:ってか俺上目遣いに弱いな…:なんて言うか…:守りたい、この笑顔。
やないけど、なんか凄く可愛い。シャル女子やしな。男の娘ちゃうしな。

「べ、別に嫌ちゃうけど…:」

「あ…:あ、あり…:がとう…:」

何故感謝されたし。

「じゃ、じゃあ着替えるね…:?」

「えっ!？」

パサッ

「お、おい!シャルいきなり…!」

「…え?…あつ!じ、ジロジロ見ないで…剣のエツチ…」

Why French People!?なんでや!脱いだん
シャルやろ!まあとりあえずは後ろ向くけれども!

「わ、悪い!」

「…み、見たいなら見てもいいけど……」

…なんだと?

—天使さん、悪魔さんが入室しました—

天「だ、ダメだよ剣くん!付き合ってもいないのに女の子の裸なんて見たらダメだよ! (シヨタボ)」

悪「なんやお前。本人が見せたる言うてんねんから見たらええやん。なー、剣ちゃん。(イケボ)」

剣「おK見よう。俺剣ちゃんって呼ばれる方が好きやし。悪魔関西弁やし。」

—天使さんが退室しました。—

「…ほんまやな?…シャル」

「…う、うん……だから……こつち向いて、いいよ?」

…っは!ま、待て!よう考えたらやばい!悪魔何言うてくれとんねん!!

「や、やっぱ待て!!シャル!」

「えっ!?…ちよ、う、うわあ!!」

俺に急に止められたシャルが脱ぎ掛けのISスーツに足を纏れさせてこつちにコケてきた。

もちろん俺も予想してなかったし、ISスーツを脱ぎ掛けな訳で—

「シャシャシャシャシャシャシャルウ!」

「痛た…ぶ、ごめ…ん……剣……」

シャルのクツションになるようにして倒れた。いや、俺が倒れるだけならまだ良かった…

「シャ、シャル…当たってる……」

「う、うん……で、でも……今起き上がっちゃったら……その………み、見えちゃうよ?」

そう、今の格好である。横たわる俺の上にISスーツを足首まで下ろしたシャルが乗っている。

ISスーツというのは体から出る微弱な電位差を検知し、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達するために作られている。

つまりはISスーツを着るときは全裸なのだ。

従って今俺の腹（ISスーツを脱ぎ掛けのため上裸）にはシャルのはつきりとした女子の膨らみがダイレクトに当たっているのである。

柔らかい。…んでなんかピンっていうかコリコリっていうか何か何かしらの別の感触がある。…アレやんな、アレ。うん、やばい。なんで

最近こんなイベントばっか起きんの？

「…俺目瞑つとくからはよ着てくれ…」

「う、うん。…あれ？…んしょ、んう…！」

どうやら俺とシャルのISスーツが絡み合って上手く抜け出せない様子。モゾモゾと俺の身体の上で動いている。

まあシャルがこんな状況で足だけ器用に動かす、ということが出来る筈もなく、当選シャルの上半身も細かく動く。

はつきり言わせてもらう。やばい。突起がコリコリと俺の身体に確かな感触を残している。シャルもそのことに気づいたのかさつきよりも遥かに焦った様子でISスーツを解こうとしているみたいや。

ちなみに俺のISスーツにはち○こプロテクターが装着されているのでどれだけ元気になろうとも気づかれない…はずや。

「ご、ごめんね！剣!!は、早く降りるから!!」

「あ、焦るな!!余計遅なる！」

落ち着かせた所でようやくシャルが立ち上がれたようや。…なんか複雑な気持ち。

「も、もういいよ…？」

「お、おう…なら俺も着替えるから。」

流石にシャルは向こう向いてくれた。…これでまたさつきみたいなことになったらシャルならんからな。

「ね、ねえ…剣…！」

「なんや？」

後ろを向いて着替えてたらシャルが話しかけてきた。

「責任……と、取って」

「なんのやねん!!」



「ん？おつす簪、セシリー。…もう動いて大丈夫なん？」

「お疲れ様、剣…」

「ええ、まだ激しい運動は出来ませんが。…それより剣さん…？」

シャルと更衣室で別れた後、廊下で簪とセシリーと出会った。…なんか表情が怖い。

「ん、ん？どないした？」

「デュノアさんと更衣室で何をしてたのかな…と」

この2人はカナからシャルのことについて聞かされている。俺が国連に言ったおかげで、もう少ししたら女子として生活できるからそれまでのサポート役らしい。

…待て、今はそんなことはどうでもいい!!何故2人が…!

「な、なんもしてへんで…？」

「…デュノアさんの…胸…おっぱい…」

簪?!そんなこと言う娘やったか!?

「…鼻の下が伸びてましたわ。剣さん…」

ぷくつと頬を膨らませるセシリー。

なんで見てんねん!!

「あ、あれは不可抗力っちゆうもん…」

「では今日の夜からマッサージを…」

Why British People!?

「…2日分で許して上げる…私とセシリア…2人ずつに…」

「んふふー、後お姉さんにもね?」

Why Japanese People!?しかもどっから

出てきたんやカナ!!…でもまあただ言えるのはひとつだけ…

「……………はい」

どうやらワンサマのTOLLOVEる体質が移ったらしい。

決闘！ V S ラウラ

―タツグトーナメント当日―

この二週間でやったことを言えと聞かれたら真つ先に『女子の身体をマツサージしたこと』としか答えられないぐらいマツサージをさせられた。その次にシャルとの訓練が来るぐらいに刺激的すぎた。何故かお尻もやらされた。やらされたのだ。柔らかかった。はい。ありがとうございます。

柔らかさ？…カナ、セシリー、シャル、簪の順番やった。まあシャルと簪はどっこいどっこいやったけど。

あれ？そういやなんでシャルにも俺マツサージしたんや？

…そんなことよりも、今はタツグトーナメントに集中せな。

「？どうしたの？剣」

「い、いや…何でもないで？」

癒される。…うん、ここら辺ではつきりさせておこう。

俺はカナ、簪、セシリー、シャルの四人が好きや。

何でか、と聞かれたら上手く答えられへんけど気づいたら『一緒にいてほしいと思う人』、から『ずっと一緒にいたい人』になっていた。四人と喋ったり、一緒にいるだけで楽しくて、嬉しくて、幸せな気分になる。…男が言うときつしよいなこれ。

もちろん俺は誰か一人に告白しようと思う。…まだ、自分の中では答えは出ていない。…でも、いつかは出したい。…そのためにも…

「…勝とな、シャル」

「うんー」

今は目の前の試合に集中しよう。



「剣さん！」

「け、剣……！」

「やつほー、剣くん、デユノアちゃん」

「ん？おお……」

対戦相手が決まり、シャルと2人でピットで待っているとセシリーと簪と楯無が来てくれた。こうして応援に来てくれるのは嬉しい。……最も、今回はそれどころやなさそうやけど……

「どした？応援しに来てくれたんか？」

「そ、それもそうですが……あ、相手が……！」

「ああ……せやな」

そう、対戦相手が問題なのだ。

「気を……付けてね？」

「……正直、ラウラちゃんの実力は1年の中でもトップよ」

「分かってる……やから勝ち進んで待つとけ、かん「そうじゃないの！」……ぎし……？」

え？……俺と戦いたいから……とかそういうんじゃないの？

「剣くん？ここに居るのは皆ね、剣くんがこの前みたいなことにならないか心配なのよ？」

「……この前……、ああ、あの無人機か」

「そう。……ねえ剣くん？わたし達と約束して？もしまたあんなことがあっても、絶対、無事に帰ってくるって」

「……また大怪我したら許しませんわよ？……だからどうか……」

「……無茶……しないでね？」

「……何があったかは後で聞かせてもらうよ？ 剣。僕も知りたいし」

「……ここまで想ってくれる彼女達に、直ぐに俺の心は決まった。だから、それを伝えるためにも……」

「大丈夫や、絶対に戻ってくるから」

今は、戦おう。……ラウラ・ボーデヴィツヒと篠ノ之箒のペアと――



「……っふん、まずは貴様か」

「いたたたた……シャルー、あいつになんか良いお薬持つてない？」

「……それで煽っているつもりなのだろうがどうでもいい。貴様を潰し、その後で織斑一夏を叩きのめすだけだ」

「まるで自分がワンサマと当たるまで負けへんみたいな言い方やな」

「当たり前だ。……この私がこんな奴らに負けるはずがないだろう」

「……へえ……」

――油断大敵、火がボーボーつてな。

「――では」

試合開始まで――5、4、3、2、1……開始!!

「消えろ」

ラウラが瞬時加速を使い、俺に突進してくるその刹那――

俺はシャルをランペイジテールに巻き付け、箒の元へと送った。

「何っ!？」

「これなら僕のエネルギーの節約になるからね。いきなりで悪いけど…やらせてもらおうよ!!」

箒の元へとシャルが行ったことを確認し、ランペイジテールを解き、ラウラのプラズマ手刀をラグナロクモードのオールラウンドで受け止める。

「…つち」

「さあて……………やろか？」



「ふあー、凄いですねえ。二週間ちよつとの訓練であんな信頼が築けるなんて」

観察室でモニターに映し出される戦闘映像を眺めながら真耶は感心したように呟く。

「…アレを連携と取るかどうか、だな。まあボーデヴィツヒのワイヤーブレードの使い方よりはマシだな」

「で、ですよね…流星にあればちよつと見逃せませんね」

剣・シャルルペア

剣の金獅子の武装であるランペイジテールを使い、シャルルを箒の間合いから強制脱出させ、シャルルはその間ラウラが攻撃をしないように銃で牽制をする。というのがこのペアの特徴だ。これによりシャルルは回避に意識を集中させる事無く攻撃を続けることができた。…もつとも、急にランペイジテールで引っ張られる時は多少驚くのだが。

ラウラ・箒ペアは対照的だった。ラウラが完全に2 v s 1を想定して戦い、もし自分の戦闘の邪魔をするものならペアである箒もをワイヤブレードで弾き飛ばす。

箒も箒で、ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡを使いこなすシャルルに全くと言っていい程、ダメージを与えられていなかった。代表候補生にして高速切替を得意とするシャルルが攻撃に専念してくるのだ。もし仮に隙が出来たとしても、間合いに入った途端にシャルルが自身から離れていく。といった具合で、攻撃がかすりもしないのだ。

「…まああれだけやれば少しは武装の特徴ぐらいは分かるか」

「時守くん…ですか？そう言えば毎週末はお二人でどちらに？」

時守がここまでの急成長を見せたのには理由が幾つかある。その中で最も大きいのが…

「なに、ニューヨークの国連本部に行つてな、そこで軍隊の隊長やら国家代表やら過去の国家代表と模擬戦の嵐だ。イーリス・コーリング…聞いたことは？」

実力者との試合である。

「あ、あります…候補生時代に結構やられちゃったなあ…」

「ほう…真耶が、か。…まあ今はそれは良い。そして、平日は私と更識姉によるISの模擬戦…これで逆に実力が付かない方がおかしいだろう…」

「よ、良く考えたらすごいですね…。？あれ？ISのエネルギーとか、あとアメリカにはどうやって？」

「エネルギーは時守がすっかりやっている。更識妹や黛に頼んだりしているらしい。…まあ、アメリカには、あれだ。許可を貰っているからISでな。」

ええ〜つと、真耶は心の中でため息を付く。…しかし、真耶にはまだまだため息の元が増えそうである。

「…せ、先輩……アレは……？」

「ん？……なっ！あ、アレは……!!」

先程まで剣・シャルルペア vs ラウラ・箒ペアの戦いを映し出していたモニターに映るラウラのIS、『シユヴァルツエア・レーゲン』の姿がドロドロと形を変えていた――

「な、なんやアレ！」

「わ、分からないけど…ヤバイものだとは思う…」

シャルルが箒を倒し、2 v s 1となった状況で、俺とシャルルはラウラ相手に優位に試合を進めていた。

俺がラグナロクモードのオールラウンドで近距離のプラズマ手刀を捌き、その間にシャルルが外からの狙撃でシュヴァルツェア・レーゲンのS Eを削っていく。A I Cによってどちらかが止められた場合は、ランペイジテールをラウラの集中の範囲外から叩きつけることにより、逃れていた。

そして、ラウラのS Eが残り20%を切ろうとしていた時、それは目覚めた。

「…アレ…どつかで見たことあるよーな無いような…」

「暮桜だよ…！第一回モンドグロツソのブリュンヒルデ、織斑先生の当時の専用機！」

「はあ!?!なんでそんなもんが……つてクソ！」

ラウラの身体をシュヴァルツェア・レーゲンごと飲み込み、1つの巨大な塊と化した暮桜（仮）が凄まじいスピードでこちらに向かってくる。ちなみに、俺のS Eは残り約60%、シャルルのS Eが残り約75%だ。

「シャルル！援護頼む!!今までと一緒や！」

「う、うん！任せて!!」

暮桜（仮）が近接ブレード『雪片』で斬りあげてくる。咄嗟にオールラウンドで防御しようとしたが、暮桜（仮）の動きに俺とシャルル

は目を疑った。

「剣!？」

「何っ!？」

暮桜(仮)は人体では有り得ないような動きで俺の背後に回り込み、単一使用能力『零落白夜』を発動させた。

本来ISとはパワースーツである。故に人間の関節等の限界を超える動きはできない。しよとすれば操縦者の身体にその負担の全てが掛かるのだ。

その予想外の起動に反応出来なかった俺は『零落白夜』の一撃を背中に喰らう。

オールラウンドによる背面防御が間に合ってくれたが、その衝撃までは受け止めきれずに前方に吹き飛ばされる。

吹き飛ばされている間も、ハイパーセンサーで相手の動きを確認するが、暮桜(仮)はシャルルの狙撃をことごとく躲し、捌き、防ぎ、そして攻撃に転じている。

金獅子が映し出すディスプレイを切り替えるところの場にいるものの残りSEが送られてくる。

——打鉄：操縦者、篠ノ之 箒 SE 0

——ラファール・リヴァイブ・カスタムII：操縦者、シャルル・デュノア SE 157／600

——金獅子：操縦者、時守 剣 SE 53／200

——???：操縦者、??? SE 800／1000

絶望的な数字だ。だけど、それは戦わない理由にはならない。すぐさま体勢を整え、次にくる攻撃に備える。

「シャルル!一旦引け!!相性が悪い!!箒のところに!」

「うん!」

シャルルが無事に筈の元へとたどり着けるよう、ランページテールを伸ばし、暮桜（仮）攻撃する。

が、雪片に軽く弾き飛ばさる。しかし、これで意識は完全に俺の方に向いた。

この暮桜（仮）は織斑先生のデータを元に行っているのかは分からないが、とにかく速い。瞬時加速を使っているのかは分からないが速い。…だが、速いだけである。先程のような予想外の起動をされない限り落とされない自信はある。…そう、落とされない自信は…

「つぐうー！」

「……」

間合いを詰められ、居合いの要領で雪片が振り抜かれる。…だがそれは…

「俺には悪手や…、どんだけ見てきた思てんねん…」

入学してから今までずっと、本物の動きを見てきた俺には止められる。

「…でも…！止められるだけや…！…！」

だが、その状況は良くも悪くも第三者の手によって変えられる――

「うおおおおおっ!!!」

「っ?!一夏!?!」

アリーナの観客席に降りたシャッターを一夏が『零落白夜』でこじ開け、アリーナへと突撃、そのまま瞬時加速を発動させ、暮桜（仮）に斬りかかった。

「あいつ!!……つくそ!!ふざけやがつてええええ!!!!」

暮桜（仮）と一夏がお互い『零落白夜』を発動させ、斬り合う。…
だが、もちろん…技量が上の方が勝るので…

「一夏あ!SEエネルギー考えろ!!」

「…うるせえ!!あいつは俺が…!!千冬姉のを…!」

一夏のSEが減るペースがとてつもなく速くなる。『零落白夜』の常時発動+相手の『零落白夜』によるダメージが白式に入り、あつという間に俺と同じぐらいまで減った。

「っ、落ち着けや一回!!」

ランページテールを一夏の身体に巻き付け、強引に暮桜（仮）から離す。…暮桜（仮）は様子を見るのか、空中で一旦停止した。

「なんだよ剣!!邪魔するんだったお前も!!」

「一旦冷静になれ!!周りを見ろ!…お前もあいつも『零落白夜』持つとんねん。そんな奴らが暴れてもし観客席に当たったらどないするつもりや!」

「そんなの………わ、悪い……落ち着いた。」

そう、さらにそれでもし暮桜（仮）が暴走でもして観客席に突っ込んだら…シールドバリア無効化攻撃を持つ敵が縦横無尽に暴れ回る。…その光景を一夏も想像できたのだろう。

「…でも、あいつ千冬姉のデータを…それだけじゃねえ、力に振り回されてるラウラも許せねえんだよ…!」

「…んなら、俺が時間を稼いで、あいつのエネルギーを極力減らしてお

前の前に持つてきたるわ。やからお前は、あいつが動かへん一瞬で、あいつをぶつた斬れ」

「それって…剣が匣になるってこと？」

回復した箒と先程まで箒を守っていたシャルルがこちらにきた。

「せや。シャルル、一夏にエネルギーを分けたってくれ。…今の俺じゃあれに止めの一撃は入れれへん。…時間が稼げたらええとこや」

「…最後に俺が『零落白夜』で止めるってことか…」

「止められるのか？…剣」

「止めたるわ。…何日、本物見続けてきたと思ってんねん」

「…絶対、無事に戻ってきてね？」

一夏も箒もシャルルも…不安げな顔で俺の方を見てくる。

コピーとはいえ、曲がりなりにも世界最強。つい最近ISに触れた俺がそう長く持たない、と思っっているのだろう。…それでも、戦う。

「ああ、絶対戻ってくる。…！来るで…シャルル！一夏にエネルギーの受け渡し、できるか!？」

「うん！」

「箒は2人が動けへん間無理の無い範囲で2人を守れ！今の箒にはSEが無いらダメージがモロ入るからな、注意しといてくれ！」

「分かった！」

「一夏…頼むぞ、あいつを止めれるのはお前だけや…全エネルギーを…残しといてくれ。…あいつに一撃入れるために」

「…ああ！任せろ…だから…、だから俺もお前を信じるぜ！剣!!」

ゴオツ!!

暮桜（仮）が突撃してくる瞬間、各人が自分の行動に移った。箒はシャルルと一夏の前に立ち、近接ブレードを構える。

ISにはSEの他にも動かすためのエネルギーがある。故にSEが切れても動けるのだが、その場合はダメージが本人に直接入る。だから普段の模擬戦の時は一旦SEが0になると、動力としてのエネルギーが切れるように設定してあるのだ。

今回のような緊急事態には、その動力が復活してある程度は動かせるようになる。

そして一夏は白式を待機状態へと戻し、シャルルがコアバイパスを経由して白式に動力としてのエネルギーを渡しにかかる。

最後に俺が…

「はあああああ!!」

「……」

暮桜（仮）を止める。

キーン!と甲高い金属の接触する音が響きわたる。今の俺の役割はこの暮桜（仮）の動力を出来るだけ奪い、一夏が100%、零落白夜を当てられる状況を作ることだ。

しかし、何もかも上手くはいかない。

「…」

「ぐおっ!!…ま、まじかい…」

暮桜（仮）は再び、人間にはできないような機動、スピードで雪片を振るう。しかし、その要所は確かに織斑先生のそれで、確かな鋭さがある。『零落白夜』が断続的に発動される雪片は、確実に俺の死角を狙い、振るわれる。

「うぐっ…で、でもな…ハイパーセンサーの慣れには、ちよつと自信あんねんな、これでもな!」

「……」

距離をとった暮桜（仮）が先程よりもさらに速い速度でこちらに再

び接近する。俺もまた、防ぐためにオールラウンドを構えようとした
……

その時だった。

「……は？」

「…」

大勢の生死を分ける戦い中にも関わらず、間抜けな声が出た。

今まで暮桜（仮）のあの速さは瞬時加速を使つてのものだ、と勝手に思い込んでいた。

この戦い、初めて瞬時加速を使い、いつの間にか俺の目の前に迫つていた暮桜は、『零落白夜』で俺を切りつけ、吹き飛ばした。

「つぐはー！」

「……」

『零落白夜』の一撃でSEが底をつき、アリーナの壁に衝突した時の衝撃に身体が悲鳴を上げる。

ハイパーセンサーで筈がこちらに来ようとしている一夏を止めているのが見える。…一夏も撃墜されたら、いくら教師部隊が応援に来てくれてもまずい、ということ分かっているのだろう。

体勢を整えようとする、既に目の前では暮桜（仮）が雪片を振りかぶっていた。

SEが尽きたこの状況で喰らったら重傷は確実だろう。もしかしたら死ぬかもしれない。そして、恐らく普通の機動では避けられないだろう。……それでも、それでも俺は……負けられない!!

「……負……けるかあああああ!!!」

ミシッ

左脚部スラストを強引に吹かし、暮桜（仮）を蹴りで吹き飛ばす。金獅子の装甲か、俺の身体かは分からないが、とにかくどちらかが悲鳴を上げた。

「…相手がどんだけ強くても…俺は負けられへんねん…！負けてたまるかよオ!! 『ラグナロク』!!」

残された時間は、後少し―



「『織斑先生!!』」

「なんだ！ここは立ち入り禁止だ！3人とも今すぐ出ていけ！」

「そうはいきませんわ！わたくしにも…わたくしにも出撃の許可を!!」

「また…また剣をあんな目に合わせて…！お願いです！」

「分が悪すぎです！今まで試合でエネルギーを消費しているのに、そんな状況で…!!」

観察室に3人の生徒が押し寄せていた。

セシリア・オルコット、更識簪、更識楯無である。

「…だから出ていけと言っているだろう！仮にお前たちでどうにかできるのか!?…そもそも…もうそう長くは続かん。この戦いは」

「っ！どういふことですか!?まさか剣さんと一夏さんが落とされるとでも?」

「…五分五分、と言った所だ。…分かってくれ…私も…辛いんだ…」

「…織斑…先生…」

今からアリーナを出て、参戦しようにも3人にはバリア無効化攻撃が無い。さらにはアリーナのピットは完全にロックされ、アリーナ外からの教師部隊しか、あの戦いには参戦できないのだ。

「…剣くん…また無茶して…」

「今の私たちにできることは、あいつらを待つことと、あいつらの帰る場所になること…そして、ただ信じることだけだろう…」

やり場の無い怒りに、千冬の拳が震える。

「…そうですね…わたくしも、…いえ、わたくしたちも剣さんが戻ってきたら言いたいことがありますし…」

「…うん、…信じて待とう…」

「…絶対帰ってくるって言ったもんね、剣くん。…だから今は…」

— 信じよう —

「…つクソが……」

俺から離れ、観客席を狙いに行く暮桜（仮）を瞬時加速で追う。

もう金獅子にほとんどエネルギーは残っていない。ISのパワーアシストもほぼ切れかかっている。

そんなほぼ瀕死状態の俺に、暮桜（仮）が振り向き、何度目になるか分からないが、雪片を振るう。

急停止+重い斬撃を身体に受け、みしみしと悲鳴を上げる。

「…ぐうー…ラグ…ナロク…！」

なんとか暮桜（仮）が離れる前に一撃を喰らわせる。だが、その攻撃は浅く、大したダメージにはならない。…だが、それでいい。

俺の仕事は…時間稼ぎと…こいつを一夏のとこまで持つていくことや!!

「……はあああ!!」

力を振り絞り、オールラウンドを振るう。じわじわと暮桜（仮）にダメージを与える。

が、ここで暮桜（仮）が俺に止めを刺すために距離を取り、雪片をしつかりと両手で構える。…この…この一撃で全てが決まる…か…この空中戦に全てを掛ける!!

「…『グングニル』…発動…、これで落ちてくれや？」

「……」

暮桜（仮）は雪片の刀身を下げる。…恐らくグングニルを切り上げて弾く算段なのだろう。

「…それでも、これで最後や…!!!」

「……」

グングニルを振りかぶる。…パワーアシストがほぼ切れかかっている、普段は感じないが、全ての装甲、オールラウンドが重く、重く感じる。…だが、だからこそ、力をしつかりと伝えられる気がする。

「…うおらアア!!!」

「……！」

全力で投げたそれを……暮桜（仮）は無残にも弾き飛ばした。

でも。

「っ！」

「……この時守剣、何から何まで計算づくや……ってな……！」

最後のエネルギーを使い切り、投げた後の体勢から瞬時加速で加速しつつ、強引に体勢を変え、暮桜（仮）の懐に潜り込む。

「……ここまで近づいたら……雪片を振り上げた状態なら……お前も避けられへんやろ!!!」

右手で暮桜（仮）をアリーナの地面へと殴りとばす。受け身を取れず、地面に叩き付けられ、雪片を離れた暮桜（仮）は、自身のそばに転がる雪片を見つけ、取りに行こうとする。

「……ははっ、……後は……頼んだで……？」

「うおおおおおお!!」

だが、その一瞬の隙を、待機していた一夏が逃すわけが無い。最高速度での瞬時加速を使い、日本刀程の長さまで絞った『零落白夜』で暮桜（仮）を見事にぶった切った。

「……信じ……てた……で……」

暮桜（仮）の切れ目から気絶したラウラが出てきて、一夏がしつかりと抱きしめたのを見たのを最後に、俺の意識は完全に落ちた。



「……んっ……ん？……またここかい」

「……起きたわね、剣くん。…無事で良かったわ」

「そうですわ！……無茶をしないでくださいと言ったのに……」

「…ほ、本当に無事で…良かった…」

目を覚ますとそこは無人機襲来の後にお世話になった医務室だった。そして俺のベッドの側には刀奈、セシリア、簪が居てる。

「…ごめん、また心配かけた…刀奈、セシリア、簪」

「っ！馬鹿！ほんとに心配したのよ!？」

「この前よりも酷い怪我をして…！もう少し自分を気遣ってくださいましー」

「……生きててくれて…良かった……」

俺が謝ると彼女達は目に涙を浮かべながらそれぞれの想いをぶつけて来た。…今回ばかりは、本当に俺が悪い。

「……俺…どんな怪我なん？」

「左足の骨、肋骨7箇所にはびび、全身に24箇所の打撲よ。…ほんと、良かったわ…」

「ええ…、あ、あの…剣さん？」

セシリアが何か聞こうとする。刀奈と簪の方も見てみると、2人もセシリアと同じ、真剣な顔で、かつ恥ずかしそうにしている。

「…ん？」

「…あ、あの…この後…部屋で…待ってる…」

「だから、お風呂上がったなら早く戻ってきてね？」

「…ああ、分かった。…ってか風呂入れんの？」

答えを聞こうとした時、医務室の扉が開き、山田先生が入ってきて、その答えを告げた。

「ええ。今日は大浴場のボイラー点検があったので、元々生徒たちが使えない日なんです。点検自体は終わったので、それなら男子に使ってもらおうって計らいなんですよ！でも、何かあったらいけないのでデユノア君と織斑君と一緒に入ってもらいますよ？」

「…はい、分かりました。…うん、3人とも…分かった。風呂上がったら…直ぐ部屋に戻るわ」

俺は痛む身体を起こし、松葉杖をつきながら山田先生と共に風呂へと向かった。

「…ふふつ、2人とも？心の準備はいいわよね？…まあ、シャルロットちゃんも、かなりやる気みたいだけど…、最後には…ね？」

出ていった直後の医務室でそんな会話が繰り広げられているとも知らずに…



「おお！剣!!大丈夫だったのか!?怪我は!？」

「…酷いけど松葉杖あったらなんとかって感じやな」

「……」

「あ、織斑くんもデユノアくんももう来てたんですね。それじゃあどうぞー！一番風呂ですよ!!」

山田先生が勢いよく脱衣所の扉を閉める。

沈黙☆

「…悪い、シャル：俺入らせてくれへん？」

「っ!?!う、うん!いいよ!」

「ヒビ入ってるんだよな。…俺が付き添うよ。シャルルはー…」

「ぼ、僕のことには気にしなくていいから、ね?」

とらいうことぞ。

カポーーーーーン

「はふう…」

「えーなー、俺なんてシャワーで済ませて入浴は軽くだけって言われたのに…」

「あ、じゃあ俺が身体洗ってやるよ」

「えー…自分でできる範囲は自分でやるわ。やばかったらワンサマ呼ぶわ」

男に洗われるとかなんか嫌や。

「そうか、じゃあ俺ちよつとサウナ行ってくる。…それと、剣…」
「ん？」

「…今回の、あれは確かにあの方法が一番良かったのかもしれないけど…、あー、なんて言えればいいのかな…、とにかく！もうあんな無茶はすんなよ！皆心配してたんだぞ！」

「ああ、分かった」

「じゃ、行ってくる。…やばかったら言えよ？」
「おう」

シャワーをひねる。…あゝあゝ、くぎもちいい…

「し、失礼します…」

「!?う、うわっ！」

浴場の入り口から聞こえてきたシャルの声を過敏に反応してしまい、椅子から落ちそうになった。…浴場で欲情したからとちやうで？

「だ、大丈夫!? 剣！」

「だ、大丈夫やけど…」

声をかけられ、振り向いた俺は言葉を失った。

そこに立っていたのは一糸纏わぬ姿のシャルだった。

胸元でタオルをきゅつと左手で固定し、大事な3ヶ所が見えないようにしていたが、所詮は薄手のスポーツタオル。その向こう側の楽園は少しばかり透けて見えた。ありがとうございます。

「あ、あのね…、一夏が『お風呂大好きだ』って言ってたから、長くなるかな? って思ってたから、一夏がお風呂に入ってる間に…剣の身体を洗ってあげようかなって…」

なんのお店ですかここは。電話した覚えも無いですよ？30分6000円とか取るんですか？

「い、いや……別に大丈夫やで!?……自分でも身体ぐらい……うぐつ!!」
「ほ、ほら……ね、ねえ剣?……その……僕じゃ……嫌……かな?」

風呂の熱さのせいなのか、はたまた別の理由のせいなのか、頬を赤く染めて聞いてくるシヤル。もちろん――

「……い、嫌じゃ……ないです……というより……洗えないっす」
「じゃ、じゃあ……失礼……します……?」

断れる訳ないや無いですかー。

数分後

『どう?痒い所は無い?』
『お、おう……』

さらに数分後

『んしよ……んしよ……、ふう……ねえ剣、やっぱり痛む?』
『んー、やっぱりちよつとは、な……』
『じゃあもうちよつと優しくするね?』

またまた数分後

『け、剣……その……前って……どう……する?』
『前は俺やるわ』

などという事もあり、無事？身体を洗い終えた。

「じゃ、じゃあ僕はもう上がるね？」

「おう…あ、ありがとうな」

「あ、あのね剣！」

「ん？」

身体を洗い終え、シャワーを浴びていたらシャルが後ろから俺に話しかけてきた。…慣れって怖いね。2人とも9割裸やのに驚かへんようになったわ。

と思ってる時が俺にもありました。

俺の背中にシャルの手が触れ、そのまま後ろから俺の身体を抱きしめた。

「ふえあつ?!」

「僕ね…ちゃんと自由国籍取れたんだ。…まだフランス代表候補生で居られるんだよ。それにね、お父さんから連絡があつたんだ。『お前に謝りたい』って。…本妻の人が僕に男装するようにお父さんに言わせたんだ。お父さん、大切なものがどうなっても知らないって脅されてたらしくてね…それで、最近本妻の人は捕まって、お父さんも離婚した。それから、お父さんとも仲直りできたんだ…あのね、剣…」

「…ふあい……」

「…僕がこうしてお父さんと仲直りできたのも、フランス代表候補生としていられるのも、まだこうしてIS学園で楽しく過ごせるのも…全部剣のおかげなんだ…、ありがとう」

ギョツと抱きしめる力が強くなる。すなわち柔らかい2つの膨らみが俺の背中に押し付けられる。

痛い…やばい||1:9

「…シャルの人生やねん…シャルの自由に生きな損やで？」

「…シャルロット…」

「ん？」

「お母さんが付けてくれた、本当の名前」

「…分かった、シャルロット……ってまああだ名やったらシャルでおんなじやけどな」

「ふふっ…そうだね…」

シャルは俺の背中にくっついたまま楽しそうに笑う。

…いや、見えへんけどもやな。なんとなく分かんねん。

「な、なあシャル？…そろそろ…」

「…あ！そ、そうだよね…う、うん…じゃあ、僕も楯無さん達と一緒に部屋で待ってるから…」

「ん、分かった」

シャルは俺に別れを告げると出ていった…



「あー、やっぱちよい痛むか」

「大丈夫か？剣」

「おう。…しっかし松葉杖って慣れへんかったら動きにくいな」

「ヒビはそこまで酷くは無いんだろ？」

「まあな」

シャルが上がった後、直ぐにワンサマがサウナから出てきて、2人でそのまま風呂から上がった。

「剣、1人で大丈夫か？」

「ああ、距離短いしな。んじや、また明日な」

「おう」

ワンサマの部屋の前に着いた所でワンサマは部屋に入っていた。
…さてと…

「覚悟を…決めるか…」

◇

「おかえりなさい、剣くん。大丈夫だった？」

「おう、大丈夫やで」

部屋に入ると待っていたのはパジャマやネグリジエといった寝る時の格好をした刀奈、簪、セシリア、シャルロットだった。

そして何故か俺と刀奈のベッドがくつついており、かなり広いベッドになっていた。

四人はベッドに腰かけ、今か今かと何かを待っていた。

「あ、あのね…剣くん、私達、剣くんに言いたいことがあるの…」

「ああ、俺もや。…ってか俺から言わせてくれ。4人の言いたいことは…分かってるから。…今は、俺から言わせてくれ」

——気づいてたんだ。4人の想いにも、俺の想いにも。だから…伝えよう。

「悪かった…今まで見て見ぬフリをしてた。…誰か1人を選ぶと…他の3人が辛い思いをするんちゃうかって…でも、もう決めた」

4人は黙って俺を見ている。

「俺は…俺は刀奈、簪、セシリア、シャルロットの4人が好きや!!
こんな俺で良ければ、よろしくお願いします!!」

告白。普通じゃ考えられへんような告白。4人への同時告白。
…しかし、彼女たちは受け取ってくれた。

「うん、こちらこそ、よろしくね…剣くん」

「皆…平等に…?」

「おうー!」

「ふふつ、剣さんならそう言うてくださると信じていましたわ。合法的なものですから、皆で仲良くしませんと」

「ちゃんと皆、平等に…愛してね?」

「任せろ!…ちゃんと4人とも幸せにする!!」

…だが、冷静になったところでシャルロットの言葉により、現実
引き戻された。

…『愛して』?…うん、そりゃあ愛してるけれども。…なんかこの
場合は意味合いが違うような…

そーいやなんか入った時から変なお香の匂いといふかなんと言
うか…

「…あれ?」

「ふふ、早速効いて来たわね…大好きよ、剣くん」

刀奈に引つ張られ、キスをされた。

「むう…またお姉ちゃん…でも…私も…好き…大好き」

ベッドに近づいた時点で、今度は簪にキスを。

「剣さん……これからよろしくお願いしますわ。……ずっと……」

ベッドに座ってから、顔を両手で固定されて、セシリアからキスをされる。

この時点で、俺の理性はナニをされるのか悟った。

「ま、待って……！心の準備がまだ……!!」

「……愛してくれるんでしょ？……大好きだよ……剣」

部屋の扉に鍵とチェーンを掛けたシャルロットが戻ってきて、キスをする。

「……ぐっ……アカン……アカンって……俺らまだ未成年やし……」

「剣くんの自由国籍で皆剣くんのお嫁さんになれるのよ。……ねえ剣くん？」

ベッドに仰向けに寝させられると、刀奈、簪、セシリア、シャルロットがそれぞれベッドの上に登ってくる。……そして――

「……私達を……幸せにして？」

刀奈のその一言で俺の理性がもの見事に吹き飛んだ。

その日、俺は明け方まで彼女達を愛した。

—そう…

—
自分がかんりの重傷を負いつつ、普通に授業があることも忘れて—

33話だよ！全員集合！！

時守剣、家を買う

「…いたい…：眠い…：もう今日学校行きたくない…」

「ダメですわよ剣さん。…アレは自業自得、というものですわ」

全身ボロボロの状態で未来の嫁4人を抱いた翌朝、俺は松葉杖を付
きながら俺の嫁、セシリア・オルコットと廊下を歩いていった。

しかし、痛いのは身体だけではない。主に腰、ち○こもや。

シてる時に『気づかないフリをした』という発言について聞かれ、
『4人が自分を好いてくれて知っていることを知っていた』と言うとそこか
ら寝かせてくれなかった。4人ローテーションで搾りに搾られ：『も
うできません』って言っても『乙女の純情を弄んだ罰だ』ということ
で搾られた。

さらには『全員と1：1でデートをしてもう一度告白をしろ』とも
言われた。ちゃんと一人ひとりに言ってほしいらしい。まあそれは
俺もちよつと気にしてたからええねんけど、『そしたらなんでOKし
てくれたん？』と聞くと『それはそれ、これはこれ』と返された。解
せぬ。

でもまあ…

「…幸せやからええか…俺で良ければいくらでも付き合うわ。これか
らよろしくな、セシリー」

「はい…他の皆さんにも…」

「分かってる。ちゃんと言うって」

…幸せだ。腰がひよこひよこしてるけど。



「…あはは…：転校生の紹介です…：転校生と言うか何と言うか…」

朝のSHRで山田先生が疲れた顔をして連絡事項、というより転校生の紹介をする。

分かる！分かりますよ山田先生!!完徹ってしんどいですよね!?普通しちやダメですよね!!遊びはともかく肉体労働○とか、そういうのはダメですよね!?まあ…気持ちよかったけれども…

「シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」

扉から入ってきて、挨拶したのは俺の嫁、シャルロット・デュノアだ。

可愛い。一線を越えたからこそ分かる…つてのがあるかは知らんけどマジ可愛い。セシリアもめっちゃ可愛い。簪もギザかわゆす。刀奈もすげえ可愛い。

「ええと…デュノアくんはデュノアさんでした…。はああ…また部屋割りを組み直さない…」

「…え、…デュノアくん女の子だったの…?」

何やら第六感がやばいと警告しているが俺は大丈夫だろう。嫁4人公認の四股なのだから。…ドヤ顔で言えることちゃうけどな。

「おかしいと思った!美少年じゃなくて美少女だったって訳ね!」

「おかしい…：昨日まではあんな膨らみ無かったのに…」

「ちよつと待って!!昨日って確か男子が大浴場使って――」

…っ来る!!

「一夏あ!!」

ドガアン!という爆音を鳴らして鈴が衝撃砲で教室のドアを吹き飛ばし、華麗?に登場する。

「ま、待て鈴!!シャルロットは入ってきてきてない!!!それに俺はほとんどサウナにいたんだ!!な、なあ!?!剣!!」

「…おう、マジやで」

「あ、あれ…どうしたんだ?剣…」

やっぱり思い出してしまふ。昨日の風呂での出来事を。

「ま、まさか剣…」

「…:ワンサマがサウナ行ってる時にシャル入ってきたで…」

「変態だああああああ!!!」

鈴がこちらに衝撃砲を放つ。

なんで!?!お前、…ええ!?

ズドドドドドオンツ!!

「ふーっ、ふーっ、ふーっ!」

髪の毛を逆立てて鈴が肩で息をしているのが見える。

髪の毛…逆立つ!?!こ、こいつ…:ハーフのサイヤ人か!…:ってあれ?

俺生きてるやん。

俺と鈴の間にいたのは…:IS、シユヴァルツェア・レーゲンを展開し、AICを発動させたラウラだった。

「さんきゅ」

「軽すぎるでしょう、先生師匠」

「せ、先生い?」

「ええ、そうです。貴方は力を勘違いした私の攻撃を受け止め、そして

私を殴って止めてくれた。そして敢えて私の進む道を示さず、私の生きる道を探させてくれた。…ドイツの副官からそのような人物を師匠と書いて先生と呼ぶ、と聞いたので」

「……そんなことしたっけ？」

「……ってか昨日ラウラのところ行けへんかったんって…まあ、アレやから。」

「しました！それに、私は昨日、貴方に重傷を負わせてしまったのに、貴方は怒らないではないですか!!」

「そりやな、怪我とか治るし」

「流石は師匠です!!……では」

なんかよう分からんけどラウラに尊敬された。

そしてそのラウラはISを解除し、……ワンサマにキスした。

「ワア!？」

「!?!?!」

「お、お前は私の嫁にする!!異論は認めん!!」

「よ、嫁え!?!…婿じやなくて?」

「お前ようこの状況でそのツツコミできるな」

俺はお前を尊敬するわ。ラウラ↓俺、俺↓ワンサマ、と来たら三角関係か?…って思うやろ?

ちやうで。最終的に皆ちっふー先生に行き着くねん。

「あ、アンタねええええ!!」

「う、うわっ!!ちよ!?!鈴!!」

ドガン

「一夏!! 貴様衆人環視の中で何を…! 破廉恥な!! 鍛え直してやる!!」
「ほ、箒! どこから出したんだその真剣!!」
「知らん!!」

ガキーン

「師匠、アレは止めた方がいいのでしょいか?」
「…お前が止めたいと思うなら止めてもええんちゃう? 知らんけど」
「はっ! では止めて参ります!! 待て貴様ら! 嫁に手を出すな!!」

ドオーン

「なあにこれえ」

「…まあ、一夏は日本国籍だし…無理だもんね」

「お、シャル。…似合ってるで、女子の制服。可愛いわ」

「えへへ…ありがと」

「死ねええええええええええ!!!!」

「…アレ? セシリー、香水変えた?」

「き、気づいてくれましたの?」

「おう、当たり前やろ」

「くたばれ一夏アアアア!!!」

「あ、ありがとうございます…その、あの後、一旦部屋に戻って付けたのですが…」

「ん、セシリーに良く合ってるわ。キツすぎひんくつて、いい匂いや」
「ふふっ、ありがとうございます…たまには、他の香水も試してみますわ」

ふわっとした花の香りの香水をセシリーは付けている。

「剣!? セシリア! シャルロット! のほほんとしてないで助けてくれ!!」

「呼んだー?」

「だああああ! のほほんさんじゃないんだ!」

「…こんな状況になってまで他の女子の名前を呼ぶとは…！」

「しかもあだ名でねえ…？」

え、『鈴』もあだ名ちゃうん？

「ふん、まあいい。嫁は私の嫁だからな」

まあこんな騒ぎがいつまでも続く訳がなく――

「貴様ら…いい加減にしろ…」

鬼の一撃で騒ぎの元は沈められた。

◇

昼休み

「な、なんやこれえ…」

俺、時守剣はちっふー先生に呼ばれ、職員室へと向かった。そこで言われたのが『国連代表としての給料が出たから確認しておくように』との事だったのだ。まあ流石にそんな話をクラスで言えるわけがないので、こうして呼ばれたのだが…

「と、とりあえずカナ達のとこ行くか」

…はよ屋上行い。

「…あ、やっと来た…」

「もう、遅いよ。剣」

「…織斑先生に呼ばれてましたが…どうしたんですの？」
「……ま、まさか…バレた…？」

屋上で待っていたのは嫁4人+ α 。… α は可哀想やな、ちやんと
言つたろ。イケメン、巨乳、貧乳×2。

「い、いや…バレてないねんけどな？…その、国連代表としての給料
貰ってんけどさ…」

「給料？…代表って給料も出るのか…」

「逆に出なきゃどうやって食っていくのよ…」

「そうだぞ一夏、現に千冬さんもそうしていただろう」

「…それで師匠。その給料がどうしたんですか？」

ラウラが聞いてくる。いや、聞いた俺も俺やけどさ。…言おか。

「2000万…貰った」

「ふむ…私も軍所属の頃から含めておそらく2000万ユーロぐらい
は溜まっております！お揃いですね！師匠！」

「…初任給にしてはかなり高いわね…あ、私どんだけ入ってるんだろ
？」

「い、いや…ユーロちゃうねん…」

見たときマジでビビったわ。

「？円じゃないのか？」

「それでもすごい額ね…剣くん？」

円でもないねん……

「……………ドルや」

『……………え？』

「やから、2000万ドル。今1ドル110円やから…」
「……えっ…」

「22億……所得税でも引かれへんらしい…」

『えええええええええ!!』

「な、なんでそんなに!?!」

「オ、オルコツト家の全財産よりかは…あれ?どうでしたかしら?」

「22億…アニメDVD何本分ぐらいだろう…?」

「簪ちゃん!?壊れちゃダメよ!!」

「……俺もそれだけ稼げたら千冬姉助けられるかな…」

「一夏…」

「……何元なんだろう?」

「……さ、流石は師匠…私の想像を軽く超えてくる…」

何買おかな。……あ。

「ちよつと不動産屋行ってくるわ」

『コンビニ感覚で言うな!!』

原作3巻 臨海学校編
悩みと真実

『ええええええええ!!!』

「そ、そんなに意外か？」

「意外どころの話じゃないよ！」

「まさか4人を彼女にしてしかも将来もう結婚することがほぼ決まってるなんて…」

「う、うう………」

「ん？」

『うわああああああん!!』

不動産屋から帰ってきたら寮の前で大量の女子に囲まれた。

『最近4人の女子生徒と仲がいいがどういう関係なのか』と聞かれたので『4人とも娶った』と答えたところ、目から涙を流しながら寮の方へと戻っていった。

その後、スパアン！スパアン！という音が寮内から鳴り響き、漆黒の鎧とオーラを纏った世界最強が現れた。

↓たたかう

IS展開

アイテム

逃げる

↓逃げる

「誰が逃がすかこのヤリチ○」

「はあ!? なんちゆうこと言うんすかちっふー先生!!」

「うるさい、お前のせいで何人の女子が泣いたと思っているんだ」

「え、えー…、そう言われましても俺が好きな女子はカナと簪とシャルとセシリーなんで…」

「…！大半の教師よりも先に婚約するなあ!!!」

そつちいいいい!?

世界最強の右ストレートが俺の顎を見事に撃ち抜き、…俺の意識は闇へと堕ちた…



「全く…なぜこんな奴に世界各国が謝礼金やら何やらを払うんだ…。婚期発言だけで法律が変わり、戦争が終わり、貿易が成功し、様々な国が同盟を組むきっかけになった…か、…そろそろ真剣に考えるか」

IS学園教師陣の敵、ハーレム王No. 2 (No. 1は言わずもがな弟の一夏)の時守を殴り飛ばした私は、目の前で気絶している奴について考えた。

事実、こいつは世界を変えた。東以来になるほど派手に変えた。…世界変わりすぎだろ、というツツコミはするな。

世界から『女性優先法』が無くなり、今まで『結婚したかったけど風潮のせいで男が出来なかった女』が物凄いスピードで婚活、無事ゴールインしている。

さらに、世界中に広まった少子高齢化がこれのおかげで収まるのではないか、とメディアは連日報道している。

つまりは、だ。もし時守があそこであの発言をしていなければ世界はジジババだらけになり、子どもは全くおらず、尚且つ国民にとつて非常に暮らしにくい国だらけになっていたかもしれないということだ。

…そう考えたら22億は妥当なのか？

まあそれは置いておいて、だ。…一夏に多分心配はされているが…
そうだな、一夏には言わないが、そろそろ私も相手を探し始めるか。
た、ただ…その…1人は嫌…というか寂しいというか恥ずかしいか
らな…、…誰かと一緒に考えよう。

…山田くん？いや、だめだ。あいつはその気になれば直ぐ結婚でき
るだろう。嫁としてのスペックが高いしな。ドジ、というのも山田く
んだとプラス面としてアピールできるだろう。

…だが私はどうだ？

まず真っ先に第一印象、関羽。あれは流石に泣きそうになった。
『げえっ！関羽!?!』だぞ？姉に、それも華の20代に。流石に自信が無
くなりかけた。

そして、私が織斑千冬だとすれば、世界最強。

『誰が世界最強を嫁にしたいねん!』と時守からツッコミが来そうな
肩書きだ。最早要らない。ほら、やるから誰か変わってくれ。更識
姉、次のモンドグロツソで優勝したらお前にこの不名誉な肩書きをく
れてやろう。『更識楯無、お前がナンバーワンだ!』…よし、叩きつけ
てやろう。

さらに内面を知れば家事のできない女。

…もうここまで来れば私には結婚は無理なんだろうかとさえ思え
てくる。料理も掃除もできない女。…なぜこうなったんだ？

むむむ…誰か…誰か私と同じ境遇でほぼ私と同じぐらい残念な奴
で私の知り合い…あ。

1人居た。…嫌だが電話…するしかないな…

「…もしもし…私だ…」

相手と話しながら、私は寮長室へと戻った。

◇

「……ん…、…ん？…なんや…これ、柔らかい…」

ちっふー先生に気絶させられて、目が覚めたらやたらと枕が柔らかかった。なんや？この枕。とりあえず左腕で確認。

ふにふに。

「…そ、それに体になんか乗ってる…」

ふにふに。

「…んっ…ちよ、ちよつと…剣くん…くすぐっ…たい…わ…」
「え？」

ふにふに。

「きやつー…そ、そこは…らめ…」

「…カ、カナ？…え？」

…これ今どういう状況？

おk理解した。

現在、夜。俺晩飯外で食った。俺の部屋。ベッドの上。頭は刀奈の膝の上。

「ご、ごめん、刀奈…まさか刀奈が膝枕してくれてると思っへんく

て…」

「…剣くんのえっち。無意識に私の脚触ってたの？」

「うぐっ…」

「そ、それに…あんな…」

「…ご、ごめん…ちゃんと埋め合わせはする…」

「うん♪皆には悪いけど、二人つきりで、デートよ？」

顔を赤らめながら照れて微笑む刀奈。可愛い。今すぐお持ち帰りしたい。…でも今はできない。

まずはお腹、簪が器用に丸まって俺の胴体の上で寝てる。

次に足。もう少してふかふかきんた枕になりそうな寝方でシャルがこれまた器用に丸まって寝てる。

そして右腕、セシリーが俺の腕を枕にして寝てる。…しかも首に腕絡めてきて、身体も寄せてるのでセシリーの胸が俺の身体で押しつぶされてる。はわわわわ。

左腕は自由なのだが、頭は刀奈の膝の上。さつきから頭を撫でられている。つまりは動けないのだ。

…ああ…気持ちいい…、ん…う…ちよつと、左腕動かしたいな。

「ひゃう!？」

「あっ…」

左腕を動かしたらカナの脇腹を刺激してしまったようだ。

……

「えい」

「ふにゃあ…」

……

「えい」

「ひゃあ……も、もう……！剣くん！」

「悪い悪い……つい、な？」

「何がつい、よ……剣くん、……私達がどうしてあの時告白を受けたのかっていうの、まだ教えてなかったわね」

「……え？」

な、なに？急にシリアスな話？

「実はね、タッグトーナメントが終わったら皆で告白して、しばらく様子を見てから剣くんに答えを聞くつもりだったの」

「……」

「……でも、剣くんはまた無茶をした。……多分、いくら私達が止めても無駄だとは思うけど、それでも好きな人にはボロボロになってほしくないの。無人機の時もそう。タッグトーナメントの時もそう。いつも自分が怪我をする道を進んでるから、もう見てもいられなくなつたの」

「……俺はただ、敵に負けたくないだけや」

「だからこそ、よ。……その負けたくないっていう気持ちは良く分かるの。……でもねあなたを慕う人、大事に想ってる人は、このIS学園にいっぱい居るの。私達4人はその気持ちか他の子達よりももっと強いだけ。……無人機の時から、剣くん少しは気づいてたんでしょ？」

「……ああ」

「……分かったでしょう……中学の時のことは私にも簪ちゃんにもシャルロットちゃんにもセシリアちゃんにも分からない。……きつと、理子ちゃんの方が良く知ってると思う。……それでも、貴方の帰る場所になりたいって思ってる人——」

刀奈の言葉を自分の言葉で強引に遮る。

「そこから先は……デートの時や。俺も、ちゃんと伝える。どうしてほ

しいか、どうあつてほしいかを…な」

「…：うん、楽しみにしてるわ」

「…で？なんで俺の告白受けてくれたん？」

「それも、デートの時に私達の口から言うわ…：ふわあ…」

刀奈が可愛らしくあくびをした。…

「…寝るか」

「うん、左腕、借りるわね？」

「おう」

招かれざる客達

「ぬぐおおお…」

6500万円した新居である一戸建てに適当に家具家電を買い揃えた翌日、俺、時守剣は人生最大の死闘に挑んでいた。

「ま、まだ朝の8:30やぞ…、な、なんやねん…」

否、人生最大ではないかもしれない。というより確実に違う。

人生最大は俺の誕生日である大晦日から三賀日終わるまでの完徹。ユニバ行って帰ってきてから誕生日パーティーオールでして（大晦日）、初詣行ってゲーセンで遊んで屋台行って帰ってきてから部屋でオールで遊んで（正月1日目）、流石にここでちよい寝かけたけど皆に妨害されて結局寝れんとそのまま遊びたおして、友だちん家回ってお年玉貰って（正月2日目）、流石に勉強しよってなって勉強して寝た（正月3日目）。

中学三年の時のいい思い出や。まあ大晦日からの元旦オールは中学入ってからずつとしてるけど。

「朝の…アレが今当たったんか…？」

朝のアレ、というのはセシリーお手製のフィッシュ&チップスだ。俺、カナ、簪、シャルの地獄の特訓のおかげでなんとか常人が食える程まで昇華したポイズンクッキングだが、ごく稀に、何らかの毒性を持つことがあるのだ。

もちろん、セシリーの手作りなので残すなんてことはしない。

以前、『食べ物で何が好きなのか』と聞かれたので『好き嫌いはない。強いて言えば甘いものが好き』と答えたら、鈴が『雑食とか…ゴキブリかい！』とツツコンできたことがあった。

ムカついたのでとりあえず鈴のベッドにゴキブリのフィギュア（全長8cm）を10匹ぐらい入れておいた。ざまあみやがれ。
話がそれたな。

「…ま、まさか…マジで今くるとはな…しかも気絶せえへん程度の腹下す毒性…くそう…糞だけに…」

かれこれ本日4回目の個室トイレ。…今日だけは…今日だけはなんと外に出なければならぬのに…!!

「よ、4人分のデートコースの下見に行かねばならぬのに…!」

4人とも同じデートコースで良いんですか？

いいわけないやろ!

ちゃんと4人とも好きなもんとか嫌いなもんもあんな!

まあ飯はおんなじとこ行こかなって思ってるけど…

「メニューとかどんななんあんのかな…@クルーズ」



「久しぶりだな、私服で外出など…まあ1人なのは変わらんが…、確か…@クルーズ…か。…束のやつ、真面目に聞いてくれればいいのだが…」

「じゃー！くーちゃん！東さんは今からちーちゃんと会ってくるね！」
「？千冬様と…ですか？…一体何を？」

「んふふ、これはいくらくーちゃんでも言えないな。なにせ！あのちーちゃんが『東にしか相談できないことだ』って言ってきたんだからね！あの時は一瞬心臓が止まったよ！比喻じゃなくてね！」

「…まあ東様なら止まった心臓を自分で動かせそうですね」

「そんなの余裕余裕！東さんの手にかかればボールペンで文字を書くのと同じぐらい簡単だよ！」

「そうですか…、…とところで、一体どこに行くのですか？」

「@クルーズっていうメイドカフェ？なのかな？ま、帰ってきたらメイドがどんな格好してたか教えてあげるね！」

「はい、楽しみにしています。では、行ってらっしゃいませ」

「じゃーねー！」



「@クルーズ@クルーズ…お、ここか」

大型ショッピングモールのレゾナンスやその付近で下見、デート当日に渡すプレゼントを買った俺は、昼飯を食べるために@クルーズに行った。

「…メイドカフェ…か、シャルとか喜びそうやな。…簪は…どうなんやろ。カナとか目新しい、とか言ってくれるかな？…セシリーは日本にはこんな文化が…！とか…いや、それはラウラやな」

シャルとかメイド服見たら『ふわあ…可愛いよお…』とか言いそう。

簪は…『…は、恥ずかしい…』ってなんでか知らんけど自分が着たときのこと考えそう。

カナは『私こういうとこ来たことないから結構楽しみなの!』とか無邪気に笑ってそう。

セシリーは『変わったメイド服ですわね』とか言いそう。

「まあとりあえず入るか」

カランコロン、

▽イラツシャーセー

◇

「久しぶりだな、束。元気にしてたか?」

「どうしたのちーちゃん。頭に変なウイルスでも打ち込まれたの?」

「…私がお前を気に掛けるのがそこまで不思議か。あと、私はお前ぐらしいの実力者でない限り変な薬は打たれん」

「ふーん。じゃ、ちーちゃんが何を聞きたいのかも気になるし、ちやちやつと入っちゃおっか」

「そうだな」

千冬と束は『千冬からの相談』という名目でカフェ『@クルーズ』へと出向いていた。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか?」

「2人だ」

「では…あー、申し訳ないのですが、ただいま込み合っておりますして

…男性の方と相席…でもよろしいでしょうか?」

「ふむ…どうする? 束」

「別にいいよー。ちーちゃんがいいならね」

「なに、絶対ここでなくてはならない話ではないんだ。少し早めの昼食とするか。…では、その相席の所へ…」

「ありがとうございます。…では、こちらです」

店員の案内で千冬と束は移動する。…そう――

「お客様、こちらの方と相席…してもらってもよろしいでしょうか?」

「お? いいですよ、相席かー、初め…て…」

「…何をしている…時守…」

「おー! 剣ちゃん、おっ久ー!」

「えっ…? あ、み、皆さまお知り合いのようで。では…」

2人目の男性操縦者のところへ――

◇

「いやー、ちっふー先生にぶるんぶるん、こんなとこでどないしたんすか?」

まさかまさかの道中でラスボスと裏ボスにエンカウントや。

「それはこっちの台詞だ。なぜ1人でカフェにいるのだ」

「あ! 束さん分かったよ! 剣ちゃんぼっちなんですよ?…なんなら束さんが――」

はっ…?…ぼっち?

「いや、ただ嫁達とのデートコースの確認とプレゼント買っただけで

すよっ…ここには昼飯食いに来る予定なんで、まあ下見です」

「よ…嫁…達…だとう!？」

ハツハツハ、ぶるんぶるんがビビっとるわ。

「なかなか女心というものを分かっているな、時守」

「いやそりや分かってなかったらこの年で婚約とか無理でしょうよ」

「…っ！そ、それで？それぞれ何を買ったんだ？」

？プレゼントの話かな？…そりやあもちろん…

「ひ・み・っ♡」

「ふんっ!!」

グワシッ！

瞬間！俺の視界は闇に包まれた！

否、それだけではない。どこか人肌のような温もりが……ツ!?

「ぎやああああああ!!」

「みぎやああああ……なんで束さんまでえ!!」

…アイアンクローってこんなに力入るもんなん…？

「とまあふざけるのはここまでだ。おい起きろ二人とも」

「ちっふー先生が眠らせたんやないっすか…いてて…」

「そうそうちーちゃん、話ってなんなの？ずっと気になってたんだけど。後剣ちゃん居てもしていい話なの？」

「ああ。…むしろ時守がいたほうがいいのかもしれんな」

「…え？」

…最近俺とぶるんぶるんの息が合ってきたような気がする。まあこれで会ったん2回目やねんけどな？

「私が結婚するためにはどうすればいいか、だ」

「無理や思います」

「ブロリーとかがいいんじゃない？相手としては」

妥当やな。

「まあ束は後で殴るとして、だ。…時守、お前そもそもどうやってあいつらと付き合ってたんだ？」

「？ただ皆に好かれてるっていうのがなんとなく分かって、それで俺もあいつらが好きやからです。…4人の内誰か1人でも離れてほしくなかったんで…」

「ただちーちゃんの場合まず女子力とか云々の前に足りてないものがあるよね」

「せやな」

「…教えてくれ」

おおう…あのちっふー先生が教えてくれ。…なんて…。まあ教えたりましょ！

「愛嬌！」

「うぐっ…！」

「釣り目とかー、ちーちゃん言い訳にするかもだけどー、ちゃんと女の子してたら『ギャップ』でいけるのにさー」

「そうっすよ。人バシンバシンしびきすぎっす。もうちよい控えめにしたらええんちやいます？」

「…そうだな…女らしさで言えばまだ束の方があるしな…そうだ。…どうせ私は世界最強。どうあがいても男等近寄っても来てくれないのだ…」

す、すごい落ち込みようやな…

ここから話はズレにズレ…

「ちーちゃんって例えるならオベリスク○巨神兵だよな」

「分かるわー」

「失礼だな。ブラ○クマジシャンガールだ」

「…それはない」

ズレ…

「プレモル派なんすか？俺はのどごし派なんすけど」

「待って。まず剣ちゃん、お酒飲んじやダメだよね!？」

「え？」

「え？って何!？ちーちゃん！私がおかしいの!？」

「お前はいつもおかしいだろう」

「あ、そうだったね」

ズレ……

「で？誰が一番気持ちよかったんだ？おお？」

「…なんでこのタイミングで下ネタなんすか…」

「束さんも気になるなあ…」

「…彼氏にアレコレしてもらったらええやないですか。話聞くよりその方がええと思いますよ」

「死ね!!」

「うぎやああああ!!」

たまに戻り…

「束さんは結婚とかする気ないよ。なんで束さんが凡人の子なんか産まなきゃいけないのさ」

「…その子どもが自分より天才で産まれてくるかも…とか考えへんの？」

「…っ！剣ちゃん…：剣ちゃんやっぱり天才だよ！そうだよ！ちーちゃん！私より天才な子が産まれてくるかもしれないんだよ！」

「…お前よりも…か…：はあ…」

「んじや、ありがとーございましたー」

「ありがとねー！ちーちやーん!!」

「くっ…！相談に付き合ってくれたから奢る、と言った途端に…！」

ちっふー先生の奢り、という形で幕を下ろした。

デート セシリア編

「…あつつ…」

「むにゃ…」

「すう………」

「…んう…」

「…今日セシリーとデートやのになんでカナと簪とシャルが隣で寝とんねん…」

…柔らかい…右腕にシャルの身体が、左腕にカナの身体が、身体の上に簪の身体がある。…簪身体の上で寝るの気に入ったのかな？

「…あかん…一人寝ながらにやけるとかキモすぎるやろ…」

「…ううん…」

「…そんなこと………」

「ないよ…？」

「は？」

起きてんのお前ら!?

「次のデートは？」

「私……ごめんね簪ちゃん…シャルロットちゃん…むにゃむにゃ…」

「すう…私……だよ…？…シャルロット…さん…お姉ちゃん…」

「…何…言ってるの…？…僕だよ…」

「起きとるやろお前ら」

起床。

「セシリーが日程を言ってきたん『この日がいい』って」

「じゃあ次は…？」

「まだ決まってへんねんけど…何時がいい？」

「あ、明日は…私がいい…明後日以降に、まとまった時間で打鉄式式のメンテナンスしたいし…」

「じゃ、その次は私ね。…シャルロットちゃんは最終日、街のことも教えてもらいながら…ね？」

「はい…よろしくね、剣」

「おう」

…金が…あと21億円しかない…あれ？金銭感覚おかしい。

「んじや、朝飯食いに行こか」

——そして、時は流れる。



寮から出て、IS学園の校門まで歩く。

なんとまあ運のいいことに、先日のタッグトーナメントの振替休日やら、後処理等が多くなって金、土、日、月と四連休が入ったのだ。

もちろん今日は金曜日。セシリーとのデートの日や。

「つてかなんであんな鬼みたいなちっふる先生はあだ名で山田先生はそのままんやろ？…付けよか。やーまやー。花火か！…爆発しそ
うやな、どこがと言わんけど」

ばいおつミサイル。山田真耶最終兵器。

「ちっふー先生を鬼と呼ぶか軍曹と呼ぶか…何が正しいんやろ。『この寮では私が寮長だ。故に、私が法だ』とか言いそうやしな。まあつまりは自分が全部正しいってこと…！全部…正しい…!?なるほど、鬼であり軍曹であり破壊神でありオベリスク○巨神兵である。それが織斑千冬か」

納得納得。

「ま、ちっふー先生やったらどう頑張ってもブラックマジシャンガ○ルにはなれへんしな。…セシリーとかどんな衣装似合うやろ…、あ」

携帯を取り出して髪型をチェックしてついでに服も整える。

そうこうしている内に校門が見えた。デートつぽさを出したいから待ち合わせがしたい！ということらしく、4人ともどこかしら待ち合わせのポイントを指定しているのだ。…さて、と—

「お待たせ、セシ…」

「もう、遅いですわよ？ 剣さん」

——なんでせうかこの天使は。

青色のワンピースに身を包んだセシリー。

着ているのはそれだけなのに、な、なんていうか…

「…お嬢様みたいや…」

「ふふっ、ありがとうございます。…今日はよろしくお願いしますわ。あと、わたくしはれっきとしたお嬢様ですわ」

ふんつとそっぽを向くセシリー。…まあ本気じゃないっていうのは分かっているけどな。

「ごめんごめん、じゃ、行こうか、お嬢様」

「エスコート、期待していますわ」

俺は彼女の手を引き、駅に向かった。

◇

「いやあ…空いてて良かったな。皆も連休やから遊びに行くもんや思ってたわ」

「流石に疲れが残ってるのではないですか？」

「あー、一回戦できひんかった人は最近やったんやったっけ？…確か…」

「鈴さんや一夏さんも、まだ疲れが残ってるみたいで寮にいるみたいですよ？」

「なるへそ」

2人は座りながら、他愛もない話をしている。

モノレールの座席に、手を繋ぎながら隣同士、ぴったりとくっついて座るその姿はまさにカップルそのものだろう。

——もつとも…

「(話題！誰か話題を恵んでください!!グループであいつらに聞く?…いや、やめとこ。どうせラ○ホとかしか言わんしな。朝からラブ○とか頭おかしいやろ。えーっと、確かちっふる先生とぶるんぶるんが『デートにメイドカフェは止めとけ』って言ってたよな。…多分セシリーやから…昼…高い…かな?あ、大丈夫や。まだ金20億以上あるしな。服屋とかよって、日本の文化的な?やつ紹介するか。多分セシリーもあんまり寮から出てへんやろうしな)」

「(な、何を話せばいいんですの!?!ああ…こういう時鈴さんみたいな性格があれば…こんな時だけ羨ましく感じますわ…。多分楯無さんや

シャルロットさんもうまく繋げることが出来そうですが…むむむ…今日の昼食？だ、ダメですわ！もし剣さんがドツキりなるものでも考えていたら…台無しにしてしまいますわ…。あ、わたくしがリードする、というの…いえ、…ここはせつかくですし、剣さんに甘えさせてもらおう、というの…」

…考えすぎなのだが——そして、さらに——

『(なんなのよあいつら！デートとか言うから一夏との参考にさせてもらうために尾行しにきたら手を繋いで早速黙るとか付き合いたてのカップルか!?!付き合いたてのカップルか。あれ？でも剣つてその……ど、童貞卒業したのよね？なんか噂になってるし。…順番おかしくない？やってからデートつて。まあセシリアも今までずっとデートの約束してたのにその度に『来い』の一言で剣が千冬さんに引きずられて行くのを見てたから、初めてのデートで浮かれてるのは分かるけどさあ…もうちよつと話さないの？剣とかキヤラ違うじゃない！)』

同じ車両には変装したIS学園1年、中国代表候補生の専用機持ちが1人——

性格が功を奏したのか、時守が沈黙を破る。

「なあセシリー。昼飯どんながいい？」

「そうですね…ふふつ、剣さんと一緒ならどこでもいいですわ」

『(……………はっ)』

「そっかあ…じゃ、向こう行ったら考えよか。今日さ、服見てあとセシ

リーに日本のこととかもつと知ってもらお思てんねんけどさ、他にどっか行きたいとことかある？」

「…あつ、水着…そろそろ臨海学校もありますし、水着がみたいですわ」

『あ？』

「あれ？今なんか聞いたことのあるような声が…」

「気のせいではないですか？…：剣さん？」

「ん？」

「今日は…よろしく願いますわ」

「お、おう、頑張るわ」

『（……………○○○○○○○○しろ。リア充が…）』

鈴以外にも数人のIS学園の生徒がいるにも関わらず、いちやつく2人。…まあこれのおかげでこれ以降時守に接触する女子が減るのだが…

ショッピングモール『レゾナンス』

「ふう、大丈夫か？セシリー。結構長い間居てたけど」

「ええ、大丈夫ですわ。…それより剣さん…その…お金の方は…」

「まだ20億残ってるわ…金銭感覚バグってきたわ…服だけで軽く1

0万は飛んだよな?」

「た、確かそうだったはずですよ…」

『(これって高校生のデートよね?しかもまだ午前よね?なんでもう10万も吹っ飛んでるのよ!!)』

レゾナンスに着いた2人はセシリアの私服と時守の私服を見ながらぶらぶら歩き、良いのが見つければ試着、購入、を数回程繰り返し、疲れない程度のスピードで店内を歩いていった。

「ま、ええわ。…多分こんだけ貰えるの最初で最後やろうけどな」

「え?」

「いやな、長官とかに言われてん『今回は紛争解決などに関わった金が一気に入ってきただけ』やって」

「け、剣さん…やっぱりすごいですよ!」

右腕を抱きしめていたセシリアはその力を強める。もちろん、セシリアのその豊満な2つの膨らみが時守の腕に当たり、潰されていく。

「せ、セシリー?そ、その…」

「うふふ、当ててますのよー」

「…また、帰ったら、な?」

「っ!は、はい…」

「そ、そろそろ昼、食いに行くか」

「そ、そうですね…」

一連のやり取りを終え、2人は顔を赤く染める。

『(なに…あれ…?なんなの?私も一夏と付き合えたらあんなことをしろと!?無理よ!何白昼堂々ナニやる約束してんのよ!なんなのあの二人!あの話した後すぐにご飯食べに行くの!?どんな神経してん

のよ!!…あー、なんか訳わかんなくなってきた…』

◇

「ファミリーストラン…初めて入りましたが、なかなか…美味しかったですわ…」

「中学ん時は何かあるたんびに集まったなあ…」

「剣さんの中学生時代…またいつかお話を…」

「……いや、リコピンから聞いてくれ…」

「むっ、どうしてですか?」

「…基本アホなことしかしてへんし」

「なら尚更聞いてみなくては」

「せやったらセシリーの中学時代も聞かせてもらおうで?」

「ええ、いいですわよ」

昼食をとった2人はまた次の目的地へと歩いていった。互いの学生時代、IS学園でのお互いの知らない出来事などを話ながら…

『(あたしと一夏だと共通した出来事が多すぎて目新しさが全くと言っていいほど皆無よね。まず『弾』が出てきて次に『酢豚』ぐらいでしょ?あ、でも学園の話なら多いかも。あたし2組だし、1組での普段の授業の様子とか知りたいし。まあ剣を出汁にしたらいくらでも話なんて出せそうだし)』

◇

「お、本屋あるやん。…寄っていい?」

「もちろんですわ。わたくしもみたい本がありますし」

「ん、じゃ、入るか」

「はい♪」

『レゾナンス』の中にある本屋に入る。

その本屋は『レゾナンス』周辺、というより駅周辺でもっとも大きな規模を誇っている。

まあ雑誌やら文庫本やら漫画やらラノベやらと新しく出た本などはここに来れば手に入る、というぐらいの規模なので…

「あら？」

「ん？…これ…『インフィニット・ストライプス 特別号』か。…なんの特別号やねん」

「夏の、だと思えますわ。これは、オーストラリアの代表候補生ですわね…」

もちろんIS関連の雑誌もある。

雑誌を取り、表紙を見る。

そこにはISの情報のほんの一部（教科書にすら乗らないレベル）や、国家代表の日常に迫る！などといったものが書かれている。

「ほへえ、カナとかからも聞いたけど、やっぱり代表候補生とか代表つてこういうこともすんねんな」

「はい。わたくしもしていますし…あと、鈴さんも確か…」

「マジか。…どうする？これ買つてく？」

「せっかくですからそうしましょう！」

『（普通のデートね…ってか何よ！アタシがモデルとかしてるのがおかしいって言いたいのか!?失礼ね!!ま、アイツがもし雑誌に載ったらそのことネタにしてやるからいいんだけどね!）』

※そのネタですら剣ちゃんは大好物です。



——そして時は流れ——

「んー、いやあ、今日は良かったわ」

「わたくしもここまでゆつくりと楽しめたのは久しぶりでしたわ」

俺とセシリーはレゾナンス近くの公園に来ていた。

今日1日ずっと歩いてたからな。男の俺で結構足疲れてるし、セシリー大丈夫かな？

「セシリー、足疲れてへんか？」

「え、ええ大じよ……！い、いえ！少し疲れたので帰る時に……えと……その……」

「おんぶ……か？」

「っ！は、はい……ダメですか？」

小首をかしげてセシリーが訪ねてくる。んなもん。

「ん、ええよ。……つてかもっと甘えてもいいねんで？」

「じゃ、遠慮なく」

ベンチの隣に座る俺の肩に頭を乗せるセシリー。

肩に乗る金色の髪の毛の頭が、妙に愛おしくて、つい撫でてしまう。

「あっ……」

「……嫌やった？」

「いえ……、もう少し……もう少しだけ撫でてくださいまし」

「了解。……でき、なんで『インフィニット・ストライプス』をそんな大事に持ってるの？」

レゾナンスの本屋にて購入した雑誌を、セシリーはずっと大事そう

に抱えている。その理由が知りたかった。

「…『2人の男性操縦者特集』があつたからですわ。その、普段知らない所、とか知れるかも…と…」

「特集とかいつ組まれとつてん…」

つい苦笑いをしてしまう。

…よし、言おう。結ばれて気づいた。一緒に居て気づいた。——だから…

「なあセシリー?」

「はい?」

「今度さ、一緒に雑誌の取材。受ける?」

「っ!は、はい!喜んで受けますわ!」

「…じゃあさ、後もう一つ。…そのあとも、ずっと一緒に居てくれ」

俺の声のトーンと言葉から察したのか、セシリーは俺の肩からガバツと頭を離し、こちらを見た。

「そ、それって…」

「おう、改まったプロポーズや。…気づいてん。何かが足らんって思ってたんだけどな、前カナに聞いたのと、今回のデートで分かった。…俺は今まで自分が負けたくないから、つて強くなろうとしてた。…でも、違うかった。ほんまは『もしセシリー達が傷ついたらどうしよう』っていう気持ちだけで動いてた。…好き、じゃなくて、…あ、愛してる、に変わってたわ」

「剣さん…ようやく、ようやく分かってくださったのですね?」

「…おう」

「わたくしも、いえ、わたくしたちも剣さんを愛しています。ですか

ら、もう…」

「ああ、セシリーたちを置いてどこにも行かへんし、勝手に死んだりせえへん。…まだ、もつともつと居たいからな」

この気持ちは誰になんと言われようが変わらない。

俺を待つてくれる彼女達が居るから、そして俺も彼女達と居たいから。だから愛する。愛している。

「やから、これを…」

「…これは…」

「ああ、まだ婚約指輪…とはいかへんけど。今のところ、証として…な？」

ポケットから取り出した指輪をセシリーに渡す。

「…ありがとうございます。ネックレスが…」

「おう、…できたら普段付けといてくれたらなって」

「ふふっ、承知しましたわ。…これからも、よろしくお願いしますわ、剣さん」

『(なんなのよアイツら!? キザすぎるでしょ! しかも今時リアルであること言う奴いると思わなかつただけど! 『あ、愛している、に変わってたわ』とか馬鹿じゃないの! しかもセシリアもそれで喜んでるしき! 頭ん中お花畑か!! メリーゴーランドでも回ってんの! …つてかデートとして参考になったの本屋だけなんだけど! 服屋も10万とか使うし、水着もセシリアだいぶ際どいの剣に見せてたし。…あ、ダメだわ。剣のデート参考にしちやダメね。うん、こりやラウラ

と箒にも報告しとかなくちや。…でも一応、簪のには箒、シャルロットのにはラウラが尾行する予定なのよね…大丈夫かしら？』

お気に入り登録3000人突破記念閑話 織斑千
冬の1日

朝 5:30

「…んっ…、…朝か」

起床。そのまますぐさま朝の支度を終わらせ、中にISスーツを着て、ジャージをその上に着て、ランニングに出かける。

——そう——

「ぎゃあああああ!!」

「やかましいぞ時守!!朝から迷惑だろう!!」

「ちっふー先生の方がうるさいやないです…：ほわあっ?!い、今何投げたんすか!」

「ISの近接ブレードだ!!」

ハーレム王、時守剣との鬼ごっこと言う名のランニングに。

「今日の私は機嫌が良いからな!捕まれば放課後マンツーマンで特訓だ!!どうだ!?嬉しいだろう!」

「それ機嫌いいんすか!?絶対めっちゃ悪いですよん!!どないしたんすか、彼氏にでもフラれ——」

「コロス」

「ヒイイイイイ!!あ、あかん!朝からこんな走ったら…授業寝てまう…」

「寝てもコロス。放課後コロス」

「圧倒的理不尽ありますがどうぞいますう!!」

なんだかんだで楽しむ(?) 千冬であった。

朝の授業

「起きろ布仏」

スパアン

「ふぎゆう!」

「起きろ時守」

ズガアン!

「痛っ!?起きてましたよ!?僕ちゃんと起きてた!」

「下を向くお前が悪い」

「いやいやいやいやなんで!?黒板写そ思ったら下向かなあきませんやん!」

「黙れ。今朝喧嘩を売った貴様が悪い」

「えー…」

ズドン!

「ちゃんと返事をしろ……………よし」

「よ、よしなんですか?…時守くん、気絶してるだけでは…」

「よし、だ。山田くん。さあ授業を…」

「は、はあ…」

※基本的なストレスは全て時守に。一夏くん、良かったですね。

昼食

問題の時間である。

「あー、今日どうしますっ?」

「シヤケ弁出前取ってるわよ」

「さっすがー!」

「……真耶」

「分かってます先輩。…あんなんに、あんなんになってはいけない、と!」

昼食を出前の弁当で済ませようとする教師2人を尻目に、後輩である山田真耶と昼食をとる。(※前の2人は山田先生よりも年上です)

「い、いや…真耶、年上をあんなん呼ばわりは…」

「…!いいんですか先輩。…こ、このままじゃ…」

「…変わらないな」

そう、ここI S学園の教師は普段と職員室での態度が全く違う。千冬はやや弱気に。真耶はやや強気になる。

「ほら!だから私今日頑張って作ってきたんですよ、お弁当!」
『何っ!?!』

真耶の一言に千冬を含む職員室に居た教員のほとんどが立ち上がる。

「ま、真耶が弁当!?!」

「まーやんに先越されたか…」

「まああんな武器持ってたら…ねえ?」

「なんでこつちむくのよ。なに?『あんた貧乳だけど大丈夫?』って聞きたいの?余計なお世話よ」

今、教員達には『弁当を作る教員は彼氏に喜んでもらうため』という風潮が広がりにつつある。

「ふふふ、ISこそ代表候補生で止まりましたが、これは負けませんよ！皆さん！」

「くっ……まーやん地味に女子力高いからな……！」

「唯一と言つていい……私達教員の中での女子……」

「……ねえ千冬……もう、さ……諦めない？」

不意に近くにいる教員に話しかけられ、絶望のどん底に突き落とされそうになる……が……

「ふ、ふふふ……」

「ど、どうしたの？千冬」

「はははははははは！私が諦めるだど！諦めなければ試合は終わらないんだ！故に私にもまだチャンスはある！」

『(あっ………)』

何かを悟るIS学園教員陣だった。

午後の授業

「ぐ、ぐふう……」

「とまあこのように操縦者の力量次第では訓練機で最新の専用機に勝つこともできる。……同時に、教員をあまりからかうなよ？」

『は、はい!!』

国連代表を魔改造打鉄でボコボコにして終了。

放課後

「はははははははは！今日なら個別連続瞬時加速ですら確実に決められるぞー！」

「それ反則や！俺まだダブルしか…!?ちよ、うわっ!!」

「夏の追い込みだああ!!!」

「まだ夏入ってへんわああ!!!」

10分後

「な、なぜに……」

「す、すまなかった。時守……」

絶対防御が働いてしまうまで時守をボコってしまった。

「い、いや…謝られたら逆にきもいっていうか……」

スパアン！

「いった！……あれ？そこまで痛くない……」

「わ、私もな…反省はしているんだが…つい、な」

「いやそのままいったらつい、で人殺しますよ？」

「……」

「なっ!?泣かんといして下さい！ほ、ほら！鼻かんで。ちーんって」

「誰がするか馬鹿者。…まあ、あれだ…礼は言っておく」

「はい？」

「お前がいると学園の雰囲気良くなるからな。…では」

「は、はあ……」

夜

寮長室に戻った千冬はここ最近、あることをしている。

「…ふむ、また今度一夏に聞いてみるか」

料理である。真耶が最近弁当を作っていることもあり、臨海学校の資料にはもう目を通し、やらねばならないことは全て終わらせた。：

「す、少しは頑張ってみるか…」

誰にも見られず、決意を固める千冬だった。

デート 簪編

朝9:00

「お、おまたせ…」

「いんや、今来たところや」

『(テンプレ…だな。ま、まあ…今日はじっくり観察させてもらおうぞ！)』

時守と簪はIS学園1年生寮の玄関で待ち合わせていた。

この時間にした理由は2つ。

1つは簪が自分の心を落ち着けるための時間を作るため。

もう1つは夜遅くまでセシリアと愛し合っていた時守が仮眠をするため(自室で)。

セシリアとやったとなるとここからさらに三連続でやることかほぼ確定しているので『少し、休んだら？』と簪が言い、『じゃ私も少し遅めでいいわよ？剣くんの身体が大事だし』と刀奈が言い、『体調が良くないと楽しくないもんね♪』とシャルロットが言い、仮眠を取らせてもらえるようになったのだ。

「あ、あの…その…えと…」

「い、いや、あ、あのな簪…ほら、いくらこういうの初めてやからって言ったって緊張しとうぎ…」

『(そういう剣も緊張しまくりではないか！なんだ』しとうぎ』とは！なぜそこで噛んだ！『しすぎ』ぐらい普通に言えるだろう！それにその微妙なぎこちなさ！付き合いたてのカップルか貴様ら!!…ああ、付き合いたてか。そう言えば鈴も同じようなことを言っていたな)』

「…ふっ…」

「俺も緊張してんねん…笑わんといってくれ…」

「それに、疲れてる…?」

「ちよつとな。…セシリーやばいわ」

『(おい!!ここまだ寮の玄関だぞ?!しかもタツグトーナメントの件で完全休みになってるから普通に生徒もいるのだぞ?!そんな話をして大丈夫なのか!?)』

「今日は、私。その次がお姉ちゃん、次がシャルロットさん。その次がセシリアさんとシャルロットさんの2人で、次が私とお姉ちゃんの2人。で、最後に全員」

「はえっ!?え、金曜セシリー、土曜簪、日曜カナ、月曜シャル、火曜セシリー&シャル、水曜簪&カナ、木曜全員って…いつ休むんや…」

「…たまに?」

「えっ…、い、いやでもやっぱりそういうのは籍入れてからの方が良いと思うねんけど…」

「せ、籍…：…お、奥さん…：か、…：ふふっ」

『(なぜもつと先に進んでいるのに籍を入れるという事実顔に顔を赤らめるのだ簪!!)』

将来の自分達の姿を想像しながら2人は照れくさそうに話を続ける。それは付き合いたてだがその愛はしっかりとしたもので、結婚を考えている…否、確実としているカップルの雰囲気そのものだった。

「じゃ、じゃあ…：…あの…：」

「ん?…：ああ。はい」

「…：う、うん…：」

先程から時守の右腕を見ながら自身の両手に奇妙な動きをさせていた簪に、時守は腕を差し出す。

対する簪はその腕を少し遠慮がちではあるが、しっかりと抱きしめる。

「じゃ、行こか」

「うん、…よろしくね?」

『(…:…:…:なんだあれは…:わ、私だけではないな。やはりあの二人のやり取りを見ていて…:ああ、やはり居たか。壁パン、床パン、拳句の果てには木に頭突きしだしている者も居るな…。ああ、最近良く見かけるが、皆男友達に振られすぎではないか?そう言えば『ごめん俺拓海と付き合うことになった』と言われた女子が泣いていたな。…確か中学1と2のイケメン同士がカップルになっていた…:だったな。…:わ、私は一夏に貰ってもらえなかったらどうなるんだろうか…:』

「あつ…:」

「ん?どないした?簪」

「ううん…:結構、剣って筋肉…:あるんだなって…:」

「そうか?ワンサマと比べたら細いほうやけど…:」

「何ていうか…:引き締まってるっていうか、無駄が無いっていうか…:とにかく、こっ…:…:シュツとしてる」

「ははっ、さんきゅ」

「ふふっ…:どういたしまして」

『(…:私は…:今日耐えられるだろうか?)』

そして2人は駅へと歩き出す…:



「簪、今日はどうする?」

行くあてもなくプラプラと『レゾナンス』を歩いていた俺たちは、未だ目的地を決めていなかった。

簪は今俺の右手を左手で握っている。さすがにまだ人前で密着するのは恥ずかしいようだ。

「…ゲームとか…アニメとか…ゲーセンとか」

「おー、ゲーセンか。昔ようやったわ」(※数ヶ月前です)

「今のガンシューティングゲームとか…後は…あれ、隣の筐体と協力するやつ」

「あー、あれか。カードとか作ってデータ保存したりするやつ」

「うん」

『(簪が…あそこまでスラスラと話せているだと？まあ私も付き合いがそこまで長い訳ではないが、自分から積極的に話すようなやつではないことぐらいは分かる。…これも剣…か)』

簪と歩いているとゲーセン発見。

しっかしほんま何でもあるな、『レゾナンス』って。

ゲーセンの中に入った俺と簪はとりあえずシューティングゲームやらオンラインやらのあるところに向かった。

「…あ」

「…?どうしたの?」

「いや、中学ん時やり込んだ奴があったからさ」

「…これ?…私も…結構やった」

「お、じゃあ勝負しよーや」

「うん。…負けない」

このシューティングゲーム…まあ良くあるゾンビ打つやつやねんけど、1人プレイと2人プレイが100円で両方いけるっていうのが学生にとってデカすぎる。ハイスコアを取ろうとしたら、1人で2人プレイしつつ、しかも銃を威力クソヘボいやつにしといて、ゾンビを出来る限り少ない弾数で倒す。…っていう仕組みのやつや。

「…あ、…こ、こつち…」

「おー…」

簪はうまい。久しぶりにやったということパターンを忘れたの
だろう、ゾンビの出てくる所を覚えきれていなかったりするが、それ
でもうまい。ヘッドショットもかなり決めている。…でもなあ…

「ふう…。あんまりいかなかった…」

「いいほうちやうか？ほら、観客が集まるぐらいやし」

「えっ…！…あう…」

俺のその言葉に簪が振り向き、大量の観客を見た瞬間、顔を真っ赤
に染め俺に抱きついた。可愛ええ。

さてと…

「んじゃ、簪。今度は俺の番な？」

「えっ…!?う、うん…頑張つて…！」

頑張るといふか何と言うか…

「す、すげえ…なんだよあのリロードの速さ…」

「オールヘッドショットワンパンとか…やり込み過ぎだろ…」

背中から聞こえてくる声を無視してひたすらにトリガーを引き続
ける。

そう、このゲームは俺が中学時代、最もやり込んだゲームの一つな
のだ。『どうせならこのゲームの全国ランキング上から10、制覇し
ようや！』という健くんのアホな発言から始まり、『飽きた』という健
くんの一言でブーム終わったのだ…が、そのやっていた間はそれはも
うやり込んだ。頭の位置、タイミングなど…まあつまり。

「ふう…」

「す、すごい…」

全国ランキングの上位層には俺の友達の名前しかない。——しかも、

「…これって…」

「じ、ジト目で見やんといってくれ…」

ランキングには

1—TAKERU

2—KENCHAN

3—TAKERU

4—TAKERU

5—TAKERU

6—KENCHAN

7—RIKO

8—RIKO

9—TAKERU

10—KENCHAN

といったふうに3人の名前しかない。…今回6位か…

「RIKOって…あの?…」

「おう、リコペンや。…あいつISでもこの技術使うつもりっぽいで

「…私も…ゲームとかアニメから、ヒント貰ってる時がある…」

「マジで?じゃあ今度一緒に見よや」

「…!うん…!あ、その…」

「おけ、出よか」

簪が周りに人が多くなってきたことに、居心地が悪くなったのだろう。ちよつと嫌そうな顔をしてたのでゲーセンを出ることにした。

せつかくのデートやねん。笑って楽しい方がええに決まってるしな！

◇

昼食をとった後、俺たちはある店にいた。

「あう…」

「いや連れてきたん簪やんな」

今の状況を整理しよう。

辺りを見回すと、水着、水着、水着………そう。

「う、うん……よし……わ、私に似合う………水着、選んで……？」

セシリー同様、臨海学校の時の水着を買いに来たのだ。

小さく拳を握り、少し照れながら、恥ずかしそうに上目遣いで聞いてくる簪。

Q. 断れますか

A. 無理です。

「任せい。ちゃんと似合うの選んだるわ」

とは言うもの——

「は、恥ずかしい……」

際どすぎる水着だったり…

「…むう…」

簪の年齢にそぐわない水着だったり…

「……」

のほんみたいな着ぐるみタイプの水着だったり…

「び、ビキニ……。…いいなあ…本音…」

簪のイメージとは合わなさそうなビキニの水着だったり…

まあぶつちやけると

「全部似合ってるねんなあ…」

「うう…」

『(途中から私には無理だと思って離れていたらいつの間に水着売り場にいたのだ!というより持つてる水着がおかしいだろう!なんだ!紐ではないか!幼稚園児が着るやつではないか!そ、それは水着なのか…?び、ビキニだ!?!…あ、あの白いビキニいいな…)』

そう、全部似合すぎて困るのだ。うーん…どないしましょ。簪は顔赤くしてるし…。

と、悩んでいたら簪が更に顔を赤くして爆弾を投下した。

「じゃ、じゃあ…剣が、…その、私に…着てほしい水着を…」

「」

』

What's?

「ちよ、ちよつとぐらいなら……えつちな水着でも……」

「待て落ち着け更識簪、君はそんなことを言う子じゃない」

『(い、いいいいいいいきなり何を言い出すのだ簪は!?)』

ビビったわ。

「ほら、な?ちゃんと決めるから」

「う、うん♪」

『(く、くそう……あんな発言をした後に普通にイチャイチャしておって……羨ましい!羨まけしからんなどという言葉は存在しない!羨ましい!!私も一夏とああいふことしたい!』

『ほら、箒……この水着、箒に似合うと思うぜ』

『い、一夏!そんな際どいもの……!』

『箒に、着てほしいんだ……』

『一夏……』

みたいな!こんなやり取りを!』

あんまり地味すぎるのもアレやし……その……露出が激しすぎるのもアレやし……ん?」

「おっ」

「えっ」

『(む?)(?)』

偶然見つけた淡い水色のワンピース型の水着。

「これがいい」

「……?……この、水色の……水着?」

「おう」

簪の魅力を引き出せるような水色の水着を買う。…うん、これや。

◇

「んー、っと…今日は楽しかったな」

「…うん」

あの後、俺たちはゲームやらアニメのブルーレイやらを漁り、再びゲーセンで遊んだりなど、なんとまあデートっぽくないデートを楽しんだ。

そして駅につき、モノレールを待っていた時、簪が俺を止めた。

「…剣」

「ん？」

「何か…変わった？…その…スッキリしたっていうか…」

「…ああ…確かに変わった。…セシリーに言われたこと。周りを見て改めて感じたこと。分かったこと。色々あって…な」

単純に言えば、深く。そしてより強くなったのだ。何が、とは言わない。

「簪。…俺は、お前を愛してる。だから、これからも、今日みたいにずっと隣に居てくれ…」

「うん…！私も…愛してる」

『（な、なななななな何を言い出すのだあの2人は!?!）』

「やから…離れんといってくれ…」

「うん…大丈夫。離れない。…だから…剣も…」

「ああ、離れへん。ずっと一緒や。…でも、時には無茶もする。…やか

ら

「うん…、その時は、信じて待ってる。お姉ちゃんとシャルロットさんとセシリアさんと私の四人で」

「…必ず…戻ってくるから…な？…やから、俺がいない時は、これを俺と思ってくれ」

簪にも、セシリーと同じくネックレス付きの指輪を渡す。

「こ、これって…!」

「まだ婚約指輪とかちやうねんけど…その、証、として持ってて欲しい」

「うん…。大事にするね」

簪にそのネックレスを首を付けると、簪は右手で指輪をキュツと握った。

「んじゃ、帰ろか」

「…うん」

そして反対の左手で俺の右手をしつかりと握った。

モノレールが来た時、俺と簪の距離はより縮まっていた。



『こ、これは想像以上だな…。告白の場所がムードもへったくれもないが、まあ2人とももう相思相愛なことはお互い知っているんだし、別にそんなものはどうでもいいのか？…いや、普通はそうはいかない

…のか？に、にしてもだな！一夏と…あのようなこと…は、恥ずかしいがやっではみたい…な。むう…まだまだ研究せねばなるまいな…』

デート 刀奈編

「全くもう…」

私、更識刀奈はIS学園の最寄り駅前で剣くんを待っていた。

私がお金を待ち合わせ場所に設定したのは理由がある。

1つは尾行している人物がいないか確認するため。もちろん、親しい人物には尾行しないように、と釘を刺しておいたけど…みんな物分りが良くて助かったわ。薫子ちゃん…顔青くしてたけどどうしたのかしらね。

もう一つは今日剣くんとIS学園で少しでも一緒に居ると我慢できなくなるから。

昨日、一昨日と剣くんはセシリアちゃん、簪ちゃんといちやいちゃしていた。

私の部屋で。

そう、私の部屋で。剣くんの部屋は私の部屋。同室。大事なことから4回ぐらい言っておくわ。

セシリアちゃんと簪ちゃん、2人とも剣くんと同じベッドで寝ながら愛を囁きあっていたけど…隣のベッドで私が寝てるの忘れてないかしら？

そりゃあシャルロットちゃんも合わせて四人で将来剣くんのお嫁さんになって、剣くんを囲う予定だけど…。流石に酷いと思うの、私がお金に行ってもキスとか甘噛みとかソフトタッチとかで終わるのって。

セシリアちゃんと簪ちゃんには激しくしたのに私にはしてくれな

いなんて……。

別に愛してくれていない、なんてことは思っていない。むしろ愛されてると思う。セシリアちゃんとのデートが終わってから、剣くんの雰囲気……というか顔がまた変わった。

最初に会ったときの『目標を見つけた顔』。

そして今は『守るもの、そして居場所を見つけた顔』。

前者は何かを追い求めるような、獣のような雰囲気だった……まあ一緒に特訓してた私や織斑先生ぐらいしか知らないでしょうけど。

後者は静かな闘志を秘めた、それこそ守る者の雰囲気。約2回の臨死体験を経て、周りの自分に対する評価や向けられている目、そして自分の想いに気がついたから……だと思おう。

さらつと言ったけど……剣くん無人機の時とVTシステムの時と……2回ぐらい死にかけてるのよね……。自爆の時は衝撃でISの絶対防壁が普通に働いてしまうレベルのダメージ。VTシステムの時は肉体への単純なダメージが重なりすぎたから。……よく生きて戻ってきてくれたわ。

んんっ！話が反れたわね。

昨日、一昨日は夜、私には構ってくれなかったけど、今日は私の番

♪

だから、だからものすごく楽しみにしてたの。

……でも……どうしてかしらね？

どうしてこういう時ってナンパされるのかしら。

「なあなあお姉ちゃん、俺らと遊ぼうや」

嫌よ。

「そっだよ？ため息ばっかだと幸せ逃げるよ？」

少なくとも少し前まではあれこれ妄想してたりして幸せだったんだけど。

「ほら、俺たちがイイことしてあげるからさ」
もう4人まとめてしてもらいました!!

はあ：剣くん、遅いなあ…。こんなチンピラ、軽くやっちやおうかしら…

◇

「ん？」

待ち合わせ場所である駅前に着いたら刀奈がアホみたいな3人組に絡まれてた。

「う、……浮気…？嘘やろ…まだ一週間も経ってへんぞ…」

4股してる奴が言っているいいセリフちゃうと思うけど……なんかめっちゃ腹立ってきた。

今日もデートやし、しかも簪と夜遅くまでいちゃいちゃしてたのに朝ちっふー先生に『訓練だ』とか言われて叩き起こされたからな。木刀フルパワーで……よし、ストレス発散や。よくよくみたらカナ嫌そうな顔してるし。多分俺の嫁に手を出そうとする愚か者やな。

「刀奈……！」

とりあえず……走ってからの…

「…刀奈から……！」

2mぐらい手前でジャンプして…

「離れろやボケエ!!」

ドロップキックのお見舞いや。

◇

「離れろやボケエ!!」

「ぐふう!?!」

チンピラー号が身体を横に『くの字』に曲げて吹き飛んだ。吹き飛ばしたのは私の彼氏であり、将来の旦那さんである…彼だ。

「剣くん!」

「悪い。ちよいちっふー先生に絡まれてた」

あー、確かにこんなチンピラ達よりも厄介よね。あの人は。

「な、…なんだてめえ!!いきなり何しやがる!!」

「そりゃこつちのセリフじゃ。…おい…人の彼女に何してくれとんねんお前ら」

「ひっ…」

あ、『激オコスティックファイナリアリテイ剣くんドリーム』だ。

ドスの効いた声で発せられる関西弁。これは剣くんが本当にキレた状態。最近は……ミルクだと思って買ったチョコがビターだった時になってたわね。あの時は確か…『工場燃やしたるかカス』…だったかしら?!

後は遊ぶ時に一夏君が持ってきたのが『ポテチうすしお味』じゃなくて『ポテチコンソメパンチ味』だった時ね。あの時は…『目ん玉に塩プチ込むぞごら』だったわね。想像した一夏くと鈴音ちゃんが震

えてたわ。

「ぶっ殺すぞごら…」

「ふ、ふざけんなよてめえ！こっちは3人なんだ！やっちまえ!!」

「あ？死なすぞゴミが、口開くな。臭いんじや」

うわあ…だいぶ織斑先生にしごかれたのね、剣くん。声と顔からして不機嫌そのものだし…とりあえず…チンピラ三人衆、ご愁傷様。

☆

「あ、もしもし警察？うん、そうそう。IS学園の最寄り駅前な？はいはい、んじやよろしくー。はよ来てな？俺今からデートするから」

「づ…づええよ(づいづ)…」

「なんなんだよ…ボゴボゴにざれだじゃねえが…」

「い、いでえ…」

チンピラトリオは一瞬で鎮圧された。…まあ普段織斑先生と組み手してるんだし…ねえ？

「おい」

「二は、はいい!!」

「二度と俺の前に面出すなよ」

「二分かりましたあ!!」

「じゃあじつとしとけ。…動いたら…な？」

「二はい！分かりました!!」

—その後チンピラトリオは警察に連行された。…剣くんどこに麻縄なんて持ってたんだろう？拡張領域に入れてたのかしら？

「んじや、行こか」

「うん、今日はよろしくね♪」

「……おう……」

剣くんの腕に抱きついて、その力を強める。

んふふく、焦ってるわね?…まあこういう反応が見たくて今日は結構露出多めの服装にしたんだし。大成功ってどこかしら。

最近剣くんに良いようにされてきたから、今日ぐらいは…ね?

「む、なによその反応。…不満?」

「い、いや…そういうことやなくてやな…。目のやり場に困るっっていうか何ていうか…」

「もう。もつといろいろ見てるんだし、今更でしょ?それに、夏には挨拶に来てもらう予定なんだから」

「……………あ?」

「簪ちゃんと私と剣くんの3人で、よ?」

「…マジ?」

「マジよ」

……お父さん…めちやくちや荒れてたけど…

「…じやあフランスとイギリスにも行かなあかな」

「そうなるわね。…ま、今は…ね?」

「ああ」

そう、今は…ううん、今日は私だけを見てくれる日。



「あつっ…」
「……………」

なんで日曜の朝やのに電車まあまあ混んでんねん。ほら、カナも汗かいて服が…ふ、服が……ぴつたりと…。あ、あかん…その…身体のラインが結構はつきりと出てるし…自然と見てしまう。

「…なに？ 剣くん」

「え、い、いや？ 別になんもないけど…、どないした？ ちよつと機嫌悪そうやけど……………」

「…ふんっ」

えっ…いやマジで俺何した？…あ。

「わ、悪い…さつきからジロジロ…」

「剣くんならいいの」

『なら』？……………あー、なるほど。

俺は隣に立つカナの耳元に口を近づけ、そつと囁く。

「…関係を周りに見せつけたい…つてことか？」

あ、顔が赤くなった。ふふふ…もつと責めてやろう。

「せやな…俺もカナを取られたくないし…何より周りの男どもの視線が気に入らん」

おー、また赤くなった。可愛いなあ」

「こ、声に出てるわよ剣くん！」

「事実を口にして何が悪いんや〜？」

「っ！もうっ！ほんとに知らない！」

「……………ほんまに？」

なんか今のカナはめちやくちやいじめたい衝動に駆られる。…俺
Sちやう…の…、ちやうよな？

「ごめんて…ほら、今日は…刀奈だけやろ？」

ギョツ

その言葉に反応したのか、刀奈は俺の胸元に顔を埋めるように抱き
ついてきた。

「…馬鹿。来るの遅いし、周りの人達がジロジロ見ても何の反応もな
いんだもん…」

「…じゃ、見せつけたるか」

優しく刀奈を抱きしめる。すると刀奈は俺の胸で顔をグリグリと
擦り付ける。

「えへへ、剣くんの匂い…」

「刀奈も…柔らかいな」

「むっ…剣くんのえっち」

「うぐっ…ま、まあソコもあるけど…なんか、全身が…な？」

「ふふっ、じゃあもつと…んっ」

ギョツ

—そんなこんなで俺たちの電車移動は終始お互い抱きしめあって
終わった。

◇

「涼しい…」

『レゾナンス』に入った俺たちはとりあえずどこの店にも入らず、ベンチに腰掛けて涼んでいた。

「…涼んだらどこ行く？」

「うーん……ゲーセンに行ってみたい…かな？」

「ははっ、そっかそっか」

「?どうしたの？」

「いやあ…姉妹揃って行きたいとこ一緒やとは思わんかったわ」

「簪ちゃんも？」

「おう、なかなか楽しかったで。…そのあとは？」

「…新しい水着が見たい…のと、後はまたそこから色々…」

「ははは！そこまで一緒やとはな」

姉妹…というより双子レベルやろこれ。

「まあ私としては簪ちゃんと考えが一緒、ってことで嬉しいんだけど…」

「そんな顔すんなよ…別に俺はええで？ゲーセンにも色んな筐体あるし」

「そう?…剣くんがいいなら…」

そう言うとかナは右手をもじもじさせながら俺の方に差し出した。…こういう所も可愛いなあ…。ってかまた簪と似てるし。

「エスコート、させてもらおうわ」

俺は彼女の右手をしっかりと握った。



「ふっふーん」

「まさかあそこでサンダー出るとは…」

ゲーセンを出た俺らは昼食をとるためにレストランに入っていた。

「初めてやったけど面白かったわ！あのカートゲーム！」

「喜んでもらえて何より、や。また後で寄るか。UFOキャッチャーとかどうや？」

「あつ！やつてみたいわ！」

「りょーかい」

こういう少女チックな所も、刀奈の魅力の1つ…やな。

そんなことを考えていると対面に座る刀奈がフォークにスパゲティを絡ませてこちらに向けていた。

「はい、あーん」

「あーん」

美味し。…そういやスパゲティとパスタって何がちやうんやろ。うちの定食屋じゃ出してなかったしな。よう分からんわ。

「んじや、はい、あーん」

「あーん」

俺も自分のドリアを刀奈にあげる。

俺と嫁たち四人の食事は大体いつもこんなかんじや。

「お待たせ剣くん」

「お、来たか。全然待つてへんけど…なんで一人で？」

昼食を終えた後、俺は水着売り場の外でカナを待つていた。

「こういうのつて、本番のお楽しみにしておいた方がいいじゃない？」

「まあ…そういうのも一理ある…か」

「そゝほら、行きましょ？」

そういうと今までとは違い、カナが俺の腕を引き、目的地であるゲーセンへと向かった。



「ふう、大量大量♪」

「ぬいぐるみとか結構取ったな」

「これモフモフしてて気持ちいいんだもん、いっぱい取っちゃった」

UFOキャッチャーでぬいぐるみやクッションやらを取った俺たちは、少し早めだが、IS学園に帰るために『レゾナンス』を出ていた。

「しっかしまあ…あんだけ使ってもまだ有り余ってるとはな…」

「ま、まあ…皆家が家だから…ね？」

更識家、オルコット家、デュノア家、そして国連代表である俺。……本気出したら企業からIS買えるんちゃう……？……あ。

「そーいや俺の名字ってどないなるん？」

「……あー……」

カナは返事を探しているのか微妙な顔をしている。

シャルはそんなこだわらんとと思うけど……セシリーとカナと簪は、ほら、跡継ぎとかあるやん？

「更識・オルコット・剣？」

「どこの国の人よ……。まあそこまで細かく気にしなくてもいいんじゃない？」

「……そーやな。愛に名前とか関係ない……か」

「……うん♪」

『愛』という俺の言葉にカナは小さく反応し、俺の右腕を抱きしめている力をほんの少しだけ強めた。



「んふふ、ねえ剣くん。もう一回言っつて？」

「……なんでここで」

電車なうやぞ？

「いいじゃない、減るもんじゃないし」

「いや、多分何かが減るで？……それに、そういうのは部屋に戻ってからの方がええやろ？」

「そーね……ふふっ」

隣に座りながら、刀奈は俺の肩に頭を乗せた。

俺の隣に座る刀奈は、終始上機嫌だった。

◇

「うふふ」

「…」

ああ…ここまで…ここまでやりにくい告白があるだろうか。

今から何を言われるか、そしてされるか分かっている彼女…まあ力
ナが返す言葉も大体分かってんねんけど…

「さ、剣くん」

「ああ…」

ここまでムードもへつたくれも無い告白とかあるか？

むむむ…このままなんも無いままっていうのもなんか嫌やし。…
今のこの余裕綽々なカナをちよつとびつくりさせたい…

「どうしたの？剣くん、愛の告白、してくれるんでしょ？」

「し、したろやないかい…」

出来るかアホ!!

よ、よし。ここでもつかい状況整理や。

晩飯は？食った。風呂は？入った。カーテンは？閉めた。電気は
？付けてある。…付けてある…これや!!

「んじや」

「……えっ!？」

パチンツ

部屋の電気を一番暗い豆球にする。…まあアレや。あのぼんやり
明るいつて感じの明るさ。

ベッドに腰掛けている刀奈の隣に座り、両肩を持ち、こちらを向か
せる。

「刀奈…」

「剣くん…」

お互いの顔が近づき、唇が重なりそうな雰囲気だが、ここはしない。
そう、あえてね。

「ほら、ムードも…あんまり作れへんかったから…」

「わ、私も…剣くんと一緒に居られてちよつとテンション上がっ
ちやったから…」

えへへ、と笑うカナ。…そうか、やからか。やから今日はやたらと
積極的やったんか…

「じゃあこれからも一緒に居てくれるか？」

「…!うんっ!」

彼女の首に指輪付きのネックレスを付ける。

「ん。…ふふ、ねえ剣くん？」

「ん？」

「…必ず、帰ってきてね？」

薄暗い部屋、そして告白したこのタイミングで色々とボカしたこの刀奈の発言…恐らく、これからIS学園で俺やワンサマのせいである事件が起こる。そして俺はその事件に間違いなく首を突っ込むだろう。…愛する人達が、ここにいるのだから、この場所は守る。俺の帰ってくる場所だから。そう…だからこそ。

「ああ、約束する。…いや、お前たち4人に誓う」

「言葉だけじゃ…足りないわ」

物寂しそうにこちらを見る刀奈に、もう俺の理性は半分程無くなったのだろう。彼女の唇を乱暴に奪い、口の中を互いに蹂躪する。

「んくっ…ちゅ、んむう…んっ…ちゅぶ…」

どちらかと言うと刀奈の方が積極的、に。

「…っふは…」

「はあ…はあ…」

——そして

「剣くん…あのね…」

——俺の残り半分の理性は

「初めては…私たちが…その……した、から…」

——刀奈の発言で

「今日は、剣くんが好きに…シて?…もつと、深く、刻んで?」

——いとも簡単に崩壊した。

デート シャルロット編

「ふんふんふふーん♪」

「む?どうしたのだ?シャルロット」

僕、シャルロット・デュノアは今までの人生で最高に舞い上がっている。…え?舞い上がってる、なんて自分では言わないんじゃないか、って?いいの、自分でも分かってるんだし。かなり早いけど楽しみすぎて起きちやうぐらいにはね?

まあ舞い上がってるのは同室になったラウラとの関係が良好っていうのもあると思うけど…。

さてと、早速ラウラにも自慢しよう。

「ほら、前に言ったたでしょ?今日は剣とデートして1日過ごすんだ」

「何っ!?師匠とか!?わ、私も連れていけ!」

「ダメ、ほら、ラウラにはちゃんとお嫁さんがいるでしょ?」

「おお!そうだった!全く:私の周りには魅力的な男ばかりだから困るのだ…」

僕がそう言うのとラウラは顔を赤くして口をもぐもぐと動かした。

いや:ラウラ?言ってることちよつとおかしいからね?まず嫁の存在を忘れかけてるって…。というよりまず嫁って…

「なるほど、だからシャルロットは気合いを入れておしやれをしているのか」

「うん、…ラウラ…は…?」

「ん?おしやれなど必要ないだろう。一夏は私の嫁だ。私は一夏の夫だ。どんな姿でも互いに受け止める、というのが夫婦のあるべき姿だろう?」

ま、まあ確かに剣なら受け止めちゃうかもしれないけど…一夏は…、というかまず…

「嫌われても知らないよ?」

「なっ!? そ、それは困る!」

「じゃあまず服を着よっか」

流石に裸はまずいと思うなあ。

「夜這いをするのに服など要らないだろう?」

「まず夜這いをすること自体間違ってるし、今、朝だからね?」

「ならば朝這いだ」

「えー……」

朝這いって…確かに一夏は1人部屋だから出来ないこともないけど…。僕? しないよ? だって剣が僕たち皆を愛してくれてるって知ってるもん。

「とにかく一夏の部屋に行くなら早い方がいいよ? 箒と鈴もたまに朝行ってるみたいだし」

「なんだと!? あいつらも私と同じ考えを!? …む? では師匠はどのようなだ?」

「毎朝織斑先生に木刀で叩き起されてるよ…」

「教官…。し、しかしシャルロット達はいいのか? 師匠が教官と毎朝一緒など…」

「剣は織斑先生をそういう対象として見てないし、織斑先生も同じだって言ってたからね。それに、朝の訓練だって相当キツそうだからそんな考えをしてる暇もないんじゃないかな」

毎朝ボコボコになって食堂に来る剣に合掌してからご飯を食べる

のが最近の1年生寮での習慣らしい。

も、もちろん僕達は心配してるよ!?岸原さんみたいに『ざまアーマン』とか言ってるよ!?…にしても『ざまアーマン』って…『ざまあ』と『アーマン』を組み合わせたって言ってたけど…そんなこと言うから剣に仕返しされるんだと思うんだ。

んんっ!話がそれたね。

なんでも『魔改造打鉄ver.2』なるものを教員と2、3年生の先輩達が合同で作ったらしい。乗りこなせるのはこの学園で織斑先生か楯無さん、後、もしかしたら代表候補生も…ぐらいのオーバースペックらしい。…遠距離武装には近接ブレードが入っててそれを投げて戦うって言ってたけど…確かにそんなことできるの織斑先生ぐらいしかいないよね。

「これでよし」

「んー、まあ確かに学園の中だから制服でもいいとは思うけど…あつ」

「そうだシャルロット。お前のようにおしやれするのもいいかもしれない。だが!これから私がするのは朝這いだ!動きにくい服装など要らん!では行ってくるぞ!!」

I S学園の制服を持って、ラウラは勢いよくドアを開け、出ていった。

じゃ、僕ももうそろそろ仕上げに入ろうかな。…確か…『化粧なんて無くても十分可愛い』って言ってくれたっけ。あうう…自分で思い出しておいて自分で顔が熱くなってるのが分かっちゃうよ…。よ、よし!最終チェックしよう!



「へえ…」

「んむう……すう……すう……」

シャルロットとのデートを目前に控えた時守の自室で、彼はディスプレイを開き、ニュースを読んでいた。

一見、何の問題も無いように見えるが…

「こりゃあ…なんとまあ…」

「けんくん……………えへ……………」

この部屋の状況と格好が問題である。

裸でベッドに寝転びながら自らの真上に展開されたディスプレイを操作する時守。

そして同じく裸で、時守の身体に抱きつき無意識に時守の身体に顔を押し付けながら幸せそうに笑顔を浮かべ、寝言を言っている刀奈。

そんな2人の身体の腹部から下を覆っているたった1枚の毛布。

「なるほどねえ…」

「むにゃ…」

そして互いの上半身のいたる所に見られるキスマーク。それは時守の身体にも、刀奈の身体にも大量にあった。

「よし…起こすか。おーい刀奈ー、かーたーなー」

「んう……………んっ……………んっ…」

「おはよ」

「…おはよう…けんくん…」

時守は刀奈に微笑みかける。対する刀奈も想い人の腕の中で目覚めたこともあり、ここ最近で見たこともないぐらいに上機嫌だった。

「俺シャワー浴びて来るけど…」

「や。…おはようのチュー」

「どつちから？」

「…けんくんから…。…んっ…」

まだ寝ぼけており、甘えてくる刀奈に軽くキスをすると、下着とタオルを手に、時守はシャワーを浴びに行く。…そして―

「…ん？…っはーわ、私…寝ぼけてた…」

シャワーを浴び終わり、戻ってきた時に毛布にくるまって真つ赤な顔でベッドの上で悶える刀奈と数回のやり取りをした後、彼は四人目の嫁の元へと向かった。



「おまたせー！」

「っ！お、おう…！」

「？どうしたの？」

『（ああは言ったがすまないな、シャルロット。今は嫁も大事だが、将来のことを考えて婚約しているお前と師匠のデートを参考にさせてもらうぞ）』

刀奈と別れた後、時守はシャルロットの部屋の前で彼女の準備が終わるのを待っていた。

シャルロットが指定してきた待ち合わせ場所は自室の前。

『できるだけ長く一緒にいたいな』という願望から、この場所になったのだ。

そして尾行するラウラ。彼女は一旦朝這いをするため、早朝、衣服を身に付けずに、手に持って部屋を出た。…が、これは中国代表候補生の指示。

『すぐあたしの部屋に来なさい。あんたの服、この前預かったでしょ？それと持ってきたのを着て尾行するのよ。シャルロットって意外

と用心深そうだし、適任はラウラ！あんたよ！』

ということで、誰にも見つからないように鈴の部屋に到着。制服を着て、時守とシャルロットの様子を確認しているのだ。

以前対立があったラウラと鈴だったが、時守のことを『師匠』と尊敬し、よく話すようになってからすぐに仲直りした。…具体的には

『ほら、ちゃんと仲直りしなさい!!ええ加減にせえへんと怒るで!』

『なんであたしが…、ってか何よそのキャラ…』

『すまなかった、嵐。…あの時の私は…どうかしていた』

『よーしよし、ちゃんと言えたな、ラウラ』

『う、うむ！頑張ったぞ師匠!!』

『おう、よーできてたで。…で?』

『で?って何よ!…ああもう!!分かったわよ!許し——』

『何様やねんお前』

『てあげようとしてたじゃない!』

『む。うるさいぞ嵐。ちゃんと師匠の話は聞かないとダメだぞ?』

『あなたのその信頼はどっから来てんのよ…。…鈴よ』

『…え?』

『だから、嵐じゃなくて、鈴。あたしもラウラって呼ぶから。よろしくね』

『っ！ああ、よろしく、鈴』

といったように、だ。

そしてラウラはすぐに他の生徒とも仲良くなった。…まあ8割ほど時守のおかげなのだが…。

ラウラが直に何かをしてしまった生徒にはしっかりと謝り、ラウラはIS学園に溶け込めるようになった。

そして、今にいたる。

『(さあ…どうでる師匠!!)』

「いや、可愛かったから…」

「えっ!?も、もう…」

『(ど、ドストレートだと!?ぐっ…こ、これは…嫁には期待…できるのか…?) こちらボーデヴィツヒ。会って5秒で可愛いと褒めたぞ』

「照れてるところも可愛いなあ、シャルは」

「む、むう〜!」

『……砂糖を精製してきても良いか?』

IS学園1年生寮の廊下で当たり前のようにいちやいちやする2人。

無線で鈴に連絡を取っているラウラだけでなく、他の生徒もそのやり取りに目が釘付けになっている。

シャルロットが怒ったように頬を膨らませてそっぽを向くも、その様子をまたも『可愛らしい』と言う時守に彼女はとある要求をする。

「ん」

「ん?…手?」

「そ、手を繋いでくれたら許してあげる」

「?繋ぐだけでいいん?」

「え?」

「カナとか抱きついて来たけど…」

「…え、えと…じゃ、じゃあ…いい?」

「おう」

しかしそこを難なく突破するどころか、反撃してさらに好意を抱かせるのが時守剣という男である。

シャルロットが手を差し出したのに対し、時守は自らの腕を差し出し、シャルロットに抱きつかせる。

この時、すでにシャルロットの脳内にはただ好きな人の腕を抱きしめ、密着できていることに対する幸せしかなかった。

「んじや行こか」

「うん！」

『(まだ学園を出ていないのだぞ…?)』



「♪」

「どないした？だいぶ機嫌良さそうやけど」

「剣と一緒だからだよ？」

「そっか。…俺もや」

『(ロケットランチャーはどこだ!!あいつら…い、いや！シャルロットだ！シャルロットのみにぶち込んでやる!!この際手榴弾でもいい！)』

俺は今日、四日連続となるレゾナンスへと来ていた。…なんでも皆人生初のデートらしくて『どうせなら皆同じところで』ということになったらしい。『一体感』が欲しかったらしいねん。

「あ、そうだ。剣はもう水着買ったの？」

「おう、オーダーメイドの298や」

「2980円？」

「298000円」

『(どんな水着だ!?)』

「ぴっちりしてないトランクスタイプのやつやけど素材はISスーツと同じやから銃で撃たれても炎で焼かれても大丈夫やし、破れない、汚れない、傷つかないっていう最強の水着やねん。…シャルのも頼んだるか？」

「あ、あはは…僕は剣にここで選んでほしいな」

そしてまた四日連続となる水着売り場に。…男が女性もんの水着

売り場に四日連続って…1人だけやったらちよつとやばい奴みたいに見えるな。…あれ？

「そーいやなんで皆水着買うん？…毎年買い換えんの？」

「なんで、って…来週から臨海学校だからだと思っただけ…剣？」

「…聞いてへんかった…」

「じゃあ臨海学校明けに期末テストがあるのは？」

「聞いてへんかったわ…さんきゅ、シャル。助かったわ」

「もうそんなに時間無いけど…間に合うの？」

「間に合わせたる」

『(うむ、流石は師匠だな)』

補習とか俺の場合マジで洒落にならんからな…予定が狂いまくつたら…俺死ぬわ…。にしてもやな

「臨海学校とか普通に忘れてたわ…報告と夏休みが…」

「それと、挨拶も…ね？」

「…おう」

「ふふつ。じゃ、僕の水着、選んでね？」

「…なんかもう慣れたわ…どんななんつても知らんで？」

『(ど、どんなん?!どんなんとはどんな物だ!?)』



「ね、どっちが似合う？」

シャルロットが見せてきたのはオレンジの水着とイエローの水着。デザインの違いを簡単に述べるとするなら、オレンジの方が地味で、イエローの方が少しエロ…いや、大胆である。

「……………オレンジ」

「イエローの方がだね？」

「……………オレンジ」

「もうっ、正直に言っよ」

ぶーっ、と頬を膨らませるシャルロット。そして、意地でも選択を変えようとする時守。

だがシャルロットはそんな時守の様子から、彼にも何か思うところがあるのでは、と思っていた。

「…剣？どうしたの？」

「…シャルのそんな水着姿を他の奴らに見られんのが嫌や」

予想もしていなかった彼の返答に、素直だなあ、と心の中で思いながら、次の言葉を発する。

「大丈夫、…僕はもう、剣以外にはなびかないから」

「…じゃあイエローの方で」

「はーいっ」

彼の本音を聞けて、シャルロットはご機嫌でレジへと向かう。

——あることを聞かねば、と、そう思いながら…



午前中に水着を選び終わり、昼食をとった後、特にこれといったことはせず、ただぶらぶらと歩き、いいと思った物を買ひ、時間を潰していた俺たちはIS学園近くの臨海公園に来ていた。

…日はもう落ちかけていて、辺りはオレンジに染まっていた。

「ねえ剣？……………っ…聞いておきたいことがあるんだ」

そんな雰囲気からなのか、シャルは俺に聞いてきた。…口調から察するに軽い話題では無いのだろう。

「ん？なんや？」

「あのね…僕は…剣が好き。…でもね…その…楯無さんや簪、セシリアと違ってあんまり会ってから長くないし…その…僕でいいのかなって…」

彼女からしたら至極単純で、ずっと考えていた事なのだろう。『会って間もない自分が、結ばれてもいいのだろうか』…と。…はあ

「いいに決まってるやろ。…第一、俺は付き合いの長さで人を選ばんわ」

「…えっ？」

「ちっふー先生みたいに会った瞬間から仲良く話せる人もおるけど…中学ん時はあんまり喋らんくてどう絡んだらええか分からん奴とか喧嘩しっぱなしの奴とかもおるしな。…それに」

「？」
「…もうシャルは自分の好きなようにしたらええねん。…俺も、シャルを見てほっとけへんかった、隣にいてほしって思えたから、告白してん」

「剣…ほんとに…、ほんとにいいの？」

ベンチの隣に座る彼女の目には、少しだけ涙が浮かんでいた。

「ああ、シャルが、シャル達やないと嫌や。…やから、これ」

「ネックレス…？」

「流石に婚約指輪は早すぎる、って思ってな。…これを付けててくれるか？…いつか、本物は渡すから…」

「うんっ！」

彼女にネックレスを渡すと、大事そうにそれを握った。

「…でもあれだね」

「ん？」

「ラファールの待機状態もネックレスみたいにしてるから…」

「あっ…ほんまや。どうする?」

「もちろん付けるよ?両方とも」

『(むうう…羨ましい、羨ましいぞシャルロット!!私が少し和菓子屋の兎と戯れている内にどこまで進んでいるのだ!!)』

「…じゃ、じゃあ剣、その…えと…そろそろ…」

「分かった。…楽しみにしとけよ?」

「っ!」

ポツとシャルの顔が赤くなる。ははは、ギザかわゆす。

「も、もう!剣っ!」

「ははっ、じゃ、帰るか」

「……………うん…」

その後めちやくちや…というのは今更過ぎるだろう。

臨海学校―開始

「海、見えたー！！！」

バスがトンネルを抜け、その先に見えた光景に、数人の女子が声を上げたみたいや。

今日は待ちに待った臨海学校初日、天気も快晴、波も穏やか。『絶好の臨海学校日和ですねー』というやつだが何かしらのフラグが立ちそうなのでやめとく。

ああ、さつき『みたいや』って言ったのはな…

「――く、ウルトラソウツ!!」

『へエイ!!』

バス中絶賛カラオケ中で周りが何言ってるか全く聞こえへんからや。

いやー、改めて感じたけどさ。1組ノリ良すぎな。

「ちっふー先生はー?」

「そういうものはお前達だけでやれ」

「えっ…」

「……山田くん…君は教師という立場なんだぞ…?何故そんな残念そうな顔をするんだ」

山田先生もめっちゃ歌いたそうにしていますやーん。……あー、なるほど。

「恥ずかしいんすね?ちっふー先生」

「っ！ち、違う！恥ずかしくなんかない!!」

「じゃあ下手なんすか?」

「下手じゃない!あ、ああ下手じゃないとも。ほらお前達、もう目的地に着くぞ?早く自分の席に座れ。もう時間だ。時守、マイクを渡せ」
「えー」

「……2度は言わんぞ……沈められたいのか?」

「…帰りは…?」

「映画だ。…まあ疲れている者は寝てもいいがな。ほら、冗談抜きにもう着く」

「へーい」

「…んあ?ここって…ま、まさか…な」

目的地の旅館に着いたらしく、1組の面々がバスを降りる。もちろん俺も降り、整列したのだが…。

「やっぱりかああああ!!」

「うわっ!ど、どうしたんだ?剣」

「い、嫌や…なんで…なんでよりによってここやねん!」

そう、今回の泊まる場所である――

「黙れ時守。さて、今日から3日間お世話になる『花月荘』だ。全員、従業員の方に迷惑をかけないように」

この『花月荘』が問題…否、そこにいる人物が問題なのだ。

『よろしくお願いしまーす!』

1年全員で挨拶をする。頼む!!休んでてくれ!インフル!インフ

ルでいいから！時期じゃないけどインフルかかっててくれ——
と、俺の願いも虚しく、最も会いたくない人物が現れた。

「はい、よろしくお願いします。今年の1年生さんも元気いっぱい……って、なんで剣ちゃんがここに？」

『え？』

その人物、清洲景子の思いもよらぬ一言で、全員の視線が俺に向けられる。

「俺が2人目やねん。清洲のおぼはん」

「…去年も言うたのに……まだおぼはん言うねんな、剣ちゃんは」

「っ！や、やめて!!俺は今日生徒としてここ——」

ゴリユツ！

1番先頭に並ばされていた俺は、清洲のおぼはんの一撃によって意識を削り取られた——

◇

「あ、あの…景子さん？」

「っ！あ、ああ織斑先生。すいません、つい」

俺の隣で剣が意識を刈り取られた後、すぐに千冬姉が清洲さんに話しかけた。…というか『つい』で意識を刈り取られたのか、剣は…

「時守とはどういう関係で？」

「まあ…簡単に言えば甥っ子ですね」

『甥っ子お!?!』

「はい。ですから毎年夏休み、ここに手伝いに来てもらってるんですけど…毎年毎年あんな呼び方をするものですから…つい。ああ、気にしなくても大丈夫ですよ?今は気絶してますが起こしますので」

それで良いんですか清洲さん。一目見た時は綺麗な人だと思ったけど…すごく怖い。

なんだろう。俺にはバイオレンスな女性ばかりが集まる呪いでもかけられているのだろうか?

「こちらの男の子は剣ちゃんよりもしつかりしてそうで良かったです」

「…:まあ…:時守に比べれば…。ほら、挨拶をしろ馬鹿者」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。…:剣ちゃんは一番最初に会ったとき『ようおばはん』でしたからねえ…:」

「ああ…」

「い、いえ…:時守がどうあっても不出来な弟には変わりありませんので…」

「不出来というか人を心配させるというかそういうことは剣ちゃんに勝てる人はそういないと思いますよ?…:ほら、起きなさい剣ちゃん」

気絶してきる剣を清洲さんはしゃがんで起こそうとする。

時に肩を揺さぶり、時に脇腹を蹴り、時に頭にチョップを喰らわせる。

そしてどこからか出したザリガニが剣の耳を挟んだ時、剣は目を覚ました。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!なんやこれ!!ザリガニ!?!」

「おはよう剣ちゃん」

「お?おお清洲のおばはん。おはよ。なあ、そろそろ部屋案内してく

れへん？」

「それじゃあ皆さん、お部屋の方へどうぞ。海に行かれる方は別館で着替えられるようになっておりますので、そちらをご利用なさってくださいな。場所が分からなければ、従業員や剣ちゃんにいつでも聞いてくださいまし」

『はいー！』

「ああ、それと。剣ちゃん。また毎年恒例のアレ、頼むわね？今年是一般向けの分はいいから、学園の子達の分をできるだけ…ね？」

「へーへー」

清洲さんからの説明が終われば、皆思い思いに部屋へと移動していく。



「剣さん？…その…お部屋の方は…」

「おおセシリー、シャル、簪。いやーそれがな？しおりのどこにも書いてへんねん。どーゆーこっちや？」

「…さあ？」

「ば、場所が分かったら教えてね!？」

「おう」

皆が散り散りに自分の部屋に向かったかと思ったら、3人と他数人がまだ残っていた。

ほんまにどこにあるんやろな。

廊下？押し入れ？

まあ寝れたらどこでもええか。…ほんまにどこでもって訳にはいかんけど。

「じゃ、またビーチでな」

「うん」

シャルたちと別れ、ちっふー先生と清洲のおばはんのところに行く。

「まさか剣ちゃん…彼女できた？」

「おう。4人」

「は？」

「まあそうなります…：はあ、時守。風紀の乱れるような事はするなよ？」

ち、ちっふー先生エスパ―っすか!？ってかはよ部屋教えて欲しいんすけど。同室の子と遊んだり、俺が持ってきたホラー映画見たりとかしなあかんし。

…まあ風紀に関しては―

「…：善処しますわ」

―としか言いようがない。

『『しない』って断言しないあたり剣ちゃんらしいな。…あ、剣ちゃん。アレの装備はどうする?』」

あー、アレな。どないしよか。水着はあるし…

「ジェイソンとあといつものアロハ―枚でいいわ。タオル用意しといてな?」

「ん、分かった。ほら、早う荷物置いて従業員更衣室に行き?」

「あーい」

清洲のおばはんはんに催促され、ちっふー先生とワンサマと移動を開始する。

「と、ところで織斑先生…。俺たちの部屋は…？」
「ついてこい。すぐ分かる」

ちっふー先生に連れられ、しばらく歩くと教員室と書かれた紙の貼ってある扉の部屋の前で止まった。

「お前達は私と同室だ。最初は個室でも、という意見があったのだが。女子が大量に押し寄せてくる可能性が高すぎるからな」

「ああ〜」

「ま、そうなるわな」

「…ところで時守。…景子さんと話していた『アレ』や『ジェイソン』とはなんだ？」

ちっふー先生が珍しく、全く分からない、といった表情で聞いてくる。あー、めっちゃ今のちっふー先生の顔写メ撮りたい。

まあでもアレとジェイソンに関してはまだ言うべきちゃうな

「まあ二人とも見れると思うんで、お楽しみってことで」

首を傾げるワンサマとどこか不満そうなちっふー先生を置いて先に部屋に入る。

ま、今はこの臨海学校…楽しもか!!

水着（拝見済み）と勇姿（馬鹿やってるだけ）

「おーい、けーん。まだかー」

『もーちよいや』

俺、織斑一夏は従業員専用更衣室の前で剣を待っていた。

それにしても驚きだ。剣がこんな所でお手伝いをしていたなんて…。まあ本人に聞いたなら『…さあ？なんでやろ』とでも答えそうなのだが。

あと、『ジエイソン』って誰だ？言葉を聞く限り人の名前だとは思うけど…。と、そんなことを考えていたら更衣室の扉が開いた。

そこにはどこにでも売ってあるようなアロハシャツを羽織り、下に青の水着を着て、そしてなぜか右手に銚を持った剣がいた。

…ん？

「なあ剣。その、さつき言ってた『ジエイソン』って人は？」

「こいつや」

剣が左手の人差し指で示したのは右手にある銚。……え？

「もしかして…その銚か？」

「せや。銚田ジエイソン君34世や」

「なんだよ銚田ジエイソンって!?普通の銚でいいだろ!？」

「あかんあかん。ずっと長いこと使ってるからな、ちゃんと名前付けたらな」

「…34世っていうのは？」

「気分や」

「まさか清洲さんに頼まれてたのって…」

「おう、俺がこの銚田ジエイソン君34世で魚突いてくんねん」

……想像の斜め上をさらにぶち抜く答えが返ってきた。

一学生が銚で魚突いてもいいのか?…あー、プライベートビーチ的なあれか。ならいいのか。…いいのか?

「先行くでー」

「あつーちよ、ちよつと待てよ剣!」

とりあえずまあ…今日は楽しけりやいいか。

◇

花月荘から出て、ビーチに足を踏み入れる。

見慣れた真っ白な砂浜、見慣れた青い海。見慣れない水着姿の同級生達…

「海やー!!…言うても毎年来てんねんけどな」

「ムードぶち壊すようなこと言ってるんじゃないわよ」

「おおりコピン。…ビキニとか気合い入ってるな」

「誰のせいでそうなったと思ってんのよ!」

俺?…俺やな。婚約したからワンサマしか狙える男子おらんし。

「まあ頑張ってワンサマ落とせや」

「とは言ってもねえ…、はあ…中学ん時の男子にちよつと連絡取ってみようかな…」

「お前………こんなこと言うのなんやけどろくな奴おらんで?」

「知ってるわよ!でもそれなりにハイスペックな奴が居るんだし別にいいでしょ!」

「それなりに…な」

変態生徒会のメンバーの事やろな。

中学の運動会で毎年50mの学年記録を叩き出して、なおかつ学力学年4位の会計、小西くん。

何かを開発、思いつくことならこの子におまかせ、学力学年3位の庶務、馬場ちゃん。

中1の時から剣道で3年連続全中優勝、ザ・イケメンかつ変態、学力学年2位の副会長、健くん。

んで何の取り柄もない学力学年1位の会長、俺。…あれ？

「…俺も変態の一員やったんか…」

「今頃？」

「…あれ？生徒会メンバーって人気あったん？」

「…かなりね」

「マジで!？」

「ま、中1の時に男子と女子の間で恋愛に絶対に発展しなくなったしねー、私たちの代は。だから中学ん時は諦めてただけど」

「んじやま、がんばー」

「軽っ!？」

リコピンの相手するよりも先に魚突かなあかんもん。清洲のおばはんのアツパーはもう喰らいたくないからな。

ジェイソンを片手に砂浜を歩いていると、まあ見られる見られる。そんなに銝つて珍しいか？

そんなこんなで砂浜を歩いていると、目の前にとある4人が現れた。

1人は水色のワンピースタイプの水着を着た嫁。

1人は腰にパレオを巻き、ブルーのビキニを身につけた嫁。

1人は少し大胆なイエローのビキニを着た嫁。

そして――

「おお、3人とも。『レゾナンス』で見た時よりもよう似合ってるわ…、で、その蚕みたいな奴、誰？」

「か、蚕って…」

「ラウラさん？ずっとバスタオルで隠していたら分かりませんわよ？」

「そうだよラウラ、ほーら、せっかく水着に着替えたんだし、ちゃんと見てもらわないと」

…は？ラウラ？糸でも吐いたんかこいつ

「む、むう…しかしだな…。師匠にこのような姿を…」

「まだ恥ずかしがってるの？…一夏に見てもらうんでしょ？」

「わ、私にも心の準備というものがある！」

凄いかオスや。シャルが蚕に向かって喋ってて、その蚕はモゴモゴ動きながら返事してる。

時間やばいからはよしてもらおうか。

「ラウラ、はよ」

「せ、師匠!？」

「大丈夫やって、今さら4人以外に惚れへんし」

「あう…」

「も、もう…剣さんったら…」

「皆の前で…えへへ…」

「むっ！私の身体では欲情しないということか!?!師匠！」

「そういうのはワンサマに言ってこい。あいつそういう方面で頭のネジぶっ飛んでるから多少のことじゃ揺るがんからな、全裸とかじゃない限り普通の反応すると思うで。…嫁のそういう所は夫が直さなあ

かんやる?」

モツピーのあのスタイルが近くにあつて全然反応せえへんってな。
…ちよい男としてどうかと思う。

「はっ!そ、そうだ!そうだな師匠!分かった、なら今すぐその唐変木
を直してやるぞ!嫁え!!」

「「「いってらっしやーい」」」

4人で一夏に蚕姿でばやんばやんと飛び跳ねながら特攻をかける
ラウラを見送る。…さてと。

「突きに行こか」

「っ!ま、待つてくださいましー!」

「ん?どした?セシリー。皆居るからあんまりえっちいことはあかん
で?」

「わ、分かっていますわ!…こほん。その…背中にサンオイルを塗つ
てほしいのですが…」

「ええで」

「あ、じゃあ私も…」

「おお、簪もか?シャルはどうする?」

「うーん、僕はちよつと泳ぎたいかな」

「おっけ、じゃあまずはセシリーと簪やな」

シャルと一旦別れる。見ると、他のクラスメイトと一緒に遊ぶ約束
をしていたようだ。まあシャルの性格やしな、友達の数百人ぐらい居
てもおかしくないやろ。

しばらく歩くとビーチパラソルの下にブルーシートが敷いてある
所まで来た。

セシリーはそこでうつぶせになり、水着のブラの紐を解く。解いた
水着はシートと身体に挟まれた状態で、セシリーはその綺麗な背中を

俺に見せている。身体に押しつぶされてむにゆりと形を歪めた乳房は、腋の下から見えており、かなりセクシーだ。

その隣に簪もシートを敷き、セシリーと同じ状態になるがどうも胸がセシリーみたいにならず、羨ましそうな、そして残念そうな顔をしている。

「むむむ…」

「か、簪さん…その…そんなに見られると恥ずかしいですわ…」

「今さら見られて恥ずかしい所とか…あんの？」

「あ、ありますわ！」

…あるか。屁こいたりするのは流石に恥ずかしいな。

「剣…もう準備…できた？」

「ん？おお、じゃ、塗るわ」

確か冷たいから手であつたためから塗るんやんな？

手に垂らして…

又メ又メ…

又チヨ又チヨ…

又チャチャチャチャチャ…

「ローションみたいやな」

「そう言われると…そう考えてしまいますわ…」

「…無心。れつつ無心」

「んじや塗るでー」

セシリーと簪にサンオイルを塗り終えた俺は、ようやく海に入ろうとしていた。

そして入る前に知った。俺がさっきから女子にチラチラ見られるのはジェイソンのせいじゃなくて俺の腹筋のせいらしい。リコピンに言われてようやく分かってんけどな、いわゆる無駄な肉の一切を削ぎ落とした身体になっててしかもそれが前が全開のアロハシャツからチラチラ見えてやばい、らしい。腹筋フェチとか…いんのかな。んじやまとりあえず。アップも終わったし、ジェイソンの調子もいいし、行こか!!

「海へ、ピョーーンツ!!」

まあジャンプせえへんとザブザブ入っていくねんけどな？



鈴が溺れ、介抱をしながら剣が海に銚を持って行ったのを見送ってから15分。時々沖合に剣が浮かび上がってくるのが見える。

「…あいつ…マジで魚突いてるんだな」

「馬鹿よ馬鹿。…まあ仕事っていうのはちよつと驚いたけど」

だいぶ落ち着いた鈴が俺の独り言に反応する。そうなんだよな。…剣つてもものすごい所まで人脈広がってそうだよな。

「全く…あいつも断れば良いものを。お人好しというか何とか」「おっ、千冬ね——」

「織斑先生だ馬鹿者。…嵐、足は大丈夫か？」

「へ？…は、はいっ！大丈夫です…」

「そうか。…明日は装備試験運用とデータ取りだ。くれぐれも無茶はするなよ？」

「はい…」

「ラウラは…お、居たか。織斑、ラウラの水着姿は見たか？」

「ま、まあ…」

「ちゃんと感想を伝えてやれよ？あいつもあいつで相当気合いを入れていたからな。…さて、と。私は少ない自由時間でも楽しむとするかな」

そう言つて千冬姉は嵐のように去つて行つた。

…

鈴と顔を向き合わせ、同時に口を開く。

「誰あれ」

あんな優しい千冬姉初めて見た。…変わろうとしてるのか？

◇

「ふう…」

織斑千冬は軽く汗を流していた。生徒とビーチバレーをし、時折見せるその柔らかな表情に同性ながらもときめく女生徒は多い。

「山田くん、時守は？」

「時守くんなら…あ、そろそろ来ましたね」

千冬の表情が柔らかくなつたのは紛れもない、この時守という男子生徒のおかげである。ストレス発散然り、笑い然り、ストレス発散然り、ストレス発散然り、ストレス発散然り、恋愛指導然り…といった具合だ。

アロハシャツと水着、そしてやや白めの肌と茶色がかつた一夏よりは少しクセのある髪を濡らした時守が海から上がってくる。

「お疲れ様です、時守くん」

「ご苦労」

「おー、先生方。自由時間つすか？」

「はい。ところで時守くん、いったい何をどれだけ取ったんですか？」

「清洲のおぼはんからは『魚はそこまで取らなくていい』って言われてたんで…サザエとか…アワビとか…つすね。あつ、あとこれ」

そう言つて時守が真耶と千冬に見せたのは…

「ウツボ、取ったどー!!!」

真耶は脱兎のごとく逃げ、千冬は時守の頭に拳骨を食らわせた。

◆
——この日、時守は2回目の気絶をした。

「……あつつ…」

「起きたか時守」

「いや何さも当然のようにはるんですか。気絶させたんちっふー先生ですからね?」

「あんなものを見せるお前が悪い。…お前が取って来たものはアレ以外全て景子さんに渡したからな」

えー…ウツボ…テレビみたいにマジで『取ったどー!』したのに誰も反応してくれへんかった…

「…腹は?」

「減ってないっすー。…ってか俺ここ来たら朝と夜しかまともに食いませんし。…つと、皆と遊んで来ますわ」

身体を起こし、軽くアップをしてからビーチバレーやビーチフラッグをしたり、泳いだりしてる皆の所へ向かう…が。

「まあ待て。どうだ、私と山田先生と後は…織斑や凰たちとビーチバレーでもせんか?」

バイオレンスな女達に俺は呪われているらしい。



「さあ来い時守!」

「……ワンサマ……鈴…」

「…頑張れ」

「骨は拾ってあげるわ」

死のビーチバレーが始まった。

チームA、俺、ワンサマ、鈴

チームB、ちっふー、真耶、のほほん(敬称略)

…どう考えても狙うはただ1人。

「…悪いなのほほん」

「えー、けんけん酷いよおー」

すまん。…だが、だが俺にはどんなことをしても勝たなければならぬ理由がある!!それは――

「剣さん!頑張ってくださいまし!」

「が、頑張つて…!」

「剣!応援してるよー!」

――愛する嫁達が応援してくれているから!!

「ああ、安心しろ織斑、凰…いや、ここは一夏、鈴と呼ぶか」

「「え?」」

「一夏、鈴。…私はこれから婚約している者しか狙わん。…いいな?」

「は、はいっ!!」

「オワタ…」

「時守、お前のサーブだ。…ほら、来い」

「じゃあ…ちっふー先生…本気で行きまっせ」

そうして楽しい(?)時間はあっという間に過ぎていった。

◇

現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っ

ていた。

「美味し！」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよね」

「うん…美味しい…」

そう言っただけなのは俺の右隣に座るシャルと左隣に座る簪。

今は全員がそうであるように、シャルも簪も浴衣姿だ。…何かよう分からんけど清洲のお婆はんの先祖が『わしは浴衣が大好きなんじゃ。あの和風の色気がもう堪らんのだ。特に箸で食事してる時のあの姿がお…』ということ全員に『お食事中は浴衣着用』義務がある。…まあ俺は楽やから常に浴衣やけどな。

ずらりと並んだ一学年の生徒は座敷なのでもちろん正座だ。そして1人1人に膳が置かれている。…というか俺が置いた。

メニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が二種類と、赤だし味噌汁とお新香。…普通は、な。

「かーっ、やっぱ美味いわ。アワビのステーキ」

「…私達には…無いけど？」

「俺が取ってきたやつやからなあ。…皆にはサーブिसでウツボの唐揚げがいく予定やってんけど…アワビいるか？シャル、簪」

「え、いいの？」

「もちのろんや。ほら、あーん」

俺のメニューだけ特別製。…なんでも新メニューの実験に使われてるみたいや。…だがただの新メニューではない。

他の皆の主菜である刺身と小鍋がアワビのステーキとサザエの壺焼きに変わっているのだ。…まあその分すごい値段やけどな。

「あむ。…んーっ、美味しい！美味しいよ剣！」

「良かった。取ってきた甲斐があるってもんや。ほら、簪も」

「…あむ、…美味しい…」

「そりや良かった。…あ、せや。赤だしどや？俺が作ってんけど」

瞬間、大広間のあちこちから箸を落とす音が聞こえた。なんや？握力奪われたんか？

「美味しい…でも…女として負けた気がする…」

「んなもん逆に俺負けてられへんわ。定食屋の息子やし、ここで料理の技叩き込まれてたし」

「でも…その…、しよ、将来は、私達が毎日作ってあげる…」

…なんでせうかこの可愛い生き物は。恥ずかしいけど俺のためを思つて顔を赤くしてまで声に出した簪。

ああ可愛い。これが可愛いなというのであればそいつは恐らく目に病気を患っているのであろう。可哀想に…

「ぼ、僕も作るからね！」

「くっ…ふう…わ、わたくしも…ですわ…！」

「皆…」

なんと、なんとできた嫁達であろうか。セシリーも、シャルの隣で正座に苦戦しながらも意志を伝えてくれる。なんでも、『少しでも長く隣に居たいので…』とのことらしい。

恐らくこれがモツピー、鈴、ラウラならば

『むっ、和食なら負けんぞ』

『何言つてんのよ、中華が一番に決まってるでしょー！』

『腹に入れば皆同じ。…ほら、嫁よ。レーシヨんだ』

みたいになつてんのかなあ…モツピーと鈴はまだしも、ラウラにはちよつと料理教えたるかな。

「あー、食つた食つた」

いつの間にか全部食つてた。…いやこりやびつくり。あ、せやせや。

「簪、シャル、セシリー。俺の部屋ちつぷー先生の部屋やから風呂上がつたら来てや。俺先風呂入つてくるから」

その後、数回のやり取りの後、3人に別れを告げ、風呂に向かう。見るとワンサマも食い終わって風呂に行くみたいやな。

し。...

入浴と恋バナ

「oh…」

「ah……」

「Yeah………」

露天風呂になっている『花月荘』の温泉に、学園の浴場程ではないが、俺とワンサマの声が響く。

「ワンサマア…」

「…なんだ…?」

「…童貞短小包茎とかやばいで」

男しかいーひん風呂とかこんな会話しかする事ないやろ。

「なっ!!ど、どどどどど…!短小じゃねえし包茎でもねえよ…!た、たぶん…!」

「お前…なんでそんな言葉だけで恥ずかしそうにしてんねん気持ち悪い」

「そ、そう言う剣は…」

「バッチリ卒業済みや。…なんやその目は。ああ、避妊はちゃんとしてるからな?」

いつの間にか枕元に置かれてた箱2つ、その2つ共に錠剤が入っていた。…怖かったです。

「つてかき、お前も彼女作らんの?」

「いやあ…今はそんなこと考える余裕が無いっていうか…」

「考えてんの?」

「うーん…誰かが彼女作らずに嫁作ったからなあ。彼女の定義が何か分からなくなってきたよ…」

……なんかごめん。

「別に剣が悪いって訳じゃ無いぜ？というより逆だ」
「は？」

「関西の方はどうかは分からねえけど、こつちの方じゃ女尊男卑の風潮が激しかったからな…剣のあの発言のおかげでちよつとマシになったんだよ。…今頃剣がいなかったら…」

「……おお怖い怖い」

「ま、だから剣は何も気にする必要なんかないって」

「で、彼女は？…話すり替えようとしても無駄やぞ？」

「ぐう…」

「モツピーとか鈴とかラウラとかどないやねん……ってかお前も嫁居るやん」

「ら、ラウラのアレは違うだろ…？」

いきなり大勢の前でキスして『お前を私の嫁にする！異論は認めん！』的な発言ってな。凄いわ。

「ほう？…じゃあもし『好きや、男女としてのお付き合いをしてくれ』って言われたら？」

「そ、その時は真剣に考える。俺だって男だ」

「ほほう？」

ま、多くの女子にとって茨の道やろけどな。

「な、なあ剣？」

「ん？」

「その……」

「なんやもじもじして、気持ち悪い。…あ、ちよい待ってワンサマ」
「えっ…」

「…よつと」

刀奈にプライベートチャンネルを繋ぐ。

『おつすー』

『剣…くん？どうしたの？こんな時間に』

『いや、今何してるかなーって気になってな』

『お風呂から上がった所だけど…あ、もしかして、見たかった？』

『もう今更やろ…。で？そっちは変わりないか？』

『ええ。…ただ、ちよつとだけ静かで…』

『そっか。…まあすぐ帰ってくるから。その時は…甘えてくれてもええから…なう…』

『う、うん…』

『じゃ、おやすみ。…愛してる』

『ふふっ、私も。愛してるわ、剣くん』

通信を切る。

デヘへ…にやけが止まんわ…

「け、剣？どうしたんだ、にやけて。気持ち悪いぞ？」

「ぶち殺すぞワンサマ。で？なんや？聞きたいことあるんちゃうん？」

「あ、ああ…その…あれだ。卒業した時の感想とかって…」

「あん時ろくに動けへんかったけどな、まあ一番締め付けがヤバかったのは——言うかいボケ」

「か、感想だけ！」

「自分で確かめろ」

時は流れ——

時守、一夏、千冬の部屋には千冬を含めた8人の女子と一夏の計9人が集まっていた。

「一夏、時守はどうした？」

「剣は浴槽の掃除だつてさ。清洲さんからまた頼まれてるらしくて」

「そうか。…シャワーだけでも浴びてきたらどうだ？汗が気持ち悪いだろう」

「ん、分かった。そうする」

先ほどまで千冬にマッサージをしていた一夏はそれなりに汗をかいていた。風呂上りに汗をかく、ということを一夏は嫌っている。本来なら湯船にゆつくりと浸かりたいところだが、同級生が1人で掃除してくれたところを使う、というのは流石に気が引けるようだ。

「さて、と…どうした？いつもの馬鹿騒ぎは。…ああ、先立つものが必要か。ほら、お前達で好きに交換しろ」

一夏が部屋から出ていき、女子オンリーとなったところで千冬が冷蔵庫から7本の缶を取り出し、7人に投げていく。

「ラムネとオレンジとスポーツドリンク、コーヒーに紅茶に緑茶…後……コーラだ」

『い、いただきます……』

箒、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリア、簪…そして理子が飲み物を口にする。

「飲んだな？」

「の、飲みましたが…」

「何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うな馬鹿め。なに、ちよつとした口封じだ」

7人全員が飲んだことを確認した千冬はニヤリと笑い、缶ビールのプルタブを開け——飲んだ。

「…つぶはー…なんだお前たち、お化けでも見たような顔して」

「い、いや…飲んでいいんですか？」

「気にするな岸原。…お前たちも飲んだだろう？」

『あつ…』

そう言われて7人は声を漏らす。

「さて、前座はこのぐらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

早速一本の缶を空けた千冬は、二本目を冷蔵庫から取り出し、再び喉を鳴らす。

「篠ノ之、凰、ボーデヴィツヒ。お前ら、あいつのどこがいいんだ？あぁ、岸原。お前を呼んだのは別件だからな。それまではこいつらの話に付き合ってもらおうぞ?」

「は、はい…」

千冬が言ったあいつ、というのはもちろん時守ではなく、一夏である。

「わ、私は別に…以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですの
で…」

と、ラムネを傾けながら箸。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

スポーツドリンクの飲み口を指でなぞりながら、もごもごと呟く

鈴。

「よし、一夏に篠ノ之と凰がそう言っていたと伝えておこう」

「伝えなくていいです!」

「はっはっは!冗談だ冗談。それで、お前はどうかんだ?」

そんないつもの正反対な口調で話す2人を、いい具合にアルコールの回った千冬は豪快に笑う。

ここにいる千冬以外の者が皆、「誰だこの人」と考えているのも知らずに、千冬はラウラに聞く。

「つ、強いところが…でしょうか…」

「いや、弱いだろ。少なくともまだ時守には勝てんだろうしなあ…」

『え?』

「なんだお前たち、更識妹以外知らなかったのか?ちよつと待ってる」

そう言うと千冬は持ってきた鞆の中を探る。簪と千冬以外のメンツは千冬の言ったことがまだ理解出来ていないようだ。

「そら、あいつの成績…というより資料だ。正直、『凄い』の一言に尽きるな。更識は…姉から聞いたのか?」

「え、えつと…はい…」

簪が千冬に答えている間に、7人は投げ渡された資料に目を通していく。

「ええつと…?」

模擬戦闘

V S 織斑千冬 2勝 5 4敗

V S 更識楯無 1 2勝 3 6敗

V S ナターシャ・ファイルス 2 1勝 2 2敗

V S イーリス・コーリング 1 8勝 2 0敗

機動

稼動時間 1 8 3 時間

瞬時加速：マスター

二重瞬時加速：成功率51%

個別連続瞬時加速習得中：…ってなにこれ…」

「お、織斑先生？…これって国連の機密事項なんじゃ…」

「ああ、そうだが？…まああいつと特に仲の良いお前たちなら大丈夫だろう…というよりあいつから直々に許可は得ているしな」

ちなみに他の生徒には言うなよ？…という千冬の一言に、7人は頷く。

そして先程の千冬の発言に疑問——そこには僅かな怒りが含まれていたが——を抱く一人、箒が千冬に問う。

「織斑先生。…剣が一夏よりも強い、ということですか？」

「そうだ」

「ほ、本当ですか？織斑先生…」

箒に時守の中学時代からの同級生である理子も続く。

理子に言わせれば単純に信じられないのだ。

あのちんちくりんが『世界最強』である織斑千冬の弟である織斑一夏よりも強いということが。

「ああ。全く…あいつの戦法はどうも掴みどころが無くてやりにくい」

「戦法…ですか？」

「なんだオルコット。時守に抱かれたのにろくに模擬戦も…ああ、すまん。私と更識姉のせいだな」

「…お姉ちゃんも…？」

我に返ったメンバーが次々と会話に入ってくるが、酒が回ってきたのだろうか、千冬は話を続ける。

「ああ。一学期の間、時守の対戦相手は国家代表になったことがあるもの、もしくは軍属の者だけだったからな。今戦えるのはラウラだけだろう」

「わ、私…ですか？」

「そうだ。全く…国も国連もなぜこんな規制をかけたのやら……つと、話が反れていたな」

反らした張本人である千冬が強引に話を戻す。

「で？お前たち4人は時守のどこに惚れた？」

「わたくしは…強い意思ですわ」

「僕は優しい所です…」

「わ、私は…その…頼りになるところ…」

「ほう…なるほどな。さて、岸原」

「は、はいっ！」

千冬が口を開きかけたのと同時に、部屋の襖も開けられた。

「おいつすー。…あれ？みんななどないしたん？」

「…見てわからんか」

「……………尋問かなんかつすか？」

「違うわ馬鹿者。ほら、今は女子だけの時間だ。出ていけ」

「そんなこと言っついていいんすかー？」

現れたのは先程まで話題に上がっていた時守。千冬の返事を聞くとすぐさま、ニヤリと笑った。

「酒につまみに暇つぶし、結構持ってきたんすけど？」

「話は後だ。飲むぞ」

天災、襲来

「ようやく全員集まったか——おい遅刻者」

「は、はいっ！」

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日かけてISの各種装備試験運用とデータ取りをする。特に俺たち専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

その中でも特にこの俺、時守剣には国連から大量の装備が送られている。『しょーみデータじゃ上手く動くか分かんねーからお前実験台な。やらかな給料減らすから』的なノリである。事務総長にグングニルをぶっぱなす。これは確定事項だ。

閑話休題。

ようするに今日はアレだ。修学旅行でいう『修学』の部分だ。ならなぜ先にこつちをやらなかつた。普通勉強↓遊びの順番やる。

まあこういう学校の行事、しかもIS学園は勝手が違う。『兵器』として見られているISを高校生が扱うのだ。遅刻や無断欠席などをして、罰が無い訳がない。無論それが学年主席であろうと、今回のラウラのように軍隊長であつてもだ。

「そうだな…ISのコア・ネットワークについて簡潔にまとめてみる」「は、はい。まとめますと、ISコアのためのチャットルームのようなものです。まだまだアップデートされ、進化している最中です」

「ふむ…まあ、そうだな…。合っているか。流石に優秀だな。遅刻の件はこれでお咎め無しだ」

ふうと息を吐くラウラ。…後で声掛けとくか。このままフオロ―無しってのもアレやしな。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員迅速に行うように」

はい、という返事が一同から聞こえる。…まあ簪とかセシリーとかはそんな返事せえへんとは思うけどな。

ちなみに現在位置は、IS試験用のビーチだ。…まあ地下通路を通った秘密基地的な場所や。…なにそれかつけえ。

ここに搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的。

当然、皆ISスーツを着用している。…おお…やつぱセシリー…すげえ…

「篠ノ之」

何故かちっふー先生にモツピーが呼ばれる。

「お前はちよつとこっちに来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいたモツピーが、ちっふー先生の方に向かう。

「お前には今日から専用——」

「ちーちやあああああ〜〜〜ん!!」

ずどどどど…!と砂煙を巻き上げながら人影が走ってくる。

…ん?あの…!あ、あの揺れ方は…!

「……束」

「ぶるんぶるん…」

あいつや!あんなに揺れんのは生きててあいつしか俺知らん!

「会いたかったよお、ちーちゃん!ささ、ハグハグしよう!ずっこんばっこんして愛を確かめ——ふげえっ!」

ちっふー先生に飛びかかったぶるんぶるんは、見事その手に捕まった。ギリギリと指が食いこんでいるのがはっきりと分かる。ちっふー先生すげえ。

「喧しいぞ、束」

「ぐぬぬぬぬ…相変わらずの容赦ない愛アंकローだねっ」
「死ぬか？」

「このままじゃ死んじやうねー」

そう言いながらちっふー先生のアイアंकローからヒョイっと抜け出したぶるんぶるん。

今度はモツピーの方を向いた。

「やあー！」

「……どうも」

「え、えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。…特におっぱ」

ゴンツ!!

「殴りますよ」

「な、殴つてから言ったあ…しかも日本刀の鞘で…酷いよ！箒ちゃん酷い！お姉ちゃんは失望したよ！」

随分とまあ、ハチャメチャな姉妹やこと。

「え、えつと、この合宿には関係者以外ー」

「んん？面白い事を言うねえ。ISの関係者…私が一番だと思うんだけどなあ」

「えつ、あつ…はい…そうですね…」

山田先生撃沈。コミュニケーション能力低め？

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。うちの生徒が困っている」

「えー、しょうがないな。天才の束さんだよ、はろー。終わり」

「コミュ障か！」

思わずつつこんだ俺は悪ないはずや。

「おお！剣ちゃんお久!!…コミュ障とは酷い言いようだね」

「お久ー、ぶるんぶるん」

「相変わらずの呼び方だね。もうちよつと変えてくれてもいいんだよ？」

「じゃあによほほー」

「それ以外でよろしくう！」

「…ぼっち？」

「はぐあつ!?!」

「嘘やって。んー、たーちゃんとかで良くね? ちーちゃんとたーちゃん。ほーらお揃い」

「ちーちゃんのことちーちゃんって呼んでるの?」

「いや呼んでへんけど」

呼ぶわけないやろ。そんな呼び方したら殺されるわ。

「やっぱり変わってるねー 剣ちゃん。やっぱり君もこつち側だからかな?」

「は?」

「何でもないよーん」

「なんやねんこいつ」

「…このアップダウンの激しさに流石の束さんでもテンション持っていられるよ…」

何言うとんねんやろな、さつきから。

「あ、あの…頼んでいたものは?」

ややためらいがちにモツピーが割り込んでくる。正直助かった。話すの疲れるしな。

「うんうん、あれだよね!! 大丈夫、完璧な仕上がりにできてるよ! さあ、大空をご覧あれ!」

たーちゃんが空を指さす。けどあえて見ない。そう、あえてね。

「ジャンジャジャーン! これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』! 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製のISだよお!」

…は?

全スペックが現行ISを上回る?…いくらハチャメチャ姉妹やからとはいえ、やっていいこととやったらアカンことがある。

姉の方は確かに天災…いや、天才だ。国連にあつた資料を見ただけでも分かる。あれを当時今の俺らと同じぐらいの歳に発案し、作り上げたのだから。そして、良くも悪くも各国の刺客から逃げ延び続けることができる。これは相手の先を読む力、そして近寄られた時の戦闘能力、または迎撃用兵器の開発能力などのおかげだ。

だが妹の方は？モツピー…いや、箒には、言っちゃ悪いが何も無い。たとえ剣道の大会で優勝していようが、IS操縦者という括りで見れば、代表候補生にも選ばれていない未熟者である。運動神経でいえば中の上か上の下辺り、ISにおいてはど真ん中ぐらいだろう。

何故、こんなにいきなり真面目な事を考えたかと言うと、とある人の表情が優れないからである。

「ちっふ…いや、織斑先生、どないしたんやあんな顔して…何か…あつた？」

自分で言うのもあれだが、国連代表というのは普通の国家代表と比べて特別だ。普通なら見れない資料の閲覧、お偉いさん達のアポの取りやすさ、等々…メリットが多い。が、その分デメリット…というか嫌な面もある。

ISが絡んだ国際問題の解決である。

コアや機体の強奪、操縦者への殺人未遂等、ISの将来に関わるような事件は、身近であれば、どんな些細なことでも率先して解決しなければならぬ。

まあ簡潔に言うなら、『多少の我が儘は聞いてやるからこちらの要件もよろしく頼む』ということだ。

「(普段あんな顔せえへんのに…)」

一旦考えるのをやめ、辺りを見回すと、大空で嬉しそうに紅椿で飛んでいる箒と、それを見てぼかんとしている他の生徒、そして張り付けた様な笑顔を浮かべる篠ノ之博士と、それを深刻な表情で見る織斑先生がいた。

「(なんか…くる)」

そう思った瞬間だった。

「たっ、大変です！織斑先生!!」

山田先生の声が響く。その声に、今まで箒を見ていた者も山田先生と織斑先生の2人の方を向く。

「どうした？」

「こ、これを…」

「特命任務レベルA：現時刻より対策を…か」

「はい、その…ハワイ沖で試験稼動をしていた…」

「機密事項を口にするな。生徒達に聞こえたらどうする」

「す、すいません…。それでは私は他の先生方に連絡してきますので」

「了解。——全員注目!!」

山田先生がトテトテと走り去って行った後、織斑先生は手を打ち鳴らして生徒全員を振り向かせる。

「現時刻より、私たちIS学園教員は特殊任務行動に移る。今日の稼動テストは中止だ。各班、ISを片付けて旅館に戻るように。連絡があるまでは各自待機しておくように。以上だ!」

織斑先生の一喝で、生徒が蜘蛛の子を散らしたかのように各々行動を始める。

——そして

「専用機持ちは全員集合!!時守、織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィツヒ、更識!——それと篠ノ之もだ!」

「はー!」

一夏の隣に降り立った箒が気合いの入った返事をして、戦いは始まった——

ブリーフィング

花月荘にある宴会用の座敷部屋。

そこは普通の座敷部屋よりかなり広く、相当な人数が収容可能である。が、今のこの部屋には人が入ることの出来るスペースはかなり限られている。

レベルAの特命任務。そのためにこの部屋に入れられた大型の機材。空中ディスプレイを展開するための装置に、展開スペースの確保。そしてディスプレイの前に座るIS学園1年教師陣の面々。そして集められた一夏達1年専用機持ち8人。これらが原因で、座敷部屋は元の広さの見る影もない。

部屋の中央に置かれたテーブルの側に立つ千冬と、その反対側に座る一夏達。

座っている順番は、千冬から見て右からラウラ、鈴、シャル、セシリア、箒、一夏、剣だ。

「では、現状を説明する」

周りで忙しくキーボードを叩く音の中で、千冬の声が凜と響いた。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動中だったアメリカ・イスラエル共同開発中の第3世代IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』：以後福音と呼ぶことにする。その福音が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱した、との報告が入った」

一夏と箒、2人の戸惑いを他所に、6人の表情は真剣そのものだった。特にラウラと時守の2人。軍人であるラウラの雰囲気は完全に軍人のそれであった。そして時守は真剣に話を聞きながらも、自分の考えの及ぶ範囲で起こりうる最悪の事態を想像していた。彼自身、自他共に認める鋭さがある。普段は無駄なツツコミやボケにそれが当てられているだけであって、このような場面でもそれは発揮される。IS学園に入学してからの変化の1つ、と言ってもいいだろう。

「その後衛星からの情報で、時間にして今から50分後に福音はここ

から2 km先の空域を通過することが分かった。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用し、空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ち、つまりはお前達に担当してもらおう」

「えっ?」

一夏の呆然とした声が響く。…これが本来の反応なのだ。軍やら作戦の要やら、そんなものとは全く無縁の生活を送ってきた者の、普通の反応だ。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」
「はい」

千冬にそう言われ、すぐさま手を挙げたのはセシリアだった。

「目標 I S の詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。ただし、これらはニカ国の最重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏れいしたと見られたら、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

若干1名、その機密のさらに奥まで知っている者がいるが。とは千冬は今と言わなかった。

未だ状況が飲み込めていない一夏に対し、代表候補生の面々と教師陣は開示されたデータを見ながら相談をはじめめる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型…わたくしの I S と同じくオールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃、機動の両方に特化した機体ね…、厄介だね。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回っているから、向こうの方が有利…」

「この特殊武装が曲者って感じだね。ちょうどフランスからリヴァイブ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「うん…しかも、制御下を離れてるから…多分人間の動きを超えた機動が出来る…かも。普通にやってたら、多分かすりもしない…と思う」

「しかもこのデータでは格闘性能が未知数だ。…持っているスキルす

「…でも分からん。…偵察は行えないのですか？」

「無理だ。この機体は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だろう…どうした時守？」

「代表候補生達が案を出す間、何かを考えていた時守に、千冬が声をかける。」

「…先生。福音の搭乗者は？」

「…ナタルだ」

「やっぱり…：…ふう、すいません。落ち着きました。搭乗者がナタルなら、ここにある以上のスペックデータは少しなら分かります」

「本当か？」

「はい。この前模擬戦をした時に色々と話したので」

「力が未知数のISのスペックを知っている、ということですのでその場に
いる者全ての視線が時守に集中する。」

「福音の特殊型ウイングスラスターを使用した攻撃、『銀の鐘』は360度、全ての方向に計三六の一斉射撃が可能です。しかも元々軍用ISとして開発されたので、SE、動力エネルギー共に競技用ISとは桁違いに高く、1対1や、2対1では恐らく勝ち目はないかと」

「ふむ…：…そうなるかと全員で出撃するのが好ましいが…」

「それもダメです。向こうは最高速がマッハを軽く超えますし…：高速機動のパッケージがある機体、元からスペックが高い機体を前衛に置き、後方支援にロングレンジでの正確な狙撃が可能な機体。そして、最悪の場合を考え、ここ花月荘を守る機体を後衛に置いた陣形がいいかと」

「…だがなあ…：」

「問題は早く倒さなければならぬ…：…ってことつすよねえ…：」

「いつもと違って千冬と真面目な会話をする時守に一同は驚くが、顔には出さなかった。出してはいけない、そういう時だと分かっていたからだ。」

「…：…どういうことですか？」

「仮にもアメリカ・イスラエル共同開発のISが日本の、しかもIS学園の臨海学校の場所に暴走して向かってきてるんすよ？国際問題に

ならんわけないやないですか。どこも大損しまくり、早いとこ事態を沈めないとつてことつす」

「あー、じゃあ一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

時守に理由を聞いた真耶のそのセリフに、全員が一夏の方を見る。

「え……う？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ問題は——」

「どうやって一夏を運ぶか、だよな。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうし、移動をどうするか」

「…それこそ、高機動パッケージが必要…」

「その状態でも目標に追いつけるか、だな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！俺なのか!?!」

「当たり前やる。…本来なら俺でも『グングニル』2、3発全力で投げたら装甲がある程度壊すことはできるやろうけど…マツハ超えに当てるわけないわ。『ラグナロク』やったら火力不足やしな」

時守は自嘲するかのようにならう。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはない」

姉のその一言は、弟を奮起させるのには十分すぎた。

「やります。俺が、やってみせます」

姉に言われたから、ではなく。確固たる覚悟を持って返事をした。それを合図により細かな作戦が練られていく。

——が、

「ちよつと待ってちよつと待ってちーちゃん！はっはっはー！この大天災東さんのお脳に愉快で素敵な作戦があるんだよー!!」

「死ね」

天災の登場で、その作戦はいとも簡単に崩れ去った――



「ちーちゃんちーちゃん！今！私の脳にはもつといい作戦がナウ・プリンティングされてるんだよ!!」

「出ていけ。…この世から」

「流石に酷くないかな!？」

天井からリアルガチで降ってきた束さんは、先ほどまで組んでいた作戦よりもいい作戦という物を千冬姉に提案しようとしていた。

「まあツンツンデレ子さんのちーちゃん！聞いて聞いて！ここは断つ然、紅椿の出番なんだよ!？」

「なに?」

「紅椿のスペックならパッケージなんか要らなくても超高速機動ができるんだよ!!紅椿の展開装甲を調整して〜ほほほいつと!じゃーんっ!これでスピードも問題無いね!!」

「展開…装甲?」

剣が俺たちの言いたいことを代弁するかの如く、すぐ束さんに聞いた。

『展開装甲』

まだIS学園に入ってほんの少ししか経っていないが、聞いたこともない単語だ。

「説明しましょ!そうしましょ!展開装甲ってのはこの束さんが作った第4世代ISの装備なんだよ!」

「第…4!?!」

「はい、ここで束さんの解説!。いっくんのためにね!まず第1世代は『ISの完成』を目標とした機体。第2世代は『後付け武装による多様化』。第3世代は『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』だね!BTとかAICとかだよ!…で、第4世

代つてのは『パッケージ換装を必要としない万能機』という絶賛机上の空論上のもの。はい、いっくん理解できましたね？先生はいっくんの理解が良くて嬉しいです！」

えつと…まだ良く分かってないんだが…

「そ、それつてめちやくちや…」

「うん、めちやくちや強いよ？機動、攻撃、防御…全部に対応できるからね。展開装甲はいっくんの雪片式型にも突っ込んだし、全身がそれだしねー。最強…つて訳にはいかないけどめちやくちや強いね」

あのお、束さん…今世界各国がようやく第3世代の試作機を作ったところなんですが…？つてか今さり気なく光るすごいこと言わなかったか？雪片式型にも使われてるのか!?

「束…言つたはずだぞ？やり過ぎるな、と」

「てへへ〜ごめんちやーい。でもいーじやん、最強じゃないんだし」

「なっ…！どういふことですか姉さん!!」

千冬姉に怒られた束に問い詰めたのは、今まで黙っていた筈だった。

「紅椿は…紅椿は…！」

「筈ちゃんの言いたいことは分かるけど…物事に絶対なんてないんだよ？ねえいっくん。全身が雪片式型と一緒に言つたけど、どういうことか分かつてる？」

「えつと…零落白夜と似たような…つて！まさか…」

「そのまさかだよ。どうやってもフルパワーでの稼動時間を伸ばせなくてねー、展開装甲を使いつばなしだと長時間戦えないのが難点かな。それに、多分もう第3世代で止まると思うよ？紅椿以外は」

「え？…？どういうことですか？」

こんなに強いIS…第4世代ISをなんで作らないんだ？…という俺の問に答えたのは千冬姉でも、束さんでもなく…剣だった。

「第4世代は万能を謳っているが燃費に難がある。…でも第3世代は『イメージ・インターフェイス』を利用してるからな、操縦者の意志、技量、操縦時間等の様々な要因が入って第4世代を超える成長をするかも知れへん…つてことやろ？」

「ピンポンピンポン！剣ちゃん大正解！まあ第4世代にも成長はあ
るんだけどね。今回は箒ちゃんが『今すぐ欲しい』って言うてくれた
からねー、すぐ使えるように作ってたらこんななつちやつたん
だー。てへっ…あっ！でも安心してね箒ちゃん!! 現行ISのスペツ
クでは、確かに全てのISを上回っているからね！」

それは安心していいんですか!?! 東さん! 物騒すぎますよ…ってI
S学園にいる時点で物騒か…。納得してしまう自分が居るのが
ちよつと嫌だな…。

「では篠ノ之の紅椿も含めて作戦を立て直す——が、出撃するのはま
あ織斑と篠ノ之、後は時守だな」

「なっ！織斑先生!!」

千冬姉が俺、箒、剣の名前を呼んだ時、また箒が声を荒らげた。

「私と一夏だけでー」

「ほう？軍用機をISに乗りたての初心者2人で倒せると？それに時
守には学園よりもさらに上から出動命令が出ている。…それを無視
させた時の書類、データの処理等を全てお前が引き受けてくれるのか
？」

「……」

—が、千冬姉に一瞬で言いくるめられた。そうだよな。…敵は、軍
用IS。とんでもないスペックの持ち主なんだ…!

「では織斑先生。俺、一夏、箒の3人が前衛。フレンドリーファイア
や、慣れない連携によるミスを防ぐためにもこの人数で？」

「そうだな。残った凰、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、更識
にはここの護衛をしてみらう。と言っても敵が来たら、だがな。何も
無ければ私と山田先生と共にこの部屋でオペレーターのために残っ
ておくように」

『はいっ!』

「東、時守の機体の速度は？」

「なんの問題も無いよー! 『グングニル』を封印してその分のエネル
ギーをスラスタールに持っていったらいつくんの白式に近いスピード
は出るよ! 元が低燃費だし、全然オツケー!」

「よし。では時守は万が一に備え先に教員部隊を配置場所まで護衛、その後福音の進路付近で待機。織斑と篠ノ之は時守と福音が衝突するタイミングで戦いに参加できるようにしておくこと。―以上だ。各員、直ちに準備にかかれ!!」
作戦が決まった。

◇

千冬の作戦はこうだ。

1. 時守が教員部隊を封鎖海域の配置場所まで護衛、終わり次第福音の進路上で待機。
2. 時守と福音がぶつかる時にちょうど3対1になれるように織斑、篠ノ之が出撃。
3. 残る専用機持ち達はオペレーターとして3人の戦闘を補助と、花月荘の護衛。

◇

「…今までこういういった事件で…あいつと一夏が揃ったら良いことが無いが…杞憂、だといいたがな…」

各々が準備に駆り立てられている中で一人座敷部屋に残った千冬は、少し俯き呟いた。

――作戦開始（一夏、箒出撃）まで、あと15分――

一夏墜つ、時守――

花月荘のビーチに、1つの白と1つの紅が佇んでいる。

そのビーチは昨日の賑やかさが打って変わったように静まり返っていた。…その雰囲気だけでなく、人の数も、そして使用される目的も違う。…ただ、海に出ていく者を送るため、そして海から帰ってくる者を迎えるため、という意味だけで見れば同じだった。

「…軍用IS…か…」

「大丈夫だぞ、一夏。何せ私と紅椿がいるんだからな！」

出撃を目前にして一夏が重々しい雰囲気を漂わせ、箒が嬉しそうに一夏に語りかけているまさにその時、2km沖合で時守は既に激戦を繰り広げていた。

…そう――

「あかんあかんあかん!!めつつちやう〇こしたい!やばい!」

謎の腹痛と。

「キリキリするヤツや…!あつ…:おおおう…!!暴れてるう…。ギョルギョル言うとする…あかんもう出そかな。有機物やしな…肥料になるんちやうか?…!いやあかん!…:どないして拭こ…紙ないやん…。もういつそのこと垂れ流そかな…:いやでも流石に拭きたいし…!!やつべ…開いてる!!開きかけてるから!」

軍用ISとの戦闘を目前に控えた者の言動とは思えないが、本人は至って真面目である。真面目に真摯に腹痛と向き合っているのだ。

「中解しかけてる…、こんにははしてるて…こんにはしてからこんばんはしてまうて…」

そう、ただ来たるべき戦いに備えて体調を備えようとしているのだ。そしてここで時守に奇跡が起こる。

『操縦者バイタルに異常発見。操縦者保護システムにより、身体状態を一時的に安定に保ちます』

「お？…おお!!」

彼の専用機『金獅子』が、腹痛を治めてくれたのである。

「ISマジすげえ!!めっちゃ感動したわ!腹痛止まるとかマジで神やろ!!」

そして本来の戦いに向け――

「…ふう。さてと」

赤と白が金と邂逅し――

「剣!!来たぞ!」

「行け!一夏あ!!」

「一発行こかあ!!」

福音との戦闘が始まった。

◇

「くそっ！」

『零落白夜』を発動させた雪片式型が空を斬る。暴走状態にある福音が直線軌道から急に方向を変え、円を描くように飛翔したのだ。

今回の作戦の要である『一夏の零落白夜による一撃必殺』はひとまず失敗した。

「切り替えや！フェイズ2に移行すんで！」

「了解!!」

「一夏！私は左から行くぞ!!」

フェイズ2 『攪乱しつつSEを削り、相手の隙を作る』

箒が口頭で言ったように福音の左へと飛び、刀『雨月』による打突でエネルギー刃を放出する。そして『紅椿』の次に機動力の高い『白式』を纏う一夏が福音の次の行動を待ち、時守がその一夏のサポートに回る。

「敵機確認、迎撃モードへと移行。『銀の鐘』稼働開始」

「っ！一夏！箒!!」

オープンチャンネルを通じてきた無機質な機械音声に時守が過剰に反応する。

『銀の鐘』を発動させた福音の翼に、淡い光の粒子が集まる。

「今度は俺からだ！」

一夏が再び、三度、零落白夜の刃で福音に迫るが、福音はひらりと、そして時にはぐるりと周り、ほんの数ミリといった差で避け続ける。零落白夜はその見た目から所謂『ビームソード』のような物になっているが、当たらなければ碌にSEを減らすこともできない。

「箒！一夏のサポートや!!」

「分かっている!!」

一夏はもうちよい発動時間を気にしろ！持たへんぞ!!」
「了解！」

一夏が正面から、箒が左から、そして時守が右から、さらには『ラ
ンページテール』で福音の行く手を可能な限り絞りながら攻め続け
る。

「くっ！はああ！」

しかし、焦るが故に攻撃は上手くはいかない。

唯一の一撃必殺武装『零落白夜』も時間制限がある。その事を知つ
ている一夏はさらにそのいらいらを募らせる。

人の手で操作される『白式』と暴走状態ではあるが機械が操ってい
る『福音』

冷静さを欠けた方が、先に隙を見せた。

「なあっ!?!」

一夏を光の弾幕が襲う。その数実に36。暴走状態にあるためそ
れほど狙いが高い制度とは言えないが、ほぼ同時に打ち出される弾丸
を避けるのは至難の業であり、なおかつ受ければ文字通り一撃で装甲
を持つていかれる。

「一夏は左から！箒は右から攻めろ!!俺が正面で時間を稼ぐ！」

「ああ!!」

『オールラウンド』を両手で持ち薙刀のように振るう時守。福音が動
きを止め、その手で受け止めた瞬間に一夏と箒が両隣から襲うが、攻
撃はかすりもしない。制御下を離れたとはいえ、危険認識能力の類い
のものはあるらしい。

恐らく最上位は『零落白夜』のみ、その次に未知の『紅椿』。時守の操る『金獅子』は、その操縦技術こそ卓越しているが、高火力武装『グングニル』を使えない状態にあるため、優先順位はかなり下になっているのであろう。

だが機械であるが故にその『受け止める』という行動が、既に隙となっていたのにも気づかない。自身が最良の判断として行った行動がそうなるとは微塵も思っていないからだ。

「はあっ……一夏！今だ!!」

時守の攻撃で動きを止め、そこを箒に追撃され、瞬時加速で接近中の一夏の目の前に駆り出される。

——が、一夏は攻撃せず、まっすぐ海面へと向かった。

「何をしているんだ一夏!?せつかくのチャンスに——」

「船だ！先生たちが海域を封鎖したはずなのに——ちくしょうっ！密漁船かよ！」

一夏はそのまま船へと向かい、白式の力で移動させる。船と一夏が先ほどまでいた場所に、福音の弾丸が降り注いだ。

そして、その爆発により打ち上げられた水しぶきが海面に落ち着くのと同時に、『雪片式型』の光の刃『零落白夜』が消えた。

「……っ！緊急フェイズ『退避』！一旦戻るぞ！」

「待て一夏!!馬鹿者！なぜ犯罪者などを庇つたのだ!!」

「箒……そんな、そんな寂しいこと言わないでくれよ。力を手にしたら弱者のことが見えなくなるなんて……全然らしくないぜ」

「わ、私は……」

「おいごら!!聞いてんのか!!」

時守が一人で福音を止めていた時、事態はさらに最悪となった。

一夏の『零落白夜』の使用不可。

そして紅椿の『具現維持限界』つまりはエネルギー切れ。少し動かすぐらいならできるが、もう防御に回すエネルギーも、武器を展開するエネルギーも、箒の紅椿には残っていなかった。

「ぐあつー…やつべえつー！」

時守を蹴りで吹き飛ばした福音は、明らかに動揺している箒に標準を定めた。

「箒いいいっ!!」

福音から放たれる弾丸を、箒に当たる直前で追い抜かした一夏は箒を抱きしめ、その攻撃から彼女を守る。

「ぐああああつ!!」

追い抜かした時に使用した瞬時加速が最後のエネルギーだったのだろう、一夏の無防備な背中に爆発光弾が降り注いだ。

「一夏つ、一夏あつ、一夏あつ!!」

「箒!!とつと一夏連れて花月荘に戻れ!!お前もそうなるぞ！」

白式が解除され海に落ちそうになった一夏を、今度は箒が抱きとめる。そしてそのまま泣きじやくる彼女に、時守は心を鬼にする。

「何…?じゃ、じゃあ剣は…?」

「俺のはまだエネルギーに余裕がある!!お前のはもう具現維持限界迎えとるやろが!!」

「だ、だが…!」

「だがちやうわ!!今のお前はお荷物や！」

箒を一瞥し、福音の方へと振り向く時守。その眼前には既に爆発光弾が迫っていた。

「け、剣!？」

先ほどの想い人のように、また1人がアレの餌食になってしまった。——かのように箒には見えていた。

「……俺をあんま舐めんなよ? 福音」

そこにいたのは金色の球体——その隙間から僅かに内側にいる時守が見えるので完全な球体ではないが。

時守は『ランページテール』を自身を中心に球形に伸ばし、その爆発光弾を防いだ。この状態だと時守は攻撃できないが、相手の攻撃もそう簡単にはもらわない。

「…箒、一旦はよ戻れ。そんな動揺してたらマジで巻き込まれるからな」

「………すまない……」

時守に一言、様々な意味が乗せられた謝罪の言葉を告げると、箒は現在出せる限界ギリギリの速度で離脱した。

——そして、今始まろうとしていた——

「……いけるか? これ」

— 金と銀の死の円舞曲が —

目覚めるヒーロー、散る英雄

時刻は午後4時。

一夏を連れて離脱した箒は、無事(?)ビーチに帰っていた。そこには既に専用機持ちの面々と、真耶や千冬を含んだ教師陣、そして重傷の一夏のための医療スタッフなどが既に集まっていた。鈴やラウラ、一夏に想いを寄せる者は一言箒に言っただけでやりたかったが押しとどめた。千冬が制したのと、未だもう1人が2km沖で戦っているからだろう。そのもう1人の将来の妻たちが我慢しているのだから、自分たちがここで爆発させる訳にはいかない、という思いでなんとか耐えていた。

だが、人はそう強くはできていない。―特に、箒や一夏達、思春期の高校生達は何かと不安定だった。



「山田くん、時守はどうだ?」

「:依然戦っています。不利そのものですね。高火力武装『グングニル』が使えないというのに、さらにこちらへの進行を許せない状況にあります。もし許せたとしても:時守くんがフルスロットルで逃げても後ろからそれこそ狙い撃ちされますし:」

「:そう、か:」

ならば:と、その先の答えは出てこない。千冬ですら、今この状況で何をするのが正しいのか分からないのだ。

―残りの専用機持ちを全員出撃させる?

―それとも時守に一夏が回復し、白式と共に出撃できるようになるまで耐えてもらう?

―はたまた時守1人に倒してもらおう?

—それ以前に、時守以外のメンツの精神状態をどうやって戻す？
教師であるにも関わらず、最後の問の答えが出せないのに歯噛みする。

鈴とラウラはいくら箒が浮かれていたからとはいえ、篠ノ之束博士
お手製の最新機が3機同時に戦ってもそのうち2機が落とされたとい
う事実には怒りと、そして諦めを感じている。

セシリア、シャルロット、簪は直ぐにでも助けに行きたいと、千冬
に直談判したが千冬はこれを拒否。『中途半端な陣形で、微妙な連携。
今のあいつの邪魔になるだけだ』という言葉に3人は押し黙ってし
まった。

実際、簪はオールレンジ、シャルロットは中衛、セシリアは後衛、そ
して時守は前衛と見栄えだけで見れば良さそうに見えるが、『微妙な
連携』と言われてセシリアが止まったのだ。以前ラウラに鈴と2vs
1で戦ったときのことを思い出したのだ。鈴とはコンビとしての相
性も完璧だったが、連携の取れていなかったことと、敵機のスペック
に負けてしまった。それが今回にも、いや、前よりも当てはまると分
かったセシリアは悔しそうな表情で千冬の元を去った。その試合を
見ていたシャルロットも、そして1人になった簪も…。

もちろん、専用機持ちは一夏が落とされた瞬間、全員が出撃しよう
とした。だが時守が箒に言い放った『お荷物』という発言に、皆が動
きを止めた。自分がまともな精神状態でないと、全員が分かっていた
からだ。そこは流石は代表候補生というべきか。

だが、止まってしまったから分らない。次に何をすればいいの
か。箒も含めて6人での即席陣形など、すぐに崩れ、負けるなどとい
うことは落ち着いて考えれば分かることだった。（一夏は重傷+機体
ダメージレベルDにより出撃不可能）

機体のスペック差や他の要因が重なり、専用機持ちたちは未だに動
けず、ずっと座敷部屋にいた。そこに一番の理由がある。

「…時守くん、キツそうですねこのままいけば篠ノ之さんと織斑く
んが復活するまで持つてくれますかね？」

「どうだろうな…だが、『守り』のみに意識を置いていれば問題無いだろう。…金獅子の残りエネルギーは？」

「SEが残り54%、動力が残り60%といったところですよ。機体ダメージレベルもまだBですね」

「ふむ…まあ流石は低燃費ISにあいつの技術といったところだな。ほぼあの地点から動いていない」

「それが大きいですね。…あと、『ラグナロク』ですらほとんど発動してませんから。恐らく時間稼ぎに全てを使っているんでしょうか？」
「そうだな。…一応連絡を入れておくか」

一夏が撃墜され、箒が離脱してから3時間が経過したが、時守は耐えていたのだ。

どういう理由か1時間が経過した辺りから福音の攻撃がやや穏やかになり、一進一退の攻防、というよりは手の内の探り合いといった状態になっていた。

千冬は時守にプライベートチャネルを繋ぐ。

「時守。大丈夫か？」

『ええなんとか…一夏はいけそうっすか？』

「…今日中には無理かもしれん…」

『…んじゃどうします？俺1人じゃ無理ですし、しようみ一夏の『零落白夜』以外でどう落とせばいいか分かんないんすけど』

「…こちらから出撃させるか？」

『それも考えてるんすけど…誰と誰をどんだけの人数連れてきてもらったらいいかってのがまだまとまってないっす』

「…では、引き続きしばらく現状維持を保ってもらえるか？もう早く倒さねば、などは考えなくてもよい。最悪なのはお前が抜かれて福音が花月荘に近接、そこに『銀の鐘』を撃ち込まれることだ。それだけは避けたい」

『了解！』

モニターに映る時守が福音に接近する。全員の脳内に『味方が複数人いる状況での撃墜』が残っており、時守も、千冬も、専用機持ちたちも援軍が必ず要ると判断しない。

仮定の話だが、福音の暴走プログラムに『敵機を複数体認識した場合、殲滅を行う』等といったものが組み込まれているかもしれないからだ。

「…どうしたものか……」

モニターの前で千冬は考える。どうすべきかを――

だが、機械はまたしても無慈悲だった。

『敵機『金獅子』SE残量50%を確認。ただいまより目標の殲滅に入ります。』

『銀の鐘』並びに『銀の指揮者』シルバー・コンダクターを稼働開始』
『んなっ!!』

「時守!?!」

福音の動きが変わる。

光の粒子が翼だけでなく、両方の掌に凝縮されていく。

「まさか……荷電粒子砲……!?!」

『みたいっすね……クソがっ!!』

2本の荷電粒子砲、そして36の爆発光弾。

対する時守は薙刀状にエネルギーを纏える一本の棒のみ。

36の砲門から同時に撃ち放たれる光弾を、1つ、また1つと防いでいくが、福音から放たれる2本な荷電粒子砲。さらに追加される光

弾が、じわりじわりと詰将棋のように時守を追い詰めていく。

『ぐあつ…』

「時守!!」

「剣さん!」

「剣!」

「金獅子残りSE38%!!動力残り42%!機体ダメージレベルCを突破しました!」

一気に座敷部屋が騒がしくなる。ただでさえ緊張感が漂っていたのだが、『時守撃墜』の可能性が出てきたため、どうにかできないかと模索していく。

『…2km先、多数のIS反応を感知。『金獅子』を撃破し、標的を変更』

『まだ終わつとらんわあ!!』

時守が『オールラウンド』を振るうが、福音はそれをひらりひらりと回避。さらにすれ違いざまに36門同時射撃。半分は時守にかすりもせずに通り返していくが、残りの半分の全てが時守に直撃する。

『がっ…!…あつ…!』

「…くそ…!」

「あたし、箒をぶん殴つても呼んでくる」

「私も行こう。…師匠が、まだ戦っているのだ。終わってもいないのになぜあいつは諦めているのか問い詰めねばならんからな」

鈴とラウラが、箒がいる一夏の療養部屋へと向かう。箒がいれば、6人いれば時守を助けることができるかもしれないと思ったのだ。

『ま……まだ、や…。まだ……負け、られるかあ!!』

額から、左頬から、右脇腹から、両太ももから血を流しながら叫ぶ。SEが切れ、装甲もボロボロだが、動力はまだ十分生きていた。

『La……♪』

『はっ…、んじゃもうちよい…上げよか!!』

互いにスラスタからエネルギーを放出、加速する。

座敷部屋では大半の者が諦めていた。絶対防御すらも働かず、ISの高火力の攻撃をほぼ装甲のみで受けなければならぬ状況に。対するこちらは高火力武装を使えないという状況に。

しかし、先ほど福音の動きが変わったように、今度は時守の動きが変わる。

『La……』

時守に接触するほんの一瞬前、福音は光弾を発射した。その狙いに慣れてきたのか、36のその全てが時守へと吸い込まれていった。――が、

『右、正面、左下、上、真下、右上、左脇、頭上、正面8発、背面5発、右脇、左、左下、真上、左上、右脇、真下、頭上、正面、周囲6発……』

時守が高速で言葉を発する。そしてその言った通りの方向の光弾を、『オールラウンド』で全てたたき落とす。

『…ふっ！』

『La…!?!』

機械質ながらも、焦ったような音声が聞こえる。

二重瞬時加速。

福音から見れば、光弾を全て浴びせ、殺したと思った相手がその全てを撃ち落として一瞬で懐に潜っていたのだ。

『……………はあっ！』

一瞬五斬。『ラグナロク』が福音の装甲を斬りあげた。

「よし……！」

「剣さん……」

教員の1人から歓喜の声が漏れ、セシリアから不安そのものの声が零れる。不安げに見守るのはセシリアだけでなく、千冬と真耶、簪もだ。

この4人は初めて時守が死にかけた『無人機襲撃事件』を実際に見ている。その時の状況と酷似しているからだろう。

「(あいつのあれは…確かに強い。…いや、ISバトルに置いては反則クラスの強さを誇る。普段のそれを遥かに凌駕する集中力、ほぼ未来予知に近い状況判断、ミスのほとんどない正確な操縦………追い込まれた状況で感覚が鋭くなり、無意識にその全てを活用する。…間違いなく『天才型』の戦い方だ……だが……) ……気をつけろよ時守……」

千冬は時守のこの集中状態を何度も目にしている。本人は自覚していないだろうが、セシリア戦、無人機戦、VTシステム戦、そして国連での模擬戦と、強者と戦う時にごく稀に起こる。そして、模擬戦ではその場合、必ず勝利を収めている(言葉をほとんど発さず、慈悲なく相手を倒すので華があるかないかで聞かれたらもちろん無いのだが)。

しかし、今回のような緊急事態には大怪我を負うことが多い。無人機戦の時は最後の自爆は予想できなかったものの、それまでは終始相手を圧倒していた。

『キアアアア!!』

『……………』

福音が吼え、時守は宙に浮いたまま自然体を保ち、相手を待つ。

—ミシリ

装甲のひしやげる音がモニターから聞こえるが、発生源はすぐに分かった。時守が動いていない以上、福音が何かを強引に行った結果なのだろう。モニターに映る時守もその何かを察したように、『オールラウンド』を構える。

『La…』

『っ!』

数秒前の時守のように、二重瞬時加速で時守に近接、福音は右回し蹴りを放つ。が、時守の『オールラウンド』に防がれる。

…そして、戦いが終わりを告げる。

『L a a a a a a a a a a!!』

『……………あ…』

「な、なに…これ……………」

モニターに残像が出来る程の速さで福音が時守の周りを飛ぶ。

リボルバー・イグニッションブースト
個別連続瞬時加速

普通の操縦者が使えば、成功率はほとんどない。だが、相手は暴走しているが機械。事前にプログラムされている作業を実行すること

など実に容易い。

「織斑先生!!篠ノ之さんを連れて来ました!」

「これで一夏を除く専用機持ちが全員揃いました!」

「も、申し訳ありませんでした!!」

全員がモニターに釘付けになっていたその時、鈴とラウラが箒を連れて戻ってきた。

だが、誰も返事をしない。

それは今はそれどころではないからではなく、絶望に近い諦めをそのモニターに見てしまっているからだ。

『…くそっ……!』

『La♪……L a a a a a a a!!!』

予想外の事態に集中力を途切れさせる時守。

もちろんその隙を見逃してくれるはずが無く、高速で飛び回る福音から放たれた荷電粒子砲が『ランページテール』をその付け根からもぎ取った。

—そして

『La………』

「ひっ………」

「きやああああ!!!」

「時守くん!!逃げてください!!!」

今度は福音から真正銘360。福音が作る球体から、内側に居る時守に爆発光弾が打ち込まれる。

同時射撃が計20回。

合計光弾数720発が中心へと一直線に向かう。

福音は不可避の弾幕を張ったことを確認し、影響の及ばない場所まで移動する。

そして――

時守を中心に、半径500mの大規模な爆発が数秒程、続いた。

「千冬姉!!」

「……一夏……」

1人のヒーローが奇跡的に復活した代わりに、真耶の口から最悪の事態が言い渡される。

『『金獅子』』：被弾数300を超えた時点で機体ダメージレベルE……被弾数700時、展開不可能により強制量子化開始……被弾数720時に操縦者のバイタル異常により、量子化……
「……………えっ……?」

状況を知らない一夏から、声が漏れる。
教師陣、他の専用機持ち達は絶句し、声すらも捻り出せない。
唯一言葉を出せた1人の真耶から、真実が明らかになる。

「……………時守くんの心臓が……………止まりました」

それは、もう1人のヒーローの死を告げるものであった――

再激闘と心層世界―

「剣が……死んだ……？」

「まだ断定するのは早いですが……ISの保護プログラムも働いているかもしれないので……」

「か、かもってどういうことですか……」

『金獅子』のダメージレベルがEを迎えていましたから……コアが無事なら仮死状態にあるかもしれない」

「……でもっ……！でもまだ完全に死んだ訳ではないんですよ？」

「そ、そうです……」

機材に囲まれた中、専用機持ち7人の内唯一事態が理解出来てない一夏が、真耶から説明を聞いていた。他の6人は声を出そうにも出せなかった。

セシリア、シャルロット、簪の3人は事実を認めたくないのか、終始何かを考えているが、その目尻には確かに涙が溜まっていた。

鈴、ラウラの2人も先の3人には劣るが決して小さくないショックを受けていた。時守に『恋心』という物を抱いているわけではないが、鈴は普通の友達よりも仲が良かった――いわゆる親友―と思い、ラウラは普段から師匠先生と呼ぶ程に尊敬し、鈴と同じく親しくしていた時守の死を信じたくなかったのだ。

簪は愕然とした。『自分が逃げて帰ったから』『力に溺れていた自分のせいだ』という思いに押し潰されそうになるも、真剣そのものの一夏の眼を見てその考えを止める。今は考えている場合ではなく、動かなければならないから――。

「だったら……行きます」

「行くって……福音の元にですか!？」

「当たり前です。……剣は、剣はまだ死んでいない……。それに、俺が眠っている間も剣は1人で3時間も福音と戦ってたんです。専用機持ち

7人が集まって倒せないこともないでしょう?」

「…織斑、その自信はどこから—」

「俺のIS『白式』が第二形態移行しました」

「何っ!?」

声にしたのは千冬だけであつたが、その場にいる者全てが驚きの表情を隠せていなかった。

『第二形態移行』

セカンド・シフトとも呼ぶそれは、ISが開発されてから10年が経った今でも片手で数える程しか発現していない現象だからだ。

「先生方は、…一体何をそんなに迷っているんですか?」

「これ以上、犠牲者を増やすわけにはいかん」

「ですが!」

「30分」

『…え?』

今まで7人の出撃に否定的だった千冬から、『30分』という数字が言い渡される。これが何を意味するのか、それはすぐに理解させることとなる。

「ISには軽い『AED』や操縦者の周囲の環境を保護する機能が付いている。元が宇宙での活動を目的としたものだからな、コアさえ生きていれば最低でも30分は操縦者の命の安全は保証される」

「だったら—」

「だがな、もし行くのなら約束しろ。福音と接触後、20分以内に撃墜することをな。その場合は篠ノ之、先程のような失態は許されんからな」

「はいっ!」

箒のその声は、『紅椿』を貰った時と同じ程の大きさだったが、声色

が全く違っており、真面目そのものであった。

不可能だと思われていた『福音撃墜作戦』が、最悪の場合『専用機持ち全員撃墜』という予想がされていた作戦が、一夏の『白式第二形態移行』で再び動き始める。それほどまでに『第二形態』とは大きな力を持つ。

「では、篠ノ之、織斑、凰を前衛、デュノア、ボーデヴィツヒを中衛、更識、オルコットを後衛とした7人陣形を組み、福音に当たれ。そして福音を撃墜し次第、福音の操縦者『ナターシャ・ファイルス』の保護、そして海底にいる『時守剣』を救出しろ！」

『はい!!』

千冬の新たな命令に専用機持ち達7人はすぐに座敷部屋を出る。

「私は…無力だ。1人の生徒を瀕死に追いやり…他の生徒も危険な目に…!!」

「…織斑先生の判断は正しかったと思いますよ?…あのまま福音がこちらに来ない、とも限りませんし」

「…ああ。だがそれなら海域を封鎖している教員もこちらに呼び戻して戦闘ができる」

「ですがその場合は一般生徒に危険が及ぶ可能性があります、それに加え時守君の救出がほぼ不可能となってしまいます。大勢の命か、少数の命か…正しい選択なんて、誰にも分かりません…最悪の場合はIS学園の新生が皆……」

「そこから先は言うな。…すまないな、真耶」

「…先輩は昔っから、1人で闘いがちですから」

真耶と千冬の話の背後で微かに聞きながら――



「――あれ?…俺確か…腹痛くて…福音とやって…あれ?」

どこや?…ここ。辺り一面真っ白やけど…精神と時の部屋?

『おお、気づいたみたいやな』

「あ? 誰お前」

『ひっどいわー、剣ちゃん。せつかく瀕死の剣ちゃんの意識をなんとか繋ぎとめてここに居させたってのに。金貫うで?』

「は?」

なんやこいつ。黒のワンピースに金髪ロングで…凄いな…

「つてかどこどこ? お前マジで誰? ……俺瀕死なん!？」

『今更か…。そや、剣ちゃんは福音の攻撃喰らいすぎて現在進行形で死に行ってる状況。はよ戻らなマジで死ぬなー』

「おー…」

なんかすげえ。いや、やばいねんけどな?

「で、お前誰よ」

『言っても信じる?』

「関西弁やからな」

『どういうこっちゃ。ま、言うけどなー。うちは『金獅子』の自我、言うなればISのコアの内部ってことや』

「つてことはここはお前の中?」

『……ここから見ててほんまに思うけどマジで剣ちゃんって鋭いよな? まあ補足しておくで内部であり内部でない場所。剣ちゃんの心層世界とうちのコアを繋いで作った世界やな』

「…入れんねんなー、そんなとこ」

『ほんまそれな。あ、う〇こ消しといたで?』

「さんきゅ」

まあ言わばISコアと自分のプライベートチャンネルなの?

『で? どないするん。戻るん?』

「当たり前やろ。…抱いて終いとか嫌やし…もつと皆と色んなことやりたいし…」

『ほうほう……死にかけたのにまた行くと?』

「ああ。…まだ、生きたいからな」

『…そつか。んじやはよめに戻ろか。皆今福音と戦ってるけどヤバ目やしな。…あー、やっぱせつちゃんまだ使いこなせてもろてないやん…かわいそうに…』

「せつちゃん?」

『ん。白式第二形態・雪羅、通称せつちゃん』

「そう呼んでんのお前だけちゃうん」

『なんで分かんのか!?!』

「お前の操縦者やからなー」

そりやな。ペットは飼い主に似るっていうし。

「…戻れるんやったら出来るだけはよ戻りたいねんけど」

『剣ちゃん、…一つだけ約束して。もう死なへんって……うちも心配したし、ギリギリやってんから…』

「…分かった、約束する」

『んじや、行こか。…皆を助けに』

差し伸べられた手を、俺はそつと握った。

『言うてもまだ回復に時間かかるから無理やねんけどな?』

「はよ言えやボケ!」

『ご主人様のために第二形態移行したったISSのコアに向かってボケやと!?舐めとんのかボケ!!』

「ああ!」

『ああん!』

「…つてか割とマジではよ戻してや。皆助けに行かな」

『いや、やからまだ無理やねんて。7人が助けに来てくれてるっぽいけど…ぶつちやけこのままいったら7人の撃墜と剣ちゃんの復活…どっちが早いか分からんで?』

「…7人もいて白式が第二形態になったんやったらいけるんちゃうん?」

『福音も第二形態移行してん。向こうさんもエネルギー全開+新武装。こりゃ割とマジでやばいで…。今剣ちゃんの身体とのフィッティング、パースナライズ、あと単一仕様能力の定着、死にかけた剣ちゃんの体力強制回復…結構かかるわ…』

「マジか…皆…持ってくれよ…?」

福音と戦っている皆を思いながら、俺は真っ白な空間に座り、その時を待っていた―



「La…♪」

「おおおおおっ!!」

「はあっ!!」

第二形態移行をした『銀の福音』と同じく第二形態移行をした『白式』、最新鋭の第4世代IS『紅椿』が激突する。

時守が粘っていたこともあり、福音は最初に戦闘を行った地点―『花月荘』より2km沖―の海面500m上空でまるで胎児のように丸くなり、浮いていた。

その福音に第二形態移行をした『白式』の新武装として左手に装備された『雪羅』で荷電粒子砲を一夏が放ち、直撃したのがちょうど出発してから5分で、今から20分前だった。

「くそっ！堅い……！」

「もう時間が無いのに……！」

「一夏さん！箒さん!!離れてくださいまし！」

「…行つて…!!『山嵐』！」

「喰らえっ!!」

空裂の一閃を左手で受け止められ、『零落白夜』の一撃を全身を纏うエネルギーの翼のようなもので防がれた箒と一夏が苦い顔をする。

今この海域の近くに居るはずの時守の死がほぼ確実になるまで残り5分を切っているのだ。

そんな焦る箒と一夏を一旦下げ、セシリア、簪、ラウラがそれぞれの射撃武装を一斉に放つ。

「はあっ！もう一回っ!!」

晴れた爆炎の中、何も無かったかのように佇む福音に再び一夏は零落白夜で攻撃を仕掛ける。

鈴の衝撃砲、シャルロットの高速切替による射撃で回避ルートを制限された福音が雪片式型に斬りつけられる。

「ぐあっ！」

「一夏!?!」

が、悲鳴を上げたのは一夏も、であった。

現在の福音は人間が操縦していない。故に、攻撃を受ける時の恐怖も無ければ、自爆覚悟のカウンターを躊躇う気持ちなど、微塵も存在しなかった。

福音に蹴り飛ばされた一夏に箒が駆け寄る。

「大丈夫か一夏!」

「箒か! ああ、俺は大丈夫だけど…もうエネルギーが…な…」

「…一夏…」

「なら一夏、アンタはその機動を生かしながら福音の妨害に当たりなさい。福音への攻撃はアタシ達がやるから」

「鈴…」

『白式』のエネルギー切れ。

それはこの作戦の大幅な火力低下を意味している。ISの絶対防御はSEがある限り発動し続けるが、発動すれば大幅に動力をも削る。故にSEを一撃で削り切るほどの火力を擁する『白式』は福音の強制停止にほぼ不可欠の存在となっていた。

つまり現状、福音を倒す手段は他の武装で強引に福音の動力を奪い切る、というものだけであった。

「……分かった」

「…アンタが悔しいのは分かってるつもりだし、何とかしてあげたいとも思うけど…今はそんなことしてる場合じゃないし…」

「そう…だよな…」

「(一夏…。また新たな力を手にしても、私のように驕らない強さ…か。確か…そこは剣も一緒だと千冬さんが言っていたな。…? なぜだ?…剣を救わねばならん状況で、福音を倒さねばならん状況で…なぜ私はこんなにも落ち着いていられるのだ…?)」

セシリア、シャルロット、簪、ラウラが福音と戦闘を行い、一夏と鈴が臨時の作戦を立てている中、簪は1人冷静だった。

「(なんだ…簡単ではないか。…皆、強くあろうと、そして強くなろうとしているんだ…。…こんな未熟な私でも…。…もし許されるのなら、共に一夏と戦いたい。…あの背中を守り、隣に居たい!)」

そして、強く、強く願う。

願いに答えるように紅椿の展開装甲がより開き、赤の光に黄金の粒子が混ざる。

「これは…!?!」

「ほ、簪?!」

「あ、アンタ何よそれ…!」

ハイパーセンサーに集中していたため、隣で一夏と鈴が驚くのも分かるが、それよりも衝撃的なものがそこには記されていた。

「…機体のエネルギーが、急激に回復している…。単一仕様能力『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築…完了…!一夏!鈴!!私に触れる!!」

一瞬にして『絢爛舞踏』の何かを悟った簪は、鈴の『甲龍』と一夏の『白式』に触れる。

「な、なんだ…?エネルギーが…。…回復してる!?!」

「こ、これが紅椿の単一仕様能力…??!とにかく行くわよ一夏!!零落白夜も使えるようになってんでしょ!!」

「ああ!簪も行くぞ!」

「無論だ!」

一夏と箒が左右から福音を攻める。

「とりあえず、…正面、ぶっばなしてやるわっ！」

衝撃砲の軌道上に味方がいないことを確認した鈴はフルパワーで放つ。福音はそれを上に飛ぶことで回避する。

「箒！」

「任せろ！」

福音の回避先に既に回り込んでいた箒が、その翼を紅椿の二刀を並べ、一断の斬撃で断ち切る。

「逃がすかああっ！」

「私が止める！」

さらに脚部展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが、ラウラのA I Cにより動きを止められた福音の本体に入った。

「今度はわたくしと…！」

「僕もいるよ！」

「…私も…！」

ラウラがA I Cを解除、その瞬間、ぐらりと体勢を崩した福音に、ブルー・ティアーズ、ショットガン、そして『山嵐』―計48発の実弾ミサイル―が福音を襲う。

その数秒後、煙の中から現れた福音に、一夏が止めの一撃を刺しに行く。

「ぜらああああっ！」

福音の胴体に零落白夜の刃を突き立て、全ブースターを最大出力まで引き上げる。

押されながらも、最後の力を振り絞るかのように一夏の首に手を伸ばす福音。

その指先が一夏に触れかけたところで、福音は空中で停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ、……」

全身装甲の胴体の前面が開け、ISスーツを着た操縦者が、海に堕ちていく…。

「しまっ——！」

「「ったく、ツメが甘いよ、アンタは」

ほぼエネルギーが満タンの鈴が、海面ギリギリで操縦者をキャッチする。

簪、セシリア、シャルロット、ラウラも無傷とはいかないが全員時守に比べればマシな方である。

「では、早く剣を——」

福音の近くに居た箒が、皆の元へと向かうためにゆっくりと飛んだ。

瞬間——

『最終エネルギー、起動。：ハック、一時的に完了。周囲 I S の単一仕様能力強制発動』
『なっ!?!』

7人全員の I S が止まり、一夏の『零落白夜』と『雪羅』、箒の『絢爛舞踏』が強制的に発動される。

「まだ生きていたのか!?!」

「そ、それよりまずいよー!」

「箒! 避ける!!」

ラウラ、シャルロット、一夏が声を上げるも、絢爛舞踏を発動させたままの箒に、福音の手が触れる。

『エネルギー…全回復…ただいまより、再び殲滅を開始します。『銀の鐘』、『銀の指揮者』最大稼働―開始』
「くっ…!」

強制ハッキングが解けた一瞬で、自分がいた場所から各々が離れるも、復活した福音のフルパワーのエネルギー弾雨が7人を襲う。

そして―

『海底に、新たなIS反応感知。新たなIS反応感知…その数…1』

全員のハイパーセンサーにこの場へのもう1人の参戦者の存在が映し出される。

『機体名『金獅子第二形態・金夜叉^{きんやしや}』……操縦者『時守剣』』

敵ではなく、味方の――。

波打ち際のデッドヒート

初めて『銀の福音撃墜作戦』が開始された11時半から約5時間が経過した今、花月荘は今までで最も騒がしくなっていた。

「篠ノ之さん、織斑くん、オルコットさん、凰さん、デユノアさん、ボーデヴィツヒさん、更識さんのSE枯渇!!機体ダメージレベルも皆さんCを超えています!!」「織斑くん、篠ノ之さん両名は動力エネルギーもかなり持っていていかれています!」「福音のエネルギー増幅を確認!現状7人で撃墜できる可能性シミュレート終了:28%!!」「福音、止まりました!!」

ディスプレイに表示されるデータを読み上げ、シミュレーションをしていく教員、武装の増えた福音がどのような攻撃を仕掛けてくるか予想する教員、SEの残量等を計算し、戻ってくるのがいいか、戦うのがいいかを考える教員:に混じり、千冬は1人、とあるモニターのとある赤い光を見つめていた。

「山田くん:あの機体はなんだ?」

「はいっ!?え、えっと:あれ?福音も合わせて9つ目の信号ですので:今、調べますっ」

「:座標は?」

「:っ!座標、機体名称、操縦者特定出来ました!!海底200m、機体名『金獅子第二形態・金夜叉』、操縦者は時守君です!!」

真耶のその言葉に座敷部屋が再び湧く。しかし、千冬表情は複雑そのものだった。

「:時守:お前も、死にかけてなお戦うというのだな:」



「け、剣っ!?!生きてるのか!?!」

『生き返ったで。言うてもまだフィッティングなうりんちよでISが動き止めてるから動けへんねんけど…お前ら大丈夫か?』

「さつきまで死んでた奴に言われたくねえよ!?!つてかなんでそんなに軽いんだよ!?!」

『やっかましいな……ん?でも言うてヤバいんちやうんお前ら皆』

「ま、まあそうだけど…エネルギー回復したって言ったらなんか急に止まったんだよ」

『なんやそれ』

『絢爛舞踏』の効果により動力、SE共にほぼ全回復した福音は、約30分前に一夏の荷電粒子砲を喰らう前のように、身体を丸めて宙に浮いていた。その姿だけ見れば、専用機7機を一気に戦闘不能直前まで持っていった機体には見えないだろう。

『ナタルは保護したんか?』

「あたしが抱えてるけど?」

『んなら誰か機動力高いやつが一旦花月荘に休めてきたほうが……つて、どないしました?織斑先生』

『今からもう一度作戦を伝えようとしていたところなのだが…、時守…』

『はい?』

オープンチャンネルに『花月荘』から千冬が特別な機械を用いて割り込んでくる。

『……よく無事だったな、お前……』

『いや無事ちゃいましたけど……』

『結果を見て、だ。全く……どれだけ心配をかけたと思っている……』

『そうですね！もう少し自分のお身体を大切にしてくださいませー！』

『もうっ！2度とあんな無茶したらダメだよ!!』

『……後で……お仕置き……』

『そうですね、もう少しガツツリと……』

『学園に戻ってから楯無さんと4人で……ふふっ』

『簪!?セシリー!?シャル!?怖い！生き返ったのに怖い!!』

場所は海上と海底、そして装備しているのはISという物騒なものだったが、そこにはいつもの日常があった。

『お前たち……まだ福音のエネルギーはあるんだぞ？7人は早く戻ってきて専用機のエネルギーを回復させろ。どういう選択をしようと、まずはそれが最優先だ。今のお前達じゃ戦っても殺られるだけだからな。』

『えっと……じゃあ剣は?』

『俺は海底で待機しとく。引つ張り上げてもらたところでお前らにIS装備した人間運ぶ余力無いやろ?』

『下手に福音を挑発しないように戻ってこい。……時守、生き返っていきなりですまないが……』

『あーい、福音の監視つすね。今回は死にませんから』

『説得力が無さすぎるが……まあそれで行くか。早く戻ってきて早く回復、そして早く撃墜して終わらせろ』

そして千冬からすぐさま臨時の作戦が伝えられた。

『……La……』

この後、彼以外の誰もが後悔することとなった作戦が――



「はあ…全く…いつ暴れるか分からんのだぞ…」

「あはは…ひやひやですね」

「それもそうだが…何かもつと嫌な予感がする。…福音の攻撃の火力なんだが…」

「…はい、遥かに上がっています。照準を合わせる速度も、機体の速度も…これも『絢爛舞踏』でエネルギーを回復したからでしょうか？」
「どうだろうな。奴の速度がどうであれ、今は動いてくれないことを祈るだけだ」

現在、仮基地となっている『花月荘』の座敷部屋は一旦『膠着状態』という形で落ち着いていた。

専用機7機がこちらに戻ってきて、エネルギーを全回復させ、福音の元に向かい、フィッティングを終わらせた時守を合わせた8機が揃うまでの予想時間は30分。時守のフィッティング自体は5分で終わるのだが、死ぬ前と同じように全員揃うまで福音を食い止める、ということでは全力は出さず、時間を稼がせる…というのが教員陣の決定だ。

1度死を迎えた者をすぐに戦地に送るのは…と、渋る者もいたが、7人をさらに危険な目に合わせる訳にもいかないので、可能な限り最速で用事を済ませる。ということでは決定した。

「あと2分で全員着くわよ、千冬」

「フィアスか…よし、A班はここに残って作業を続け、B班はあいつらの機体の整備に当たれ！」

「了解！」

数人の教員がISの整備機材を持って慌ただしく座敷部屋を出ていった。部屋に残ったのは千冬や真耶などの元代表、元代表候補生の面々―これが今回の作戦のA班―だ。今出ていったB班は、IS学園整備科の卒業生だったり、企業の開発部長であつた者を引き抜いてきた者達で構成されている。

流石に国家機密を弄るわけにはいかないが、予め用意されてある装備をISに装着したり、エネルギーを補給したり、操縦時のラグを解消したり：etc、などを任せればそこらのIS整備士なんぞ目ではないレベルの教員達だ。エネルギー補給と軽い整備だけなら1時間もかからずに済む、というのが千冬の判断であり、事実であつた。

優れた状況判断能力を持つ実行部隊に、優れた技術を持つ整備部隊。後は優れた操縦者がいれば作戦の成功率はぐっと上がるだろう。

…イレギュラーが無ければ。

『…おりむーザザツ…えい…いに…グがー!!』

「っ!?どうした嵐!!」

『…かん…!!どう、ら……きーどの…ツキングでー!!』

「お、織斑先生…」

突如として鈴とラウラの2人（声から察するに）からきた雑音が混じった焦った声が、チャンネルを通じて教員に伝わる。

真耶がすぐに原因を割り出したようだが、その様子はやはり言うべきか、優れていなかった。

「…どうした山田くん」

「先ほどの福音の臨時ハックにより、織斑くん達7人の専用機7機が……その……」

「早く言え!!」

「は、はいっ！今から約1分後、強制停止後、一定時間展開不能になります!!」

「何?……ま、まさかつ!?!」

千冬がディスプレイに素早く振り返る。その動きに釣られ、他の教員もディスプレイに注目する。

そのディスプレイにはラウラがドイツの衛星を用いて写している福音の姿がある。だが、数分前と決定的に違う場所が1つだけあった。

「羽が……」

「…開いてる…?」

「…嘘……でしょ……?」

先ほどまでは福音は何か行動の基準を変える時に、機械的ながらも音声を発していた。だが、今回はその音声が無い…故に何をするのか分からない。

「山田くん、時守のフィッティングは?」

「後30秒です」

「時守…聞こえているなら、もう一度、もう一度だけでいい……頼む」

千冬のその言葉を合図にしたかのように、福音は過去最高速で飛んだ。



「千冬姉!!」

「織斑先生…!…って、きやつ!」

7人はかなりの速度でビーチにたどり着いた。が、着くなりいきなり全員のISが量子化、そして、真耶が言っていた通りの事が起きた。

「ブルー・ティアーズ…展開不可能ですわ…」

「僕のラファールもだよ…一体…」

「お前達、詳しい原因とその他の話は後だ。早く花月荘に入れ」

待機状態となったISを片手で握りしめ、7人は急ぎ足ながらも、渋々といった風に駆け出す。

「ファイアス、7機は…」

「エネルギーの補給はできるわ。でも、武装の補充とかは…ちよつとキツイわね。何がどうなっているのかすら分からない状況だし、何より軍用ISが競技用ISをハッキングしてバグを起こすなんて聞いたことが無いし…」

「私もだ。…さて、…不味いな」

一夏、箒、鈴の3人はその一言に驚愕した。

あの千冬から『不味い』という言葉は今まで1度でも聞いたことがあっただろうか、といったところだろう。

「どうしたのですか、教官」

そんな千冬の様子を見て、かつての（今もだが）教え子であるラウラが心配そうに瞳を揺らして聞いてきた。

「…お前達の I S は、ハイパーセンサー系統にもバグが起きているからな…気づかなかったのも無理は無い、が……福音が再起動した」
「はあっ!?!」

「また…ですの…」
「…剣…」

それぞれの反応は予想通り、といったところで、千冬は新たに作戦を告げる。…と言ってもこの7人にとっては作戦になるかどうかすら怪しいのだが。

「お前達はここで待機。…最初と同じように時守のオペレーターをしろ」

「また剣に戦わせるんですか!?!」

「ではお前は無防備な他の生徒を見殺しにしろと言うのか織斑!!」
「うっ…」

千冬の言葉は誰もが思っている事、だが口にしようとはしなかったこと。1度死んだ者を力持たぬ者のために再び戦わせようとするのだから。

「更識、デユノア、オルコット…すまな」

時守の将来の嫁である3人に話しかけようとしたその瞬間だった。

「キアアアアアアアアアアアア!!!」

「ぐっ！」

「こ、これって…」

「福音の……」

花月荘のすぐ近くで、福音が叫んだ。かなり近くに居るのだろう、『銀の鐘』の光が窓から差し込むように入ってきている。

「…IS、複数機確認、削除します」

「な、何アレ!？」

「…新しい…IS…?」

「誰かの専用機かな？」

「それより…削除って…?」

「あんな浅瀬にあつて危なくないの?」

先ほどの大声と、この光で流石に気になったのだろう、専用機を持たない一般生徒が部屋の外には出ていないものの、窓を開けて福音の姿を確認しているであろう声が聞こえる。

『織斑先生…』

ふと、ISのオープンチャネルから、男の声が聞こえてきた。

専用機持ち7人は、チャネルは使えない状態で、福音はこれだけ近くに接近しており、使う必要も無い。ならば誰だ？

とも考えずに、千冬の脳裏には既に1人の顔しか浮かんでいなかった。

「時守か!?!今—」

『知ってます。…フィッティング、終わったんで今からすぐ行きますわ。…後、一っだけ聞いときたいんですけど』

「なんだ?」

『…ナタル乗ってないんやし、福音潰してもイイんすよね?』

「あ、ああ…完全に、はダメだが…」

『んならオツケーツス。…こちとら訳分からんのに付き合わされていい加減腹立ってきたところに、7人にあんなことされてそろそろ限界やったんすよ…』

「時守、お前何を…?」

怒気を孕んだその声は、明らかに福音に向けての物だった。

友達、親友、教員、クラスメイト、そして愛する者の命を脅かす者の存在を見て見ぬふりをする事など、時守には出来なかつたし、するつもりも無かつた。

『ははっ、こっから先は…俺の世界や。いくで金夜叉…』

あるデイスプレイに、海上に姿を現した、第二形態移行を果たした『金夜叉』を纏う時守の姿が写った。

そこにいたのは黒。否、漆黒。

ラウラのシユヴァルツェア・レーゲンよりも深く、全てを飲み込むかのような黒にの装甲に、いたるところに金のラインが走っている。カラーリングだけ見ればシユヴァルツェア・レーゲンにそっくりだが、装甲の厚さや翼部スラスターなど、形の違いははっきりとしていた。

装甲は全体が均一に薄く、例えるなら更識楯無が操る『霧纏の淑女』に近い。

そして翼部スラスターはその数が2枚に減つたが、その1枚1枚が大きく、まるで蝶の羽根のように広がっていた。

さらには『ランページテール』にも変化があり、その数は2本となつ

ていた。…が、ここで驚くべき光景が広がった。

『ワンオフ・アビリティ単一仕様能力、『シンククロ完全同調』発動。…さあて、んじやあちよいと後先考えずに暴れるかア…』

その2本のランページテールが消え、スラスターから吹き出た金の粒子が『金夜叉』を包んだ。

『…シンクロ、まあとりあえずは自我6割、コア4割つてどこかア？ンで、生身の俺の肉体にも電気送れ…このままやったら日イ暮れるわ』

時守はまるで『誰か』と会話するかのように1人で語る。

…そして—

『んじやア……行くか』

音すら残さず、衝撃波のみを発生させ、消えた。

たった1人の最終決戦

「まあだこんなところにいたんか、お前」
「La…」

現在、花月荘のビーチの浅瀬、上空200mの地点で2機のISが睨み合っている。

1機は銀。今回IS学園1年生専用機持ち8人が討伐に当たっていた銀の福音である。
シルバリオ・ゴスベル

1機は金を纏った黒。第二形態移行を果たした『金夜叉』が単一仕様能力の『完全同調』を発動した姿である。

いつもと少し違う口調で、いつもとはかなりかけ離れた雰囲気をつ時守は、無意味だとは分かっているにもかかわらず続ける。

「つうかよお…お前、何が目的や？」
「キアアアア!!」

そのただならぬ雰囲気から何かを察したのか、福音は瞬時に『銀の鐘』を発動。第二形態移行をして、さらにエネルギーを全回復したその翼の光は初めて発動した時のそれよりも遥かに勢いが強かった。

「おっ…なんや、ようやくお前もやる気出てきたっかア？ああ、後一つだけ言うとかくけどな…」

「La…」

時守が話している途中で、福音は『銀の鐘』を『花月荘』に向かってフルパワーで放った。

現在『花月荘』には展開可能なISは0。ISの武装のパワーを持ってすれば一つの宿など一瞬で吹き飛ばせる。

—当たれば、だが。

「…『花月荘』やら中に居る奴らに手え出したらもう二度と動けへんと思えや？」

その言葉と共に、文字通り福音のハイパーセンサーの視界から一瞬で消えた時守が『ラグナロク』を発動させた『オールラウンド』で全てをかき消した。

「なあおい、福音ちゃんよオ…。お前、何を考えてるんや？」

その間に福音は答えない。

「まあお前もISやし、しかも世代は第3世代やろ？…言いたいことは分かる思うけどな」

「La…」

「イメージ・インターフェイスを必要とする第3世代ISに、自我が無いなんてお笑いもんやで？」

「キアアア!!」

福音は短く吠えた。

その照準を移動する時守に絞り、片手で数えられる程の光弾を自身が放てる最高速で放つ。

が、確かにしっかりと照準を合わせたにも関わらず、そこに時守はいない。光弾は宙を駆け抜け、そのまま海に着弾した。

ふいに、背後から声が掛かったような（ハイパーセンサーで声はそのまま耳に入ってくるのだが）気がした。

「第3世代ISを操作するんやったら、せめてものアドバイスや。常に最強の自分を思い描け。言うてもまあ、お前はもう終わりやけど」

な」

「La……」

「人間の筋肉ってのは電気信号を送ることで動かしてるってのは知ってるよなア？ンでこのISと人間の身体の間には僅かながらにも電位差があり、この電位差をできるだけ無くすためにISスーツが作られている……ってな感じやったっけ？ここまでではだいじょぶ？」

「La……っー」

「じゃあもし、……もしもの話やけどな？福音ちゃん。筋肉に許容量以上の電気を流したり、その電位差を0にし、時間差を無くす。……そんな単一仕様能力があつたら……どうや？」

「La……♪」

「ま、そんなだけちゃうねんけどな。ISと操縦者の電位差を無くすってことはその分のラグが消えるってことになってる。……まあつまりや、そんな単一仕様能力があれば現在公開されている全てのISの操縦技術を100%成功させることができ、なおかつそのISの能力を100%引き出すことができるってことや。そのためについて感じやけど、そんなISを乗りこなせるように強制的に電気を身体に流してその反応速度やら移動速度、さらには思考速度までもを遥かに向上させてるんや。加え、五感のうち触覚以外の4つをハイパーセンサーと直接リンクさせることで情報をそのまま脳内にぶち込んで。やかからその単一仕様能力発動中は尻尾とか人間が持っていないもんはISが極力消してるらしいわ。『触覚以外の完全同調』……見て判断してからやつたら……遅いで？」

◇

「す、すげえ……」

「これが……『金夜叉』……」

私、織斑千冬は現在『花月荘』の座敷部屋で時守と福音の戦いを見

ている。

織斑や篠ノ之から『金夜叉』に対する驚嘆の声が聞こえるが…、お前達2人の方がスペック的にはかなり上なんだぞ？

とは言うものの、確かにあの単一仕様能力『完全同調』は強い。第3世代最強クラスの単一仕様能力だろう。…まあ発現している数自体少ないんだがな。

一夏の白式の『零落白夜』は一撃必殺。

箒の紅椿の『絢爛舞踏』は自動回復。

時守の金夜叉の『完全同調』は…言うなれば肉体強化、と言ったところか？

もし時守が言ったように電位差を完全に0に出来ていたら…誰も金夜叉には触れられんだろう。…現に…

「す、凄いよ剣！福音から全然攻撃を受けていない!!」

「まるで未来が見えているかのよう…」

「…違う…これは、…初動のタイミングが…早すぎるだけ…」

『初動のタイミング?』

ほう…、更識は気づいていたか。どれ、答え合わせといこうか。

「更識、お前は分かったか？」

「はっ、はい。…えつと…、多分剣は今、ハイパーセンサーを視覚と聴覚に直接繋げています。さらにISと身体の電位差、つまりはラグを0にしています。…しかも剣自身の身体に強制的に電気を流しています」

「…続けられるか？」

「はい。…言ってしまうえば、見た映像から判断した動きを、そのまま身体の筋肉に移し替えているだけ、言わば反射神経をそのままISに繋いでいるんだと思ったんですけど…」

「まあ正解だな」

「えつと…どういことですか？ちふっ…織斑先生」

更識以外の代表候補生も分かったようだが…やはりというかなんというか…この愚弟は…!

「簡単に言えば、だ。ISを自分の身体を動かすように動かせるんだ。ハイパーセンサーから来る酔いも無し、自分が『こうしたい』と思っ
てから実際にISがそう動く時間差も無し、まさに『金夜叉』自体が
時守の身体のようになっているんだ」

「…そのどこが…」

「強いですか?などと言うなよ馬鹿め。ISバトルにおいて先手を
必ず取れるんだ。操縦することと自身の身体を動かすこと、どちらが
早いか考えれば分かるだろう。タイミングだけではない。自分の身
体として動かしているんだ、出来ない動きなどほとんど無いだろう。
二重瞬時加速、個別連続瞬時加速…その他諸々の高難易度機動もな
」

「…はあっ!」

「ようやく気づいたか。…まあお前達の分かりやすい例で言えば、織
斑の『零落白夜』が自分の意のままに操られたり、オルコットの『ブルー・
ティアーズ』が6機同時に動かせ、なおかつ全てのビットで偏向射撃
が可能であり、自身も自由に動けたり、ボーデヴィツヒのAICが集
中するだけで自分の周り360°に発動できたり…だな」

「ま、マジ…すか…?」

お前の『零落白夜』単発の方が使い勝手がいいと思うんだがな。

「まあ今は落ち着け、時守はハイパーセンサーを常にリンクさせてい
るんだ。こちらからの応援もちやんと聞こえるだろう」



「キアアアア!」

「おっそいわア!!」

このままでは勝てない、そう判断したのか、福音は狙いを『花月荘』に変更。『銀の鐘』と『銀の指揮者』を同時に放った。

『只今より全エネルギーを消費し、『金夜叉』の殲滅とその他ISの破壊を開始します』

「…ふう…。よっしゃ『金夜叉』、全部寄越せ。シンクロ率4:6…ま、40%から100%やな…」

両者が花月荘の前で睨み合う。

時守は守るように、福音は攻め落とすように。

「死なへん程度にぶっ壊したるわ！福音ウ!!」

福音の銀の羽根が、金夜叉の金の粒子が、それぞれ最大まで広がり、拡散した。



ドオオオッ！

「きゃあっー！」

「な、なにこの揺れ!？」

時守が福音を海面に向かって殴りつけ、着水した衝撃が花月荘を揺らした。

座敷部屋にいる千冬たちにも聞こえる程、専用機持ちでない生徒達は騒いでいた。

「…まずいな、このままではパニックになるぞ」

「ですが手の打ちようが…」

「…外を見るなど言っても最早無駄…か。一般生徒には時守は正体不明の謎の機体の討伐に当たっている、ということにしよう」
「分かりました」

真耶に生徒への対応の準備をさせ、再びモニターに目をやる。

『来いやあ!!』

『キアアアア!』

そこには瞬時加速で追い、追われる福音と時守がいる。
現在優勢なのは時守だ。

それもそのはず、福音はエネルギーこそ多いが、装甲はボロボロ。対する時守はエネルギーも多く、装甲もところどころ傷ついているものの、福音と比べればそこまで酷くは無かった。
のだが――

『がアっ!?!……ぐっ……あ……っ、痛覚遮断……!』

『La……』

一瞬、ほんの僅かな一瞬だけ、時守の動きが止まった。
そう――

「まさか…速すぎる動きに肉体そのものがついていけないのか…?」

強制的に肉体を動かし、さらにはISのスペックの最高値を常に出そうとしているため、時守の身体には莫大な負担がかかっていたのだ。…だが、金夜又はそれすらも一時的に忘れされることが出来る。
…故に。

「まさに…夜叉だ。鬼神の如く…ただ戦うために…」

千冬は1人呟く。画面に集中している7人の言葉を代弁するかのように。

『…先に死んだもん負けや。…簡単な話や。エネルギーが尽きる前にどっちが早いこと倒れるか』

『La…♪』

『お前ももうちよいやろが…、俺の身体とお前のエネルギーか装甲…どっちが先にお陀仏になるかや!!』

最後のラストスパートと言わんばかりに、『オールラウンド』を量子化し、己の拳を武器に、時守は福音に突撃する。

『終わらせる…！…ここで…、お前を止める!!』

モニターをアップして見たら、恐らく時守の身体の至る所に裂傷があり、切れた血管から血が流れているだろう。もしかしたら骨に異常があるかもしれない。

しかし、時守は止まらない。その残り少ない時間で、相手を止めるために。

素早く殴り、そして撃つ両者だったが時守は一瞬の隙を突き、二重瞬時加速で福音の胴体へと急接近した。

『おおおおおおお!!!』

『キアアアアアアア!!!』

懐に潜ってきた時守を、待ち伏せていたかのように、『銀の鐘』、『銀の指揮者』を同時にフルパワーで発動させ、殺しにかかる福音。

勢いそのままに、福音を殴り倒そうと、スラスターをふかし続ける時守。

『La!?!』

『身体に限界が来てるのが俺だけや思たんか？ボケが!!』

突如として動きがぎこちなくなる福音。

…これだけ長時間、専用機8機が死ぬ気で戦ってきた。

そのダメージが、今、如実に現れた。

『これで……』

『La……』

『いっけえええええ!!』

座敷部屋に教員、そして生徒達の声が、応援が響く。

声を届ける先は今まさに、右手を福音の頭部目掛けて振り上げ、殴り抜けようとしている人物、

『終わりやあああああ!!!』

この戦いの勝者、時守剣だ。

帰還、帰還

「よつと」

福音の待機状態の…なんやこれ。ストラップ的な？やつを空中でゲットだぜした俺は花月荘のビーチに降り立った。

「あーしんど。腹減ったな…清洲のおばはんなんか作ってくれるかな？」

右手でストラップを投げて遊びながら、ガツシヤガツシヤと花月荘に向かって歩く。いやあく、ISって歩幅デカイからくっそ楽やねん。

「ん？…おお〜」

ビーチの真ん中ぐらまで来たところで、十数人の人影が花月荘から出てきた。こちらにダッシュしてきているのはもちろんアイツらやろな。

「剣!!」

「おー」

「なんだその夏休み明けに久しぶりにクラスメイトに会ったような反応は」

「いやモッピー例え上手すぎな。…いや何て言うか…その…」

「こういう時って『戻ってきたんだな』とか『これで…終わったんだよな』とか言いそうやけど俺は言わん。」

「疲れた」

「アンタそれしか言うこと無いの？」

「喧しいわ。…あのな、俺お前よりも頑張った。だから疲れてる。おっけえ？」

「ぐっ…！な、殴りたいけど…！正論、よね…」

言うちや悪いけどお前『衝撃砲』ぶっぱなしてナタル抱えて戻っただけやん。

「お疲れさまでした師匠！」

「本当に…どれだけ心配したと思っっていますの…！」

「もう金輪際あんな無茶はしちゃダメだからね!？」

「…：良かった…」

ラウラがビシツと敬礼をする。…いや、ここで俺にもしろと？まあ、とりあえずラウラは置いて…：ごめんなラウラ。

「悪いな、…：心配かけた」

「もう大丈夫ですわ。…：しっかりと楯無さんにも報告させていただきましたので」

「え、っ。な、なんて…？」

「『じゃあちゃんとしっかり私達が枷にならないとね』だって。もう、ほんつとに心臓が止まるかと思っただんだよ!？」

「俺マジで止まってんけど」

「…：笑えない…：冗談、言ってる場合？」

「…：ごめん…」

わあ、簪ってジト目になって目からハイライト消えたらすつごく怖いんだね。しかも口だけ不自然に笑ってるから余計に怖いや。

ワンサマ、モッピー、鈴、ラウラ、セシリー、シャル、簪と、皆が

一言言い終えたところで、ちっふー先生がやってきた。
何やら険しい顔で、重く閉ざされた口をゆっくりと開けた。

「よくやった時守…：ISだが…」

「ああ、解除しましよか。よっ」

『あつー！』

あ？…なんや皆急に声揃えて。

「け、剣？痛みは大丈夫なのか？」

「え？…あー、それ心配してくれてたんか」

「当たり前だ。今も見てみる、身体中色々な所が裂けているだろう。
これから骨、脳、内蔵などに異常が無いか検査する、んだが…」

「ま、無事ちやいますね。今も痛覚遮断と演算補助、後は筋肉操作…と
かで立ってますわ」

無かつたらぶっ倒れてるやろな。視界ボヤけて耳もよく聞こえへん、とか普通なレベルやと思うし。

「ふむ…、今はそれでいいが、基本絶対安静で、もし動く時は痛み止めを打って、移動は車椅子でもらうぞ？それと、1度心臓が止まっていた事も含めて、学園に戻り次第精密検査を受けてもらう。時間が少なくなるが…期末テストはお前ならば大丈夫だろう？」

「了解っす」

あー、テストか。ってかもうそんな時期やねんな、早っ！

「大丈夫…ってアンタそんなに賢いの？」

「こないだの小テストでIS関連は8割ぐらいしか取れへんかったんけど…一般科目は余裕やろ」

「まあISに重きを置いている分、少しは簡単でしたけど…」

「それでも世界でトップクラスだぞ？」

セシリーの言葉に同意の意味で頷きつつ、モツピーの質問に反応する。

「ほへへ、すごいな」

「そーいやアンタって受かった高校蹴って来たのよね？」

「蹴らされた、やな」

隣でうぐっ！とワンサマが低く呻いた。：別にお前のせい：いや、お前のせい。：って、さっきからワンサマなんか元気無いけどどないしたんやろ？

「そら、お前達。積もる話もあるだろうがまずは時守を中に入れてやれ」

ちっふー先生に急かされて、俺達は花月荘の中に入った。

：とりあえず、帰還。

飯や飯。

◇

「はい、あーんっ」

「ん」

花月荘の座敷部屋。今日一日大活躍したこの部屋は、夜になった今でも働き続けていた。

今の使用目的は食事。部屋に拘束されていた生徒達、任務に当たっていた生徒数人に加え、食事のタイミングが一切無かった教員達も同

じ場所で食べていた。

そして現在、シャルロットに晩ご飯を食べさせてもらっているのは時守剣。…その理由は…

「ね、ねえシャルロット？時守くん大丈夫なの？顔以外包帯やらギプスやらでグルグル巻きにされてるけど…」

「大丈夫じゃないから、こうやって僕が食べさせてるの」

現在、大絶賛重傷中だからである。福音に何度も回し蹴りをした右脚にはヒビが入り、両腕の筋肉は最早筋肉痛と呼んでいいのかわからないレベルで痛み、無茶な機動により、背筋やら腹筋やらも相当痛めていた。

教員のほとんどが車椅子に乗せてベルトで固定して移動させるのがいい、その方が1人で動きやすいだろう、と提案したが千冬はこれを却下。

『車椅子に乗せたら遊ぶ』という理由で全員満場一致で車椅子(同伴者必須)生活となった。

そして痛み止めと、治療用ナノマシン(ラウラ産でない)を身体にぶち込み、食事をとっていた。

「ん、美味しいわー。全然足らんけど」

「…僕の、食べる？」

「いや、シャルも腹減ってるやろ？俺はこれで我慢しとく…っつていうか、食ってても身体痛いからこれ以上受け付けられへん」

「だーめ、ちゃんと食べないと、早く治らないよ？」

「…おぼはーん」

関東にいる数少ない身内に助けを呼ぶが、大声が出せないで届かない。

「ほら、あーん」

「ん……、食事担当がシャルで…移動が簪、セシリーが身の回り担当
やったっけ？」

「うん。身の回りって言っても、荷物の整理とかだけけど」

「明日、外に出してくれへんやろなあ…」

「…ダメ…」

彼を挟んでシャルロットの反対に座る、簪が彼に死刑宣告を下す。

普通の男子高校生よりも遊び盛りだと自他共に認める、彼にとって
自由時間に遊べない、というのはかなり来るものがある。

「くっ…ふ…う、と、とはいえわたくし達…専用機持ちはデータ取りの
続き…ですわ…」

「マジか、…え？じゃあ他の皆は？」

そしてシャルロットを挟んで時守の反対に座る、セシリアが明日の
予定について継ぎ足す。

データ取り、だが、時守の第二形態以降をした『金夜叉』について
は夏休みに詳細なデータを纏めて取るということ合意。明日は完
全なフリーとなっていた。

「今回の件で中止だって、念には念をって感じだよ。夏休みにも訓練
機を貸し出しすることで対処してみたい」

「へー。…あー、早く金夜叉乗りたー」

『ダメっ!!』

そして機会を伺いISに乗ろうとしても止められる。…活発系男
子はもの見事になることが無くなったのだった。

「くそう…こうなったら気合いで治したる…！シャル、お肉ちよーだ
い」

「ふふっ、あーんっ」



時は流れ、臨海学校最終日。

残りの日は、一夏が相変わらず千冬の出席簿を喰らったり、時守が怪我を忘れて飛び起きたせいで3時間程悶絶したりと、いつも通り男子が馬鹿をしていたIS学園1年生は、クラス毎にバスに乗っていた。

「…だうー、疲れたあゝ」

「バスん中何流そつかな…」

1組のバスの中は他クラスよりも騒がしかった。

一夏はそうでもなかったがその周り、つまりは箒とラウラの席の奪い合い（何故か本音が乱入したが、無事箒が隣、ラウラが前を陣取った）や、夜の海で一夏と箒がキスしかけていたのがどこから漏れてその件について問い詰められたり、データ取りだったり、周りの環境により、一夏は疲れきっていた。

時守は体内投入型ナノマシンにより奇跡的に多少の筋肉痛を除き、ほぼ全回復した。自分で歩いても良いと言われて海に魚（ウツボ）を取りに行ったり、料理を作り数多の女子のプライドを粉々に粉砕したりと、行くところ全てで何かしらの騒ぎを起こし、本人が満足するそれはそれは楽しい臨海学校となった。

「何だろうな…懲罰って…学園に帰ってからって聞いてるけど。剣は何か聞いてるか?」

「夏はポケモ…ん? ああ、アレか。確か『時間内に福音を倒せなかった』ことに対するやつやんな?」

「そう…それだ…」

「肉体的なやつじゃないとは聞いてるで。ひたすら精神的にゴリゴリいくらしいわ」

「……はあ」

バスの中で流す映画を決める係に任命された時守に、一夏は罰の詳細を聞くが、余計に憂鬱になるだけだった。

そんな一夏をすぐさま意識の外に追いやった唯一懲罰を逃れた専用機持ちである時守は、その懲罰の内容をもう知っていた。

「（仕掛ける側も楽しみやからな…、今からウズウズしてくるわ）…ラピュ〇にするか…火垂る〇墓にするか…この前リコピン号泣してたから火垂るの〇にしよ」

「決まったのか？時守」

「はい、これで」

通路を挟んで反対に座る千冬に、映画決定の旨を伝える。彼の隣に座る一夏は先ほどから「…はあ」だの「…罰かあ…」だの「……テスト…忘れてたな。弾…しばしお別れだ」だの言っているが、バスの中をどう楽しむか、これが今の時守の最大の問題である。

「い、一夏！」

さて、映画もいいが他は何をしようか。と考えていると自分の隣に座る人間が、2人の女子に呼ばれる……のと同時に、バスに一夏の知らない、時守のよく知る人物が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」

「へえ、君が…って、剣くんじゃない」

「ん？おっ、ナタル。もう大丈夫なんか？」

「ええ、お陰様で…ね？」

『銀の福音』 操縦者のナターシャ・ファイルスである。

ブルーのカジュアルスーツに身を包み、開いた胸元から整った膨らみを僅かに覗かせ、微笑む彼女に一夏は落ち着きを失い、時守はいつも通り接する。

「そっか。…で、どないしたん？」

「んもうっ、急かさないでよ。…ただ、お礼を言いに来ただけよ。貴方とそこの白いナイトさんに、ね？」

「俺ボッコボコにしてもてんけど…？」

時守の問いを一旦返さずに、一夏の頬にキスをし、その後時守にもしようとするが、人差し指を唇に当てられ、ナターシャは止まった。

「え、あ…う…？？」

「悪いけど、俺はもう居るから」

「あら、そうだったわね。…暴走したあの子を止めてくれてありがとう。あのままだったら、どうなってたか分からないわ。じゃあ、またね。白いナイトさん、剣くん。バーイ」

「は、はあ…」

「バイビー。また夏休みー」

2人でバスから降りるナターシャに手を振る。

「夏休み、か…」

隣に座る一夏に500m1ペットボトル×2が飛んでくるのを尻目に、時守は1人、呟いた。

原作4巻 夏休み編+α
期末テストと(世)紀末テスト

キーンコーンカーンコーン

「そこまで！ペンを置け！すぐにデータを送信するように！」

IS学園の中でも珍しい憂鬱なイベント、期末テストが終わりを迎えた。

IS学園のテストは数年前の紙に問題を印刷して解答用紙に解く：といったものではなく、自身の机に取り付けられたタッチパネルに表示された電子化された解答用紙にペンで書いていく、といったものになっている。

ノートも電子化され、とある操作をすればテスト中にもノートを開けるのだが、生徒全員の画面は教員机にも縮小して表示されているのでノートのカンニングは不可。

各々の机の画面にも特殊加工が施され、横からは全く見えないという仕様になっているのでテスト中の他人へのカンニングも不可。

つまりは自分自身の力がはつきりと出るテストとなっていた。

さらに、テストの採点を全て機械に任せらることで、採点ミスを無くし、一瞬でその全てが終わるのでテスト返却日というものを作る必要が無い。

だが何故か、何故か(一説によれば『テスト後のあのワイワイしたのが良い』という謎の理論により)テストは紙に印刷して返すのだ。解答用紙に生徒自身が書いた形をそのまま超高速プリンター(ISの瞬時加速の技術を応用)で印刷。一学年全員分の解答を印刷しても、5分とかからないので、受けたその日に答案を返却できるのだ。

科目は

一般教科

日本語

数学 I・A

日本史

理科（物理基礎・化学基礎・生物基礎がそれぞれ20分）

英語

と

IS（IS関連全授業を纏めて100分）
だ。

やや日本に偏りがあるのは『は？ISの説明書の言語、並びに説明を英語でしろ？』じゃあ日本語万国共通語にしろよ。他の国とかどうでもいいし』というIS開発者、篠ノ之東の一言が原因だ。

それまで英語と中国語がメインだった地球だが、あつという間に日本語（標準語）が浸透。世界各国の小学校から既にカリキュラムに組み込まれる程になっていた。

まあつまり、だ。このテストにおける日本人のアドバンテージというのほぼ無いに等しかった。

さらには、IS学園はその倍率が軽く一万を超える、ということもあり生徒のレベルも皆高く、平均点を60点ぐらいにするためにかなり難し目の問題となっている。

端的に言えば『鬼畜』である。



「終わった〜」

「終わった…」

「同じ言葉なのにここまで意味が変わるとは…やはり日本語、というものは面白いな」

テスト後、すぐに1年1組はうるさくなくなった。

いつも通りの仲のいい友達と集まり、『今回のテストどうだった？(98点)』『全然勉強してないから無理だったよー(92点)』『あー、私もー。結構遊んじやってさー(91点)』『うちめっちゃしたし。勝った。うちの時代や(35点)』という醜い争いを始める……者はいない。

開放感。

達成感。

絶望感。

騒がしくしている原因は主にこの3つだ。

まだテストは返ってきていないが、手応えやら自信やらで、会話はどンドンと膨らんでいく。

専用機持ち達も、例外では無かった。

「い、一夏さん？そこまで……でしたの？」

セシリア・オルコット……得意科目英語、苦手科目無し

「忘れていたお前が悪い」

篠ノ之箒……得意科目日本語・日本史、苦手科目英語

「流石に、対策がアレだけじゃキツイよね」

シャルロット・デュノア……得意科目数学、苦手科目日本史

「一学期はかなり忙しかったからな。ペースを掴めないと、死ぬぞ？」

ラウラ・ボーデヴィツヒ……得意科目IS、苦手科目日本語(本人自覚無し)

「いっちゃん!!勝負、忘れてないわよね！」

凰鈴音……得意科目IS、苦手科目数学

「やめてくれよ、鈴……これ以上傷口に塩を塗りたくらないでくれ……」

織斑一夏……得意科目日本語・日本史、苦手科目IS

「傷口に塩で……そんなむずかったか？」

時守剣……得意科目一般教科、苦手科目無し

「……お姉ちゃんに聞いたら、去年と同じぐらい……らしいよ？」

更識簪…得意科目数学・理科、苦手科目無し

IS学園一年生専用機持ち、ここに集結。



「にしてもISの問題ふざけすぎやろあれ」

『モンドグロツソ第一回大会の優勝者の名前を答えよ』とかね…試験官が答えな問題って…。答えられなきや…どうなるか」

『ISの開発者を答えよ』…まさか自分の姉がテストの問題になるとはな

「それを言えば『女性優先法を無くすきっかけとなった男性操縦者の片割れを答えよ』なんて本人だぞ？ですよね？師匠」

「ほんまそれな。答えに『俺』って書いたるか思たわ」

計6科目を2日に詰め込み、午後が完全にフリーとなった8人は食堂でだらけていた。

「けーんくん！」

1人、追加である。背中に抱きついてきた刀奈を体勢を全く崩すことなく受け止めた。

「お、カナ。どうやった？」

「ん？学年トップだけど？」

「なんや、やっぱ一緒か」

「うう…あそこで計算ミスをしていなければ…！」

「皆レベル高えよなあ…」

一夏の言う通り、代表候補生並びに国家代表の学力レベルはかなり高い。

現状、学力で言えば時守、セシリア、シャルロット、簪、ラウラ、鈴が上位に固まっており、箒、一夏はその少し下にいる。

結果は先程返ってきたテストが参考だ。

「それにしてもあの岸原さんは凄かったよね」

「返ってきた瞬間にガッツポーズする者などいるのだな…日本の学生というのは皆あなのか？嫁よ」

「い、いやあ…皆が皆って訳じゃないけど…」

この時、一夏の脳裏には2人の男の姿が浮かび上がった。

1人は自分。中学時代に平均点を下回らず、千冬に怒られないと安心する姿。

1人は友人の五反田弾。平均点ギリギリをとり、『よっしゃあゝ！』とクラスで叫んでいた姿。

IS学園に入った自分を羨ましがっていた彼は元気だろうか、と考えていた一夏はすぐに自らの身を案じることになる――

「そういえば…皆織斑先生からの罰って今日よね？」

『うゝっ！』

いつの間にか時守の膝の上に座っていた楯無の言葉により。

「確か放送で呼び出されるって聞いてるけど…ああ、だから皆ここにいるのね？」

「そゆこと。あー楽しみ」

「…なに、されるのかな」

簪の口からポロツと出たその言葉は、残った6人の不安を煽る。

「…だつ、大丈夫よ！いくら千冬さんでもそんなえげつない事しないわよー」

「そ、そうですわ！精神的にゴリゴリと言われてるので…、精神的に…」

鈴に乗ったセシリア、自爆。

「うむ。教官の教えを直々に受けられる…のだ。……………懲罰用の」
「ら、ラウラ…懲罰用とか言わないでよ…」

「ほ、本当に千冬さんは何をするんだろうか…」

「1つだけ言うなら俺のやってる訓練の1つやな」
『え?』

罰を受けない予定である時守の一言に皆、反応する。
訓練の1つ。

ということとは非人道的なことは無いのだ。

「やから、普段俺がやってるやつ」

「ど、どんなやつだ!?核爆発が起きたり隕石が落ちてきたり天変地異が起きたりしねえよな!」

「ん?簡単やし、まあ人によると楽しいけど…まあ俺は萎えたな」

〜数時間後〜

「一夏あ!早く決めなさいよお…!」

「帰りたい…」

「は、早く終わらせてくれ…嫁よ…」

「わ、分かってる!!今度こそ…!」

第二アリーナ。そこに、専用機持ち達は集合していた。

地上でそれぞれISを纏いながら、鈴、シャルロット、ラウラが声を上げる。

一夏は1人、空に向かって飛び出した。罰を終えるために。

「あつまーい」

時守剣に一撃入れるために。

雪片式型をオールラウンドで上に弾かれた一夏は、自らの腹を相手に思い切り見せる形となった。

『グングニル』！

「ぐあっ！」

「……27回目、だね」

「一夏さん1人だけが残るようになってから5回目ですわ」

「…剣…捉えにくい」

「まあ流石は国連代表、なのか？…では、28回目!!」

今回の罰『時守剣に一撃当てるまで帰れま10』はまだ続く。箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、一夏と順に時守と対戦していき、全員が初撃を当てたらクリア。逆に初撃を誰かが当てられたらもう一回遊べるドン。

見事に『グングニル』を喰らった一夏がアリーナのグラウンドに激突したのを合図に、再び箒が向かっていく。

作戦を立てるために、オープンチャネルすら切り、近くに集まって話す。

「わ、悪い皆…」

「次よ次！…まあ…た、確かにアタシも刀と荷電粒子砲だけで一撃つて言われたらキツイけど…」

「よくよく考えたら剣さんはこれを織斑先生相手に…?」
「…『完全同調』使われてたら僕たち明日の朝までやってそうだよね」
「言わないでくれシャルロット。3回目に師匠がふざけて発動した時のアレを思い出してしまったではないか」
「それって…ラウラが4秒で一撃受けた時の…?」
「アレはやばかったな。お、箒がクリアだ」
「では、行ってきますわ!!」

赤が空から降り、蒼が空へと駆けていく。

「ふう…剣がまだ『紅椿』の武装をよく知らないおかげでなんとか、と
いったところだな」
「?武装を知らない?」
「ああ。…シャルロット、お前達じゃなかったのか?テスト前、剣にI
S関連のことを触れさせないようにしていたのは」
「い、いいじゃん!だって…また怪我しそうなんだし…ああ」
「あ?」
「剣って…一夏の雪羅…知ってるのかな?」
「…あ。…ぷ、プライベートチャンネルで連絡してくる」
「う、うん」

〜30分後〜

「なんやねん…荷電粒子砲て…」
「本当に知らなかったんだな…」

見事『時守剣に一撃当てるまで帰れま10』をクリアした7人と、その相手であった張本人、時守剣は時守の部屋でだべっていた。

「だって…：ISISに関することほとんど禁止されててんもん」

「どうせ剣くんのことだもん。また完全同調して身体ボロボロにして帰って来ちゃうんでしょ？」

「…そんなに信用無い？」

「…：怪我の面だと…無い」

「うっ、…善処…します」

何かしらの事件がある度に怪我が酷くなっている…：一体誰が信用するのか。

「こほんっ…と、ところで剣さん？…：その、夏休みの予定は…」

落ち込む剣に助け舟を出しつつ、自らの自宅に呼ぼうとするセシリア。…：だが、2人の関係をそこにいる誰もが知っているので咎めたりはしない。

「夏休み…？…：日本にはほとんどいーひんで。ニューヨーク行ってイギリス行ってフランス行ってエジプト行ってインド行ってロシア行って中国行ってニューヨーク行って学園戻ってきて家帰ってニューヨーク行って…：」

「世界一周旅行かよ!!」

「…：全部模擬戦とデータ取り…：後はお偉いさんとの会談にテレビ番組の出演に雑誌の取材、写真撮影に接待…：」

「うわあ…：ま、まさかそこまでとは…」

ツッコミを入れた一夏、気持ちを素直に述べた楯無以外のメンバーもあまりのハードスケジュールに同情するしか無かった。

「4人の家への挨拶も済ませる予定やねん。…：俺が死んでなかったら」

「福音の件があるせいで説得力が馬鹿にならないな」

「…テレビ電話で『軍人さん、いっぱい呼んでるからねー』とか笑顔で言われてみ。引くで」

各々想像する。…軍服を着た大人達がぞろぞろ自分の前に現れ、片っ端から模擬戦をしていく…。(精神的に)無理である。(肉体的にも)無理である。

「やから4人に会える時が唯一の癒しやねーん。簪ー」
「…うん」

息を吐くかの如く惚気、近くにいた簪を自分の膝の上に乗せ、抱きしめる。

「あー、…このサイズ感…たまらん」

「なんかピツタリ収まってるって感じだよな」

「そこは簪ちゃんの特等席よね?」

「あう…」

真っ赤になった簪をさらに強く抱きしめる時守。
そしてその様子を見守る7人。

IS学園に、久しぶりに平和な時が流れようとしていた。

弾蘭劍

「はあ…」

「せ、先輩…相当溜まっていますね…」

織斑千冬は疲れが溜まっていた。どの程度、とは表せない程に。

職員室に置かれた自らのデスクで数時間作業した後、周りに誰がいるかも確認せずにため息を吐く。

「分かるか?…」

「え、ええ…どうしたんですか?」

「…明明後日に控えた時守の出国に合わせて、…担任である私がスケジュールの管理をしろと…、IS学園、国際IS委員会、国連から言われてな…つい先程終わったところだ」

「お疲れさま…です。コーヒー、入れましょうか?」

「頼む」

その返事を聞き、真耶はインスタントコーヒーをカップに入れ、熱湯を注いでいく。

ふと、注ぎ終わったところで疑問が生じた。

「そう言えば時守君の予定ってどんな感じなんですか?結構軍事的なことも…」

「ここが職員室だからってそういうことをあまり大きな声で言う物ではないぞ?…まあ今は私達しか教員はいないが…くそっ!今頃あいつらは…」

「乳ぐりあってますよねえ。予定が『合コン』『海』『デート』ですから…」

「ふんっ!…いつそ振られてしまえ。ああ、ありがとう」

際どいビキニ、そして合コンする相手のスペック、デート先のチケット等を終業式の朝に職員室で自慢してきた同僚に呪詛を吐き、真耶からコーヒーを受け取る。

「…つと、そうだ、時守の予定だったな。そら」

「わっ、…お、重っ!?!これほんとに予定なんですか!?!」

「会談で使う資料等のコピーも入っているがな。全く…私はこういった細々とした作業は苦手だと言ったのに…」

「とはいえ完璧じゃないですか。…予定が分刻みなのが気になりますけど…」

「最早アイドルだからな、今のあいつは」

「そういった才能…というか普通の人とはちよつと違うベクトルで凄いですよねえ…そう言えばこの前のテストもそうでしたよね」

「ああ」

資料を受け取り、自分のコーヒーも入れ終わった真耶が思い出すのはついこの前行われた期末テスト。

「毎年1年生のこの時期のテストに出している恒例の『なぜISが女性にしか使えないか、自分の考えを述べよ』。今後のISの各国の技術の向上のために、良い案を實際乗る立場である生徒からヒントを聞き出すためにやっているものなんだが…まあ今年は『なぜISが基本的に女性にしか使えないか、自分の考えを述べよ』だったがな。今年の専用機持ちがおかしかったんだ」

「去年までは『女性の方が男よりも優秀だから』とか『女性の復権のために篠ノ之博士がお作りになられたから』とだったんですよ?」

「そうだが、まああの馬鹿は見事にその風潮もぶち壊したからな。今年は『織斑君に会うため』とか『老化防止』とか『乳がん予防』とか…何の関係があるんだ。真面目に書かなければ減点されるという事ぐらい分からないのか…」

「あはは…。せ、専用機持ちって…ああ…篠ノ之さんたち、ですか…」

思わず真耶ですら苦笑いをしてしまう。…今年も女尊男卑の回答が無かった分、少し狂った回答が多かった。

「篠ノ之は…『姉さんの思い付きです。すいません』だな」

「テストで謝るってどうなんですかね…」

「ちなみにこの問題を解く時、箒は心の中で姉に巻き込まれた人に頭を下げた。」

「オルコットは『女性の立場の回復のため』…か、まああいつの経歴を知っていたら否定はできないな」

「オルコットさんは今まで一人で頑張ってきましたからね。時守君に会えて良かったですねえ…」

「その結果先を越されたがな」

ナニの、とは言わない。

「凰は『たまたま』…こいつ欠点にしていいか？」

「だ、ダメですよ!!凰さんは他のところはしっかりしてるじゃないですか!」

「いやどう考えてもふざけてるだろ。だがまあ、欠点がダメだと言うなら…二学期に特別メニューでも組んでやるか」

「(ごめんなさい凰さん!欠点の方が良かったかも知れないです!!)」

鈴本人のいない所で処刑が確定し、真耶は心の中で涙を流した。

「デュノアは『現状ではまだよく分かっていない所も多いので、将来はどんな男性でも乗れるようになるかも知れません。ISというのはまだ未完成です。なので女性だけ乗れる、というのはまだ解明されていない所があるかもしれないからです』……………」

織斑一夏、欠点回避。

「……次の…次のあの馬鹿が問題なんだ…っ！」

「また職員会議開かれましたからねえ…」

あはは、と先程よりも何とも言えない苦笑いをする真耶。…IS学園の教員を再びどん底に叩き落とした時守の回答、それは…。

「時守…。」『ISコアにエロいおっさんが居るからです。自分と一夏は第二形態移行する時に、少女のようなISの人格に出会いました。しかしこれは、白式と金夜叉が他と違うだけなのです。普通のISのコアにはただのどスケベなおっさんが住んでいます。そのおっさんは長時間美女、美少女に纏いつくことで快感を覚え、その快感が絶頂に達した瞬間、第二形態移行する…と、思います。この仮定だと全てが当てはまります。おっさんは美女、美少女が大好き。長時間抱きついていた。一緒にいたい。でも男は嫌。故に女性にしか反応しない。しかもIS操縦者は美人が多い。…だから、普通のIS操縦者はISを纏っているとき、常に全裸のおっさんが抱きついているのと変わらないのです。これだと、ISが女性にしか使えないということが証明できるかも知れません』…こんなもの世界に公表してみる。IS乗りが揃って自殺するぞ」

「…打鉄とか、大丈夫ですよね?」

「…何とも言えん。ただ、私の暮桜は女性だった」

「えっ?! 会ったんですか!?!」

「私だって第二形態移行ぐらいしている。…でないとモンドグロツソで優勝などできん」

時守剣、またも世界を揺るがしかける。

「だがな、認めたくはないんだが…合っているんだ…。あの、時守の馬鹿みたいな仮説が…!」

「ですよね……胸を鷲掴みにされて脚にもしつかりとした装甲が……後ろから絡みつくように抱きついてるってことですよね……」

「他の仮説を出しても……これ以上に説得力のある仮説が出ないんだ……」

「そ、そうなるなら篠ノ之博士は467人のどスケベなおっさんと一時は一緒に生活を……」

「やめてやれ……やめてやれ」

篠ノ之束、もしかするととんでもない環境に住んでいるかも知れない。

「公表は……？」

「控えておけ。いいか、振りではない。絶対にやめろ」

「は、はいっ……ところで……その時守くんは？」

「……今織斑と遊びに行ってるるところだ。男友達を紹介するらしい」

千冬はこの時既に確信していた。

弾あの人と剣、仲良くなれない訳がない……と。



「ピンポン!!!」

「なんでインターホン押さずに口で言うんだよ……」

時守剣、織斑一夏の2人は『五反田食堂』に足を運んでいた。

関東に来てからというものの、身内が清洲景子1人という時守に自分の男友達を紹介したい。と一夏が申し出たのだ。

「いや……インターホンうるさいかなって」

「じゃあ何のためのインターホンなんだよ!?!」

物音の正体はこの家の住人にしてカースト最底辺、五反田弾である。



「で?」

「で?」

「いや、で?ってなんだよ。あとなんで剣も弾側なんだよ。お前こつち側だろ」

「いや…そりや何となくやろ」

「言うと思ったよ!!」

五反田弾と時守剣は10秒で打ち解けた。

『時守剣!』

『おう。なあ、う〇こしていい?』

『え、お、おう。二階上がってすぐの所だ』

この会話だけで、見事、一夏の仲介無く、仲良くなった。

「でき、実際どうなんだよ。ハーレムなんだろ?」

「おう。ハーレムやな」

「認めるなよ!…って言いたいけど剣は確かにそうだよな」

「は?」

「いや、こいつ世界公認でハーレム作ってんだよ。嫁さん4人」

「てめえふざけんじやねえぞ剣!!どんなだ!!どんな人たちだ!」

「ん」

そうやって時守は弾に携帯の写メを見せる。そこには背もたれの無い椅子に座る時守と4人の美女が。

「この俺の背中に抱きついてるのがロシア国家代表の更識楯無。左腕に抱きついてるのがフランス代表候補生シャルロット・デュノア。右腕に寄り添って肩に頭乗せてるのがイギリス代表候補生セシリア・オルコット。んで膝の上に座ってるのが日本代表候補生の更識簪。いや…もう、な?…皆可愛すぎて辛い」

「当たり前のように惚気けるな!!それにしても、姉妹井十金髪井…なのか?…しかも全員美少女に美女だらけ…く、くそう…羨ましいが…!この救世主ならいいと思う自分がある…。剣がいなきや今頃やばかっただろうし」

「弾の言う通りだよな。剣がああ言ってくれてからこっちもだいぶ暮らしやすくなったし」

「ほんと、これで蘭も丸くなってくれたら良かったんだけどなあ。つたく!にしても羨ましいぜお前ら!!」

弾が考えているのは自分の妹である五反田蘭、中学三年生。

想い人の一夏の前ではお淑やかに演じるようにしているのだが、普段は男勝りな性格で、少々荒い所もある。

「お兄!!きつきからうるさい!!」

このように無断で兄の部屋に侵入し、怒鳴るぐらいに。



「(えっ…。…い、一…夏、さん?…一夏さん!?な、なんで一夏さんがまたお兄の部屋に!?!…ってかこの人…ええ!?!ほ、本物!?)」

五反田蘭は困惑していた。

寮生活している一夏にまさか一学期中に2回も会えるなんて。

新たに教科書に乗った人物、時守剣に会えるなんて。

「おい蘭！お前またそんなラフな格好して…！お客さんも居るんだぞ！」

「…え？」

いつもはお兄（昔はお兄ちゃんと慕っていた）と呼んでいる弾に言われてはっ、となる。

お客さんⅡ国連代表時守剣。雑誌やニュースで良く取り上げられており、その回数は一夏を越える。学園内で明かされている成績等もかなり優秀であり、例の件（婚期）も考慮され、彼の一举一動に全世界が注目している。

ここまでは大丈夫だ。問題ない。

だが、気になるのは兄が言ったもう一つ。

「（ラフな…格好…？）…あつ…」

短く声が漏れる。

今日の格好を自分で思い返して、そして自分の目で見ると。

期末テストも終わり、終業式までの期間の謎の休み（三者面談用）で、今日は生徒会の集まりも面談も出かける用事も店の手伝いも無かったはず。

そして久しぶりに一夏に電話でもしてみようか、と考えていたこの朝。当然、寝巻きやパン、全裸等ではないが、へそが出る程短く、そして少し屈めばCカップの胸の先端まで見えそうなタンクトップにハーフパンツ。

完全にやらかした状態である。

「（ど、どうしよう！また一夏さんの前でこんな格好を…！ってかバカ兄もちゃんと言っておきなさいよ…ま、まずい…。このままじゃ…。一夏さん…はダメ！お、お兄！何とかして！）」

この場にいる、遠慮の要らない人物に助け船を求め、が―

「（なんでこんな時に携帯いじってんのよー!!）」

失敗。…もう諦めかけたその時。

「お？蘭…ちゃん？で、いいんか？そんな格好でそんなとこいとかなと着替えてこつち来たら？今日は一日勉強休みつてことで」

神が降臨した。

自分に着替えのチャンスをくれ、さらには一夏と同じ部屋（他男子2人込み）に居られる理由を作ってくれた。

…勉強やつてる場合じゃねえ。

「は、はいっ！そうします。…では、失礼します…。お兄、覗かないですよ。」

「はいはい覗きませんよ」

バタンツ

少し強めにドアを閉める。

部屋の中の

ブツ！『あ、屁え出た』『くっせ！おま…っ！人の部屋で屁こくなよ！』『蘭来る前に換気しようぜ。弾の部屋入った時イカ臭かったし、それに屁の匂い入って今意味わかんねえ匂いになってるしな』『これだから童貞は…』『隣に蘭が居るんだからでかい声でそんなこと言うな！…っつか剣お前童貞卒業してんのかあああ!!!』
とかいう会話は一切蘭には聞こえていない。

「な、何着ようかな…」

好きな人の前では、可愛く居たい。その思いでいっぱいだった。

◇

「お、お待たせしました」

「おー」

蘭が部屋に入ると、3人は完全にだらけ切っている状態だった。聞きたい事は山ほどあるが、…と、思った瞬間、再び神が降臨なされた。

「蘭ちゃんアレやる？来年IS学園受けるんやろ？」

「はいっ！」

「んじやアレか。やっぱISで気になる事とかあるんちゃうん？」

ナイスタイミングで話題を振ってくれた。…この人はIS操縦者よりも番組MCとかの方が向いてるんじゃないか、と思った蘭であった。

「あの、時守さんって…千冬さんに勝ったんですか？」

「え？ちっふー先生に？…まあ、ISでは勝ったっちゃ勝ったけど…整備不良と油断してたから、やからな…」

「生身で何勝何敗だっけ？」

「0勝653敗」

「あ、あはは…流石千冬さん…」

将来の義姉（予定）の凄さを改めて知る。…と、ふとここで疑問が生じた。

「そう言えばお2人のIS適正、ってどのくらいなんですか？」

「俺は…この前検査受けた時はBだったな。剣は？」

「うーん…臨海学校始まる前はAやってんけどな。多分またこの夏検査受けるわ」

「えっ…夏も学校あるんですか？」

「あるっていうか…全寮制やし、学園でなんかするって奴も多いねん。…まあ俺は招集とかあるから世界中回りまくるけど。ワンサマは？」

「俺は半分以上が企業の人達とのこ難しい話だ」

「ふ、2人の話聞いてたらやっぱりIS学園にそこまで行きたくなく

なってきたぜ…」

「流石は男性操縦者ですね…。あ、あの！もつと聞いてもいいですか？」

「ええよ」

こうしてこの日、五反田蘭はIS学園への志望をより強い物にした。

大人のお姉さん， S（笑）

「来てくれたね、ミスタ時守」

「おー、事務総長おっすおっす」

時守はニューヨークにある国際連合に来ていた。

ISが開発、発表されてから国連にはIS学園に勝るとも劣らないIS設備が作られるようになった。

国際親善試合等に用いられることも多いアリーナ、世界各国から集まったトップクラスのスタッフで構成されている開発部、大半がIS学園整備科卒業生の整備部等など…『教育』という観点ではIS学園には劣るが、『競技』や『技術』で見ればIS学園には引けを取らない程の設備が揃っている。

「では早速、第二形態移行をした『金夜叉』を見てみたいんだが…」

「おっけー、今日はスタッフさんに預けて、細かい動きとかは明日以降に見る、でええんやんな？」

「相変わらず理解が早くて助かるよ。ジムや射撃場などは空けてあるから自由に使ってくれても構わないし、各国代表も少しは集まってるから喋っても良いよ？」

「了解っすー。あー、お土産とか見よかな…」

「それは構わないが…外に出る時は必ず誰かしら国家代表と一緒に行動してほしい。君のISは一日預かるからね」

「へーい」

「まあ、外では少し制限はあるが、今日は一日オフだ。…後から来るミス織斑にも同じことを言っしてほしい」

「うーい。んじゃ、行ってきまー。…ミス織斑…：I think that Orimura can't marry forever

e r. …ま、嘘やけど」

自分のコーチにとって、凄まじい破壊力を誇る暴言を吐きつつ、時守は技術研究所へと向かう。

「今日どないしよかな…。国家代表多い言うてもカナおらんとか…死にたい…。言うちや悪いけどおばはんだらけやしな…」

言うちや悪すぎである。

◇

ISを預け、ぶらぶらと施設内を歩く。

「おばはーん」「おーばはん」とつぶやきながら歩く時守は多くのIS操縦者の心を抉っていった。

ISが出来てから、国連には『ISO』なる組織が作られた。独立した建物を貰い受け、そこに様々な施設を詰め込んでいる(ちなみに、今日時守が訪れているのもこの場所だ)。

IS関連しかない、というところで施設内にはやはりというか、女性が多い。数年前までは全体的に見てロボット研究部門は男性の方が秀でていたので、中には男性スタッフもいる。…新たな武装の開発には、少年の心も必要なのだ。

「そんなおばはんで大丈夫か?…大丈夫じゃない。大問題だ」

「だあれがおばはんだ?とつきー」

そんなことを1人喋っていると、ふと背後から声をかけられる。

聞いた数こそIS学園の生徒の声よりかは少ないが、女性にしては特徴的な口調。

ギギギツと壊れかけのブリキ人形のように振り向くと、思い描いていた通りの人物、アメリカ国家代表、イーリス・コーリングがいた。

「んげっ!?!…いい、イーリ…」

「ほら、可愛がってやるから早く第2談話室に來い。お姉さん達がたっぷり、虐めてやる」

「いや…いいわ」

「ドン引きするな!!おら行くぞ!!」

「いやああああ!やめて!!えっち!イーリのスケベ!!どうせ年下の男の子を虐める趣味でもあるんでしょ!?!このシヨタコンドS!!」

「おまつ…!黙れ時守!あたしはシヨタコンでもねえし第一お前もうシヨタって年齢じゃねえだろうが!!」

「年下の男の子を虐める趣味を否定しやんって…いやああああ!やっぱりえっちなことされる!!ぐちゃぐちゃにしゃれゆううう!」

「…つくそ!おら!!」

「ふみゆっ!?!ちよっ!ファンクエは反則…!」

彼女の専用機『ファング・クエイク』が展開され、その手のひらに頭を鷲掴みにされる。この時、頭が潰れないようにする力加減ができるのは、流石は国家代表といったところだろうか。

「さて、お姉さん達とイイコトして遊ぼうな」

時守剣、拉致られる。



「ごきげんよう、剣くん」

「お久しぶりです!大先生!!」

「まああたしもやっとか。久しぶりだな、とつき」

「…で?なんで私までここに呼ばれたんだ?」

「あら?ここにいるメンツの共通点ぐらい、千冬なら直ぐに分かると思うけど…」

談話室で時守の前に座る5人の女性。

ナターシャ・ファイルス（未婚）

クラリツサ・ハルフオーフ（未婚）

イーリス・コーリング（未婚）

織斑千冬（未婚）

アヴリル・エリセ・ファン・スースト（未婚）

皆、国家代表であったり、軍属の操縦者であったりする者達だ。

「よっ、ナタル、クラリス、イーリ、ちっふー先生、アヴリルさん」

「このメンツにそんな挨拶できるなんて剣くんぐらいよね？」

「国家代表、元国家代表が3人もいるなかで堂々とできるとは…！尊敬します大先生!!」

「おいクラリツサ。お前はいつからこの馬鹿のことを大先生などと呼ぶようになったのだ？」

千冬がドイツIS配備特別部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』副隊長であり、階級は大尉…そして何故かいきなり時守に敬礼しだしたクラリツサに問う。

「はっ！私が大先生の呼び方で隊長に提案させていただいた案の中で隊長が『師匠と書いて先生と呼ぶ…』というのはいいな。よし、これから私はあの人のことを師匠と呼ぶ！』と仰ったので、隊長が師匠と呼ぶなら私たち『黒ウサギ隊』の隊員は大先生のことを大先生と呼ぶようにしました!!」

ズビシツと今度は千冬に向かって敬礼するクラリツサ。

普段は普段でオタク気質のある奴だが、しつかりする所はしていた…が、どうもこいつはラウラが関わるとポンコツになるな…

と、千冬は嘗ての部下への印象を改めたと同時に頭を抱えた。

「教官もいかがですか？」

「いらん。それよりもナタル、もう身体は大丈夫なのか？」

「まだちよつと疲れはあるわ。…んもう、どこかの誰かさんがあんなに激しくしたから…」

「おいナタル、お前ただ殴られただけだよな？なんで頬を染めてるんだよ…」

「イーリったら、ノリが分からないと今の世の中生きていけないわよ？30越えても未婚とか、嫌でしょ？」

「なっ…、は、はあっ!?べ、別にあたしはけっ、結婚なんてまだしようとは考えてないし…っ！で、できるとも思ってたねえよ!？」

「まだ考えてない、つてことは将来は考えてるの?…後、できるとも思っていないって…求婚されたら受けるってこと?」

「…んなっ!…あつ、…ああつ…あうう…」

「乙女ですかアメリカ国家代表」

「別にいいじゃないかクラリツサ。こいつもただの1人の素敵な恋に憧れる少女だったというー」

「あれ?ちっふー先生も『出会うなら、合コンじゃなく、素敵なおバー』とかいう川柳読んでませんでした?」

「ぶっ!？」

まさかあの黒歴史を聞かれていたとは…完全に不意打ちだ。

…まずい。吹き出したと同時に俯く事には成功したが、今は顔を上げたくない。現アメリカ国家代表のイーリス、モンドグロツソで共に競い合ったスペイン国家代表のアヴリル、そして昔の部下のクラリツサに単に友として仲のいいナターシャに知られた。

全員がニヤニヤしているだろう。…どうする…?」

その考えが出た瞬間、千冬にはある答えが出てきた。

「んん、っ！と、時守っ！お前は、最近調子はどうなんだ?」

迷った時は直ぐ時守へ。

「明らかに話反らしたっすね…。で？なんの調子っすか？」

「…ISだ」

「ま、調子はいいい…とは言えへんねんなあ…」

「なに？」

調子がいいとは言えない？…第二形態移行をして楽に、そして機動も何もかもが格段に上昇したのに…か？

と、千冬の中に疑問が巡る。それは時守の第二形態移行を聞いていた他の4人も同じようで、代表してナターシャが怪訝な顔で尋ねる。

「剣くん？第二形態移行、したのに調子良くないの？」

「まあなー、簪や楯無にも見てもらってんけど『金夜叉』のワンオフがな…まだ解明できてない所があるらしくてな…ちっふー先生、そういうのに詳しい人誰か知りまへん？」

東…という考えが出たがすぐ様消えた千冬を攻める者は誰もいないだろう。

「すぐには出てこないな。探してみよう」

「あざっす」

「で？それだけでお前の調子が悪い理由にはならないはずだが？」

世界最強…否、担任はやはり鋭かった。

『完全同調』

現在、発現している単一仕様能力の中でも相当使い勝手が良い単一仕様能力。解明できていない所があったとしても、十分使える能力である。だからこそ、解明できていないだけで時守の調子が良くない理由にはならない。

「…流石にばれますか。実は『オールラウンド』の使用可能モードが全く変化無いんですけど…残りの容量が若干減ってるんすよ」

「ほう……ということとは、ワンオフ同様何かしらまだ分かってない所がある、ということか？」

「そつす。ISってあれでしょ？操縦者の成長でも進化するんでしょ？やから俺もあんまり強くなつてないんかなーって」

そう言いつつ、時守は頭を軽く掻いた。

困ったような表情を浮かべる彼に、1人の国家代表が口を開いた。

「いや、そんなことねえだろ。乗り始めて数ヶ月で国家代表に勝てるようになってきてる奴が強くなってねえとか……ありえねえ」

「あらいーり、随分と剣ちゃんにお熱なのね」

「ちつ、ちげえよアヴリル!!そういうお前はどうかなんだよ!!」

スペイン国家代表のアヴリルにからかわれたアメリカ国家代表のイーリスが顔を一気に赤くして否定する。そして反撃する……が

「私?…愛人ならいいかなあつて」

「あつ!?あ、愛人!？」

「ええ。だって、剣ちゃんでしょ?本妻は4人だけど、愛人ぐらい作ってもいいんじゃない?」

「枯れるわ!!」

「あ、それもそうね。じゃあ遠慮しておくわ」

「あんたが言い始めてんやろ!!…ほんま…疲れるわ」

失敗。アヴリル、やはりよく分からん……とイーリスは心の中でため息をついた。

急に愛人なら可、と言われ焦って返した時守も同じく。

スペイン代表、アヴリル・エリセ・ファン・スースト

前回のモンドグロッソでイタリア国家代表のアリーシャ・ジョセスターフに惜敗。その後後継となる実力者が現れなかったため、継続して国家代表の地位についている。

楯無とは少し違うベクトルの『考えが読めない』雰囲気、見事にISバトルでも発揮しており、相手の思うように試合を進めさせない戦法を得意とする。

機体も、高機動高火力重視だが戦法は攻めか守りかで言われたら守り、という『よく分からないセオリー外れ』の戦いをする事で有名で、『正体不明の矛盾』という異名を持つ。

「疲れてるのなら、休む？」

「誰のせいや思とるんやろな、この人は…、アヴリルさんは何しはるんですかー？」

「私は…どうしようかしら」

「呑み行くって言ってただろ？アヴリル。あたしとお前と千冬の3人で」

「あ、そうだったわね。そう言えばここが集合場所…だったかしら？」

ニューヨークの国連本部を何に使っているんだ貴様ら、と言いたいが一般人は絶対に言えない。何故なら彼女達が国家代表であり、世界最強だから。

「クラリツサはどうするんだ？」

「はっ！一旦秋葉原によってからドイツに戻ります!!」

どこが一旦なのだ、とは千冬はツツこまなかった。この『シユヴァルツェ・ハーゼ』の副隊長、自らの趣味になると千冬でも静止が効かない。かつて交流を深めようとして3時間弱、彼女の趣味について語られた後、『まだまだありますが、時間が時間ですね…。今日はここまですべておきます!!』と敬礼されたのはいい思い出である。……いい思い出なのだ。

その経験から察した。今回『いったいどこが一旦なのだ』とでも返してしまっただが最後、『きよ、教官には理解いただけないかも知れませんがあの聖地には…』と延々語られることになる。自分もめんどく

さいし、何よりこの場にいる他の者に申しわけない。何より早く呑みに行きたい。だからあえて

「そうか。ナタルは…まだ全快ではない、のか？」

スルーし、友人に話を振った。その友人も、またこの場にいる他の数人も、クラリツサの趣味を理解しているので千冬に乗ることにした。

「そうね、遠出が許可されてないし、何よりその3人と呑む体力なんてないわ」

「人を化け物みたいに言うなよナタル」

「あら？その通りじゃないの？イーリ」

よし、なんの違和感も無く話題を転換することに成功した。

千冬、ナターシャ、イーリスの3人は目で合図をし、心の中でガッツポーズをする。時守とアヴリルは我関せず、といった具合に『アヴリルさんはすぐ結婚できる思うけどなー』『そう？なら次のモンドグロツソ終わったら引退しようかしら』などと呑気に会話を繰り広げている。

そして3人は再び視線を交わし、目だけで会話をする。

「とっころでとつきー、お前これからどうするんだ？あたし達は久しぶりの呑みだから早めに出る予定なんだが」

「あ、マジか」

「…早くないかしら？千冬」

「混む時間帯になると色々と面倒だろう。3人共、普通に街を出歩くだけでどれだけの騒ぎになると思っているんだ」

時守とアヴリルを会話に引き込むことに成功。

クラリツサが自分の世界に入り込み、妄想を繰り広げているのも確

認済み。

：これで各々の予定が崩壊することはない。あとはもう普通に終わる。そう確信した3人は自由に会話を弾ませることにした。

「あー、やっぱ皆有名やからですか？」

「そうだが：お前もだぞ？時守。引退した私がまだここで人気があるかは分からんが、お前は現役の国連代表。雑誌やテレビにも出ているだろう？」

「うへえ、じゃあ外でたら下手しバれる：と？」

「そうね。私もテスト操縦者以外にモデルとかやってるから、けっこう騒がれるわよ？」

「えっ!? ナタルモデルやってんの!？」

流石時守、過去の話題等無かったことにしている。

クラリツサにビクビクせずとも、最初からこの男に話を振ってれば良かったのではないか、と思わせるほどに見事に話題を変えてくれる。

「知らなかったのかよとつきー」

「まあ：雑誌とか、読む暇無いし？多分これから先も」

「まあ忙しいものねえ、私も今日呑みに行くのにどれだけ予定を詰めたか」

「私もだ。：山田君には悪いことをしたな」

「おー、あのデカパイ眼鏡の元代表候補生か」

「：一応真耶の先輩だから言うておく。その呼び名はやめてやれ」

「いや、だって：世界規模だろあれ。アメリカやヨーロッパの方にもそう居ねえぞ？」

「それでも、だ」

※婚活中女子の会話です。

「で、剣ちゃんはこれからどうするの?」

「ほんまに急にぶっこんできはりますねアヴリルさん。予定っちゃ予定、かな?とりあえず適当に汗流して仮想戦闘でもしときますわ」

「大先生!アレをやられるのですか!」

「お、おう…。最近ではデータやけどちっふー先生と戦えるようになってきたから…」

『仮想戦闘』という言葉に反応したクラリツサに身じろぐ時守。

仮想戦闘—正式名称『仮想戦闘訓練用対戦機』

マツサージチェアのような装置に待機状態のISをセットし、ヘルメット型のヘッドギアを被ることで脳空間にダイブ、装置内にプログラムされている機体とセットしたISで対戦することができる。ここ、国連には数十台設置されているので、自分の戦闘データをコピーし、自身の弱点を克服するために使ったり、リアルでは戦えない国家代表クラスの操縦者と(データ上ではあるが)戦ったりする。

「では私たち3人は呑み、ナタルは療養、クラリツサは秋葉原、時守は訓練、でいいのか?」

「そつすね。…ちっふー先生、二日酔いは止めてくださいよ?」

「うぐつ!」

「千冬、もしかしてしたことあるの?」

「……………一学期に、一度だけ」

「ほー、じゃあまず話題はそれだな、な?アヴリル」

「ですねえ。あつ、後は千冬の恋バナも…」

「……………はっ!?!いい、イベ…ント…?教官!失礼します!!皆さんも、失礼します!!お元気で!」

呑みの場での最初の話題が決まり、携帯端末を弄っていたクラリツサが何を思い立ったか部屋を出て行った。

「じゃ、俺もそろそろ行こな」

「あ、じゃあ途中までついて行っていいかしら？」

「おう、ええで？」

「んじやあ、あたし達も行くか」

「良いところなんですか？イーリスに千冬？」

「大丈夫だ。私が保証する」

そうして大人のお姉さん達と時守の集まりは解散した。



「ん？メール：たーちゃんから？なんやこれ：『夏休み、エジプトで待ってるぜい!!』：いや、エジプトのどこで具体的にいつ何のために俺を待ってるか言えよあのコミュ障。今度会ったらしばきやな」

時守の夏は、まだ始まったばかりである。

極秘実験

『では、待機状態のままISを起動だけさせろ』

「了解。金夜叉を待機状態のまま起動」

ISO施設内奥部の真っ白な空間の中で、ISスーツだけを身に纏い、右手中指に金の指輪を嵌め、それに左手を添える人物、時守剣は管制室から聞こえる千冬の声に従い、金夜叉を起動させた。

『今回の実験の目的は金夜叉の待機状態での単一仕様能力を使用した場合のお前の身体能力並びに演算能力の向上、人格の変化などを調べるため、だ。…改めて問うが、構わんな?』

「はい。…では、もう?」

一辺50mの立方体の部屋の中に立ち、時守は千冬に合図を促す。その合図とは金夜叉の単一仕様能力『完全同調』の使用許可を求めるものだ。

完全同調はその効果もあり、現存する単一仕様能力の中でもずば抜けて使い勝手が良い。…が、それと同時にまともに使いこなすのはかなり難しくなっている。

『演算補助』『痛覚遮断』『筋肉操作』『機動予想』等々を、コアの人格と操縦者の人格を極限まで近づけることにより成立させている。言うなれば『ISが時守の一部になり、時守がISの一部になっている』という状態だ。だが故に

『ああ。だが今は60%にしておけ』

「…ってことは俺の意識がまだ大半ってこと…でしたっけ?」

『そうだ。お前が例の件で使用した100%。あれはお前とコアの人格がそれぞれ1:1で金夜叉を支配している状態だと、調べた結果分

かった。それ以上、つまりシンクロ率100%以上はお前の意識が元ではなく、金夜叉の人格が徐々にお前の身体を支配し、お前の意識はその一部を支えるだけになる。だから模擬戦などでは最高でも80、本当にピンチの時だけ100%にしておけ。それ以上は暴走してお前自身手がつけれん状況になる』

「分かりました」

危険が生じやすい。シンクロ率100%は1つの身体に2つの心が入る、まさに『同調』。だが、それ以降は心が金夜叉のコアに侵食され始め、どうなるかは誰にも分からないのだ。

「今日は60%までを見る。では、始め」

「はい、…『完全同調』、発動」

だからこうして、周りに被害が出ない状況で実験をすることになった。

◇

「シンクロ率、55%…操縦者の脳に異常無し。…今の所、何の問題も無さそうですね。時守くんのバイタルも、脳波も安定しています」

「だが油断は禁物だ。何が起るかわからないんだからな」

現在管制室には千冬を含め、数人の人間がいる。

20代〜40代の男女数人の研究員が、そして千冬がモニターとガラス越しに見える時守に注意を向け、他の者がデータを打ち込んでいく。

「…時守、どうだ？何か異変はあるか？」

『いえ、特には。…ただ自分の中に別の何かが居るのは、曖昧やけど分かります』

「そうか…60%、いけるか？」

『はい』

真っ白な部屋に立つ時守が、千冬の指示に従い行動する。

『60%…違和感、ありません』

「分かった。…では、これより射撃訓練に入る」

千冬のその言葉と同時に1人の研究員がコンソールを操作、時守の立つそのすぐ隣に1丁の銃が置かれた台が部屋の床から伸び、時守の腰辺りの高さで止まった。

「今から高速で動く的を出す。お前はただそれを連続撃ち抜けばいい」

『了解』

返事と同時に台から銃を取り、腕をだらんとぶら下げる。

これが今の構え。時守と金夜叉が弾き出した最良の答え。

「……はじめ！」

パパンツ!!

千冬の合図の直後、2つの的が高速機動を始める。

が、一瞬に縮められた2つの銃声が響き、その中心から数ミリ離れた所に2つの風穴を空けた。

『……どう、ですか？』

「……はっ！え、えと…その、い、今出しますう!!」

その光景に呆気にとられていた研究員の1人がキーボードをカタカタと打ち鳴らし始める。

「…速いですね」

「そうですね、時守くん曰く『脳内に直接イメージが叩き込まれる、自分の考えみたくに浮かび上がる』ということなので、時守くんの勘と金夜叉の予測演算補助などを使って…普通に撃ち抜いたみたいですよ」
「照準速度…ほぼISと変わらない…か」

その射撃速度は計算するまでも無く、速かった。

合図があり、的が動きながら出現したその瞬間に撃ち抜ける程速かった。

「時守、何か異変は無いか？」

静寂に包まれていた部屋の中に、千冬の声が響き渡る。

さほど大きく無かったが、時守が的に風穴をぶち開けてから全く動いていなかったこともあり、他の音が一切無かったその部屋に、千冬の声は良く届いた。

『特には、無い…です』

いつもこういう場でははつきりと発言している時守だったが、今の返事はとても曖昧で、その表情も優れなかった。

「どうした？…っ！まさか意識が!？」

そしてその様子は千冬を、そして2人の会話を聞いていた他の者の不安を煽った。

『い、いやいやいや！ちゃうんすよ!?!大丈夫ツス。ちゃんとちっふー先生が未婚な事も覚えてるし、結婚に協力的な時守剣ちゃんですよ?』

そして別の意味で研究員達の不安を煽る発言をした。

——どうやら大丈夫なようである。(部屋の中では、将来は不明)

「…そうか」

『な、なんか怒ってます?…あ、でも、1つだけ。1つだけ疑問…って

か変な感じしたんがあつて…』

「…なんだ、言ってみろ」

『なーんかもの足りひんなーって。的撃ち抜くだけとか…なんかこう…金夜叉からよう分からん…こう、モヤモヤしたもんが来てるんすよ』

◇

「ううっ…ぐすっ…」

「気持ち悪い、男なら泣くな」

「泣いてませーん。ただちっふー先生にぶん殴られた所が痛いから涙目になってるんですうー」

「…もう一発欲しいか?」

「嫌ですうー」

ゴンツ!

…あんまりや思うねん。もうちよいしたらイギリス行くいう時に金夜叉の実験、しかも部屋出てきたら『教師に失礼な口を聞くな』つていきなり殴られて…今更やん。『ちっふー』呼びOKやねんやったら別に結婚出来てない、とか応援してる、とかさ、今更やん。なんで殴られんねん。しかも今また殴られたし。…いった。

「しかしまあ、本当に何とも無いとはな」

「まあ…多分100%でも大丈夫っすよ?金夜叉からもなんかそんな感じしますし…あのよう分からんのは分かりませんけど」

ちっふー先生の一言から連想し、考える。

なんかよう分からんけど100%までは大丈夫な気がする。…それ以降はなんか怖い。ほんまなんでか分からんけど。

「そうか、…なら…現状は大丈夫…なのか?」

「ほーい」

まあ今はそんなに深く考える必要は…無いんかな?

「それよりも、だ。お前のこれからのスケジュールだ」

「は?…イギリス、ですよね?」

「それはもう少し後だ。まずこれからニューヨーク郊外でモデルの仕事…まあ、撮影だな……」

お、てことはギャラ貰えるんか。モデルの仕事とかISの訓練に比べたらましそうやしな。

「もちろん移動の時には戦術を学んだり、身体の動かし方を考えたりするぞ?」

「ですよね」

うん、期待はしてなかったけど。早すぎて辛い。

施設の中をカツカツとちっぷー先生のヒールの音が響く。…つか歩くの速いつすね、ちっぷー先生。

「予定が詰まっているのだ」

「心の中読まれたのも久しぶりつすわ。…あ、そのモデルつてももちろん誰かとセットで?」

「ソロだが?」

いや、待って?それおかしい。ぼっちとか俺慣れてないから死んじゃう。

「誰かいないんすか?」

「そう…だな…。ああ、嵐がいるな」

「えっ!?あいつもモデルやってんの!」

「まあな。『暑い』『だるい』とか言っていたが、商店街のくじ引きでチケットが当たったらしくてな、ニューヨークの観光ついでに雑誌の撮影もするらしい。お前の予定と丁度被っているから同じ雑誌だろう」

「ほー、マジすか」

どこ見んねん!確かに顔はISコアのおっさんに気に入られるぐ

らいやからまあ可愛いとして、ちっばいに他の色んなトコも…えっ…あー。もしかなくても甲龍とシユヴァルツェア・レーゲンのコアはロリコン貧乳好きのドMってことか。あの2人もモツピーに並ぶぐらいにバイオレンスやからな。…よう考えたらワンサマサイドバイオレンス揃いやんけ。軍人に武士に衝撃砲…まあなんか1人おかしいけど、それに俺の隣にいる歩く魔王に…

「…ワンサマって不憫ですね」

「凰の話からどうそうなったのかは分からんが、まあそうだな。あいつはお前と違い一夫多妻が認められていないからな」

「とか言うてちっふー先生が日本国籍守ったってるんですよね？」

「……」

沈黙は肯定と見なす！

「……もしかして結婚相手にワンサマ考えてます？」

「……………血のつながりが無ければ、あつたかもしれん…な」

めつちや悩みますやーん。まあワンサマと結婚することに、じゃなく俺に話すことに、やとは思っただけ。

「あ、じゃあモツピーとか鈴とかラウラがワンサマ好きなん知ってます？」

「ああ。というか見ていて分かるだろう？あいつら…専用機持ちというコネを何に使っているんだか…」

「まあ他のワンサマ狙いの子が可哀想になるぐらいには防壁作ってますよね。『ここから先は私達と嫁の世界だ！』的なの？」

「ラウラなら…いいかねんな。クラリツサが副官だからな」

ポンコツなんかよう分からんねんなー、あの2人。

…あ。そっかいや。

「ちっふー先生も撮影とかしたことあるんすか？」

「…ああ」

「えっ…マジすか？」

「…世界最強というのはな、金になるんだ」

ゲスい。いや、ワンサマに前聞いてたからちっぷー先生一人で生計立ててたつていうのは知ってるけど…。それ込みでもゲスい。

「しかも私の場合、この目、雰囲気、全てが『かっこいい女』という風に見られたらしい」

「まあ…そりゃあ…そう、でしょうね」

「少なくとも第一印象『可愛い』とはならん。『かっこいい』か『綺麗』の二択やな。」

「それを生かして雑誌の撮影とか、だな」

「洋服○青山の春の新生活応援キャンペーン…とか？」

「…スーツ○はるやまとかな。他は…オリンピックの宣伝にも何故か使われた」

「そっちの方が凄くね!?!なんでスーツ○はるやま優先したん!?!」

「…ああ、オリンピックで思い出したが、来年のモンドグロツソから毎年、モンドグロツソが行われるようになるらしい」

「へえー、まあ俺は国連代表やし?ー人やし?関係ないし?」

「…油断していると負けるぞ?ちなみに、まあ今年は無い…から来年だな。来年の冬辺りになれば他の国も優秀な代表候補生が代表になる、と私は予想している」

「…え?」

「つまりどゆこと?」

「…I S学園に居る代表候補生や、居る間に代表になった奴は技量やら何やらの成長速度が著しいんだ。よって、各国で…まあお前も知ってる奴だらけだが『更識簪』『セシリア・オルコット』『シャルロット・デヌノア』『ラウラ・ボーデヴィツヒ』『凰鈴音』『フォルテ・サファイア』『ダリル・ケイシー』を代表にする、という案が出ている…まあアメリカはまだ五分五分、と言ったところだがな」

「…それ俺に言っただいんすか?」

「どの道知ることだ。それに、もしあいつらがお前と戦うのならあいつらの方に分がある。戦法を良く見ているのはあいつらの方だから」

な」

あー、なるへそ。武装ほぼ知られてるし。ぶっちゃけ鈴とかあんまやってへんし。

「ま、公式試合やったら誰にも負けへんって決めましたからねー」

「…やはり入学時に表情が変わったのはそれか？」

「んー、多分そっすねー」

そりやな。

「…世界最強なんて、普通にかっこええやないっすか。俺はそれをただ目指す。それだけっす。…あー、そっか、皆も強なってるんやんなー。…んじや、俺も世界で、学べること学んで二学期、迎えるか」
「ふっ、そうだな」

ちっふー先生に鼻で笑われた。泣きそう。

「ああ、勘違いするな。別に馬鹿にした訳ではない」

「え？」

「ただ鍛えがいのある奴になったと、そう思っただけだ」

「…は？」

「そら、行くぞ。今までのメニューではまだ足りんぞ？ほら、予定をもっと詰めてもつと訓練だ」

「ちよっ…」

「ははは！久しぶりに血がたぎるぞ!!」

…なんかあかん火付けてもたわ…。ちっふー先生歩くスピードめっちゃ速なったもん。

女子会

時守が国連で千冬に殴られる数日前、時守が国家代表や軍人達と会っていた日、IS学園一年生寮1027号室にIS学園専用機持ち6人は集まっていた。

「剣君に会ーいーたーいー！んもう、どうしてこのタイミングで生徒会に仕事が舞い込んで来るのよー！」

「お、お姉ちゃん……ここで怒っても……」

「仕方ないですわ……」

所謂女子会（本物）。どこぞの教師達がしていた女子会（笑）等ではない。

「はあ……いいわよねえ、4人共。好きな人と結ばれて」

直ぐに会えない楯無とセシリアがため息をつき、それを見た鈴が2人を、そして簪とシャルロットを羨む。

「剣が受け入れてくれたからね」

「む？師匠から4人に告白したのではないのか？」

シャルロットの発言に疑問を抱いたラウラが問う。

時守のあの4人同時告白は直ぐにIS学園全体に広まった。それは時守から4人への同時告白であって、決して4人から時守への同時告白ではない。

「確かに告白自体は剣君からだっただけ、それは私達の気持ちを知ってしてくれた上でのことだったらしいわよ？」

「どういうことですか？」

「剣さんはわたくし達4人があの場で想いを告げようとしていたのを分かっていたみたいですよ。そして『自分のせいで誰かが不幸になるようなことはしたくない。ならばいっそ……』という答えになったらしく、全員を、ということになったのですわ」

「私達も……剣に一夫多妻が認められてるから、奪い合いよりも、そっち

の方がいいかなって……。皆仲良く……。って感じ、かな？」

「簪達は……良かったのか？自分一人を見てほしい、という気持ちは無かったのか？」

今度は箒が問いかける。

箒も鈴もラウラも、一夏には自分一人を見て欲しい。そう考えている。だから、その答えを出さなかった4人の答えを、ただ知りたかった。

「うーん、それもあつたけど……。ちゃんと剣も僕たちの事を想ってるって言ってくれたし、僕たちも剣の事が心配だし……。愛し愛されるなら、それでいいってなつたんだ」

答えは何となくだが分かった。『一生を賭けて添い遂げる』。これが4人の答えだった。別に周りからどう思われようが、時守の側に居続ける。それが認められているのだし、時守も、そして自分達もそうしたいからそうするのだ、と。

「なるほど……。ねえ、ま、いいんじゃない？本人達がそれでいいなら」

鈴のその言葉が、ラウラの、そして箒の答えでもあつた。

そして――

「ふふっ、私達の事を話したからー、次は鈴音ちゃん達の話よね？」

「えっ!?あ、あたし!」

「当たり前ですわよ？鈴さん」

「そうだよ？何たって、女子会だもん。ね、簪」

「うん……。ラウラと、箒も……」

「なっ!わ、私もか!」

「私は構わんぞ？嫁のどこに惹かれたか、だろう？」

今度は一夏ラバーズの話に変わった。正直な所、これが主催者側（シャルロット&楯無）の今回のメインでもあつた。

「ほら、ささっと吐いちゃいなさい？」

「そ、そう言われても…」

「何から言えば良いのか…と、というより話すつもりはありません!!」
「いやんっ、そんなに怒らなくても良いじゃない。箒ちゃん。せっか
く良いアドバイスになればなあって思ってたのに聞いたのに」

嘘である。ただ恋バナを聞きたいだけである。

「そうですね、鈴さん。話してくださいまし。一夏さんとどうい
うことかしたいのですか?」

「な、なんであたしからなのよ!順番で言えば箒からでしょ!」

「私に振るな!最初に、こ、こ、こ、告白めいた事をしたのは鈴ではない
か!」

「2人とも…」

「……初心」

「なああっ!?!」

シャルロットと箒からの言葉に、鈴と箒は顔を赤くする。ラウラは
と言うと、先程から楯無に『嫁は私を救ってくれたのだ』だの『師匠
は私の先生であり、想い人ではない』だの『嫁が夫になればまた教官
と過ごせるのだろうか?』だの『キスの先とはなんだ?』だのもう既に
恋バナ(?)を展開している。

「ほら、ラウラも楯無さんに話してるんだし…ね?」

「いや…シャルロット、ね?と言われてもな…」

「急に言われても恥ずかしいわよ…」

「告白したり、キスしかけたのに…?」

「箒さん、そういうのは気にしちゃ負けですわ」

酔豚告白に海岸キス未遂…その2つはもうここに居るメンバーに
は隅から隅まで知られている。

「あ、そう言えば臨海学校で織斑先生と皆と理子ちゃんと話したのよ
ね?あれってどんな感じだったの?」

と、ここでラウラの話聞いていた楯無がセシリア達の会話に入っ
てきた。話自体は簡単に聞いていたが、自分がその現場に居なかつた

事もあり、興味が沸いたのだろう。

「…あれは…酷かった」

簪が、セシリアが、シャルロットが、箒が、ラウラが、鈴が、その表情を暗くする。

そして、ぽつりぽつりと、語り出した。

◇

「はっはっはっ。美味しい酒に美味いつまみ、良いもてなしだぞ時守」
「いやー、つまみは適当に俺が作っただけなんすけどね？その酒は…
一応清洲のおぼはんと協力して作ったやつです」

（お酒作れるんだ…）

またも時守のハイスペックな一面が軽く暴露され、それを聞いて呆然としている女子達をスルーし、千冬は上機嫌なまま話し続ける。

「ほう？…酒の持ち帰りは？」

「4980円っす」

「…2本貰おう」

「今なら3本11000円＋『花月荘特製プレミアム枕』&『海の幸ミニセット』プレゼント」

「買った」

「まいどー」

「相変わらずちゃっかりしてるわね。あんた」

千冬と時守の交渉を見ていた1人の理子が思った事をそのまま口にする。この場なら、大丈夫。そう判断した結果である。

「まあ…癖、みたいな？昔からの」

「昔、ねえ…あー、懐かしいなあ。皆」

「おっと、忘れる所だった。おい岸原」

「はっ、はい！」

大丈夫だと判断した結果絡まれた。酔っ払いに。

「中学の時のコイツの話を聞きたいのだが」

「っ！聞きたいですわ！」

「僕も！」

「わ、私も…！」

「えっ、と、時守の…ですか？…本人が居る前で？」

「俺は別にええよー」

「ま、マジ？…じゃあ…」

本人の許可も降り、時守の嫁3人の視線、千冬の雰囲気もそろそろ怖いので、話すことにした。

「…って何から話せば…？」

「そうだな…まずは、中一の第一印象…とかだな」

「分かりました。えっと—」

◇

「そこから岸原さんが軽く剣の過去について話したんだよね？」

「なんでそこで止めるのよー！私もつと聞きたいー！」

「話せば…長くなるから。それに…」

「あの時は千冬さんが良い感じにアルコール回ってたし…思い出したくないわ」

ほんの少ししか聞けなかった楯無がシャルロットの肩を揺さぶるも、シャルロットはおろか、他のメンバーも話そうとはしない。

「ぶう…ならいいもん。剣君が帰ってきたら直接聞くもん」

「その方がいいですわ。ええ、その方が」

本人達が話そうとはしない話題をほじくり返す程、楯無の性格は悪くない。そして今の他のメンバーの様子から察して、今は一旦放置することにした。

「…じゃあ、鈴達。またよろしく…」

「えっ…ま、またあ!？」

「もちろん。でないとな何のために集まったか分からないもの」

「うっ…うう〜」

そのため、話題が無くなり再び鈴達の恋バナにシフトしようとした、その時だった。

「そう言えば具体的に恋バナとは何を話すのだ？」

ラウラがそう切り出した。

「既に4人が婚約済、そして私達3人は嫁に想いを寄せている。それが分かっただけで良いのではないか？臨海学校の時に具体的な内容も話したぞ？」

「そ、そう言われればそうね。…むう。じゃあただのおしゃべりになっちやうじゃない。………おしゃべりでいつか」

長考、後に妥協案を出した楯無だったが、周りの反応を見て、その案を採用することにした。

「そう言えば皆ISの訓練とか大丈夫なの？」

「僕は大丈夫…というより、そんなに長く乗ってられないっていうか…」

「ハイパーセンサーは慣れる、とはいえ使い過ぎると酔うからな。

各々のペースが一番だ」

「流石ラウラね、よく考えてるわー。ね、箒」

「うむ、そうだな。直感タイプの私や鈴では説得力の欠片も無いからな…」

ずーん、と自ら墓穴を掘り、項垂れる鈴と箒コンビ。

鈴とセシリア、鈴と箒、鈴とラウラ、鈴とラウラと時守、といった具合に、ここ最近女子の笑いの中心に居るのがこの少女、凰鈴音である。

「かく言う鈴さんもハイパーセンサーの扱いには長けているのではな
くて？」

「ま、そうなんだけど。少なくとも一夏よりかは上手い自信はあるわ。
でも、1年生全体ってなると…」

「簪が居るからねえ」

「は、恥ずかしいから、そんなに見ないで…」

学年トップクラスでハイパーセンサーが使える簪に視線が集中し、簪は顔を赤らめ、反らした。簪のその仕草にきゃー！簪ちゃん可愛いい〜!!と、楯無が抱きつき、座っていた時守のベッドにボフツと倒れ込んだ。

そして―

「…あ、剣のベッド…いい匂いする…」

「簪ちゃん、剣くんの匂い好きよね？」

女子会のベクトルがズレた。

「っ！…う、うん…。好き。安心する」

「私もほぼ毎日布団の中に入ってるけど、簪ちゃんと同じ感想よ」

「暖かくて…落ち着く」

「好きな殿方の匂いでももの。当然ですわ」

「不意に抱きしめられた時、きゅんってなるんだよね」

「いいなあ…アタシも一夏にぎゅってされたい…」

「私は…いや、そうだな、私も抱きしめられたい」

「…そんなに良いものなのか？」

恋バナの面影すら見事に無くなった話題の中、ラウラが楯無、簪、セシリア、シャルロットに問う。

「凄いわよ？もう『ああ、やっぱり自分はこの人の女なんだ』って改めて思わせるほどにね」

「…雌の…本能…」

「も、もう少し言い方が無かったのか？簪…」

「言いようのない物ですわよ？簪さん」

「僕たちだけでも知れないけどね」

普段の言動からはありえない発言をした簪に呆れる筈だったが、その後のセシリアとシャルロットの返答に頭を抱えそうになった。

「一夏…気づいてくれるかな…」

「鈴さん…大丈夫ですわ！…と言いたいのですが…」

「…多分…無理」

簪の容赦無い一言に、箒と鈴、そしてラウラは今まで見たこと無いぐらいに肩を落とす。

―が、

「剣に聞いたら協力ぐらいならしてくれると思うけど…」

シャルロットの言葉に、思わず顔をガバツと上げる。

「その手があつたか！」

「昔がどうかは知らないけど、アイツって普通の健全な男子っぽいもんね…ナイスよシャルロット！」

「師匠になら、大丈夫だな！」

一夏の朴念仁をどうにか出来るかも知れない。その僅かな希望に、部屋は一層騒がしくなる。

自分の恋が成就するかも、と騒ぎ、どこまで朴念仁を貫くのか、と笑い、一体剣が居なければどんなことになっていただろうか、と想像した。

「あ、そう言えば鈴音ちゃん。一人でニューヨークに行くのよね？」

「え？は、はい」

そんな雰囲気の中で、ふと楯無が鈴に脈絡のない質問を投げかけた。

「いーなー、私も仕事が無かったら行つてたのに…。まあ夏休み行くんだけど」

「羨ましいですわ鈴さん…。とはいえ、わたくしも家の事情がありますし…」

「僕もお父さんに呼ばれてるし…会社とかのこともあるし…」

「私も…お姉ちゃんの手伝いと、打鉄式式の調整もしなきゃ…」

「えーっと？じゃあ結局アタシが行つていいの？」

「ラウラもこっちで出来る軍の仕事があるし、私も国家重要人物保護プログラムのせいで国外に行くには手続きが面倒だからな。行けるのは鈴ぐらいだろう」

このメンツ、専用機持ちという括りではあるが、鈴以外の家庭環境やら生まれやらがシリアスなのだ。

鈴も両親が離婚しているが、ラウラにはそもそも親がいない。他に、箒は強制的に別れさせられ、シャルロットは男装させられ、セシリアは若くして後を継いだ。更識姉妹も、暗部組織の長とその妹。学園全体で見て普通の家庭に育った人物は、フォルテ・サファイアと時守剣ぐらいなのだ。

「じゃ、遠慮なく楽しんでくるわ」

「では鈴さん、出国の日はわたくしも空港までお供しますわ」

「ん、よろしくね」

「じゃ、そろそろ解散ってことで。皆もやらなきゃいけない事とか、あるでしょ?」

時間も程よい時間、話もキリよく切れた所で、楯無が締めくくった。どうにもパツとしない終わり方だが、この7人ならそれでいいのだ。

これから何回も、長期間戦うことになるのだから。

戦う女達、という同じ境遇。…またこういった集まりをすることは、全員が分かっていた。

ご挨拶（？） in イギリス

「なあセシリー」

「?どうかしましたか?」

「いや…ご挨拶的なやつすると思つててんけど」

「それなら大丈夫ですわ!なにせこのわたくしが、オルコット家次期当主なのですから!」

「は、はあ…さようで…」

ニューヨークで雑誌の撮影や模擬戦を終えた時守は、すぐ様イギリスへと向かった。

その目的は至ってシンプル。

ここ、イギリスにあるオルコット家へいわゆる実家へのご挨拶をするためである。

が、オルコット家に迎え入れられるや否や、『お嬢様のことを、どうかよろしくお願い致します』とだけセシリアの使用人達全員から言われ、家の中で待つこと数分、淡い水色のサマードレスに身を包んだセシリアに連れられてロンドンの街へと出ていた。

「ぶつちやけわたくしが『この人と結婚する』と言えば反対する人は居ないのですわ」

「セシリー、お嬢様がぶつちやけとか言ったらあかん」

「むう…」

時守からの当然の指摘に、セシリアはぷくつと頬を膨らませる。

実のところ、彼女は彼にもつと構ってほしかった。

IS学園での部屋は違おうし、デートしたのも一ヶ月近く前、身体を重ねたのも同じぐらい前なのだ。

反対に、楯無は普段から同室で、良く彼の布団に潜り込んでいる。

楯無に誘われ、妹の簪も。さらに簪はその小柄な体型から、良く彼の抱き枕になつていたり、彼の身体の上に丸まって寝ることすらある。シャルロットに至っては周囲の目を気にせず、いきなり抱きついたりしている。

貴族として、オルコット家の者として…と今まではそれで自分にブレーキを掛けられていたが、他の要因もあり、そのブレーキが壊れかかっていた。

その要因とは、鈴とラウラ、そして1組担任の千冬である。

鈴は普段からその人柄を買われ、時守と良く話している……と言えば聞こえがいいが、まあよく遊ばれている。

ラウラは普段から彼のことを『師匠』と呼んでいるだけあり、一夏の所に居ない時は、結構な頻度で彼の後ろをとことこと付いていつている姿を見かける。

そして千冬は、わざとか、は分からないが良く彼を拉致(?)し、自分達から離そうとしているように思える。

もしかして鈴さんとラウラさん…そして織斑先生も!?!という考えがセシリアの頭の中に浮かぶことが多々あった。

そうなれば自分は…今以上に…?今以上に気づいてもらえないのか?

そう考えると自分からもっと積極的に行こうか、とするも、そこでやはりブレーキがかかる。

が、その度に他の者と彼が良く近づくことがある。

…ぶっちゃけセシリアは限界が近かったのだ。

「…剣さん?鈴さんとの撮影はどうでしたの?」

「お、おお?なんか怒ってへん?セシリー」

「怒ってなどいませんわっ!」

無意識の内に、語尾が少し強くなってしまう。

—なぜ鈴さんと撮影なのですか!?

その思いが自然と彼女の右手と彼の左手、いわゆる『恋人つなぎ』で

繋がっている手にかかる力を強くさせた。

「…セシリア」

「け、剣…さん…？」

いつもは親しい人物をあだ名で呼ぶが、真面目な話の時は名前をそのまま呼ぶ彼が、自分の名を、両親が付けてくれたままの名前を呼んだ。

「…ごめんな、セシリア」

「っ…：な、なぜ剣さんが謝りますの!?!その…わ、わたくしのわがままですのに…」

彼も不意に強く握られた左手と、セシリアの表情、態度からセシリアが何を求めているのか気づいたのだろう。俯きがちに喋るセシリアに、言葉を紡いだ。

「もつと皆と…俺も一緒に居たい。…でも、皆には悪いけど色ボケてばっかやったらあかんねん…」

「剣さん…」

「やからな、セシリア。…こういう、俺のオフの時ぐらい、どうしてほしいか、何してほしいか、言ってくれへん?…ちやんと、セシリアの口から聞きたい。…それを出来るだけ叶えてあげたい」

これは紛れもない彼の本心だった。

確かに彼女達と過ごす時間も大切だし、一緒に長く居たいとも思う。だがそれと同時に、強くありたいとも思っている。国家代表、国家代表候補生達の将来の夫として、国連代表として恥じないほど、強くなりたいたい。…そして、金夜又とのあの約束を守るために。

「…ふっし」

「セシリア?」

「いえ、何でもありませんわ…。ただ…改めて自覚しただけですわ。わたくしが惚れた、時守剣という男性とは、こういう方なのだ」と

「そ、そんなにドストレートに言われたら恥ずかしいな…」

「恥ずかしがる必要などありませんわ。…そ、それはそうと…その…剣さん…?あ、あの…」

「ん?」

急に改まった愛の告白をしたかと思えば、今度は顔を赤らめ、もじもじとしたセシリア。きつと、先ほど時守が言った『してほしいこと』を言うのだろうと、時守はセシリアの言葉に耳をしっかりと傾けた。

「う、腕を…抱きしめても?」

「ええよ、そんなぐらいい。俺の腕やったら、暇な時ちやうくてもいくらでも」

セシリアの要望を、時守は微笑んで了承した。

その返事を聞き、セシリアは右手を離した。そして時守の左腕をぎゅつと、自らの胸の谷間に埋めるかのように抱きしめた。

「んっ……」

「せ、せせ…セシリア?」

艶めかしい声と共に腕をセシリアのバランスの取れた身体に密着させられた時守は一気に冷静さを欠いた。

—ま、まあこれぐらいなら…

と、思っていたが、以外にも、彼女の欲求不満はかなりのものだったらしく。

「今日は、…もちろん泊まっていかれるのですわよね?」

「っ！あ、ああ…」

「でしたら—」

上目遣いで、さらに胸をこすりつけるかのように左腕を挟みながら動かして、そう言われ、

「今夜は一晩中、明け方まで激しく、今までで一番激しくお願いしても構いませんこと？ 剣さんからの…愛が、もつと欲しいですわ…。貴方が枯れるほどに、わたくしに浴びせてくださいまし。…剣さんも、国連で色々な女性に会って…溜まっていますわよね？ それを…全部わたくしで、解放してください」

背伸びした彼女のその艶やかな言葉が、耳をくすぐった。そして、肩を引き寄せられて耳の穴に舌を入れられ、舐め回されたその瞬間から、時守の心臓はいつもよりも数段早くその鼓動を刻んだ。



—エジプト リビア砂漠—

まっさらな砂漠が広がる砂漠の中、彼女は何事も無いように突っ立っていた。

「ふんふんふんふん。いやあ…やっぱり金獅子ってよく分かんないな—」

何かを模索するように歩く彼女は、あるISについて考えていた。

「単一仕様能力もそうだし、一次移行も早すぎるんだよねー。これって金獅子のコアが原因なのかな？ いやでもこの束さんはそんな不安定なコア作った覚えないしなあ…」

彼女―篠ノ之束―は砂漠のある地点で止まり、ある決意を再び固める。

「ま、だからこそ呼んだんだよね！ 間違いなく第3世代最強になるIS金獅子のその後と、単一仕様能力の限界値を見るために！」

彼女はどこからかりモコンのような物を取り出すと、それに付いているボタンを押した。

すると、彼女の前方1m程の所に、人数が入れる程の穴…というか、機械的な入り口が現れた。

「ここならどれだけ暴れても束さんとちーちゃんできめられるしねー。剣ちゃんにも他の所で暴れられて万が一にもISの絶対数減らされても困るし。コア作るのめんどっついし」

その中にぴょーんと飛び込むと、そこはラボのような、戦闘施設のような場所になっていた。

「…にしても誰なんだよ。『銀の福音』を暴走させたのは束さんだけだよ、IS7機同時ハックを軍用ISを通じて成し遂げた奴。おかげで篝ちゃんが完全な嘔ませになっちゃったじゃん。剣ちゃんも死にかけたし」

彼女にしては珍しく、数週間前の事を思い出し、イラつきながら、ラボの奥へと向かった。



「せ、セシリア…人の居る前であんなこと…」

「ふふっ、わたくしのタガを外したのは剣さんですわよ？それに今日のショッピングにも、しっかりと付いてきて下さったではありませんか」

「い、いや…だってセシリア1人であんなところ入らせるわけにもいかへんし…」

セシリアに耳の穴に舌を入れられた瞬間から、時守は男の性的興奮の象徴を抑えることが出来なかった。加え、今日の予定は服を見たり、食事をとる、といった普通のデートの筈だったが、セシリアの気が変わったのか急遽ショッピングの店を変更、大人の店を周り、買い漁った。

「自分に正直に…せめて剣さんと2人きりの時はそうしようと思っただけですわ」

「いきなりすぎてびっくりするわ…ってあれ？チエルシーさん達は？」

「買い物途中、剣さんがお手洗いにいる間に、ここに連絡して帰らせましたわ」

「…は…」

街中で時守にディープキスを数多くしたり、その自慢のプロポーションを誇る身体を押し付けてくるセシリアが、今日の夜何をしたのかは、すぐに分かったが、まさかここまでとは思わなかった。

「では剣さんは、飲むものを飲んで、少しお待ちください。わたくしは少々準備をしておりますので」

「は、はあ…。で、でもセシリア？準備って早すぎひん？」

「そんなことありませんわ。それと、2人きりの時はセシリアと、お呼びください」

「お、おう。分かった…セシリア」

「ふふつ、あ・な・た♪…では準備をしますわ！」

セシリアの言動全てに呆気に取られながらも、時守は今日購入した錠剤を、数粒一気に飲んだ。

数十分後

「剣さん、お風呂、その他諸々の準備が整いましたわ！」

「…ん。さんきゅ、じゃあ入ってくるわ」

「？何を言っていますの？」

「…え？」

「もちろん、わたくしと一緒に、ですわよ？」

「ま、マジで…？」

現時刻18：30。明け方まで、およそ11時間。

「長いですが、よろしくお願い致しますわ♪」

時守とセシリアの、快樂の時間が始まった。

ご挨拶 in フランス

「やっぱ何回乗っても飛行機ってテンション上がるわ。世界一周1人旅やしなあ…IS学園居る間に後何回乗るんやろな」

イギリスでセシリアと愛し合った後、千冬から手渡された訓練プログラムをこなしつつ、メディアからの取材に応じる、等々イギリスでの用事を済ませた時守は、今度はフランスに飛んだ。

別にISを使っても良かったのだが、流石に人目が気になるので仕方なく飛行機に乗ることにした。

「お?」

「あつ!」

飛行機を降り、ゲートを出た所で白のワンピースに身を包んだ美少女と目が合った。夏休みに入るまでに幾度となくその声を聞き、ほぼ毎日その非の打ち所の無いその身体に触れ、数夜夜通し彼女を愛した。また、彼女も時守の事を愛しているからだろうか、反射的に2人は動いた。

「けーんっ♪」

「よっ…と。久しぶり、シャル」

「うん!…ずっと会いたかったんだからね?」

シャルロットは剣の姿を確認すると、すぐに駆け寄り、抱きついた。対する時守は、彼女と視線が合った時に両腕を少し広げ、彼女を抱きしめる体勢に入った。そして駆け寄ってきたシャルロットが抱きつくと同時に、ぎゅっと抱きしめた。

「えへへ…剣の匂いだあ…」

「シャルさんや、見られてまつせ」

「むう…剣とならいいもん。むしろ見せつけてやるっ！」

むふーっ！と一度、鼻息を強く鳴らして意気込むシャルロットは上目遣いで時守に訴えかける。衆人環視の中で彼女を抱きしめられることになった時守だったが、実は彼は――

「じゃ、別にキスしてもええよな？ん…」

「え？ん……んっ!?…ちゅ……んっ、…ふ……う…」

コツチ方面に関して、ナチュラルドSだった。

彼女の背にやっていた右手を彼女の顎に添えると、人差し指と親指で持ち上げ、半ば強引に唇を奪った。シャルロットもそれまでは良かった。が、舌を入れられてからは完全に彼にペースを持っていかれた。

「…んっ…ぷはっ、ごちそーさまでした」

「ちゅ…あつ…も、もうっ！こんな所でいきなりすぎるよ！」

「嫌やったか？ってか途中からシャルもめっちゃ積極的やったやん。最後だって止めたくないー、みたいな声出してたし」

「うっ…。う、う…ううー！」

約1分、時守とシャルロットは唇を重ねた。それも、ただの子どもキスではない。舌を入れ、互いの口の中を蹂躪し合うような、大人のデーブキス。久しぶりのキス、そして人前、さらに時守の言葉が全て事実だということもあり、シャルロットの顔は赤く染まっていた。

「と、とにかくっ！これからは、その…ムードとかちゃんと考えて！」

「おう…ん？またやつてもええん？」

「…うん。気持ち良かったし…剣とだつたらずつとしていたい…かな？」

頬を赤く染め、照れながらも自分の気持ちを素直に伝えるシャルロット。そんな彼女に、時守は少し前から気になっていたことを口にした。

「なあ、シャル。出迎えてくれたつてことは何か用事あつたんぢやうん？」

「へ？…あつ！…え、えつとね…この後、デユノア社に行く前に、ちよつとだけデート…してほしいなつて…ダメ？」

先程まで自分を抱きしめていてくれた、時守の両手を自身の両手できゅつと胸の前で握り、首をかしげ、上目遣いで彼を見上げる。

時守は女子の上目遣い（一部除く）に弱い。してくる相手によつては脳天にチョップをぶちかましたり、『ダメ？』と聞いてきた所を『ダメえ』と見下ろすこともある。だが、それは一部の話。シャルロットにこうされて―

「ん、分かつた。全然大丈夫やで。…まあこつちのことよう分かつてへんからシャルに任せつきりになるけど…それでもええんか？」

「うんっ！」

断る理由など微塵も存在しない。

デートを了承したところで、再びシャルロットが何かを思い出したかのように言葉を発した。

「あつ、そつだそつだ…。剣？」

「うん？」

シャルロットは時守から少し離れ、

「ようこそフランスへ！」

改めて、満面の笑みで彼を迎えた。

◇

―デュノア社、社長室―

本来ならば実家で話すことになっていたが、第3世代機の開発の目処がたったこともあり、デュノア社は多忙を極めていた。そんな中、社長のフランク・デュノアが休むわけにはいかない、ということで、時守はデュノア社の社長室を訪れていた。

「……君が？」

「は、はい。IS学園一年、時守剣です」

40代の顔の整った男性、フランクが数分間続いていた沈黙を破り、時守に問いかけた。長机のフランクの対面、シャルロットの隣に座る時守は、その質問に、普段なら『お前誰だ』とでも言われそうな言葉で返す。

時守の隣に座るシャルロットも

―剣：どうしたの!? 関西弁じゃないなんて…ま、まさか記憶喪失!? ……ってそんな訳ないか。き、緊張…してるのかな？

と、一瞬ツツコミを入れそうになったが、その場の雰囲気のおかげでなんとか声にはしなかった。

「…そうか。シャルロットから聞いているよ。君ともう一人の男の子、織斑一夏君に助けてもらったと」

「た、助けたなんてそんな…。ただやれることやっただけですし…」
「それでも、だ。本来なら、私がシャルロットにあんな事をさせなければ良かったのだが…」

「でも、そのおかげで俺はシャルに出会えました」

「…そう言ってもらえると気が楽だよ。…で、本題なんだが…」

「ごくり、と誰か…というか3人全員が唾を飲み込んだ音が鳴る。

「…シャルロットと、そして他にも3人の女の子と付き合っている、というのとは本当なのか？」

「は、はい」

「そう、か…。まあ私も人のことは言えないんだがね…」

「いや、なんてツツコミ入れたらええねん！重すぎるやろ!!」

「お父さん…今は剣と私の話でしょ？」

と、そんな2人の子どもの考えがフランクに伝わるわけもなく、フランクは続けた。

「時守くん。君は…、君はシャルロットを、そして他の女の子3人を、幸せにできるのか？」

「…します。…悲しい思いさせたり、時には辛い選択をさせてまうことでもあるかもしれませんが。でも四人は、死ぬ気で幸せにします」

「そこは死んでも幸せにする、ではないのか？」

「死んだら幸せにできませんやん。それに、シャルを悲しませることにもなりますし」

「ふっ…、はははっ！流石に大物だな！そうかそうか…。なぜシャルロットが君を選んだか分かった気がするよ」

時守の言葉を聞き、フランクは声を上げて笑った。それは馬鹿にするような笑いではなく、時守を認めた故に出た笑いだった。

「シャルロット、ちゃんと彼をサポートしてあげなさい？この年頃の男子は結構無茶しがちだからね。怪我などしないようにしつかりと…ね？」

「う、うんっ！」

（怪我ってか…大怪我もう何回もやってるし一回死んでんけどな…あ、あの時点でシャル達悲しませてるやん…。後でまた謝つとかな）

フランクの言葉と、醸し出す雰囲気から、シャルロットと時守は認めてもらったことを理解した。

「時守くん。シャルロットを、娘をよろしく頼む」

「任せてください。必ず幸せにします」

「お父さん、剣なら大丈夫だよ？それに、心も身体も剣にメロメロだから、もう十分幸せだよ？」

ねー？と互いの顔を見合わせるバカップル。だが、フランクにはその光景よりも、今のシャルロットの発言にツッコミたい所があった。

「…心も…身体も？」

「あっ…」

「と、時守くん！まさか君は…まだ16歳にもなっていないシャルロットを!?何をしたんだ！ナニを!？」

「いや！俺からちやいますって!！」

「き、君からではない…?！」

娘の貞操の安否を時守に問い詰めた所、彼から仕掛けたのではない、と言われたフランクは、ギギギ…と壊れたブリキ人形のように、真面目だと信じている娘の方に顔を向けた。が、そこに居たのはそっぽを向き、何故か冷や汗を流し、適当に口笛を吹いている娘だった。

「時守くん、シャルロットが何をしたか話してくれないか？」

「えっ!?お、お父さん!?!」

「俺が、骨にヒビやら身体に打撲やら怪我する…まあ事件みたいなのが あつたんすよ。そんな時にね、部屋に戻ったら4人が揃ってて、そこで告白したんつす。…で、部屋に媚薬入りのお香たかれてて、追加で媚薬飲まされて、ベッドに寝かされて、両手足に4人がそれぞれ乗って、逃げられへんようにされて…食べられました」

「シャルロット…」

「しよ、しょうがないじゃん!それに剣だつてその後…、あう…」

「…結局シただね、時守くん」

「やられっぱなしは嫌やったんで。ほら、シャル。そんな照れること ちやうて」

当時のことを思い出し、顔を真っ赤にするシャルロットの頭を時守は優しく撫でる。撫でられたシャルロットは気持ち良さそうに目を細め、時守の肩に頭を預けた。

「そうか、…ただ、孫を見るのはせめて後3年後ぐらいがいいんだが」
「…うん」

「シャルロット!?!なんだその『ちっ、バレたか』みたいな返事と表情は! いけません! いけませんよ! お父さんはそんな、高校生の間にお母さんになることなんて、許しませんからね!」

「…ちっ」

「ほんとに舌打ちした!?!ほら、シャルロット、道徳的な問題もあるし… ね?」

「シャル、流石にそれは、な?俺がもつとデカイ家買ってそこで皆で ちゃんと住めるようになってから…な?」

「剣がそう言うなら…」

3人の話し合いは、こうして賑やかに過ぎていった――



「…はい？どないしました？」

夜、デュノア邸のベランダで時守は日本にいる人物と電話を繋いでいた。

「はあ、そつすね…まあ確かに気にはなりましたよ？なんでこんなところ行くんやろなって」

その話題はフランスの次に訪れる場所について、だった。

「えっ!?マジで来るんすか!?…えー、なんか疲れそう。…いや、だってその2人と一緒とか俺死んじゃう。…大丈夫だ、お前はそれぐらいでは死なん。とか言われても…だって…えー…」

電話の向こうにいる人物が次の目的地、エジプトに来てさらに既にそこに居る人と待ち合わせて何かをするらしい。

「まあ金夜叉のことについて製作者と学園の担任に来てくれるのは助かりますけど…ちっふー先生用事とか大丈夫なんすか?…は?私に夏の予定など仕事しかない?…乙っす」

電話の相手―織斑千冬、そして金夜叉製作者の篠ノ之束と数日後、エジプトで会うことになっていたのだ。夏休みの予定の中にエジプトが入っていたのはそのためらしい。

「あ、そーういや聞いときたかったんすけど、俺って夏休み日本で何日ぐらいフリーの日あるんすか?…はあ!?3日だけ!?しかもお盆だけとか一番忙しいですよん!ふざけてるんすか!?…あつ、ちっふー先生

2日だけ…なんかすんません。今度どつか呑み行きましょか、初めて俺に会ったときみたいにストレス溜まつてるんでしょ?…まあ日本やったら俺ジューズになりますけど」

互いの予定を確認し合ったところで、最も忙しいIS学園生徒と最も忙しいIS学園教員が分かってしまった。国連代表と世界最強。この2人にプライベートな時間などほとんど無かった。

「仕事?そんなもんまた山田先生に…あ、もう回してるんすね。…そう考えたらドブラックですよ、IS学園って。俺ちっふー先生と山田先生がまともに休んでるとこほとんど見たこと無いですもん。労働基準法…あー、すんません。なんか聞いたらあかんこと聞いたみたいで。…やからすんません、働きたくないでござるとか言わんといてくださいよ。俺も手伝いますから。…あーもー、こんなちっちゃいことで泣かんといて下さいよ…ってか酔うてます?…酔ってないわづあかもつて…絶対めっちゃ酒飲んでるやんこの人!今そっちサマータイムで考えたら朝4時つすよ!!…え?もう寝るから大丈夫だ?…はあ、そつすか?…んじやあ身体と飲みすぎには気をつけて、…はい、はいーお疲れ様です。はいー…酔いすぎやろあの人」

千冬との電話を終え、時守は1人ベランダでゆつくりと過ごす。

シャルロットには家の中に入ってもらい、会話が聞こえないようにしてもらっている。いくら婚約関係にあるとはいえ、正式に結婚した訳ではない。夫婦の間柄になるまで他者にはできるだけ極秘にしたいことが多い、という理由から、国際IS委員会と国際連合より電話等はできるだけ人に聞かれないように、と言われたからである。

そのような束縛された環境では、こうして異国の地で、夜ゆつくりとすることなどほぼ無かった。

「シャルと居られるのも後一日か…何してあげよかな」

木製の扉を開き、家の中に入って廊下を歩きながら、ふと考える。幸いというか何と言うか、今日、シャルロットはいつぞやのセシリアのような事は求めてこなかった。本人曰く、今はそういうことをするよりも母国を自分で案内したり、自宅で一緒に過ごす、といったごく普通のことかしたいらしい。

「あ、剣。織斑先生との電話は終わったの？」

「おう」

「もう今日やることは無いの？」

「せやな。あとは明日も含めて自由時間や」

「あーじゃあ、明日どこに行く、とか決めたいんだけど…いい？」

寝室へと向かうと、偶然廊下に出ていたシャルロットと鉢合わせた。

「おけおけ。…ってか今さらやけどさ」

「ん？どうしたの？」

「…シャルつて一々可愛いよな」

「ふえっ!?むにゅっ…や、やーめーへーよー!」

会話の途中で不意に褒められたシャルロットが頬を赤くする。褒めたと同時に、時守はシャルロットの赤い頬を両手でむにむにと揉む。

「うわ…柔らかっ!」

「むうう〜!やりかえしてやる!」

「むっ」

「…:ほっぺの柔らかさで負けた気がする…」

負けじとシャルロットも時守の頬に手をやるが、その柔らかく、綺

麗な肌に敗北感を感じた。

「ハツハツハー、生まれてこの方お肌の綺麗さには自身がある……ふあ……」

「剣？眠いの？」

家よ廊下で互いの頬を揉み合っていた2人だったが、まだ22時にもなっていないこのタイミングで、時守から大きな欠伸が出た。

時差、慣れない環境での疲れ、等々原因が挙げられるが、やはり一番大きな原因は

（あつ、剣、ほとんど移動と訓練ばかりなんだよね。しかも国を渡ることでもかなり多いみたいだし……やっぱり相当疲れてるのかな？）

夏休みに入ってからからのハードスケジュールによる疲れである。シャルロットが考えたように、時守は今まで、夏休みのほとんどをI Sの訓練と移動に費やしてきた。金夜叉が近接型、武器も大まかに見れば長い棒なので、少しのスペースがあれば、ホームセンターで買ってきた棒を振り回して扱いに慣れようとしている。また、オールラウンドを使わない戦闘では、自身の身体が武器となるので、仮想の敵を相手に組手をする事も多い。

「ああ、ちよつとな、夜更かしして……」

「嘘はダメだよ？剣って基本早寝早起きだし、時差ポケと身体の疲れのせいでしょ？だから今日は早く休んで、ね？」

「…ん。分かった。明日の予定は？」

「よくよく考えたら別に明日適当にふらつくのも悪くないかなーって」

「…そか、ありがとう」

自分に気を使ってくれた彼女に礼を言って、時守はふらふらと寝室に向かう。

—金夜叉、単一仕様能力『完全同調』の上限突破（100%オーバー）

時に操縦者と機体に掛かる負荷と変化についての観察――

これが先ほど千冬からの電話の内容である。

福音戦の時の金夜叉の速度等から、シンクロ率100%以上の実験は広大な土地と、もしも暴走したとき用に、時守を止める人間が必要になる。

だから広大な砂漠（東のラボ付近の隔離された範囲）と、千冬と東という実力者が実験に付き合うこととなった。

ちなみに東が実験に参加する気になった理由は『おもしろそうだから』である。

「シャルー、一緒に寝よー」

「え!?!きよ、今日は…その…」

「分かってるってー、ただ寝るだけやからー」

数日後にそんな一大イベントを控えた彼は、そのためのエネルギーを蓄えるかのように寝ようとしていた。…彼女と一緒に。

「そ、それだけなら…」

「んじゃあ寝室にレッツツラゴー!」

翌朝、幸せそうな表情を浮かべ、抱きしめ合いながら眠る2人がシャルロットの部屋のベッドに横たわっていた。

掃除と訓練

リビア砂漠、某所

太陽の日が燦々と照りつけ、その光と熱を地面が反射するこの地を訪れていた時守は、右手で端末を操作しながらある場所を目指していた。

「えーっと、この辺か？」

端末の画面はレーダーのようになっており、自分の現在地と目的地が赤い印で示されている。その2つの印が重なった地点、そこで時守は立ち止まった。

「おわっ!?!な、なんや?」

時守が止まって数秒、前方1mほどの地面が機械的にスライドし、穴が開いた。

中は真っ暗で何も見えず、相当な深さがあることが分かる。

「これか? ってかこれ以外ありえへんよな」

時守は迷わず、その穴に飛び込んだ。



「たーちゃん凄いよな。着地地点に減速装置普通に作ってるなんて」
「はっはっはー！天才東さんには出来ないことなど無いのだー！
あつ、減速装置はね、ISを持つてる人にだけ反応するんだよ！もち
ろん東さんが登録してるコアだけだけどね？白式とか紅椿とか」
「…ちっふー先生は？IS持つてないっすよね？」
「15mぐらいなら生身で飛び降りてもなんの問題もない」
「ま、東さんもちーちゃんも50mぐらいまでなら余裕だよ？」
「マジで人間かアンタら!？」

東の施設型ラボの中はまさしく近未来そのもの…ということはない、ごく普通のSFに出てくるようなラボだ。

中を見渡せば最新鋭の篠ノ之東製のIS関連機器が所狭しと置かれている。

「失礼だなー、剣ちゃん。ちゃんと東さんもちーちゃんも人間で日本人だよ…ね？」

「なぜそこで疑問形になって私の方を見るのだ東。心配しなくてもお前は日本産のどち狂った天災兎で私はただの元世界最強…だよな？」

「疑問形で回されたやつをさらに回さんといってください」

「…ま、まあ今はそんなこと置いといて。ささっ、ちーちゃんも剣ちゃんも東さん唯一の固定型ラボへようこそー！」

金属なのかガラスなのか、はたまた東が創り出した未知の物質なのかよく分からない床を3人で歩いていると、千冬が学園では滅多に使わないような柔らかい口調で東に話しかけた。

「東、お前はいつもここに寝泊りしているのか？」

「ふえ？…あ、ああ…うん。そうだけど？」

「ならちようどいい。私と時守もここに泊める。ホテルに泊まる金が無駄なのでな」

「ええ!?ちよちよちよちよ!!ダメ!死んじやうよ!」

「何があるのかは知らんが、お前が死んでいないなら私も死なん」

「いや俺は!?!…ってかたーちゃんがそんなに焦るなんて珍しいな。なんかヤバいモンでもあんの?」

「ギクツ。ナ、ナゼソレヲ…」

「…東、言ってみろ」

最初は優しく、ただ親友と話す、ごく普通の女性のような雰囲気の千冬だったが、『ヤバいモン』があるのかどうかを聞かれた東が答えを返せずにいると、その雰囲気は一変。雰囲気だけで小動物なら気絶させられる元世界最強へと戻った。

対する東は普通に焦っていた。現在、『吾輩は猫である』に娘(仮)を留守番させているため、こちらは東一人なのだ。そのこと自体に問題がある。

「えっ、いや…その…ちよつとだけ、ちよーつとだけ長い間掃除してなかったなーって」

「ほう…。お前がそんなことに気を使うとは…変わったな東。で?どれぐらい掃除してないんだ?」

「…3年?」

「…よくそんな所に寝泊りできるな、お前は」

「ち、ちーちゃんだつて同じようなもんじゃん!」

「し、失礼な!一夏と時守の指導のお陰で人並みには掃除ぐらいは出ているはずだ!!…多分」

「多分って何さ!東さんも思い立ったらちやんとたまにだけど机の上だけ掃除してるんだよ!?!」

「掃除言うてもどうせ2人とも夜な夜な誰にも見つからへんところでI Sの荷電粒子砲で燃えるゴミも燃やせないゴミもまとめて消し飛ばしてるだけやろ?」

「…」

「…マジかよ…」

時守が適当に言ったゴミ処理方法を見事に2人共が取っていた。

実際、東は太平洋の日付変更線上で1年に一回、特大荷電粒子砲『フハハハ、見ろ！人がゴミのようだ!!』でゴミを消し飛ばしてる。そして千冬も、部屋から異臭が漂いかける前に学園のラフアールをこっそり持ち出し、東同様、荷電粒子砲でゴミをまとめて消し飛ばしてる。

「…たーちゃん、ちっふー先生、とりあえずここにいる間、掃除と料理、洗濯の練習な」

「ええ!?なんで東さんが!？」

「なぜ私もなんだ!学園でそれなりにはできるようになってきただろう!？」

「じゃあたーちゃん今部屋に俺ら入れれる?後ちっふー先生、それなりにって言ってますけどあれまだ男子中学生レベルですからね?」
「うぐっ…」

時守の言葉に見事に撃沈する2人。家事関係では日本のどこにでもあるような男子高校生にも負けている2人は、家事がほぼ完璧にできる時守と一夏にはそっち方面で反論できないのだ。

「さーさー、たーちゃん。はよ部屋案内してやー」

「…はい」

従うしか無かった。今この関西人に何を言っても無駄なのだろう。そして何より自分が天才で、さらに先ほど出来ないことなど無いと言ってしまったばかり。しかもすぐ隣には親友である世界最強の千冬がいる。…東、詰みである。

「…ここだよ…」

「……なにかカサカサ聞こえるんだが?」

「完全防音ちやうん?」

「そうなんだけど…。また出たんだね…。やつ。…生物の大先輩はね、いくら束さんが本気出しても絶滅してくれないんだ」

「……黒い…あいつなのか?」

「う、うん…」

「いやはよ開けーや…つてまさか。あー、そゆこと」

束の部屋の扉の前で立ち止まった3人。すぐに入るかと思いきや、大人2人組が部屋の中から聞こえる音に完全に動きを停止させてしまった。そしてその会話から、ある1つの事実が判明した。

「2人共ゴキ・ブリ子ちゃん怖いんか」

「怖いというより気持ち悪い、だ!!というよりなぜお前はそんな名前前でやつのことを呼ぶんだ!?!」

「そうだよ剣ちゃん!もし出てきたらどうするの!?!」

「殺したらええやん」

「潰れるだろうが!ぐちゃつて!黄色と…なんか、こう…よく分からない色が混ざって…」

「いっつも潰す時にやりすぎて中身と羽がミックスされて…:…うぷっ…」

「束!?!吐くなよ!絶対吐くなよ!?!…つて吐くなああああ!!!」

オエエエエ…と床に盛大に吐く束と、吐いた人の介抱の経験があまりなく、焦る千冬を尻目に、時守は1人動いた。

「なーるへそ、2人共力強すぎんねんなあ…んじゃ俺が処理してくるか」

その後涙目になりながら黒光りするやつに怯える束と、縮こまっている束の背中をしゃがんでさする千冬から離れるように、時守は部屋へと入っていった。

〜20分後〜

「うーい、終わったでー」

「嘘だ！あいつらがそんなすぐに全滅するわけないもん！」

「嘘はダメだぞ、時守。やつらは四肢や触覚をもぎ取られても身体が半分になっても動き続けるようなやつらだからな」

「いやまず物理で殺そうとすんのが間違えてんねん」

「な、なん…」

「だと…？じゃあどうやって…っ！」

「たーちゃんの部屋のもん全部一旦テキトーに片付けてからな？床にそこら辺にあった液体窒素ぶちまけた」

「そ、そんなんで…？」

「ブリ子ちゃん達ってさ、産んだ卵が死んでたらもうそこには産まへんらしいで？ゴツキーの卵って凍らせたら一発らしいし」

「も、もしかたまた出てきたらどうするんだ？」

「そんな時はそんな時で。…ってかそんな嫌っすか？」

「嫌だっ！」

年甲斐もなく、そして乙女のように声を上げる大人女子（人外）。

そこに絶望の手を差し伸べる者が1人。

「あ、ゴキブリ」

「きゃあああああ!!!」

年甲斐もなく、そしていつもの雰囲気を全く感じさせない1オクターブ程高い、まるで女子のような悲鳴を上げ、飛び退く2人。

対面するように立っている時守から指さされた自分たちの後ろから、立ち幅跳びのように跳躍した2人は、そこにあったちようど掴まりやすいものに抱きついた。

「…2人とも。嘘やから、な？離れて？俺彼女持ち（4股）」

「やだあ！」

「いやだ！」

「…まさかここまで幼児退行するとは…あ、おもしろいから写メ取っとこ」

ガクガクブルブルと震えながら、コアラのように時守の身体に抱きつく2人だったが、ピロリン、という電子音で我に返った。

「はっ！け、消せ時守!!消すぞ!!」

「何その新しい脅迫の仕方!？」

「ほ、箒ちゃんには見せちゃダメだよ!？」

「あつ、たーちゃんは保存してもええ派なんや」

「うん、別に剣ちゃんならいいや。あつ！そだそだ。全自動掃除マシン作ろーつと」

目にも止まらぬ速さで時守から飛び退くと、千冬は顔を赤くし、束は先ほど思いついた機械の制作に取り掛かった。

「時守、貴様がその写真を誰にも見せないと神に誓うのなら朗報を教えてくださいてもいいぞ?」

「じゃあ誓いますわ。神さまー俺誓ったでー」

「…まあいい。で、その朗報だが、二学期から全生徒との模擬戦が解禁される」

「マジで!？」

「ああ。基本、クラス代表の一夏や嵐、更識妹の機会が増えるが、実演等の場合はお前にも積極的に参加してもらおうからな」

「へーい！やったー！負けんですむー!」

「そこまで負けてたか?」

「…ちっふー先生、主にあなたにです」

「…そう、だったな。…すまん」

「いや、俺が雑魚いから…」

「……」

千冬の何気ない一言が時守のメンタルをゴリゴリと抉り、その事実
に気づいた千冬も、どう慰めれば良いのか分からず、俯いてしまう。

「あれ？何この葬式みたいな雰囲気。誰か死んだの？」

「いや別に？」

「そうだな、基本話を聞かんお前には関係の無いことだ」

「酷いっ!？」

が、ボケでも天災なのか、絶妙なタイミングで割り込んできた束に
より、その悪い雰囲気は払拭され、

「…とまあ、おふざけはここまでにして、だ」

ピリピリとした、まるで刺すような雰囲気へと変わる。

「…時守、束。準備はいいか？」

「おっけーだよ、ちーちゃん。剣ちゃんは？」

「はっ、俺も金夜叉もずっと絶好調や」

「分かった。では外へ出よう。…始めるぞ」

たった3人だけの、そして世界でもほんの一握りの人物しか知らな
い、『完全同調』の極秘実験・第二段階がスタートする――

ご挨拶（大嘘） in 更識家

「剣くんっ！早く早く！」

「か〜んちやく〜んもお〜！」

青い空、白い雲、人で賑わうビーチ、大胆なビキニ姿で満面の笑みを浮かべながら時守を呼ぶ楯無と、簪を呼ぶ本音。

「…テンション…上がりすぎじゃね？」

「ふふっ、お嬢様、ずっと楽しみにしてたんですよ？」

「あ、そーなんすか」

「臨海学校るとき、…自分だけ、ぼっちだったから」

「いやぼっちで。…まあぼっち、やったな」

そう、時守+更識&布仏の少年少女達は、海に来ていた。

◆遡ること1日

「こ、こ〜こが更識家…でっか」

エジプトにて東と千冬との訓練の後、時守は、インド、ロシア、中国、アメリカでの仕事をすぐさま終わらせ、日本へと直行した。

羽田空港に着くやいなや、時守は黒服のガタイのいいお兄さん達にどでかいリムジンにぶち込まれた。次に車のドアが開いた時に彼の目の前に広がっていたのは、時代劇で見るとような巨大な木製の門、更識家の玄関口だった。

「どうぞ、時守様」

「えっ、あ、はい」

門番らしき、スキンヘッドで着ている服の上からでも分かる筋骨隆々なお兄さんに誘導され、時守は更識家の敷居を跨いだ。

(…やべえ、敷地内に砂利敷いてあるとかやばい。神社みたいに鳩いるやろ絶対。あの石当てるゲーム専用鳩。しかも普通に住職さんとか居てもおかしくないレベルやろこれ…。なんぼぐらい掛けて建てんやろ?)

石畳を歩きながらふとそんな事を考える。門から家の玄関までは50m走が普通にできそうな距離がある。そんな長い石畳の奥、家の玄関から、メイド服に身を包んだ本音がゆっくりと歩いてくる。

「おう、けんけん、おかえりなさいませえ」

「えっ、お、おかえりなさいませ?」

「そおだよおう?おじようさまと、かんちゃんがね?」認めてくれな
いお父さんなんて大っ嫌い』って言ったらねえ?あつさりおつけー
貰えたんだってえ」

「えげつないことすんな、あの2人」

「他にもおう、『またお父さんのパンツと一緒に洗ったでしょ。：ちっ』とかあ、『また勝手に部屋に入って、掃除しようとした?：最低：』とか言っちゃってえ、先代様のメンタルボロボロなんだよ
う?」

「マジでえげつないな!」

「だからあ、けんけんはもうかんちゃんとおじようさまの2人との結婚が認められてるんだあ。めでたしめでたし」

「俺がめでたくてもお義父さんが…」

「私もお姉ちゃんも言うよ?先代様達が庭で自分の下着洗ってるのたまに見るし」

「あつ、はい…」

先代楯無を早くもさり気なく『お義父さん』呼びしている時守。将

来、いい関係を築くために庇おうとしたが、最後の最後にいつもの口調じゃなくなった本音の雰囲気にあっさりと言われてしまった。

「さあさあけんけん、そんな事は置いて、ようこそ更識家へ！」

「んじや、えつか。おじやまんぼー!!」

そして本音のノリに合わせて更識家に2人で突撃する。するとそこには――

「あつ…、ああ、き、君が時守君か」

「ようこそ、更識家へ。…と言いたい所だが…」

「…え？」

「けんけん、かんちゃん達は奥だよ」

玄関土間にしゃがみ、洗面器に水を張り、下着を洗っている2人の男性がいた。先程の本音の話を聞く限り、この2人が先代楯無と現布仏当主なのだろう。なんの威厳も感じられない姿が、そこにあった。

「…乙女の部屋を勝手に漁った罰だよ、お父さん。お姉ちゃんもかなり怒ってたんだからね」

「うっ…。す、すまん本音…。だがお前たちが悪い男に引つかかかってないか心配で…」

「処すよ？」

「…すまん」

廊下から振り向き、本音は自らの父にジト目を向ける。そのオーラはいつものほんわかのはほんときたものではなく、思春期の女子高生のそれであった。

「後先代様も、かんちゃんとおじようさまに口論で勝てないことぐら

い分かってるんじゃないですか？」

「ぐはっ！」

「んじゃあけんけん、そろそろ行こお〜」

ついでに先代楯無に止めを刺す本音。実際、簪と楯無がIS学園から帰ってきている時に度々起こる口論はほぼ姉妹の完全勝利に終わっている。最終兵器『お父さん嫌い』と『今の楯無は私』のおかげである。

「時守くん」

下着を洗っていた先代楯無が、時守を呼び止める。ジャブジャブという水音が鳴っているが、彼の声は良く響いた。

「…刀奈達から君のことは聞いている。君自体から話は聞いていないが、賛同もしている。…だが、娘たちに辛い思いをさせたら…その時は覚悟しておけ」

「…分かりました。死ぬ気で、幸せにします」

「ああ。…後で、男だけで話をしよう」

「…はい。……とりあえずその洗濯が終わったら」

「そ、そうだな」

2人は再びじゃつぶじゃつぶと下着を洗い始める。これでも一応、更識家と布仏家のヒエラルキーのトップなのだ。

「んじゃあけんけん、行こっか」

「ん」

本音に引つ張られ、とことこ廊下を歩いていく。身長差と歩行速度の違いのせいでかなり歩きづらかったが、今の本音にそれを言えば何を言われるか分からないので何も言わないことにした。

歩くこと数分(主に本音の速度のせい)、2人は大きなふすまの前で立ち止まった。

「ここが私達の部屋だよお」

「…え、4人でおんなじ部屋？」

「うん、そだよお」

「…カナと簪が喧嘩してたときやばかったんちゃうん？」

「…部屋の四隅に散って寝てたんだあ、かんちゃんとおじょうさまが対角線で」

「ああ…そうなんや。あ、もう開けてええで？」

「じゃ、ごたいめーん！」

本音がスパアッ！と音が鳴るほど豪快にふすまを開けたその先には

「あつ…んっ…あんっ！…お、お嬢様！…んっ、ふ…う…や、やめ…てっ！…ひやつ…あ、そ…こはあつ…らめ…ですう……んはあつ！」

「あら？虚ちゃん、かなり感じてるわね？…なんでこんなに大きいのに一番感度がいいのかしら？…ねえ簪ちゃん」

「うん。虚さん…確かお尻も弱くなかった？…私はおっぱいやるから、お姉ちゃんは、そっちを」

「ほんとう…じゃあちよつと失礼して」

「し、失礼するなら揉まないでくださ…ひゃんっ！…ちよつ…と、まっつてくだ…さいっ！」

「いやんっ、そこまで怒らないでよ虚ちゃん。つれないわね」

ぐんずほぐれっしている彼女とその従者の姿があった。虚の声が大きかったからか、先程のふすまを開ける音にも気づいていないように、3人はその傍から見る限り、みだらにしか見えないその行為を続けた。

「…おつきい。張りも…よし。感度…よし」

「か、簪…おじよ、う…さまっ！ひ、人の…身体を…んっ、そ、あんっ！そんな風に…やつ、…んんっ！解説…しな…い、で、く…ふう…くださ…いいっ！お、お嬢様！直は…だ、だめえ…」

「…ほんとお尻弱いよね、虚ちゃん。揉んでるだけよ？」

「そ、それだけでも…やつ、だ、ダメなものは…ふあ…ダメ…ですっ！…あ、あれ？本音？…に、け、…剣…くん？」

喘ぎが止まった虚の最後の一言が、場の空気を凍らせた。まるで時が止まったかのように固まる5人。服の上から虚の豊満な胸を揉みながら固まる簪。虚のスカートの中に手を突っ込んで直で虚の臀部を揉みながら固まる楯無。2人に胸と臀部を揉まれ、頬を紅潮させて息を荒げている虚。にぱーっと、満面の笑みを浮かべながら姉の姿をじっと見続ける本音。虚の姿を速攻で脳内保存し、ついでにISのコアのメモリーにこっそりと保存する時守。

「わあくお、お姉ちゃんえろくい」

そして本音の一言で再び、5人の時が動き始めた。

「…ち、違うの、剣。4人の中で一番おつきい、虚さんのおっぱいってどんなのかなって」

「いやうん、まずなんでそうなったし」

「男子で言うプロレスごっこみたいなものよ」

「おけ理解して脳内保存した」

「理解はしても脳内保存はしないでください!!」

顔を真っ赤に染めた虚が怒鳴る。胸や臀部を揉まれていた姿を見られただけでも普通に恥ずかしいのだが、この中で一番年上で、さらに主の婚約者の前で醜態を晒してしまったこともあり、普段怒る時などよりも、その顔ははるかに赤くなっていた。

「お嫁に行けない…」

「およよ、お嫁とおよよ一文字違い…なんつって」

「しばきますよ剣くん！…そ、その…どれぐらい…見ました？」

「…はつきり全部…」

「ほ、他の人には言わないでくださいね…？」

乱れた衣服を整え、ズレた眼鏡をかけ直し、涙目になりながらも時守に訴える。

流石の時守も恋人の従者の痴態を他人に話す趣味は持ち合わせていない。

「はい。俺の頭の中に留めておきます」

「できれば忘れてほしいのですが…」

「留めておきます」

「…そ、その…変なことに使ったりは…」

「しませんよ？将来虚さん弄る時に使えるかなって。ツツコミは欲しいし」

「やっぱりそれですか！…あれ？私…ツツコミ？」

「諦めた方がいいわよ、虚ちゃん。鈴ちゃんもう学園皆のツツコミキャラとして定着しちゃってるでしょ？あれ剣くんが始まりだから」
「…それは私にここではツツコミ役に徹しろと暗に言っているのですか？」

「ダイレクトに言ってるのよ」

「…分かりました」

将来死ぬまでツツコミ役が決まってしまった虚。…となると当然。

「じゃあ私はポケ担当だあ〜」

「じゃあ…私も？」

「本音っ！あなたみたいなのっくりなポケにはつつこめません!!せめ

て後二倍速ぐらいしないとつつこみません！それと簪お嬢様！剣くんとお嬢様みたいなのを止められるのは貴女ぐらいしかないのですよ!？」

「早速つつこんでるわよ虚ちゃん。後、みたいなのってなあに？」

本音がボケ、楯無もボケ、簪も当たり前のようにボケる。時守は言わずもがな、である。

「なぜですか！私が眼鏡だからですか！」

「眼鏡は関係ないと思うわよ？」

「…本当ですか？…全くもう、なんでこんな事に…」

「元はと言えば虚ちゃんが『水着がまたキツくなった』って言ったからじゃない」

「それが胸を揉むことには繋がりませんっ！」

「わ、私のと比べてどんなのかなーって…。あ、あはは…」

「…もう、罰として買い物にきてきて貰いますからね！」

そこからは早かった。流星年頃の高校生と言ったところか、すぐ様外出の支度を終え、5人でレゾナンスへと出向いた。

そこでお菓子、水着、遊び道具などを大量に買い込み、次の日となる今日、彼女らは海へ来ていたのだ。



「ねえ剣、行かないの？」

時守の隣に立つ簪がそう聞いてくる。

彼女の今の格好は、臨海学校の時に着ていたワンピース型の水色の水着にシュノーケル、浮き輪という完全装備である。

海の方を、本人は隠しているつもりなのだろうが、キラキラとした瞳で見つめている。

「ん、せやな。そろぼち行くか」

「そうですね。固まっていた方が何かと楽ですし」

時守以外の4人、つまりは更識姉妹と布仏姉妹は美少女揃いである。そんな美少女達が、水着で、かつ男女比1:4で遊びに来ているのだ。たかりに来る男共も居るかもしれない。虚が言った、何かと楽、とはそう言った輩を敬遠するという意味である。

「そーいやようお義父さん達了解したな。子どもだけで海なんて」

楯無と本音の元へと向かう途中、時守が簪にそう尋ねた。

「うん。虚さんと本音も含めて、私たち4人とも武術の心得はあるし、ISS機あるし」

「あー：国攻めてきても大丈夫っぽいな」

「うん。：それと、お父さん達が私たちの水着姿想像して鼻の下伸ばしてたのがキモかったから、2人だけでマリパ5時間耐久させてる」

「：ある意味キツイなそれ。虚さんもゲームとかするんすか？」

「はい。4人用のゲームが多いので、よく4人でやりますよ？」

「ほえー、中学ん時の俺と似てるなー」

今にも海へと駆け出しそうな簪の手を、恋人つなぎで逃げられないようにしつつ、話を膨らませる。

「：剣の中学時代、気になる」

「んなもん普通やで？仲いい奴と席一番後ろ同士になったら授業中でも4人で狩りまくってた」

「えっ、4人共後ろになることが：そんなに多かったですか？」

「そっちよりも友達の方がって感じっす。クラス40人中35人ぐらい持つてて32人ぐらいと仲良かったから」

「…学年に、何人友達いたの？」

「数えたことないけど…喋った事無い奴おらんのちゃう？」

「何故か私の学年でも剣くんと友達っていう子が多い理由が分かりました」

「けーんくんっ！」

「よっ…と。…あ」

「っ！本音…！ゴー！」

話しているうちに、いつの間にか波打ち際まで来ていたようで、時守の身体に楯無が抱きついた。それと同時に時守の手から簪の手が離れ、簪は本音と2人で海へと入っていった。

「虚ちゃんとイチャイチャしてたわね！」

「い、いや、そんなんちゃうって」

「むう…」

むぎゆう、とその豊満なバストが潰れるほどに力強く、楯無は彼を抱きしめる。

頬を膨らませながら抱きつくそのあざとかわいい姿は、決してわざとしていた訳では無かった。彼を自分達4人以外の誰かに取られるかもしれない、そう直感して、身体が動いていたのだ。

「お嬢様。心配なさらずとも、私は剣くんにそのような気持ちを抱いたことはありません。ですから安心してください」

「虚ちゃんがそう言うなら…。うんっ、よし！今日は遊ぶわよ！」

〜数時間後〜

「かんちゃん！もう浮き輪で寝るの禁止！」

「ううっ…」

「楽しかったですね、お嬢様」

「うん…でもちよつと眠いかも…」

「ん」

「ん、ありがとう剣くん」

途中、4人を狙うアホな輩を撃退したり、浮き輪で寝ていた簪がかなり沖の方に流されたりとトラブルもあったが、それなりに楽しんだ5人は帰路についていた。

「えへへえ…剣くんの背中、あつたかい…」

「…お姉ちゃん、羨ましい」

「簪も、いつかしたるわ」

「う、うんっ！」

「あ、そう言えば剣くん、いつまで更識家に？」

「え？…あー、明後日には家帰るから…明日の昼過ぎぐらいかな？」

「分かりました。家の者に伝えておきます」

ほぼ寝かけの楯無を背負い、簪にも近い将来する約束をし、虚に明日、明後日の予定を伝える。

そして同時に、

「あ、そういや明後日友達来るし、簪とカナも来る？」

「行くっ!!」

爆弾を落とした。

「なんでそういう事早く言ってくれないのよ！」

「えー…つと？そない大事なこと？」

「うん、大事なこと。皆呼ぶの？」

「あー、せやな。せやったら専用機持ちも呼ぶか。虚さんとのほほんはっ。」

「私たちは課題をしなければなりませんので」

「おじようさまやかんちゃん、けんけんと違って代表とか代表候補生じゃないからねー」

時守や簪らといった、テストの成績が良かった代表並びに代表候補生はIS学園の長期休暇の課題を免除されている。これは、既に出来ている座学に時間を割くより、データ取りのために時間を使うために、という学園からの配慮である。

「そか、んじや俺んちに来んのはあいつら3人とこつちからは8人？」

「うん、そうなる」

「…入るかな」

「……多分、大丈夫」

時守を中心とした、関西と関東の友人が出会うまで、後2日…

関西人、襲来

「えーっと、ここ…みたいだな」

「うむ、合っているようだぞ嫁。ちゃんと表札に『時守』と書いてある」
「字面だけみたらやたらかつこいいわね」

「字面だけなら私や一夏、楯無さんたちも負けてないぞ？ 『篠ノ之』、『織斑』に『更識』だからな」

「あれ？…なんで『時守』の隣にスペースが空いてるんだろ？」

「…はっ！ま、まさか…！わたくし達が嫁いだ時用の…？」

「…無いとも…言い切れない」

「さ、皆、剣くん家の表札で騒ぐのはそれぐらいにして、そろそろインターホン押すわよ？」

時守、フォルテ、ダリルの3人を除いたIS学園専用機持ち8人は、都内某所の一軒家、時守の自宅の前にいた。

シャルロットやセシリア、更識姉妹でさえ1度も訪れたことの無かったその場所に、皆何かしらの興味を抱いていた。

その家のチャイムを、楯無は迷うことなく押した。そして――

『…あゝい』

聞こえてきたのは、明らかに眠そうな、そして不機嫌そうな時守の低い声だった。

『…新聞取ってませんよ…』

「剣くん、私よ、わ、た、し」

『……早すぎ。まだ9時やで』

「ダメ、だったかしら？」

『あかんことないけど…皆いんの?』

「ええ、ちゃんと皆居るわよ?」

『…行くわ』

そう言われて待つこと数秒、家の中から半袖半ズボンのパジャマに身を包んだここの主が出てきた。

「…ねっむ…ってあつつ!!修造本気出しすぎやろ…おはよ皆」

「おはよう、剣くん。こんな時間まで寝てるなんて珍しいわね?夜更かししたの?」

「外出る予定無い時いつもこんぐらいやねん」

「あんた今すつごい顔になってるわよ?」

「…鈴以外上がって」

「うそうそうそ!ごめんってば!」

「…そういうのええからはよ入って」

「あ、うん。じゃ、おつ邪魔しまーす」

時守は寝癖がつきまくりの髪の毛を左手で弄り、寝ぼけていてまだ普段の半分も開いていない目を右手で擦りながら8人を家の中に案内し、リビングのソファに適当に座らせる。

「…何飲む?」

「と、とりあえず飲み物の前に、顔を洗ってきたらどうだ?」

「…うん」

箒にそう促され、洗面所に向かう時守だったが、まだ寝ぼけているようで、右へ左へ、まるで酔っているかのようにふらふらしていた。リビングに残された8人は何か起こらないか心配しつつ、滅多に見られない時守のその様子をじつくりと見ていた。

「剣って、家じゃあんななんだな」

「確かに意外だな。ふざけていることも多いがしっぴかりしている時はしっぴかりしているだけにな」

一夏と箒の言葉に、他のメンバーも頷く。ここにいる全員にそう思わせるほどに、普段の時守は寝起きの姿を頑なに見せない。

リビングで、全員が緊張した面持ちでドアの奥に消えた時守を待つこと数分、先程よりかはすっきりとした顔で、彼が現れた。

「あーすっきりした。ほんますっきりした」

「なにアンタ顔洗うついでにしっぴかりお花摘んでんのよ」

「は？目ヤニのこと言うてんけど…お前何と勘違いしてんの？」

「えっ、あ、あー。そういうこと…いや、何でもないわよ？」

「あつそう。…鈴、お久。ラウラとモツピーも。…後ついでにワンサマも」

「それ今？…ま、久しぶり。ニューヨーク以来ね」

「お久しぶりです師匠！」

「久しぶりだな」

「久しぶりだな剣！会いたかったぜ!!…ってあれ？俺ついでかよ！…って簪さんいつの間にかの膝の上に!？」

ソファに座った時守の膝の上に、まるで瞬間移動したかのように、簪が座っていた。簪のうなじに顔面を突っ込んではずすしたい衝動をなんとか抑え、時守は鈴、ラウラ、箒、一夏、という未来の嫁メンバーではない、いつものメンバーにとりあえず適当に軽く挨拶した。

「こうしないと…剣寝ちやうから」

「…I, m hungry」

「剣くんまだ朝ごはん食べてなかったの？」

「…うん」

「何食べる？」

「…ドーナツと、野菜ジュース…あとプリン。キッチンにある」
「可愛いなおい」

朝のメニューを聞いた刀奈とシャルロットが台所に向かう。時守家のキッチンや冷蔵庫の中はやたら綺麗で、整理整頓もすっかりとされており、初めて入った2人でも簡単に目的のものが見つけれられた。一夏のツツコミを軽くスルーし、時守は簪を抱きしめながら右に左に揺れる。

「…朝からがつつり食えるヤツの胃の中意味わからんわ…。身体休めたすぐあとにガツガツ食えるとかただのデブやんけ…」

「お、俺や千冬姉は痩せてるぞ!？」

「…：頭も筋肉やからエネルギーようけ使うねん。省エネしろ省エネ」

「ひでえ！省エネはしてるぞ!!」

「きよ、教官の脳は筋肉で出来ているのか!?!…も、もしや骨も…うそ、そうなれば…教官は…教官は本当に人間なのか!?!」

「とりあえず落ち着きなさい、ラウラ。後一夏、脳筋ってこと否定しないのね。…にしても剣、アンタが結構朝弱いって意外だったわ」

「今日だけな。…朝からテンション上げてたらあいつらに付き合いきれへんねん」

「あいつらって…剣の中学の時の友達?あ、はいこれ」

「剣くんの友達…ちよつと所じゃないレベルで気になるわね。はい。私も」

「あんがと、シャル、カナ。とりあえずテーブルに置いといて。…気になる言うても、普通…：とは言いきれへんけどそこら辺にいるようなやつやで?」

シャルロットと刀奈の2人にドーナツと野菜ジュース、プリンをテーブルに置いてもらい、その中からドーナツを手に取り、齧る。飲み込む。齧る。飲み込む。簪に一口上げて、…強引に口の中に入れて

…野菜ジュースで押し込む。

「ごっちゃんした…片付けて歯あ磨いてくる」

「うん、じゃ、簪ちゃん。…ね？」

「…むう」

渋々、と言った表情を隠すこと無く頬を膨らませ、簪は時守の膝の上から降りた。

◇

食器を洗い、もう一度洗面所へと向かい、歯を磨き終え、自室でとある物を取り、リビングに戻った時守の目に飛び込んできたのは――

「見なさいよセシリア！このソファふつかふかよ!!」

「剣さんには申し訳ありませんが…実家のソファの方が…」

「僕の家も、この前帰った時に見たらずいぶん高い物に変わってたし…」

「これぐらいなら家にいくらでもあるわよね？簪ちゃん」

「うん…。でも、基本和室だし…使い道、無いかな？」

「何なのよこいつら全員金持ちか!!…金…持ちか…。うっ、ぐすつ…
神は…非情ね…」

ソファに仰向けになり、ぼふんぼふんと跳ねていた鈴の身体が止まり、ソファに沈み込んで涙を流す姿だった。

「…何しとんねんお前」

「え？いや、ソファあってマンションとかじゃないならこれしたいじゃない？」

「…分からんでもないけどな。ってかぶっちゃけその辺に売ってるからなっ…」

「ほんと？」

「ただ新品ってだけや。そんなんとセシリー達のソファ比べたあらん

で。…つとせやせや。多分見たいとか言う思ったからアルバム持ってきたでーつてもう来たか」

テーブルにアルバムを置こうとした瞬間、時守のズボンのポケットにある携帯から、凄まじいほどのバイブ音と通知音が鳴り響く。

「ごめんやけどもう一回だけ待つといて。あいつら迎えに行ってくるわ」

そして遂に、関西と関東（世界各国）が一堂に会する。



「お待たー」

「ひつろー！リビングひつろー！イオンのフードコート…よりはちっこいな。…誰？」

「剣ちゃん、無駄に金掛けすぎや思うで。こんなとこに金かけるんやったら投資とか不動産とかして金稼げばいいのに…誰？」

「んっはあ!!さっすが剣ちゃん相変わらずええケツしとんなあ!まあでも今の俺のブームはDMガチホモ×DS巨乳フタ○リやからそこまで興奮せえへんけどな?でもまあ剣ちゃんには別の意味で興奮する…って誰やねんこいつら」

率直に言おう。

時守に連れられ、一夏たちリビング待機組の前に現れたのはとんでもないキヤラをした3人だった。

まず1人目、人の家のリビングの広さを何故かショッピングモールのフードコートの広さと比較した男。

2人目、眼鏡を掛け、やたらデカイ端末を左手に持ち、家に入っすぐ時守家の無駄を探し始めた男。

そして3人目、時守の尻をひたすら凝視し、何故か自分の今の性癖

のブームを語りだした男。

『世界最強』織斑千冬を日頃から見慣れており、かつ刀奈以外のメンバーに至っては『大天災』篠ノ之束と直に合っているのだが、その2人と比べても全く劣らない強烈すぎるキャラであった。

「どした？座んで？」

「お、おう……」

「ほ、ほら簪ちゃん。詰めて詰めて」

「う、うん……」

そんなメンバーを当たり前のように率いるこの男はどこかイカれているのだろうか、何事も無かったかのように一夏達にそう問いかけた。一夏達IS学園メンバーは文字通り困惑していた。寧ろ――

「んじや揃ったところで」

「合コンか!？」

「ちやうわぶつ殺すぞ」

「んなら生き返って剣ちゃんに一生憑いたるからな!……はっ!?そ、それって剣ちゃんとずっと一緒ってことやん……。つまりは俺にそんなことしてほしかったってことか剣ちゃんこのツンデレめー!」

「剣ちゃんはそんな非効率なことせへえんと思う」

「とりあえず健君土に還るか」

「嫌や。土に還る前に冬のおこたにもう一回潜りたい」

『……』

困惑しすぎて誰一人として会話についていけないまでもある。

「……話進まんから健君黙っついて」

「うえー!……あ、これ了解って意味って覚えてるよな?剣ちゃん」

「百回も言わされたからな。……さてと、そろそろ紹介するか」

リビングに置いてあるテーブルを挟み、対面して座る両陣営を、その共通の友人である時守が紹介する。

「…まずIS学園やな。俺らの敵、侍、ツインテ、軍人、嫁嫁嫁嫁」

「紹介雑過ぎんだろ！つてか剣の敵つて何だよ！」

「今ツッコんだのがワンサマな」

「侍…私か？」

「モツピー以外に誰がおんねん。あ、モツピーこと篠ノ之箒な」

「ツインテつて…あたし？他に言うこと無いの？」

「他の特徴言うたらキレルやん。…で、今のが凰鈴音な」

「師匠！軍人ではなく弟子とお呼びください！」

「…多分俺の弟子のラウラ・ボーデヴィツヒ」

「誰が第一后なのか気になりますわ！」

「もうセシリアだったら…剣はそういうの考えてないって知ってるでしょ？」

「シャルロットの言う通り。…剣は、皆平等に扱ってくれる」

「ツツコミやボケも男女平等よね」

「で、この子たちが俺の癒し、セシリア・オルコット、シャルロット・

デュノア、更識簪、更識楯無。…以上！質問ないな！よし！」

「はい！剣ちゃん！あーりまーす！質問あるよー!!」

時守の紹介に、一人の男が手を上げた。

「まず！」

「なんや」

「ワンサマとかキラキラネーム過ぎるやろ！」

「本名じゃねえよ！思いつきり日本人の顔して名前ワンサマとか死にたくなるわ！剣もちゃんと紹介しろよ！織斑一夏つてちやんと！」

「一夏て…充分キラキラネームやわ…うわあ…流石東京…」

「東京関係無くね!？」

一通りのやり取りを終え、思わず立ち上がっていた一夏は肩を上下させる。その際ふと『ツツコミはセンスありやな』や『もう関西に染めかけてるとか流石剣ちゃん』と言ったやたらと採点めいた言葉が聞こえてきたが敢えて無視した。…ツツコめるほどの元気がもう無くなったのだ。

「何汗かいとんねんワンサマ。次こつち紹介するからな。まずこのパツとせんのが小西亮哉君^{こにしりょうや}。一応陸上部でもあり、一応俺らの代の中学の学力No.4。さつきイオンとか言うてた子な」

「一応は余計やで、剣ちゃん。後パツとせんてどこが?…顔やんなあ…」

「小西君全部が全部一応やん。…んで、この眼鏡かけてて頭良さそうやけど隣のアホに総合で負けてんのが馬場雄星^{まばゆうせい}、通称馬場ちん」

「剣ちゃん、失礼やで」

「そうか?で、最後に変態でアホで頭良くてイケメンできつしよいいいつが神藤健^{しんどうたける}」

「特技はいろんな性癖を見つけることでーつす☆」

「で、最後に俺を入れたのが中学の生徒会」

「学校崩壊する未来しか見えねえよ!生徒皆がっこうぐらしならぬその日暮らしたよー!」

思わず復活し、ツツコんだ一夏を責める者は誰もいなかった。寧ろ、一夏のそれを評価する者までいた。…何故か。それはボケられたらツツコむ、という一連の流れを一夏が自然にしていたからである。

「なんで崩壊すんねん。俺生徒会長で健君副会長、馬場ちん庶務で小西君が会計で上手いこといつてたで?」

「馬場君が会計じゃねえのかよ!どう見てもこの中で一番賢そうだろうが!」

「外見で選ぶなや。俺らん中でもワンサマパツと見強そうやけど鈴達にも負けてるんやろ?そゆことや」

『ああーなるほど』

「…納得された…箒にも鈴にもラウラにも納得された…」

「…はっ！ち、違っ！そんなことをしている場合ではない!!」

一夏がいじけたその隣で、箒がはっと気づく。その表情はいつものようにキリツとはしておらず、一夏や学園での友人以外の大切な何かを確認したいという、不安や恐怖などといったマイナスな感情を含んでいた。

「そ、その…だな。神藤健、剣道をやっていたり…は？」

「うえ？…あー、してるで。うんしてるしてる。こないだもインハイ優勝させてもろたし」

「やっぱりかあああ!!!」

「うわっ！ちよっ、箒!?アンタどうしたのよいきなり!」

「…箒?…篠ノ之…箒…っ!ってあの中3の時女子で優勝しとったやつやー!」

「あああ…」

「ど、どうしたんだ?箒…」

急に目尻に涙を貯め、俯き、声を絞り出し、何かに絶望する箒に、I S学園メンバーは一斉に彼女の方に視線を集める。

「…私の…代は、だな。言っちゃ悪いが私以外に強い剣士は全国でもほとんどいなかったんだ。…だからという訳でもないが、ふと『男子はどのなのだろうか?』と思っつてな。試合を見てみるとだな、圧倒的な強さを誇って中学1年で全国優勝した奴がいたんだ。…正直、感動したんだ。そいつの試合に。見れば容姿端麗、聞けば文武両道、インタビュー等の受け答えは紳士的、そんな奴に付いた名前が『神童』。…そ…んな、そんな奴が…」

自らが今絶望している元になるであろう話を、箒は一言一言、しっ

かりと紡いだ。そして、顔を上げ――

「こんな変態だとは思わなかった!!」

「いやあそう褒められても…」

「何をどう聞けば褒められたと勘違いできるんだ!?!」

怒った。唯一憧れたと言ってもいい、同世代の剣士。そんな奴がこんな奴だったのだから当然と言えば当然だろう。

「そんな俺に求められても困るわ」

「うぐっ…な、ならーっただけ聞かせてくれ。剣を握っている時のお前と、今のお前、どっちが本当の神藤健だ?」

「今。ってか基本そんな使い分けとかあんな無いで? 試合中も『今日の晩ご飯肉じゃがかなー? シチューかなー? キムチ鍋やったらええなー』とか考えてるし」

中学高校、共に学校1を誇る変態である健だったが、流石に箒の試合を見て『すっげー! 初めて全国来たけどあの篠ノ之箒って娘おっぱいめっちゃぶるんぶるんしてるやん! いや…ぶるんぶるんやな…挟んだら気持ち良さそうやわ…やっべー! うわっ、他の子もえっぐいわ…。女子の乳揺れもっと思たいわ…え? 東…京?...んなら全国までまた行けばええんやろ! ビバ乳揺れ!!』という一心で全国まで上り詰めた事は口にしなかった。今思い出したことだが、それを口にしてしまえば何かが終わる気がしたからである。

「…肉じゃが…シチュー…キムチ鍋…は、はは…ははは…」

「ハハッ! 僕ミツキ〇!」

「剣、ボケやめさせるとかできないのか? 箒が放心しかけてるんだけど…」

「無理やな。俺の友達やで?」

「そう…だよなあ。さつきから簪さんとシャルロットとセシリアと楯

無さんに触れてなかったけど…何してるんだ？」

「見て分からん？俺の匂い嗅いでるらしいわ。簪は寝てるけど」

「あっ…そう。…はあ」

「む？先程からどうしたのだ？嫁よ」

「剣ちゃんトイレ行ってくるわー」

「…まともなのがアタシと一夏しか生き残ってない…」

鈴の言う通り、そこにはまともな人間がほとんどいなかった。セシリア、シャルロット、簪、刀奈の四人は会話の隙を見て時守とイチヤイチャちゅっちゅ。ラウラは関西 side に影響され先程から六甲風の歌詞を覚えさせられている。箒は一夏の言ったとおり放心状態で、関西組はトイレに言ったりラウラに色々教えたりしている。…一夏と鈴以外、最早まとまってすらいなかった。…が、

「腹減ったな」

「せやな」

気付けば12時を越えており、時守と健の声で全員がまとまった。食は万里を超えるのだ。

「あー、じゃあ俺も手伝うよ。この前俺ん家に皆来た時は作ってもらったし」

「おけおけー。んじゃワンサマ手伝ってー」

「了解」

「おっしやー。ひっさしぶりに本気出すかー」



「あー美味しかった。マジでお店レベルやろ剣ちゃんの料理」

「お店の跡取りになる予定やったからな」

「いや…ここまで美味しい炒飯食べたこと無いわよ…。アンタどう

なってるの?」

「どうもなつてへんわ」

時守の炒飯はなかなか好評だった。それこそ、中華にはそれなりの自信を持っている鈴が完敗だと思う程には。

「なあ剣ちゃん」

「ん?」

食後、皆がリビングでだらけていると、健が真剣なのかふざけているのか分からないような表情で言葉を発した。

「…なんか良いことあった?」

「…あ?…ふつ、はははっ! ああ、あったあった。ええこと尽くしや」

「ははっ! そうかそうか…良かったやん」

「ああ、ほんまにな。…ようやくや」

その健と時守の会話に、IS学園メンバーは首を傾げ、残った関西メンバーの2人は笑っている時守と健を見て微笑んでいる。

「…ようやく…本気になれるもん見つけたわ」

瞬間、時守以外のIS学園メンバーを自らの何かを支配されるような感覚が襲った。

時守の表情に。

時守の言葉に。

そして時守の雰囲気、一瞬にして呑まれたのだ。

「ずっと探してたもんなー剣ちゃん」

「ああ。…今までやってきたもん全部がおもんないって言ってるわけちゃうけど、ここまで俺に合ってるもんも珍しいわ。これやったら誰

にも負けたない。そう思えるからな」

「なるへそ。ようやく剣ちゃんの才能の道が決まったつちゆうことか」

「俺にもし才能があつたらそうなるな」

先程とは一転し、軽く「がっはっはー」と笑う彼に釣られ、次第にリビングが再び騒がしくなる。

そしてこの騒がしきは、一夏達が帰る時までずっと続いた。



「山田くん。時守をどう思う?」

「ふえっ!? そ、それって男性として…という意味ですか?」

「はあ…、違う。1人のIS操縦者としてだ」

「あつ…ああーそうですかー。操縦者、として…。うーん、難しいですねえ、私よりかは上に行くと思いますけど…」

「あまり自分を卑下しすぎるなよ、真耶。…そう、か。真耶よりは上か…」

「? どうしました?」

IS学園職員室、そこに真耶と千冬は居た。残った仕事を社畜の如く働き、片付け、午後7:00には全ての仕事を終えていた。

インスタントコーヒーの入ったカップを片手にくつろぐ彼女達の話題は自分達のクラスの生徒、時守剣についてだった。

「いや、時守の強さが周りに具体的にどれほど伝わっているのかと気になつてな」

「時守君の強さ…。あんまり、皆知らないと思いますよ?…ほら、上からの指示で模擬戦の制限があつたりしたせいで」

「やはり…か」

最後の言葉を千冬に聞こえる程度に小さくした声で伝えてくる真耶に同意する。

「…二学期が楽しみだな」

「確か、時守君の模擬戦も解禁されるんですよ?」

「ああ、あいつは自分のスタイルを確立したしな。もう変な癖が付くことも無いだろう。…くくつ、一夏や嵐の驚く顔が目に見えかぶ」

「…へ?」

「…山田君、君にだけネタバレというか、先に言っておこう」

千冬の言葉に首を傾げる真耶に、千冬はさらに言葉を繋げる。

「あいつはまさしく天才だ。ISだけなら、数年後には私をも軽く上回るだろうな」

「…ええ!?本当ですか!」

「ああ。ま、あいつにあつて私に無いもの…と言えば分かるか?」

「…恋人?」

「コミュニケーション能力だ。…呑み捨て。死にたくなければな」

「アツはい。…で、どうしてコミュニケーション能力でそれほど変わるんですか?」

「ISのコアには自我がある。…ということとはだ。好みもあるんだ。まあコアに『この操縦者は嫌だ』と思われるようなことがあればそこで成長は止まる。…が、逆は?」

「無限の成長もありえる…ということですね。確かに時守君なら…ISコアと仲良くなつて六甲嵐とか覚えさせそうですね…」

「…もう覚えさせていた。一軍の応援歌もな。もしかしたらあの束でさえ驚くようなことをしでかすかもしれんぞ?」

「…やりそうですね…」

「しないと断言できないのが怖いな。…さて、そろそろ行くか」

「…はい。あ、そう言えば先輩」

「ん?」

「コミュニケーション能力無いの自覚してたんですね」
「…言うな」

そうして各々の夏休みは、終わりへと向かう。

原作5巻 文化祭編

二学期、スタート

「ぜらあああつ!!」

「甘いのよー夏あー!」

二学期の実技授業が始まる初日、1年1組と1組2組はアリーナにてIS実技合同授業を行っていた。内容は『専用機持ちによる模擬戦』。専用機持ちでない一般生徒は専用機持ち達の試合を見ることで戦術を学んだり、機体のどこに不備があるかを見分ける能力を鍛える。

そして現在、アリーナで戦闘を繰り返しているのは4人。

一夏vs鈴のペアとー

「喰らえっ!」

「よっ…と」

時守vsラウラのペアだ。

「くそっ!動きが読めん…!」

「ほーらほらほらラウラ。余計なこと喋る前にちゃんと相手確認しいやー。さつきから避けられてばっかやでー」

「むっ!師匠!今は…いえ、試合ならば師匠だろうが関係ない!私は負けんぞ!」

「おー、えらい殊勝な心がけで」

それまで両肩のレールガンにより遠距離攻撃を続けていたラウラ

だったが、罅が明かないと踏んだのだろう。今度は両手首からプラズマブレードを具現させ、瞬時加速を使い距離を一気に縮める。

「はあっ！」

「…ふう」

ゆっくりと息を吐く。そうしているうちにも、ラウラは時守にプラズマブレードを振り下ろしている。プラズマブレードの先端がほんの少し、時守の頭部を捉えかけたその瞬間――

「…いくか」

「っ！」

金夜叉の各スラスタから金色の粒子が吹き出す。それと同時に、ラウラのプラズマブレードが空を割く。

「右っ！…くっ…速っ…ガッ!？」

「…」

時守が回避したことを一瞬で理解したラウラは、ハイパーセンサーで相手の位置を確認する。…が、時すでに遅く、『完全同調』により強化された上段右回り蹴りをモロに喰らってしまう。

「ぐっ…。動きが読めん…か」

「…」

アリーナの地面で受身を取り、ラウラは素早く視線を時守に戻す。宙に浮く彼からは、ISの大きな存在感をほぼ感じられず、ただ一人の『人としての存在』がそこに感じられた。

「…くぞ」

「来いっ！」

先程のラウラの接近よりも数倍速い二重瞬時加速を使い、時守がラウラに接近する。

いくらラウラがドイツ軍の軍隊格闘術を極めているとは言え、操縦のその先、自らの身体を動かすように動ける時守相手に、先手を取れるということはほとんど無い。

さらに時守には夏休み世界中を回って得た経験値がある。遠距離攻撃がメインでないラウラのレールガンはとことん避けられ、時守の得意な近距離まで詰められる。…だが、ラウラもただでは終わらない。

「(ここまで全て計算通りだ！師匠が世界で経験を得たことも全て私の読み通り！『完全同調』を使われたら近距離どころか遠距離でさえろくにアドバンテージが取れん。だが、恐らく師匠は仕留める時に必ず近距離に詰めてくる。…そこをつ！) 今だあ!!」

「ん？…へえ…」

「いくら速いと言え、ISはIS！二重瞬時加速中に強引に進行方向を変えることなどできん！」

二重瞬時加速の勢いそのまま、四肢を使った攻撃を仕掛けてきた時守に左手をかざし、AICを発動させて動きを止める。

「まあ…そりゃ無理やわな。身体本体の動きは」

「なに？…なっ!？」

しかし、AICは対象の形全てを把握し、なおかつ膨大な集中力を必要とする。故に、いきなり『完全同調』を解除し、展開したランペイジテールで攻撃してくるという動きまでは止められなかった。

「ぐっ…！」

『完全同調』発動。…ラウラ：お前まさか俺がこの夏休み、何の新しい技も覚えずに終わったとか思てへんよな？」

「…くそっ！」

「オールラウンド、展開。ま、俺が遠距離で攻撃する手段がグングニルだけやっていう考えは改めるべきやな。『具現…』」

ランペイジテールで再びグラウンドに叩きつけたラウラに狙いを定め、空中でオールラウンドを引く。

淡い、しかししつかりとした形を持った透明なエネルギーがオールラウンドの先端に集中する。そして――

「…一閃！！」

「なあっ!？」

引いていたオールラウンドを、まるでそこには居ない相手に近接攻撃をするかのようにスイングした。すると、スイング途中もオールラウンドが纏っていたエネルギーが、まるで斬撃―紅椿の空裂のエネルギー刃のように放出される。

「ちいつー！」

「はああああああっ!!」

1発、2発、3発と具現一閃を放ち、その後も次々とシユヴァルツェア・レーゲンへと撃ち込んでいく。ちょうど14発目がラウラに命中し、体勢が崩れたのを見てすぐさま懐へと潜り込む。そして――

「ぐっ…この…っ！」

「マジの近接で誰がA I C使わせる暇なんざ与えんねん！よっ！」

「っ！…S E…0。私の…負けか」

ラウラにA I Cを使わせない猛ラツシュをするため、『完全同調』を

解除。ランページテール2本と四肢を使った計6方向からの連続攻撃に、ラウラはあえなく沈んだ。

「おつかれ。ま、相性が悪かったな」

「むうっ！相性のせいだけにはしたくない…のだが…どうすればいいでしょうか？」

「それを考えんのがここ、やろ？クラスの皆もいるし、ちっぷー先生も山田先生もおる。…まだまだ学校始まったばっかやし、これからや」

「はいっ！」

「んじや、ってラウラエネルギー足りてる？」

「0ですっ！」

「いやうん。別に敬礼することちゃうからな？…んじや、捕まってるーい」

◇ 二学期、始まりである。

◇

「模擬戦いきなり二連勝っ！一夏にも奢ってもらったし、二学期幸先良いスタート切れたわ」

「それにしても…『雪羅』でかめはめ波、か…。一夏、雪片式型でどうにかしようとは思わなかったのか？」

「するにしてもせめて何かしらの剣技ではないのですか？」

「まああれほどの威力だ。嫁がロマンを感じるのも仕方ない…とは思うが…」

「僕は織斑先生が見てる模擬戦でそれをした一夏の行動力、凄いと思うよっ！」

「まあやってみたって気持ち分かんなくはないけど…」

「ぐふっ…！…シャ、シャルロットが変に慰めてくれるのがさらに心に…後簪さん。やっぱりやってみたいよな!？」

「あ、あはは…」

「う、うん…。でも流石に模擬戦ではしない…かな」
「がはっ」

午前の模擬戦の後、1組2組専用機持ち十簪の8人は食堂のテーブルに腰掛けていた。8人の話題は午前の模擬戦で一夏が放った某漫画のエネルギー波（雪羅ver）についてだった。

「あの後、ひたすら怒られていたがな」

「エネルギー効率を考えろ。だったか？」

「ISだと無駄が多すぎるよね」

「一夏さん、溜めモーションの時は発動させる必要があるのですか？」

「絶対必要だっ！剣なら分かってくれるはず…ってあれ？剣は？」

一夏がふと、この場に関西弁が無いことに気づいた。

「…なんやねん」

「おわっ?!いい、いたのか!…ってどうしたんだ?そんなに凹んで」

「…一回目の模擬戦で圧勝できひんかった罰で放課後またDS教師ちっふーの地獄塾に通うことになった…」

「そ、そう…なのか…。…ちなみに二回目は何？」

「余裕の完勝。コロンビア」

「うわああああっ!!」

両手を中途半端に上げ、ガッツポーズをしながらラウラに向かって渾身のドヤ顔を向ける時守。その時の記憶を思い出したのか、ラウラが声を上げてテーブルに突っ伏した。

「師匠が強すぎるんですっ!」

「は?…いや、俺まだまだだよっわいからな?今日ラウラに勝てたんもラウラとの相性もあるやろし、ラウラが俺の戦い方とか成長度合い知らんかったんもあるやろ?AICとランページテールとか相性最悪

そのものやし」

「むう〜」

「ま、もしもAICがランページテール丸ごとかけれるようになったら、分からねけどなー」

「どうせ『完全同調』で私が集中する前に終わらせるつもりに決まってる…」

「ギクツ」

「うわああああっ!!やっぱりだあ!シャルロットー!」

「ふふつ。もう、剣もダメだよ?あんまりラウラを虐めたら」

「へーい」

隣に座っているシャルロットの胸に顔を埋めるラウラを他の6人が暖かい目で見守る中、時守は1人軽く返事を返す。

「…後かめはめ波は無い。アホやろ」

「今それほじくりかえすのか!?!」

ラウラ弄りをひとしきり楽しみ、標的を一夏に変える。まるで今日の放課後にフルボッコにされる分のストレスを今の内に発散するかのように、一気に一夏に畳み掛ける。

「いや、あまりにもアホすぎたからな。ってかほんまちっふー先生見てる中でようできたな。アホやろ。まずISバトルで当たると思ってたん?アホちゃうお前。だいたいあ言う必殺技って相手の隙作ってから打つもんやのになにセリフも溜めも親切にやってんの?ほんまアホやろ」

「ひでえ…」

だがぶっっちゃけ言う通りである。

模擬戦の後、千冬が無表情で一夏の元に来ていつもの6割増しの出席簿を食らわせたことを考えるとまさにその通りである。

ちなみに、千冬に言わせれば、時守の言ったこと＋『お前はISバトルを舐めているのか』＋『時守もやりそう？確かにやりそうだが：ネタぐらい理解しろこの愚弟』＋『それとやるなら瞬間移動かめはめ波ではなく瞬時加速かめはめ波にしろ』＋『まあ今のお前には無理だろうから剣技を磨け』となる。

「でも正論で何も返せないわね、一夏。…負けは負けよ？」

「分かっている。午後は絶対勝つからな！」

「ふふん！アタシがそう簡単に負けると思う？」

「思う」

「な!?アタタよくも…!!…剣、今度模擬戦やる時アタタとするから！」

「なんで？別にええけど」

「今の流れで分かりなさいよ!!…っていいんだ」

「…皆、午後からも織斑先生の授業だけ…大丈夫なの？」

『いただきます！』

簪の一言で、先ほどまで弄り、弄られていた時守、一夏、鈴とその3人のやり取りを温かく見守っていたセシリア、シャルロット、箒の計6人が慌ただしく昼食を食べ始める。

「ごっちゃん！」

「速っ!？」

「早食いは身体に悪いぞ？」

「身体に悪いのと一撃で殺されそうになるのどっちが嫌か考えた結果や。俺はまだ死にたくない」

「悪いが一夏、私もだ。千冬さんの逆鱗には触れたくない。ごちそうさまでした」

「模擬戦で勝っても出席簿には負けたくありませんわ。ごちそうさま。美味しかったですわ」

「あたしは元々食べるの速い方だったし…っ！ゴホツゴホツ！あ、ありがと、剣」

「ぼ、僕も二学期早々アレは嫌にならなくて…ごちそうさま」

「…すまん嫁よ。嫁との食事と教官からの教育的指導を回避…私は回避することを選ぶ。ごちそうさま」

「一夏…遅すぎ…」

一夏がやや遅いペースで食べている内に、時守、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラとほぼ同時に食べ終わった。

喋っている途中、鈴が喉を詰まらせかけたのを見て、背中を叩くのと同時に、時守にあるイタズラ心が芽生えた。

「マジジジイやお前」

「ジジイ言うな！」

「お前ももう16やろ？…俺と同一やん…」

「当たり前だろ!？」

「お前…実は転生とかしてて実は70歳越えてまっせーとかない？」

「ねえよ！真正銘人生一回目だ！」

「じゃあ…好きな食べ物？」

「和食。小骨とか無いやつだな」

「ジジイやんけ」

「それがジジイとは限らないだろ!？」

—自然に話を振って一夏を昼食に集中させないようにした。もう食べ終わった箒達は一夏を待つという名目で胃を休ませていた。

「枯れてるし」

「枯れてねえよ!？」

「ホモやし」

「ホモじゃねえし！」

「…昼休憩もうすぐ終わるし。よし行くぞ！」

「へ？…あつ！は、嵌められた!？待てよ皆！」

時守のその合図で、普段は走らないセシリアさえも全力で一夏の元を走り去る。

「かかったなアホが！」

「くそっ！……ごちそうさまでしたあ！つてもういない!？」

IS学園は二学期も変わらない。



「廊下を走るな食堂で馬鹿騒ぎをするな時間の管理ぐらいしっかりしろ」

『ふぎゆうー!』

ちなみに簪を除いた7人は授業前、皆仲良く叩かれた。

学生の…宴が始まるーーツ!!

「あれ？剣はどこ行ったんだ？」

二学期が始まって数日後、一夏達…否、全校生徒…さらには全教員もが、講堂に集められていた。

その理由は至ってシンプルなもので、この9月中旬に行われることになっている、生徒会主催の学園祭についてだ。

こう言った集会の前は、大体の生徒が教師に指摘を受けるまで会話に花を咲かせる。IS学園では最早止めることが不可能なため、どの教師も止めはしていない。教師も女子○なのだから。

一夏が違和感を覚えたのはその周りから響く声だった。確かに女子の高く、やや耳が痛くなりそうな声もする。だが、いつものあの声が無い。岸原がツツコンでない。セシリアとシャルロットが奴とではなく、互いに会話をしている。

「それでは生徒会長、並びに副会長から説明させていただきます」

講堂の壇上から、生徒会役員である虚の声が、マイクを通して全体に響き渡る。それに釣られて、先程までのざわめきがピタツと止まった。

「やあ皆。おはよう」

「おっはー」

「あつ、楯無さんが生徒会長だったけ。…そーいや剣も副会長だったな」

壇上に上がり、挨拶をした楯無と時守を見て、一夏は時守が生徒会副会長という地位に就いているのを思い出した。実際、普段の時守から生徒会副会長の威厳などというものは微塵も感じられないのだ。

「さてさて、一学期は何かと忙しすぎたせいでちゃんとした挨拶が出来ていなかったね。一年生諸君、初めましての方は初めまして。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後よろしく」

「まあ多分知らん人は居らんと思うけど、一応言っとくわ。俺の名前は時守剣。皆の長の補佐や。以後よろしゅう」

途中、一夏が出した決死の訴えがかき消される程、まさに阿鼻叫喚と化した講堂にスピーカーから時守の声が響く。

「あつ、ちなみに部活動の本来の活動を疎かにした部は廃部な」
「ひどい!？」

「酷ないわこれぐらい。部活動として参加すのに本来の活動せえへんとかそりやアカンやろ。ま、部活動ってだけじゃなくてIS学園の中で活動してる…まあ同好会とか?とりあえず先生の許可貰ってる団体やったら参加オツケーやからな」

「剣、ちゃん、は!？」

「俺は一応生徒会副会長やし、これには入らへんねん。ごめーんね。ま、その代わり織斑一夏は全員に平等やから、部活動にも、学園祭にも、全力をもつて取り組んでIS学園をもつと盛り上げてほしい。…ではこれで生徒会からの連絡を終わります」

時守がマイクから離れ、楯無と共に礼をし、壇上から降りる。それと共に再び女子達に火がついた。

「よし、よしっ…!盛り上げてきましたなあああ!」

「今日の練習後の集合、いつもより30分伸びるって皆に連絡入れといて」

「…もしゲツチュウできたら…一夏君に、お茶を入れてほしい。動くのめんどくさいし」

「本が捗るうううっ!!」

「うちに来たら…まあヌードモデルは確定ね」

こうして、一夏が困惑し、何も理解できていないまま、学園祭の準備が始まった。



同日、放課後のHR。1年1組は、クラスごとの出し物を決めるためにやたらと騒がしかった。

「えーつと…:だな」

「ふむふむなるへそ」

現在、教壇に上がり、クラスの意見を聞き終えた一夏と時守が、クラスメイトが提案した意見に目を通してている。

内容は『織斑一夏と時守剣のホストクラブ』『織斑一夏と時守剣とツイスター』『しりとり』『おにごっこ』『織斑一夏と時守剣とポツキーゲーム』『織斑一夏と王様ゲーム』『時守剣のドSイジメ』『男女衣装交換ダンス』『俺と一夏のホストクラブ』：などなど、まあ普通の高校では見られないような物ばかりだった。

「却―」

「とりあえず何個か採用でええやろコレ」

うおおおつ！と、朝の講堂と同じように、大音量で歓声が響いた。

「剣！おま、アホだろ!? ってか『おにごっこ』とか『しりとり』とか『男女衣装交換ダンス』とか入れたのお前だろ!! しかもなんで『俺と一夏のホストクラブ』とか入ってんだよ！一人称からして明らかお前しか居ないよな!? 訳わかんねえよ！」

「いや、考えんのめんどかったし。ただダンスしてもおもんないやん？しかもホストクラブとかやったらとりあえずドンペリ入れといたら儲かるやろ」

「だからってしりとりは無いだろ!?ただダンスしても学園祭だから盛り上がるし!!…って、その前に高校生に学校で酒飲ませようとすんな！こんな所で商売人魂出さなくていいんだよ！」

「ここ、IS学園、治外法権」

「違うからな!?一応それなりに法はあるからな!？」

お祭りごととなると、やはりこの男が出てくる。時守がクラス代表の一夏にはぼ仕事をさせないレベルで仕切ろうとするが、一夏にも、譲れない一線がある。意地でも自分の意見を曲げようとはしなかった。

「ああもう！とりあえず、今出てる案は全部保留だ！」

「何っ!?織斑一夏は共有財産では無いのか!？」

「そうだ！織斑君には女子を悦ば…喜ばせる義務がある！」

「盛り上がることを考えたら織斑君と剣ちゃんが出るべきよ！」

またもや講堂と同じような雰囲気の流れ出した。まともな意見が

出ないだろう、という所で、1本の白く、細い腕が拳がった。

「なら、メイド喫茶はどうだ?」

「…え?…ラウラ?」

メイド喫茶。…喫茶、そんな女子力高そうなワードを出したのはなんと軍人であるラウラだった。

「実際に見聞きしたことはあまり無いが、このような催しでは客受けはいいだろう。それに飲食店は経費の回収が行える。外部への招待券もあつたはずだ。それなら、昼時はランチスポットとして、それ以外は休憩の場としての需要もあると思うが?」

「え、えー…つと?…皆は、どう…思う?」

一夏は戸惑いながらも、クラスメイトに意見を聞く。

ツイスターやポツキーゲーム、王様ゲームなど、先程出ていた案に比べれば比較的マシな内容が出てきたため、クラス代表としてはできればこれで決定したかったが、クラスのことを個人で決定する訳にもいかず、多数決を取った。

「いいんじゃないかな? 剣と一夏は厨房か執事でオーケーだと思うし」

「んなら俺両方。できれば厨房」

「んじや俺も厨房でよろしくな。シャルロット」

「え、…皆は、それでいいの?」

「良くない!」

「剣ちゃんと織斑君は執事一択なのよ!」

シャルロットのラウラを助ける発言を聞くやいなや、すぐに厨房に立候補した時守と一夏に周りの女子からやいのやいのと声が飛んでくるが—

「俺も剣も料理できるし—」

「せやったら俺執事でええで」

—うおおおおおつ!と、またもや歓声が上がった。

「ん? どないした? ワンサマ。そんながつくり肩落として」

「何でもない…何でもないんだ…」

「そか? んなら俺ら1年1組はメイド…は執事もいるし変やな。まあ

とりあえず『ご奉仕喫茶』みたいな感じでオツケー？」
「オツケー!!」

かくして、1年1組の学園祭の出し物はメイド喫茶改め、ご奉仕喫茶となった。

生徒最強の力

「あら、今朝ぶりね。こんにちは、織斑一夏くん」
「よっ」

「楯無さん…剣を連れて俺に何か用ですか？」

1年1組の学園祭での出し物が『ぶっ奉仕喫茶』になったことを千冬に伝えた一夏が職員室から出ると、生徒会長と生徒会副会長の楯無と時守が扉の前で待っていた。

その口ぶりから、とりあえずは自分に用があるのだろうとは思いつつも、今朝のこともあり、やはり少し邪険に扱ってしまおう。

「いやんっ、そんな嫌そうな顔しないでよ」

「誰のせいで強制的に部活に入れさせられそうになってると思ってるんですか！」

「…校則じゃない？」

「そうですね。ありがとうございます楯無さん」

邪険に扱った結果楯無に一瞬で論破された一夏は恨みの対象をIS学園の校則を作った人物達に切り替えた。

「で、改めて。何のようですか？剣も一緒ってことは楯無さんの私的な理由じゃないと思いますけど」

2人に…というより主に楯無に問いながら、一夏はアリーナへと歩を進める。その一夏に並ぶように、楯無と時守も歩き出す。

「流石に分かるわよね。…ただ単に一夏君にとある提案を持ちかけに来ただけよ？」

「提案って…何ですか？学園祭の景品以上に嫌そうなことなら本気で断りますよ？」

「流石におねーさんもそんなこと、一夏君には頼まないわ。…これから私がキミのISコーチをしてあげるって話なんだけど、どう？」

「けっこうです。コーチはいっぱいいるんで」

時守の服の裾を左手できゅつと掴みながら歩く楯無の提案を、一夏

は即決で切り捨てた。一夏に付いているコーチの数なら生徒の中ではかなり多い。箒、鈴、ラウラ、そして同じクラスの、それも同じ専用機持ちだという理由だけで手伝ってくれているセシリアとシャルロット。計5人もの専用機持ちが、一夏のコーチに付いている。

「そう言わずに。私はI S学園の生徒会長なのよ?」

「…はい?」

「お前知らんの? I S学園の生徒会長って…つ、楯無」

「ん、ありがと剣くん。大丈夫、3人ぐらい1人で余裕よ。待っててね」

何気なく話し、廊下を歩いてきた3人だったが、いち早く何かを察知したのか、時守が楯無に注意を呼びかける。

時守が一夏の歩みを右手で遮り、2人の足が止まった瞬間、廊下の奥から砂塵を巻き上げる程の勢いで、竹刀を持った女生徒が襲いかかってきた。

「なっ!? おい剣! 助けないでいいのかよ!」

「助けられへんねん。I S学園生徒会長、つまるところのI S学園の生徒達の長は学園最強やないとあかん。…まあ生徒の中だけやけどな?」

その数秒のやり取りの間に、楯無は先ほど襲ってきた竹刀を持った女子と、窓の外の木の上から矢を放った女子を一瞬で撃破していた。

「学園…最強」

「せや。まあやから楯無倒して最強を示せばそいつが生徒会長になれんねん。今襲ってきたんもワンチャン自分が生徒会長になれたらお前を自分の部に引き込めるとか思ってたんやろ。I Sやったら勝てへんことなんて分かりきってることやし」

「ん? ってことは…俺のせいで襲われてるのか!」

「せやな。一学期こんなこと無かったし」

「剣くん、終わったわよー」

「ん、お疲れ」

一夏にI S学園生徒会長についての説明をしているうちに、楯無は新たにロッカーから飛び出したボクシング部員を含めた3人をあつ

という間に倒し、こちらに笑顔を向ける。

「さてと、一夏くん。これでも私が君のコーチになることに不満がある？」

「え…、いやその…」

「ふーん、なるほどなるほど。じゃ、とりあえず生徒会室までご同行願うわね？」

「え!?! な、なんで!?!」

「いや、ここまで話しに付き合つといて今更抜けるとか無しやろ。てかもうちよいで生徒会室やし」

◇

「…いつまでぼんやりしているの」

「眠…夜…遅…。かゆ…うま…。まん、ぞく…」

「しやんとしなさい」

「…うん。…だが、断る…! 私は眠…い、のだ」

「こっの…っ!」

「ふぎゅっ!…うええ…痛い」

ドアの向こうから、ごちんっ!と鈍い音が聞こえてきた。

「また夜更かししたんかあいつ」

「え、剣。今のって…」

「おそらく一夏くんが考えている娘で合ってるわ。同じクラスだし、声ぐらい聞いたことあるんじゃない?」

そんな話をしながら、楯無は気軽に重々しい生徒会室のドアを開けた。時守もその後にくのを見て、一夏も離れまいと2人の後に付いて中に入った。

「ただいま」

「ただいまんぼ」

「し、失礼します」

「おかえりなさい、会長。副会長」

「おかえりんご。…ふわあああ…」

生徒会室の中に入ると、生徒会役員の布仏本音と布仏虚が3人を出迎えた。虚は3人が来ることを事前に知っていたのか、3人分の紅茶を用意しているところだったが、本音は昨夜夜更かしをしていたのか、目を擦りながら机から起き上がり、大欠伸をする。

「おうのほほん。また夜更かしか」

「うん…。深夜…壁紙…収集…連日…」

「眠いんやったら鼻の穴両方に練りわさび突っ込んだるか？今奇跡的にポケットにチューブわさび入ってるし…」

「起きたああああ!!起きたよ!けんけん!!本音はできる子頑張る子!」

時守の提案をかき消すかのような大きな声を上げながら身体を勢いよく起こす本音。その顔には、過去同じようなことをされたのだろうか、確かな焦りと怯えがあった。

「えっ…の、のほほんさんって…その…生徒会室役員、だった…のか?」

「むうう、おりむー、それはどういう意味ー?」

「あらあら、あだ名で呼び合うなんて。結構仲が良いのね」

生徒会長、と書かれたプレートの置いてある席に楯無が腰掛け、その隣の副会長のプレートがある席に時守が座る。あまりにも慣れたその仕草に、一夏は戸惑いながらも適当な席に座った。

「あ、いや…。本名知らないんで」

「えええええー!!ひどい、おりむー。…私のこと好きだからあだ名で呼んでくれてるのかと思ってたのに…」

「えっ!?あ、えと…その…」

「そーいやワンサマてあんまりあだ名とか付けへんよな」

一夏と本音、2人の間で妙な空気が流れそうになった時に、時守が会話に割り込む。

「…そーうだな。あんまり付けたことも付けられたことも無いな」

「ホモ斑とか言われてへんの?」

「言われてねえよ!いい加減そのネタから離れろ!」

「…じゃあモツピーとかラウラとかの気づいたれよ…」

「え？」

「…刺されて死ぬ。もしくは俺がぶつころりするぞ」

「ひっでえ！…ってか今の俺弾に中学の時に30回ぐらい言われたんだけどなんでだ？」

「知るかボケ」

「ねえおりむー、私は遊びだったのか？」

酷くはない、寧ろそれが普通だ。弾含め、学生時代に一夏の被害にあった男子は数知れず。そこそこのスペックを持っているにも関わらず、彼女が出来なかった者は皆口を揃えてそう言う。

「これは…仲が良いんですかね？会長」

「そうだと思うわよ？」

「そうですか。…本音、その辺にしておきなさい」

「てひひ、バレた。ごめんねおねーちゃん」

「お、お姉ちゃん？」

「そうよ。私が姉の布仏虚で、こっちが妹の本音」

「更識家直属のお手伝いさんなのだ」

あつさりと、いとも簡単に実家のことを口にする本音。だが、そんな彼女を虚も、楯無も止めはしない。…一夏が、最低限知っておかなければならないことだから…。

「…なるほど。仲のいい人を入れた、という訳ですか？」

「そういうことよ。あ、虚ちゃん紅茶ありがとね」

「あざーっす」

「じゃあ私はちよおちよおちよおく…おいしいあのケーキを持つてくるねー」

カップを持つてくる虚と入れ替わるように、本音が冷蔵庫へとてくてく歩いていく。ふらふらと、時に倒れそうになりながらも無事にケーキを持つてきた。

「んじゃあ、いただきまーす」

「やめなさい本音。布仏家の常識が疑われるわ」

「だいじよぶだいじよぶっ。うまあゝいゝ」

「時守君、練わさびお借りできますか？中にちゅーつと注入したいの

で」

「はいはい。外にさつとちやうんすね」

「ごめんなさいい！」

涙目になりながら謝るのほほんを見て、一夏は悟る。――ああ、1度本当にやられた事があるのだろう、と。

「はいはい、姉妹仲がいいのは分かったから。お客さんの前よ？」

「失礼しました」

「し、失礼しましたあ……」

「失礼も何もせえへんから何も言わんとくわ」

改めて（1人改まる気すら無い者もいるが）、生徒会役員が一夏の方を向く。

「一応、最初から説明するわ。一夏くんが部活動に入らないことで色んな方面から苦情が寄せられちゃってね。生徒会としてはキミをどこかに入部させないとまずいことになっちゃったの」

「それで学園祭のアレですか……」

平静を保つ一夏。だが、その心情は穏やかではなかった。いい迷惑だと、声を大にして伝えたかった。

そんなことをしていて大丈夫か？大丈夫じゃない。大問題だ。

という自問自答すら、自らの心の中でしてしまう程には、そう思っていた。

「でね、交換条件として学園祭終了までの間、私がキミのコーチをしてあげる。もちろん、生身もI Sも、ね？」

「結構です。…剣からもなんか言ってくれよ……」

「この件に関しては会長しか関われへんからむーりー」

「…マジか、はあ……。それにしてもどうして楯無さんが鍛えてくれるんですか？」

「キミが弱いからだよ？」

「…な……っ！」

一夏に、あまりにも自然に『弱い』と告げた楯無に、虚も、本音も、時守も何も言わない。

「俺は……そこまで弱くはないつもりですが」

「つもりでしょう？ものつすぐく弱いわ。多分、私の5割、剣君の6割に完敗するぐらいにはね」

「け、剣の6割に…？」

「うん。だってキミ、夏休み中、あんまりIS動かしてなかったでしょ？」

「…動かして、ました」

「ダウト。その答え方は自覚ありね。確かに専用機を持ってない子と比べたら動かしてるわ。それでも、専用機持ちの中で、という条件が付くと下から数えた方が早いレベルよ」

「うっ…。そ、それでも！剣の6割に完敗するっていうのには納得いきません！」

一夏は至って真剣に楯無にそう訴えかける。確かに、『国連代表』という肩書きと『ただの専用機持ち』、字だけで見れば強さは圧倒的に違ってくるだろうが、自分達はそうではない。同じ男性操縦者で、スタートも、専用機を持ったタイミングも、環境も、ほぼ似ている。

—というのが一夏の見解だったが、楯無はそれを一蹴する。

「…一夏くん、それ本気で言ってる？」

「…え？」

自信満々に、だがまるで子供が親に質問するかのような純粋に『聞きたい』という表情を浮かべながら、首を傾げる。

「確かに一夏くんと剣くんは『似てる』わ。専用機を貰ったタイミング、二次移行したタイミング、IS学園という環境で、コーチが付いている。それだけだとほとんど一緒よ」

「だったら…」

「でもね、中身が全く違うの。一夏くんと剣くんには圧倒的な違いがある。心の面でもね。私との試合の後、織斑先生にも聞いてみない。きっと私と同じことを言うから」

「…そこまで言うのなら、乗りますよ。その勝負！」

「…ふっ」

まるでイタズラが成功したかのような笑みを浮かべ、楯無は一夏と生徒会室の外へと出ていった。



「着いていなくても良いんですか？」

「え？…あー、まあ大丈夫つしよ。…もし刀奈にラッキースケベとかしたらアイツ磔の刑に処しますし」

「相変わらずらぶらぶだねえ…」

一夏と楯無が出ていった生徒会室で、時守と虚、本音の3人はお茶会の続きをしていた。時守は楯無の残りを、本音が一夏の残りを食べながら、会話を進めていく。

「…剣くん、お嬢様が言っていたことの意味、分かりますか？」

「…ま、分かるつちや分かりますね。虚さんは？」

「正直、あまりよく分かっていません」

主の発言を理解出来ていないということが、従者である虚を責め立てる。

「しやあないつす。これ多分専用機持ちちやうと分かりませんし」

「…というと？」

時守の言葉を良く聞くために、虚は椅子に座ったまま、姿勢を整える。本音も気になる様で、顔をうつ伏せにしながらも、しっかりと時守の方を見る。

「まず環境から。同じIS学園所属の男性操縦者言うても違いがある。一夏にはただの国家代表候補生がたったの4人+IS操縦に關しては一般生徒と大して変わらない第4世代IS持ち1人」

「それは…多いのでは？」

「普通に見たらそつすけど、俺と比べるとやっぱり違う。元、現含めた多数の国家代表+IS学園に負けない程の環境が1つ」

「国連のアリーナですか…」

「その他諸々含めて色々ありますしね。あつこには」

決して、一夏を馬鹿にするような態度を取ることなく、時守は言葉を進めていく。

「次に身体能力。今はどうか知りませんが入学当初は多分一夏の方

が上やったんすよ」

「…というと？」

「中学3年間はやってなかったとは言え、剣道でそれなりの強さを誇ってる。…ま、それをISバトルにも生かしてる…んかは知らんけど、やから多分ISでも変なプライド持ってるんちゃいます？」

「剣道は剣くんもしてたのでは？」

「やってましたよ？半年ぐらいで辞めましたけど。野球、サッカー、空手、ピアノ、テニス…その他諸々も」

「長続きしなさすぎだよお…」

自らの考察と経験も織り交ぜて、話を広げる。

「最後にメンタル面。これがほとんどに関わってると思いますよ？…虚さん、俺が入学してすぐ、刀奈とちっふー先生に何したか知ってます？」

「えっと…トレーニングのお願い、ですか？」

「正解です。くだらんプライドなんて捨てて本気で目標目指すために、俺は自分で最良の道を選んだつもりです。…でも一夏は？」

「確か…なし崩しに篠ノ之さんと…」

「そうです。最初は幼馴染みの女子、そこにイギリス代表候補生のセシリーが入って、中国代表候補生の幼馴染みの鈴が転校してきた。トドメはフランス代表候補生のシャルとドイツ代表候補生のラウラの転校です。…分かります？」

「正直、まだ…」

「んじや、俺が言いますわ」

そこで時守は一旦言葉を切り、虚に向かい直す。

「虚さん。貴女がもし、何かで強くなりたい時、普通に強い人とめっちゃくちや強い人、2人がいたらどないします？」

「…めっちゃくちや強い人に教えを請います」

「OKです。それが正解。…でも仮に、周りには普通に強い人しか居ないと思ってたら実はそれを遥かに凌ぐ物凄い強い人がいた、となれば？」

「…最初に頼むのなら、普通に強い人にしか…っ！」

「気づきましたか？今の一夏はその状態です。最初に『自分よりも強い人達がいるから、この人達に教えを請おう』ってなつて、その次に『この人達よりも強い人』を探すのをやめてるんすよ」

「分かりましたが…、一体なぜ？」

「身近に強すぎる姉が居て、『この人達よりも強い人』ってなつたら真っ先にあの人しか出てこーへんようになってるんすよ、アイツの中で。しかもそこに姉の力を借りずに強くなりたい、とか、幼馴染み2人がいるし、とか、友達にも申しわけない、とかの気持ちが入ったら現状以上の指導者を探さへんようになるんすよ」

「なるほど…では一夏君は…」

「あいつらの事悪く言うつもりぢやいますけど、恐らくモツピー達以上のコーチを探す、ということをしていないってことになります。…まあ他にも原因あるんすけどね」

「…聞いても？」

恐る恐る、虚は聞く。

「…簡単です。あいつには、具体性が一切ない」

虚の問いに、時守は恐ろしい程冷静にそう答えた。

「どれだけ強くなるか、誰を守るか、誰を倒せるようになるか、最終目標はどこか…だけちやうくて、自分の苦手はどこか、その克服をどうするか、相手の戦闘スタイルの弱点はどこか…そういう事を探すのに、具体性が全く無い」

「…でも、織斑先生が…」

「確かに、一つの事を極める方が向いてる、とは言いましたよ？…でもそれは馬鹿みたいに特攻して雪片を振ることぢやいます。自らの得意な近接戦闘に持っていきけるようにして、かつそこで無類の強さを発揮しろ…ってことやと思うんすけど」

「ああ…、そういうことですか」

「合ってるかは知りませんがね。…まあ本人がどう考えてるか、とか俺には分かりませんし、今言ったのも全部俺の考えに過ぎませんけど…」

息を吸い、目を細め、はっきりと告げる。

「俺はアイツに絶対負けへん自信はある。つてかあいつほんまに強なる気あるんかな？」

自分の方が、一夏より強いと。

「ん？…携帯…刀奈から？」

話が丁度終わり、ピンと張り詰めた空気が徐々に解けていく中、時守の携帯がなった。

『もしもし、剣くん？』

「ん、終わった？」

『うん。私が勝って、その時に一夏くん気絶しちゃった』

「…運ほか？」

『大丈夫。彼、結構見た目に反して軽いから。先生でも呼んで運んでもらうわ』

「了解」

『あ、後…その…。い、一応。一応報告だけ、しておくわ』

「…どないした？」

(これは…嫌な予感がします…)

先程までの張り詰めた空気と、楯無の声色、そして時守と一夏のとある体質から、虚は何かを察知した。

『一夏君…にね、服、脱がされかけちゃったの』

「…あ？」

『み、未遂よ？彼が躓きかけて、偶然手が私の胸元に…』

「分かった。今からそっち行くわ」

『…う、うん』

通話が終わると同時に、本音と虚は姿勢で会話をする。携帯を耳から離す彼の目からは、俗に言うハイライトが消えていた。

(本音、どうにかしてちょうだい)

(さすがの私でも無理だよお、今のけんけん、ブチギレって言葉がこ

れ以上ない程に似合ってるもん)

(そうよね…はあ…一夏くん、どうかご無事で…)

携帯を握りしめ、しばらく固まったままの時守だったが、急に何かを思い立ったかのように、目に光を灯して立ち上がった。

「…せやな。刀奈の言うことがほんまやったら、アイツも強ならなあかんし。…何より俺の彼女に何してくれとんねんマジで」

その顔に怒りを浮かべつつ、ゆっくりと扉の方へと歩く。

「ええ機会や。…渋々やっても意味無いしな」

ドアノブに手を掛け、扉を開く。

「…一回一夏と、ガチの模擬戦してみるかあ」

一夏の苦難は、まだまだ続く。

死闘？ 金夜叉 V S 白式！

「あ、あの…楯無さん。本当にすいませんでした！」

「ま、まあ…私は、大丈夫よ？…まだ記憶があるなら多分剣くんがそうとう怒ると思うけど…」

「や、やってしまった事は覚えてますけど、色とかそこまではもう…」

「あ？」

「ほ、本当に忘れたんだって！悪かった!!この通りだ！」

IS 学園保健室。その一角のベッドの上で、一夏は目の前にいる楯無と、その後ろに立つ時守に頭を下げていた。一夏がしたこと…いわゆるラツキースケベなるものは、一瞬にして時守の怒りの限界を突破した。…ものの。

「…カナ、ほんまに大丈夫なんやな？」

「ええ」

「せやったら俺が後から上書きするからもうええわ」

「え、ちよ、それどういう…」

「もうええ。リピートアフターミー、ミスターオリムラ」

「も、もうええ…」

「おけ」

どうやら、楯無のことについては怒りが収まったらしい。が、依然として時守は一夏の目を無表情で見続ける。

「…で、や。一夏」

「っ…どうしたんだ？剣がそう呼ぶー」

「お前、俺との強さの関係、どう思ってるねん」

普段『ワンサマ』と、一応あだ名で呼ばれている身であるが、時守が名前である『一夏』と、そう呼ぶ時は真面目な話をする時だと、一夏も分かっている。

そんな時守が『一夏』呼びをした、ということは、何か自分に用がある。そう思った一夏は時守に問おうとするも、有無を言わさぬ声色で一夏の質問を遮った時守が、逆に一夏に問う。

「…正直、まだ良く分からないんだ。剣がどれぐらいの実力を持って

いるか、俺がどれだけでできるか…今ここでこうして考えてても全く分からない」

時守の問いに、一夏ははっきりと答える。無表情で、目を細めて見下ろす時守を見上げて。

「…だからー」

「その後ぐらい俺でも分かるわ。…一夏。今から第一アリーナに來い。鈴達にはもう今日の訓練はちよつと後回しにしてもらうように言つてある。今から1時間後、模擬戦するぞ」

◇

「ねえシャルロット。なんで劍と一夏が試合するか知つてる？」

「一夏が楯無さんの…、あの、…なんて言えばいいのかな？」

「…だいたい察したわ。そういうこと、なのよね？」

「う、うん。そういうことなんだ」

数時間後、第一アリーナの観客席は多くの女子で埋められ、満席状態となつていた。

それもそのはず、何せ『公式模擬戦』として時守がI S学園のアリーナで、それも生徒の前で戦うのはこれが初めてなのだ。

「全く…一夏め、そんなにも年上が好みか」

「あながち間違いではないかもしれん。たまに嫁は姉である教官に見惚れる時があるからな」

「…あのラツキースケベは、女の敵」

「劍さんならラツキーでも何でもなく普通に…」

「止めなさいセシリア。あんたそんなこと言うようなキャラじゃないわよ」

「あ、あはは…。にしても、凄い人だね。生徒だけじゃなくて先生までいっぱい見に来てるし…」

観客席に座るのはなにも一般生徒だけではない。専用機持ち達もその例外ではなく、観客席の中には2、3年生の専用機持ちの姿も見受けられる。

「それだけ剣くんの試合が興味深いってことよ」

「あ、お姉ちゃん…」

「どういうことですか？」

「簡単なことよ、箒ちゃん。今までその実力があまり分からなかった剣くんの試合だから。それに、対戦相手がもう一人の男性操縦者の一夏くんだもん。見に来れるのに見に来ない方がおかしいわ」

「…師匠は二学期に入ってから普通に試合をしているぞ？」

「ええ。普通の試合はしているわ。…でもね」

箒達6人が連続して座る席の隣に、通路からやってきた楯無も腰かける。椅子に座る前からの話を、楯無は続けた。

「剣くん、全力での試合は二学期が始まってから1度もしてないのよ」「なっ!？」

「やはりか…。確かに『具現一閃』は強力だった。…だがあれは紅椿の空裂に似ているからな。ただ形状が日本刀か、杖術か。それだけの違いしかない」

「ラウラ、あんたそれって剣が夏休みの間に『具現一閃』以外の技術も身につけてるって言いたいなの？」

「無論そうだ。皆も聞いただろう？師匠は夏休みに世界一周をするとな」

「ラウラちゃんの言う通りよ。剣くんは何も遊びや交流のために飛び回ってた訳じゃないの。各国の国家代表、軍属操縦者らとの模擬戦。寝泊りするホテル周辺のジムでのトレーニング。その大半に、コーチである織斑先生が付いているの。…皆なら、サボろうと思う？」

楯無のその問いに、6人全員が凄まじい勢いで首を横に振る。専用機持ち6人全員そうするほどまでに、千冬の特訓は厳しい。普通の生徒が大した覚悟も無く付いていこうとすれば、すぐに音を上げてしまう。…そう、普通ならば。

「普通そうなるわ。私だってサボろうなんて思わない。…でもね、剣くんは能動的にやろうとしたの」

「…やらされている、と思わずにですか？」

「そ。箒ちゃんも分かるでしょ？やらされる練習と、自ら進んで取り

組む練習のどちらが身につくか。：剣くんはその後者を一学期からずっとしてきたの。：そんな剣くんが、たった一つの技能しか得て無いというのはおかしいわ」

「…なるほど」

「：嫁と、どちらが強いのだろうか。：というよりシャルロット達は知らなかったのか？ 師匠がどのような特訓をしているか」

ラウラの疑問も最もであった。婚約者である四人が、なぜ時守がどんな訓練をしているか知らないのか、という疑問は、口にはしないものの箒や鈴も同様に思っていた。

「まあ：一種の情報規制ってやつかな。正式にはまだ結婚出来てないし」

「なるほどな。不用意に周りに知らせて機密情報が漏洩するのを防ぐために、本当に最小限の人間にのみ知らせるといふことか」

「流石ねラウラちゃん。動きだけを数回見て技術を速攻で盗むなんて事、大抵の人間は出来ないもの。解析に解析を重ねた上で、反復練習をして身に付かせるものだから」

「：ということとは師匠の本当の実力を知っているのはコーチに付いていた教官だけ、ということか？」

「そうなるわね」

開戦を今か今かと待ちわびる観客達の中で、6人は時守の実力についての分析を行っていく。

何せ、セシリア達でさえ本当の実力を知れていないのだ。各国から、データ取りや他国の専用機の情報、自らの実力向上のため、彼ら得られるものは全て得ようという魂胆なのだろう。

「：通りで本国が騒がしいわけだ」

「篠ノ之博士のお手製ISに、国連と元世界最強の技術ですもの。騒がない国の方がおかしいですわ」

「：そう言えば、勝敗予想って誰か知ってる？」

鈴がそう聞く。騒がしい観客席のあちらこちらで、女生徒が様々な声を上げているのが分かるが如何せん多すぎる。情報がまとめられた物を、彼女が求めたところ、彼女の隣に座る簪が答えた。

「…大半の生徒と教師の中では、一夏が圧倒的優勢…だった」
「だった？過去形なの？」
「うん…。…織斑先生が剣が勝つって言ったらしくて」
「ち、千冬さんが…？それって、一夏は知ってるの？」
「…知らない、思う。2人ともずっとピットに籠ってるから…」
「まだはつきりと予想出来ないまま、彼女達はまだ両者が現れていないアリーナへと目を向けた。」

◇

「あー…すっごい人ですね」
「ま、こうなるのは目に見えていた事だ。男性操縦者2人の本気の模擬戦、…かく言う私も気にはなっていたんだ」
「それって、弟さんか愛弟子の、どちらが強いか、ということですか？」
「…真耶、何度も言うが私はからかわれるのが嫌いだ」
「ひいっ！」

管制室のモニター前に座る真耶を、じろりと睨む。言われている事は確かに凶星であるが、探りは入れてほしくない。

「はあ…。ま、多分アイツが勝つだろうがな」
「織斑君がもし聞いてたらショックを受けますよ？」
「やってきた事の差がでるだけだ。それでショックを受ける暇があるなら、特訓でも何でもやればいいのだ」

「き、厳しいですね…」
「…まあ、時守のあの考えを聞かされると厳しくもしたくなる」
「え？」

「何でもない。ほら、2人が出てきたぞ。後は頼んだ、真耶」
「えっ！私1人ですか!?!ちよ、ちよつと先輩ーっ!!」
「あたふたする真耶に、心の中でエールを送り、外に出る。
（一夏、同じ立場の者の強さを知れ。あいつは、お前を変えるはずだ…）」

人っ子1人居ない廊下を、カツカツと靴の音を立てて歩く。アリー

ナから、爆発的な歓声が響き渡った。



《さてさてーいよいよ両者が出てきましたあ!!知らない人は居ないとは思いますが、ここで改めて、この公式模擬戦の対戦者の紹介をいたします!!》

白と黒、両機が出揃った所で、実況の生徒の声がありーナを包んだ。
《まずはー世界最強を姉に持ち、その剣を受け継いだ男、織斑一夏選手です!》

アナウンスの説明が終わると同時に、観客席から溢れんばかりの黄色い声が聞こえる。

《続いてーISにおける実力は未知数、しかし!そのボケとツツコミとスルースキルの高さはIS学園No.1!時守剣選手!今日はその実力の、本気を見せてくれるそうです!!》

「アナウンスふざけとんのかあああ!!」

アナウンスの終了と時守のツツコミの後、観客席からは黄色い声と笑い声が入り交じって聞こえる。もちろんそれは、アリーナ中央にいる2人にも聞こえていた。

「剣…」

「何も言うなや一夏。…負けて泣くなよ?」

「上等ー行くぜ!」

《それでは、試合開始!!》

実況のアナウンスと共に、ブザーがなる。そのブザーを聞き、両者が動く。

「うおおおおおっ!!」

一夏は、雪片式型を携え、前に。

「…」

時守はオールラウンドを右手に持ち、迎え撃つ。

「ぜらあああつ!」

「…ちっ…」

《織斑選手！開幕特攻での零落白夜で時守選手を攻めまくるー！そのあまりの猛攻に時守選手、手も足も出ません！》

「はあっ！」

試合開始直後、瞬時加速でクロスレンジ勝負に持ち込んだ一夏はすぐさま零落白夜を発動。そのまま一撃を入れようとしていた。…が。《しかし！時守選手も避ける！超至近距離でのやり取り、さらに相手には零落白夜という強力な切り札があり、クロスレンジでは圧倒的不利な立場にありつつも、織斑選手の全ての攻撃を紙一重で避けています！》

「…ほっ、…よっ、と…」

「うおおおっ！」

「……はあ」

時守は零落白夜の一閃を、全て間一髪で交わしていく。時に身体を捻り、後ろに下がり、旋回し、避けていく。一夏が数十秒の猛攻を見せ、時守をアリーナの壁まで追い詰めた。

「これでっ！」

「…ああ、終わりや」

そのまま無防備に構える時守に、一夏は雪片式型を振るう。

「お前の、な」

時守のその言葉と共に、一夏はアリーナの地面へと叩きつけられた。



《あ、ああーっとお！織斑選手、後少しの所で時守選手の『ランページテール』に弾き飛ばされたー！これにより、この試合のファーストヒットは時守選手が奪いましたあ！》

「ほう、流石だな時守」

「お、織斑先生っ!?!」

「ん？…おおお前達。お前達もここで観てたのか」

「え、ええ。まあ…」

「しっかし、なんだ？オルコット達は時守にピットから追い出されたのか？」

「そ、そういう訳ではないのですが…」

「大方時守に『この試合は集中したいから1人にさせてくれ』とでも言われたのだろうか？」

「うっ…」

箒達が試合を観戦している観客席に、千冬が階段から降りてきた。なぜかいつもより饒舌な彼女は、箒らが座る一番端、楯無の隣に腰掛けた。

「よっこいせ…つと。…勝てよ、時守」

「や、やけに応援しますね…」

「当たり前だ。とあるものが賭けられているからな」

「…一夏が勝つとは、思わないんですか？」

「…思わんな。少なくとも今は。そら、今も見てみる。ランページテール1本出されただけで形勢逆転しているだろう？」

《時守選手！先ほどまでの防御から打って変わって攻め続けるーっ！織斑選手も雪片式型でなんとか守ってはいますが、それでも捌ききれない！》

千冬の視線の先では、オールラウンドを『ラグナロク』のモードで構えつつ、ランページテールで相手の行動を制限する時守と、そのランページテールの回避に手間取る一夏が、近接して戦っている。なんとか一夏が食らいつくものの、少しずつ確実に白式のSEは減っている。

「…決まったか？」

『ぐうっ…このお！』

「一夏…」

『…ランページテール、追加。加え『グングニル』発動…。こっから6割や、一夏。耐えろよっ！』

『…ああ。…俺は、剣よりも弱い。この試合で良くわかった。でも！

それでも俺は、この試合に勝ってみせる！」

オープンチャネルでの会話だったということもあり、一夏の宣誓がアリーナの観客席まで伝わる。それを聞いた女子達が黄色い歓声を上げる。が、その一方で千冬は1人、表情を暗くしていた。

「一夏…」

「やりおったな、一夏め…」

「え？」

「ありや完全に時守のスイッチを入れたな。…篠ノ之、時守はな—」

うつとりとしていた箒が呆けた声を出したのを、まるで咎めるかのような声色で千冬が呟く。そして、ここにいる7人全員に聞こえる声で、確かに告げた。

「—やたらと負けず嫌いだ。それこそ自分に向けて『勝つ』などと宣言されて、はいそうですかと簡単に負けるような奴ではない。…ま、つまりはまだまだ普通の男子、ということだ」

「…お前それ本気で言うてんのかおい」

「ああ、本気だ。俺は、剣の本気に勝つ！」

「…随分とまあ俺も舐められたもんやな。いや、でもみんなには実力知られてないからそう思われんのも仕方ないんか？」

「別に俺は舐めてなんか…」

「舐めとるやろが。…まあええわ。こっからは6割なんかじゃなくてお前のお望みどおり、全力全開の100%で行ったるわ…：すう…」

「…来い—」

空中に浮く時守は、深く、深く息を吸い—

『『完全同調』 100%』

単一仕様能力を発動させた。金の粒子が金夜叉を包むのと同時に、ランペイジテール2本が収納される。数秒間、両者が止まった時間が続いたが、その均衡は一瞬で崩れさる。

『…行くぞ』

『なあっ!?!』

まるで瞬間移動したかのような速さで、時守が一夏の懐に一瞬で潜り込む。

『……タイミング、機動、緩急、フェイク、攻め方……そしてお前自身の思考が甘すぎる』

『ぐっ、っ、がああああっ!!』

「一夏!?!」

「……決まったな。ま、あいつもあいつなりに思うところがあるだろう」

『……ほらまた甘い』

『くっ……そおお!!』

箒や千冬達のいる観客席からでも、2人の戦いの異常さはよく分かる。白式が異常な速さで回避しようとした先に、なぜかすでに金夜叉がいる。

速さと早さ、その両者が激突……否、早さが圧倒していた。

『……肝心な場面で瞬きするような奴に、負けんぞ?』

『ま、だまだああ!!』

しかし、一夏もただでは負けまいと必死に抗う。スラスターを吹き、零落白夜を発動させて時守に斬りかかり続ける。……だが、それでも

『おーらよつと』

『がっ……、は……』

時守には全く当たらない。寧ろ、試合の前半よりも簡単に避けられるようになっていた。雪片式型を振るったそのから空きのボディを、時守の右拳が穿つ。

「……更識、私は山田先生の所に戻る。……後は、頼んだぞ」

「かしこまりました」

教え子に圧倒される弟を尻目に、千冬は観客席を後にした。



「……お前、ようそんなんで俺らに勝てるのか言うたな」

「……はあ、……っはあ……」

息も絶え絶えな一夏に、時守がその顔に怒りを浮かべながら言葉を投げかける。すでに白式のSEは3桁を切っており、零落白夜も発動

出来ない状態である。一夏のその様子から、負けることは無いと判断した時守も、『完全同調』を解除している。

「零落白夜発動してもただ突撃してくるだけ。雪羅に至っては遠距離からバ火力でぶっばなすだけ。：お前そんなもん『完全同調』使わんでも余裕で避けれるわ」

「……」

「そもそもな、俺に全力全開で相手して欲しかったら、俺から目を離さずに、様々な攻撃手段を匂わせておいて、かつ自分の得意分野でそれなりの強さを持つとけや。：ISに振り回されてるなんて論外や」

「…ああ」

時守の言葉に、一夏は力無く答える。それもそのはず、一夏は時守が『完全同調』を発動させてから、1度もまともに攻撃を仕掛けることすら出来なかったのだから。

「：正直、期待はずれやったわ。全力全開で行ったるわって言ったけど、出す前に終わってもたもん。流星に同級生死なせたくはないしな」

「：だ、だ」

「あ？」

「まだだ。：まだ、終わっちゃいない」

「：お前それマジで言ってたらほんまにキレンぞ？」

「キレてくれてもいい！まだSEは残ってる！戦える限り、俺は諦めない！」

「：もうええわ。確かにお前は、プライベートの付き合いでは良い友達やとは思ってたけど。：ISバトルではどうも馬が合わんな」

「ぜらああああ!!」

零落白夜すら発動出来ない雪片式型を構え、試合前半同様、一夏は時守に突撃する。

「剣がなんと言おうと、これが俺のスタイルだ！」

「そうかい。：んなら」

雪片式型の刃が触れる寸前、再び時守を金色の粒子が包んだ。

「これが、俺のスタイルや」

「っ！お前！それは千冬姉のっ！」

「やからどないしてん！全世界にすでに公開されてる操縦技術に戦い方、別に誰が盗っても構わんやろが！」

「このっ！やめろ！」

「そんなんいう暇あったら止めさせてみるや！」

『完全同調』状態の時守が、現役時代の千冬の攻め方で一夏をじわりじわりと追い込んでいく。

「おいしょ、っと！」

「があああっ！」

かと思えば、一瞬でオールラウンドを展開し、『具現一閃』のエネルギー刃で一夏を吹き飛ばす。

「…さて、と。もう終わるしええやろ。『完全同調』解除」

「剣！お前なんで千冬姉の戦い方を！」

「あの人俺のコーチやぞ？似てきて当然やろ。それにな、お前そんなこと言うんやったらもうちよい白式マシンに動かさせや」

話している途中に、オールラウンドを『具現一閃』から『グングニル』に変え、ランペイジテール2本を下に垂らす。

「言うちや悪いけど、俺の方がもうちよい上手く白式動かせるわ」

「っ！うおおおおおおおっ！！」

「…ほんま、呆れるほど単純すぎるわ。…オールラウンド」

「なっ!?!」

突撃する一夏の下から、ランペイジテールを2本とも一夏に向けて伸ばし、その両腕に巻き付けた。

「はい、礫の出来上がりー」

「このっ！離せ！」

「試合中にそんなこと言うて通じるとでも思ってたんのか。…あーあ、今ここでもし『零落白夜』が使えたら、どうなってたか分からんかってんけどなー」

「…ぐっ…」

「ま、今回のお前はまだまだやったな。評価でいうと『がんばりましよう』。10段階の2ぐらいやな。ほんじゃ、おーわりっ」と

身動きが取れない一夏に、グングニルを投げつけた。これによつて白式のSEが0になり、試合の終わりを告げるブザーが鳴った。…そして

《試合終了。白式、SE0。金夜叉、SE400。パーフェクトゲーム》

一夏は自分の意識が闇に沈む寸前に、無慈悲な機械的な音声により、自らの完全敗北を知った。



「……んっ、……、……はっ」

「っ！起きたか一夏！」

「ほう…きょう…そうか、俺、負けたんだったな。…それも、剣のSEを1も減らせずに」

「一夏…」

IS学園医務室。先ほどの試合の影響で気絶していた一夏と、その見舞いに来ていた箒の姿だけが、そこにあつた。

「…もつと、強くなりてえ。曖昧な強さ何かじゃなくて、もつと具体的な強さを」

「…それは、剣のような強さか？」

「…ああ。剣は、本当に強かつた。途中から100%でやるつて言つてくれてたけど、多分まだ先があると思う。…冷静になつて、ようやく気づいたんだ。剣はあの試合で、自分の本当のスタイルすら出していなくなつたつて。俺にこうして気づかせるために、わざとそうしてくれてたんじゃないかって。…箒、剣から何か聞いてないか？」

「剣からは聞いてないが、千冬さんと楯無さんは似たような事を聞いたぞ」

「…分かつた。ありがとな、箒。…自分の、スタイル…か」

窓の外の夕焼けに目をやりながら、一夏は思索する。自らの進む道

を。



「で？お前は何が聞きたいんや？」

「…なんで、手を抜いたのよ」

「別に手え抜いたわけちゃう。ただ全力ではやってなかった。あのセリフとかと組み合わせて、いわゆるブラフってやつ？」

「ふぎけないでよー」

「じゃあお前、あいつがさつき以上にボッコボコにされてメンタルやられて再起不能になってもよかったん？」

「うっ…それは…」

所変わって、とある廊下。そこには時守と鈴の姿があった。

「第一な、あいつはまだ試合やるには早すぎるわ。もつと基礎やらなあかん」

「そこから？」

「IS操縦の基礎ちやうで？ISバトルの基礎や」

「…どういうこと？」

ベンチに隣り合うように座りながら、彼らは話を続ける。

「あいつの中にはちっふー先生に対する憧れ、んでもって剣道での変な武士道精神とかがある。…それらは邪魔や。憧れんのを止めへん限り、超える事なんて不可能やからな」

「アンタは…、剣は、千冬さんを超える気での？」

「当たり前やろ」

鈴のその間に、時守は即答した。IS学園のほとんどの生徒、教員が今まで言おうともしなかったことを、実行しようとしているのだ。

「勝てばええねん。ISなんて言うたらド派手やねんから小細工なんてあんま効かへんし、自分にやれることは全部やらな」

「…意外に考えてるのね」

「そりやな。…ま、一夏に言っといてくれ」

立ち上がり、振り返ったこういった。

「散々言うたけど、俺にはまだ教える程の余裕は無い。でもお前の周りにはお前と同じような立場の人間はいっぱいおる。自分で考えて、周りを頼れ。ってな」

「ん。了解」

「んじやばいびー」

手をひらひらと振って、時守は自室へと帰っていった。

日常と非日常

「おっはー!」

一夏との模擬戦の翌日の朝、時守はいつも通り教室に入った。そこに待っていたのはいつもの風景、：ではなく、クラスの中心人物の1人である一夏が、やたらと真剣な表情で悩んでいる光景だった。その一夏に釣られて周りのムードも暗くなっていた。

こういう時の解決方法を、時守はよく知っている。

「どうしたんだい? 一夏くん。またジャイアンに何かされたのかい?」

「お前が言うなよ…ってかどこのネコ型ロボットだよ。謎に上手いし…」

「そりゃ練習したからな。あ、右の鼻の穴から鼻くそ出てんで」

「嘘っ!?!」

「嘘」

「おまつ! 剣!!」

無事、解決。

「ははっ…。なんか、昨日ボコボコにされた相手にこうして慰められるのって変な気分だな…」

「えっ…。お前今のどこに慰め要素を見出したん? ドラえもんのマネして嘘ついただけやで?…それで慰められたと思ってるとかちよつと引くわ…」

「慰めじゃなかったのかよ!?!」

「ちやうちやう。…で? どうせ考えてはみたものの何したらええかやう分からんって感じか?」

「ぐっ…。そ、その通りです」

「まあいきなり慣れへんことしろって言われても困るしな。…:あ」
教室の前の方の席で一夏と話していると、チャイムが鳴った。それと共に、2人の教師が入ってきた。そのうちの1人を、時守は凝視した。

「:…なんだ時守。教師の顔をジロジロと」

「いや、なんでも無いっす。…やつぱあります」
「…早く言え」

朝のHRの時間が惜しいため、千冬はその表情に、少し不機嫌さを混ぜて言った。

「一夏、鍛えてもいいつすか?」

「…2組の凰には教えることは出来ないとか言ってたか?」

「いやまあ、そーっすけど。最低限の基礎ならいけるかなって」

「ふむ…まあいいだろう。どうするかは放課後に決める。織斑と時守は放課後、教員室まで来るように」

「は、はいっ!」

「うーい。づっ!…痛い…」

「泣くな馬鹿め。ちゃんとした返事をせんからそうなるのだ。分かったか?」

「はいっ!んゝっ!?!…いってえ…」

「声がデカい。朝からうるさい」

「圧倒的理不尽に感謝感激」

「…時守?」

「あ、はい。すみませんでした」

そうして、昨日の男性操縦者2名による模擬戦のいざごなど忘れたかのように、1日は過ぎていった。



「…一夏、お前には、もしかしたら酷かも知れんが、私から言っておくことがある」

「…千冬姉…」

教員室。そこで一夏と、椅子に座る千冬は対面していた。姉と弟という立場で話しながら、その雰囲気は真剣そのものである。

「…あ、鼻血出た。山田てんてーティッシュユー」

「と、時守君!?その血どこから出てるんですか!?!」

「や、やがら、ばながら、ばながらでまんねん…ちよ、でにづくがら

「ばやぐ…」

「は、はい！ティツシュです！」

「ん、んん…つと、さんきゅーっす！」

「鼻にティツシュ詰めた状態で言われても…。なんかしつくり来ない
というか…」

そのすぐ隣で、なぜかいきなり鼻血を出した時守と、その介護に当
たった真耶が騒いでいる。

「…山田先生、時守。静かにしてもらえるか？」

「あーい」

「は、はい…すいません」

「んんっ。でだな、一夏。…お前は、私と同じスタイルを辿るな」

「えっ…」

千冬は一夏に向けて、非情な宣告を下した。

「私の後を継ごうとしてくれるのは…まあ、その…嬉しく思うが、お前
と私は全く違う。まず1つ、白式と暮桜のスペックの差。2つ、私と
お前の肉体のスペックの差。そして3つ、雪羅の存在だ」

「雪羅の？」

「ああ。私は雪片一本だったが、お前には雪片式型に雪羅もある。
せっかくある強力な武装を使わんなどという愚かな事はするな。私
の戦い方を真似るということはそういうことだ」

「逆に言うたら、雪羅と雪片式型、白式さえ上手いこと使いこなせたら
ちっふー先生越えることだって可能かも知れへんってことや」

「マジか!?…って全部やんなきゃならねえんじやねえか…」

「当たり前やろ。世界最強越えようとしてんねんから」

止血をするために鼻にティツシュを詰めた時守も会話に入った。

「かっこいいセリフだが鼻のせいで見事に台無しになっているぞ」

「言わんといってくださいいちっふー先生。…あー、まあまずワンサマが
する事言うたら決まってるな」

「な、何をすればいいんだ？」

「ジューズ買ってこい」

「…はっ？」



「な、なあ剣。これで本当に強くなれるのか？」

「強なるかは知らん。でもISの事はよう理解できるわ」

「マジか」

IS学園のとある中庭。一夏はそこで白式を纏ったまま、右掌に120円を乗せていた。

「炭酸の強いヤツ頼むわ。あ、俺も付いていくからコケたりしたら最初からやり直しな。ミスって120円握りつぶしたりしたらお前の自腹で」

「…分かった」

事前に千冬に時守の指示は聞くように言われたこともあり、一夏はすんなりと時守の言葉を受け入れた。

「はい、んじやPICとスラスターの動力切れ」

「…え？」

「え？ちやうねん。切れ。パワーアシストだけ残して」

「お、おう。…切ったぞ」

「んじや行ってこーい。階段一段飛ばしとかしても最初からやからな」

「…ん？歩くのか!?!」

「おう。何をいまさら。それが目的や」

「…そうなのか。まあ、とりあえず行ってくる！」

ガシヨツと、第一歩を出した所で――

「えっ、ちょ!?!」

見事に前のめりに転んだ。

「はーいやり直しー」

「ぐっ、くっそー…。なんか歩きにくいな」

「ジュース買ってくるまでこれ終わらんぞー」

「…よし！なりふり構ってなれるか！うおおおっ!!!」

一歩前のスタート位置に戻り、一夏は再び足を踏み出した。



「ぐ、おおお…っ！指が…！腕が、あああああっ!!」

「力加減ミスんなよー。これミスったらお前自腹1200円超えるぞー」

「ぐっ、…ぬ、あああ！入れよ10円っ！潰れるなよ10円!!」

「…ねえ、何やってんのあんた達」

「ん？…おお、鈴。…見て分かん？」

「分かんないわよ…。ISの右手の指に10円挟んで悶絶してる一夏見て何を知れって言うのよ」

「訓練ってことや」

「余計に分かんないわよ！」

2時間後、一夏は自販機の前で白式を装着したまま、10円を入れる、という所までできていた。これまで数回ほど自販機には辿りついたのだが、その際に硬貨を握りつぶしてしまったり、自販機を潰してしまったり等でやり直しが増え、それと共に自腹も増えていった。

110円を入れ終え、残り10円という所で、普通にジュースを買いに来た鈴と遭遇したのだった。

「っ！しゃあああああっ!!!入ったあああ!!…っよっしゃああ!!買えたぞおおお!!」

「ん。さーんきゅ」

「…え？一夏。剣のパシリ？」

「ああ…。はあ…はあ…なんか、めちやくちや疲れたな…」

「そらせやろ。まだまだ慣れてへんねんし」

一夏から缶ジュースを受け取り、時守は喉を潤していく。

「…慣れてる、つもりだったんだけどなあ」

「戦いやったら多分慣れてるわ。1年の中でも上位らへんでな。…でもさ、お前普段から慣れてへん状態で上手いこと戦え言われて出来るの？」

「…無理…だな」

「やろ？…やから、ISをパワースーツとして認識して、それに自分の経験を合わせていく。生身でいくら強かろうがIS使い慣れてなかったらそ雑魚やからな」

「なるほどな…。つまりは普段やってるような当たり前の事が出来ない状態で満足に戦えるわけが無いってことか」

「そゆことそゆこと。俺も最初はそんなんやってたし。…ちっふー先生と鬼ごっこして捕まったら罰ゲームとか」

「うわぁ…」

鈴と一夏の声が重なる。もし仮に、自分がその時の時守の立場だったとして、無事に生還出来るかと聞かれたら無理だと即答出来る自信しかない。

「ま、後は戦い方やな。一夏、お前雪羅どないして使ってる？」

「えーつと…射撃？」

「アホか。まだほとんどやった事の無い分野で勝負しようとするんや」

「じゃ、じゃあどうすればいいんだ？」

「せやなあ…例えば…」

「嫁っ！師匠っ！」

「剣！」

自販機の前で鈴と一夏と喋っていると、ラウラとシャルロットの2人が同じ方向からやってきた。

「けーんっ！」

勢いを全く弱めることなく走ってきたシャルロットが、時守に抱きついた。その衝撃で少し後ずさるも、時守はしっかりと彼女を抱きとめた。

「でへへ…」

「むう…。シャルロット、いちやいちやしすぎだぞー！」

「え…？そう…かな？」

「ラウラからしたらそうなんちゃう？セシリーは？」

「…アリーナで1人で何か悪戦苦闘してたよ。声をかけようにもなんかかけづらい雰囲気で…」

「ん。大体は分かったから後でセシリーんところ行くわ。…あ、でや一夏」

「ん?」

シャルロットを抱きしめ、右に左に揺れながら、時守は先ほどの話題を一夏に戻した。

「今の俺とシャルみたいな距離で、雪羅相手の身体にぶち込むとか?」「いきなり怖いよ!」

抱きしめているシャルロットの腹部に左手を当て、一夏に例を示す。やってる事は相当えげつないが、射撃が苦手な一夏が遠距離から狙うよりも効果は高い、と思つての発案だった。

「いや、シャルにやるわけちゃうつて。…瞬時加速で相手の懐に入つて、左手で相手鷲掴みにしてからの、雪羅ドーン」

「恐ろしいなお前の脳内…」

「なお更なる恐怖を植え付けるために顔面でも可」

「余計恐ろしいわ!」

一撃でSEを枯渇させることの出来る武装を零距离で顔面に喰らう場面を想像してしまったのか、鈴とラウラの頬は若干引きつっており、腕の中のシャルロットも少し震えている。

「もしくは雪片式型と雪羅をいつでも使えるように見せかけといて、拳でぶん殴りまくる」

「…そ、そんなやり方…」

「汚い、とでも言いたいんか?…はあ。あんな、ISバトルのルールは主に1つだけや。相手のSEを0にしたら勝ち。…それするために手段なんて選んでる方がアホやろ」

「で、でも!千冬姉は!」

「あの人は雪片で一撃必殺するのが最適やったからや。お前に、白式を完全に使いこなして、雪片式型で相手をぶった斬ることが出来るのか?」

「うっ…そ、それは…」

時守の問いに、一夏は完全に詰まってしまうた。どう答えたらいいのか分からない。確かに、時守の言うことも一理ある。SEを0にし

たら勝ちなのだから、0にしてしまえばいい。それは理解できる。だが、一夏の中ではどうしても譲れない『何か』が残っていた。

「…お前がそれしたい、って言うてるからこそ、こうやって完全にISに慣れるようにしてるんやろ?」

「っ…剣…」

「お前のスタイル重視したいってのも分かるし、でも強さにもこだわらなあかんってのも分かる。…普通のやつやったらスタイル諦めさせてんねんけどなあ…白式ピーキーすぎるからあの人の戦い方しか合わへんねなあ…」

その一夏の『何か』—いわゆる、千冬への尊敬の念と、世界最強の弟であるプライド。ちっぽけかも知れないが、一夏にとっては大切な物だ。それを守り通しながらの戦い方を、時守は提示した。

「ま、とりあえずはちっふー先生真似てみる」

「お、俺は…」

「迷惑掛けたくないってか? やったら、ビデオやらなんやら見て真似ろ。…『学ぶ』ってのは『まねる』、『まねぶ』から来てんねん。まずはあの人レベルまで行って、そこから越えろ。…良くも悪くも、お前とちっふー先生似てんねんし、多分それが一番しっくり来るやろ」

「…分かった。じゃあまずは」

「ちっふー先生を真似れるように、基礎から慣れることからやな」

「おう!…剣、ありがとうな」

「…キモっ」

「何でだよ!」

こうして、一夏の非日常と時守の日常は流れていく。心新たに、目標をより明確にした一夏と、更なる高みを目指す時守。学園祭までも、それからも続いていく—。



「何やねんこれ」

—ことにはなった。もつとも、IS面においては、であるが。

現在、時守達1年1組の面々は学園祭のために居残りでの料理の練習をしている。ご奉仕喫茶と名乗るのだから、最低限、お客様に出せるレベルの品を提供しなければならぬ。…ならないのだが…。

「おい女子。いや、シャルとモッピ―とその他数人以外の女子」

『は、はい…』

「お前らほんまに女子か？」

『がはっ!?!』

女子力が皆無、とまで言えるほど、彼女達の料理の腕前は凄まじかった。

「はあ…。つたく、2組の中華は鈴がいるからいけるとして、やな。うちこれ壊滅的やぞ…まず何出すつもりやねん。おいリコピン」

「えっ、あの…その、えと…『湖畔に響くナイチンゲールのさえずりセット』…なんだけど…」

「は? 『股間に響く無いチ○毛ーるのパイ○リセット』?」

「アウトだな。商品名変えるか。…ってか剣。普通にド下ネタ言うなよ。皆顔真つ赤だぞ」

「考えたやつが悪い。しかもナイチンゲールやったら鳥じゃなくて看護婦の方思い浮かべる人もいるし」

改良点はまず商品名から。その1、空耳でド下ネタに聞こえる。

『深き森にて奏でよ愛の調べセット』は…?」

「何やねんそのアニメの遊戯王みたいなん。深き森にて!奏でよ!!愛の調べセットオオ!!…なんか出てきそう」

「簪さんとかにはウケそうだな」

その2、中二。

『『執事にご褒美セット』は!?!』

「何をご褒美すんねん」

「ほ、ポッキーだけど?」

「食べさせてる絵面楽しむとか…女子の趣味分からんわあ…」

「お、お待ちください剣さん!わたくしはそのような趣味は持ってませんわー!」

「ちよつとセシリア!あんたこの前――」

その3、いかががわしいためアウト。

「はい、考え直しー」

「…想像以上にやばかったわね。ノリで考えてたわ…」

「そりやせやろな。…メニューの決め方としてはまず、お客様が言いやすいかどうかや。セシリー、さっきの『湖畔に響くナイチンゲールのさえずりセット』。大勢の前で言えるか？」

「無理ですわ」

「やろ？しかも無線使うにしても、料理出すやろ？何番テーブル何々出来たでーって言うとき、皆なんて言うねん。略称やろ？…このメニューの略称とかチ○毛で決まりやん。チ○毛○ン毛言う喫茶店なんて俺入りたくないわ。スパゲッティとかでええやん。他店との違うメニューにだけ、特別な名前を付けた方が特別感が出て売れる」

「ほほお…なるほどなるほど…」

実際に飲食店で働いていた経歴のある時守が率先して1年1組のご奉仕喫茶の内容を決めていく。

「…もういつそのこと商品名『織斑一夏』で良くね？」

「良くねえよ！何自分だけ助かろうとしてんだ！」

「え、いや。女子から指名貰えるだけ有難いと思えよ。…世の中には視界にすら入れてもらえへんやつもおんねんぞ？」

「お、おう。…あれ？なんか納得させられてる感満載なんだが？」

「当たり前やろ。そうしようとしてんねんから」

「えっ…」

「んじやま、とりあえず執事にご褒美セットは保留にしとくか。…つてメニューちゃうねんて、メインは」

話が一段落ついた所で、本来の議題を思い出す。それは残酷にも、女子達のメンタルをゴリゴリと削ることとなる。

「よしっ。女子、どれぐらい料理できるかもつかい見せてもらうわ。…最低でも、俺の中での及第点は取ってもらうからな？」



「焦げてるから教えられるチームに」

「うわあああん！お母さーん！もつとお手伝いしとけば良かったよ
おおお!!」

定食屋の息子による料理査定は難易度で言うとなりにルナティック、
鬼、壊滅級…等の表現が当てはまるだろうか。もの凄い難しさであつ
た。

「セシリーはホールで良かったんやっただけ？」

「ええ。そ、その…剣さんも、ホールなのですわよね？」

「…うん」

「なら、そこで。…いいえ、そこがいいですわ。…ふふっ」

「何イチャコラしてんだてめえら…っ！」

「お、おいリコピン？怖い怖い、顔くっそ怖いで」

「うっさい！ふんっ！」

どんっ！と音を立てて、時守の目の前に理子の料理が置かれる。

理子を含めた数人の調理班の料理の腕前を知るべく、時守による試
食会が開かれた。大丈夫な者は教えなくてもよい。問題がある者は
時守の指導を受けながら覚えていく、という方法で、メニューの品を
完成させようとしていた。

「でっ？どう？」

「…うん。まあ大丈夫やろ」

「軽いわね」

「実際普通に上手いな」

「ほんと!？」

「ほんまほんま。…調理班で一番ちやう？」

「ほっ、…良かったあ…」

自らの料理の腕前が認められ、時守の指導を回避することに成功す
る理子。料理を全くしたことのない者は最初から調理班には入って
おらず、皆が皆、一応料理経験者で構成されているのだが、やはり拙
い所もある。その拙い所が無いと言われ、内心安堵する。

「流石俺が教えただけある」

「…ま、中学の時にメンタルボロボロにされたし…これぐらいはま

だつて感じ?」

「:ねえ理子。剣ちゃんつてほんとに料理出来るの?」

「え?そりゃ出来るけど…」

「なんでお前が答えてんねん」

2人の会話の中に、教えられるチームに入れられた女子が割り込んでくる。理子の料理の腕前には全く疑問を持っていないようだが、その目は確かに時守を疑っていた。

「剣ちゃん、出来るの?」

「そうよ!私達よりも料理上手くなかったら教えられたくないもん!」

「私達だけ手料理振る舞うとか不公平だー!」

「剣ちゃんの手料理を所望するー!」

邪険、というムードとは程遠い、軽い雰囲気で女子達が声を上げる。

「んじゃ作るわ」

「えっ!?ちよつ、時守!」

「なーに作るつかない。イタリアンでもええし…いつそフレンチ…いや、懐石もありか?」

「ぎ、聞いてない…」

その声に答え、時守は料理を振る舞うためにキッチンへと向かった。

—かつて中学時代、娘や息子の弁当を作っていた数多の主婦の心を軽く粉碎した腕前で、自らの得意料理を作るために—



「どや?」

「お、おいしい…」

「:ねえお母さん、私ほんとに女?」

「IS乗るの上手いし、料理上手いし…。もしや剣ちゃんつて女…」

「てかこんなのどうやって作ったの…?」

「懐石料理作れる男子高校生なんていたんだ…」

「諸事情により和洋中は大体作れる」

時守が出したものはまるで高級旅館の夕食を思わせるような懐石料理だった。それを見た女子達が天を仰ぎ、口に入れて放心し、まだ俺の中では下手な方という言葉に両膝両手を地に突いた。

「まあ花月荘のメニューは全部作れるわ」

「…なんで？」

「夏休みにバイト行かされてたから。寝てる間に気づいたら花月荘に着いてて、自分で稼いで自分で食ってた。足りんようなら近くに食材泳いどるし。運動できるわ金稼げるわ料理上手なるわ、最高やつたわ。おぼはん怖かったけど」

「あ、あはは…」

今の話を聞き、料理に関しては自分達は時守の足元にも及ばない事を悟った女子達。そんな彼女達に、数ヶ月前に既に自分の力で上達する事を諦めた人物が声をかける。

「剣さんに料理で挑もうなど100年早いですわ！」

「まあそれだけじゃなくて、朝昼晩の自分の飯は自分で作ってたし、たまに店に出してたし。向こうのおっさんたち悪いからなあ…上手い料理出したら大人しくなってくれたし。それもあ。…で、どないすんの？料理指導」

「お、お願いします…」

理子以外の調理班の女子の声が一致する。

「あ、調理班終わった？こっちも衣装合わせ終わったからどんな感じか見て欲しいんだけど」

女子の降伏と同時に、ホール担当の衣装合わせをしていた手芸部の女子が話しかけてくる。

「衣装合わせって言っても…借りてきたやつやる？」

「うん。…でも…その…し、篠ノ之さんとか…」

「なるへそ。ボーンってことか」

『い、言うなー！これでもキツイんだ！…あ。今またビリッて…』

「い、一応カップは一番大きいやつなんだけどね…。篠ノ之さーん、今直すからねー」

食堂の一角に小さいながらも着替えるスペースを作り、そこで接客班が衣装を合わせているのだが、箒のとある大きな2つの部分が立派すぎて終わらない。時守に原因を耳打ちし、女子はまた箒のいるスペースへと消えていった。

「…ワンサマは？」

「…おう」

「似合わね」

「ひっでえな！」

呼んだら出てきた変なヤツ。男子専用のスペースから出てきた彼は、それはそれは違和感バリバリだった。

「剣はどうだったんだよ」

「…なんか眼鏡かけるとか言われた。まあ普段伊達眼鏡かけるときあるから別にええねんけど」

「眼鏡？なんでだ？」

「…なんかそつちの方が色々良いらしいわ」

「ふーん」

眼鏡掛けて執事服で罵って、という女子が数十人程居たので、もちろん断ろうとした。が、断ろうとして強く言ったら余計に興奮され、また罵って、の繰り返しになった所で、時守が折れたのだ。

一部の女子のM具合を思い出し、少しばかり引いていると、後ろから右肩を軽くつつかれた。

「むう？」

「えへへ…引つかかった。どう？似合ってる？」

振り返るとそこには―メイド服に身を包み、はにかみながらこちらを向くシャルロット―紛うことなき天使がいた。

とうつ、と口にして、くるりとその場で一回転する。最後に時守に向かって後ろで手を組み、上目遣いでポーズを決める。

「天使かよ…」

「も、もうっ！そんな恥ずかしいこと言わないでよっ！…えへへ…天使…」

「くそっ…何なんですかあのデユノアさんの笑顔は…っ！」

「彼女は…天使…。私は…何？」

「天使にはなれないのか…」

「もう墮天使でいいや」

その光景に再び女子を諦めようとする女子が続出する。もはや1年1組の日常風景と化しているが、もちろん皆、本気で女子を諦めようなどとは思っていない。

「俺専属のメイドになってほしい」

「そ、卒業したら…ね？」

「…おう」

そして成り行きで時守の将来が色々と決まっていく。これも、もはや恒例行事だ。

「…っ！わ、悪いなシャル。俺ちよつとちつぷー先生んところ行ってくるわ。簪のそこにも行かなあかんし、生徒会の用事もあるし」

「うん。いってらっしやい！」

背を向ける彼を、シャルロットは満面の笑みで送り出した。

彼女が満面の笑みを浮かべている中、彼は痛み顔に顔を歪ませていた。



「オーバーワークだ馬鹿者。…まったく、だからあれほど言っただろうが！」

「…すみません」

「…まあ途中まで気づかなかった私のミスでもある。夏には異変が見て取れたが…。時守、お前痛みは何時頃からだ？」

「ラウラ…VTとやり合った時からっす。言うたら本人達傷つけそうで…」

「バレた時の方が傷つけるだけだ。…で、二学期からの規制は守っているのか？」

「まあ、守れてるっちゃ守れてますね。鈴とかに火付けへんように来きたら」

「なるほどな」

カウンセリングルームの椅子に座る時守は、目の前に仁王立ちで立つ千冬から、入学して初めてではないか、という程に怒られていた。理由は簡単。度を越えたオーバーワーク。そのせいだった。

「時守、以後お前はISでの戦闘は極力避けろ」

「…絶対って、言わないんすね」

「ああ。どうせ、やるだろうしな。変に止めて逆らわれるなら、ギリギリ回復が見込める圏内の練習量まで減らすだけだ」

「ははっ、良くお分かりで」

「…で、その上痛み止めを出せとか言うのだろうか？」

「…そこまで…っすよ」

「嘘を付くな。お前、束との実験の結果を忘れたのか？」

「忘れるわけありませんよ」

時守は思い出す。かつて、人生初となる経験のオンパレードだった数日を。

「…暴走、っすよね」

「…？…ああそうだ」

話の途中、何かに気づいた千冬が一瞬入り口の方を振り返るも、すぐに会話を再開する。

「自我の欠損、生存本能の低下、向上したのはただ相手を倒すという意思のみ。俺の身体なんて、なんとも思ってへんかったみたいっすわ」
「細かく言えばお前のISの暴走状態が、な。アレのせいで2日間丸ごと気を失っていたのだぞ？」

「肉の断裂やらえぐかったっすからねえ…。ま、反省してます。キヤノボにも出たいんで」

「…なるほど。お前が狙うのはあれだけでは無いのか」
「ええ」

時守はその目に、確固たる意思を持って告げた。

「俺は、千冬さん。貴女を超えます。…三大会連続総合優勝、かつ他の部門も総取り。俺の最大の目標はそれだけっす」

「…そうか。なら、早く治す事だな」

「うーい…いてて…」

◇

「剣が…モンド・グロッソを狙ってる…?」

カウンセリングルームから漏れてきた声は、しつかりと彼女の耳に入っていた。廊下を歩いていたが、時守と千冬の会話内容を聞いたせいで、カウンセリングルーム側の壁にぴったりと背を付けたまま、会話を聞くことに没頭してしまった。

「い、いや。それよりもその前よ前。…オーバーワーク、暴走…。ここ、これってあたし一人が知ってていい事なのかな…」

壁に背を預け、俯き、考える。それと共に彼女の綺麗なツインテールが彼女の前に垂れる。

「シャルロットとかセシリアには…」

「言うなよ、凰」

「っ！お、織斑先生…」

独り言のように呟いていると、部屋から千冬が出てきており、こちらを少しばかり睨んでいた。先ほどの独り言は恐らく全て聞かれていただろう。

「時守本人が、言うべき時に言うと言っている。…それよりも驚いたな、なぜお前がここに?」

「学園祭の準備の帰り道で…ってそうじゃなくて！剣は大丈夫なんですか!?!」

「…お前がデュノアやオルコット、更識姉妹でなくて良かった。そっちの方が相当めんどくさそうだからな。時守だが、今は大丈夫だ。それこそ、ゴーレムや暴走軍用機が襲ってこない限りは、な。…ああ、それと、1つ言っておく事があった」

「…言っておくこと、ですか?」

千冬はその表情を、厳格なものに変えた。

「ああ。…気を、抜くなよ?」

そう言い残し、千冬は背を向けて廊下の奥へと向かった。

学園祭、スタート

いよいよやってきた学園祭。

生徒により招待されて者か企業関係者しか学園に入ることが出来ないため、一般開放はしていない。そのため開始の合図である花火等は打ち上がらないが、そんな物が無くとも女子達は元気だった。

「1組よ1組!あの織斑君と剣ちゃんの接客が受けられるのよ!」

「しかも執事服で!」

「しかもゲームもあるんだって!」

「勝ったらツーショット写真よ!?!行くしかねえっしょ!!」

いささか元気過ぎる気もするのだが、それは廊下や校内にいる女子だけではなかった。それぞれの教室内にいる彼女達も、十分騒がしく、時折その中に教員たちの姿も見られる。

そんな賑やかな廊下や他教室よりも、圧倒的な賑わいを見せていたのがここ、1年1組だ。

「お嬢様。残念ながらこのゲーム、俺の勝ちや」

「あつ、ああああ…」

「流石剣だね!勝率なんて軽く超越するなんて!」

「勝負となると一切の妥協を許さない剣さん…。素敵ですわ…」

「シャルロット、セシリア。お惚気フィルターを通して師匠を見るのはいいが、しっかりと仕事をしろっ!」

接客に当たっている時守や、その他の専用機持ち達もこの学園祭を大いに楽しんでいた。若干時守戦績に疑問を抱く者も居るが、解決する前に教室を出してしまうので、雰囲気的には全く問題ない。現在、時守が接客担当していた女子も、見事じゃんけんで負けて涙を流すものの、すでに帰る雰囲気を漂わせていた。

「も、もう一回…だめ?」

「あ、か、ん。まあまた来るんやったら別やけどな?」

「ほんとに!?!」

「ああ。…でも、太るで?ややぽっちゃりまでは妥協出来る範囲やけど、デブはお断りやわ。オツケー?」

「はいっ！またお昼と夕方来ます！運動もしつかりします！なので是非また私とじゃんけんしてください！」

「ん。じゃ」

「はいっ！では、また来ます！」

時守に適当に追い出された女子は、何故か満面の笑みを浮かべて1年1組の教室を出ていった。もちろん、それだけでクラスが静寂に包まれる事などなく、時守にもすぐさま指名が入った。

「らっしやーせー」

「と、時守くん!?こっちのテーブル来れたの!？」

「え?あー…まあ、来れた。っつか来た。お嬢様のために」

「お、お嬢様…。私の、ために…っ!？」

時守が接客に当たり、『お嬢様』と呼ばれた女子がうつとりとした表情を浮かべると同時に、クラス内のどこからか、強烈な殺気が撒き散らされる。具体的には接客班の金髪2人から。笑顔で接客する2人だが、その背後には不気味なオーラが舞い上がっている。

「ん?どないした?」

「う、ううん。な、何でもないの…」

「そか?んじゃ注文何にする?」

「えつと…こ、この『お嬢様にご奉仕セット』でも、いい?」

「…まあええで。ちよい待っついて」

オーダーが衣装に付けている無線から調理班に伝わり、時守はそれを取りに行く。

「腹痛いねんけどリコピン変わってお願い。靴下3足セット1000円のやつ買ったるから」

「何その交換条件!?てか嫌よ!私も忙しいし、何よりあんたが抜かれる訳ないでしょ!？」

「ガム…2個でどう?」

「何?その間は。私の価値はガム1個か2個だとも言いたいのか?っつか無理って言ってんでしょ?」

「清香ちーん。学園祭終わったら食堂のスイーツ好きだけ奢るから5分だけ変わってー」

「私も無理だよー!」

「何なんだよその価値の差はー!!」

「無理なんやったら行ってくるわ。んじゃ」

理子の悲痛な叫びは時守には届かず、その当の本人はトレーに、中にポツキーが入った冷えたグラスと紅茶を乗せ、意気揚々と担当の席へと向かった。

「おいしよつと。お待たー」

「ま、待って…ないわよ?」

「はははっ、別に無理してお嬢様口調にする必要ないで?」

「あ、そうなんだ。じゃあ普通にしようかな」

「せやせや。人間普通が一番や。ほーれ」

「えっ!?」

どこが執事やねん、とツツコミが飛んできそうな接客態度で、時守は接客…というより会話を楽しむ。

学園祭の準備期間中、一度だけ標準語、かつ丁寧語で接客の練習をさせたことがあった。慣れていない一夏や箒、発案者のラウラ、時守と同じ、接客を選んだセシリアとシャルロットが次々と合格を貰う中、時守だけがいつまで経っても合格出来なかったのだ。『いらつしやいませ』は『らつしやーせー』や『おお、いらつしやい』、『ありがとうございました』は『あつしたー』や『ほなまたよろしゅう』等、どうやっても手馴れすぎた接客と関西弁が抜けなかったのだ。そして、仕方なくクラス全員が妥協して、彼のみいつも通りの喋り方での接客が許されたのだ。

「何驚いとんねん。『お嬢様にご奉仕セット』やねんからお嬢様が食べな意味無いやん」

「え…。あ、あーん、をしてくれるセットなの?」

「せやで。ポツキーだけやけどな。ほい、あーん」

「あ、あーん…」

どこかの金髪美少女2人の額に血管が浮き出て、廊下を歩く青髪の2年生が黒い笑みを浮かべ、1年4組で店番をしている青髪の少女の目からハイライトが消える。

そんな光景が脳裏をよぎった時守だったが、今は目の前の女子の接客に集中することにした。

「どや？」

「な、なんかその…味なんて分からないよ…」

「緊張なんてせんでええのに。ほれ」

「あ…あ…ん」

左腕で頬杖をつきながら、右手でポツキを食べさせる。このラフさ加減が、きつちりとした一夏と違いが出来て評判が良いのだ。

「およ？もう無くなってもた」

「あつ…。もう、終わり？」

目の前の女生徒の接客を担当している時守だったが、あれよあれよという間にポツキーが無くなってしまった。

「やな。列が列やしおかわりとかできひんねん、悪い」

「い、いいよ全然！楽しかったし！」

「そか。んじゃ、写真のゲーム何にする？」

「じゃんけんで！」

「おっけー」

テーブルの上で両者が拳を構えー

「さーいしよーはぐー！」

なんの不正も無く勝負が始まるー

(負ける確率の方が低いのよ！ならまだ勝ち目はある！)

(俺にはゴンさんのじゃんけん必勝法があるからなー。キルアも使ってたけど)

なんて言うことは無かった。千冬のトレーニングをこなしてきた時守にとって、普通の女子がじゃんけんで手を出す直前に、相手の手の動きを読み、自分の手を変える等容易いことだった。

「じゃんけん、ぽん…あつ…」

「ん、どんまい」

結果は、時守がグーで勝った。相手の人差し指と中指が動き出したのを確認できる程の動体視力をいかに発揮し、勝利を収めた。

「ま、また来たら…」

「そりやできるで？」

「分かった！じゃあまた後で来るね！」

「ばははーい」

勢いよく立ち、出口の方に向かっていった彼女に手を振る。そして

「剣ちゃーん！織斑くんのヘルプ入ってー。今トイレ行ってるか
らー」

「ガツデム！ふざけんなよあいつ！」

先程まで一夏が担当していたテーブルに、すぐさま入ることとなつた。そう、

「およ？ワンサマの担当お前やったんか。鈴」

「け、剣…」

一夏に会いに来たであろう、風鈴音のいるテーブルに。

◇

「んで、何頼んでん」

「え、えつと…し、執事にご褒美セット…なんだけど…」

「マジか…お前…」

「しよ、しようがないじゃない！一夏にできると思ってたのに！」

「ようそんなこと大声で言えんな」

どっこいせ、と声にしながら、こいつはあたしの隣に座った。その顔に一切の悲痛さを滲ませずに。その態度に一切の辛さを見せずに。

あの日、千冬さんとカウんセリングルームの前で会ったあの日から、どうもあたしはこいつに対して明るく振る舞いにくくなっていく。いや、こいつ…剣だけでなく、セシリアやシャルロット達、さらにはラウラや箒、ティナにまで、なんて言うか…いつもの自分を出せなくなっている。いわゆる、作り笑顔でその場しのぎをしている。今もそうだ。一夏を言い訳に出し、目をそらすフリをしながら、剣の服の下に隠れている身体を見てしまう。

「ん？どないした？服にゴミ付いてる？」

「え、あ、ううん。何でもないの」

…もちろん、嘘だ。オーバーワークの反動が、今も剣の身体を蝕んでいるのではないかと考えてしまう。それを誰にも言えないことが、またあたしの気分を暗くする。

「…で、何が聞きたいんや?」

「っ!?あ、あたしは別にそんな…」

「嘘つけ。…ちよつとお前のこと観察してたけどな、俺と目が合った瞬間、やけに暗くなったかと思っただけに作り笑顔してたやろ。…幸い、周りがうるさいからな。小さい声やったら相談ぐらいでできるで。ま、おおかたカウンセリングルームのことやろとは思っけど」

「…知ってたんだ…」

「ああ。ちっふー先生から聞いた。お前にバレたってな」

「…そっか」

なら、話しやすい。

そう思っていたはずなのに、言葉がなかなか出てこない。

—もう訓練はするな?

ダメ、千冬さんでも止められなかったのに…。

—セシリア達には話さないの?

論外よ、こんなの。その辺を一番考えているのは、きつと剣に違いないから。

—なんでそこまで頑張るの?

これも論外。頑張る理由は人それぞれだもん。

だからあたしは、そのまま聞くことにした。

「ねえ剣。…今、辛くないの?」

あたしがあの瞬間、感じたことを。

「確かに、そうは思う。普通に動くだけでも全身痛むしな。…『完全同調』で痛覚を遮断できるのは発動中のみや。やりすぎな機動に気づかずにはやってたツケが回ってきたってとこやな」

「…:…:そう。あたし以外に知ってる人は?」

「ちっふー先生と国連の人等だけや。セシリアとシャルと簪にはバレてないけど、カナには何かしらの異常はバレてると思っ」

「言う気は、無いの?」

「今はまだ無いな。でも、いつかはちやんと言う。：悪いな、嫌な思いさせて」

「大丈夫よ。ただ、何も知らなかったんだって思っただけ」

あたしは剣のことを何も知らない。どんな訓練をしているのか、模擬戦は本気でしているのか、どんな思いで戦っているのか。

「え、俺男つてことも分からんの？お前」

「そういうんじゃないわよ！……ふふっ……」

「やっとなか。今は学園祭や。こんな辛気臭い話せんと楽しむぞ」

「……うん」

あたしがそんなことを考えていたら、相変わらずというか、やはり剣はボケた。こいつにとつてボケに入るかどうかは分からないけど、ふと笑ってしまった。ようやく、普通のあたしに戻れたのだと思っただ。だからこそ――

「あ、鈴。ポツキーちようだい」

「……え？」

「いや、執事にぐ褒美セットやねんから俺にあーんせな」

「……はあ!!」

こいつにそう言われた時、あたしはとてつもない羞恥心に襲われた。



「い、一夏にできると思ってたのに……」

「何をぶつぶつ言うтонねん。ほら、早よ」

「……もう。はいっ！あーんっ!!」

「あつぶな!?!お前人殺す気か！フェンシングばりの突きやったぞ今のは！」

「う、うるさいうるさいうるさい!!とつとと食べなさいよ！早く終わらないじゃない!!」

顔を真っ赤にした鈴が、時守にポツキーを突きつけ続ける。その奇妙な光景と2人のやり取りは1年1組にいる全ての人間の注目の的

となっていた。

「んじゃほら、あー」

「うっ…。あ、あー…ん」

「んっ。…ぬるうまい」

「何？その微妙な感想は」

「いや、ほんまやって。食べてみいや。…ほれ」

「あむっ。…あ、ほんとだ。ぬるうまい…ってかぬるくて美味しいわね」

「やる？」

「うん」

いつの間にか2人で食べさせあいをしている2人のテーブルから、次々とポツキーが無くなっていく。

「てかさ、お前隣で何やってんの？」

「中華料理よ」

「お、せやったな。んじゃ後で行くわ」

「ん、ありがとう。じゃ、ごちそうさまー」

「うーい」

もはやご奉仕喫茶の『ご』の字も感じられない会話だったが、これで一応時守の鈴へのご奉仕が終わった。



「んあ…。つつかれたー。接客で分担作業とか慣れへんわ」

「ふふっ、…お疲れ様、剣…」

「ん。簪のクラスはどうなん？」

「私たちのクラスは…展示だから、店番交代するだけでいいの…」

「めっちゃ楽そうやん」

「うん…。それに、朝の一番早い時間に入れたら、…その…、午後、剣と居られる時間が確保しやすいから…」

「簪ー!!」

「きやつー…も、もう…」

廊下で横を歩いてきた簪に抱きつく。この例え難いサイズ感と柔らかさが心地よい。

鈴が2組へと帰った後、教室にやってきた楯無を含めてのミニ撮影会が開かれた。その後俺は、一夏と交代ではあるが、一定時間の休憩を得ることができた。

「…剣？」

「ん？」

簪から1度離れ、目を合わせる。簪はあいも変わらず上目遣いになつており、さらに首を傾げている。これされたらたまらんねんなあ…。

「その…、セシリアとシャルロットは良かったの？」

「本人達がそう言ってたしな。いつまでも店に俺がいた方がめんどくさいやろ？客来るし」

「あつ…、なるほど。お姉ちゃんは？」

「撮影の後、生徒会室に戻ったらしいから迎えに行くねん。ちなみにセシリーとシャルともそこで待ち合わせや」

「…ん。分かった…」

手を、いわゆる恋人つなぎでつなぎ、廊下を生徒会室に向かって歩いていく。

一時間に届くか分からない程度の休憩だが、それだけあれば5人で色々と回ることができらるだろう。

「…ねえ、剣？…剣の方には、企業の人とか来た？」

「あー、俺には来てないな。つてかそもそも来んなつて国連から通告してもらつてるし。もしやったらIS関係の仕事やらせませんよーって」

「そう、なんだ…」

「ワンサマにはくつそ来てるっぽいけどな。可愛いそーに」

「ふふつ…。棒読み、すぎ…」

「そうか？」

話しながら、廊下の角を曲がる。その先の廊下には、生徒会室や職員室、保健室等があり、他の場所と比べてやたらと静まり返っている。

何となく、そんなことを考えていると、簪の左手の握力が強まった。
…ま、まあ思い当たる節と言えはーつしか無いねんけどな。

「それより剣…。さっきの写真の時…なんで私だけ、その…」

「お姫様だっこせんかったんかって?」

「…う、うん…」

「だって簪、あんな色々見られてるところで撮るん嫌やろ?それやったらあんまり皆に見られへん所で撮った方がええんちゃうかなーって」
「…そっか。あり、がとう…」

先ほどの写真撮影の時、シャルとセシリ、カナの3人は俺にお姫様だっこを要求してきた。それを一切断ることなく、3人との撮影は終わったのだが、簪だけは顔を赤くし、キョロキョロと周りの様子を伺っていたのだ。

やはりというか、予想通り、簪は大人数の前でいちやいちやするのを、嫌っているわけではないが、まだ少し苦手らしい。

「また学園祭終わったら、俺の部屋か簪の部屋で撮る?」

「うん…。場所は、剣に任せる…」

「りようかーい。んじゃ、入るか」

「うん…」

話ながら歩いていたため、気づけばすぐ隣に生徒会室の扉があった。

「お姉ちゃんのことだから…何か企んでるかも…」

「ま、さすがに学園祭中やし、そこまで酷いことは考えてないやろ」

「…だと、良いけど…」

淡い期待を胸に、俺達は生徒会室の扉を開け、中に入った。

そこに待ち受けていたのはー。

「ふふふ…」

「えへへ…」

「はあ…すみません、織斑先生…。ごめんなさい、一夏くん…あなたのためとは言え…」

制服に着替え終わり、不敵な笑みを浮かべるカナ。

にぱーつと、満面の笑みで姉を見るのほほん。

右手で顔を覆い、天井を見上げる虚さんの3人だった！。

灰被り姫と新たな男子

「お嬢様、ひとつだけ、ひとつだけ聞かせてください」

「ん？なあに？虚ちゃん」

「いつからこんな劇を考えていたのですか？」

「一夏君を生徒会に入れるって決めた時からよ？あ、ちなみに本音ちゃんも知ってたから」

「……本音？」

「す、ストーツプー！え、ええつと……これには理由があつて……」

「……言いなさい」

「面白そうかな〜つて！……ふぎゅっ!？」

「ごちんつ。と、虚の拳が本音の頭を穿った。

虚の目の前のテーブルの上には、『灰被り姫（殺）』という題名の書かれた台本のような物が置いてある。以前から、一夏を生徒会に入れようという話が出ていたことを虚は知っているし、何よりそのためにも自分も尽力してきたつもりだった。

が、そんな虚に隠れ、楯無と本音は一夏を確実に獲得するため『観客参加型シンデレラ』という劇を企画していたのだ。

「……立案はどちらが？」

「私よ？」

「……台本は？」

「私だけど……ほとんどアドリブよ？」

「……ナレーションは？」

「私がするわ」

「……先生方への許可は？」

「お酒と交換で手に入れてるわ」

「……場所は？」

「第4アリーナよ。あ、もちろん使用許可は取ってるから」

「……はあ」

「本音ちゃんがしたのは虚ちゃんへの話題振りだけだから」

「えへへ〜」

「…はあ…」

楯無の手回しの早さに思わずため息が零れてしまう。自分に気づかれること無く、いつの間にかそれほどの準備をしていたのか、甚だ疑問に思う。それと同時に、主人と妹の画策に気づかなかった自分を少しばかり愚かしく思ってしまう。

「…剣くんは？」

「ひえっ…に、睨まんといってくださいよ。俺はただなんか劇やるってことしか聞いてなかったですし、最近夜寝るの早かったり、色々して遅かったりやから…」

「…簪お嬢様は？」

「え、えっと…その…、一夏で何かするって言うのは…」

「…分かりました。…はあ、お嬢様、何度も言いますが、こういうのは1度私に相談してから…」

「もうっ、虚ちゃんったら。素直に言えば良いのに。一緒に遊びたいって」

「違います！それよりやっぱり一夏くんで遊ぶつもりなのですか!？」

「あら、バレちゃった」

悪びれることなく、舌をちろりと出し、小悪魔のように微笑む楯無に、今度は頭を抱える。

—これ以上仕事を増やさないでください…。それと剣くん、今も私がかこうしている間にお嬢様といちゃついています…。それ以上…甘やかさないで…。

そんな虚の苦労も露知らず、時守と楯無と簪の3人はベタベタと互いの身体を触りながらいちゃいちゃやチュツチュしている。本音は本音で、いつの間にか取り出したケーキを満面の笑みで口いっぱい頬張っていた。

「…いつから、始めるのですか？」

「もう少しよ？虚ちゃんの入場チケットの係が終わる時間とちよつと合わせてたし」

「そ、そうですか…」

何故か頬を少し赤らめた虚が、楯無から目を逸らす。ふと、少し前

に入場ゲートで声を掛けてきた赤髪の青年のことを思い出した。が、彼には悪いが、今はそれどころでは無い。

「そ、それよりお嬢様。出演者はどうするのですか？さすがにアポは取って…」

「ないわよ？今から行くの」

「…ないんですね。ちなみに候補は？」

「最初は1年生専用機持ちちゃん達で、ちよつとしてから投票してくれた皆よ。一夏くんが生き残ってくれたら、それだけ投票してくれる子が増えるし、どの道私が一夏くんの同棲相手を決めるしね」

「…というと？」

「最初はね、一夏くんから王冠を取った人が、同室になれるっていうルールだったの。でもそうしちゃうと私と剣くん離れちゃうじゃない？だからね、『王冠を取った人が、織斑一夏の同棲相手を決めることができる』っていうのにしたの」

「なるほど…。で、その一夏くんが来てくれるという確信は？」

「確信も何も、連れてくるわ。一夏くんが剣くんに完敗してから、一応はコーチしてたし」

「…コーチの件もこのためだったんですね…」

あまりの周到さに、最早ため息すら出なくなってしまう。外から見ている限り、楯無の指導は、ちよくちよく一夏で遊ぶ以外は、至って真剣だった。

しかし、その裏で、一夏に『少しでも強くしてあげた』という借りを作らせ、今回の劇に必ず参加させるように仕向けていたのだ。

「まあそれ以外にもあるけどね。彼が弱かったら困るっていうのはホントのことだし」

「そう、ですね…」

「あ、せや。皆って誰学園祭に誘ったん？今更やけど」

不意に、時守からそんな質問が投げかけられる。話が少し暗くなりそうだったため、良い話題変換の機会だと思い、虚も乗ることにした。

「私達全員、両親に渡したわ。…剣くんは？」

「俺もおかんかおとんに渡そ思てんけどな、あの2人今沖縄でサー

フィンにはまってるらしいから要らんって言われてん。んで、結局友達に渡した」

「け、剣くんの?」

「おう。中学の友達。カナと簪も前会ったやろ?」

楯無や簪、本音らも乗った結果、自分達の知らない所で学園祭が荒れていることを、その名を聞いてなんとなく知ることとなる。

「健くんや。あの健くん」

自分達が今まで出会った中で、最高クラスのキャラの濃さを持つ、その人物が来ていることを。

◇

「エロス!」

「死ねこの変態っ!!というより、なぜお前がここにいる!」

「剣ちゃんに招待券もらってん。昨日このへんであった練習試合でボコってきたとこやし、タイミング良かったなーって」

「…はあ」

時守と、彼を追って出ていったシャルロットとセシリアが出ていった後、1年1組のご奉仕喫茶は少しの間、落ち着いていた。が、とある人物の来店により、数分前までの勢いが少しばかりぶり返してきた。

「で、だ。注文はなんだ?」

「お、ま、え♡」

「一夏、木刀を取ってきてくれないか?」

「嘘嘘嘘!!もう、箒ちゃんったらー。剣道日本一同士のノリやないのー」

「…はあ。…注文は?」

『メイドにご褒美セット』と『メイドのご奉仕セット』で」

「ああ、了解…:し:た…:っ!?!ふ、2つともか!」

「せやでー。何回も注文するよりまとめてした方がええやろ?」

「え、あ、…:わ、私が…:?」

「おう」

颯爽と現れた謎のイケメン、神藤健を見に来た人に時守の知り合いということがバレ、さらに人を呼ぶというループが発生したのだ。

「ぐぬぬ…、し、仕方ない。い、今は一応、客だからな。仕方なくだが従ってやる！感謝しろ！ご主人様！」

「お、おおお…っ！」

「な、なんだその顔は…」

「い、いや。何もない…」

「ふんっ！変なやつめ…」

知らず知らずのうちに見事なツンデレを見せた箒が厨房に料理を取りに行く。箒がそうしている内にも、健はラウラや一夏に声をかけては時守の話で盛り上がっている。

「ね、ねえ篠ノ之さん？」

「なんだ？」

料理が出来上がるまで、少しばかり厨房のそばに立っていた箒に、理子が話しかける。まるで恐ろしいモノを見ているかのような表情で、箒の顔色を伺っている。

「も、もしかしてさ…健と付き合ってる？」

「……………は？な、なななな何を言っている!!」

「な、なんかやたらと仲良さそうにしてたし…剣道日本一同士だし？」

「あ、ありえるはずないだろう！アレだぞ?!」

「あ、今の聞いて安心したわ。ま、大変だと思うけど、接客頑張ってる！はい、お待ちどおー！」

「あ、ああ…」

引き攣る頬をなんとか抑え、箒は健の元へと向かう。厨房から出た箒の目に止まったのは――

「……………はっ？」

――まさに異様な光景だった。

「いらっしやーせー！」

「ど、ドレスだど!?私も着れるのか!？」

「ええ、もちろん。あ、一夏君には拒否権無いからね」

「はあ!?な、なん…。はあ、分かりましたよ。なんでって言っても連れ

「ていかれるんですよね?」

「正解。鋭いわね、一夏くん」

「楯無さんに振り回されていたら分かりますよ!!」

なぜか執事服を着た客（鍵）が接客に当たり、ラウラが興奮した様子で楯無に食ってかかり、その楯無は不敵な笑みを浮かべながら一夏を茶化し、その一夏は年相応の怒りを見せていた。

調理班やその他の1組の女子が緊急処置として接客に当たっている中、お前達は何をしているのか、と、問いただしたかった筈だが、どうしても聞きたいことがあった。

「ドレスとはどういうことだ!!!」

「ずん、ずんと大股で一直線に進んでいく。器用にも、スカートの裾を一切踏むこと無く、目的地である楯無の元へとたどり着いた。」

「私もラウラもドレスを着ますから行きましよう楯無さん行くぞ一夏」

「え、ちよ、筈?今なんて言ったんだ?1度に言われても…」

「さつすが筈ちゃん。即決即答ね。ほらー、一夏くんもさつさと決めなさい?男の子でしょ?」

「…はあ。はいはい、分かりましたよ」

「はいは一回ー!」

「……はい」

「どうした?嫁。ずいぶんと暗い顔をしているが、何か変な物でも食べたか?」

「…何でもねえよ、ラウラ。……ありがとうな」

「な、なあ…!?!」

4人が教室を出る間際、げんなりとした一夏の不意の一言がラウラをときめかせ、筈に危機感を覚えさせ、楯無に黒い笑みを浮かばせるという、まさにIS学園ならではの出来事があったが、あれよあれよという間に出ていった。

「いつてらー。…お、いらっしやーせー!かわいいお嬢様ー!!」

なぜか男性操縦者でもない関西人に見送られながら…。



「あれ？弾？」

「お、まだここにいたのかよ、鈴」

関東の男性操縦者、織斑一夏の親友である五反田弾は、再び1年2組の中華料理訪れていた。

「今度は1人なの？」

「ああ。…ぶつちやけ、一夏といると女子がな…」

「あー。ま、まあ分かる気はするけど…」

あんたはあんたで、結構人気みたいよ？

その一言を、鈴はあえて飲み込んだ。理由は簡単、面白そうだったからだ。実際に、今も弾目当てで他クラスから見に来ている女子もいるし、クラス内の接客担当の女子も、先ほどからちらちらと彼を見ている者が多い。

「入場ん時に良いなって思った人とうまく話繋がれなかったし… やっぱ俺女子と喋んの向いてねえのかもなあ…」

「じゃああたしは何なのよ」

「鈴は…友達？ってか最早親友クラスだな」

「…何よ。あたしを女として見てないの？」

「……見てるって言ったらキモいとか言うんだろ？」

「当たり前よ。弾だもん」

「酷くねお前!？」

ショックを受けている弾を尻目に、鈴は微笑む。回りくどい言い方だが、自分に女としての魅力があると伝えてくれたのが少しだけ、照れくさかったのだ。

「だああああ!!高校3年間彼女無しとかマジで嫌だ!周りが周りだしな!」

「剣に一夏…、か、可哀想なほどにあんたに目が行かないわね…」

「だろ!?!…刺激的とか要らねえからさあ…もつと、こう…。お淑やかかっていうか、優しいっていうか、普通のお付き合いが楽しめるような人と出会ってえんだよ!」

「……なんでか分かんないけど共感できたわ」

思わず、思案にふける。自分達が何をしていたのか。

―斬り、打ち、撃ち、飛び、忍び、騙し、欺き……

そんな駆け引きなど日常では当たり前。さらにISでは。

―転校、テロ、転校×2、暴走、テロ―

よくよく考えたらあたし達の一学期おかしくない？という疑問が浮かぶ鈴だったが、ふと気になったことを弾に尋ねてみた。

「ねえ弾。そう言えばさ、なんであんたまたここに来たの？さつき食べたとこなのにもまた来るのもおかしいわよね？」

「あ、忘れてたわ。なんか一夏が女子に連れられてどっか行ってたのを見たんだよ」

「……聞かせて」

「ひっ……。あ、あのな。1人は剣の彼女だ。水色のはねた髪のは……確か、楯無……さん？だったな。後は、銀髪のちっちゃい子と、一夏のフアースト幼馴染みの篠ノ之箒。両方とも目がキリッとしてる。んで、なんか劇がどうやらー、とか、ドレスがなんとたらー、みたいな話してたぜ？」

「……そう」

両手の人差し指で目尻を上げ、2人の目元の真似をする弾に、鈴は、声色こそそうは聞こえないが、心の中では今までに無いほどに感謝をしていた。

「ありがとう、弾。あんた、絶対モテるから、頑張んなさい」

「え、お、お、おう？……も、モテる？……って、どこ行くんだ？お前」

「ちよつとバトってくるわ」

「そ、そうか……。が、がんばれよー」

互いに激励の言葉を送り、鈴は店の外へ、弾は店の中に残った。

「……嘘ーん」

ここでも1組同様、客が残り、店員が居なくなるという珍事が発生した。



「剣くん、着替えた？」

「え、俺ってこの服装で良くね？」

「まあそうなんだけどね。一夏くんは？」

「いやあの、着替えたんですけど…なんですか？これ」

第4アリーナの更衣室、そこに一夏と剣、そして楯無は居た。服装は順に、楯無が用意した王子の衣装、店の執事服、中にISスーツを着た制服、となかなかのミスマッチである。

「それが一夏くんの衣装よ。題目はシンデレラで、台本は無し。後10秒ぐらいで始まるから早く準備してねー」

「え、あ、後10秒!?や、やべえー!」

「俺はちよい後かららしいからがんばー」

「お、おう!」

何がなんだかよく分からないまま、一夏はアリーナに作られたステージに登った。——否。

「むかーしむかし、あるところに、シンデレラという1人のお嬢様が居ましたー」

(良かった…。普通出だしっぽいぞー)

——登ってしまった。

「と、思われがちですが、シンデレラが1人?そんなのは、ここIS学園においては全くの嘘っ!!英、独、仏、日、中!各国から集った6人の精鋭が王冠に隠れる機密文書を狙う!はたして、王子と執事は無事、その王冠を守ることが出来るのか!」

「……は?」

「6人の姫、灰被り姫と執事と王子の舞踏会!今宵はどのような舞いを見せてくれるのだろうか!」

「もらったああ!!!」

「伏せろやアホがああ!!!」

楯無のナレーションの終了と共に、一夏の頭上で、鈴と時守が交錯した――。

闘の壱 始まり

『ちよつと…っ！剣！あんたこんなことして大丈夫なの!!』

『ま、そんな派手に動かん限りは大丈夫や。それこそ、生身同士でやり合うぐらいやったらな!』

プライベートチャネルで鈴がいきなり怒鳴ってきたので、少々手荒いが、チャネルと共に彼女の細い身体を投げ飛ばす。俺の身体のことを思ってくれるのは嬉しいが、だからといって手を抜く理由にはならない。ってかこれぐらいやったら余裕やし。相手がちっふー先生とかちやうしな。

鈴が一夏に放った第一撃を防いだ後、俺と鈴はそのまま一夏のすぐ隣に着地した。

と、同時に。

「…は？え？鈴?」

「おいボケ。まだ何が起こってんのか理解出来てへんのか」

「え、あ、ああ。はい」

「簡単に言うことやな、お前が女子達から狙われる標的で、お前の唯一の武器は俺。多分時間切れがあるからそれまで王冠を死守するだけ。おけ?」

「OKなわけあるか!!なんだよそれ!俺自身、身を守れねえのかよ!!しかも時間制限が多分って何!!下手したら終われねえ可能性もあるのかよ!!」

「企画が楯無やからな」

「あー…」

「ねえ、もう攻撃していい?」

まだ何が起きているか分かっていない一夏が間の抜けた声を出した。ってかこいつのツッコミススキル上がってね?鈴もそこら辺分かってくれてんのか知らんけど、この流れの間待っといってくれたし。

さすがにしびれを切らしたのか、やや真剣味を帯びた目で、鈴が俺達を睨んでくる。

『剣、あんたが身体痛めてるのは知ってるけど、ここに出てきた以上は

「手加減しないわよ?」

『当たり前や。…ま、お前らに武器の使用が許可されてるのとおんなじで俺にも許可されてるモンがあるから大丈夫や』

またこれ使ったら鈴になんか言われるかも知れんけど、生身で出来る事は限られてるから大丈夫やろ。そう思い、発動する。

『完全同調』、発動。…生身版つてなア」

「は、はあ!?!何よそれ!」

「見て分らんか? P I C やらパワーアシストやらは無いけど、視覚強化とか反射速度向上とか、その辺は生身にも使えんねん。臨海学校の帰還の時にも使ったやろ?」

「…ったく…。相変わらず、イカれた性能、してる、わねっ!」

セリフの切れ目と共に、鈴から回し蹴りや飛刀の投擲が放たれる。それを両手両足で流しつつ、距離を詰めていく。…まあ言うちや悪いけど『完全同調』あるから生身の相手に苦戦することなんて無いねんけどな。

「ちよっ! 来んなあ!!」

「…そこまで拒否られたら…さすがに来るモノがある…」

「あ、ご、ごめん…」

「…なあんちやってえ! 一夏! セシリーが狙つとる! 早よどつか行け!」

「あっ! 待ちなさいよ一夏あ!」

「お、お前はどうするんだよ!?!」

「とりあえず撒きながら攪乱するわ!」

俺と距離を取った鈴との距離を再び詰めようとする、真後ろの視界に銃弾が飛び込んできた。

タイミングを合わせ、首を傾げるだけでそれを避ける。すると、先ほどまで俺と鈴の間にあった綺麗な床に、明るい赤のインクがぶちまけられた。

「よっ…と。ほれ、狙つとるやろ?」

「…ああ。剣、悪いがここは任せた!」

「ほーい」

ひとまず鈴とセシリー、そして俺の近くの城みたいなんに隠れながら盾を持って待機しているシャルを纏めて相手取ることしよう。いや、めっちゃ上から目線やけどピンチなん俺やからな？向こうには飛刀とライフルと盾あるけど、俺無しやからな？

一夏が走り去っていったのを確認し、鈴がまたもや俺に突撃してきた。両手が飛刀で塞がっているため、それ以外では蹴り技が多くなっている。…あ、パンツ見えた。パンツってかスパッツやけど。

「そこを…っ！どけえ!!」

「報酬あんのはお前らだけちゃうねん。やから、っていうわけちゃうけど、俺も負けられへんねん」

女子達には、一夏の王冠の『一夏の同棲相手決定権』だけが知らされてるが、俺にも、『時守剣の同棲相手（最大4人）決定権』が与えられている。これは俺が一夏の王冠を制限時間まで守りきった時に有効になるもので、その間に誰かに取られてしまうと、俺の同棲相手が下手すりやよう分からん子になる可能性があるということだ。…予定なら、俺の制限時間が終わった瞬間にカナが王冠取って、一夏の同棲相手を決めんねんけど…。

「…っ、さつきからえらい大人しい思たら、セシリー動いてんな…」

「まだあたし以外のこと考えてる余裕があるのね」

「まあ、な。シャルも出て来いや。そこにいんのは分かってんでー」

「えっ!?…あつ、声出ちゃった…」

可愛い（確信）。ドレスを着て、頬を赤らめ、モジモジしながらシャルが出てきた。唯一似合わないのはその手に構えられた巨大な盾ぐらいだろう。

「ね、ねえ、剣。一夏を説得してくれない?」

「…ん?仮にシャルが王冠取ったとして、なんか報酬あるん?」

「えつと…あはは…」

「アンタの写真とか動画に釣られてんのよ。3人は」

「…まじか…」

納得しました。俺だってシャルとかセシリーとか簪とかカナの動画やら画像を餌にされたらすぐ動くもん。動く動く。死にかけのゴ

キブリレベルで動く。

「ま、俺の口からは言えへんけど、取らんほうが楽しめんで、シャル」「じゃあ取らないことにするねっ！セシリアと簪にもプライベートチャネルで連絡しなきゃ…」

「シャルロット!?!」

「はっはっはー！おい鈴。お前一夏んどこ行かんでええんか？今頃簪とセシリーも一夏に加勢してんで」

「…このっ！」

俺の一言であっさりとこっち側に来てくれたシャルに感謝。と同時にセシリーと簪にも感謝。この最高な企画を出してくれたカナに感謝。

シャル、セシリー、簪の3人が敵に回ったと分かるやいなや、鈴はすぐに行動を開始した。盾だけのシャルよりも、ライフルを持つセシリーと雑刀を持つ簪の方が危険度が高いと判断したのだろう。…いや、お前らの陣営の方がえげつないからな？軍人に侍に飛刀使いて…。

「俺らも行くか、シャル」

「うんっ」

いつまでもこうして、何もせずにここに居る意味も無いので、シャルと共に移動を開始する。

——その時だった——

「っ!?!シャル、ちよつと先行つといてくれ」

「え？いいけど…何か忘れたの?」

「ああ…。まあ、そんなとこや」

一夏が、穴に落ちたのが、俺の視野に入った。

…いや、引きずり込まれた、と言う方が合ってるか。ハイパーセンサーで確認した限り、一夏を掴んだ腕は白人のものだった。

恐らく、俺たちに離れた所で一般生徒が参加したのだろう。その混乱に紛れ、一夏を軽く拉致ったのだ。

「…シャルロット」

「ん?どうしたの?」

「カナの指示に、従ってくれ」

「……え？う、うん。分かった…」

彼女にそう言い残し、俺は走った。

—敵、亡国機業の元へ—

◇

「え、えつと…ありがとうございます。巻紙さん」

「ふふつ、どういたしまして。何やらお困りの様でしたので」

とある女性に手を引かれ、俺は朝に使った更衣室にたどり着いた。地上で箒やラウラ、さらには大勢の女子に追い回されていた俺をそこに導いてくれたのは、ご奉仕喫茶で白式に追加武装の話を持ちかけたその女性、巻紙礼子さんだった。

「あ、あの…。なんで巻紙さんが？」

「はい。私、スリルが好きでして、こういった所について入ってみたくなるんです。ここからなら先ほどの劇の様子も少しですが見えますしね」

「は、はあ…。本当に助かりました。改めて、ありがとうございます。何かお礼でも出来ませんか？」

ニコニコとした笑顔を浮かべる巻紙さんに、改めて礼を言う。箒もラウラも、殺傷能力が下がっているとはいえ普通にナイフとか日本刀とか使ってたからな。あのまま逃げてたら今頃どうやっていたことやら。

「いえいえ、お礼なんてそんな…」

「い、いや！見ず知らずの人に借りなんて作れませんし…」

「…そうですか…。随分と、お人好しですね…。では…」

少し考え込んで、巻紙さんは再び俺と目を合わせた。代表候補生（仮）の状態だし、ちょっとしたお礼に出せるぐらいの金はある。

巻紙さんが何を言うか聞き漏らさないように、しっかりと集中している—。

「白式を、頂戴してもよろしいですか？」

瞬間、腹部に鋭い衝撃が走る。その強力な勢いそのまま、俺はロツカーに叩きつけられた。

「ゲホッ、ゲホッ!…な、何を…!？」

「あー、だるかったー。ったくなんで私がこんなクソガキとおままごとみてえなことしなきゃなんねえんだ…よっ!おらっ!どうだあ?あたしの蹴り、はっ!最近の男つてのはこうされんのが嬉しいん、だろっ!」

「グッ、…ガア!」

地面に這いつくばっている俺に、さらに4発の蹴りを食らわせてくる。

——ふざけんな!俺はドMじゃねえ!

…じゃなかった。この痛みが、俺にようやく『敵だ』と認識させる。

「白式!」

白式を、ISスーツごと強制展開する。これにより、ややエネルギーが多く消費されるが、何もしないよりかはましだ。

「…ハッ。待ってたぜえ…、そいつを使うのをよお…」

展開と共に起動したハイパーセンサーが、巻紙さん…もとい目の前の女が邪悪に笑うのを捉えた。

くそっ!何なんだよ一体!

「ようやくこいつの出番だからなあ!!」

「なっ!」

焦り、苛立つ俺の前に立つ女の背後から、鋭利な爪が現れた。黄色と黒の禍々しい配色で、その先は刃のようになっていた。

少し、安堵した。さっきはあいつの脚で蹴られていたけど、この爪で攻撃されたら多分、…死んでいた。

「くらえ!」

蜘蛛のような脚の先の爪が開き、重々しい銃口が顔を覗かせる。

「くそっ!」

反射的に、地を強く蹴り、スラスターを全力で噴出する。

それにより、凄まじい速度で上昇し、天井にぶつかったところでようやく止まった。

「何なんだよ一体…っ！お前は誰だ！」

天井から一気に急降下し、起動させて雪羅を、女の頭上めがけて突くも、2本の爪に防がれる。

一旦距離を取って着地した俺に、女の口から先ほどの答えが出てきた。

「ああ？分かんねえのかよ。悪の組織って言ったら分かるか？」

「ふざけん——」

「ふざけてねえっての！ガキが！秘密結社『亡国機業』ファンタム・タスクが1人、オータム様って言えば分かるかあ!？」

「知らねえよ！誰だよお前！そんな人様に言えねえようなことやって恥ずかしくねえのかよ！産んでくれた親に申し訳ないと思わねえのか！」

「…う、うるせえ！申し訳ないとか思ったこと…な、無くはねえけど…っ！いい、今は今だ！愛する人もいるし、過去なんて振り返らねえんだよ!!」

その言葉と共に、女—オータムのISの姿があらわになり、俺のツツコミが炸裂した。

「…おらっ！どうだ！」

「ちっ…くそっ！」

オータムの攻撃が、本格的なものへと変わってくる。

近距離に詰めれば8本の脚が俺の行動を制限し、逆に距離を取れば銃口から実弾を撃ってくる。

…うまい。そして、強い。言動の荒さが目立つが、繊細な部分のコントロールは確かなものだ。

「あ？意外にうめえじゃねえか。誰だ？クソ雑魚とか言ったの」

「ごんの…っ！」

「まあ初心者にしちゃ、だがなあ！このアラクネ相手にちよこまかできるとするのは、ビギナーズラックか？」

「ぐっ…う…！」

瞬時加速で懷まで潜り込むも、4本の脚に遮られ、残る4本の脚の爪が俺に牙を向く。

弾き飛ばされた俺は、地に両足と左手をついてバランスを取り、すぐさま体勢を整える。

：かなり、厄介な相手だ。遠距離攻撃は直線的なものしか無いが、近距離だと自由自在に動かれる。：となると、やはり『零落白夜』で一撃で仕留めるしかない：っ！

「あん？なんかするって顔だな。：ま、多分零落白夜でワンチャン狙ってんだろ？」

「っ！ち、違う！」

「ハッ。そうかよ。んならそんな見え見えの嘘しかつけねえクソガキにお姉さんがイイコト教えてやんよ」

そう思っていたところを、見透かされた。

俺の反応を見てほくそ笑んだオータムが、何やら俺に語りかけてきた。

—耳を貸すな！明らかな挑発だ！

その意識はあった。どんな挑発が来ても、乗らないつもりだった。「この前のモンド・グロツソでなあ！てめえのことを攫ったのはウチの組織なんだよ！感動のご対面ってわけだ！はっはあ！攫ったやつが言ってたぜえ？『何にもできないただのゴミだった』ってなあ！」

「っ！」

「…そうかよ…っ！」

モンド・グロツソでの誘拐事件

公にはなっていないが、第2回モンド・グロツソの決勝戦の直前、俺は何者かに攫われた。結果、俺は無事だったが、それは千冬姉が決勝戦を棄権して助けに来てくれたからだ。あの時の千冬姉の顔は、忘れない。目尻に涙をため、安堵した様子でずっと俺の名前を呼んでいた。少し嬉しくも思ったが、その時から俺は、強い無力感を感じていた。

あの時ほど、俺は自分の無力を呪ったことはなかった。いつの間にか、右手に握る雪片式型が震えている。：それは武者震いや怯えから来るものではなく、単純な怒りから来たものだった。

「なら、あん時の借りを返してやらあああつ!!」

気がつけば俺は、全速力で突撃し、オータムに斬りかかっていた。「はっ! やっぱガキだな。こんな煽りで見事に乗ってくるなんて…よっ!」

オータムのISから、エネルギーの塊のようなものが投げつけられた。

それを雪羅で切り裂こうと思った俺を、思わぬアクシデントが襲った。

「なっ、何だこれ!」

「…まじかよ…。こんななうまいこといくなんて思ってたぜ。初見でもかなりのやつには避けられんのに…」

そのエネルギーの塊が、まるで蜘蛛の糸のように伸び、いつの間にか俺の身体が白式ごとがんじがらめにされたのだ。

「くそっ! 離せ!」

「やーなこった。ってかマジで馬鹿だろ、お前。どんな教育受けてんだ?」

「てめえええ!!」

間接的にでも、千冬姉を馬鹿にされたような気がして、身体に込める力を強める。

なんで…っ! なんでこんなやつに…!

そう思い、身体が動くも、糸は俺の身体に絡まり続ける。こんなもの一つ解けない自分に、強烈な無力感を覚える。

「ま、感動のご対面の後は…嘆きの別れって相場は決まってるんだよなあ」

「…何?」

そんな言葉、聞いたことが無かったが…一体何と別れるんだ? そう思っていると、四本足の見たことも無い装置を持ったオータムが、こつちにゆっくりと近づいてくる。

「んじゃ、楽しい楽しいショーの始まりだ」

オータムが、俺の胸元にその装置を押し付けると、4本全ての足が閉じた。

「な、何だ……？は、離せよ！」

「さて、別れの時間だ。言いたいことは言つとけよ。」

誰に？何を？という疑問が浮かぶ俺だったが、一番の疑問は、何と別れるのか、ということだった。

だが、俺はそれを目の前の女の口から知ることとなった。

「つつても、後2秒ぐらいしか使えねえ、てめえのISに、だがなあ！」
「なにっ!？」

瞬間、俺の全身に強烈な電流が流れた。

「があああああっ!!！」

何も考えられなくなり、ただ叫びを上げることしかできない。全身の感覚は一瞬にして無くなり、最早俺の脳に電流による痛みを伝えることしかできなくなっていた。

「ぐ、……う……この……っ！」

電流が止まったと同時に、俺は地に落ちた。

その際、あまり慣れない感覚で落ちたが、大方電流で感覚が麻痺しているのだろうと、深く考えずに、顔をオータムの方へと向けた。

—足に力は、入る。行ける！

そう思い、右手の雪片式型に力を入れる——が、手に伝わる感覚は、俺が拳を握ったものと全く同じだった。

まさか、と思い、右手に目を向ける。するとそこには、何もなかった。見慣れた剣も着なれた白の装甲も無く、ただ俺の手の甲しか、無かった。

「てめえの元相棒ならここだぜ？へえー、ISのコアって結構綺麗なんだな。指輪とかに使えそうじゃねえか」

「お、お前……それ……っ！」

聞きたくもない声のする方に顔を向けると、その女の手の中には光る菱形の結晶——ISの核、コア——が鎮座していた。

「いやまじ、うちの技術班ってすげえわ。知ってつか？あれ剥離剤つてんだ。文字通り、使用者とISを引きはがすもんなんだが……。良かったなあ、生きてるうちに見られてよお」

「ふぎ、けんなああああ!!！」

全身に力を入れ、オータムに突撃するも、鳩尾に直蹴りを喰らい、壁に叩きこまれた。

「がっ…は、あ…」

「IS無しの戦闘ド素人に何ができるってんだよ。ったく、おら！今のガキはこういうのが好きなんだろ！」

「ぐっ…！ガハッ！」

「ひやははは！あんま汚えモン飛ばすなよ？綺麗な脚が、てめえなんかで汚されちやあ、たまんねえ、からなあ！ひやははははは！！」

——その時だった。

バキヤッ！

「ぐふっ!!」

「あれ？なんか踏んだ？」

最初に俺がぶつかった天井から、金夜叉を纏った剣が降ってきた。

「ん？よう」

「…おう」

「なんでそんなボロボロなん？」

「そいつに、やられたんだ…」

「まじか」

見事なドロップキックでオータムを吹き飛ばした剣は、こつちを向いて気軽に話しかけてきた。

「…で？お前誰？」

「ああ!?てめえふざけてんのか!？」

そしていきなりオータムを煽り出した。…加勢に、来てくれたのか…。

「やから誰やねん」

「はっ！だあかあらあ、悪の組織が一人、オータム様だっつってんだろ！」

「知るかポケエ!!誰やねんお前。てかロケット団みたいな自己紹介するとかフラグ建てんの上手すぎやろ」

と、思っていたら、オータムに先ほど俺に流れた電流よりも遥かに強そうなものがオータムに流れ、さらに金夜叉の待機状態の指輪から、ランペイジテールが2本具現化し、オータムを遠くの壁に吹き飛ばした。

「げほっ、げほっ…」

「なんの対策も練らずに相手にIS渡す馬鹿がどこにおんねん。よっ、と」

「あ、白式…。…戻って、来てくれたのか…」

吹き飛ばされたオータムの手から離れた金夜叉と白式が、無事剣と俺の手の中に収まった。

「てめえ…。…舐めてんじゃねえぞ！」

「っ！剣！」

白式が戻ってきたことに一瞬安堵した俺だったが、目の前に広がる光景に、再び現実を引き戻される。

オータムが、壁から瞬時加速で一気に剣に接近してきたのだ。

やばい。そう、思った時だった。

「な、何だ…。…こりやあ…。…」

「ん、ナイスタイミング。カナ」

「ふふっ、私を忘れてもらっちゃ困るわ」

剣とオータムの間に、水のヴェールが広がった。振りかぶられた2本の爪は剣の頭部に届くことはなく、儚くもヴェールに無駄な攻撃を続けるだけだった。

「私のISはね、水を操るのよ」

「…ナノマシンか…。…」

「あら、意外と賢かったのね。言動がアレだったから、ちよつと残念な中身かと思っちゃった」

「この…。…てめっ…。…ぐっ…。…」

「おいおい。…お前、まずは俺やる？」

「なっ、この…。…ざけん…。…がはあっ!!」

ひとまず、剣をガードしている楯無さんを先に倒そうとしたのか、オータムが今度は楯無さんに肉薄した。が、その攻撃が叶うことはな

かった。

脚の一本を掴んだ剣がオータムをISごと地面に叩きつけ、起き上がろうとしたところを顔面に膝蹴りを喰らわせた。…え、えげつねえ…。

「…ざっこ。地の利の差で一夏に勝ててたみたいやな。開けたこやったら一瞬でお陀仏やん」

「舐めんなああああっ!!」

「舐めとんのはどっちやねん…」

やや怒気が籠った声を、剣がこぼす。

「勝手に人の居場所にずかずか入ってきてきよって…ただで帰れると思うなよ」

今度は、今まで1度も聞いたことがないような声で、そう言った。

いや、俺は…聞いたことがある。福音が、花月荘に接近していた時の声と一緒にだ。

——ああ、そうか——

俺は、何となくだが実感した。

「なっ!このっ、離せっ!」

「ええで、言うても…」

剣が、なぜこれほどまでに急に強くなれたのかを。

「これは一回決まりでしたら止まらんコンボ技やけどなあ!」

「ガッ、グッ!?この…!ごふっ!ガハッ!」

自分の、新たな居場所を、守るために戦っているからだ。

剣は、関西からこっちに来た。ここで出来た大切な場所、人、環境…そういう、大切な何かを守ると決めているから、強くなれるんだ。

オータムが悲鳴を上げながら宙に舞う。剣はそのオータムと距離を一切開けること無く、まるで円舞のように追撃していく。

「てめ、え…!と、まれえ…!ぐがあああっ!」

「5、…8、9…60っ…。『具現一閃』!」

「クソが…あ…っ!」

両手両足で殴り、蹴り、ちょうど60回。オータムを蹴りで地面に叩き落とし、止めに具現一閃を刃状で放ち、沈めた。

「どう？一夏くん。頼りになるでしょ？」

「…はい。俺も…」

「うんうん、ちゃんと気づいたみたいだね」

オータムが膝を着いたのを見て、楯無さんが俺に話しかけてきた。言葉通り、俺は気づけた。

すっかりとした守る目標を持ち、それを守れるように強くなる。

今、その言葉がすんなりと心の中に入ってきた。

「あー疲れた」

「お疲れ様、剣くん」

楯無さんが剣に近づいた、その時。

「このっ！」

「っ！剣くん！そいつを捕まえて！」

「…ちっ！つてまたかよ！」

オータムが、ISから離れた。

その手には、白式の時と同じようにISのコアのようなものを持っており、戦闘により空いた壁の穴に向かって走り出していた。

追いかけてしようとした剣だったが、残されたISを見て、俺と楯無さんの前に躍り出た。…すると。

「…まず…！」

オータムが残したISが、大きく爆ぜた。

瞬時に白式を纏えた俺だが、助かったのは別の要因だということはすぐに気がついた。

まず一つ、楯無さんが俺達2人の周りに水のヴェールによるバリアを張ってくれたから。

そして二つ。

「剣くん!？」

「…いてて、だいじよびだいじよび。オールラウンド、モード『双龍』。いやこれマジで防御やと最強やわ」

その楯無さんを庇うように、剣がオールラウンドを身体の前で回転させ、盾のようにならしていたからだ。

…なんだ？あの形。鈴の双天牙月みたいに両端に刃状にエネルギー

ギーがあつて…。今まで見たこと無いけど…。

楯無さんも同じことを思ったようで、すぐにヴェールを解き、剣に近づいた。

「それも、夏に?」

「おう。まあ鈴の双天牙月みたいな形やけど、そこまで威力は無いんやわ。どちらかと言うとこれで殴って距離取ったり、今みたいに盾にするのがメインやな。…で、どないする? 追うか?」

「そうね…。お願い、できる?」

「任せとけ。…他ならぬ、お前の頼みや」

「そう、じゃあ…お願いね。後、…んっ」

「んっ…。どない…した?」

「剣くんが帰ってくるための、おまじないよ」

「この勢いならアジトまで突撃して殲滅しかねへんわ。…ま、冗談はさておき…行ってくるわ!」

俺がその一部始終のやり取りに啞然としていると、剣はあつという間にオータムと同じ穴から出ていった。

え、いや。今普通にキスしなかったか?

「うん? どうしたの? 一夏くん。顔真っ赤にして」

「え、えと…いやあ、その…」

「あ、分かった! 一夏くん、今私と剣くんがキスしてたの見て、興奮してるんですよ」

「ち、違いますよ!」

興奮なんてしていない!…は、恥ずかしいだけだ…。

「んふふ、ほんとかしら? 剣くんね、キス上手いのよ」

「なんでそれを俺に言うんですか!」

「えー。だって、一夏くんもいつかはするんですよ?」

「そ、そんなの知りませんよ…」

「ふふふ、好きな人とするキスはいいつてことだけは言っておいてあげる。…じゃあ、その先は? 剣くんはね…結構、凄いわよ?」

「ぶっ!」

吹き出した俺は悪くないはずだ。…うん、悪くない。

「い、いきなり何を聞いてるんですか!？」

「あら、ただのディープキスよ?…もしかして、一夏くんが考えてた事って…」

「うっ…」

「…あはっ。やっぱり、えっちなこと考えてたんだ」

「ちよ、ちよっと楯無さん!それよりも剣を追いかけなくていいんですか!？」

咄嗟に出た一言で、俺自身実感してしまった。

剣を一人で行かせて大丈夫なのか、と。

「大丈夫よ。剣くん、負けないもの。それに、外にラウラちゃんとセシリアちゃんも居るしね」

「え、そうなんですか?」

「ええ。生徒のみんなには全く知らせてないし、簪ちゃんとシャルロットちゃんと鈴ちゃん、箒ちゃんには別方向の警備をお願いしてるしね。ほら、剣くんも言ってたでしょ?多すぎても連携の邪魔だつて」

「い、いつの間に…」

「虚ちゃんからの連絡によれば、負傷者0、来賓も全員無事だそうよ」
「へ、へえー…」

俺の知らない間に一体どれほどの指示を出したのだろう、と俺はこの時ばかりは楯無さんに感謝と尊敬の念を抱いた。

楯無さんらしい、完璧で、堂々とした立ち振る舞いだと思った。

「でも…」

「はい?」

不意に、楯無さんの口から言葉が出た。

「剣くん…ほんとに、無事に、帰って…くるわよね…」

「…そ、そりゃあ、帰ってきますよ。あいつを追うだけですから」

「そう…よね…」

ただ、剣を想うその表情からは、俺の知る楯無さんの一面など微塵も感じられなかった。

身体を自分の腕で抱き、俯き、何かに怯える彼女は、今まで見たこ

とがなかった。

「あの、楯無さん？」

「…ごめんね、一夏くん。もう大丈夫よ」

「は、はあ…」

「さて、早くここを片付けて、織斑先生達と合流しましょう？」

「えっ…」

ここを、片付けて？

いつも通りの調子に戻った楯無さんに言われ、嫌な予感がして、足元から周りを見渡すように顔を動かす。

すると、そこには瓦礫の山。次いで壊れた壁、天井。…ここ、これ？…まあ千冬姉が居ないのは幸いだけど…。

「えええ…」

「こら、男の子がそんな嫌そうな顔しないの。ラウラちゃん達だって、今は大変なのよ？」

「…そうでしたね。…よしー！」

まずは俺にできることからやってやる。

そう思い立ち、俺は雪片式型を収納した。

闘の式 続と後

「くそっ、くそっ、くそっ！」

(何なんだよあいつ！クソ強えじやねえか！)

オータムは焦り、苛立っていた。

白式強奪という作戦が失敗したということもあるが、何より自分よりも格下だと思っていた男性操縦者を仕留めることが出来ず、救援に来たもう一人に叩き潰され、完敗したことは屈辱以外の何物でもなかった。

「あんのクソガキども…！次やるときはぶっ殺してやる！」

彼女の脳裏に浮かぶのは三人の少年少女の憎き笑顔。あの二人の男性操縦者と青髪の生徒会長。途中まではうまくいっていた。だが、頭上からもう一人が降ってきてから全てが変わった。

さらに気に食わないのがあの剥離剤という機械を渡してきた組織の少女だ。一度奪ってしまったばもう取り返されないと言っていた。よく考えればそれ自体がおかしかった。なぜそんなことを言う必要があったのか。…答えは簡単。自分を騙し、剥離剤の効果を確認するための。

とどのつまり、あの少女の道具のように使われたのだ。

「デメエもだぜ…！…M…!!戻ったら覚えておいてやがれ…！」

足を止めることなく、その場しのぎで隠れられるような場所を探す。

走り続けていたからだろうか、不意に喉が渴いた。周囲を見渡すと、すぐ近くに公園が見えた。そこに入り、蛇口をひねって口を水に近づける。

唇、口内、喉、と順に潤っていく。

(焦ることなんてない。上の目を欺いて、タイミングを待て…。ゆっくり、ゆっくり…)

非常に癩だが、あいつには実力がある。真っ向からは殺せねえ。奇襲か？いや、毒でもいい。

さらに綿密な計画を練ろうとしたが、自分の口の周りに水分が来な

いという異変に気付いた。

(あ?…なんだ?…これ…)

目だけを下に向ける。

すると、先ほどまで唇を濡らしていた水が、何もないとところで跳ね返っていた。見えない壁に阻まれているように、空中でばしやばしやと音を立てながら向きを変えて下に落ちていく。

(A I C か！)

一瞬で答えを出すことには成功したが、時すでに遅し。自らにも A I C がかけられており、逃走することはできなかった。

「ドイツの…最新機か…!」

「ふむ…。師匠の嫁から少しは賢い奴だと連絡が入ったが…やはり馬鹿だな。私のシユヴァルツエア・レーゲンは確かに新型だが、最新機ではない。今ごろ、本国の代表用に第3世代の完成を目指した機体が作られているだろうか」

「てめえもなめてんじやねえぞゴラア!」

「ま、奪ってばつかやったら分かんやろな。どこの技術がどんだけ進歩してるかなんて。ただあるのを盗るだけやしな」

「師匠っ!」

「クソガキ…!」

楯無により予測された逃走経路と、時守による尾行からラウラが先に回り込んでいたのだ。

オータムが A I C に補足されている間に、後から追いかけてきた時守が『オールラウンド』を肩に担いで歩いてきた。

「あまり暴れるなよ。…うちの狙撃手は、優秀だぞ?」

「ま、直接手は下させへんけどな」

ラウラと時守から少し離れたところ、I S 学園の屋上から、セシリアがブルー・ティアーズのライフルをオータムの眉間に照準を合わせて構えている。

『鈴さんやシャルロットさん、簪さんの方ではなく、こちらに来たのが運の尽きでしたわね』

「ああ。正直今のこいつには誰も苦戦はしないだろうが、捕縛に向い

ている私、そして狙撃のセシリア、追撃してくる師匠が揃うとなれば、
な」

『ですわね。それよりも剣さんっ！黙って一人戦いに行くなど無謀すぎますわ！』

「あー、それは…その…」

『ふんっ、ですわっ。話は、これが終わったら、たっつぷりと聞かせてもらいますわ！』

「…可愛い…」

『もうっ！剣さん！今鈴さん達もこちらへ向かってきていますから、お二人は早く敵を捕まえてくださいまし！』

プライベート・チャンネルでセシリアが会話に入ってくる。

話の通り、こちらのメンバーは敵の捕獲に向いている。敵を無力化しつつ、牽制しつつ、動きを止められるのだ。

「そうだな…そろそろ聞き出すか。お前のIS、アメリカの第2世代機の『アラクネ』だろう。どこで手に入れた？」

「誰が言うかよ、ばアか」

「…そうか。私にも、尋問の心得は多少ある」

「俺にも、な」

「何…？」

「この俺の…いまやIS学園最強とまで言われるコチヨコチヨ、なめんなよ？」

「てめえの方がなめてんだらうがあー！」

時守が両手の指を器用に踊らせる。

中学の頃から改良を重ね、ここIS学園でも数多の被害者を出してきた時守のくすぐりが、オータムに襲いかかろうとした、刹那。

「っ！セシリア標準！ラウラはそいつ見張りながらヘルプに回れ！」

『了解っ！』

「…ほっ、…よっ！」

3人のハイパーセンサーが遠方に新たな敵を捉えた。

その敵はラウラをロックし、いきなりエネルギー弾を撃ってきた。集中力を必要とし、なおかつエネルギー兵器にあまり効果がないAI

Cの解除を目的としたものだと、3人は一瞬で判断した。

時守の指示の元、セシリアはライフルのスコープを敵機へと向け、ラウラは『越界の瞳』を発動。そして時守は瞬時に『完全同調』を発動させ、エネルギー弾を撃ち落とすと同時に、敵機へと突っ込んだ。

「誰やお前。まだまだちっちゃいガキンチョやんけ」

「……国連、代表か……」

「なーんで俺はその愛称で親しまれてるんかねえ」

『剣さん！お気をつけてください！その機体はイギリスの最新機、第3世代IS『サイレント・ゼフィルス』ですわ！』

「……へえ、てことは被害にあつたんはイーリのとこだけちゃうってことか……」

セシリアから入った通信より、自分の目の前にある機体も奪われた機体だと分かった。

そして、あのセシリアが気をつけろと言った。さらに、イギリスの最新機ということ、操縦者の態度、表情……。

時守の額に、わずかだが嫌な汗が流れ始める。

「…ビットは、増えてる感じ？」

「それはな…自分の目で確かめろっ！」

「くそっ！」

敵のセリフとともに、セシリアのブルー・ティアーズのビットよりも多い、六基のビットが解き放たれた。

（やばいな…。よりにもよってビット使いかよ。流星にもうそろそろ、身体がもたんぞ…）

時守の懸念は、実力差よりも、自らの身体にかかる負担の大きさにあつた。

先ほどの更衣室での『アラクネ』の装甲の爆発。一見、時守が『双龍』によるシールドでその衝撃を消していたように見えたが、実はそうではなかった。足だけでは踏ん張りが足りないため、身体と機体の支えにランペイジテールを加え、対抗する威力を上げるために翼部スラスタを噴射させていたのだ。

その時の莫大な衝撃により、身体の節々や筋肉、内蔵に更なるダ

メージが蓄積され、なおかつ高レベルの演算を必要としたためかなりの頭痛が頭と身体を蝕んでいるはずだ。

現在も『痛覚遮断』を用いているが、それも肉体が動いてくれなくなれば意味がなくなってしまう。

「この…、具現一閃！」

中距離でひらりひらりと躲しつづける敵に、具現一閃を振るう。まるでゲームに出てくるホームニング弾のように迫ったが、触れる寸前、またひらりと避けられる。

「こんの…：うっ…：ぜえ！」

「はあっ！剣さん、大丈夫ですか!？」

「ああ。…ただ、六基つてのがウザすぎるわ。…ってあぶね！」

時守の元へと飛翔してきたセシリアがフォローにまわるも、敵はその優れた操縦技術を駆使して2人を攻撃し続ける。

六基のビットで時守を、自らが構えるライフルでセシリアを狙い、引き金を引く。

ビットが時守の周りをまるで先を読むかのように移動する。だが、それが優れているのは時守も同じ。ビットの動きの先を読み、なんとか敵の懐への侵入を試みる。

追撃するビットから放たれたエネルギー弾をランページテールで叩き落とそうとした、その時だった。

「はあ!ぐっ、…クソが…！」

ビットから放たれたそれが、意思を持つかのように曲がり、背中に2発命中した。

その瞬間、時守とセシリアの2人は脳内から1つの答えを導き出した。敵の実力がどれほどのものかを知ることができるとの答えを。

「…セシリアのビットをライフルで壊す…さらにはフレキシブル、か。…なんでセシリアが使えるんのお前が使えるんやろな」

「な、なぜあなたがフレキシブルを!？」

「…別に、ビット適性がAでないからといって、偏向射撃ができないわけではない。それにな、一つ言わせてもらおうと…」

フレキシブル
偏向射撃

放ったエネルギー弾を途中で曲げることができるといふ反則級の技術なのだが、理論上は可能で、現状誰もできない…はずだった。

目の前の少女がやってみせたのだ。ビット適性がAのセシリアにはできない偏向射撃を、やってみせただけでなく、当てて、ダメージを与えたのだ。

言葉の追撃として、少女は続ける。

「私は遠距離はどちらかと言うと苦手だな。…近距離の方がやりやすい！」

「こんの…！」

「セシリア！回避しろ！」

「…っ!？」

「はっ、所詮はただの一般人か！」

「グツ…、やつ…べえわ…！」

瞬時加速で時守に肉薄した敵は、構えていたライフルを収納して拳で攻撃をしかけてくる。セシリアに気を取られ、さらには奇襲だったということと敵の技術の高さから、じわりじわりと時守のSEが削られていく。

その一方で、六基のビットをセシリアの方へと向かわせ、硬直している彼女を囲う。その球体の中からセシリアを逃がすまいと、薄く弾幕を張る。

ビットに狙われるセシリア、そしてそれを阻止しつつ、敵と相対しようとする時守。…もちろん、今の時守には無理があるのだが。

『完全同調』、130%

「何っ!?!ぐっ、この…ちよこ、まかと!なっ、ぐうっ!?!」

リミッターを壊してしまえば、どうということはない。

コアを暴走させ、わざと意識に侵食させる。無理な機動による自爆のダメージは増えるが、それと同時に色々な物が吹っ切れた。

例えば―

「ハッ…こんなもん、余裕のよっちゃんや」

「…えっ?け、剣さん?今…何を?」

「アン?...別に、ただビットぶっ壊しただけ、…や!」

理性、感情、性格、などの時守の内側を形作るものだ。

『出来るだけ被害を最低限』にしつつ、『敵を撤退、もしくは撃破する』ためだけに、金夜叉は動く。

至近距離にいた敵を、人間では有り得ない動きで避け、吹き飛ばす。その後、ミシリ、という身体の嫌な音に耳を貸すことなどなく、セシリアの元へと全力で飛び、彼女を囲うビットを破壊した。

「正気か貴様…。自我を放棄するなど…」

「アア？何でもかんでもてめえのものさしで測んなや、ぶっ殺すぞ。…ふっ！」

「…ふんっ、そうか。なら…貴様の後ろで呆然としているそいつらを狙わせてもらおうか！」

再び標的を変え、全速力で接近する時守の後ろへと、エネルギー弾が飛ぶ。

自分を超えるビットの操作をする者が現れ、さらに愛する人が豹変した姿を目の当たりにし、硬直するセシリアへと、駆けていく。

「クソがア!!」

「何だと!？」

「け、剣さん!」

「師匠!」

普通は、追いつけないのだ。放たれたエネルギー弾にISが後から追いつこうなど、無理な話なのだ。だが、時守は今それをやってのけた。

急な方向変換と同時に、骨や内蔵を傷つけながら。

加速すると同時に、身体中に数多の裂傷を作りながら。

弾き飛ばすと同時に、右腕を折りながら。

「あ?…痛ないわ、こんなもん」

時守が左手を、装甲をそのままにして右の二の腕へと持っていく。ごきり、と。嫌な音が宙に響いた。

彼を除く3人が、敵味方含めて驚愕の表情を浮かべる。表情を一切変えることなく途中で折れた右腕を直線に戻すところを目にしたのだから、当然といえば当然だろう。

「な、何を…?」

「師匠っ!ここは一旦!」

「大丈夫」

夫。そう言おうとした時だった。

「あ…?クソっ、マジかよ…」

時守の視界が、ぐらりと揺れた。それと同時に、身に覚えのない謎の浮遊感に襲われた。

「っ!ラウラさん!剣さんはわたくしが!」

「ぐっ、…ちいっ!この…ぐあっ!」

時守のISが、空中で解除されたのだ。

その瞬間、各人が一斉に動き出した。セシリアは落ちる時守を助けるために。敵は、オータムを奪還するために。

今回、ようやく敵とまともに戦うことになったラウラだったが、敵の優れたビット操作とライフルによる狙撃に、その数発をモロに受けてしまった。

ビットの相手をするということもあり、ただでさえ薄くなっていたAICへの集中力が、そこで完全に途切れてしまった。

「迎えに来ましたよ、オータム」

「てめえ…!」

「話は後で」

有無を言わさぬスピードで、あっという間にラウラからオータムを奪った敵は、一瞬で見えなくなる距離まで飛んでいった。

「ラウラさん、追わないのですか…?」

「…ああ。敵は相当の実力者だしな。何より、まだ潜んでいる敵がいるかもしれない。そんな中、私が単独で行ったところでどうなるかは分かりきっている」

「…そう、ですか…」

不本意ながらも、敵を見送るラウラの元に、腕に時守を抱えたセシリアが降りてきた。その表情は優れないながらも、しっかりと彼を抱きとめている。

ふと、ラウラはIS学園の方へと目をやった。

ISを装備し、飛んでくる同級生に、駆け足でこちらへと向かってくる上級生、教師が目に入った。



「ラウラ！大丈夫か!？」

「…嫁…。あ、ああ。私は、大丈夫だ」

「…私は？…ってことは…」

陸を走ってきた一夏が、真つ先に私の心配をしてくれる。恐らく、先程までの通信から、私が最後まで戦っていたことを知ったのだろう。そこは嬉しく思う。…だが…。

一夏が辺りを見渡しはじめた時、セシリアに支えられていた師匠が膝から崩れ落ちた。

「ゲホツ、ゲホツ!…ガツ、…ぐ、…はあ…!」

「剣さん!？」

「お、おい剣!」

見渡していた一夏や私含め、ここに駆けつけた者全員が駆け寄る。左手を地面につき、口から血を吐く師匠の元に。

「くそ…、ちよつと…やりすぎた…っぽい?」

「お、お前…!全身ボロボロじゃねえか!」

「ははっ…、い、いてて…。ちよいと訳ありでな、ちよつと本気でやるとうこうなんねん」

そう言つて立ち上がり、師匠は笑つた。…だが、他の者はただその表情を暗くするだけだった。特に、師匠の嫁達は。

「ま、何はともあれ、守るもんは守れたな」

はっはっはー、と、今度は声を上げて笑つた。…なんと言えば良いのか、分からない。今ここにいる教官でさえ、苦い表情をしている。ボロボロで、血を流し、右腕には折れた痕跡がありながらも笑う師匠に、かける言葉がない。

と、私も俯きそうになった、その時だった。
パアンツ!!

「……え？」

「何が…っ！何が守れたのよ！全然、全然守れてないじゃない！」

鈴が、師匠の頬を引っぱたいた。それも、軽くではなく真正銘全力でだ。

「いや、鈴…」

「…あんた、今の自分の身体見て、守れたってほんとに思ってるの…？」

「…それは…」

「…その血だらけの身体と顔で…っ！その痛みで戦闘すらできない身体で、何を守れたってんのよ！」

「…お前、それ…」

「なんで、あんたは…、誰にも…頼んないのよ…。ゴーレムの時や、臨海学校の時とは違って、今回は周りに皆いるのに…」

目尻に涙を溜める鈴の言葉は、私達の心を代弁したかのようなもので、師匠に重くのしかかった。

「あんたはただ、周りを傷つけないからそうしてるのかも知れない。でも…、でもそれであんた自身が傷ついてちや元も子もないでしょ!?あんたが傷ついていくのを、ただ見てるだけのこっち側の身にもなりなさいよ！」

「…嵐、その辺にしておいてやれ。こいつも相当やばい状態だ。先に医務室に連れていくべきだろう。…それに、こいつに色々言いたいのはお前だけではないからな」

激昂し、師匠のISスーツの胸ぐらを掴みんで怒鳴る鈴を、教官が止めに入った。今やるべきは説教ではなく治療だと判断されたのだろう。

そして、最後の言葉を聞き、ここにいる私も含めたメンバーの顔つきが変わった。…確かに、言いたいことは、ある。

私も、セシリア達も、嫁達も、そして、教官達も。



あれから数時間がたった。

学園祭は終わりを迎えたつあり、校内を賑わせていた来賓や招待された客達も帰り始めていた。

ほとんどのクラスが片付けに追われているであろう今、俺達は医務室にいた。

「…剣くん、その…」

「身体のこと、か？」

「…うん」

楯無さんが力なく頷く。その隣では簪やシャルロット、セシリアも不安そうな表情を浮かべている。

「更識、今回の件に関しては私にも問題がある」

「え？」

まさか千冬姉が話すとは思っていなかったのか、楯無さんは疑問の声を上げた。

「…すまない。時守が傷ついてしまったのは、私の監督能力不足のせいでもある。薄々異変には気づいていながらも、こいつのオーバークワークを止められなかった」

「…オーバークワーク…」

千冬姉が言ったそれが、俺も楯無さんも、簪やシャルロット、セシリア、ラウラや箒、鈴もが知らない、剣が傷ついていた原因だった。

「…ほんまは、知られることなく治すつもりやってんけどな」

「だから言っただろうが…。バレれば、辛いのはお前だと…」

「剣くん…」

「…ごめん。便利やと思って使った『完全同調』の痛覚遮断があかかったらしいわ。一夏の零落白夜はSEを、俺の完全同調は俺自身の身体を蝕む諸刃の剣…ってことや。…ま、色々と強化しすぎたら、やけどな」

ベッドから上半身だけを起こし、ギプスが巻かれている右腕を左手で撫でながら、剣は自嘲気味にそう言った。

俺と違い、剣は単一仕様能力を完璧に扱えていると思っていた。…けど、実際は違った。剣自身、その強すぎる単一仕様能力に振り回さ

れていたんだ。

「大丈夫…なの？」

「…ああ。しばらくの間安静にしながら、緩い運動を続けたりじわじわ回復していくらしいわ。…やから、命に別状はないで、簪」

「そっか……。良かった…」

楯無さんの横で、簪の表情が安堵に変わる。確かに、心臓に負担をかけすぎて止まる、なんていう事が無くて良かった。

「時守、100%まででは対応できなかったのか？」

「…間に合わんかったら、下手し死者が出てた…って判断したんすよ。相手に判断する余裕を与えてしもたら、IS学園に弾撃ち込まれてたかも知れませんし」

「そう、か…。金夜叉が途中で解除された原因は分かるか？」

「SEを減らされすぎたのに加えての高速機動、やと思います。修理から帰ってきたら設定ちよつと弄りますわ」

「…それはお前の勝手だな。…さて、お前達も言いたい事があるだろう？」

そう言つて、千冬姉は俺達にも話す機会を与えてくれた。

…え？いやそれよりも俺は剣のさっきの発言が気になったんだが。

「剣つて、自分で機体弄れるのか？」

「ちよつとした設定ぐらいならな。いくらIS学園の教師陣や整備科の先輩でも、流石に最重要機密を見せるわけにはいかへんしな。…つてか今それ聞くんかい」

「…本当に、大丈夫なのですか？」

「ああ。…つて言つても、襲撃とかが無い限りやけどな。…つて泣かんといてくれると助かんねんけど…」

「うう…つ、ぐすつ…。だつて…だつてえ…」

「うん…、ほん、とに…ぐずつ、よがつだよお…」

剣の返事を聞いて、セシリアとシャルロットの目から涙がこぼれ落ちた。普段とは全く違う様子から、俺達以上に剣を心配していることが分かる。

本人の口から安否が確認できたからなのか、ラウラや鈴、箒も剣に

何かを聞こうとし始めた。

「…師匠。単一仕様能力、『完全同調』の本当の正体とはどういったものなのですか？」

「んー…。悪いけど流石にそれは話せへんわ」

「…なんでよ。あんな目にあつて、こんな思いさせて」

ラウラの問いに対する剣の対応に、鈴がむすつとした表情で呟いた。…な、なんか態度とかが怖いんだが？

「え？だってそりゃ、将来世界最強を競い合うかも知れへん奴らに手の内全部さらけ出すとか、そんなアホなことするわけないやん」

「…あ、あー。ソウイウこと…」

「…そ、そういうことかー。ナ、ナルホドナー、流石は師匠だ」

剣があつげらんかんとした態度でそう答えると、ラウラと鈴は何故か少し片言になりながらそう返した。気の所為か、奥の方でシャルロットやセシリア、簪達が冷や汗をかいているように見える。

「…剣、その…」

「ワンオフにはたーちゃんは関係ないで、モツピー」

「っ！な、なぜ私が言おうとしたことが…」

「顔に書いてあるわ。どうせ、お前のことやから、また姉さんがー、姉さんがー、あの鬼がー、って思ってるんやろ？」

「うっ…、そ、それは…だな…」

「確かに機体をくれたんはたーちゃんや。…でも、それを今の状態に進化させたんは俺や。…ってかもしたーちゃんに責任があつたとしてもモツピーのせいちゃうやん」

「そ、そう…か。…すまない、余計な気を使わせてしまった」

「ま、こんぐらいのことであの姉の楚楚を気にしてたら3日ぐらいで胃痛で死ぬわ。普通は」

「…ま、まあその通りだな。…ね、姉さん…3日…、ふふつ、だ、ダメだ…！お腹が…」

「…ふつ、ふふふつ…。束の、楚楚…っ」

「どんなツボしとんねん2人も。あ、あと何笑ってるんすかちつふー先生。アンタだつてあの人のこと言えんでしょうが。こないだ

だって卵焼き作ろうとしてフライパン斬ってた癖に」

「ちよ、時守っ!!」

医務室の一角は、いつの間にか、剣を中心とした笑顔の溢れる空間へと変わっていた。

…ただ、一つだけ言わせてくれ。

「…千冬姉、一体何十個目の犠牲を出したら気が済むんだ？」

「い、いや…その、アレだ。一夏。これには深い訳があつてだな…」

「へえ…。そつかあ…」

千冬姉、そういうのだけは弟として許せねえわ。

◇

「あー、しんど」

ぼふんと、音を立ててベッドが沈み、ぎしつ、と音を立てて軋む。

あれからさらに数時間が立ち、学園祭は表面上、無事に終了した。『各部対抗織斑一夏争奪戦』は、見事うちの部、つまりは生徒会が制した。

いや、流石に観客参加型劇の参加条件が生徒会への投票とかエグい。自動的に票集まるとかマジでビビった。俺の中学ん時の選挙のしんどさはなんやってん。

ちなみに、一夏の生徒会での立場は庶務という名の雑用である。各部へと派遣とか、のほほんがやると危ういような仕事のサポートなど。…まあぶっちゃけ学園祭は大した問題も無く終わったのだ。

…そう、学園祭は、だ。

「ぜつつつたい、怒ってるよなあ…」

俺の目下の問題は、現在シャワーを浴びている刀奈の機嫌である。

奇跡的に今日中に、右腕にギプスを巻きつつも退院できた俺だが、俺が自分の怪我よりも気になっているのが刀奈である。医務室で途中から俺のことを無言で見つめていた刀奈だったが、それは食堂でも、そしてこの部屋に戻ってからでも続いた。

その理由が俺が身体のことを黙っていたからだということとは分

かっている。

どうしよかし、どうなるかし、と考えていると、浴室から聞こえるシャワーの音が止まった。

「…剣くん」

「は、ハイ…」

「…話が、あるわ」

「お、おう…ってオイオイオイ!? 服は着よ!? いつもパジャマ持っていつてるやん!？」

浴室から出てきた刀奈は、バスタオルで大まかな水気は取ったのだろう、バスタオルを首にかけ、ベッドに座る俺の目の前まで躊躇うことなく進んできた。

いつも脱衣場に持っていつているはずの、白地に青いドットのパジャマも着ておらず、たまに着る白いバスローブも、見慣れ始めた彼女の勝負下着もそこにはなく、あるのは完璧なプロポーションを誇る刀奈の裸体だけだった。

「…私、怒ってるのよ」

「はい…」

「…と、言うわけで。ん、しよ…つと」

「あ、あの…刀奈さん? 流石にそれは…」

「私は、怒ってます。…えいつ」

「い、いふあいいふあい。はなひてや」

俺の膝の上に向かい合うように座った彼女は、俺の頬を両手で引っ張った。

少したつた後、頬から手を離れた彼女は、今度は俺の背中へと両腕を回した。

「…本当に、心配したのよ…」

「…ごめん」

「…これから、無茶しないって言うのは信じてる。私たちはもちろん、織斑先生やみんなも目を光らせると思うから…」

「…うん」

「…でもね、私は、なんで剣くんがそこまで頑張るのかが知りたいの。

…なんで、身体がボロボロになっても、強くなりたいのかが、知りた
いの…」

彼女の言葉を、受け止める。わずかに震えるその声色に、自責の念
がこみ上げてくる。

「あー…、そのー。…ただ、舐められへんようにするためって言ったら
…怒る？ただでさえちつふー先生とかカナがコーチに付いてくれて、
国連の人らも俺にめっちゃ力になってくれるし。…そんなやつが、
いくら稼働時間が短いって言っても候補生レベルに普通に負けてた
ら話にならんやろ？」

「……ん。分かったわ」

「…え？もうええん？」

意外にも、彼女は笑って許してくれた。

泣かれても仕方が無い、なんならぶん殴られても…それぐらいには
思っていたのだが。

「ええ。なんとなく、剣くんから聞いたかっただけだから」

「…そっか」

「と、言うわけで。今日は一緒に寝ましょ？」

「…え？いや、俺今ギプスしてるし…」

「それは、こう…すれば大丈夫よ」

「おい」

まさか俺の上のパジャマの中に入ってくるとは思わなかった。

確かに、確かに俺のパジャマは体に比べてややだぼついたものにし
ているので、少しくらいなら空間はある。

でも人は無理やろ。

ラウラとか鈴やったらまだ分かる。…だが、今これをしているの
は、あの刀奈なのだ。

「…当たってる」

「んふふー、ただ寝るだけだから、今日はダメよ？剣くんが私の背中に
手を回したら、右腕が固定されるでしょ？この状態だと寝返りしにく
いし」

「せ、せめて下は履いてや…」

「…すう…すう…。すぴー」

「いや、絶対寝てないやろこれ…。…ま、いいか」

いつの間にか俺の肩に頭を預け、寝息を立てている刀奈を起こさぬように、左腕が下になるようにしてベッドに寝転ぶ。本当に寝ているのかは分からないが、刀奈がパジャマの中で回している腕の力が強くなった。

「ん……。すう…」

「最近、朝起きたら直ぐ走りに行ってたし。たまには、な」

思い返せば、ここ数日、寝起きの時間を刀奈と共有出来ていなかったことに気づいた。ダメージに気づかれなかったためか、それともさらに鍛えるためだったかは自分でも分からないが、無意識のうちにそうしていたのだろう。

「んく…。えへへ…」

「カワイイやつめ」

可愛らしい寝言を言う刀奈を見て、諦めてこの体勢のまま寝ることに決めた。

夜、流石にあの状態で暑くなってしまう、俺も上を脱いでしまったから、2人でさらに汗をかくことになってしまったのは、言うまでもない。

閑話　　〜第一次世界〇〇大戦〜

「——だから、ここはこうなる訳だ。…織斑、先ほどから頭を抱えているが…復習しておけよ?」

「はいい…」

とある平日の5限。昼食後にいきなり千冬が受け持つ授業がある1年1組では、いつも通りの雰囲気です。授業が進んでいた。

「あと…10分といったところか。では最後に、この作品を…時守。簡単にまとめてみる」

「ういーつす」

千冬に指名され、席を立つ時守。

現在の授業、現代文で扱っている小説の内容も終わりに近づき、授業自体もまとめに入ってきている。

授業が終わりに差し掛かり、最後のまとめになぜコイツを指名したのか、という声が彼の地元の知り合いから上がりそうだが、そんなことは千冬が知る由もない。

『門の変などに変なババアいたわす。やべ、何とかして着物剥いで逃げたけどキモいからどつかいこーつと』で、どすか?」

「……お前は…芥川を馬鹿にしてるのか?」

「いやいやいや、してるわけじゃないですやん。簡単に、って言われたから簡単にしたんすよ!」

「そう、か。ところで時守、前から気になっていたんだが…」

「はいい…」

IS操縦に収まらず、世界有数のレベルの高さを誇るIS学園で、学力までも学年トップクラスをキープし続ける時守があっさりと答え終えたことにより、授業の終了時間までにかかなりの時間が残ってしまった。

こういう時に教師の取る行動は主に3つ。

一、授業を延長して次の範囲に進む。

二、雑談の時間にする。

三、『早いけど……』までにしておきます』と職員室に戻る。

自身も元IS操縦者であり、勉強との両立が精神的にかなりの負担をかけることを知っている千冬は、極力『一』を選ばない。かといって、『三』にしてしまえば、騒がしくなり隣の2組に迷惑をかけてしまうかもしれない。

よって千冬はこのような場合は大半、『二』を選ぶのだ。

「お前のそれは本当に敬語…なのか？」

「は？いや、そうに決まっていますやん」

「…試しに、今のを標準語で言ってみろ」

「ええ…う…まあいいですけど」

どう変換するのか、それを思案する時守に、彼以上に集中した視線をこの教室にいるほとんどの者が向ける。

関西人に標準語を喋らせるとどうなるのか。

この議題で、時守以外の生徒や教師間は度々盛り上がっていた。文面にするのには何も不自由は無い。だが、実際口にしてみるとどうなるのか。至極どうでもいいことだが、気になって仕方無かったのだ。

「えつと…」

「…どう、した？」

「いや、いけました。いきますよ？」

「ああ」

すう、と息を吸いこみ。

「そうに決まってるやん」

ただの関西弁を発した。

「…それは関西弁だ、馬鹿者。ただ敬語が抜けて悪化しているだけではないか」

「え、ほんまっすか？いやー、標準語なんて使う機会無いんで…」

「大有りだろうが！」

「ちよい待ってくださいいちっふー先生。それには俺にも異議がありません」

「何…?」

くだらない議題に似つかわしくない世界最強と国連代表の真剣な面持ちに、いつの間にかクラス全員も会話に集中する。

「なんで関西人が標準語使わんとあかんねん、ってことっす」

「まあ、一理あるが…如何せん分かりにくいのでな」

「どこが分かりにくいんすか!めっちゃ分かりやすいですよん!」

「いや、お前…。それ本気で言ってるのか?」

「もち!」

「では、『この本はとても面白いから、1度読んでみた方がいい』という文を関西弁で言ってみろ」

「これやばいで」

「分かるわけ無いだろうがそんな言い方で!」

ここでついに千冬の怒りが爆発した。彼自身、決して語彙力が低い訳ではないのだが、会話となると全く違ってくるのだ。

「だって、会話ってことは本見せてるんでしょ?一々そんな長く言うんめんどくさいですよん」

「…まあ、これはまだいい。酷いのは道案内だ」

「俺以上に分かりやすい道案内とかありませんやん」

「逆だ馬鹿者」

「悪い、俺も織斑先生に賛成だ、剣」

「私もだ」

「すまない師匠。…私も、だ」

「あ、あはは…僕も、かな?」

「すいませんが…わたくしも…」

「なん…やと…?」

予想外の方向からのダメージに、思わず狼狽える。あのラウラはまだしも、箒や一夏、拳句、セシリアやシャルロットにまで通じていなかったとは思わなかったのだ。

「嘘やろ…?あんな懇切丁寧な道案内ないやろ…」

「じゃ、じゃあ剣。試しに『そこを右に曲がってください』って言ってみろよ」

「あつこを、こう」

「言葉だけ聞いて分かるわけないだろ…」

「これは…ひどいな…」

一夏と千冬、姉弟揃ってため息をつかれた。

「え、嘘。じゃあ『なんきんの炊いたん』とかも通じひんの？」

「南京のタイタン？なんだそいつ」

「人ちやうわ！食べもんや！」

「関西人タイタン食うのかよ…。ってかタイタンって実在するのかわ？」

「どの家庭にも出てくるやろ」

「関西怖え!!どの家庭もダンジョンかよ！」

「通じない、理解できない、そもそも知らない。様々な要因が絡み合
い、その結果。」

「フランス語の発音の方がしにくいのだ！シャルロット！」

「酷いよラウラ…。日本ではドイツ語がちよつとオシャレみたいな扱
い受けてるからって…」

「そうですね！だいたい、日本で長く使われているのは英語！イギリ
ス発祥の英語なのですわよ！」

「ふんっ、変に訛っているイギリス英語と比べるな」
「なんですって!?!」

第一次世界言語戦争が始まった。

「英語の方がいいですわ！日常で使う単語も、文法も楽なのですわよ
！」

「関西弁ぐう聖」

「うーん、フランス語ってそんなに発音しにくいかなあ…」

「関西弁ええで」

「シャルロットが先ほど言っていただろう！今の日本ではドイツ語の
方がカッコいいのだ！はいろんぱ！」

「論破になってませんわ!!」

「ここは日本だ。それに校則にも原則日本語とあるだろうが馬鹿者
共。…ん？」

大きくなつた騒ぎを収めようとした千冬が、とあることに気づいた。

「どないしたんすか？ちつぷー先生」

「いや、関西弁も日本語だと思つてな」

「当たり前やないつすか」

「何を私は意固地になつてお前に標準語を使わせようと思つていたのか、と気づいたのだ…」

「十年以上関西弁しか喋つてこゝへんかつたのにいきなりやれ言われでも無理つすよ」

「それもそうか」

こうしてこれからも、時守剣は関西弁を使い続けるのだった――。



「なあ真耶、知つてるか？」

「はい？」

「モテたいがために似非関西弁を使うとな、関西人に殺されるらしいぞ」

「ええ!?本当ですか!？」

「ああ。時守から聞いた。イントネーションが違う、関西弁喋る私かわいいと思つてるぶりっ子、関西人馬鹿にしてんのかボケ、等と思われらしいぞ」

「…この前の合コン、酔つて使つちやいました…」

「…ちなみに、関西の人は？」

「いました…。2人…」

「…今日は、呑むか」

「……はい」

「ま、いぎとなつたら誰か貰つてくれるぞ」

「そう…、ですかね」

「…ああ。き、きつと。多分、な」

「……私、決めました」

「ん？何をだ？」

「ふっふっふー。…ナイショ、です」

「…なるほど、時守が苛立つ理由が何となく分かった気がする」

「何ですかあ!？」

原作6巻 キヤノンボール・ファスト編

祭りの後に残るのは思い出と筋肉痛

「あん？イーリが敵を取り逃した？あんな獲物のためなら何でもしそうな地を這うゴリラみたいなんが？…あ、今の本人に言わんといてや。マジで、いやマジの方で。いや、軽装備のナタルが負けるってのはまだ分かんねんけど…、もしかしてアイツら？…やっぱそっすかりよりよー、氣い付けとくわ。はいー、あーい」

通話を切り、もたれかけていた廊下の壁から背中を離す。

足を目的地へ向け動かすも、俺のその足取りは重い。脳裏を掠めるのはあの学園祭での出来事、亡国機業の襲撃事件だ。今の連絡も、アメリカにある『イレイズド』という地図に乗ることのない軍事基地が襲撃されたという国連からの報告だった。下手人はもちろん亡国機業。目的はIS『銀の福音』の強奪。件の事件により、初期化されたコアを使っている福音の方が勝手が良かったのだろう。結果としては、福音は奪われなかった。奪われなかった、のだが。

「…まさか、イーリが倒しきれへんとはな…」

俺にとって、ISの強奪よりも気になるのはそっちの方なのだ。

こういった事件の防止のために、各国の主要な施設にはその国の最新ISとそれに見合う操縦者、国家代表クラスの人間を数人程配置している。イレイズドは中でもトップクラスで、警備も最高峰。駆り出せるISも多く、操縦者も決して表に出ることはないがアメリカ指折りの人物が多い。聞けばイレイズドを襲撃し、逃走したのはたったの1人だという。

世界中であまりにもこういう事件が増えれば、各国代表を収集して掃討部隊が組まれるとは思うが…。

「てか負けんよ。何しとんねんマジで。サボっとつたんか？」

とりあえず、勝ち逃げとか許すわけない。後もうちよいやのに。

「おっ。おかえり、剣。何の電話だったんだ？」

「ああ。ちよつと友達が怪我したでー、って電話」

「…大丈夫なのか？その人」

「ダイジョブダイジョブ。体の丈夫さと気性の荒さだけには定評のある奴やから」

「後の方は定評があつてはいけないのではないか？」

一夏、箒と軽口を叩き、席に着く。

昼食を直ぐに食べ終え、一服していたところに、先ほどの電話が掛かってきたのだ。報告以外にも結構長く話していたとは思うのだが、全員が全員、律儀に待っていてくれたのだろう。一夏、箒、鈴、セシリー、ラウラ、シャル、簪、カナの8人が俺が席を外す前と同じ並びで座っていた。

だが、律儀に待っていてくれたというのは少し違うみたいだ。

「で、どないしてんラウラ。んなあからさまにほつぺた膨らませて」

なにやら怒っているようなラウラに一声かけ、茶を煽る。

テーブルの上を見ると、カナや簪、シャルロットにセシリーといった面々が食事を終えているのに対し、箒や鈴、一夏にラウラはまだ皿に多くの料理が残っていた。はっはーん。

「4人揃ってう〇こ行つとったんか？」

「違う!!この2人が嫁の誕生日なるものの日を教えてくれなかったのだ！」

「9月27日やったっけ？」

「覚えててくれたのか？」

「覚えてた、やな。『苦9.27になれお前の人生』って覚え方便いやで」

「どんな語呂合わせだよ…」

「ひどい覚え方ね」

そんなん言われても困る。覚えやすいねんもん。

「てかその日ってキャノボやん」

「そ。だからキャノンボールファストが終わって、4時から一応始める予定なんだ」

「ほーん。ええよなー、みんな。専用パッケージやら展開装甲やらあつて。あんなんあつたらめっちゃ速なるし。もう勝負見えてるどころか決まってるやん」

「…金夜又つて、パッケージ無いんだっけ…?」

「せやでー、なんでも仕様やら装備やら分類やらの話でなー」

「そーいやす。金夜又のそういうのって、どうなってるんだ?」

簪からの問いに答えると、ふと、一夏からそんな言葉がでた。

思い返せば、俺との会話でそう言った話になったことはほとんどなかった。それこそ、金獅子を手に入れた直後と、金夜又に二次移行した時ぐらいだろう。一学期はまだ解放しきれていない武装もあったので、それなりに制限のキツイ守秘義務が課せられていたのだ。

「仕様は『可変式ジャベリン』で、装備はランペイジテール2本とオーララウンド一本。分類は『全距離蹂躪型』やとさ」

「ぜ、全距離蹂躪型…?」

「そ。ランペイジテールぶん回しながら気に入らん奴をオールラウンドでフルボッコにしていくねんて」

「怖すぎんだろ」

「一撃でワンチャン死ぬかもしれへんワンオフとどっちが怖いねんアホ」

言うたら猪突猛進な死神が襲ってくるようなもんやん。

「でもまあ?今度のキャノボじゃ?エネルギー効率の問題から?『零落白夜』使えへんから?何の脅威でも無いんですわあ」

「使おうと思ったら使えると思うんだけどなあ…くっそお!なんで皆はワンオフ無いんだよ!」

「嫁よ。ワンオフが軽く発動できないからこそ、第3世代だぞ?」

「あ、そっか」

アホやろこいつ。適当に煽った結果がこれやしな、ほんま、いじつてて飽きひんわ。

「そーいやアンタのワンオフは制限無いんだっけ?」

「せやで。ま、言うて単発だけやったらそこまで強いわけちゃうしな。縛るんはラグナロクぐらいにはなりそーやし」

「機動よりは攻撃重視なんだね」

「機動重視に切り替えたとしてもいつもとあんま変わらんからな」

「いつもと変わらないのか…」

「それはそれでやりにくいですわ…」

あれ、何でや。箒とセシリア以外にもなんかめっちゃ嫌そうな顔されてんけど。

「なんでそんな顔すんねん」

「師匠、自分の戦績を覚えていないのか？」

「楯無さん以外、ほとんどお前に攻撃当てられてないんだぞ？」

「機動が売りやのに当てられたら逆に俺が困るっつーの。代表が代表候補生に負けるとかあったらめっちゃ怒られるわ」

まあぶつちやけ怒られるだけじゃすまへんと思う、とは口にしないでおく。今じゃ国連代表候補になる条件があるわ、しかもめっちゃキツイわ、やからなあ。

「んで、キャノボの訓練とかはいつすんの？」

「そろそろ高速機動の授業があるから、それぐらいだな。授業で分かんかったところをラウラに聞いたりする」

「へー。なるほどねえ」

「ね、ねえ…剣…？そ、その、キャノンボール・ファストには…」

「ん？出るで？…大丈夫や、飛ぶのがメインやし、何より…」

不安げに俺の顔を覗く簪の頭を優しく撫でる。

簪の言いたいことも分かる。これ以上、怪我をしてほしくないと願ってくれているのは本当に嬉しく思う。でも、今回は本当に大丈夫なのだ。

「言うたやろ？もう、勝負は決まってるって」

そう、キャノンボール・ファストの勝者は、もう決まりきっているのだ。



「なあカナ」

「んー？」

「なんでさつき何も喋らんかったんー？」

「年長者からのアドバイスが無い方が皆成長出来るかなーって」

「なるほどなー」

昼食の後、俺は久しぶりにカナと部屋でごろごろしていた。他意は無く、本当にただごろごろと、のんびりとした時間を過ごしていた。

「あ、せや」

「んー？」

「今週末どつか行くか？」

「行くっ！もうっ、どうして剣くんはいつもそういうことをいきなり言うのよ」

「わ、悪い悪い…」

隣で横になっっているカナの方を向いて、外出を提案すると、凄まじい勢いの寝返りと共に賛同された。

「あ、もしかして、一夏くんの誕生日プレゼントを買いに行くの？」

「え？…あ、あー、せ、せやでっ！」

「剣くん…」

「わ、忘れてないし…。ほんまに」

なぜかジト目で見られた。解せぬ。

仰向けになり、心の中で密かに一夏へのプレゼントを考えていると、身体に軽い衝撃と柔らかい感触が同時にやってきた。天井から下へと視線を向けると、純真無垢な笑顔を浮かべた刀奈がいた。

「何してんの？」

「抱きまくらく。んふふ、剣くんの匂い」

「かわいい奴め…、うりやうりやっ！」

「きやつ、もうっ！やーめーてーよー！」

可愛い(確信)。可愛くないのだろうか、いや、可愛くないわけがない(反語)。可愛い(断定)。カワイイ！(建前)カワイイ！(本音)

刀奈への可愛いの五段活用を心の中で終えたところで、意識を再び彼女に戻す。ちなみに、これが簪に対するものならば俺以外に刀奈の分が上乘せされ、倍の十段活用になる。可愛い可愛い、と2人で言い続けてたら顔を真っ赤にして走って逃げられたのは記憶に新しい。

「ねえ剣くん」

「ん？」

「もう、痛くないの？」

「…あー。まあ、日常生活では痛まんない。流石にちっふー先生とスパーリングとかしたら痛いとは思うけど」

「そんなの誰でも痛むわよ。…というより、痛いので済むわけないでしょ？」

「せやな。…やから刀奈とこうしてても何の問題もないでー！」
「きやー！ー！」

刀奈と抱き合い、2人でベッドの上を転がり回る。

「け、剣…、いる？…って昼間っから何してるのさー！」

「んー？おー、シャルー」

「あら、シャルロットちゃん。どう？一緒にごろごろする？」

「むう…。…します」

その後、俺の週末の予定を聞きに来たシャルも加え、3人でごろごろし続けた。

久しぶりに、IS学園に平穏が訪れようとしていた。



「訪れてへんやんけ」

「はい？どうかしましたか？剣さん」

「いや、別に何もなくて」

時は数日ばかり流れ、場所はIS学園第2アリーナ。そこに、7機の専用機が佇んでいた。

白と紅は、限られたスペースではあるが既に軽い模擬戦を始めており、橙と黒、そしてやや赤みがかった黒は地に降り、何やら話し込んでいる。

そんなら機から少し離れた所に、金の走る黒と青がいた。

「で、や。セシリー。…ここんとこずっと元気なかつたんって、やっぱアレか？」

「…っ、はい…。そうですわ…」

金の走る黒——俺の問に、青——セシリアは苦々しい表情を俯かせながら答えた。

数週間前から、セシリアが誰にも言わず、ただ一人黙々と訓練を続けていたのは、フレキシブル：いわゆる、偏向射撃の成功のためだった。

本国イギリスから実弾兵器の使用不許可を通達された彼女は、もちろんエネルギー兵器の特訓に明け暮れた。以前から知っていた最高難易度の技術の一つである偏向射撃。それをもって、最近勝率が下がり気味である模擬戦を、何とか改善しようとしていたのである。

だがそこに、世界最高クラスのビット適正を持つわけでも無いにも関わらず、偏向射撃を見事使いこなしていた亡国機業の敵が現れたのだ。

なんと言うか、まあ、可哀想なほどに不憫である。

「ま、やから俺が見ることになってんけどな」

「：シャルロットさんたちも、よく分からないとおっしゃっていましたが：剣さんは分かりますの？」

「何となくは、な。要はビームを曲げるコツやろ？」

「そうですねど：。っ、ま、まさか本当にご存知なのですか!？」

「お、落ち着け落ち着け。俺もよう知ってるわけやない。ただ、できるっただけや。見ててみ?これを、こう、して：。死ねカスっ!」

「おわあああああつ!?!あ、あつぶね!!」

「ひいつ!剣っ!お、お前!どこに狙いをつけているんだ!あ、危ないではないか!」

セシリアの見本になるよう、『オールラウンド』を展開して適当に振り、超適当な所へ『具現一閃』を放ち、強引に一夏と箒が模擬戦をしている場所へと曲げた。

「とまあ、だいたいこんなもんや」

「なるほど」

「なるほど、じゃねえよセシリア!頼むからこっちにビットとライフルを向けないでくれ!」

「そもそも剣とセシリアでは得物が違うではないか!」

「あ、せやな」

せや、それもあるんか。とは言え、元々理論上は可能やから適正トップやったらできるやろつてのも変な話やねんけどな。言うたら理論上は人は飛べんねんから一番胸筋のある奴に段ボールで作った羽持たせて飛べつて言うてるみたいなものやし。

『……もう、終わり？』

「おー、簪ー。悪い、まだもうちょいや」

『ふふつ、安心してね。私と簪ちゃんがしつかりとデータ取りしておくから。セシリアちゃんも、固くなりすぎないように、ね？』

「…分かってますわ…。自分でも、考えすぎだと言うことぐらい…」

管制室でデータ取りを引き受けてくれている簪とカナからの通信に、セシリーは顔を俯かせて答えた。

セシリーが本格的に根を詰めて訓練を開始したのは、丁度二学期が始まってから。つまり、第二形態移行した俺と一夏の機体、金夜叉と白式・雪羅との模擬戦が始まってからである。

彼女の二学期からの戦績は、お世辞にも良いものとは言えない。一学期まで専用機持ちの中でぶつちぎりの最底辺だった一夏に負け越し、地道に地力を上げつつある鈴とシャルロットにも良い結果は残せていない。たーちゃんお手製の第四世代IS『紅椿』に対抗しようにも、技術は上なのだが火力の差で快勝することができていない。となれば、地力で負けているラウラや簪にも簡単に勝てるはずがなく、カナ戦に至ってはセシリーのペースに持っていく方が難しくなっている。まあつまり、セシリーは現在かませ犬になりかけているのだ。

そんなこと断じて許せん。誰か一人が負けてばかりだと、こちらとしても辛いものがある。

「セシリア」

「はい…」

「賭けかも知れへんけど、試してみるか？」

「っ、何を…ですの？」

俺のその一言に、彼女は暗い表情を少しだけ明るくして、顔を上げた。

「短時間で、一気に成長する方法や」

「え、そ、その…、本当にあるのですか？」

「ああ。俺や一夏も、そうやって強なった。一気に、な」

この方法、皆には周知のものなのだが、なぜか皆がやろうとしない。
…いや、できない、のだろう。

「一夏さんと剣さんと言えば…、ま、まさか…」

「せや。そのままかや」

第二形態移行。それが出来れば苦労はしないだろうが、頼りはそれしか無いのだ。この世界で短時間で一気に強くなれる手段など、限られている。さらにこのISにおいてなら、その方法は形態移行に絞られてしまう。

「で、ですが…」

「まあセシリアの言いたいことも分かる。あんなん、狙ってできることちゃうしな。…でも、それに近づくことならできる」

「近づくこと…ですか？」

「…もつと、今の自分を信じてみる。それだけで、変わるもんもある」
別に、第二形態移行に成功しなくてもいい。ちよつとしたことを変えてみるだけで、ISというのは大きな成長を得ることがある。物理的に少し変えてみる、というのは簪の得意分野であったりするのだが、少しメンテナンスを行うだけで機体そのもののパフォーマンスが格段に向上するといったことは、何ら珍しくない。

「…そう、ですわね。分かりましたわ剣さん。もう少しだけ、自分自身と向き合ってみますわ」

「ん」

彼女が俺の手助けを必要としないのなら、俺は無理には手伝わない。もちろん、命の危機などの時は問答無用に助けに行くが、本人が自力で頑張りたいというのなら、そうさせるのが一番だ。

だが、セシリアだけがそれをする、というのは少しだけ違うのだ。自分自身と、自分達自身と向き合う必要は、俺達全員にもあるのだから。

束の間の休息

「何が…どないなっとなねん…!」

とある土曜日の朝、食堂で新聞を握りしめながら、俺は唸っていた。広げられている新聞に目を落とせば、スポーツ欄に載っている選手達
が嬉しそうに騒いでいる。

「DeNAマジック点灯やと!?!」

「一体朝から何の話してんのよ」

「ん?お、鈴。おっす」

「ん。座るわよ」

「おう」

セ・リーグの結果という、他の専用機持ちにとってはそこまで重要な事ではない記事に驚嘆する俺の向かいに、鈴が座った。その手には朝食が乗っているであろうプレートがある。…にしても。

「サラダにヨーグルト、アサイーって…」

「な、何よ…」

「お前乙女か」

「乙女よ。失礼ね」

せやったな。こいつも一応乙女やったな。…でもな。

「残念ながらまだそれやったら乙女ちゃうわ」

「自分から言つといて何言つてんの?アンタ」

「俺のメニューの方がまだ乙女」

「:はあ。じゃ、何食べたのよ」

「季節のフルーツと野菜ジュース」

「あんまり変わんないじゃない!!」

「そうか?」

サラダとフルーツやったらいぶちやうと思うけど。味とか、後は形とか。

全くもう、とぼやいた鈴は手を合わせ、サラダを食べ始める。乙女とか言っておきながらかなりのハイペースで食べ進められているそ

れは、瞬く間に器の底を見せ始めた。

「食うの早すぎやろ」

「そう?…ごちそうさま。セシリアとかは?」

「4人で秘密の特訓やと」

「へえ…。アンタは大丈夫なの?」

「何が?」

「いや、何がって…、キャノンボール・ファストの高速機動演習よ。一夏から聞いているけど、あんまり自主練とかしてないんでしょ?」

「あー、まあなー」

鈴の言う通り、俺は数週間後に迫ったキャノンボール・ファストに向けて、あまり訓練という訓練は行っていない。

最近の主なメニューは軽い機動の確認と機体の調整、コースを確認しながらのイメージトレーニングなどといった、非常に肉体に負担のかからないものになっている。もちろん、セシリア達からの要望やちっふる先生からの命令と言うのもあるが、俺自身キャノンボール・ファストに向けてそこまでの訓練をする必要がないと感じたからである。

「むっ…。何よ。訓練しなくてもアタシたちに勝てるって言いたいのか?」

「別にそうは言ってへんやん。ただここで急ごしらえみたいに高速機動演習する意味が無いってことや」

「ってことは…、やっぱ夏休みにしてたの?」

「ああ。たつつぷり、とな」

時間にしておよそ250時間。夏休みに入る前、福音と戦った時、すでに代表候補生として数年ISを動かしていたセシリアが20時間だったことを考えれば、馬鹿みたいに近い数字である。

「ちっふる先生が引退したせいだな、機動部門も格闘部門も総合部門もどの国でもアホみたいに代表鍛えてんねん」

「あ、そっか。千冬さん引退したんだったわね」

「そのせいで俺もアホみたいに鍛えることになってもてん」

「なるほどね。だから今更付け焼き刃みたいに鍛える必要が無いって

こと?」

「そゆことそゆこと」

故に、俺にとって数週間前だからといって猛特訓するのは、テスト前日に徹夜で勉強するのと同じようなものなのだ。

「てかさ、お前は大丈夫なんか?」

「えゝゝ、な、何が?」

「何が? ちゃうわ。高速機動演習や。まだ中国からパケ来てへんねんやろ? そろそろ来るんちゃうん?」

「あ、あゝゝ。そーいやそんなこと言つてたよーな気がゝゝ」

鈴が遠い目をしだしたのを見て、俺は手元にあるパックのいちごオレの残りを吸う。

「てかはよ練習行けや」

「は、はあ!?! もうちよつと他に言い方ないの!?! しかもあんたにだけは1番言われたくないし!」

「ワンサマが箒とかラウラ侍らせてんで」

「アイツのことは今はどうでもいいの!」

「いや、どうでもいいってゝゝ」

「ぶつちやけ雪羅も零落白夜もない一夏なんてキャノンボール・ファストじゃなんの脅威でもないのよ。アンタもそう思うでしょ?」

「まあな。でもあいつ変に本番に強いから若干怖いつてのはある」

「あゝゝ。ま、何でか分かんないけどそれが一夏なんじゃない?」

「何やねんそれ」

ズゾゾゾと音がするまでパックを吸い続け、吸い終わると同時にテーブルに戻す。そんな単純なはずの動作に、目の前にいる鈴はやたらと視線を向けてきている。

「どした?」

「ふえつ!?! い、いやゝなんでもない、けどゝゝ」

「そか。んじゃ、俺もう行くわ」

「そ、そうゝゝ」

何でそんな反応すんねん。アレか? 俺がいちごオレ飲んでたからか?

そんなテキトーな考えを抱きつつ、目的地へ向かうために席を立つ。

「あ、せやせや。言うん忘れとったけど」

ふと、何となくだが言いたいことができたので、一瞥する。

「俺は、お前にも一夏にも、負ける気は無いからな」

「…は、はあ？アタシも負ける気なんて無いけど…なんで急に？」

「何となく、や」

再び鈴に背を向け、右の手をひらひらと振る。

「さてと…。いっちょやりますか」

◇

「そういやさ、ラウラ。お前今キャノボの予想どうなってるか分かる？」

「む？それは、本命や大穴という意味で、ですか？」

「そうそう」

その日の放課後、シャルとセシリア、簪に声をかけられた俺は、当初の予定を変更してアリーナに足を運んでいた。

当初の予定といっても、軽い調整がてら『金夜叉』でわちやわちやする程度なので、居てもいいと言われるのなら俺は喜んでこっちの訓練に参加する。

「確か…、本命が師匠と簪、対抗に私とシャルロット、鈴、セシリアで穴が簪、大穴が嫁だったような…」

「うげ…、俺本命かよ。胃い痛なるわ」

「…」

「い、いや。冗談、冗談やからその疑いの目やめてくれへん？」

ラウラの目から、本当はそんなこと微塵も考えていないのだろうという意思がひしひしと伝わってくる。機体の速度自体はそんなに速くないねんからそんな目しやんといてほしい。

「てか後一週間やってんな。初めて知ったわ」

「どれだけ興味無いんですか！」

「きよ、興味無いとかちやうくてな？普通にまだ時間あると勘違いしててんで。いや、ほんまに」

そのせいでカナとシャルとのデートが先送りになってしまったのだ。キャノボ許すまじ。

「…ということはもしや嫁の誕生日プレゼントも用意していないのでは？」

「んげっ…。忘れとったわ…。時の流れる早いこと早いこと」

「師匠…」

「白ブリーフでえっか」

「師匠！…このっ…！」

ふざけてたらレーゲンのゴツゴツした拳で殴られました。

ちよ、やめいラウラ。さつきからゴインゴイン言うてるし、隣にいる簪もずつと苦笑いしてるやん。

「うえーん、簪ー、ラウラが虐めてくるー」

「え、そ、その…うん。…とりあえず、『完全同調』…解除して？」

「え、なんで？」

「…し、『完全同調』発動してたら…なんか怖い」

「こ、怖っ…」

「あつ、ぐ、ごめんね…」

とりあえずラウラから逃げるために簪の元へと『完全同調』を発動させて駆け寄ったら怖がられた。

危ない危ない…。簪に怖いなんて言われたことなかったから今一瞬死にかけたで…。

「…それで、剣。今日は…その…訓練するの？」

「おう。鈴とかにはあんましやらんって言うたけど、やっぱ軽く練習ぐらいはしとかなあかんしな」

「…む？ならなぜ私は呼ばれたのだ？」

「え？暇そうにしてたし、後は実験台として？」

「じ、実験台!?…あ、なるほど。私が遺伝子強化試験体であることと掛けたギャグですね！」

「いや、そんな重っ苦しいギャグ流石によう言わんわ…」

ラウラがポジティブすぎてほんま涙ちよちよぎれるわ。なんでラウラってこんなメンタルになっただけやろ。転校してきた時はこんなんちやうかつたのになあ…。誰のせいやろ。…俺かあ…。

「…ねえ、剣。…剣がラウラと飛んでる間…。私は何をしてたらいいの…?」

「んー…。直視映像で動きを簪に採点してもらってもええねんけど…。やっぱええわ。月曜の授業で山田先生に見てもらおうしー…。んー…」

「師匠。本番ではなく、ただの訓練にも関わらず、何をそこまで悩んでいるのですか?」

「ん? ああ。それはな、本番までのお楽しみを考えてるからや」

俺のその言葉に、2人とも揃って首を傾げた。

IS学園専用機持ち組『お人形さんみたいランキング』トップ2を占めるこの2人によるこの仕草は、男として、そして師匠として少し来るものがある。…師匠としてって何やねん。



「ではお前達。今日も先週に引き続き高速機動についての授業だ」

1組担任、ちっふー先生の声が第六アリーナに響く。

この第六アリーナは、一体何が目的で高くしすぎたのか分からへん中央タワーと繋がっており、高速機動演習が可能となっている。

ぶっちゃけそのせいでここが借りにくいのは言わないでおく。申請に行くと『高速機動演習するの!?!』と聞かれ、そこから広まり、ただの模擬戦をしようと思っても高速機動演習目当ての観客がアリーナの客席にちらほらと出てくるからだ。

「ちなみに山田先生は今日から数日、アレがアレなのでアレだ」

「やっぱりやまやんも女の子ってことかあ…」

「結構重たいって本人から聞いてるし、仕方ないよね」

「私達が入学してからもたまにあつたし…。まやちゃんってもしかして…貰い手いないんじゃない?」

ちっふー先生のその一言により、俺の先日の計画がパーになってしまった。山田先生無念。

ここ、IS学園は俺とワンサマと用務員さん1人を除く全員が女子と女性である。ゆえに、『女の子の日』と称される日のための対策も、しつかりと取れている。生徒はもちろん、教員にもバッチリと対応している。…まあ俺にはあんま関係無いねんけどな！

「時守、更識姉が今月まだ来ないと言っていたが？」

「……………は？……………へ、…え？……………へえん!？」

「…ふんっ、冗談だ」

ふぎけんな。マジでふぎけんな。今のはいくら天下のちっふーでも許せん。しかもプライベートチャンネルでこっそりとか、リアルすぎて多分5秒ぐらい心臓止まったわ。

「では、先週オルコットと織斑にやつてもらったことを、今週は時守と…」

「あー、俺すか」

「先週から言っていただろうが！んんっ…。それと、この授業だけ特別に講師として参加してもらおう、2年2組のフォルテ・サファイアの2名にやつてもらおう」

「よろしくッス、後輩達!」

いつの間にかいた、鈴やラウラと同じぐらいちんまいのが、そこにいた。

「おっすフォルテ」

「うっす剣ちゃん。てかいつまでたっても敬語使わないんすね」

「そりゃあ……………フォルテやからな？」

「なんすか今の間は！なんで疑問形なんすか!」

「2人とも、少し静かにしろ。お前達も知っているとは思いますが、この2人は代表と代表候補生だ。時守は言わずもがな、サファイアは代表候補生だが2年だ。専用機持ち達にも学べることはしてくれるはずだ。なあ？フォルテ」

「う、ウッス…」

マジ蛇に睨まれた蛙。…いや、両者ともちよつと違うな。繁殖期の

ライオンに睨まれたカタツムリ、ぐらいか。

「では、時間も惜しいことだ。そろそろ準備しろ。スリーカウントの後、2週して来い」

「え、そんないきなり?」

「ああ」

◇

「…よし、位置に着いたな?」

「ウーツス。ってか剣ちゃん、ISSってそんなだったっすか?」

「変わってん。スーパーサイヤ○からスーパー○サイヤ人2に何のと同じ」

「ほえ。…ん?てことはめっちゃめっちゃ強くなってるんすか?」

「さあ?」

「…準備は、いいか?」

千冬姉の背後のどす黒いオーラに、2人はスタート地点で直立した。

今、離れて見ている俺達よりも数メートル離れた地点に、2人はISSを纏って立っている。剣は『金夜叉』、フォルテさんは彼女の専用機である『ゴールド・ブラッド』で器用に敬礼し、額に汗を流している。「…なぜあの方が剣さんと…。先週に引き続きわたくしでも良かったのではありませんこと?」

「ま、まあまあセシリア。観客視点で剣のレースを見れるって考えたら?」

「…それは、良いことですね…。せっかくなのですか、二人きりで飛んでみたかったですわ…」

「剣ならきつと、放課後にでも一緒に飛んでくれるよ」

「はっ!そ、そうですわね!」

シャルロットの言葉に、セシリアは表情を明るくさせる。

やはり、自分の恋人である剣とは一緒に飛びたいのだろうか、シャルロットも時々頬を緩ませてにへらく、と笑っている。

「織斑」

「は、はいっ！」

剣の話題で盛り上がっている2人を、箒やラウラと見ていると、背後から千冬姉に声をかけられた。その声色は怒っているものではなく、普通に話しかける時のものだったが、驚いてしまった。

「他の専用機持ち達にも言えることだが、直視映像でどちらか見たいほうの世界を見ておけ。サファイアのチャンネルは299、時守のは003だ」

「ちなみに、織斑先生のおすすめは？」

「そうだな…、ボーデヴィツヒ。たまには年長者の世界を知るということも大切なことだと、私は思う」

「はっ！分かりました！」

聞けば、俺達専用機持ちちは2人の様子を直視映像という、ISを通しての映像で2人の視界をみることで、観察できるらしい。

千冬姉に言われ、セシリアやシャルロット達もフォルテさんのチャンネルに合わせている。

「では、後数秒で始める。お前達も準備しておけ！」

「ウーッス」

「へーい」

声を大きくしながら2人に呼びかけ、千冬姉は離れていった。

ほんの少しだけの、ちよつとした出来心から、俺は剣のチャンネルに合わせた。

「では行くぞ。…3、2、1…、行け！」

「どんな掛け声ッスか！」

「よっ、とおー！」

—その瞬間、視界が金色に染まった。金色のもやが晴れ、青空が見えたかと思えば、先週の俺とは全く違う視界が広がった。

(なん、だ…？これ…。全然、違う…)

俺とセシリアが先週やった時のような段階がある加速など一切無く、2人とも一瞬で音速を超え、かつその状態で瞬時加速を連発していた。

(それ…だけじゃない…。この、この世界が、『完全同調』の世界…) 今、俺の視界は、剣の視界とリンクしてかつて経験したことのないようなものになっている。後方にいるフォルテさんの腕や足、目や頬などの筋肉にズームしながら、前方の空気の流れや気圧の変化を読んでいる。そして目の前に見えるウインドウには、数秒見続けるだけで気持ち悪くなってしまうような程のおびただし数のコマンドが、出たり消えたりしている。

「あー!!せこいッス! 『完全同調』使ったらやばいんじゃないんスカ!?」

「無茶せん程度やったらOKらしいねんてー」

「んじや凍らせるだけッス」

「ほわっ!?ちよ、空気凍らすとかえげついつて!」

ふざけているような雰囲気を出しながらも、2人はその巧みな操縦技術で飛行を続けていく。ふと、直視映像を切って周りを見てみると、そのレベルの高さはみんなにも伝わっているようで、あの筈ですら口をぽかんと開けていた。

「こんの…っ、どっかいけチビ!」

「はあ!?誰がチビッスか! 剣ちゃんのバーカ、バーカ!!」

「んやとゴラボケカスウ!!」

「この馬鹿者共が…!」

ため息をつくと同時に、千冬姉が遠くの2人を睨む。千冬姉の視線の先では、フォルテさんのISから放たれた冷気が空気を凍らせ、その行方に居る剣がその氷を一切見ることなくひらひらと躲している。「時守! サファイア! 次の1周は本気でやれ! 私が手を抜いていると見た瞬間、どうなるか分かっているな!!」

「ヒイっ!」

「…、ういーっす…」

あつという間に1周を終えかけた2人に、千冬姉が怒号を飛ばした。

それに対してフォルテさんは顔を青ざめ、短く悲鳴を上げ、剣は仕方が無い、といった風に一度頷いた。

「剣ちゃーん。そろそろっスねー」

「おう。せやな」

俺達の目の前まで戻ってきた2人が、旋回のために減速する。まるでドリフトのように空中で旋回しつつ、2周目を迎えた。

「んじゃ」

「行くっスか」

—瞬間、凄まじい轟音と共に、2人の姿が俺達の視界から消えた。



「ふふっ…、素晴らしいわ。Mr. トキモリ。…まさかあの領域にまで届きうるとはね」

「うーん、流石にちよいと予想外すぎるし…。やっぱしあの子達、居る？ぶっちゃけ試作品だし、調整機能も何も付いてないガラクタ同然だけど」

「ええ。貰えるのなら貰っておくわ。…正直、彼相手にMだけでは少し不安なもの」

某国某所、彼女達は嗤う。

「さてさてー、久しぶりにちーちゃん観察日記を更新しますかー!」

「うふっ…。本当に、ここまで楽しみなことは生きててそうそう無かったわ…。ああ、早く…貴方に逢いたい…」

歪に口を歪ませて…。

最速の決戦

「ふいり、すつきりしたー。でつかいのでたわ。いやマジで。バナナ二本。…聞いてんの？ワンサマ」

「なんで大会当日に快便の話なんて聞かないやならないんだ…」

「だってシャル達着替え行つてんねんもん」

「お前この話女子にするつもりだったのかよ!!」

「え？」

「えっ…？…あれ？俺が間違つてんのか…？」

「そうなんちやう？」

キャノボ当日、俺とワンサマは男子便所前でだべっていた。端から見たらやたらぴっちりしたスーツを着た変態みたいな男子高校生がいかかわしいことを企んでるように…見えへんか。服装が変態なんは事実やけど。

「にしてもアレだな」

「ん？」

「楯無さんってマジでスゲエな」

「そりやな。代表歴で言えば今IS学園にいる中で一番長いし」

「歴、かあ…」

「まあ密度にもよるけどな。あとはその他もろもろ」

ぶつちやけ競技というのは大体が、長さ、密度、その他もろもろ、この三つで勝敗が決まると俺は思っている。

「てかあいつら遅くね？」

「…そうだな。いくらなんでも遅すぎる…。つ、ま、まさか！」

「便器詰まつたんか！」

「違えよ！襲撃とか、そういうのだから！こういうイベントなんだからあつてもおかしくないって今朝千冬姉も言つてたじゃねえか！」

「織斑先生だ、馬鹿者」

「ふげっ!？」

男子便所前に降臨した元世界最強。…字面がひつどい事になって

るのは置いておいて、全身を黒スーツに包んだちっぷー先生が、いつも通り見えない程の速度でワンサマの頭を出席簿でしばいた。

「あ、せや。ちっぷー先生」

「なんだ？」

「その出席簿って何でできてるんすか？その腕力で何回しばいても凹みもせえへんって…」

「何って…形状記憶加工済みのプラスチックだが？」

「…どこ産？」

「……兎だ」

「oh…」

「そんな何かを悟ったような顔をしないでくれ…」

左手で顔を覆い、天を仰ぐちっぷー先生。曰く、とある日にいつも通り出勤したらいつの間にかすり替えられていたらしい。

「で、お前達はここで何をしていたんだ？」

「ああ、セシリア達待ってたんつす」

「オルコット達ならこの階の女子便器が詰まっていたからもう少し遅くなるぞ」

「マジで詰まってたのか!？」

「ああ。このキャノンボール・ファストはIS学園の学生が近くで見れる数少ないイベントだからな、卒業生やら受験生やらが見に来ているらしい。そのせいで詰まったそうだ」

「受験生なら勉強しろや」

「…息抜きぐらいさせてやれ」

ちっぷー先生から現在の観客席の状況を伝えられ、それに反応したところ、ため息をつかれた。

いや、要らんやろ。むしろ倍率1万超えてるIS学園受けるのに休憩とかしてる場合ちゃうと思うねんけど。

「時守。お前、優勝は狙いに行くのか？」

「え？いや、まあそりゃ出るんやし、狙いにいくっちゃいますけど、何で今？」

「なんとなく、だ。そら、早く行け悪ガキ共。お前達も便器を詰まらせ

るような真似はするなよ」

「あ、それなら剣が詰まらせたから2人で直しておいたぜ」

「お前らも詰まらせたのか!!」



「うえーい」

「…うえーい…」

「…えつ、乗ってくれんの簪だけ…?」

「み、皆が皆お前みたいに緊張していない訳ではないんだ!」

「いや、モツピー絶対剣道の決勝とかの方が緊張してるはずやろ…」

「そ、そうだと師匠! 師匠も緊張しているかも知れないが、私は師匠以上いきんちやうしていいりゆのだじよ!」

「ラウラ…」

「ラウラさん…」

「はあく…ラウラ、かあいいよお…」

「アンタだけおかしいわよ、シャルロット」

「…なんか皆いい感じにリラックスしてるなあ…」

「お前には言われたくないわ」

あれから、セシリア達が俺達のところに合流し、ちっふー先生のツツコミ祭りが開かれた。いやあ、人ってどんな才能が隠れてるか分からんもんやな。あのちっふー先生にまさかツツコミの才能があるとは思わんかったもん。鍛えられた肺活量からなる無限のツツコミ。鍛えられた肉体による神速の動き。そして初心な本人による多彩な表情。ほんまにおもろかった。簪なんか俺の影に隠れて地面叩きながら爆笑しとったぐらいやし。その後ちよつと絞られてたけど。

「みなさーん。そろそろレースが始まりますから、スタート位置に付いて下さいねー」

「うーい」

山田先生の指示に従い、地面のマークに沿ってスタートラインへと移動する。…はっ!?

「山田先生のあだ名考えんの忘れとった!!」

「それ今考えること?」

「…ちやうな。大丈夫やって、シャル。そんな目せんでも。ちゃんと、全力で勝ちに行くから」

「…うんっ。なら、良し。僕も負けないからねっ!」

俺の方に満面の笑みを浮かべるシャルを見て…ふと、思った。優勝してにこやかに微笑みながらドヤ顔のシャルと、優勝を逃して悔しそうに頬を膨らませ、目尻に涙を溜めるシャル。どちらの方が可愛いのか。簪とセシリーの分も含めて6回ぐらいキャノンボール・ファストやりたい。…めっちゃ急にやる気出てきた。

『それでは、ただいまより1年生の専用機持ちによるレースを開催します!』

無事、ハウリングすることなく山田先生のアナウンスが場内に響いた。…何ていうか、あの人こういう公の場ではミスらへんねんな。

周りの7人全員がスラストを点火させる中、俺は1人ホバリングを続ける。…まあ『完全同調』あるから事前準備もクソも無いしな。

周りの7人が高速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下げる中、俺はぼーっと宙を見ていた。…『完全同調』のおかげで普通のハイパーセンサーを高速機動用にちよちよいと調整することぐらいは試合中にでもできるし…。

そんな風に、周りと比べて少しぬぼーっとしていた俺を尻目に、シグナルランプは点滅する。

3…2…1…。

『ゴーツ!!』

え?…何でぬぼーっとしてるんかって?…そんなん。

『あぁつとー優勝候補筆頭、時守選手!スタートで大きく遅れてしまいましたあー!』

「よしっ!スタートで引き離れたぞ!」

「い、いや待て一夏!逃げろ!これは…畏だ!」

「…レース物、ってかこのキャノボはな、後手必勝や」

最初から出遅れるのが狙いやからに決まってるやん。

皆がスタートしてから数秒後、『完全同調』を発動させると同時に俺もスタートする。これにより、先頭集団7人を、俺1人が追従するという形になるが、これこそが俺の狙いなのだ。

「あのなあ…、ブラインドショットとか後ろ向きながら攻撃するとか、そんな慣れへんことするよりも…」

「する…よりも?」

「後ろから1人ずつ落とすの方が確実やろ?」

「えげつねえこと考えてんな!…つくソ、皆、まずは距離を取るぞ!」

先頭の中でも後方にいた一夏が、全員に声をかける。元々のお人好しからなのか、それとも落とされた機体の巻き添えを嫌ったのかは分からないが、その一声によって7機が散り散りに分かれた。

「おー、めんど。ランペイジテール、二本展開」

「はあっ?! 『完全同調』中は展開できないんじゃないの!?!」

「それは『金夜叉』が要らんって思って最初に省くだけや。…後で俺が要ると思ったら展開ぐらいできるわ。…操作だるいけど、なっ!」

「ぐっ、!相変わらず蛇のように動く…!」

「ちよっ、なんで狙いがアタシ達なのよ!」

けど、そんなこと気にせず鈴とラウラをランペイジテールで攻撃する。狙いはただ一つ。このキャノンボール・ファスト用に調整されている『甲龍』と、ランペイジテールに似た鬱陶しい武装『ワイヤーブレード』を積んでいる『シュヴァルツェア・レーゲン』を早めに潰しておきたいからだ。

箒や一夏の機体は論外として、シャルとセシリア、簪の機体は後方への強襲にあまり向いていない。…つて言っても俺見解やけどな。それに引き換え、鈴の今の『甲龍』は高速機動中の横になった体勢でも前後左右への衝撃砲が可能であり、ラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』はワイヤーブレードを後ろで適当に振り回すだけで後方への抑止力となる。

まあつまりは運要素と危険因子を排除する目的でこの2人なのだ。

「悪いな、それは終わってから話すわ」

「ふんっ!アタシも、ただで負けてないって、のっ!」

「それは私も、だっ！」

やはり予想通り、前方から衝撃砲とワイヤーブレードが飛んでくる。…が。

「掛かったなアホが！『オールラウンド』、モード双龍！」

「んなっ！」

「くっ…！し、しまった…！」

「へっへー。相手の行動を狭めてから嵌めるってのは、勝負でもよう使われる戦法やろ？」

オールラウンドを前方で回転させ、衝撃砲を弾くと同時にワイヤーブレードを絡めとる。これでラウラを落とせる、と思っていたのだが。

「…ふう。危ない。もう少しパージするのが遅れていたら落されるところだった」

俺が絡めとったワイヤーブレードを瞬時にパージすることで俺の元に手繰り寄せられるのを回避。この決断力は流石は軍人といったところか。

「悪いな、嫁よ。私も勝負ごとには勝ちたいのでな！」

「お、おいラウラー！」

さらに、機体の隙間を縫うようにして前方に出ようとするラウラ。俺と物理的にも距離を置き、さらにその間に少しでも遮蔽物を置くことで俺からの攻撃を避けるつもりなのだろう。…非常にいい考えだ。最も、俺だけに対しては、の話だが。

「邪魔ですわよ！ラウラさん！」

「わざわざ私たちの前に出てきてくれるとはな…。ラウラ！まずは、お前からだ！」

「ちいっ！師匠の次はお前達か！」

最前を突っ走っている筈とセシリアがそれを良しとする訳が無く、ラウラへの猛攻を開始する。…後ろから見ている限り、その3人以外の、シャル、一夏、簪、そして現在進行形でランペイジテールの餌食になっている鈴は、俺の更なる追撃に備え、前方への攻撃よりも後方への防御に力を注いでいるようだ。

「…っ、…、はあ…」

「…一夏も、攻撃したいならすればいいのに」

「えっ!?か、簪さん…。何で俺の考えてること分かったんだ?」

「…顔に書いてあるから。でも、今ここで攻撃するのは正解だと思う」

「えと…じゃあなんで簪さんは攻撃しないんだ?」

「…安全地帯を自ら崩す馬鹿はいない」

先ほどから、何かをしようとしているのかは分からないがそわそわしすぎている一夏を見かねて、簪が声をかけた。

現在、簪は丁度ひし形の真ん中にいるような状態になっている。頂点にラウラ、その次にセシリアと箒、真ん中にシャルと簪と一夏、その後ろに鈴、そして俺、という順だ。

「…前と後ろで潰し合いをしてくれるなら、漁夫の利を狙うのは当たり前…シャルロットもそうしてる…」

「あ、あはは…バレちゃった…」

「何呑気に話してんのよ！ちよつとは助けなさいよお！」

「…今の話、聞いてた?」

相も変わらず、ランペイジテールを『双天牙月』で弾いている鈴が簪に助けを求めるも、簪は答えない。…今は、頂点を決めるレース中なのだ。好き好んで敵を救う者などそうはいないだろう。

「…ん?…おお、そろそろか。『オールラウンド』、モード具現一閃」

「んげっ!?アンタなんでこんなタイミングで!?!」

「前も俺らもこんな膠着状態だったら、レース進まんやろ?」

レースも一周が終わろうとしており、順位はさほど変わっていない。作戦通りに行けば間違いなく1位にはなれると思うが、ここは念には念を入れて、早めに抜きにかかる。

だが、突如として飛来してきた光線に、動きを止めてしまった。

流星にまざいと、思ったが、どうやらレースの展開ではなく、別の意味でまざいようだ。

「…サイレント・ゼフィルス…!」

どう見ても先に行かせてくれなさそうな存在が、背後に太陽を携えて、俺達を見下ろしていた。

「ふっ…。いくぞ、凡俗共…！」

　　獰猛な笑みとともに突撃してきたその背後から、無機質な物体が俺の元へと飛来した。

「お前達の相手はこの私だ…。さて、国連代表…」

　　全部で4機、以前とは姿も形も、恐らく仕様も全く異なるそれは、あの意味俺のトラウマとなっている存在だった。

「お前の相手は、そのゴーレムⅡ達だ」

這い出る狂気

「え……な、何？急にどうしたの……？」

少女、五反田蘭は困惑していた。レースをしてしている選手達の会話と、レースの内容についての実況と解説の声が観客席のスピーカーから流れており、2周目に入ると共に時守の手によりレースが大いに動かされることを知ったのだが、視界には、突如現れた謎の蒼い蝶のようなISに、一夏達が攻撃されているという、今も信じられない光景が広がっていた。

『緊急事態発生、緊急事態発生！観客、来賓の皆さまはスタッフの指示に従い、落ち着いて避難してください！繰り返します。緊急事態発生――』

「き、緊急事態……ひっ……！」

何が起きているのか分からない内に、周囲の人間が慌ただしく、悲鳴を上げながら避難という名の暴走に巻き込まれかける。

「わ、私も……きやつ！」

周りに釣られ、自分も急いで避難しようと立ち上がったところ、足がもつれてしまい、前方に倒れそうになる。その体を、通路で指示に当たっていた楯無の手が支えた。

「大丈夫かしら？」

「は、はい……」

「全く……困ったものね。とりあえず、今のままだと危ないから……こっち来て」

「へ、えっ……」

返事をさせてもらえないまま、蘭は楯無に引っ張られる。人波をかき分け、『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた金属製の重い扉の先へと連れていかれる。

「さて、と。ごめんなさいね。おねーさん、これからやらなくちゃいけないことがあるから、誰かに何か言われたらIS学園生徒会長にここにいろ、って言われたって言ってね。じゃっ」

「あ、あのっ……行っちゃった……」

せめて何か一言、と思ったが、その思いは口から出る事は無かった。年や立場は違えど同じ生徒会長。それ以前に、家系の問題もあり、仕方の無い事なのだが、そんなことを知る由もない蘭は、少しの無力感に襲われた。今、自分の立場が被害者であることは間違いないのだが、それでも、少しでも行動できたはずなのだ。自分のように、躓いてしまった人もいたかもしれないし、もしかしたら怪我をした人間がいるかもしれない。

「夏さん、大丈夫かな……。わ、私も、頑張らなくちゃ……」

想い人への心配が募ると同時に、理想と憧れ、そして義務感にも似た欲望が強くなる。



「…なあおい。お前、さつきコイツらのことなんつた？…って、んな余裕ない、か」

「クソツ！馬鹿、な……。短期間でこれ程のレベルアップなど、ありえるはずが…」

「レベルアップ…ねえ、レベルなんざ大して上がってへんわ。ただ、戦い方を変えたらそれなりには変わるやろってこつちや」

『箒、そのまま『空裂』と高速機動で相手を翻弄しろ。簪はそのフォロ、箒に当てへんようにな。セシリア、一矢報いたいのに分かるけど今は我慢や。…一夏、おもっクソ『雪片式型』でぶん殴り続けろ』
『了解っ！』

突如として現れた謎の機体―サイレント・ゼファイルス―と相對する4人に、再び指示を出す。

「つうかよ、Ⅱって付けるんやったらもうちよいスペック上げてこいや。ちよつとちよつちやくして基本スペック上げて、んで俺のトラウマを狙ったんかは知らんけど、自爆の威力上げて…もうちよい他にすることあったやろ」

「余裕ね、劍」

「…とは言え、正直拍子抜けだね。高速機動用の装備の僕たちでも止

められるんだから」

「あ？そんな当たり前やろ。…コイツらはただの機械やからな」

1対4の戦闘を繰り広げている5人から少し離れた場所にいる俺、鈴、シャルの3人に、一機の無人機が接近する。

「敵意向けてくる機械に与える情けなんざ、俺は持ち合わせてへんわ」
俺に向け、右手が振り上げられたのを見て、瞬時加速で背後に周り込み、右肩を外す。右肩から下が機能を停止したのを確認し、即座に右手で相手の頭を鷲掴みにし、左腕に左回し蹴りを喰らわせる。2度喰らわせたところで折れたようなので、今度は背中に右蹴りを喰らわし、前に吹き飛ばす。

「ん、頼むわ」

「はい」

「よっ、と」

相手が無防備で飛んでくるのに合わせ、シャルがマシンガンで敵の胴体を撃ち抜き、鈴が衝撃砲を連続で喰らわせる。その結果、ほぼ壊れかけの人形が再びこちらに飛んでくる。

「ふんっ！…お、なんか四身の拳使って悟空に負けた天津飯みたいになってる」

「的確な表現ね」

「で、どうする？…こっち終わったけど、向こうに助太刀しに行く？」

俺らが飛んでいる下には、既にガラクタと化した3体の無人機の山に、先ほど俺がかかと落としで叩き落とした1機が突き刺さっていた。

最初、襲われた瞬間にシャルと鈴がこちら側に来てくれたのがありがたかった。鈴もシャルも、俺がランペイジテールで止めてるやつフルボッコにしてたしな。いやあ…あんなんさされたくないわ。

「ふっ…。誰が、ゴレム達が4機だけだと言った？」

「…え？」

「ちっ…」

「感謝するぞ国連代表。…ここ、日本では数十年前から有名だっただろっ？」

ふと、ゼフィルスの操縦者がそう言ったかと思えば、いつの間にか全8機の無人機が、こちらを見下ろしていた。

「まだあんなにいるの?」

「…待て鈴。ちよいとばかり、厄介や」

「独自のネットワークを組み、学び、理解し、実践する。そいつらは自己成長型の無人機だ」

あいつの台詞から考えていたことが的中した。外見から察するに、今まで倒した4機と外見は全く同じなのだろう。違うのは、いや、変化しているのは恐らく中身。先ほどの戦闘から俺達の弱点を見抜き、戦いを覚えていく。もしそれが真実ならば、かなり厄介になつてくる。

「おい2人共」

「嫌よ」

「僕も」

「まだ何も言つてへんやん…」

俺の後ろに控えている鈴とシャルに声をかけると、内容を話してないにもかかわらず、即座に否定された。

「どうせ、アンタのことだから『こいつらは俺が片付けるから2人はあつちのサポート頼むわ』とか言うんでしょ?」

「は、はあつ!?そ、そんな俺、絶対言わんし?てかいつ俺がそんな感じのことした?」

「剣がした、って思つてなくても、僕達はそう感じてるの。それに、織斑先生や山田先生にも、剣がこれ以上無茶しないようにって釘を刺されてるしね。まあ、刺されてなくても僕はこうするつもりだったけどね」

新たに現れたゴーレム8機が、俺の眼前で臨戦態勢に入ったのを確認した2人は、まるで俺の盾になるかのように前に出た。

「あんたが今まで以上に傷付くのを指咥えて見てるのなんて、もうゴメンよ」

「それに、剣も前に言つてたでしょ?」

そんな2人を無視し、俺に突撃を仕掛けてきた2機のゴーレムを見

逃すことなどあるはずが無く、鈴は衝撃砲、シャルはパイルバンカーをゴーレムの頭部に撃ち込んだ。ゴーレムの速度に加え、自らも加速していた2人の攻撃により、頭部は一撃で破壊され、2機のゴーレムは機能を停止して堕ちていった。敵の速攻に、シャルはほぼノールック、鈴は高速機動パッケージのせいで横を向いた状態での衝撃砲となったが、綺麗に撃ち抜いてみせた。

『金夜叉』には一撃の火力が無いって。学習していく敵に、そんなに技を見せてたらないでしょ?」

「それに引き換え、アタシとシャルロットにはそれができる武装がある。適材適所ってヤツよ。…だから、今回はアンタはサポートに回って。アタシ達全員からの、お願いよ…」

「シャル…鈴…」

「鈴っ！正面と上から2機、来てるよ！」

「了解っ！」

確かに、『金夜叉』には相手を一撃で落とせる、または機能を停止させられる武装はない。…でも、それは鈴の『甲龍』やシャルの『ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ』もさほど変わらない。衝撃砲にしても、パイルバンカーにしても、操縦者本人の動き自体を学習されてしまったら、当てることすらできなくなってしまう。

「おい待て、鈴！そもそもお前自身の動きが読まれてもたら意味無いぞ！」

「分かってるわよ!!けどこれ以上、アンタを戦わせるわけにいかないのよ！」

「…貴様ら。私が、国連代表の敵はゴーレムだ、と言ったことを忘れたのか?」

鈴が戦いながら怒号を上げたのに対し、一夏達と戦っている『サイレント・ゼフィルス』の操縦者が落ち着いた声で言葉を投げかけてきた。ふとそちらを見れば、時間を重ねたからなのか、近接で戦っている筈や一夏の動きはおろか、中距離で戦っている簪や、遠距離のセシリアの動きでさえ読まれているようで、全くと言っていいほど攻撃が掠っていない。4人の苦しそうな表情が良く見える。

「…どういうことよ」

「まだ分からんのか。…そのゴーレムには、戦闘を少しでも重ねた時点で、邪魔者を無視して国連代表のみをターゲットするようにプログラムされている。…もし、その邪魔者がゴーレムに照準を合わせようものなら…」

「っ！鈴！シャル！今すぐ離れろ！」

敵の言葉を聞き、何が起こるか察知した俺は、すぐさま2人に指示を出した。2人も俺と全く同じことを察したのか、ゴーレムの身体が光出すと共に瞬時加速を使つて一瞬でゴーレムから離脱した。

ゴーレムが自爆して数秒後、またも、ゴーレムが八機ほど俺の元へと飛んできた。

「ほう…、流石に察知がいいな。見ての通り、国連代表以外がそいつに攻撃しようとするると自爆するようになってる」

「つまり、僕達は良いようにデータを取られただけってことになるね…」

「アンタら…、どんだけ汚いのよ！」

「戦いに汚いもクソも無い。そら、そうやって、お前達が国連代表の攻撃範囲内にいるせいで、いつまでたってもゴーレムは消えんぞ？」

「ぐっ…！」

飄々と攻撃を避けるサイレント・ゼフィルスを睨み、鈴とシャルは渋々といった表情で俺とゴーレムから離れた。…恐らく、鈴とシャルのデータが取られたのは、先ほどのパイルバンカーと衝撃砲を撃ち込んだゴーレムと、今自爆したゴーレムだろう。ISを操る、基礎となる部分が卓越しているシャルの動きを見たからだ、という仮の推測を立ててみる。…と、なると少々マズイことになるのだが、まあなんとかなるだろう。

「剣、その…ごめんね…。僕達、何も出来なくて…」

「んなことないって。謝らんで大丈夫やで、シャル。…それより、そつちもやばそうやから早めに叩いてな」

「うん…」

謝罪の通信を入れてくるシャル。その声色はやはり優れず、ハイ

パーセンサーにより確認できる表情にも影が差している。

「死なないって、約束しなさい」

「もち」

そして、鈴との物騒な約束をした俺は、ゴーレムの群集の中へと飛び込んだ。

◇

「…ええ、良く耐えたわ。最初の連携は驚いたけれど、落ち着けば貴女だけでもその7機は落ち着けば完封できるはずよ。…ええ、そうね。国連代表が入ると流石に分が悪いわ。あの子達に任せなさい。…期待してるわよ、M」

時守達がコースでサイレント・ゼフィルスと戦闘を繰り広げている中、今は避難する人すらもいなくなった観客席の廊下に、1人の美女が立っていた。柔らかいウェーブがかかった美しい金髪、たわわに実った豊かなバスト、キュツとくびれたウエスト、引き締まりつつも、魅力を感じさせるヒップと、そこからすらりと伸びる細く、一切の汚れない脚。その美しい身体を、ややサイズが小さめのブラックスーツが包み込んでいる。そんな男女問わず、横切る者は誰でも振り向いてしまうような美貌を持つ彼女は、現在、一夏ら7人と戦闘を行っているサイレント・ゼフィルスの操縦者、Mに通信を入れていた。

「あら、勝手に乱入しておいて、随分と酷いことを言うのね」

そんな彼女の背中に、とある女の声がかけられる。その正体を彼女は知っている。数少ないIS学園における危険人物の1人、ロシア代表の更識楯無のものだ。

「そうかしら。私は事実だと思うのだけれど。強い親に守られる雛鳥が7羽。…随分戦いにくそうね、彼。今こうして貴女と話している私や、雛鳥達の練習相手になってあげているMにも気を使いつつも、ゴーレム達の攻撃範囲内に彼らが入らないように立ち回っているのだし」

「剣君にそこまで警戒されていると分かっておきながら、こんなにも

大きく動けるとわね。大した度胸だわ」

「怖くなんかないもの。…ふふつ、いえ、やっぱり怖いわね」

ゆつくりと振り向く彼女に、楯無は警戒を強める。今の自分は、時守剣の彼女でも、1人の少女としての刀奈でもない。ロシア代表としての、そしてIS学園生徒会長としての、更識楯無なのだ、と、自分を必死に律する。

「歳が離れていて、弱い男に興味が沸かなかった私が、心から彼を欲しているんですもの。…怖いわ、彼。もっと近づければ、彼の魅力をもっと知れるかもしれないわねえ…」

「っ…！貴女を、貴女をそんな簡単に剣君に近づけさせる訳ないでしょう！」

律していたのだが、彼女の狂気が垣間見えた瞬間、一瞬だけ怖気付いてしまった。その目は酷く狂気で濁っており、心なしかその表情にも狂気じみた色気が感じられる。

「大丈夫よ。もうしばらくは、見てるだけでも、十分に楽しめるから。それと、安心してくれて構わないわ。…私が狂っているのは、私自身がよく分かってるから」

「…単刀直入に聞いわ、土砂降りスコール。貴女達は一体何が目的でこんなところまで来たの」

「…そんなこと、簡単よ？敵にそんなことを聞いてしまうだなんて、更識家も落ちたものね」

「もし本気で聞いていると勘違いしたのなら落ちたのはそっちのようね、亡国機業。…大方、剣君絡みだとは思っけど」

「私も詳しくは知らないけれど、そう考えるのが妥当、といったところかしらね」

お互いの腹のうちの読み合い、それが上手くいっている証拠なのか、はたまた単に楽しんでるからなのか、2人の口端が上がる。…最も、金髪の彼女—スコール—には、楯無から情報を抜き取れるか、などどうでも良いことなのだが。

「…貴女にも勘違いしてほしくないのだけれど、私は国連代表を殺したい、なんて思ったことは無いわよ。他でもない、私の目的のために」

「そんなことを、鵜呑みにするとても思ってるの?」

「鵜呑みにしたい、が貴女の本音じゃないの?…まあいいわ。私達の目的や意図、そして今の言葉の意味。…彼に骨抜きにされる前の貴女なら、分かったかも知れないわね。それじゃあまた、近い将来にでも」
「なっ!…くっ、しまっ…た…」

相手が論戦目当てだと決めつけてしまっていた楯無は、不意に投げられたナイフにISを展開することでしか反応できなかった。

楯無の想像通り、投げられたナイフはISのシールドに当たった瞬間に爆発。楯無のIS『ミステリアス・レイディ』を覆うほどの黒煙を巻き上げた。

「…逃げられた、わよねえ…」

ハイパーセンサーに写る視界の端に、飛んでいく金色の機体が写る。見慣れた『金夜叉』と違うフォルムのそれは、一切の迷いなく、空へと姿を消して行った。

「…はあ」

「おい、更識」

「っ、織斑、先生…?」

「…警戒するのは分かるが、声で判別できなかったのか?」

消えた敵のことは一旦忘れ、次に切り替えようとしていた楯無だったが、不意に背後から声をかけられ警戒態勢のまま振り返ってしまった。普段の楯無なら、声の持ち主が千冬だと言う事などすぐに分かったのだが、先ほどまでのこともあり、ほぼ敵意を剥き出しにしてしまったのだ。

「あ、あはは…、すいません。ちよつと、気を張り詰めていましたから」
「まあ無理もない。済まなかった、本来なら私が対処するべきところを。…それより、だ。打鉄を待機状態で借りてきた、ので」

「ここは先生に任せて、私は加勢に行つてこい、ということですね?」
「…ふっ、少しは冷静になれたようだな」

「ええ。もちろん、織斑先生が来てくださったというのもありますが」
言葉を1度切り、楯無は視線をレース会場へと向ける。千冬のそれも、楯無に釣られて会場へと向く。そこに写るのは、依然として激し

い攻撃を繰り返し、なんとか敵に一撃を当てようと奮闘している6人と、いつの間にか20機以上のゴーレムに囲まれている1人がいた。「まだ、皆が頑張ってますから」

「そうだな。…更識、時守を助けたい、という気持ちは分からんでもないが、お前もあの通信を聞いていただろう?」

「はい。全く…、ここまで徹底した剣くん対策を取ってくるなんて…」
「考えるのは後だ。そら、さっさとあの6人のところへ行つてこい」
「分かりました」

この場を千冬に任せ、楯無は駆けていく。

「…はあ。打鉄、か…」

その背後で、手の中にある打鉄の待機状態を、寂しそうに眺める千冬に気づくことなく――



「お前つ！何が目的でそこまでして剣を狙うんだ！」

「さあな。私が教えてやれることはもう全て教えてやった。あとは、自分で気づけ！」

「ぐっ…！」

一夏達6人は、6対1という数でいえば圧倒的な優位に立つておきながらも、サイレント・ゼフィルスの操縦者、Mに対して苦戦を強いられていた。

理由はただ一つ。高速機動用に機体を調整したせいで、一部の機能が制限、または封印されているからだ。その最たる例が――

「ふんっ。今のお前など、最早なんの驚異でもない。その後ろで待機している、お前達もだ」

「くそっ…！零落白夜さえ使えれば…！」

「これほどまでにやりづらいとはな…！」

「これ以上は…、ダメ…。攻撃の手段が、ない…」

――白式の零落白夜と雪羅、シユヴァルツェア・レーゲンのAIC、打鉄式式の武装の数だ。

それぞれが高速機動用の調整とあって、制限をかけた強力な武装が、この奇襲への反撃を成功させるには必要だった。

「鈴！衝撃砲は無理なのか!？」

「無理よ！今のままじゃ真正面に撃てないの!！」

「ぐっ…!っ、箒…。箒！絢爛舞踏は使えないのか!？」

「先ほどから試してはいるがまだだめだ…、すまん…」

一夏が幼なじみ2人に問うが、返ってくるのは望んでいたものではなかった。

『皆っ！もう少しだけ耐えて！あと少してそっちに行けるわ!』

「お姉ちゃん…」

「ちっ…!ロシア代表か…」

だが、ふと予想だにしていなかったところで、思わぬ吉報が訪れた。ロシア代表でありIS学園生徒会長、つまりIS学園生徒最強の座に君臨する更識楯無の加勢。これにより、戦いの勢いは一気にIS学園側へと流れる—

「…なら、そっちを潰すか」

—ことなどなかった。

現在、時守が相手をしているゴーレム達が自爆するスイッチは『時守剣以外のIS操縦者にロックされること』。これは、今彼の周りにいる20機余りのゴーレム全てに適応されることであり、かつ、『敵味方関係無く』ロックされた瞬間に、自爆するのだ。

その機能を利用するべく、Mは瞬時にゴーレム20機余りを、一気にロックした。

「しまっ…!」

「剣君っ!!」

一夏達と、これから加勢に行こうとしていた楯無の視線が、時守に向く。角度の問題から彼の顔は8人からは見えず、周囲のゴーレム達が光り出していることだけが、明確に分かった。

「いや、やっぱ—」

何かを言おうとした時守だったが、その声は爆音にかき消され、彼のその姿も爆炎に包まれた。

Mは愉悦による笑みを浮かべ、その様子を見ることしかできなかった8人は、それぞれが複雑な表情を浮かべ―

「お前、アホやろ」

―一本の棒が、Mの顎を打ち上げた。

「ガツ…、…な、何…が…」

「この光景見てもまだ理解できひんのか。俺が、お前を、ぶち抜いた。…それだけや」

「き、貴様は今、自爆に巻き込まれて…」

「あんな見え透いた自爆、ガードできるに決まってるやろ。こないだは味方を守るためやったけど、今回は明らかに自分を狙ってきてるの分かってんもん。…ま、ランペイジテール二本とも逝ってもたけどな」

先ほどまでの笑みは無く、Mは目の前に佇む時守を睨む。ウインドウから送られてくる情報を見る限り、相手に大したダメージは与えられておらず、特殊武装、それも『完全同調』発動時には邪魔になっってしまう程度の物を二本、機能停止にできただけに終わってしまったからだ。

「一夏、ちよつと武装パージするからちよいと時間稼いでくれ」

「っ！分かった！」

「あと、セシリア」

「…はい」

「前にも言った偏向射撃やけどな、簡単や、信じろ。深く考えるな。…できる、理論上可能ならっ？」

「…ビット適正トップの、わたくしに出来ない訳が無いですわ」

「せや。…まあ、信じていいのは、自分だけちゃうけどな」

「はい？……はっ！そ、そういうことでしたのね！」

「ようやく分かったんか…。んなら、一夏、セシリア！」

「おう!!」

「はいー!」

一夏とセシリア、2人と一言二言交わし、時守は下がっていった。その彼の脇を、どこか晴れ晴れとした表情の一夏と、セシリアが駆け

ていった。



「おいしよ、と」

「け、剣！ほんとに大丈夫なの!？」

「ん？おお。今んところは、な」

「…でも、今まで7人で上手く攻められなかったのに、一夏とセシリアだけで大丈夫なの？」

「大丈夫やって」

楯無、簪、シャルロット、ラウラ、鈴、箒の元へと戻った俺は、一息付きながら使い物にならなくなった武装を、迷うことなくパージした。そんな悠長なことをしているのを見かねたのか、身体の安否を問うシャルロットが物凄い剣幕で一気に近づき、采配の意味を聞くために鈴が問いかけてきた。

身体の安否については、一旦置いておくとして、采配については問題ないやろ。…現に、ほら。

「あいつ攻めあぐねてるやん」

「ほんとだ…。でも、なんで…」

「恐らく、一夏くん本来の良さ。…まあ、思い切りの良さだったり、今まで出来ていなかったことが本番でできる凄まじいセンスが生かされるようになったから、ね」

「…まあ、セシリーが偏向射撃できるように…なってるやん…。あんなクソテクターなアドバイスで…」

「…あの説明で出来るなら、なぜもつと早くできなかつたのだ？」

ラウラの疑問も正しいだろう。俺はただ、『自分以外も信じてみる』と言っただけである。それで偏向射撃できるようになつたら誰も苦労せーへんって。

「ま、多分『ブルー・ティアーズ』がセシリーに答えてあげたいって思ったからやろ」

「…どういうことだ？」

「こういう強い武装とかってな、自分の努力だけやったら発現せーへんねん。ISのことを信じて、かつISに信じられて、初めて出てくんねん。セシリーはISに十分信じられるぐらいの付き合いはあったけど、ずっと自分1人でやろうとした。∴それを変えたから、『ブルー・ティアーズ』が偏向射撃って形で答えただけや」

「∴なるほど」

「いや絶対モツピー分かってへんやろ」

俺の言ったことは、単一仕様能力であつたり、第二形態移行にも必要なことである。まあ俺はそのへんのことを金夜叉から聞けるので、せこいと言われちゃ終わりである。

「∴あ、敵が∴」

「いいわよ、簪ちゃん。今の目的は敵の撃退。確保じゃないわ」

「それはちゃんと2人にも言ってるし∴あ、戻ってきた」

俺が解説をしている間に、敵、Mは退散していった。∴てか遠目から見てたけどワンサマ今のやつ絶対怖いつて。近距離でやりあつてる背後から、曲がってくるとはいえビーム飛んでくんねんで？自分に当たらんと思つても流石に怖いやろ∴。

「ま、今回こそは、誰1人怪我人無く終われたな」

「アンタは常に怪我してるじゃない」

俺達の戦いの最後は、全員の苦笑いという結果で終わった。お前のせいやからな！鈴！

澱む意思

「せーのっ」

「一夏、誕生日おめでとう！」

シャルの掛け声とともに、ぱあんぱあんとクラッカーがなる。

「師匠っ！」

「うえーい！」

その数秒後、俺の持つバズーカ型のクラッカーが一夏の顔面目掛けて放たれる。

「ぶっ…：ペツ、口入った…。どこでそんなもん買ってきたんだよ！」

「ビレバン」

「ああ…うん。どのタイミングで？」

「入学する前に使う物として送ってもらった」

「ずっとあったのか!？」

ちなみに、その時はまだ付き合っていなかった刀奈がこれを見た瞬間に吹き出したのはいい思い出や。

今、時刻は午後5時、場所は織斑家。キャノボが終わった後の俺達は、ここで一夏の誕生日パーティーをしていた。

「この人数は何事だよ…」

「少ないよな」

「多いだろ！」

この人数で多いとか…こいつ今までの誕生日パーティー何人でやっとなんか。メンバーを整理してみると。

いつもの。モツピー、鈴、セシリー、ラウラ、シャル、簪、カナ、んで俺。

後はちよつと前にあつた蘭ちゃんとその兄貴の弾。後なんかよう分からん男子。

どっから来たんかは知らんけどのほほんと虚さん。

んで新聞部の黛薫子。てかそもそもこの人数のパーティーを家のリビングでするのが間違ってるやろ。

ま、謎の襲撃後の労う会みたいなんも兼ねれるからちよつと良かった

たっちや良かったけど。

「あ、あ、あのっ、一夏さん！私、ケーキ焼いてきましたから！」

「おお、蘭。今日は楽しめたか？…って、途中でめちやくちやになったけど…」

「ワンサマずっと中盤でモジモジしてたから後ろから煽る側全くおもんなかったで」

「そういう意味じゃねえよー！」

「あ、あはは…。あの、楽しめましたし、かつこよかったです！ケーキどうぞー！」

なにやら猛烈なアタックをかけている蘭ちゃんから離れ、弾の元へと向かう。

「なあ弾。蘭ちゃんってワンサマのこと好きなん？」

「見ての通り、お察しの通りだ。将来のこと考えると、あいつが義弟になるかもしれないんだよなあ…」

「…ちっふー先生が義姉なるで？」

「ら、蘭にそれ伝えてこようかな…」

あの人、自分のことならいいとして、ワンサマの結婚相手とかめっちゃいびりそう。

「うちの弟にこんな飯を食わせるのか…的なの？」

「小姑丸出しじゃねえか…。あつ、そういやお前ら初対面だったな。

剣、紹介するぜ。俺と一夏、まあ途中までだけど鈴が中学時代に仲良くなった、御手洗数馬だ。数馬、こいつがああ、時守剣」

「よろしく」

「ん、よろしゅう。…あの時守剣ってどんな紹介の仕方やねん」

「ま、まあそれで分かるんだからいいだろ？」

「ええけどやな。あ、俺のことは名前であえて」

「いいんだ…」

なんか全体的に柔らかいふにやっとした優男、御手洗数馬との初対面は、弾を介して笑いの中始まった。

いや、まあおかしいねんけどな？『あの』時守剣って紹介する方もする方やし、理解する方もする方やし。

「初対面のやつやったらこれが早いのは事実やからな。…てかき、俺の社会からの評価ってどんなんなん？」

「一夏とは別の意味で注目を浴びてるのは間違いないぜ。あいつは嫌がってるけど、そりゃ千冬さんと篠ノ之博士と距離が近いってのもあるし、後は…ま、見た目、だな。お前の場合は大分違うと思うぞ。なあ？数馬」

「うん。剣は、良くも悪くも情報が少ないから、自力で手に入れられるようなことしか知らない人が多いんじゃないかな？例えば、中学校は全国でも名だたる進学校で、その中で2年連続生徒会長を勤め、考査では1度も一位を落としたことが無いこと…とかかな」

「すっげ。全部合ってるやん」

「合ってるのかよ!?!」

なにを驚いとんねんコイツは。

「その高校に向けての全てがIS学園への強制入学でペアになってんけどな」

「ああ…そうか…。すまん、一夏のせいだ…」

「ま、今はそんな気にしてないしな。将来の夢は潰れたけど、安泰なんは確定やし」

「案外あっさり切り替えられるんだ…」

「まーなー。学費ただやし、代表なったから援助やら給料やらガッツリ入るし、キツイことも多いけど、どっちが楽しいかって聞かれたら間違いなくこっちやわ」

「なあにが楽しい、よ。あんだだけ怪我して楽しいって…アンタドM?」

「ちやうわい。…んで、鈴。マジで誕プレラーメンにしたん?」

「当たり前よ」

一夏を除く男3人で話していると、数馬と弾との中学の知り合いでもある、鈴が会話に入ってきた。

実は、一夏の誕生日の1週間程前から、いつものメンバーに誕生日プレゼントが何がいいか、と聞かれていたのだ。

ぶっちゃけめんどくさかったから何人かはテキストに答え、その場をやり過ごしたのだ。…そのテキストに答えた一人がこの鈴で、『中

華でええやん』と食堂の長椅子に寝っ転がりながら答えたところ、マジで採用したらしい。アホやこいつ。

「弾と数馬は何にしたの?」

「俺は…その、アレだ。男だけの秘密だ」

「弾…それじゃバレルよ? 僕は筋トレセット。そんなに高くは無いです、一夏がまたI Sを中心に身体を鍛えたいって聞いたからね」

「ふーん。…まあ、普通はそんなもんよね。剣は?」

「独自のルートで手に入れた、一部の人間からしたら喉から手が出るほど欲しいブツ」

「誕プレに何送ろうとしてんのよ!」

「安心せえ。ただの調味料セットや」

ただし、そこには『市販の』ではなく『一流料理人御用達の』が付く。おとんの知り合いに、そういった調味料を格安で仕入れて売ってくれる人がいて、誕生日の事を話すとほぼただ同然で売ってくれたのだ。

「アタシ以外にも誕プレの助言したんでしょ?」

「おお、したで。セシリーにはティーセット、シャルには時計って言った。簪には、一夏が持ってへんゲームで、カナには…」

「えーいつ」

「うおっ!?! 危なっ!…って何ですかそれ! 突起出てるじゃないですか!?!」

「うふふ、凄いでしょ。私の知り合いに作って貰った護身用のけん玉よ」

「…普通にしとけつて言うたのになあ…」

鈴に、みんなにどんな誕プレのアドバイスをしたか、を話していると、視界にけん玉を振り回す刀奈と、それを必死に避けるワンサマが写った。

「ご、護身用けん玉…?」

「そうよ。糸の部分は特注のワイヤーで出来ていて、最大5メートルまで伸びるわ。玉の部分は特殊プラスチックでただ硬いだけなんだけど、持ち手にあるスイッチを押すとこんな風に突起が出るの。ちな

みに、持ち手の部分は近距離戦闘用に特殊合金で作ってあるから安心して使ってちょうだい」

「安心できませんよー!」

「あんたどんなアドバイスしたのよ…」

「普通に自分の暇つぶしでええんちゃう? つて」

簪とカナは意外なことに、人に自分が選んだ誕生日プレゼントを送ったことがほとんど無いらしい。身内であるのほほんや虚さんぐらいにしか上げたことが無く、それ以外は付き人に選んでもらったらしい。それだけでもビビったのだが、セシリアも同じことを言ってきたので逆に俺がおかしかったんか、と思いきやそうになった。

「さて、と」

そろそろ俺も誕プレ渡そかな、と思っていたその時、ズボンのポケットの中の携帯が震えた。

「…ん? なんや、電話かいな。…っ」

普段はあまり来ないが、メールなら短いバイブレーションで終わる。だが、数秒待っても続いたため、着信が来たのだと判断できた。

その画面に表示された名前に、僅かながら息を飲んだ。

「ん? どうしたんだ? 剣」

「…いや、ちよつと電話や」

無意識にいつもより低い声で弾に返した俺は、足早にドアへと向かい、できるだけ大きな音を立てず、かつ少し力強くドアを開け、リビングを出た。

「…ん? あれ、千冬姉?」

俺が部屋を出るのが分かっていたかのようなタイミングで、テーブルの上の一夏の携帯が震えた。



『もしもし』

「もしもし。…どうしたんだ？千冬姉」

『…少し、お前達に用があつてな』
「用？」

千冬からの電話に、一夏は首を傾げた。襲撃への慰労の言葉はもう言われたし、誕生日についても朝祝ってもらっている。しかも、お前達と言ったと言う事は、自分一人に対する用事ではないからだ。

『ああ。一夏、今近くに誰がいる？』

「えつと…箒に、鈴、セシリア、ラウラ、シャルロット、簪さん、楯無さん…後は、虚さんとのほほんさん。弾と蘭と数馬。剣…以外はリビングにみんないるけど」

『…そうか、都合だ。スピーカーにして、テーブルに置いてくれ』
「分かつ、た…」

さすがの一夏も、実の姉に都合だ、いきなり携帯をスピーカーにして置いてくれと言われて疑問を隠せず、返事に少しだけ詰まってしまった。

『さて、五反田兄妹、御手洗、布仏姉妹。お前達にも聞く権利がある話だが…どうする？』

「え、えつとお…」

「…織斑先生、私達がいると話しづらいでしょうし、聞きづらくもあるでしょう。私達5人は、外で待っています」

『そうか。…すまんな布仏、色々と気を使わせる』

「いえ。…では皆さん、行きましようか。本音も」

いきなり話を振られた弾も、先程の一夏と同じように返事に戸惑ってしまった。いても居なくてもいい。言外にそう言われたのだが、メンバー最年長の虚が、即決した。

妹の本音、そして弾と蘭、数馬に退室を促し、先程時守が出ていったところとは違う扉から、リビングを出た。

『…行つたか？』

「あ、ああ」

『…なら、始めるか』

時守を除く専用機持ち8人が残つたりリビングに、千冬の声がやや無

機質に渡る。

『お前達、今日の襲撃について、お前達自身についてどう考えている？』

「お、俺達自身について？……えっと…最初は、うまく対応できた、とは思う…けど」

「その後は、ダメでした。結局相手に翻弄され、まともに当てられずに…」

『待て、一夏、篠ノ之。私は今、相手について聞きたいんじゃない。お前達自身について聞きたいんだ』

「どういうことだ？千冬姉」

自分達自身のことを話し始めた一夏と箒だったが、その途中、半ば強引に千冬に止められた。

『…なぜお前達は、あの時ゴーレムを自爆させなかったんだ？』

そして、あまりにもいきなり、唐突にそう言われた一夏達は、一人残らず反応出来なかった。

「……え？…ちよ、ちよつと待ってくれよ、千冬姉…。その言い方って…」

『そうだ。時守が囲まれている時に、なぜゴーレムをロックしなかったのか、と聞いているんだ』

「で、出来るわけないだろ!? 剣は今まで、何回もそうして怪我してたんだぞ!」

『ああ、そうだな』

「それに、俺達の方だって襲撃者の方に集中してて—」

『それが、どうした？』

「っ、千、冬…姉…?」

一夏の言い分を、たった一言で千冬は切り捨てた。そこには、織斑一夏の姉である千冬は居らず、世界最強としての織斑千冬が存在した。

『なぜお前達は、あいつがそんなものでダメージを受けると思っているんだ？』

「な、なんでってそりゃ…」

『あいつが二学期に入って身体を痛めているのは主にISの機動に身体がついて行っていないからだ。あいつ自身、二学期に入ってからはテロリストからの直接的なダメージはほとんど受けていない。先程の戦闘も、敵の不意打ちですらまともに喰らっていないしな』

「…確かに。前のアラクネの時も、爆発の勢いが少し強かっただけで、それ以外は受けてないって言ってたわね…」

『それに、あの自爆は嵐やデユノアですら避けた。なら、『完全同調』を…そうだな、80%ほどにでも調整した時守が無傷で切り抜けられることは分かったんじゃないか?』

「それはゴーレムが1体だけだったからですわ! 剣さんはあの時囲まれていて…」

『ならなぜプライベート・チャネルで連絡を入れんのだ。どこか始点を決めて、そこから時計回りに自爆させていく、といった指示を出せば良かっただろうが。相手の資源も有限、ゴーレムも無限にいるわけではない、という事は少し考えれば分かったはずだが?』

「そ、れは…」

正論なのかは分からないが、千冬の有無を言わさぬ淡々とした口調に、一夏も、楯無も、セシリアも何も返せなかった。もちろんそれは声に出した3人だけでなく、簪らも同じだった。

『はつきり言おう。今のお前達は、時守に依存している』

「依存…」

『そうだ。無茶はしてほしくないが、いざという時には指示し、助けてほしい。お前達全員が、心のどこかでそう考えているはずだ。…甘えや依存と、信頼は全くの別物だ。…最も、私はそれ以前の問題として、専用機持ちの中でも最も遅く受け取った2人の内1人に指示を仰ぐな、と言いたいかな』

「……」

『…これはお前達のために言う事だが、今のお前達は余りにも時守に甘えすぎている。学生である前に専用機持ちと捉えるか、専用機持ちである前に学生と捉えるかは勝手だが…。更識姉。お前も少し、変わったな』

「っ…、はい…」

『戦闘のための兵器になれば、とは言わん。学生らしいことをするな、とも言わん。だがな、もう少し自分の立場というものを考えてみる。時守に関しても、な』

「ちよーつと、言い過ぎツスよ。ちつぷー先生」
「剣…」

千冬の言葉が、8人に刺のように刺さる中、通話を終えたであろう時守が、リビングに戻ってきた。

「だいたい、高1高2でのレベルを考えたらこんなもんちやいますの？俺がやりすぎたぐらいで」

『そうか…お前の方にも、連絡がいったのか』

「ええまあ、今さっきね」

戻ってきた矢先、時守と千冬の間で言葉のやり取りが行われる。

—それはどこか優しげで、それでいて当たり前のように牙を持っていた。

「ちつぷー先生にも一応報告しますわ。受けましたよ、あの話」

『…分かった。では、お前の長期公欠の手続きを進めておく』

「あざっす。…ってことで、俺、明日から軽く2週間はおらんようになるから」

「……え？」

振り向きざまに、あつけらかなとした態度で話す時守に、誰が発したかは分からなかったが、誰もが心の中でその言葉を発した。

「いやな？俺あいつの不意打ちでランページテールぶっ飛んだやん？んであの後ちよつと調べてみたら、ダメージは無いねんけど所々変にズレてる所あったし、もうめんどいからオーバーホールしてくることにしてん」

「そ、それでも2週間って…」

「細かい部品とかも調整したいから長めに、やねんて」

まるで8人を置き去りにするかのようになり、時守は話し

『まあ、お前の回復も兼ねているだろうな』

「でしようね。ぶつちやけ『金夜叉』無しでここまで身体苛められませ

んし」

千冬もそう返した。

『ふむ……。いい機会だ。全員、これを機に代表、代表候補生としての自分に何が足りんかを考えてみる』
「うーっす」

一夏は、自分達と2人に、形容し難い壁を感じた。

原作7巻 全学年専用機持ちタツグマッチ編

One of the determinatio
n to growth.

「…あつ」

「おはよう、一夏」

「おう…。おはよう、シャルロット」

誕生日の翌日。一夏は食堂で、朝食をプレートに乗せたシャルロットに出くわした。目元にクマを残したまま現れた彼女は、どこか寂し気に笑っていた。

「その…大丈夫か？」

「うん、なんとか。…って言ったら、やっぱり嘘になっちゃうかな」

「そう…だよな」

「ここ、座るね？」

円卓に座っていた一夏の、ちょうど対面の位置にシャルロットは腰掛ける。

沈黙が続く。今朝のことでこうなることは分かっていたのだが、如何せんこの場を打開することのできる案を考えるには、時間が圧倒的に足りていなかった。

「一夏は、大丈夫？眠れた？」

「いや。昨日帰ってからも、剣が行ってからも、ほとんど眠れてない」

「…そっか」

その気まずい沈黙を破ったのは、シャルロットだった。顔色とそのか細い声色から、彼女が無理をしているのは、女心に対しては鈍すぎると言っても過言ではない程の、流石の一夏でも分かった。

「…僕ね、一睡もできてないんだ」

「ほ、ほんとに大丈夫か？」

「ラウラには『休める時に休んでおかなければ、いざという時に困るぞ』って言われたんだけどね、どうにも…怖くて…」

「怖い？」

「…うん。今僕達がこうしてる間にも、剣との差が付いちやってるんじゃないかな…って」

「そんなこと…」

「分かってるよ？剣も、寝たり休憩したりしてることぐらいは。でもね、今までそうして、差が付いてたんだって考えたら…」

やっぱりちよつと…と言葉を零し、儂げに笑う。

「楯無さん達は、どうしてるんだ？」

「簪は朝剣を見送ってから、ずっと整備室に籠ってるよ。楯無さんも、『目が覚めたから武道場で身体を動かしてくる』って。セシリアは、僕と似た感じで、寝てる途中によく目が覚めちゃってたみたい。…簪達は？」

「あ…その、こんなこと言って良いのか分かんねえけど、皆爆睡してたみたいだぜ？」

「…ふふつ、そっか」

「そ、それにさ。剣の様子が気になるなら、千冬姉に聞きに行こうぜ？今までどんなことしてたか、とか、今どんなことをしてるか、とか、機密とかあるとは思うけど、ちよつとだけなら…」

表情では取り繕っているものの、相変わらず寂しげな雰囲気を出し出すシャルロットをなんとか励まそうと、必死に話題を絞り出す。

そもそもこうなってしまった原因は、昨夜の一夏の誕生日パーティーとは別に、今日の明朝にあった――



「じゃあチフユ。彼はちゃんと、預かるわね」

「ああ、頼む。それにしても驚いたぞ？ファイルス。まさかお前までもが国連の所属になっていたとはな」

「少し前のことよ。情報収集と交流のためにね。対亡国機業用に、各国から操縦者を集めるようになったらしいわ。表には出ない軍属なのだし、そういつた組織は世界中にあるもの。こんな日の目を浴び

ることのない組織にも、こうやって変化をもたらしてくれたのが剣くんだもの。手を貸さないはずがないわ」

時は少し戻り、朝の5時。朝練の準備や家事などをこなす生徒以外はあまり起きていないこの時間に、千冬と真耶、そして専用機持ち9人と、国連からの遣いであるナターシャ・ファイルスが、IS学園の校門前に集まっていた。

「いや、俺そんなたいそうなことしてへんやん」

「それを本気で言ってるなら病院をおすすめするわよ？」

「…産婦人科？」

「精神科に決まってるでしょ!?ちよつとチフユ!また剣くんおかしくなってるじゃない!」

「こいつはこれが正常運転だ。気にするな」

今から長期間学園を離れることになる、ということを微塵も感じさせないような、いつも通りの騒がしさを時守と大人で作り上げる。

「あの、ファイルスさん。時守くんをどうやって運ぶんですか?確か、『金夜叉』の使用は、禁止されているんですよね?」

「ええ。それで合ってるわよ、マヤ。オーバーホール前に不備で墜落なんてされても困るので、私が抱きかかえて運ぶわ」

「えっ、マジ?抱っこ?」

「…その言い方は辞めてくれると助かるのだけど…。まあ、剣くんがどうしてもって言うなら、完全初期化したラファールを一応持ってきてはいるから、それで…」

「んじゃそれで」

「…こうも即決で否定されると、女としてくるものがあるわ…。それなりににはスタイルに自信はあるのだけど…」

がつくりと項垂れるナターシャを一切心配することなく、時守はその手に握られたラファールの待機状態を取った。

「おーいしよ、つと。ほい、これで俺専用ラファールの完成ー」

「…時守。お前、今何をした?」

「へ?いや、ただ『完全同調』発動させて、金夜叉にある俺のデータを全部ラファールに送っただけですけど?」

「何でもありませんね…」

「全くだ…。おい時守、その機能は絶対に他人には話すなよ」

平然と、何やらとんでもない機密事項になりそうなことが、時守の口から発せられる。

触れたISを、『完全同調』の応用でほぼ専用機のような状態にしてしまった。その瞬間に千冬から吹き出した計り知れないプレッシャーに、一同は頷くしかなかった。

「…と、まあ。とりあえずだけど、みんなにも伝わるように簡単に説明するわ。まず、今回時守国連代表を送る目的は、上よ」

「…上？」

一夏がそう呟き、上を見る。もちろんそこには空しか無く、少し雲が漂っているだけだった。

「肉眼で見ても見つからないわよ。国際連合宇宙開発専用ISステーション。その名の通り、国連に所属しているIS操縦者が、宇宙開発のための中継地とするために作られた場所なんだけど…。その実験も兼ねて、まずは剣くんの体力回復ね。みんなも、日本のマンガとかで見たことあるでしょ？体力回復のための培養液とか、栄養カプセルとか」

「ま、まあ…」

「それに、軽く5日は浸かってもらうの。で、その間に『金夜叉』の調整をして、後は剣くんに実際に装備してもらったり、新しく開発した武装とか、パッケージを試してもらうの」

「なるほどな。そっちが本命か」

「さっすがチフユ。ご明察ね。…安心して？私たちも、流石にこれ以上自分たちの代表を傷付けさせるようなこと、絶対にさせないわ」

「そう、ですか…」

絶対に傷付けさせない。

その凜としたナターシャの言葉は、聞くだけでなぜか、8人を安心させた。

「それとね、みんなに言いたいことがあるの」

「私たち、に？」

「ええ。…私は、代表、どころか代表候補生にすらなれなかった女よ。だから、貴女達が今、そういつた問題でどんな風に悩んでいるかは、あまりよく分からないわ。貴女たちが、IS操縦者として強くなる方法しか教えてあげられない。目標を持ちなさい。最初はどんなに低いハードルでもいいわ。クリアできれば上げればいいんだもの。それを、ずっと続けていけばいいの」

ナターシャのある意味当たり前だと言えるアドバイスが、心新たに進もうとする8人に、染み込んでいく。

「…ファイルス、そろそろ時間だ」

「そう。…じゃあね、皆。剣くん、挨拶とか大丈夫？」

「んー…せやな。ふああ…、ねむ…」

校門前に集まってから、あまり口を開いていなかった時守に、挨拶が振られる。

朝がとにかく弱い時守だが、今回のような場合も例に漏れず、大きな欠伸をしていた。

「…細かいことは、また後でメッセ送るわ。…とりあえず」

小さな歩幅を数回繰り返し、刀奈まで距離を詰める。

だらりと下げていた右手を、刀奈の頭に優しく置く。

「…皆のこと、カナのこと、ちゃんと頼むわ」

「ええ。任せて」

「俺も、できるだけはよ帰ってくるから」

「…うん」

「…シャルも、簪も、セシリーも、無茶せん程度に、な？…ま、言うてすぐ帰ってくるし」

3人が無言で、だがはつきりと頷いたのを確認して、時守はナターシャの方へと戻る。

「あ、ラウラ。お前らもちゃんとええ子にしときや」

「子ども扱いしないでください！師匠！」

「へーへー。…ま、楽しみにしとけ。んで、楽しみにしとくわ。んじゃ、また…近いうちに？」

そして、屈託のない笑顔を浮かべながら、こちらに振り向き、別

れを告げた。

◆ 「今思えば、あんまり締まらない終わり方だったな」

「その辺りが、剣らしいから良いんだよ？ 全く、一夏は分かっ
てないなあ」

「まあ、しみりされるよりかは、気は楽なのは確かだけど」

「でしょ？」

朝食を摂り終えた2人は、千冬がいるであろう職員室へと歩き出
していた。

今朝の見送りから、あまり寝れていない2人。そのせいだろう
か、いつもより少し早い朝食になっていた。その分、いつもよりは時
間に余裕もあり、職員室にも、ゆつくりとしたペースで向かうことが
できた。

「…その、シャルロットは、さ。何を目標にするつもりなんだ？」

「…相手に全力を出せるように、なんだ。タッグトーナメントの時
は、ラウラと剣が敵対してたっていうのもあったから、あんまりそう
言うのは考えたこと無かったんだけど。…やっぱり心のどこかで、友
達に武器を向けるのを躊躇ってるんだと思っただから。そういう所で
考えたら、箒や鈴の性格がちよっとだけ羨ましく感じるんだ」

「なるほどな…。それ、俺も他人事じゃないかも知れない…」

その道中、2人はナターシャに言われたことについての、各々の
考えを語り合う。

シャルロットの決意は、ISでの戦いにおいて、甘さを捨てる
というものだった。

元から優しい、否、優しすぎる彼女は、専用機持ち達との仲を深
めてからパイロバンカー等の、ISの防御力があつたとしても操縦者
に大きなダメージを与えかねない武装の使用を、極力減らしていた。
その理由は至って簡単で、皆を傷つけたく無かったからである。

「…だからね。織斑先生程って訳にはいかないし、普段からそう振
る舞おうとも思っていないけど、ISだけは、そういう甘さとか、捨て

るって決めたんだ」

「シャルロット…」

「一夏は、決めた？」

「…ああ。俺も、皆にちゃんと全力で戦えるようになる。…やっぱりどこか、『零落白夜』とか『雪羅』を人に向けるのを、怖がつてるんだと思うんだ。だから、SEを0にできるギリギリの力加減とか、当てるテクニックを身に付ける」

一夏の決意は、『零落白夜』を扱うテクニックの向上である。

過去、様々な場面において、その強大な強さから、ほぼ一撃で戦況を決めてきた『零落白夜』と『雪羅』。失敗すれば相手に、決まれば自分たちに流れを呼び込んできたそれを、もっと上手く扱えるようにならないといけないのだと、一夏は感じた。

クラス対抗戦時のゴーレム、暴走したVTシステム、銀の福音、学園祭時のオータムらに対しては、なんの躊躇いもなく振るえた。だが、クラスメイトに迷いなく振るうのは、あまりにも恐ろしい代物であることは一夏もよく知っている。

「じゃないと、負けてばっかりになりそうだしな」

「そうだね。皆も、変わると思うから。ちゃんと練習しないと」

2人は決意新たに歩く。



「あれ？織斑君に…デユノアさん？おはようございます。…どうしたんですか？こんな早くに」

「おはようございます、山田先生えつと…織斑先生はいますか？」

「織斑先生、ですか？」

職員室に着いた2人を待っていたのは、1組の副担任である真耶だった。時間が早いということもあり、職員室にもほぼ人がおらず、真耶もあまり眠れぬまま直接出勤したように感じられる。

「多分今は…まだ自室にいるんじゃないでしょうか？私も、その…時守くんが行ってから、眠れなくて早く来ただけなので…」

「山田先生もですか」

「ええ。やつぱり、先生としては心配ですから…。あつ、へ、変な意味で捉えないでくださいね!」

「捉えませんよ…」

「むっ…。…まあいいですけど…」

やつぱり、いい先生だなあ…。と2人して思っていたところ、急になぜか自爆しにいった真耶。入学してからすぐに発覚したことなのだが、真耶は少…かなり抜けている所がある。年下ばかりの生徒の前で緊張してしまうことなど序の口、一夏や時守と自分が1体1で対面する場面を想像するだけで妄想の世界に入り込んでしまうことすらあり、今のよう自分から変な発言に変えてしまうこともあるのだ。

そんな真耶を見るのも慣れたようで、一部の発言の被害者である一夏は呆れたようにため息を付き、真耶の言葉を否定。

シャルロットは、自分の恋人に思わぬ手が伸びようとしているかもしれないことに少し危機感を覚えるも、婚約時に決めたことをすぐ様思い出し、真耶に鋭い視線を向けるのをやめた。

「そ、それより、お二人は織斑先生にどんな用事が?」

「えっと…今まで剣がどんなことをしてたか、とか、今剣が何をしてるのか、とか少しだけ詳しく教えてほしいと…」

「それなら…」

ちよつと待つてくださいい、と2人に断りを入れ、真耶は自分と千冬のデスクを漁り始めた。デスクの上に置いていく書類の中に、『極秘』や『誰二モ見セルナ』等という文字が見えるのは気のせいだと思いたい2人であった。

「あーありましたよー! そう…ですねえー。これぐらいなら、公開しても大丈夫みたいですね」

千冬のデスクの引き出しから取り出した書類を手に取り、真耶は読み上げる。

「えっと、普段、平日の放課後はですね、普通に織斑先生との戦闘訓練ですね。SEが尽きては、回復。その間に考察し、再戦。その繰り返しみたいです。土日は、国際連合本部での実戦です。たまに国家

代表の選手がいることもあったみたいなので、かなりの戦闘経験を積めたみたいです」

「…すごいな」

「うん。…織斑先生相手に、しかもほぼ負けてばっかりなのにずっと続けていられるなんて…」

「多分、その精神力の強さが、時守くんの成長の秘訣なんだと思います。…それと、今は先ほどファイルスさんが言ったとおり、体力の回復とI Sの修復ですね。…見たところ、あの施設にも小さいアリーナはあるみたいなので、そこで新武装の試験、だと思っています」

「なるほど…分かりました。ありがとうございます」

「大丈夫ですよ、これぐらい。…私には、これぐらいしかできることがありませんから」

どこか誇らしげに、しかしどこか儂げに笑みを浮かべる真耶を、2人は初めて見た。

◇

「はあっ！」

一夏とシャルロットが共に朝食を摂っていたのと同時刻、誰もいない、少しばかり冷え込んだ剣道場に、黒い長髪が美しく揺れ、頬から汗が散る。

最近弛んでいた自分を引き締めるため、前日は早く寝て、今朝はルームメイトを起こさぬよう、着替えを持ってこっそりと抜け出した。

まさかここまで考えさせられ、そして行動に移すことになるとは思わなかった。

篠ノ之箒は、竹刀を振り続ける。

「はあっ！」

思えば、普段おちやらけていた剣よりも、私の方が腑抜けていたな…。

剣を振るたびに、同じ名を持つ友人の顔が頭に浮かび、自責の念

に駆られる。

振り返ったところで、自分が何かしてやれたことなど、大して無かった。

初めて無人機が襲ってきた時には、一夏の妨害しかなかった。タッグトーナメントの時も、自分の下心のせいで変な騒ぎを立ててしまった。極めつけは臨海学校の時、想い人と友達を、死なせてしまうところだった。

「っ、はあっ！」

先ほどよりも、強く踏み込み、打つ。

夏休み、保護プログラムがあるおかげで外に軽く出られないことを良いことに、学園でダラダラと時を過ごしてしまった。

二学期、文化祭。剣道部の先輩に『幽霊部員』と直接言われても、何も言い返す言葉が無かった。敵が襲撃してきた時、ただ楯無の指示を仰ぐしか無かった。

そして、キャノンボール・ファスト。またも指示を待ち、結果的に邪魔をし、挙げ句いつものように傷つけた。

「はあっ……ふう。…情けない、な」

幼少期からの付き合いで、自分の性格を分かってくれているのか、一夏の誕生日の後、千冬が話しかけてきてくれた。

『これが1年で、良かったな』

その言葉を理解出来ない程、箒の頭は固くない。

中学の時も、部活の顧問に似たような事を言われた。自分に力があると過信し、剣を振るっていた。一時期は勝っていたものの、時間が経つにつれ、勝てなくなっていた。その時に言われた言葉と、全く同じだった。

「また、同じ過ちを犯す所だった。…いや、もう遅い、か」

事実、彼は治療のため、この学園を離れた。

その言葉だけ見れば軽いものだが、中身を見れば自分達に非があることは明確だった。

—周りを助けすぎて怪我を負ったから、今は怪我しない環境で治療、特訓させる—

箒だけでなく、専用機持ち全員が、言外に『弱い』と言われた気がした。

「いや、弱いんだ。私は。…弱いから、剣が怪我をして、シャルロット達に悲しい思いをさせてしまったんだ…」

構えていた竹刀を降ろす。剣道場に来てからずつとしていた素振りは、頭を冷やすには充分だった。

「…ん。気持ち悪い、な。…浴びるか」

竹刀を袋に戻し、剣道場に付いているシャワールームへと足を向ける。

いつも通り、脱衣場で着ている衣服全てを一気に脱ぎさる。

汗でへばりついた道着と、胸の形を整えていたブラジャー、そしてそのブラジャーと共に汗を吸い、蒸れに蒸れたパンティを脱ぎ、一夏に貰ったリボンを取る。

普段なら隠すが、今は自分以外いないことは分かっているので、数枚のタオル片手に、シャワーのある場所へと向かう。

自分でも思うほど大きく育った胸が、歩く度に大きく柔らかく揺れる。

「そういえば、最近また少し大きくなっていたか…？」

簡易な仕切りで区切られたシャワースペースの一つに入り、扉代わりの磨りガラスにタオルをかける。

だが、まずシャワーを浴びることはせず、その大きな胸に自分で手を当てる。…やはり、また大きくなっている。高校に入学するまでは、鬱陶しく思っていたそれも、今はそれほど嫌ではない。

「二夏も、大きい方がいいのか…？」

自分で、揉んでみる。少し強めに揉み、形を強引に変えてみるが、圧迫感を感じるものの、快感は生まれない。

「…まあ、今はいいか」

先ほど竹刀を振っていて思ったことだ。周りの専用機持ちに比べ、自分だけがうつつを抜かしすぎているように思う。

箒は、決意した。恋の前に、そのふさわしい強さを身に付けることを。

「きやつー…っ、冷たいな…。まあ、冷えてきているからな」

ノズルを捻ると、シャワーから冷水が勢いよく飛び出してきた。あまりに突然で驚いたが、少し待てばすぐに温水へと変わった。

まずは髪と、身体全体を濡らす。いつもなら時間が無いため本当にシャワーだけだが、今日は時間に余裕があるため、洗うことにした。

シャンプーを流し終えた後、持ってきたタオルの一枚にソープを出し、泡立てる。

左肩から先端へ、そして右肩から先端へ。そして腹部を洗い、たわわに実った乳房を洗う。洗い残しがあると気持ち悪くなるため念入りに洗い、シミ一つない背中へと移る。その後、筋肉と脂肪が絶妙な比率で付いている脚を洗う。残している部分以外に洗い残しが無いことを確認し、臀部を揉むように洗っていき、最後に秘部を、乳房と同じぐらい念入りに洗う。

「んっ、はあ…」

篠ノ之箒も、1人の思春期の女子高生である。

口では否定しているものの、上手く隠れて自慰もしているし、性行為にだってそれなりに興味はある。

いつの間にかタオルを左手に持ち変えており、右手は知らないうちに陰部へと向かっていた。

中指と人差し指を動かす。すると、ぐちゅり、という明らかにシャワーの水気の音ではないものが、箒の膣口から鳴った。それは一回だけではなく、不規則なリズムで、少しずつ大きな音を立てていった。箒の口からも嬌声が漏れ始め、次第に大きくなる。息も乱れだし、2本の指が奥へと進もうとする。

だが、そのいやらしく動く彼女の右手が、今朝は止まった。

「…今は、このような時間すら、上手く使わないとな」

まるで先ほどまでの行為を否定するかのよう乱雑にシャワーを浴びる。磨りガラスのドアを開け、肢体の水分を取った後、持ってきた替えのパンティを履き、ブラジャーを着ける。

「っ、やっぱり、少し苦しいか…」

サイズが合っていないことは無いだろうが、少し小さい感じるそ

れは、箒の乳肉の形をいやらしく保っていた。

「まあ、良い。…剣が帰ってくるまでは、これが戒めだ」

肌着と制服に袖を通し、剣道場を後にする。

箒はここに、時守が帰ってくるまでのしばらくの間、自慰行為禁止も決意した。

◇

「…んう？…あれ、普通に爆睡してたわ」

凰鈴音は、いつも通りの時間に自室で目を覚ました。

同時刻に、想い人は別の女子と共に廊下を歩いている最中だったが、そんなことを寝起きの彼女が知るよしもない。

「…セシリア達になんか言われそうね、このままじゃ、『変わろうとは思わないんですの!?!』みたいに」

昨夜、厳しい面持ちで解散したことはもちろん分かっているし、本当に心新たにISの技能向上に努めなければならぬことも分かっている。時守が学園を離れた彼女達の心境は、分かりはしないものの、察することはできる。…だが、

「でもまあ、眠いのもホントだし。睡眠時間削ったらできない派の人間だもん、アタシ」

眠いのだ。

自分は睡眠欲には勝てない。それが分かっているからこそ、鈴音は早く眠り、その代わりに昼間の時間を上手く使う。

「…ま、放課後にやりやあい話でしょ。朝イチからガツシヤンガツシヤン言うのも周りに迷惑に決まってるし」

寝間着を脱ぎながら、これからの予定を大雑把に決めていく。

朝食を食べて、授業を受けて、昼食を食べて、授業を受ける。

その後はもちろん、ISの特訓に当たっているが、それはまあその時の気分で決めよう。

「うーん…。とりあえずは…双天牙月の扱い、かなあ。んしよつ、と」

寝返りをうってズレたパンティを直し、クロツチを陰部に合わせ、少し食い込み気味に引き上げる。

そして、1人ぼやきながら、ブラジャーの肩紐を両腕に通す。夏休み、とある店頭で見つけた淡いピンクのそれは、ある1点を除いて鈴音のお気に入りになっていた。

「衝撃砲は…大丈夫だし、近距離戦闘で強くないと…。っこの、相つ変わらずムカつくわね！ちよつとデザインが良いからって、着けにくいのよ！」

そして、背中のホックを上手く止められずに、いつも通り格闘する。

背中に手を回し、唸りながら鈴音は決意する。近接で強くなろうと。

「…なんかお腹減っちゃった」

寝起きにいきなり考え事をし、下着と格闘した彼女は、いつもと比べればかなりのカロリーを消費してしまった。

「ティナは…いつか」

だらしのない寝顔で、ヨダレを垂らしながら未だ睡眠を続けるルームメイトを尻目に、スカートに脚を入れ、ブラウスに袖を通す。

制服を着ている間、ティナの方を見てみると、箒程では無いものの、豊かに育った双丘がリズムよく上下に揺れている。

「…ふんだ。別に、大きけりやいってもんじゃないでしょ。少なくとも、あいつはそうだし」

女子に何の躊躇いも無く『胸のデカさなんて大して関係ないやろ』などとぬかした関西人のことを思い出しながら、鈴音は部屋を出た。

◇

「…結局、あまり眠れませんでしたわ」

制服に着替え、自室でモーニングティーを済ませたセシリアは、食堂へと繋がる廊下を歩いていた。

一夏の誕生パーティーから帰ってきてからもあまり眠れず、時守

を見送ってから全く眠れなかった。

「剣さん…、はあ…」

朝からずっと、この調子だ。

寝起き、紅茶を入れる時、飲む時、着替える時、部屋を出る時…もう既に何回ため息をついたか数え切れない。

ため息をつけば幸せが逃げる、という言葉があるが、彼女の場合少し違う。幸せが逃げてしまったからこそ、ため息が出てしまうのだ。

「…：はっ!?し、幸せは…：剣さんと共に戻ってくるのでは？」

しかし、廊下を歩いている内に少し考えが変わったのだろうか、セシリアの表情が明るくなる。

「ですがそれは…：剣さんが完治していて、もう守ることで傷つかない場合のみ、ですわよね…」

だが、またも表情が変わり、今度は俯き、影が差す。

表情を二転三転させる彼女は、表に出すことで答えに近づこうとしているようにも見えた。

「…：私ができるのは、後方からの射撃のみ。私が前線で『インターセプト』を振るっていても、ただの邪魔にしかありませんわ」

セシリアが考えるのは、競技としての1対1の戦闘ではなく、襲撃者が乱入してきた時の戦闘である。

自分のような人間、機体が前線で戦うのは、本来前線を得意とする仲間の邪魔にしかない。そのことを彼女は、良く理解していた。

「そうなれば、『偏向射撃』だけではなく、『スターライトmkⅢ』での狙撃も重要になってきますわね」

キャノンボール・ファストが終わってから自在に操れるようになった技術を、セシリアはメインにするつもりは無かった。自分が操る武装は、スターライトとビット。決して、ビットだけしか使えない訳では無いのだ。

「それに、『偏向射撃』ができるようになるまでは、ほとんど剣さんに頼りっぱなしでしたもの」

思い返せば、『偏向射撃』習得に行き詰まればすぐに彼の元へと歩み寄っていた。そのせいで、彼自身の時間が減っていたことに、今更気づく。

「…狙撃は、私自身の力で伸ばしていかないといけませんわね」

セシリアは決心した。自分のメインウェポンである『スターライトmk-III』に重点を置きつつ、『偏向射撃』の扱い、戦い方を学ぶのだと。

◇

「かんちゃん、そろそろ休憩…朝ごはん食べよおよ」

「ダメ…、後、ちよつとだから…」

「さつきからそればかりだよお？全然寝てないんでしょ？」

「…大丈夫。徹夜ぐらい、いつもしてる」

そういう意味じゃないんだよお、と、布仏本音の嘆き声が、整備室に響く。

本音が簪を止めようとする理由はただ一つ。このまま無茶をし続け、いずれは時守と同じ道を辿りかねないからだ。

徹夜は慣れていると言った簪だが、本音から見ると、それがたった1日で終わるわけがない。あの簪なのだ。きつと時守が帰ってくるまでは意地でも寝ないつもりなのだろう。

「けんけんも、帰ってきた時に元気なかんちゃんといちやいちやしたいと思うよお？」

「…なら、その前の日で体調を整える」

「…も〜!!かんちゃん!」

「…ふふつ、冗談だから、本音。…キリがいいし、そろそろ片付けて行こう?」

「…むー…」

今までからかわれていたことに、本音の頬が膨らむ。本音がそう思ってしまうほど、簪はかつてない程集中していた。

「ねえ、かんちゃん。なんで、急に?」

「……本音なら大丈夫かな。…私ね、日本代表になりたい」

「……え?」

その理由を問うたところ、斜め上に行く回答が返ってきた。

「…確かに、織斑先生の後釜だし、重圧も凄い、と思う…。でも、剣やお姉ちゃんの景色を見るには、それが一番の近道なの」

「かんちゃん…」

「それに、そろそろ影口も鬱陶しくなってきたから。…最有力候補とか言われてたけど、ずっと認められなくて、グチグチ言われてたし。正直、あんまり固執してなかったけど、今はなりたい」

恋人と姉と同じ景色が見たい。その願いのために、織斑千冬と同じ立場に立つ。簪は、日本代表という肩書きすら、踏み台にしようと考えていた。

「…戦闘スタイルは違ってても、私は私なりの代表になる」

「応援するよ、かんちゃん」

「…ありがとう、本音。…でも、ごめんね。多分、何回か剣とかお姉ちゃんと戦ったら、私は代表を辞めると思う」

「…なんで？」

近接重視の千冬と、中距離メインの簪。戦い方、魅せ方は違えど、必ず日本代表になると、簪は決意した。

決意すると同時に、本音に謝った。

「…私、代表として闘う剣のサポートがしたい。剣と戦いたい気持ちも無くはないけど、エンジンアとして、支えたい。…もちろん、お姉ちゃんやシャルロット、セシリアもね」

「…うん。その時は、手伝うね」

「…ありがとう」

片付けを終えた2人は、揃って整備室を出た。



「……………はあ」

自分以外誰もいない生徒会室で、楯無は一台のパソコンと向き合っていた。

そこに映されているのは、自分のバイタルデータ等を含んだ、I

S関連のファイル。スリーサイズなどに微妙な変更点があるものの、楯無の視線はそこではなく、とある一つのグラフに集中していた。

「…どおりで、最近負けがちなわけよね」

I S 『霧纏の淑女』の稼働率等の伸びが、芳しくない。さらに言えば、技能等は、夏休み終了時とさほど変わらぬほどに、上達していなかった。

「全く、いつから勘違いしてたのかしら。…私はまだ、教える立場じゃないのに」

更識家当主、I S 学園生徒会長、ロシア国家代表、それほどの肩書きを持っていても、楯無はまだ学生なのだ。まだ高校生活の折り返し地点にすら立っていない彼女が、自分自身を律するにはそれで充分だった。

「…元代表候補生の先生からも教わることはあるし、織斑先生みたいな元国家代表からももちろんある。…入学してからの剣くんみたいに、なれてなかったってこと、ね」

千冬が、『変わった』といった部分は、恐らくここだろう。

一年生の時の自分は、周りに教えることはあれど、基本は自分のスキルアップメインだった。だが、2年生になった自分は、自分の訓練を疎かにし、一夏ら1年生を教える時間に、自らの時間を使いすぎていた。

優しくすることは、甘くすることではないのだ。

「…また、本当に心新たに精進するしかないわね」

楯無は決意した。代表候補生時代、もしくは代表候補生になるために必死に努力していたあの頃の心持ちに戻り、I S に取り組むことを。

「…剣くん、待ってるわ」

生徒会室の窓の外を見る。

そこには、綺麗に晴れた青空が、広がっていた。

No one could start us a
l day—today.

「んっ、と。…おー。すっげ。マジで基地みたいやん、ここ」

国際連合宇宙開発専用ISステーションの中に入った時守は、臨時で貸し出されたラファールを待機状態に戻し、金属の床の上に降り立った。

到着する直前に、ナターシャが通信を入れた際に開いた入り口を見た時にも同じような声が漏れたが、中に入って改めて出てしまった。

まるでアニメやSF映画に出てくるような、宇宙船の中のような内装。かなりの高度にあるはずなのに、全く息苦しく感じないのも、何かの設備のおかげだろうか。

「ふふっ、どう？驚いた？」

「まあな。…資料で見た時は、正直こんなデカイもんやとは思わなかったし」

「…知ってたの？」

「…は？いや、俺国連代表やねんし、知らんわけないやん」

「じゃあ、なんであの時は黙ってたのかしら？」

「眠たかった」

隣でこうべを垂れたナターシャが、トボトボと歩き出す。その後をゆっくりと着いていく。

施設の廊下には、様々な人種が行き来しており、ガラス張りになっていいる部屋を見れば、数多のコンピューターが忙しなく数字を表示し続けている。

「なあナタル。ここで専用機使えんのって俺だけ？」

「えーっと…どうだったかしら。確か、イーリはいたはずだけど」

「あいつ暇人かよ」

一学期や夏休み、国連関連で時守がどこかに行けば、そこに必ずという頻度でそこにいるアメリカ代表。そんな彼女をずっと見続け

ていけば、さすがに予定が無さすぎるのではないかと思ってしまう。「あー、なるほど。あいつの性格やし、テレビとかにあんま呼ばれへんのか」

「それもあるし、代表候補生の数が多いっていうのもあるわね。アイドル的な面は候補生に任せて、代表はISに打ち込めるように、っていうのがアメリカの考えだから」

「なるほどねえ…。そういやさ、国連代表候補生の話、聞いてる？」
「ええ、もちろん」

時守が切り出した話題、それは一部では少し有名になっているものだった。

関西出身の初心者男性操縦者が代表になったことで、一気に注目を集め始めた国連。そしてそこで、世界中が気になるのは、もちろんその候補生のことだ。どの組織も国家も、ISにおいて代表がいるところには必ず代表候補生がいる。不慮の事故などで代表が亡くなった時などもそうだが、代表が退いた時に入れ替わるためである。

「過去、どこかの国で代表か代表候補生になったことがある者、よね？」

「そ。…んでさ、その候補生の候補の1人にな、ちっふー先生おんねん」

「知ってるわよ…。私も見た時にコーヒー吹き出しちゃったから」

あの元世界最強の千冬が、国連において自分より格下だと分かった時、時守は何とも言えない気持ちになると同時に、謎の寒気に襲われた。

「お、あつこちやうん」

「ええ、そうよ。あそこがメインルーム、家で言ったら、リビングみたいな所ね」

しばらく歩いていた2人の眼前に、これまた金属で作られた重厚なドアが現れる。今までただの一直線だった廊下を部屋と区切っているそれは、向こうの音などの一切を遮っていた。

そんな重厚なドアは、時守が前に立っただけで、いとも簡単に開いた。

「お、随分と早かったじゃないか」

「おつす、事務総長。来てたんすね」

「ああ、ここは国連の重要な施設のうちの一つだからね。それに今日からは、君のケアも入っているんだ。来ない方がおかしいよ」

「なるなる。んじや、早速行きましょか」

「…そうだね」

メインルームに入り、事務総長と一言二言交わし、ナターシヤに別れを告げた後、入り口から見て、メインルームの更に奥の廊下を2人で歩く。

「…にしても、どうしたんだい？いつもの君なら、廊下の途中にあった部屋に興味を示しそうなものだけど…」

「おもしろそうではあつたけど、…今の俺には、んなことに時間を割いてる余裕は無いしな。はよ治さな。…ん？どないしたんすか？そんな笑つて」

「ふふふ…。いやあ、つい、頼もしくてね。今の君なら、君自身にメニューを任せても良さそうだ」

「お、マジつすか？ちょうどやりたい事あつたんで良かったつす」

「…まあそれも含めて、全ては治療を終えてからだね」

「そうつすね。…はっ、はは…」

「ふふふ…、ふふふふ…」

2人の男は、うつすらと笑みを浮かべながら、静かに笑う。

廊下には、笑い声と靴音だけが、響いていた。



「さて諸君、おはよう。欠席は…時守が公欠で居ないだけか」

その日の朝は、今年度が始まつて一番と言つていいほどに不気味で、静かだった。

たった1人、たった1人の生徒が休むだけで、こうも変わつてしまふのだ。

「まあ居ないやつの事を考えるな、とは言わん。だが、あいつが帰つ

てくる時まで教室が静かすぎるのもアレだからな。お前達はお前達で、考えて動くように」

語尾に命令形こそ付けられないものの、その口調と雰囲気から、どう考えても『しろ』や『しておけ』という言葉が付いているようにしか思えない千冬の言葉。ある一部を除いてまるで通夜のように静まり返っている教室に染み入る一言だった。

「…そう言えば、時守のことで忘れていたが、また山田先生が出張で居ない。何か山田先生に用事があるなら私に言うか、職員室の山田先生のデスクの上にメモを置いておけ。…では、各自一限の用意をしておくように」

朝のSHRという名の連絡時間が終わり、千冬が出ていく。その数秒後、喋り出す者も出てくるが、やはりいつもと比べて雰囲気は暗いままである。

そんな時、先ほど千冬が出ていったドアが、また開いた。

「なーに、お通夜みたいになってんのよ」

「鈴…」

「おはよ、一夏」

開いたドアから一直線に一夏まで来た少女は、彼の幼なじみである凰鈴音だった。

「さつきちよつと考えたんだけどね、アタシ達がこんな風に暗くなること自体、間違ってるんじゃない?」

「どういう、ことだ?」

「だって、今回の剣のやつって、『金夜叉』の新武装とそのテストがメインなんでしょ? ってことは、どの道この時期にはアイツは居なくなってたってことよね?」

「そう、らしいけど…」

鈴の言葉も、今の一夏にはいまいち伝わらない。

同じ男性操縦者、専用機をもらった時期も同じ。学園で習っていることも全て同じ。なら何がこんな差を産んでしまったのか。答えは至って簡単。強くなろう、強くあろうとする意識、覚悟の差である。

その気持ちの差で、時守は一夏、箒、鈴、シャルロット、簪、セ

シリア、ラウラを一気に抜き去り、生徒として学年トップである楯無とほぼ並んだ。

もし、自分達が時守と全く同じ気持ちをもって、一学期から取り組んでいれば、彼の怪我をどれだけ減らせただろうか。その思いが、1組の専用機持ち達を駆け巡っている。

決意は新たにした。しかし、やはりこの1年1組の雰囲気を感じてみて、どうしてもナイーブになってしまう。

「あー、もう！鬱陶しいわね！」

「っ、お、おい鈴？いきなり何を…」

先ほどから俯き、小さい声で返事をする一夏に対して痺れを切らしたのか、鈴は一夏の机を叩き、物凄い剣幕で言い放った。

「そんなだけ腐ってたけりや腐ってなさい！どうせアイツのことだし、夏以上に成長して帰ってくるのを指咥えて待つてなさいよ！今のままのアタシ達候補生を7人同時に倒せるぐらいになってくるかも知れないのよ!?!アタシと簪は、それを考えて嫌だつて結論になったわ。アタシ達2人は代表になる。来年のモンドグロツソで、アイツと戦う。アタシは今の代表をボッコボコにして、簪は日本政府と世間に認めさせて、絶対にアイツとあの舞台で戦う。そうじゃないと、アタシ達の中でアイツと同格になれた気がしないのよ」

「鈴…」

「アタシの話聞いてどう思うかは勝手だけど、アタシや簪にまで差を付けられて暗くならないでよね。…じゃ」

いきなりやって来て、それだけ言った鈴は、入ってきた時同様、一直線にドアへと向かい、出ていった。

「鈴のやつ…」

「凄い、考えてたね。確かに、剣が居ないからって、普段もこんな感じなのは良くないよね」

「…だな。…だが、嫁の顔だけ見てそれを判断するのは、やめてほしいが…。ふああ…」

「ラウラさん、どうしましたの？随分眠そうですね…」

「…寝すぎて、眠いというやつだ」

「今朝も遅刻ギリギリだったが、そんなに寝ていたのか…」

この日、ラウラは珍しく遅刻しかけていた。普段は早起きし、一夏の部屋に行くことも珍しく無い彼女だったが、それすらもできないほどに爆睡していたのだ。

「だが、さっきの話で決めたぞ。私もドイツ代表になってやろう。…と言っても、実質ほぼ確定だがな」

「そうなのか?」

「ああ。軍隊長として鍛えられたのもあるが、何よりAICの存在が大きいからな。それと、話は変わるが…あのいきなりの激励は、きつと嫁に向けてのものだと思うぞ?」

「お、俺に?」

「ああ。恐らく同じ男性操縦者だから、と考えていることを言っているのだと思う」

「そんなくだらない考えは捨てろ、ってことか?」

「…何だ、分かっているのではないか」

一夏の返答に、ラウラは目を丸くする。今までの一夏なら、時守のように強くなる、みんなを守るように。と言った答えを言っていたが、今返したのは曖昧なものだったからだ。

「まあ、な。今まで考えて、言われて、負けて、ようやく分かったんだ。今までやってこなかった俺が、ずっとやってきた剣に勝てるはずが無い。なら、これからやればいいんだ。幸い、俺には一撃必殺の『零落白夜』と『雪羅』があるからな」

「…随分と、自分勝手に傲慢なことを言うようになったな。織斑」
一夏の、自己中心的とも捉えられる言葉を、教室のドアから千冬が聞いていた。

その手には教材を入れるための籠があり、次の授業のために入ってきたことが容易に分かる。

「っ、織斑先生…」

「だが、それでいい。あいつのことだ。お前が強くなれば、さらに強くなるだろうとするだろう。早くあいつと相乗効果を産めるようになれ」
「分かりました。…ならまず、本気の剣のSEを、1でも減らせるよ」

うにならないとな」

「…ふん。二学期になってようやく分かってきたか、この愚弟が」

ほんの一瞬だけ、姉として、千冬は一夏を激励し、教員として笑みを浮かべた。



「…え？もつかい言うて？」

「だからね、ここで全裸になるんだよ。君が」

「なんで？」

「栄養カプセルにバイ菌を持ち込ませないように、ときつきからずつと言ってるだろう!？」

「嫌やわそんなん。バイ菌ぐらいで死なへんって。唾つけときいや」

「…ああそうかい。なら、君はここから出る時、肉塊になって…」

「分かった分かった!!脱ぐから…脱ぐから女性陣こつから出してくれへん!？」

国際連合宇宙開発専用ISステーションのメインルームから少し進んだ所、時守のメデイカルルームの手前にあるコントロールルームで、時守と事務総長が少しの言い争いを繰り広げた結果、あっさりと時守が負けた。

「…なぜだい？君の肉体を細かく見るには、私は少し知識不足なんだよ…ここにいる女性陣は皆、そういう医療関係のスペシャリスト達だ」

「…男はおらんの？」

「君の怪我を治すのがこの部屋の一番最初の任務になるとは誰も思っていないくてね。ISと言えばまだまだ女性が主流だ…全裸にならないければならないここに、男性スタッフを配置するのも問題があるだろう。ISも外さなければならぬしね」

「……はあ、そうでつか。じゃあせめて、更衣室ぐらいは」

「もちろんそれぐらいなら」

手で差し伸べられた方向にある、小さなブースに入る。

人前に衣服を全部脱いだ状態で出るといふ、IS学園に入つてからはあまりしていない行為に、少しだけ緊張してしまふ。

「…はあ、てかなんでナタルとかもおんねん。絶対医療関係ないやん。他のスタッフさんも美人でスタイル良い人多いし。…はあ」

更衣室の中で、独りごちる。

中学時代の同級生と比べると、まるで女神のような美貌を持つ女性スタッフ達に、自分の全裸を見られるのだ。緊張しないわけがない。

「…脱いだで」

「…そう溜めて言われると、何だか風営法に引っかかるような気がするから、やめてほしいんだが」

「マジでぶっ殺すぞお前」

「冗談だよ。ちよつとしたアメリカンジョークさ」

ハハハ、と笑う目の前の男に、殺意しか湧かない。

彼から少し目を離してみると、女性スタッフに勢いよく視線を外された。そつぽを向いた彼女達の耳は紅くなっており、そんな反応を示された時守まで恥ずかしくなってくる。

前はタオルでしつかりと隠しているが、彼女達の指の隙間からは、どう見ても股間部に視線が向かっている気がする。

「あ、ちなみにそのタオルもカプセルに入る時は外してもらおうからね」

「何となく分かつてたわ。…てかさ、ちよつと寒いからはよ入りた いねんけど」

「もう少しだけ待ってくれ。…もうじき、準備が整う」

その言葉をきっかけに、動きを止めていた女性スタッフが慌ただしく動き始める。

直接言葉にせずとも、こうして部下を動かすことができる彼を見て、時守は少しだけ尊敬の念を抱き

「…さ、その邪魔なタオルと『金夜叉』を渡しなさい」

この社会の理不尽さを思い知った。



「…さて。日本の高校生にしては立派なモノを持っているようだが、目をくれるなよ？各自、しっかりと集中しろ」

全裸にした国連代表を栄養カプセルに突っ込んだ事務総長―ロジャーは、コントロールルームにて女性スタッフに指示を送り続けていた。

現在、栄養カプセルの中に入っている彼の身体には様々なコードが付いており、そこから送られてきた信号が、目の前のパソコンにめまぐるしく映されている。

「…呼吸は？」

「安定しています。脈拍、血圧共に異常ありません」

「ふむ。引き続き、時守くんのバイタルをチェックし続けたまえ。…さて、と。私達は別作業に移るとするか」

モニターで時守の様子を確認するのを、女性スタッフの1人に任せ、ロジャーは別のデスクへとスタッフの数人を引き連れて移動する。

既にそこに待機していたスタッフを含め、10人に満たない人数がデスクの周囲に集まり、画面に集中する。

「ノーラ、今までの解析結果を」

「かしこまりました。まず、IS自体の状態ですが、多少部品の結合にズレが生じているだけです。ここの設備ならば、ほんの数時間で元の完璧な『金夜叉』に戻せるかと」

「なるほど、では…」

「しかしですね…」

「む？…どうした、何かあるのか？」

ノーラと呼ばれた、今までそのデスクに座り続けていた女性が、言い淀む。

時守とロジャーは、このコントロールルームに入った時に、彼女に『金夜叉』の待機状態を手渡し、分析してもらっていた。国連が管

理するISの整備スタッフでもある彼女が言い淀んだことに対し、ロジャーは疑問を抱いたのだ。

「その…変なんです。私が今まで見てきたISは、拡張領域が埋まっていないことや、単一仕様能力が発現しないことなどは多々ありました」

「…まあ、大半がそうだろうね。拡張領域をフルに使っているISは少なくないが、単一仕様能力が発現すら難しいからね」

「ええ。…ですが、今の『金夜叉』は、よく分からないもので拡張領域と単一仕様能力のロットが埋まっているんです」

「…なんだと?」

そんなこと、今まで聞いたことが無い。

シャルロットに与えられているラファール・リヴァイブ・カスタムIIには、確かに大量の武装が積まれているが、それはシャルロットが『ラピッド・スイッチ』の使い手だからである。また、一夏の白式も特例中の特例の一つだ。単一仕様能力である『零落白夜』とその武装『雪片式型』がロットを取りすぎていて、通常、ISに搭載されているはずの装備が、いくらか入っていないものもある。

だが、今回の『金夜叉』は訳が違う。原因不明だが、拡張領域と単一仕様能力のロット、それぞれが別で埋まっている。

「…ということは、ただ単に時守君が具現化出来ていない、ということか?」

「そうなりますが…『金夜叉』の成長率も、時守君との相性も最高なので…一体何が原因なのか全く…」

「なるほどね…少し、手強いな。こればかりは、時守君本人からの意見を聞かねば分からない、かな」

その場にいるスタッフでは明確な答えを出せなかった。だが、ロジャーはそれで終わらせるような男では、なかった。

「まあ彼が起きるまで指を啜えて待つ、というのもアレだからね。考えようか。…誰か、案を出したい者はいるか?」

代表の力でしか専用機の問題を解決できないなら、整備班はいい笑いのものになってしまう。それ以前に、自分が完全にお手上げ状態と

なっている事案を、長時間放置しておくことが我慢できなかったのだ。

「えっと、一つ、いいですか?」

「なんだね?」

「時守くんって、向こうでほとんどの生徒から心配されるほどに、傷ついてたんですよね?」

「…少しだけ語弊があるが、まあそうだな」

手を挙げた女性スタッフの話を聞く。少しおどおどしながら発言した彼女だったが、ロジャーに意外なヒントを与えることになった。

「なら、一番間近で体感してた『金夜叉』は、どう思ってたんでしようか、と考えたのですが…」

「…ナイスだよ、君。非常にいい意見だ。…なるほど、今の彼に足りないのは、他者とのコミュニケーションというわけか。…合っているかは分からないが、その可能性は大いにある」

『白式』は自らの主の命を救うため、半ば強制的に第二形態移行した。

『金夜叉』は、自らの主の願いを叶えるため、主に力を与えるべくして、第二形態移行した。

なら、『完全同調』を手に入れたことにより、主とより密接に関わることができるようになったコアは、傷つく主を見て、何を思うのか。

「…悩んだままでは、ISも成長できない、か」

◇

「…ああ、分かった。だが年末だろうか?今連絡する必要など…。なっ、何っ!?私が日本でぐうたらしてしまうかもだど!?そんなわけないだろう!…ああ。ちゃんと、年末前には一度ドイツに戻る。レーゲンを完璧に扱えるようになるという目標もできたしな。学園でのイベントもあるからいつになるかはまだ分からないが、レーゲンの整備もしつかりとやっておきたい。…うむ、しつかりと頼むぞ、クラリツサ」

「ねえラウラ。今のって、副隊長さん？」

「ああそうだ。：全く、変な所でお節介なやつなんだ」

「ふふっ、部下に慕われてるんだね、ラウラって」

「ああそうだ。まあ、そうなのだろうな」

放課後、アリーナのピットに、2人はいた。ISスーツのみを身にまとっている彼女達の身体には汗が滴っており、先ほどまで身体を動かしていたことがわかる。

「しかし驚いたぞ？シャルロット。まさか、あそこまで積極的に攻撃してくるとはな」

「万能型がウリだからね。カウンターの一辺倒になるのはもったいないと思ってるさ」

「悪くは無い、いや、むしろ良いと思うぞ。流星に、パイルバンカーを外したすぐあとにマシンガンで追撃するまでとは思ってなかったがな」

「あはは。。。回避能力も高い、ラウラだから試せたんだよ？」

つい先程の模擬戦、ラウラvsシャルロットは意外や意外、シャルロットの勝利で終わった。

終始攻めの姿勢を貫いたシャルロットの動きをラウラが捉えきることができず、地道にはSEを減らせたが、それ以上に減らされた。大まかな流れはこうである。

現在、彼女達は自分達の試合の反省をしながら、目の前の試合にも意識を向けていた。

「何というか、少しレベルアップした？」

「そうだな。私達が言える立場ではないと思うが、2人とも躊躇いが無くなったな」

彼女達の見るモニターに映っているのは、一夏と鈴の模擬戦だった。

今までの彼らの試合とはどこか違い、一夏はしきりに『零落白夜』と『雪羅』の発動タイミングと時間に気を使っており、鈴はその隙をついて近接戦闘に持っていつている。

「賢い判断だな。嫁は、自分から仕掛ける近接戦闘なら強いが、受け

身となると途端に弱くなる」

「まあ、『零落白夜』を発動させて離れられる、っていうのが一夏にはダメーじになっちゃうからね」

「あそこからどう持っていくか、だな」

「答えはもう、織斑先生が何となく出しちゃってるけどね」

攻められて弱いなら、どうするか。答えは千冬の動きにあった。

決められる前に決める。相手に一切の流れを渡さない、まさに瞬殺。

だが一夏は今回の模擬戦で、敢えて自分から動いていないように見えた。

「…恐らく、対ゴーレム戦を想定しているのだろうか。数で攻められては、白式は弱すぎる」

「…なるほど。だから、ああして通常状態の『雪片式型』で攻撃を受け流しつつ、カウンターを狙ってるんだね」

「そういうことだろうか」

近接戦闘で強くなりたい鈴、完璧なタイミングで『零落白夜』を発動させるカウンターを習得したい一夏。目的がどちらも近接戦闘の2人は、誰に言われるでもなく模擬戦を開始していた。

IS学園1年生専用機持ち達は、着実に成長しようとしていた。



「お嬢様、今日はどうなさいますか？」

「そうね、生徒会でやることはもう終わらせたし、今日はアリーナで自主練するわ」

「…はい？え、えっと…。かなりの仕事があったはずですが…」

「うーん…、確かに多かったけど、2、3時間でしばらく先の仕事まで済ませたから、虚ちゃんも大丈夫よ？」

「は、はあ…」

「そんなことよりもね、虚ちゃんに手伝ってほしいことがあるの」「っ、手伝って、ほしいことですか？」

虚は耳を疑った。あの完璧で、何でも一人でできる楯無が、従者である自分を頼ったのだ。遡れば、『霧纏の淑女』の調整以来、このような真面目な案件で頼られたことは無かったかもしれない。

「そう。…最近、私自身甘くなってきたと思うの。だからね」

振り向きざまに、楯無は微笑みながら虚に告げた。

「織斑先生の全盛期の機動データと私のデータを比べてちょうだい。虚ちゃんなら、比較しながらでもどこが劣ってるとか私に送れるでしょ?」

「た、確かにできますが…。この短時間で織斑先生の全盛期は…」

「ええ、不可能だと思うわ。…でもね、代表としての技量で、何が足りないのかを知るには、もってこいの方法なのよ。だからお願い。遠慮なんてせずに、どこが劣ってるか教えてちょうだい」

「…そこまでおっしゃるなら、分かりました」

主の強い主張に、虚は頷きざるを得なかった。

久しぶりに見たのだ。ここまで何かに熱中する楯無を。

久しぶりに感じたのだ。主である楯無から、恐ろしい程の闘気を。

そして、久しぶりに思い出したのだ。

(そうですよ、お嬢様。お嬢様はそうであるからこそ、楯無であり、刀奈なのです)

圧倒的なカリスマを誇る主が、まだ成長しようとするその姿に感じる喜びを。

校舎の外を歩き、アリーナを目指す途中、ふと虚は空を見上げた。

「…いい、訓練日和ですね、お嬢様」

「そうね。朝はもう少し晴れてただけど、これぐらいがちょうど良いかも」

その空には、朝の空には無かった雲が、少しばかり浮いていた。

Equation of Winis about
to be established.

「…ん？おや、または徹夜をしてしまったようだな」

「…そう、ですね…」

「まあ地球の周りを公転しているこの国際連合宇宙開発専用ISS
テーションには、時間の概念などあつてないようなものだがね」

「……は、い…」

「…どうした？疲れたのか？少し寝ていないぐらいで情けないぞ
？」

「寝させてください…」

「ふむ…どうやら限界のようだな。良いだろう、7時間の仮眠を許
可する。風呂や食事の時間は入れておかないから、ゆつくりと休みな
さい」

「ありがとうございます…」

「ここまでしばらく寝ることなく、働き続けてくれている部下の1
人に労いの言葉をかけ、休ませる。」

「日本でいうところの、現在3徹目。ロジャーは一睡もすることな
く、疲れた素振りも見せぬままパソコンと向き合っていた。」

「…しかし、死屍累々だな。こら、君。そんなだらしない格好で寝
るんじゃない。タンクトップからブラジャー…さらに言えば谷間が
大きく見えているぞ？」

「…え？…ああ、もういいです…。どうせ、ここはロジャーさん以外
みんな女性ですし、貴方は奥様一筋で有名ですし…」

「…ふむ。なら一応この様子を写メで時守くんを送るとするか」

「何が一応…！あつ、ダメ…。立てない…」

「パシヤリ、とシャツターの切れる音と共に、時守の携帯にトーク
アプリからの通知が来た。」

「うっかり学園で開いてしまえばいらぬ誤解を招いてしまいそう
な写真だが、時守がそれをどうするかはロジャーの知った所ではな
い。」

い。

「はあ…。これでいよいよ、まともに動けるのは私だけか。…君、とりあえずこのブランケットを羽織りなさい」

「あり、がとう…ごいいます…」

「構わんよ。…時守くんが完治するまで後…47時間程か。まだ余裕がある、な。今後の予定でも決めておくとするか」

数台のパソコンで時守が入っている栄養カプセルの制御をしつつ、その片手間でカレンダーに予定を打ち込んでいく。

「まさか、金夜叉があんなことになっていとは思わなかったが…。思わぬ誤算、だがそれも予想の範疇。むしろ好都合だ。予定よりも低予算ですむ。…ただ問題は、期限が間に合うかどうか、だな。IS学園には千冬くんを通して連絡できるが…。どうも、ああいったイベントを時守くんが逃そうとするようには思えんしな…。どうなるかは、彼が目覚ましてから、か。…やれやれ。こんなイベント、過去に一度も無かったはずなのだが…」

他人の目が本格的に無くなったこともあり、ロジャーの独り言が加速していく。

デスクの上に乱雑に置かれている資料の中にある、とある一枚の紙に目をやる。

全学年専用機持ちタッグマッチ。近々IS学園で行われるというイベントである。数時間ほど前に、ロジャーのパソコンに送られてきたものをプリントアウトしたそれには、参加者となるであろう生徒達の名前が記載されている。

織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識簪、更識楯無、フォルテ・サファイア、ダリル・ケイシーの全10人に加え、時守が仮に登録されている状態である。

時守の性格から考えて、人数が奇数になれど、参加の意思を示してくるだろう。…だが、そうなると足りないのだ。

「…行かせるわけにはいかない。まだ、不完全なんだ…。こんな短時間で完成するとは思えんが、その可能性すら潰したくはない」

圧倒的に時間が足りない。

せつかく、数日前に手に入れたヒントがあるのだ。その解次第では、時守は大きく飛躍できると、ロジャーは確信している。

「日に日に、見えるだけでも身体が良くなっているのが分かる。：今まで傷つけてばかりいた身体に、休息と栄養を与えればこうなるのは当然なのだがね」

作業を一旦やめ、コーヒーを口に含む。時守が入っている栄養力プセルのある部屋はガラス張りになっており、肉眼でも時守の様子が良くわかる。ここに来たときはまだ年齢にあつた体つきをしていたが、今は身長や髪が伸び、全身の筋肉量も増えている。

「こんな逸材を早く学園に戻したいという気持ちは充分分かる。だがね、逸材だからこそ君よりも慎重に、かつ大胆に育てたいのだよ、千冬くん」

身体はしっかりと治りつつ、筋肉も増量されてきている。戦闘は千冬のお墨付きで、人望も厚い。そして何より、過去に類を見ない程のISの操縦才能を秘めていると、ロジャーは推測している。

そんな彼に、思わぬ変化を遂げたISが味方につくのだ。そしてその進化の過程を最も間近に見ることができ、さらに言えば自らの手で、その行く末すらも左右される可能性があるとも、ロジャーは判断した。

「まあまずは、ゆっくりと力を蓄えてくれたまえ。未来の世界最強」
ロジャーはコーヒーをもう1度口に含み、薄らと笑みを浮かべた。



「箒、全学年専用機持ちタッグマッチのことなんだが…」

とある日の休憩時間、一夏は箒に声を掛けていた。その理由は他愛のない話でも、世間話でもなく、数週間後に迫った全学年専用機持ちタッグマッチについてだった。

同じ篠ノ之束作のISだから、という訳ではなく、一夏は箒に声

をかけた。のだが。

「…すまない一夏。私は、楯無さんと組むことにした」

「そうなのか。…なんでよりにもよって楯無さんと?」

自らの思い通りにいかなかったからといって、怒る一夏ではないが、あの箒が楯無と組んだことに違和感、というか疑問を持っていた。「…勘違いしてもらおうと困るから言うが、何も優勝したくて楯無さんにペアを申し込んだ訳ではない」

「な、なるほど…。…ん?箒から申し込んだのか!？」

「…なんだ。私から申し込むのがそんなに珍しいか」

一夏が今まで彼女を見てきて、自分以外の人間にそこまで積極的に話しかけるような女性だと感じていなかった。こういうと確実に怒られると思うが、正直このように感じていたのは事実である。

「…私は、特別な訓練を受けずに専用機を貰った、たった1人の女性操縦者だからな。駄々をこねていた自分の責任でもあるが、紅椿に振り回されすぎている。…むしろ操縦者として認めてはくれないのではないか、と思つてな」

「東さんが箒専用に作つたんだろ?それは…」

「関係ないかも、と思つたがな。…一夏も、私の性格を分かっているだろう?」

「…ああ、そういうことか」

「そういうことだ…。ふふっ」

2人の中に、少しながら笑いが起きる。

箒がそこまでして自分の考えを貫くための、答えはただ一つ。自分がそうだと思つたからである。

負けず嫌いが故に、自分が操るISぐらいに認められるぐらいの実力は身につけたいのだ。

「だから、楯無さんに」

「ああ。楯無さんには教わることは多いし、何よりも近接武器を使った中距離戦闘という点においては、ほとんど同じだからな」

「蒼流旋と空裂、雨月…。そういやそうだな」

さらに、お互いに、近接武器としても使えるが、中距離武装にも

なる武器を積んでいる。操縦技術だけでなく、立ち回りなどの戦い方も教わろうという魂胆だ。

「分かった。そういうことなら、大人しく引く。…その代わり、驚くなよ?」

「ふんっ、それはこっちのセリフだ。そもそも、まだペアが決まっていないうちに言われたくはない、がな」

「うぐっ! そう、なんだよなあ…」

「私の他に誰かいないのか?」

「えっと…」

各人の返事を少しばかり、思い返してみる。

シャルロットはラウラと組むと言っていた。今まで仲が良かった2人だが、ペアとして出たことが一度もなく、力を試す良い機会だと言っていた。鈴は、セシリアと組むらしい。というか、鈴と話しているその途中に、2人の横をセシリアが通り鈴がペアを申し込んだのを目撃した。もちろん、セシリアはそれを承諾。2年のフォルテ・サファイアとダリル・ケイシーはお互いに組むらしい。

「…簪さん、だけだな」

「まあ、白式の件は簪が許しているみたいだが…。早めに行ったほうがいいぞ?」

「分かってるさ。…流石に、今日中にペアを申し込んで、鍛え始めないとな」

もう、他のペアは訓練を開始しているだろう。それどころか、普段仲のいい者同士組んでいるペアが多い。あまり時間を共にしたことがない一夏と簪には、一秒でも多くの時間が必要なのだ。

「そうか。…なら、私ももうそろそろ楯無さんの所へ向かう。…じゃあ、また明日、一夏」

「おう。また明日、だな」

教室の前で箒と別れた一夏は、4組へと向かう。4組に居なかったら、高確率で整備室か、部屋に籠ってアニメを見ているという情報は事前に本音から手に入れていたが。

「おっ、いたいた」

「…え？…一、夏？」

運良く、一番最初に訪れた4組に、彼女はいた。居残りで勉強をしていたのだろうか、今まで机に向かっていたようである。

「よっ、簪さん」

「…もしかして、全学年専用機持ちタッグマッチのこと？」

「…なんだ、知ってたのか？」

「うん。…なんとなく、私は最後になりそうだったから」

「…ん？なんで？楯無さんに先に声を掛けてれば…」

「それは嫌」

簪が示したのは、明らかな否定。だが、姉である楯無を嫌悪しているという理由ではなく、もっと前向きな意見での、否定だった。

「いつまでもお姉ちゃんに頼ってばかりじゃ、弱いままだから。」

…ロシア代表の力を借りて、日本代表になりたくない」

「そういうこと、か。なんか、似てるな、2人とも」

「むっ…。剣でもないのに、似てるのかな。私とお姉ちゃんが似てるのは、好きな人といろんな所の色だけ」

「わ、悪い。なんだかんだ、姉妹揃って剣を好きになるって、すごいよな」

「…そう？…といっても、私とお姉ちゃんじゃ好きのレベルが違うけど」

「え？…そう、なのか？」

「…別に聞きづらそうにしくなくても大丈夫。私は、人並みに愛してくればいいって思ってるけど、お姉ちゃんは分からないし。同室とか、知り合って長いっていうのもあるから」

「…ほう」

「…絶対分かってないでしょ…。…もう、私達と剣の話はこれで終わり。…早く申請書出してきて。整備室で待ってるから」

いつの間にか一夏の持っていた申請書に名前を書いていた簪は、静かに立った。

◇

「…あら、箒ちゃん。いらつしやい。早かったわね」

「はい、授業後すぐに来ましたから。…楯無さんは、いつから?」

「そうねえ…、朝からずっと、つてどこかしら」

「なっ!?そ、そんなに早くからですか!?!」

箒がアリーナに着いた時、既に楯無は全身を汗で濡らしていた。

額や頬、腕や腿には汗が溢れるように浮き、顎や手先などからは、一定のリズムで落ちていく。

「ええ。提出物も、生徒会の仕事も、ロシアへの資料も、全部終わらせたの。存分に打ち込める環境が欲しくて、ね」

「お嬢様、そろそろ休憩なさった方が…」

「…流石に、剣くんにあれだけ釘を刺してた人間が、潰れる訳にはいかないっていうのは理解してるつもりよ?自分の限界は自分で分かっているわ」

滝のような汗を流しつつ、楯無は呼吸を整える。『霧纏の淑女』を展開し、武器を出さずにこの汗の量ということは。

「…機動の練習、ですか?」

「ええ、そうよ。良く分かったわね」

「その汗の量を見れば、何となく…。でも、楯無さんにまだできない機動って…」

「あるわよ、いくつか。まだ世界で2人しか成功していない、しかもその内1人はほぼ反則技を使ってしかできない機動が」

「…まさか、剣と、千冬さんですか?」

「…すごいわね、箒ちゃん。良く見てるじゃない。…織斑先生と、剣くん。2人とも、全ての機動技術を繋げることができるようよ。…最も、剣くんは『完全同調』を使ってる時だけなんだけどね」

「それを、できるようになると?」

「まあ、極力ね。…いきなりだけど、次のモンド・グロツソからは第2形態移行は当たり前、単一仕様能力の撃ち合いになると、私は予想してるの。…もしそうならなくても、剣くんがいる限り私の持っているアドバンテージはほとんど無くなったも同然。なら、基礎から叩き

直すしかないでしょ？」

「…はいっ」

楯無の予想は、近い将来に実現されるかもしれない。

男性操縦者が2人とも、ISを第2形態移行させ、単一仕様能力を発現させたのだ。長時間乗っている女性操縦者が発現させるのも時間の問題だろう。

ならばどこで差がつくか。単一仕様能力の個性の差と、単純な操縦技術である。

「だから、一緒に頑張らしましょう？ 箒ちゃん。箒ちゃんも、代表とか、候補生については考えているんでしょう？」

「っ、ええ…。一度、断りましたが」

「あら、そうなの？」

「はい。もちろん、日本でなりたいですが…、日本だと、一夏や簪と競えないと思ったので」

「ふふっ、なんだかんだ言って、箒ちゃんも負けず嫌いなものね」

「なんだかんだは余計ですっ！」

楯無監修、虚の監視の元、2人はトレーニングを始めた。

◇

「…はあー、疲れましたあ…。久しぶりですよ、こんなに疲れたのは…。あれ？先輩？」

「ん？…なんだ真耶。今のは私に向けて言っていたのか。独り言だと思っただぞ」

「酷いですよー」

まるでスライムのように机に倒れ込む真耶を流し目で見つつ、千冬はコーヒーを淹れる。

元々、自分の休憩用として1つだけ淹れようとしていたが、後輩のあまりの疲れ様にもう一つのカップに注ぐ。

「真耶。お前、確かブラックは飲めないんだっただな」

「はえ？…はい、苦いのは無理ですが…。もしかして、淹れてくだ

さってるんですか?」

「まあそんなところだ。今回ばかりは、流石にお前にも苦勞をかけるからな」

今回、というのはもちろん全学年専用機持ちタッグマッチのこと、に加え、時守の長期公欠のこともある。

真耶の役割としては、周りの生徒のメンタルケア、時守がいなくなることによる予定のキャンセルなどが挙げられる。

「だうー…。心に沁みます、このコピー…」

「キャッチコピーのように言うな、馬鹿者。そっちは…それほど、なのか?」

「いえ、先輩の仕事量に比べれば、まだまだマシな方ですよ」

「そうか。…すまないな、慣れないことをさせてしまつて」

「大丈夫ですよ。こうでもしないと、学園が回りませんから」

今回、真耶に割り当てられているものの中で、最も重要なものと言われれば、学園における千冬の緊急時における権限を、一時的に借りていることだろう。

全学年専用機持ちタッグマッチにおいて、千冬は様々な動きを強いられている。亡国機業への警戒を怠らないようにしつつ、毎日、数人ずつの教員に指導をしている千冬が、普段の学生生活の中での緊急事態に対応できるはずがない。

そこで、白羽の矢が立ったのが、一組副担任でもある真耶だった。

「何も、寮官の仕事まで奪わなくてもいいとは思うがな」

「理事長達も、流石に生徒達だけでは不安なんだと思いますよ? I S無しでも戦える先輩は、心強いですから」

「…その言い方だと、どうも私が都合のいい化け物だと思われるようだが?」

「こ、言葉のあやですよー」

ぶっちゃけるとそうなのだが、このI S学園で段違いに強い、というのもまた事実である。

元代表や、元代表候補生の教員は、思ったほど多くない。寧ろ、企業からの引き抜きや、卒業生を雇っている方が多いこのI S学園で

は、いざという時の戦闘要員がさほど多くなく、また狩り出せるIS自体も多くない。

故に、生身でも、そしてISでも、全教員がある程度戦えるように指導するのが、この数週間千冬に与えられた指名である。

「先輩の方は、どうですか?」

「…まあ、教員になって戦うと思っていた者が少ないこともあって、少し手こずっているのは確かだ。皆に得手不得手があるのは分かっているが、流石に侵入者を相手に生身で打撃を加えられない、というのはな」

「ISでしか戦わないって思い込んでましたからね、私も。そう考えると、やっぱり女性が強いなんていう風潮、そもそもおかしかったんですね」

「当たり前だ。女性ではなく、ISが強いんだ。…そもそも、そのISの未来も1人の天災の手に委ねられているぐらいだからな」

「…篠ノ之博士って、ISが男性でも乗れるようにすることもできるんですか?」

「さあな。本人からは、あまり詳しく聞いていない」

詳しく、ということとはできるかどうかは知ってるんですか?とは、聞けない真耶であった。

教員達の危機意識の低さもそうだが、ここまで侵入者対策をしてこなかった学園側、そして何より、何も対応できなかった自分に、堪忍袋の緒が切れかかっているのだ。

その雰囲気、外に漏れだしているのだ。恐ろしくないはずがない。

世界最強という肩書きを疎ましく思ったことは数え切れないほどあったが、それと同時にその責任も、同じ数だけ感じてきた。それなのに、このざまだというのが、千冬は許せなかった。

「まあなんであれ、これ以上学園を脅かす者はこの私が許さん。例え束でもな」

「それは私ですよっ!次で捕まえられなかったとしても、いつか見つけてみせます」

「おい…、いや。真耶は捕まえるだけでいいか。その後は私がする」
「その後…って何するつもりですか!？」

「害を加えてくる者には、それ相応の罰を与えねばならんということだ」

「先輩が言うど洒落になりませんよー!」

職員室は、緊張感と普段の雰囲気と程よく混じっていた。

空は、少しだけ雲が増え始めていた。

A f t e r t o b e d e c i d e d p a r t n e r .

「さて、と。どうするか」

「…どうするも何も、訓練しかないでしょ？」

「いや、まあそうなんだけどさ。まず何から手を付けるかなーって」

「…まあまずは、作戦から？」

「作戦って言っても、俺が近距離で、簪さんが中距離で決まりじゃないのか？」

一夏と簪は、ひとまず整備室の一角に腰を下ろしていた。

他のペアが恐らくもう訓練を始めている頃だとは思う。だが、何の目的も決めずにとりあえず、というのは愚策だという意見が合致したため、一旦は作戦を立てようとしていた。

「…得意な得物だと、そうなるけど…。多分読まれると思う。…後、ただでさえ燃費が悪い白式が、2対2の試合中持つか、っていう問題もある」

「あー…そっか。悪いな、簪さん」

「別に、いい。変に特徴の無い機体の方が作戦立てにくいから。…こうなると、相手によつて変えた方が良いのかも」

一夏と簪ペアの鍵は、言うまでもなく一夏の白式の使い方だ。有り余る機動力と攻撃力を考慮した上で、対戦相手も作戦を立ててくるし、それをこちらも読まなければならない。

そこで簪が提案したのは、戦う相手によつて作戦を変える、というものだった。

「そんなことできるのか？」

もちろん、一夏から疑問が飛ぶ。

自分達のミスが出てしまうかも知れない、というのものもあるが、付け焼き刃が相手に通用するかも分からないのだ。

「…ペアだからこそ、出来ることもある。私の打鉄式式には、いろんな武装が積んであるし、なんとかかできる…というよりしなきゃダメ」

「なるほどなあ…じゃあ、俺が零落白夜をセーブしながら、簪さんメインで戦うとか?」

「…考えたけど、無し。セーブするってバレたら、確実に2対1の形で潰されるのがオチ」

「…簪さんは、いい案あるのか?」

「あるにはあるけど…ちよつと、せこいつていうか、汚くなりそう」
簪が一夏への提案を渋り、名案を期待していたのには理由がある。

一夏は、良くも悪くも真っ直ぐで、素直である。簪の提案では、一夏の気を損ね、これからペアとして戦っていく中で、支障が出るかも知れない。

簪の脳内にあるのは、一夏の思い描く真っ向勝負ではない。勝負を早く終わらせることもできるだろうが、良い目で見られる保証はない。

「大丈夫だって。…今なら、勝つことには必要なこともあるって理解できる。それに、勝てたらみんなも、簪さんの作戦が良かったって言うさ」

「…一夏がそれでいいなら、良いんだけど」

「ああ、大丈夫だ。簪さんがどんな作戦を立てても、俺はそれに従う。…というより、俺自身いい作戦とか考えれないからさ」

「…なら、私の作戦でも大丈夫?」

「さつきから言ってるだろ? 大丈夫だって、俺は簪さんを信じるよ」

「…分かった。なら、作戦を言うね…」

簪から告げられた作戦。それは――

◇

「はあ? 真っ向勝負う?」

「ええ。武士たるもの、というやつですわ」

「アンタにもアタシにも武士の要素ひとつも無いんだけど?」

時を同じくして、セシリアと鈴はアリーナの更衣室にて作戦を立てていた。ペアを申し込んだ鈴が考えようと提案したのだが、予想に

反し、即答がセシリアから返ってきたのだ。

「ただの比喩ですわ。これが一夏さんなら、もう少し変わったかも知れません。ですが、鈴さん自身も甲龍も、無駄に縛るには惜しいほどの逸材だと、私は思っています」

「そ、そんなドストレートに言われるとちよつと恥ずかしいんですけど…」

「ですから、私が鈴さんに合わせますわ。鈴さんが近・中距離、私が後方からの援護射撃。得意分野、セオリー通りに攻めようかと」

「なるほどね。なら、アタシから一つだけ提案していい？」

「ええ」

セシリアが鈴に提案したのは、一夏・簪ペアとは違う、奇策でもなんでもない、王道の戦法だった。接近戦が得意な鈴に近接を任せ、遠距離から自分が援護する。さらにそこに、

「今までよりもガンガン攻めたいんだけど、大丈夫？」

「もちろん。というより、最初からそうするつもりでしたわ」

鈴の提案により、その戦法は超攻撃型のものとなる。

「アタシもさ、衝撃砲に不満があるって訳じゃないんだけど、近接で強くなりたいのよ。アンタも簪とかに遠距離で負けたくないでしょ？」

「そう、ですわね。自分で得意分野だと思ってますから、中距離メイの簪さんに負けてしまったら私の立場が無くなってしまいますもの」

「そ、だからあたしも、近距離は負けたくないの。一夏にも、箒にももちろん剣にもね」

時守が参加できるか分からないが、その3人をあえて挙げた鈴。その口調からは、負けたくないというよりも、負けたくないという意志が感じられた。

「剣さんに、ですか？」

「むっ…もしかして、アンタも無理だとか思ってるの？」

「…も、ということとは」

「朝から散々クラスメイトと担任に言われたわ。…あんな短い期間

であいつに出来たんなら、アタシも同じだけやればできるかも知れないってのに」

「…あ。そう、ですわね。普通に考えたらそうですわね」

「何よその意外なものを見たかのような目は」

「いえ。鈴さんが意外と賢かったので」

「ペアじゃなかったらぶっ飛ばしてたわよ」

物騒な発言の後、鈴は一気にISスーツの皺を伸ばした。今まで会話も全て、鈴が着替えながらされていたのだ。

今回参戦するペアすべてに言えることだが、彼女達にはいかんせん時間が無い。だが、一夏と簪、楯無と箒といった特例を除き、彼女達は普段から仲の良い者同士でペアを組んでいる。組んでいるが故に、作戦の簡略化ができ、その分の時間を練習に充てられるのだ。

「ま、アタシ達の作戦は至って簡単。攻めるが勝ちってことで」「ですわね」

セシリアと鈴、鈴が転校してきてからなんだかんだで仲が良かった2人の作戦はいとも容易く決まったのだった。



「ねえラウラ。作戦なんだけど、どうしよつか」

「そうだな…。…うむ、ダメだ。私ではシャルロットが後方支援、私が前衛という作戦しか思いつかん」

「確かに、それじゃちよつと単純すぎるよね」

「…その考えがすぐに出てくる、ということは…」

「うん。僕も、それしか思いつかなかったんだ…」

「ぬう…」

セシリアと鈴の作戦が簡単に決まっていた頃、とあるアリーナの廊下に設置されているベンチで、シャルロットとラウラは眉間に皺を寄らせていた。

「どうせやるのなら、私達らしい戦法がいいたがな」

「僕達らしいっていうと、バランスがいってこと？」

「そうなるな。出来れば、私が妨害しつつ、シャルロットの手数も使って2人でSEを減らしていきたいんだが…」

「…うん、それでいいんじゃないかな。僕が接近した時はラウラが外から見て、ラウラが接近した時は僕が外から援護射撃って感じで」
「…なんだか、あつさり決まったな」

しかし、それも一瞬の内で、彼女達も鈴やセシリア同様、すぐに作戦が決まった。

最も、鈴とセシリアのペアとの明確な違いはあるのだが。

「まとめると、臨機応変に対応しつつ、私とシャルロットで前衛と後衛を切り替えていく、ということか」

「そうだね。…だから、重要になってくるのは」

「如何に私達の息が合うか、だな」

自然と、2人の口角が上がる。上手くいった時のビジョンは非の打ちようがないものになるだろうし、相手の翻弄される姿、驚愕する表情が目につかぶ。しかし、その域にまでコンビネーションを昇華させるのは、至難の業であることは間違いない。

だが、だからこそ、面白い。

「ははっ。…やるぞ、シャルロット。完成させよう、私達のコンビネーションを」

「うん。なんでか分からないけど、僕もちよつと楽しみになってきたよ」

気づけば2人して、ラウラはそうでもないかも知れないが、普段は見せない獰猛な笑みを浮かべていた。

彼女達もまた、この数週間を通して成長しようとしていた。



「えっ? 作戦?」

「はい。噂で聞いたのですが、ラウラとシャルロットのペア、そして一夏と簪のペア、鈴とセシリアのペアはもう作戦が決まったみたいです」

「なんだ、意外と早かったのね、皆。フォルテちゃんのところはもう決まってるとして、私達はまだ決めなくていいのかー、って聞きたいの？ 箒ちゃん」

「っーえ、エスパーですか!?!」

「箒ちゃん、貴女単純って言われたことないかしら?」

誰がどう見ても焦っている箒が、他のペアの進行状況を楯無に告げていた。

表情とセリフから考えて、楯無に箒の言いたいことが分からない訳が無いのだが、そんなこと、今現在驚愕中の箒が知るはずない。

「そんなことどうでもいいんです! 私達も何か作戦を—」

「二人とも間合いを見ながら攻めるって形でいいんじゃないの? 正直、私と箒ちゃんだとあまり色々なことはできなさそうだし」

「っ、それは、まあ、そうですねが…」

『紅椿』と『霧纏の淑女』

彼女達の操るその2機両方が、中・近距離の戦闘を得意とする。そもそも、まともな遠距離武装よりも近接武装の方が圧倒的に多いのだ。さらに、第4世代を操る箒と、ロシア代表である楯無。肩書きだけで見れば、苦戦はすれど、普通に戦えば勝てる相手の方が多いのだ。「だから、真正面から向かっていけばいいのよ。私はともかく、箒ちゃんはそれが一番強いんだし」

「…そうですね?」

「ええ。一夏くんには負けるけど、相手を瞬殺できるスピードだと、貴女がぶつちぎりの2位よ?」

「えっ、それって…紅椿が、ということですか?」

「もちろん。単一仕様能力が無くても、十分すぎる程に強いもの。…ここから先は、貴女自身で考えなさい?」

「は、はあ…」

振り向き、首を傾げる箒を見て、楯無は優しく微笑む。

しかし、再び前を向いた彼女の顔は、いつになく真剣な物となっていた。



「…ふむ、後数分といったところか。…短かったようで、意外と長かったな」

「事務総長。そりゃあ、ずっと徹夜してたら長く感じるでしょう…」

「そんなものか？」

「そんなものです」

時守が回復し終わる予定時刻の直前、ロジャーを含むほとんどの国際連合宇宙開発専用ISステーションの職員が、時守の入っている栄養カプセルの監視室に集まっていた。

「さて、もう一度確認しておくが、『金夜叉』は万全の状態なんだな？」

「はい。後は、時守くん本人による調整をするだけです」

「分かった、ならば待とうか」

職員の一人に視線を向けたロジャーは、会話が終わるとすぐに視線を元に戻した。

手元のタイマーは既に時守が出てくる予定である時間まで、ほんの数分を示している。

そして—

「…終わった、か」

あつという間にその時間は過ぎ、コントロールルームにけたたましいアラーム音が響く。

栄養カプセルの中を満たしていた栄養液のがどんどんと外に排出され、部屋の隅にある排水口から流れて行くのが、ガラス越しに分かる。

栄養液から、ちょうど顔を覗かせたところで、時守が目を覚ました。

『…えっ、ちよい。開かへんの？』

「まあ待ちたまえ。栄養液が全て排出されるまで、その扉が開くことはないんだ」

『ほへー。なるへそ』

久しぶりに目を覚ましたということとを全く感じさせない時守は、栄養液が全て抜けきるまで終始ぼーつとどこかを見ていた。

そして、栄養カプセルの扉が開いたところで、すぐさま外へと出た彼は、ガラスの向こうにいるロジャーに向けて

「服ちようだい」

「やはりそれか」

衣服を求めた。

時守が目覚めた瞬間に視界に入ってきたのは、自分を見つめる数十の大人達だった。目覚めたその瞬間だけでなく、自分が眠っている間もずっと見られていたことは分かりきっている。しかし、今までがどうであれ、動いている時に見られるのはかなわないのだ。

コントロールルームから、時守の最低限の衣服とISスーツを持ったロジャーが、時守の元へと向かう。

「あー…、ISスーツだけでええわ。どうせこの後すぐに動くんでしょ？」

「…本当に聡いな、君は。その通りだ。我々ではどうしようも出来ないことが発生した」

「うつつ。んで、どこ行けばいいんすか？」

ISスーツにすぐさまで着替えた彼は、ロジャーに質問しながら部屋を出る。

「…着いてきなさい。今まで君にすら見せた事の無い部屋だが、非常事態だ。やむを得ん」

「なんかやばいことでも起きてんの？」

ロジャーの返答に、時守は眉を顰めた。トラブルに良く巻き込まれるIS学園のことが、ふと頭を過ぎったのだ。

「安心してくれたまえ。IS学園のことではないよ」

だから、今は着いてきなさい。と、ロジャーはいつもとはどこか違う口調で時守にそう言った。



「はあ？金夜叉が動かん？」

「ああ。全くもって意味が分からないのだが、どこをどう直しても動いてくれないんだ。…少し前は表示にバグがあるぐらいだったんだが、数時間前に全く動かなくなったらしい」

「んで、それを俺にどうにかしろと」

「そうなるね」

「無理やろアホちゃうか」

久しぶりに聞く関西弁のツツコミにロジヤーの口端が上がる。しかし、それは単に時守との会話が楽しいからではない。

（…だめだ。この私が、1人の少年のみに全力を捧げたいと思っただけだ。立場上許されないことなのは分かっているが…）

栄養カプセルから出てきた時守の様子が、以前と明らかに変わっていたからである。

増えた筋肉、伸びた身長、髪の毛等々…。そして何より、どんなことよりも自分がすべきことを優先した考えに、ロジヤーは興味を抱いていた。

「つて言っただけ、やらなあかんのやる？」

「…ああ。そのために、君が『完全同調』した時にISの心層世界に入れるようにした装置がある、この部屋に連れてきたんだ」

「…マジ？」

「だから言っただろう？今まで君にすら見せたことのない部屋だった」

時守とロジヤー。2人が入った部屋は、なんの変哲も無い、ただのコンピューターと椅子が数個置かれているだけの部屋だった。

しかし、その実態は既存のISのパワーバランスを崩しかねない程の影響力を持った、最新技術の詰まった部屋だったのだ。

「それに、正式な完成には君の『完全同調』のデータが必要なんだ。『単一仕様能力』が使える程に専用機との相性が良く、かつ最大まで成長させたデータでないと、意味が無いからね」

「なるへそ。…てか『完全同調』して何したらいいんすか？」

「なに、実に簡単なことだが、君にしか出来ないことだ。…金夜叉の

コアとは、臨死した時に会っているね？」

「へ？…ああ、会ったことあるで」

「彼女から、問題を聞き出してほしいんだ。今の我々は、問題文と解答説明が分からない問題を解いている状態にあるからね」

どこを探しても、金夜叉が動かない原因が分からない。

ならば、金夜叉のコアに直接聞きに行けばいいではないか、というのがロジャーの考えだった。

「なる。んじゃ、とつとと始めた方がええな」

「…髪は、切らなくてもいいのかい？」

「実際、んなことしてる暇無いんやろ？髪ぐらい、IS学園帰ってからも切れるわ。とりあえず、1回やってみてや」

「分かった。…では、椅子に座って、合図をしたら『完全同調』を発動させてくれ」

「あいよ」

ロジャーに促される前に、時守は椅子に腰掛けた。

そして、指に嵌められた指輪から出た淡い光が時守を包み、全身から力が抜け落ちた。

◇

「ん…。おー、ここも久しぶりやな」

数ヶ月前に見た、真っ白な空間に時守は降り立つ。

相も変わらず、そこには何も無く、ただ延々と空間が広がっている。

「んで、どないしたんや？金ちゃん。そんなところに座って」

そんな空間の中で、時守を見つめる少女が1人。

『…話が、あんねん』

声を震わせながら、彼女は時守に近づいていった。

◇

「…はい、分かりました。時守が回復したと、生徒達に伝えます」

『頼むよ千冬くん。それと、帰るのはもう少しだけ遅くなるというの

も伝えてくれ。かなり難航しそうなのでな』

「難航、ですか？」

『ああ。金夜叉が次のステップに進むために必要だね。彼には今、金夜叉のコアと会ってもらっているんだよ』

「次のステップ…ということは、もしかして…」

「あくまで可能性の話だよ。過去最強の第二形態になるとは思っているが、そこから先は流石に分からないさ」

「そう、ですか」

時守が目覚めた日の、IS学園の放課後。千冬はロジャーに連絡を取っていた。時守の現在の状態と、どこまでの情報を公開しているのか、という確認のためだ。

『そっちはどうだい？レポートを見るに、皆が皆、時守くんから影響を受けているみたいだが』

「はい。全員が全員、試合用の戦いではなく、戦闘用の戦いも想定して訓練に当たっていますので、それなりの成長は得られるかと」

『なるほど。では、君たちはどうだい？』

「…元が高いこともありますが、ある程度の襲撃なら対応できますが…」

『流石に専用機が無いとキツイかい？』

「…はい」

ロジャーが問うてきたのは、生徒達の成長と、自分達教員のブラシクがどれほど無くせているか、だった。

千冬自身、教員達の相手をしてきて、ある程度は力が戻ってきていると思う。しかし、専用機を奪ってきた相手に対して、打鉄やラファールしか使えない自分達では、圧倒的に劣ってしまうことも事実なのだ。

『君の暮桜。アレもここで解析しようとは思っているんだが、どうする？』

「是非、お願いします。いつまでも地下に飾りのように置いておくのは、不本意ですのぞ」

『……そうかい、分かった。ではまた連絡する』

「はい。失礼します」

不気味な間の後、ロジャーは会話をすぐに終わらせた。

千冬がふと見た空は、薄らと雲が広がっていた。

Nucleic of endless batt
le is in the sky.

「なんや？話って」

「…そんなん、簡単や。向こうで皆から散々聞かれてると思うけど、
なんであんなに無茶したんか気になってんねん」

何も無い空間で、少女は、金夜叉は時守に問う。

「…やから、強なるためやって…」

「嘘や。ウチが、『完全同調』してる剣ちやんの心を読めへんども
思ってるの?」

「…ほな聞く意味無いやん」

「そういう意味ちやうわ!」

金夜叉の表情が、より厳しいものになる。過去数回、こういった
会話は少しだけだがしたことがある。

その時からはぐらかされていたが、この状況においてもまだ、本
音を言おうとしない主に対し、金夜叉は我慢の限界を迎えた。

「なんで1人だけ強なろうとすんねんってことや!せつちやんの使
い手だっておるし、何よりも他の娘がどう思ってるか分かってるやろ
!?!」

「ああ。よう分かってるわ」

「んなら—」

「やからこそ、俺は強ならなあかんねん」

「っ、アホツ!!」

金夜叉の拳が、時守の胸を叩いた。

「なんで頼らへんねん!ウチが出してもた不完全な単一仕様能力の
せいで身体がやばなるってのは最初に言ってたやろ!?!やのになんで
夏休みも、二学期も自分勝手に—」

「夏休みはしゃあなかった。んで、二学期はタイミングが悪すぎた。
そんだけの話や」

「っ!いい加減、ウチらを怒れや!」

「…は？」

意味が分からなかった。

自分が今、ここに来ている理由は全て自分の非にあると思ってるし、何よりもその原因となる怪我は、自分の自傷、自爆行為からのものなのだ。

にも関わらず、金夜叉は、時守の怒りの矛先を彼女達自身に向けてると激昂していた。

「なんで何もかも自分のせいにしとんねん！周りが弱いから剣ちゃん1人が背負うことになってんやろ！ウチかてそうや！ウチの単一仕様能力のせいで剣ちゃんは傷つかな全力で戦えへんようになってんやろ!?やのになんで—」

「別に、死んでへんからな」

「はあ!?!もし死んでもたら元も子もないやん！」

「単一仕様能力は、金ちゃんが俺を助けるために出してくれたもんや。皆は、そもそもそういう事があるって教えてくれる場が無かったからな。剣道やってた奴がいきなり戦国時代にタイムスリップして戦えって言われても無理やろ？俺は、夏にある程度は想定してやってたからな」

「でも…っ、でもっ！」

金夜叉の目尻から、雫が零れた。

「剣ちゃんが傷ついたのはウチのせいやねん！ウチが、もつとちやんとした、…単一仕様能力出してたらっ…、ウチが剣ちゃんを見極められてへんかったから…、ウチが…」

「大丈夫や、金ちゃん。もう治ったし、そう思うならこれから強くなったらええねん」

「うっ、ひぐっ…あう…」

時守の手が、金夜叉の髪を撫でた。

それと同時に、彼女の中で塞き止められていた物が溢れ出た。



「ずびくっつ！っ、あ、あ、あ、あ…。ずっぎりじだあ…」

「いや鼻水出しすぎやろ金ちゃん」

「ウチらかてな、ご主人や思た人が自分に乗ってズタボロになつたら嫌つちゆうことや。すうつ、ぶびい〜!!」

金夜叉が泣き止んだ後、時守は、彼女がどこから取り出したティッシュで処理をする彼女を見ていた。

もう涙は止まっているのだが、大量の鼻水の処理に追われる金夜叉を見て、思わず苦笑いしてしまう。

「てか金ちゃんそのティッシュどっから出したん？」

「へ？ 剣ちゃんの頭の中のイメージから、やけど？」

「…は？」

先ほどとは全く別の意味で、意味が分からなかった。

もちろん誰もが、突然目の前にいる少女から『あなたの頭の中からティッシュを取り出しました』と言われて、理解はできないだろう。

「あのな、この世界はな、ウチらISのコアと操縦者の精神でできんねん。やから、この世界で何をどうするかはウチと剣ちゃん次第つてことや」

「…はあ、なるほど」

「ほんまに分かつてる？」

「分かつてる分かつてる。つまりはアレやろ？ なんでもし放題つてことやろ？」

「まあせやな」

言外に、自身のイメージと金夜叉に蓄えられた知識によりこの空間が成立していると言われ、不思議な感覚を覚えつつも納得する時守。

そんな微妙な表情を浮かべ、適当な反応をする時守に、金夜叉は笑みを浮かべながら口を開いた。

「流石に生き物は難しいけど、この世界なら何でも出せる。今のウチの本気の状態で、ウチら同士で戦うことだつてできんねん」

「マジかよ」

「…もっかい聞けど、ほんまに事の重大さ分かつてる？」

「おお。つまりは次の段階へと進むためのステップやろ？」

「…まあせやねんけど、いきなり色んな機能とか搭載しても扱いき

れへんし、何よりもつとウチの動かし方を分かってもらいたいねん。ウチですら知らん、ウチのことすら知ってるレベルで」

「背中のホクロから毛え生えてるの知るみたいな感じか」

「例え汚すぎやろ」

時守の独特の答えに、金夜叉も的確なツツコミを入れる。

IS学園では珍しいそのやりとりにも、時守はどこか懐かしさを感じつつも、笑った。

「しやあないやん。俺やし」

「今のですっごい納得いったわ。…んしよつ、と」

「…ん？何してんの？」

このまま普通の会話を続けるのだろうか、という疑問が時守の頭に浮かんだ直後、金夜叉がISとしての『金夜叉』を纏った。

その時守の疑問に、金夜叉は当然ではないか、といった表情で言葉を放った。

「え？…戦わんの？」

「いやおい、さつきと言ってること矛盾しとるやんけ」

「この世界で筋肉痛やらになるわけないやん。あるとしても、戻った時の多少のたるさだけやで」

「それはよ言えや」

ここでなら、全力で戦っても、誰にも被害が及ばない。

今までなら、自分は傷つき、悲しむ人が出て、学園を救っていた。久しぶりのただの全力での訓練に、内心、ほんの少しだが、時守は燃えていた。

「んで？どうなったら金夜叉の整備できるん？」

「へ？…あー、それね。ぶっちゃけ、経験値的な問題で言えば全然問題ないねん。…いや、せやな、うん。これは一から説明した方がええな」

1人俯き、ぶつぶつと呟く金夜叉。決心したのか、1度言葉を切り、顔を勢い良く上げた。

「剣ちゃんっ！」

「なんや」

「いっぺん、ISの進化について説明するわ」

「第二形態移行だけちゃうん？」

「ちつちつち、まだまだ甘いなあ」

「…なんかめつちやムカつくわ」

まるで嘲笑うかのように、金夜叉（推定10歳）は時守に全力のドヤ顔を向ける。

どこか憎たらしいが、そうでもない。だからといって、腹が立たない訳では無かった時守は、そのあやふやな気持ちをどこに向ければ良いか分からなかった。

「あんな、ちつふーが言ってたように、ISってのはまだ未完成やねん」

「ちつふー先生呼び捨てとかすげえな金ちやん」

「…ま、まあそこは置いてや。未完成つちゆうことは、まだ先があるってことやねん」

「まあせやわな」

「てことで、ウチらにもウチらの限界分からんねん」

「…それだけ？」

「うんっ、それだけ！」

金夜叉は満面の笑みを浮かべていたが、時守の表情は真逆。言うなれば、『無』だった。

—んなこと知つとるわボケ。

そう言葉にしそうだったが、出してしまうえば目の前にいる少女が泣き出してしまうかも知れない。そんな良心が、彼の口を止めたのだ。

「…整備は？」

「もー…、せつかちな男は嫌われんで？…言うてまえば、剣ちやんが完全にウチを超えた時、やな」

「超える？」

「そ。第一形態移行はお試し期間。第二形態移行はISのコア、ウチらのご主人の力を認めた時。単一仕様能力は、一応完全に信頼した時ってなってる。んでや、そつから先が難しいねん。次に行くために

は、この心層世界でウチらを完璧に負かさなあかん。自分を知り尽くしたウチらの全力を、な。そつからは割と簡単やで。ただ、ウチらがもつと力になりたい。そう思うだけや」

「…んじやとりあえず、今はお前と戦えばええってことか」

「そゆことそゆこと」

ニヤリと、口角が釣り上がった。

◇

「…んあ?」

「む、起きたか時守君」

「ああ…、つと」

目を覚ました時守に、ロジャーは優しく声をかけた。

普段の彼なら時守が起きてすぐに、金夜叉の整備の方法を聞き出そうとしただろう。しかし、そうしなかったのには理由がある。

「どうしたんだね?その汗は」

「ちよつとあつたんです。…ああ、追加装備の製作、一旦打ち切つていてください」

「ふむ…、なるほど。どうやら君にしか解けない問題だったみたいだな。…それとだ時守くん。敬語、使いづらいなら普通に話してくれて構わないよ。ステップアップするために、私との間にそんなことは必要無いだろうからね」

「ああ。助かるわ。…そのついでに、もういつちよ助けてくれへん?」

その言葉の直後、身体を起こした彼の腹部から、尋常ではない音が鳴り響いた。

「よう考えたら俺何も食ってへんかったわ」

「…メニユーは?」

「鍋で」

◇

「びん」

「食いすぎやろ」

「…まあ、かなり食ったからな」

食事後、金夜叉とのやり取りをロジャーに話した時守は、再び金夜叉の元へと戻っていた。先ほども数十試合こなしていたが、まだ彼女の背中はずいぶん遠い。

ロジャーから告げられている滞在期間はおよそ2週間。その内の5日間は既に終わり、6日目ももうすぐで終わりを告げようとしている。自分の中で逆算してみるが、間に合いそうにない。

自分でも分かるほどに、珍しく消極的になっていた。

「ウチを倒せる、算段はついた？」

「さあな。よう考えたら、金ちゃんのことを何から何まで知り尽くせてないんは当たり前やし。何より、まだ本気の『ほ』の字を出すどころか出そうとすらしてへんのに勝てる気せんわ」

「…なんや、気づいとったんか」

「最後にフルボッコにされた時、やな。あん時、俺は『完全同調』を140%で使つとったけど、お前は何も使つとらんかった。…まあ、ISとしてのお前と今の具現化してるお前が別モンなんかは知らんけど、とりあえずまだ全然本気ちゃうってことは分かったわ」

「へえ…。流石剣ちゃん、やな。確かにウチとISの『金夜叉』はちよつとちやう。100%超えた辺りからはウチも自我無くなるしな。いわゆる暴走状態ってやつ？『完全同調』を200%まで出してもた時に暴走すんのもそのせいやねん」

食事前の最終試合、時守は初めて『完全同調』の割合を140%まで上げた。その時のことは曖昧にしか覚えておらず、何を使って負けたか、どのくらい時間で負けたかなどは覚えていない。

それほどまでに、自我をISに預けても勝てなかったのだ。その差は、嫌でも気づかされる。

そして、その会話の過程で『完全同調』で100%を超えた場合、目の前の少女の金夜叉も暴走してしまう、という事実に向き合ってしまった。

「どうにかならんのか？」

「流石にならんわ。あれはいわば、剣ちゃんの命令が最後の砦やねん。剣ちゃんの意味1つで、ウチらは何も考えへんただの暴走ISになつてまう」

「なるほどなあ…。んじゃ、ほんまに100%までで終わらさんとな」

「…せやなあ。でも1番は、周りの子らに助けてもらおうことやねんけどな」

「…まあそれもせやけど」

金夜叉の言い分は、時守がそうならない状況を周りが作れ、というものだ。

「剣ちゃんが強く言えへんのも分かんぞ？内半分は恋人、もう半分は友達や。そんな関係の人間に『雑魚いから俺のためにもつと強なれ』とか言うても、ブチ切れされて終わるだけや。そういう意味では、ヘイト役になってくれたちっふーには感謝やな」

「ぬぐつ…、バレとったか」

「当たり前やん。ウチやもん」

関係を壊さないように、かと言って嘘は言わず、自分の成長速度を抑えつつ、言外に周りを促す。

もちろん、そんな器用なことが長続きするはずもなく、こうして時守はここにいる。

「愛してるが故に、言えへんこともあるんやろ？」

「まあ、な。…複雑やなあ…」

「それは、IS学園に戻ってからやろ？今やることは簡単や。ただ、ウチの本気を倒すだけ。…もう休憩はおつけー？」

「ああ。ほな、やろか」

二つの黒が消え、何も無い世界に二つの黒線が現れた。

◇

所変わってIS学園のとある一室。2人きりのこの部屋で、空中に投影された映像の人物と、更識楯無は通話していた。

「うんっ、そっちはどうなの？」

『ん？別に大したことないで？ただ、極秘訓練漬けてだけで』

「んもう…、それって全然普通じゃないってことでしょ？」

『まあそうとも言わな』

「ふふつ。でも良かったわ。ちゃんと、元気になったみたいで」

『ああ。…簪達は？』

「みんなが集まると騒ぐからって、織斑先生が解散させたわ。…まあ、かく言う私も、皆と同じように騒ぎそうならいには嬉しいんだけど…」

『俺との電話でそんなってことは…、結構扱かれてるな』

「ええ。織斑先生は先生達への戦闘指導に当たってるから、データとの戦いつて感じだけど…まだまだ遠いつて感じたわ」

『ははっ、そりやそうや。実質世界大会二連覇やからな』

久しぶりの声に、心臓が弾む。

千冬から、彼が目を覚ましたと聞いた瞬間、今までのどんな時よりも素早く動いて千冬の目の前まで掛けたのを覚えている。

流石に8人が同時に話すと、こちらとしても喧しくなり、向こうにも迷惑がかかる。そこで、代表としてルームメイトであり、彼女の1人でもあり、年長者である刀奈が選ばれたのだ。

「そうね…、でも、私の目標達成のためにはそれぐらい強くならないといけない気がするの」

『カナの目標？』

「ええ、新しく立てたの。いくら剣くんでも、これは内緒よ？」

『…分かった。また会った時の楽しみにしとくわ。…つと、短かったけど、もう行かなあかんっばいわ』

「…分かったわ。じゃあ、気をつけてね」

『ああ。カナも、な』

「うん…」

無意識の名残惜しさから、会話を引き伸ばしてしまう。しかし、時差もあり、かつこちらよりも遥かに忙しいであろう彼の環境が、そんなことを許してくれなかった。

「なんだ、もう終わりか」

「はい。剣くんも、随分忙しいみたいで」

「まあな。お前にもあいつの予定を見せただろう？」

「…ええ、まさかあそこまで、とは思いませんでした」

話し声が消えたのが分かったのだろうか、通話の終わりと同時に、扉から千冬が入ってくる。

「場所が場所だからな。風呂は無く、娯楽は少なく、物資が届くのも遅い、といった環境で治療とトレーニングだけのメニューが組まれているんだ。無理もないだろう」

「そう、ですよね…」

最先端の治療技術がある国際連合宇宙開発専用ISステーションで、今時守がすることと言えばただ一つ。自らの状態を整えることである。改めてそのことの重要さを、そのスケジュールの過密さから、刀奈は悟ったのだ。

「なに、心配するな。あいつが元気な姿は見ただろう？」

「ええ…でも、やっぱり目の前で違和感なく動いてる姿を見ないと…」

「全く…。何の心配もするなどは言わんが、お前達ももう少しあいつを信頼したらどうだ？時守もお前達を信じているからこそ、学園を一時去る選択をしたんだ」

「分かっては、いるんですが…」

やはり、心配である。

もう一週間近く直接顔を見ていないのだ。同じ学校の、同じ寮の同じ部屋に住んでいるにも関わらず、生の声すら聞けていないのだから。

◇

「あー、会いたいなあ…」

「通話を終わって直ぐに惚気かい？」

「話せたんはカナだけやもん。シャルともセシリーとも簪とも話したかったのに…」

「今から予定を終わらせればギリギリタッグマッチに間に合うさ」
「んなもんかねえ…、…ん？」

金夜叉との訓練をしていた部屋を移動した2人は、別の部屋でIS学園と通話をし、先ほどそれを終えた。

その後、ほんの少しの雑談を交わした後、時守が座る椅子の隣に鎮座している重々しい機械から無機質な音が鳴った。

「これで終わり？」

「ああ、だが時守くん。それはいわゆるドーピングに近い代物だ。1日の多用は許せないよ？」

「んなもん承知の上や」

2人がこの部屋を訪れた目的は二つ。

先ほど挙げた様に、IS学園側と通話することともう一つ。時守に点滴をするためである。

点滴と言っても、普通の病院にあるような物ではない。時守が浸かっていた栄養液そのものである。

「で、どうだい？彼女に勝てるビジョンは見えてきてるのかい？」

「んー、どやろな。期限までにどっこいどっこいってことやとは思うけど」

ぶつちやけキツイわく、とボヤきながら、時守は点滴の針を外す。今までの対戦結果と経験から見ると、正直分らない、というのが彼の本音だった。

「まあ、なんか掴めそうな気はすんねんけどな」

「そうかい。なら、また？」

「おお。今日はギリギリまでやるわ」

時守のそのセリフが終わると共に、2人は椅子から立ち上がり、部屋を立ち去る。

コツ、コツ、と二つの足音が訝響する白い廊下を、ただ歩く。

「あ、そーいや割と関係無いんですけど、俺が帰る日って天気どんな感じっすか？」

「む、天気かい？流石にまだ曖昧だが、今は確か…」

時守の質問にロジャーは端末を起動させ、答えた。

「どんよりとした曇り空、だね」

Delivered Notification
of tournament his for
mer.

「…ん。今は、5時30分。…睡眠時間、7時間半。晩は良い感じに減らしたし、後は走って、ストレッチして、朝ごはん食べるだけ…。だからお願い本音、今日だけはちゃんと起きて」

「んへへ、分かったよお…」

自室のベッドの上で目覚めた簪は、枕元に置いている時計から時間を確認し、そして頭の中が異様にスツキリとしている事から、今日の自分が凄まじく良い状態に仕上がっていることを自覚した。

「今日のはかんちゃんの、IS学園に入ってから初めての晴れ舞台になるかも知れないもんね」

「…そんなに簡単にはいかないと思うけど、最善は尽くしたいから…」

「だいじょーぶつ、かんちゃんなら、きつと勝てるよ。…ランニングして来たら？着替えの準備はしておくから」

「…ありがとう、本音」

「いえいえご主人様」

主人と従者という、本来の関係を皮肉るように軽口を叩きつつ、簪はジャージに着替えて外に出た。

寮の外に、人は全く居なかった。普段なら今日のような早い時間に目覚めることは無いのだが、幾らかの部活では朝練があるということはクラスメイトから聞いている。しかし、今日は学園の敷地内を走っている生徒も、施設を使用している生徒も、ましてや許可を出す受付の教員もない。

夏に比べて幾分涼しくなった外を走りながら1人、考え、ごちる。

「…ついに、来ちゃった…」

全学年専用機持ちタッグマッチ、当日。

今簪が確認出来ている中で、外でアップをしようとしているのは

自分だけだった。

「…負けない…。一夏にも、作戦を飲んでもらったし、全ペアの対策も出来てる。…勝てないことは、ない…」

「ん？あれ、簪じゃない」

「ひゃあう!？」

自分でも分かるほどに変な声が出てしまった。

ぶつぶつと独り言を呟きながらランニングしていた自分にも非があると思うが、曲がり角でいきなり現れるのは卑怯だと思う。

「…びつくりしすぎでしょ、アンタ」

「だ、大丈夫だから…。鈴も、タッグマッチで？」

「ま、そんなとこね。セシリアとかラウラは、いつもの…何ていうの？ルーティーン、だっけ？それを守る、とか言ってたけど、やっぱり身体動かしてないと落ち着かなくてね」

(…やっぱり、似てる…)

朝から良く口が周り、テンションの高い鈴を見て簪が思い浮かべるのは2人の男女。

1人は、自分の恋人では無い方の男性操縦者。もう1人は彼の幼馴染みの天災科学者の妹。その2人と鈴に共通するところある思考に、簪は既視感を覚えた。

「…脳筋」

「ちよつ、違うわよ！アンタだって、朝から走ってるじゃない」

「いつも身体を動かす前は、ちよつとはアップしてるもん」

「でも朝からランニングまではしてないでしょ？」

「…それはまあ、そうだけど…」

鈴に言われ、今日の自分の脳筋の一部になっているのだと、気づいてしまった。

今日の簪は普段の簪らしくない。その理由は、もちろんただ大きなトーナメントがあるというだけではない。

「ほら、そうでしょ？ってことは、やっぱり気合い入ってるの？」

「…うん。流石に、専用機持ちだけが見られる大会だし…」

「それに、アンタの場合は剣が帰ってくるからってのもあるんで

しよ?」

「うっ…、え、その…あの…」

「大丈夫よ、言い訳なんて考えなくても。ただごちそうさまってだけよ」

愛しの彼が、今日帰ってくる予定なのだ。

とはいえ、第一試合からの参加とはならなかった。移動時間の都合上、1回戦の最終戦にギリギリ間に合うということで、ソロでのエントリーを許可されたのだ。

「にしても、あいつ起きてから何してたの?」

「えっと、お姉ちゃんから聞いたんだけど、単一仕様能力の向上、だって…」

「…え? 『完全同調』ってあれ以上になるの?」

「さ、さあ…?」

足を完全に止めた2人は、軽いストレッチをしながら、今日帰ってくるであろう彼の話を進めていく。

◇

「つしやらあ! ようやく勝ったぞごらあ!!」

「うおっ、ど、どうしたんだい? 時守くん」

「ああ…? おー、総長。遅なつてすんまそん。ついさつき、やっと金ちゃんに勝ったんです」

「…ということとは?」

「金ちゃんからの許可も出ましたし、展開したら色々変わってんのかないます?」

「本当か!? ならまず解析だ…っ、解析班! 今すぐ金夜叉を見てくれ! …ああ。それでいい。今から持っていく。時守くん、金夜叉を借りていくよ」

「どうぞどうぞ」

全学年専用機持ちタッグマッチの2日前、時守は心層世界で遂に金夜叉を下した。目覚めて直ぐに彼の視界に入ったのは、何やら難しい書類に目を通すロジヤーの姿だった。

そんな彼は、時守の口から出た言葉を聞くやいなや、すぐ様行動に移した。服に付けている無線機でISコア解析班に連絡を入れ、10秒と経たない内に、解析班の元へ金夜叉を届けに走り去った。

「んじゃ、俺もゆつくり行くとするかあ」

大人達の慌ただしさを尻目に、時守は1人安堵していた。

千冬とロジャー、それぞれから『タツグマツチにギリギリで間に合わない可能性の方が高い』と言われ続けていたのだが、それを覆すことが出来そうなのだ。もちろん、心層世界で彼女に見せてもらった新しい『能力』や、大幅に上がった基礎能力、そして生まれ変わろうとしている機体。それらに慣れる時間は必要だろうが、それらを踏まえても確実に間に合う計算になる。

「それだ！詳しいことはまた彼が来てから…っ、おお！時守くん！良いところに来てくれた！」

「ほえ？」

のらりくらりと廊下を歩き、自身のISを解析しているであろう部屋へと辿り着くと、ドアを閉めることすらせずに、中では慌ただしく作業が行われていた。中では見知った技術者達とロジャーが大声で議論しており、答えを時守しか知らない問題が見つかったのだろう、廊下から見えていた自分に白羽の矢が立った。

「新しく出た『能力』、並びに装甲、仕様、e t c …。この目で見てみないと分からないことだらけなんだ」

「りよーかいつす。んじゃ、コード繋げるようにして展開しますわ」
部屋の中へと入り、ガラス張りになっている大部屋へと繋がる扉を開く。既に中には数人の技術者がコードを小脇に挟んで待ち構えており、ガラスの向こうではロジャーが今か今かという表情で自分の方を見ているのが分かる。

「まあ、総長以外でも腰抜かすやろな。」

誰よりも早く答えを聞いた彼は、誰に向けるでもなく、柔らかく微笑んだ。

◇

「お、おおお…。素、晴ら…。しい…。素晴らしすぎるぞお！やった！やはり私の目は間違つてはいなかった！」

時守が展開したISを見て、ロジャーは人目を一切気にすること無く、叫んだ。否、叫ぶことが出来た。現在、時守のISを解析しているスタッフの中で、こうして声を出し、歓喜することが出来ているのがロジャーただ一人なのだ。それ以外のスタッフは、老若男女問わず、絶句、驚愕し、そしてただ口を開けていた。

「新時代を担うのはただの暴力などではない！唯一絶対の強さなのだ！…これでまた、世界は整う…。素晴らしいぞ、時守くん！」

ガラスの向こうで、白けた顔をした国連代表が耳を塞いでいるのにも気付かず、ロジャーは声を上げ続ける。

「…はっ、そ、そうだ…。私としたことが平静を失っていた…。ノーラ君！このISの予備装甲を作ることは出来るかい？」

「…へっ？は、はいっ！出来ます！」

「よし、なら頼む。次のタッグマッチだけで全てが壊れるとは到底思えんが、あるに越したことはない。…マリーナ君！『能力』の解析はできそうかい！」

「いえ、こればかりは代表に実演してもらわないと…」

「…ということだ。話は聞いていたね？時守くん」

『耳痛なるほど聞こえてたわ。…んじゃとりあえず。今までのやつ強化版で、大丈夫っすか？』

「ああ、どんどん出してくれたまえ」

ISの解析は、1人の少年を除いて慌ただしく行われた。

大部屋の中にいる時守が、淡い金色の光で包まれる。

『まずこれが、『完全同調』の進化系やな』

「どこがどう違うかは、分かるのかい？」

『ん？ああ、まあぼちぼちつてとこやな。まあ流石にこればかりは、現実世界で戦わへんと分かりにくいわ』

「それもそうか。なら、アリーナを開けよう。ノーラ君、作業は一旦任せて、アリーナの準備に当たってくれ。ファイルス君、彼の調整相

ロジャーが時守側のピットに入って既に8試合目。両者のISEの回復の時間に、ロジャーは時守にしばしば話を振っていた。「なるほどなるほど。完全に使いこなせるには、後どれくらいだい？」

「んー、いうて後5試合ぐらいちやうかな。…あ」

「…あ？」

「いや、言うん忘れとったわ。それは『完全同調』の先のやつ調整だけで、他はもうちよいかかりそうやわ」

「なるほどね。…間に合うのかい？」

「多分ギリギリやろな。こんな扱いムズイのばつか出るとは思わなかったもん」

「それも、君が願ったからだろう？」

「まあせやけど。もうちよいやりたいいつちややりたいわ」

時守の口から出るどんな言葉も、今のロジャーにしてみれば、その全てが歓喜の物へと変わる。愚痴、要望、理不尽、ボヤキなど、その全てが、彼が願っていた物へと直結しているのだ。

「…ファイルスくん。時守代表が、他の『能力』も試したいそうだ。行けるかい？」

「え、ええ。大丈夫ですが…もう少しだけ待ってもらえますか？SEが回復し切っていないので」

「それぐらいならいくらでも」

時守の意志が確認できたところで、ロジャーはナターシャへと通信を入れた。

その内容から分かるように、先ほどの模擬戦では時守が勝った。新たな『能力』に慣れ始めた時守に、ナターシャが完全に遊ばれる形で、幕を閉じたのだ。

「…今更だが、無茶をさせて済まない」

『いえ、これぐらい、大丈夫です。…ただ、ちっぽけなプライドすらも、完膚無きまで叩き潰されそうになると、辛くはあります…』

「そこの所は安心してくれたまえ。君のことは、『最強』に初めて立ち向かった勇者として公表するよ」

『…それはそれで、恥ずかしいのですが』

アメリカの軍用ISを持つてしても、敵わないISを操る男性操縦者。

その事実を改めて認識したロジャーは、時守のいるピットで一人笑った。

「いいじゃないか、英雄になれるんだ。…つと、そろそろ準備が整ったかい？」

『はい。…では、時守代表。9試合目を』

「ほーい」

自分の隣に座る時守が、席を立つ。

そのまま無言でピットの先端まで歩いた彼は、光と共にアリーナに飛び出た。

◇

「…つはあー。つ、か、れ、たあ〜」

訓練と解析と修理と治癒を重ねに重ね、時守が金夜叉との戦闘を終えてから一日後の夜。全学年専用機持ちタッグマッチを明日に控えた時守は、国際連合宇宙開発専用ISステーションに設けられた自室のベッドに寝転んでいた。

「…明日、か。最後にナタルとガチ試合して、回復させてから輸送ユニットで運んで貰う手筈になってるはずやけど…これ間に合うんか？」

IS学園から送られてきた全学年専用機持ちタッグマッチの資料を見て、眉間に皺が寄る。

開催時間は朝早い。それもそのはず、一日でISのタッグマッチのトーナメントを消化しなければならぬのだ。故に、1回戦の時守の試合も、正午辺りには回ってくる予想が立てられている。

「…まあかなり速い輸送ユニットは作ってくれてる見たいやけど」
それでも、何だかんだで不安である。

これだけの準備をして、いざIS学園に戻った所で棄権扱いにでもなったとしよう。とてつもない恥ずかしさに襲われることは分か

りきっているが、間に合わなかった自分が憎くなるだろう。

「…ま、そのへんは明日起きてからやろ」

油断も、傲慢も、過度の緊張も、そして驕ることもするなど、今日の訓練の終わりにロジャーから告げられた。

そんな自分が分かりきっていることを、ロジャーに言われたことを思い出さず、時守は眠りについた。

◇

「まあでも、成長してるのを見るのは楽しいけど」

「…うん」

そんな彼が時差の関係上まだ寝ているであろう時間、簪と鈴はストレッチを終えようとしていた。

「…どうする？もう朝ごはんにする？」

「へっ？…う、うん。そう、しようかな」

「ん、りよーかい。じゃ、食堂でちよつと待ってて。財布取ってくるから」

「う、うん…」

恐らく自室にISと携帯以外の全ての貴重品を置いていたのだろう。鈴が駆け足で寮の入り口へと向かっていく。

そんな彼女の背中を見届けた簪は、1人ゆっくりと歩き出した。

「…鈴も、凄い。試合前なのに、全く緊張してなかった…」

考えてみれば、鈴だけではない。一夏も、箒も、セシリアも、シャルロットも、ラウラも、そして姉である楯無と、剣も、大一番で緊張して自身の力を存分に出せない、ということは無いだろう。

今回参加するメンバーで、空回りしてしまう恐れがあるのは自分ただ1人だと、簪は感じていた。

「頑張らないと…」

一学期に行われたタッグトーナメントは、2、3年生の将来を決定づける大きな要因となっていた。…しかし、今回の全学年専用機持ちタッグマッチは少しだけ、だが大きく意味合いが変わってくるだろ

う。

国家代表候補生が、近い将来国家代表になり得るのか。そして、世界の舞台であるモンド・グロツソで好成績が期待出来るのか。亡国機業への牽制や、一般生徒の意識向上だけでなく、そういった可能性を見る意味も、含まれているだろう。

簪は、将来を見据えて良い意味で緊張していた。

空には、分厚く黒い雲が、一面に敷かれていた。

O c c a s i o n a l l y , H i t i s t h e
i r b a d p r e m o n i t i o n .

「それでは、全学年専用機持ちタッグマッチ、開会の挨拶を更識楯無生徒会長からして頂きます。生徒会長、よろしくお願いします」

虚がそう言い、司会用に立てられたマイクスタンドから一步下が
り、一夏や本音がいる隣へと戻る。虚が立ち止まると同時に、先ほど
までその列にいた楯無が、マイクスタンドへと向かって歩く。

生徒会メンバーである、楯無、一夏、虚、本音は、第1アリーナ
に作られた特設ステージの上に立っている。

「…ねむねむ…、これだけ早起き頑張ったんだから、かんちゃんど
おりむーには是非とも優勝してもらわないとねえ」

「お、おいのはほんさん。教頭先生が睨んでるって」
「ほえ…、あの先生、よくあんな怖い顔出来るよねえ。私なら
ぜえつたい無理だよお」

こくりこくりと、まるで教頭に見せびらかすように本音が大きく
二度頷く。本音のその反応が大変気に食わなかったのか、教頭のこめ
かみに大きな青筋が走った。

「うわあ。ほら、のはほんさん。流石に織斑先生にも怒られたくな
いだろ？」

「…ういー…」

だが一夏は、そんな教頭など全くもって怖くなかった。理由は
至ってシンプルなもので、その教頭の後ろに立っている自身の姉が、
普段なら絶対見せないようなニッコリとした笑顔を自分に向けてい
るからである。それだけならまだ良いが、何やら千冬から良からぬモ
ノを感じたのだ。教頭の顔がどんどんと青白くなっているのが良い
証拠だろう。

「どうも皆さん。今日は全学年専用機持ちタッグマッチトーナメン
トです。…もちろん、専用機持ちと銘打っているだけあって、出場選
手はたったの11人。ですが、その試合内容は決して見ていて無駄に

なるような物にはならないと思います。専用機持ちではない一般生徒の皆さんにも、これからの将来に大きく役立てることのできる試合が、多くあると思っています。しっかりと見ていてください」

相も変わらず、圧倒的な存在感を放つ楯無。生徒会長としてステージの上に立っているのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、それを無くしても、彼女の話を実剣に聞く人間がほとんどである。彼女はただ者ではない。そんな、出会って直ぐに気づいたことを、改めて確認できた一夏は――

「まあそれはそれとして！今日は参加しない生徒の皆さんにも思存分楽しんでもらうために、生徒会とある企画を考えました。名付けて『優勝ペア予想応援・食券争奪戦』！」

その後の楯無の言葉を聞いて、ぽかんと口を開けた。そんな彼の心境など露知らず、楯無が『賭博』と書かれた扇子を胸元で開く。それと同時に、再び声が出ない一夏を無視して、綺麗に列を作って並んでいた生徒達が、一斉に湧いた。

「…はっ！た、楯無さん！これってどう見ても賭けでしょう!?!」

「織斑庶務、大丈夫よ。もう既に交渉済みだから」

「交渉済みって…ま、まさか…」

おそるおそる、一夏は教頭や千冬以外の教員に目をやる。

すると、何ということでしょう。全員が全員なんの反応もしていないではないですか。

「お酒の力って、ほんとに凄いわね」

「やっぱり買収ですか!?!」

「やん。そんな物騒な言葉使わないの。取引って言った方が上品よ?」

「そつちの方が物騒に聞こえるんですが…」

さらばー、おとーさん達のー、宝物ー、とこちらはこちらで何やら物騒なことをボヤキ続ける本音は一旦置いておくとして、一夏は再び、ステージ前に並んでいる生徒と教員の列に目をやる。

「…っ」

ふと、息が詰まった。

その視線の先には、自分が所属している1年1組の生徒達が並んでいる。

そして、その中心にいる、専用機持ち達の面持ちを見てまた気持ちを切り替えさせられる。

箒、セシリア、シャルロット、ラウラ、そしてクラスが違うため離れてはいるが、鈴と簪も、騒いでいる周りに流されること無く集中している姿が見つけられた。

「…ふふ。参加する専用機持ち達は、全員、仕上がってるみたいね」
IS学園生徒最強の余裕の現れだろうか、楯無の口から、挑発紛いの言葉が出た。

彼女が全員、と言ったということは、まだ見つけてはいないが、キヤノンボール・ファストの見本を見せてくれた2年生のフォルテ・サファイアとまだ見ぬ3年生のダリル・ケイシーの様子も、楯無の目には映っているのだろう。

「それでは、対戦表を発表します」

楯無がそう言うと共に、今まで騒がしかった生徒達が静かになり、彼女の背後に大型空間投影型ディスプレイが投影された。

「…あー、マジかあ。もし勝てたら、いつかは当たると思ったけど…」

そこに投影されていた組み合わせは――

第一回戦

第一試合

織斑 一夏&更識 簪

v s

篠ノ之 箒&更識 楯無

第二試合

フォルテ・サファイア&ダリル・ケイシー

v s

セシリア・オルコット&凰 鈴音

第三試合

シャルロット・デュノア&ラウラ・ボーデヴィツヒ

時守 剣

という、一年生達にとって、非常に苦しい組み合わせとなっていた。「皆さん、思うことはあると思いますが、しっかりと準備をして試合に挑んでください。…これで、開会式を終わります」

ステージ上で、楯無が深く礼をする。

開戦のゴングは、すぐそこまで迫っていた。



「あれ、簪どこにいるんだ?」

開会式後、一夏はアリーナの廊下を歩いていた。

開会式のステージの撤去、生徒達の整理、用具の準備や警備の再確認などを行うための、そして選手達にとっては、最後の調整となる1時間。彼はペアである簪を探していた。

「…ん?もしかして、一人で精神統一しようとしてるのか?」

彼なりに、いない理由を考えてみる。今まで様々な場所の通路などを探してきたが、彼女は全く見つからなかったのだ。もしかしたら、誰にも見つからないような場所で、1人集中しているかもしれない。

「なら邪魔しない方が良いのか?…いや、本当に精神統一のために離れてるのか聞かないと…」

「おやおやおや!そこにいるのは現在IS学園唯一の男子生徒となった織斑一夏君じゃないかー!」

そんなことを考えてながら歩いていると、背後から大きな声で呼び止められた。

振り向くと、そこには『撮影係』と書かれた腕章を右の二の腕に付け、カメラを構えた黛薫子がいた。

「はいっ、チーズ!」

「ちよ、:はあ、もう止めませんよ。どうせそれも、黛先輩の仕事の内なんですよね?」

勝手に写真を撮られたが、その行為を否定してしまえば、彼女の今日の仕事が無くなってしまう。生徒会役員として、腕章を付けてい

る生徒を咎めることも出来ないので、撮らないように説得することは諦めた。

「うん、そうだよ。一夏くんはさつきまで何してたの?」

「えっと、ペアの簪を探してたんですが…」

ダメ元ではあるが、恐らくあちこち歩き回っているであろう彼女に自分のペアを見なかったか聞いてみる。

「んー、更識さんなら見てないけど…彼女の性格的に、精神統一してらんじゃない?控え室のピットで」

「…え?ピットで、ですか?」

「うん。だって彼女、無駄な所にエネルギー使いたがらないでしょ?なら、出撃準備も精神統一もできる、ピットにいるんじゃないかなーって」

「…なるほど」

それは盲点だった。

きつと、人混みを嫌ってどこかのベンチに腰掛けているのだろうとでも思っていたが、改めて考えるとそれもそうだ。機体の準備もできる、人も来ない、精神統一ができる選手控え室となっている、ピットにいるのなら、理にかなっている。

「ありがとうございます、黛先輩。では—」

「ちよーつと待ったー!ねえねえ一夏くん、更識さんの場所のアドバイスしてあげたんだし、ちよつとだけ先輩の話、聞いてかない?」

「…分かりました。ですが、早くお願いしますね!」

「分かってる分かてる—」

一夏から了承が出たからか、薰子は陽気に、鼻歌交じりに鞆を探る。

そして、勢い良く鞆から飛び出してきた彼女の手にあったのは、1冊の小さなメモ帳だった。

「おっ、あったあった」

「何ですか?それ」

「たっちゃんと言ってたでしょ?優勝ペア予想応援って。そのオッズよ。私達新聞部が任されてるの」

「へえ…。つて、最下位ですか…」

「まあそりやねえ、白式がピーキー過ぎるっていうのが大きいみたい。タッグマッチってこともあるし、皆攻撃特化にはあんまり期待してないみたいよ?」

「…そういうことなら、燃えてきました」

「それに何より、時守くんが3位に入ってるっていうのが驚きよねー」

1番下の所に自分達の名前を見つけ、闘志をさらに燃やした一夏だったが、順に視線を上げていく。

自分達の上にセシリア&鈴、その上にシャルロット&ラウラ。そして、その上。今回の大会で最大の特徴とも言える『単独参加』の時守が、生徒予想で3位に着けていたのだ。

「剣の上が、フォルテ先輩&ダリル先輩。そして1位が、箒と楯無さん…か」

「そ。1位は、まあ文句無いわね。生徒最強のたつちゃんに、『天災』篠ノ之束の妹であり、お手製の専用機を持つ篠ノ之さん」

「…ま、まあ束さんお手製ってことなら、俺も同じ何ですけどね…」
「機体の性質の差じゃないの?…あ、その顔、実は篠ノ之さんのことじゃなくて、2位が気になってるって顔ね?」

「うぐっ…」

ズバリ、凶星だった。

「うんうん、まあ特別に情報を教えてあげよう」

「いいんですか?」

「心配しなくてもだいじょーぶ。と言っても、言えるのは彼女達が私達新聞部に公表してることだけなんだけどね」

国とかの許可とか結構シビアなんだよね〜と呟きながら、彼女はメモ帳を捲った。

「おっ、これよこれ。フォルテ・サファイア、2年。専用機は『コールド・ブラッド』。特殊武装として、氷を扱うの。そして、もう1人。ダリル・ケイシー、3年。専用機は『ヘル・ハウンドver2.5』。こっちは、特殊武装で炎を使うわ」

「こ、氷と炎ですか…」

「そして、2人の得意戦法でもあるのが、『イージス』っていう戦い方なの。2人とも、氷と炎っていう、攻撃しつつも防御が出来て、かつ視界も奪うことができるものを使うの。どちらかが相手の妨害を、そして隙が出来たら一気に畳み掛けるって感じね。…まあもちろん、それが簡単に出来るだけの技術もあるってことなんだけど」

「は、ははは…」

情報を提供してくれるのは有難かったが、まさかそこまで強いとは思っていなかった。簪の作戦に穴はないと思いたいが、薫子の話を聞く限り、どうも簡単に通用する気が湧いてこなかった。

もし、楯無や箒に勝つことが出来ても、その次にはもしかしたらそんなペアが待ち構えているかも知れない。

一夏はの心は、どんよりと曇っていた。

「…話だけでここまで追い詰められてて大丈夫?」

「な、何とか大丈夫です…」

「そっか。なら良かった。…そろそろ、更識さん探した方がいいんじゃない?」

「そうですね。外には、いなさそうですね」

「うん、そうだね。…生憎だけど、この天気だしね」

アリーナの廊下から、2人して外の景色を眺める。

先ほどから、中から雷鳴が響いてくる程の黒雲からは、ぼつりぼつりと雨が降り出していた。

◇

「あー、つつかれたー」

「お疲れ様。非の打ち所の無い完璧な試合だったよ」

「そりやせやろ。ISの機体性能が全然ちやうねんからこんぐらい、簡単にせな」

「ふふっ、そうかそうか。本当に、頼もしくなったものだ」

「ん?どゆこと?」

IS学園にて、全学年専用機持ちタッグマッチの開会式が終わった頃。時守は、国際連合宇宙開発専用ISステーションにて最後の戦

闘訓練を終えていた。

「ISに乗り始めて数ヶ月の男性操縦者が、軍属の操縦者が操る軍用ISを完全試合で下せるんだ。もう少し、給料を弾まなければならぬいかも知れないね」

「おつ、マジ？さんきゅー」

ロジャーの話を聞きながら、時守は先ほどまで戦っていた証であろう汗を拭い、テーブルに置いてあった水分を口に含んでいく。

「それでだ。これからの予定だが、IS学園から連絡が来た。君の出発は、移動時間や時差を考慮して、およそ50分後。流星にそれだけあれば君の体力、並びにISのSEは完全に回復できるだろう」

「ん、おっけ。じゃあまたカプセル入れればいいん？」

「ああ。とはいえ、初日のようなものではなく、仰向けに寝るタイプの簡易的なものだがね」

「りょーかいー。んじゃほい、IS回復させといたってな」

「ああ、承知した」

短い業務連絡の後、右手中指から指輪を抜き、ロジャーに投げ渡す。

外に出た時守は、指示通りに回復カプセルが設置されている部屋へと向かう。

「…もうちよいや。もうちよいで、みんなに会える」

着ていたISスーツを脱ぎ、カプセルの中に入る。

最初こそ、脱衣場でもない場所で衣服を脱ぐことに羞恥心を持っていたが、今となっては、人がいなければ、医療目的であれば、さほど恥ずかしくはなくなっていた。

「…それまで暇やし、寝とくか」

口に呼吸器を装着した彼は、栄養液に浸かっていた。



「——っ！っ、…んっ！」

「…ん？」

「つ、起きたか…。時守くん、体調は万全かい？」

「え、まあそりゃ…普通に浸かってましたし」

カプセルに入って、どれだけ経っただろう。

ロジャーによって起こされた時守は、壁に掛けられている時計を見る。自分が入る前から、30分しか立っていない。

「…なんかあつたんすか？」

「ああ。…怒らずに、そして落ち着いて聞いてほしい」

ふと、視線を戻してみると、鬼気迫る表情をしたロジャーが、普段とは似つかわしくない真面目な声色で話しかけてきていた。

「—IS学園が、およそ10を超える『ゴーレムⅢ』に襲撃されている」

飛び込んできたのは、やはりというか、IS学園が襲われているという報せだった。

「…：間に、あうんすか？」

「…正直に言うが、微妙なラインだ。今急ピッチで輸送ユニットの整備に当たっている。出発は、早くても10分後。到着は約20分後になるだろう」

「そのゴーレムつてのは、どんぐらい強いんすか」

「…：学園から送られてきたデータしか無いが、聞ukai？」

「ああ」

ロジャーに、緊迫した雰囲気は伝わる。その大半を焦りが占めているのだろうが、目の前にいる少年の冷静な対応が、より彼を焦らせていた。

「まず、スペックだが、相当に不味い。全体的に『ゴーレムⅡ』、『ゴーレムⅢ』を上回っているにも関わらず、よりめんどくさいことになった。右腕に付けられた武装の巨大ブレードと、左腕の掌にある4砲口の超高密度圧縮熱線がメイン武装なんだが、それに絶対防御システムを阻害するジャミング装着が搭載されていてね。つい先ほど、苦戦を強いられていると連絡が入ったところだよ」

「そう、すか…」

「自分を追い詰める必要はない。後、10分だ。20分の間、彼女達が耐え忍んでくれることを祈るだけだよ」

今、あまりにも無力な時守は、何も出来なかった。

「…続けるよ。各アリーナにゴーレムが行ったんだが、全てのアリーナではなく、2つだけだ。まあ、試合会場を狙ったようだね。そこで、千冬くんが現場指揮を取っている」

「まあ、あの人はそういう役目やって自分で言ってたからな」

「今は…待とう、時守くん」

◇

「簪っ！」

「ひっ、あ…う…」

一夏がピットに到着した時、突然の襲撃者に、簪は自身のIS『打鉄式』を展開出来ずにいた。

「うおおっ！っ、らあー！」

扉を壊し、そのまま瞬時加速で『ゴーレムⅢ』の懐に潜り込んだ一夏は、左手を敵の喉元に突きつけた。

「遅いっ！」

一夏を迎撃しようとしているのだろうか、『ゴーレムⅢ』も同様に左手に超高密度圧縮熱線のエネルギーを溜めていたが、それでも一夏には追いつかなかった。

「はっ！」

白式第二形態左腕部多用途武装『雪羅』

その遠距離兵器である荷電粒子砲『月穿』が、『ゴーレムⅢ』に直撃した。

『皆、大丈夫!?!』

「っ、楯無さん!?!」

「お姉ちゃん…」

そんな時、普段、全く聞くことが無いであろう、楯無の焦りに満ちた声が、プライベートチャネルを通して聞こえてきた。

『あー、ウチと先輩は大丈夫ツス』

『は？おいフォルテ。3体とかめんどいから助け呼ばねーのかよ』
『僕達は一応大丈夫です！』

『こちら、デュノア・ボーデヴィツヒペア。現在2体と交戦中！』
『アタシ達も一応、無事だけ、どおっ！』

『数が多すぎますわっ！』

『一夏、お前達の所はどうだ!?!』

「俺達の所は、今一片片付けー」

た。と言おうとしたその時、瓦礫の崩れる音と共に先ほどの『ゴーレムⅢ』が立ち上がる。その側を見ると、もう二機のゴーレムが、自分達をロックしていた。

「3体が増えたー」

『くっ…、これで現状分かっているだけでも11体…。全員、アリーナシールドをぶち破つて、アリーナに出て戦ってちょうだい！健闘を祈るわー！』

『了解っ！』

プライベートチャネル越しに、全員の返事が聞こえる。最も、返事をしたのは彼女達だけではない。

「…行けるか、簪」

「うん。…もう、大丈夫。さつきも、ちゃんと返事できたし」

『ゴーレムⅢ』から一瞬視線を切り、後ろを振り向く。そこには、『打鉄式』を身に纏った簪が立っていた。

「もう、私自身には負けない…っ！」

「よし…、おおおっ!!」

『ゴーレムⅢ』に突撃するフリをした一夏が、一気にピットのアリーナシールドまで詰め寄り、『零落白夜』を振るった。

「簪っ、出るぞー！」

「うんっ！」

雨が降りしきる中、彼らは躊躇うこと無く、アリーナへと駆け出した。

No battle, no growth.

「箒っ！」

「一夏！簪！後ろだ！」

「大丈夫…っ！」

アリーナへと飛び出した一夏の後を追うように、3機の『ゴーレムⅢ』が飛び出す。同じく、アリーナシールドを破って出てきたであろう箒が、反対のピットから飛び出してくる。

その箒が叫ぶが、一夏はなんの恐怖も無かった。なぜなら、

「行つて…『山嵐』…い！」

その『ゴーレムⅢ』達を屠るために、簪が後ろを付けているのだから。

マルチロックオンシステムによる高性能誘導八連装ミサイル『山嵐』が6つ搭載されている『打鉄式』から、一斉にミサイルが飛び出す。

計48個。それぞれが3体に、16個ずつ襲い掛かった。

「箒、大丈夫か!？」

「ああ。なんとか、な」

「そつちも、敵の不意打ちには何とか対応できたみたいね、簪ちゃん」

「…うん。あのゴーレム達、だいぶ気分屋みたいだから」

これからの戦いのことを考え、できる限り最低限のエネルギーでの最速で、アリーナの中央に集まった一夏、簪、箒、そして楯無の4人。一夏達側から出た『ゴーレムⅢ』は、簪の『山嵐』により動きを止めており、箒達側から出てきた『ゴーレムⅢ』はゆっくりと壁伝いにアリーナに降りてきていた。

「気を、付けるわよ。それぞれが完璧だとしても、対応し切れるとは限らないわ」

「ええ。いざとなれば、また『穿千』^{うがち}を使います」

「…穿千?」

「ああ。『紅椿』に新しく出た武装でな、出力可変型ブースターライ

フル：言わば、出力が自由に換えられる大出力射撃武器だ。本当は、この大会用に隠しておいたんだがな」

「…なら、今は使える武器の一つ。…っ、皆、来る…！」

楯無と箒がピットから出てきた手段を知った一夏と簪。だが、敵が許してくれる時間はただそれだけのようで、挟み撃ちのように『ゴーレムⅢ』が計6体、襲いかかってくる。先ほど簪が『山嵐』を喰らわせた3体も、さほど大したダメージを感じさせず、ほぼ無傷の3体と同じように動いていた。

「じゃあ、皆1番動きやすいペアで行くわよ！」

「っ！はい！」

「了解です！」

「…うん、分かった！」

楯無の指示と共に、箒と簪が行動を始める。

「行くぞ一夏！」

「応っ！」

「こつちも、負けないわよっ！簪ちゃん！」

「うん…！」

即席だが、最も戦いやすく、そして勝率が高いペアへと移り変わった。

第一アリーナ

篠ノ之 箒&織斑 一夏

vs

『ゴーレムⅢ』×3

更識 楯無&更識 簪

vs

『ゴーレムⅢ』×3

開戦。

◇

「おいッス。無事ッスか？後輩達」

「おいフォルテ。んな気安く話しかけてやんなって。今必死に戦ってんだろ？」

「なら避けるだけでなくしつかりと戦ってくださいまし！」

「さつきからアンタ達とこの流れ弾がこつちに来てんのよ！」

第一アリーナで戦闘が始まったのと時を同じくして、第二アリーナでも戦闘が始まっていた。

しかし、第一アリーナと違うのはその密度。ほぼ第一アリーナと同じ面積にも関わらず、そこに専用機持ちが6人、『ゴーレムⅢ』が7体集まるという混戦ぶりを見せていた。

「あ？おい、今おめータメ口使った？お？」

「ちよ、センパイ。今絡んだら流石にカワイソーツスよ」

「こんな時でも余裕綽綽…っ、流石は先輩達だなっ！」

「いやそんな褒められても」

「褒めてないですよ!？」

「いや、てかフツーにこつちの方がしんどいからな？なんならおめーらの方に押し付けてもいいんだぜ？」

ラウラ&シャルロットvs『ゴーレムⅢ』と、鈴音&セシリアvs『ゴーレムⅢ』。会話だけ聞けば、2年、3年ペアが邪魔をしているかのように聞こえるが、実際の所そうではない。

フォルテ・サファイア&ダリル・ケイシーvs『ゴーレムⅢ』×

5

2人は、5体のゴーレム相手に、一切の被弾を許すこと無く、戦っていた。

「あつ、センパイ、見てくださいます」

「あん？」

「とうっー！」

5体の内1体が放ってきた熱線に向け、自身のIS『ゴールド・ブラッド』の能力を発動する。

すると、一瞬だけ熱線が凍りつき、再び超速度で自分達へと向かってきた。

「あり？」

「んだよ、結構おもしろーモン見れるかと思ってたのに」

「ちゃんと戦ってますの!？」

「あ？つたりめーだろ。いつまでもちんたらしてんのは好きじゃねえからな。…ほら」

ダリルが、とある方向に手を伸ばす。するとそこには、まるで炎の結界が地を這うように広がっており、その中で2体の『ゴーレムⅢ』が同士討ちを行っていた。

「アレでハイパーセンサーとか中枢系バグらせて、味方を敵って認識させてんのよ。さ、これで後は…」

「2体ツスね、センパイ」

先ほどフォルテに向けて熱線を放った『ゴーレムⅢ』が、氷漬けになったまま、機能停止した。

「ぶっ壊すのは疲れるツスけど、止めてからじつくり殺るのがコツスよ。後輩達」

ラウラ・ボーデヴィツヒ&シャルロット・デユノア

vs

『ゴーレムⅢ』

凰 鈴音&セシリア・オルコット

vs

『ゴーレムⅢ』

フォルテ・サファイア&ダリル・ケイシー

vs

『ゴーレムⅢ』×5

◆ 開戦。

「……」

「…その、時守くん。少し落ち着いたら…」

「…俺は、落ち着いてるっすよ」

「そうは、思えんがね」

国際連合宇宙開発専用ISステーションのピット内にあるベンチに、時守とロジャーは腰掛けていた。

時守の出発まで後3分。時守のISと、輸送ユニットの調整を待

つだけだった。

「…まあ、当たり前つすよ。一体この世界のどこに、自分の大事なものを壊されかけて、自分は何もできひんのに平然としてるやつがいるんすか」

「…すまない」

「いいんすよ。元は、俺のオーバーワークなんすから」

自然と、何故か話し方が敬語に戻っている。

いつもなら、どんな場面でも多少の軽口を叩く彼が、一切それを許さない。その事実が、ロジャーを困惑させていた。

「今1度、確認するよ。ここからIS学園までの飛行中、君には一切の専用機の『能力』を使う権利を与えない。『ゴレムⅢ』の実物を見ていないこともあるが、相手は数があるからね。君には万全の体制で望んでほしい。そして、君の直ぐ後を、私がナターシャ君に抱えてもらって追いかける。無線で指示を送るので、良く聞いておくように」

「分かってます。後、何分すか」

「1分と42秒…今で、丁度100秒前だ」

「…んなら、そろそろ立ちましょか」

「分かった」

調整が済み次第、スタッフが全速力でこのピットにISと輸送ユニットを持ってくる手はずとなっている。

時守は、まだ待つしか無かった。

「さっきの続きっすけど、ただ平然としてるわけじゃないんすよ」

「…というど？」

数十秒の沈黙の後、時守が不意に口を開いた。

「前、ラウラがセシリーと鈴に攻撃した事あったん、知ってます？」

「ああ。彼女が、まだ刺々しかった時のことだろう？」

「そんな時も、えぐいぐらいにキレてたんすけど、今よりかはマシやったと思いますわ」

「っ、時守くん…」

表情には出さない、声色にも出さない、態度にも、身体の身振りにも一切出していないが、確かに時守は激昂していた。

「…自分を失うぐらいに、キレることはないと思う。けど、多分犯人見つけたら、全身全霊を持って叩き潰したるわ。例え誰が相手でも、木っ端微塵に粉碎したる」

「…関係の無い一般市民に手を出さないのなら、我々の方で揉み消してあげるよ。暴行、ISの無許可展開、器物破損、そして、殺人ですらね。相手方にどういう意志があるのかは分からないが、私たちも聖人では無いんだ」

何やら扉の奥から騒がしい音が聞こえてくるが、何のその。

2人はふつつつと、怒りを高めていた。

「まあ、殺しはしませんよ。そんだけのことが出るやつや。利用価値はある」

「鬼だね君も。まだ殺せる相手かも分かっていないのに」

「…俺らに、こんな鉄の塊を送るしか出来ひんようなやつやろ。んなもん、俺と金ちゃんで大丈夫や」

その発言を、ロジャーは油断とも、傲慢とも捉えなかった。

何せ、世界初を同時に2つもやり遂げ、それらを完璧に扱える程の実力を身につけたからである。

「この件に関しては、私に判断を委ねてもらおうよ、時守くん。君なら、情が移る可能性があるからね」

「無いやろそんなん。…もし、犯人がちっふー先生でも、俺は容赦する気は無いからな」

扉が開く。

数名のスタッフが、時守の輸送ユニットとISのそれぞれの待機状態を持っており、息を切らしたナターシャが、『銀の福音』の待機状態を持っていた。

「ロジャー事務総長！調整、終わりました！」

「時守国連代表、精神統一は大丈夫？」

ロジャーにはスタッフが、時守にはナターシャが駆けつけ、声をかける。

「うむ、ご苦労。早速時守くんの背中に付けてくれ」

「ああ。…自分でも怖いぐらいに、落ち着いとるわ」

ナターシャにそう告げ、時守は輸送ユニットの準備へと取り掛かった。

決して、自分の内心が漏れないように気をつけながら。

◇

「こんのっ…はあっ！」

一閃。しかし、阻まれる。

一夏の振るった『零落白夜』は、ひらりと、その体躯に似合わぬ『ゴーレムⅢ』の華麗な駆動によって避けられた。

「まさかこいつら…、『ゴーレムⅡ』のAIを引き継いでいるのか!？」

「…多分、そうだな。箒、気を引き締めて行くぞ。相手は、『ランペイジテール』と『オールラウンド』の無い剣とほとんど同じだ」

「ああっ！」

声と共に、それぞれが一気に肉薄する。

一夏と箒、2人が一機ずつ相手取り、もう一機に気を配る。神経がすり減るような戦いだが、今はこれしか無かった。

「おおおっ!!」

「はっ！」

代名詞とも言える『瞬時加速』からの『零落白夜』、そして、連撃からの『雨月』と『空裂』。2人の攻撃が、2機の『ゴーレムⅢ』に迫る。

「うっ、とうっ、しいー！」

「くそっ、このエネルギーシールドのせいでまともに攻撃が通らん！一夏っ！『零落白夜』なら…！」

「ぐっ…、さつきから狙ってるけど、ブレードで防がれる！何で出来てんだよ、こいつ…！」

「言ってる場合か！」

『ゴーレムⅢ』の周りに浮かぶ、球状の物体。そしてそれらが展開する可変エネルギーシールドが、専用機持ち達の戦いを不利そのものにしていった。

「とにかく、今やることは攻撃の手を緩めないことだ！」

「そうは言っても、このままだとエネルギーが尽きるぞ！」

武装に元から備わっているエネルギーを使う楯無や簀とは違い、簀はともかく、一夏はエネルギーの消費速度が他の機体と比べて凄まじいことになっている。このまま戦闘を続けていくのは危険だと、誰でもない彼が一番良く分かっていた。

「大丈夫だ！…まだ、成功率は高くないが、私の『絢爛舞踏』がある！」

「…信じるぜ、簀！」

長期戦闘において、必須とも言える回復要因。まだ成功確率は高くないが、一夏はそれを信じることにした。

信じなければ、負けるといふ確信があった。

「一夏！私の分を、引き受けてくれないか!？」

「っ…了解！」

簀から、何かを察知したのか、一夏は簀が相手をしている『ゴーレムⅢ』にただの『雪片式型』で攻撃を加える。

それにより、一夏は2体の『ゴーレムⅢ』からロックされることになる。

そして、そのことを確認し、一気に飛翔。

急に動きを変えたことにより、3体目の『ゴーレムⅢ』からロックされる。

「簀！準備出来たら合図してくれ！」

「分かった！」

一夏が囹役を買って出たことを確認し、簀は全てのPICを機体支持に回す。

十数分前、アリーナのエネルギーシールドをエネルギー兵器無効化の効果が無いにも関わらず、一瞬で破った武装『穿千』のために。

「…っ、一夏あー！」

「よしっー！」

簀の合図を受け、一夏は一気に高度を下げる。

追撃していた3機の『ゴーレムⅢ』も、彼と同じように高度を下げていく。

「『雪羅』で守れ！」

「了解っ！」

一夏と箒を結ぶ直線上に、『ゴーレムⅢ』が3機共に入る。エネルギー武装である『穿千』、その余波を受けぬよう、一夏は『雪羅』をバリアシールドで展開した。

「はあっ！」

『紅椿』の両肩にある、クロスボウへと変形した展開装甲から、2本のエネルギービームが、超高密度圧縮状態で放たれた。

威力は実に、先ほどピットで放った物の2倍。それらが、3機の『ゴーレムⅢ』に直撃。『雪羅』で守っていた一夏でさえも、飲み込まれてしまった。

「ちよ、箒！危ないぞー！」

「ふんっ、『雪羅』なら、エネルギー武装は一切効かないのだろうか？」

「ま、まあそうだけだよ…！」

もくもくと、『ゴーレムⅢ』達がいた場所が爆煙を上げる中、一夏はふわりと飛び、箒の側へと降り立った。

「…やったのか？」

「…終わってれば、私やお前に付いているターゲットが、外れるはずだが？」

煙が晴れる。そこには、3機の『ゴーレムⅢ』が、それぞれの球状の物体を繋げ、巨大な可変エネルギーシールドを作っていた。

先ほどと、さほど変わらぬ『ゴーレムⅢ』が、そこにいた。

「効いてないのか…？」

「みたいだな…、クソ…っ！」

じわりじわりと、確実に追い詰められていた。

◇

「ほいっ」と

「はっ！」

爆炎の球が、ゴーレム達に襲いかかる。

「おー、今のいい感じじゃね？ポアーって」

「意味分かんないわよ!」

「あー、センパイって、常にそういう人っすから。あんま気にしてたら疲れるっすよ」

「集中してくださいな!」

ダリルが『ヘル・ハウンドver2.5』から炎を出し、それを鈴が衝撃砲で形を形成、相手にぶつけるという何ともシンプルなものだったが、案外上手くいった。

一方、フォルテとセシリアの方も、上々だった。フォルテが凍らせた部分を、セシリアが『偏向射撃』で砕くという戦法は、確かに『ゴーレムⅢ』達に通用していた。

「でも、ジリ貧だよ。向こうには『山嵐』や『夢現』、『春雷』がある簞に、『蒼流旋』がある楯無さん。言わずもがなの一夏に、展開装甲のある簞。…高火力が、揃いも揃って向こうに行っちゃったから!」

「おん?なんだ一年。オレ達じゃ、火力不足だったか?」

「べ、別にそういう訳じゃ!」

別のゴーレム達を相手取っていたシャルロットが、冷静に分析する。

こちら側、第二アリーナ組には、『ゴーレムⅢ』達に有効な武装が少なすぎるのだ。

「まあ、ぶっちゃけそうだな」

「ええっ!?大丈夫なんですか!」

「まー、センパイがこうなのはいつものことっすから。いざとなれば、オリムラ先生にでも頼めばいいんじゃないっすか?」

「…確か、教官は第一アリーナの管制室に居て、現在まだ通路のロツクが解除されていないため、動けないはずだが?」

「…え?マジっすか?」

ラウラの口から、大した援軍が期待出来ないことを知る第二アリーナ組。

こちらにも、静かに追い詰められていく。



「織斑先生…」

「なんだ、真耶」

「ロックが、開きそうに無い、との連絡が」

「…だろうな。こんなことを仕掛けてくるやつだ。こういったことへの対応は、しっかりとしているだろう」

「…先輩…」

真耶からの連絡に、千冬は知っていたかのように、静かに返す。しかし、態度はそれと正反対。手のひらから血が出るほどに、強く、右手を握りしめていた。

「すまん、真耶。お前の専用機の許可さえ取れば、もう少し戦況が変わりそうなんだがな…」

「っ…」

真耶の顔が、一瞬悲痛なものに変わる。

知っているのだ。千冬の専用機である『暮桜』がIS学園の地下で、凍結状態となった石像になっていることを。

「お前も、私と同じ心持ちだとは思う。教え子達が、自分達に変わって、学園を守ることが、耐えられんのだろう」

「…はい。そうですが…」

「私もだ。…もう一つ、残念だが、いい知らせがある」

「…へ？」

この、どう足掻いても悪い方向にしか傾かないような戦況で、千冬はとある報せを持っていた。

「時守が、つい先程出発したらしい。改良された輸送ユニットに乗り、ここに着くのは後5分後だそうだ」

「と、時守君が、ですか…？」

「ああ。皮肉にも、またアイツの成長した姿を初めて見るのがこんな戦いになるとはな…」

悲しく、そして物憂げな表情を浮かべた千冬は、管制室にあるモニターに目を移す。

そこに写されたドス黒い雲には稲妻が走り、戦闘が始まった時よりも、雨が強く、強く降っていた。

Like the Lightning.

「…後何分つすか」

「後2分だ！さつきからそればっかりだぞ、時守くん！」

「しようがないですよ、ロジャーさん。剣くんも、気が気で無いんですから。制約が無ければ、きつと『能力』を使ってでも飛んでいきますよ」

国際連合宇宙開発専用ISステーションとIS学園を繋ぐ空の道を、3つの人影が超高速で駆けていた。

「…クソが」

「ん？どうか、したかい？」

「いや、何でも無いつすよ」

2機共に音速を超えているため、もちろんプライベートチャンネルを通しての会話だったが、時守が呟いた一言は、ロジャーには聞こえなかった。

そう、ロジャーには。

「剣くん、怒る気持ちは分かるわ。誰だって、大事な人達を襲われたらそうなるわ。でも、それをぶつけるのは相手よ。今のここでは、心の中に押しとどめて…」

「んなもんあそこで聞いた時からずっとやってるわ」

「っ、剣、くん…」

時守の呟いた声がはつきりと聞こえてきたナターシャから、無闇に怒りを撒き散らさないように注意される。だが、この怒りを押さえつける努力など、報せを聞いた時から既に行っていたことだ。出撃前ですら、それが溜まりに溜まって、自分が変になりそうだった。

「今からでもな、許可が出たら戦いに行く準備は出来てんねん。照準さえ絞り切れれば、俺はいつでも行くからな」

「…ええ。それなら、出撃時に許可が降りてるから大丈夫よ」

時守に、現在『能力』の使用が禁じられている理由はただ一つ。あまりにも強大すぎる力故に、少しでも操作を誤ってしまえば、被害がより拡大してしまうからであった。

驕りでは無い。事実だった。

「君の『能力』が、千冬くんと『暮桜』の様なものなら、私も考えたさ！だが、もしそうだったとしても、向こうで戦うためのエネルギーが少なくなる！」

「…分かつてるつすよ」

そう話している間も、3人は超速移動を続ける。

時守は、ISスーツを着た上にウインドブレーカーに身を包み、その上から改造された輸送ユニットが、背負う形で固定されている。一見するともものすごくダサイことになっているが、今の姿を肉眼で捉えることが出来るものなどいるはずが無いので、ビジュアル面は無視した結果となっている。

ナターシャとロジャーは、高速移動パッケージを換装し、さらに速度特化に改造された『ラファール・リヴァイブ』で時守の後を付けている状態だ。

「君の全力なら、敵を簡単に倒せるだろう。だが、今は負傷者となっている味方がいるかもしれん！それに、今回も敵が増援を送ってくる可能性だってあるんだ！」

「やからこそ、今こうやって我慢してるんすよ。言ってる事矛盾しすぎてて自分に腹立ちますわ。この行きだけに全てのエネルギーを使うようにプログラムされた輸送ユニットでさえ、遅いって感じますわ」

この日、何度目となるであろう、遠い目で、時守は進行方向の遙か先、IS学園を見やる。

3人がここまで焦るのには理由があった。

ロジャー、ナターシャ、時守。3人が付けている無線に、数分前から絶え間無く入ってくる、IS学園からの情報だった。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ISの損傷が激しく、生身にも幾らかの傷あり。後遺症になる程の物は無いが、これ以上戦闘を続けるのは危険。

ダリル・ケイシー。IS、本人共に未だ目立った外傷は無いが、S Eがほぼ尽きかけており、非常に危険な状態。

フォルテ・サファイア。ダリル・ケイシー同様、目立った外傷は無いものの、疲労が溜まりつつあり、撃墜も時間の問題。

凰鈴音。肩部、腕部の全衝撃砲が破壊。満身創痕の中、『双天牙月』で辛うじて防衛に徹している。

篠ノ之箒。単一仕様能力『絢爛舞踏』の発動に成功するも、機体の損傷が激しくなり、苦戦を強いられている。新武装である『穿千』による、本人への負担が懸念される。

織斑一夏。専用機持ちの中で最も生身の肉体にダメージを負っている模様。『絢爛舞踏』のおかげで戦うことは出来ているが、先に操縦者が失血により意識を失う可能性が大。

セシリア・オルコット。BT兵器が全て破壊され、スターライトmkⅢで応戦するも、その手数と攻撃力、そして敵の防御力の高さ故に、ほぼ相手にダメージを与えられる状態ではない。

シャルロット・デュノア。周囲の援護のため1人奔走中。ほぼ全ての味方に自身の拡張領域に積んでいる武装の使用許可を出しており、何とか戦況の維持に貢献。しかしそれにより、本人の火力不足が顕著に。

更識簪。『春雷』、『山嵐』共に弾切れ。現在、『夢現』での近接戦闘で奮闘しているものの、複数機からの猛攻に攻めあぐねている。

更識楯無。唯一と言ってもいい程に武装が残っており、着実に敵にダメージを与えている。周りに味方が多く、開けた場所であるために『沈む床』と『清き熱情』は期待出来ないが、操縦技術の高さと『蒼流旋』で現在奮闘中。

状況が芳しくないどころか、最悪に近いものだという報告が、先ほどから耳に入っていた。

「絶対防御の阻害、か…」

「惨状を聞いて改めて恐ろしさが身に染みたよ。絶対防御阻害、それに合わせた巨大ブレードと4砲口の超高密度圧縮熱線、そして『ゴーレムⅡ』から引き継いだ君の動きに近いAI、大体の攻撃は防いでしまう可変エネルギーシールド。…どうやら敵は、本気で殺しに来ているか、本気で世界に喧嘩を売りたいようだね」

「そうみたいっすね」

歯噛みし、しかし表情を変えること無く、時守は飛ぶ。

「っ、雨…か。IS学園にも降っているんだったな」

「…皆、もうちよいだけ頑張ってくれ」

ロジャーと時守、2人の眩きは雨の中に消えた。

◇

「ぐッ、が、アアア!!」

「一…、夏…あ…」

『ゴーレムⅢ』の右手で掴まれた一夏が、アリーナの壁に叩きつけられる。

こちら側が弾切れやエネルギー不足を起こしたと判断するや否や、今までは大人しかった『ゴーレムⅢ』達が、猛攻を仕掛けてきたのだ。

「まだ…だ、まだ、負けちゃいけないえ…っ!」

「はあ…っ、はあ…、そう、ね。頑張ってるね、一夏くん。おねーさん、ちよつと助けてあげる余裕が無くなってるから…っ、ふっ!」

『蒼流旋』が、虚しく可変エネルギーシールドに防がれる。

ゴーレムにしては早すぎる機動と展開に、専用機持ち達は完全にサンドバッグにされていた。

「…この前の襲撃で、剣の動きと、シャルロットの『高速切替』を会得してる…。このままだと、ジリ貧っていうより…」

「言うな、簪…!そんなもの、言わずとも私達が一番良く理解しているはずだ…!」

『夢現』で『ゴーレムⅢ』1機との戦闘を続ける簪が、つい零してしまった一言。それに反応したのは、膝に手を付き、息絶えだえながらも、何とか立とうとする簪だった。

彼ら彼女らの周りには、未だ6体のゴーレムが、四人を狙っていた。

——そこへ

「ぐっ!?こんのっ、なんだいきなり!」

「分かんないツス！」

「今、の、は…効きましたわ…」

「はあ…、はあ、不味…いな。流石にもう、エネルギーが無いぞ…」

「本当、何がしたいんだらうね、こいつらは！」

「愚痴ってる暇は無いわよ、シャルロット！」

第二アリーナにいたはずの6人が、『ゴーレムⅢ』達によって第一アリーナの地面に叩きつけられた。

「フォルテ、ちゃん？」

「アレ？楯無…ツスカ？てことは、ここ第一アリーナツスカ」

「…なんだ、嫁よ。みつともないぞ」

「お前には言われたくないな…つ、ラウラ…」

「皆様、大丈夫ですよ…？」

「そういう…セシリアも…？」

「僕もセシリアも皆も、何とかって所だよ、簪」

「あ？んだよ。こつちも大して状況良くねえじゃねえか…」

「言ってる場合じゃ、ないでしょう…！」

「アンタ、大分やられてるけど平気なの？簪」

これにより、第一アリーナに専用機持ち全員が揃う形となった。

第一、と謳っているだけあって、このアリーナはIS学園の中で最も大きいアリーナとなっている。だがそれでも、専用機持ち10人と『ゴーレムⅢ』13機が戦うとなると、少し狭苦しくなる。

「何が目的でここに皆を…」

「んなの、簡単だろ？生徒会長。つ、全員、構えろ！」

楯無の疑問に答え、吼えたダリル。アリーナ中央に集められた満身創痍の専用機持ち達。そして彼らを囲むように、ゴーレムⅢ達はジリジリと距離を詰める。

「オレらを、ここで一網打尽に見せしめにでもすんじゃねえのか？」

「笑えない冗談…ねっ！」

諦めたように笑うダリルの言葉を聞き、鈴が『双天牙月』を『ゴーレムⅢ』の1機に振り下ろす。が、やはり虚しくも右腕の巨大ブレー

ドにより防がれてしまう。

「皆、疲れてるとは思うけど中央で混戦になるのは避けるべきよ！
：フォルテちゃん、ダリル先輩、2機ずつ任せられるかしら…？」
「オレらしいねえんだろ？」

「やるしかないツスね…！」

「後、は…私が引き受けるから」

1年生が一体ずつ。2、3年生が2体ずつ引き受けることで、何とか戦いを成立させようとする。

「ぐあつ…！」

「ラウラ！」

しかし、元から戦闘不能間近だった所から、綻んでいく。

他の専用機に比べ、極端に防御力が低い『シユヴァルツエア・レーゲン』に、『ゴーレムⅢ』のブレードが突き刺さる。偶然にもラウラ自身には刃が通っていないが、ラウラ自身に大きなダメージが伝わるのも時間の問題だった。

「…はっ！」

「このっ！」

「なんで…！」

「ちいっ！」

「通、り…ませんわ…！」

「当たってよっ！」

零落白夜、双天牙月、夢現、空裂、スターライトmkⅢ、パイルバンカー。

その全てが、可変エネルギーシールドと巨大ブレードに防がれる。続けて攻撃しようにも、ひらりひらりと、躲かれてしまう。

「こりゃ、オレもちよつとキツイぜ？生徒会長さんよオ」

「無茶を言ってるのは承知よ…、でも、今1年生はそれどころじゃないの…！」

「そうは言っても、ウチらんとこもそれどころじゃないんツスけどね」

思わず、フォルテは笑ってしまった。

—無理ツスよ、こんなん。何も、何も通らないじゃないツスカ。周りが、見えてしまっていたのだ。可変エネルギーシールドと巨大ブレードに全ての攻撃は阻まれ、かと思えば絶対防御の阻害システムによりこちらはダメージを負うばかり。楯無も虚勢を張っているが、きつと気づいているはずだ。

—ウチら全員、ここで誰かの踏み台になるんスね。顔も見たことない誰かの。

そんなフォルテの考えが伝わってしまったのか、楯無の表情にも陰りが差した、その時だった。

「きゃっ………えっ……」

簪の方から、嫌な予感と共に短い悲鳴が聞こえたのは。

その両手から夢現が弾き飛ばされ、クルクルと宙を待っている。その背景には、曇天と…飛行機だろうか、一筋の光が見える。

弾き飛ばされた衝撃で、思わず尻もちをついてしまった。

瞬間。簪が相手をしていた『ゴーレムⅢ』は、当然のように巨大ブレードを振り下ろした。

「簪ちゃん！」

自身の相手をしているゴーレム2機を無視し、楯無は簪の元へと翔んだ。ダリルもフォルテも、これを咎めるはずがなかった。いくら他国の代表候補生とはいえ、同じ学園の仲間なのだ。その仲間が死ぬところなど、見たくもない。

「お、ねえ…ちゃん」

「ぐっ………、のお……」

巨大ブレードを、『蒼流旋』で何とか受け止める。完全に仕留める一撃だったそれはとてつもなく重くのしかかり、地に膝を付いてしまった。

「おねえ……」

「簪ちゃん。お姉ちゃんなら、大丈夫よ」

楯無はそう見栄を張っているが、そう長くは持たないだろう。

学園最強の楯無ですら、敵わない。篠ノ之博士お手製の専用機ですら同じ結果だった。学園に所属している全ての専用機持ちが力を

合わせても、このざまだった。

簪の中で、何かが切れた。

「もう、無理だよ……」

「無理じゃ、ないわ」

「無理だよ！この世にヒーローなんていないんだよ！」

「そう、かしら？……って、ちよつと不味いみたいね」

楯無がブレードによる攻撃を耐えている間にも、『ゴーストIII』は次の攻撃への準備を進めていた。

「あ、う……」

「……ごめんなさい、簪ちゃん。……私達、ここまでみたい」

超高密度圧縮熱線の4砲口、全てが2人を捉えていた。

「楯無さん！」

「簪っ！」

仲間達の声が聞こえる。

雷の轟音と光と共に、熱線が放たれた。

◇

「……あ、れ？」

「……簪、ちゃん？」

目を開けた2人は、生きていいのか死んでいるのか、自分自身定かではなかった。

「生き、てるの？」

「そうみたいね。……夏くん達が、こっちを驚いた顔で見てるから」

どうして、あの状況で生き残れたのか、という言葉を出そうとした楯無の頭に、何かが乗った。

「……へ？」

「そりゃ流石に、このタイミングで俺が来たら驚くやろ」

頭を上げると、そこには髪が無造作に伸び、こちらに優しく微笑む彼がいた。

「…剣、くん？」

「ああ、せやで。お待ちせ」

何故か、彼は非常にあっさりとした挨拶で終わらせたが、楯無と簪の心は揺れ続けていた。

「なん、で…」

「んー、多分色んなことについてのなんで、やとは思うけど、とりあえず今は避難してくれへんか？」

ほら、今も狙ってきとるし。とボヤク彼。どうやって熱線を止めたのか、どうやってここに来たのか、聞きたいことは山ほどあるが、それを今すべきでは無いと、本能で理解出来た。

「…うん、分かった…」

「よし。シャル！一夏！出来るだけここにいる全員を隅の一箇所にも固めてくれ。んで、固めたら『雪羅』のエネルギーシールド張つてくれ」

「わ、分かった…」

「了解…っ！」

全員がボロボロだが、特にゴーレムに攻撃されることなく、全員が移動を開始することに成功していた。

「…さつきから、やたら信号多くてウザいな」

「…へ？」

簪の気の抜けた声を置き去りに、時守は消えた。

ISも展開しないまま、一体どういう原理になっているのかは全く分からないが、確かに消えた。

「出来るだけはよ頼むわ。こいつら、今俺しか狙ってへんみたいやしな」

「ちよ、剣！ISの展開は…」

「今はいらん。時間稼ぎには勿体ないわ」

まるで超人のように、生身でゴーレムを飛び越え、自分に攻撃を集中させようとする時守。その思惑通り、全員が一夏の後ろへ避難した。

「どうなってんスカ？あの動き。どう見ても人間のソレじゃないッ

スよ…」

「あれぐらいなら、『完全同調』を生身で発動させたアイツでもやってたわよ」

「それよりも、今は重傷者の応急手当ですわ…」

「そうだよ、鈴。…ラウラ、大丈夫?」

「平気だ。…とは、言い難いな。シャルロット。すまんが支えてくれるか?」

「うん」

しやがんだ一夏の後ろで、箒が『絢爛舞踏』を発動。一夏の『雪羅』が切れないようにする。

そして、その2人の影で、残った8人がISを解除して座っていた。

「お姉ちゃん…」

「大丈夫よ。きつと、今の剣くんなら、大丈夫」

「どうやって、あの熱線を止めたのだ…。私も見ていたが、どう考えても間に合わなかったぞ…」

「それを、今から見せてくれんじやねえのか?…しっかり守ってくれよ?オリムラくん」

「分かっていますよ!」

箒を除き、これで避難した全員が生身になったことを確認した一夏は、シールドの展開により集中する。自分が破られてしまえば、確実に重傷では済まないものが出てくるからだ。

とはいえ、目の前で繰り広げられる戦いは、一瞬で終わるのだが。

「よつ、と。全員、無事に終わったみたいやな」

『最重要ターゲット、ロック。排除シマス』

「やからさつきからうるさいねんって」

ふわあ、と欠伸を一つ。『ゴレムⅢ』の1機が左手を向けているにも関わらず、生身で大あくびをかく。

「さあさあ。確認させて貰うけど、お前らが襲撃の犯人でおけ?」

『本作戦ニオケル、最重要ターゲット、時守剣ト断定。コレヨリ、行動ヲ開始』

「…ああそう。本作戦っていうんやったら、お前らで間違いないんやな」

『ゴーレムⅢ』の左手から、時守に向けられて熱線が放たれる。地面諸共焼き尽くさんとするそれは、時守のいた場所に爆煙を上げた。

「剣っ!？」

「安心せえ。…こいつはもう、俺にダメージ与えれへんからな」

その煙の中から、無傷で出てきた時守は、『ゴーレムⅢ』の腹部に右手をかざした。

「…さて、んならそろそろ取り繕うのは止めるか。…いい加減にしろよ。てめえら、そこまでして早死したいんか」

『ピツ…ガツ、フ、不調…原因、不明ノ不調アリ…』

ゴーレムのカメラを通して見ているであろう真犯人に向け、時守は言葉を紡ぐ。

「なんで俺をここまで殺したいんか、何の恨みがあるんかは知らんわ。…でもな、俺を相手取りたいんやつたらこんなクソ使うな。自分でかかってこいや」

時守の右手中指の指輪から、光が溢れる。

そして、

「…『雷轟』」

『ゴーレムⅢ』から天に昇るように、極大の雷が発現した。

轟音と共に地に沈むゴーレムを目にすることなく、時守は次の標的を見定めた。

「残り12体か。…本気で来いや、クソ雑魚共。お前らの相手はこの俺や」

台詞と共に、黄金のISが展開される。

「なんでも、世界初らしいな。これ出したんって。丁度ええわ。憂さ晴らしに付き合え」

一夏と、その影に隠れる全員が、ISを起動させて時守のISを確認する。

金獅子第三形態『金色』

金夜叉よりもさらにコンパクトに、よりシャープになったその金色の機体からは『ランペイジテール』が8本生えていた。

世界初となる、サイド・シフト三次移行機が、そこにいた。

『雷轟』

その声と共に、凄まじい物量の雷が時守の右手装甲から飛ぶ。

可変エネルギーシールドを展開しても、意図を持つかのように動く雷を捉えられるはずがなく、青白い雷の刃は『ゴーレムⅢ』達の装甲を抉っていく。

「…ん？」

ふと、何かに気づき、後ろを向いてみる。すると、目の前にいるゴーレム達に向けて『雷轟』を放つ時守の背後から、1機の『ゴーレムⅢ』が、巨大ブレードを突き刺さんと突撃していた。

「…『雷動』」

しかし、ブレードの先端が時守の首筋に触れようとしたその瞬間、時守の身体が、まるで雷のように一瞬で消え去った。

『雷轟』は、ただ雷を射出するだけの単一仕様能力や。ワンオフアビリティんで、今の『雷動』は読んで字のごとく、雷のように動ける、ほぼ瞬間移動に近い複数仕様能力や」

まるでゴーレム達を嘲笑うかのように、時守はふわりふわりと空を飛んでいた。

「んで、『雷鳴』」

その言葉と共に、眩い光が『金色』から放たれ、時守にロックを付けていた全ての『ゴーレムⅢ』が、ハイパーセンサーを手で覆った。

「こいつは優秀でな、俺にタゲ取ってる奴らの視界をハイパーセンサーごと数秒狂わせるもんや。…俺らが三次移行して新しく出た複数仕様能力はこんだけや。楽しませてくれや？」

文字通り、蹂躞が始まった。

◇

『雷轟』オ！」

「これで、6体目…」

「すごい…」

「はっ、最早同じモンに乗ってると思えねえよ」

「は、ははっ、なんスかこれ。アレをオールワンパンとか、ウチらの今までの頑張りって、何だったんスか」

一夏の影に隠れている、専用機持ち達がそれぞれ、思い思いの声を上げる。

「そ、それにしても凄いですわ…」

「うん…。まるで雷みたいに、いや、もう雷そのものだよ…」

「まさか、三次移行で先に行かれるとは思ってなかったわ」

「あ、また一体沈んだわね」

話している内に、また一体の『ゴーレムⅢ』に雷が突き刺さった。

「クソが。これだけやったら、ストレス発散ならんやんけ」

「…何か、するようだぞ」

ラウラの言葉通り、今まで『雷轟』でゴーレムを叩き潰していた時守が、動きを止めた。

「ランペイジテールで潰すのもなんかちやうしな。ここは、やっぱアレで行くか」

とある1機の前まで移動した時守は、そのランペイジテールを全て収納した。

『『シンクロ・オーバー』完全同調・超過』

金の機体の各スラスタから、見覚えのある金の粒子が放出され、時守を包んだ。

「…こいつの変わった所はただ一つ」

目の前にいるゴーレムの背後に、鋭角機動で回り込む。

「俺への自爆ダメージが無くなった。ただそれだけや」

轟音と共に、『ゴーレムⅢ』は蹴飛ばされた。

「す、すごいな…」

「ええ。本当、に…。彼女として、誇らしく思うわね…」

「全く、ですわ…」

疲弊からか、既に数人が気を失っている。

一夏と筈、2人を残して専用機持ち達は意識を手放した。
残る2人も、時守が最後の1機に雷を落とした所を確認し、静かに眠った。

全ての電気と雨を吐き出したからだろうか、空からは、薄らと陽の光が差し込んでいた。

Your power is.

「なん、なんだ…。これは…」

モニターに映る時守が、右手装甲の掌から雷を放つ。

あまりの激しさに、力に、圧倒的強さに、千冬は声が出せなかった。

「こ、れは、ISなのか…?」

「立派なISだよ、千冬くん」

「っ—！ロ、ロジャーさん…?どうやってここに…」

「昔少しだけプログラムを齧っていたからね。ちよちよつと弄ったのさ」

開かれた扉の奥で、おちやらけたようにキーボードをタイプするフリをするロジャーを見て、千冬と真耶、そしてロジャーの後ろに立っているナターシャは唾を飲んだ。

「—アレを、齧っただけのプログラミング能力で? IS学園でも屈指のハッキング、クラッキング能力を持つ学生、教員を総動員しても開かなかった扉を、一瞬で…」

千冬は、前々から気になっていたのだ。この、国連事務総長の詳細について。

ロジャー・デイエゴ・スミス

ISが発表され、大国であるアメリカの官僚の経験もあった彼が、常任理事国以外から選出するというルールが例外的に無視されて国連事務総長に選出された。有名大学の出身で、生まれもよし。幼少期からアメリカンフットボールで活躍し、まさに文武両道を生きていた。

公になっているのは、その程度のことしかない。

まるで未来が見えているかのように時守に投資、時守のために医療設備のある国際連合宇宙開発専用ISステーションを開発、そして今も、どこで習ったのか分からないほど高度なプログラミング技術を駆使して、見事扉を開けて見せた。

一体、何者なのか。その問は千冬の中に残り続けることとなる。

「話を戻すよ。アレは、現時点で世界最強のISさ」

部屋の内部に入りながら、ロジヤーは説明のために視線をモニターへと移す。

釣られて、3人の視線も移った。

「使い手も世界最強と言っている。千冬くん。今君が、『暮桜』を操ったとして、全身全霊でぶつかったとして、勝てると思うかい？」

「それは…」

その後が、捻り出せなかった。

まるで雷そのもののISを操る時守。

動体視力には自身があるし、愛機『暮桜』で挑むのだ。

斬れないはずがない、と思いたい千冬。

しかし、千冬にとつて問題は、3つの単一仕様能力『雷轟』、『雷動』、『雷鳴』では無かった。

強化された最強の能力『完全同調・超過』。一切の時守への自爆ダメージが無くなったそれは、時守が縦横無尽に暴れ回るには十分過ぎた。

「言い淀むのも無理はない。ここにいるナターシャ君は、あの『銀の福音』を数分で文字通り粉碎されかけたんだからね」

「ちよ、ちよつとロジヤーさん！そのことは…」

「良いじゃないか。彼女達も、国連代表候補生とその候補なんだ。知る権利ぐらいはあるさ」

そのロジヤーの言葉に、千冬は眉を顰め、真耶は小さく声を漏らした。

襲撃当時。暴走状態ではあったが、専用機持ち7人を相手に奮闘し、時守の第二形態移行で何とか勝ちを得た相手。それを、ものの数分で軽々と倒したというのだ。

「だが、だからこそ、注意してほしいのだよ。千冬くん」

モニターでは、時守がまるで小さな部屋の中で暴れるスーパーボールのように空中を跳ね、『ゴーレムⅢ』の装甲を削っていた。

「更識ロシア代表もそうだが、まだ彼らは子どもだ。とても、大勢の人の上に立てるようにはなっていない。もし、上手く行っているよう

に見えても、それは見せているだけだ。必ずどこかに綻びがある。そこを君に、ケアしてほしいと思う。教師として、何より、彼らの目標としてね」

「はい。それは分かっています」

「あの頃合の子どもというのは、危ういものだ。力を欲するが、手に入れすぎれば壊れてしまう。誰一人として、欠けることなく卒業するまで頼むよ、2人とも」

ロジャーの言葉に、2人は力強く頷いた。

時守は強い。この春のトーナメントで生徒会長の座が変わるだろう、と2人が予測するぐらいには、他生徒との差は明確に現れている。

だが、弱い部分もある。つい先日まで国際連合宇宙開発専用ISステーションにて治療をしていた原因のように、何でも全てを1人で背負ってしまう。

心・技・体。全てが均衡良く成長出来るほど、時守の生活は生易しいものではなかった。

「もう時間の問題だろう。あの鉄の塊が全て沈むのは。ロックも、そろそろ解除されているのではないかね？」

「っ、真耶！クラッキングに当たっている教員に連絡を。解除が確認され次第、閉じ込められた生徒達の避難、並びに医務室のベッドを開ける」

「はっ、はいっー」

千冬から真耶に指示が飛ぶ。

真耶が通話を入れてから数秒後、各地のロックが解除されていくのが、モニターから分かる。千冬も、その連絡を真耶に任せ、別の場所へと連絡を入れていた。

教員2人が対応に追われる中、1枚のモニターで、時守が最後の一体の『ゴーレムⅢ』を貫いていた。

「ではナターシャくん、ここを頼むよ。僕には行くところがあるからね」

「は、はあ…」

自分がこの場に不要だと判断したのか、ロジャーは踵を返し、部屋を後にした。

あまりの彼の自由さに、ナターシャは曖昧な返事をするしか無かった。

◇

「…では時守。お前は、その心層世界とやらで訓練に明け暮れていた、と？赤の8だ」

「そつすね。アレやったらあんまエネルギーも消費しませんし。赤のスキップ」

「スキップということとは…」

「真耶を飛ばして私だな。クソ、そんな上手い方法があるなら私もすれば良かった…。赤の3だ」

「って言っても、その方法出来んの多分俺だけっすからね。赤のリバースで」

「じゃあ青のリバースだ」

「お二人ともさつきからわざと私に回さないようにしてませんか!?!」

「おい真耶。あまり大きな声を出すな。こいつらが起きてしまうだろう」

「あつ、す、すいません」

専用機持ち達10人全員が眠る医務室の一角で、時守、千冬、真耶の3人は小さなテーブルに腰掛けていた。

「そつすよ？意外っすけど、ラウラとかダメージデカいんすから。ちよい気い付けたらんと。青の9で」

「そうですねえ、意外でした。まさかボーデヴィツヒさんがあそこまでやられるとは…。ふっふっふっ…先輩！容赦はしませんよ！

青のドローツードです！」

「むっ、なら黄のドローツードだ」

「緑のドローツード」

「なあっ?!?!…こ、こんなこともあるのかと、ドローフォーも持ってた

「んですよ！赤ですよ！」

「同じくドローフオーで赤」

「んじゃドローフオーで緑っす」

「……1、2、3、4……」

「18枚ドロードぞ、真耶」

「分かってますよお！」

回復を待つ暇つぶしとして、時守が持っていたカードゲームをすることになったのだが、接待でも何でもなく、真耶が負けまくっていた。

彼女が大一番での賭けに弱いのか、それとも時守と千冬が強いのか、その真偽は霧に包まれたままだった。

「手札が21枚……」

「良かったじゃないか。ゲームがゲームなら攻撃力21000のモンスターすら出せるぞ」

「今は遊戯王じゃなくてウノじゃないですか……」

「でも次でオシリス攻撃下がりますね。山田先生つすよ」

「……なんでこれだけ引いたのにドローク系が一切来ないんでしょうか。緑の5です」

「ドローフオーで黄色」

「黄色のドロークっす」

「………1、2、3、4、5、6……」

「自分で手札をさらけ出すのは愚かだったな、真耶」

「ドローク系は被って出してもいいとか自分で言うからっすよ？つてカラーも真っ青な攻撃力っすね。あいつ黄色っすけど」

「お二人とも、まだドローク系隠し持ってます？」

「そんなことはない」

「ことは無いっすね」

「ぐすっ……時守くん……」

「い、いや。そんな目しやんといってくださいよ。2枚とも出したくなるやないっすか」

現在の手札は、千冬が5枚、時守が3枚、真耶が26枚。しかも

会話の内容から、時守の3枚の内2枚がドロ―系であることが分かってしまった。

「…ゲーム、変えませんか？」

「別にいいが…そんなに気にすることか？」

「流石に始めてから7連敗はキツイので…」

「ま、それもそつすね。何します？マリパとか？」

「嫌です。もっと、みんなでワイワイする感じのやつがいいですつ！」

8敗目の予感を察知した真耶が、ゲームを変えることを提案した。

しかし、対人戦となるとこの2人に勝てる気がしない。年頃で、そういった物が得意そうな時守はまだ分かる。だが、学生時代はアルバイトで忙しく、卒業後直ぐに代表になった千冬には、どこにそんなことをしていた暇があったのか分からない。もしかすれば、天性の勘で勝ち続けるという恐ろしいことをしているのではないか、と真耶は思った。

事実、千冬は勘だけで負けていなかった。

「みんなワイワイって言っても、ここやったら出来ること限られてますよ？」

「そもそも医務室でワイワイするなど言われそうだな」

「そ、そこはまあ…アレですよ！」

「そつすね。アレっす」

「なるほど、アレか」

3人から、笑みが零れる。

時守がIS学園に来て、今までで最も穏やかな時が流れていた。

「……んっ、ここ、は…？」

「おっ、起きたみたいっすよ。最初はワンサマか」

「ふむ。どうだ？織斑。恐らく凄まじい程に身体は痛いだろうが、違和感は無いか？」

「は、はい。…えっと、3人とも何してるん…ですか？」

一夏は首を傾げながら、当たり前な疑問をぶつけることにした。

◇

「んうっ…、…えっ?」

「おお、起きたかラウラ。おはよ」

「お、おはようございます師匠。…今、どういう状況ですか?」

「ん?ここで、全員が起きんのを待つとってん」

「なるほど。すまない、随分と長い間寝ていたようだ」

「しゃあないやろ、あの怪我やったら」

一夏が目を覚ましてから、8人がポツポツと目を覚まし始めた。

そして、最後。ラウラが目を覚ましたところで、時守がベッドの隣へと移動した。

「とりあえず、ただいま。んでお疲れ」

あの『ゴーレムⅢ』相手に、良く耐えてくれたと、彼女達の奮闘を讃えた。

「まあ最後の最後は剣ちゃんに全部持っていかれたんツスけどね」

「ほんと、どうなってんだ?お前。そんな簡単に三次移行するなんてよお」

並べられたベッドの中の2つの上から、時守に質問が飛んだ。

質問をした本人、フォルテ・サファイアとダリル・ケイシーは、これでもかと言うほど、互いに近づいていた。

「簡単ってわけちゃうけど、結構キツかってんで?」

「ねえ、剣くん。聞きたいことがあるんだけど」

「ん?」

フォルテ達の質問に答える前に、刀奈が新しい疑問をぶつけてきた。

きっとそれは、この中の誰もが抱いているもので、千冬ですら、聞きたいことであった。

「どうやって、ここに来たの?」

「輸送ユニットで来てん。エネルギー切れたら自動的に量子化されるようなやつやけどな」

「…どうやって、あのタイミングで攻撃を止められたの?」

『雷動』でアイツの目の前まで移動して、あの熱線に『雷轟』をぶ

つけてん」

「あの、一瞬で？」

「おう」

刀奈の質問に、淡々と、しかし丁寧に答える時守。

彼女のベッドの隣へ行き、右手を頭に乗せる。

「悪いな、怖い思いさせてもたわ」

「…ううん、いいの。今、こうして生きてるもの」

「そっか。簪もセシリーもシャルも、なんとか無事そう良かったわ」

「うん…。剣の、おかげ」

「本当なら、わたくし達だけで倒したかったのですが…」

「ほんと、驚いたよ？あのゴーレム達を一瞬で倒すなんて」

「アレぐらいできな、金ちゃんに怒られるわ。三次移行する時にボッコボコにしてもたのに」

少しずつ、彼らの間に会話が増えていく。ダメージと、時守がいきなり帰ってきて助けてくれたということから、上手く話せない者もいたが、段々と場が明るくなっていった。

「ま、ありがとね、剣。アンタが来てくれなかったら、アタシ達下手すりゃやられてたかもしれないし」

「ああ、それには私も礼を言おう。ありがとう、剣」

「…なんか面と向かって言われるとめっちゃ恥ずいわ」

「む？恥ずかしがる必要など無いではないか、師匠。これだけの専用機持ちとISを救ったのだぞ？」

「まあせやけど…」

鈴、箒、そしてラウラから一切の悪意無しに礼を言われ、思わず顔を背けてしまう。見れば、少しだけ顔が赤くなっており、完全に照れているのが良く分かった。

「…悪いな、剣。またお前に頼っちゃった」

「別にええって。加減せえへん、本気の調整には丁度ええ相手やったからな」

「本気の調整？」

「おう。あんなん、なんの制限も無しに普通の I S に撃ったら操縦者諸共イカれるからな。てか制限アリでも『福音』にパーフェクトできる時点で十分なんやけどな」

『福音』って、もしかして『銀の福音』のことか!？」

「ああ。アレの操縦者のナタルがな、国連にも顔出すようになったからな。戦わせてもらつとつてん」

操縦者諸共叩き潰してしまう程の力を有していること、そして軍用 I S 相手に完全試合を達成したことをあつさりと言いつつ時守。しかし、自慢げにせず、慢心する様子も無く、他人を軽蔑もしていないであろうその様子は、どこからか新鮮味を感じられた。

「それとだ、こいつには新しい力が更に付いたらしい。その全てを、『完全同調』を応用させて限られた時間の中で身につけたそうさ。お前達も見た通り、前に学園にいた時よりも遥かに強くなってるぞ?」

「うっわ。すっげえプレッシャー」

時守の隣に並び立った千冬が、事を説明しつつ、時守に圧を掛ける。

当の本人は、へらりと笑いながら言葉を続けた。

「まあ、大丈夫そうで良かったわ。詳しい検査とかはこれからやけど、一件落着つてことで。これ以上みんなが無茶して怪我させへんように俺が見とかなあかんもんなー!」

「うっわ」

「は?」

「鈴さん?」

専用機持ち達が怪我をしていることを良いことに、少し前の自分の境遇に彼らを重ね、皮肉る時守。それに対し、呆れたようにため息を吐く鈴と、反応する時守とセシリア。

医務室に夕暮れの光が差し込む中、時守が鈴に割と本気のコブラツイストを掛け、セシリアが待っていたと言わんばかりに動画を撮る。その光景を見て、千冬と真耶、そして専用機持ち達の中に笑いが起きていた。

◇

「ど?」

「どうしたの? 剣くん」

「いや、なんで皆の完治祝いで俺がISに乗ってんの?」

「新能力お披露目と言っているではないか」

「そうだと師匠。箒の言う通り、何せ4つも新しい単一仕様能力が出たのだ。将来戦う可能性があるという誤魔化しは効かんぞ?」

「『完全同調・超過』というものが本当に剣さんの身体に負担をかけるのか、というのも見極めなければなりませんもの」

「ええー…」

数週間後。時守は1人、第一アリーナに『金色』を纏い、浮いていた。管制室にいる専用機持ち、千冬、真耶達に新しく発現した単一仕様能力と機体の性能を見せるためである。

「時守。向こうで取っていたデータもあるが、地上のアリーナでの稼働記録も取っておきたいそうだな」

「それ言われたら断れへんなー」

「と、時守くんっ! ドローンを出しても?」

「いいっすよ」

ほんじゃいくかー、と彼が呟いた瞬間、アリーナの外壁からドローンが大量に射出されー

「よっ」

晴天の元降り注いだ雷により、木っ端微塵に粉碎された。

「…時守、データを取れんのだが」

「んじゃ、『雷轟』では測定不可能って書いていてください」

「なんて速さだよ…」

「最早異次元じゃない」

一夏と鈴の反応通り、時守の新能力は別次元その物だった。

過去、千冬が『暮桜』を操った時の最高記録は35秒。100個同時に乱雑に射出されたそれを如何に速く撃ち落とせるか、という競技において、この単一仕様能力はあまりに強すぎた。

「では、『雷鳴』、『雷動』ではどうする?」

「『雷鳴』は攻撃向きちゃいますし、そつすねえ…。『雷動』と『完全同調・超過』の同時使用とかでええんちゃいます?」

「よし。なら、行くぞ」

今度は、遠距離同時攻撃の『雷轟』ではなく、雷のように動く『雷動』と『完全同調・超過』の同時使用での、近距離型での測定に入る。

「始め!」

「ふっ!」

バチリ、と音が聞こえたと同時に、アリーナを写すモニターに幾つもの光の線が走る。宙に浮く数多のドローンが、次々と壊されていく。

「らあっ!」

「…11秒、か。時守、身体の方はどうだ?」

「ゼーぜん。なんの問題もありまへんでー。つてか、『完全同調・超過』になってから、身体へのダメージすら動かすエネルギーに変換してますし、寧ろ動きやすいんすよ」

「勝てる気がしないよ…」

「…今のままじゃ、絶対無理」

「こりゃ、ちよーつと面倒なこと言われそうねえ…」

そんな時守の様子を見た専用機持ち達の反応は様々だった。

圧倒的速さと破壊力を前に、言葉を失う一夏、鈴、シャルロット。何とか解析しようとするセシリア、箒、ラウラ。対策を練る簪と、ロシア政府からのお小言を思い浮かべ、憂鬱になる楯無。我関せずといった様子だが、何かしらの打開策を生み出そうとするダリル、サファイア。

そんな彼らの苦悩を知ること無く、時守は言葉を繋げた。

「俺とかワンサマにでも出来てんから、皆にも第二形態移行ぐらいなら出来るかも知れへんのちゃう?」

「無責任な事を言うな、時守。まだ世界でも、片手で数えられる程しか出ていないのだぞ」

「あ、そうでしたね。んー、でも」

何を感じたのか、管制室の方を見やり、時守は1人ごちた。
「なんか、インフレしそうな気がするんすよねえ…」
その言葉に千冬は1人、首を傾げた。

原作8巻 ワールド・ページ編
平和な日常

「へっ、へっ……フビライハンっ！」

「凄いくしゃみだな」

「へブライ語ではなくフビライハンなのか」

「…特に意味は、無いと思う」

いや、マジ。簪の言う通りやって。モツピーもラウラも高々くしゃみ如きでハードル上げやんといてや。

件の『ゴーレムⅢ』襲撃事件から数日が過ぎた。その間、皆の身体が完治したらことを除けば、特にこれといった重要なイベントも無く、体育祭や期末テストまでは時間があるという学生の中で最も微妙な期間の中、久方ぶりに俺はのんびりと過ごしていた。

「…あー。しんど」

「剣さん、最近よくくしゃみをされますわね」

「たまにあんねん。ふっ、へっ…香港っ！」

「どことなくしゃみしてんよ」

「見事にアジア攻めだな」

やから関係ないって、鈴、ワンサマ。たまたま語呂が良かったから出てもただけであって、特に意味とか何も無いからな？

「もー、ほんま嫌やわ。くしゃみ嫌い」

「ここにきて、剣くんの意外な弱点発見ね？」

「ん？ああ、まあせやな。後はデパ地下とかにおける香水くっさいオバハンとかマジ無理」

「弱点が斜め上過ぎではないか？」

そうは言うてもやな、モツピー。普段慣れてへん奴にはアレキツイねんで？鼻ひん曲がるかと思うし、ちよつと意識してもたら吐くかと思うもん。

「ずびっ。…あー、めっちゃ暇」

「悠長で良いわよねえ、アンタは」

「あん？どゆこと？」

「剣も分かっているとは思うけど、皆本国から色々と言われてるんだよ？」

「…なんかごめん」

「大丈夫。そもそも、モンド・グロツソで勝つためには、必要なことだもの。剣くんに責任は無いわ」

そうは言うものの、カナや、代表候補生の表情は明るくない。苦笑いをしている者が大半だ。

恐らく、というか確実に俺のせいなのだが、各国が第二形態移行を目指して可能性のある操縦者に発破を掛けまくっているらしい。主な面子は、IS学園に通っている生徒。つまりはいつものメンバーである。

このままでは国連一強になってしまふのを恐れているのかは分からないが、ぶっちゃけ俺としては誰がどう来ようが勝つだけなので関係ないのだ。

「…ん？もしかして、第二形態移行の話か？」

「お前今まで何話聞いたってん」

「わ、悪い悪い。でもさ、やっぱり短期間でやろうとするのは無理なんじゃないか？」

「…どういふことよ、一夏」

一夏の言葉に、鈴が眉を顰めて反応する。

言葉だけ聞けば、先に第二形態移行を済ませた者の余裕からのアドバイスのように聞こえるが、そうではない。

「まあ確かにな。俺ら、死んだからISが第二形態移行してくれたし」

「ああ、なるほど」

「楯無さん。『霧纏の淑女』の第二形態移行にはどれくらいの期間が？」

「うーん…。良く覚えてないけど、確か1年ちよつと、だったかしら？」

「な？んな短期間で第二形態移行しようなんて、それこそ1回死ぬし
か無いって」

「…ちよつと、死んでくる」

「アタシも」

「じゃあ僕も!」

「待て待て待て」

IS学園で各国の専用機持ち達が集団自殺とかマジ笑えへんわ。てかカナとかセシリーとかシャルとか簪に死なれたら俺も死にたくなる。

「…なら、地道に努力するしか無いのか」

「あれ、何でやろ。ラウラがまともに見える」

「なにっ?! 私は元からまともだぞ!」

「それは天地がどうひっくり返ってもミリ単位でありえへんから安心していつも通りにしとけ、な? 人間それが1番や」

「…むう。師匠がそこまで言うのなら、そうしよう」

なんやろ。敵襲とか以外でどんどんラウラがただのポンコツになって行ってる気がする。…流石に俺とシャルで甘やかしすぎたか?

「なんていうか、平和ね」

「むしろ今までがおかしかったんちゃう?」

鈴と俺がそう言うと、皆が微笑んだ。何この謎のドラマの1コマみたいなん。あ、あかん…っ、また出る…!

「ふっ、へっ…:フランシスコザヴィエルウウウイヤツ!」

「剣、わざとしてるだろ?」

当たり前やろ。こんなくしゃみデフォルトで出るやつおったら逆に見てみたいわ。

◇

「はあ…」

「発情すんな変態」

「してねえよ!」

「えっ…。これから体位測定やのに女子の身体で反応せえへんの…。こわっ」

「だから違うって! 離れるな! 尻を押さえるな!」

数日後の放課後。俺とワンサマは更衣室で制服から体操服に着替えていた。何故か。簡単である。女子の体位を測定があるからだ。測定係は俺とワンサマ。ほんまにここの首脳陣頭どっかおかしいと思うわ。

「いや、モツピーにパイタッチワンチャンやぞ？お前」

「お前それ本人に絶対言うなよ？」

「おっけ分かった」

「フリじゃねえからな!？」

織斑姉弟は2人揃ってフリが上手いから困る。つまりはアレか。モツピーに、『ワンサマがお前の身体になんも感じひん』って言えばええんか?…いや、これ俺がただ単にセクハラ野郎になるだけやん。

「分かったって。俺は言わんから、とりあえずどっか褒めたれ」

「お、おう？」

よし。これでとりあえずワンサマが爆死することは確定した。あのモツピーがワンサマに自分の身体のこと言われて普通でいれる理由ないもんなー。

「あ、山田先生。こんちやっす」

「すみません、織斑くん、時守くん。書類を集めるのに手間取ってしまつて…」

「や、山田先生!？」

男2人でやいのやいのしていると、山田先生がいくつかの書類をカゴに入れ、更衣室に入ってきた。

「あーもしかして、山田先生が測定してくれるんですか!?そうですよね!」

「いいえ?織斑くんも、時守くんも、2人とも測定係ですよ?私は、記録係ですっ!」

その豊かな胸を張り、ドヤ顔でむふーつと鼻息を鳴らす山田先生。対照的に、両肩を落とすし、顔を手で覆い、ワンサマは何やら嘆いていた。指の隙間から、何かしらの水が滴っていた。

ワンサマが1人そんな風に落ち込んでいると、ワイワイガヤガヤと騒ぎながら見慣れた1年1組のメンバーが入ってきた。

「えっ、マジで織斑君と時守君に測ってもらおうの?」

「えー、時守かあ…」

「リコピンウエスト20cm増やすぞおら」

「ご、ごめんって…」

リコピン、のほほん、モッピー、シャル、セシリー、ラウラ、他約30名が、そろそろと体操服姿で2列に並んだ。

「盗撮してDVDにしたら売れそう」

「クソみたいな商売考えてんじゃないわよ!」

『激録! IS学園女生徒の体位測定くその1』

…うん。絶対アウトやわ。リコピンにツッコまれんでも分かるわ。

そんなこんなをしていると、皆が入ってきた扉から、ちっふー先生が入ってきた。

「えっ、嘘やん。ちっふー先生のも測んの?」

「馬鹿め。お前達が測るのは生徒達だけだ」

「…は? 1年1組だけじゃないますの?」

「お前だけ全クラスだ。嬉しいだろう?」

「そりやもちろん」

簪とか刀奈をワンサマに測らせる訳にもいかんしな。

「このエロガキが」

「年相応って言ってほしいっすね。まあ後は、先生達に変わって身体ボロボロになりながらも学園守り続けてるご褒美とでも言えばいいんですかねえー!」

「…すまない。我々が無力なせいだ…」

「いやそんな急に泣きそうにならんといて?」

いきなりちっふー先生がシリアスモード出すのは困る。対処しきれへんわ。

「んんっ! とはいえ彼女持ちの時守と違い、織斑。お前には女子の身体に対して抵抗があると思ったのでな。特別に、そら。目隠しだ」

「おおー!」

え?なんで俺が女子の身体に対する抵抗が無いって知ってるの?

…えっ?

「詳しくは聞いていないが、随分と女遊びに慣れているようだな？お？」

「ほんまただのエロ上司みたいな絡みやめてくださいよ…」

いくら恋人できひんからって生徒にセクハラ発言はあかんと思います。

「つてスケスケじゃねえか！」

「はっはっは！ま、女を知ること必要だと思ったからな。健闘を祈るぞ、織斑」

俺にだけセクハラをしたかと思えば、先ほどワンサマに渡したのは透けている目隠しで、何の役割も果たさないような物だった。

やってる事マジでただのスケベじいさん…。

「では、時守の方の記録には私が入る」

「いや、ちよっ…」

「へっへーん、入るよ織斑くん！」

山田先生の姿が見えない。恐らく、もう既にワンサマの方の記録に入っているのだろう。そして、ワンサマの方に記念すべき1人目、声から察するに、清香が入った。

「うへへ〜。よろしくね〜、けんけーん」

「ん？おお、のほほんか。…ん？ちよいちっふー先生ー」

「なんだ」

「体位測定やのにブラとパンツありなんすかー？」

「…流石に、な？」

おもんな。

「んじや、測るぞのほほん」

「むう〜。けんけんは〜、女心を分かっているようで分かってないよお〜？」

「女ちやうからな」

メジャーを手に持ち、両腕を上げるのほほんのたわわに実った胸囲を測る。メジャーで胸がむにゆりと卑猥に形を変える…。

と思っていたその俺。残念、ブラジャーを着けてるので大して形は変わりませんでした。にしても下着の色赤でレース付きとかのほ

ほんなかなかにやるな。それまで体操服なんやったら周りに透けて見えてたんちやう？

「バスト91ー」

「おー、ちよつとおつきくなつた〜」

「そ、そんなにはつきり言われるの!？」

「どうしよー!アタシ、昨日ご飯お代わりしちやつたー!」

「次ー、ウエスト59ー。細つ、なんでこのバストでこのウエストやねん」

「どやー、努力の証なのだ〜」

その割には身長が無いと。ふむ、どこぞの中華娘が可哀想になってくるわ…。

ん? そういやワンサマは?

「…お?なんだこれ?」

「ひやつ!ちよ、ちよつと織斑くん…!そこは…」

「えつ、と…。相川、さん?」

「やめつ…んうつ!」

「一夏つ…!貴様アアア!」

「体位測定如きでふしだらな行動をするな!嫁エ!」

案の定か…。なんか俺の方にいっぱい来そうな予感すんねんけど。

「い、一夏さんには申し訳ありませんが、わたくしは剣さんの方に…」

「流石に彼氏以外には触られたくないかな…」

「究極の選択があたしに迫る…!」

カーテンで仕切られている向こうから、女子達の声が聞こえてくる。声からして、セシリーとシャルはこっち。んでリコピンみたいにラッキースケベされるかスリーサイズを大々的に公表されるかで迷ってる女子が数人つてどこか。

「けんけん〜、いくらなんでも、ずつと下着姿は恥ずかしいよお〜」

「おお、すまんな。ヒップ85ー」

「うおお〜、ボンツキュツボンだあー。どお〜?けんけん〜、わたしのナイスバディは〜」

「…うん」

「うわあ〜くん。その反応はないよお〜」

なんか、出るところ出てるし引つ込むとこ引つ込んでるけど、なんか違う、気がする。喋り方と身長とでも思つとくか。

「本音ちゃんそんな凄かったんだ…」

「いつもダボダボの服着てたから分からなかった…」

「うへへえ〜、私は出来る女なのだ〜」

外からの声にそう返しつつ、のほほんは仕切りの奥へと移動し、体操服を着て外に出た。

次に入ってきたのは、なんとリコピンだった。

「えっ…」

「ちよっ、見んなあ〜!」

「…見いひんかったら、ワンサマみたいなことなんで?」

「うっ…、ううう…!」

必死に手で胸と股間部を隠したりコピンは、顔を真っ赤にし、太ももをもじもじと動かしながら俺の前へと歩いてきた。

なんか変なことしてる気分になるからやめて欲しい。…つて既に変なことしてるわ…。

「ほ、ほんとにつ、触ったらぶっ殺すからね!」

「へいへい。…どうする?小声で言おか?」

「…うん」

「むーっ!どーして私の時は聞かなかつたの〜!けんけん〜!」

カーテンの奥から、のほほんからの抗議が聞こえる。いや、お前全然隠す素振りしてへんかったし、なかなかド派手な下着着けとつたやん。両方とも年相応の白で揃えてるリコピンとはちやうやん。…上下白が年相応かは知らんけど。

「じゃあ測るわ。手を挙げろお〜!」

「なんで警察みたいなのよ!…み、見ても良いけど、ほんとに変なことしないでよね!」

「…おっけ」

天才剣ちゃん、今のはフリじゃないと理解した。手を挙げたりコピンの胸に、メジャーを巻く。

「きやつ！」

「不慮の事故、不慮の事故……！これは故意ではありませんわ……！剣さんがわざとした訳では……！」

「もう少しで僕達の番……！もう少しで……！」

リコピンの緊張が伝わってしまったのか、俺の手がややキツめに、メジャーを締めてしまった。

ナイス俺の腕。

「も、もう！鼻の下伸ばさないでよ！」

「っ！ナギさん！離してくださいまし！」

「谷本さんも！」

「時守くん、真面目にしないと国際問題……というか冷えきった夫婦関係になるよ？」

何故かカーテンの奥からガシャコンガシャコンと機械音が聞こえる。……え？さゆかの話的にもしかして2人ともIS展開してる？ってか。

「夫婦関係か……」

「いい響きですわあ……」

「け、剣ったら……。気が早いよお……」

「やるなら早くしなさいよ時守！」

改めて夫婦関係という言葉の響きにしみじみと感動していると、リコピンに怒鳴られた。そらまあ下着姿で放置とか流石に可哀想やもんな。

「……ん。一応全部記憶したから、お前が着替えてる内にちっふー先生に言っとくわ」

「スリーサイズなんて覚えて欲しくないんだけど……」

「しゃ、しゃーないやろ。なんでか知らんけど測定係になってもてんから」

「もしかして、これから先も？」

「知らんわそんなん」

リコピンが出ていくと同時に、裏で記録しているちっふー先生の元に向かう。

「リコピンなんかスリーサイズ言われたく無いらしいっすわ」

「大半の女子がそうだ、馬鹿者。ここまで来たのなら、私には言わずにお前が書いてやれ」

「へーい」

リコピンの記録用紙にスリーサイズを書き入れていく。えっと、上から八じゆう…

「なんかアカンことしてる気分になりますわ」

「そんなもの、男でここに来た時点で捨てたものだと思っただけだな」

「まあそうでもないとともに生活できませんわ」

放課後とか服ゆるゆるでブラチラとか当たり前やし、夜とか普通に廊下をノーブラパジャマで歩いとるしな。最初の方は割と眼福やと思っただけで、一週間でキツなっただけ。まだ刀奈と付き合ってたかった時は発散できひんかったもんなあ。

「ま、これから言ってくんで、オナシヤス」

「ああ。しっかりと測って、しっかりと見てやれよ？」

ほんまにただのスケベ親父やんけ。

◇

「3年生…凄かった」

「むっ」

「痛い痛い。いや、大丈夫やって。3年に俺のこと狙ってる人なんておらんやろ？」

「…そうね、そんな噂はあんまり聞かないけど…」

「それでも…、やっぱり心配…」

「全く…先輩方だけで剣さんを独占だなんて、妬けますわ！」

「あはは…。それにしても、こうして5人で集まるのって久しぶりだね」

その日の夜。俺は彼女達と共に、自室でのんびりとした時間を過ごしていた。その際、ふと3年生の体位測定での感想が口から出てしまい、刀奈に横腹を抓られた。

「せやな。何だかんだで、皆忙しかったからな」

シャルの言う通り、この時間にこうして5人が俺の部屋に集まることは、最近無かったのだ。

というのも、俺が怪我を隠そうとしていたり、セシリーが偏向射撃を会得しようと苦戦していたり、キャノボに向けて頑張っていたり、学園祭だったり、二学期がやたらと忙しかったのだ。

「そういう意味では、宿泊許可を出してくれた織斑先生に感謝だね」

「ええ。買い出しのための、外出許可をくださった山田先生にも、ですわ」

最早隠す気すらない会話だが、今日はそういう日なのだ。

俺が回復して、彼女達も全学年専用機持ちタッグマッチの怪我から回復した。俺が学園を出る2週間程前、つまりは1ヶ月強の間、ご無沙汰だったのだ。

すっかり準備が出来ているのか、まだ何もしていないにも関わらず、彼女達の息遣いが荒くなっている。

「今日は、色々と持ってきたから…」

「存分に堪能してちょうだいね、あ・な・た」

簪が、何やら重そうな黒いビニール袋を俺に見せびらかす。それを合図にしたかのように、刀奈が俺の胸に抱きつき、押し倒す。

その日、俺はIS学園に来て2回目となる最も充実した夜を過ごした。

EOSと面倒事

「どういふことで、EOSだ」

「どういふことやねん」

体位測定からさらに数日後のIS実習。なぜかちっふー先生が俺が国連で開発に関わらされた悪夢の名を口にした。

「先ほど、お前にも関係のある話だから聞いておけと言っただろうが。先日の襲撃を受け、専用機を1度オーバーホールすることになっただろう。そこに、国連からEOSというもののデータを集めてほしいという要望が来たのでな。丁度良いだろう」

「い、嫌や！俺はもうアレには乗らへんぞ！」

「剣さん？どうかなさいましたの？」

「あんなポンコツ乗りたいないわ！絶対防御無いSE無い、やのにクソ重いし、あんなんで訓練したくないわああ!!」

EOS。その名を聞くだけで思い出してしまふ、悪夢の日々。本当に辛かった。ちっふー先生にフルボッコにされるよりもキツかった。

「そんなになの？剣」

「ああ：皆は多分大丈夫やと思うけど、ちよつとな…」

「何があつたんだ？」

「ISの全方位射撃を命懸けで殴り落とし続ける訓練があつてやな…」

ラウラ、ワンサマ、やめろ。なんで二人して俺の肩を叩くねん。

セシリー、シャル、モツピー、鈴、簪なんで皆泣いてんの？

「そんな馬鹿げたものは訓練ではなく、EOSの駆動実験だ。お前でしかやらんから安心しろ」

「マジふざけんなよアンタら！」

いつかは役に立つから、ちよつとだけだから、と言われて装備したEOSでまさかあんななるとは思わんやん。

ええ大人が不気味に笑いながら近づいてきたと思つたら狙い撃ちにされんのはほんまにヤバかった。

「ともあれ、今日はEOS同士での実験だ。死ぬ気でやれば死ななことは時守が証明した。なので、お前達には安全圏内でどれだけ動けるかを試してもらいたい」

周りを見れば5人とも楽しそうにEOSに乗り込んでいる。

あーあ。俺知らんで。

「う、お…。なんだコレ、重くて…」

「動きづらいですわ…!」

EOSを装備した皆は、とにかく動きづらそうだった。そらそうやわな。

E (えらい)

O (重い)

S (装備)

で、EOSやからな。

「コツなどは無いのですか、師匠!」

「お?コツ?」

「さつきから剣だけ1人、軽快に動いてるからね」

「コツはまあアレ。横に動くってか上下に動く感じ」

言葉だけで言っても絶対に伝わっていない自信があるので、ゆっくりと動く。

「まず、軽くしゃがむやろ?んで、膝をちよい伸ばす時に左右で力の調整して進んでいくねん」

「それを連続させるのか?」

「せやな。連続させまくったら…」

視界が激しく上下する。それと共に、普段は聞くことがない凄まじい機械音が辺りに鳴り響く。

「こうなる」

「…いや、絶対酔うだろ。それ」

「もち。口でドウエドウエ言ったら気持ち速なる」

「ジャンプしてねえじゃねえか」

ええねんそんな細かいこと。

「で?これでペイント弾ぶつけ合ったらいいんすか?」

「そうだ。既に充填は済ませてあるので、いつでも始めて良いぞ」
「死ねやボケカスウ！」

「ぶっ!？」

開始の合図と共に、ワンサマに向けてペイント弾を連射しまくる。
赤、青、黄など、ワンサマの身体が色とりどりになっていく。

「綺麗なオブジェにしてやんよ！」

「ちよ、待っ…臭っ!？」

「当たり前だ。特製ペイント弾だからな。今日1日は落ちんぞ？」

「喋ってる場合か？ワンサマ！」

ガシヨングシヨンと重々しく動くワンサマ号に対し、超速で上下運動をしながら横にスライドする俺。

ほぼ全弾がワンサマに命中する。

ふと視線を逸らせば、セシリーやシャルはキャツキャウフフと和やかに動いていた。

可愛い。

死ねる。

なるほど、片方は緩慢な動作を、片方は急速な動作を確認するとうことか！

「お前、剣！茶色を尻に当てるな！」

「じゃあ紫にする」

「やめろ！余計グロくなるだろ！」

「グロないとおもわないやろが！」

「おまつ、マジでやめっ…！簪も尻を狙うな!？」

「ふふっ…」

超高速スライド走行を繰り返す俺と簪。円を描くように動き、中心にいるワンサマを狙う。

「逃げられると思わないこと…、もう、逃げ場は無い…!？」

「今日のお前はケツが茶色に汚れたISスーツで一日過ごす運命なんやー!？」

「やめろオ!!」

どこを向いても、どんな回避をしても、確実にケツが汚れていくワ

ンサマ。

紫やらが既に混ざっており、その色はだいぶ気持ち悪い物になっている。

「緑ー!」

「ぼふあつ…!」

「よし、そこまで!…そ、そこ…まで…」

「ぶ、ふ、くくつ…よ、嫁よ…。笑らせないでくれ…」

「え?」

ちっふー先生の掛け声で、短かったEOS操縦は終わった。

と同時に、ワンサマの凄まじい色合いで、ちっふー先生とラウラというお硬い2人が笑い始めた。

「お、織斑…。その、だ。顔はしっかりと洗っておけ。顔面がナメツク星人のようになってるからな」

「ええ!? ホントかよ、千冬姉!」

「織斑先生だ」

「は、はい…」

注意されるも、しばかれることは無かった。

多分ちっふー先生、スペック表が汚れるん嫌やったんやろな。

「それと、ISスーツも洗っておけよ。カーキ、スカイブルー、ベージュやグレーなどは落ちにくいからな」

「剣! お前なんでそんな色使ってたんだ!」

「国連の格納庫から持ってきた」

ワンサマの身体、もといISスーツは、俺と簪の集中砲火により最早現代アートのようになってる。

ケツは茶色一色だが、全体的にマイナー色で疎らに染められているかと思えば、紫や緑といったメジャーな色が散りばめられている。

「圧倒的美的センスス!」

「マジでふざけんな!」

最早元の色が無くなったワンサマは、EOSから飛び降りた。

瞬間、ベチャツという音と共に、深緑色のインクが足元で跳ねた。

◇

「しっかしやー」

IS 実習後の混み合う女子シャワー室。

その仕切り越しに、鈴が話す。

「この前の事件、あいつが帰ってきて無かったらヤバかったわよねー」

「そうですね。本国からも、文句…というよりかは、安否確認の連絡が耐えませんでしたし」

セシリアが返したその話題は、先日の『ゴーレムⅢ』襲撃事件のもので、専用機持ち全員が食いついた。

「確かにな。2年、3年の専用機持ちは本国での緊急修理が必要だと聞いたが？」

「それは、ラウラでもないのか？随分とダメージを負っていたが…」

「うむ。確かにそうだが、生徒会長の専用機と共に学園で修理してもらったことになったのだ。師匠からのツテでな、技術者が派遣されるらしい」

「え、それって大丈夫なの？機密とか…」

ラウラが口を開き、その言葉に箒が疑問を投げかけた。

先の襲撃、AICとワイヤーブレードによるヘイト稼ぎをしていたラウラのIS『シユバルツエア・レーゲン』のダメージはとんでもないことになっていた。

しかし、それを学園の設備で直すのだ。

その事に対する疑問、不安に対し、今度はシャルロットが口を開いた。

「…大丈夫。流石に、戦争を誘発させるほど国連もアホじゃないし、何より剣がさせない。メンツが保てないし…」

「箒の言う通りだ。言わなかったが、派遣されるのも我が本国の技術者だからな」

「なんだ、先に言っただよ…」

箒とラウラからの意見により、シャルロットは胸を撫で下ろした。

IS 学園は良くも悪くも絶対不干涉。現状、シャルロットもその性

質を使い、本国からの面倒な繋がりを絶っている状況にある。

「だが、学園としても本来引き受けたくないはずだがな」

「え、なんで？」

「…ラウラだけじゃなくて、お姉ちゃんのISも引き受けてるから。：最先端の技術ほど、扱いにくいものは無い…」

「直しにくいですし、何より盗まずにそれをしなければなりませんもの」

学園の整備室を貸す以上、どうしてもログなどが一瞬残ってしまう。

その後処理、並びに補助などが出しにくい、というのがラウラと楯無の両者のISにある面倒事である。

「出来れば、シユバルツェ・ハーゼの隊の者達にもお土産を持って帰りたいかったのだがな、もう少し先になりそうだな」

「そう言えば、ラウラもシャルロットもセシリアも鈴も、あまり国には帰れないのだったな」

泡を流した筈とラウラが、シャワーブースから出る。

あまりの胸囲の差に、ラウラの心に幾らかの嫉妬が産まれた。

「…ああ。軍属の私は何よりだ。帰る時は事前に作戦などを知らずに帰ると、かえって邪魔になる」

「隊長でもそうなのねー、って、今は副隊長に任せてるんだっけ？」

同じく、泡を落とした鈴が出てくる。

あまりの胸囲の差に、鈴の顔に影が映える。

「…でも、IS学園でその分学べるって考えたら、気は楽…かも？」
簪が出てくる。

以下略

「はあー。すごいワガママになっちゃうけど、僕も第3世代の専用機に乗ってみたいいなー」

シャルロットのそんな呑気なボヤキを聞き流しつつ、3人は涙ながらに下着を身にまとっていく。

何も知らぬまま、筈は新品の下着を身にまとった。



「うぎ」

「黙れ時守。手を動かせ」

「いや、シャルとかセシリーとか簪とかカナとかいるんやったらまだ分かりますよ？なんで俺だけ教師に囲まれて…」

「良いからして下さい、時守君！」

「うおっ！」

平日の職員室。授業と授業の休憩中に、時守はそこにいた。

その日はクラスにツツコミ役である一夏がおらず、暴れに暴れていた時守。

それを見かねた千冬が、彼の首根っこを掴んで強引に連れてきたのだ。

「そうだぞ、お前に関係することなんだ」

「えー、この案件やったら、カナ連れてきてもええやないっすか」

「言わせるな、2年のアイツを引っ張ってくるのは面倒なんだ」

「大人って汚ったね」

「と、時守君！先生に向かってそんなこと、言っちゃダメですよ！」

「へーい」

真耶と千冬、それから数人の教師に囲まれながら、時守は作業を続けていた。

「だいたい、メンツを見て察しているだろう？お前なら」

「まあそりや、ね。IS学園きつての実力者揃いじゃないっすか。

…ほぼ全員が、元国家代表。一番弱いのが山田先生っすから」

時守を囲う教師陣、それは、技術者出身の者達や中途半端な実力者ではない。

正真正銘、本物の実力者達だった。

「あと、この資料。そりや技術者出身の先生達には見せれませんわな」

「時守君が賢くて助かります…」

「まあこれでも、国連代表ですし」

あははー、とアホみたいに笑う時守。

その笑い声を掻き消すかのように、突然職員室の電気が消えた。

「山田君」

「っ、IS学園周辺に不審者を確認」

「システムも落ちて、防御シャッターも作動してるわ、千冬」

「ある程度はイカれてないわね。でも、非常灯が点かない…」

「オペレーションルームへ専用機を誘導、どうかしら、千冬？」

「元からその予定だ。時守」

「やってますよ」

緊急時の対応にも慣れた面々が、手元にある端末、ウインドウで落ちて着いて現状が把握されていく。

時守により、千冬の名の元にオペレーションルームへの専用機持ちの収集がかかった。

またも、IS学園での事件の匂いを、時守は感じていた。

◇ ◇ ◇

「では、状況の説明を始める」

IS学園地下特別区画、オペレーションルーム。

本来ならどんな生徒も入ることは許されず、知ることも無いそこに、現在IS学園にいる専用機持ち全員が集められていた。

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、時守。その前に、千冬と真耶だけが立っていた。

「一切の質問は受け付けん。お前達には、これから電腦ダイブをしてもらう」

「で、電腦ダイブ…ですか？」

「ああ…時守」

「うっす」

千冬から促された時守が、専用機持ちの列から外れ、真耶、千冬側に立つ。

「今、IS学園はハッキング受けたみたいだな。目的、手段、犯人、

誰も分からんから内から反撃ってことや」

「なお、電腦ダイブは時守が慣れている。恐らく、この世界で最長と言っても過言ではない程にな」

「まあ、そういうこつちや」

そうは言えども、動揺が収まらない専用機持ち達。

しかし―

「ぶつちやけ犯人に心当たりあるし、出会ったら5秒で倒せるからしよーみ余裕」

「なんだ、そうなの」

―時守の発言でその緊張は一気に解れた。

「全く…、緊張感を持って挑めと言っただろう…。とにかく、お前達はアクセスルームに移動！更識妹、お前がバックアップ、並びにナビゲートに当たれ」

「はいっ―」

楯無を除く7人がオペレーションルームを後にする。

「更識姉、お前には学園を狙う第三勢力の排除を頼む」

「はっ！」

「システムが復旧し次第、時守にも命令を与えている。無茶は、するなよ」

「分かっています。これでも、自分の身は大切ですから」

「なら、頼んだぞ」

ペーリとお辞儀をした楯無が、オペレーションルームから出ていく。

「…さて、生徒達にしてもらう最低限のことは任せたが、私達には辛い任務が待っているな、真耶」

「ですね。…とはいえ、流石に許可が降りた先輩なら、大丈夫なんじゃないですか？」

「ふっ、どうだかな」

千冬と真耶が、薄らと笑う。

生徒達には、比較的軽い任務を任せた。

自分達2人に課せられたのは、それとは比べ物にならない任務。

しかしそれでも――

「またまた…。敵を切る、その目的で振るう剣は、何よりも強いでしょう?」

「まあな。時守と戦う時よりかは、遥かにやりやすい、なにせ――」

――我慢しなくて良いからな。

千冬の口端が釣り上がる。

千冬と真耶。2人も、とある準備へと取り掛かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「何よ()…」

「…精神と時の部屋…?」

「ちやうぞー簪ー」

足取りが重い6人を引く時守は、いつも通りだった。

白一色、ベッドのような物がズラリと並ぶそこは、誰も見覚えが無いものであった。

…時守以外は。

「まあそんな固くなるようなとこちやうで」

「えっ、剣。アンタここ来たことあるの?」

「お?おお。国連のヤツで色々となー」

のっしのっしと歩き続ける時守。

ベッドチェアの横に辿り着くなり、手を翳した。

「マスターID、初代国連代表、時守剣。使用IS、金色」

その声と共に、この部屋全ての機械が一気に作動した。

「な、何ですの?今のは…」

「非常時にのみ使える、いわゆるチートみたいなもんや。許可さえ降りれば、IS関連で文字通りなんでも出来るで?」

ニヤリと不敵に笑う時守は、この場において頼りになる存在であった。

「…とにかく、急いだ方が良い。中は仮想現実の世界。…早く終わらせよう」

「それもそうね、了解っ」

快活な声で、鈴が元氣よく答える。

時守と鈴。2人によってある程度不安が払拭された専用機持ち達は、ベッドチェアの端末にISを接続した。

「んじや、全員横になつて。昼寝みたいな感覚でええから」

「むう…師匠、教官は緊張感を持ってと言っていたぞ？」

「鬼の居ぬ間に洗濯つてやつや」

本人が聞いていたら真つ先に主席簿を食らっていただろうが今はいない。

ラウラも、いつの間にか千冬のことを教官と呼んでいたが、もちろんお咎めは無かった。

「じゃあ、行きます…！」

デスクに座った簪が、ISから立ち上げたコンソールから、システムを作動させる。

6人の意識が吸い込まれるようにどこかへ落ちていく…。

「…ん？あれ…剣の…？」

そんな中、時守のIS『金色』がぼんやりと光っていた。

T A S

「っと」

見渡す限り見事な草原。

ほんま草生えるわ。いや、生えてるわ。

季節感ガン無視の日差しが降り注ぎ、風が駆け抜けていく。

…。

「そこやクソ兔イ！」

挨拶代わりと言わんばかりに右手から『雷轟』を射出。

草むらに隠れていた兔が、丸焦げになって倒れていた。

『…えっと、ハッキングの阻止が完了されたって…』

任務が、2秒で終わった。

「え、ちよ、アンタ何したの？」

「大元ぶっ倒した」

「あ、そう。…帰っていいの？」

「ええんちやう？」

『不思議の国のアリス』のアリスの格好をした面々が、俺の元へと集まってくる。

「あの兔は何なのだ？」

「さあ？相手のISのワンオフ…その鍵的な？」

「つまり、それを倒したからもう終わりってこと？」

「おう」

「わたくし達が来る意味ありましたの？」

セシリーの疑問も当然や。

正味、ほんまに俺だけで良かってんけどな。万が一のことも考えて、らしいけど。

「でもでも、この衣装可愛くない？」

「ああ、天使。可愛すぎて死んでしまいそう」

『…死んじゃ、嫌…』

「冗談やって、簪」

シャルのアリス衣装。

ありがとう敵！そこには感謝するわ！

「……………ああああ」

「…む？何か、聞こえないか？」

「あー、電脳世界ならやつぱ来るか…」

「…あああああ！」

シャルとセシリ、2人の衣装を眺めていると、上から何やら叫び声が。

この状況で、叫び声を上げながら落ちてくるやつなど、俺は1人しか知らない。

「あああああ！受け止めてや剣ちゃんんんん！」

「おっけい！バッチコイ！」

腕を広げる。

見上げれば、黒のワンピースと金色の長い髪の毛を靡かせながら、それは落ちてきていた。

「ありがとう！剣ちゃー」

「やつぱ嘘」

「ブツ!!」

見た目10歳のそのガキンチョは、俺の手をすり抜け、見事に地面に顔面に叩きつけた。

「おいコラ剣ちゃん！何してくれとんねん！」

「いや、あの速さで受け止めれへんやん？」

「それでも10歳の子どもを普通そのままスルーするか!？」

「お前怪我せーへんやん」

「何やとー」

わーわーぎやーぎやーと…あいつ変わらず騒がしいなこのクソガキ。

見た目だけはそれなりやけど…などと考えていると、凄まじい表情でこちらを見る5人、空中に投影されたモニターに映る簪も含めると、6人。

「け、剣さん…？そちらのかたは？」

「おっ…こいつ？…おい、自己紹介しろ」

「…つたく…。ウチの操縦者やからって、無下に扱い過ぎやわほんま…」

「操縦者…？ま、まさか…」

ラウラが真つ先に、その後、波紋のように驚愕の表情か広まっっていく。

やっぱ、見るのはみんな初めてか。

「ウチは『金色』っちゅうねん。知つとるとは思うけど、剣ちゃんのIS、その自我ってもんや。皆、よろしゅうな…」

につぱー、とアホヅラ下げて笑うこいつを見て、皆が皆、面白い程の反応を見せる。

なぜか震えるモツピー、鈴。

口をぱくぱくさせるセシリー。

目を輝かせるシャル。

同じぐらいの身長に嘆くラウラ。

頭を抱える簪。

「…でも、ウチはよろしゅうするつもりは無いけどな」

しかし、そんな面々も、金ちゃんのその一言で強ばってしまう。

「おい金ちゃん」

「あかん。これだけは言わせてもらう。…今はここにおらん奴もおるけど、ウチにだって言いたいこともある。こんな機会、滅多に無いしな」

明らかに口調、トーンが変わった金ちゃんに対し、誰も、何も言えなくなっていた。

恐らく、何を言われるのか想像がついているのだろう。

「お前ら…もう、IS乗らんと言ってや」

「おい金…」

「分かってる！…分かってるけど、ウチだって、剣ちゃんに怪我されたくないんや…」

「…それはもう、これからはすることは無いって」

「これまでの話や！」

金ちゃんの怒号が響く。清々しい程に開放的なそこに似合わない

その怒りは、留まることを知らなかった。

「過去の話は忘れられへん！ウチはIS、言わばそのAIや！一回あつた事は忘れられへんねん！剣ちゃんがいったい何回死にかけた!? 周りがちゃんとしてれば、剣ちゃんがそんな思いすること無かつたやろ!?!」

「…それ、は…」

「…はっ、だんまりかいな…。まあええわ。もう、ウチは技術面に關して、お前らに期待はしてへんからな…っ!? 痛っ!」

「言い過ぎや」

流石に言葉が過ぎる。そう判断し、とりあえず金ちゃんの頭に拳骨を叩き込む。

しかしそれでも、シャル達の顔に笑顔は戻らない。

「…でも、でもお!」

「お前が俺を思ってくれてるのは、『完全同調・超過』を使つてる俺が一番よう知つてる。…せやったら、皆に強く当たらんといってくれ!」
「うう…うわあああつ!」

「汚つたね!ちよ、お前自分で種まいて勝手に泣くなボケ!」

泣きわめきながら金ちゃんが俺に抱きついてくる。

毎度思うのだが、こいつISにしては感情表現豊か過ぎひんか? 空での訓練の時も、散々色々話したし。

「…あの、金、ちゃん?」

「…なんや金髪」

「…ごめんね? 僕達が今まで不甲斐なかつたのは確かだし、それで剣も傷ついちゃつた、のも事実。…でも、これからはここにいる全員、そんなことは絶対にさせないって誓う。…それで、許してくれる?」

「…:…なら、お前らも死なんことも条件に入れる。お前らが死んだら、剣ちゃんも悲しむからな」

「うんっ!約束」

ゆーびきーりげーんまーん、と金ちゃんと指切りをするシャル。

諭されてる少女と、優しいお姉さんと見ればいいのだろうが、諭されている側の中身はただの関西人である。

「…そんなことを、思わせてしまっていたんですね」
「…ああ。ごめんセシリー、止められへんかったわ」

「むしろ、良かったですわ。客観的に、どのように見られているか分かりましたもの」

「そうね。これ以上、雑魚認定されるのはアタシが許せないし」

「もう師匠を傷つけません！」

「うむ、もちろんだ！」

『最初っから、そのつもり…』

金ちゃんの涙により、皆が改めて決心したようである。

正直、変な空気にならへんか心配やってんだけど、大丈夫っぽいな。

「んじや、用もなくなつたし、戻ろか」

『えつと…どうやって？』

「あー、アイツ一瞬で倒してもたから帰れへんのか…。金ちゃん何とかできるっ…」

「任せときー！今やこの空間は、あの兎のもんちやう。倒したウチのもんや。やからー」

金ちゃんの全身が淡く光る。

おいお前、まさかー

「—衝撃浴びせたらショックで戻れるわ！」

「やめー」

『『雷轟』 ツー！』

—瞬間、俺たちは雷に包まれたのだった…。

◇

「っ、何すんのよ！ってあれ？」

「戻ってきたみたい…」

「…剣、さんは…。どこへ？」

「剣なら、お姉ちゃん達の補助に行った…。『雷動』で瞬間移動みたいに移動してたから…」

「大丈夫か？カナ」

「ふふっ、ありがと、剣くん。助けに来てくれて」

「おい時守、もう終わったのか？」

「はー、流石に早いですねえ…」

「…もう、終わったみたい」

「ええ…」

仮想現実世界から戻ってきた鈴達。

見渡せば、そこに時守の姿は無かった。

しかし、そのほんの数秒後。楯無をお姫様抱っこした時守が入り口の扉から、千冬と真耶を引き連れて戻ってきた。

…一件落着である。

「相手は何がしたかったんだ？」

「さあなー、まあ、アメリカってことは分かってんだけど」

「ちよつと、ヒヤツとしたわね。縄が切られるなんて…失態だわ…」

「まあ、間に合うたし、終わりよければ全てよしや」

気持ちよさそうに抱き上げられる楯無の顔は、終始にやけっぱなしで、とても生徒会長のものではなかった。

「えっ、その…侵入者とかは？」

「お？俺が戻ってきた時に、『雷動』でカナんとこまで行くやる？んで『金色』でぶっ飛ばして、またちっふー先生んどこ行って、ぶっ倒した」

「…長く苦しい戦いだっただな…」

箒の呆れたような声が、アクセスルームに響く。

何はともあれ、終わったのだ。



『6回の裏、山田先生チームの攻撃は、4番、ピッチャー。織斑、一夏。織斑、一夏』

「いけ一夏！お前のバットで決めろお！」

「嫁！優勝するのは私達のチームだ！」

少女達の声援が、バッターボックスに立つ一夏へと向かう。

対するは、ここまで無四死球無失点の好ピッチングを続ける時守。

「ぶれーいー」

「ふっ！」

「くっ…！」

「すとらーいくー」

「144km/hの膝元に食いこむ高速スライダー…！」

「流石剣ちゃん…ISの補助アリって言っても凄いわね…」

布仏本音の合図で、時守が投げる。

右バッターの一夏の身体へと向かっていたそれは、突如として起動を変え、インコース低めへと突き刺さった。

「セシリアも流石の好リード。…こりゃ一筋縄じゃいかないわね…」

「え、えつと…。織斑くん！頑張ってくださいーい！」

鈴のボヤキに焦りを隠せなくなった真耶が、それを誤魔化すかのよう
うに声援を届ける。

「すとらいくっー」

「っ、外角へのチェンジアップ…！」

「性格悪いわね…！セシリア…！」

「6回まで凰さんの内野安打1本のみ…。織斑君…」

セシリアの巧みなリードに、一夏のバッツが空を切る。

6回裏。いよいよ試合も終盤に差し掛かる中で、真耶のチームは内
野安打でしかヒットを出せていなかった。

「…、ボール」

「おお〜」

「インコースギリギリ…」

「良く見ていけ！一夏！相手も疲れているはずだ！」

「時守イ！しっかりと締めるオ！」

「つらあ！」

「っ…！クソ…！」

「すとらーい、バッターあうとー」

ため息が、真耶ベンチを包む。

帰ってくる一夏を責めるものは、いなかった。

「どんまいです、織斑君！次は打てますよ！」

「は、はあ…。あの、なんで野球なんですか？」

「えっ!?えっと、学園のシステムに異常が出たんですが、思いの外早く解決してしまったので。皆さんの息抜きにもいいかと」

「…なるほど」

IS学園からの緊急連絡を受け、最速で倉持技研から帰ってきた一夏を待っていたのは、体操服を抱えた千冬だった。

有無を言う間もなく着替えさせられると、そのまま試合が始まったのだ。

一夏からすれば、何が何だかさっぱりだ。

「あうとー」

「あー…、ラウラもショートゴロ…」

「理子って変なところで凄い動きするわよねー」

「さっ、織斑君！守りですよ！頑張ってください！」

「は、はい…」

何も分からぬまま、一夏はマウンドに立つのだった。

『7回の表、織斑先生チームの攻撃は、2番、セカンド。更識、簪。更識、簪』

「いっけー！簪さーん！」

「しぶとく繋げー！」

対するは、千冬チームの技巧派セカンド、簪。

左打席に立った彼女は、クラウチング打法。しかもバットを短く持ち、繋ぐことに意識を向けていた。

「…はっー！」

「…」

「ふあーるー」

『ファールボールに、ご注意ください』

簪がカットし、楯無のコールが場内に響く。

彼女の選球眼は、1年トップクラスのものだ。ならば、臭いところ勝負で歩かせてしまう方が…。

「ふぁーるー」

そう考えている内にも、簪はカットする。

球を受ける筈も、どこに投げれば良いのか分からない。そんなサインだった。

そんな時。

「…よっ、と」

「っ、サード！」

「嘘…！」

「更識さんがセーフテイ!?」

「っ、セー！セー！」

外角への投じたストレートを、セーフテイ気味に転がされた。

不意を付かれ、サード、相川清香がダッシュをかけるも間に合わず。結果として内野安打となってしまった。

「よしっー！」

「ここで、3番のシャルロットに回る…」

「出塁率7割越えの力を見せてやれー！」

苦笑いしながら出てきたのは、千冬チームのクリーンナップの1人、シャルロット。

長打力は無いものの、確実なミート力、そして選球眼と足の速さを生かした出塁率の高さに要注意。

「っ、そこはまずいだろ、箒…」

箒が指示したのは、前のシャルロットの打席、綺麗な流し打ちでレフト線に落とされ、2点タイムリーツーベースを打たれた外角低めだった。

「…っ、なあ!?」

少し、そのサインに不安を感じてしまった一夏は、ファウルを誘うために外角高めへと投じた。

しかし、結果は不発。左打席に立つシャルロットの流し打ちで、これまたツーベースヒットとなってしまふ。

「タイム…一夏、どうした。サインは外角低めだっただろう?」

「ああ、悪い…。っ、ここに来て4番の剣か。…その次は、セシリア

…」

「次のバッターに集中しろつ。剣ならば、最悪歩かせてもいい。とにかく、コールドにはさせんようにな」

「分かってるよ」

箒がマウンドからホームベースへと戻っていく。

現在、7回表。5―0で、千冬チームが勝っている。

「いつけえ！時守くーん！」

ワアワアキヤアキヤと歓声が飛び交うが、時守の視線の先には監督しか写っていない。

―容赦なく、叩きのめせ。狙え。

実の弟相手に、鬼のような采配を見せる千冬だった。

「ふっ！」

「ぼーるー」

「いいぞ一夏！ナイスコースだ！」

一球目、外角低めへのストレートが外れる。

元来、そこまで野球をこななかった一夏が投げられる球種は多くない。ISの補助があれども、大した変化は産めない。

ならば、叩くのはファーストストライク。

「…ふっ」

一夏の腕からボールが放たれる。

軌道は、先程よりも僅かに内。

狙い、通り。

「っ―！」

快音が鳴り響き、ボールがグングンと上がっていく。

バットを放り投げる。一夏が蹲り、シャルと簪がゆっくりと歩き始める。

ライトスタンド中段へと、白球が叩き込まれた。

「つしやらあ！8―0！剣君の勝ち越しスリーランホームランじゃあー！」

「あつと2つ点！あつと2つ点！」

「悪いな、真耶。…私は、勝負事では負けたくないんだ」

ホームに帰ってきた時守が、簪とシャルロットに抱きしめられている。

ネクストバッターサークルに控えているセシリアとハイタッチを交わした3人が、ベンチへと戻る。

「良くやった時守。…後は」

『あぁつとー！これも大きい！入るか、入るか…入ったー！二者連続ホームラン！セシリア・オルコット、バックスクリーン直撃の特大家庭ラン！』

ウグイス嬢兼実況解説をしていた楯無の声を聞き、全員がセシリアの方を見る。

そこには、まるで外国人助っ人のようにバットを振り切った彼女がいた。

のっしのつしと一塁ベースへと向かう彼女。

白球は、バックスクリーンへと叩き込まれていた。

「…後は、最終兵器に任せておけ。審判！代打、私だ」

ユニフォーム姿でヘルメットとバットを持ってバッターボックスへと向かう千冬は、これ以上にならない程に頼もしかった。

◇ ◇

「いやー、楽しかったねー」

「ほんとほんと。織斑先生の最後のホームラン、すっごかったよね」

「外角低めを引っ張ってレフトポールの最上段にぶつけるとか、凄いやねー」

ワイワイガヤガヤと、勝ち負け関係無く生徒が後片付けに励んでいる。

その光景を見ながら、千冬と真耶は2人、ベンチで話していた。

「ほんと、今日は何も起こらなくて良かったですね」

「ああ。時守が4分半で片付けたからな。下手なカップラーメンならまだ出来上がらんぐらいだ」

「強かったですねえ、時守君」

内容は、今日の昼にあった謎の襲撃事件。

開始から撃退完了までに、時間のかかるカップラーメンが一つ出来上がらない程に、一瞬で終わったそれは、既に記憶から薄れ始めていた。

「…そう言えば、隊長と呼ばれていた奴を拘束していたな」

「ええっ!?大丈夫なんですか!?!」

「なに、時守のI Sで気絶させてあるから大丈夫だ。学園の外から狙っていたやつも、時守が脅しを掛けていたからな」

「はえ、何でも出来るんですね、時守君…」

明らかに大丈夫ではない内容が千冬の口から飛び出るも、その淡々とした口調と真耶の性格から、彼女はあっさり何事も無いと信じてしまった。

「…ではそろそろ、私もお暇—」

「おい真耶。…お前、賭けの内容を忘れさせたとは言わせんぞ?」

「え、エー…ナンノコトカ…」

「ほう?」

「分かりましたよお!今日でいいんですか!?!」

「ああ。…くうー!久しぶりだなあ!食べ放題じゃない焼肉は!」

「え、え、っ!?!嘘でしょ先輩!」

更衣室へと向かう生徒達を尻目に、真耶と千冬も教員用ロッカールームへと歩き出した。

この日の夜、真耶の財布から質量が消えた。

原作9巻 運動会編
乙女達の闘い、開幕

「はい、あーん」

「あーん」

「あーん」

「あーん」

「…あ、あーん」

「…何アレ」

「まるで餌付けだな」

件の襲撃事件。

噂が歪曲しすぎたせいで、生徒に伝わっている名前が『アメリカ産5分カップラーメン襲撃事件』というトンでもないモノに変わってしまった出来事の翌日。

専用機持ち達は、食堂にいた。

「もぐもぐ…。餌付けって…そんなこと言うけどね、箒ちゃん。剣君の本気料理食べたことないから、そんな事が言えるのよ?」

「…、そうですね。この一流料亭にも匹敵するほどの腕前、そうは頂けませんのよ?」

「それに、彼氏があーんってしてくれてるんだもん。ちゃんと答えないと」

「妬みは、やめて…」

「はあ!? そんなんじゃないわよ!」

「そ、そこまで言うなら食べさせてくれ! 剣!」

「え? いや」

時守の言葉を聞いた瞬間、鈴と箒がテーブルに頭を強くぶつける。

ゴスツ! という音と共に沈んだ2人は、額を赤くしながら再び時守の方を向いた。

「なんでよ!」

「そうだ! 説明を求めろ!」

「ちゃんとカナ達の好物作ってきてんもん。また言ってくれたら作るやん」

「…酢豚」

「では肉じゃがで頼む」

「むっ。では師匠、私はうさぎの和菓子で」

「おっけー、ワンサマはプロテインでええか？」

「なんでだよ！俺にももうちよいまともなもんー」

「じゃあ卵かけご飯」

「なっ…、いや…。卵かけご飯アリだな…」

ワイワイガヤガヤと騒ぐ9人は、周りの生徒から好奇の目を集めていた。

「…あ。そういやさ、カナ」

「うん？」

「体育祭どないすんの？」

「うーん…、正直、微妙なところなのよねー。3年生達は体育祭どころじゃないし、2年生も大して乗り気じゃないらしいし…」

「じゃあ1年だけ？」

「そうなるんだけど、意外と人数が多いのよ…。あっ」

「あ？」

時守の声に合わせるように、他の7人も同時に首を傾げる。

その視線を一身に受ける楯無は、ニヤリと口端を釣り上げた。

「良いこと考えちゃった」

◇

「という訳で、1年生による専用機持ちヴァーサス・マッチ大運動、開幕じゃあああ!!」

ボツゴーン！と、楯無の背後に用意されていた巨大なコンテナが盛大に爆ぜた。

千冬の頬が引きつった。

「ルールは簡単！戦うのは専用機持ちの、織斑一夏を除く1年生のみ

！勝った者には、織斑一夏と1年間同じクラス、同じ部屋になる人を選ぶ権利を約束します！他の1年生は誰が勝つかを予想し、見事的中したら豪華景品を贈呈するわ！…あ、2、3年生は、準備期間の裏方ポイントの反映が終わるまで、ちよつとだけ待っててねっ」

千冬のこめかみに、青筋が走った。

時守が最近やたらと特訓に懸命で、何かを隠すように動いていたのはこの為だったかと、気づかぬ自分に腹が立つ。

そもそも、ログもプログラムも『金色』により書き換えられているので発見のしようが無いのだが。

「なお！お昼ご飯を用意出来ない生徒は、回ってきた紙に頼みたい物を書くように！」

生徒達の昼食を出前。流石は羽振りのいいIS学園。普通の高校とは違う。

しかし、同じところもある。

高校での運動会、上は体操服。ここまでも普通だ。

下がブルマで統一され、景品が織斑一夏だということを除けば。

「それでは、選手宣誓を、時守剣くん！」

「ほーい」

楯無の隣に立っていた時守が、マイクスタンドの前に立つ。

数多の生徒の視線を浴びても、一切緊張することなく普段通りの自分を貫き通せるのは、一種の才能かもしれない。

「せんせー。…あ、先生のことちやいまっせ？」

「そんなこと分かってるー！」

軽くネタを挟むのも忘れない。

別にちっふー先生のこと言うたんちやうのになー。と、心の中で1人ボヤク。壇上から見える千冬の顔が僅かに赤くなっているのを見ると、言った後に彼女も気づいたようだ。

「あー、あー…んじゃ、宣誓。我々、選手一同はー、スポーツマンシップに乗っ取りー、日頃の努力と鍛錬を信じー、その成果を存分に発揮しー、競技に望むことを誓いまーす」

間延びしつつも割とガチな選手宣誓に、生徒達から拍手が湧き上が

る。

しかし、そんな生徒達に流されない六人がいた。

紅組、蒼組、桃組、橙組、黒組、そして鉄組の団長である、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪。

彼女達の戦いが、今始まる。

◇ ◇

「マッサージ、要る!？」

「べ、別にいい…。それにその手つき…。今ここでだと、流石に恥ずかしい…」

「そうか」

両手をいやらしく動かし、簪、シャルロット、セシリアの3人の元へと向かった時守。

生憎マッサージは拒否されたが、そもそもダメ元だったので良しとする。

「てか、生徒会長権限使えば5人1部屋ぐらい出来そうやけどな」

「それ言っちゃったら元も子もなくなる？」

「と言うよりも、できるのですね」

既に時守と関係を持っている1年生の、セシリア、シャルロット、簪の3人としては、今回の大運動会はあまり乗り気では無かった。

同室になる必要が無い。が、流石にクラスが離れると言われれば本気を出すしかなかった。

「…最初は50m走。ええなー、俺も出たかったなー」

「…剣が出たら、色々反則」

「あはは…。ほとんど女の子ばかりだもんね」

大運動会が楯無により立案された瞬間、ほぼ全ての競技に立候補し、物の見事に拒否された時守は、一晚中枕を濡らした。

千冬に肉体面で扱かれまくっている時守が、IS学園の鍛えられている女子とは言え、その中に入って競技をするのは反則に近い。

「景品はまあアカンとしても、俺はええやん」

「景品言うな！」

鈴の柔軟を手伝っていた一夏から、お約束のツツコミが飛ぶ。

「…なんかさー、一夏」

「お？なんだ？鈴」

「アンタ最近、ツツコミ適当じゃない？」

「なっ…！」

鈴の、斜め上に行く質問に、一夏の表情が固くなる。

「ほら、今も。言葉詰まらせたりとか、一文で言い切ったら会話続かないわよ？」

「うっ、ぐう…！鈴に言われる日が来るとはな…」

「あたしもそれなりには鍛えられてんのよ！」

誰に、何を、という必要は無い。

目の前で、セシリアの透けたブラジャーを堪能しながら柔軟を手伝っている関西人だということは、ここにいる誰もが分かっているのだから。

ばぁん！

「いけっ、いけっ…！しゃあっ！勝ったア！」

「クソが！凰！なぜ勝った貴様ア！私の諭吉がペアになったではないか！」

第1種目、50m走。

それを見守る運営テントの中で、千冬が時守に10000円札を1枚渡した。

「あ、あの…織斑先生？何を…？」

「応援と、その予想。そしてそれを当てた祝いとして、時守に小遣いを上げただけだ。何か問題でもあるか？更識生徒会長」

「い、いえ…。何も…」

良くも悪くも有無を言わさぬ千冬の口調に、楯無は実況に戻らざるを得なかった。

「こういうところで勝たなストレス発散なりませんわあ…」

「外道が。すぐに赤字にしてやるからな。…っ、おい見たか時守！篠ノ之が勝った！今のは私の勝ち―」

「大丈夫かシャル！」

「―だ…」

「…千冬姉。そろそろそういうの辞めないと、本気でやばいぞ？」

「…ああ」

初戦を落とした千冬。しかし、二戦目に予想していた筈が見事勝利。

これにて先ほどの負けを取り返せるか、そう思った瞬間。

時守が彼女であるシャルロットの元へと走っていったのだ。

スタート直後に転んだ彼女の膝からは、血が流れていた。蹲り、涙を堪える彼女の元へ、全力で走る。

そんな彼女を背負いながら、一步一步ゴールへと向かう時守。

その姿を見て、弟の言葉を聞いて、千冬は心の中で涙が止まらなかつた。

「はあー、役得役得」

「むっ、私も出てくるわ。剣くん」

「おんぶぐらいなら、いつでももやったる…っ、大丈夫か簪い！」

第三戦、わざとらしく転んだ簪にも迷わず走っていく時守。

慌てふためき、顔を真っ赤に染める彼女を無視して、お姫様抱っこのままゴールする。

「はあ…。…なあカナ」

「っ、こ、ここじゃダメよ？流石に、ね？」

「おい、手を離せ愚弟。校内での不順異性交遊は教師として見過ごす訳にはいかん…」

「け、剣！楯無さんも！千冬姉！落ち着けて！」

「私は行き遅れてなどいない！」

「そんなこと言ってねえ！」

年に1回の大運動会ということで、彼女も少しテンションが上がリ、残念になってしまったのであろう。

千冬の口から、ボロボロと普段は聞けない言葉が飛び出てくる。

「先輩。そう、あまり悲観しないでください…」

「っ、真耶…！」

振り向けば、仲間がいる。

涙ながらに、少し微笑みながら振り向いた千冬は—

「30までには出来ますよ！」

—真耶の止めの一撃に、膝から沈んだ。

千冬が運営テントの中で撃沈している中、50m走は鈴組が勝利をもぎ取った。

◇ ◇ ◇

「うっひょー。すっげえなおい」

「お、剣」

「ん。ほいスポドリ。500円な」

「ボツタくんよ。ん、160円」

「まいどー」

事前にスーパーで買っていた80円のスポーツドリンクをワンサマに倍の値段で売りつける。

自室の冷蔵庫に取りに行っただけなのだが、どうも自販機で買ってきたものだと思いでくれたようだ。

「めっちゃおもしろそうやんアレ」

「そうか？まあ、燃費が悪いから楽しくなさそうに見えるだけかもしれねえけど」

「100%それやろ」

現在の競技は、『玉撃ち落とし』

フィールド中央に鎮座する全自動標的投擲機から発射される玉を撃ち落とす競技で、玉が小さいほど得点が高い。

「…うん、やっぱ見てるだけじゃ足りひんわ」

「あら、ならやってみる？剣くん」

「やってええん？」

「ええ。みんなへの遅めのデモンストレーションってことにしたら大丈夫。…って、ちよつと箒ちゃん!?その機械高いのよ!」

カナの大声を聞き、フィールドへと再び目を向ける。

モッピートの放った『穿千』が、一直線に全自動標的投擲機へと向かっていく。

「時守」

「あいよ」

そんな短いやり取りで会話を終わらせる俺とちっぷー先生。

千冬が出したのは、『穿千』を止めろという命令。

俺が返したのは、了解の意を示す返事だった。

「っ、『雷轟』!」

「ほっ…。…箒ちゃん?後で織斑先生と剣くんにちゃんと謝っておきなさい?」

「は、はいっ!」

穿千が全自動標的投擲機に迫り着く前に、雷が叩き落とす。

凄まじい轟音を鳴らしたものの、投擲機には一切の傷一つついていなかった。

「よっ、と」

『あ、剣くん。今からデモンストレーション開始してもいい?』

「お?ええけど、ワンサマもか?」

「ああ!」

白式を展開したワンサマが、フィールド上へと躍り出た。

元から競技に参加していた面々は既に下がり、ワンサマと俺の2人だけの戦いが始まろうとしていた。

『ああそれと、時守。お前は『雷轟』と『雷動』の使用は禁止だからな』

「分かってるっすよ、そんぐらい」

指先一つでISを展開することなく玉を落とせる手段と、ほぼ瞬間移動は流石にアウト、ということだ『雷轟』と『雷動』の使用が禁止された。

まあでも、ぶっちゃけそんぐらいの方がおもしろいな。

「俺は全力で行くぜ!」

「ああ。俺も、本気で行かせてもらおうわ」

またとない、全力で動くことの出来るチャンス。

逃す手は、無い。

『っ、始め！』

ちっふー先生の掛け声で、投擲機から一斉に玉が射出される。

「はあっ！」

先手必勝。そう言わんばかりにワンサマが飛び出し、『零落白夜』を発動。リーチを伸ばしたそれは、複数個の玉を一気に切り落とした。

「どうだ！」

「ああ、やるな」

バチリと、『金色』に光が走る。

どうやらこいつもやる気のような。まあぶっちゃけ目立って悪い気分はせんからな。

『『完全同調・超過』』

「うげっ!？」

瞬時加速で次の玉へと向かっていったワンサマを抜かし、通過ついでに玉を叩き落とす。

ふむ。流石に速いし、動きやすいな。

「…ま、まだまだ改善の余地しかないけどな」

「クソっ…、雪羅！っ、ああ！ま、またかよ剣！」

ワンサマが雪羅を放った方向にある玉目掛けて方向変換をし、再び通りざまに叩き落とす。

「…こういう競技ってな、相手にポイントやらんかったら勝てんねん」
もうワンサマに、軽く点は取らせない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあく。すっごいわね、あいつ」

「だ、第3移行する前からでも充分でしたのに…」

「アレでまだ足りないって言うんだもん。…ほんと、早く追いつかな
らっ」

「だな。…今の師匠は、少しだけ嫌な予感がする」

「嫌な予感？どういうこと？ラウラ」

「…何でもない。気にするな」

ラウラの意味深な言葉を流し、少女達の観戦は続く。

『雷動』は使っていない、とは言っても、『完全同調・超過』により鋭角機動が可能となった時守の動きは凄まじく。一夏の広範囲への『零落白夜』よりも早く玉を落としていた。

「ISの動き、と言うよりは武闘家のそれよね」

「かかと落とし、肘鉄、膝蹴り、裏拳…。ISを、パワードスーツって扱ってないみたい…」

一夏が、振りかぶり、斬る。

その動作の中で、時守は移動し、攻撃する。というのを何度も繰り返していた。

『クソツ、追いつかねえ！』

『当たり前や。追いつかれたら、俺のメンツが保てへんやろ！』

広範囲への同時攻撃。それを繰り返す一夏を、どんどんと突き放していく時守。

しかし―

「…うん？あまり、差が開いていない…？」

「そうですわね。剣さんも、決して手を抜いている。という訳では無さそうですが…」

「答えは簡単よ。ただ、一夏君が上手くなってるの」

箒とセシリア、2人の疑問に答えたのは楯無だった。

他の4人も口にはしていないものの、不思議に思っていたようで、顔を楯無の方に向けていた。

「一夏君、一見適当に振り回しているかのように見えるけど、遠くの玉だけを『零落白夜』で落としてるの。そして、その間に自分の周りに溜まった玉を、今度は普通の刀で落としている」

「つまりは、エネルギーの消費を抑えているということか？」

「ええ。まだ使いこなせない『雪羅』はそもそも使わずに、自分の得意分野だけでつてことね」

「まずは雪片を扱えるように、か……。意外と考えてるじゃない」
楯無の解説に、ラウラと鈴が言葉を挟む。

射撃センスがまだ磨かれていない一夏が、普通の銃ですらない『雪羅』を動く敵に直撃させることは至難の技だ。

相手にダメージを与えるどころか、むしろ自分のSEが減ってしまう。

そこで一夏が取ったのは、まともに扱えるようになるまで『雪羅』を封印するという至って単純な手。

そもその『零落白夜』の火力に、二次移行の速さがあれば、並みの機体には負けなかった。

「それでもやっぱり、三次移行の速さには勝てないのよ」

しかし、さらにその上を行くのが時守と『金色』。

二次移行を上回る火力と俊敏性、武装の豊富さ。いくら『雷轟』、『雷動』という2つの強力な単一仕様能力を封じているからとはいえ、一夏はなかなか追いつけなかった。

「はあ……。ほんと、嫌になっちゃうわね。あんな奴に追いつけー、だなんて。国も無茶言うわよ」

「だが、そうでもない」とモンド・グロツソで太刀打ち出来んからな」

「それにね、鈴?」

「…何よ」

鈴のボヤキにラウラが当然のように返事をした。

未だムスツとした表情を浮かべながら時守を見る彼女に、今度はシャルロットが声を掛ける。

「剣のあの表情見てたら、頑張ろうって思わない?」

シャルロットの視線の先、そこには、嬉々として玉を撃ち落としていた時守の姿があった。

「…シャルロット。嫁も、一生懸命やっているのだぞ? カッコイイではないか」

「そういう皮肉ではありませんわ。わたくし達も含めて、1年生で一番強い剣さんが、あれほどまでに楽しそうにしているとすれば、そこに辿り着きたいと思っただけですわ」

学年最強の生徒が、楽しそうに日々強くなっていく姿。

それは1年生の中に大きな変化をもたらしていた。

圧倒的な成長速度を見せる時守に、何とか追いつこうと、時守から何かを学ぼうとする者が増えているのである。

「…ふんっ」

鈴以外が一夏と時守の姿を見ている中、彼女は1人、頬を僅かに朱に染め、顔を逸らしていた。

『あ、ランペイジテール全部使えば勝ち確やん』

『ちよっ』

空中では、時守がランペイジテール8本を展開したことで、試合が決まった。

第二種目、玉撃ち落としのデモンストレーションは時守の勝ちで幕を下ろした。

乙女達の戦い、終幕

「軍事障害物走なあ…」

カナに聞けば、アサルトライフルを組み立てーの、匍匐前進しーの、打ちーのといふなかなか危険な競技らしい。

授業でもEOSとかが軽く運ばれてくる辺りやっぱ色々やばいよな、この学園。とそんなことを考えていると、競技開始を知らせる銃声が鳴った。

「やっぱすげえわ。この学園」

「え？なんか言ったか？」

「お？いや、何もないで。ただの独り言や」

「…おい時守」

独りごちると、先程、のほほんのあまりの遅さに驚いていたワンサマが聞き返してきた。

大したことを言った理由でもないのに、適当に返す。すると、今度は俺たちの後ろに座っていたちっふー先生が、いつの間にか隣に立っていた。

「…えっ、なんすか？」

「何か…あつたのか？」

真剣な表情で、低い声で聞いてくるちっふー先生。その迫力は嘘を全く言わせてくれないものだった。

カナも、ワンサマも、山田先生も何事かとこちらに注意を向けている。

「…何もないっすよ。ほんまに」

「…そうか。変なことを聞いたな」

「いえ。お気遣い、あざっす」

「そう思うなら—」

「づっ!？」

気にかけてくれたちっふー先生に座りながらも軽く会釈する。

すると、去り際に俺にゲンコツを食らわしてきた。

「もう少し、ちゃんと返事をしろ」

「…了解っす」

頭を抑える俺にちっぷー先生は薄らと微笑み、教員席へと戻って行った。

競技は、のほほんが驚異の速さで銃を組み立てたものの、その射撃センスの無さから、ダントツのビリで終わっていた。

何でやねん。銃なんてちゃんと向けたらそこ行くやんけ。

「…ってほんま痛いわ！」

「ふんっ、遅延性だ」

「頭ん中ゴンゴンするねんけど…」

「大丈夫？ 剣くん」

頭の中をスーパーボールが飛び跳ねているかのような衝撃に、頭を抱えた手をなかなか離せない。

いや、頭の中にスーパーボール無いけどな？

心配してくれるカナに一声返事をし、目の前のレースに再び目を向ける。

「ふはははは！ 我が軍は無敵なりい！」

そこには、アホヅラでこつちにドヤ顔を向けながら銃を掲げるラウラがいた。

どうやら、この競技をトップで取ったようだ。

「どうだ、嫁、師匠！ 私の活躍は！」

「ごめん見てなかった」

「なん…だと…！」

そんなラウラも、俺の一言で、絶望の表情を浮かべながら膝から崩れ落ちた。

周りのチームメイトが必死に励ましている。あいつも、何だかんだいってそれなりに友達が増えたようで嬉しい限りだ。

◇

第4種目は、運動会の定番とも言われている騎馬戦だ。

「まあ最近はおT/Aやらの関係で無くなってるどころもあるけどな」

「剣くん、ピー音が仕事してないわ」

「そりやそんなもん」

わざとに決まってるやん？

カナが苦笑いを浮かべると同時、競技がスタートした。

派閥はほぼ2つ。

セシリー、シャル、簪組。

ラウラ、モツピー、鈴組。

しかし、普段から付き合いが長く、連携も取れるセシリー達にとって、ワンサマとの同室がかかっており、ヤツケになっている3人からポイントをもぎ取るのは容易い。

「圧倒的ではないか……！」

「流石は簪ちゃん……！」

「え、えつと……。箒ー、ラウラー、鈴ー！頑張れよー！」

頑張れよと言われてから頑張る奴は大したことないねん。

モツピー、ラウラ、鈴がバタバタと慌ただしく動く中、3人の騎馬は素早く立ち回る。

シャルとセシリーが動きで牽制しつつ、簪が後ろに回り込んで素早く奪い取る。

「動きが止まって見えるよ！」

「更識は日本にて最強……！」

「わたくし達が、天に立ちますわ！」

先ほどのラウラのように高笑いをしながらハチマキを取っていく3人。

ISも使わずに、こうも騒ぎながら、楽しそうにはしゃぐ姿を見ると、こつちまで楽しくなってくる。

「平和やなあ……！」

「……ふふっ、そうね」

何せ、初めてなのだ。

このIS学園に来て、大きな事件が全く起こらずに、平和に行事が進むのは。

ゴーレムに襲われ、VTシステムが現れ、福音の襲撃に会い、亡国機業が攻め込み、再び亡国機業に襲われ、多くのゴーレムを相手取った。

そのほとんどで大きな怪我をし、皆が傷ついた。

途中何度も死にかけ、何度かは死んだ。しかし、それでも戻ってきたのだ。

「平和すぎて、変になるわ」

「これで良いのよ。…何も無いのが一番なんだから」

カナの言う通り、このまま何もなく、無事に卒業出来るのが一番良いのだ。

良いのだが、恐らくそうはさせてくれないだろう。

—誰かがきな臭い動きしとるしな。

「…え？剣くん、何か言った？」

「いんや、何も言ってるへんで」

首を傾げながらこちらに問いかけるカナに返事を返す。

亡国機業の事、欧州の事、金ちゃんが言うてきたややこしくなってるISの事…今は全部を忘れて、運動会を楽しもう。

「でもさ、男子なんもせーへんの面白くない？」

「大丈夫よ。一夏くんが500点の獲物として放り込まれるから」

「と、いう訳だ。とつとと行け、愚弟」

「ちよっ!？」

カナを挟み、俺とは逆方向に座るワンサマの頭部に、一瞬ではちまきが巻かれ、ちっふー先生によってケツを蹴飛ばされた。

「ふんっ。だが、不純異性交遊などしてみる。すぐさま—」

「やあん！織斑くんのえっち—」

「—懲罰室送りにしてやるから覚悟しろよこのアホ愚弟が…!」

フラグ回収お疲れ様です。と口には出せず。ちっふー先生から湧き出る謎のどす黒いオーラによる恐怖に、カナと互いに震える手を握り合うことで、なんとか耐えた。

「つたく…、人が良かれと思ってる事を知っているのか？

あいつは」

「ないでしょうね」

「ないっすね」

「はあ…」

ちっふー先生曰く、ワンサマは便利だから常に横に置いておきたいが、恋人は別で欲しいらしい。

かと言って、ワンサマの恋路を邪魔するつもりは無く、ワンサマにもし彼女が出来れば、自分は自分で生きていく、とワンサマに伝えているらしい。

自分で生きていけんのかこの人。料理全部炭にする癖に。

「…時守、更識。教えてくれるか？」

「まず包丁の持ち方なんとかしてから来てください」

「私に聞くより、剣君に聞いた方がいいと思いますよ？」

「いや、そのだな…時守だけでは…」

「…なんすか」

「…厳しすぎるといいうか」

「あんたがそれ言います？」

俺の教え方とか、ISでのちっふー先生の教え方と比べたらうんこに集るハエの糞並には劣る自信がある。

もちろん厳しさの面で。

「あ、じゃあちっふー先生がちやんと結婚できるように、花嫁修業します？俺したことありますし」

「おい待て」

「剣くん、待って」

「朝早くに駄々こねる子どもの起こし方とか必要でしょ？」

「…割と欲しいスキルだな、それは」

ほほう、ちっふー先生も子供が欲しいと。…サイヤ○とかちやうやろな、子ども。

私にも教えて？と小声で言ってくるカナが可愛すぎて、悶絶しながらも握っている手で、彼女の手の感覚を楽しんでいるとワンサマがISで吹き飛ばされた。

「えっ、流石にこの競技でISはあかんやろ」

AICで動きを止められ、衝撃砲で宙に投げ出され、穿千で塵になりかけたワンサマは何とか生きていた。

いや、白式すげえなおい。



「はい、剣。あーんっ」

昼休憩、俺は天国にいた。

目の前にいるのは、体操服に身を包み、こちらに身を乗り出しながらおにぎりを食べさせようとしてくれているシャル。

「あむっ。…んっ、めっちゃうまい。死ぬ」

「死んじゃやだよ!?!」

少し長めの休憩時間が取られ、俺たち5人はIS学園の外縁部にある広場へと来ていた。

まあ言うて広場やねんけど。外縁部って何やねんって聞かれても、外縁部は外縁部やしか言いようがない。

「冗談抜きで美味しいわ。…なるほど、やから昨日、俺が弁当作らんでええって言ったんか」

「うんっ。こういう時ぐらいは、剣に料理食べて欲しかったし。…何より、女子としてのアレが…」

「…自信が、無くなる…」

「私も、結構出来ると思ってたのよ?でも、剣くんの出来を見てたら、練習せざるを得ないと言うか…」

「申し訳ありませんわ…。このような、練習相手役をさせてしまっているようで…」

「そんなん、こつちから感謝するぐらいやで。確かに俺のは周りからよう美味いって言われるけど、それと好き嫌いとはまた別やからな。俺は好きやで」

普通に可愛い彼女達からの手作りご飯とかご褒美以外の何物でもない。

「剣さんっ!では、次はわたくしの作ったトムヤムクンを!唐辛子たっぷりですよ!」

ご褒美とは(哲学)

セシリーが持っていた容器の蓋が開けられる。凄まじい湯気と共に

に角膜と鼻腔が刺激された。

あつ、これマジであかんヤツや。

「ちよつ…。セシリア、唐辛子入れすぎ…」

「味は分からないけど、この湯気が凶器になってるわね」

「まあ食えるやろ。食えるもん使ってんねんし」

とはいえ。食べないと流石にセシリーが可哀想なので一口。

エビの肉を箸で摘み、ぱくり。

うん…。口の中に、唐辛子の辛みと痛みが広がって…。うんっ、〇

C。

…美味、しい…？

「…コツ…ホ…ツ…。…牛乳…」

「そこまででしたの!？」

水分を含んだ料理であれば、辛さが強ければ喉元を過ぎた頃に水分が欲しくなる。

強ければ強いほど、それを打ち消すための水分を身体が欲し、そのサインとして乾いた咳が出る。

「美味しいけど…。美味しい」

「剣っ、語彙力が!」

「ぎゅ、牛乳…ある? 簪ちゃん」

「ないけど…。…あつ、チーズなら、ある」

簪が手渡してくれたチーズを、口の中に放り込む。

…あー。生き返った。無ければ後20分は辛さと戦わなあかんかったわ。

「…ま、良くあるミスや。こつから、こういう料理をより上手くできるように頑張ろな」

「…っ…はいっ、もちろんですわ!」

料理のミスは、俺もちよくちよくする。

その度に同級生達にタダ飯という名目で処理させていたのだが、このIS学園ではその処理係がリコピンしかないなので困っているのだ。

「剣、その…私も、いい?」

「お？なんや？簪」

「た、たこさんウインナー…」

「…うん。ちよーだい」

Q: 顔を真っ赤にしながら「たこさんウインナー」と口にする簪を見て、人は平静を保つことができますか。

A: できません。

簪の顔がファイアーしたかと思えば、それを見た俺も照れてしまい、そしてそのやり取りを見ていた3人も照れてしまうという謎の連鎖が起こった。

「も、もうっ…。て、照れないで、早く食べて…。あーん…」

「あむっ」

簪が作ってきたのは、もちろんたこさんウインナーだけではない。

少し小ぶりの弁当箱に綺麗に詰められた、お手製のお弁当だ。

5人で分けやすいように、一つ一つは大きくなく、数を増やすというさり気ない心遣いも彼女らしい。

「…うん、いい焼き加減やわ」

「そう…。良かったあ…」

俺のその一言に、ホッと胸を撫で下ろす簪。

いやあの、俺の査定ってそんなに厳しい？ぶっちゃけ何でももうまいうまいって言ってる気すんねんけど。

「私はサンドイッチよ。はい、あーん」

「あーん」

…ふむ。ザ・美味。

「…大変美味しゅうございます」

「ど、どういたしまして？」

硬い言葉を使うと、変に緊張した刀奈まで改まって返してくる。

こういうところが愛おしく、そして可愛い。

「…刀奈ってさ、この運動会出えへんの？」

「え？」

ふと疑問に思ったことを言う。

確かに、これにはワンサマとの同室権、並びに同じクラスになる権

利を賭けた闘いである。

しかし、だからといって参加出来ない生徒がいるのはおかしいやろ。

「うーん、そうねえ。でも、剣くんとこの解説も楽しいから、それで大丈夫よ?」

「…嬉しいこと言ってくれるな、このっ」

「きゃっ、もう…」

あんなことを言われると、俺は自制出来ない。

隣にいた刀奈を抱き寄せ、強く抱きしめる。すると、今まであまり嗅いだことのない匂いが鼻腔をくすぐった。

「っ、剣くん。もしかしたら私、汗臭いかも…」

「…ん。でも、いい匂いや…」

「うう…っ。恥ずかしい…」

胸元に収まる刀奈の髪に顔を近づけ、息を吸う。

少し刺激的な匂いだが、全くと言っていいほど嫌悪感がない。かつ刀奈の本来の匂い、僅かな洗剤の香りが混ざり、俺の好きな匂いになっている。

「…でも、私も剣くんの匂い、好きよ…」

「むっ。お姉ちゃんだけズルい」

「簪が行くなら、僕もっ!」

「わ、わたくしもですわ!」

身体の正面だけにあった柔らかい感覚が、右、左、そして後ろからも伝わる。

…いやほんま。4人の彼女に四方から抱きしめられるとか幸せすぎるわ。

「ほんま、平和なやあ…」

ぐりぐりと額を擦り付けてくる刀奈達が、本当に愛らしい。

彼女達を守りたい。そのためにも、自分はここでやるべき事を全てやり終え、卒業しなければならぬ。

「…頑張ろな」

「うんっ」

意図は伝わっていないだろうが、ここISIS学園で頑張る、と言えど一つに限られる。

これからも、彼女達と1歩ずつ歩んでいこう。

◇ ◇ ◇

という、まるでラブコメの最終回のようなことを考えた昼休憩も終わり、俺は競技のトラック上に立っていた。

「…っし。元氣はチャージしてきたし、準備万端！」

先ほど、みんなに抱きしめられた後。本番はしていないもの、それぞれと少し戯れた。そのお陰で、スツキリ元氣に午後を迎えている。

俺の隣には、1年女子の専用機持ち達がずらりと並んでいる。

『さーて、それじゃ行くわよ！』『コスプレ生着替え走』！』

そう、俺はこの『コスプレ生着替え走』にエントリーを許可されたのだ。テンション爆上げ。

『まず、各チームの代表が用意した服装を抽選してもらいます。が、実際関係上の問題もあるため、抽選箱は二つに分けています。け…時守くんには、身体能力のハンデとして、1人で着替えてもらいます』

なお、着替えゾーンは中からライトアップされ、ボディラインがくつきり浮き出るエロ親父仕様。

ふへへ…俺の美しいボディでビックリさせたんねん…。

なんとこの競技、入る得点は10000点。今までの競技が10点単位での換算でいうと、なんともまあアホな得点である。バラエティによくあるヤツとか言うたらあかん。

『それじゃ、各代表は着替え補佐の子を紹介よろしく！』

カナが促すと、真っ先に動いたのはモツピー。

「私のパートナーは四十院神楽だ。同じ剣道部で、実家は旧華族と聞いている」

「え、モツピーって剣道部やつけ？いつもワンサマと一緒にあった気すんねんけど」

「言つちやダメよ、剣。本人も幽霊部員になつてゐることは薄々気づいてるし、申し訳なく思つてゐるんだから」

「ほー、んじや剣道部に当てる活動費1人分減らしてもええよな。カナ、剣道部1人分要らんつてー」

「なつ、おい待て！確かに、幽霊部員だが、その…。ううつ…部長！明日からは必ず参加します！」

「よろしくー」

観客席に目をやると、剣道部の部長が箒に手を振っていた。

いや、それで許すとか懐ガバガバかよ。心太平洋並に広いやん。

「…こほん。古いだけが取り柄の家柄です。どうかよろしく」

古いだけとかそんな言わんといてや。俺の家ただの定食屋やねんけど。

次に、セシリーが紹介する。

「わたくしの補佐は鏡ナギさんですわ。ご両親はお寿司屋をなさつてゐるようで、わたくし、1度お招きされたのですが、それはそれは美味で…」

「ちよ、セシリア！恥ずかしいつてー！それに剣ちゃんの方が万倍美味しいでしょー！」

流石に寿司屋のプロと比べんな。寿司では負けるわ、多分。

あーでもワンチャンちらし寿司やったら勝てるかもなーとから考へてゐると、次は鈴がテキトーに紹介を始めた。

「はいはい、あたしはルームメイトのティナに手伝つてもらうわ。…手え抜いたらその脂肪抜き取るからね？」

「怖いつてー。しかも説明雑だし。…え？あれ、剣ちゃん？なんで出てんの？」

「流れや流れ。深く考えんな」

マイペースな2組の次は、シャルロット。

「えつと、その…。谷本さんに手伝つてもらう予定だったんだけど…」

「やつほー！岸原理子でーっす！「リコピンつて呼んでくださいっ！きやるるんっ！」つて声被せんな時守イ！」

「シャルに近づくなアホ。アホうつるやろが」

「はあ!?…もお、あんたのせいで自己紹介失敗したじゃない!」

「永遠のツツコミメガネでええやん」

なんでリコピンやねん。しかもなんでシャルの手伝いやねん。

「次は私か。私と似て、性格も体型も自己主張が控え目な夜竹さゆかだ」

「…ラウラさんは、性格は自己主張が激しすぎると思いますが、夜竹です」

どこが自己主張が激しいのだ?とド天然をかますラウラを、さあ…?と首を傾げるだけでさりと回避するさゆか。

いや、メンタルつかスルースキル高すぎん?

「…私は、布仏本音。…ルームメイト」

「にやはー、布仏本音。16歳、学生です。サイズは上からー」

「…もう、剣のせいでみんなにバレてるから、一々言う必要無いよ?」

「…むう、けんけんのいじわるー」

なんなん言われてもしやあない。

さて、と。

ほな。

『レーススタート!』

ピストルの音で、一気にスタートダッシュを決める。

『さあ!最初に飛び出したのはやはりというか、剣くんだー!』

まあ当たり前やわな。単純な足の速さで普通の女子に負ける気がせんわ。

時守&シャルロット&セシリア&簪と書かれた箱から、紙を引く。

えいや。

「んお。…ドレス…」

引いたのは、まさかまさかのセシリーのドレス。

えつ、やだ。胸元見えちゃう…。

「なあっ!?ちや、チャイナドレス(ミニ)!?ふざけるな!」

「あたしの服なんだから文句言わないでよ!あたしは…軍服?」

「となると、私は…やはり、巫女服か」

モツピー、鈴、ラウラ達は3人の衣装が綺麗にローテーション。ま

あそりやそうやけど、モッピーがチャイナはアウトやろ…。

「えつと…ね、ねこさん着ぐるみパジャマ…?」

「…私は…っ…ふふっ優勝は貰った…!」

「なあ…も、もうっ!」

様々な反応を背後で聞きつつ、カーテン・サークルの中に入る。

…さてと。ドレスは着たこと無いけど、別にスカートを履くことに
恥じらいは何もない。中学の文化祭で女装したしな。

「あつはあくん」

『おおつと!ここで剣くんセクシーポーズ!』

『えっ、需要あります?』

『そりや女子、主に私にはあるわね』

体操服を脱いだところで、ファンサービスを行う。

ふはは!どうや!

「えっ…何あの腰の細さ…。モデル…?」

「そこに付く筋肉に一切の無駄無し…」

「それでいてガッチリとしている身体…」

「ダビデ像…」

ダビデとか…。あんなフルチンと一緒にしやんといて欲しい。

とりあえず凄まじく着にくそうなドレスではあるが、まあ何とかな
る。背中が空いてて、前が胸を主張するようにスカート部から2枚の
布が伸びて、それを首で巻いて固定する。ほほう。

んで、足に長めの靴下みたいなん履いて、チャリ漕いでるオバチャ
ンがようしてるアームカバーみたいなん付けると。

余裕やん。

「よっ」

『ぶふっ…。い、1位はなんと、セシリアちゃんのドレスを着た剣くん
!』

『え、えつと…楯無さん。鼻血出てますよ』

『それでもこの目に焼き付けるのよ…!』

スカートを持ち上げながらたったかたー、と走る。

ぶつちやけ上はいくら肌蹴ても問題無いしな。

第一関門、跳び箱。

7段をぴよいと飛び越える。スカートの中普通の男性モンやし見られても構わんやろ。

続く第二関門は、平均台。

小学生の頃はガードレールの上を歩いていたこともあるので余裕を持ってクリア。

ふと後方を振り返ると、なかなかインパクトの強い光景が広がっていた。

「ま、待て剣！」

「あああああ！ちよつと箒！アンタ脇腹のどこ破けてんじやない！」

「う、うるさい！小さいのが悪いのだ！」

「…小さい、ですつてえ…!?!」

「ふははははっ！銀髪ロングの巫女とはこれまた風情があるだろう！」

明らかにサイズが合っていないチャイナドレスを着る箒、軍服に身を包む鈴、巫女服で全力ダツシユするラウラ。

「あら、これはこれで動きやすいですわね。ねえ？シャルロットさん？」

「…ふふふつ。剣の私服…えへへ…。どう？シャルロット…」

猫さん着ぐるみパジャマで走るセシリーと、俺の私服で走る箒。

その後方にいるのが――

「ゆ、許さないからね…！簪…！」

――極小ビキニを纏ったシャルロット。

「あ。あかん」

下手に下着を見られてはいけなくなってしまうた。

と言つても、既に観客の目はシャルロットに釘付けになっているの。後は爆走するだけだ。

いやあ、彼女が男女問わず視線を集めるほどの美女ってのは鼻が高いですなあ…。

…ん？男女問わず？

「ワンサマァー！シャルのこと見たら『雷轟』で塵に変えたるからなあ

！」

「わ、分かっているっのー！」

流石の枯れ果てたワンサマでもシャルの格好は色々ときたようだ。そしてここで、俺に一つの仕事が出来たのだ。

一刻も早くこの競技を終わらせ、シャルを救わねばならぬ。

「そらっ」

最終関門、ハードル。

誰にもバレないようにこっそりと『完全同調・超過』を発動。

陸上選手も真つ青な動きで跳んでいく。

具体的には、1歩で一つのハードルを越えるという具合だ。

「ほいっ」

『ここで剣くん、1位でフィニッシュ！続いてラウラちゃん、鈴ちやんがゴール！…まあでも、ポイントは1位にしか入らないから、この試合はほぼ無効試合になるわね』

「おっしや」

「ちくしよおおおー！」

「な、何でよお…」

「ええ…」

巫女服に身を包みながら号泣する銀髪眼帯と、ツインテールの涙目軍服。

その凄まじいインパクトに、俺は人生で最大級の微妙な表情を浮かべてしまった。

◇

「えーん。はよ助けてー」

『あ、ああー。なんとということでしょうー。剣くんと一夏くんが空中に放置されているではありませんかー』

「スツゲエ棒読みだなオイー！」

俺とカナの茶番に、ワンサマがツツコミを入れる。

現在、男子高校生2人が巨大バルーンの上に取り残されていること

状況こそ、今回の運動会の最終競技だ。

『ではルールを説明します！これから、専用機持ちのみんなにはバルーンに取り残された男子生徒を下に下ろしてもらおうわ。どんな手段を取ってもオツケーだけど、あんまり過激すぎると嫌われちゃうかもしれないので注意してね！』

俺らの周りには、それぞれ専用機を纏った1年生専用機持ち達がいる。

それにしても、カナも上手く言ったものである。

『それと、大前提のルールをもう一度。この競技、男子生徒を下ろした生徒には、5000兆点が与えられます。ということは、実質この競技で来年の部屋割り、クラスが決まります』

いやあ、ほんまに上手いこと言うたわ。

『それでは、スタート！』

各専用機が一斉に動き出す。

俺の周りに蒼、橙、白が集まりだし、実況席から瞬時加速で一機のISが駆け寄ってくる。

「簪さん！」

「任せて……！」

「いつでも来ていいよ、剣！」

「私も、準備万端よ！」

バルーンがセシリーの偏向射撃により割られると同時に、4人の手が俺の体を支えた。

「勝ち確ですわ！」

「作戦勝ちだよね」

「……争いは、不毛……」

「誰も、競技に参加している専用機持ち、とは言っていないものね」

某フランダースの逆版のごとく、4人の天使によって地面へと運ばれていく俺。

4人の手によって着地させられた瞬間、俺達の作戦は成功した。

「がんばれー、ワンサマー」

「ちよちよちよちよ？あの、楯無さん？白式が展開出来ないんですけ

ど?」

「させるわけないでしょ?」

「はーっ!」

ワンサマが乗っているバルーンが、周辺から凄まじい勢いで割られていく。

過激にならないよう、ゆつくりと丁寧に、笑顔でバルーンを割り続ける筈、鈴、ラウラの3人。

その光景は恐怖以外の何物でも無かった。

「あっ…」

ワンサマを支える最後の砦が割られ、ワンサマが自由落下を始める。

「待ちなさいよ一夏ア!」

「むっ! 邪魔をするな! 鈴!」

「貴様もだ! 筈! 嫁は私のものだ!」

「早く助けてお前ら!」

上空から落ちてくるワンサマをガン無視してさらにその上でバトルを始める3人。

もはやIS学園伝統芸能とも言えるそれは、鈴が筈に衝撃砲をぶちかましたことで終わりを告げた。

「ぶっ!?! あ、よし。一夏あ!」

「あっ」

「鈴! 何をやっているのだ!」

背後から綺麗に衝撃砲を食らった筈は、綺麗に顔面から地面に突っ込んできた。

そう、ワンサマよりも早く。

落ちてくるワンサマより早く着地した筈は、そのワンサマの捕球体制に入った。

「よっしや、取ったどおー!」

「バックホームやモツピー!」

「了解!」

「了解すんな筈!」

滑らかなフォームでオレにワンサマを投げようとしてきた筈だが、さすがに途中で止まった。

投げられずにすんだワンサマが地面に降ろされたと同時に、運営本部にいた山田先生の声がマイクを通して響いた。

『え、えーつと…。とにかく、時守くんが更識楯無さん、セシリア・オルコットさん、シャルロット・デュノアさん、更識簪さんと同室、同じクラスが決定。織斑くんが篠ノ之さんと同室、同じクラスが決定でーすっ！』

ああ…。鈴とラウラが人生の絶望を迎えたみたいな顔になってる…。

『ごちやごちや言っても意見は聞かん。これにて大運動会は終了だ！各員、片付けに入るように！』

ちっふー先生の鶴の一声で全員がわらわらと移動を始めた。

こうして閉会式も何も無くただグダグダしたまま、俺達の大運動会は終わりを告げた。

慰労会という名のストレス発散

「カナー、シャルー」

大運動会の翌日、俺は刀奈とシャルロットの2人とのデートのためにレゾナンスに来ていた。

セシリアは以前から真耶に頼んでいたコーチングを引き受けてもらえたことから訓練、簪はセシリアに付き添いながら打鉄式式の整備に勤しむとのことだ。

…まあ正直なところ、今日はセシリアと簪の2人がシャルロットと刀奈にデートを譲ったのだ。

「ってまた何しとんねんクソ共がアアア!!」

「ぐぼあっ!!」

「んべっ!!」

「ごなっ…」

合流して早々、刀奈とシャルと口論していた金髪ピアスのアホ顔三人衆それぞれに蹴りをお見舞いする。

1人は後頭部に肘、1人は鳩尾にアッパー、1人は金的につま先を抉りこませた。

「おいテメエら…」

「ってえな…。って、お前あの時の!!」

「ってことは…と、時守、剣なんだよな…」

「ま、マイゴールデンボール…」

この3人には見覚えがある。

刀奈との最初のデートの時、IS学園の最寄り駅で刀奈をナンパしていた奴らだ。

…ふむ、おかしいな。こいつらには刀奈に近づかへんように誓約書書かせたつもりなんやけど…。

「ハウスッ!」

「はいつ!」

俺の掛け声でその3人は散っていった。

約1名股間を抑えてたやつおったけど大丈夫やろ。

「ごめんやで。嫌な思いさせたな」

「んーん。大丈夫だよ、剣」

「そ、れ、よ、り。どうして遅れたの?…何か、あった?」

刀奈が問うてきたように、俺は今日のデートの待ち合わせ時間に少しばかり遅れてしまった。

理由言ってもー

「勝負下着迷ってた」

「…」

「…」

「いや、顔赤くして固まらんとって?」

—しようもないことなので包み隠さず話す。

いや、だって久しぶりのデートやで?

まあレゾナンスやけども。そりゃ彼女2人とのデートやねんから気合い入るやろ。

「その、ね…?」

「剣君も私達と同じこと考えてるんだな、って…」

「そういう事か…」

シャルと刀奈の発言に、今度はこちらの顔が熱くなる。

…。

「ほ、ほな。行こか」

「うんっ」

「そうね、時間は有限なものっ!」

右腕にシャル、左腕に刀奈が抱きついてくる。

まあこの2人の美貌ならナンパされてもしやあないわな!

「んー、なんか嬉しいわ」

「うん?何が?」

「2人がナンパされる理由」

「むっ、私たちが取られてもいいの?」

「そんな訳無いつて信じてるけど、2人とも可愛いしな。可愛い彼女が2人ともナンパされるってことはそんだけ魅力的ってことやろ?」

むぎゆう、と両腕に込められる力が強くなった。

「ほ、ほら！早く行こ！」

「シャル？顔真っ赤なってるんで？」

「せっかくのデートだから、ね！」

「刀奈？耳めっちゃ赤いで？」

耳まで真っ赤になった2人に腕を引かれ、レゾナンスの中へと入っていく。

◇ いやー、やっぱり照れる姿も超可愛いわー！

「ロシア？」

「そう、ロシア。剣くん、私の実家には来たけどロシアには来てないでしょ？」

「…夏休みに、ちよつとだけな…」

「あつ、ご、ごめんね？」

「大丈夫やで。次に刀奈と行くんやったら全然辛くないもん」

「剣くん…大好き！」

「俺もやー！」

「私もっ！」

「シャルツ！」

周りの目がどんどん死んでいくのを尻目に、カナとシャルと抱き合う。

確実に国連代表時守剣やとはバレてるやろうけど、このバカツプルの雰囲気につっ込んで来れるやつがおらん、って言ったところか。

「むへへへ…剣くんやっぱいい匂い…」

「…剣、また身体凄くなった？」

「お？そりやな。…あんまデカい声では言えへんけど、三次形態移行したおかげで余計激しい動きできるようになったしな」

「…でも大丈夫なのよね、剣くん。もう、あんな無茶は…」

「ああ、せえへん。というより、『完全同調・超過』があるから無茶にはならへんしな」

「そっか。なら良かった」

先ほどまではウインドウショッピングをしており、休憩のためにベンチに腰掛けながら話す。

フランスにロシア、イギリスとなぜか全員の所属が日本を除いて割と寒い所にあるため、訪問用のコートなどを買ったのだ。

前々から思ってたけどファーって何やねん。さんまか。

「それにしても、ほんとに凄いやね。二次形態移行も、三次形態移行も。まだISに乗って数ヶ月しか経ってないのに……」

「ワンサマも割と早かったし……男やからって感じちゃう?」

「その所、ISって謎が多いわよね」

現在確認されている稼働中ISの中で三次形態移行まで済ませているのは『金色』だけらしい。

亡国機業が隠していれば分からないが、もしいるのならそれを超えるだけや。

「ま、今やったらどんな奴が襲ってきても余裕やわ」

「……慢心はダメよ? 剣くん」

「慢心せずして何が王か、ってな。これでも一応国連代表やで? 心配してくれんのは嬉しいけど、俺だってちよつとは強なってんねんから」

ドヤつ、と少しカッコつけてみた時だった。

それが見事にフラグを立てたのだろう。

「っ、もしもし?……ええ、ええ。分かったわ今すぐ向かうわ」

「……お? なんや。……ほーん。とりあえずイーリのケツしばいたらええねんな?」

刀奈の『ミステリアス・レイディ』と俺の『金色』に秘匿回線通話が入った。

お互いの緊張感は真逆だが、内容は全く同じだろう。

「あ、あの……剣? 楯無さん?」

「おお、すまんなシャル。ちよいと野暮用や。今から米軍の空母調査しに数十キロの制服遠泳デート何やけど、どうする?」

「み、魅力的なお誘いだけど、断るっていうのは……?」

「当然の権利よ。……まあシャルロットちゃんがいるのなら、一旦学園

に戻って、私たちが帰ってきた時の準備をしておいて欲しいんだけど。頼めるかしら?」

「はいっ!」

こう言われてすぐに了承の返事をしてくれる辺り、やっぱりシャルは判断能力が凄い。

自分のISには来なかった。しかし俺とカナには来た。

この2つの要因から、『国家、並びに国連代表だけが関わっている案件』だと判断してくれたのだろう。

「シャルに頼むとしたら、戻ってきてからの着替えの準備とかちっふー先生への説明とかになってまうねんけど…」

「任せて! 大丈夫だとは思うけど、気を…付けてね?」

「その言葉があれば俺は無敵や!」

「ふふっ、ありがとねシャルロットちゃん。ちゃんと戻ってくるわ」
カナと共にベンチから立ち上がる。

シャルは既に携帯で連絡を入れてくれている。話し方から察するに、恐らくちっふー先生辺りにでも電話を掛けているのだろう。

「ほな行こか、刀奈」

「そう呼んでくれるのは嬉しいけど、今は楯無よ? 剣君」

「了解、楯無」

レゾナンスの中を、細心の注意を払いながら走っていく。

——
——
——
やって来たのはIS学園近くの臨海公園。

そこに俺と楯無はIS学園の制服を着て立っていた。

「さて、と。剣君。ISスーツはちゃんと着てるわよね?」

「もち。んでまあ泳いで沖にあるアメリカ国籍の空母に乗り込む、と」
「ええ。まあそこにある情報を抜き取ることが目的ね。何かときな臭いことは確かだし」

2人して柵をよじ登る。

——
——
——
と言っても、先に俺がよじ登り——

「楯無、ほら」

「う、うん…」

—柵から降りてくる楯無を、脇に手を入れて支えながら下ろしたのだが。

「…この年になって年下の彼氏に抱っこされて下ろされるのって、ちよつと恥ずかしいのね」

「一瞬だけ見たらたかいたかいやしな」

年上ロシア国家代表をたかいたかいする国連代表。

これから潜入ミッションに挑むにあたって、直前の雰囲気は真面目そのものながらどこか抜けていた。

「お、おほん。じゃあ剣くん、行くわよー!」

「おー!海へ、ぴよーんっ!!」

綺麗な飛び込みを見せる楯無。

そんな彼女を尻目に、俺はそのまま海へと飛んでケツから思いつきり着水した。

「ぶはっ、剣君。お尻大丈夫?」

「…ちよつと痛い」

顔が海の水で濡れて分からなかったやろうけど、ほんの少しだけ涙が出ました。



「なんやこの調理室。汚いし換気できてないし、ここの責任者どんな奴やねん」

「…まあ、普段から織斑先生に鍛えられてる剣君なら疲れないわよね」

「お?俺小学校ん時から割と遠泳得意やったで?」

潜入しての時守の開口一番は調理室の衛生面に関してだった。

料理ガチ勢のこの男からすれば、包丁やまな板を置いてある所が常に濡れていたり換気口が無いこの調理室は考えたくもない空間だった。

「おーい、腹減ったから何か作ってくれ…つてとつきーじゃねえか。

こんなところに何の用事だ？」

「おー、イーリ。よっ、お久」

「お久ー。…ってそうじゃねえよ。マジで何しに来たんだ？」

「…お前知らんの？今ここだいぶヤバいで？」

「え、マジ？…って更識楯無もいるじゃねえか」

楯無は頭を抱えそうになった。

アメリカ国籍の秘匿空母で、そこにいるアメリカ国家代表と遭遇したのだ。

まず間違いなく一触即発。向こうの逆鱗に触れ、戦闘になると考えていた。

のだが。

「…イーリス・コーリングアメリカ国家代表、でいいかしら？」

「おう。てか長いだろその呼び方。別にイーリで良いぞ」

「…イーリ。貴女、剣君との関係は？」

「あー、何だろな。ライバル？ダチ？」

「ボコられ役の間違いやろ」

「てめこのっ…！」

今度は、本当に頭を抱えた。

彼氏が他の女に尻を蹴られているが、今はそれ置いておく。

なぜこの人はこんなにも輪が広いのか。

最早友達が多いとかいうレベルではない。説明を聞かずに攻撃してきそうな、いわゆる敵かもしれないポジションの人間がいない。そう言ったポジションの人間は揃いも揃って既に味方になっている。

本当の敵以外、戦わなくてもいいという事態に、楯無は混乱していた。

「…剣君、イーリに状況の説明をしてあげて」

「おっけ。…ん？どした楯無。酔うた？」

「…違うの」

「おーおー、お熱いこった。とつきーアレだ、嫉妬ってやつだ。お前とアタシが仲良くしてんのが見んのが気に食わねえんだよ」

「そ、そんなことっ…無くは、ない…けど…」

「なあイーリ、俺の彼女流石に可愛すぎひん？」

「もうっ！ 剣君！ 今がどんな状況か分かってるの!？」

「……ハツパ掛けときながらアレだけだよ、お前ら一緒に未永く爆発してくれねえか？」

全くもう、とセリフを残し、ぷんすかぷんすかと怒りを頭にしながら大股で歩いていく楯無。

イーリスへの説明を大まかにしながら、時守も後を追いかける。

「えとな、アバウトに説明すると、ヤバい情報と一緒にこの船沈みかけ」

「嘘だろおい。聞いてねえよ。この船にまだアタシの財布残ってたんだぞ？ カードやら何やらが入ってたのに……」

「全部が全部、亡国機業つてとこが悪い」

「んだその厨二病丸出しのネーミングセンス。そこのトップ頭悪そうだな」

「まあそりゃな。各国からIS奪おうとか考えてる時点でアホやん」
「同感だ」

頬をぷうっ、と膨らませたままの楯無と、その後続く2人が入ったのは極秘データが集まったセントラル・ルーム。

「おい更識楯無。なんでお前がアタシらんとこの1番大事な場所知ってたんだよ」

「秘匿空母の、ここらへーん」

「ここは淡路島じゃねえっての」

「……入ってきた時にマップ見て覚えたのよ」

「聞いたかとききー。お前の彼女すげえぜ？ お前覚えたのか？」

『『金色』で俺の目通して写してる時にスクショ撮った』

「ほんつとに便利だよなそのIS。タブレットかよ」

「IS国家代表倒せるタブレットとか凄くね？」

2人の話を適当に流しながら楯無は電子端末を操作していく。

別世界では全く違う関係ではあるが、ここではこの2人は恋愛関係になることはない。

彼を信じているからこそ、置いておくのだ。

「ねえイーリ。スコール・ミューゼルって知ってるかしら」

「おお知ってるぜ。確か、十年くらい前にぼっくり逝ったババアだろ？」

「…そう。ならやはりおかしいわね」

「何がだ？」

「この間ね、そのスコールと少しだけ戦ったのよ」

「キャノボン時か」

「…なら確かに妙だな。そのデータは、他とはちげえ。公にされてないからこそ事実しか書いてねえはずだ。…ってことは」

イーリの発言と楯無の体験との間に生じた矛盾。

それが3人をより真剣な表情にしていく。

…最も、楯無は最初から真剣そのものだったが。

「イーリの知らんところで亡国機業と間違いなく繋がつとるな、アメリカは。…亡国機業だけちゃうとは思うけどな」

「…と、いうと？」

「まあその辺は本人に聞こや。丁度——」

時守がIS『金色』を部分展開し、『ランページテール』で壁を貫いた。

尻尾の先が3人の元へと戻ってきた時、その先端には金色のISを身にまとった女性が捉えられていた。

「偶然ここにおったみたいやし」

「くっ…、この…！離さないー！」

女性—スコール—は叫んだ。

聞いていなかったのだ。国連代表がここまで出来る人間だとは。上の情報では、数週間前に復帰した程度でしか無かった。

それが何故、ISを起動したと同時に敵の位置を把握、武装を展開して最短ルートで捉えられる程の腕前になっているのか。

「離してもええけど、その瞬間に雷お前の眉間にぶち込むからな」

「ぐっ…」

「…なんだ。珍しくキレてんなとつきー」

「当たり前やろ」

時守以外の3人が、彼の言葉に耳を傾ける。
気になるのだ。何がそこまで彼を怒らせるのか。

「金色のISとか、盛大にキャラ被つとるやんけ!!」

「…は？」

「…え？」

「はあ…」

イーリス、スコールは間抜けな声を上げ、楯無はやはりと言わんばかりにため息をついた。

「いや、見てみいやISの色。被ってるやん」

「そ、それだけ…か？」

「はあ？キャラ被りとか死活問題やん」

「っ！『ゴールデン・ドーン』ツ!!」

時守がイーリスの方に顔を向けた一瞬で、スコールは攻撃へと転じた。

彼女の操るIS『ゴールデン・ドーン』は炎を操るIS。

その中でも特に高い火力を誇る超高熱火球『ソリッド・フレア』が時守へと襲いかかり—

「どーんっ—」

—一瞬にして消え去った。

「…えっ？」

「なあ楯無。アタシらほんとにこいつとモンド・グロツソで戦って勝てると思うか？」

「や、さあ…う…」

突き出した右腕から伸びる人差し指。そこから放たれた『雷轟』が炎をかき消したのだ。

スコールの動きが遅いのではない。むしろ、並のIS操縦者以上の速さだ。

しかし、時守はさらにその上をいつているのだ。

「なら…っ—」

「おつ、追いかけてっか?」

今度は『ソリッド・フレア』で『ランページテール』を溶かし、拘束から何とか逃れたスコール。

二重瞬時加速で逃げる彼女を、時守は涼しげな顔で追いかけた。

「とつきーがいれば負けることは無いとは思うが、任せっきりつても癪だしな。アタシらも追うか」

「ええー!」

2人もIS『霧纏の淑女』と『ファング・クエイク』を展開して2人を追う。

空母を後にして宙へと出た2人は、一筋の光の線がスコールの周囲を、まるで乱反射しているかのように巡っているのを目の当たりにした。

「速、すぎる……!」

それでも、ダメージを最小限に抑えているのは流石といったところか。

亡国機業実働部隊、『モノクローム・アバター』のリーダー、スコール・ミューゼル。

ISの腕は確かだった。

「まー、あいつも運が悪かったなー。カモだと思って罾を仕掛けたら、掛かったのがティラノサウルスってレベルの災難だぜ、こりゃ」

ゴリゴリと『ゴールデン・ドーン』のSEが削られ、同時に装甲が磨り減っていく。

ハイパーセンサーを使って集中して動きを捉えても、ブレて何をしているのか良く見えない。

それほどまでに『雷動』を使った時守は速かった。

「お姉ちゃん!……誰?」

「あん?……似てんなおい。妹か? 更識楯無」

「ええ。簪ちゃん、なんでここに?」

「織斑先生に言われて、これを持って行けって。後は……お手伝い?」
「大掃除かっつての」

そんな時守の攻撃にいつ追撃を合わせようかと考えていた時。

シールドパッケージ『不動岩山』を装備した簪が2人の元へ飛んできた。

「ありがとう簪ちゃん。受け取っておくわ」

「うん。…でも、使う?」

「恐らくね」

簪が持ってきた物。それは楯無に必要な物だった。

『霧纏の淑女』専用パッケージ『オートクチュール』。

名を『麗しきクリースナヤ』。

そんなん付けんでも麗しいで!という彼の声が聞こえてきそうな名前のそれを、背中に接続する。

アクア・ヴェールが青から赤へと変色、超高出力モードへと切り替わった。

「幾ら剣君が速いとはいえ、相手もかなりの手練よ。間違ひなく一撃を食らわせる必要がある」

「つてなりや、流石のとききも一瞬だけ動きを止める。向こうもその隙を狙ってんだらうよ。目がそう言ってる」

簪は言葉に詰まっていた。

一見すれば時守が完全に優勢。どこをどう見ても負ける要素なんて微塵も存在しなかった。

しかし、国家代表の二人から見れば全く別。一瞬で形成が逆転されかねない状況らしい。

「スコールはその隙を。逆に私たちは剣君の隙を突こうとするスコールの隙を狙うの。幸い、私の単一仕様能力は拘束に長けているから、そこを狙ってちょうだい」

「あいよ。つっても、アタシまだ単一仕様能力出てねえし、ただぶん殴るだけになるな」

「…じゃあ私は、そこを『山嵐』で狙い撃つ」

『山嵐』ってなんだ?」

「マルチロックオンシステムによる高性能誘導八連装ミサイル。…計48発」

「物騒だなおいっ！アタシが突撃してる時にそれぶっぱなすなよ!？」

「…人の彼氏と仲良くしといて、良く言う」

「そ、それは謝るからさ…」

「二人共、そろそろよ」

誰に似たのか軽く漫才を始めていた2人を楯無が諫める。

彼女が察したということ、彼から彼女にだけプライベートチャネルで連絡が入ったのだろう。

3人に緊張が走る。

スコールの背後から攻撃を当てた時守の動きが、一瞬だけ止まった。

その瞬間――

「っ、『ソリッド・フレア』！」

『沈セツクむ床ヴアベツク』！」

『山嵐』！」

『刺ゲイし穿イつ死棘ボルの槍ク』！」

――4つの大型武装――内一つは単一仕様能力――が同時に激突する。

時守を落とさんとばかりに放たれた火球。

それを撃つた下手人を捉える沈む空間。

そこからもがき、這い出ようとするスコールを足止めするミサイル。

そして火球諸共スコールのISを右腕、右翼ごと粉碎した槍。

ことは、一瞬で片付いた。

「勝負あり、つてか？」

「…ええ。ISも壊れかけ。右腕ももげちゃったし、負けね」

ただしそれは勝敗において、である。

「っ！まだや、イーリ！捕まえろ！」

「…っ、そういうことかよ…！」

「だから逃げさせてもらうわ。『ソリッド・フレア』」

火球がスコールを隠す。4人と対面する形で飛んでいたスコールが、自分と時守達の間巨大な火球を数個並べたのだ。

「オラッ！」

イーリスが『個別連続瞬時加速』を成功させ、火球を殴り消すも、既にそこにスコールはいなかった。

遠方にI Sが一機逃げていくのが見える。恐らく仲間に抱えられているのだろう。

「チツ、逃がしたか…」

「構わないわ。：アメリカの上層部との交渉を有利に進められるモノが手に入ったもの」

「お前はそれで良いかも知れねえけどよ」

「まあ今回は誰も名誉の負傷も無かつたし、な？大丈夫か？簪」

「う、うん…。特に怪我は無いけど…」

冷静になった簪は、ふと周りを見渡す。

—もしかして私、凄い所にいるのでは。

ロシア国家代表、アメリカ国家代表、国連代表、そして先程までは亡国機業の実働部隊のリーダー。

そんな豪華なメンツの中に、代表候補生の中で1人だけ入れたということに、内心ウキウキしていたのだ。

「ほな帰ろか。もう展開してもたもんはしやあないし、このまま臨海公園まで」

「そうね。あそこは人が少ないし、各方面への連絡ぐらいならできるとでしょうから」

「あ、あーっ!!マジで空母沈んでるじゃねえか!あ、アタシのカード、携帯…。手続きめんどくせえなあ…」

そのウキウキを、決して表には出さずに3人の後をついていく簪。その速度を少し早め、時守と楯無に追いついた。

◇ ◇ ◇

「で、剣君。あの武装はなあに?」

「お?ああ、『刺し穿つ死棘の槍』のことか?第三形態移行した時に出てん」

「そう、それよ。私の目には投擲した槍が途中で軌道を変えたように

「見えたんだけど？」

「簡単なことやで。俺、あいつのISに『雷動』で攻撃したやろ？その時に電荷を帯びさせて、それと正反対、つまりは引き合う電荷を槍に帯びさせんねん。んで後は『オールラウンド』に『雷動』発動して投げただけ」

「……ちよい待てとつきー。お前今『オールラウンド』について言ったか？」

「おう。それがどないした？」

「…あのね剣君。そもそも単一仕様能力自体の発現が少ないから絶対、とは言えないんだけど、普通は単一仕様能力を武器に纏わせるなんて不可能なのよ？」

「…ん？でも俺に出来てんから不可能ちやうやろ？」

「ん？なんか俺悪いことしてもた？と純粹な顔そのまま聞いてくる時守に顔を顰める理由にもいかず、楯無とイーリスは顔を合わせた。

「ねえ、普通はやっぱり不可能よね？」

「…つたりめえだろ。そんなんが誰でも出来たら地球ぶっ壊れるわ。」

「…そうよね…。ほんと、新しい単一仕様能力出る度に凄い使い方をわね…。」

「…完全同調で他のISの調整とか出来るんだろ？…流石にやべえだろ。」

「なーなー簪ー、2人とも見つめあってんねんけどー」

「むにゅ…、ほ、ほつぺた伸ばさにやいれ…」

「…いや、ほんま柔らかいな簪のほつぺ…。おおー、おおー！」

「むうう…」

視線で会話する2人の横で膝の上に座らせた簪の頬の感触を楽しむ時守。

ほつぺたを伸ばされる簪はやめて、と言いつつも幸せそうな顔をしていた。

「剣くん」

「はいな。なんでっしやろ」

「他に、第三形態移行して新しく出た武装は無いの？」

「おう」

「そう、なら織斑先生に怒られずにすみそうね」

「…えっ、俺怒られる？」

「今の武装の存在を伝えてないのなら、多分…」

「嘘やん」

どないしよ、と急に真顔に戻った彼の膝の上で、簪があたふたと慌てている。

そんな光景を見て、思わず楯無とイーリスの口角が上がった。

「ふふっ、剣君。簪ちゃん。帰りましょ？」

「だな。あたしも色々と上に報告しなきゃいけねえことが増えたし、何よりお前ら2人、濡れたままだろ？」

「あ、ほんまや。んじゃ帰るか。ほら、簪」

「…ん」

簪が時守の膝から降り、時守の右手に楯無の左手、左手に簪の右手が繋がれる。

「…アタシも、もうちょい考えてみつか」

3人仲良く大きく手を振りながら臨海公園を後にしていく。

そんな彼らの背中を見ながら、イーリスは独りごちた。

「つたく、そういや全員国籍は違えど同じI S学園。…海を渡って帰るのは1人ってことかよ」

ぶつくさ言いながら彼女は秘匿回線通話で自国の上層部に連絡を入れた。

「あ、アタシだ。おう、おうそうだ。今から帰る。…ああ。ファング・クエイクには何の問題もねえ。国連代表サマとも関係良好だ。…てかとつきーには変な勘ぐり入れねえ方がいいぜ？アタシも最初は疑ってたけどよー」

誰にも聞こえない連絡を取りながら、彼女は1人臨海公園を去った。



休み明けの月曜日。

「やっほー!一夏!剣!」

「や、やっほー…剣…、一夏…」

「ふふつ、これからも皆、よろしくね?」

朝のホームルームの時間。1年1組に凰鈴音、更識簪、そして更識楯無の姿があった。

「山田先生、説明を」

「はい。この度、1年生の専用機持ち達を皆、この1組に集めることとなりました。先日の大運動会の結果を受けてですね。それと、2年1組から更識楯無さんが皆さんの授業の手助けをしてくれることになりました。2年生はこの時期、授業のある日の午後は自分のしたい事のできる時間となっているので、その時間を割いてもらって来ています。現役国家代表の更識さんから、色々なことを教えてもらってくださいね?」

「まあこれで事実上クラス対抗戦は出来なくなった訳だが、他クラスへの補填はしっかりとしておく。専用機持ち達は、存分に訓練に励むといい」

「はーいっ!!」

1人馬鹿みたいに大きな声で返事をした時守。

その顔はどこかうきうきとしたものになっていた。

「あつ、ちよ、待て鈴!」

「ん?何?アタシ空いてた席に座っただけだけど?」

「一夏と近いではないか!」

「えっ、何それ…。俺病原菌みたいに扱われてんのか…?」

「…剣。隣、いい?」

「そのために空けとつたからな!」

ワイワイぎやあぎやあと騒ぐかと思っていた席決めが、以外とあっさり決まったことに千冬はどこか関心していた。

「さて、これでISの実技には実質9人の専用機持ち達が参加することとなった。…専用機持ちでない、代表候補生でもない生徒も、頑張

れば追いつけるかも知れないぞ?。」

その一言で、専用機持ちでない生徒のやる気も駆り立てられた。

流石は織斑千冬と言ったところか。自分の影響力を良く知っている。

彼らを包む環境が、がらりと変わろうとしていた。

原作10巻 修学旅行編
帰省

熱くなっていたテニス解説者も、プロ野球の熱く盛り上がったシーズンも息を潜め、秋も深まりやや涼しくなってきたIS学園。

ぶつちやけ海の上に建っているのも涼しいとかいう次元ではなくなってきたことは置いておこう。

そんなすでに寒くなってきたIS学園の全校集会で、更識楯無は壇上に立っていた。

「それでは、これより秋の修学旅行についての説明をさせていただきます」

おおーっ、という女子の歓声の中に微かに、いよっ！という男の声が響いた。

「今回、さまざまな騒動もあり延期となっていた修学旅行ですが、またしても第三者の介入が無いとは言いきれません」

一瞬、鋭く視線を走らせる楯無。

え、この時期で延期とか普段どんなタイミングで修学旅行行ってたん？とシャルロットに聞く時守。

結果、答えとして苦笑いしか帰ってこず、再び壇上へと視線を戻した。

「ーと、いうわけで。生徒会選抜メンバーによる、修学旅行の下見をお願いするわ。メンバーは専用機持ち全員。それから、引率には織斑先生と山田先生。以上です」

どこに行くのかを言わなかった楯無だが、周囲の反応は至って普通。

大半から『いいなあ』という意見が出ていた。

そしてそれは、1年の専用機持ちにも言えることだった。

「どこに行くのだろうな。やはり、京都か広島か？長崎や北海道、沖縄かも知れんな…」

「へえー、日本ってそんなに修学旅行に行くところがあるんだあ。楽

しみだね、ラウラ！」

「うむ！どこも行つたことがない所ばかりだからな！楽しみだ！」

箒、シャルロット、ラウラが会話を弾ませる一方、セシリアと鈴の顔色は優れていなかった。

「なぜわたくしがそのようなお使い紛いのことを…。だいたい、英国のロンドンに勝る古都があるとは、到底思えませんわ」

「どーせ、また京都とか言うんでしょ？飽きたのよ。なんで日本って修学旅行といえは京都なの？」

「俺の中学沖縄やったで？」

露骨に嫌な表情をする2人に話しかける、内心うつきうきの時守。それもそのはず、彼は関東圏での修学旅行は初なのだ。

「鈴ちゃんには一夏くん、セシリアちゃんも私は私たちと一緒に剣と同行してもらおうね」

2人のその表情は、楯無の一言で180°逆転した。

「このセシリア・オルコット。皆さんと共にミッションを遂行することを誓いますわ」

「え、ちよ、嬉しいけどさあ…。セシリア、気合い入りすぎじゃない？」

「何を言ってますの!?修学旅行の下見に、剣さんとー」

「あー、はいはい分かった分かった。って話さなくていいって…。あー、もー、やぶへびだったー」

セシリアから好きな人と共に旅行が出来る良さをひたすら聞かされ、再びげんなりする鈴。

箒、ラウラが一夏と同行出来ないことにショックを隠せない中、時守は1人、更にうきうきしながら集会に参加していた。

◇

「では、今回の修学旅行の下見の本当の目的を話します」

楯無に呼び出された専用機持ち全員が、生徒会室に集まっていた。そこにはもちろん、先日『ゴレムⅢ襲撃事件』の際にも活躍した、ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアも座っていた。

「今回はISの修復を終えたフォルテとダリルも参加する全戦力投入となるわ」

『戦力』という言葉聞き、1年生専用機持ちの女子からざわめきが始まりました。

そのざわめきを止めたのは、司会をしていた楯無ではなく、時守とフォルテだった。

「全戦力投入って、亡国機業に？」

「えー、やっぱやるんすか？ダルいなあ…」

「あら、知ってたの？」

「知ってたっつーか、本国に帰った時にちよいと耳にただけっすよ」
内容と反し、少し間の抜けた口調で話す2人と楯無だが実力は3人とも折り紙つき。1年生の専用機持ちは会話に入っていけなかった。

「お、フォルテ無茶すんなよ？ただでさえちっこいのにミジンコみたいになんて？」

「そんなになるわけないっす。…てかセンパイ、こういうの意外とやる気無いと思ってたんすけど…」

「ああ？燃えるに決まってるだろこんなもん」

小さい体に猫背のフォルテと優れたプロポーションにしつかりとした背筋のダリル。

その2人の性格の違いは、身体の肉付きにもやる気の違いにも良く現れていた。

「ま、専用機のバージョンアップもあつたしな。薄々そんな気がしてたっただけだ。根回しが良いな、生徒会長」

「IS学園の名を借りただけよ。…というわけで、みんなには嘘偽りなく国際的テロ組織、亡国機業へ攻撃を行ってもらおうわ。情報収集は私が担当、みんなには個別に役割を秘匿回線で伝えるわ」

相変わらずマイペースなフォルテとダリル、そして先ほどから口の中で飴玉を転がしている時守も含め、室内に緊張が走っていく。

「それでは各自、出撃に備えて。解散！」

「はいっ！」

勢いよく、1年生グループが返事をする。

その向かいで、おうっ！と1人でかい声で返事をした時守が、ダリルとフォルテにおちよくられていた。

「つてことになつてたのに…」

その翌日、1年生専用機持ちは全員、ショッピングモールへと買い物に来ていた。

「なんでみんな普通に視察旅行として楽しもうとしてるんだ…」

「まあぶつちやけそんな強ないしな」

「へ？…亡国機業が？」

「おう。お前らにも言うたやろ？前にその部隊の隊長とやり合った時にボッコボコにしたつて」

「まあ、話には聞いてるけど…」

作戦に意気込んでいた一夏とは真逆に旅行を楽しもうとしているヒロインズ。

嘆く一夏に、時守が声をかけた。

「ま、戦うつてなつたらその時やろ。幸い数はこっちの方が有利。前やった感じやと、流石にこつちが2で向こう1に負けるような強さちやうかつたしな」

「でも…」

「それこそ、短期間でテロリストをマンツーマンで倒せる程には強なれへん。それやったら、ペアになるかも知れん友達とより仲を深めた方がええやろ？」

「…そう、だな」

わいわいと騒ぐヒロインズ達に時守が近づいていく。

「まあでも、それで不安やつてんなら俺が1人で引き受けたるわ」

「へっ、そんなことさせるわけねえだろ？それでも最近マシにはなつてきたんだぜ？」

「ほーん。…なら、期待しとくわ。俺らも行くぞー！」

「おうー！」

セシリア達の方へ時守が。

箒達の方へ一夏が合流する。

「…あ。そういやさ、俺ぼーっとして聞いてへんかってんけど今回の修学旅行つてどこ行くん？」

「え？鈴の予想通り京都だけど…、どうしたの？」

「いや、もしかしたら俺の地元寄るかも知れへんって思ってたんだけど
流石に無いなーって」

「うーん。でも、大阪なら京都とのアクセスもいいんじゃないの？」

「…え？俺、地元大阪ちゃうで？」

瞬間、時守以外の時が凍った。

「……え？い、いやいや…。嘘、だろ…？」

「何驚いとんねん。やから、俺地元大阪ちゃうねんって」

「……もう、1度言ってくれないか？師匠…」

「何回でも言ったるわ。俺の地元は大阪ちやいまっせ」

「な、ならば一体、どこですの…!？」

「け、剣！ちゃんと誤魔化さずに言ってるね！」

「私達は今まで凄まじい誤解をしていた可能性があるな…」

「あ、アタシてつきり大阪だとばかり…!」

「…くくり」

時守以外の7人が彼に詰め寄り、一気に問い詰める。

驚愕のあまり表情を失った一夏に、耳を疑うラウラ。困惑のあまり
震え出すセシリアに、彼の両肩を揺さぶるシャルロット。やたらと真
剣な表情で考え出す箒と鈴、そして、生唾を飲み込んだ簪。

彼の答えは――

「う、そー」

――鈴の鳩尾へのアップーにより、その二文字しか聞き取られなかつ
た。

◇ ◇

「なあ鈴。そろそろ本気出してや。いい加減20連勝のババ抜きとか
おもんないねんけど」

「うっさいわね！てかなんでアタシだけなのよ！」

「あの時ぶん殴られたのが気に食わなかった」

時守が鈴の手札から、一枚を引く。

絵柄を見ることすらせずに、すでに持っていた一枚と合わせて捨てる。

「はい、俺の勝ちー」

「はあっ!?なんで手札見てないのに分かんのだよ!」

「お前の顔見てたら分かるわ」

「…ババ抜き中に人の顔ジロジロ見てたの?」

「なんや。恥ずかしかったんか?顔から考え読み取っただけやで」

出発を控えた新幹線の中で、時守は鈴とババ抜きに勤しんでいたのだ。

21回目のババ抜きに差し掛かろうとしたその時、荷物を置き終えたシャルロットが財布を持って2人の側に立った。

「剣も鈴も、何か欲しいものは無い?」

「シャルロット、お前が欲しい…」

「剣…」

「ほんといい加減にしなさいよアンタら!なんでアタシが目の前でこんな3流昼ドラみたいな展開見せつけられなきゃいけないのだよ!もうセシリア2回と簪3回、楯無さんの2回と合わせて8回目よ!」

「俺の対面に座ったお前が悪い」

それもこれも、シヨツピングモールで鈴が時守に腹パンを食らわせたせいである。

他のメンバーはさほど気にしておらず、ただ時守の発言に驚いていただけなのだが、変に雰囲気を作りすぎた上で満面の笑みで嘘を吐かれたと分かった瞬間、鈴は止まれなかったのだ。

「はあ…。で、またババ抜き?」

「いや、今度学園帰ってきた時に模擬戦しよや」

「…まあ、そんならいならいいわよ」

「新しく出た武装でフルボッコにしたるわ」

「はっ、言っただけよ。今に負かせてやるから、覚悟してなさい」

と言いつつ、国連代表にボゴボゴにされて英国国家代表候補生に慰められながら仏蘭西国家代表候補生に苦笑いを向けられ、日本国家代表候補生、独逸国家代表候補生らと共に露西亜国家代表と国連代表の戦いを見る中国代表候補生が、数週間後にはいるのだが。

「よっ、悪い悪い。遅れた」

「びよごおおおお!!!」

「…おいワンサマ。ラウラどないしてん」

「なんか駅弁のひよこを買えなかったからって泣いてるみたいなんだが…」

「へえ…。ならラウラ。お前がアレ食うんやったら、ひよこエグいとなんで?」

「…………ふむ、それもそうだ。…なら、シヨーケースに入っているのを眺めるだけで良かったな。感謝するぞ、師匠!」

「手慣れてんなおい」

出発間際になって車両に入ってきたラウラと一夏。

泣きじやくついていたラウラをあつきりと泣き止ませた時守の元に、今度は楯無が寄ってきた。

「ねえ剣くん。ちよつとお話、いいかしら?」

「お?…ああ。ええで」

すまん、と一言かけてシャルロットを跨ぎ通路へ出て歩く。

一夏たちと楯無と時守の2人を、鉄のドアが隔てた。

「で、どないした…って、ちつふー先生?」

「相変わらず、マイペースなやつだな。お前は」

「褒めてます?それ」

新幹線の車両のドアを越えた先、自動販売機などが置かれているその小さな空間に、楯無と時守、そして千冬はいた。

「早速だけど、本題に入るわ、剣くん」

「おう」

「私がこの前剣くんに任せた役割は『奇襲』。故郷を懐かしむフリをしながら索敵をし、見つけ次第一撃で仕留めるというものだったわ」

「だが、ここに来て状況が変わった。更識の家の者が厄介な情報を手に入れてな。お前の役割を変更することになった」

「変更、ねえ…。ちなみに厄介ってのは?」

先日の作戦会議の後。楯無から時守に当てられた役割は、いわゆる見敵必殺。その優れた索敵とスピードを生かして敵の数を減らしていく、というものだった。

「…イタリア国家代表、アリーシャ・ジョセスターフの目撃情報、並びに篠ノ之束の目撃情報も上がっているんだ」

「…てなると、亡国機業だけを相手にするわけにもいかへんかもってことか」

「そう。私は本部を置かせてもらう旅館を簡単には離れなれないから、実質剣くんリーダーを任せることになるかもしれないの」

楯無の作戦。アレは、亡国機業用に立てられたものだ。

向こうの戦力は、分かっているだけで『ゴールデン・ドーン』、『サイレント・ゼフィルス』、『アラクネ』。+αでゴールレム数体といったところ、のはずだった。

しかし、このタイミングでイタリア国家代表と篠ノ之束の目撃情報が上がったということは、何かがあると踏むに越したことは無い。

「ほな、俺の役割が『奇襲』から『最後の砦』って感じか？」

「ええ。…ごめんさい、こんなことを任せてしまって」

「構わんわ。…そもそも、強なるために国連代表になってん。こうして頼ってもらえる方が、守られるよりも万倍マシや」

「私も真耶も、あまり使い物にならないだろう。申請はしているが、ISの使用許可が取れるか分からんからな」

「うっす」

「話はそれだけっ…さ、後は京都までの新幹線、楽しみましょ？」

むぎゆ、と時守の右腕に楯無が抱きつく。

瞬間、千冬の顔に影が落ちた。

「なあおい更識。…お前、私に見せびらかせているのか？お？」

「あ…、い、いえ。そういう訳ではなくて、その…。っ、つい剣くんと一緒にいると…えへへ…」

楯無は上手く弁明したつもりだった。

しかし、今のセリフで千冬の心に幾度となくトドメを刺していた。冒頭の「あ…」でうつかりと、自然な形でしてしまっていたことを

千冬に知らせ。

その後の言い訳を考える仕草も、普段の楯無では考えられないような乙女に染まった、ただの恋する少女そのもの。

ほんのりと赤くなつた顔で彼の顔を見る仕草自体、千冬の心を抉る。

そして「つい」という言葉、そして最後の「えへへ…」と照れ。

刀奈のその動きが、未だ彼氏も好きな男も出来なかつた千冬を殺した。

「…おい時守。お前も今、こいつに何かしようと考えてただろう…」
「えっ、嘘。なんで分かつたんすか？」

「…これほどカマをかけて成功しても嬉しくないことなど初めてだ」
ちなみに時守が考えていたことは、やべえキスしてえ。である。

「だ、大丈夫つすよちっふー先生。顔は整ってますし、スタイルも抜群。しかもできる女感満載やないっすか」

「そ、そうですよ織斑先生！」

「後はちよつとだけほんこつ入れば可愛いもんつす、よおっ!？」
危険を察知した時守の顔が左に傾く。

元々顔があつた所には、千冬の右腕が綺麗に伸びていた。

「か、可愛いなどと、私に言うな…」

「…今の照れ隠し？」

「……織斑先生の彼氏さん、頑丈な人じゃないと務まらないわね」
照れ隠しで顔面にストレートを打ってしまう織斑千冬に、恋路は来るのか。



「まもなく京都、京都です。ウィール・メイク・ア・ブリーフ・ストツ
プ・アット・キョート」

「うーわ、ガッチガチやん。変なアナウンス」

「ちよ、おい剣。まじでやめろよ？」

話し合いも終わり、楯無と共に専用機持ち達が待つ座席へと座つた

時守が時間を潰していると、新幹線が京都に近づいた。

それと共に流れたアナウンスに、いつもの如く関西人がケチを付けた。

「あ、次はー、京都ー、京都ー、です。お降りの際は忘れ物の無いよう、ご確認よろしくお願いしーますっ」

「ぶっ、ぎやははははっ！上手すぎだつてのそれ！」

「ほ、ほんとダメ…！それ、ツボ…！」

「ひっ、ひー！ひー！」

「そ、そんなに電車の、乗らないけど！だ、ダメ…！可笑しい…！」
「相変わらず上手すぎでしょアンタ…、くふふふ…、あー！お腹痛いー！」

良くいる駅員のモノマネ（中川○風）をすると、一夏、簪、箒、楯無、鈴といった日本の電車に割と乗ったことのあるメンバーが爆笑する。

対して、シャルロットやセシリア、ラウラにダリル、フォルテといった日本の電車にほぼ乗ったことがないメンバーは、首を傾げるだけだった。

「…何がそんなに面白いんですの？」

「い、いや、セシリア、あんたも1回で良いから日本の普通の電車乗ってみなさい？動きとか完璧すぎてほんと、笑うしか出来ないから」

「そ、そうですの？では、剣さん…いつか…」

「おう、ええで」

会話をしながらも着々と爆笑しているメンバーの荷物を下ろし、外に出る準備をちやつかり済ます辺りオバチャン化している時守。

「…『金色』使えばまとめて持てるんじゃないかね？」

「やめろ馬鹿」

ガンっ！と金属がぶつかるような音が時守の頭で鳴った。

振り返れば、千冬が拳を掲げていた。

「殴りました？」

「ああ」

「…痛ったあ…」

「痛覚鈍り過ぎだろお前」

「あ、ダリルさん。ちつす」

「おう」

なぜ人の拳と人の頭がぶつかってそんな音が鳴るのか、爆笑と準備に包まれるその車両の中で、気にする者はいなかった。

さらにそこから時守が幾つかのネタを息をするように出し、楯無ら日本人が爆笑しているといつの間にか京都に着いた。

ぞろぞろと車内から出ると、京都駅名物の長い階段が姿をあらわした。

「おー、ここで集合写真撮ったらすごい良さそうだな」

「せやな。…お、ワンサマカメラ持ってるやん。ちよい貸して」

「あつ、おい！」

一夏にとつて、千冬の思い出の品であるカメラを借りた時守がどこかへ走っていく。

「何してんのアイツ」

「…ふむ。どうやら写真を撮るのを頼んでいるようだな」

「え、えー…。よりによって、観光客の人に頼んじやうんですか…？」

鈴がボヤキ、千冬が彼の行動についての解説をした所で、真耶から至極真つ当な意見が出た。

一夏の意見を聞いた時守が駆け寄っていったのは、明らかに地元民ではない、金髪碧眼で地図を手にしていた背の高い外国人。

周りに人がいるのにも関わらずなぜその人を選んだのか。

「あ、了承してもらいましたわね」

「話し声が小さく聞こえたけど、全然英語話してなかったよね…」

「ああ。むしろ、頼むわー！などと聞こえたからいつも通りに話してたんだろう」

「…それで外国人を連れてくるって、どうなってるの…」

外国人が笑みを浮かべて頷いた。どうやら了承してくれたようである。

一足先に戻ってきた時守が、概要を話す。

「なんか京都に来たおっちゃんらしいから、その人に撮ってもらおうわ」

「いや、まずなんであの人に頼んだんすか？」

「え？いや、普通に日本人に頼むとき、俺ら今ISS学園の制服やで？めんどいことなるやん」

「…あー、…なるほど、な」

ある意味正しい意見が出て、一同からこれ以上疑問が出なかった。

それもそのはず。冷静に考えれば元世界最強の織斑千冬と、男性操縦者の2人、さらにはロシア国家代表の楯無に各国代表候補生の綺麗所が揃いも揃ってISS学園の制服を着ているのだ。

事情をそれなりに知っている日本人に見られれば、間違いなく面倒ことになる。

「アー、ホナイキマスネー！ア、ソコノオフタリモチヨットダケヨツテー！」

「すつげえカタコト関西弁だな」

「ハイッ！サン、ニー、イチッ」

カシャッ！とシャッター音が響く。

「ア、モウイチマイイキマッセー！」

カシャッ！とシャッター音が再び響く。

「サイゴ、ジユウニー！」

自由に、と言われた瞬間、各々が動き出した。

ダリルとフォルテはキスをしようと。

流星にそんな光景を集合写真に載せるわけにはいかない、と千冬が焦りながら止めに。

時守の身体にシャルロット、セシリア、簪、楯無が抱きつき。

その時守は一夏の頬を左手で掴み、強引に変顔にさせ。

その一夏の左頬にキスをしようとするラウラ。

彼女を止めるべくISSを展開しかける箒と鈴。

そんな2人を見て、顔を青くしながらムンクの叫びのように両手を両頬にやる真耶。

一夏の思い出に、全員が笑顔で写る最後の写真が加わった。

観光、後に

「え、ほんまにそれでええん?」

「ええ。情報提供者を探さなきゃいけないの。だから、情報が整理出来るまでは皆観光してて大丈夫よ」

「なるほど。…んじや、どうする?」

言つて、時守は1年生専用機持ちの方を向いた。

既にダリル、フォルテの2人はこの場を、二人揃つて去っている。

「京都を満喫するツスー!」と意気込んでいたフォルテが意気揚々とダリルの腕を掴んでいたのをつい先程、全員で温かい目で見送った。

「どう、つて…剣はもう回るのが…あつ」

「もちろん」

「わたくしたちが」

「一緒に回る…」

だから付いてくるなど目で語っているシャルロット、セシリア、簪の意図を察せぬ程、一夏は鈍感ではない。

自身の恋が絡むと鈍感…というより、感覚が無くなるのだ。

「では消去法で私が」

「そしてアタシが」

「なら私も」

お前に付いていくと目で語る箒、鈴、ラウラの圧力に首を横に振れず、了承。

ずんずんと進む3人に腕を持っていかれてその後をただただ付いていく一夏。

待つてくれと頼むも、3人は聞く耳を持たなかった。

「…なんであいつまだ付き合っていないのに尻に敷かれてるん?」

「さ、さあ…?」

「ですが一夏さん、何となくですけれど結婚したら本当に尻に敷かれてそうですわね」

「…一夏は、悪を成敗しようとはするけど、身内にはなかなか強く言わ

ないから…」

将来誰と結婚しても休日に妻の言いなりになっているであろう一夏が目には浮かぶ。

「ねえ剣。一夏がカメラ持ってきてたけど、剣は持ってきてない？」

「え？あー、写真か。まあカメラちやうけど、一応携帯のやつは…」

「そういうえば、最近の日本の携帯電話のカメラも馬鹿にできない程に技術が進歩していましたわね」

「そうそう。…んでさ、この前中学ん時に使ってたガラケーの会社から新商品のモニター頼まれてん」

「何それ凄い」

簪が目をキラキラと光らせながら時守の方を見やる。

つまりは、早く見せてくれと言う事。

「まあこれやねんけど」

「あつ。前から気になってたけど、そういう事だったんだ」

「買い換えた訳では無かったですわね」

「おう。2TBの超高画質カメラ機能付きやつて。そんなにアプリと入れへんからあんま使い道無いねんけどな」

「ほ、他に機能とかは!？」

「あー、何やつけ。あ、アレや。どつかのスイッチ押して指紋認証したらデータを全部ISに移して、投げたら手榴弾になる機能」

「その機能は要りますの!？」

簪の顔が満面の笑みかつ憧れの表情になる一方、セシリアの顔が驚愕に変わった。

「え、普通に要るで？IS修理に出してる時に襲われたら便利やん」

「まず発想が物騒なんじゃないかな?…そ、それとさ、剣?」

「お?」

「中学の時、ガラケーだったの?」

「ツツコミ遅ない?」

時守は、彼と関係を持っている女性を含むと、かなり庶民的な生活を送っていた。

お嬢様のセシリア、簪、楯無は言わずもがな、父親からは愛されて

いたシャルロットは、それなりに資金援助は受けていた。

そもそも、4人とも中学時代に既に代表候補生になっており、便利な機能の多い、いわゆるスマホを持たされていたのだ。

「まあ要らんかったしな。中学時代は勉強の邪魔やったし」

「なるほど。：剣さん、日本の中学ではどれくらい賢かったんですの？」

「え？いや、自分ではそんな分かんけど、よう先生からは、大学は京都か東京のトップにお世話になれるやろ、つて言われてたで。意味分からんけど」

「えっ…。け、剣、それほんと？」

「おお」

話の中で、唯一簪だけがその事態の異様さに気づいていた。

時守の考えでトップとは、洗剤、もしくは様々な分野でのトップがあるので一概に言えないものだ。

だが、一般的に大学のトップ、と言えば偏差値。

京都と東京といえば、選択肢など無いに等しかった。

「：日本の大学ってそんなに有名ですか？」

「ま、まあ最近はIS学園が出ちゃったから薄れてるけど…」

「：剣、凄い…」

「…：簪、そんな見つめやんといてや。照れる」

さらにこの男、以前臨海学校にて理子から聞いた話によると、生徒会長としてバリバリ働きながら部員の少ない部活に入部し、助っ人としても働いていたらしい。

ワーカホリックになっっているのではないだろうか、内心簪は心配した。

「…え？てかなんでIS学園が出たから日本の大学が薄れてんの？」

「あれ、剣知らないの？IS学園って卒業したら実質大学卒業と同じ扱いになるらしいよ」

「はあ!？」

「IS学園に入学して、剣さんにあつて半年が過ぎましたけど、ここに来て一番の驚きですよすわね…」

「まあでも、学歴社会の日本じゃ驚くのも無理は無い、かも…」
知らんかった…と天を仰ぐ時守を見て苦笑するシャルロット。

IS学園卒業が実質大学卒業と同じ扱いではあるが、なぜか今のタイミングで謎のIS学園付属大学なるものも開校される予定だと、今まさに国会では話題になっている。

「…つていやいや。こんなこと話すために京都来たんちゃうやん。観光や観光」

「だよねっ！剣って京都とかいっぱい行ってたの？」

「オーキヤンとか遠足で何回か行ったような気が…しない」

「しないんですのね」

「…じゃあ、私が案内する？」

「ん。頼むわ簪」

簪を先頭にして、4人は歩き出した。



「竹林って乳首と若干似てるよな」

「やめてくださいましっ！」

古風な街並みを見て回りながら歩き、現在は竹林が見える道を4人で歩いていた。

時守の不意の一言にセシリアがやや怒り気味のツツコミを入れる。歩いていると、脇道からふわりと人影が現れた。

「あら…」

「うわあ…」

「綺麗…」

「…ん？」

セシリア、シャルロット、簪がその人影の美しさに声を漏らす中、時守は普段と変わらぬ声色で首を傾げた。

「アーリイやん！」

「ぬ？オオっ、ケンちゃんじゃないのサ」

「…え？」

そしてその人物は、時守の声に反応してこちらに振り向き、笑顔を見せた。

理解出来ていない3人を尻目に、その人物、アーリイは時守に近づいた。

「えらい久しぶりやなあ」

「そうサね。夏にイタリアに来てボコツて以来になるのサ」

「ハツハツハー！まあええわ、次は俺がボコるからなー」

「言ってるといいのサ。まだ私には勝てないだろうしね？」

出会って早々煽り合うIS学園の制服を来た男子と、右目に伊達政宗、胴体に日本の和の心、さらには火傷の跡と欠損した腕、加えて赤髪、さらにははだけた着物から見える巨乳。

関西人と傍から見ればただのコスプレのヤバい奴の会話は、明らかに周囲の注目を集めていた。

「ね、ねえ剣。その人知り合い？」

「おお。：アレ、同じヨーロッパやのに知られてへんで？アーリイ」

「無理もないのサ。私は所詮、第2回にたまたま出たら奇跡的に優勝出来ただけの女サ」

ヨーロッパ、そして第2回、優勝。その3つの単語から、セシリアとシャルロットが口を開けた。

「ま、まさか：イタリア代表の：」

『テンベスタ嵐』、アーリーシャ・ジョセスターフですの!？」

「お、ようやく思い出してくれたようなのサ。その通り。私はアーリーシャ・ジョセスターフ。ご存知の通りイタリア代表をやってるのサ。話は良くケンちゃんから聞いているのサ、セシリア・オルコツト、シャルロット・デュノア。それにそちらは：更識楯無の妹さん、簪、だつたかな？」

まるでアイドルに生で会えたファンのように発狂しだす2人。

それもそのはず、あの織斑千冬に、不戦勝という形ではあれ勝ちをもぎ取り、第2回モンド・グロツソを制覇した人間なのだから。

：もちろんそこには、2人が熱狂的なファンだと言う事もあるのだが。

「…ア。ケンちゃん、済まないのサ」

「ん、どしたよ」

「私はちよつとヤボヨウがあつてね、とある場所に行かないといけな
いのサ」

「なんや、そうなんか。なら引き止めて悪かつたな」

「いいのサ。…私としても、若い芽と多く出会えるのは良い経験にな
るのサ」

「じゃーねー、とひらひらを手を振りながらデカイピンヒールをがっ
こんがっこん石畳に打ち鳴らしながら、アーリイは去っていった。

その彼女の後を追う白猫の存在に気づくことも無く、シャルロット
とセシリアは未だきやーきやー言っていた。

「やばい！その、えと、やばい!!」

「は、はわわわ…。あ、さ、サイン！サイン欲しいですわ！」

「…二人共、代表になれば簡単に会えるよ？」

「はっ!!」

簪の一言に2人は現実に戻ってきた。

セシリアとシャルロットがここまでアリーシャを神聖視している
理由は簪には分からないが、恐らく日本の女子が織斑千冬に憧れるの
と同じような感じなのだろうと思うことにした。

「それより、ちよつとここで着替えてみない…？」

「…え。こんな人目につく所で着替え？」

「もうっ、そうじゃ、ない…：私の知ってるお菓子屋さん、そこにあ
るんだけど、そこで着物体験サービスやってるから、どうかなって」

「おっ、ええやん。…あ。ここおとんの従兄弟が経営してる所やん」

「ええ…」

また親戚かと内心ツツコミ、声にも出したい簪だが声に出なかつ
た。

この男の顔の広さに一々突っ込んでいては体力が持たないことは、
これまでの付き合いで学んでいるのだ。

「おっちゃん久しぶりー！」

「ん？…あらあらあら、剣ちゃんやないの！」

「あれ、おばさんやったか」

「まあまあ、えらいおつきなつてー、IS学園言うた？そこに行つとらんやろ？景子はんから連絡来てなー」

「げ、清洲のおばはんこつちにも連絡寄越してるんかよ」

久しぶりに会う親戚の家に入る時の挨拶では無いのでは、という疑問はもう捨てた。

後ろには現実には戻ったものの、未だとして興奮しているシャルロットとセシリア。

3人のお世話を押し付けられたような形になった簪の目は、なぜか半泣き状態になっていた。

「あ、俺の着物まだ残ってる？」

「もちろん取ったあるけど、着るん？」

「おお。あ、この子らにも飛びつきりに似合うやつ頼むわ」

「ふふっ、任せとき」

しかしやはり、地元とも取れる関西に帰ってきて終始嬉しそうな彼の表情を見て、笑みを浮かべる簪であった。



「で、お前はなんでああも敵を引きつけるんや？」

「…考えてみるよ。100%敵が寄ってくる罠だぜ？使いやすいだろ？」

「お前がちゃんと逃げてくれたらな」

簪、鈴に続き最近自虐キャラと化してきた一夏が、旅館の大広間で盛大に滑った。

和服の時守が和服の簪、シャルロットと1着だけあつた綺麗なドレスを着たセシリアとの京都観光を満喫し終えた頃。

簪のISが一夏に敵、オータムが迫っているのを感知し、専用機持ち全員で捉えたのだ。

「おいコラクソ共！いい加減離しやがれ！」

「あー、オータムやつけ？床に唾飛ばさんといってくれる？こーこー一応俺

の叔母さんの旅館やから」

「…時守一族って何なんだ…?」

食堂、花月荘、お菓子屋さん、そしてこの旅館。

その全てが時守剣の2親等以内の人間によって経営されている事実。

まだ誰にも知られていない、と言うより時守すらも知らないルーツがあるのだが。

「てかお前パスポートは? さっき身ぐるみ剥いだけど不携帯やったやん」

「…言うかよ」

「あ、もしもしポリスメン? ちょっと不法入国者見つけてんけど」

「ホテルにいるスコールに預かってもらってんだよ!!…あ」

「ふむ、良くやった時守」

「いえいえ。アホですもんこいつ」

やっちゃまったと青ざめた顔で虚空を眺めるオータム。

「じゃあ裏切ったとかいうあの2人も一緒か」

「てめえエスパーか!?! Oh…」

「敵ながら亡国機業が可哀想になってきたわ」

「いや、むしろこの状況を見てIS学園側に寝返ろうとしてるんじゃないか?」

やらかしたと俯くオータム。

ここまで来ると流石にスコールが可哀想になってくる。

「…つと、そろそろ自己紹介に入ってもいいのサ?」

「ああ」

オータムのアホさに千冬や楯無らが呆れていると、その空気を変に読んだのか、アリーシャが話題を変えた。

「私の名はアリーシャ。テンペスタ嵐のアーリイと言え、一応知ってくれて
いるのサ?」

セシリアとシャルロットは知らないはずがなく、同じ国家代表としての地位を持つ楯無や、もちろんモンド・グロツソを見たことがある
箒、鈴、ラウラ、簪、一夏もその名前を聞いた覚えがあった。

「腕と目はなんかやらかしてんやんな？」

「そういうことサ。まあ、別に気にしてないんだけどね」

あつさりとえげつないことを聞く時守に、さらにそれを「気にしてない」と返すアリーシャ。

さらに――

「ではここで現状を整理する」

――そのままの流れで現状を説明しようとする千冬。

国家代表クラスの人間にはまともな奴は居ないのかと、代表候補生は皆思い、その結果なぜか比較的マシな代表である楯無が異様に慕われることとなるのは別の話。

「向こうはマイナスイ、こっちはマイナス2だ。そして、ここにアールイが入ってプラス1、向こうにこちらの人間が渡ってプラス2。人数の移り変わりであればこちらの方が不利だが、勝てない訳では無い」

「2人が裏切ったからもう各々の役目は隠さないわ。鈴ちゃん、箒ちゃん、一夏くんと言った近距離高火力の機体はアタッカーメイン。セシリアちゃん、シャルロットちゃん、簪ちゃんはサポートメインよ。まあ、倉庫の方は最初は忍び込んでおくから展開しないんだけどね？」

単純な人数の移動では向こうに軍配が上がるが、元の人数、そして一人ひとりの質の違いを考えればどうなるかは分からない。

「…え？俺は？」

「言っただでしょ？剣くんは最後の砦。…ギリギリまではここにいて、ピンチになった所に『雷動』で駆けつけてちょうだい」

「あつ、そゆこと」

どちらか片方で既に戦闘を開始してしまうと、そのどちらかがさらに大きなピンチになった時、駆けつけづらい。

一大事になるまでは本部で待機。文字通り最速の単一仕様能力の『雷動』で、現場に駆けつけるといった具合だ。

「うーん…、でも、またみんながヤバそうになるのを待つって感じのポジションで心が痛むな…」

「安心しなさい。ヤバそうになるなんて、ありえないから」

「そうですわ！わたくし達7人だけで、必ずや倒してみせますわ！」

「鈴、セシリー……」

「ま、實際剣の単一仕様能力だと周りに影響が出すぎるしな」

「一夏の言う通り、だよ？こんな所で大規模放電なんてしたら、色々狂っちゃうからね」

「あ、ほんまや」

一夏とシャルロットに言われ、気づいた。

自分の身の回りに電気を纏う程度の『雷動』ならまだしも、雷そのものを飛ばす『雷轟』や、眩い光を放つ『雷鳴』は一般人への被害も小さくはない。

「てことは俺も戦うなら近接メインか」

「そうなるな。だが、このままなら師匠の出番は無いぞ」

「……ああ。冷静に考えても、何も起こらん限りは時守と更識姉が合流する必要は無い。スコールにアーレイ、ダリルとフォルテに篠ノ之、凰、オルコット。ゼフィルスの操縦者と潜入に織斑、ボーデヴィツヒ、デユノア、更識妹だ。何もアクシデントが起きなければ、完封できる戦力差だろう」

確かに、そうだ。

敵のトップとはイタリア代表のアリーシャがやり合い。

他はそれぞれ余剰戦力とも言えるほどの人数をぶつけている。

しかし――

「ゴーレムの存在は無いんすか？」

――時守にはどうしても拭えない光景があった。

自分に強烈なダメージを与え、数多の機体に囲まれ、最後には完勝できたもののあまりいい思い出がないゴーレム達。

それらが、地元関西で暴れるのをずっと気にかけていたのだ。

「ありえん。派手にやり過ぎて世界各国から目をつけられるのも嫌がるだろうし、何よりも奴らは遠隔か自動操作。近くに味方が密集していれば思わぬ自爆を呼ぶ可能性もある」

「あつ、そういやそうでしたね。キャノボン時も俺の動きをコピーし

てるって言っていましたし」

(ちっ…、記憶力の良いガキだぜ…)

あ、そーかそーか。と緊張の欠片も感じさせない雰囲気を漂わせながら千冬の言葉に頷く時守。

そんな彼を見て、オータムは内心焦っていた。

織斑千冬の読みは完璧だ。篠ノ之東というジョーカー以外、こちらに有利になる手札はない。

ゴーレムを連れてきても良かったのだが、いかんせん時守剣との相性が悪すぎる。

(マジイ…。アタシが捕まっちゃまったせいでかなり形勢が不利だ…。こりやまたあのクソチビにぐちやぐちや言われちまうな…)

「ほな、頑張つてな」

「…氣い抜けるからもうちよつとしつかりした見送り方してくれない？」

「氣合いだあーっ！」

「ったあっ!?何も背中叩くなつて言ったんじゃないわよ！」

「…む？氣合いはそう入れるものだろう？」

「頬じゃなかったか？箒」

「そもそも、こんな時の氣合いなど自分で入れるものだぞ！」

バツシーンツ！と凄まじい音を背中から響かせ、鈴が目尻に涙を溜めて時守に吠える。

箒の言ってることも一夏の言っているアントニ○猪木も間違いではないのだが、不意の一撃が相当効いたようだ。

「…まあしようみ言うことやで、俺の本氣やったら、俺の本氣やったらスコールとかいうおばさん余裕やったで？」

「…何よその言い方、じゃあアタシは一人で鼻歌歌いながら倒してやるわよ」

「…じゃあ私は武装を封じて徒手空拳だけで倒してやろう」

「…では私は、ISなど展開せずに倒そうではないか」

「…亡国機業なんて木刀一本で十分だ！」

「えと、えと…」

「更識。このアホどものボケに乗っからなくていい」

ゴゴゴゴゴンとまたもや人の体の部位同士がぶつかって鳴っていない音ではない音が、時守、鈴、箒、ラウラ、一夏の頭から煙とともに発された。

のたうち回る5人。この5人の共通点で言えば千冬をいじって千冬にシバかれるという流れを自然に行えるという事だ。

「おいバカども、分かっているんだろうな。特に、代表候補生達」

「っ、はいっ！」

「分かっています！」

代表候補生。

その言葉に、鈴とラウラが真っ先に反応した。

代表候補生のまま燻っている者には、平等にチャンスが与えられる。…とは限らないのだ。

このようにIS学園に所属しており、発生した事件を解決できるか否か。

それも、戦闘が起こった時に勝てるかどうかは強いかどうかでほぼ決まる、国家代表の選出に大きく響いてくる。

「何もパフォーマンスを気にしろ、だとか、魅せて勝てなどは言わん。これは真正正銘の戦いだ。ただ勝って帰ってこい。それだけだ」

千冬の凛々しいその一言に、一夏、箒、鈴、セシリア、シャルロット

ラウラ、簪は、一瞬にして奮い立たされた。

京都での開戦まで、後数分

京の夜に舞う光たち

京都の夜に、爆炎が咲いた。

「とつととくたばるのサ！ババア！」

「随分と喧しいのね、貴女も十分ババアの仲間よ？」

「小皺が目立つ初老のババアには言われたくないのサ！」

「…本っ当に耳障りなババアね」

「うるさいババア！」

「黙れババア！」

「バーカバーカ！アホー！その歳で露出したいなんてイタすぎるのサ！」

「うるっさいわねこの勘違いイタリア人！アホ厨二病！そのだっさいファッションに言われたくないわよ！」

「行き遅れのババアには私の美的センスが分からないのサ！」

京都某所の高層ホテルのフロアを丸々ぶち抜き、焼き払った2人は思えないほどの低脳で語彙力が低すぎる言い争い。

だがその言葉とは違い、スコールとアリーシャ、2人の操縦技術はこの場にいる他の少女達と比べると、雲の上にもいるかのような高度なものだった。

「フォルテ・サファイア！貴様なぜ、裏切った！」

「それが分からないようなら、アンタらは私らに勝てないツスよ！」

「分かってんのよ、アンタが裏切った理由なんて。それより言いたいのは、なんでアンタがダリルを裏切らせなかったのかってことよ」

「…へ？」

『ゴールデン・ドーン』と『テンペスタ』が凄まじい攻防を繰り返すその横で箒と鈴、そしてフォルテとダリルは対面していた。

「いや、だからさ。ダリル・ケイシーにとつても亡国機業って居づらい場所で、抜け出したいって思ってたんでしょ？じゃあダリルが亡国機業を裏切れれば良かったじゃない」

「……ほ、ホントツス！先輩っ！明らかそっちの方が賢かったツス！」

「…ま、まあ確かに各国からの援軍とかも期待出来るっちゃできる…
が、オレにはオレでこつち側で精算しなきゃいけないこともあんの
よ。その後のことは、それからだ！」

ダリルのIS『ヘル・ハウンド』が鈴の『甲龍』に襲いかかる。

ダリルの拳を避けた鈴に、『ヘル・ハウンド』の肩についた犬頭から
放たれた炎が追尾していく。

「このおっ！」

その火炎ごとダリルを吹き飛ばそうと、『甲龍』の衝撃砲を放つ。

火炎は見事空中で霧散するも、衝撃砲はダリルの目の前に辿り着く
前に、氷の壁に阻まれた。

「甘いツスよ後輩。今はその精算を終わらせるため、この勝負も片付
けるツスよお！」

「私を、忘れるな！」

攻撃の準備を整えるダリルから距離を取ろうとする鈴に、今度は
『ゴールド・ブラッド』からの氷の追尾弾が鼻先まで迫る。

しかしその氷塊は、『紅椿』の空裂による斬撃型のエネルギー刃で
木っ端微塵に粉碎される。

「わたくしもいますのよー！」

鈴と箒が体勢を立て直すべく下がる隙を、後方支援に当たっている
セシリアが行う。

『ブルー・ティアーズ』のライフル、スターライトmkⅢによる連撃
がダリルとフォルテに襲いかかるも――

「はっ」

「温すぎッス」

豪炎により威力を弱められ、その弱々しいエネルギーが分厚い盾と
なった氷壁に当たり、無残にも消えた。

3対2

数で見れば圧倒的有利な状況でありながらも、セシリア、箒、鈴は
攻めきれていなかった。

焦りに、表情が曇る。

「まあそう悲観するんじゃないやねえ。IS学園で2年も『イージス』の鉄壁

コンビとしてやってるオレ達に、即席トリオでまともにやりあえたら上出来だ」

「お世辞抜きにそうツスよ。学園に居た頃は、あの楯無ですらウチらコンビは倒せなかったツスから」

「…本気で、相手はしてないようね」

「…そりゃあ、な。返事をくれた出来のいい後輩には、オレらが本気を出さねえ理由を教えてやるよ」

ダリルとフォルテ、2人からの言葉に唯一返事をした鈴。

そんな彼女に、ダリルからのプライベートチャネルが入ってきた。

』、――。』

「はあっ！ちよつとアンター！そんなこと、できるわけ…」

「鈴さん!？」

「鈴！何を言われたのだ!？」

プライベートチャネルで送られてきた内容に、思わずオープンチャネルで声を荒らげてしまった鈴。

要らぬ挑発でもされたのかと、セシリアと箒がダリルを睨む。

「だあかあらあ、そう睨むなつての。そいつには大したことは言つてねえよ」

「…そうなのか、鈴」

「…ええ、ええ。どこまで本気かは分かんないけど、もしアイツが言つてる事がホントなら、アタシ達がここで戦う理由が無くなるぐらい…」

「それはどんな理由ですの!？」

「理由は後で！本気では来ないけど、多分それは学園仕様のシールドエネルギー制限規制を解除したのに慣れるために来るつてことよ!」

「そういうこつた!」

3人を散開させるよう上手く位置取りしながらダリルが犬頭から火球を放つ。

その炎を3人ともが綺麗に避けたため、鈴、箒、セシリアとダリル、フォルテの間に距離が開く。

「てか正直助かつたぜ。こつちに時守が来てやがったら、オレもフォルテもとつ捕まつてただろうしな」

「そツスね。私らも目に映らない物は流石に防ぎようがないツスから」

「それって目に見えるなら止められるってこと？」

「ならば、止めて見せろ！」

ダリルは良く知っている。

今の1年生専用機持ち達が時守剣に大きな負い目を感じていることを。

だからこそそれを煽る。

例え単体が格下でも、数でいえば相手の方が上。

使えるものは全て使うのが最良だと判断したのだ。

「よつとお。危ねえ危ねえ」

「よく言うツスよ。軽く避けてるくせに」

「んなことでいちいち怒んなよ、フォルテ。お前の手助けのお陰だろ？」

「やだ、照れるツス」

『紅椿』の雨月による鋭い刺突のエネルギーがダリルに迫るも、これまたタイミング良く現れた氷塊に阻まれる。

一進一退、というよりかは出方を伺う両陣営。

「箒、セシリア。気合入れて行くわよ」

「ああ。向こうに明確な殺意が無くとも、敵であるのならば倒すだけだ！」

「もちろんですわ！」

「おーおー、いい感じに仕上がってきてんじゃねえか、後輩共」

「じゃ、私らもそろそろ上げていくツスよ！」

前衛に出る鈴と箒、それに対峙するダリル。

2人を後ろから援護するセシリアと、ダリルのカバーに回りつつ妨害を試みるフォルテ。

少女達の戦いが幕を開け、また。

「くたばれババア！しわくちやババア！」

「ババアって言った方がババアなのよ！」

婚期を逃しそうな2人の戦いも始まった。



同時刻、空港倉庫の上空にて。

「このっ！」

「ふん、そんな出鱈目な動きで当たるものか！」

『白式・雪麗』を纏う一夏と、『サイレント・ゼフィルス』を繰るマドカの戦いが既に始まっていた。

倉庫に潜入した一夏、ラウラ、シャルロット、簪の4人だったが、倉庫内からの不意打ちにより女子3人が弾き飛ばされ、亡国機業の織斑マドカたつての希望により、上空で一騎打ちが行われているのだ。

「くう…！」

「お、重い…！」

「なぜ動けんのだ…！」

もちろん3人も一夏を助けに行こうとした。

だが、マドカのことを尊重し、かつ自分の思い通りに事を進めようとし、それが出来る人物がそれを防いでいた。

「にやはー。いやー、流石に『黒騎士』のお披露目を邪魔されるのは楽しくないからねー。親元を離れる子を見守る所は邪魔しないでよー」

篠ノ之束。

まさか亡国機業側にいるとは知らなかった3人は、束の新開発した装置によってISごと地面に沈められていた。

「束さん特性空間圧作用兵器のお味はどうかかなー？…おっと、安心してくれよちーちゃん。この子達の命なんて狙わないからさー」

「…何が目的だ、束」

「織斑、先生…？」

暗闇に話しかける束。

その影から出てきたのは、彼女の言葉通りシャルロット達の担任でもある、千冬だった。

「簡単だよ？ただ、あの子の戦いっぷりが見たくてさ。後はまあ、ちーちゃんがちゃんと先生出来てるか？」

「余計なお世話だ。…お前、私が来ていなかったら生徒達に手を出してただろう」

「さー、どーかなー」

なんでバレてんだろーなーと内心冷や汗を流す束。

それすらも千冬は読み解き、話は進む。

「もし生徒に手を出そうものなら、例えお前が相手でも容赦はしない」
「しないならしないで、もうちよつといい場所で戦おうよ」

「この場から…逃がすと思うか？」

「思わないけど、それをするほどちーちゃんが阿呆だとは思いたくない束さんがいるのでーす」

齒噛みする千冬。

現在千冬は束に対して手が出せない状態にある。

この『天災』がこの場に何を仕掛けているのかが分からないのだ。

何も無い所からIS3機を封じ込める空間圧作用兵器すらも簡単に作ってしまう束。

生徒3人を葬る兵器などを仕込んでいてもおかしくない。

「じゃ、またねちーちゃん。近いうちにまた会おうよ。それ、と。生徒には手を出す予定は束さんの中から無くなったから安心していいよ」

束が指を弾くと、彼女は爆煙に包まれた。

それが晴れる頃には彼女の姿は消えており、人の気配すらも消えていた。

「…………ふう」

束が消えた場所を睨むように注視していた千冬がそこから視線を外す。

彼女の意識はすでに、遠い空で戦う一夏の方へと向いていた。

◇ ◇

「くそっ！」

マドカへの接近を試す一夏だが、ライフルによる一撃とビットに周

囲を囲まれることで攻めきれない。

「…そろそろ、終わりにするか」

一夏からある程度距離を取ったマドカ。

対面する形ではあるが、一夏の周りには『サイレント・ゼフィルス』のビットが漂っている。

しかし、向こうから攻撃してくる様子はない。

「見せてやろう、私だけの新しい力を！」

「…イタタタタ…」

小声だったためマドカには聞こえていないが、もし聞こえていたのなら問答無用で撃ち落とされていたであろう一言を洩らす一夏。

だが、彼のそんなほんの少しの余裕も、サイレント・ゼフィルスの変色を見て無くなっていった。

「え？…嘘だろおい…。主人公かよお…」

おまいうというブーメランがぶっ刺さっているが、一夏からすればその感想に尽きる。

なぜか分からないがやたらと敵視してくる敵が自分の前に現れ、いつの間にか新しい力を手に入れているのだ。

どちらかと言えばライバルポジションだが、こうもホイホイ付きまわるとつてくると今の一夏に冷静に考える余裕は無かったのだ。

「ふ、ははは！これが、私の新しい力！『黒騎士』のお披露目だ！」

「ネーミング完全に『白騎士』のパクリじゃねえか！」

「も、モチイイイフー！またはオマー・ジュだ！それにこれから死ぬ貴様には関係ないことだ！」

言われたくない所を突かれたマドカが少し狼狽える。

事実、束から『黒騎士』の存在を知らされた時、『白騎士』に似たネーミングに嬉しさを感じる反面、完全に対にしろよ、ともツツコミたかったのだ。

そもそも第一世代のパクリなんて正直勝ち目あんのかよ、とも言いだかつた。

「だ、だが！名前に反して性能はすごいんだぞ！」

「へー」

「バスター・ソードだけじゃない！カッコイイランサービットもあるんだからな！」

「鼻の下伸ばした剣に対するセシリアのビットの方が怖い」

「ムキーー！」

一夏は知っている。

確かに禍々しい雰囲気を醸し出す『黒騎士』だが、本気でキレた千冬や同級生の方が万倍怖い。

時守からのアドバイスで「怖いと感じる時があれば二日酔いの目覚めのちっふー先生を思い出せ」と言われたのを思い出したのだ。

起こしに行った際に鬼の形相で睨みつけられ、手元にあったビールのプルタブが投げられたのだが、なぜかコンクリートの壁にめり込んだままどこかに消えたことがあった。

それに比べたら、屁みたいなものである。

「…おほん。少しお前につられておかしなテンションになってしまったが…お前にはここで死んでもらう！」

「くっ…！」

ひとしきり軽口を叩き、先ほどまでの雰囲気に戻ったマドカがバスター・ソードを振りかざす。

彼女の言っていた通り、凄まじい暴力が一夏を襲う。

それまではサイレント・ゼフィルスのメインウエポンを張っていたスターブレイカーが展開装甲が備えつけられた大剣に代わり。

マドカの攻撃性の高さにより不要とされたシールドビットが無くなった代わりに、それまでであったビットが一对のランサービットへと変貌を遂げた。

「このおっ！」

「甘い」

雪片式型を振るうも、その巨大なバスター・ソードは揺るがない。

対し、一夏が盾として使う雪片式型は膨大なエネルギーを纏ったバスター・ソードの前に、あまりに脆かった。

「そう易々と、負けてたまるか！」

しかし、近接戦闘にすら力量に差があり、マドカに軍配が上がる。

ただでさえ不利な状況が一夏に攻めの機会を与えず、一対のランサービットと『黒騎士』の腕部ガトリングガンがさらに翻弄する。

中距離、近距離、超近距離で、一夏は完全にマドカに劣っていた。「ぐあああああっ！」

雪片式型を振るっても防がれ、ビットにより追撃、その隙にバスター・ソードで切り伏せられる。

「ふははははー！」

一夏の機影が、闇に落ちていく。

マドカが、そんな無防備な一夏を放置しておくはずが無く、ランサービットによる連撃が彼に降り注いだ。

一夏が落ちた先は木々に囲まれていたが、その木々ごと焼き払われ、火炎の中に彼は倒れた。

「ぐはっ！」

吹き飛ばされる際に雪片ごとぶった切られたので、もう一夏に防ぐ術はない。

ただマドカからの蹴りを受け続けることしか出来なかった。

鋭い蹴りが装甲を歪ませ、シールドを削り、彼の生身にダメージを与え続けた。

「うっ……」

その猛攻は、一夏が気絶するまで続けられた。

「こんなものか。では、死ね」

その首を刎ねるため、バスター・ソードが掲げられる。

もちろん一夏は動かない。気を失っているのもあるが、ただでさえ肉体へのダメージが大きいのだ。

「…なに？」

一夏の首に狙いを定め、振り降ろされたバスター・ソード。

エネルギーを纏い、それは一切の抵抗無く彼の首をはねとばす予定だった。

しかし、それを掴んだのは一夏の動かないはずの左腕。

ひしやげた『白式』の腕部装甲がなぜか動き、破損した左手がエネルギーに包まれたバスター・ソードをしっかりと掴んだのだ。

「っ、さらに立ち上がる、か…」
目を閉じたままの一夏が立ち上がる。

というより、見えない何かしらの力によって身体が起こされるように動き、直立した。

マドカの前に立つのは、どうやって動いているかも分からない程に傷ついた『白式』

その答えは、すぐに出る。

「くっ…なんだ、何が、起きている…!」

光る『白式』

傷を負った装甲を押し上げるようにして、新たな装甲が生まれる。

サイド・ソフト
三次移行。

圧倒的ピンチに陥った時に窮地を脱することがあるとは事前の調べであらかじめ分かっていたことではあるが、ここまで上手いタイミングであるものかと嘆息する。

だが、マドカの予想は意外な形で外れることとなる。

「なっ…し、『白騎士』だど!」

『白式』の下から生まれた、否現れたのは、『白騎士』。

偶然にもマドカが現在操っている『黒騎士』と良く似た、そして彼女と関わりの深い、なおかつ現れること自体がありえない機体がそこにいた。

「有り得ん…! 『白騎士』は、確実に初期化されたはず…。まさか、織斑千冬の残留思念が生きているというのか…っ、ぐうっ!」

分析する暇も与えず、まるで瞬時加速のような早さの右の蹴りが、マドカの鳩尾に突き刺さる。

シールドにより生身にダメージを負うことは無かったが、シールドエネルギーが減った。

これは幻ではなく、実態だという現実をマドカに突きつけていた。「力の資格の、無いものよ…」

「ほぎけ。…私と『黒騎士』で、貴様という過去の存在を、今ここで葬つてやる」

『白』と『黒』。

三度二機は、刃を交える。



「山田先生！起きてください！」

「う、ん…。あれ、私…：スコール・ミューゼルと…」

「生身でISに立ち向かおうなんて、織斑先生じゃないんですから…」
外に出ていた楯無と時守が旅館に帰ってくると、真耶が倒れていた。

僅かに残る戦闘の跡とオータムが居なくなっていること、そして真耶のセリフから、アリーシャを撒いたスコールが襲ってきたのだろう。

「すみません。アリーシャさんが撒かれるとは思ってなかったの…」

「いえ、大丈夫です。それより更識さん」

「はい。情報提供者に接触、例のモノを受領してきました」

立ち上がった真耶に、楯無からブローチが手渡される。

「山田先生の学生時代の二つ名、銃^{キリング・シールド}央矛塵、しっかりと拝見させていただきますね」

渡されたブローチは真耶の専用機。

IS学園の教員になるということで政府に預けられていたそれを、楯無が受け取りに行っていたのだ。

「あ、あはは…。その名前は恥ずかしいのでちよつと…」

ズレたメガネを直すと、いつもはそうは見せない真剣な表情へと変わった。

「とはいえ、急ぎましよう」

「そうですね。剣くん、そっちは大丈夫？」

「ああ。すみません山田先生、俺が出てもてたせいで」

「気にしないでください、何もないですから。それよりも、非常時での民間人の避難誘導の方が大事ですから」

「そう言ってもらえると助かりますわ」

少しのエネルギー消費でも抑えるために、楯無が真耶を抱き抱え、『霧纏の淑女』を展開する。

「じゃあ先に行ってるわね、剣くん。いきますっ！」

楯無と真耶が一旦、時守よりも先に飛び立った。

残された時守はただ一人、ポケットに手を入れ、携帯電話を取り出した。

「さて、と。…電話すつか」

これから起こる事態を察知し、時守は自身の携帯でとある番号を押し、電話をかけた。

白

楯無が旅館から発つほんの数分前。

「ふぎ、けるな…」

白騎士の戦闘領域にてマドカは切り捨てられた。

織斑千冬と言うには弱すぎるが、どこかに強さがあった。

その白騎士に一撃でのされたのだ。

「わたし、は…わたしは、こんなところで…終わらない…!」

裂けた胸部装甲からペンダントがこぼれ落ちる。

なぜかそこには、たった一枚の千冬の写真があるのだ。

「それだけは離してたまるかつ!」

落ちる中、やつとの思いでそれを手中に収めることに成功したマドカ。

しかしそれは、白騎士の攻撃が再来する合図にもなった。

「潮時ね、エム」

その声にハツとした。

亡国機業で呼ばれているコードネーム。その名を、こんな場面でゆつくりと発する人物など、マドカは一人しか知らない。

「ス、コール…」

白騎士からの攻撃を圧倒的熱量を誇る弾幕で遮り、スコールはマドカの腕を左手で握りしめた。

右腕にはオータムが抱かれており、追手はいない。

「さようなら織斑一夏くん。また会えることを願っているわ」

「待て…私は、まだ!」

「言うことを聞きなさい。今の貴女、正気じゃないわ」

マドカの言葉に聞く耳を持たず、スコールはその場から飛び立った。

「…」

後に残るのは白騎士ただ一つ。

それは密かに戦いを望んでいた。

「…来る」

その眩きは虚空に消える。

しかし、その数秒後には『紅椿』、『ブルー・ティアーズ』、『甲龍』を操る箒、セシリア、鈴が現れた。

「な、なんなのよあれは…い、一夏は…？一夏はどこ行つたのよ！」

悲痛なほどの鈴の叫び。

それに応えるように、白騎士は静かに敵意を向けた。

「力の資格の、あるものよ…」

その切っ先を確かに箒達に向ける。

「私に挑め…」

箒達の、史上最悪の戦いが始まった。

「くうっ!？」

「箒さん！」

「ボーっとしてんじやないわよセシリア！ともかく、今はアレと戦うのよー！」

一瞬の加速のうちに箒の目の前に迫つた白騎士。

『紅椿』の展開装甲のスピードを持ってしても、防ぐのが精一杯というその一突きは、3人のスイッチを切り替えるには十分過ぎた。

「なぜ私達に…！」

「言つてる場合ではありませんわ、箒さん！鈴さんの言う通り、今はアレをなんとかしないことには、一夏さんは戻ってきませんわよ！」

気づいてはいる。

ダリル、フォルテとの戦闘空域にいた3人にまで届いたスコールのオープン・チャネル。

『織斑一夏の戦闘空域が面白いことになっている』というそれを聞き、戦闘を止めてここまで来たのだ。

それに、3人はしつかりとこの場を去るスコールの姿を見たのだ。

ということとは、ここが一夏の戦闘空域だったということ。

「目え覚ましなさいよ、アホ一夏あ！」

となれば、そこにいるアレー白騎士―が、一夏を乗っ取っている可能性が高い。

そうと決まれば話は早い。

元よりこういつた場面ではサバサバしている3人。

『銀の福音』の時の時守と同様、中から一夏を引きずり出せばいいのだ。

「喰らいなさい！」

「行けっ！」

衝撃砲と空裂。

どちらも直撃すればただでは済まない代物を、白騎士は丁度重なるタイミングで、一太刀で切り捨てた。

「甘いですわよ……！」

その死角。

もはや手慣れてきたとも言える程の精度で敵の死角を狙い撃ちできるようになったセシリアの、正確無比なビットによる一撃が白騎士の左斜め後ろから突き進む。

後数cmもすれば、後頭部へと刺さる。

「…」

しかしその一撃すらも、白騎士は首を傾げるだけで躲してしまふ。

「なっ!?!」

「止まんじやないわよ！」

そのまま、セシリアの方には目もくれずに腕部荷電粒子砲を撃つ『白騎士』。

その荷電粒子砲の軌道を、鈴の衝撃砲がほんの少しだけずらし、セシリアから反れていった。

「助かりましたわ、鈴さん」

「そんなんは後っ！来るわよ！」

少しの作戦を練るための時間すらも与えてくれない。

残留思念とはいえ流石は『織斑千冬』といったところか、専用機持ち3人を相手取っていても、優勢に変わりはなかった。

「ぐ、う、うっ……、のお……！」

「ナイスよ箒！」

「今のうちに！」

鈴、セシリアの方へと突っ込んできた『白騎士』。

その間に入り、壁となるように空裂と雨月を十字に構えた箒を一刀両断すべく、『白騎士』は雪片壱型を振りかざす。

箒と『白騎士』の鏑迫り合い―箒が一方的に押されている状況だが―の隙に、鈴とセシリアが距離を取り、『白騎士』への攻撃に転じる。「はあああつー！」

鈴の双天牙月が『白騎士』に迫る。

その瞬間、『白騎士』は箒との鏑迫り合いの状態から瞬時に箒を弾き飛ばし、くるりと軽く反転しながら鈴の脇腹に回し蹴りを食らわせた。

「ぐっ……」

「ガッ、あ……」

「この……っ！」

友人2人が吹き飛ばされる光景を見つつも助けに行かず、セシリアは『白騎士』の隙をついた完璧な一撃を食らわせるために、引き金を引いた。

当たる。確実に当たる。

その確信通り、スターライトmkⅢから放たれた光は、今度こそ『白騎士』の頭部を捉える。

「……」

「な……っ！何、ですつ……て……」
はずだった。

突如として目の前に現れた『白騎士』の蹴りを受けるセシリア。

だが、セシリアが驚くのも無理はない。

『白騎士』がやってのけた芸当。

それは、完全停止の状態から最大速度まで一瞬で加速するという、まさに人間離れした操縦技術。

それでもセシリアは、この技に見覚えがあった。

「しゅ……縮地加速……」

1度は授業中に担任が使っていたもの。

もう1度は模擬戦で恋人が使っていたもの。

それ以外では映像でも記録でも、見たことも聞いたことも無い。「瞬時加速」をもじったそれは、世界トップレベルの2人しか使えないものだった。

「とんでもないですわね……織斑先生と、剣さんしか使えない技を……！」

といっても、両者のそれは少し違う。

千冬は地の技量で。

時守は『完全同調』の補正を受け、成功させた。

地力が隔絶されている両者。

さらに言えば、時守には縮地加速よりも速い『雷動』があるため、多用する機会は少ないのだ。

「すまない、セシリア……！」

「厄介ねこいつ……。もう、無意識の一夏だから、なんて手加減してる余裕無いわよ……」

蹴りを食らった腹部を抑えるセシリアの元へと近づく、同じくダメージを受けた箒と鈴。

「こちらこそすまん！セシリア、箒、鈴！合流した！」

「3人とも大丈夫!?!」

「……遅れて、ごめん……」

「ラウラさん！」

「シャルロット、簪も……」

「これで全員ってわけね」

その3人に、ようやくと言ってもいい援軍が来た。

束に受けた拘束から抜け出したラウラ、シャルロット、簪の3人。『白騎士』と対峙していた3人よりかはまだダメージが少なく、大きな戦力になる。

「状況は？」

「最悪ですわ」

「箒、あの機体は？」

「分かん。だが、アレの中に一夏がいることは確かだ」

「……強さは？」

「みんなご存知、織斑先生レベル。それも、手加減無しの全力よ」
6機の専用機。

『紅椿』、『甲龍』、『ブルー・ティアーズ』、『ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ』、『シユヴァルツェア・レーゲン』、『打鉄式式』が構える。
対する『白騎士』は、6機に半身になりながら構え、右手に軽く雪片壺型を握る。

唯それだけ。

唯それだけでも、『白騎士』の異様さは良く分かり、事実その強さは身をもって知っている。

「っ！来るっ！」

ラウラの予測通り、『白騎士』が6機に突撃してくる。

瞬時に散開。

『甲龍』、『打鉄式式』、『ブルー・ティアーズ』の3機と『紅椿』、『シユヴァルツェア・レーゲン』、『ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ』の3機に分かれる。

『白騎士』が選んだのは後者。

その中でも比較的腕の劣っている、『紅椿』に狙いをつけた。

「ません」

だが、そのための布陣。

ダメージを負っているとは言え、『紅椿』は専用機持ちの中での速度で言えば2番手。

回避にのみ集中し、展開装甲を操作すれば躲すことはそう難しくはない。

そこを『シユヴァルツェア・レーゲン』のA I Cで拘束。

「はああああっ！」

『ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ』が瞬時に対応し、武器を選択。

一斉掃射で、今度こそ『白騎士』の懐に直撃させる。

「まだだ！」

継いで、誘導のために退避していた『紅椿』からの攻撃。

『ゴーレムⅢ』との戦闘でその脅威を知らしめた、穿千。

危険を察知した『白騎士』の手元がブレた。

「何っ!?!」

ラウラが驚くのも無理はない。

自身が集中して対象を捉えている限り、ほぼ無敵の拘束力を得る
「A I C」

それの中に閉じ込められた『白騎士』だが、指一本動かせない、と
いうことはない。

雪片壺型で零落白夜を発動させ、「A I C」をエネルギーごとぶった
斬ったのだ。

ラウラがいくら集中していても、エネルギーそのものが切られてし
まえば意味は無い。

「ラウラ!」

「くう…!」

無意識の敵に対し、完璧だった作戦。

それすらも『白騎士』には通用せず、ラウラは雪片壺型に押し込ま
れ、シャルロットの助けが入る前に弾き飛ばされる。

「まずっ…!」

「当たらないっ!?!」

「箒!シャルロット!」

散開していたもう1組から声上がるそのほんの一瞬のうちに、
『紅椿』と『ラファール・リヴァイブ・カスタムII』も吹き飛ばされる。

ラウラ、箒、シャルロットに一旦ダメージを与えた『白騎士』は、ま
だ動いている3人に狙いを定めた。

「来るわよ!」

「簪さん、お願いしますわ!」

「うん…!」

言われる前から既に山嵐の発射準備をしていた簪が、それを実行す
る。

こちらに向かってくる『白騎士』だが、流石に計48発のマルチロッ
クオンミサイルを全て躲すことなど出来るはずがない。

そう、思ったかったのだ。

「えっ…!」

気の抜けた声が出た簪の眼前に迫る『白騎士』

縮地加速により、まるで瞬間移動のようにして彼女の目の前に現れた『白騎士』が、その加速力全てを0にして強引に止まったのだ。

だが、それでも物理法則には従うしかなく。

余ったエネルギーを乗せた蹴りが、簪の腹部を捉えた。

「がっ……！」

「簪……この……！」

「これ以上はさせませんわー！」

良く見なくても簪のダメージが大きいのは分かる。

これ以上の追撃を許すまいと、『甲龍』と『ブルー・ティアーズ』が2機の間躍り出る。

しかし、既にその2つも小さくはないダメージを受けており、『白騎士』に吹き飛ばされるのは必然だった。

「強、すぎるだろう……！」

「うん……！」

ラウラか箒か。

そしてシャルロットか簪か。

いずれも誰かが呟いた一言は、その戦闘空域に小さく響く。

ただ強く。

ただ速く、早く。

『天下無敵』を体現しているかのような偶像を、6機は相手にしていた。

そして誰もが俯きかけた、その時。

「皆っ！」

「お待たせしました！」

ロシア国家代表、更識楯無が操る『霧纏の淑女』が、IS学園1年1組副担任、山田真耶を抱えてその場に現れた。

驚きと共に、少しの期待が湧く。

「ご覧あれ！」

なぜここに専用機を持たない先生が？という疑問は即座に消えた。

楯無の腕から浮き上がった真耶を光が包み、晴れた時には彼女の身

体を見たこともないような機体が覆っていた。

「専、用機…?」

「はいっ!名付けて、ラファール・リヴァイブ・スペシャル!
ショウ・マスト・ゴー・オン幕は上げられた!」

同じラファールでもシャルロットの物とは全くもって違う。

翼部のスラスタ以外の身体の装甲はほぼ同じ。

違うのは、その胴体を囲うような巨大な4枚のシールド。

それが最大の特徴であり、真耶の最大の武器でもある。

「行きますっ!『絶対制空領域』!!」
シャッタード・スカイ

その巨大なシールドのそれぞれが有線接続操作の盾となり、射出される。

「生徒を傷つけるようで気は進みませんが…」

真耶の正確無比な連撃が、『白騎士』の行動範囲を狭めていく。

即席とはいえ、6機でも手に余った『白騎士』を1人で相手取る真耶の技術には、やはり生徒達にも目を見張るものがある。

「っ、今!」

『白騎士』が動きを止めた、その一瞬。

その瞬間を狙い、中に『白騎士』を閉じ込めるように、先ほど射出した巨大なシールドで正四面体を作る。

その頂点のほんの小さな隙間にサブマシンガンを押し込み、真耶は思い切りトリガーを引いた。

「…楯無」

「剣くん…。大丈夫よ、これで多分…」

楯無と真耶の2人に遅れること数秒、時守剣もこの場に到着した。彼も見た、逃げ場の無い空間での2丁のマシンガンの連射。

『白騎士』の戦いぶりをオープン・チャンネルを通じて聞いていた楯無だが、これで仕留めきたと思った。

もちろん、それは楯無だけではない。

トリガーを引いた真耶も、時間を稼いでいた6機もだ。

ただ1人以外、この場での戦闘は終わったと思っていた。

「…まだや」

「え？」

跳弾の音が止み、4枚のシールドが剥がれていく。

そこにはその言葉通り、大した傷すらも負っていない『白騎士』が鎮座していた。

「あのレベルの奴が、マシンガンの連射程度では堕ちんやろ」

「そん、な…」

現役国家代表すらも、口を開けたまま動けない。

この場で『白騎士』が何をしたか理解出来ているのは、時守ただ一人。

自身と同速程度、さらにあの操縦技術ならば2丁のマシンガンから放たれた銃弾を切り落とすことは出来る確信があったのだ。

「やから」

ぐい、と引かれた。

6機に『霧纏の淑女』と『ラファール・リヴァイブ・スペシャル』を加えた計8機が、大きな力で1点に引き寄せられた。

8機が見る景色は全く同じ。

黄金のIS『金色』の背中と、その奥に見える『白騎士』

三次移行の時に増えたランページテールにより、それぞれが時守の背後に引っ張られたのだ。

「技術であかんかったらそこに速さを。さらに足りひんねんやったらそこに力を」

普通のISと、卓越した技術程度では『白騎士』にまともなダメージは与えられない。

異常なISと、考えられないような技術を持って、戦えるのだ。

「俺が行く。『完全同調・超過』」

8機を引いたランページテールが消え、代わりに金色の粒子が時守を包む。

「120%」

時守の理性が侵食され、ISが強制的に暴走状態へと片足を突っ込む。

「…来なさい」

「ハッ！最初っからそのつもりやア！」
金と白。

形は違えど、最速の戦いが再び始まった。

◇

「…また、アイツに任せっきりか」

「悲観しちゃダメよ、鈴ちゃん。確かにスパンは短いけど、これは最善策よ」

「違いないな。師匠にも余裕が無い。あれば、いきなり120%まで引き上げんからな」

『白騎士』も、肩慣らし程度だったということですね。時守君と戦い始めてから、速度が段違いに…」

時守か『白騎士』に突撃し、さらに空高くに舞い上がってから数秒後に鈴から零れた言葉は前向きなものでは無かった。

だが楯無と真耶の考えでは、これは最善。

誰も捉えられないのなら、最速を誇る時守が動きを鈍くする程度まで戦うしかない。

といつても、これは操縦者の技術云々を抜きにしても、ISの機体性能差によるものの方が大きいが。

「…となれば、話は簡単」

「そうですね。剣さんが止めた所を、中距離武装で狙い撃ち」

「それしか無さそうだな」

その場にいる8機の専用機の中での最速のIS『紅椿』をも超える速度を出す『白騎士』だが、雷動を使っている時守は捕まえられない。

見ている限り先程から翻弄されてばかりいる。

そこを、狙う。

「狙うメンバーとしては、誰が行く？」

「確実な遠距離武器がある機体だな。セシリアは当然として、レールカノンのある私、それと荷電粒子砲を積んでいる簪か？」

「それがいいわね。それでも落とせなければ、簪ちゃんやシャルロツ

トちゃんが機動力でダメージを稼いで、鈴ちゃんか私辺りがとどめを刺すって感じ、かな？」

シャルロットの問いに対するラウラの答えは完璧だった。

止まった瞬間を3機の遠距離武器で狙い撃ち。

そこから楯無立案の、もしまだ動いていた時には機動力と近距離でたたき落とす、という作戦。

だがそれは

「後は…時守君が止められるかどうか、ですね」

今現在『白騎士』と戦っている時守が止められるかにかかっている。

「そう、ですね…。剣君も、あまり余裕は無さそうですね」

「街への被害が大きい武装が多いから…。『雷轟』は高く撃ちすぎると飛行機に、低すぎると民家に当たる」

「言っちゃえば、高火力が揃ってる投擲のオールラウンドも完全に使えないしね」

速度と『完全同調・超過』による技術向上。

全ての武装が十全に扱えれば、簡単に『白騎士』を止めることが出来る。

だが、今は全ての武装を使う、などということとは出来ない。

雷を射出する『雷轟』はあまり乱用出来ないし、『グングニル』や『刺し穿つ死棘の槍』にモードを変えたオールラウンドを投擲することも出来ない。

一撃必殺の『零落白夜』を使える『白騎士』相手に、ほぼ素手の近距離で戦わなければならないのだ。

「…こうしていると、『銀の福音』の時を思い出しますね」

「山田先生…」

真耶は良く覚えている。

あの時、千冬への報告のため、時守の姿を映した衛星放送をずっと見ていたからだ。

相手が高火力武装を積んでいるという状況にも関わらず、『完全同調』という単一仕様能力を発現させ、近距離で仕留めたあの一件を。

「ですから信じましょう、もう1度。時守君なら、大丈夫です」

「もちろんです！」

「当然ですわ！」

シャルロットとセシリアが意気込んだ、その時だった。

「任せる」

8機が浮かぶ、その真ん中に突如時守が現れた。

驚きはするものの、全員即座に理解した。

雷動を使い、ここに現れたのだらうと。

だが、その言葉は直ぐには理解出来なかった。

「っ、了解したぞ師匠！全員、『白騎士』の方を向け！」

一番初めに理解出来たのは、実戦経験豊富なラウラ。

情報はまずハイパーセンサーから得るといふ基礎を、彼女は怠っていないかった。

だからこそ気づいた、そこに現れた時守の異変。

彼女の声に従い、皆が迫り来る『白騎士』の方を向く。

「…っ!？」

その時守の姿がゆらゆらと消えていくのと共に、離れた所にいる『白騎士』が不自然に動きを止めた。

そしてその『白騎士』の背後には、はつきりと実体を持った時守がいた。

『雷動』と、『完全同調・超過』を上手いこと応用した残像。パツと見は気づかんけど、ハイパーセンサーで見たら中身ないから一瞬で分かる。お前みたいないな機械相手とは、もうやり慣れたからな」

彼が、8機と『白騎士』を結ぶ直線上から離れる。

「…例え技術があの人並でも、そんな人には負けられへんわ」

決して油断を見せず、浮かれた表情もせず、独りごちる。

同時に、『白騎士』を極大のレーザーが貫いた。

セシリアのスターライトmkⅢが胴体を、ラウラの両肩のレールカノンが翼部を、簪の荷電粒子砲『春雷』が『白騎士』全体を攻撃。

見事、動きを止めることに成功した。

「あっ！」

『白騎士』：否、もう白式へと戻り、ボロボロのそれを纏った一夏が落ちていく。

するりと時守の背中から尻尾が伸び、一夏を受け止める。

「…しんど」

「アンタって戦い終わったあととそれしか言えないの？」

「それしか言えへんぐらいに疲れろや、お前も」

「何ですってえ!?!」

一夏を一本のランページテールでぐるぐる巻きにして固定し、彼女達の元へと戻る時守。

相も変わらず鈴と軽口を叩く様子に、彼女達に笑顔が戻った。

ぐ 褒美タイム

「は？すまん、もっかい言つて？」

「…な、何も覚えてないです…」

「…ちっふー先生。電撃で人の記憶って復活出来ましたっけ？」
「やめろ」

旅館の大広間にて、一夏は時守と千冬の前で正座していた。

「オイオイオイオイ一夏くうん。せつかく事前にお医者さん呼んだのによお、覚えてないってさあ…そりゃ通らんやろ。なあ？」

「どこの極道だお前は。まあ、あらかじめアレをボコボコにすることを踏まえて医者を呼んでいたことは褒めてやろう」

時守が戦闘空域に飛び立つ前に電話していた施設。

それは病院だった。

「移動させたくない患者が出来る」という電話をかけ、事前に旅館に来てもらっていたのだ。

「…え、結局俺って何が原因でこんなことになったんだ？」

「亡国のクソチビにボコられて、なんか分からんけど変身して、そこをまた俺がボコった」

「あー、そつか。アイツにやられたのか。…なんか、すまん」

一夏の中で罪悪感が生まれる。

普段なら、理由も無くボコボコにされれば流石の彼も怒る。

だが、今回は明らか自分の実力不足のせいでマドカに敗れ、そこから迷惑を掛けてしまったのだ。

彼の中では、形はどうであれ自分に非がある。

「やからお前に、罰を与える！」

「っ、あ、ああ！」

「これから年末まで一日一本俺にジュース奢りな」

「……………え」

一瞬考え、「あれ、そんなにキツくないか？」と思つたが、よくよく考えれば時守は「俺に」とだけ言つた。

ということとは、まだ少女達からの罰は決まっていけないのだ。

「あ、モッピースーにはお前の筋力が無くなるまでのエンドレスマッサージな」

「嘘だろおい」

ある意味地獄。

ただでさえ肉体の疲労が凄まじく、激しい筋肉痛にも襲われているのだ。

そこに、身体的負荷が大きいマッサージなどをすれば、腕がヤバいことになってしまう。

「私と」

「もちろんアタシと」

「無論私にだ」

「はあー…」

クソデカため息を吐く一夏だが、彼の中では決心は付いていた。

というより千冬と時守があちら側にいる時点で断ることなど出来ないのだと、割り切っていた。

「…つてあれ、シャルロット達はいいのか…。あ、いや悪い。そうか、そうだよな…。そっちで楽しくやってくれ…」

「…先輩、織斑君明らかダメな方向の察しが良くなってきてますよね…」

「…：言うな。言わんでくれ、真耶…」

マッサージをして欲しいと言わなかったセシリア、シャルロット、簪、楯無の方を見て、一夏は察した。

なぜか全員が時守のすぐ側に近づいており、彼の浴衣をがっしりと掴んでいるのだ。

彼の顔を見た一夏は、その眠たげな彼に心の中で合掌した。

「あー、まあなんだ。若いのは若いの同士よろしくやっつけ」

「それ教師が言っていることっすか？」

「今は勤務時間外だからな、ただの元世界最強さ。ほら真耶、風呂で呑むでしょう」

「はいっ！んーっ、楽しみですねえー」

「あ、風呂はそこ出て左っす」
「おう」

いつもより気持ちテンション高めだった千冬が真耶を引き連れ、大広間を出ていく。

残ったのは、ダリルとフォルテを除く専用機持ち達のみ。

「さ、行きましょ、剣君」

「…うん」

刀奈と簪に連れられ、時守が襖の前へと連れていかれる。

その襖がシャルロットとセシリアによって開けられると、そこには1枚の布団が敷かれていた。

「ほえ、布団？」

「…剣君、疲れてるでしょ？」

「いや、そんなこと…」

「嘘ですわね。普段よりも少し歩くのが遅いですわ」

「普段と違って気が抜けてるし、猫背にもなってるよ？」

「…目がトロンとしてるのと、口調も普段とは違う…」

「喋るのも遅くなってるし、寝ぼけてる時の特徴が出てるわよ？」

「…バレてた？」

その時守の一言に、4人が一斉に頷く。

『完全同調・超過』は、時守への肉体的負荷すらもエネルギーに変換することで、『完全同調』の完全上位互換へと進化した。

しかし同時に、『雷動』や『雷轟』との併用も増え、結果時守の脳にかかる負荷は増えたのだ。

スペックの上がった『金色』が大半の演算を担ってくれてはいるが、時守の脳が行う演算も、そう少なくはない。

「織斑先生とか一夏くんには、こういう所見られたくないでしょ？」

「…ああ。わざわざありがとう、刀奈…」

「素直…」

「…俺って普段そんなに素直ちゃう？」

素直は素直だが会話の中でツッコミとボケが多いので脱線しまくっているのだ、とは言えなかった。

今にも寝そうな彼を前に、そんなこと言えなかったのだ。

「…襖、閉めといたよ?」

「ん…」

簪のその言葉を聞くやいなや、布団に倒れ込んだ時守。

うつ伏せになった彼の両足に、シャルロットが手を添えた。

「マッサージ、してあげるね?」

「あゝあゝ…。このまま天国行きそう…」

「では私は腰の方を…」

「おゝおゝあゝ…。はあん…」

「…そして私たち」

「更識姉妹が…」

シャルロットとセシリアからの腰から下へのマッサージを堪能していると、楯無と簪が時守と同じように布団に寝転んだ。

「二人揃っての添い寝よっ」

「…して欲しいことがあったら、何でも言って…」

「……すう…」

「…つてあら?」

「…寝ちゃった?」

頬を啄いても、時守の手を掴んで胸に押し当てても、耳に息を吹きかけても何の反応もない。

疲れすぎて死んだように寝ている時守は、ある意味最高のおもちやになっっていた。

「ふふ、こうしているとほんとに可愛いわね。剣くん」

「……ほっぺ、柔らかい…」

「んう…」

「…寝かせてあげよっか」

「そうですわね」

シャルロットが気を利かせ、全員が彼から離れて毛布をかける。

「うつ伏せのまま、大丈夫かな…」

「肋骨にヒビが入ってるって理由でもないけど、確かに心配ね…」

「このままぐっすりという可能性もありますし…」

「よ、4人で仰向けにする…?」

この割とガタイの良くなってきた引き締まった筋肉に包まれた彼氏を?

いくら女子4人でも、起こさずに仰向けにするのはキツイだろう、と思っていた、その時。

「…ん…」

「あつ…、寝返り…」

「そ、そう言えば剣さん。以前に布団では寝相が悪いと言っていたよ
うな…」

「あ、あはは…」

「…とにかく今は、ゆっくり寝かせてあげましょう?」

ごろん、と彼が寝返りをうった。

見知った旅館での浴衣姿ということと、彼の性格、そして今の寝返りもあって胸元が大きくはだけてしまいが、所詮は男のもの。

さらにもう見慣れている彼の身体なので、4人はそこまで大きな反応は見せなかった。

…チラ見せというのに惹かれたのは事実だが。

「おやすみなさい…」

屈んだ刀奈の唇が、時守の頬にキスをした。

「——つ、お姉ちゃん…!」

「ぬけがけ…、ですわよ…!」

「そ、そんな小声で怒らなくなたっていいじゃない。ほら、みんなもすればそれで平等ってことで…」

「それもそうですけど…」

文句を言いながらも、セシリア、簪、シャルロットの3人も彼におやすみのキスをする。

平等とは言え、誰もが一番初めを狙っているのだ。

「…お風呂、入る?」

「ええ、是非そうしましょう」

「…この温泉、結構良いみたいよ?」

「そうなんですか?」

4人が時守を起こさないよう、ひっそりと部屋を後にした。
残ったのは、ただ1人。

「…みんなめっちゃええ匂いしてたやん…。唇も柔らかかったし。普段ほっぺにしてもらうこととか無いからなー」

寝たフリをしていた、時守剣だけである。

眠いのは確かだ。

だが、彼女達が自分のために何かをしてくれそうだったので寝た振りをしたところ、予想以上に役得なことをしてくれた。

疲労に感謝感謝である。

とは言え

「…あかん、まじでクソ眠い…」

疲労のピーク真っ盛りなのも事実。

この旅館の風呂がどういうシステムかは良く理解しているため、一刻も早く突撃したい気分を抑え、今は少しばかりの休息を取ることにした。

「寝よ」

その言葉から10秒も経たない内に、その部屋からは寝息が小さく聞こえていた。



「…っ、ガチ寝!?…なんや、10分しか経ってへんやん」

仮眠を取った時守は勢いよく身体を起こした。

疲労は少しだけだが取れているし、頭も割と冴えている。

「よし、行くか」

いざ楽園。混浴へ。

彼女達が温泉へと向かったのは約15分前。

事前の準備に時間もかかるだろうし、入ってるまだそれほど時間は経っていないはず。

「着替えもタオルも置いといたし、後は行くだけや」

ラッキースケベならぬ必然のスケベをしに、時守は温泉へと足を向

ける。

そもそも、入っているのは彼女だけ。

さらに彼女達は夜になると風呂やベッドで誘ってくることもある。ならいいだろうという考えの元で動いていた。

「…ま、まあ風呂入るだけやし?」

風呂では風呂に入ることが目的。

それ以外のことで、何かすることがあるのだろうかど頭を働かせる。

あつたわ。とすぐに自答した。セシリアや刀奈が誘惑してくるのがいけないのだ。

「男って楽やわー。脱ぐのほんま楽やし」

脱衣場に着くなり、上を二秒で脱ぎ、下を下着ごと一秒で脱ぎ、三秒程で全裸になった時守は、一応前を隠して温泉に突撃した。

「やつほー!…あー!…」

突撃した先に待っていたのは、桃源郷。

桃源郷には違いないが、同級生や副担任、コーチまでもが入浴している桃源郷だった。

「入るで?」

「何平然と覗いてんのよアンタはー!!?」

顔を真っ赤に染めた鈴が大声で怒鳴る。

それもそのはず。彼氏でもない男に風呂に入っている姿を見られているのだから。

「覗いてへんわ!ガン見や!」

「見んな!」

「…ってかカナ、3人だけちゃうかってんな」

「スルーしてんじやないわよ!なんか言うことないの!」

「…てへぺろ?」

「このっ…」

さらに真っ赤になりながら怒鳴る鈴を無視し、時守は身体を洗い始める。

「まーまー、そう怒んなって。お前も俺の裸見たってことでチャラや。

ですよね？ちっふー先生」

「ああん？あー、そうだな。男女平等はいい事だ。はっはっは」
「うわ酔うてはるやん」

即効で髪の毛を洗った時守が泡を流す。

そしてそのまま洗顔を始める。

「うあ、うおっういー？うあううあ？ういづあううああ」

「と、時守くん？何て言ってるんですか？」

泡まみれのまま話したため、声が泡に遮られてまともに聞こえない。

時守の乱入に未だ混乱している数名の代わりに、真耶が聞いた。

「…ぶはっ。モツピー？ラウラ？嫌やったらゴメンやで？って言おうとしたんすよ」

「何で私はいないのよ！」

「…何となく？」

簪、刀奈、セシリア、シャルロットに謝らないのはまだ分かる。

先ほどから満更でもない、というよりも待つてましたと言わんばかりの表情を浮かべているからだ。

真耶、千冬の教員達もまだ、百歩譲って分かる。

流石に、生徒の裸に欲情するような変態だとは思いたくないし、まずこの2人とも酔っているからだ。

だが、ラウラと箒。テメーはダメだ。というのが鈴の主張だった。

「てかそもそも3人ともほんまに嫌ならIS展開してるやろ？」

「ぬぐっ…」

「それ、は…」

「言ってはいけないやつだぞ、師匠…」

だが、時守のその言葉により彼を止めることが出来なくなってしまう。

一夏に着替えを覗かれればISを展開して怒り出すにも関わらず、この場では展開しない理由。

時守を恋愛対象として見ていないということもあるだろうが、この場に、酔っているとはいえ千冬がいることが大きかった。

「その前に3人に手え出したらセシリー達に何されるか分からんも
ん」

「もちろんお仕置きですわよ?」

「…手え出そかな…」

「剣さんっ!」

身体を洗いながら、そんなことを1人呟くとセシリアから手厳しい
ツツコミが入った。

セシリアからお仕置きと言われるとどこか唆られる時守なので
あつた。

「っと、おーわり。…入ってもええの?」

「…こつちをジロジロ見ないなら」

「アホ。見るわけないやろ」

「…何よ…」

顔を赤くしながら口元まで湯に浸かり、ぶくぶくと泡立てる鈴。

そんな彼女を尻目に、時守は刀奈達が待っている所に入った。

「はひよく。ええお湯」

「剣くん、寝てなくて大丈夫?」

「ああ。4人ともありがとうな。気持ちよく寝れたわ」

肩までしつかりと浸かる時守と談笑する刀奈。

簪、セシリア、シャルロットも平気な顔をしているということは、普

段から彼の裸を見慣れているということなのだろう。

「…にしても疲れたわ。白騎士強すぎやろアレ…」

「そうなの?結構、競ってるように見えたんだけど」

「…:正味、アレを操ってるのがほんまの人で、性能も段違いに上がっ
てたら無理やったわ。無人機の第1世代やったからいけただけやな」

「…無事に終わったから、それでいいんじゃないの?」

「まあせやな。簪ー!」

「わっ…」

近くにいた簪をぎゅっと抱きしめる。

話題も話題だからだろうか、神妙な顔をしていた時守の顔が一気に
緩んだ。

「…やばい」

「つ、だ、ダメ、剣…。みんなまだいてるから…」

「い、いけませんわよ剣さん！」

「分かってるけど…」

とある生理現象が起きかけた時守だが、自称鋼鉄の理性を持ってなんとか耐える。

「でもまあ、本来の目的は果たせたな。ですよ？山田せんせ」

「えっ、わ、私…ですか…？」

簪を抱きしめながら顔だけを器用に真耶の方に向けた時守。

その抱きしめられている簪の顔が、2つの意味の火照りにより真っ赤に染まっているのを微笑ましく見ていただけに、真耶にとってそれは不意打ちに近かった。

「うーん…、どうでしょう。亡国機業の幹部も倒せませんでしたし、何より向こうに全力が渡ってしまったので…」

「…えっ？いや、それちやいますて」

「え？」

微妙に噛み合わない会話。

楯無と千冬から伝えられていた亡国機業への攻撃はお世辞にも成功したとは言えない。

しかし彼は、目的は果たせたと言ったのだ。

「修学旅行の下見つすよ。亡国だけならなんとか出来ますし、一般生徒には楽しく行ってもらえそうかなって」

「時守くん…」

真耶が言う目的はそれであつたが、時守の言う目的は修学旅行の下見。

教え子がこれほどまでに周りのことを考えられていることに感動しつつ。

「はっはっは！真耶、注いでくれ。…ええ？何か言ったか？…ぷっ、はっはっはー！」

「…先輩…」

目の前で偉大な先輩が泥酔しているのを目の当たりにし、その感動

が薄れてしまった。

「そ、そうですね！下見としては、文句なしの出来栄です！」
「なら良かったつす。もしかた変なんが来たとしても、俺らでなんとかしますから」

無自覚に専用機持ちちにプレッシャーをかける時守。

だがそれでも、後ろ向きな気持ちが始生えることは無かった。

今度こそ、今度こそは仕留めると、心の中でそう決めたのだ。

「…そろそろ出よか」

「そうですね…」

「うん、ちよつとこのままだとのぼせそうだし…」

「…えつと、じゃあお先に上がるね…？」

「おやすみなさい、みんな」

箒、ラウラ、鈴に別れを告げ、千冬と真耶にも会釈をし、5人共に気づかなかつたが、真耶と千冬により隠されていた一夏とも別れる。

互いの裸を少しは見慣れてくる程に付き合いを重ねてきた彼らだが、脱衣所に戻るまではしつかりと身体をタオルで隠し、新しい浴衣を着る時も出来るだけ見せあわないようにした。

「お待たせ、剣くん」

「おお…。…浴衣美人ってやつか…」

「んもう。そんな上手いことを言っても、何もいわよ？」

「…お姉ちゃん、だけ？」

「僕達にも、何か無いの？」

「お風呂上がり…少し自信はありましたよ？」

「ああ、簪も、シャルも、セシリーもよう似合ってるわ」

再び顔を合わせて脱衣所を出る頃には、5人が5人とも、しっかりと浴衣に身を包んでいた。

「…ねえ、剣くん」

「おい、まだ廊下やぞ？」

「そんなもの関係ありませんわ」

「それに、この時間帯なら誰も居ないでしょ？」

「…そもそも、貸し切り状態だし…」

脱衣所から部屋へと向かう途中。

浴衣を、というよりも身体をこれでもかと時守に押し付ける彼女たち。

楯無の生徒会長権限で既に5人同室にしているということはある。そういう事なのだ。

「せっかく大運動会で5人一部屋になったのに、最近ご無沙汰だったじゃない?」

「ま、まあせやけど…」

「なら京都に来るんだし、浴衣姿でするってというのはどうかなーって思ったんだ」

「幸い、織斑先生達とは少し離れた部屋ということですよ…」

「……これでも、興奮しない?」

「さつきから結構やばいねんって」

さつきとはいつか。

具体的に言えば風呂に入った数秒後からである。

「部屋に入ったらよろしくな」

「こちらこそ、よろしくね?」

「覚悟しててね? 剣」

「今日の疲れを、わたくし達が吹き飛ばして差し上げますわ」

「…でも、今夜は、寝かせてあげない…」

襖を開け、割り当てられた部屋へと入る。

既に布団が敷かれていた部屋。

だが、その布団や先ほどまで入っていた混浴が、今夜だけは本来とは少し違う用途で使われたのと言わなくても良いだろう。

夜中、もし誰かが襖に耳を当てれば、声が漏れていたかも知れなかった。

新たな発見

『続報です。昨夜起こった京都上空での謎の光が、ISによるものと判明しました』

「大変ねえ、学園の上層部も。マスコミは私たちの名前を出してないけど、結構対応に追われてるんじゃないかしら」

「せやなあ…。つてまあ、このメンツ敵に回したらどの局も生きられへんやろ」

時守剣と更識楯無の朝は早い。

学園にいる時も、方や千冬との特訓、方や生徒会長としての仕事に奔走しなければならぬこともあり、2人とも5時前後に起きることなどざらにあった。

「ロシアに中国、フランスにドイツ、日本と…国連？後はまあ、剣くんと仲のいい所も含めるとアメリカとかオランダとか…。流石にそれらの国から目の敵にされたくはないわよね」

「後は、俺とワンサマに嫌われるに等しいしな。普段パンダとしてこき使われてんのにこういう時にボロカス言われるのは嫌やわ」

「大丈夫よ、私たちがついてるもの」

「…それだけでも充分すぎるわ」

ぎゆうっと、時守の胡座の上に座っている刀奈をあすなろ抱きのように抱きしめる。

時守は刀奈の柔らかさと甘い匂いを堪能し、刀奈は1人だけ時守に抱きしめられるという幸福感に浸ることが出来る。

簪、シャルロット、セシリアの3人がまだ目を覚まさないこの時間にもみできる、2人だけの秘密だ。

「ねえ剣くん。ちゅーしましょ？」

「ん」

短いやり取りの後、唇を合わせる。

数時間前は唾液の受け渡しをする程に深く激しいものだったのだが、今は唇同士を付け、舌先でくすぐる程度のキスをする。

「ちゅっ…。うふふ、大好きっ」

「俺もや」

刀奈との甘いキスを味わった後、顔が離れば至近距離で微笑みながら愛を囁かれる。

後ろから抱いている腕に込める力を少し強める。

「んんっ…。どうしたの？」

「ただ刀奈を抱きしめたかっただけや」

「…そう」

割と苦しいのではないかというぐらいに強く抱きしめる時守。すると、そんな彼の腕の中から刀奈がするりと抜け出した。

「…刀奈？」

「抱きしめたいなら…えいつ」

時守と対面する形で膝立ちになった彼女が、そのたわわに実った胸元に時守の頭を抱き寄せた。

「…もつと甘えてもいいのよ？国連代表で、強くて、色々なことを任せれがちだけど、剣くんはまだ15歳だもの」

「……なあ刀奈…」

「恥ずかしながらダメっ。…最近の剣くん、ちよつと強がりすぎよ？確かに頼りになるけど、たまにはこうしてお姉さんに甘えなさい？」

「…それ言われたん、久しぶりやな…」

豊満な双丘に顔を埋め、その匂いと感触に癒される。

恥ずかしいという感情はもう無い。

ただ顔いっぱい刀奈を感じるだけだ。

「…どうして添い寝じゃなくてこうしたか分かる？」

「…んーん。分からん」

「剣くん、私たちのおっぱい好きでしょ？」

「……………」

「沈黙は肯定と見なすわね」

「……刀奈あ…」

「ふふっ」

だいぶ躊躇って絞り出した答えがそれだった。
そりやそうである。惚れた女性の母性の象徴が嫌いな男なんていない。

みんな好きなのだ。

「だからこうしたら喜んでくれるかなって」

「…確かに嬉しいけども」

「むう…、なによ。まだ足りないの？うりうり」

「や、やめて…」

谷間に挟まっている時守の顔の両頬に、刀奈の胸が押し付けられる。

俗にいう、ぱふぱふ。

簪達がまだ隣で寝ている朝5時に浴衣姿でもらうことちやうやろ、と何故か心の中で冷静に突っ込んでいた。

「…ありがとう、刀奈。癒されたわ」

「どういたしまして。…なんなら、もうちよつとだけしてあげてもいいのよ？」

「流石に遠慮しとくわ。みんなにも悪いし」

「…うふふつ、それもそうね」

名残惜しいが刀奈の胸元から離れる。

未だすやすやと寝ている簪達を見て、ふと笑みが零れる。

「…んう…。…剣、そこ、弄っちゃやあ…」

「簪…っ！」

「ふえつ、な、何…！や、んあつ、変なところ触らないで…！んうっ!？」
「…今のは簪ちゃんが悪いわねー」

淫靡な寝言を出してしまった簪に時守が襲いかかり、全身を揉みしだかれキスされていく。

そんな様子を、姉として、恋人として苦笑いして見ながら、刀奈は幸せを感じていた。



「皆さん、好きなお弁当は買えましたかー？」

「はーいっ！」

「…剣の気がなくなってしょうがねえ」

「わたくしも、決して悪くない選択だと思ったのですが…」

「関西にそのような兵器があるとは知らなかったぞ、師匠…」

「お、お腹が減ってきた…」

「…ねえ剣。一つ、ちょうだい？」

「…僕もねだると剣の分が無くなるよね…」

「流石に、お弁当でそれを選ぶとは思ってなかったわ…」

場所は新幹線車内。

京都から東京へと帰るその車内に、時守はとある兵器を持ち込んでいた。

「いやー、やっぱりお昼は551の豚まんやろ」

「ほんとにいい匂いするわねそれ…」

「要る？あーげないっ！」

「くう…！この…！」

「…そんなに欲しいんやったらやっぱ上げるわ。ん、ほれ」

通路を挟んで隣接している鈴に、時守が豚まんを片手に手を伸ばす。

「いいの？」

「おう。はよ食えよ」

半分に割られた豚まんの具の部分からは、熱々の肉汁がこれでもかと言わんばかりに主張してきており、湯気に混じった芳しい匂いが鈴の鼻腔をくすぐった。

「…って、なんで渡してくれないのよ」

「全部はやらんぞ…このままでも食えるやろ！」

「こ、このままって…」

片腕を伸ばし、目の前にあるのは半分になった豚まん。

しかしそれでも、あーんをしているということに変わりはない。

「…どした？トイレか？」

「違うわよー…あむっ」

食べ物を渡しているというのにも関わらず汚い話題を出す時守に怒りながら、豚まんに齧り付く。

「あつづあつ!？」

肉汁の熱さに思わず叫んでしまった鈴であった。

「にや、にやにこれ…」

「おー、今回はマジの出来立てやな。んじやいっただっきまーす」

そして、鈴が食べた後の豚まんを、時守はそのまま食べた。

舌を冷ましながらその様子を見ていた鈴の顔が、見る見るうちに赤くなつていく。

「あつ…ちよ、あ、あんた今…」

「お?どした、まだ欲しいんか?」

違う、そうじゃないとこの場にいる誰もが、時守の発言にその思いを抱いていた。

彼女がいる前での、彼女以外の女子との間接キス。

未だ彼氏彼女が出来たことのないメンバーがいる中でこの行為は、注目を浴びた。

「か、かかか…間接…」

「…あー、間接キスか。そんなん別に気にせんやろ?」

「気にするわよ!」

「…え?」

「…え?」

ここにきて生まれる、互いの意識の差。

「お前つて…そんなん気にしてたっけ?」

「…あ、えと…その…。なんて言うか…」

真つ赤になつたままの鈴と、普段通りの一重まぶたのぼけーつとした目の時守が見つめ合う。

「あつ、あたしは!気にすんのよ!」

「へえー」

その瞬間、鈴が爆発した。



「…はあ」

そこから数時間。

昨夜は旅館でぐっすり寝た者もいれば、夜遅くまではしゃいでいた（意味深）者もいおり、相当数の人間が寝ていた。

その中で生徒でたった1人、時守だけが起きていた。

「……やりにくいなあ」

誰に聞かせるわけでもなく、ボヤいた一言が辺りに少しだけ響く。

「……あれ、時守くん？休んでてもいいんですよ？」

「ああ、山田先生。なんて言うか、そう言う気分になれへんっていうか……」

通路の奥を眺めていると、その逆側、時守の背後から真耶が歩いてきた。

手には缶コーヒーが二本持たれており、恐らく彼女と千冬の分だと時守は考えた。

「…『白騎士』の時、ですよ。そこから時守くん、あまり笑えてませんでしたから…」

「気づいてたんすね」

「はいっ、先生ですから」

先生って何者やねん、と心の中で軽く突っ込む時守だったが、その心中は未だ晴れない。

「…私で良ければ、相談に乗りますよ？はい、どうぞ」

「え、これちっふー先生のんちやうんすか？」

「その予定でしたけど、先輩も寝てますし、ね？」

小首を傾げながらウインクをし、右手の人差し指を唇の元へとやる真耶。

可愛らしく内緒にしておいてくれ、と言われたのだからそうするしかない。

「んなら遠慮なく。…あの『白騎士』っすけど、確かに強かったんすよ」

「そうですね…。私の必殺技も、不発に終わってしまいましたし」

「……そこも、疑問点なんですよ。この前山田先生の現役の時の映像

見てたんすけど、アレは並大抵の人間やったら避けられる訳がない技っす」

「あ、あはは…。ありがとうございます…。なんだか照れますね…。」
貸し切りになっているその車両で、座席を多く使って休んでいる者が多いため空いていた時守の対面に座る真耶。

唯一起きている人間との会話ということもあつて話が弾む。

「山田先生。思い出してみてください。…現役時代、誰がアレを避けれました？」

「え？…えーつと…。先輩や、他の候補生にもたまには…」

「でしょ？…普通の候補生なら、無傷はありえへん。並の代表でも数発はもらう。でもあの『白騎士』は」

「無傷…。…つ、ま、まさか時守くん…」

真耶の顔が、徐々に驚愕のものへと変わっていく。

「そうっす。…『白騎士』は、ちっぷー先生や」

時守のその発言を予想していたかのように。

「そ、そんなこと…」

「ありえるんすよ。『白騎士事件』の全世界のミサイル同時発射。そんなん出来んのは篠ノ之束ぐらいや。それをISのお披露目の場として使い、その操縦者は仲のいい織斑千冬。…こんなこと、俺だって考えたくなかつたつすよ」

「だったら、どうして…」

「…『白騎士』の剣筋が、ちっぷー先生そっくりやったんすよ」

「…時守くん…」

それ以外の言葉を真耶は絞り出すことは出来なかつた。

時守が知っていることを、良く知っているのだ。

彼は知っている。千冬の本気の剣筋を。

彼は知っている。千冬の実力を。

彼は知っている。千冬の飛び方を。

だからこそその考えに至つたのだと、真耶は考えたのだ。

それだけ多くのことを彼が知っていると、真耶は知っている。

「……これから、どうしたらええんすかね、俺。結果的にミサイルは全部エネルギー刃により消滅。破片が落下してくることも無かったすけど、一歩間違えれば大惨事を巻き起こした犯人つすよ……」

「……もう一度良く、考えてみたらどうですか?」

「でももう疑えへんつすよ……」

「そこではなく、織斑先生とどう接するかを、です」

少し外していた視線を真耶へと戻す。

そこには、真剣な面持ちで時守のことをじっと見つめる彼女の顔があった。

「…『白騎士事件』の犯人とは接したくない。そう思うのなら、もう先輩にコーチは頼まない方がいいと思います。ですが、IS学園教師の、元世界最強織斑千冬と接したいと思う気持ちの方が強いのなら、今まで通りにすればいいと、私は思います」

「山田先生……」

自分でははつきりと出せなかった答えを真耶は数秒で叩き出した。

「…山田先生って、先生やったんすね」

「どういうことですかあ!?!」

「じょーだんつすよ。…ありがとうございます」

その失礼な一言と共に、時守は彼女に礼を言った。

「今回だけじゃなくて、これからも頼ってくださいね?」

「はい。そうさせてもらいます。…言っちゃアレつすけど、精神面を保ってくれる大事な人つすよ。山田先生は」

「……ええつ!?!」

「弄りがいがありますし」

「…そ、そっちですか!?!」

先ほどまでの陰鬱とした雰囲気から一転。2人の間に流れる空気が明るなものへと変わる。

もちろん、寝ている者にも考慮してボリウムは小さめだが。

「…まあ確かに、『幕は上げられた』を使っても『白騎士』には大したダメージも与えられませんでしたし?時守くんは操縦面で教えることももう無いですし?そもそも、代表の地位としては先輩よりも既に

時守くんは上ですもんねー」

「あ、あーもう。スネヤンといってくださいよ」

目の前で拗ねだした童顔巨乳眼鏡教師。

副担任でありながら、彼女の現在の地位は「国連代表候補生候補」となっており単純に見れば時守の2個下。

国連でも2度3度顔を合わせたこともあり、その際には変な空気が流れたのを覚えている。

「…ふふ。だったら、たまにでいいので私の訓練にも付き合ってくださいか?」

「…へ? 良いっすよ…ってかこちらからお願いしたいぐらいなんすけど…」

「ならお願いします。…これを機に、政府からも時守くんと織斑くんの保護を優先するべく、『幕は上げられた』が私に2年間預けられることになったので」

「え、マジっすか?」

「…そうなんです。やりすぎっていうか、私のプレッシャーが…」

「はは、ならそのプレッシャーの肩代わりでもさせてもらいましょか」

「…時守くんが肩代わりしちゃったら、元も子もない気が…」

IS学園でも数少ない実力者との手合わせの約束に内心うつきうきの時守と、政府や学園からのプレッシャーに胃を痛める真耶。

「楽しいー楽しいー、と小学生のように笑う時守を見てふと、真耶は彼に聞きたいことがあったのを思い出した。

「あつ、時守くん。…ちよつと前から聞きたいことがあったんですけど…」

「え、なんすか。好きな人ならもういますよ?」

「知ってますよ!…えつと、その…。とても楽しそうにISに乗るなあつて思ってた…。先輩との訓練とか、辛くないんですか?」

「…え? アレって辛いんすか?」

「…へ?」

ここにきて、再び2人の間に意識の差が生まれた。

「普通に楽しくないっすか? 空飛んだりするのって」

「まあ、分かります。私も最初に飛べた時はそうでしたから」

「それを邪魔されたくないから、相手をいかに素早くボコボコに出来るかを研究してるから辛くないっすよ」

「考えが物騒すぎませんか!？」

「じよ、じよーだんっすよ。…とにかく、飛ぶのが楽しいんす。やから訓練も楽しいし、勉強もおもしろい。もっともっと自分のしたい動きができるように、まだまだ精進あるのみっすわ」

「……そうなん、ですわね」

時守の言葉に慈愛の目を向けて優しく微笑む真耶。

そんな彼の頭に思わず手を伸ばし、撫でていた。

「……これからも、応援してます。国連代表としても頑張ってくださいね?」

「…は、はあ…」

まさに聖母のような微笑みを向けた真耶は時守の対面から立ち上がり、自分の席へと戻っていった。

「何やってんやろ。…ふあ、話したら眠たなってきた。寝よ」

その数秒後には、時守の座席から寝息が聞こえていた。

◇ ◇ ◇

「けんけん、おりむー、おかえりー」

「ただいま、のほほんさん」

「ほれのほほん。向こう限定のお菓子や」

「わあーい!けんけん分かってるうー!」

たこ焼き風味やお好み焼き味、大阪のタレ風味など、お前は一体どこに修学旅行に行ってきたのだというような品々を本音に渡している時守。

もちろんちゃんと抹茶味も忘れてはいない。

「あ、虚さんには弾から飛びつきりのお土産があるらしいっすよ」

「そうなんですか?…もう、無理はしなくていいのに…」

当たり前かのように嘘をつき、さらりと弾のハードルを爆上げする。

正直何をしたいのかは彼自身も理解してはいないのだが、いぎ2人

の次のデートでどうなるかを見るのが楽しいのだ。

「さてと、俺らが行ってる間にこっちは何も無かつたんすか？」

「はい。生徒会としての仕事も、さほど舞い込んできませんでした」

「なーる。どないする？」

聞く相手はもちろん楯無。

今は彼氏彼女の関係としてではなく、生徒会の会長と副会長という立場での会話だ。

「そうね…。報告もぱぱつと済ませて、みんなで修学旅行本番の準備にかかるとはどうかしら」

「さんせー！」

「4世！」

「……ぷふっ……」

賛成（3世）の次は4世という時守のしようもないボケにもツボに入ったかのように笑い出す籐。

ふと見れば、声を我慢しているが楯無もかなり腹を抱えて笑っていた。

「んじやあいつも通りレゾナンスでええか」

「…うん。…本音は、どうする？」

「私もかんちゃん達についていくー」

「…じやあ俺は1人か」

「なーに言ってるのよ一夏君。君には箒ちゃん達がいるじやない」

「え。…誘っても断られないですか？」

「安心せえ。ここ出て5秒以内にあっちから誘ってくるわ」

時守のその一言に頭を傾げる一夏を見て、他の生徒会メンバーが笑う。

下見という名の亡国機業への攻撃を終え、結果はどうであれ、皆が皆疲弊していた。

彼らに、幾度目ともなる休息が訪れる。

ブーメラン移動で再び京都へ

「いっせーの、11」

「……………9、10、11っ!?な、なぜだ剣!なぜお前だけ毎回毎回一抜けなのだ!」

「お前らの手の動きが読みやすいねん。ほれ、賭け金の1000円」

「くう…!」

「また、負けた…」

「けんけん強いー」

「どうして勝てませんの!?!」

「うう…、そんなに分かりやすいかな?」

「これで師匠の5連勝か、流石です!」

「……………なあ、俺たち何してるんだ?」

場所は食堂。

他の一年生は修学旅行の準備に忙しいという中、一年生専用機持ち十本音は、そこで『アレ』を使って賭けをしていた。

まあ全部セシリー達とのデート代に消えるけどな

「何って…あれや、コレ」

「どれだよ」

「名前なんてどうでもいいでしょ?」

「まあそうだけだよ…。ってちげえよ!準備しなくていいのかってことだ!」

「…着替えを入れ替えるぐらいではありませんの?」

「うん。僕も下見の時のカバンに、服を詰めたぐらいで終わったよ…」理由は簡単。下見に使っていたカバンの中身をそのまま修学旅行に持っていけばいいので、大した準備をする必要が無かったのだ。

もちろん、着替えやタオルなどは入れ替えてはいるが、それ以外に特別必要な物などはそう無い。

「のほほんさんは?」

「おねえちゃんがやっちゃった〜」

「やつちやつたつておい。お前それ『本音！早く準備を……！つ、もう見てられません！』みたいに言われたんちゃうん？」

「……くふっ、け、剣……。今の、虚さんのモノマネ……？」

「え、うん」

「絶望的に似てなかったぞ、師匠」

「いや似てへんのかい」

てつきり似すぎたから簪にウケているのかと思っていたが違ったらしい。

「おお、けんけんすごーい。そのセリフ、一言一句違わずおねえちゃんから言われたよお」

「ほんまかいな」

「だから後はお菓子を買うだけなんだあ」

「…簪、シャル、セシリー。俺らももうちよつとだけ買い足しに行くか」

「…うん、賛成」

「4世？」

「……やめ、て……くふふ……」

専用機持ち達、いざ買い物へ。

場所は移りレゾナンス。

時守だけでなく一夏や箒も臨海学校や夏休み期間などの買い出しによく訪れていたレゾナンスだが、この大人数で来るのは久しぶりだ。

「メントツは、モッピー、ワンサマ、鈴、セシリー、シャル、ラウラ、簪、本音、俺。9人か」

「多いな」

「ほな分かれよか」

綺麗に4：5に――

「ならんのかい」

ならなかった。

なぜか6：3になったのだ。

「どうしたの？剣」

「いや、普通9人やつたら4：5なんちやうかなーって」

「そう言えば、本音さんもこちらなのですな」

「うん。かんちゃんについてくから」

「…それよりも、鈴は向こうじゃなくて良かったの？」

時守、セシリア、シャルロット、簪、本音の5人が固まることはある程度予想できた…というより、散ることはないだろうと思っていた。

しかし、その5人に鈴が加わったのだ。

「買い物だけならこつちのメンツの方がセンスあると思っただけよ。

…文句あんの？」

「なんでそんな喧嘩腰やねん。別に文句も何も無いわ。…奢らんどー？」

「あたしをなんだと思ってるのよ！」

鈴の言葉に嘘はない。

箒と一夏とラウラ。

一緒にいる分にはいいのだが、服や化粧品などの買い物となれば話は別。

いい所育ちのセシリアと簪、本音とファツションセンスの塊であるシャルロット。世界各国飛び回り色々な物を見てきたであろう（？）

時守。

女子力なるものを鍛え上げるにはこのメンツの方がいいのだ。

「ま、奢らんってのは冗談や。三次移行の報奨金もたんまり出たから何でも買ったるぞ」

「孫に甘いおじいちゃんみたいなこと言うわね」

「あつと、こんな所に100万円の札束がー」

時守のカバンから出てきた札束。

今まで生きてきてそんなものを見たことが無かった鈴は、時守の元へと擦り寄り―

「ね、ねえ剣。あたしい、ちよおつと買って欲しいコスメがあるんだけどー？」

「鈴さん？」

猫などで声で化粧品を強請った。

あからさまに声に出したセシリアと、無言のまま笑みを向けてくる簪とシャルロット。

その余りの不気味さに、鈴はすぐさま平静に戻った。

「まあこれ偽札やけどな」

「ぶっ飛ばすわよアンタ！」

「顔知れてるから、一応盗難とかあった時にこういうのあった方が騙しやすいやと」

「アンタも上の人も何考えてんのよ…」

「でもまあ口座にはまじで入ってるからな？」

「…真顔で普通に言う辺りなんかムカつく。このっ！」

「いって!?!」

偽の札束をカバンの中に戻した時守。

一行は、目的地を絞ることなく歩いていく。

「あ〜！けんけんー、お菓子買ってえ〜！」

「…本音、子どもじゃないんだから…」

「ジンギスカンキャラメルか？トマトキャンディか？」

「…けんけんのいじわる。もういいもん」

「冗談やって」

好きな人は好きだというお菓子をチョイスしたところ、本音が拗ねた。

ちなみに挙げた2つとも、時守も食べられないし、本音もあまり好きではない。

「てかもうお菓子は調達してあるしな」

「早くない？」

「京都で買ったのを持って帰ってきた」

「な、なんか違うような気が…」

時守は話していかないが、現在彼らの部屋に備え付けられている食品棚の中には、抹茶味のお菓子やたこ焼き味、ソース味など、関西で良く売られているお菓子が詰め込まれている。

「ま、言うてもそんな持つかへんやろ？」

「むう。でもけんけんが準備してくれてるなら、いつか」

「ほなどこ行くよ。セシリー、シャル、簪。行きたいとこない？」

「わたくしは特には…」

「うん。僕も、もうほとんど準備し終えたし…」

「……剣が、着てほしい服があるなら別だけど」

その簪の一言に時守の物欲が駆り立てられるも、何とか抑える。

可愛い服だとか、よく映える服だとか、綺麗に見える服だとかを探しに行こうとするも、今はそうではない。

今は修学旅行の準備をしなければならぬのだ。

「じゃあ、鈴が言ってたコスメでも見るか？」

「え、ほんと？」

「おう。…俺あの匂い無理やから長いことおられへんけど」

「そう言えばそうでしたわね…。大丈夫ですか？ 剣さん。…最近、疲れが溜まっているようですけど…」

「だいじょぶだいじょぶ」

そう言つて、少女5人を引き連れ化粧品売り場へと足を向ける時守。

化粧品のキツイ匂いが無理なのは事実だが、それは関西にいた時の話。

ただでさえ漂う化粧品の匂いに加え、すれ違うオバハン達の香水や化粧のどぎつい匂いが敏感な嗅覚に突き刺さったというだけ。

いい匂いのする美少女5人が周りにいれば怖くない。

「そういやさ、女子同士って化粧品の貸し借りとかしてんの？」

「わたくしは、貸すことはあっても借りることはありませんわ」

「ああ…。まあセシリーはそうやろうなあ…。ぶっちゃけ今のままで超絶美人やし化粧変える必要も無いし…」

「……こいつつて、彼女限定で一夏みたいになるわね…」

「すげこまし〜」

時守の一言一言に顔をボンツとまるで火が出ているように耳や首元まで真っ赤に染めて彼の後ろを歩くセシリア。

その仕草は、普段のおしとやかな彼女からは想像出来ないほど、た

だの初心な少女だった。

「俺やったら口紅とかは嫌やなー。ワンサマと関節キスとか：うえ…」

「なに自分で想像して気持ち悪くなってんのよ。女の子同士でも口紅の貸し借りとかしないわよ？」

「え、そうなん？」

「普通の化粧品はたまにあるけど、口紅とかリップとかはやっぱり無
いかな」

「へえー」

心の中で、ぎょう虫検査を同じ紙でしたくない的なもんか、と一人
思う。

一夏は最近女子というものを分かり始めてきたのだが、時守は最近
ボケないということを学び始めた。

そういう空気ではない時にそういうことを言うもんじゃないと分
かってきたのだ。

「ニキビケアのやつとかはええんやつたつけ？俺も刀奈の使わせても
らってたけど」

「えっ、そ、そう…なの…？」

「おう。その代わり俺のボディソープ貸してたけど」

「…道理で一時期、楯無さんから剣と同じ匂いがしてた訳か…」

「剣さんと同じ匂いに包まれてると言いながら、とても嬉しそうにし
てましたわね…」

「え、そうやってんや」

てつきり洗いっこしたからやと思とった。という核爆弾並の発言
も黙っておくことにした。

何となく嫌な予感がしたのだ。

「にしてもシャルとかセシリーとかもどんなやつ使ってるか気になる
わー」

「僕たち？」

「だって、結構匂い分かる香水つけてるのに鼻に来おへんもん」

「それは日頃の努力の結果ですわ！」

「…のほほん、鈴。こういうところの差やで？」

「う、うっさいわね…」

「分かってるけどお、何から手をつければいいか分かんない」

「つってもまあ、2人ともそんな気にすることないやろ」

言っていることが矛盾している彼の横を歩く彼女達はその言葉に集中する。

何かと普段からとんでもない発言をすることがあると、この数ヶ月の付き合いで分かってきたからだ。

「だつてのほほんも鈴も可愛いやん。そんだけ」

「な、あ…う…」

「にや、にやはく…」

案の定鈴と本音にとって特大の爆弾を投下し、我関せずと歩き続ける時守。

照れて顔を赤くする本音と鈴、そして恋人である時守に向けて苦笑いを浮かべながら、シャルロットとセシリアはその後ろを歩いていた。



「という訳で、また新幹線か」

「どういう訳よ」

時折揺れる新幹線の車内。

1年生の修学旅行ということで流石に刀奈は着いてきていないが、シャルロット、セシリア、簪の3人と共に座席を向かい合わせにして座っている時守の一言に、鈴がつっこんだ。

「いや、なんも起こらんかったらええなって」

「やめなさいよ。ほんとに来たらどうすんの？」

「今度こそぶっ飛ばす」

「そうだぜ鈴。いつまでもやられてばっかじゃいられないからな」

「2度と目の目を見ることの無いようにしてやる」

「これ以上私の学生生活を邪魔されたくないのな」

対亡国機業で脳筋と化した時守、一夏、箒、ラウラが次は無いいい
う意思を明確に表す。

「んなん言うてるけどお前も修学旅行めちやくちやにされたら嫌やろ
？」

「あつたりまえよ。今度こそ逃がさないわ」

「…京橋とか奈良とかにある、歴史的な建物を壊されるのは私も嫌」

先日の戦いで、IS学園側は『防衛戦』としては勝つことができた。

しかし、本来の目的であった『亡国機業への奇襲』という面では完
膚なきままでにしてやられたのだ。

こちらから2人引き抜かれ、本来手を貸してくれるはずだったア
リーシャまで向こうに付いたのだから。

「それに関してやねんけどさ、箒。…やっぱ怒ってはった？」

「…うん。国宝が多い区域で、何をしてるんだって」

「そんな俺らのせいちゃうわー。って言いたいところやけど、あの辺
マジで国宝だけじゃ足りひんからな…」

「そんなになの？」

「おう」

地元関西のことを良く知っている時守の話に、全員が耳を傾ける。

「ワンサマが墜落した竹林も結構ブランドもんの竹やったらしいし
な」

「え、っ…。だ、大丈夫…なのか？」

「まあお前被害者やしな。罪は全部向こうに被せろ。んで国宝とかや
けど、重要文化財が京都と奈良で合計500以上やったっけな」

「そんなにもあつたのか…」

「せやねん。んで奈良の場合は周辺地域で世界遺産やったから、もし
あそこでドンパチやったら俺らもアウトやろな。ははっ。まじでお
もろいよな」

「笑いごとではありませんわ！」

事実、これには日本政府関係者もかなり苛立っている。

京都、奈良といった古都。近畿の水源ともなっている琵琶湖を有す
る滋賀。そして関西の大都市である大阪と兵庫。梅干しやみかん

ど農作物の産地としても有名な和歌山。

そのいずれもが、被害に遭う可能性があったのだ。

「ふむ。まあ確かに日本が戦力を放棄してからそういった所を攻めるのは何とも言い難いな」

「まあ今は若干、日本の戦力放棄とかその辺の話はアウトな感じやけどな」

「剣…。流石にその話題はダメ…」

「まだ選挙権ないんやしええやん」

「わたくしの国もどうなってしまうのか…」

「セシリア、お前もそれはまずいだろ…」

「楯無さんとダリル・ケイシーの対立も…」

「や、やめなさいよアンタ達…。あの国が近いあたしのところもシャレにならないんだから…」

色々とアウトである。

◇

「なありコピン。流石に飽きてんけど」

「飽きた言うな。確かに環状線から乗り換えて割とぱつと行けるとこだけど」

「阪神線乗ってきていい？」

「あんた修学旅行で日本シリーズ行くとかマジで浮くわよ？」

「じゃあないやんけ。関西ダービーやぞ？シリーズが始まった時はこんななると思っへんかったもん」

「あたしも色んな意味でその時はこんなことになるとは思わなかったわ」

10月月末に関西に来ている時守が考えていること。

それはISと日本シリーズのこと。

開幕大きく出遅れていた虎。しかし巨の正捕手の離脱、鯉のリリーフ陣の不調、浜に怪我人続出と試合をこなす事に何か起きてしまつたセ。

交流戦で竜が大きく後退し、燕との首位攻防でなんとか競り勝った虎がセを制したのだ。

「まあ野球のことはお前に任せるわ」

「あの時守がそう言うなんてねえ…」

そんなこんなで関西ダービーとなった日本シリーズだが、時守には観戦よりもしなければならぬことがある。

「流石に修学旅行やったら見れへんしな。後でホテルのテレビで見ればええだけや」

「結局見るんじゃない」

「んなもん当たり前や。…まあ、今はそれどころちやうけどな」

亡国機業。それがIS学園を、日本を狙っているというのであれば専用機を持っていない理子のような一般生徒の代わりに時守達が戦わなければいけない。

「つと、そろそろ行くか」

「そうね」

荷物を肩にかけて歩く。

車内に忘れ物が無いか確認していたのだ。

「お待たー」

「けんけん遅い〜」

「忘れもんやぞ、のほほん」

「何〜?」

「カバン」

「おー、どおりで肩が軽いと思ったー」

本音のとんでもない忘れ物を届けたところで、いざ出発。

「あれ、簪達は?」

とは行かなかった。

「かんちゃんたちは〜、けんけんとお嬢様に買うプレゼントを探しに行ったよお〜」

「…いや、それ言っただいやつなん?」

「…だめって言われてたんだ〜。てひひ〜」

「ええ…」

黙って行かれたことに少しショックは受けたが、自分へのプレゼントを探してくれているということなら話は別だ。

そう言えば、もう少して年末なのだから色々買わねばならないものもある。

「んじやリコピン…。つてあれ、あいつどこ行つた？」

「話してる間に、さゆさゆ達の方に行つたよお」

「ふむ…。じゃあ俺らも適当に回るか」

「ういゝ」

回る人がいないのなら、余り物同士組んで回る。

幸い、2人とも奇数人数で「ペアを組んで」と言われて余るような人間ではなく、寧ろ即席でペアを作るといったことは得意だった。

「えーいっ」

「おつと。…簪に怒られても知らんぞ？」

「だつて寒いんだもーん」

「まあそりや秋の京都に制服だけやったら寒いやろ」

「けんけんは違うのゝ？」

「インナー着てるし、その下にISスーツ着てるしな。しかも俺のやつやたら気合い入ってるやつやから防寒防熱完璧なやつ」

ほれ、と袖を捲つて見せる。

そこにはCMなどで良く見る安いが暖かいコストパフォーマンスの良いインナーシャツと、彼専用のISスーツがしっかりとあった。

「ぶう。いいな」

「…ここだけの話な、俺を仲介したら安く手に入んで？」

「それがけんけんのお財布に入つていくと」

「……お前意外と鋭いな」

「けんけんも相変わらず商売人」

時守剣プロデュースのISスーツの売り込みだと察した本音がそれを回避する。

最も、今回避したところで2年生への進級時に買うISスーツの選択肢の大半が時守剣プロデュースのものであり、知らず知らずの内に買うことになるのだが。

「てかほんまに簪に見られても知らんぞ?」

「その場合は私よりけんけんの方が〜」

「さあ、どうやろな?」

実際、時守から悪ふざけで本音に抱きつくというこゝとは無い。

本音が時守に抱きつき、力づくで離せないという今のような状況は、簪達が見れば本音が無理やり抱きついている、ということになるのだ。

「…ねえけんけん?」

「んお?」

「もし、かんちゃんたち以外にも、けんけんのことが好きって女の子が出てきたら、どうするの?」

「……あー、考えてへんかったな」

それもそのはず。

セシリア、シャルロット、簪、刀奈。4人の可愛い彼女達に囲まれている今が、既に幸せでいっぱいなのだ。

しかし、それについて考えていないのは時守だけだった。

「シャルに、前から言われとつてん。もしそういった告白をしてくる子がいたらちゃんと考えたつてくれって」

「…というと〜?」

「4人同時に付き合ってるのも、そのうちの誰かを不幸にしたくなかったからや。やから、ほんまに俺のことを想ってくれる人が出てきたら、その時はまたみんなと考える。…つっても保険金目当ては全員で見極めるけどな」

「にや、にやはは〜」

オルコット家当主のセシリアと社長令嬢のシャルロット、更識家当主の楯無とその妹の簪。

保険金目当ての人間はその面々の視線をそう簡単にはかいくぐれないだろうと、本音は確信していた。

「てかそろそろ行こや。じっとしてたら時間勿体無いわ」

「ういゝ。どこ行く〜?」

「……言うて中学時代に大体の観光場所に行ったからな。のほんまに

「任せる」

「じゃあ、清水寺で〜」

「あいよ」

地図を見ることなく時守が歩く。

その隣を布仏本音は、静かについていく。

「IS使ったらあかんかな」

「流石にそれはだめかと〜」

信号が青になった横断歩道を2人は歩いていった。

明かされること

「あ、モッピー。鈴とラウラも。どないしたよ。ワンサマは？」
「む、剣か。私たちは3人で回っているのだ。その…言ってはあれだが下見の時に一夏はかなり独占させてもらったからな。今日は、一般生徒のカメラ係になっている…はずなんだが」
「はず？」

本音が行きたがっていた清水寺に着くと、やはりというか大勢の観光客、その中でも一際目立つI S学園の制服を着た女子生徒が多かった。

その中の3人、箒、鈴、ラウラに話しかけると、3人ともがやや苦笑いで返してきた。

「一夏ったら、ついてくる女子が多かったからI Sでどっか飛んでっちやっただのよ」

「えっ。…やばない？」

「教官と山田教諭からは特にお叱りは受けていなかったぞ。…何か、考えがあつての事なんだろうが…」

「1人にさせたれつてことちゃう？」

時守にそう言われ、思わず唖つてしまう3人。

時守同様、最近疲れが見え始めていた一夏。だが、あいも変わらず普段のように奪い合いをしてしまい、彼に負担を掛けてしまっていることも理解しているのだ。

「分かつてはいるのだが…」

「嫁が誰か他の女子と仲良く歩いているのは我慢ならん！」

「そうでつか。俺には分からんわ」

「…：ほんと、一夏があんたみたいに重婚できて好意に敏感ならややこしくならないのに」

「余計ややこしくなる未来が見える」

本音の言う通りだろう。

そもそも、好意に敏感な一夏は本当に織斑一夏なのか、と疑われる

程に鈍感だから、一夏なのだ。

哲学めいたことになっているが、あの朴念仁だからこそその織斑一夏ということだ。

「まあ、あいつもゆっくり考える時間があつた方がええやろ」

「そういうもの、なのか…?」

「誰かと付き合うってこと以外もな。ISにしろ、勉強にしろ。考えなあかんことはいっぱいあるし」

「うへえ…。修学旅行の時ぐらい忘れさせなさいよ…」

「なんでや。IS動かすの楽しいやんけ」

「まあそれはそうだけど…」

「……待つてくれ師匠。なぜ、ISが楽しいと思うのだ?」

何気ない鈴と時守の会話。

そこにふと、真面目なトーンでラウラが割り込んできた。

「ん、どした急に」

「頼む、答えてほしい」

「ん…。確かにシゴキがきついつて思う時はあるけどやな、普通に空飛んだりとか、単一仕様能力発動させたりとか、後は戦ったりとか楽しめない?特に勝てたら」

「なるほど。最近、あまり成長していなかったからヒントが欲しかったんだが、そういうことか」

「どういうことや」

急に1人納得しだしたラウラを見て、話を聞いているだけだった本音すらも首を傾げた。

「いやなに、私は軍事兵器としてしかISに触れてこなかったからな。もう少し視点を変えてみるのも一手だと思ったんだ」

「なるへそな。俺とは真逆やな」

「ねえ、あんたってISが嫌になったことはないの?」

「え、無いけど…」

基本的に、ISというものはISバトルをするためのものである。

故にまだ年頃の少女達は時々、ISそのものすら嫌になる時がある。

だが、時守は違った。

「だって、楽しいやん」

「それだけ？」

「おう。普通に空飛んで、ハデな技撃って、相手に勝って。そんなん最高やろ。しかもそれで金もらえるし」

「呆れた。そのためならどんな努力も惜しまないっていうの？」

「んー。努力ってかやることやってるだけやねんけどな」

「何それ」

ただただ楽しいから。

ISを纏い、空を飛び、武装を放ち、相手に勝つ。

それだけでもかっこいいが、技を極めれば極めるほどに、それはさらに華麗さを増していく。

目立ちたがりの節がある時守にとって、これ以上に楽しいことは無いのだ。

「それにISがあったからこそ、カナや簪、シャルにセシリア、お前らとも知り合えたしな」

「……よく平然と、そんなことが言えるな」

「おっ、なんやモツピー。恥ずかしがってんの？」

「まあそれもそうね。ISが無かったら、こんな世界中の知り合いが出来なかつたわけだし」

「だな。私も、ISが無ければ祖国ですつと軍人としてしか過ごしていなかつただろう…」

それぞれが過酷な生活を送っている。

ISにより家庭を壊され、ISにより思想が変わり、そしてISにより命を落とした。

だが、ISのお陰で友人ができ、ISのお陰で初恋を知り、そしてISのお陰で強くなれた。

「やからまあ、過去に起こったことはどうにも出来ひんしな。なるようになる人生を楽しむだけや」

「老後を考えてるおじいさんみたい」

「お前もう菓子やらんからな、のほほん」

「嘘だよ。うそうそ、冗談」

「ったく。ぶっちゃけ女尊男卑もうちよいで終わってくるやろし、正味そんなどうでもいいし、まずは強いやつと戦いたい」

「サイヤ人かアンタは」

「言うな。中途半端なやつと戦うのが一番飽きんねん。雑魚いし動けへんし」

変に弱い校外にいる専用機を持っていない代表候補生達を軽くデイスリながら、時守と本音は3人と共に清水寺を観ることにした。さすがの専用機持ち達も、ここでは大人しかった。

◇

「うい。すまん遅れた」

「…ん。遅かったね」

「お待ちしておりましたわ、剣さん」

「外、寒かったでしょ?」

「どこに行っていたのだ、一夏!」

「そうよ!ちゃんと説明しなさい!」

「嫁よ、遅れるということとはそれなりの理由があるのだろうか?」

「この差は何なんだ…」

彼女かそうでないかの差である。

両手にお土産を持ち、簪、セシリア、シャルロットの3人に旅館に迎え入れられる時守と、同じくお土産を持ちつつも、箒、鈴、ラウラの3人に問い詰められる一夏。

「…お前、そろそろ身持ち固めたら?」

「へ?身持ちって…何のことだ?」

「辞書引けアホ」

そう言わずにはいられない時守だった。

8人が溜まっている玄関先。

未だ会話が続くそこに、真耶が割って入ってきた。

「まあまあ皆さん。今日は、日頃から頑張っている織斑くんと時守く

んに、特別なおもてなしを用意してるんですから」

「特、別…?」

「新しい専用機とかつすか!」

「あ、あんまりハードルを上げないでください…」

「痛っ、おい金ちゃん。嘘や嘘。じよーだん」

真耶が苦笑いをすると同時に、時守の右手中指に痛みが走った。

理由は誰に言われずとも分かっている。「新しい専用機」という単語に、待機状態の『金色』が対抗心を示したのだ。

「今日は専用機持ちの皆さんに、舞妓はんになつてもらいます!」

「それって俺達もですか?」

「と、時守くんと織斑くん以外の、ですっ!」

「舞妓はんかあ…」

どちらかと言えば花魁派の時守。

どちらかと言わなくても舞妓でもいい派、というかあんまり分からない派の一夏。

ストライクゾーンから微妙に外れているため喜びは少ないが、それでも彼女達からのおもてなしというのは、時守にとつては嬉しいことだ。

「では、お2人はここの和室で待っていてくださいね」

真耶に通され2人が入ったのは割と大きめの和室。

ちよつとした宴会なら軽く開けそうなほどの広さを持つそこに、2人は寝転がった。

「あー、疲れた」

「チンポジおかしいわ」

まるで畳に沈んでいくかのようにただ寝転ぶ一夏と、寝転がりながら股を開き、ズボンの上から内ももにへばりついた袋を外す時守。

「お前…」

「なんや」

「隣にみんないるんだぞ…?」

「男がちんこ掻いてる音集中して聞いている女子なんておらんやろ」
「いやでもほら、シャルロットとか…」

「…お前、それ以上深く聞く?」

「…やめとく」

「そうしとけ」

ついでに痒くなったので出来るだけ音は小さくなるようにして掻く。

冬場は厚い布地のズボンを履くので蒸れるのである。

もちろん、箒達には聞こえないようにはしている。

聞こえていてもいなくても、どの道シャルロット達は時守の元に来るのだ。

「う、おとおおおっ!」

「…おおっ。舞妓もええな」

チンポジを直した時守が一旦手を洗いに行ったり、一夏が割と本気で寝かけてしまったり、暇な時守が『完全同調・超過』を使ってISの調整などをする事、30分。

艶やかな舞妓衣装に身を包んだ彼女達が、襖の奥から現れた。

「では、まずはお夕飯からですね!」

真耶がぱんぱんと手を鳴らすと、別の襖から料理が運ばれてくる。

それも、採れたての旬の食材をふんだんに使った一流の京料理。それらが時守と一夏の目の前に置かれる。

「それでは皆さん、くれぐれも変なことはしないように…」

すう…と静かに襖の奥に消えていく真耶と女中達。

残された1年生専用機持ちに静寂が訪れることは無かった。

「では一夏。まずは、一献」

「剣さんも、杯を」

「俺達まだ未成年だぞ!」

「安心しろ、ラムネだ」

「そうですわ。ラムネ…ですわ」

セシリアのその間は何なのか、と一夏がツツコミを入れる隙もなく、2人の杯にとくとくとラムネが注がれていく。

それに、まずは一口付ける一夏と一気に煽る時守。

このような動作にも人間性の違いが見て取れる。

「……ああ、なんかドツと疲れてきたな」

「っ、かあくっ！美味いっ！配分絶妙やわ！」

「配分？」

「け、剣さんっ！お、おほほほ……。なんでもありません。なんでもありませんわ、一夏さん」

本当にラムネなのか、とは追及しなかった。

上機嫌でセシリアに酌をしてもらっている彼が幸せそうなのだから構わない。

「枝豆欲しなってきたな……」

「お前それホントにラムネだろうな」

「ラムネやラムネ。ラムネ風味の飲み物や」

ラムネ風味なら実質ラムネか、と納得した。

そうこうしているうちに、一夏の元に鈴が、時守の元にシャルロットが座った。

「おっ。食べさせてもくれるんか」

「うん。はい、あーんっ」

「あーん」

「……こ、こいつらの後でするのもアレだけど……。い、一夏っ！あ、あーん……」

「……あーん」

流れるように2人とも笑顔を浮かべながら、時守に食べさせるシャルロットと、ぎこちない動きで2人とも照れながら、一夏に食べさせる鈴。

「……ホントはアンタと遊ぶ予定だったんだけどね」

「……ちなみに、何を？」

「花札よ」

「鈴できねえだろ？」

「……だったら、ジエンガ」

「こんなところでジエンガなんてしたらうるさいだろ」

「……そう、ね」

なぜにジエンガと思う一夏だったが少し考えたところで分かった。

あの鈴のことだ。剣達がいなかったら、みんながいる中であーんなって出来ない。きつと、2人で遊んだ方が楽しいだろうと。

ある意味時守に感謝である。

「では私は嫁にプレゼントを渡そう」

「お、サンキューな。すげえ、よく出来てるな！」

「ふっふっふ…。当然だ。この私が作ったのだからな！」

「本当によく出来てるぜ、このイノシシ！」

「…ウサギだ。…ぐすっ…」

「えっ…」

「はいシャルも。あーんっ」

「あーん」

「わたくしも、わたくしも欲しいですわ！」

「ならはい、あーんっ」

「あーん」

「…なら、私も」

「ん、簪もはい、あーんっ」

「…あむっ」

うさぎなのに…と涙目になるラウラとオロオロとし出す一夏。

それを見て苦笑いで頭を抱える鈴と、そのストラップはネコじやないのかと戦慄する箒。

その隣ではいつの間にか食べさせ合いが始まっており、舞の準備をしていたはずの簪も気がつけば時守の隣にちよこんと座っていた。

「…あ。舞、しなきや」

「おー！ちゃんと見とくからな、簪ー！」

「…うん」

セシリアとシャルロットに酌をしてもらいながら簪の舞を見る。

一夏達は一夏達でやはりぎゃーぎゃーと騒がしかったが、簪の舞が始まると静かにその様子を見ていた。

「やかましいぞ貴様…ら…。…おいラウラ。男子生徒へのもてなしのはずだろう？それが、なぜ宴会のようになってるんだ…？」

「ひ、ひいつー！えと、その…」

簪の舞も終わり、そのあとに生徒だけで騒いでいるとふと、襖が開かれた。

どうやら騒ぎすぎでいたようで、その対応に千冬が来たらしい。

その表情は普段のような凛々しいものではなく、慣れない環境に少し疲れている様子だった。

しかし、まるで宴会のように騒いでいる専用機持ち達を見て、スイツチが入った。

餌食になったのは、ラウラだ。

「それと、だ。なぜ時守の杯にラムネチューハイが入ってるんだ？」

舞を終えた舞妓姿の簪といちゃいちゃしている時守が先ほどまで座っていた卓の、杯に残っている飲み物を一気に煽る千冬。

今さら間接キスなど気にしている年ではない、と自覚していた。

「……師匠に聞いてください」

「時守いいいっ!!」

「ぐえっ」

襟を掴み、強引に引き寄せる。

更識やデユノア、オルコツトなどが驚いた顔をしているが千冬には関係ない。

「貴様ア！」

「ぐっふっ」

千冬から放たれる有無を言わさぬ老若男女平等パンチ。本気のそれを後頭部に食らった時守は、見事沈んだ。

勤務中ということもあり、酒が飲めず。

生まれてこの方、彼氏などできた試しもない。

そんな千冬にとって最大の煽りと言ってもいい行為を時守はしていたのだ。

「正義は、勝つ……」

「生徒を殴ることは正義ではありませんわ！」

「剣っ、剣っ!?!」

「だ、大丈夫……?」

ぶんすか、と聞こえるほどに頬を膨らましながらオルコツトが怒っ

ているが、千冬には関係ない。

彼女2人に身体を揺すられながら心配される時守。

ぶっ倒してもこの男は私を苛立たせるのか、と千冬の中でさらに炎が燃えた。

「オルコット…。勝てば、良いのだ。勝ったこそ正義なのだ」

「いったい何時代の話ですの!?!」

「あつ、剣起きた」

「つまり家事全般でちっふー先生に余裕で勝ってる俺は正義」

「ぐふうっ!?!」

掃除、洗濯、料理、整理整頓、e t c…。

女子力というか、主婦力ですら時守に負けている千冬は、現代日本ではただのダメ女だった。

「いてて」

「アンタ千冬さんのアレ食らって痛いですむの?」

「金ちゃんがシールド張ってくれた」

「…えっ。じゃ、じゃあ千冬さんはISのシールド貫通したってこと…?」

「…何を言っている、風。シールドなど貫通できるだろう」

「素手でなんて無理です」

そうか、普通の女子はISにダメージを与えられないのか…。と今さらになって当たり前のことを改めて知らされた千冬。

「まあ、その…アレだ。お前達も早く風呂に入って寝ろ」

「逃げた」

「逃げましたわね」

「ちっふー先生逃げたー」

自室に帰る時に、再び時守をしばいておいた千冬である。



「むうー。これ簪的にはどうなん?」

「剣…、重い…。…まだおもしろい方、かな?」

「ねえ剣、ホントに大丈夫？」

「だいじょぶだいじょぶ」

「このアニメ、IS学園での剣さんと一夏さんをイメージに作られていますのね」

「うん。…だから、知ってる側からしたら現実とのギャップがあつて、おもしろい…」

夕食、そして入浴共に終えた4人は、生徒達が泊まっている一室のテレビで簪の日課である深夜アニメの視聴をしていた。

「…あ、そう言えば剣、知ってる？各国から新しい代表候補生が転校してくるの」

「おお、知ってんで。鈴の従姉妹とかやる？絶対亡国対策やん…」

「でもそれ…、転校してくるのは来年度の開始と同時って聞いたけど…」

「ということは、もし今年度中にまた襲撃があれば間に合いませんわね」

「んなもん弱いやつ寄越されても困るわ」

胡座をかく時守の脚の上に簪がちよこんと座り、先ほどから抱きしめている腕の力を強める。

「…戦ったことあるの？」

「夏休みぐらいに、鈴の知り合いなんですよ！って言われたから、おお、そうや。って言ったら戦えって言ってきて、いざボッコボコにしたら半泣きになられた」

「は、半泣き…」

「そ、その時はどうやって戦いましたの…？」

「完全同調とオールラウンドでフルコンボしただけ」

「あはは…。もし剣と面識無かったら、本当に泣いちゃうかも…」

あすなる抱きのような状態から、簪の首元に鼻先を埋めて匂いを嗅ぐ。

んう、という小さく可愛らしい悲鳴をあげ、簪が身を細かく振る。

「名前なんつったつくな…。凰…淫乱？」

「乱音だよ、剣…」

「…それ、絶対本人に言っちゃダメだからね」

「……おう」

イジりに使おうと心に決めた時守である。

「えへへっ。けーんっ、ぎゅー」

簪をあすなる抱きする時守を、さらにあすなる抱きするシャルロットの美しい手が、千冬に殴られた時守の頭から離れる。

「んー？どした、シャル」

「別に、ただこうしたかっただけっ」

「なら、わたくしもですわ」

胡座をかく時守の右肩に頭をちよこんと乗せるセシリア。

しかし、ちよこんと乗せているのは頭だけであり、シャルロットと簪と時守との僅かな隙間に腕を入れ、彼の上半身にその柔らかい肢体を押し付けている。

「…け、剣…」

「ん。簪もな」

アニメを見ている時間だが、彼が目の前で他の彼女2人に占領されるのを黙って見ていられる程、簪の恋心は冷めていない。

しかし、アニメから目を離したくもない。

そんな彼女が彼にお願いしたのが、同じように抱きしめてもらおうということだ。

「……ねえ剣。その…」

「ん？」

「…お、お尻に、当たってる…」

「…だって、こんだけシャルとセシリアが胸押し付けてきて、簪を抱きしめてんのに、反応せえへんわけないやん」

そんないちやいちやタイムをしばらく楽しんでいた4人だが、簪の一言でそのムードが少しだけ変わった。

「それに、簪達だって誘ってるくせに」

「うっ…」

「部屋入ってきた時、布団が1枚しか敷かれてない時点で分かったからな？」

「…剣は、したくないの?」

「そうですね!」

女子のあとに風呂に入った時守と一夏。

他の生徒達の泊まっている部屋よりも何故か少し離れた場所にある彼の泊まっている部屋に入ったところ、浴衣姿の3人が団欒していたのだ。

おかしな点は、その部屋の中央に敷かれた一枚の布団。それとティッシュボックスと、どこで仕入れたのか分からないゴム。

見て見ぬ振りをしたが、あからさまだった。

「同じ部屋になったから分かるの…。剣、最近発散できてないでしょ?」

「うぐつ…」

「女の子が周りにいっぱいいる状態で、ISの特訓とか勉強もしないとダメだもんね」

「ですから、今日ぐらいはしたいことを言ってくださいまし」

もはや簪はアニメを見ていない。

彼が溜まっているのも事実だが、最近ご無沙汰だったのもまた事実。

最近と言っても、修学旅行の下見の時にはしたのだが。

三方向からの柔らかい刺激に、次第に昂っていく。

「…知ってるんだよ。同じ部屋になる前は、内緒でお姉ちゃんとエッチしてたこと」

「えっ、嘘。マジ?」

「…ホントにしてたんだ」

「でも、良いよ。それは当時の刀奈さんの特権みたいなものだもん」

悪魔の囁きのように、彼女達がつぶやく。

互いに身につけているのは薄い浴衣のみ。その体温や感触などは、ほぼそのままお互いに伝わっていた。

「だから、この修学旅行は私達の特権」

「幸い、綺麗な温泉…それも混浴のものもありますし」

「偶然にも、ここに最新型高性能カメラもなぜかあるし、ね?」

時守は知らないことだが、彼女達3人が多方面に交渉を持ちかけて、この離れた一室をゲットしたのだ。

ここで拒否されては何のために取ったのか分からなくなる。

「…簪、今何時？」

「さっきのアニメが終わったから、丁度0時半だよ」

「明日って何時起きやっけ？」

「7時30分だよ」

「…じゃあ3人も、明日は眠い目擦りながら歩くことになるけどええか？」

「うんっ」

「今はそれよりも…」

「今日この場でしかできない体験がしたいですわ…」

彼女達の熱の籠った吐息が耳にかかる。

…ここまでお膳立てをされて、応えないほどへタレではない。

「じゃ、机退けよか。当たったら危ないしな」

「はーいっ」

「わたくしも手伝いますわ、シャルロットさん」

「じゃあ私は、諸々の準備を…」

布団のそばにあった硬いものをとにかく遠くに離すセシリアとシャルロット。

持ってきたキャリーケースの中から黒いビニール袋を取り出し、枕元のすぐ近くに置いた簪。

「何これ」

「…い、色々」

「まあ、楽しみにしとくわ」

布団に腰を降ろす時守と簪。

そこに、移動をし終えたシャルロットとセシリアも加わる。

「じゃあ、はい剣！目隠し！」

「えっ、なんで…？」

「次に目隠しを取る時に、すごい光景が待ってますわよっ…」
「おっけ。するわ」

手渡された目隠しを全く疑うことなく装着する時守。

その日、明け方まで何をしていたかは時守と彼女達だけしか知らない…。

◇ ◇ ◇

某高級ホテルの最上階レストラン。

その一角に、スコールとオータム、そしてつい先日彼女達の仲間になった人物が集まっていた。

「歓迎するわ、元イタリア代表、アリーシャ・ジョセスターフ」

柔らかな微笑むスコールと警戒の目を向けてくるオータム。

その2人を前にして、アリーシャはキセルから口を離して答えた。

「ま、私は織斑千冬の対決にしか興味は無いのサ。形はどうであれ、きつと織斑千冬も決着は付けたがっているはずサ」

「てめえ…。だがまあ、構わねえよ。やる気のねえ奴に邪魔されんのも面倒だ。てめえはあのブリュンヒルデだけを相手にしとけ」

「言われなくてもそのつもりサ」

オータムとアリーシャ。その間に友好関係などはない。

互いの目的達成のために手を取り合っているだけ。

オータムは時守達IS学園専用機持ちを処分するため。

アリーシャは織斑千冬と戦うために、協力し合う。

「それで構わないわ。彼女が私たちに敵意を向けてくるのは、少々こちらとしても都合が悪いから」

「任せとくのサ。こちらら、織斑千冬よりも現役としては長いのサ」

「なら期待させてもらおうわ。…でも、作戦にはある程度参加してもらおうよ」

「それぐらいならいくらでも」

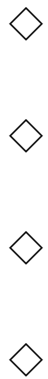
今日の本題は、顔合わせという軽いものではない。

もっと重要な話し合いをするために集まったのだ。

「エムやレイン、フォルテにはまだ言っていないけど、近々大きな作戦があるの」

「…ちなみに、作戦は？」

「オペレーション・エクスカリバー」



「りんごーん、りんごーん」

何も無い空間、いつとも分からぬ時間。

そんな世界で少女は歌う。

「はろお、ぶえいぶいー。あい、りんぐ、ぎ、ベーる」

歌う、謳う、詠う。

どこかアホみたいな歌声で、彼女は歌う。

「……えっ、どこどこ？」

彼女の名は、エクスカリバーと言った。

原作11巻 エクスカリバー編

やはりどこでも歳末は忙しい。

「なあおいフォルテ。オレら何してんだ？」

「宇宙に暴走した機械を止めに来たんすよ。なんでも、制御下から離れたとか」

「ちゃんと管理しとけての。何してんだあの人達」

亡国機業の元に下ったフォルテ・サファイアとダリル：もとい、レイン・ミューゼル。

彼女達がいるのは暗い空。それもそのはず、彼女達は現在宇宙飛行パッケージを装備させた専用機を操り、宇宙に来ているのだから。

「目標は謎の良くわかんねえIS」

「ちゃんと話は聞いてくださいっす。目標は高度エネルギー収束砲エクスカリバー。まじ、まともに食らったらダメなやつっす」

「マジなやつで？」

「マジなやつっす」

軽口に叩きながらも強敵に挑むのはIS学園にいた頃と変わっておらず、エクスカリバーの施設内部への侵入を試みる。

「お邪魔すんぞー」

「お邪魔しまーっす」

その重厚な外見からは想像もできないほど簡単に、施設内部への侵入を果たす二人。

「おろ？」

「んえ？」

しかしその数秒後、彼女達の通信は途絶えた。

地上の上、空の遙か上。

皮肉にも、ISが開発された本来の目的の活動の場、宇宙から、地球に危機が迫っていた。



「もし、いーくつねーとー、おーおーみーそーかー」

「こどもの日にはー、チョコ食べてー」

「コスプレをしてー遊びましょー」

「はーやーくーこーいーこーいー、せつぶーんよー」

「いや、色々混ざりすぎだろ」

本来は元旦に向けての歌だが、最初に大晦日、その次にこどもの日、バレンタインデー、ハロウィン、節分と様々な行事が混ざっていくその替え歌は、時守を先頭として、簪、楯無、本音というメンバーにより生徒会室の中で歌われていた。

「お盆とか海の日入れたバージョンもあるぞ」

「それ休日ならいくらでも作れるじゃねえか」

「：てかこの替え歌J A S R A O大丈夫かな」

「原曲の面影がほとんどないから大丈夫じゃないか？」

替え歌を歌っていた4人と一夏、虚を入れたいつもの生徒会メンバーがこの生徒会室に集まっていた。

「といっても、ただ集まっているだけではない。」

「ねえ剣君、一夏君。冬休みの予定って、二人ともどうなってる？」

「ん？俺はアレや、前に言うた通りこの冬は普通に自由やで。どこに旅行に行ってもいいし、どこで年越ししてもいいらしいわ」

「なら、私たちの家に来ない？シャルちゃんやセシリアちゃんも日本で年越ししてみたいって言ってるんだけど…」

「絶対行くわ。：予定入れられたらロジャーぶっ飛ばしたろ」

「年末のお泊まり会の前に、大掃除とかあゝ、クリスマスでの飾り付けとかも、いちお、生徒会のお仕事だよおゝ」

「だってよ、剣」

「黙れ童貞。お前も生徒会やろが」

「ど、どどど童貞は関係ねえだろ!？」

「関係ない、とはあながち言えないかも知れませんよ。一夏くん」

狼狽する一夏に、トドメの一撃を刺しにいったのは意外や意外。虚だった。

「クリスマス・イブは学生であろうとカップルが最も性交をしやすい日だと聞いたことがあります。しかし、クリスマスをぼつちで過ごすことを回避するためだけに付き合った彼女とはそんな夜は過ごせず、すぐに別れてしまうのだとか」

「そ、それで…？」

「結論から言います。12月に入った時点で、一夏くんに彼女が出来ていないのならば、クリスマス、並びにクリスマス・イブには大した予定は入っていません」

「…：はい。その通りです…」

「クリスマス・イブが誕生日だと言っていたセシリアさんはお嬢様達と共に過ごすようですし、私は…：その、弾君と会うことが決まっていますので、クリスマス・イブとクリスマスには一夏くんだけが残ることになりますね」

「…：の、のほほんさんは？」

「おー、デートのお誘いー？」

「本音は布仏家での大掃除があります」

俗にいう詰んだ状態である。

本来ならば数馬や弾と男だけでの慰め合いをするのだが、弾は駆け抜け。数馬は期末テストの補講が決まっているらしい。

自分が高校に入っても遊んでくれる友人がそれだけしか居ないことに内心絶望していると、時守から助言が飛んできた。

「せやったら、モッピーとかと遊べばええやん」

「え、箒？」

「おお。それと鈴とラウラでも連れて4人で遊園地でも行ってこい。あ、後、蘭ちゃんとかも誘ってみたら？」

「うーん…：みんな誰かと遊ぶんじゃないか？」

「今すぐ聞いてみる。30秒以内にオツケー貰えるわ」
「…：分かった」

渋々、かつ少し緊張しながら4人にメッセージを送る一夏。

すると、時守の言った通り速攻でオツケーの返事が帰ってきた。

「マジで返ってきたんだけどどうしたらいいんだ…」

「行けばええやん。5人で」

「蘭とラウラは初対面だぞ?」

「お前が紹介したつたらええやろ」

「まあ、それもそうだな」

簪を膝の上に乗せながら椅子に座っていた時守は、少し目線を下げ、机の下で携帯電話の通知を確認する。

そこには、箒、鈴、ラウラ、蘭からの夥しい程の感謝のメッセージが届いていた。

彼女達4人は一夏のことが好きだ。だが、彼が自分からクリスマスに誘ってくることなど、誰かに言われなければしないということも知っていた。

「一夏くんも、そろそろ彼女とか考えたら?」

「んー。そもそも、俺を好きになつてくれる人がいるか分かんないですし、まだそれほど余裕が無いですから…。恋愛は、もう少しISで強くなつてから考えます」

「おー、その意気や。俺もその考えで強くなつた」

「ほんとかよ」

「マジやで。告白するなら強くなつてからって思つたら死にかけた。てへっ」

「っ!てへっ、じゃないっ!」

「ふっ!?!」

膝の上で抱きしめていた簪の後頭部による軽い頭突きを喰らった時守が小さく悲鳴をあげる。

「ほんとに、もうあんなことしちゃ、嫌だから…」

「ごめんって。氣い付けとく。かもしれない運転やな」

「ISのかもしれない運転ってなんだよ」

「もしかしたら裏切り者が出るかもしれないので、怪しいものはとりあえず潰しておく」

「ただの通り魔じゃねえか!」

氣をつけてくれるんだつたら、いいよ。と小声で囁く簪が愛おしくてたまらなくなつた時守が簪を強く抱きしめ、その2人のやり取りを

見ている我慢できなくなった刀奈が背後から時守を抱きしめた。

苦しそうにしながらもどこか嬉しそうな簪を抱きしめる時守を、刀奈が胸を押し当てながら背後から抱きしめるといふ構図が出来上がったが、この3人でいる時は割と日常茶飯事なので虚も一夏も本音も気にしてはいなかった。

「それはそうとね、剣くん。さつき本音ちゃんが言ってたクリスマス準備なんだけど、私たちで買いに行かない？」

「んじゃ、どこ行く？」

「わ、私も見たいものがあるから…、れ、レゾナンスでいい…？」

「ならわたしもついていく。これでもいちお、かんちゃんのメイドなのだから」

「では、私と一夏くんはここで留守番、ということですね」

「一夏くん。虚ちゃんが魅力的だからって、襲っちゃダメよ？」

「お、襲いませんよ！」

「お嬢様っ！からかうのはやめてください！」

「んもう、冗談よ、冗談。そんなに怒らないでよ」

顔を赤くした一夏と虚を見て微笑む刀奈。

彼女がいらない一夏はともかく、弾という彼氏がいる虚もそういう反応をするということは、まだそういった経験が無いのだろう。

「じゃあ、改めて剣くん。明日、駅で待ち合わせね？」

「ん。…ちゃんと起きや、のほほん」

「わかってるわかってるう」

ぱつと開かれる刀奈の扇子。

そこには、「日曜日」と達筆に書かれていた。

◇ ◇

「なあ簪。見たいもんって何？」

「えっと、その…。服とか、いろいろ…」

「ん。刀奈は何もない？」

「うくん、そうねえ。アクセサリーをちよつと見てみたいぐらいね」

「ほうほう。のほほんは？」

「わたしは、ちよつとおっぱいが大きくなってきたから、ブラ

「ジャーが見たいのだ」

「女の子が彼氏でもない男子にそんなこと言うんじゃないやありません」

「てひひ」

翌日の朝。

約束通りに駅前で集合した4人は、レゾナンスへと向かっていた。

事前に部屋で、どういった店に行ってみたいかは話していたのだが、今日の彼女たちの気分はどうなのかを確かめたのだ。

「ほな、服見てから」飯食べて、またそこからどっか行くって感じやな」

「そうなるわね」

店内に入り、ぶーらぶーらと練り歩く。

刀奈は大半の冬服を既にロシアで仕入れているということなので、この場で買うのは簪と本音、時守の3人の物になった。

その一行の視界に入ってきたのは、クリスマス関連のグッズの数々。

時期的に言えば当然なのだが、この1年があまりに忙しかったため、実感がわかなかつたのだ。

「…サンタか。去年の今頃は金属バットでぶっ飛ばしたいぐらいにウザいおっさんやったな」

「け、剣のお家には、サンタさん来なかつたの…?」

「絶対寝やんとこと思っただ目え見開きながら布団の中に居てたら、呑んで帰ってきた親父が脱いだ靴下を俺の枕元に置いてそのまま風呂入りに行っただ」

「ええ…」

「んでその翌日にクリスマスのプレゼント間違えたって言われて渡されたのが赤本2冊」

「確かにクリスマスカラーだけどお」

時守の言い分としては、受験生のクリスマスなのだからその程度で大丈夫だということらしいが、本人が気に入らなかつたのはその前の出来事。

酔って帰って来た父の靴下があまりに臭く、吐きそうな思いをした

という。

「なんか、刀奈達の家はクリスマスパーティーとかプレゼント交換とかしてそんなイメージするわ」

「クリスマスパーティーはしてるわね。プレゼント交換も、みんなずつと一緒にいるから、大体好みの物は上げちゃって候補が無くなりだしてからやめたのよねえ…」

「なんかそこんとこリアルやな」

「そうなの。簪ちゃんとか、私に仕返しと言わんばかりに毎年裁縫セットを選ぶのよ？」

「…そういうお姉ちゃんも、私に向けて最近毎年豆乳選んでくるのに」「わたしは、きぐるみだったよお」

「虚さんに回ったらどうすんねんそれ」

「…：1回、本音が間違えて買ったキッズサイズのきぐるみが虚さんに行っただけど…色々、凄かった」

着させられて羞恥に悶え苦しみ、炎が上がるほどの怒りを頭にしつつ、そのスタイルが凄まじかったらしい。

「んでカナが弄つてのほほんが怒られて簪は宥めてたと」

「凄い…。なんで分かるの…?」

「いや、なんかその時のまま変わらず成長してんたって」

本音のふわふわした行動をカバーするために虚が東奔西走し、その虚を見て刀奈が弄り、怒りそうになったところを簪が抑える。

それが今の4人の日常だった。

「むっ、何よ剣くん。私達が幼いと言っても言いたいのか？」

「昔の可愛らしさも残ってるってことや」

「てひひく、ほめられたー」

「のほほんは…うん。なんかほんまにそのまま成長してそうやな」

そのグラビアアイドルも青ざめてしまうようなグラマラスな身体以外、本音はそのまま育ったのだろう。

その分、虚の心労は耐えなかっただろうが、本人もさほど嫌がっていないので良いのだろう。

「ねえ剣くん。私、剣くんの昔のこともって聞きたいわ」

「ほえ？…俺の？」

「ええ。簪ちゃん達は臨海学校の時に理子ちゃんに聞いたらしいんだけど、あれからなんだかんだ忙しくて聞けてないのよ」

「ほうほう。ええよ。…って言っても、そんな大したもんちゃうけどやな」

ゆっくりと歩きながら時守が話していく。

4人の時間は、それと同じほど穏やかに流れていった。

◇ ◇ ◇

「どういう、ことだ…」

時守が刀奈達に昔話をし始めていたのと同時刻。

IS学園の職員室の自分に割り当てられた席で、千冬はモニターの前で頭を抱えていた。

「凰鈴音、ラウラ・ボーデヴィツヒ、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア、篠ノ之箒、織斑一夏、更識簪、更識楯無、共に稼働率最高。なおも上昇し続けており、第二形態移行並びに単一仕様能力の発現の可能性高まる…」

そこに映し出されているのは、世界各国、組織から送られてきた教え子達のISの稼働データ。

その誰もが、異常なほどの成長を果たしていたのだ。

そしてやはりというか、その最たる例が、彼だった。

「…時守、剣。上限、不明…。ISのさらなる形態変化の確率、99.7%…。操縦者と機体の相性、常時最高状態。なんだ、これは…。まだ、終わりでは無いと言うのか…？」

千冬自身、自らが世界で初めて成功させた第二形態移行の先、時守が成し遂げた第三形態移行すら初めて見たのだ。

しかし、データは彼はまだ進化すると語っていた。

「今の時守が手を抜いているとでも言いたいのか…？…いや、そんなはずがない。手を抜いて第三形態移行など、出来るはずがない…」

手を抜いていない。彼は、全身全霊でIS関連を鍛えている。

だが、最近は一時期ほど、自分を追い込んでいない。

ならばなぜ、彼の上限が分からないのか。

千冬はその答えに、既に至っていた。

「完全同調、だな。ISコアと自身の自我を、半強制的に融合させる……。それで、『金色』と時守の相性が最高状態となり、いくつもの進化の可能性が芽生えた、と」

彼が発現させた単一仕様能力、『完全同調』

一見すれば、ただISと操縦者の間に存在する電位差を無くすこと
によって操縦時のラグを無視するという効果のそれだが、中身を見る
とそうではない。

発動している状態ならば、ISの設定を変更出来たり、その状態で
他のISに触れても同様のことが出来たり、コアと特別な空間で話す
ことが出来たりするなどである。

「…まだ分からんことだらけ、ということか」

空前絶後のブラックボックス。

その中身を理解できているのは開発者の篠ノ之束だけだと言われ
ているISコア。

束の親友である千冬ですら分からないそれは、まだまだ秘密に包ま
れていた。

「いや、分かっていることは一つあるか…」

そう一人ボヤきながら、千冬はデスクトップ上の一つのアイコンを
ダブルクリックし、開く。

そこには、稼働データを送ってきた世界各国、組織からの『IS学
園でのこれまでの実績を送るよう』と言った内容のおびただしい程
のメールがあった。

「…………私の仕事が終わらないということだ…」

元世界最強、織斑千冬。

現在の職はIS学園のただの一教師。

ただ物理的に強いからというだけで跳ね返せることは、想像以上に
少なかったのだ。

「ふ、ふふふ…。終わらな—い終わらな—い…。仕事が終わらない—」

夏休みに合コンで見事に彼氏を引つ掛けた同僚は、この12月は予定で一杯である。

千冬と真耶、特に千冬はなぜか忙しかった。

「…イブ、クリスマス、年末…、彼氏と家でいちやいちゃゴロゴロ…はあ…」

弟の一夏、もう一人の男性操縦者の時守、東の妹の箒の入学。

それから起きる数々の事件。

様々な国から送られてくる、そして送らなければならないデータの数々。

増えていく事務作業。生徒から出てくる多くのクレーム。

寮長としても、担任としても、IS操縦者としても、千冬は疲弊していた。

「…時守い……」

良くも悪くも、様々な方法で常に千冬のスプレスの元となり、またストレス発散の道具となってきた時守。

「……別に、私だって依存してもいいじゃないか」

誰も見ていないところで、机に突っ伏しながらぷくーつと頬を膨らませる。

今まで、束ほどまでとは言わないものの対人関係で、時守ほどは上手くいってこなかった千冬。

何だかんだで、彼女は時守のことを気に入っていた。

「ま、まあ私はあいつのコーチだからな。これからもシゴいてやろう」

最近、というより時守が国際連合宇宙開発専用ISステーションが帰ってきてから、彼はまだメキメキと力を付けてきている。

打鉄では、弟子相手に快勝出来ることも少なくなってきた。

「…暮桜」

千冬が零すのは、かつての相棒の名前。

その言葉を聞いてなのか、千冬の携帯がぶるりと震えた。

「……ん？電話？」

数回の間、続けてバイブレーションが続いたので、携帯をジャケットのポケットから取り出す。

画面を見るとそこには、久しく懐かしいようで、良く見る名前がそこにあった。

「――束？」

恋人かそうでないかは大きく違う。

「えーっと、なにになに？『私は飼い猫を女子の大浴場へと放ってしまった犯人です』…。一夏アంతタ、何したの？」

「あ、あはは…。ちよつとシャイニイがさ」

「ワンサマの目を盗んで、セシリーが入ってる大浴場に入ってもてん」

IS学園の女子の大浴場前の廊下で、一夏はそう書かれたプラカードを首からぶら下げて立っていた。

「えっ、じゃ、じゃあもしかして…」

「覗いてねえよ!？」

「ワンサマがそのまま突入して行こうとしたから、代わりに俺がいった」

「あ、あ…。…まあ恋人同士だもんね」

「恥ずかしがってるセシリーマジ天使」

「は、入るのなら入る前に一声掛けて欲しかったですわ…」

「それはほんまごめん」

事の顛末を言うところだ。

部屋から抜け出したシャイニイを探していた一夏が、女子大浴場の更衣室へと入って行くシャイニイを発見。

そのまま覗きに行きそうだった一夏を、偶然通りがかった時守が止め、更衣室に誰かいなか声をかけてみたところ返事が来なかったののでそのまま突入。

しかし、更衣室に人は居なかったのだが、浴場にセシリアがいたのだ。そのため、浴場に入ったシャイニイを捕獲するため、時守が再び突入。

無事、一糸まとわぬ姿のセシリアと出会ったのだ。

「…なんか新鮮やった」

「剣さんっ！」

「見慣れてるもんじやないの？」

「あの美しさを見慣れる訳ないやろが！」

「なんで怒鳴られんのよ」

「うう…恥ずかしいですわ…」

自身のことを誉められて嬉しく思う反面、彼のストレートすぎる言葉に照れて頬を染めるセシリア。

そうは思っているつもりでも、やはり不意打ちで裸を見られたことについては思う所があった。

「…いくら剣さんとは言え、急に見られるとさすがに驚いてしまいますわ」

「…うん。ほんまごめん」

「で、す、の、で。剣さんに罰ゲームですわっ！」

「喜んで！」

「…セシリア。多分アンタから何してもこいつには罰ゲームにならないわよ」

「むううう〜！」

互いにべた惚れなため、肉体的、精神的に大きな負荷のかかる罰ゲームを用意する気は、セシリアには存在しない。

そのため、セシリアの考えうるどんな罰ゲームでも彼が喜ぶ光景は目に浮かぶようだった。

「剣さんっ！」

「はいっ！」

「こ、この週末、わたくしとここに行ってもらえませんか？」

そう言っつてセシリアが差し出したのは、横浜にあるテーマパーク『Deパーク』のワンデイパスポートだった。

「あつ…横浜…」

「ほ、ポジハメパーク…」

「ダメ、ですか…？」

「ふ、二人つきりで…？」

「もちろんですわっ！」

鈴が察したのは、他でもない時守の心情である。

今年、無事にセ・リーグを制することが出来た虎。2000本安打を達成したベテランや盤石のリリーフ陣、開花した中堅や新人達がかく活躍しまくり、4勝2敗で日本一になることが出来た。

「…ポジ、ハメ…。うん、ええよ。…行こか」

「剣さん、どこか具合でも？」

「いや、大丈夫や…」

基本的に関西にしか出店していない某家電量販店のCMの呪いも見事に乗り切ったかと思つた、このオフ。なんとCSや日本シリーズでも活躍したユーティリティプレイヤーが横浜にFA移籍したのだ。時守の最良の選手だっただけに、ショックは大きい。

と言つても、その代わりに2年目のピッチャーが人的補償で来たのだが。

「まっ、来年もウチが勝たせてもらおうし、可哀想やからその分行つとたるかー!」

「…可哀想?」

「野球よ野球。セシリア、詳しくは知らないでしょ?」

「知ってますわ!」

「イギリスは…強かったか?」

「強くなくても知ってますの!」

セシリアの知っているは、存在やルールを知っているかどうか。

鈴の知っているは、応援歌やどんな凄い選手がいたかどうかを指している。

言葉が多少足りなくても理解できてしまう日本語のせいで微妙に差が出るが、大したことではない。

イギリスが野球が強いか、というのも問題ではない。

では、何が問題か。

「…ねえ、剣。セシリアと二人つきりでデートに行くつて…ホント?」

「あつ…しゃ、シャル…」

「…なーんて、冗談だよ、冗談。その、か、わ、り。ちゃんと僕達ともデートすること、ね?」

「どこ行く?ハワイとか?」

「そ、それは気合い入りすぎだよっ!」

他でもない、シャルロット、刀奈、簪のことである。

彼女達4人のうち、セシリア一人とデートするとなれば当然、他の

3人もそうして欲しいという意見が出てくる。

一瞬ヒヤツとした時守だったが、シャルロットからの意見をすぐさま採用し、セシリアだけでなく3人とのデートも決まった。

「では剣さん。この週末に」

「おう。…って言っても明後日やし、明日も会うし、なんやったら今から帰る部屋一緒やけどな」

「……言わないでくださいまし」

◇

「ついに来たか…」

「ついに来ましたわ！」

週末、セシリアとの約束通りDeパークで待ち合わせをし、無事合流した時守。

その彼の視界に入ってきたのは、ブルーのワンピースにホワイトのコート、そして唇に薄いピンクの口紅をつけた女神と、横浜に本拠地を置くプロ野球チームのユニフォームを着たマスコット達だった。

「…舞い上がりたい反面、ぶん殴りたい」

「どうしましたの？」

「いや、何でもない。ほな行こか、セシリア」

「っ、はい。…剣さん」

不意に、普段呼んでいるあだ名ではなく本名で呼ばれたセシリア。

最初は少し驚いていたが、その差し出された左腕を優しく抱き寄せると、彼の隣に密着し、その表情をよりうつとりとしたものに変えた。

「やはり、素敵ですわ」

「ん？…このこと？」

「いいえ。なんでもないですわ」

「そか。じゃ、早速」

最近にどこを回る、などは全く決めていないが、ぐい、と歩き始めた彼の身体に引っ張られる。

計画性がないとも言えないこともないが、まだパークに入園して間もない。園内をぶらつきながらでも決まるだろう。

IS学園に入る前のセシリアが知らなかった男性の良さが、そこに

はあった。

「あつ、悪い。ちよつと引つ張つてもた？」

「いえ、大丈夫ですわ。…むしろ、もっとわたくしをエスコートしてください」

「…ほう。なら、俺には大人しいエスコートは期待しやんといてな」

「そんなこと、剣さんとお付き合いを始めた頃から分かっていましたわ」

「きびしーっ！」

笑い合いながらも、彼の足はどんと前へと進んでいく。

「…剣さん」

「おん？」

「随分と、お身体が遅しくなられましたわね」

「まあ常日頃からちっふー先生にボコられてるからな」

「それでも、ですわ。…本当に、素晴らしいお身体ですわ…」

「ちよいセシリア。まだ朝。まだ朝の10時やから。良い子もいるから」

「分かってますわっ！それは、今日の夜で、す…わ…」

「…うん」

顔を真っ赤にしながらのセシリアの言葉は、その照れが時守にも伝わるほどに、2人にとつて凄まじいものになった。

セシリアの爆弾発言により始まった2人のデートは、誰にも邪魔されることなくスタートした。

「で、ではまずは、このドッグパークというところに行きましょうっ！」

「おお。…犬か」

「剣さんは猫派…でしたか？」

「いや、どつちも好きやで。…ただ」

「ただ？」

「小学校の帰り道で猛犬がおったこと思い出してな」

「ま、まさか噛まれましたの!？」

「ちやうちやう。その猛犬にめっちゃ懐かれてさ。そいつの子供1匹

引き取ってん」

なんでもない話を広げながら、2人の足はドッグパークへと向かった。

「その子供もなー、普通に可愛かってんけどなー」

「どうかしましたの?」

「死んでもた時のおかんの泣き方が恐ろしすぎてトラウマやねん」

「…ま、まあ悲しいのは分かりますが…」

「泣きすぎて暴れてたら俺の部屋の窓ガラス割れてさ」

「だ、大丈夫でしたの!?!」

「そのあと脱水症状でぶっ倒れて大人しくなっせん」

「…け、剣さんの御家族も、凄まじい個性をお持ちですのね…」

ペットを飼うに当たって、いつかは必ず訪れてしまう別れ。

時守もしつかりとそれは理解していたし、世話を見ていた分悲しみも大きかった。

しかしそれ以上に自分の母親の号泣の方が印象に残ってしまったているのだ。

「セシリアも意外と号泣しそうやな」

「…そうですね。きつと、自分が好きになって一緒に過ごすのですから、別れの時にはきつと泣いてしまいますわ」

「…せやな。今なら、よう分かるわ」

「わたくしも、そして刀奈さんや簪さん、シャルロットさんも、今なら良く分かりますわ」

セシリアの彼の腕を抱きしめる力が強くなる。

それにより、セシリアの胸の膨らみが時守の腕に押し付けられることになるが、今は両者に邪な気持ちなどは出てこない。

「強ならなあかなあ…」

「もちろん、わたくしもそのつもりですわ。まだ第二形態移行の兆しは見えませんが、いつか必ず追いついてみせますわ!」

「ああ、待ってる。まあ俺も頑張るけど」

「ならば、わたくしは剣さんよりも頑張りますわ!」

「んじゃ俺はさらにそれよりも頑張る!」

「オーバーワークだと分かり次第、再び全員でお仕置きですわよ」
「……ごめんなさい」

他愛もない話を進めながら2人はドッグパークへと入っていった。
2人を待ち構えていたのは、小型から大型まで様々な種類が揃った
可愛らしい犬達だった。

「まあっ！」

するりと時守の腕から離れ、ポメラニアンやヨーキーといった小型
犬の元へと駆けていくセシリア。

そのうちの1匹をひよいと抱き抱え、時守の方へと振り向いた。

「見てください剣さん！可愛らしい子達ばかりですわ！」

「おいしよ。おー、ほんまや。ちゃんと躡られとるし、可愛いやつばっ
かや」

時守も彼の元へゆつくりと近づいてきたパグを慣れた手つきで抱
き上げ、セシリアの元に向かう。

「うりうり」

「わふっ！」

「おっ、何吠えとんねん。…セシリーを取っておきなから…」

「わうっ！」

「このアホ犬め」

「もう、剣さん。安心してくださいまし。わたくし立ちは、剣さん以外
に靡きませんわ」

「ハッハッハ。見たかアホ犬。これが俺の女神や」

セシリアが抱いているヨークシャーテリアの頭をわしわしと撫で
ると、ヨークシャーテリアも負けじと時守の手に頭を押し当ててき
た。

「お、なんや。遊びたいんか？」

「わうっ！」

「…あふっ」

「おー、お前もか。んじゃほい」

セシリアがヨークシャーテリアを下ろすのとほぼ同時に時守もパ
グを下ろす。

すると、その二匹だけでなく様々な小型犬が時守の足元へと寄つてきた。

「俺の足からジャーキーの匂いでもしてんのか？」

「きつと、動物に好かれる体質だと思いますわ」

「俺が犬やったら絶対セシリアの方行くけどなー。ほれ、どした」

遊んでほしいとアピールする犬達の中で、先程まで時守に抱えられていたパグが大人しくじつと時守のことを見つめていた。

それに気づき、しゃがんで視線を近づける。

「遊びたくないんかー…つとおつ!？」

すると、いきなりそのパグが時守の顔面へと襲いかかった。

その衝撃に尻もちをつかざるをえなかった時守は、しばらくの間されるがままに顔を舐め回されていた。

「ちよ、おい…」

「うふふつ。好かれましたわね、剣さん」

「鼻ん中に舌突っ込むなあっ!」

時守が仰向けに倒れても舐め回しは止まることを知らず。

結果、時守がさらに数匹の犬達にもみくちゃにされて、2人はドッグパークを出たのだった。

◇ ◇

「あー、凄まじかったわ。あのパグ」

「まるで剣さんのようなわんちゃんでしたわね」

「そうか？」

「ええ。いつの間にか人に寄り添い、こちらが構っても流したかと思えば、急に猛アタックを仕掛けてくるような…」

「…ごめん。俺そんな厄介みたいな存在やったとは…」

「そ、そういう意味ではありませんわ! 全て、いい意味で、です!」

「ははっ、こつちも冗談や。じよーだん」

2人並んでパーク内を少し練り歩き、良さげなベンチが無いかどうかを探す。

「あつ、剣さん。ここはいかがですか？」

「んー…」

セシリアが指さした場所は、確かに悪くない。しかし。

「いや、あつちにしよ」

「あちら…:ですの? いいお天気ですわよ?」

「やからこそ、や」

時守がセシリアの手を握って歩き出した方向にあったのは、日陰であり、さらにパラソルの下にテーブルが置かれている少人数用のスペース。

せつかくの晴天がもつたいない、とセシリアは考えていた。

「どうしてここにしましたの?」

「まあ見ててみ」

時守が視線を向けた方向に、セシリアも顔を向ける。

そこには既に人が座っており、カバンの中から弁当を取り出していた…:のだが。

「…:あ、あらまあ…:」

「こういう遊園地のハトってのは、時間帯やら場所やらで、美味しい餌が食えるつての分かつてるからな。晴れの日なら尚更寄ってきて食事にならへんねん」

「少しなら上げても構いませんが…:」

「目え離れた隙に死角から奪われるつてこともあるからな」

まるで狙いを付けられていたかのように、数十匹のハトが一斉にそのベンチの周りに群がり始めたのだ。

動物に餌をやる程度なら、と思っていたセシリアだが、その自分達の昼食すら危うくなってしまうかもしれない光景を目の当たりにして考えを改めた。

「物知りですね」

「ただやられたつてだけやねんけどな…:」

「それは大阪のテーマパークで、ですか?」

「ん? せやけど…:」

「でしたらわたくし、来年の夏にでも行ってみたいですわ!」

「おお、ええな。ほなそんな時は」

「ええ。もちろん皆さん揃って、ですわ」

2人揃って笑い合う。

こうして平和な遊ぶ予定を話し合える時間すらも、付き合っていないがらあまり無かったのだ。

変な話ではあるが、皆が皆初めてできた恋人同士。まだまだぎこちない所が多い。

「まあ、後それ以外にもこの場所を選んだ理由はあんねんけどな」

「と、言うത്?」

「あ、その前にセシリア。髪に何か付いてるわ」

そう言つて、反対側に座るセシリアの髪を触るために身を乗り出す時守。

首元の髪に時守の指先が触れ、そのまま彼の手のひらがセシリアの後頭部へと回った。

「えっ…。っ、んんっ…ちゅっ…」

「んっ、ぷはっ。…こうやって、人目を気にせずキス出来るからな」

完全に不意を突かれたセシリアは、少しの間何をされたか理解出来なかった。

後頭部を優しく掴まれたかと思えば、気づけば唇を彼に奪われており、その彼は今いたはずらっぽく微笑んでいる。

「…こんなの、ズルいですわ」

「ズルい俺は嫌い?」

「そんなことないですわ。…ですが、心臓に悪いですから…。キスをしたいのならば、もっと近くに来てくだされば…」

「ん。りよーかい」

対面に座っていた所から、セシリアと同じベンチ、それもお互いの肩が密着してしまう程近くに座った時守。

「剣さん。好きですわ…」

「俺も。好きや、セシリア」

再び2人の距離が無くなるのに、時間は要らなかった。



「ふいふ。遊んだ遊んだ」

「日本のテーマパークも素晴らしかったですわ」

「テーマパークだけちゃうで？」

昼食の後、ホラーアトラクションや絶叫マシン、絶叫マシンと観覧車に絶叫マシンと乗っていき、夕暮れ。

帰り始めている人もちらほらと出てきている中で、2人は園内をただ歩いていった。

「ふふ、剣さん」

「ん？どないした？」

「ただ呼んでみただけですわっ」

「…そか」

2人の手は繋がれたまま、ゆつくりとしたペースで歩く。

国連代表としての責務、多方面から押し寄せるインタビュウなど、そして、世界初の2人の男性操縦者のうちの1人としてやらなければならないこと。

年末だからこそ抱えてしまう様々な問題を忘れられるこの瞬間が、時守はたまらなく好きだった。

「セシリア」

「はい？」

「…ありがとな」

「…ふふっ。どういたしまして、ですわ」

繋いでいる右手に自然と力が入る。

細く、しかし柔らかく、美しいとしか言いようのないセシリアの手。そんなものを今、自分が掴めているということに少しの優越感を覚える。

時守がそんな感情に浸っていた、まさにその時だった。

「ん？…あつぶね」

突如時守とセシリアの元に、光が飛来した。

セシリアの肩を抱いて体の向きを変えることでそれを避ける。

それと同時にISを起動だけして、敵を確認する。

「国籍…イギリス？…セシリア、なんか知ってるか？」

「いえ…で、ですがあの機体は…」

『ダイヴ・トゥ・ブルー』…。なるほど。どうやら、また亡国にイギリスのISが巻き込まれたみたいやな」

園内にある他の施設は決して狙うことなく2人を襲撃した下手人は、セシリアのよく知る人物だった。

「…チエルシー。一体何の真似ですの？ブルー・ティアーズの3号機まで持ち出して」

「お迎えに上がったのです、お嬢様。お嬢様…いえ、ここではセシリア・時守・オルコット様と呼びましょうか」

「ぜひ」

「この場面で普通その名前にする？」

振り返った先にいたのは、イギリスでのセシリアの専属メイドであるチエルシー・ブランケット。

シリアスな雰囲気から一転。彼女の口から放たれた一言は、その空気を少しばかり緩めることとなった。

「少なくとも、後3年のうちにはそうなるのですから良いのです。それよりもセシリア様。私も目的達成のためには、あなた様が必要不可欠なのです」

「目的？」

「今は言えません。それはまた、イギリスでお会いしたときにでも」

チエルシーがそう言うと、突如として彼女が機体ごと空間に沈むように消えた。

「ワンオフ、か」

「剣さん？」

「前にちよつとだけイギリスのIS開発施設を視察させてもらったことがあってな。確か予定やったらイギリス代表が乗る予定やっただけやけど…」

「チエルシーは国家代表ではありませんわ。…となると」

「またなんか起きたってとこやな」

また剣さんが無茶をしますのね、とセシリアは頭を抱え。

新機体と戦えるかもしれねえなんて、オラワクワクすつぞ、と時守

は密かな興奮を抱いていた。

いざ欧州へ

「剣さんは当然として、楯無さん、簪さん、シャルロットさんはまだ分かりますわ。織斑先生と、山田先生もまだ納得いきます」

ロシア上空。セシリアは自身が所有する自家用ジェット機の機内でわなわなと震えていた。

「なぜ皆さんがいますの!?!」

「何よ、いちやだめって言うの?」

「デートの邪魔をしないでくださいましっ!」

「デートではない馬鹿者」

「ふみゅっ!?!」

この場になぜそれがあるのかは分からないが、千冬の懐から取り出された出席簿がセシリアの頭を捉えた。

あの日、Deパークで二人が出会ったセシリアの従者であるチェルシー。彼女の発言は明らかな罫のように思えた。

その真実を知るべく、セシリアと時守は二人でイギリスに向かう予定だったのが、いつの間にかメンバーが増えていたのだ。

「まあまあセシリア。みんなセシリアのことが心配なんだって」

「う、うむ。そうだぞ」

「このジェット機には赤外線感知センサーは付いているのか?」

「付いてはいませんが…どうしましたの?」

増えたメンバーというのは、言ってしまうえばいつものメンバーだ。

時守とその彼女たち、一夏、箒、鈴、ラウラ、そして一年一組の担任、副担任だ。

「あれ、そーいや剣はどこ行ったの?」

「…剣は今、備え付けのトイレに行ってる。離陸前に食べ過ぎたつて…」

「アホでしょあいつ」

イギリスに向かう面々の空気は軽い。

流石にゴレムやら亡国機業やらが飛んでくる自体となれば話は変わるが、今はまだ空の旅の真っ最中。

イギリスに着くまでは常に場を張り詰めなければならない、というわけでもない。

「…本当に付いてないのか?」

「でしたらどうですか?」

しかし、そんな機内に投げられた一石。

それはラウラの言葉と、その彼女の後ろの窓に映る大きな影だった。

「み、ミサイル!」

「またあの国か!」

「ほんつと、いい加減にしてほしいわよ!」

「授業中にもアラート鳴ってうるさいし!」

「お姉ちゃんに言っただけ潰してもらおう!」

どん!と大きな爆発音。

各人ISを展開し、ジェット機から飛び降りる。その時、簪が思い出した。

「…あ。け、剣は…?」

「っ、た、確かまだおトイレに…!」

「剣くん!」

「けえええん!」

シャルロットの叫び。それに呼応するかのようには、爆炎の中から光が現れた。

「やばいやばい。もうちよいで放送規制のかかるえげつないもん見せてまうとこやったわ」

「ぶ、無事なの…?」

「ん?おお、無事や無事。なんか衝撃きたお陰で便秘治ったし、そっからも割と展開する余裕あったしな」

ミサイル直撃から爆発までそれほど時間に余裕はなかったはずだが、こんな形で無駄なハイスペックを發揮した時守。

彼の肌には傷一つついていなかった。

「てかワンサマとセシリー人抱えてたら手塞がるやろ。貸してみ」
「あつ」

「すみません剣さん…」

一夏が抱えていた千冬とセシリアが抱えていたパイロットを『ランペイジテール』を巧みに操り、彼らの腕の中からするりと巻き取る。「おいこら時守。人を物のように扱うな」

「んじやはよ学外でのIS使用許可もぎ取ってきてくださいよ」

「……はあ。流石に生身では飛べんからなあ。今は仕方なく持たれてやるとしよう」

IS学園内で千冬とこれほどまでに対等な立場で話せる生徒は他にはいないだろう。

などとその場のほとんどが考えていると、爆炎の側にいた女が降りてきた。

「流石に今のじゃ堕ちないカー。ねえ、更識楯無さん」

「あ、狐目クソサイコレズ」

「アア!? テメーはファツキン関西人…よくも、よくも私のお姉さまを…!」

「あら残念。私の妹は簪ちゃんだけよ?」

「……お姉ちゃん」

空中にいたのは、かつて楯無にロシア国家代表の座を奪われたログナー・カニーチェ。

密かに楯無ラブを貫いていた彼女だが、時守と楯無が交際を始めたことを知り絶句。

以来、もう隠すことも我慢することもやめたのだ。

「ファツキン関西人とか言うてるけど、お前そいつに一回も勝ててへんねんで?」

「じゃかあしいワ! お姉さまから離れろ!」

「私の幸せを願ってるのなら、剣くんとのお付き合いを応援してほしいわ」

「アゝアゝアゝアゝアゝアゝ! 究極の選択が私に迫る…!」

「さ、剣くんも簪ちゃんも、みんなと一緒に先に行つて?…織斑先生、引率をお願いします」

「ああ、任せろ」

ばつと広げられた扇子に書かれていたのは、「また後で」という文字。

時守と簪はその言葉を信じ、シャルロットたちの元へと向かった。



「なあ剣。本当に楯無さんについてなくて良かったのか？」

「んー…まあ順当に考えてカナが負けるわけないし、あの狐目がカナに傷つけへんやろしな。多分ロシア側からの迎えついでに久しぶりに手合わせつてとこやろ」

「はあく。よく分かりますねえ、時守くん」

「ログナーそんな強くないですしね」

1年生専用機持ち達8人と真耶の計9人でドイツへと向かう。

と言つても、このドイツ経由は最初からルートの中に入っていたものなのだ。

「元国家代表よ？」

「まあそれでも第二形態移行したカナに完敗つてことは、さほどやってことや」

「そういうものなの？」

「そういうもんや」

ISバトルでは機体の性能と操縦者の技量が勝敗を大きく左右する。

実力が均衡した国家代表クラスの戦いでは、言わずもがな機体の性能が差をさらに大きく広げる。

「そつすよね？ちっふる先生」

「まあな。時守のようなバランスのいい第二形態移行が出来れば、ISに乗りなれた者なら、簡単に勝てる…かもしれないな」

「その辺には単一仕様能力の使い勝手も関わってくるってわけだなー、ワンサマ」

「来ると思ってたわー！」

単一仕様能力の使い勝手の良さ。その話題になれば必ずと言っていいほどに出てくるのが、一夏の『零落白夜』と時守の『完全同調』

超過』だ。

「一発当てたら勝てんねんぞ？普通に使ったら連戦連勝やろ」

「お前に当てられないから俺は負けてるんだが？」

「そりや俺の単一仕様能力は俺の技量に依存してるからなー」

「おまけに雪羅が出てきてから余計難しくなつたし…」

「慣れろ」

「うぐっ…」

国連代表という立場に置かれ、第三形態移行まで済ませ、四つの単一仕様能力を発現させた時守にそう言われ、言葉が詰まる一夏。

この中でISにトップクラスで慣れている時守だからこそ言える言葉だった。

「慣れろって、ISでジュース買いに行かせるやつ？」

「あれは初級編やで、シヤル」

「じゃあ…上級編は？」

「地上から10cmの所で仰向けに寝転びながら1時間浮遊すんねん」

「えっ…」

「ちなみに本当だ。私が現役の時は、逆立ちでアリーナを一周などだな」

あいも変わらず代表クラスの人間は何をやっているのだろうか、と考えてしまう候補生達。

変態機動が得意な時守、言わずもがなの千冬、そして冷静に考えればナノマシンの入った水を手足のように操るといふ常人離れしたことをしている楯無。

慣れるにしてももう少し他に方法は無いものか。

「ま、慣れたら強なれるってこっちゃ」

「もつと、頑張らなきゃ…」

「頭の中からISを展開してるって感覚すら抜けたら合格やで」

「どんな感覚よそれ」

「こんなにも大きくて翼すらあるものを、正しく服を着ているかのようには操るのだ。」

その感覚を身につけるには、それ相応の時間の訓練が必須となる。

「あ。てかパイロットさん痛くないっすか？」

「えっ？は、はい。大丈夫ですけど…」

「……おい。なぜ私には聞かん」

「いや、ちっふー先生やったらこんぐらいでダメージ受けへんかなって」

「…ドイツに着いたら覚えておけよ貴様」

ランペイジテールにくるりと包まれたパイロットと千冬。

彼女達に落ちてしまうかも知れないという不安など一切持たせることなく、時守と専用機持ち達はドイツへと向かった。



「お久しぶりですっ！教官っ！大先生！」

「うい、お疲れクラリス」

「出迎えご苦労、クラリツサ」

『ご苦労様ですっ!!!』

時守達一行がドイツの黒ウサギ隊の基地に降り立った時、彼らの前には既に黒ウサギ隊の面々が整列していた。

そしてその中央、一人だけ列よりも一歩前に出て時守達を迎えたのが、黒ウサギ隊副隊長のクラリツサだった。

「予定よりも少しばかり遅かったですけど…何かありましたか？」

「カナがストーカーに捕まってもてな。今はその対応してるところや。その間に準備を進めるために俺らだけで先にドイツ入りしたってところや」

「なるほど…。では、早速オペレーション・ルームにご案内を？」

「ああ、頼む。こいつらも、快適な空の旅でさほど疲れてはないだろうからな」

ラウラがIS学園にいるということもあり、現状での黒ウサギ隊のトップはクラリツサだ。

その彼女と引率である千冬、そして先導して物事を決めていく時守

が揃っているため、何の滞りもなく会話が進んで行く。

「目的地のイギリスまでは、我がドイツを通るルートと―」

「途中にデュノア社に寄らなければならなかったため、フランスを通るルートだな」

「ロシアとアメリカを通過してそのまま突撃する世界一周ルートは？」

「そんな頭の悪いルートは世界中でお前と束ぐらいしかできんだろう。行くなら一人で行け」

「冗談で言っただけですやーん。…あ、せやクラリス。アリーナ空いてる？」

「空いてますが―」

クラリツサ、千冬、時守。

黒ウサギ隊、IS学園、IS学園1年生。それぞれの集団の中での最強が率いて施設の中へと入っていく。

「んじやき、ちよつとだけ貸してくれへん？改造ラファールも」

「ラファールも…ですか？うちに置いている改造のものは、それこそ当時の織斑教官しか使えないようなものしか…」

「おお、それでええよ。アリーナもそんな長い間使わへんし」

「分かりました。…それで、一体誰と模擬戦を？」

すでにその列には三人しかいない。

IS学園1年生はラウラによる施設の説明を受け、黒ウサギ隊の面々はその二つに分かれた集団を後ろから見守っていた。

皆が皆それほど大きい声で話してはいなかった。そのため―

「ん？ちっつぶー先生とやで？」

―その声は、いやというほどに響いた。

「ん、私と…か？」

「最近これといって実践形式してませんでしたしねー」

「だからと言って、いきなり私か？」

「ま、相手としては一番不足ないっすしね」

IS学園では、千冬が暮桜の次に乗り慣れた打鉄を千冬仕様に改造したものを使っていた。

時守が二次形態移行していた時は、単一仕様能力を使わないという縛りでの模擬戦はあったものの、三次形態移行してからは互いの予定もあり、実現しなかったのだ。

「ということは…」

「ワンオフの調整に付き合ってくれたら嬉しいなーって」

「ふん。私が勝てば、高い焼肉でも奢ってもらおうか？」

「うわ。生徒に奢らせる気とかマジかこの人」

「ほれ、私が条件を出したんだ。お前も何かないのか？」

「そつすねー」

時守と千冬以外の人間は、この会話にももちろん聞き耳を立てている。

「俺が勝ったら、国連代表としての権力使うんでこれから暮桜使ってくださいね？」

「……そうだな。本当にお前の権力でもどうなるか分からないものだが、もし実現できたら、今度は暮桜で戦おう」

「んじゃ、交渉成立ってことで」

IS学園でも実現しなかった時守のみ単一仕様能力アリの公開師弟対決が、異国の地ドイツで実現する――

◇ ◇ ◇

「ま、言うてその前にこれがあんねんけどな」

「黙れ時守。それでは、改めて現状を確認する」

「え、さつきも言うたとおおり、カナはロシアから、俺らはドイツとフランスからってことやないんすか？」

「それについての人の振り分け方だ」

二つのルートに分けるとだけ聞かされていた生徒たち。

時守も含めて大半の人間が初耳となる理由を時守から聞かされることとなる。

「まず、ドイツからの海路。こちらには山田先生を引率に、オルコツト、篠ノ之、凰、織斑だ」

「…なる。下手し、ラウラが国内の変な組織に狙われてるかもしれんってことつすか」

「まあそれもあるが、単純にここですでに作戦用の重装パッケージは受領済みだからな。あとは、私の監視下にあった方が扱いやすい」
「それ本人の前で言うんすね」

「海路だからな。監視下で扱いやすいかどうかは大事なんだ」

ほんまやろか、と時守が思う中、何人かはその会話に冷や汗をかいていた。

ラウラが一夏のことで暴走し始めたら止められる気がしないので千冬側に行って欲しかった真耶。

事実、千冬と同じがよかったラウラ。

黒ウサギ隊が確かに国内に少数ではあるが敵を作ってしまったていることを知っているクラリツサ。

三人の心臓は、バクバクと鼓動を続けていた。

「そして、織斑、篠ノ之。お前たちも少し、私から離れ、違った視点でものを見てみる」

「は、はあ……」

「分かりました……」

今まで、千冬と一夏、箒は嫌でも近くにいることが多く、また近くにいることが当たり前になっていた。

そのため、敢えて千冬から離れることで新しいナニカの発見を促そうという考えだ。

「次にフランスからの空路だが、時守、デュノア、ボーデヴィツヒ、更識に、私が引率としてついて行く」

人数的にも人選的にもこちらの方に戦力がやや偏っている気がするが、それは致し方ないことだというのが、千冬の考えだった。

「どうしてもフランスのデュノア社までは陸路を通ることになるからな。万が一の襲撃に備え、襲撃に手馴れたメンツを連れていく」

「さりげなくデイスられた気がする件について」

「同じ意見です、師匠」

軍出身のラウラと襲撃請負人時守。

そこに、代表候補生の中でも上位の腕前を持つシャルロットと簪、そして千冬自身が居れば問題ないだろう、というのが最たる理由だ。

「まあ時守に頼るつもりは無かったんだがな。こいつこそ私の監視下に入れて置かなければ何をしでかすか分からんからな」

「そ、そこまでガキちゃいますわー」

「…まあいい。ここまでで質問のあるやつは…いないな」

オペレーション・ルーム全体を見渡し、異論がある者がいないことを確認する。

それもそのはず。すでに出ている指令には従うほかなく、ここに来ている時点で手練れていることに間違いはないのだから。

「ふむ。…では、出発の時間までは余裕がある。ボーデヴィツヒカクラリツサの案内で各自施設を見回るもよし、休憩するもよし、各々好きに時間を潰しておけ」

千冬がそう言っても、誰一人として席を立つ者はいなかった。

IS学園関係者も、黒ウサギ隊の人間も、誰一人としてである。

「ん？どうした」

「あ。多分みんなアレちゃいます？腹減ったとか」

「おおそうか。すまんなお前たち」

『違います！』

時守と千冬のその掛け合いに二人以外の全員が声を荒げた。

「腹痛いんか」

「違う！お前が千冬さんと模擬戦をするからだ！」

「えっ。それでみんな残ってたん？」

箒が時守に怒鳴ると、ほぼ全員が頷いた。

「ああ、そうか。そういえばお前その訓練は完全極秘扱いとして非公開にしていたからな。お前と私の本格的な模擬戦はあまり知られてないんだろう」

「なーるへそ。ってことは、みんな俺とちっふー先生の模擬戦が見た」と

「ま、まあそうなるな…」

「何より、世界のトップクラスの戦いには違いないしね」

「んー。結構大口叩いといてあれやけど、俺も自分が今どんぐらいの強さか知らんでっ…」

「それも踏まえての模擬戦だ。時守。お前も、少し本気を出せ。私も出せる範囲で出す」

「うっす」

今後の作戦に響かない程度。それでも、千冬とその弟子の時守が本気を出して戦うというのだから、気にならない人間の方が多い。

「ほな早速行きましょか」

「ああ。開始は？」

「ちよつと準備欲しいんで、30分後ぐらいでどうです？」

「分かった。では、先にピットに入っておく」

「了解っす」

今ここに、世紀の対決が始まろうとしていた。

師匠と弟子

「ちっふー先生ー。準備オツケーすかー？」

「ああ。いつでも大丈夫だ」

あれからきつちり30分後。時守と千冬はお互いのピットにて準備を完了させていた。

その二人のピットには彼ら以外に誰もおらず、一夏たちは全員簡易の観客席で戦いのゴングを今か今かと待ちわびていた。

「にしても、千冬姉がラファールか」

「意外に思うかもしれないがな、嫁よ。織斑先生もここ、黒ウサギ隊の教官をしていた時にはラファールが基本だったんだぞ？」

「え、そうなのか？」

「そりや、確かに意外ね。千冬さんって、武装も機体も何もかも日本製で揃えてるってイメージだったから」

「えつと…。確かに日本代表の時は暮桜と打鉄しか使ってなかったけど、IS学園で教えるようになってからは他のものにも慣れるようにしてるって…」

「へえー。それって、日本代表チームでの話だよな？ 簪」

「うん…。今でもたまに、教えに来てくれるから…」

「その辺、IS学園の先生と同時進行ってのは結構厳しいかもな」

「そうですね。代表では簪さんを最良しても、学園ではしてはいけませんもの」

ここに来て、改めて織斑千冬という人間がいかに高いスペックを誇っているかが知られる。

普段IS学園の講師としての激務をこなしつつも現在の日本国家代表のコーチも引き受け、そして普段は時守の指導にも当たっている。

そしてその全てを十全にこなしているのだ。多少、家事がアレでも許される程度には仕事面でのスペックが高いのだ。

「教官。時守国連代表。試合の準備が整いました」

「ん、サンキュークラリス」

「分かったクラリツサ」

黒ウサギ隊の中で唯一、管制室からアナウンスを担当しているクラリツサの声がアリーナと観客席に響く。

その声に、思わず観客席もテンションが上がる。

「い、いよいよか」

「うむ…。どれほどの戦いになるのか…」

「ら、ラウラ隊長でも分からない二人の実力…」

「ど、どんなものなのか気になります…!」

クラリツサとともにIS学園の面々を出迎えたネーナ、ファルケ、マチルダ、イヨの四人も一夏たちとともに観客席に座っている。

根っからの千冬ファンが多い黒ウサギ隊に在るだけあり、やはりこの四人も千冬の大ファンだ。

そのこともあつて、千冬の本気の一部が見られるということに非常に興奮していた。

「ほな」

「ああ」

時守からの短い掛け声に、同じく短く千冬が答える。

その数秒後。ピットから二機のISが飛び出した。

「おー。なんか久しぶりっすね。ちっふー先生のIS姿」

「そうか？ただラファールを使うことが少ないから、珍しいだけではないか？」

「そうっすかね？」

一機は、IS学園の生徒たちが見慣れた機体。

見慣れていると言っても、世界的に見れば一機しかない第三形態機。そしてその周りを存在だけで威圧してしまうような曇りのない金。

もう一機は、黒ウサギ隊が見慣れた機体。

と言っても、最近倉庫に保管されているだけの代物で、誰も扱えないほどの化け物スペックを持った黒。

「んじゃ、いつでも？」

「そうだな、クラリツサ。お前のタイミングで始めてくれ」

「はっ…：それでは、試合——」

クラリツサの声色が張り詰めたものになると同時、時守と千冬から感じられるモノも同じく張り詰めていく。

「——始めっ!!」

「っらあー」

試合の開幕と同時。『雷動』と『完全同調・超過』を同時発動させた時守が千冬の背後に現れ、彼女の後頭部目掛けて飛び蹴りを放った。

「ふん」

「うえ?」

しかしそれも、千冬がただ首を傾げるだけで躲されてしまい、その足首を片手で掴まれた。

「その攻めは私には通用せん。『雷動』を会得した時から想定の中にあつた攻めだからな」

足首を掴まれ、前に思い切りぶん投げられた時守。

しかし、時守も投げられてそのままというわけではない。

『雷鳴』

「チツ…：目くらましか」

現在アリーナの中で時守をロックしているISは千冬のラファールののみ。

その千冬のハイパーセンサーを狂わせる単一仕様能力『雷鳴』により彼女が少しの間身動きを止めている隙に体勢を整える。

「ちっふー先生? 本気っすよ?」

「分かっているさ。ただの、ウォーミングアップだ」

千冬仕様のこの改造ラファールには、遠・中距離武装としての銃は積まれていない。

近距離武装として元々備わっているラファール用の近接ブレードが容量いっぱいまで積まれているだけだ。

「今からが、本気だッ!」

「うおっと。まだ『雷鳴』効いてるはずですけど?」

「たとえば見えなくても、弟子の場所ぐらいは手に取るように分かる」

まだ千冬のハイパーセンサーが潰れていると安心しきっている時

守目掛けて二重瞬時加速で一氣に距離を詰め、ブレードを振るう。

場所は合っていた。しかし、流石に見えなかったというのが大きかったのかブレードを当てることはできなかった。

教えた通りの試合展開をしてきていることに、千冬の口角が少しばかり上がる。

「それに」

「げっ」

なおも回避したことから油断が生まれている弟子がいる上を向く。

単一仕様能力『雷鳴』がハイパーセンサーを潰すのなら、そもそも使わなければならない。

ハイパーセンサーを一瞬だけ切ることでその目くらましをリセットし、かつその間に距離を詰める。

「ハイパーセンサーを数秒使えなくさせただけで油断するな。馬鹿者」

「油断はしてへんっすよ」

言われて、気付く。しかし遅かった。

千冬がハイパーセンサーから肉眼に切り替えたその瞬間に、時守は千冬の死角となっている二人の真下から千冬の背後に向けて、『ランペイジテール』を伸ばしていたのだ。

「くっ…」

避けようとしても間に合わず。胴体にそれをくくりつけられ、千冬はアリーナの地面に叩きつけられる形になった。

「いやー、流石っすわちっふー先生。ワンオフ3つ使っても、それらを囷にしたランペイジテールでやっともなダメージとは…」

「仮にも元世界最強だ。舐めるなよ?」

「そりやもちろん。ちっふー先生の強さをよく知ってるからこそこの距離感っすよ」

(…:我が弟子ながら、随分と強くなったものだ)

千冬を投げ飛ばした後の二人の位置関係は、時守が宙に浮き、千冬がアリーナに立っているというありきたりなものだ。

問題は、その距離。

いくら改造ラファールのスペックが高く二重瞬時加速が速いとはいえ、それよりも上のスペックで、なおかつ『雷動』という超高速移動手段を持っている時守には速さでは勝てない。

二人の距離は、丁度千冬がどうやっても不意打ちも先手も決められない距離にあった。

「間合い管理もしつかりと出来ているな」

「まあそのラファールも見たところかなり速そうですね。念には念を、って感じっす」

「そうか。…はあっ！」

不意打ちが決められないのなら、真正面から打ち破る。

千冬の現役時代の動きを彷彿とさせるような瞬時加速で時守の懐へと迫る。

「『雷轟』っ！」

しかし、時守もおいそれと千冬の接近を許すほどバカではない。

迫り来る千冬に向け、自身の持つ最速最強の攻撃で迎え撃つ。

「——え？」

その『雷轟』で、一撃で落とせなくとも、かなりのダメージは与えられると踏んでいた時守。

「ふっ。…時守、お前今、勝利を確信しただろう？」

その予想は、他でもない千冬の手によって覆されることになる。

「ぐ、あ…！」

「雷がなんだ。シールドエネルギーに守られているのだから、その程度突き抜けられる」

「そ、そんなんできんのちっふる先生ぐらいっすよ」

放たれた『雷動』は確かに千冬に命中した。

しかし千冬は、その雷の中を、ブレードで最小限守りながら瞬時加速で突き抜けてきたのだ。

勢いそのまま時守の眼前に飛び出した千冬は躊躇うことなく時守へとブレードを振り下ろし、今度は彼をアリーナに叩きつけ返した。

『雷動』、『雷鳴』、『雷轟』、『完全同調・超過』…。どれもこれも、今のままでは私を倒す決定打にはならんな」

「……まあ、言い訳とか嘘に聞こえるかもしれないですけど、奥の手ならもう準備してるんですけどね。今ここでは使わんときます」

「ほお？全力で、つと言っておきながらか？」

「今は出せへんってだけっすよ。今は、この4つのワンオフと『オールラウンド』で戦います」

同級生相手には無類の強さだという印象を植え付けている時守の単一仕様能力たち。

それすらも、千冬の圧倒的な実力の前ではやや霞んでしまう。

それでも――

「ほっ」

「チツッ・厄介な組み合わせを……」

――そのほぼ全てを同時使用することで、流石の千冬でも完璧に対処することは難しくなってくる。

『完全同調・超過』で全ての性能を100%引き出せるようにし、その上で『雷動』で動き、『雷鳴』で目を眩まし、『雷轟』で少しずつ追いつめていく。

『『雷』――』

「はあっ！」

光速で動く時守の右手が千冬の胴体を捉えようとした時、今度はその手が近接ブレードによって弾きあげられた。

「……ええ？」

「甘いつ！」

「ぐっふっ！」

無様に胴体をさらけ出した時守のそこを右足で思い切り蹴り飛ばす。

元々『雷動』で動いていた分の速度も加わってしまったせいで、凄まじいほどのエネルギーが時守の腹部に襲いかかる。

「っ、げほっ、げほっ……！えっぐう……」

「まあ、そんなあからさまに弱点が見えている単一仕様能力を連発するからだ」

「…確かに手のひらからしか出せへんのは弱点っすけど、光速っすよ

？」

「そんなもの、肉眼では捉えられんがハイパーセンサーを使えばある程度は予測できる」

千冬はこう言っているが、もちろんそんな芸当ができるのは世界で千冬ぐらいのものだ。

IS学園でトップクラスにハイパーセンサーの使い方が上手いうら、簪、そして国家代表である楯無ですら、雷の進行方向を予測することはできない。

「…やっぱ、おかしくないっすか？いろいろ」

「そんなもの、弟子入りした時に分からなかったか？」

「いや分かってましたけど…」

叩きつけられたアリーナの壁から起き上がる。

食らった攻撃はわずか2撃。それでも威力が高い千冬の攻撃は、時守のシールドエネルギーを削るには十分であり、気がつけばあと少しで二桁になるうところまで減っていた。

「減りすぎやろ流石に…」

「私が零落白夜の火力だけに頼っていたと思うのか？」

「いいえ？ただ、凄くなって」

「小学生か。まあ、この蹴りなどを使っていく戦法はお前から学んだものだ」

「それでも凄いつすよ」

アリーナの壁際から、中央に佇む千冬を見上げる。

ほんの僅か。それでいて分厚い壁が、未だ時守と千冬の間には確かにあった。

「勝ちたいっすねえ…」

「簡単には勝たせん。でなければ、お前の師匠など名乗れんからな」

「弟子冥利に尽きますわ。ホンマ」

互いに再び構える。

千冬はしっかりと近接ブレードを。時守は脱力し、ただ千冬を見上げる形で。

「ここじゃちよつと狭すぎて奥の手の一個使えませんけど、最後まで

粘らせてもらいますわ」

「ああ。楽しみにしている」

瞬間。千冬の視界から時守が消える。

と言っても、先ほどと同じく動く場所、そしてその先は千冬には見えていない。

（――左、か）

その予想通り『雷動』で飛び込んできた時守が左に動く。

出方を一旦伺うために少しだけ溜めを作り、待った。次の瞬間。

「なっ!？」

またも、時守の姿が消えた。

「取ったあっ!」

「っ―、下…!」

声のした自分の真下を見ると、時守が千冬まであと少しというところまで迫ってきていた。

あの千冬が左に振り向いたほんの一瞬に、『雷鳴』を発動させていたため気付けなかったのだ。

『雷動』ツ!」

それでも、この攻撃を受けるわけにはいかない。

ただでさえ、あと一撃で沈めることができる圏内に入っているのだ。それが、この攻撃を受けてしまえば形勢逆転してしまうかもしれないのだ。

「おおおお!」

時守が展開したオールラウンドで千冬に突きを放つ。

下から上に。その攻撃に対して千冬は――

「はああっ!」

――近接ブレードで突き返す。

オールラウンドと近接ブレードの衝突。

その接戦を制したのは――

「――ふっ!」

――上からの重力も加わっていた、千冬だった。

「これで…」

時守のオールラウンドの軌道を反らすと同時に、時守の肩に切っ先を突き立てる。

「終わりだっ！」

そして、すれ違いざまに時守の胴を切り払う。

切り上げられた形になった時守の、シールドエネルギーが尽きた。

「……はー。やっぱあきませんでしたか」

「まだ、な。確実に善戦はできるようにはなっている。…おい、クラリツサ」

「は、はいっ！し、試合終了！勝者、織斑千冬！」

勝ったのは、師匠だった。

◇

「あー…。クツソ悔しい」

「さて、反省会だ。時守」

「へーい」

模擬戦の後。時守と千冬、クラリツサと観客席にいた全ての人間は、オペレーション・ルームに戻ってきていた。

「まずー」

「ぶふっ!？」

開幕早々、千冬が時守の頭を叩いた。

「ちゃんと本気を出せ。常に『完全同調・超過』を使っていれば、接近戦でのまともな戦いができただろう」

「言うたやないですか。ワンオフの調整って。その上でちよつと本気出したんすよ」

「むっ…。そうか。ならいい」

時守は今回、単一仕様能力の調整程度に千冬を倒せれば儲けもんや、程度に挑んでいた。

もちろんぶつ飛ばすつもりではいたが、それで調整がおろそかになっちゃってしまっは、国連代表の名が廃る。

「てかちっふー先生も俺のワンオフが競技向きちゃうの知ってるでしよっ。」

「まあな」

時守のワンオフたちは、以前に京都での戦いで露呈してしまったように、広範囲への攻撃が多く、またそれらの威力が他のISに比べて段違いに高いという弱点があるのだ。

ここで文字通り時守が全開の出力でワンオフを使ってしまったえば、アリーナのシールドを破りシステムダウンが起きたかもしれない。

それほどに、規格外なのだ。

「やから今回は『完全同調・超過』をメインにつて考えてたんすけどねえ……」

「まだまだ精進が足りんな」

「精進、なんすかねえ……」

果たして、まだ誰にも言っていない秘密を隠し持ち、今回もそれを使わなかった自分に成長する資格などあるのかと、時守は自分に問う。

「時守。たまには、相手と相手のISを信じろ。お前のちよつとやそつとの攻撃で死ぬほど、ISは柔に作られていない」

「……うつす」

千冬には、時守が全力で攻撃できない理由が分かっていた。

もとより、高火力の単一仕様能力を使う機会がそれほどなかった時守。使う相手の代表例になってしまったのが『ゴレム』なのだ。

そのため、生きている人間に向ける恐怖心が生まれてしまっているのだ。

「武器を人に向けることを恐れるのはいいことだ。少なくとも、慣れるよりかはな」

「努力しますわ。……今度戦う時は、文字通り全力で戦えるようにします」

「ああ、期待している」

時守と千冬。二人の総評が終わり、あとは二手に分かれてイギリスを目指すだけとなった。

「ふーっ……。全力、か」

千冬の話に集中する他の者を見て、思う。

――果たして、自分がモンド・グロッソに出場した時に、同級生たち

に向かって自分は本気を出せるのか。

(まあワンサマとかには大丈夫やろうけど、セシリーたちには…)
自分でも、凄まじいものを操っているという自覚はある。

雷。生身に当たればそれこそ即死してしまう代物だ。

(ま。その辺もこれから一緒に頑張ってこか、金ちゃん)
右手中指の指輪が淡く光る。

主人の呼びかけに、愛機はしっかりと答えた。

2 度目のフランス

「一夏、くれぐれも変なことをしないようにな」

「特にセシリーになんかしてみい。お前、これやぞ」

「だ、か、ら！大丈夫だって！」

電車の乗り降り口にて、車内からホームに立つ一夏に向かって首を掻き切る動作をしてみせる時守。

時守の付き添いである千冬も、実の弟にそんな行為をされると、普通は気分が良くない。

しかし、一夏はかなりの前科を持っているのだ。

「とか言ってお前着替えとか覗くやろ」

「の、覗かねえよ！」

「一夏、入学式の日を覚えてるか？」

「僕が女の子って分かった時のことも覚えてる？」

入学式の日には箒の下着姿を見てしまい、シャルロットのいざこざの時は浴室で彼女の全裸を見てしまったのだ。

「扉を開ける前には!？」

「ノックと声掛け、だろ？分かってるって」

「……分かってないから、みんな言ってるの」

時守と同じく車両の中に立っている簪のその一言に、女性陣が軒並み首を縦に振った。

「…俺、そんなにノックしてないか？」

「大事な時にな」

「大事な時って何時だよ」

「着替えてる時やアホ」

千冬や時守ならまだいい。だがそれが、箒や鈴やラウラ、そして時守の彼女である刀奈や簪、セシリアやシャルロットならば、とんでもないことになってしまう。

いくら箒達が一夏に好意を持っていようとも、まだ恋人関係でないのならそこに羞恥心が出てくるのだ。

「むっ。お前たち、そろそろ時間だ」

「ういーつす。んじや、セシリー。またイギリスで」

「はいっ。剣さんも、お気をつけて」

「ああ。：ワンサマになんかされたら撃ち抜いてええからな」

「おいっ!?!」

「もちろんですわ」

「セシリア!?!」

兎にも角にも、ここドイツで2手に分かれるのであった。

電車が出発し、外の景色が流れていく。

「ふふっ」

「ん、どないしたん？シャル。えらい機嫌良さそうやけど」

「だって、最初IS学園に来た時は、こんなにも明るい気分でデユノア社に戻れると思ってなかったもん」

「まあお義父さんとは今も連絡取ってるしな」

「あ、そうなんだ」

適当に腰掛けた座席で5人で話す。もしここに時守がいなければ千冬といることのプレッシャーで変になってしまいそうなシャルロット達だったが、やはりこの男がいると話が弾みやすい。

「えつと…、その、シャルロットのデユノア社の話って、あんまり知らないんだけど…」

「あー、そういやまだあんまり喋ってない時期やったな。えつとな、実は悪いのがシャルの義母で、お義父さんとシャルは被害者やった、的な？」

「ふむ、女尊男卑の風潮か。近代では確かに珍しくない話だ」

「やっぱそうなん？ラウラ」

「ああ」

シャルロットの話から、時守の知らない近代情勢についてラウラが話し始める。

「ISが出る以前は、それこそ有能な人材ならば男女関係なく活躍できていた。…というのは、今さらか」

「イマサラタウンやな」

「だが、ISが出て以降、良くも悪くも多くの分野でISは影響をもたらしたのだ。：師匠が男女平等：いや、男女対等の法律に組み替えるきっかけになったとしても、人の感情というのは簡単には変わらんかな」

「：まあ、その辺については発言者である俺に責任あるし、できるだけみんなが過ごしやすくてきたらええねんけどな」

「：剣、政治家みたい」

「IS操縦者引退したらやってみよかな」

「そんな軽い気持ちでなられてたまるか。国民の気持ちを考えろ」

途中、冗談が入りながらも、ラウラと時守という普段抜けに抜けている二人のやや真面目な会話は続く。

「とはいえ、師匠のしたことは決して無駄ではない。いびつで、少し時間がかかるかもしれないが、ちゃんと男女が打ち解ける日も来る」

「お前がワンサマに気持ちを打ち明ける日は？」

「ぶうツ!? な、なななななな：！い、いきなり何を!？」

「いや、ラウラが打ち解ける、って言ったから似た語感で出てきてん」

「そ、そうか。：：：そ、卒業までには：」

「ちっふー先生？」

「ダメだ。3年に上がるまでに告白しろ。：ただでさえ、学園の一部で不能疑惑が出ているんだ：！早めに女というものを弟に教えてやってくれ：」

「不能って：」

しかし、真面目な話が終わった途端にこうして凄まじい方向にベクトルをずらすのが、時守剣という男なのだ。

「時守、一夏とそう言った話にはならないのか？」

「えげつない人選しますねホンマ：。あんまないっすね。更衣室とかでもそんな話はほとんどないっす」

「ほう、なるほどな。まあ普段こういう場所にいると普通の男子高校生がどんなものかというのが分からないからな」

「俺とアイツを普通の括りにしたらあかんと思えますよっ：」

世界に二人しかいないISの男性操縦者で、片方は三次移行や重婚

などやりたい放題にハチャメチャしまくっており、もう片方は世界最強織斑千冬の弟で、究極の朴念仁として一部の人間に知られている。「まあでも、俺が言うのもアレですけどしばらくはISに集中させたらええんとちやいますか?」

「そうだな。私としては、もう少し自分で打開していつてほしいところなんだが…」

「そこも、ひとまずワンサマに任せといたらどつすか?」

「ああ。…うん?どうした、お前たち」

千冬が時守に相談する、という見慣れない光景を目の当たりにしてしまった3人が、ようやく口を開いた。

「い、いえ。織斑先生が師匠に相談を…」

「…なんだ、それが珍しかったか?まあ、こいつは良くも悪くも頭が冴えているからな。ふざけていなければそれなりに有能だ」

「おつ。ちっふー先生に褒められた…もつと褒めてもいいんでっせ?」

「こういう所が無ければ、な。まあ何にしろ、優良物件を捕まえたな、デユノア、更識」

「あ、あはは…」

「…ありがとうございます…」

シャル達の方が俺なんかよりも魅力的やのになー、とひとりごちる時守。

ラウラも、見たことのない恩師の姿を見たからか、少しばかり狼狽えていた。

「…はっ!きよ、教官も私達と同じ人間だった!?!」

「おい」

「いやー、ラウラもええボケを覚えてきて俺は嬉しいわ」

「ラウラのはボケじゃない気がするのは僕だけかな、簪」

「ううん…。私も、本気で言ってると思う…」

とにかく、賑やかで楽しい雰囲気です人はフランスへと向かっていく――

◇

―はずだった。

「…ちっふー先生。…俺、これに関しては何んまにキレますよ」

「…すまん、時守。これは完全に私の落ち度だ」

テーブルを囲う5人。

場所も変わらず、一列には時守を挟む形でシャルロット、時守、簪が。もう一列には、ラウラと千冬が座っていた。

変わっているのは、そのテーブルの上の惨状と、時守と千冬表情だ。何ヶ国語かの言語で書かれた様々な資料が散在し、時守と千冬のお互いがパソコンを忙しなく操作していた。

「書類あるなら日本でちゃんと渡しといてくださいよ…」

「…すまん。私自身の仕事に追われていた…というのは、言い訳だな」

「また呑みに行きましょう。パーっと」

「…ぐすつ。本当に、良い弟子に、育ったものだ…!」

「泣くところそこですか!」

「師匠はまだ未成年でしょう?」

「…織斑先生と、二人で行くの?」

呑みという単語で泣き始めた千冬をシャルロットが窘め、ド正論をラウラが放ち、簪が軽い嫉妬を向ける。

場がカオスになりながらも、二人の手は止まらなかった。

「大丈夫や、簪。…この人、酔うたら泣くわ喚くわして勝手に寝るか
ら」

「…時守。それは、本当に言わないでほしいんだが…」

「それに国外やったら俺の年齢でも軽く呑めるところはあるし、いざとなったらテレフォン使って理事長呼び出すもん」

「うわっ…」

今や一教師となってしまう千冬にとって、圧倒的上司の理事長に
はどうやっても逆らえない。

もちろん、不服なことや非道なことをされれば抗議はする。

しかし、自分がしでかしてしまったことに対しては、千冬は平謝り

するしか無いのだ。

「まあほんまはそれ以上に酔い癖悪いけどな」

「っ、時守…」

「冗談つすよ」

千冬の真の酔い癖。

まだ時守はそれに直面したことは無いが、東やナターシャ曰く、抱きつき魔とキス魔と化すらしい。

それを時守にしてしまえば、完全に事案となってしまうこと程度は酔った千冬も分かっていた。

「さてと、お仕事お仕事」

「ああ。再開するか」

つかぬまの茶番を終え、二人は再びパソコンの画面と資料に目を通していく。

「えーつと何々…? 『国際連合I.S新代表候補生候補リスト』、か。『良さそうな実力者を選んだので、貴方が戦いたい、強そうだと思った人を選んでください。その人を候補に加えます』…え、マジ?」

「束とか出すなよ時守」

「んー…。でもこのリスト見る限りそんな強そうな人おらんねんなー。どう思う? シャル」

「そのリスト僕が見てもいいの?」

「参考程度って感じや」

おそるおそる覗くシャルロット。

将来の旦那よりも格が下になるが、確実に自分よりは格上の存在ばかりが並んでいるであろうそのリストには、おびただしい数の人名が書かれていた。

「えっ…! す、凄い人ばかり…!」

「え、そうなん?」

「そうだよ! 元ロシア代表のログナーさんもだし、フランスの元代表のエミリーさん、ドイツのアンナさんに、アメリカのイーリスさんまで…」

「イーリは現役やからな。言うても、そのメンツとも普通に顔合わ

せたことある、し…って、電話?…えっ」

「シャルロットに書類を一旦預かってもらい、意外な人物から掛かってきた電話に出る。」

「あ、お久っすロジャーさん」

『ああ、久しぶりだね。…今、大丈夫かい?』

「周りにちっふる先生とか、俺のクラスメイトとかいますけど」

『…ならば、オブラートに包んで話そうか』

「うっす」

千冬が静かに作業をしており、ラウラ達も時守が電話に出ているため会話はしていない。

となれば、このテーブル一帯は時守と電話越しのロジャーの話し声しか聞こえなくなり、ロジャーの声も少しばかり筒抜けになっていた。

『…新しい武装、作っておこうか?』

「ちよっ…それはマジで、オブラートに包めてませんで…」

『だがそう呑気に黙ってもいられない。私だって君には度肝を抜かれているんだ。…今の君には、必要だと思いが?』

「あ…、まあそうっすけど…」

ロジャーとの会話が始まり、明らかに普段とは違う様子で若干の焦燥を見せる時守。

そんな彼を思っただか、隣に座る簪が彼の左手を優しく握った。

『それに、リストも渡しただろう?あの中から君のお眼鏡にかなう—』

「俺に気に入ってもらいたい国があるんなら最低限、単一仕様能力を発現させてから出直してこいって言ってほしいわ」

『…と、言うとは?』

「今の時点でも至る国で戦わされてるけど、雑魚ばっかでおもんないねん。…せめて、モンド・グロッソの準備期間になる来年ぐらい、強いやつと戦わせてくれ」

『…ああ、分かったよ』

簪の手に包まれた左手で、彼女の手の感触を確かめるように優しく

握り返す。

その一方で、口調は荒いものへと変わっていた。

「毎度雑魚の腕試しみたいなんに使うなって釘刺しといてや。…俺かてゲームのラスボスとちやうねん。1回ゲームオーバーになったからって、電源消していくらでもやり直しなんて、俺が嫌やわ」

『了解した。ならば、これからはしつかりと君の要望に答えられるよう、頑張ろう』

ロジャーはそう言うが、電話越しでも簪たちは分かった。時守のその願いは簡単には叶わないと。

最低でも単一仕様能力の発現と、彼は言ったのだ。その最低限に辿り着けるだけの人間が、今この世の中に何人いるのか。

「まあ、最低限ワンオフって言いましたけど、無理なら無理でぶっ壊れ性能の軍用機相手でもいいんで」

『っ！時守くん、それは流星に…』

「…そんだけ、もう似たような国の似たような実力のやつとはやってきたんすよ。ちよつとぐらいのわがままも無理なんすか？」

『……はあ。分かった、分かったよ。要望は通してみる。だが、もし軍用ISとの模擬戦が決まれば、本気で取り組むんだ。いいね?』

「ういーっす」

流星に各国の代表を舐めすぎだという意見を伝えようとしたロジャー。

しかし、この年の夏休みにはただでさえ多忙な彼を世界中で引きずり回し、代表やその候補、軍属IS操縦者達と戦わせてきた。

その結果、彼は強くなった。千冬や楯無といった、トップクラスの人間でないと競り合えないぐらいに強くなった。

『あらかじめメンタルの強いものは呼んでおく』

「えっ、なんで?」

『…はあ、まあいい。君もまた強くなったからね。つまりは、そういうことや』

「メンタル強いのもええけど、ちゃんと実力のある人も頼むわ」

改造した軍用ISで男性操縦者と戦ってほしい。

そう伝えても、快く了承してくれる人間がどれほどいるか。舐めるなど、怒るものが大半だろう。

そして、そのうちのほとんどが彼にろくなダメージを与えられずに完敗する。

そんなこと、メンタルが強い者で無ければ耐えきれはるはずがない。

『そういうことは、最低限国家代表クラスの選手、だね?』

「そつす。頼みますよー」

『ああ。任せてくれ』

電話を切る。

時守はほつとした表情で辺りを見渡すが、彼を見る目はある一種の恐れのようなものを孕んでいた。

「あれ…どないしました?ちっふー先生」

「いや…随分と、凄い物言いをするのだと思つてな」

「まあ当然っちゃ当然でしょ。…普段は、IS学園1年生の時守剣ですけど、国連の舞台で戦う時は国際連合代表の時守剣つす。そりや見方も変わりますよ」

「…そう、だな」

言われて納得した。

仮に千冬が学生だとして、当時IS学園に通う立場であれば、その生徒としてやれと言われたことはやる。

しかし、1度モンド・グロツソで優勝し、日本代表としての立場で戦えと言われ、相手に格下ばかり用意されては気分が良くない。

「しかも、この我慢もあと数ヶ月すりや終わりつす」

「だな。…まあ、こちらの苦労は増えるが気にするな」

「いやー、そう言ってもらえるとありがたいっすわ」

「ねえ剣。なんの話?」

「…あ、そか。シャル達にはまだこの話通つてへんのんか」

千冬と時守の間だけで成立し始めた会話に、シャルロットが割り込む。

どの道、シャルロットが聞かなくても簪かラウラが聞いていただろう。

「来年、俺らが2年になると同時に、IS学園にモンド・グロツソ出場予定の選手が合同練習しにくんねん」

「えっ、そ、そうなの!？」

「まあ言うても、合同練習はその時点で代表になってる人だけやけどな」

「お前たちも浮かれてはいられないからな。：母国に残っている代表候補生を連れてきて、その場で代表を決めるという国もあるそうだ」

ヨーロッパ各国とかな、という千冬の言葉に、シャルロットとラウラの背筋が伸びた。

今までこれだけ多くの専用機持ちと代表候補生に囲まれて感覚が鈍っていたが、それはモンド・グロツソに出る国家代表を決めるための候補生。

代表候補生の肩書きは、決してIS学園に入学するためだけのものでは無い。

「ああ、更識。お前も油断はしてられんぞ?」

「：分かって、います」

軍隊長であったラウラでも、暫定トップの簪でさえ、まだ代表として確定ではない。

IS学園でモンド・グロツソ出場が決まっているのは、時守と楯無だけなのだ。

「普段の行いはともかく、こいつのワンオフの扱い方以前のISの基礎に関しては、私も多少は認めている。たまには見本にしてみる」

「普段の行いはともかくつてのは余計っすよ」

1年生から2年生、それも、モンド・グロツソの開催年へ。

着実に、時が進もうとしていた。

幾度目のデユノア社へ

夜、そろそろ予約していた部屋でベッドに入ろうかという時間。問題が起きてしまった。

「え、三人部屋が2つ？」

「ああ。どうやら手違いでそうなってしまったらしい」

「んじや一緒に寝よか。シャル、簪」

「…やはり、そうなるのか？」

「いや普通に師匠と弟子とはいえ男子生徒と女性教師が二人つきりで寝るのはやばいっしょ」

2人部屋を3つ予約したはずが、手違いで3人部屋が2つになってしまったらしい。

それでも、このメンツでの部屋割りには時守が言った通りに割ることですんなりと終わることとなる。

「俺寝起きめつちや悪いですし、寝ぼけてちっふー先生の方に突撃しちゃうかも知れませんか？」

「それほど…なのか？」

「はい！以前、師匠の自宅にお邪魔させていただいた時も凄かったです！」

「そ、それに、剣は寝相もちよつと悪いので…」

「抱きつく対象がいないと、凄い寝相になっちゃうもんね」

「ガキかお前は」

事実、抱き枕というものを手に入れるまでの小学生の時守は凄まじく、寝ているのに起きているような動きをすると母親が戦慄したぐら이다。

パジャマが脱げ、パンツも半ケツで上下逆になった状態で毛布の上で枕を股間の上に乗せて爆睡するぐらいである。

「それにシャルと簪をちっふー先生と同じ部屋で寝させたくないっす」

「よし、いい子だからそこに座れアホ弟子。思いつきり拳骨を叩き込んでやろう」

「身長縮みそうなんで遠慮します」

千冬に扱かれ、栄養面もしっかりと管理され、そして国際連合宇宙開発専用ISステーションにて栄養液に浸かり物理的に成長してきた時守。

「てか、ラウラとおんなじ部屋で寝んの嫌なんすか？」

「えっ…。そ、そうなのですか、織斑先生…」

「……本当に、我が弟子ながらいい性格をしているな。そんな訳無いだろう」

「教官！」

「織斑先生だ、馬鹿者」

「ごちん、と軽く千冬がラウラの頭を小突く。

「だがな、時守。もしもお前の部屋からデュノアや更識の変な声が漏れて来れば、問答無用でお前を叩き出すからな」

「も、もちろんっすよ」

「……仮にも今の私は教師だ。教師の前で、不純…いや、不純でなくとも、異性交遊など考えないことだ…」

ふふふ、と不気味な笑みを浮かべたまま、ラウラの手を引きながら

千冬は部屋の扉を閉めた。

「さすがに寝台特急のベッドはきつい」

「そういう問題じゃないと思う……」

「あ。ねえ剣、簪もだけど、明日の防寒対策って大丈夫なの？」

「お姉ちゃんがロシアで買ってきたやつがあるから、私は大丈夫だけど…」

「まあ気合いでなんとかなるやろ」

「ならないよ!?!」

真冬のヨーロッパを気合いで乗り切ろうとする彼氏に思わず声を張り上げてしまうシャルロット。

しかし、簪の分も合わせて女性物のコートしかない。

「あつ。じゃあ、僕と簪のマフラーをそれぞれ剣にも巻くっていうのは?」

「…ええな」

「じゃあ、手袋も一緒に…？」

「ええやん！」

シャルロットと簪。二人が巻いているマフラーを時守も一緒に巻くことになる、3人の動きがかなり制限されることになるのは目に見えている。

しかし、このバカップル達はそれでいいのだ。

手袋も、それでいいのだ。

「ほな寝よか」

「うんっ」

「パジャマパジャマ…」

部屋に入って寝る準備に取り掛かる3人。

いつも通り簪がメガネを外してパジャマ、シャルロットが寝るまでの少しの団欒の準備をし、時守が明日の準備に取り掛かる。

「二人とも明日何着るかは決めてる？」

「うん。あつ、デユノア社製のISSスーツ出しておいてくれる？」

「おけおけー」

シャルロットのカバンの中から、彼女のデユノア社製のISSスーツを取り出す時守。

ふと、少しばかり邪な考えが彼の脳内によぎった。

「…これが、普段シャルが着てるISSスーツか…」

「も、もうっ！変態っ！」

「いや。それは制作側に言っただけ。こんなん着てるシャル見たら俺落ち着いてられへんわ」

「…：…はっ。もしかして、これが剣の弱点…」

彼が持っているISSスーツに、翌朝シャルロットがその豊富な身体を押し込むのだ。

少しというか言葉にしてしまえばすぐにお縄についてしまう考えだが、これは寝る前の毎度の会話のようなもの。

丁寧にツツコミをいれているシャルロットが真面目すぎるのだ。

「うん、せやで。流星に公共の電波に簪達のエロい格好が映るのは嫌やけど、普通の模擬戦やったらそつちに目奪われるから俺絶対戦えへ

ん」

「国連代表がそれでいいの？」

「国連代表の前に男代表やからしゃーないわ」

「…でも、剣にだけなら、見られてもいいかな…」

「簪—！」

「…むう」

3人分のパジャマを準備し終えた簪の発言に、時守が抱きつく。それを見たシャルロットが頬を膨らまし、何も言わずに時守の方へと擦り寄る。

「えいっ」

「おっ。どないした？シャル」

「別に—？ただ、目の前にいるもう一人の彼女にも抱きついてくれないのかな—って」

「愛してるぞ—！」

「僕もっ—！」

「わ、私も…」

今度は近づいてきたシャルロットに抱きつく。

完全にアホカップルとなっているが、本来はここに刀奈とセシリアも加わるのだ。

以前、千冬が時守への連絡のために突撃してしまった時の彼女の顔が凄まじくなったことなど、当の本人たちはすっかり忘れている。

「…あかんムラムラしてきた」

「ダメ。…ほんとにダメだよ？」

「分かってるって。流石に今回の作戦はマジやもんな」

「…うん。じゃあ、着替えよっか」

「んじゃ外出てくるわ」

いくら付き合っているとは言え、時守は基本彼女達の着替える姿を見ないようになっている。

彼女達の美しい裸を見慣れるということはないとは思いますが、今のうちにマンネリ化を防いでいるのだ。

「…さて、と」

左手には携帯電話。右手にはイヤホン。

「便所行く」

何をするかは明白である。

◇

「んっ…や、あ…。だめだよお、剣…」

「そ、そんなところ、さわっちゃだめ…」

「きよ、教官…」

「起きているか、ラウラ。…ったく…!あのアホめが…!」

その日の深夜。千冬は隣の部屋から聞こえてくる艶めかしい声で目を覚ましてしまった。

それは彼女と同じ部屋で寝ているラウラも同様であり、友二人の間いたこともないような声に少し困惑しているようだった。

「待っていろラウラ。お前の馬鹿師匠をたたき出してきてやる」

「は、はいっ」

周りの部屋への近所迷惑も考え、最小限の音に抑えて千冬は時守の部屋へと侵入する。

そこに待っていたのは—

「ぐがー」

「あんっ、もう…剣ったら…」

「えっち…」

「…アホは、この二人だったか」

—三人仲良く同じベッドで寝ている、シャルロットと時守、簪の姿。と言っても、シャルロットに時守が抱きつきながら寝ており、その彼の背中にさらに簪が抱きついて寝ているというシャルロット過負荷スタイル。

その中でまともに寝ているのが、彼女のアホ弟子だけだった。

「…まさか真面目だと思っていた教え子二人が夢の中でエロいことしか考えてないとはな」

「むにゃ…剣…出しすぎ…」

「何人作るつもり…?」

「牛丼…ラーメン…パフエ…」

「こいつらどんな夢見てるんだ?」

人前で口にしてしまえばあつという間に時守がやばい立場になってしまいそうな言葉を連呼する女子二人。

それに比べてアホ弟子はただ食べたいものであろうものを述べているだけだった。

「むきぐり…柿ピー…オムライス」

「統一性が無さすぎるだろう、お前の寝言は」

「ナポレオンツ!」

「うおっ…!…ナポリタンじゃないのか…」

突如として食べ物から路線が外れた時守の寝言。

「織斑千冬…ゴリラ…:千冬、ウイン」

「おいアホ。起きてるだろ」

名前を唐突に呼ばれたことに少しドキツとしなかったと言えは嘘になるが、言われたことに対して腹が立った。

確かに知性が人間に劣る動物に負ける気などないが、それでも選んだ動物に悪意を感じた。

「家忠…タダより高いもんは無い…」

「…:本気でこいつの頭が心配になってきた…」

いったい時守の夢の中ではどんな世界が繰り広げられているのか。それはまさに、神のみぞ知るものである。

「サンドウィッチ」

「おっ。食べ物に戻っ—」

「伯爵ウツ!」

「—らないのかっ!」

思わず少し大きな声でつつこんでしまった。やってしまったと思うも時すでに遅く—

「すび—」

「…ほっ。焦らせるな、全く」

—彼は再び、深い眠りへとついてしまった。

「…しかし、こうして見てみると本当に高校生とは思えないほどに幼い寝顔だな。普段はクソ生意気で気だるそうなやる気のない面構えだというのに」

ぷにぷにと寝ている弟子の頬を軽くつつく。

んへえ、とだらしない顔をしながら、彼はシャルロットに抱きつく力を強めた。

「…色恋沙汰にうつつを抜かしている暇はない…というのは、こいつには無駄か」

既に数ヶ月前から4人の美少女にぞっこんになりながらも、成長率ではぶつちぎりの世界1位を保っているアホ。

とは言え。

「約束は約束だ。—ありがたく受け取るといい、時守っ！」

彼女二人が艶めかしい声を上げたのは事実。

ドズンツッ!

彼女の鉄拳が、彼の額に直撃する。

「っ!?ツガ、ア…!ん…っ、う、え…?」

「ではな。おやすみ、時守」

「え…あ、はい。おやすみ…」

あまりの痛みと衝撃で目を覚ました弟子を尻目に、千冬は自分の部屋へと戻った。

「んう…。…どうしたの?剣」

「なんかめっちゃデコ痛い…」

「大丈夫?…うん、赤くなっちゃってるけど、血は出てないよ?」

「…:…どうしたの、剣」

「あ、簪。剣のおデコが赤くなってるんだけど、何か知ってる?」

「んーん」

千冬が部屋に戻ったあと、今度は悶絶する時守の隣でシャルロットと簪が目を覚ました。

真夜中に起きてしまったが、愛しの彼の様子が少しおかしいこともあり、二人は彼に献身的だった。

「…痛い」

「うん、よしよし。大丈夫。大丈夫だからねー」

「シャルロット、お母さんみたい…」

「ママー」

「もう、剣ってば。痛くないの?」

「痛いので続けてください」

彼に對面しながら寝ていたシャルロットが、赤くなつた彼の額を撫でる。

彼の背後で寝ていた簪も少しでも彼の痛みを和らげるべく、その少しばかり立派に育つた柔らかい身体を彼の背中に押し付けた。

「大丈夫…?」

「割とマジで大丈夫じゃない…」

「うーん…。でも、そろそろ寝ないと起きてからも響いちやうし…」

部屋に掛けられている時計を見る。

その時計は3:30を示しており、まだ十分に寝ているはずもないし、起きてしまうにも早すぎる。

「まだ痛い?」

「脳みそがずきんずきんしてる」

「じゃあ…」

シャルロットがおもむろにパジャマのボタンを外して始める。

付けていたナイトブラも器用に抜き取り、頭になつたシャルロットの両胸。

「…はい。今日だけだよ?」

「…なんか、抱きついといてアレやけどやってることただの変態やん」

「その変態さんの彼女なんだから、いいの」

「なら遠慮なく」

シャルロットのたわわに実つた生乳の谷間に顔を埋める。

ほんのりと甘い匂いが漂い、心なしか痛みが和らいだ気がする。

「あ、寝れそう」

「…相変わらず、スケベなんだから…。じゃあ、おやすみなさい、剣」
「ん、おやすみ。シャル、簪」

「…ん」

ちやつかりと背中にいる簪の尻を揉むのも忘れない。

良い意味でも悪い意味でも、どこまでも思春期男子を貫き通す時守は、シャルロットの谷間で再び眠りについた。

◇ ◇

「しやるう…」

「か、簪―…」

「…知らない。剣にそうしちやつた、シャルロットがいけないの…」

朝。

胸元に愛しの彼の頭があり、尚且つ彼の両腕で胴体を抱きしめられたシャルロットはベッドの上で身動きが取れなかった。

「うう…。流石に恥ずかしいよ…」

「…剣。ねえ剣、起きて」

「…ん、…簪？おはよ…。シャルも、ありがと…」

「あ、ありがとう簪…」

動けないシャルロットの代わりに既に起きていた簪が彼の肩を揺すり、起こす。

以前の彼の自宅でのような寝起きではなく、かなりスッキリと起きることが出来た理由は、言わずもがなシャルロットのお陰だろう。

「ほんまにありがとうシャル。お陰で痛み引いたわ」

「なら良かった」

「またやってくれると嬉しいです」

「しない、って言ったよ？」

「二人とも、朝の準備しないと…」

ベッドを降りた簪はパジャマを脱ぎ始めており、その彼女の言う通りいつまでもベッドの上でいちやいちやしている訳にはいかない。

「んじや着替えるかー。…あ、俺ちよっとトイレ行ってくるわ」

「うん。じゃあ、その間に着替えちやうね」

「…入ってきてても、いいよ？」

「時間無いんやろ？」

夜と同じく、彼女二人が着替えている間にトイレに行く時守。

「あ、歯ブラシ持ってくんの忘れた。…まあ普通に顔洗ってシヨンベ
ンしよ」

扉を開け、蛇口をひねって顔を洗う。

「…っしやあーぱつちり剣ちやんの登場やー!」

顔を上げて鏡を見ると、先程までとは打って変わってすつきりとした表情の自分が写っている。

顔を洗うまではいつもよりも眠たげだが、今はそれが取り払われており、いつも通りの顔がそこにはあった。

「さて、と。トイレートイレー」

パンツごとズボンを下げ、なんのとは言わないがぶら下がっている竿を握る。

「…ん? ベタついてる…。…昨日拭き忘れたか? ま、ええわ」
用を足し終えてトイレから出る。

顔を洗ったこともあり、足取りも軽くすぐに部屋の前についた。

「着替え終わったー?」

「うん、大丈夫だよー」

「へーい。おっはー」

「おはよう、剣。…すつきりした?」

「おお、したでしたでー。冴えまくつとるわー」

時守が部屋に入ると二人は既に着替え終えており、暖かそうな正装に身を包んでいた。

それもそのはず。これから時守達はただの訓練に行くのではなく、フランスのトップ企業の頂点に立つ人物に会うのだから。

「剣も、会うのがお父さんでもマシな格好してあげてね?」

「その件はライン来てたしな。部下へのメンツが保てないんじやーつて」

「ええ…」

「社長なんでしょ…?」

「そこはアレや…。うん、アレ」

「怖いよ…」

いくら社長令嬢のシャルロットと付き合っているからとは言え、今やIS関連企業のトップクラスとなったデユノア社の社長と普段からやり取りする時守の私生活に思わずため息しか出ない。

「さて、と。ほな久しぶりのフランス上陸と行きますかー！」

千冬とラウラはもう電車を降りてきているようで、時守たちも三人揃って外に出る。

「って、さっむ!?あかん死ぬ…」

「もう、だから言ったでしょ?」

「…はいマフラー」

隣に立つシャルロットと簪が巻いているマフラーが、時守の首にも巻かれる。

そしてその両手が、また彼女たち二人が着ているコートのポケットに入れられる。

「あったか…」

「…」

「…」

「ん、どした?」

「ほっぺだけじゃなくて…」

「手もスベスベ…赤ちゃんみたい」

「失礼な」

美肌系関西出身男性操縦者、時守剣。

地味に化粧品などのCMが決まっているのは、まだ内緒である。

「お、出てきたか時守。…相変わらず仲が良いのは構わんが、分別はつけろ」

「分かっていますって。ジエイムズさんも、お久しぶりです」

「ええ。お嬢様とこれからも良いお付き合いをお願いします」

シャルロットの使用人である初老の紳士、ジエイムズに時守が話しかける。

駅で出迎えてくれた彼にも時守とシャルロットの関係は筒抜けであり、清い関係、と言わなかった辺りそこら辺の情報もすでに伝わってしまっている。

「ほんじゃ、デュノア社行きましょか」

「お前がしきるな」

すぱん、と軽く千冬が時守の頭を叩く。

フランス空路組がデュノア社へと赴こうとしていた。

金髪はとことん良い奴かそうでないかに二分されやすい

フランス、パリ。

「あ、お義父さん。俺がメンズのパリコレに出る話どうなりました？」
「おお剣くん。いやー、残念だけど流石に私の力でも無理だったよー」
「えー、おもんな」

デュノア社の社長室に五人はいた。

時守とシャルロットには見慣れたものであるが、千冬と簪、そしてラウラがここに入るのは初めてだ。

しかし、このメンツは格式高い場所でも緊張こそすれ、取り乱してしまうということは無かった。

「あの、デュノアさん…」

「ああ、すまないねブリュンヒルデ。それと、デュノアではシャルロットとややこしくなるから私のことはフランクと呼んでくれたまえ」

「ではフランクさん。デュノ…シャルロットの専用機の件ですが…」

「分かってるよ。…単刀直入に言おう、シャルロット。今乗っているリヴァイブから、第3世代に乗り換える気は—」

「ないよ、そんなの。僕は、できるだけこのリヴァイヴと一緒に頑張りたいんだ」

「そう言うと思ってたよ」

フランクがデュノア社に五人…というよりシャルロットを招集した理由は他にもなく、彼女の専用機についてのことだった。

現在シャルロットが使っているラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは他の生徒たちにも知られている通り、第2世代機だ。

現状、IS学園の専用機持ちで第2世代機を使っているのはシャルロットだけであり、一番最新の機体である『紅椿』に至っては第4世代である。

「でもね、これからの戦いやモンド・グロッソ参戦のことも考えると、そのわがままも聞けなくなってしまうかもしれないんだ」

「っ、でも…」

「なにも、今すぐ乗り換えることを強制しているわけではないんだ」
シャルロットの操縦は、とにかく巧い。

一人だけ第2世代を操っているということのを忘れさせるぐらいに第3世代機と渡り合っているのだ。

しかし、それが国家代表クラスが相手となると話は変わってくる。

「私たちデュノア社が新たに開発した第3世代IS『コスモス』。それを、デュノア社の人間に使わせる」

「と、いうことは」

「ああ。シャルロットが勝てば、今まで通りリヴァイヴを。負ければ、乗り換えるということも視野に入れてもらうよ」

「うん。分かった」

「ほえー。第3世代機かー」

「剣くんも戦ってみたいかい?」

「いや、別にいいです。今はシャルの番なんで」

シャルロットの勝負の時が近づいていた。

◇

「つよ…っー」

試合開始早々、シャルロットは追い詰められていた。

第2世代ISであるリヴァイヴの性能の大半を受け継ぎ、かつそれでいて第3世代機となったコスモスは、当然の如く全ての性能においてリヴァイヴを上回っていた。

加え、第3世代兵器『ル・ブクリエ・デ・ペタラ花びらの装い』という実弾兵器をことごとく受け流すエネルギー・シールドが取り付けられているため、実弾が基本装備のシャルロットのリヴァイヴとはとことん相性が悪い。

「それでも…」

その他にもエネルギー弾と実弾を組み合わせた射撃が可能な四八口径ハイブリッドロングライフル『ヴァーチェ』や、三二口径十連装ショットガン『タラスク』の存在もあるが、今まで戦ってきた強敵と比べると、一番強いというわけではない。

少なくとも、ゴーレムⅢの方が絶望感は強かったし、全ての単一仕

様能力を同時に使う時守よりかは勝てるビジョンは見える。

「…」

ヘルメットバイザーをしている対戦相手、シヨコラデ・シヨコラータの顔色は窺いしれないが、かなりの実力者であることはすでに分かった。

糖尿になりそうな名前、と彼氏が言っていたことが頭から離れないシャルロットであった。

「それならー」

瞬時加速による接近。

そこに浴びせられる弾丸を真正面から受け、二重瞬時加速に切り替える。

「…」

観客席で見守る時守の目は、どこまでも冷静に、戦況を把握していた。

そもそも、自分ならどう戦うだろうという考えが浮かんだとして、単一仕様能力が発現していない第三世代IS程度ならば、形はどうであれ勝てるかと踏んでいるのだ。

今はただ、戦うシャルロットを冷静に見守るだけだった。

「はあっー」

パイルバンカーの一撃を囫に、空中一回転の蹴り上げを浴びせる。思わぬ攻撃だったからか、相手が怯んでいる隙にショットガンの連射を浴びせる。

その連撃がヘルメット・フェイスを割った。

「チイツー！」

「っ、あ、あなたはー！」

「あ？」

現れたのは、もはやIS学園1年生専用機持ちの中でも見慣れた顔である、亡国機業のオータムの顔だった。

時守の顔が思わず歪む。

「くそっ！何もかも台無しじゃねえかあー！」

「ど、どうということですか、お父さん!?!」

叫ぶシャルロット。その視線の先では、フランクが青ざめた表情でアリーナを見上げていた。

「こういうことも何も、この最新鋭機を頂こうってことだよ！」

フランクが部下に命じてアリーナのロックを試みているが、上手くいかない。

千冬は、以前東とともに行動していた少女、クロエ・クロニクルの顔を思い浮かべた。

「簪、カウンター頼むわ」

「うんっ！」

「ちっふー先生？」

「ああ、時守。今すぐピットに向かってー」

「待って！」

開いていくアリーナの天井を見て、簪にカウンターハックを指示する時守。

ピットからアリーナに乗り込もうとする時守を止めたのは他でもなく、シャルロットだった。

「いつまでも、剣に頼ってばかりじゃられない！」

「シャル…」

とはいえ、開きつつある天井を見て焦ってしまったシャルロットのリヴァイヴは装甲をかなり削られてしまっており、地の利でも心境的にもオータムが優勢だった。

「はっ！せっかくこの場で一番強えやつの手助けを断るなんてなあ！」

「僕はその人に並ぶために、戦ってるんだ！手助けなんて、借りてられないっ！」

シャルロットが攻める。

「っ、やべ…」

しかしそれは、時守の目から見ても、そして千冬やラウラ、果てはフランクの目から見ても明らかかなほどに、焦りから生まれてしまった攻め。

「くあ…い！」

シャルロットがまともにダメージを与えられないのと対照的に、コスモスの攻撃がリヴァイヴに降りかかる。

リヴァイヴの装甲が割れ、ついにはISコアが露出してしまう。

「シャルツ！」

「織斑先生！ハッキング元、特定出来ました！」

「よし、でかした！…チツ。このアリーナの上空1000mだと…」

「シャルロットが奴を撃破できれば…」

千冬はこの時点で全ての戦況が理解できた。

デユノア社内部に潜入したオータムがコスモスに乗り、クロエのIS『黒鍵』の単一仕様能力『ワールド・パージ』とお得意の電脳戦の補助を使い盗み出すというもの。

その作戦の完遂には、シャルロットの撃破が前提として存在していた。

「舐め、るなあ！」

そしてそのことはシャルロットもよく分かっていた。

言ってしまうえば、このフランス空路組の中での一番のカモ扱いされとも同然。

父の、そして愛する人の目の前、故郷で、母が好きだった花の名を受け継いだ機体をいのようにされて、いくら温厚なシャルロットでも我慢の限界だった。

「お願いっ！リヴァイヴ!!」

シャルロットの慟哭。

それとともに露出したリヴァイヴのコアと、コスモスの装甲がぶつかり合った。

「なあっ!？」

瞬間、二機の間で共鳴現象が起きた。

「あ、あれは！」

「なんやアレ」

「以前、VTシステムに飲まれた私を助けるときに、嫁が白式で突撃してきた時と同じ光だ！」

「…あ。俺そんな時ぶつ倒れてたから知らんわ」

「ということは」

光に包まれる二つの機体。

強制排除されたオータムとシャルロットは、アリーナの地面に叩きつけられた。

「っし。二つともー」

「させない！おいで、リヴァイヴ：ううん、『輪廻の花冠』！」
リイン||カーネイション

シャルロットの叫びが、声が、想いが——届いた。

「やっぱり合体：っ！シャルと合体していいのは俺だけやあっ!!」

「このタイミングでふぎけるな馬鹿者」

時守の声もばつちりと届いてしまったようで、シャルロットは真つ赤な顔のまま、文字通り専用機となった『輪廻の花冠』で飛翔した。

「ちゃんと、分かる…。お母さんと、お父さんの温かさ…」

「ISやからって調子のんなよお！」

「いい加減落ち着け」

すぱん、と小気味よい音が時守の頭から鳴る。

ガード不可攻撃である千冬のシバキの衝撃は時守を正気に戻すのに十分だった。

「いてて…：はー、シャル美しすぎませんか？」

「お前…。まあ喚かれるよりかはマシか」

世界で初めてのデュアル・コア搭載機『リイン||カーネイション』の誕生を目の当たりにして、時守が放った言葉はそれだった。

ぶつちやけこの男からしてみれば、世界初の偉業程度のこととは自分にとって日常茶飯事となってしまうているのだ。

「天使かな？」

「おいアホ弟子。出席簿を食らいたくなければ上空の敵を捉えてこい」

世界初の出来事よりも、いかに彼女が可愛く、美しくなったか。

共鳴現象により正しく天使の光輪を戴いたかのような翼と装甲に見とれていられるだけの時間が、時守にはなかった。

「ちえっ。んじゃ行こか、ラウラ」

「はっ！」

シャルロットの機体に『コスモス』も入ったため、スコールに強奪される心配がなくなったのだ。

敵を捉えるなら、今しかない。

「来ましたか」

「来ましたでー」

青空に浮かぶのは、ゴスロリ衣装に身を包んだクロエ・クロニクル。

IS学園の人間では、千冬以外誰一人として見たことのないその姿にも、やはりというかこの男は適応した。

「貴様…その顔は！」

「んえ、どしたラウ…えつ。そっくりさん？」

「いえ、そういうわけでは……」

「いやいやいや。これで似てへんってのは無理があるやろ…」

同じ顔に同じ髪、同じ肌。

まるで生き写しのような二人を、時守は見比べた。

「あ、いや。やっぱ似てへんな」

「はい？」

「ラウラはどつかアホそ…抜けてるっていうか、キツそうやけども。

お前何考えてるか全く分からんもん」

「むっ！師匠！それでは私が馬鹿正直だと聞こえるぞ！」

「その通りやんけ」

一見全く同じな二人。しかし、彼にとってはある程度は見分けがつく。

まずは目。ラウラの方がキツイ。

そして雰囲気。ラウラの方がアホそ…相手の方が賢そう。

最後に言葉遣いなど。相手の方が上品。

とことんラウラに厳しい時守であった。

「ごほん。はじめまして。完成品の『月の落とし子』。私はあなた。あなたになれなかった、もう一人のラウラ」

「やっぱそっくりさんやん」

「…ローレライ？」

言葉の意味を履き違える時守と、そもそもうまく伝わらなかったラ

ウラ。

日本語とはつくづく難しいものだど痛感したクロエだった。

「あなたは知らなくてもいいこと……。それと、その隣にいる男。時守剣」

「はいよ、なんでっしやるか」

ハイパーセンサーで下にいるシャルロットの姿を確認していた時守。

不意に話を振られ、思わず返事をしてしまった。

「あなたは完全なイレギュラー。我がマスターのため、いずれこの世から消えてもらいます」

「もうすでに一回死んでる場合は？」

「ノーカンでお願いします」

「お断りします。もう死にたくないです」

そもそももう大怪我すら負う気がないため、軽く返す。

そんな時守とラウラに、地上にいる千冬から割り込んで通信が入った。

「何をしている！お前たちが見ているのは幻だ！」

「なっ！師匠！」

「なんや、これ……！」

「前はきちんとお披露目ができませんでした。これが私の単一仕様能力『ワールド・パージ』です」

「前回？……っ、野球ん時か……！」

「はい？」

クロエには分からないだろうが、それだけでラウラには伝わった。

時守が単一仕様能力を1回使用しただけで2秒で解決してしまった『アメリカ産5分カップラーメン襲撃事件』の真犯人。

それが、この今日の前にいるクロエと、その単一仕様能力『ワールド・パージ』なのだ。

「では、私はこの辺りで」

「ラウラア！俺の手え握れ！」

「はいっ！」

クロエの姿が宙へと消えていく。

それを見て捉えられないと悟った時守が、ラウラの手を握る。

「雷轟ー！」

「ぎゃあああああつ!!」

ラウラの身体に強力な雷が浴びせられる。

ギャグ漫画の如く、ラウラのシルエットが骨だけになった。

「何をするんですか!？」

「え、いや。お前まだワールド・パージ…やっけ?アレの影響受けてそうやったから…」

「拳骨でも良かったでしょう!？」

「おけ。じゃあ次はそうするわ」

ぷすぷすと髪の毛の先々を縮れさせ、煙を上げているラウラと共に下降していく時守。

アリーナではすでに、シャルロットがオータムを捉えていた。

「ヒヤッハア!汚物は消毒だアー!」

「またてめえか!つて、ちよ…!マジで全身光らせながら近づいてくんなつ、ギヤアアアアツ!」

ひとまず、愛しのシャルロットを汚そうとした下手人に怒りの雷を落とした。

◇ ◇

「と、言うわけで」

「シャルロットの専用機問題が見事に解決してしまった件について」

「解決したの?お父さん」

「ああなに。政府やそこら辺には私がなんとかするから安心しなさい」

「…そもそも、国連代表と懇意にあるお前に下手に手は出さんだろうよ」

「あつ、なるほど」

場所は戻って、社長室。

縄で縛ったオータムを引きずってここまで来た一同は再びフラン

クと話していた。

「正直シャルロットもこの結果が一番良かったんじゃないのかい？」

「言ってしまうばそうだけど…、ほんとに大丈夫なの？」

「ああ。それで…シャルロットは、『輪廻の花冠』には乗りたくないのかい？」

「…そりやあ、乗りたいよ。お父さんとお母さんの気持ちが詰まった機体と、僕の愛機。その2つが合体した機体だもん」

「だったら乗りなさい。『輪廻の花冠』に乗って、お友達と残りの2年間。IS学園でいろんなことを学んできなさい」

「っ、うんっ！」

一学期の学年別タッグトーナメントでシャルロットとフランクの間での誤解が解けて以降、フランクはシャルロットと正妻との間の娘のように接してきた。

それでも、今まで父親らしい事が出来たかと言われれば、素直には領けない。

しかし、今この瞬間のシャルロットの笑顔を見て、ようやく自分は父親らしくなれたのではないかと、フランクは自負する事が出来た。

「あ、てかシャル。ワンオフは出たん？」

「ううん。ワンオフも、第二形態移行もまだだよ」

『輪廻の花冠』は扱い上、特殊第三世代となってるからね。今回の任務を終えれば、詳しく調査を進めていこうと思っているとところだ」

「ほー」

「どうした時守。やけに興味津々ではないか」

「まあ合体なんてもん見せられましたしねー。…どんな機体になってるんかったのが楽しみっすね」

シャルロットが機体性能の面で専用機持ちたちの中で少しだけ遅れ始めていたということは、時守も千冬も知っている。

シャルロットと交際している時守なら尚更だった。

だからこそ、この誰も見たことも聞いたこともない特殊第三世代機『輪廻の花冠』との戦いに、時守は胸を躍らせていた。

「期待しててね、剣。みんながビックリするぐらいに成長するから」

「ほっほお。成長度合いでこの俺に勝とうとでも?」

「今はまだ、僕はこの『輪廻の花冠』のことをよく分かってあげられていないけど、ちゃんとこの子のことを分かってあげられたら、きつと剣にも追いつけると思うから」

「…ああ。その意気込みがあれば、シャルはもつと強なれるわ」

「私たちも……」

「負けていけないな、簪」

覚悟は決まった、とでも言わんばかりの表情を見せるシャルロットに、時守は彼女のさらなる成長を予言した。

その会話を聞き、共に次代の国家代表を目指すラウラと簪にも火がついた。

「互いに刺激しあっているところ申し訳ないが、時守」

「はい? なんすか?」

「今回のこの作戦が終わり次第、国連本部に来るようにとロジャーさんから連絡があった」

「ほいほい。りよーかいっす」

今回の遠征が終わる予定が、12月の25日。つまりはクリスマスの夜。

そこから年末までのわずかな期間でいいので来てくれとのことだった。

「ま、今は作戦に集中しておけ」

「ほおーい」

どこからどう見ても集中しているようには見えないその様子。

だが、やはりその姿はどこまでもいつも通りだった。

2 度目のイギリス

「あばばばばばば」

「もうっ。どどん北上市るんだから寒くなるに決まってるでしょ？」

「こたつ欲しい…」

「それは日本人皆が思っていることだ、時守」

空路でフランスを出発し、イギリスに到着した空路組。

彼らを待っていたのは、とんでもない寒さだった。

「金ちゃん助けて」

「防寒ですぐにISを使おうとするな」

千冬は数年前にドイツで購入していたコートを、シャルロット、簪、ラウラはそれぞれ事前に準備していたものを着ていたが時守にそれはなく。

フランスに着いた時と同じく、シャルロットと簪のコートとマフラーを共有する形となっていた。

「あっ！剣さん！」

「お、セシリー達や」

空港を出てすぐにあるロータリーで先行していたドイツ海路組と合流する。

セシリア、箒、鈴、そして一夏がそこには立っていた。

「モツピーこたつ持ってきてきてへん？」

「お前は私をなんだと思ってる!？」

「大和撫子」

「だからと言ってこたつを持ってきているわけがないだろう！それにこんな所でどうやって入るつもりだ！」

「…ワンサマ、コレよコレ」

「ああ。流石は箒だぜ…！」

「な、なんの話だ？」

十中八九ツツコミのキレの話だが、周りのせいで気づかぬうちに

ツツコミも強化された筈は知る由もない。

時守の元へと駆け寄ったセシリアに続くように、三人もフランス空路組に歩み寄った。

「そっちはどうやった？」

「船が気持ち悪かった」

「小学生か」

「でも実際マジよ？案外揺れるとキツいっていうか…」

「ISの揺れとはまた違うものだったからな」

お前揺れるもんあるんか、とは鈴には聞かなかった。

セシリアが時守の近くで再開の喜びに浸っている間、他の三人の旅の様子が伝えられる。

どこの中継地にも寄ることなくイギリスまでノンストップだったドイツ海路組。

一番辛かったのが―

「…あー、時守くうーん」

―真耶だった。

「うわあ…。大丈夫ですか？山田先生」

「えと、はい…。なんとか…。凄く、揺れたので…」

「その光景簡単に想像できますわ」

ぴよんぴよんと小さく跳ねるセシリアと3人の少し後ろで青ざめた顔で少し屈んでいる真耶。

その光景は、男子として非常にくる物があった。

「そう言えば時守。なぜ私はあだ名で山田くんは先生のままなんだ？」

「えっ。今さら？もしかして嫌でした？」

「そういうわけではない。ただ気になっただけだ」

じゃあちっふー先生の新しいあだ名も考えよー、と考える時守。

その前に、真耶につけるあだ名を模索する。

「んー。んー…」

その視線は、どうしても真耶の胸部装甲に釘付けになってしまっていた。

「剣？」

「やつぱりおつきい方がいいの…？」

「わたくしの大きさでは足りませんか？」

「いや待って待って待って、あだ名考えてるだけやから」

とは言うものの、時守がつけるあだ名は全て名前から由来しているものがほとんどだ。

確かに、胸を見る必要は無い。

「よし。んじゃ、まっちゃん」

「どこの大御所芸人さんですか…！」

「やーさん」

「私そんなに怖く見えますか!？」

「全然？」

山田真耶という良くも悪くもいじりにくい名前。

篠ノ之束とかいうインパクトしかない名前の方がシンプルなあだ名が生えるのだが、妙につけにくい。

「じゃあもうまーちゃんでよくね？」

「はい。もうそれでいいです…」

船酔いの影響でこんなことに考えを割きたくない真耶。

以後、この時の適当な返事のせいで生徒の9割以上からまーちゃん呼びされることになるとは、この時は思ってもいなかった。

「っていうか、テレビで見たわよシャルロット。リヴアイヴがなんか凄いことになってんじやない！」

「ほえ？」

ずい！と鈴から差し出された新聞。

それは今朝のフランスの新聞の一面であり、鏡で見慣れた自分の姿が載っていた。

「えつと…『フランスの聖^{ラ・ビュセル}女、ジャンヌ・ダルクの再来か!?世界初のデュアル・コア搭載IS『輪廻の花冠』とシャルロット・デユノア…：な、なにこれ…!」

「おつ、それ確かお義父さんがやけに気合い入ってたやつやん」

「剣知ってたの!？」

「おう。それに、その小見出し見てみ？」

でかでかと書かれている、シャルロットからすれば恥ずかしいにも程があるその見出し。

さらにそのすぐ下には――

『男性操縦者の一人、時守剣国連代表もその進化に期待の眼差し！
「1度戦ってみたいですね」とコメントも』：剣、これ、いつインタビュー受けたの？」

「シャルと簪とラウラが寝てから、ちっふー先生と俺とお義父さんの3人で」

「国連代表の名前を出してるってことは……」

「お仕事の一つやなー。ま、ええやんええやん」

「良くないよお……」

シャルロットが顔を真っ赤に染めて蹲る。

専用機持ちの中でも比較的常識人である彼女にとって、身内の恥とも言えるようなことが起きてしまったのだ。

「お、おほん。では改めまして、ようこそ皆さん。我が祖国、グレートブリテンへ」

うやうやしくお辞儀をするセシリア。

スカートを掴む仕草も、その後ろにずらりと並ぶメイドたちを従える姿も非常に様になっている。

しかし、やはりというかそこにチエルシーの姿はない。

「セシ――」

「ちいちゃああああああん!!」

明らかに落ち込んで見えるセシリアに時守が声をかけようとしたその時。

ずどどどどどど、と凄まじい土煙を上げながらこちらに向かって走ってきたのは、現在絶賛国際指名手配中のISの開発者、篠ノ之束だった。

「会いたかったよおおっ！あつ、箒ちゃんもいるねえ！剣ちゃんも、もちろんいっくんも！」

「うざい死ね離れろ」

千冬を見つけるや否や、躊躇うことなく彼女に抱きつく東と、それをうっとおしそうに片手で制する千冬。

いつも通りの二人。だが、生徒達はそうではなかった。

京都の一件で、すでに東が亡国起業の一員になっていることは分かっているのだ。

「千冬姉？」

「今から説明する」

一つため息をつき、千冬は静かに言葉を紡いだ。

「今回の作戦行動では、欧州統合政府、IS学園上層部、そして……亡国起業との共同あたる」

「なっ!？」

ざわつく一同。

一人眉間に見たこともないほどに皺を寄せた弟子を見やり、千冬が一步前に出た。

「静かに。作戦時刻は現時刻より四時間後、16:00に開始する。作戦名は――」

いつにも増して真剣な面持ちの千冬。そんな彼女の口から告げられたのは――

「ソード・ブレイカー聖剣奪壊だっ!」

高校生でも口にするのが憚れるほど、厨二病に染まったものだった。

◇

場所は変わり、イギリスのIS空軍基地。

何十人ものスタッフが慌てふためきながら作業を進める中、時守は不機嫌そうに一夏と話していた。

「何がどうなってるんだ……？」

「さあなー。まっ、また碌でもないことに巻き込まれてるのは確かやろなー」

頭の後ろで手を組みながら柱に凭れかかる時守。

その視線の先には、国連所属のIS整備スタッフの姿があった。

「…チツ。気にくわんわ」

「拡張領域が埋まってるのはどうするんだ？それに、内容極秘のパッケージなんて使いたくねえよ…」

一夏の視線の先では、実戦仕様と追加装甲、そして一夏の言った通り内容不明の極秘パッケージの取り付けに職員たちが追われていた。

「よっ、青少年」

「ぬっ!？」

そんなつぶやきをした一夏の尻を、ペロンと何かが撫でた。

「またまた会ったね」

「か、篝火ヒカルノさん!？」

「いつえくす。ヒカルノお姉さん、呼ばれて見つ参！」

一夏のケツを撫でたのは、スク水仕様のISスーツに白衣、水中眼鏡にモリと、ものすごく場違いな格好をした変態だった。

「一夏、誰この人」

「あ、ああ。剣は知らないよな。倉持技研の所長さん、篝火ヒカルノさんだ」

「はいはい。君のことはもちろん知ってるよ、時守剣くん！」

「どもども」

こんな個性の塊のような存在を目の当たりにして、時守が反応しないということは、真面目モードのスイッチが入っているということ。

一夏はなんとなく、彼の性格について理解してきたのだ。

「その辺りはご安心を。白式にも付けられるよう、外付け増設で統一してるからね」

「へー。ほな金ちゃんに付けさせてるやつ外させよ」

「えっ、ちよちよちよ時守くん!？」

こんな格好をしているヒカルノだが、これでもれっきとした研究員。

その彼女が作戦のためにつけさせようとしているものを、時守は外させようとしたのだ。

「なんすか?」

「いやいや、聞いてたの?それ、作戦に必要」

「それを決めれんのは俺と金ちゃんだけや。そもそも、せつかく実戦

仕様にしたのに他の邪魔なやつ付いても動きにくくなるだけやからな」

「う、ぐ…」

有無を言わさぬ時守の圧力。

年下とは思えぬほどのそれに、ヒカルノは返すことができなかった。

「にやつほほーい。元気そうだねー、剣ちゃん」

「おおたーちゃん。なあ、あの装備って金ちゃんには要らんよな？」

「え、うん。要らないよ？」

「ほれ見い。広告塔に使おうとしてること、バレバレでっせ」

作戦本番にさしかかろうとしているこの時間帯。

この男は、一切のおふざけがなくなっていた。

「おい、男子二人！それから変態とアホ！作戦の説明を始めるぞ！」

千冬のやや怒りの籠った声に振り向いてみると、彼女の元には一夏と時守以外の作戦に出るであろう人員が集まっていた。

「おつ、よう雑魚。またアレにボコられに来たか？」

「ほざけ。お前との直接対決では私が勝っているだろう」

「よう言うわ。あんな機械相手にボロボロになっときながら」

「いい加減にしろ。今からお前たちは共に作戦を完遂させるために共闘するんだぞ」

そのメンバーに近づき、その中の一人、織斑マドカを見て時守が発した言葉は、とてもこれから同じ作戦に取り掛かる仲間に向けるものでは無かった。

「つてかチエルシーさんいるやん」

「剣さん。あの時、なぜ剣さんとわたくしの前にチエルシーが現れたのか、その理由がはつきりとなりましたわ」

「申し訳ございません、時守様。これは、一種の私のワガママのようなものでして」

「ほーん。それに、亡国も関係してるって普通に考えておかしくない？」

どこまでも鋭い時守の一言に、チエルシーは息を飲んだ。

「…順を追って、話させていただきます。今回の作戦のターゲット、エ

クスカリバー。あれは、イギリスとアメリカの共同開発によって生まれた攻撃衛星―」

「つつーのは建前。生体同期やる?」

「し、知っておられたのですか!?!」

「前に資料で見た。…で、そのエクスカリバーがどないしてん」

時守のIS、どころか彼の持つ国連代表という権限をうまく使えば、改ざんする前の情報を見る程度容易いことなのだ。

今の所一夏も話に着いてこれている。

「アレに乗っているのが、私の実の妹、エクシア・カリバーンなのです」
「チェルシーに妹がいるということなど、今の今までわたくしも知りませんでしたわ…」

「そして、そのエクスカリバーが暴走しちゃったーって焦ったイギリスと亡国起業が白羽の矢を立てたのが―」

「このISを大量に保有してるIS学園ってか?」

「さっすが剣ちゃん!ちなみに、狙われているのは女王様が住んでるお家らしいよー」

言つてしまえばこうだ。

イギリスとアメリカの共同開発の生体同期ISが、亡国起業に奪われ暴走。

それが女王陛下の宮殿を狙っており、その始末を手伝わされているということ。

しかし、セシリアの母国であり、狙われている場所も場所なので、IS学園側からしても無関係ではないということだ。

「んで、この作戦を自分の手でやり遂げるためにブルー・ティーズ三号機を盗みたかったからチェルシーさんは亡国に入ったと」

「はい…。いかなる罰も、受けるつもりです」

「それは全部やり終えてからや。で、どうやってあんな破壊するんすか?」

大人組に作戦に概要を聞こうとする時守。

颯爽とポーズをとったのは、ヒカルノだった。

「はい!この私が開発した特殊パッケージ外装

『Output・Variable・Energy・Reverse・System』
について、ここで説明させてもらいまーすっ！」

「エイ！とピースサインをするも、緊張感に包まれたこの場では誰も返すものはいなかった。」

「ええつと、この『O・V・E・R・S.』は少量のエネルギーを増大、反転させることでより強力なエネルギーを引き出すというー」

「そこまで言ったところで、待つてましたと言わんばかりに束が飛び出した。」

「まるで紅椿の単一仕様能力、『絢爛舞踏』のようだね！不思議な偶然もあつたもんだよ！まるでー」

「そこまで言い、束はヒカルノの眼前に迫った。」

「ー紅椿のコピー品みたいだね！」
「うっ…」

「この場で束とヒカルノ以外知る由も無いが、この『O・V・E・R・S.』こそが、ヒカルノが成し遂げようとしている計画の第一歩のようなものなのだ。」

「しかしその考えは当然、束にはバレていた。」

「説明に戻る。今回の作戦ではこの『O・V・E・R・S.』搭載機による連携が必須となる。この装置は搭載に同士のエネルギーを均一化する効果もあるため、今回に限り紅椿にも搭載される。…時守、こればかりはつけてもらおうぞ」

「了解」

時守の返事を受け、千冬の説明は続く。

「バックアップは山田先生と…簪。デュノアの機体はまだ不安定な部分もあるため、楯無と共に地上に残ってもらう」

地上。そこに残るのがバックアップ班以外で二人のみ、ということ
は。

「今回の作戦の目標は」

「自らの真上を指差す千冬。」

「宇宙だ」

「…つてことは、マドカとチェルシーさんも宇宙つすか？」

「いや。ブルー・ティアーズ組は地上から超長距離射撃を行う。これこそが、この作戦の要と言ってもいい」

「なら俺たちは？」

「…言葉を選ばないのなら、困だな」

「なんや、適任ばっかつすね」

さりげなく遠距離攻撃において役に立たないと言われた一夏、箒、鈴、ラウラ。

実際のところ本人たちも気が狂うほど遠くにあるものを狙い撃つなど性に合わないので、怒る気にもなれなかった。

「そして、だ。お前たちの中でも前衛、後衛を決めておけよ」

「やとさ、どーする？」

「俺は死にたくないぞ」

「そんなんみんなそうよ」

ううむ、と唸る一同。

女王陛下の宮殿を消滅させかねない代物相手に、誰も前衛に行こうとはしなかった。

「ほないつも通り適当に立ち回るか」

「っ、いいのか？そんな適当で」

「言うてもまあ、暴走して機械相手やろ？」

「お前が言うからこそ、嫌な予感がするのだぞ。剣」

ゴーレムⅠ、VTシステム、銀の福音、ゴーレムⅡ、ゴーレムⅢ、そして白騎士。

無意識だったり、機械だったり、完全無人機だったり、人が操作していないISの相手が非常に多い時守。

勝ち負けで見れば全戦全勝だが、時守の肉体へのダメージを見れば2勝4敗なのだ。

「だいいじょびだいいじょび」

「その余裕はどっから出てくんのよ…」

「…あ、そか。まだドイツ海路組には…ってか誰にも言っへんかったな」

「また何かしでかしたのか？」

「ちやうわ。まあなんや、色々上手いこと行つてんねん」

「なにになー？東さんも気になるなー」

ことある事に何かをしてきた男、時守。

「…まあそれは、いざという時のお楽しみということぞー」

「むうー！ヒントぐらいちようだいよー！」

「せやなあ…。強いて言うなら、目に見えるもんだけを信じるなつてか？」

彼がまた、何かをしでかそうとしていた。

200%

作戦開始の目的地である山岳部まで向かうイギリス空軍特務IS部隊のヘリの中。

二班に分かれた一同は、千冬からの無線により作戦内容の確認に当たっていた。

「それではおさらいだ。織斑、凰、篠ノ之、ボーデヴィツヒ、時守の5人は衛星軌道上の目標、『エクスカリバー』に向け、重力カタパルトで上昇する。指揮は一応時守に任せてはいるが、各々最適だと思ったら自分の判断で動くように。攻撃が接近部隊に集中している間に、オルコットはBT粒子加速器によって地上から超長距離射撃を行う。この作戦の要は、すべてオルコットだ」

無線から聞こえてくる千冬の声に時守の隣に座るセシリアの体が強張っていく。

先日簪にしてもらったように、時守が緊張によりずっと握り締められていたセシリアの左手を、自らの両手で優しく包んだ。

「大丈夫や。セシリーが当てられるまで、何回でも俺が止める」

「剣さん…」

決して浮かれたような雰囲気はそこにはなく。ただただ真面目に彼女を励ます姿がそこにはあった。

そこに割り込むように、空中投影ディスプレイが開かれる。

「これが、目標の画像だ」

「…なるほど。やからエクスカリバー」

「そうだ」

宇宙に漂う、一本の剣。

全長15メートルという場違いなほどに長いそれが、太陽光を吸収、収束させ、地上に一気に放つという。

「こんなんが生体同期型とはなあ…。政府もえげついモン作りよるわ」

「なんだ、今更になって怖気付いたか？」

「んなわけあるか。…ただ、ちよつとは厄介やるな」

マドカも軽く時守に悪態をつけて見せるものの、先ほどのような仲間割れを引き起こしかねない発言は避けていた。

時守たちの撃墜は、すなわち地上にいる自分たちの死も表している。

成功か、はたまた失敗か。全員死亡その二択だった。

「ま、味方は今だけやけどな。お前も頼むぞ?」

「ふん。私とて、お前たちとは決着をつけたいからな」

いずれはつきりとした決着をつけるために。そのために、今は休戦し、一つの目標を遂げる。

千冬がいらない、最年長がチエルシーというこちら側のへりは全員にとつて程よい緊張感に包まれたまま、目的地に着陸した。

「よつと。…おー、でつか」

人里離れた山林の奥。そこにあつたのは、まるで宇宙望遠鏡とでも言わんばかりの巨大な装置だった。

「これが今回の作戦の一番のメイン、BT粒子加速器であり、絶対対空砲『アフタヌーン・ブルー』だ」

ほぼ同時に千冬が別のへりから降りてきて説明を交えながら合流した。

時折彼女の視線がマドカに向いていたことは皆が気付いていたが、あえて言いはしなかった。

「では、各自準備に取り掛かれ!ブルー・ティアーズ各機は『アフタヌーン・ブルー』との接続を、上昇班は『O.V.E.R.S.』の最終調整に入れ!」

ついに、宇宙。

そんな思いとは全く別の意味を孕んだ胸の高鳴りを、時守は感じていた。

「さてと。んなら俺らも最後の作戦会議といこか」

「ああ」

「と言っても師匠。作戦などあるのか?」

「まあな。一応つてもんやけど、俺らのメインは箒や」

「わ、私か!？」

他の四人、一夏、箒、鈴、ラウラを集め、最後の話し合いを行う時守。

国際連合代表しか着ることを許されていないウインドブレーカーが、嫌に目立った。

『O. V. E. R. S.』が何のためにつけられてるか、つてのは大丈夫か?」

「まだ完全に理解できてるわけじゃないけど、あれでしょ? 紅椿の『絢爛舞踏』を『O. V. E. R. S.』搭載機にもって感じの」

「まあせやな。でや。今回のコレは、実践仕様になつとる。つてことは」

「消費するエネルギーも増える、つてことか?」

「そゆことそゆこと」

規格外のパワーを誇る『エクスカリバー』

そんなものに試合用の調整がされたISで挑むなどというようなバカな真似は誰も考えていない。

そのため、普段はあまり使い慣れていない、実践仕様での戦いとなるのだ。

「やから、常にエネルギーを回復してくれる箒が重要つてことや」

「実践仕様ならば、嫁の『零落白夜』も凄まじい威力になるしな」

「俺の単一仕様能力も、全部軒並み強化できるからな」

「ふむ、なるほど…。責任重大だな」

言葉だけ聞けば、ただ絢爛舞踏を発動さえすればいい。

しかしそれは同時に、絶対に撃墜してはいけないということなのだ。

「…ん。そろぼち準備せなあかんっぽいな」

「じゃあ、行くか」

『O. V. E. R. S.』の最終調整へと向かうため、それぞれ自分の重力カタパルトへと向かう。

「時守代表!」

「お? ノーラさん。お久ー」

「そ、そんな気軽でいいんですか!？」
「いいんすよ」

時守の重力カタパルトには三次形態移行の時にお世話になった人物の一人であるノーラがいた。

彼女も時守の担当作業員として、この場に呼ばれていたのだ。

「そういうノーラさんは？」

「私は、今調整が終わったところですね」

「ほなちようど良かった」

そう言つて、ウインドブレーカーを脱ぐ時守。

「これ、持つてもらえますか？」

そこには、他の者とは違う襟元に国際連合の旗のマークが描かれたISスーツを着た、真正銘国際連合代表としての時守剣がいた。



「それでは作戦を開始する！」

地面に刺さった三つの突起物。正三角形にその重力アンカーが配置されている中心に、各人が待機する。

それぞれ五基の重力カタパルトにIS展開状態で上昇班が身構える。

「発射まで、10、9、8、7、6……」

真耶と共に施設の内部でオペレーターを務める簪の秒読みが、やけにはつきりと聞こえる。

「……」

ただ一点。ハイパーセンサーで捉えている『エクスカリバー』の姿を見上げ、首の骨を鳴らす時守。

重力カタパルトに力が集中し、くらりとした一瞬の浮遊感の後、内側に向いていた重力アンカーが一斉に外側へと開いた。

「3、2、1——発射ッ！」

どんっ、という短く大きな音と共に射出。

一気に限界速度まで達した五機は、成層圏を離脱するべく『O.V.』

E・R・S.』を起動、加速を維持する。

「これって、どのくらい役に立つんだ？」

飛翔を始めてしばらく。どこか呑気な声で、一夏が持たされたシルドの耐久性への疑問を口にした。

「相手は超高出力熱線なんだろ？アイスみたいに溶けないよな…」

「さあなー。俺は要らんからつけてへんし」

「一応、この物理シルドはISのエネルギー・シルドと接続することでその効力を何倍にも引き上げるといふ代物だからな」

対応策を持っているので必要ないと言って断った時守とは違い、他の四機はそのシルドを装備している。

時守とラウラのその表情は、いつにも増して引き締まっていた。

「箒」

「分かっている。いつでも、絢爛舞踏を発動できるようにはしている」
「来るぞっ！」

一夏がそう叫び、五機は散開する。

先ほどまでいた空間は圧倒的火力を誇る熱線に薙ぎ払われ、空間がびりびりと震えていた。

「な、なんだこの出力…」

明らかに想定していたものとは違う。

疑問を抱いたラウラが『エクスカリバー』のデータを読み込むと。

「想定のお3倍!？」

「ッ、くそが…仕事せえやほんまにー！」

そこには、ありえない数値が並んでいた。

ラウラのその言葉を聞き、時守が地上で『エクスカリバー』の観察に当たっていた者に悪態をついた。

「はっ！」

乱雑に放たれる熱線。

地球、もしくは他四人に当たる可能性のあるものだけを、最大出力まで引き上げた『雷轟』で弾き飛ばす。

「完全に『O・V・E・R・S.』頼りの戦いかたやけどしやあないやろ…！」

「くそっ、近づきさえすれば…!」

相手は過去史上最大の I S。そう言っても過言ではない敵に、一夏が瞬時加速で近づく。

「はあああー、なっ、ぶ、分離した!」

しかし、その瞬間に『エクスカリバー』がその刀身を四つに分けた。それぞれが子機の役割を果たす、多機能攻撃衛星に姿を変えたのだ。

「っ! 『完全同調・超過』、『雷鳴』、『雷動』!」

全員に焦りと緊張が生まれ、結果一瞬だけ止まってしまった。

その一瞬の硬直の間。一人だけ動けた時守が単一仕様能力を使い、他の四人を強引に散らす。

「お前ら、氣い抜くなよ」

「うむっ!」

地球へと被害を及ばせないよう、『エクスカリバー』から見て地球とは反対に位置取る。

「箒。『O・V・E・R・S.』でのエネルギー供給頼むわ」

「ああ——くっ!? お、おのれ…欠陥品が!」

時守が箒に『O・V・E・R・S.』の使用を促したその瞬間。紅椿の背中に搭載していた『O・V・E・R・S.』が爆発した。

ここに来て、今回の作成の一番の要と言っても過言ではないほどの、肝心の『O・V・E・R・S.』すら壊れてしまったのだ。

「…はあ。使えんもんばっか寄こしよって…!」

「剣、作戦は!」

「あるかそんなもん! 自分が死なへん程度に、ぶん殴りまくれっ!」
単純明快な作戦。やられる前にやれというもの。

時守の雷が、箒の一閃が、鈴の双天牙月が、ラウラのレールカノンが、そして一夏の零落白夜が『エクスカリバー』に襲いかかる。

「チッ! 火力が足らんやんけくそが…!」

「一夏っ!」

「分かってる!」

しかし、そのどれもが『エクスカリバー』を止める有効打にはなら

ない。

接近しての零落白夜しか、手段は残っていないかった。

「ぜらあああああー！」

「あんのアホ……！」

決定打は自分しか居ないと理解し、突っ込む一夏。

だが、その位置がまずかった。

「死ぬ気かお前えー！」

一夏が飛び込んだのは、あろうことか『エクスカリバー』の射線上。とある細工により地球にいるセシリアたちが狙われないことを分かっている時守だったが、それでも一夏一人が受けるには大きすぎる熱線だ。

「零落白夜で突きながら守れ！」

「ああっ！」

『雷轟』―フル・バースト！』

飛び込んだ一夏と『エクスカリバー』の間に出るように、文字通り最大出力の『雷轟』を放つ。

雷と零落白夜、そして熱線。

「く、お、おとおおー！」

奇しくも前者2つは後者1つを打ち破るには至らず、僅かながらに削られ、一夏にたどり着こうとしていた。

「カーッ！」

だがそれを、全てを受け切る訳ではなく、何にも被害が及ばない方向へと何とか弾いた。

しかし――

「い、一夏？！」

「氣い失つとるな」

―エネルギー・シールドに守られているとは言え、尋常ではない熱量とエネルギーに晒された一夏の身体は持つことはなく、意識を手放してしまった。

「鈴っ！一夏持っつけ！」

「あ、アタシ!?」

『雷動』で移動し、決して『エクスカリバー』に狙いを付けられることなく一夏を鈴音に引き渡す。

「…あーあ。このままやったらもう無理やん」

「何か無いのか…」

「くそ…」

「…一応、一夏のバイタルは安定してるわ。このまま粘って、また一夏が起きてくれることを—」

「そんな時間あらへんやろ」

こうしている間にも、『エクスカリバー』は着実にエネルギーを蓄え、地球にいるセシリア達に狙いを定めるだろう。

「鈴。一夏ちゃんと守っとけよ」

「…あんた、今度は何を…」

「今やったら大丈夫や。それと箒。俺の合図で絢爛舞踏の発動頼む」

「あ、ああ！」

「ラウラ。絢爛舞踏の時に箒を守つといてくれ」

「承知した。…それで、師匠は？」

バチリと『金色』の装甲から雷が迸る。

「決まってるやろ。…俺が、食い止める」

その一言に反応したのは、地球にいる千冬だった。

『おい待て時守っ！お前、何をするつもりだ！』

彼女の叫び。

怒号にも近いほどの凄まじい声色のそれを、時守はさらりと受け流す。

「俺しかおらんやないっすか。ワンオフの相性も、悪くはないですし」

『だがっ！』

「大丈夫っすよ。俺らを、信じてください」

焦りを含む千冬の口調に対して、至って冷静な時守。

対照的な二人の会話がオーブンチャネルで行われていく。

「あと何分ぐらいっすか？」

『…10分以上、かかるかも知れん』

「未定ってことは、多少なりともデカイダメージ与えといった方がいい

でしょ」

10分以上、というのは時守の行動を縛るための千冬の嘘。

しかしそれは、声の強弱、話し始めるまでの間、言葉の選び方などから、時守にそれが嘘だということがバレてしまった。

「織斑先生。信じられないっすか？あなたが育てた弟子が」

『っ！時、守…』

「もう、大丈夫っす。夏みたいにはなりませんから」

夏みたいに。その言葉を聞いて、今度は鈴が反応した。

「ちよつと剣…。あんた、もしかして…」

「やから大丈夫や。そのために、俺らは強なってん」

今こうしている間にも、『エクスカリバー』はその力を強めていつている。

それに対抗する手段は、一夏がない今、時守の中では一つしか残っていないかった。

「いざとなった時は、頼む。そんな時は止めてくれ」

「…はあ、分かったわ」

『凰っ…。お前も…！』

「信じましょう、千冬さん！」

正直言ってしまうば、今の時守は国連代表としての時守剣だ。

ゆえに、千冬や鈴などの、立場としてみれば下の彼女たちの意見を無視しても構わないのだ。

だが、まだ言うことを聞ける今のうちに、意見は聞いておきたいのだ。

『…分かった。時守、お前の独断行動を許そう』

「あざっす。完全同調・シンクロ・オーバー超過——」

なぜなら——

「200%」

——ここで自ら、意識を断つただから。



「お、織斑先生…」

「…すまん、更識、デユノア…。また、あいつに…」

「…大丈夫です。剣が、そう言ったんだったら、大丈夫ですよ」

千冬と鈴は、時守が『完全同調・超過』を暴走させることは分かっていたのだ。

夏休みにまだ第二形態の時のエジプトでの『完全同調』の実験で、千冬というストッパーがいるという状況下での200%。

自我がなくなり、ISの暴走状態に身を委ねるといふ、禁止手中の
禁止手。

「完全同調から完全同調・超過に、確かに進化はした。だが…」

「脳への負担は一切軽減されてないんだよね、ちーちゃん」

「…ああ、そうだ」

暴走状態でなくても時守の肉体を傷つけてきた『完全同調』

その進化系の『完全同調・超過』は肉体へのダメージは無い。

しかし、東が言った通り彼の脳への負担は一切減っていない。

「…なら、待ちましょう」

「何…？いいのか、お前たちは」

「はい。もう、信じて待つって決めたんです」

モニターに映る時守は、今はまだ動かない。

しかし同時に、『エクスカリバー』もまた、動きを止めていた。

「それに今は、あそこに鈴もラウラも箒もいます。剣も言ってたように、いぎとなったら止めてくれますから」

「一夏も、います…」

「…そう、だな。あいつたちを、信じよう」

過去時守が大怪我を負ってきたのは、少なからず自分に非がある。そう思っていた千冬。

しかし、教え子二人がここで支援を、一人が狙撃に備え、そして5人が宇宙で戦っているのだ。

過去に犯してしまった過ちを、今掘り返している暇はない。

「よし。それではデユノアは時守たちが帰還した時の受け入れ体制を整えておけ」

「はいっ！」

「更識はそのままオペレートに徹しろ。時守の自我が失われた今、お前が今回の作戦のブレーンだ」

「はい……！」

やっと、いつもの凜々しい顔に戻った千冬。

そんな彼女に束が声をかけた。

「おー、ちーちゃんようやく復活？」

「…私だって、人間だ。悔やむこともあれば、悩むこともある」

「……うん。私もだよ、ちーちゃん」

その二人の会話は、慌ただしい施設内の音にかき消されて他の者に聞かれることはなかった。

激戦

「…師匠？」

オープンチャネルでラウラの声が響き、消えていく。

その問いに、ラウラが問いかけた人物は返事をするのではない。

「……」

『完全同調・超過』を200%まで引き上げたはいいものの、そこから一切動くことがない。

「ちよ、ちよつと剣？」

鈴の震えるような声も、ただオープンチャネルに消えていく。

「……」

その声も届かず、『金色』はただ『エクスカリバー』と対面するだけ。

「……くっ」

箒の生睡を飲む音さえも聞こえてしまうほどに、それとエクスカリバーは睨み合っていた。

「……ハッ」

短い声。

少し息を吐いた程度の声だったが、それは確かに『金色』から聞こえたものだった。

「ほっ。良かっ―」

「良くなぞない！来るぞ箒！」

気を引き締めろ、ともラウラは言えなかった。

なぜだ、という確認すらも箒はできなかった。

それほどに―

「ハハハアッ！」

―目の前の存在が狂気に満ちていたのだ。

エクスカリバーに向かっただの二重瞬時加速。

先ほど撃墜してしまった一夏と同じ光景をどうしても思い浮かべてしまう3人。しかし。

「オラよおッ！」

その放たれた熱戦を、『雷轟』を纏わせながら突進し、間一髪のところ

ろで弾きとばし――

「死ねやクソがあー！」

――視界がほんの少しだけ広がった瞬間に『雷動』を発動。『エクスカリバー』に急接近し、そのまま数メートルほど殴り飛ばした。

「っ、ハアッ！」

それだけでは終わらない。

再び自分に狙いを定めようとした『エクスカリバー』に向け『雷鳴』を発動。ハイパーセンサーが眩んでいる隙に、再度接近する。

『雷轟』オツ！」

問答無用。正真正銘の全力を、ためらいもせずに『エクスカリバー』に打ち込む。

「何を――」

剣型であり、『エクスカリバー』の顔色を伺うことなどはできない。

しかし、目の前の異常な存在を前に、明らかに単体の迎撃体制に入ったことは誰の目にも分かることだった。

「――悠長に構えとんねんゴラアッ！」

だが、その変形すらも許さない。

先ほどのように四機に分離しようとした『エクスカリバー』を、今度は殴り、そして蹴り、動きを止めていく。

「ハッ！」

分離がダメならと、『エクスカリバー』は一夏を落とした時と同じ熱戦を再び放とうとエネルギーを溜める。

が――

「アホが」

――エネルギーが、先ほどに比べて溜まるのがやけに遅い。

気づいた時にはもう、『エクスカリバー』に打つ手はなかった。

「さて問題。このたった一機のISには到底生み出せへんような電気。一体どっから貰ってるでしょーか」

理由は簡単。目の前のISに奪われているからだだった。

「てかそもそもこんだけ雷食らったら普通はショートするっつての」

これこそが、禁じ手を使う最大のメリット。

普段『雷轟』などの単一仕様能力を使うときは、生み出す雷はもちろん『金色』のエネルギーだけを交換している。

しかし、ただ敵を倒すだけに専念するこの200%では、他からも電氣を得る。

他から電氣を得るための演算など、普通は不可能だ。だが、その常識のストップパーさえ外れてしまえば、反動など気にすることなくやってしまう。

「…あ？」

だがそれでも『エクスカリバー』は止まらない。

ぎこちない動きで、再び『金色』を狙う。

「うざいつての」

しかしそれも、近くに瞬間移動してきたかのような『金色』に裏拳で殴り飛ばされ、不発に終わる。

「もう、消えろやお前」

今まで誰も見たこともないほどに、『金色』の右手装甲が輝きを放つ。

時守が先ほど放った全力の『雷轟』の数倍を軽く超えるほどの電氣が、手のひらに集まっていく。

「ダメッ！」

「んなッ…：…お、い…：鈴。止めるの、今か…？」

「そんなでかいの当てちゃったら、中にいる子もやばいじゃない！」

あと数秒で放つという瞬間、『金色』の背後から鈴が抱きついた。

抱きついた衝撃で、今まで彼の視界が捉えていなかった世界に、鈴音が入り込む。

「…お前、一夏は…？」

「あ、アレ…」

数秒前までの『金色』の視界は『エクスカリバー』しか捉えておらず、接近していた鈴にも気づかなかった。

そのため、彼女が抱きかかえていた一夏が白い六枚の花弁に包まれていることにも気がつかなかった。

「…：…そうか、お前もようやく」

「え?」

時守が力なく呟いたのを、鈴は聞き逃さなかった。

それと同時に、一夏を覆っていた外部装甲が四散した。

「ああっ! 悪い、剣。待たせた!」

「:ほんま、遅すぎるわ」

一夏の背後に広がるのは、いつも見慣れたものとは少し違うスノウ・ホワイトのエネルギー翼。

その身に纏っているもの。それこそが—

「白式、第三形態『ホワイト・テイル』か」

「これなら、今度こそ届く!」

—三次形態移行をした『ホワイト・テイル』だった。

時守のシャープなものとは真逆の、巨大なエネルギー・ウイング。

そして、背負っていた『O. V. E. R. S.』を吸収したであろう意匠が伺えた。

「ほなよろしく。:セシリーもな」

『は、はいっ!』

一夏が復活したことは、もちろん地球にいる全員にも知れ渡っていた。

その事実を、精神感応性質を持つBT粒子の密度にも、大きく現れていた。

『時守、一夏っ! 至急『エクスカリバー』から離れろ!』

「んじゃ、頼むわ」

「任せてくださいましっ!」

地上から放たれる蒼い閃光は、一夏たちの前に佇んでいた『エクスカリバー』を軽々と飲み込んだ。

「やったか!」

「モツピーまじでこのタイミングでそれやめて:」

「確かに壊した。でも—」

「ああ。まだや」

半壊した『エクスカリバー』の内部に侵入する一夏。

その目的地である狭いコントロールルームに辿り着くと、そこには

「だな。やっと、まともな戦いができるぜ、剣！…剣？」

一夏がその名を呼んだことで気づいた。

あの男が、この話題に乗ってきていけないのだ。

「っ!?!ちよつと剣！大丈夫!?!」

「え? ああ…:どないした、鈴」

「あんた、両目から血が…!?!」

「なっ!?!」

振り返り、よく見れば彼の両目から血涙が溢れ出ていたのだ。

大気圏突入と同時にそのことに気づいた四人は、慌てて時守へと近づく。

「…多分、脳みそに負荷かけすぎたんやと思う、わ…」

「お、おい！大丈夫か剣！」

普段からは考えられないほどにゆったりとした口調で、喋りにキレもない。

だが、この四人は一度だけこれに近い姿を見ていた。

「ねむ…」

「ダメだ師匠！今寝てしまえば…」

一度彼の自宅を訪れた時の、寝起き姿を彷彿とさせる姿。

こんな状態で寝させてしまえば今後どうなってしまうか分からない。

「っ、剣！剣っ！」

懸命に4人が声をかけるもISの展開が解除されていく。

大気圏内に入り、あとはこのまま下降していくだけ。

その瞬間に、時守剣は再び意識を手放した。

「っ、とおー！」

エクシア、ダリル、フォルテの誰も抱えていなかった鈴が、ISが解除された時守を受け止めた。

「えっ…:う、嘘でしょ…?」

「ど、どうしたんだ、鈴…?」

一つの大きな戦いが終わったと同時に――

「心臓が…動いてない…」

—もう一つ、また戦いが始まろうとしていた。

『嵐っ！お前だけ瞬時加速で時守を運んでこい！何よりも優先しろ！』

「は、はいっ！」

いきなり飛んできた千冬の叫び声。

しかしそれに戸惑う素振りも見せず、3人に声もかけずに鈴は急降下した。

『出来るだけ抱き寄せろ！エネルギー・シールドの中にさえいれば、バィタルは安定する！』

千冬に言われるまでもなく、鈴は時守の身体を抱き寄せ、自らが出せる最速で地上へと降りていった。

「っ、千冬さんっ！」

「良くやった嵐！」

臨時に建てられていた、元は作戦の基地として置かれた施設。

その入り口に、千冬とセシリア、チエルシー、簪とシャルロット、そして合流した楯無が揃っていた。

「ぼ、亡国のは…？」

「治療の邪魔をするつもりは無いと言って帰っていった。それより時守を！」

「はいっ」

ぐったりとしたまま動かない時守をストレッチャーに乗せ、慎重に治療室へと運んでいく。

「どう、して…？・ISには、回復機能が…」

「多分、『完全同調・超過』を200%にしちやったからだねー。アレは、剣ちゃんの生命機能なんて考えてないから」

「っ、束…！」

治療室のその入り口に立っていた人物。

それは、この作戦の間不気味な程に大人しかった束だった。

「し、篠ノ之博士なら…！」

「直せるけど、私はお医者さんの治し方じゃないからね。生体同期型ISを剣ちゃんの身体に埋め込んでもいいなら、すぐ出来るよ？」

「そ、そんな……！」

「ああ。そんなこと、する必要は無いよ」

一刻の猶予も無く、時守の心臓どころか脳すら活動が停止してしまうのも時間の問題。

そんな時、廊下からゆっくりと革靴と床がぶつかる音を鳴らしながら、とある人物が歩いてきた。

「…君、誰？」

「ろ、ロジャーさん…？な、何故ここに…」

「彼に一大事があったとなれば、私が飛んでくるに決まってるだろう？…ああ、篠ノ之博士。私はロジャー。これでも一応、国連の事務総長をさせてもらっている」

現れたのは、形式上時守の上司となっている国連事務総長の口ジヤーだった。

「へー。そんな人が、なんで必要無いなんて分かるの？」

「簡単だよ」

ロジャーがそう一言呟き、ストレッチャーに横たわる時守を見やつた、その瞬間。

彼の胸部に、一筋の細い雷が落ちた。

どくん、と彼の身体が小さく跳ねる

「…へ？」

「彼はね、ISのプログラムに、自分のバイタルが異常をきたして脳と心臓の両方が活動を停止させた時、強引に心臓を動かすプログラムを組んだんだよ。『完全同調・超過』の影響すら受けない、コアの根底にね」

人の鼓動。それとほぼ同じリズムでその雷は時守の胸部…心臓を刺激していく。

「破裂などで原型が無くならない限り、彼は絶対に死なないよ。心臓を強制的に動かして脳や全身に血液を流せるからね」

「カツ…ハ、ア…！」

「っ、剣っ!？」

ロジャーが語り終わると同時、時守が息を吹き返した。

お世辞にも顔色は良いとは言えないが、それでも生き返ってくれたことにシャルロット達の顔に嬉色が浮かぶ。

「良かったあ…」

「…悪い、みんな。また不安にさせたな」

「全くだよ時守くん」

「あ、ロジャーさん。おはよっす」

「ああ、おはよう。気分はどうだい？」

「頭が割れてるんちやうかってぐらいに痛いっす」

しつかりとした受け答え。それが出来ているだけでも、彼女たちの目に涙が浮かんだ。

「もう！ロシアから駆けつけたら剣くんの心臓が止まったって聞いたから…」

「ほんますまん。…あかんマジで頭痛い」

「酷使しすぎだよ。今は寝るといい。ちゃんと君の健康状態は確認しておくからね」

「ういっす。…ぐう…」

「早っ!？」

慌てた様子で時守の右手を握った楯無と側で立つロジャーとの会話を終わらせると、時守はすぐに寝息を立て始めた。

「…えっとお…」

「我々で彼の状態は把握するから、手を握ってあげておいたらどうだい?？」

その言葉を聞き、自分もというようにシャルロットとセシリアが左手を、楯無が握っていた左手を簪も握った。

「んへへ…」

「全く…、だらしないアホ弟子が…」

千冬が呆れながら、かつ笑みを浮かべながら彼の寝顔を眺める。これにて、本当の意味でエクスカリバー事件が終わりを告げた。



「おつ。よつすワンサマ。暇やからなんかおもしろいことしてや」
「よう剣、起きてたのか。そんな無茶ぶりされても俺には無理だ」
「クソやんけ」

その数時間後。時守はしっかりと目を覚ました。

まだ頭痛は残っているものの、このまま十分な休息を取ればクリスマス・イブまでには完治する見込みということもあり、この日は慰労会も兼ねてこの施設に泊まることとなったのだ。

「じゃあ剣なら何をするんだ？」

「ん？こうやってな、右目押さえてな…。喰らえ、俺の魔眼を！」

「ははっ。厨二病見てえ」

「血涙出てるんだから笑い事じゃないよ!？」

血涙という創作物の中でしか見たことのないものをその身で実際に体験した時守。

脳への負荷は凄まじいものだったが、それでもやはり文字だけ見ればかつこよかったのだ。

「まあ今『完全同調・超過』使ったら頭がち割れんのちゃうかってぐらい痛なるからやらんけど」

「にしても本当に身体自体にはダメージがなくて良かったな」

「まあそれは金ちゃん頑張ったおかげやけどな。夏ん時はもっと酷かったし」

「そ、そんなになの？」

事情を知っている鈴が恐る恐るといった具合でその詳しい内容を聞く。

現在、いつものメンツはすでにシャワーを終えており、寝巻きに着替えた状態でロビーで話していたのだ。

「ああ。ですよね、ちっふー先生」

「ん？お前の夏のエジプトの話か？」

「それっすそれっす」

「なんかめちやくちや暑そうな時期にやってたんだな」

生徒たち同様、すでに寝る準備を終わらせ、たまたまロビーに来ていた千冬に時守が振った。

「あの時はただの『完全同調』だったということと、かつ発動時間が3時間という長時間だったからな。その反動として二日間丸ごと死んだかのように眠り、身体はズタボロになっていたな」

「いやー、懐かしいっすね」

「…ん？その時は血涙は出なかったのか？」

「そんな時はどちらかというところ、ほんまに体がただ暴走してた。今は、短時間にありえへん量の演算をしたせいで脳がパンクしてもた、みたいな感じじゃ」

「なるほどなるほど」

夏休みのエジプトでの極秘特訓は、時守と千冬の記憶に新しい。

なぜならその3時間というのは、千冬が耐えることしかできなかった3時間なのだから。

「そんなはどうでもええねん」

「いやそんなんってお前の命に関わることだろ？」

「ええねん。ワンサマの新しいワンオフ、アレなんやっけ」

『夕風燈夜』だろ？」

「それぞれ。その名前さー」

全員が風呂上がり、そして寝る前ということもあり油断している中。

「中学生が考えたラノベの主人公の名前みたいやんな」

この男は一夏にとって最大の爆弾を落とした。

「…………お前、人が本気で気にしていることは弄っちゃダメだろ…？」

「あ。気にしとってんや」

笑い声をなんとか堪え、そして腹を抱えながら爆笑しているのは、箒、鈴、楯無、簪、千冬という日本に馴染み深いメンツ。

セシリアやシャルロットといった最近簪に影響されてきた二人も、息ができないほどに笑っていた。

笑ってはいけけないと我慢していたラウラも、千冬が笑ったのを見てクスクスと笑っていた。

「もうちよいどうにかならなかったのかよ…」

「例えば？」

「…：超零落白夜」

「かめはめ波か」

ぶふおつ、と女子が出していい笑い声ではない声で笑ったのは鈴だ。

「あー、くそっ！こうなったら夕風燈夜を使わないでいいぐらいの新しいワンオフをもう一個出してやる！」

「ワンオフのバーゲンセールか。今度は何くんになるんやろな」

「剣！…ったく。今に見てるよ…」

クリスマスや年末年始がもうすぐというこの時。

セシリア以外の異国の地であるイギリスにて、IS学園の事件に巻き込まれやすいメンバーたちの安らぎの時間が過ぎていった。

ようやくまともな誕生日パーティー

性：聖夜前日クリスマス・イブ

ただの誕生日パーティーの感覚でその日を迎える者と、決戦前夜と言わんばかりに気合いの入っている者の二種類に分かれるこの日は、セシリアの誕生日である。

大きな城で行われる彼女の誕生夜会では、メイドたちがあれやこれやと忙しそうに走り回っていた。

自らの仕えるべき主に尽くすという、メイドの本分であり本望を成し遂げるため、奔走している。

そして城の一室、ドレスルームでは下着姿の――

「やべ、ぽこちんかゆい」

「お前なあ。ここセシリアの城だろ？」

「かゆい状態でセシリーに会う方が失礼やろ」

「：まあ、彼女の前では確かに痒くなつて欲しくはないな」

「せやろ？」

――時守と一夏が着替えていた。

「それにしても、こうして平和にクリスマス・イブが迎えられるとはな」

「やー、ほんまそれやで。セシリーの誕生日も点滴ぶすぶす刺されたまんまで出なあかんとこやったわ」

「白式もだけど、そう考えたら金色もピーキーだよな」

「言うな。それに、一応もう克服はできてんねん」

「え、そうなのか？」

「お披露目はもうちよい先や。お楽しみ」

トランクスの上から股間を搔いていた時守は併設されていた蛇口で手を洗うと、持ってきていたタキシードに着替えだした。

「別に普通のスーツでもええと思うねんけど、どうせやったらな」

「それ、自分で用意したのか？」

「おう。この前の修学旅行の時にいとこのとこ寄って仕立ててもらっ

てん」

「本当にお前の親戚どうなってんだよ」

「そんな俺に聞くな」

対する一夏はドレスルームにあらかじめ置かれていたスーツに着替えていた。

「てかきワンサマ」

「なんだ？」

「IS学園戻ったら模擬戦しよや」

「いいけど…。どうしたんだ？急に」

「別に。…ただ」

「ただ？」

言葉を区切り、ズボンのチャックを引き上げる時守。

「第三形態になって、だいぶ変わったやろうから腕試しに付き合ったるわ」

「本音は？」

「顔面とか躊躇なく狙える男子と戦いたい」

「…まあ、その気持ちは分からなくはないけど…」

会話の内容が今日の誕生日パーティーにふさわしくなくないものとなった。それが、それもまた仕方のないことだった。

「でも、なんでそんなに急なんだ？」

「え？いや、お前も性能確かめときたいやろ？」

「そうだけどさ…」

「それに…」

獯猛な笑みを浮かべて、時守は静かな声で言い放つ。

「どんぐらい強なったんか、本気で戦いたいねん」

「…分かった。んじや、戻ったらやろうぜ、模擬戦！」

「おう」

時守にとって、三次形態移行というのは、正しく嬉しい悲鳴というものに等しかった。

皆から褒められ、目標にされ、様々なことを聞かれ、守りたいものをしっかりと守ることができ、尊敬の目を向けられることも少なくとも

かった。

しかし、この男はそんなものよりも、対等以上に渡り合えるライブルを欲していたのだ。

「全てを初期化するワンオフ、か」

「へへっ。使い方には気をつけるけど、油断すんなよ?」

「はっ、お前もな」

会話が終わったタイミングで、一夏がに着替え終えた。

「ほな行こか。…セシリーのドレス姿とかガン見すんなよ」

「分かってるって」

きつちりとしたスーツとタキシードに着替え終えた二人。

彼らは揃って、ドレスルームを後にした。

◇

「それでは、セシリア・オルコット様の誕生日パーティーにお集いの皆様、今宵は盛大な祝福をよろしくお願い申し上げます」

セシリアのメイド長、チエルシーがそう言うと、社交界の紳士淑女は一斉にセシリアの元へと詰めかけた。

「…行かなくてもいいの? 剣」

「IS学園とここやったら立場がちやうから、セシリーもいろいろせなあかんやろしな」

「あら、結構落ち着いてるのね。剣くんのことだから、てつきり一番先に行くものだと思ってたわ」

「…あのジジババ共さえおらんかったら…!」

「剣、漏れてる漏れてる」

そのセシリアから少し離れたテーブルで、時守、簪、楯無、そしてシャルロットの四人はグラス片手にその様子を眺めていた。

体臭と化粧で臭そうな人たち（時守の偏見）に囲まれたつも、セシリアは嫌そうな顔一つせず、丁寧に対応しているのが分かった。

「指一本でも触れたら『雷轟』で消し炭にしたんねん」

「簪ちゃん、どうしましょ。私たちの旦那さまの愛が重いわ」

「…軽いよりは、良い。…美味しい」

「あ、簪のそれ美味しそう」

もちろんセシリアが招待している人物たちが彼女に変なことをするとは信じたくないのが本音だ。

紳士淑女たちの監視もそこそこに、時守たちは料理を堪能し始めた。

「あれ、そーいやワンサマは？」

「社交界の空気に耐えきれなくなつて…逃げたらしい…」

「あーあ、出世への第一歩ミスりよつたな」

「リアルなこと言わないでよ…」

「んー、一夏くん。モンド・グロツソはどうするつもりなのかしら」

「……ボッコボコに叩きのめす…！第三形態がなんぼのもんじゃ…！」

「その意気やぞー、簪ー」

すでに出場選手として内定している時守と楯無。

特殊第三世代機の『輪廻の花冠』を操るシャルロットも、IS学園でもアピールがうまくいけば代表になれるだろう。

セシリアも、イギリス代表候補生の中で唯一専用機をもらえている実力者だ。

だが、日本の代表争いには、専用機持ちが多すぎるのだ。

「はっはっは。楽しんでるか、時守くん」

「あれ、なんでおるん」

「一応君の上司つてことと呼ばれたんだ。こんばんは、更識楯無くん、更識簪くん、シャルロット・デユノアくん」

「こんばんは、ロジャーさん」

「こ、こんばんは…」

「こんばんは。いつも剣がお世話になってます」

「えっ、ちよつと待ってやシャル」

そんな四人のテーブルに近づいてきたのは、先日の作戦の最後に姿を見せた国連事務総長のロジャーだった。

楯無と簪、シャルロットにも挨拶をすませると、彼は再び時守に話を振った。

「今日はセシリアくんの誕生日でもあるが、同時にクリスマス・イブで

もある。…くれぐれも、気をつけながら楽しみなさい」

「何にやねん」

「今日の夜だよ」

「別に俺とセシリーたちが何しようとなえやん。ちゃんと付き合っ
てんねんし」

「いや君たちまだ未成年だからね？」

「愛に年齢は関係ないやろ！」

「……まあ、うん。そうだけど」

時守の謎の正論（？）により、論破、というより反論する気を削が
れたロジャー。

彼の彼女たちが顔を少し赤らめているところを見ると、釘を刺して
も刺さなくても今日の夜の予定は決まりきっていたのだろう。

「おっと。どうやらセシリアくんがこちらに来るようだ。私はそろそ
ろ他の人と話に行くよ」

「ほなまた。年末に、やったっけ？」

「ああ、本部に来てくれたまえ」

「了解了解」

ロジャーとの別れを軽く済ませたところで、4人のテーブルにセシ
リアが駆けてきた。

「お待たせいたしましたわ、皆さん」

「ん、お疲れ様」

「ロジャーさんのお話は良かったのですか？」

「軽い挨拶程度やったからな」

すでに年末に国連本部に向かうことにはセシリアにも伝えてある。
さほど言うことがなかった時守は、それに軽く答えて彼女を受け入
れた。

「セシリア、おめでとう」

「ありがとうございます、剣さん。こうして、この城でこれ以上はない
バースデーを迎えられて、とても幸せですわ」

「ふふっ。おめでとう、セシリアちゃん」

「おめでとう、セシリア」

「おめでとう…、セシリア」

「皆さんも、本当にありがとうございます」

オルコット家の当主としてのセシリアと、IS学園の生徒としてのセシリア。

この場にいるのは、もちろん後者としての彼女だ。

しかし、彼の前だけでは、ただの生徒では終わらない。

「…剣さん」

「よう似合つとる。…綺麗や」

「はう…」

時守剣。

彼の前では、彼の恋人の一人としてのセシリア・オルコットになつてしまうのだ。

セシリアの透き通るような綺麗な金髪を撫でると、彼女は気持ちよさそうな声をあげる。

「少し、派手すぎではないでしょうか…」

「大丈夫や。…セシリアの魅力を良く引き出してる」

「それなら良かったですわ」

セシリアに構いすぎだ、と3人は言わない。

今日という特別な日はだけは、セシリアを優先してあげてほしいと、3人から言ってきたのだ。

「…ねえセシリアちゃん。剣くんと二人でバルコニーにでも出てみたらい？」

「えっ…。た、楯無さん…構いませんの？」

「もちろんだよ、セシリア」

「今日は…セシリアのための日だから…」

「シャルロットさん、簪さんも…」

セシリアの目頭が思わず熱くなる。

ただでさえこうして平等を崩した扱いを受けさせてもらっている中で、セシリアが一番して欲しいことすら実現してくれるのだ。

「わたくしは、本当に幸せものですわ…」

「じゃあセシリア」

「ええ」

セシリアの手を取り、バルコニーまでの短い距離のエスコートを始める時守。

「1年に1日しかない大切な日ですもの、ね？」

「はいっ。…セシリア、幸せそうでしたね」

「…でも、日付が変わった瞬間…」

「「うふふふふふ…」」

今夜はこのセシリアの家城に専用機持ち達は泊まることになっていくのだ。

クリスマス・イブ、セシリアの誕生日、泊まるのは彼女の家、そして言ってしまうばセシリアの寝室に誘われている彼と彼女たち。

これだけの条件が揃っていて、あの彼が夜に手を出さないとはいけな

い。
そこには、彼に対してのある種の信頼があった。

◇ ◇

「…空気が、澄んどうる」

「星も良く見えますのよ」

「ああ。凄い、綺麗や…」

イギリスの夜空の下。

時守とセシリアはバルコニーで二人だけの時を過ごしていた。

「ま、セシリアの方が綺麗やけどな」

「言うと思ってましたわ。…ふふっ」

「なんやとー。本気で言ってるねんぞー」

「ありがとうございますっ」

二人の手は、今は恋人繋ぎで固く結ばれている。

時々どちらかが指を細かく動かすと、もう片方もそれに応えるように指を動かす。

そうして互いの手の感覚を楽しみながら、少し肌寒く感じながらも、肩を寄せあっていた。

「…本当に、幸せですわ」

「俺もや。こうして、セシリアの故郷で誕生日を祝えるからな」

「剣さん…」

その言葉を聞き、セシリアが時守に身体を預けた。

「ずっと、お慕いしておりますわ」

「ああ。…セシリア」

彼女の両肩を掴み向かいあわせる。

何の言葉も合図も交わさずに、セシリアがおとがいをあげると、そっと親指と人差し指で支え—

「んっ…」

—差し出された彼女の美しい桜色の唇を、優しく奪った。

「あっ…」

「ここから先はお預けや。また今夜に、な」

「…はい…」

唇同士を重ね合わせるだけのキス。

それ以上は今日の夜。時守とセシリア、そして彼女の3人だけの誕生日パーティーで奪うと、彼は宣言した。

「じゃあ、行こか」

「…優しく、お願いいたしますわ」

「…さー、それは無理かなー」

再びセシリアの手を引き、城の中に戻る。

パーティー会場ではまだかなりの数の人が残っていたが、楯無、簪、シャルロットは先ほどまでと変わらず3人で話していた。

「あらセシリアちゃん。もういいの?」

「はい。いつまでも剣さんを一人占めしておくのも心苦しいですから」

「別にそんな遠慮しなくてもいいのに、セシリア」

「今日は…セシリアが一人占めしていい日、だよ?」

合流すると始まる彼女たち4人の何とも言えない会話。

その話題の中心にいるのは時守だが、一人占めかどうかの話になると時守は意見を言いにくいのだ。

だが—

「…せや。今日は、セシリアの日や」

「えっ…。剣…さん？」

「カナ、シャル、簪が何と言おうと、今日はセシリアを優先したい。…ごめんな」

「んもう。最初からいいっていつてるじゃない」

「剣もセシリアも、僕たちに気を使わなくてもいいからね？」

「…どの道、同じ部屋で寝泊まりするし」

「あ、あはは…」

—この日時守は、一人の男としてセシリアを優先して愛することを決めたのだ。

「今日はセシリアの日やから、みんなの誕生日も、今日と同じようにするっ—」

「そ、そういう所も剣くんらしいっていうか…」

「一応、嬉しいっっちゃ嬉しいんだけど…」

「…もう、剣のえっち…」

周囲も会話に集中しているため5人の会話は幸いにも他人に聞かれることはなかった。

時守のその発言は、セシリア以外の3人を赤面させるには十分すぎた。

「まあ、俺はみんなを平等に愛してるけどな！」

「それはもう、たーっぷり伝わってるわよ」

「でも僕、また身体を簡単に投げ捨てるとは思わなかったな—」

「うっ」

「…多少の無茶ならいいけど、また心臓止まるなんて思ってもなかったから…」

「ごめん…」

「と、いうことは。…またわたくし達がどれほど剣さんを大切に想っているか、どれだけ一緒にいたいかをまた知ってもらわなければなりませんわね」

「…分かりました」

こうして、いい笑顔を浮かべた4人の美少女に連れられて、時守はセシリアの寝室へと向かうのだった。



「お嬢様、少しよろしいですか？」

自室で寝巻きに着替え、あとは彼がシャワールームから出てくるのを待つだけだったセシリアは、チエルシーに答えた。

「お待ちなさい」

「はい、かしこまりました」

セシリアと同じくすでにシャワーを終えていた楯無達もいるが、まずはチエルシーの要件を聞いてからだ。

そう判断したセシリアは、結っていた髪を解き、扉の方を向いた。

「よろしくてよ」

主の言葉を聞き、チエルシーが静かにドアを開ける。

「お話があります」

「話？」

「はい。…お嬢様のご両親は、亡国機業から手に入れたISコアを用いて、エクシアを心臓病から救ってくださいました」

「…そうでしたのね」

彼女から静かに告げられたのは、エクシアとセシリアの両親についての真実だった。

楯無達がいるこの場で話し始めたのは、時守と共にセシリアと過ごしていく時に、知っておいてもらいたいことだったからだろう。

「エクシア」

「は、はいっ！エクシア・ブランケット、入りますっ！」

チエルシーのあとにドアを開けて、姉と同じメイド服に身を包んだエクシアが入ってきた。

「わ、私は、オルコット家を守る最後の剣として、セシリア様のご両親に命を救っていただきました！」

「…奥様達は、いずれお嬢様に襲いかかるであろうISの脅威を、予見していたようです。例え政府を裏切る形になっても、お嬢様を守るために…」

「…エクシアは、良かったのですか？命を、歪めることに…」

「とんでもありませんっ！…こうして、命があるからこそお姉様とも、セシリア様とも出会えたのですから」

セシリアの苦しい声に、エクシアは首を横に振って答えた。

セシリアと彼女の両親。3人のお陰で、自分の命は繋がっているのだと、セシリアにそう告げたのだ。

「…ありがとう、チエルシー、エクシア。ありがとう、お父様、お母様…」

セシリアは、ついに辿り着いた両親の真相とそこに隠された想いに一人、涙を流した。

「…それはエクシア。私たちはそろそろ戻りましょう」

「えっ。け、剣様ともお話を…」

「…お嬢様はこれから、剣様、楯無様、簪様、シャルロット様の5人だけでのパーティーをするのです。そこに交じるのは無粋です」

「は、はいっ！分かりましたお姉様！」

パーティー。

どんなパーティーなのか、エクシアには理解できなかった。

しかし、これから仕えるべき主が寝室で、それも5人という人数で行うパーティーなのだ。

自分が入ってはいけない理由があるのだろうと、エクシアはそれは理解できた。

「それではお嬢様。おやすみなさいませ」

「お、おやすみなさいませ！」

「ええ。チエルシー、エクシア。おやすみなさい」

チエルシーとエクシアが部屋から出る。

それと共に、シャワールームからバスローブを羽織った時守が部屋に入ってきた。

「およ。チエルシーさんたちもう良かったん？」

「はい。…剣さん」

「ああ」

セシリアは、時守と付き合いはじめてからベッドを新調した。

今までも十分すぎるほどに大きかったのだが、彼や他の彼女達3人と同じベッドで寝たかったのだ。

「今夜は寝かさんぞ?」

「…よろしく、お願いしますわ」

彼と彼女たちの、夜の誕生日パーティーが始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時守とセシリア達が誕生日パーティー（意味深）を始めた頃。

オルコット家のゲストルームで休んでいた一夏の元を千冬が訪れた。

「…一夏、宇宙で何があった」

「え?」

千冬が部屋に入ってくるなり、詰め寄って言った言葉の真意を、一夏はすぐには理解できなかった。

「お前のダメージは、どう考えてもすぐに治るものではなかった」

千冬の言う通り、あの時の一夏のダメージは控えめに言っても気絶だけで済むようなものではなかった。

下手をすれば数日意識が戻らない。そんなことさえ簡単に想像できるとなダメージだったのだ。

千冬のまつすぐな瞳に耐えきれなくなり、一夏は観念した。

「…助けられたんだ」

一夏は、その重い口を開いた。

「誰にだ。あの空間に、お前たち以外の反応はなかったはずだ!」

口調を荒げる千冬。その言葉の裏には、弟を心配する思いが感じ取れた。

「分からないんだ。…見たこともない、ISを装備してたんだ。外見は、その—」

「小麦粉をまぶしたみたいなのに、真っ白なISだった」

その一言に、千冬はひどく動揺した。

原作12巻 セブンス・プリンセス／紅椿繚乱編
彼らの冬休み

セシリアの誕生日の翌朝、つまりはクリスマス当日の朝。

いつもよりも遙かにつやつやとした楯無、簪、シャルロット、セシリアに手を引かれ、背中を押される形でやっと移動できた時守は、凄まじくげっそりとした様子でセシリアの部屋から出てきた。

「えー、それでは。少し遅くなつたが、今日からお前たち専用機持ちは、冬休みに入る。IS学園の生徒としてふさわしいと思う行動をするよう、心がけるように。以上っ！」

そのままクリスマスのうちにIS学園に戻った一同。

明らかにバテていた他のメンツとは違い、なぜか移動中に体力を全回復させた時守は、寮で行われていたクリスマスパーティーにもガッツリと参戦。

夜まで騒ぎ、朝まで再びイチャイチャするというあまりのスタミナに、楯無達も呆れたようにため息をつくしかなかった。

「いやっほーいっ！冬休みの宿題無しやー！」

「言つたそばから騒ぎ出すな時守！冬休みの宿題がないのは今回だけだ。今回ばかりは、お前たちに宿題をする時間が無いからな」

1年1組の教室。

そこに集まっていたいつもの専用機持ち達は、千冬から少し遅めのホームルームを受けていた。

「時守。校門前にジェット機が準備出来ている。お前の支度が終わる次第、国連に向かえ。他の者は、もう解散でいいぞ」

「ほーい。…ん、どしたみんな」

千冬にそう言われ、早速教室を出ようとした時守は、他のメンバー全員が時守のことをじっくりと見ていることに気づいたのだ。

「…剣って、普段国連でどんなことしてんだ？」

「訓練」

「誰と？」

「他の国の代表」

「…あとは？」

「時間つぶしたり宿題したり街出歩いたりやな」

一夏、鈴、簪から投げられる質問に簡単に答えていく。

「なんで？」

「いや、なんとなく気になっただけなんだ」

「ほー。…んじゃ予定無いんやったらついてくるか？」

「…えっ、い、いいの…?」

「かまへんかまへん。IS学園の専用機持ちですって言うたら普通に通してもらえるで」

「なら…」

「うむ。ついて行かせてもらおう」

急遽、専用機持ち達の国連への帯同が決まったが、時守としては特に気にする所はない。

普段から、国連併設のIS関連施設を使いたい時に時守の許可が必要などということはない。

専用機持ちか、国連加盟国に認められたIS操縦者ならば、誰でも入れることが出来るのだ。

「ちっふる先生。あのジェット機って何人乗りつすか？」

「その人数ならば問題ないだろう。私の方からロジャーさんには連絡しておこう」

「あざまーす」

千冬としても、丁度良かったのだ。

世界トップクラスの環境を見るのは、生徒たちにとって良い機会になると、彼女は確信していた。

◇

「おっ、マリーナさん。お久っすー」

「お久しぶりです代表。皆さんも、今日はよろしくお願いします」

IS学園から出ると、その少し広いスペースの半分程を占めるジェット機が、すでにエンジンのかかった状態で止まっていた。

その隣に立つ女性に時守が近づき、8人も彼に続く。

「剣くん、この方は？」

「んー：俺の、主に移動を担当してくれてる人、やな。マリーナさん」
「はい。私はマリーナ・ハウナーというものです。時守代表の担当補佐官の一人を努めさせていただいております」

「よろしくお願いします」

挨拶を終え、順番に機内に乗り込んでいく。

その機内には冷蔵庫やソファなどが完備されており、8人が入るところか、くつろぐにも十分な広さがあつた。

「何よコレ。部屋じゃない」

「あー、このジェット機か。俺が要望したら全部通つたつてやつ」

「何そのワガママ空間…」

「ほんまにただのくつろげる空間にしてつて言つたからなー」

取り付けられている本棚には漫画や雑誌、一部参考書などが置かれており、食品棚には時守の好きな菓子類が詰め込まれ、冷蔵庫にも飲み物がこれでもかと入っている。

「菓子パでもしてぐうたらしてたら向こう着くで」

「それで良いのか国連代表」

「ええんやで」

そうこうしているうちに離陸。

機体も安定して自動操縦に切り替わり、あとはアメリカに着くのを待つだけになった専用機持ち達は――

「あ、セシリア。そのチョコちよーだい」

「いいですわよ」

――時守の言った通り、菓子パをしながらただただぐうたらしていた。

「…やべえ。すつげえりラックスできる」

「せやろ？」

「うん…すごい、ふかふか…」

「本当、すごく気持ち良いわ」

一夏はソファに深く腰掛けて全身の力を抜き、簪と楯無は時守の両

脇を陣取って彼に凭れかかり、時守はそんな彼女二人の方を抱き寄せながらソファに沈み込んでいた。

「…これ美味しいわね」

「本場ベルギーの高級なものですわよ」

「なんでそんなもんがここにあんのよ」

「俺お気に入りって広告流したら売れるらしいからモニターでな」

「…アタシも、絶対代表になってやる」

「動機が不純すぎますわ」

鈴とセシリアはテーブルを挟んで互いに選んだお菓子に舌鼓を打っていた。

「ねえラウラ。その雑誌取ってくれない？」

「これか、いいぞ」

「ありがと。はいこれ、今度はラウラに貸してあげるね」

「ああ、助かる」

シャルロットとラウラは機内に置かれていた最新のファッション雑誌に一夏たちとは違うソファに寝転びながら目を通していった。

「…ほっ。まさかお茶まであるとはな」

「あつたかいので一息つきたい時もあるからな」

箒は一人、温かいお茶を入れて和んでいた。

「ああ…」

全員の口から、脱力していることしか感じさせないため息が漏れた。

「凶器よこの空間。こんなところでゆっくりした後には訓練なんてしたくないわ」

「ここでエネルギー溜めとかなやってられへんねん」

「あれ、これなんだろう」

春物のファッション誌を見ていたシャルロットが、ふと背表紙が分厚い雑誌を見つけた。

大半の雑誌が背表紙がなくホッチキスで止められているタイプの中で、その雑誌は異彩を放っていた。

「背表紙に何も書かれてない…。表紙も、裏表紙も。剣、これ何？」

「俺もモチベアツプアイテム」

「…えいつ」

思い切つて、中を見るシャルロット。

そこには――

「え、ぼ、僕…？それも、この水着つて…」

「そ。臨海学校の時のシャル」

「こんな写真、撮られた記憶ないよ？」

「金ちゃんて撮つて、それを写真集風のアレンジしてもらつてん」

――臨海学校の時に身につけていたイエローの水着姿で海に入り、満面の笑みを浮かべている自分自身の姿があつた。

「これつてここにしか置いてない？」

「当たり前やん。俺がただ眺めて英気を養うために置いてんねんから」

「なら良かった。…でも、こうやつて本にするならちゃんと言ってね？」

「ん。ごめん」

「許してあげるっ」

シャルロットの天使のような微笑みに時守がノックアウトされると、そんな彼を見て両脇の更識姉妹がその身体をさらに彼に押し付ける。

イギリスでいっぱい構ってもらつたセシリアは、我関せずといった様子でチョコレートを食べていた。

「剣ー、ちなみにこれつてどんぐらいで着くんだ？」

「おー？ISの技術をありえへんぐらいに詰め込んでるからクソ速いで。確か――」

瞬間。どんつ、という大きな音と共に全員の身体が浮いた。

「ーい、1時間ぐらい？」

「着いてから言つても遅いわよー！」

専用機持ちの中でも体重が軽く、全身がかなり浮いてしまった鈴からツツコミが飛んでくる。

「…死ぬかと思つた」

「湯呑みの中身が零れてないなんて奇跡だな、箒」

もう少しで熱いお茶を顔面に被るところだった箒がほっと胸を撫で下ろす。

何はともあれ、アメリカ到着である。

◇ ◇

「寒っ！」

「そりやせやろ。ニューヨークなんやから」

時守達が着陸した場所から車で移動すること数十分。

彼らは、国連本部を見上げていた。

「その奥にあるのが俺のいつもの勤務地や」

「言い方おい」

時守の後に続き、国連本部の奥に建てられた施設内へと入る。

「ここが俺はいつも訓練してるところや」

「うわ…。デツカ…」

時守には見慣れた光景であるが、八人にとってはそうではない。

とんでもなく高い天井が目立つメインフロアには各々が作業しやすいように所々にテーブルが置かれており、現在もそこで何かしらの作業をしているのが見える。

「まあ、ここではそんな重要なことは話してへんねんけどな」

「それは何となく分かるけど、剣くんはどこに行くの？」

「ちよい待ち」

そう言つて、携帯電話を取り出した時守。

まさか、と全員が心の中で思ったと同時に。ピツという音を鳴らし、そのまま耳元へと持って行った。

「はよ来て」

そしてそのまま切った。

「…剣。相手は？」

「ロジャー」

「国連事務総長さんをあんな風に呼び出したの!？」

「だってあつこにおるもん」

時守が指差した先には、二階の連絡通路に立っているロジャーの姿があった。

待つこと数分。時守たちの元にロジャーが降りてきた。

「自分で言うのもあれだけど、電話一本で呼ばれるとは思ってなかったよ」

「はよ渡してほしいって言ってたやん」

「それはそうだがね。さあ…『金色』を渡したまえ」

「ん。ほい」

『金色』の待機状態である金の指輪を右手中指から外し、ロジャーに渡す。

これにより、時守のここできなければならぬ仕事は終わった。

「…どうする？」

「あとは本当に何もすることがないからね。君は、時々忘れそうになるがまだ15歳だ。年末年始もぎっしり働かせる気は無いよ」

「え、ほなほんまに何したらええん」

「イーリスくんでもからかってきたらどうだい？」

「あ、そうしよ」

ロジャーから提案されたことをそのまま実行しに行く時守。

最早いつも通りの暴走なので誰も止めようとはせず、ただ歩いていく時守について行くしかなかった。

「こっ、は…？」

「第1室内アリーナ。今やってんのはイーリと…ナタルか」

アリーナ内で戦闘を行っている人物を肉眼で確認する時守。

イーリスは彼女の専用機でもあるファンク・クエイクを、対するナターシャは普通のラファール・リヴァイヴに乗っていた。

「国家代表と軍属操縦者の戦いか…」

「流石に『銀の福音』出してくんのは反則に近いからな。ああやってラファールか打鉄使ってんねん」

戦闘の様子は、やはりというか国家代表でもあり専用機に乗っているイーリスが圧倒的に有利だった。

「なんや。おもんな」

そう一言呟くと、時守はアリーナと観客席を隔てているエネルギー。シールドに覆われた強化ガラスの元へと近寄った。

そして、そこに備え付けられていたマイクのような装置に向かって

「安パイ攻めるとかおもんないぞアメリカ代表―」

『ア、ア、ッ!?!』

―アメリカ代表を軽く煽った。

『テメエとつきー！来てんなら言いやがれ！』

「嫌や」

『んだとオラッ！ってかおもんないって何のことだ！』

「格下相手に持久戦してるとことか」

イーリスに来るということを事前に知らせれば何が起きるか。答えは簡単で、すべての予定を放棄しての模擬戦漬けだ。

もちろん今日はそんなことにはしたくないため、事前に彼女に連絡を入れるということとはしていなかった。

「てか俺が三次移行してからイーリ全然勝ててへんやん。夏でも怪しかったのに」

『うるせえ！今日は勝てる予定だったんだよ！』

「へー。おつ、ナタルいい攻め」

『さつきから話しかけてくんなよとつきー！』

時守が来るまでは完全にイーリスが主導権を握っていた試合が、今はなぜか接戦状態になっている。

集中力が切れてきたイーリスを見て、ナターシャが猛攻に転じたためである。

「モンド・グロツソのガヤの練習や」

『そんなガヤ飛んでくるわけねえだろうが！』

「…イーリ。お前日本人舐めてるわ」

時守が言いたいここでの日本人というのは、酒に酔った状態でスポーツ観戦をしているおっさんのことを指す。

他のスポーツよりも肉体の露出が多く、そして出場者も美女が多い

モンド・グロツソには、もちろんおっさんのファンもいる。

例え酔っていないなくても騒げるおっさんの存在は、ある意味で障害とも言えるのだ。

『てかおつきーが喋りかけてくるせいでヤベエじゃねえか!』

「ははっ。おもしろ」

『おもしろくねえよ!』

しかし、専用機と訓練機のスペック差というのは実際に目の当たりにすると酷く、ナターシャが五分に持っていけるかというところで、一気に形勢を逆転した。

結果、最初の予想と同じくイーリスが勝利した。

『次はおつきー、お前だ!』

「カナー。他にも食堂とかあるから見に行くー?」

『お前はマジで、何をしに来たんだー!』

イーリスの叫びも虚しく、時守は連れてきていた八人と共に食堂へと向かうのだった。



「ねえ剣くん。イーリはアレでよかったの?」

「まあイーリやしな」

施設内にある食堂で9人は休憩していた。

ここまで来てやっていることはいつもと同じことということにツッコむ者は誰もいなかった。

「よくよく考えたらIS施設の見学なんて、そんなに無かったよな」
「専用機持ちやから担当の施設はあるやろうけど、そこ以外を見るのはなかなか無いわな」

「にしても、改めて見るとすごい規模よね…」

「そら、将来の世界最強の育成に専念してるからな」

「自分で言うんだ…」

簪が呆れた声を上げたが、事実、国連のIS事情は時守の言う通りなのだ。

「この食堂のメニューも俺好みのやつとか、栄養管理できてるやつとかで統一されてるしな」

「お好み焼き&焼きそば定食…」

「栄養管理の意味間違えてるだろ」

時守が指差した方向にあったのは、普通見かけることのないような定食の看板。

その他にもたこ焼きや、甘党の時守のためにジャンボパフェなどがメニューにあった。

「これがまた旨いんや」

「…これって、剣が代表だから？」

「そうらしいで」

代表に一切のストレスなく訓練に打ち込める環境が揃っているこの施設。

それもすべて、ロジヤーの指示だったという。

「ありがたいことやで」

「師匠にとってこれ以上ない環境だな」

「ほんまほんま。仮想訓練できるし」

「仮想訓練？」

一夏から疑問の声が出る。

IS学園で生活していて、あまり聞きなれない言葉だったのだろう、箒や鈴たちも首を傾げている。

「ああ。仮想戦闘訓練用対戦機つつつてな。言うたらデータで対戦できんねん」

「へー」

「ようやくちっぷー先生にも勝てるようになってきてんけどなー」

そう言った瞬間、時守以外の全員が吹き出した。

「え、どしたん」

「剣、千冬姉に勝てるのか!？」

「おう。でもなー、この前負けてもたからなー」

仮想空間ということもあり、時守は訓練の際には千冬にありつたけのワンオフを食らわされている。

現実でやってしまえばドン引きされるかもしれないぐらいに雷を浴びせているのだ。

「それって他の選手も入ってるのか？」

「入っとなー。専用機持ちは全員」

「えっ」

「あんまやらんけどな」

「ここでやらずとも、IS学園でいくらでも対戦できるIS学園の専用機持ちたちよりも、千冬などのなかなか本気で戦えない人物と戦う。」

「そのための、仮想訓練なのだ。」

「これって、IS学園にはないのか？」

「こんなんあつたら争奪戦やる。それに、ある程度の技量がないやつに使わせても時間の無駄やからな」

「手厳しいな…」

「まっ、これでも代表やからな」

授業中に千冬にシバかれたり、彼女とイチャイチャしていたり、ボケたりツッコんだりふざけたりと、IS学園でずっと生活していれば忘れがちだが、この男こそが国連代表なのだ。

「立場だけ見たらちっふー先生の上やからな」

「気まずすぎるだろう」

「それでもいつも通りシバいてくんのがちっふー先生や」

「アンタもブレないけど、千冬さんも案外ブレないわよね」

「日本酒かビールかदैいつもガタガタにブレてるけどな」

「お酒好きって事でブレてないね」

シャルロットが苦笑いする。

それもそのはず。時守が入学してくる前までの千冬の生徒からの評価は元世界最強の凛々しいお姉様、というものだけだったのが、時守が入学してから関西人へのツッコミ担当の酒呑み、という認識も入ってしまったのだ。

結果、残念美人という扱いをさせることが増えていた。

「あの人誰か貰い手おらんのかな。その辺知らんの？ワンサマ」

「んー…。千冬姉、自分の結婚よりも俺のことを優先するんだよな。弟としては早く結婚して落ち着いてほしいんだけど…」

「元世界最強の扱いの雑さよ」

「元世界最強でも家事も何も出来なかったら家で死ぬだけだよな、剣」
「せやな」

千冬に育ててもらった恩は確かに感じている一夏だが、それでもこれからのことを考えて家事はまともに出来ていてほしいと考えているのだ。

フライパンを斬ったり洗濯機を叩き壊したり掃除機のコードを引きちぎったりしては、出来るものも出来ないのだ。

「いざとなったら貰ってくれよ、剣」

「むっ。それならばウチの姉さんも貰ってくれ」

「まずはカナ達の面接を通ってからやな」

「就活か！」

鈴のツツコミに一同が笑う。

鬼の居ぬ間に洗濯とは、まさにこの事だった。

穏やかな年越しのはずが無く

12月31日。

ついに年越しを迎えるこの日。

「一夏っ！そっちはいけてるか！」

「任せろ、もうちよつとで次にいけるー！」

時守と一夏は、最大の敵とも言っていないものに直面していた。

国連から帰ってきて、部屋や寮の大掃除、年末年始に備えての買い物などを粗方やり終えたIS学園生徒達。

しかし、大事なものが抜けていることに、昨日の深夜に時守が気づいたのだ。

それが――

「っしや、かずのこ終わり」

「こつちも、黒豆終わったぜ」

――おせちだった。

『確かに年末年始だけどわざわざおせちなんで作らないよねー』という女子生徒、教師の発言に啞然とした一夏と時守。

毎年千冬との二人分のおせちを作っていた一夏と店の手伝いでおせちを作っていた時守にとつて、ありえない発言だった。

「いやー。凄いね二人とも。手際がすごい」

「全くだ。使ったことのないキッチンなのにねえ……」

「そう言うお二人は邪魔ですよ」

「さっ。おせちの準備をするので出ていってください」

二人の作業場所は更識家のキッチン。

さすがにIS学園生全員の分を作るのは無理なのでいつもの人数分＋更識、布仏家の分となり、それらを一夏、時守、更識、布仏の妻達で作っていたのだ。

「ごめんなさいね、織斑くん、剣くん。特に剣くんは今日誕生日なのに」

「いえいえ。そのためにお部屋使わせて貰うんですからおせち手伝う

ぐらいは当然っすよ」

「それにしても、鯛の尾頭付きを持ってくるとは思わなかったわ」

「良いでしょアレ。今日の朝市で買ってきて来たんです。今日の晩にでも」

「あら、良いわね」

時守としては生きたフグが良いと思っていただけだが、生憎フグ調理の免許を持っていなかったたので、知り合いのツテで参加させてもらった朝市で無事に鯛を入手。

クーラーボックスに氷と共にぶち込んで持ってきたのだ。

「他のみんなは？」

「誕生日パーティーの準備だよ」

「へえ…。そんなたいそうなことせんでええのに」

時守の誕生日パーティーは関西にいた時は例年菓子をつまみながらひたすらゲームをして終わり、というものだった。

それが今回は、女子の専用機持ちたちが更識家の一室を借り、そこを飾り付けを施すという豪華なものになっているらしい。

「ま、楽しむためにもはよ作り終わらなあかな」

「だな」

「そうね」

「おばちゃんたちにも頼つていいのよ？」

布仏、更識家の分と織斑家、そして時守や鈴、箒などの専用機持ちたちの分のおせちを仕上げるべく、四人の動く速度が上がった。

一方、時守の誕生日パーティーのメインとなるであろう一室の和室では――

「うんっ。こんなところかしら」

「あら、いいですね」

「んー。あいつがどんなことして遊ぶのがいいのか分かんないわね…」

「…：剣はいつも、ゲームしながら遊んでるって…」

「あたしテレビゲーム苦手なのよねー」

—女子陣が和氣藹々と団欒しながら作業をしていた。

「シャルロットちゃん、苺ある？」

「はいっ」

「そ、そんなに大きいケーキ、食べて大丈夫なんですか？その、代表として」

「今日ぐらいは何も気にしなくていいって言われたらしいよ？それに、剣曰くちよつと動いたら大丈夫って」

「……羨ましいな」

「全くだ」

楯無とシャルロットが作っているのは、大きな大きなホールケーキ。

たつぷりと生クリームが使われたそれをいくら食べても大して太らない、というのは、筥が漏らした通り女性陣にとっては羨ましいこと限りなかった。

「それはそうとき、あんた達誕プレとか何にした？」

「…そ、それは、剣に渡す時のお楽しみだ」

「私もだ」

鈴が聞いたのは、何もプレゼントが被っているかが気になったわけではない。

ただ単に、あいつに何を渡すのかが気になっただけなのだ。

「うーい。お待たー」

「あつ、お疲れ様、剣くん。おせちは大丈夫？」

「おう。台所にみんなの分置いてるで」

「ありがと、ホント助かるわ」

「うむ。感謝するぞ、剣」

準備が終わったその部屋に、おせちを作り終えた時守と一夏が合流する。

「カナ。明日の朝ごはん期待しときや」

「それって、クーラーボックスに入ってたお魚？」

「せや。今はまだ内緒やけどな」

お嬢様たちであるセシリアや刀奈、簪、そしてシャルロットも流石

に鯛の尾頭付きはそう見たことはないだろう思い、今は内緒にしておく。

明日の朝ごはんのことよりも、今日のことなのだ。

「さき、立ってないで座ってよ、剣」

「ん」

シャルロットに促されて座る。

手作りのケーキを筆頭に、軽く作っていた惣菜や買っていたお菓子などが机を埋め尽くしており、いかにも誕生日パーティーという雰囲気になっていた。

「あれ、そういや虚さんとかは？」

「もう少ししたら……って、噂をすればなんとやら、ね」

「お待たせしました」

「やつほく」

遅れてやってきたのは、この更識家の屋敷に住んでいる布仏姉妹。

専用機持ち達……つまりはいつものメンツでの集まりを邪魔しているのか、と虚が遠慮していた所、人数が多い方がおもしろいでしょ。という時守の言葉で参戦が決定したのだ。

「では」

「誕生日パーティーの」

「始まりだあー！」

一夏の時に時守がぶっぱなしたバズーカ型のクラッカーは誰も持ってきていなかった。

だがそれでも、計10人の手から放たれるクラッカーというのは衝撃的だった。

「…俺も16か……」

「30日前のおっさんみたいな反応すんなよ」

「まだ後4年も成人するまでかかるのだぞ」

「合法酒遠すぎやろ……」

「海外に行くしかありませんわねっ」

千冬が聞けば色んな意味でブチ切れそうな会話をしながら時守の誕生日パーティーがスタートした。

クラッカーを回収し終え、刀奈がケーキを切り分ける。

「じゃあ…今のうちに。…剣。誕生日、おめでとう」

「簪…っ！」

彼女の一人にプレゼントを手渡され、いきなり泣きそうになる時守。

簪が差し出した小さな紙袋の中にはメガネケースが入っていた。

「メガネ?…俺視力ええで？」

「うん。だからこれは、ブルーライトカット加工してあるものを選んだの。金色の調整とか、パソコンで資料見るのにどうかなって思っ
て、作ってみたの」

「ありがとう…えっ、作った？」

「うん」

「すっげえ…」

身近にすでにとんでもない最新機械最新機最新機を持っていても、彼女が手作りでブルーライトカット加工眼鏡を作ってきたとなれば流石に驚く。

驚く時守に畳み掛けるかのように、誕生日プレゼントが手渡される。

「剣、私からはこれだ。何が良いのかと迷ったのだが、これにした！」

「…ん、服？」

「ああ。着物を仕立ててもらったんだ」

「高かったんちゃうん」

「お得意先が剣のファンでな。誕生日プレゼントだと言ったら割り引いてくれたんだ」

「ほえ。ありがとう。ちよくちよく着るようになるわ」

簪が手渡してきたのは紺色をメインに使った着物。

素人目に見ても明らかに高そうなそれに、感嘆の声を上げるしかなかった。

「じゃ、あたしはこれよ」

「お?なんやこれ」

「電動マッサージ器よっ！」

「アウトオオオオオッ！」

「えっ、な、なんで…?」

「…いや、何でもない。普通に使えばええだけやからな」

鈴が良かれと思つて時守のために用意したのは、電動マッサージ器。

筋肉痛で良く身体がバキバキになっているということ思い出して、家電量販店で買ってきたのだ。

「普通じゃない使い方って何よ」

「…一夏に聞け。ありがとう、大事に使わせてもらうわ」

「ねえ一夏。電動マッサージ器の普通じゃない使い方って?」

「…グ○グル先生に聞いてくれ」

鈴の純粹な疑問の目から顔を背けながら、今度は一夏が袋を手渡してきた。

「なんやこれ」

「…女子のいない所で開けてくれ」

「…おう。さんきゅ」

中身が何かは分からない。

しかし、女子の目に晒していいものではないものだと察したのだ。

「では師匠。次は私だ」

「ん。…え?」

「シャルロットがお揃いのパジャマがいいと私に言っていたのを思い出してな。流石に師匠がうさぎというのはあれだからライオンにしておいたぞ」

「ちよつとラウラツ!」

「ナイスラウラ。ありがとう」

さりげなくシャルロットが時守とお揃いのパジャマを着たいというところを暴露しつつ、うさぎとライオンというところでもない組み合わせを実現させたラウラに、時守は思わず食い気味に反応してしまった。

「あら、いいわねそれ。ねえ簪ちゃん、セシリアちゃん。私たちもあんなパジャマ買わない?」

「それでしたら、わんちゃんが良いですわね」

「も、もうっ！楯無さん、セシリアまで！」

その結果、ライオンに食べられるネコ2匹とうさぎと犬が1匹ずつという光景がいずれ完成することとなった。

「…こほん。じゃあ、僕からはこれ」

「どれどれ…。べ、ベルト？」

「うんっ。普段使ってるのもそろそろ傷ついてきてるし、IS学園の制服の時にしか使わないってなると余計に痛みやすいでしょ？」

「おー。よう見てんな、シャル。ありがとう、早速明日から使わせてもらおうわ」

「えへへ…」

シャルロットが選んだのは、ベルトだった。

普段時守が身につけるのはもちろんIS学園の制服。それとセツトになるかのように、ベルトも同じものをするのがほとんどだった。

それゆえに入学当時に比べればボロボロになっており、そろそろ買い換えようかと考えていた時の彼女からのプレゼント。

使わない理由が無かった。

「では、わたくしからはこれを」

「コート…。…これって」

「ええ。結局、イギリスでは渡せなかったもので、どうせならば誕生日プレゼントにいい物を、と思いましたが！」

「ほへー、ありがとう。…うん、大切に着るわ」

セシリアからのプレゼントは黒いコートだった。

箒の着物と同じく素人目に見ても高そうな、というよりも明らかに高いコート。

気合いで多少の寒さを凌いできた時守にとっては、嬉しい代物となった。

「ふふっ。じゃあ私からはこれね」

「…ん？…これ、腕時計？」

「そうよ。流石に簪ちゃんみたいに手作りって訳にはいかなかったけど、それなりに良い物を選んだの。…ちなみに、色は違うけどお揃い

よ?」

「カナ……」

そろそろ少しはオシャレな腕時計が欲しいと思っていた時にまさかの彼女から、デザインがお揃いの物をプレゼントされ、思わず涙する時守であった。

「じゃあじゃあ、私からはこれを」

「…お菓子?」

「いえ、す！みんなで食べよお〜!」

「それが目的かい!…ま、せやな。みんなで食べよか。ありがとうなのほん」

どこで買ってきたのだろうか、大きな袋にパンパンに詰められたお菓子のセットを渡す本音。

それを渡してきた本音の頭を撫でる。

「えへへ〜」

「ゆるキャラみたいやな」

「あまり甘やかさないください、剣くん」

本音のふわふわとした雰囲気を楽しんでいると、この場にいる最後の一人である虚が話しかけてきた。

「あつ、虚さん」

「甘やかせば、もつと色々強請ってくるので」

「むう。そんなことしないよお〜」

「大丈夫つす。飴と鞭つすよ」

「後で何されるの!?!」

さりげなく本音を甘やかさないことを明言した時守。

そんな彼に、虚が小さな袋を手渡す。

「お誕生日おめでとうございませす。私からは、これを」

「おつ、ありがとうございませす。…ん?名刺と…名刺入れ?」

「はい。IS学園の技術班に入れてもらえることが決まったので私の名刺と、剣くんの名刺入れです。あつた方が便利かと」

「ちやつかりしてるな…」

袋に入っていたのは、金属製の名刺入れ。

そしてその中には一枚だけ、虚の名前が入った名刺が入っていた。「ふふふ。…将来仕える主としても、また技術班としてもパイプは持っておきたいですから…」

「物騒な言い方やめてくださいよ」

誕生日プレゼントで国連代表とのコネを露骨に得ようとする虚に、時守もただただ笑うしか無かった。

「…さて、と。それじゃあ、食べちゃいましょっか」

「せやな」

ゆつたりと、時守の誕生日パーティーは始まったのだ。

◇

「…ゲツ。もうこんな時間かよ」

「えっ、もう!? 早いわね」

数時間後。辺りはすっかり暗くなり、時刻は一夏や鈴が帰る時間になっっていた。

「流石にそろそろ帰った方がいいだろう」

「そうだな。千冬姉が呑んだくれてないか心配だし」

「はあく…炬燵から出たくない」

「うむ、分かるぞ鈴。日本には、こんなに素晴らしいものがあつたのか…」

テキパキと帰る支度をする一夏と箒に対し、炬燵でぐだぐだでしている鈴とラウラ。

「炬燵途中で屁こくぞ」

「もう、やめてよ剣くん」

「僕達も被害受けるんだよ?」

「…ですが、確かに鈴さんやラウラさんの言う通り、出たくないのは分かりますわ…」

「…んう…」

一人ぐでつと寝転ぶセシリアと、その隣で座るシャルロット。

そして、時守の右隣に座る楯無とその時守の膝を借りて眠る簪。

彼らは、ここ更識家に泊まるのだ。

「簪ーかわええのー」

「んー…」

「簪ちゃん、剣くんの身体を枕にするの好きよね」

「…うるさい、おねーちゃん」

「ふふふ、可愛い妹ね」

「可愛い彼女やわ」

「うゝ…」

耳を赤くしながらの簪の反撃は、楯無と時守にあっさりと捌かれたのだった。

「じゃあ、楯無さん、簪、シャルロット、セシリア、剣。お邪魔しました」

「皆、良いお年を」

「はいはい、来年もよろしくねー」

「…年賀状、出したから」

「良いお年を、一夏、箒」

「良いお年をですわ。…鈴さん、ラウラさんは？」

「寝とるんちゃうんこいつら」

すぐさま準備を終えた一夏と箒が、部屋を出ようとする。

しかし、鈴とラウラは未だ炬燵に入ったままだった。

「お前らにおせちやらんぞー」

「…はあ。起きるわよ、ラウラ」

「むう。仕方なし、か」

ずりずりと這い出るように炬燵からでた鈴とラウラ。

その気になればすぐに帰り支度を終えられる二人は、出たら早かった。

「さぶつ。早く帰りましょ」

「そうだな。こんな日は、早く帰るのがいい」

「じゃあねみんな。良いお年を」

鈴とラウラが揃い、4人は別れを告げて帰っていった。

「さてと」

「も、もうっ！剣くん！」

「えっ、何？」

「…あの、その…。姫納めでも、するのかと…」

「それは後で。刀奈のえっちー」

「なっ…！」

4人だけになり、早速刀奈が自爆した。

「虚さんのほほんは？」

「二人は、離れの個室で過ごすって。…なんか、気を使わせちゃったみたいね」

「んー。虚さんやったら、『これくらい、更識家のメイドとして当然ですっ』とか言いそうやけどな」

「確かに言いそうだけど、絶望的に似てないわ」

「似てへんよな」

またも炸裂する時守の似てないモノマネを華麗にスルーする刀奈。

テレビでは既に、年末恒例のバラエティ番組が始まっていた。

「えーいっ」

「おわっ。どした？」

「えへへ〜」

簪の頭を撫でながらテレビを見ていた時守の上半身を押し倒して、その上にのしかかった刀奈。

「年末だもん。いいじゃない、剣くん」

「せやな。うん、せやわ」

年末であり誕生日という謎の理屈で刀奈に言いくるめられ、そのまま仰向けの状態で彼女を抱きしめる。

「楯無さん、ズルいですっ！」

「そうですわっ！」

「わぶっ…」

右腕に刀奈、そして顔の近くにシャルロットとセシリア、足に簪を乗せ、寝転がる。

「うっへっへ…。ええ匂いやのお…」

「でしょ？この前、セシリアにいい香水教えてもらったんだ」

「わたくしは、シャルロットさんにボディソープを教えてくださいましたの」

「ほへへ。…ん？」

「…ねえ、剣？」

近くに来たシャルロットとセシリアの二人と話しているとふと、股間に柔らかい感触があった。

「さっき後でって言ったけど…剣のココ、もう準備万端だよ？」

「おい簪」

モノが、揉まれていたのだ。

「あら、我慢は良くないわよ剣くん」

「今日は剣の誕生日なんだから、我慢しないでいいんだよ？」

「剣さんがしたいことを、何でも言ってくださいまし」

「え？何でもしてええの？」

「もちろんっ」

彼女たち四人の声が重なる。

時守と彼女たちの、姫納めが始まった。

ぶつちやけ初詣に晴れ着を着ていく人はそんなにいない

「あけましておめでとーございまああああつす!!」

「ふえ？」

「んう？」

「なに？」

「…ん？」

昨日まで時守の誕生日が行われていた和室。

現在の時刻、朝の7:00。

持ってきていた私服に着替え終えた時守が、布団にくるまる彼女達を起こした。

「お正月やぞー！朝やぞー！」

「……すう」

「かーたーなー？」

「んく…。もうちよつと寝かせてほしいわ…」

「あかんあかん。今日は一年の始まりの日やからな。しやんとせな」

「……やだ」

「おーきーろー！」

「んんんんんっ！やだーっ！」

布団を引き剥がしにかかる時守と、それに抵抗する刀奈。

見れば、簪とセシリア、シャルロットも布団に入り直していた。

「全く…。いつもより激しかったからっていつまでもゴロゴロしてたらあかんやろ！」

「…誰のせいでこうなったか分かって言ってるの？」

「寝たと言って言ったのに…」

「剣さんのえっち…」

「僕たちは止めてたのに…」

「それはそれ。これはこれ」

手振りで彼女たちに言い訳をする。

しかし、起きてもらわなければならないのもまた事実。

「はよ起きひんかったらお年玉無しやっつて。二人とも」

「えっ」

「ほ、ほんと…?」

「うん。刀奈と簪のが、それぞれ虚さんとのほほんに行くつて」

「お、起きなきや…」

「眠たいのに…」

「…で、では。わたくし達も…」

「うん、起きよつか」

折角の正月の朝。

ゆっくりしていたいという気持ちも分からなくはないが、こんな日こそ早起きをしなければならぬ。

「…剣くん。起こしてくれる?つて、いたたたた!?!簪ちゃん!?!」

「あざといお姉ちゃんが悪い」

布団から両手を突き出した刀奈の脇腹を抓る簪。

「あつ、じゃあ僕も起こしてほしい…つて痛いよセシリア!」

「あざといことをするからですわ」

全く同じことをするセシリアとシャルロット。

そんな彼女達を見て、時守は笑った。

「はは。んじゃあ、皆起こしたるか?」

「それは嬉しいけど…何その動き」

「ん?さわ…起こすためやで?」

「今触るつて言いかけたよね?」

「何のこつちや?」

笑みを浮かべながら、彼女たちを起こそうとする時守。

その両手は、すべての指がいやらしく動いていた。

「お年玉を虚ちゃんに取られたくないし、自分で起きるわ」

「わ、私も…」

「ではわたくしも」

「じゃあ僕も」

「あらら」

そのまま素直に時守が起こすはずがないと察したのか、すんなりと起き始める彼女たち。

布団に包まれたままの白い裸体からは、肩がはだけていた。

「はい、着替え。ここに置いとくわ」

それだけ言って、時守は部屋を後にした。

◇

「お、起きてきたか。おはよう皆。そして、明けておめでとう」

「明けておめでとう、お父さん」

「ん、あけておめでとう、お父さん。叔父さんも、おはようございます」

「ははは、おめでとう、簪ちゃん。セシリアちゃんとシャルロットちゃんも、座りなさい」

「あけておめでとうございます、皆様」

「おめでとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきます」

「もう二人とも、そんなに固くならなくていいのよ？」

「そうよ。刀奈たちの恋人の剣くんの恋人ってことは、私たちにとっては娘と同じですもの」

「んー…」

刀奈と簪の両親、そして虚と本音の両親と自分の彼女たちの挨拶を見ながら、時守は唸っていた。

あけおめいうだけでスゲエ長い、と。

「お腹減った」

「剣くんも男の子ねえ。いいわよ、朝ごはんにしましょう」

「虚、本音を起こしてきてくれる？」

「うん」

普段の敬語ではなく、実の母親に向けているからか、虚の言葉遣いが普通のものになっている。

その光景にシャルロット、セシリア、時守が驚きながらも、やはり本音の面倒を見るのは虚の役目なのか、と内心哀れんだ。

「ああそうだ。いつもの、用意しておいたよ。刀奈」

「ありがとうお父さん」

「いつもの?」

「ええ。いつもは私と簪ちゃん、虚ちゃんと本音ちゃんの四人で初詣に行ってたの。その時に着る晴れ着のことよ」

「晴れ着…」

「素敵ですわ!」

「今回は、シャルロットちゃんとセシリアちゃんの分もあるわよ。ね、お父さん」

「ああ」

その言葉を聞き、彼女たち四人の晴れ着を想像していた時守に、予想外の言葉が飛んできた。

「剣くんはどうする?」

「ほえ?」

「いや、一人だけ私服というのもアレだろう。それに君は、いろんな意味で目立つからね」

「余計目立つのもあかんってことですか?」

「剣くんは普段は晴れ着を着てなかったの?」

「私服で近くの神社にチャリで行ってた」

「:すごい普通の中学生だったのね」

「このたまに見せる普通っぽさが、娘たちを虜にしたのかも…」

刀奈母と虚母に何やら酷いことを言われている気がするが、今は気にしない。

「てか晴れ着って寒くない?」

「中に色々着込むから大丈夫よ?」

「え、そうなんや。んー。どないしよかな…」

「何だったら、私たちのお古の着物になるが、一枚どうかな?」

「いやいや、それは悪いっすよ」

「貰っていいよ、剣。最近太ってきたお父さんたちが着た方がみっともないから」

「はぐあ…」

「か、簪ちゃんからの言葉が刺さる…」

何だかんだで着物を入手した時守であった。

「ん〜。みんなおはよ〜…」

「あ、本音も起きてきたわね。それじゃあ、朝ごはんにしましょっか」
「よっしや」

その日食卓に並んだおせちに、数の子、くわい、里芋、八つ頭が多かったのは、また別の話。



「なんかすごい見られてる気がする」

「そりや、剣くんですもの」

「うん。剣だからね」

「…：うん、それ以外に理由はないかな」

「そうですね」

「どういうことやねん」

「そういうことなのだ〜」

「残念ながら、皆さんの言う通りです」

朝食を終え、彼女たち四人と虚、本音を加えた計七人で初詣に行くことになった時守。

周囲にいるのが美少女だらけ、ということ視線を集めているのも間違いないが、その最大の理由は時守にあった。

「普段はIS学園にいるから実感がないと思うけど、世界に二人しかない男性操縦者なのよ？」

「あ、そうか。普通に忘れとった」

「そんな人物が変装もせずに初詣に来るんだから、皆驚く」

「さらに、国家代表候補生の皆さんがいるのも起因していますね」

「ほえ〜。ボディガードとか大丈夫なんかいな」

「ウチとシャルロットちゃんとセシリアちゃんのところの黒服がいるから大丈夫よ」

「むしろ怖い」

先ほどから木の陰をこそこそと動くものを金ちやんが捉えてんのはそのせいかな、と内心ため息を吐く。

彼らは今、賽銭箱の列に並んでいた。

「話ブツとぶけどさ、皆仏さんとか神様って信じてる？」

「…随分と、ロマンチックな話をするのですね」

「いや。俺らを引き合わせてくれたんはISやけど、もしいるんやったら多少褒めたるかなって」

「それは神仏を信じてる人の言葉じゃないね、剣」

「仏様にすごい上から…」

「さすが剣くんというかなんというかな…」

基本的に神という存在を信じていない時守。

もしバチが当たったかのようなことが起きても、運が悪かったで済ませるのだ。

「お、そろそろか」

「お賽銭、いくらにするの？」

「5円」

「うん。なんて言うか、知ってた」

「縁がありますように、という意味を込められることが多いが、時守の場合はその理由とあまり大きな金額は嫌だというものだった。

「みんなは？」

「…500円？」

「ほな、みんな思い思いにしよか」

そうしているうちに、時守達の番が回ってきた。

それぞれが既に取り出していた小銭を投げる。

「今年一年は、みんなが無事でいられますように」

500円を投じた刀奈。

（―無病息災）

500円を投じた簪。

（―これからみんなが仲良くいられますように）

500円を投じたシャルロット。

（―これ以上事件が起こりませんように）

5000円を投げたセシリア。

（皆様が、良い成績を収められますように）

5000円を投げた虚。

（みんながずう／＼と仲良くありますように）

5000円を投げた本音。

（今年もよろしく。とにかくなんか願い叶えろ）

5円を放り投げた時守。

まさしく十人十色といえる願い方。

若干一名宣言通り適当すぎる奴がいたが、それを彼女達を知る由はない。

「ねえ剣。剣は、何をお願いしたの？」

「あ、知らんの？シャル。こういうのって内容を人に言ったらあかんらしいで」

「へえ。そうなんだ。じゃあ僕も秘密にしとくね」

「そうしとき」

全員が終わると、列の外へと捌ける。

にこにこ微笑みながら隣にきたシャルロットとの短い会話を挟み、少し開けた所で合流した。

「さて、じゃあどうしましょうか」

「…初詣が終わったとなれば、やることはただ一つ」

正月に相応しくない、と言ってもいいほどに真剣な声色になった時守。

何があるのか、と全員が彼の方に向く。

「おみくじや！」

「…：うん、そうね」

「ん、どしたカナ」

「急に剣からまともな言葉が出たから驚いてるんだと思う…」
「失礼な」

とはいえ、この場で提案されたものに反対する人物もおらず、全員揃っておみくじ売り場へと行くことに。

「のほほん。ちゃんと虚さんの手握つときや」

「…けんけんは、わたしを何歳だと思ってるの〜?」

「3歳ぐらいやろ」

「…むう」

と言いつつも、本音の右手はしっかりと虚の左手と繋がっている。

時守の両手は簪とシャルロットの手と繋がっていた。

「…お姉ちゃん、最近じゃんけん弱くなった?」

「うーん…どうしてかしら」

「まあ、所詮はじゃんけんやしな。全戦全勝なんて普通はありえへんやろ」

「…あら?でも確か剣さん、学園祭の時は無敗だったはずでは…」

「アレは動体視力を使った裏ワザや」

「ええ…」

時守の右手の感触を左手で堪能していたシャルロットが呆れたような声をあげる。

左にいる簪も、声こそ上げなかったが小さくため息をついていた。

「具体的に、どうやって?」

「出す手の指の動きを見んねん」

「…無理」

「いけるって」

簪が小さくボヤいたのに軽く返しながら歩く。

そんなこんなでどうでもいい話をしながら時間を潰していると、おみくじ売り場に着いた。

「さてと。ほんじゃ皆、健闘を祈る」

全員がそれぞれバラバラの列に並び、おみくじを買う。

紙を受け取ってもその場で見ることはなく、再び開けた所で合流し、全員で結果を見る。

心なしか、シャルロットとセシリアの海外組がわくわくしているように見えた一同であった。

「せーのっ」

彼の掛け声で、一斉に見る。

「あっ。大吉だわ」

「…私も」

「わたしは吉だあ〜」

「…末吉…」

「中吉だよ！」

「わたくしも虚さんと同じく、末吉でしたわ」

「……………凶ってマジで入ってんねんな」

結果、刀奈と簪が大吉、シャルロットが中吉、本音が吉、虚とセシリアが末吉で、時守がまさかまさかの凶というものだった。

「願望、叶わぬものもあり。待人、来ず。失物、出がたし。旅行、危険を覚ゆれど後調う。商売、売るは良し。方向、北と東の間なら吉。争事、勝つ。転居、さわがぬ方がよし。出産、さわりなし。用心せよ。病氣、思うより易し。縁談、調いがたし。…ほほお」

「それで分かるの？」

「大体やけどな」

今日のメンバーの中でぶつちぎりに悪い運勢を引き当てながらも悲観しないのは、やはり神仏を信じていないからだろうか。

「言ってまえば、願い事は叶うけど叶わんもんもある。待ってる人は来おへん。失くしたものが出てきにくくて、旅に出たら危ないけど最終的には落ち着く、的な？」

「おお。……………って危ないの!?!」

「まあでもそんな旅行する機会なんて無いし」

「…国連訪問の時、は？」

「あ。……………ま、まあ大丈夫やろ」

何かしらのフラグが立ってしまったかもしれないと思うが、あの口ジャァーが危険への対策を怠っているとは思えなかった。

「…というかそもそも、国連が危険になるということはそうそう無いだろう。」

「あとは、商売は上手くいくし、方角は文字通り。勝負には勝って、みたいなきやな」

「…それ、ホントに凶？」

「んー…。結果見る限りはあかんし、詳しくは分からんけどな…」

「言ってしまったえば、ただのおみくじですしね」

「お、そつすね虚さん」

基本的に神仏を信じていない時守は、おみくじもそれほど信じていない。

それゆえに、初詣の時に引くのは、一種の運試し感覚となっていた。

「おみくじの後はお守りや」

「安産祈願、とかでしょ？」

「…うん。その通りやけど、なんでそれを選んだんや…」

シャルロットの爆散発言に軽く動揺しながらも、今度はお守り売り場へと並ぶ一同。

「簪は何買うん？」

「…家内安全」

「やってのほほん」

「私のかんちゃんに変なことしてないよ」

「私もよ？」

「お嬢様、本音。嘘をついてはいけません」

普段から更識家にて本音と刀奈で弄られている簪と虚は家内安全を、刀奈と本音はそれぞれ、健康祈願と学業成就を買った。

「わたくしたちは実家のことを思い」

「商売繁盛だよ」

「うまくいくに越したことはないしな。ええやん」

財閥の当主と社長令嬢。

この二人が繁盛、というか繁栄を祈願しないわけにはいかなかった。

「剣さんはどれにしましたの？」

「健康祈願やで。一応な」

「一応？」

「そ。2年になるし、なんかあるかもしれへんしな」

IS学園には、年明けの短い三学期にもそれなりのイベントが控えている。

それだけではなく、代表である時守にはIS学園外でも予定がつ

まってきたているのだ。

「休めますようにって願い込めたった」

「あ、あはは……。切実な願いだね……」

「もっとゴロゴロしてたいねん」

「わかるよおくけんけん」

「ちよつとでも長く休むと動くのめんどくさくなるよな」

三学期が始まるということは、学校が始まるということ。

せっかく冬休みの宿題を免除され、思う存分に訓練に明け暮れ、体を動かしてきた時守からしたら座学が苦痛に変わってきた。

「まあ何はともあれ、今年もよろしくな」

「うんっ」

「ごちんごそっ！」

普段のイベント事とは打って変わって、特に荒れることなく、7人の初詣は静かに終わった。

彼と彼女の休日

「ふああ…。ねむ」

「おい時守。ちゃんと睡眠は取っているのか？」

「大丈夫ですよ。ちゃんと寝てます」

初詣を終え、その日の夜にI・S学園へと帰ってきた時守たち。

そこから数日後。

三学期が始まるまであと数日まで迫ったこの日は、珍しい時守の完全オフの日であった。

「それにしても珍しいな。お前が休みに更識たちと一緒にいないとは」

「そりや、カナたちにもカナたちの予定がありますしね」

この日の彼女たちの予定は、簪が倉持技研へ出向き、楯無は国家代表としてロシアへ、シャルロットは『輪廻の花冠』のデート取りのためにフランスへ、そしてセシリアは、箒、鈴、ラウラと共に女子会という名目のお買い物へ行っていた。

一夏は家の掃除のために帰っており、言ってしまうえば一人で暇だったのだ。

「ちっふー先生の予定は？」

「私か？…そうだな。私も、今日は特にこれといった予定はないな」

「ほへへ。じゃあ二人でどっか行きますか？」

「…何？」

千冬は耳を疑った。

念のため、もう一度聞いてみる。

「今、なんと言った？」

「やから、どっか行きませんかっ」

「お、お前…それは…」

デートに誘っているつもりか、という言葉は出なかった。

「いい、いいのか？更識たちは」

「大丈夫ですよ。ちっふー先生が俺を独占しようなんて考えてたら

別つすけど」

「そ、そうか」

今の今まで、ろくに異性との付き合いがなかった千冬。

先日の年末年始では、今年で25になるんだからそろそろ真剣に考えろと一夏に真面目な表情でのガチトーンで言われ、一気に酔いが醒めてしまったのも記憶に新しい。

その際に気づいたのだが、自分は男をリードするよりは、リードされる方がいらしい。

今のように。

「し、しかしだな。別にこれといって外出する予定など…」

「今までの師弟関係で、訓練の中では割と話してきましたけど、こうして日常ってなると全然やったやないですか。やからいい機会かなーって思って」

「うっ…」

そして千冬は、年下の方が好きだ。

リードされるのはいいが、年上だからと言って強引に進められるのは気に食わない。

技術のある年下に、うまくリードされていくのがいい。

今のように。

「だ、だがな。私は教師で、お前は生徒だ。そんな二人が一緒に出かけるなど…」

「世間では、師弟で知られてるはずっすよ？それとも、ちっふー先生は俺とのデートは、嫌っすか？」

「なっ、お、おまつ…！」

そして千冬は、乙女である。

乙女なんて年齢じゃないと言う不屈き者には鉄拳制裁が下るだろうが、誰がなんと言おうと千冬は乙女なのだ。

印象が悪くない異性からデートに誘われたらドキッとはするし、ホイホイ行って行ってしまうそうになる。

今のように。

「いいやないっすか。二人でお出かけ」

「うっ、あの、その…」

「ん？」

「よ、よろしくお願いします…」

こうして、時守と千冬の1日だけのデートが決まった。

◇

場所は変わり、レゾナンス。

デート、と時守は言っていたがもちろん手を繋いだりすることはなく、ただ二人並んで歩いているだけだった。

「ところで時守。お前、そのメガネはどうしたんだ？」

「これっすか？買った福袋ん中に入れてたんで、だて眼鏡で使ってるんすよ」

「ほう、良い心がけだ。引退した私とは違い、お前は現在進行形で注目を集めているからな」

「ちっふー先生も十分有名人やないっすか？」

千冬の隣を歩く時守は、黒縁のシンプルなレンズ入りのメガネをかけている。

レンズ入りと言っても度は入っておらず、彼が言った通りだて眼鏡として使い、彼の数少ない変装アイテムとなっている。

「私の場合は近づいてこようとするファンはいないからな」

「…ちっふー先生、なんかヤバイことしたんやったら今のうちっすよ？」

「何を勘違いしているのかは知らないが、皆が勝手に神聖視しているだけだからな？」

対する千冬は、私服に身を包んでいるだけであり、変装はしていない。

元世界最強でありとてつもない数のファンがいる千冬だが、そのファンの大半は近づくことすらおこがましいと思っているのだ。

「さてと。ほなどこ行きましょか」

「昼は学園で食べてきたからな…。とりあえず見て回るか」

「うっす」

目的地をあえて定めずに、店内をぶらぶらと歩く。
基本的に千冬に付き添いながら女性ものの衣服を見ることになっ
た。

「……んー」

「ちっふー先生、服にお金かけてます?」

「失礼なことを聞くな。…わ、私だってそれなりには…」

「まあ普段は学校ですもんね」

「…ああ。そう言ってもらえると、助かる」

千冬は、服にほとんどお金をかけない。

日頃着るのはスーツであり、部屋でゴロゴロするときには部屋着さえあればいい。そう考えていた。

「まあ流石にいきなりお出かけに着ていける服が必要になるってこと
はないと思いますし」

「分かってくれるか」

「今金無いですもん」

「…年末年始というのは、凄まじく金が飛んでいくな」

「何買ったんすか」

「一夏とずつと鍋を食ってた」

「ええなあ…」

年末年始に鍋とつまみでしこたま呑んでいた千冬。

今現在、別の意味で脱げば凄いことになっているのは乙女の秘密
だ。

「そういうお前はどうか過ごしていたんだ?」

「別に普通つすよ? 国連から帰ってきてから地元の友達呼んで遊んだ
り、一人ふらーつと出かけたり、簪に勧められたゲームやらアニメや
ら」

「なるほどな。…少しぐらい、宿題を出してもよかったか」

「いやいや。そんなん要りませんって」

自分自身は気づいていないが、相当詰まった予定が組まれている時
守。

この冬休みに、もし多めの宿題が出されでもしていたら、それこそ

幼児退行ぐらいしてしまっていたかもしれない。

「そういうちっぷー先生は？」

「…い、家で」

「家で？」

「ご、ゴロゴロ…」

「ゴロゴロ…」

お正月休みとはいえ、いつも通りほぼすべての家事を一夏に任せ、ずっとぐだぐだしていた千冬。

学校が始まるまでのこのわずかな期間でも、なかなか気合いが入らないのだ。

「寮の部屋とか大丈夫なんすか？」

「…ふっ。大丈夫だと思うのか？」

「はあ…。掃除にいるもん買いに行きますよ」

「……すまん」

話の流れで行き先が掃除用具コーナーへと向く。

もはや男女のお出かけのそれではないが、今はそれを気にしている場合ではない。

「どんぐらい汚いんすか」

「ご、ゴミを捨てられていないだけで…」

「了解っす」

手早く買い物カゴを取り、その中にまずは大きいゴミ袋を放り込む。

「普段掃除は？」

「…しない」

雑巾、洗剤、そして消臭剤を追加。

「軽くやったらこんぐらいでええやろ」

「すまないな時守。何から何まで…」

「自分で買ってくださいよ？」

「……ああ」

元世界最強は、しよぼくれたままカゴをレジまで持っていった。



「さあ、やるで！」

「…時守、軍手は要らないのか？」

「そんなんあつたら邪魔です」

ムードもへったくれも無く終わった時守と千冬のデート。

アレからすぐに帰ってきて、現在の時刻は3時。

千冬からの要望で一夏が帰ってくるまでに終わらそうとするならば、ちんたらしている暇はない。

「掃除の鉄則その1。確実に要らんもんから捨てていく」

「あっ！おまつ、それ！」

「こんなシミだらけのパンツ履かないでしょ。破れてるし」

破れたピンク色のショーツ、伝線したストッキング、片方しかない靴下などを一気にぼいぼいとゴミ袋の中へと突っ込んでいく。

「鉄則その2。迷ったやつは保留」

「茜霧島は捨てるなよ！」

「ほーい。…てか冷蔵庫入れときましようよ」

地べたに置いてあった未開封の酒達は一旦冷蔵庫にぶち込み、足の置き場を確保していく。

「鉄則その3。思い出に浸らない」

「あ。この写真集懐かしいな…」

「言うてるそばから…！」

「あうっ」

これまた床に落ちていた写真集を拾い、ページを開き始めた千冬の頭をぼしんと軽く叩く。

そんなことをしている場合ではない。

「てかマジで休みん時緩いんすね」

「当たり前だ。休む日だからな」

「まあそう言われたらそうですけど」

千冬は、休む日はとことん休むと決めている人間だ。

長期休暇で仕事がない時などは基本的に休む日であり、遅くまで寝

てゆつくりとしていた。

「そういうお前は休日はどうなんだ」

「俺っすか？誰かに起こしてもらって、ご飯食べてテレビ見て外に出かけて、みたいな感じっすね。何もする予定ない時はちっぷー先生と同じくゴロゴロしてますけど」

「…クソが。今からでも別室にしてやろうか…！」

「生徒会長がいるから無理っすよ」

例を挙げて言うなら、起こしてもらい、朝食を摂った後に皆で簪が撮っていたアニメを見て、全員で少し課題をし、外に出て遊ぶ。というようなもの。

今まで全くと言っていいほど恋をしてこなかった千冬にとっては、辛いスケジュールだった。

「…そういうえば時守。お前、生徒会長決定戦には出るのか？」

「ええ。…てか出すつもりやったでしょ？」

「まあな」

三学期は最終学期である。

ここIS学園では例年、生徒最強の座である生徒会長を、希望者全員参加の大会で決めている。

去年の覇者は、現生徒会長である更識楯無。

参加資格は新3年生と新2年生の全員にあるため、かなり多くの生徒がこれに向けて精進することとなる。

「油断するなよ。お前は一心、私の正式な弟子だからな」

「言われんでも。…正直今なら、冗談抜きで誰にも負ける気しませんしね」

「ほう？それは、私にもか？」

「ええ。今んとこはロジャーさんにしか報告してませんが、また強くなったんすよ」

「…ならば、もうそろそろ私から教えることは無くなりそうだな」

「……そうっすねえ」

最近は、善戦どころか接戦まで増えてきた。

千冬も時守との実践を経て全盛期の勘を取り戻しつつある中で、時

守はそれ以上の速さで成長していた。

「では、三学期になってから模擬戦でもするか」

「おっ、いいっすね。もちろん本気で」

「当たり前だ。…まあ、私は『暮桜』は使えないがな」

「そりゃしゃーないっしょ。打鉄でも、魔改造してたらそれなりに強いですし」

「…ふふっ。ああ、そうだな」

弟子が勝手に強くなっていく。

今まで自分に教えを請うてきた人物は山のようだったが、その中でも指折りで負けん気が強く、そして才能に溢れていた。

そんな弟子が、もう少しで自分の手元から離れようとしていた。

「ん。どしたんすか」

「いやなに。手のかかる弟子だったと思っただけだ」

「ふーん。…てかまだですからね？」

「分かっている」

だがそれは、模擬戦で千冬相手にしつかりとした結果が残せたら、という話。

もしも彼が不甲斐ない結果を出せば、まだまだだということだ。

「んしょ。だいたいこんなもんでいいっすか？」

「ああ。助かった」

「どういたしました。ほなまた」

「…ああ、またな」

会話をしている間にもテキパキと作業を進めていた時守。

気づけば床に散らかっていたゴミはほとんど無くなっており、あとは千冬一人でも大丈夫と言えるほどまで片付けられていた。

「…いきなり散らかさんといってくださいよ」

「分かっている！…さ、自分の部屋に戻れ。誰かしら帰ってきているのではないか？」

「そうですね。ほんじゃ」

そう言って、彼は千冬の部屋から去っていった。

「…はあ」

時守が閉めていった戸を眺め、ため息を吐く。

そのまま携帯電話を取り出した千冬は、とある人物へと電話をかけた。

『もっしもしっしっ！やあやあちーちゃん遅かったね！』

「すまん、東。…そっちの準備はどうだ？」

『ぼっちぐーだよ！あの『絢爛舞踏』のパクリも、うまく使えそうだしね！』

「そうか」

その人物は、篠ノ之東。

彼女の親友であり、ここ最近内密に連絡を取っていた人物である。

『それでそれでー、暮桜は弄ってもいいのー？』

「…ああ、構わん。私たちの悲願のためだ。やむをえん」

『…そっか。そう、だよね』

電話越しに聞こえる東の声が震えている。

いくらあの常識が無い天災、篠ノ之東とはいえ、怖いと感じるものもある。

『ねえちーちゃん。…私たちがやろうとしてることは、正しいんだよね？』

「…さあ、な。そればかりは、やってみないと分からんだろう。すべてが元通りになどなるはずはない」

『…うん。ここまで来た、ううん。ここまで来ちゃったんだもん。最後までやらないとね』

「ああ」

いつになく悲しい声で、寂しげに、そして弱々しく会話する二人。

『じゃあちーちゃん。これが最後の連絡だよ。1月23日。ちゃんと一人でアメリカに来てね』

「了解。暮桜はその時か？」

『うん。ちーちゃんがアメリカに来た時、いよいよ計画は大詰めだから』

「…そう、だな」

亡国起業と手を組んでいる東と千冬が実行しようとしている作戦。

それこそが――

『これでようやく、全IS破壊作戦が始められるね』

――彼女達が世に出した物を、破壊し尽くすというものだった。

「……なあ東。破壊だけで、いいんじゃないのか？」

『ダメだよーちゃん。箒ちゃん以外、特にいっくんと剣ちゃんは危険だって言ったでしょ？…歯向かうなら、もちろん殺すよ』

「その二人だけはどうしても、生かして欲しくないのか…？」

『…いっくんは進化度が怖いし、剣ちゃんは実力が未知数だからね。今もまだ、何か隠してそうだし。拘束って形ならなんとかかなりそうだけど…』

「なら、そうしてくれないか。…私も、その二人が殺される所を見せられて、我慢は出来ないだろうからな」

『…うん、そっか。じゃあその二人と箒ちゃんだけは死なせないよ。ちーちゃんのためだもん！』

全IS破壊作戦と謳っているが、もちろんその操縦者も破壊の対象である。

歯向かってくる者にはそれなりの手段に出るし、場合によっては命を奪うこともある。

「もう後戻りは、出来ないな」

『うん。…そんなの、ちよつと考えたら10年前に分かったことなのにね』

「ああ。…本当に私達は、大馬鹿者だ」

千冬が目から、一筋の涙が流れた。

◇ ◇ ◇

「え、刀奈たち帰ってこやんの?」

「うん…。だ、だから、ね?」

「簪の方から誘ってくるなんて珍し――」

「……一緒にアニメ見よ、だよ。…剣のえっち」

「じゃあ簪。俺が性欲無くなってもいいん？」

「そ、それは……ダメ、だけど……」

千冬の部屋を出て、自室に戻った時守を待っていたのは、アニメを録画していた簪だった。

衣服はすでに部屋着に着替えており、軽くシャワーを浴びていたのか、髪は水気を帯びており近づくだけでいい匂いがする。

「…アニメ見るよりも、したい？」

「いんや。今はアニメ見よか」

「うん…っ！」

時守たちも、普段からそういうことばかりをしているわけではない。

気分が乗らないときもあるし、彼女たちの予定もある。

「明日は朝早よなりそうやからな。今夜はしません」

「ん。…じゃあ、見よっか」

5人が寝ることができるといふバカみたいに大きいベッドに腰かけ、録画したものを再生していく。

「あ。クソアニメか」

「うん。本音に、私の声に似てる人が出てるって言われてんだけど、どう思う？」

「んー。似てるって言われたらそうかもしれんな…」

簪と比べると全くと言っていいほどに似ていない、ずんぐりむつくりのキャラクターが動いていた。

「簪あんな体型ちやうもんなー。胸もおつきなっしたし」

「流石にこんな体型には……って、なんで知ってるの…！」

「えっ？お正月に、な？」

「ううう…」

ベッドに腰掛ける時守の膝の上に納まる簪の耳が赤くなっていく。

彼の左手は腹部に回されていたが、その右手は簪の胸部へと当てられていた。

「お尻もちよっとおつきなっしたし」

「…そ、それは…ふ、太っちゃっただけ…」

「あつ、そうなんや」

ならお腹はどうやと伸ばしていた左手でお腹をつまもうとすると、ばしんと弾かれた。

とはいえ。彼女が太ってしまったと言っているのだ。

「ダイエツト、しなきゃ…」

「おつ。じゃあ一緒に運動するか？」

「……もう。またそう言つて、すぐにえっちなこと…」

「え？いや、普通にI Sの訓練を…」

言つてから気づいた。

これでは、自分からそういう運動をしたいと言っているよ
うなものだと。

「…簪つて、むつつりやんな」

「ち、違うもん…！」

「俺はオープンやぞ！」

「……知ってる」

抱きしめる力を強めてくる彼を一旦無視する。

彼に体を触られていていて気が散っていたが、いつの間にかアニメも終わっていた。

「…今日は、しないから」

「分かってるって」

何しろ晩御飯すらまだ食べていないのだ。

ここで時間をかけるわけには行かない。

「ご飯食べに行こか」

「……ん」

手を繋ぎ、二人は食堂へと向かうのだった。

年始は案外めんどくさくない。

「はい、皆さん揃ってますねー。新学期が始まりますよー」

1月初旬。

全員揃っているとはいえ、その大半がまだ目を擦っている中、真耶が教室へと入ってきた。

「最初は始業式ですつ。皆さん、準備してください！」

「はあーい」

千冬と時守、そして本音と一夏は生徒会の準備でない。

良くも悪くも教室内の雰囲気支配していると言ってもいいメンツがとことんおらず、一年一組は真耶に急かされるまま廊下に並んだ。

「今日はいったい何の話をするんだろうな」

「さあ？学年末のイベントとかじゃない？」

「…その可能性が、一番高い…かな。生徒会長決定戦もあるし」

「ついに、1年生も終わりますのね…」

「あはは…。まだ三学期始まったばかりだよ？」

「うむ。まだまだ精進せねばならん！」

箒、鈴、簪、セシリア、シャルロット、ラウラの順で言葉が交わされる。

始業式と言ってもただ形式上のもでは無い。

今回の始業式は、生徒会長である更識楯無から直々に重大発表があると通告されていたのだ。

「うう…。緊張するなあ…」

「ん？どうしたんだ？シャルロット。それほど始業式に緊張するのかわ？」

「ううん。そっちじゃないんだ。今日の放課後にね、剣と模擬戦するから…」

「え…？剣、確か今日織斑先生ともするはずじゃなかった？」

「僕のは『輪廻の花冠』の最終調整…っていう名の結構本気の模擬戦な

んだけど、織斑先生との模擬戦は剣の卒業試験のようなものらしいよ」

「何ッ!? 師匠は卒業してしまうのか!？」

シャルロットの一言に、ラウラが大袈裟に反応してしまう。

「違うよラウラ。剣つてずっと織斑先生の弟子つてなつてたけど、もう教える必要がなくなるかもってこと」

「なんだ、そういうことか。紛らわしい言い方をするな!」

「ええ…」

自分の勘違いをさりげなくシャルロットのせいにしようとしているラウラを見て、シャルロットが苦笑いをする。

一年一組全員で講堂の中に入ると、すでに大半のクラスが講堂の中に揃っていた。

そこからしばらくして、全クラスが講堂に揃ったところで、壇上に生徒会の面々が現れた。

『さあさあ、皆集まってくれたね。これから三学期の始業式を始めるわよ』

決して大きくわなないがマイクを通された楯無の声は、ざわついていた講堂を鎮めるには十分なほどに透き通っていた。

『二、三年生はわかっているとは思うけれど、一年生のために話しておくことがあるわ』

楯無のその一言と共に、彼女の背後に出ていた巨大なスクリーンに文字がデカデカと現れた。

『IS学園、生徒会長決定戦よ!』

言い終わると同時、講堂が湧いた。

『知つての通り、三年生は卒業するから参加できないわ。基本的に一、二年生がメインになるの』

後ろのディスプレイに、細かいルールが書かれたスライドが表示される。

『でも、せっかくの三年生最後の行事に参加できないのはつまらない。そう思い、生徒会の方でなんとか策を練りました』

まず一行目に書かれているのが、三年生の参加についてだった。

『操縦者としての道を進む人は選手として、技術者としての道を進む人はサポートとして、参加資格を与えさせてもらうわ。もちろん、ただ参加するわけではないわよ？すでに進路が決まっている人も、結果が良ければ今後I S学園の方から支援をさせてもらうわ』

一、二年生のための大会だが、三年生も参加資格が無い訳では無い。もちろん生徒会長に選ばれることは無いが、結果が良ければ卒業後も個人としてI S学園から支援を受けることが出来る。

『そして、メインの一、二年生ね。皆も、基本的に参加は自由よ。強制することはしない。でも、一般生徒の皆でもしつかりとした結果を残すことが出来れば、代表候補生になれるかも知れないからね』

一、二年生。特に今の一年生には専用機持ちが多く、一般生徒達は操縦者として学内の大会で優勝することを諦めているものが大半だ。

しかし、そんな中でも諦めずに頑張る姿を見せることで、各国の目に止まるかも知れないのだ。

『もちろん、ハンデはありよ。…でもそれは、参加する専用機持ち達だ、決められた範囲内で自身で決めること。ここが、この大会の肝よ』
普通とは違うハンデ戦。

その概要が説明される。

『まず専用機持ち達には、生徒会長決定戦の前段階として、順位付けのためのリーグ戦を行ってもらうわ。そこで一位になったものからハンデが厳しくなっていく、というものよ』

つまり、強ければ強いほど、拘束が厳しくなるということだ。

『具体的に言えば一位の選手に課す最低限のハンデは、武装一種類、S E半分スタート。ここから更にハンデを厳しくして結果を残せば、それだけその選手にもI S学園から支援をさせてもらうわ』

自分と相手の力量の差を理解しつつ、どの程度のハンデならば勝ち進むことが出来るか。

その判断を求められる大会なのだ。

『ハンデはもちろん戦闘だけじゃないわよ。技術者を何人雇うか、というのも対象に入るわ。詳しいことはまた大会開始前に言うけど、学年末にある最後の成果発表の場となることは間違いない。もう一度

言うけれど、専用機持ちでない一般生徒達にももちろん活躍の場となるわ。：皆の参加を、待ってるわね』

詳しいことを言うにはまだ時期が早い。

しかし、今からモチベーションを上げておくに越したことはない。ハンデ次第では、一般生徒達が専用機持ち達にジャイアントキリングを起こすことも夢ではないのだ。

『さてー生徒会長決定戦の話は一旦置いておきましょう！』

真面目な声色から一転。手をパンと鳴らし、その顔に笑みを浮かべた楯無。

『今日はこれから、いつも通り授業があるわ。しかし！今日は放課後に大きなイベントが2つ待っています！』

生徒会長決定戦の大まかなルールが書かれていたスライドが切り替わり、3人の名前とアリーナの場所、そして時間が書かれたスライドが出てきた。

『まずは第一戦目。フランスでの出来事はみんな知ってるだろうから割愛するけど、『輪廻の花冠』のシャルロットちゃんVS『金色』の時守剣くんよ！』

シャルロットが胃がある腹部をさする中、周りの生徒達が一気に湧いた。

『専用機持ち同士の本気の戦いよ。時間があれば、是非とも見に来てほしい。このあとにある、時守剣くんと織斑先生の対決もね』

楯無の言葉に、今度はまるで息を飲んだかのように静まり返る講堂。

生徒同士の戦いならまだしも、あの二人が戦うとなれば、ただ騒いで見るだけでは勿体ない。

『どちらの試合も、見て絶対に損は無いからね。もちろん、アリーナに入れなかった人のために、各施設のモニターで生中継をするわ』

IS学園にあるアリーナにも、もちろん収容可能人数というものがある。

そのため、観客席に入ることが出来なかった人への救済措置が取られている。

『これで今回の私からのお話は終わりよ。各自、生徒会長決定戦などのことも考えておいてね』

今日のこれは始業式。

皆さん、冬休みは学生らしく過ごしましたかなどという無意味な事を、世界の最新を突っ走る I S 学園が聞くことはなく、印象に残ることと言えば楯無の話だけとなり、始業式は終わった。

「……胃が痛い」

「大丈夫ですか？ シャルロットさん」

「うん、ありがとうセシリア。…言っちゃったら、織斑先生と剣の模擬戦の前座だから、緊張しちゃって」

「でも対戦相手はアイツなんだし、緊張しなくて良くない？」

「…うん。そう言われると気が楽になるよ」

良くも悪くも、シャルロットの対戦相手は自分の彼氏でもある時守剣。

彼の強さや実質的には前座ということを考えれば緊張するが、時守だということを出せばそれも和らぐ。

「頑張ろうね、『輪廻の花冠』」

「…頑張って」

簪からの激励を受け取り、シャルロットは放課後の模擬戦に備えるのだった。



「なー、金ちゃん。シャルの『輪廻の花冠』ってやつば強い？」

『それなりになー。物理とエネルギーの両方持ってるし、胸ちっこい方の金髪は武装の切り替え早いから厄介やで』

「…今度シャルのことそんな呼び方したらお前の待機状態に鼻くそ付けるからな」

『嘘嘘嘘嘘っ！冗談やん、じょーだん』

時は流れ、そして場所も変わり、『金色』が創る『完全同調・超過』での精神世界。

装備としてのIS『金色』の調整がてら、この精神世界で一戦交えていたのだ。

『でやでや剣ちゃん。今日はどこまで解放すんの？最後まで!』

「んなわけないやろこのドアホ。…今まで通りや」

『ちえく。こないだのドイツでのちっふーとの模擬戦ん時も全っ然本気出さんかったやん』

「そりやな」

胡座をかく『金色』と向かい合いながらラフに座る時守の顔は、真剣なものだった。

「今のままでも、十分すぎる程に強い。新しいのは敵をちゃんと見つけてからや」

『ふーん。てことはマジの戦闘ちやう限り本気は出せへんってことか』

「そうなるわ。…雷とか、普通の模擬戦でやってええもんどちやうかな」

『まあせやけどさー。ウチかて本気でやりたい時もあるやん?』

「…亡国機業と戦う時や。次、もしアイツらとの戦闘になったら、そんなに本気を出す」

立ち上がり、ちよこちよこ短い歩幅で時守の元へと近づく『金色』。

ゆらりと、彼女の長い髪が揺れる。

「今、まさに今や。手の内を知られたらあかん。やからこそ、IS学園から離れてるロジャーにしか報告してへんねん」

『ほへく。我が操縦者ながらすんごい考えてる…』

「脳筋のパートナーやから賢ないとあかんやろ?」

『殺したるかコイツ』

時守の額を小突き、歯を見せて笑う『金色』。

その八重歯が映える。

『てかさ剣ちゃん。んなこと言うても亡国に勝てるん?』

「さあなー。…でもまあ、負ける気はせんやろ?」

『…うん。そりや、な』

一瞬伏し目がちになりながらも、彼に微笑みかける。

そんな『金色』を見て少し疑問に思いながらも、話を続ける。

「アイツらがつと強なって、さらに戦力をかき集めてるって言うんやったら別や。けど、そうやない限り俺は負けん」

「ん。このままでも、剣ちやんとウチは誰にも負けへんよ」

「そか。：それってシャルにも？」

『当たり前やん。あの娘には悪いけど、流石に三次移行してて単一仕様能力も出てるウチらとやったら比べもんにならないわ。：まっ、デュアル・コア搭載機の実力つてのを見せてもらおうか』

「いや、何様やねん。まあでもせやな」

—簡単に勝たせるわけにはいかんよな。

その言葉を聞き、『金色』は微笑んだ。

『つたり前やん。：まあでも、対策ぐらいは立てとこか』

「せやな。武装つてどんなんあつたつけ？」

『えつとな、エネルギーシールド』花びらの装い』、四八口径ハイブリッド・ダブル・ライフル』ヴァーチエⅡ』、三二口径十連装ショットガン』タラスク』、近接デュアルブレード』ジキル・ハイド』、デュアルパイラルバンカー』グレースケールⅡ』、マルチウイングスラスター…やな』

「アホやるそんなん。天使ちやうわそれ、悪魔や悪魔」

『まあでも食らわんかったら勝てるで？』

「そりやまあ…：せやけど」

こちらが攻撃を食らわなければ勝てる。

作戦もへつたくれもないが、事実時守の戦法は『完全同調』を会得してからはこうだった。

『てことは、いきなり『雷動』解放する？』

「いんや、最初は『完全同調・超過』だけや。シャルの強みは高速機動戦闘やからな。シャルには悪いけど、それを強引に乗り越える」

『かくつ。趣味悪ツ！相手の土俵に立った上で完封すんの？』

「そうなるわな。俺かて勝ちたいし」

『：絶対あの子の方が剣ちやんに勝ちたがってると思うわ』

「そんなんどっちも思てるやろ」

いくら恋人同士とは言え、ISでの模擬戦となれば話は変わってくる。

シャルロットは現在フランス国家代表候補生であり、現状のままではモンド・グロツソには参加できない。

もしシャルロットが本気で出場を目指しているのなら、国連代表という目立つ試合で本気で勝ちに来るだろう。

「とにかくにも、俺らはシャルがどんな出方をしてもいつも通りやる。それだけや」

『せやな！よっし、やったるでえええええっ!!!』
『うるさい』

立ち上がり、『金色』のデコにチョップをお見舞いする。

その場でのたうち回る…ことなど無く、さすがはISの自我と言ったところか。ケロッとしたまま時守を見上げる。

『ん、どしたん？もうそろそろ行く？』

「ああ。あんまり長いこと目え閉じてたら皆も心配するやろしな」

『ん、そか』

『金色』が時守の言葉を聞き入れ、頷いた瞬間。

二人の精神世界は、白い光に包まれた――



「んお…。くあ…っ！」

「もう、剣くんっ。あと少しでシャルロットちゃんとの模擬戦よ？」

「……真面目にやらないと、多分怒るよ？」

「そうですね。いくらシャルロットさんが優しいとは言え、剣さんに手を抜かれては…」

「ああ、それは大丈夫や。今も金ちゃんと作戦立ててきたところやしな」
目を覚ますと、そこは『金色』との精神統一に入る前に眺めていたピットの光景と全く同じであり、座っている時守の前にはシャルロット以外の3人の彼女が立っていた。

『『金色』ちゃんと？』

「おう。一応、ISバトルに関しちや一番近いパートナーやからな。色々と話しとってん」

「…って、ことは」

『輪廻の花冠』対策も、シャル対策もそれなりには立てられた。ま、ちやんと見といてや」

「剣さん…」

時守の言葉を聞き、3人の顔が真剣なものへと変わっていく。

休息を取っていたと思っていた彼が、実際は精神世界で自分の専用機の人格と向き合っていたのだ。

つまり、彼女で、かつ代表候補生という立場のシャルロットに対し一切の油断も無いということだ。

『時守剣くんvsシャルロット・デュノアさんの模擬戦まで、後5分となりました！両者、フィールドに出てください！』

「よしや、行ってくるわ」

開いたピットをISを展開しないまま進んでいく。

既にフィールド上には、『輪廻の花冠』を纏ったシャルロットが佇んでおり、その双眸はしっかりと時守を捉えていた。

「行こか、金ちゃん」

まさに刹那と言えるほどに短い光。

そんな一瞬のうちにISを展開し終え、シャルロットの眼前まで躍り出る。

「…やっぱり、いざこうして対峙して見るとよく分かるよ。剣が凄まじく強いって」

「そりや買い被りすぎやわ、シャル。…いや、シャルロット・デュノアフランス国家代表候補生」

「…。じゃあ、胸を借ります。時守国連代表」

「ああ、存分に実力をぶつけてこい」
じりじりと2人が距離を取る。

両者共に多芸な戦い方が可能なため、出方を伺っているのだ。

「…ふふっ、ねえ剣」

「せっかくカツコよく決めとったのに…。どした？」

「何か、賭けよつか」

「ええな。…ほな、俺が勝ったらシャルを一日中俺の好きにする権利な」

「ええ!?…うーん…じゃあ僕が勝ったら、デユノア社の社長を正式に継いでくれる?僕がちゃんと秘書につくから」

「……おう」

かなり重いシャルロットの提案を何とか飲む。

勝てばいいのだ。勝てば、シャルロットを一日中好きにする権利を得ることが出来る。

「…絶対勝と」

「させないよー!」

『試合、開始イイイイイツ!!』

時守とシャルロットの模擬戦が、始まった。

本気

「はああああっ!!」

『完全同調・超過』

試合開始早々、近接デュアルブレード『ジキル・ハイド』を構えたまま、特攻を仕掛けてくるシャルロット。

しかし、いくらシャルロットが高速機動戦闘を得意にしているとは言え、それは時守にも言えること。

シャルロットの初動を見てからの『完全同調・超過』の発動で、難なく避けることが出来た。

「そこっ！」

「っ…」

直線的に進んできたシャルロットに対し、右に避けた時守。

しかし今度は、『タラスク』による追撃を狙ってきた。

「まだまだあー！」

「ちっ…」

その『タラスク』での弾幕を避け、少しばかり距離を取る。

しかしそこでも武器を変えられ、『ヴァーチェII』でのさらなる弾幕にが張られていく。

「…剣に勝つには、自分のスタイルを貫く…なんて綺麗事、言ってもらえないからね。とにかくがむしやらに、攻撃を当てにいくよ」

「おおむね正解ってとこやな。確かに『雷動』と『完全同調・超過』を狙える人なんてそうはおらんし、攻め続けるのはええこっちゃ」

試合が始まり、およそ30秒。

その間に攻撃を行ったのはシャルロットだけであり、時守は一切の武装を展開することすらせずに、ただ単一仕様能力で逃げていただけ。

だが、そのお互いの表情は試合の展開とは真逆で、シャルロットには余裕はなく、時守にはまだまだ余裕を感じられるものだった。

「でも、やっぱりダメみたいだね」

「諦めるには早過ぎひんか？」

「そんなことないよ。これは、実力差を考えた上で、だから。最速を誇る剣の『雷動』を出されたら、それだけで僕は太刀打ちできなくなる」シャルロットは、最初から分かっていたのだ。

世界初のデュアル・コア搭載機になっても、その出力がラファールの時と比べて大幅に上がったとしても、『金色』の持つ『雷動』の速さには勝てないことを。

「僕がズバ抜けた動体視力や、当たれば一撃で倒せる武器を持ってない限り、今のままでは剣を超えられない。できるだけ早く二次移行をすることが目的なんだ」

「…じゃあなんで、今ここで俺と模擬戦を？」

「自分が上の世界と、どれだけ差が開いてるかを実感するため。…まあ後は、今ある力でもどこまでできるかっていうのを知りたかったんだ。…ワガママに巻き込んでごめんね？」

「ええよ。むしろ、シャルから誘ってくれて嬉しかったわ。…ほな、仕切り直しといこか」

近接戦闘を行うにはあまりにも離れている距離感のまま、にらみ合う両者。

シャルロットが少し息をつこうとした、その時だった。

「はっ！」

「っ!?!くっ、ああ…!」

「格上相手に息抜きしてる場合ちゃうぞ？」

『完全同調・超過』、『雷動』という時守の機動力を最大まで引き上げる二つの単一仕様能力を同時に発動させ、彼がシャルロットの懐に。まさに瞬間移動の如く一瞬で現れた。

そしてそのままシャルロットの腹部に押し当てられた右手から、『雷轟』が放たれる。

「っ、このおっ！」

「ええ心がけや。…けど、残念やわ。圧倒的に、全てが足らん」

「分かってるよっ！」

足りないのは、単一仕様能力だけではない。

第二形態移行する時のスペックの上昇や、武装の変化、追加など。

良くも悪くも、『輪廻の花冠』は既存のIS二機が合わさっただけのもの。

三次移行を済ませた機体と渡り合えること自体、奇跡に近いのだ。「ワンサマの機体ならどうなったかは分からんけどな。少なくとも、俺には勝てへん」

「…それって、国連代表としての余裕？」

「それもあるし、俺の機体が『金色』やからって理由もある。あとは、余裕であり油断やな。シャルがここから俺を倒せる術を出してきても、負けへん自身はあるつもりや」

一夏の機体は、超攻撃重視のものとなっている。

しかし、時守の機体は機動力に重きを置きながらも、全てにおいてバランスの良いものとなっている。

「さて、シャルロット・デュノア代表候補生。奥の手を出すなら今のうちやぞ？」

「っ……！」

シャルロットのSEは、試合開始の時間から考えるとかなりのペースで減っている。

その全てが、彼が攻撃に転じてから数秒の間で減らされているのだ。

「行くよー！」

先ほどまでと同じく、エネルギーシールド『花びらの装い』で彼らの攻撃に最低限の牽制をかけながら、なんとか肉薄を試みる。

ブレード、パイルバンカー、そして銃。

既存のそう言った兵器でまともにダメージを与えられないことは分かりきっていたが、そんなことは諦める理由にはならなかった。

「最後まで全力を出したシャルに、ご褒美や」

「そんなの、今は要らないよー！」

いずれの武装を用いた攻撃も避けられてしまい、次第に残弾が無くなり、攻撃も淡泊なものへと変わっていた。

対する彼は、まだまだ余裕。

この戦いでも攻撃にはほとんど『雷轟』しか使っておらず、ここから全力を出せばその手段は多岐にわたる。

「まあまあ。せっかくのご褒美なんや。ありがたく——」
彼の言葉が耳に入る。

先ほど言っていたご褒美とやらが来るのか。そう意気込んでいたシャルロットは——

「——受け取つといてや」

「……………へ？」

——いつの間にか背後に迫っていた彼に気づくこともなく、衝撃を感じることにすらないままに、負けていた。



「ううううううううっ!!!」

「シャルが甲子園のアラームみたいな声出してる」

「そうなるのも仕方ないわよ、剣くん」

「私たちから見てたら……普通に『雷動』で背後に移動した剣がトドメを刺してたけど……」

「肝心なのは、シャルロットさんがそれを感知できなかったということ……」

「ねえ剣っ！あれ、何?!僕最後、全っ然攻撃されたって分からなかったんだけど!?!」

時守とシャルロットの模擬戦が終わった。

結果は時守のほぼ完全試合と言ってもいい内容であり、シャルロットはその鬱憤に時守のことを真正面から思いつき抱きつきながら、彼に叫んでいた。

「あれが、俺と金ちゃんが一番編み出した新しい技や。どやった？」

「何をされたか全然分からないから聞いてるんだよ？」

「外から見てた私達は気づいて、一番近くにいたシャルロットちゃんが気づかない……」

「全く訳が分かりませんわ……」

「……それはそうと、本当に大丈夫なの？ シャルロット」

「えっ？ うん。最初から勝てる気では無かったもん」

簪がそう聞くと、シャルロットはあっけらかんとした顔でそう返した。

「自信を持つてた機動力が通用しなかったのはショックだったけど、剣は多分世界トップクラスの機動力だし、それに僕も『輪廻の花冠』でのほとんど初めての戦いだったからね。どんな風に動かせるか分かっただけでも十分な成果だよ」

「ふふつ。すごく前向きね、シャルロットちゃん」

「はいっ。ポジティブにならないと、前には進めないの」

『……おい時守。貴様、すでに機体の整備は済んだだろう。早く出てこい』

でも負けたことは別だから慰めて、と言わんばかりに時守のことを抱きしめ続けていたシャルロット。

時守自身もそんな彼女を抱きしめ返していたが、その時間もうとうとう終わりを告げるようだ。

時守のピットに、少し怒気を孕んだ千冬の声が響いた。

「ほな、行ってくるわ」

「うん、頑張つてね」

「これに勝てば、ついに免許皆伝つてところかしら」

「応援していますわっ！」

「もし勝てたら……皆でござ褒美を考えてるから」

彼女たちの言葉を背に、『金色』を展開する。

「んじやあちよつくら、勝つてくるわ！」

ピットから勢いよく飛び出していく時守。

そんな彼を待ち構えていたのは、鬼の形相を浮かべた織斑千冬だった。

「随分と、余裕そうじゃあないか、時守……」

「さつきよりかは無いっすよ、流星に。やからこそシャルリウムを撰取してきたんです」

「意味の分からん御託を抜かすな」

軽口を叩くも、時守はその言葉通り、先ほどのシャルロット戦と比べてその表情に余裕は無い。

飛び出したと同時に『完全同調・超過』をすぐさま発動し、いつ戦闘になってもいいようにしていた。

「今回は、俺がチャレンジャーです。最初っから本気でぶつ飛ばしますよ」

「ああ。…お前が私を超えてくれることを、楽しみにしている」
緊張が高まる。

時守と千冬が向かい合うフィールドだけでなく、一夏や箒たちが観戦している観客席、楯無たちがいる時守のピット、真耶がいる放送席までもが、ピリピリとした空気に包まれていた。

「お前が隠しているすべてを、さらけ出してもらおうか」

「さあ？それは、ちっふー先生次第っすね」

『試合、開始イイイイツ!!』

本日2度目となる試合開始の合図。

数秒の間睨み合い、先に動いたのは時守だった。

「行きます…!」

「っ!」

バチリ、と光が時守の周りにまとわりつき、雷を帯びる。

その瞬間、その場から時守が消える。

「っ、チィ…ッ!」

「らあっ!」

いつの間にか千冬の懐へと現れた時守。

その超速の蹴りが、彼女の腹部を穿つ。

「…ああ。言い忘れてましたけど、前のアレが最速な訳やないっすからね」

「…:それぐらい、今の攻めで分かったさ。全く…、視認できた時には蹴られていたとはな」

千冬が今までに見たことのないほどの速さ。

流石に蹴られるまで何をされたか分からない、という程ではないが、ハイパーセンサーでも視認できない。

「ほっ」

「そんなっ、気軽に、瞬間移動を、するなあっ！」

『雷動』と『完全同調・超過』

もはやお馴染みのコンボだが、時守の気分次第でこれはどこまでも速くなる。

『金色』というISを完全に制御し、その上で『雷動』でひたすらに速度を上げていく。

限界は、時守が制御できなくなる時。ただそれだけだった。

『ラグナロク』

「なっ……！」

千冬を蹴り飛ばし、そこから逃げる千冬をさらに『雷動』で追撃する時守。

追いついた彼が出てきた手は、千冬にとって最早懐かしくもある武装だった。

「くそ……。オールラウンドか……」

「ええ。あんま警戒してなかったんすか？」

「そりゃあな。てつきり、単一仕様能力ばかり使うものだと勝手に思っていた」

「流石にそれだけやったら勝てませんって」

『雷轟』を警戒していた千冬の懐を抉る、切り上げるような攻撃。

時守が千冬に唯一勝っていると考えているのは、その手札の差。

相手は魔改造された打鉄とはいえ、そこに積まれている武装は基本的に近接ブレードのみ。

攻撃の手段だけは、どうやっても『金色』には及ばない。

「……」

「……ようやく、本気になったみたいっすね。ほな、もういっちょっ！」

時守と距離を取って対面する千冬表情から、余裕が消えた。

そんな彼女を見て、再び時守の姿が消える。

「ふっ……」

「はあッ……」

先ほどの接近と同じ、もしかしたらそれよりも速いかもしれない加

速。

しかし、千冬はそれをしっかりと視認。近接ブレードでのカウンターへと転じた。

「ツ、よっー!」

だが、単純な速さでは時守に分がある。

振り払われたブレードをオールラウンドで弾き、今度は『グングニル』を纏い、投げる。

「舐めるな」

『雷動』でさらに速くなった『グングニル』。

下手をすれば一撃でSEを全てこそぎ取ってしまうかもしれないそれを、千冬は身体を回転させることで避けた。

「そっちこそ」

「っ!」

千冬が体をターンさせ、時守に背を向けたほんの一瞬。

その一瞬のうちに時守は千冬に右手を向け、単一仕様能力の一つ『雷轟』の準備を終えていた。

「ぐう…!」

「もう、ちっぷー先生に攻撃はさせませんよ」

千冬が初めて浴びた、極大の雷。

かつてフルパワーで振るった際に、ゴーレムⅢを沈め、エクスカリバーの熱線を弾き飛ばしたそれは、彼女のSEを着実に減らしていた。

「くそ…何っ!?!」

「あ、もしかしてまだ俺があそこにいるって思っていました?」

何とかして『雷轟』の範囲外に外れ、時守と距離を取ろうとする千冬。

だが、なぜか既に避けた先に彼が回り込んでいたのだ。

「チツ、ハイパーセンサーが…『雷鳴』か…」

「これがお待ちかねの、本気っすよ!」

またも行われる、時守の超速突撃。

後ろに距離を取ろうとしても、上手く位置取られていたのだろう。

アリーナの壁が邪魔をして、その攻撃をブレードで受けるしかなかった。

「…ふっ。強く、なったな」

「なんすか急に。まだまだこれから…やあー！」

再び手にしたオールラウンドを振り上げる。

今までの展開からは珍しく淡白な攻撃であり、もう一度素直にブレードで防ごうとした千冬。

だが―

「な、が…！」

「やから、本気出すって言うたやないですか」

―そのオールラウンドは千冬の近接ブレードをすり抜け、彼女の顎を跳ね上げた。

「な、何が…！」

「それは、自分で考えてみてください。…じゃあこれで、終わりっす」

先ほどのシャルロット同様、何をされたのか理解ができていない。

そんな彼女に、時守は右手を向ける。

『雷轟』

「ぐ…っ。…ははっ。これで、私の負け、か…！」

全力ではないが、確実に千冬のSEを削りきるには十分な雷。

終始時守のペース。千冬にほとんどの攻撃を許さずして、彼が勝った。

「…どうすか、ちっふー先生」

「完敗だよ。お前の攻め方と武装を事前に確認していても、対応しきれなかった。…私に暮桜があつたとしても、どうなっていたかは分からないだろう。…まあ、こんなことを言っても負け惜しみだな」

観客席の慟哭は、二人の耳には入っていない。

あるのは、ただの師弟の会話だけだ。

「認めよう、時守。IS操縦者として、既に私からお前に教えることは無いだろう」

「…そっすか。じゃあ後は、先生と教師としてよろしくお願いします」

「…ああ、よろしく」

少し寂しげな表情を浮かべ、時守のことを見上げる千冬。
アリーナの壁の影になっっている部分に入っていたからか、千冬は彼
を眩しげに、目を細めて見るのだった。



「うおう。けんけん、おめでとおう」

「お、のほほん。それに山田先生も」

「おめでとうございます、時守くん」

時守がピットに戻ると、そこに彼女たちはおらず、本音と真耶が
待っていた。

「どしたんすか？」

「わたしは、かんちゃんたちにけんけんの労いを頼まれたんだよお
〜」

「わ、私は、その…織斑先生の方には行きづらかったので…」

「…ちっふー先生、大丈夫なんすか？」

「はい。初めて負けたのを思いつめてるようですが、何やら考え込ん
でいたので」

話から察するに、簪たちは言っていたご褒美の準備に取り掛かって
いるのだろう。

そして、弟子に負けてしまった千冬はピットで一人になり、何かを
考えているらしい。

「にしてもけんけん、ちよおちよお速かったねえ〜」

「そりやな。いやあ…ええ試合やったわ」

「織斑先生も、また鍛えないとって言ってましたよ？」

「じゃあ次も勝つだけっすよ」

ピットから三人で出て、通路を歩く。

話題はもっぱら時守と千冬の模擬戦のことだった。

「これからも、まだまだ強くなるの〜？」

「おう。そりや、ちっふー先生に勝ったからには他の人に負けてられ
へんからな」

「時守くんなら大丈夫ですよ。先生も応援してますっ！」
「いや、先生ならみんなも応援したってくださいね？」

「そ、それはもちろんですよ!」

ほんのりと顔を赤くしながらも、真耶は続ける。

「でも、時守くんは本当にすごいと思います」

「ほえ？」

「だって、あれだけ先輩にボコボコにされても、頑張り続けたんですか
ら」

「…まあ、はい。あれは辛かったですから…」

「けんけん頑張ったね」

「まだモンド・グロツソまでは時間あるけどな」

三人並びながら向かうのは、IS学園の一年生寮。

本音、時守、そして真耶の部屋があるそのロビーまでだと、口に
せずとも分かった。

「じゃあ、けんけんが優勝したらお祝いしなきゃだね」

「俺じゃなくてIS学園の誰かでも、な」

「ういうい」

「あつ、じゃあ私はそろそろここで」

気がつけばすでにその目的地に到着しており、一人教員室へと戻る

ため、真耶が別れを言う。

「ほーい。お疲れさまです、山田先生」

「やまやん、じゃあね」

「はい、さようなら。…布仏さん、山田先生ですよ？」

「てひひ」

悪びれもせずに舌をちろりと出す本音。

小さく手を振った真耶は、廊下の奥へと消えていった。

「やまやん、これからもお仕事なのかな？」

「そやろな。社会人やし」

「…私には関係のないお話」

「…あ、そつか。簪のメイドやもんな」

「うい」

エレベーターに乗り、移動すること数分。

本音の部屋まではずぐだった。

「ありがとねー、けんけん」

「おう。んじやの」

「ほーい」

二人特有の軽いノリのまま別れ、本音が部屋に入る。

そこから少し歩き、廊下の角にある部屋。

今や5人部屋となったそこは、リフォームや改築を重ね、かなり大きいものとなっていた。

「ただいまー」

「あつ、お帰りなさいっー」

その扉を開ければ、何かの準備をしていたであろう、エプロン姿のシャルロットが笑みを浮かべて振り返っていた。

「てつきり待っててくれると思っただわ」

「えへへ。ちよつとしたサプライズを用意してたんだっ」

彼女に手を取られ、部屋の中へと入っていく。

「じゃじゃーんっー」

「あら。お帰りなさい、剣くん」

「お待ちしておりますわ!」

「おめでどう……っっていうのは、ちよつと早い?」

そこに広がっていたのは、祝い事があったかのような豪華な食事の数々。

恐らく……というか確実に、彼女たちが用意してくれたのだろう。

「ありがとう。なんか織斑千冬討伐記念みたいやな」

「…剣くん」

「分かってるって。そんなん言わんよ」

そこにはいつもよりも少しだけ賑やかな空間が広がっていた。

時間は止められない

「…あの、剣さん？」

「ん？」

「なぜわたくしの頭を撫でるのですか？」

「さらっさらで気持ちいいから。…嫌やった？」

「い、いえっ！むしろ、いくらでも撫でて欲しいですわ…」

IS学園、平日の午前中。

IS学園はイベント事や模擬戦なども多いが、もちろん普通の授業もある。

今は、1年生も終わりに差し掛かった三学期。

一般科目と一般科目の間の休憩時間に、時守は席替えをした結果右隣の席となったセシリアの頭をひたすらに撫でていた。

「ん…。すっげえさらさら」

「んっ…剣、さん…。撫でるのが、お上手ですわ」

「みんなをいっぱい撫でてるからな」

「むうー。僕も撫でてほしいな」

「わ、私も…」

椅子に腰掛けたまま距離を詰め、セシリアの頭に右手を伸ばす。

左隣の席に座っているシャルロットが時守の背中に抱きつき、時守の前に座っている簪も強請った。

「…あかん。腕3本無いわ」

「そ、そんな真面目な顔で悩まなくてもいいよ？」

「では剣さん。わたくしはもう十分に堪能したので、お二人にお譲りしますわ」

「ん」

セシリアが少し下がると、その間に立ち上がった簪が入る。

背中では、胸が押し潰されるのも構わずに時守に体重を掛けたシャルロットが、彼の肩から顔を出していた。

「んっ…。剣」

「よしよし。…ほら、簪も」

「う、うん…」

「…なんか、犬と猫みたいね。二人とも」

「夜は俺が狼になるからな」

「聞きたくないわよそんなこと!」

席替えの結果時守の真後ろを陣取ってしまった鈴が怒鳴る。

それもそのはず。三学期に入って、この男が前に来たせいで鈴にとって宜しくないことが起きているからだ。

「あ、そうだ。ねえ剣、ノート見せて」

「えっ、俺の?」

「そうよ。アンタの身体が微妙にデカいから写せないところがあったの」

「ん、ほれ」

IS学園の机は、一般的な机の面にタブレットが埋め込まれたようなものになっている。

その中のソフトに板書を書き写すことも出来るが、時守のように現物のノートに書くものもある。

「ありがと。…普通ね」

「いったいお前は俺をなんやと思っとなんねん」

いくら時守とは言え、板書は普通である。

自分で問題を解く時ではなく、書き写す作業は割と丁寧なため、鈴が想像してたよりも綺麗なノートに仕上がっていた。

「あれ、そういや次なんやっただけ」

「ISの座学だよ?」

「はいクソー」

ISの仕組みなどはとことん身体を動かすことで覚えてきた時守にとって、座学はつまらなく、そしてやりがいのない科目だ。

だいたいこのことは完璧に理解しているため、1年生で新しく習うことがほとんどないのだ。

「授業中ずっと簪のうなじ見とこ」

「や、やめて…。それに、髪の毛で見れないでしょ…?」

「…やることないやん」

「ちゃんと授業受けなさいよ」

そんな話をしていくうちに、教室の前の扉から真耶が入ってきた。

「はーい、皆さん座ってくださいねー。授業を始めますよー」

「めんどくさ」

「と、時守くん!?!ちゃんと受けてくださいね!?!」

「ほーい」

なんだかんだで、授業が始まろうとしていた。

「…あれ、そういやちっふー先生は?」

「そういえば来てないね」

「座学の時間でも、いつもはいらっしやるのに…」

「……山田先生、織斑先生はどこへ?」

だがその時、時守が教室の異変に気付いた。

立っているだけで嫌でも存在感を放つ、千冬がいない。

真耶が担当する授業にも全て監督として出ていた彼女が、いないのだ。

「それが……分からないんです」

「えっ?」

「朝のホームルームの後、職員室から出てから教員の誰も織斑先生の姿を見ていなくて…。生徒の皆さんには内緒にしておくようにって言われていたんですけど、このクラスは織斑先生のクラスですから伝えておこうかと…」

なんと、真耶曰く千冬が失踪したらしい。

その事実が生徒に伝えられなかったのは、彼女がいなくなることで生徒に不安な気持ちを抱かせてしまう、と学園側が考えたからだろう。

「……このことを他に知ってるのは?」

「生徒会長の、更識楯無さんだけです」

「そっすか」

もしかしたら何かの事件に巻き込まれたかもしれない。

そう一瞬考えた一同だったが、あの織斑千冬が誰かに攫われるな

ど、考えられなかった。

「…いい、今の手の空いている教員たちで捜索に当たっているの…。ごめんなさい、織斑くん。お姉さんが…」

「いいいやいやっ！大丈夫ですよ！…千冬姉なら、ちゃんと帰ってくるでしょうし」

一年一組の生徒たちに不安を与えてしまったと思ってか、真耶の口から現在取っている処置が伝えられる。

そしてそれと同時に、姉としての織斑千冬の行方が分からなくなつたことに対して、真耶が一夏に謝罪した。

「…そろそろ、ちゃんと怒らないとな。千冬姉、最近どんどん生活習慣悪くなってるし」

「あ、あはは…」

良くも悪くも自分で決めたことは曲げない千冬。

そんな彼女に唯一の肉親である一夏が説教を決めた、その時だった。

「っ！みんな伏せろっ！」

「敵襲ですわ！」

一年一組の教室の窓の外に、数機のゴーレムが佇んでいた。

時守の大声とセシリアの声に、悲鳴を上げながらも机の下に潜り込む。

「時守くんっ！」

「剣っ、お願い！」

いち早く窓に駆け寄り、開け放ったシャルロット。

最小の機体でありながら最高の機動を誇る彼に、真耶とシャルロットは先陣を任せたのだ。

『雷動』！

「僕たちもっ」

「行きますわよみなさん！」

「うん……！」

「誰か一人、教室守ってて！」

「俺じゃ不向きだ！箒！」

「うむっ！ラウラ、お前も頼めるか！」
「任せろ！」

教室を飛び出していく時守、シャルロット、セシリア、簪、鈴、一夏。

そして、万が一彼らが教室への襲撃を許してしまった時に対応する役として、簪とラウラが中に残った。

「…なんやこいつら。前やったやつとは、ちやうな…」

「っていうことは、ゴーレムIV?」

「考えたくもない…！」

前回の襲撃でゴーレムたちを蹂躪した時守の横に並ぶシャルロットと簪。

その時の苦い記憶がまだ残っているのか、簪の眉間には今まで見たことがないほどに皺がよっている。

「…ですが、ちよつと様子が変ですわよ」

「アタシたちをわざわざロックしたのに、全く攻撃してこないわね」

「それどころかエネルギーすらほとんど無いよな、こいつら」

だが、臨戦態勢で飛び出した6人の気をそらすかのように、ゴーレムたちはその場でただホバリングを続けるだけ。

一夏の言う通り、ゴーレムたちの動力を確認してもあと数分動けるか分からないほどのものしか残っていないかった。

『……ラ、…フ……ヨ……テ、ア……タ』

「何言うтонねん」

突如として喋りだしたゴーレム。

それに時守がツツコミを入れると、まちまちだった言葉が繋がり、まるでロボットが治ったかのようにスラスラと喋りだした。

『オリムラチフユラ、ニユーヨークニテ、アズカッタ』

それは、失踪した彼女の行方を知らせるものだった。

◇

謎のゴーレム達の襲撃に加え、千冬が攫われたという事件が起き、

今日の残りの授業は急遽休講となった昼。

時守達は、真耶の指示で地下にある部屋に集められていた。

「どしたんすか山田先生」

「…実は、皆さんにお知らせしなければならぬことがあります」

「それって、織斑先生が攫われたこと以外に、ですか？」

「…はい。それでいて、その件にも関係しています」

「どういうことですか？」

集められたのは、いつもの専用機持ちが9人。

そのほとんどが顔を強張らせていた。

「それは…」

「その件は私から、説明させてもらおう」

「ロジャー？」

「やあ時守くん」

真耶の表情が澁んだと思えば、部屋の奥から一人の男が現れた。

国連事務総長、ロジャー。

既に時守以外も見知った顔になりつつある人物だ。

「……時守くん、怒らないで聞いてほしい」

「なんかあったんすか？」

「ああ。…ニユーヨークにある国連のIS施設が、亡国機業に乗っ取られた」

「…は？何してるんすか。…イーリとナタルは？」

「彼女たちも攫われた。…申し訳ない」

「……謝ってもしゃあないでしょ。…どうするんすか」

彼の口から告げられたのは、時守のアメリカでの活動場所が亡国機業によって乗っ取られたこと。

そして、彼の友人二人も千冬同様、亡国機業に攫われたこと。

「そこに、私がここに来た理由がある。IS学園専用機持ち諸君。君たちに、亡国機業の討伐を頼みたい」

「断る理由も無いですし、まずそうしなあきませんしね」

「ああ。だが、イーリス国家代表とナターシャ操縦者とは違い、千冬くんは攫われた訳ではなさそうなんだ」

「…と、言うとは？」

「この映像を見せてくれ」

しかし、ここにいる全員が、彼に言われずとも犯人は何となく分かっていた。

持っていた端末を操作し、その画面をモニターに映し出す。

流れたのは、とある場所の監視カメラだった。

「これって……」

「IS学園地下特別区画の映像ね」

「さすが生徒会長。じゃあここに何があったか、知ってるかい？」

「…織斑先生の専用機、暮桜です」

「ご名答」

「なっ！きよ、教官の専用機がここに!?!」

「まさか、IS学園に保管されていたのか…」

ロジャーと楯無の落ち着いた問答とは真逆の、焦りと驚きに満ちた反応を見せるラウラと箒。

それもそのはず。第一回モンド・グロツソ優勝、第二回モンド・グロツソ準優勝という輝かしい成績を残したまま、理由なく引退した千冬の機体が、ここにあったのだから。

「驚くのはその辺にして、映像を見せてくれたまえ」

監視カメラの映像を流し始めるロジャー。

滅多に人が来ない区画であり、なかなか変化がないそこに、二人の人影が現れた。

「こ、これって…!」

「千冬姉と、東さん…?」

比較的画質がいいそれを軽く見ただけでも、全員が分かった。

織斑千冬と篠ノ之束。

彼らが良く知る二人が、この地下特別区画に現れたのだ。

「いったい、何を…」

石化した暮桜に近づく二人。

束がコンソールを叩いた、その時だった。

「な、何ッ!?!」

「暮桜が……待機状態に、戻った……？」

「ああ。…モノクロだから見えづらいが、暮桜は石化していてね。原因が分からず全く動かせなかったのが、これさ」

眩い光を放ったかと思えば、暮桜が待機状態のガントレットとなり、千冬の左手首に装着されていた。

そして――

「……つちを、見た……？」

――千冬と束。その二人が、監視カメラの方を見た。

映像はここで終わった。

だが、それと同時に専用機持ちたちは言い様のない気持ちに襲われていた。

「今のを見てくれても分かるだろうが、暮桜は盗まれた」

「……ロジャー。あんたまさか……」

「ああ。君たちには辛い言い方になるが」

そこで一旦区切り、一夏の方を一瞬だけ見やる。

再び時守と目を合わせたロジャーは、無慈悲にも言葉を繋いだ。

「織斑千冬は攫われたのではない。亡国機業に寝返ったのだ」

「っ！いい加減にしろ！千冬姉が、千冬姉がそんなことするはずないだろー！」

「今の映像を客観的に見たまえ。それとも、なんだ。彼女は洗脳されているとでも言うのかい？」

「違う……た、束さんなら、映像を加工することだって……！」

「織斑くん……。残念ですが、確認した所確かに暮桜は特別区画には、もう……」

「……嘘、だろ……」

その言葉に、もちろん一夏が反応した。

だがこの反応は何も、彼に限ったことではない。肉親でこの中で最も近い人物だった彼は叫んだが、他の者も心の中では信じたくはなかった。

「……だが、これは恐らく罠だ。彼が言った通り、篠ノ之束には監視カメラの映像を加工することなんて容易だろう。……だからこそ、気になる

点がある」

「なんでこの映像を残したんか、つてことか」

「そうだ。もし本当に織斑千冬と暮桜を奪いたいのなら、この映像も完璧に隠蔽してしまうだろう。…だが、敢えて残していた。言ってしまえば、ニユーヨークにいた私が何事も無くここに来れたことも不思議な程だ」

「…なるほどね」

時守の言葉につられるように、それぞれの解答を思いついていく面々。

「亡国機業が、俺らに戦いを吹っかけてきた。つてとこやな」

織斑千冬、暮桜、イーリス、ナタル、国連施設、そして襲撃。

どれもこれもが、IS学園側の戦意を駆り立てるものだ。

「悔しかったら乗り込んでこいつてか」

「つまり、誘われてるってことね」

「…じゃあ、千冬姉はそのための人質ってことなのか…？」

「それは分からないけど、一つだけ確かに分かっていることがあるわよ、

一夏」

「うん。僕も分かったよ」

「私もだぞ、嫁よ」

「無論、私もな」

「わたくしもですわ」

「わ、私も…」

「あら、奇遇ね皆。お姉さんもよ」

「…ああ。俺も、それだけは分かるぜ」

「…なら、答え合わせと行くか」

なぜ千冬が束に自分の意思でついて行ったのか。

なぜ襲撃してきたゴレム達はすぐに沈んだのか。

なぜ自分たちが誘われているのか。

分からないことは多いが、唯一分かっていることがある。

『亡国機業を倒す』

全員の声が揃う。

そう、何がしたいか分からないが、相手が悪いのは分かっている。ならば倒せばいい。それだけだった。

「京都では俺らが待ち伏せやったけど、今回は向こうが待ち伏せか」
「……ちなみに聞くが、勝てる要素はあるのかい？」

「勝てるか、じゃないんです。勝たなきゃ、いけないんです」

「……まあ、間違いないがね」
やることは決まった。

アメリカ、ニューヨークにある施設に乗り込み、亡国機業を叩き潰す。

そして千冬達を取り返す。

これで万事解決だと、一夏は思った。

「向こうの戦力は、篠ノ之東、ちっふー先生、スコール、オータム、エム、ダリル、フォルテ、アーレイ。そこにゴーレムか」

「ゴーレムを一体だと考えれば、丁度9対9」

「……誰が誰と戦うか、決めないといけないな」

ラウラが呟いたその言葉の次に、緊張が走る。

この中の誰かが、千冬や東と戦わなければならないのだ。

「千冬姉とは、俺に戦わせてくれ」

「……大丈夫なんか？」

「ああ。なんでこんなことしたのか、何を考えてるのか。弟として、俺が聞かなきゃならない気がするんだ」

「ならば、私は姉さんと戦おう。いい加減あの人のわがままも許してはおけん！」

強い希望により、一夏と箒が千冬と東と。

「じゃあ私は、アリーシャを相手しようかしら。この中じゃ恐らく、トップクラスに強いでしょうしね」

同じ国家代表として、楯無がアリーシャと。

「なら、アタシとセシリアはダリルとフォルテと戦うわ」

「勝手に決めないでくださいまし……こほん。ですがそうですわね。京都での借りも、返しておきませんと」

京都でのリベンジマッチとして、鈴とセシリアがダリル、フォルテ

と。

「…私は、オータムと戦いたい。学園祭で、お姉ちゃんと剣を襲われたから、リベンジ…したい」

亡国機業が初めて襲撃してきた際の因縁で、簪がオータムと。

「じゃあ僕とラウラは」

「ああ。キャノンボールファストでは、折角の楽しみを奪われたからな。あの二人だ」

時守が学園を一時離れる原因のリベンジとして、シャルロットとラウラがスクール、エムと。

そして―

「んじゃ俺は、何体用意してるかは知らんけどあのクソ全部ぶっ壊したるわ」

―I S学園の亡国機業では一番因縁深いと言っても過言ではない戦いとして、時守がゴーレム達と。

各々が戦いたい相手が、決まった。

「ふむ。大まかな作戦は立てられたが、それ通りに事が運ぶとは限らないぞ」

「分かってるっすよ。今のは俺らが戦いたい相手や。そう上手いこと行くとは思わんけど、大体な」

「なるほど。…だが、その中で一つだけ、絶対に成立させなければならぬ組み合わせがある」

今挙げたのは、各々が戦いたい、倒したいと思っている人物たち。

だが、相手も人間がほとんどだ。こちらの思い通りに動いてくれるとは限らないし、ペアが変わることもある。

その中で、ロジャーとはある組み合わせだけを成り立たせなければならぬと言った。

「織斑一夏くん、篠ノ之箒くんのペアは、必ずあの二人だ」

「…それって、俺たちの専用機の特徴から、ですか？」

「そうだ。莫大なエネルギーを消費する代わりに高い火力を出せる白式と、それを補う紅椿。あの二人を止めるには、この組み合わせしかないだろう」

言うまでもなく世界最強の千冬と暮桜。

ISを開発した、なんでもありの束。

千冬だけでも強すぎるが、束の専用機の詳細が一切分かっていないのだ。

「まあ、こんな作戦組むだけ無駄かも知れんけどな」

「それでもだ。…その二人以外で織斑千冬、篠ノ之束を止めるのは難しいだろう」

「…ああ、せやな」

高まる緊張感の中、作戦が決まった。

「アメリカへの乗り込みは明日の正午だ。各自、準備をしてくれたまえ」

亡国機業 vs IS 学園

その史上最大の戦いまで、あと少し。

決戦前夜

千冬がIS学園から消えた日の夜。

「すみません山田先生。明日も早いのに」

「大丈夫ですよ。このタイミングで私との模擬戦がしたいってことは、皆さんに知られたくないことがある。…そういう、ことなんですよね?」

「ええ。山田先生にはもう隠しませんけど、そういう事です」

時守はライトに照らされたアリーナにて、真耶とISを展開して向かい合っていた。

「皆さんの士気を下げたしてしまうようなことなんですか?」

「…そうとも思えますし、逆とも言えます。でも、やからこそ山田先生に知っておいてほしいんですよ」

「私に?」

『金色』と『幕は上げられた』

二人の専用機は宙に浮いたまま、ゆったりと微妙に動いていた。

「はい。申し訳ないっすけど、今から俺が出すモンを見てもし皆がシヨックを受けた時、ケアしてほしいんですよ」

「…なるほど。だから私が、それを体感しておかなければならない、と」

「そうなりますね」

「つ、つまりは、試し打ち…と…」

「そ、そうなりますね…」

真耶の顔が少しずつ強ばっていく。

いくら彼女が教師とはいえ、真耶だって時守の正真正銘の全力を向けられると怖い。

言ってしまうえば、『雷轟』の時点でもだいぶ怖い。

涙がこみ上げてくるほどには、怖い。

「でもまあ、安心してください。『雷轟』みたいなえげつないモンとはちやいますから」

「あつ、そうなんですネ」

「ええ。新しく試したいのが2つ3つあるんですけど、そのどれもが、それ自身には大した攻撃力はありません」

「…と言うことは、『完全同調・超過』のようなものが？」

「そつすね」

ちよつとずつではあるが明らかになつていく。

武装なのか、新しい単一仕様能力なのかは分からないが、おおよその形は見える。

「自分で言うのもアレですけど、ちよつとだけ覚悟しといた方がいいかも知れないつす」

「そ、それほど…ですか」

「はい。…前にロジャーにだけ見せたことがあるんですけど、腰抜かしましたもん。前に三次移行を始めて見せた時には、アホみたいに興奮してたのに」

「へ、へえ…。そうなんですネ…」

アホみたいと言われる国連事務総長に呆れながらも、あれほどの人物がそんなにも興奮してしまうと知り、苦笑いを浮かべる。

「やから、山田先生も本気で来ていいつすよ。多分俺が勝ちますし」

「むっ。いくら国連の代表になったとはいえ、驕りはいけませんよ。時守くん」

「国連代表になったからだけやないんすよ。俺自身、三次移行したての時よりかは遥かに強くなりましたから」

軽い言い方で時守に注意を促した真耶だが、その顔色は真剣そのもの。

ごくりと唾を飲み、彼の攻撃に備える。

「ほなそろそろ行きましょか。時間ももつたいないですし」

「はい！いつでも、大丈夫ですからね」

「んじゃ、遠慮なく」

時守の姿が、『金色』ごと光に包まれていく。

『完全同調・超過』を発動するのか、と身構えていた真耶は—

「行こか。『金色』——」

「えっ?」

―普段と同じく、淡い光に包まれる時守の姿が、少しだけ揺らめいていることに気づいた。

◇

「たらいまー」

真耶との軽い模擬戦を終えた時守は、自室へと戻ってきていた。時刻はまだ普段寝るような時間ではないが、明日が明日なのだ。

「んお、どした。お葬式みたいな雰囲気して」

早めに寝ようと思いい、ベッドに向かう。

するとそこには、強ばった顔でベッドに腰掛ける彼女たちがいた。

「剣くんは、怖くないの?」

「え?…あー、そか。俺はそんなにやな。ちっふー先生に勝てたし」

「…わたくし達は、勝てるのでしょいか」

「戦いたい相手とか言っただけど…」

「…勝てるかどうかなんて、分からないし…」

放課後のあの時。

倒したい相手の名は軽く出すことが出来たが、今までの戦いとは少し違う。

文字通り、全戦力を投入する殲滅戦。

もしかしたら自分が敗れ、最悪の場合死んでしまうかもしれないという恐怖を、3人は噛み締めていた。

「…カナは大丈夫なん?」

「ええ、一応。これでも更識家の当主でロシア国家代表ですもの。覚悟は出来てるわ」

「ん。まあアレや、3人とも」

俯く3人の元に歩み寄り、セシリア、シャルロット、簪の順に頭を撫でる。

「最終的にどいつが生き残っても俺がぶっ飛ばすから大丈夫や」

「こ、今回ばかりはそうも言ってられないでしょ!?!」

「そうですね！これまでも剣さんばかりに迷惑をかけてきたのに…」
「こんな大事な戦いで、また足を引つ張るなんて、嫌…！」

殲滅戦ということは、最悪一人がすべて片付けてしまえば済む話。
だが、またいつものように彼に頼るなどということ、3人は考えた
くなかった。

「大丈夫や。助け合って、守り合いながら勝つ。それやったらええや
ろ？」

「…うん」

「で、ですが…」

「…確かに不安はあると思う。けど、相手もおんなじ人間や。やる前
からそんなビビってても、勝てるもんも勝てへんで」

「…：うん。それも、そう…」

3人がそう考えているからこそ、時守もあえて少しだけ厳しい意見
を突きつける。

簪のさらさらの髪の毛を両手で弄る。

「ぶつちやけ、俺がここまで自信満々なんも三次移行やらいっぱいし
てきたからってだけや。それ以外で大した自信なんてあんまない」

「そうなの？」

「ああ。でもただ、本気で倒すからには、その通り本気で戦う。俺らの
実力やったら本気でやり合えば最低限互角にはなるやろ」

「どうしてそこまで言い切れますの？…：今まで、わたくし達はろくに
撃破すら…」

「俺らのISに掛かってる、競技用の制限があるやろ？」

「あつ…：。ってことは、今回の作戦では…」

「ん。みんなそれを解除する」

「当然といえば、当然のことだ。」

今までIS学園側の面々は襲撃される側、つまりは待つ側が多かつ
た。

唯一奇襲を仕掛けた京都での作戦も、民間人への被害を考え、制限
解除をすることはなかったのだ。

「やから正直、俺とかワンサマとかの火力エグいことになるし、今まで

制限アリでそこそこ戦えてたからな」

「…そう、ですわね。ですがそうなる…」

「制限の掛かってない武装を、相手に向けるんだよね…」

「まあそこは、割り切るしかない…って思っ、俺は戦うわ」

「…うん。私も、皆を守るためなら、本気で倒しに行く…」

「その意気よ簪ちゃん。この戦いは今までみたいに相手を退散させた
ら勝ちじゃない。相手を行動不能にしたら勝ち、ですもの」

ISというのは兵器だ、というのが世間一般の認識である。

モンド・グロツソなどの大会のおかげでスポーツとしても馴染んで
きてはいるが、それこそ今ある兵器の中では最強なのだ。

それを、一切の制限無しで人に向けるには、それなりの覚悟がいる。

「やから、ある意味俺の相手がゴーレムで良かったわ。躊躇いなく
ぶっ放せるし。今ここでは言えへんけど、秘策もあるしな」

「秘策って？」

「秘策やから、内緒やわ」

「私たちにも？」

「…どこで聞かれてるか、分からへんしな」

「っ！そう、ね…。油断してたわ…確かに、相手に篠ノ之博士がいるな
ら、聞かれてるかも知らないわね…」

刀奈の表情が、より一層引き締まったものへと変わる。

これから直接戦う相手には、天災がいるのだ。

今自分たちがしている会話を盗み聞きされていてもおかしくはな
い。

「やから今日はよ寝よ」

「うん…」

「そ、その…」

「剣……」

「ん？どした」

早めに寝ようとした時守を、彼と同じく寝巻きに身を包んでいた
シャルロット、セシリア、簪が止めた。

普段五人が寝る時は、時守が中心となり、その両隣はローテーショ

ン。

だが―

「今日は、みんなでくつついて寝たいなって…」

「…了解。そうしよか」

―今日はみんながくつついて寝たいと、シャルロットがほんのりと赤い顔で告げてきた。

もちろんそれを断ることなどできず。いつもは5人並ぶところを、中央の時守に4人が密着して寝ることとなった。

「おいで」

「けーんっ！」

「わ、わたくしもっ！」

「…ふにゃ…」

時守が横になると、左腕の近くにシャルロットが、左脚の近くにセシリアが、そして右脚に、太ももを枕にするかのように簪が寝転んだ。

「ふふっ。ベッドが大きいから、みんながこうしても自分眠れるわね」

「刀奈はどうする？」

「…。卑怯よ、剣くん。このタイミングで、そうやってちゃんと私の名前を呼ぶなんて…」

擦り寄るようにして刀奈が時守の右腕の近くに来る。

押し付けられて形を変える彼女の柔らかい胸の感触を楽しむ間もなく、彼女の顔が目と鼻の先に現れた。

「けーんくんっ」

「えへへ、剣っ」

「うふふ。好きよ、剣くん」

「相変わらずお肌すべすべ…」

「寝れるかぁー！」

右を向けば刀奈が満面の笑みで愛を囁き、左ではシャルロットが頬をつつく。

二人ともとんでもなく時守の体に密着しており、刀奈だけではなくシャルロットの胸の感触…どころか彼女たちの体の柔らかい感触の大半を味わえるほどだった。

「むにや…」

「…ん？右脚なんか冷たいねんけど…」

「あ、多分、簪の寝よだれじゃないかな」

「…まあ、そんなだけ安心してくれてるんやったらええか」

右太ももを枕にしている簪の口から垂れた液体が、時守のパジャマを濡らす。

「セシリーもすごい押し当ててるし…」

左足では、既にセシリアが夢の中へと旅立っていた。

その胸の感触が、これまた良く分かる。

「…あつ。剣くん、もしかして辛い？」

「いやいやいや。流石にアレだけ啖呵切ったあとにするつもりはないし、そもそも今夜で体力使うわけにもいかへんやろ？」

「…否定しないってことは、辛いんだよね？」

「……………はい」

これだけ魅力たっぷりな彼女たち。

そんな彼女たちの凹凸がはつきりしている柔らかい肢体を押し付けられると、どうしても男として反応してしまう部分がある。

「新年になってから、全然シてなかったわよね？」

「俺がちよつと忙しかったしな」

「その間、自分で処理は？」

「…あ、してへんわ」

「発散しておくなら、今のうちよ」

刀奈の吐息が耳にかかる。

彼女たち二人の手も、腕やら上半身を撫で回すように動いていた。

「……………いや。今日は、せん！」

「ふうん。…じゃあシャルロットちゃん」

「はいっ！」

「えっ、ちょ、何？」

しかし、時守とて事の重大さを良く理解している。

いくら自分がしたいからとはいえ、彼女たちの睡眠時間を奪うわけにはいかない。

「剣くんは、戦う前にちゃんとマーキングして、戦ってる時に無茶しすぎないように私たちを思い出してもらおうって思ってたのに…」

「したくないんだったら、僕たちにも考えがあるからね」

そう言っつて、刀奈とシャルロットはその顔を時守の首筋へと近づけた。

「いっばいつけてあ、げ、る」

その瞬間、刀奈とシャルロットが、時守の首に吸い付いた。



「はあく！最近の高校生ってエツロいねえ、ちーちゃん」

「教え子がイチャついてる所を盗み見ている親友を、私はいつたいたいという心境で見ればいいんだ」

「私も彼氏とこういうことしたいくらいって思えばいいんじゃない？」

「おい。…そもそも、今こうしている時点で、無理だろう」

「…：…そうだねえ。名実ともに、世界の大罪人になっちゃうしねえ」

アメリカ、ニューヨーク。

乗っ取った国連IS施設の倉庫の中の一室で、束と千冬は亡国機業の面々と共にモニターを眺めていた。

「それにしても流石だね、剣ちゃん。束さんに盗聴されてる危険性も考えてるなんて」

「なんだ、もういいの？」

「いくら束さんでも女子高生4人が一人の彼氏にキスマークつけてるシーンを眺める趣味は持ってないよー」

「…はあ」

くるりと椅子を回し、千冬に向き直る束。

その顔には笑みが貼り付けられていた。

「愛されてるねー、剣ちゃん。頭も冴えるし、ISの扱いも上手い。こりゃ優良物件だね」

「ああ、そうだな。…私たちが動かなければ、な」

「うんうん。せつかくISの操縦が上手くなったとして、破壊され

ちやつたら意味無いもんねー」

モニターの中では、いつの間にか起きていた二人の女子も混ざり、時守の身体中を弄んでいた。

そのモニターの電源を切り、千冬はより真剣な声色で束に投げかけた。

「束。本当に作戦を実行するとして、だ。最大の敵は誰になる」

「そりやもちろん剣ちゃんでしょ。いっくんと箒ちゃんもいいコンビだよ。何たって、束さんが作り上げた対になるISだもん」

そう言い切った束。

この時も笑顔だったが、それが少しだけ真面目なものに変わる。

「…ただ、剣ちゃんは未知数なんだ。成長速度もとんでもないし、途中からは多分何かを隠してる。ちーちゃんにも、もちろんISのネットワークにも」

「待て。…そんな事が出来るのか?」

「剣ちゃんのIS忘れたの?他のISの内部データを書き換えられるISなんだから、盗まれたくない情報を隠すぐらい簡単だよ?…束さんでも見れないようにしてあるのは、ビックリだけど」

束が今回の作戦遂行にあたり最大の敵だと認知しているのは、時守。

制限無しの火力で考えると文字通り世界一のものとなる一夏や、単一仕様能力が発動すればいくらでも戦える筈ではなく、時守なのだ。「だから、ある意味で一番怖いよ。何を持ってるか、さらにどれだけ成長してるかも分からない」

「…:だが、いくら時守でもお前には勝てんだろう」

「…うん。だとは思っけどね。あの2つがある限り、束さん…いや、こっちの陣営が負けることはないよ」

束が見やる、一つの小さな機械。

形が様々なISの待機状態を中に入れるためのケースが数個並んでいる。

もう一つは、彼女が首にかけているネックレス。

その二つの機械こそ、稀代の天災、束の自信作だ。

「ねえちーちゃん。そろそろ暮桜に乗らなくていいの？」

「ここに来てからもう散々乗った。扱いにも慣れてきたしな」

「そっかそっか。でも、まだまだ慣れるに越したことはないよ」

「ああ、それは分かっている」

「ならよし。：暇だし、剣ちゃんの様子でも見てよっか」

「おい束っ！」

パシッ、と一瞬で千冬の手握られていたりモコンを奪い、モニターの電源をつける束。

そこには――

「…あ、あー…。がつつり…」

「…お前、時守の標的にされても知らんからな」

「いやいや。これは不可抗力だよ？ていうかちーちゃん。教師として怒らなくていいの？」

「何がだ。…アイツらのこれは、しょうがないものだろう。学園内では生徒会長の権限の方が強いからな」

「わあく。まるで独裁政権だあ」

――仰向けの時守の腰に跨り、何やら楽しんでいる全裸の女子の姿が。

背中を向けているため誰かは特定できないが、その髪の色と髪型からフランスの代表候補生であることは何となく分かった。

「…束さんも、戦う前に自家発電してこよっかな」

「…処女をこじらせたまま、24の私たちは戦うのか…」

「ちよつとちよつとちーちゃん。そのセリフ割と心に来るからやめて？」

「そんなことを言うならこんな作戦などやめてしまえ！」

「それとこれとは話が別だよ！」

やや赤い顔のまま繰り広げられる二人の残念美人の会話。

モニターを見て顔を赤くする辺り、二人共かなりのピュアさである。

「ちーちゃん、男の人の裸見たことないでしょ？いっくんのはもちろん無しとして」

「……ある」

「ええっ!?あのちーちゃんが!?!」

「……………夏に爆睡していた時守の布団を剥いたら、全裸だった…」

「……………お、おう…」

まさかまさかの親友が初めて男性の全裸を見たのが、これから戦う相手。

さらに言ってしまうば、彼女の弟子。

しかも、不慮の事故。

とことん不憫な千冬だった。

「へいっ!じゃあちーちゃんも一発スッキリしてから戦いに挑もうではないか!」

「会話がさつきから下品すぎるわ馬鹿者!」

「うぎやああああっ!」

千冬の神速のアイアンクローが炸裂する。

そこには、普通の仲のいい二人の女性のじゃれ合いがあった。

いざアメリカへ

「にへへ…」

「…はあ。結局みんなとがつつりしてもたやん」

アメリカへと飛び立つ予定の朝。

時守は自室のベッドで彼女たちに囲まれて目を覚ました。

「…まあでもやっぱ、無茶はあかな。将来は俺だけの身体やないやろし」

「んう…」

喉、首筋、胸など、時守の身体には大量にキスマークが付けられている。

それだけ、否それ以上彼女たちに大事に思われていることを再確認する。

「使うしかしか、ないか。アレを」

「…：アレって？」

「いつ!?か、刀奈…起きてたんか」

「うん。…ねえ剣くん。アレって、何？私たちに隠さないといけないことなの？」

「…刀奈たちには隠さんでもええねんけど、やっぱり聞かれてるかもしれへんしな」

「…じゃあ、皆が起きたときに筆談だったら大丈夫でしょ？」

「あ。せやな」

そんなトークをしていると、刀奈が頬にキスを落として立ち上がった。

「コーヒ―淹れるわね」

「ん、ありがとう」

「いいのよ。その状態じゃ、剣くん起き上がれないでしょ？」

身に何も纏っていない彼女のその姿に少し見惚れながら、仰向けになる自分の身体を見る。

右腕はがっちりシャルロットに抱きしめられ、左脚はセシリア、

右脚には簪が枕のように使い寝ている。

彼女たちも疲れたのか、ゆつくりと寝息を立てている。

「あー…やっぱ、皆クソ可愛いなおい」

見れば見るほど愛おしく、そして自分が愛されているのだと自覚する。

だからこそ無事でいなければならないし、だからこそ彼女たちも守りたい。

「……俺にはどっかの誰かさんみたいに皆を守るなんて綺麗事言えへんしな」

「いいと思うわ、それで。手の届く範囲のもの全てを守るために動く。人間って、得てしてそういうものじゃないかしら」

「刀奈…」

二つのマグカップを持ってきた刀奈が、ベッドの側のスペースにそれを置く。

バスローブの隙間から見える健康的な白い肌に見蕩れそうになりつつ、会話を続ける。

「その言葉は、確かに理想よ。守るために戦う人の究極系でもあるわ。でも、その理想が時には他人を傷つけることもある」

「まあ、せやろな。……でもなあ」

「やっぱり、織斑先生がどういう理由で離れたのか気になる？」

「……そりや、な」

つい先日まで自分の師であり、向こうは専用機ではないというハンデでようやく追い越せた人。

その人が、なぜこんな裏切り方をしたのか。

それが時守が気になっていることだった。

「何となく察しはついてんねん。あの人の事や。意地でもそれは曲げへんし、自分の中でそれが正しいと思ってはる」

「そうね。私もきつとそうだと思うわ」

シャルロットが抱きしめている右腕をすりと抜いて上体を起こす。

刀奈が淹れてくれたコーヒーを口に含むと、程よい苦味が口を覆っ

た。

「それがホンマに正しいことになるんか、ならんのか。そんなん分かんらん」

「なら聞き出すしかないわね」

「…せやな。なんで亡国なんか、何がしたいんか。…なんでそれをしようと思っただんか。聞きたいことは山ほどあるわ」

もう1度カップを煽り、飲み干す。

彼の手の中からコーヒーが無くなったのを確認した刀奈が、頭を彼の肩に乗せた。

「…それでも、全部背負わないで」

「…ああ」

「私もシャルロットちゃんも簪ちゃんもセシリアちゃんも、確実に強くなつたわ。…だから、剣くんだけが背負わないでね?」

「ん。頼らせてもらうわ、刀奈」

「…お姉ちゃん、だけ?」

「そうですね…。わたくしたちも、ふわあ…」

「頑張ったんだよ…?」

「もちろん、皆もや」

いつの間にか起こしてしまっていたのだろう。

しがみついていた彼女たちが眠い目を擦りながらその身体を起ここしていた。

「さて、ほなそろそろちゃんと起きよか」

「そうね。おはよう、剣くん」

「今更かいな。おはよ皆」

決戦まで、あと少し。



「……」

「……」

「ふわあ……。ねっむ」

「あ、あのお……」

「ん、どうした山田教諭。何か問題でも起きたかね？」

「い、いえー！」

時刻は、日本時間で昼過ぎ。

場所は太平洋上空。

ロジャーが用意した機体は自動操縦のまま、アメリカのニューヨークを目指していた。

「時守くんのアレって……」

「ん？ああ、見せたのか時守くん」

「ちよつとだけっすけどねー。ま、勝てる勝てる」

「なんでアンタはそんな樂觀的なのよ……」

「これから戦いに行くってのに……」

一人大欠伸をした後、余裕綽々といった様子でロジャーと会話をする時守。

そんな彼を見て諫めるように鈴と一夏が口を開いた。

「だって事実やからな」

「っ……だから、その自信はどこから来てるんだよ！」

「ん？」

「皆不安なんだ！もしかしたら、死ぬかもしれない。そんな戦いなんだぞー！」

「そりやせやろ。今回の戦いはそういうもんや」

「分かってるんならー」

「でもな、やからって俺が負けへんのは俺が一番良く分かってる」

あまりにも傲慢なその言葉。

確かに今まで幾多の襲撃を退けてきた時守の強さは凄い。

だが、それとこれとは話が別だ。

「なんでそこまでして言いきれるんだよ」

「……ここやったなら、大丈夫か。言ってもええか？」

ロジャーに目配せをし、この機体に盗聴器が仕掛けられていないかどうかを確認する時守。

頷くことで返された時守は、乗り合わせた専用機持ちたちに告げる

ように言った。

「第三形態なんてとづくに過ぎてんねん、俺の機体」

「……え？」

「前から模擬戦とかで戦ったんは四次移行した機体や。それを『金色』やと誤魔化しながら戦ってた」

「い、いつから…。ていうか、どうやって？」

「修学旅行終わってちよつとしてからやな。自主練の途中にいきなりなってる。誤魔化してたんは新しい単一仕様能力のお陰や」

淡々と並べられるその言葉に、専用機持ち達はぽかんと口を開けるしかなかった。

四次移行

フォースシフト

まだ数人しか二次移行出来ておらず、一夏もついでこの前三次移行したばかり。

それをさらに一段階超えていたのだ。

「俺と金ちゃんの相性がいいってのもあるけどな」

「それなら、早く…」

「向こうに聞かれてる可能性があるって言うたやろ？……まあ、ぶっちゃけそれだけやないねんけどな」

「何よ、また新しい単一仕様能力でも出たの？」

「ま、そんなとこや」

鈴の言葉に適当に返す。

もしその言葉が本当ならば、IS学園側にとってこれ以上ない補強となる。

「第四、形態ですの…？」

「おう。でも、今回は皆の前では見せたないけどな」

「…なぜだ？」

「私たちの前で見せる時は、剣くんが助けに来てくれた時。つまり、私たちがピンチの時よ」

「そゆことそゆこと」

「…つまり、その師匠が私たちの元に来た時は、作戦通り上手くいかず、何かしらの問題が起きてしまった時…か」

「せやな」

箒の疑問に楯無が答え、ラウラの説明に時守が肯定の意を示す。

「なあ剣。ホントに、強いんだよな？」

「当たり前やろ。俺と金ちやんの第四形態やぞ。今のお前と『白式・王理』と戦つても5秒で沈めれるわ」

「ははっ、そりや頼もしいな」

去年の年末に三次移行した一夏の専用機、正式名称は白式・第三形態『王理』

新たな単一仕様能力として『雪羅』がエネルギー無効化防御『霞衣』とIS初期化アビリティ『夕風灯夜』に変化したのだ。

「新しく出たモン自体はビミョいけど、他のと組み合わせたらそら凶悪よ」

「どれくらい？」

「どれくらいって……布団の中にゴキブリのオモチャ仕掛けるぐらいにはな」

「アンター！それまだ忘れてわけじゃないわよ！」

以前何かしらのイタズラで鈴の布団の中にゴキブリのオモチャを仕込んだ時守。

その事を思い出したのか、鈴が顔を赤くしながら怒鳴った。

「ええやんけ。今は関係ないやろ？」

「なんで被害者のアタシが悪いみたいな言い方を……！」

「勝って帰ってきたら、またやったるわ」

「ふざけんなあああつ!!」

時守の言葉に発狂した鈴を咎める者は誰もいなかった。

「さて諸君、もうじき着陸する。…準備は出来ているね？」

「準備もクソもあるかいな。ただ乗り込んでぶっ潰す、それだけやろ？」

「間違つてはいない。だが、これだけは約束してくれ」

アメリカが近づいているということを伝えたロジャーの顔は、真剣そのものだった。

「全員、無事に帰ってきなさい。成り行き上指揮官になっている私か

ら言えるのはそれだけだ」

「…りよーかい」

そんなロジャーの忠告を、時守は一人少し不満げに聞き入れた。

◇ ◇

「こ、ここが…アメリカ…」

「つつてもちっこい空港やけどな」

「でもなんか、初めての国って緊張するよな」

「そう考えたら僕達ってIS学園に入学してから色々な国に行ってるね」

「その度に襲撃されていますわね。お陰で、ろくに観光も楽しめていませんわ」

「IS学園の危機管理ってどうなってるの？」

「流石にそれは生徒会の職務外よ。文句なら、織斑先生に言って頂戴」

「…よし。じゃあみんなで、ボコボコにしよう」

「教官をか」

「誰かは関係ない。私も、姉さんを半殺しにする覚悟はできている」「君たちいつもこんな殺伐してるのか!？」

時刻は時差や機体速度の都合でズレ、現在朝の11時。

国際連合のIS施設の近くにある小さな小さな離着陸場。

ロジャーが用意していた飛行機から降りた専用機持ちたちは、これでもかと毒を吐いていた。

「まあそりゃ闘いに行くってなったら多少気は荒くなるやろ」

「それもそうなんだろうが…。戦う気がないよりは頼りになる…のか…?」

「なるやろ」

先導するロジャーとその隣を歩く時守。

専用機持ちが後ろにつく形で出口を目指す彼らの目には、闘志の炎が灯っていた。

「山田先生は?」

「彼女はこの離着陸場に待機してもらおう予定だ。何かあった時に駆けつけられない人間がいないと、少々まずいのでな」

「…てか冷静に考えて、国連のIS部隊が制圧されてることの方がやばいけどな」

「そ、それは…」

「まあ、今役に立たん人間のこと言うてもしやあないわ。またいつか、俺が死ぬほど鍛え上げたるからな」

そもそも原因である、乗っ取られてしまった国連のIS施設。

そこに常駐しているIS部隊が専用機持ち程の強さはないが連携で相手を拘束するのに長けていたことは時守の記憶にもある。

「お手柔らかに、な」

「お断りや。お手柔らかにして国際連合がズタボロにされてもええんやったら手え抜いたるけど」

「…厳しく頼むよ」

「うーい」

表舞台の仕事は時守が。

そして、裏で地道に国連を守るのはIS部隊が担当している。

そしてその力関係は、時守に圧倒的に分がある。

だからこそ言える言葉だった。

「これからどないすんの？」

「徒歩で向かう。何、1時間もかからん場所にある。下手に探られるよりは歩いた方がいいだろう」

「んじやその途中でメシでも食うか」

「だな」

「えつと…ロジャー、さん？その、敵の近くに来たんですし、警戒とかは…」

「しなくていいだろう、嫁」

あまりにも気の抜けた会話をする時守とロジャーを見て、一夏が口を挟んだ。

しかしそれに即答する形で、ラウラが言葉を重ねた。

「向こうは教官を拉致…というか迎え入れて待ち伏せている。明らか

に私たちを誘って、国連の施設にアジトまで作ってな。そして、その責任者である事務総長がIS学園に行くのを見逃しているんだ」

「…ほうほう」

「つまり向こうは、完全にその施設での戦闘を待っているということだ。下手に市街に出るよりもそうした方が自分たちのペースに持っていきやすい」

「さらに言えば、こうして市街地で奇襲してる側って訳でもないのに襲ってくるのは自分たちの実力に自信が無いって言ってるのと同様と同じ。織斑先生、篠ノ之博士、そして国家代表のアリーシャが集まったプライドの高い向こうは、そんな方法取ってこないのよ」

「へえー」

「絶対分かってないでしょ、アンタ」

話を右から左に聞き流しながらボケーッと歩く一夏。

何はともあれ、敵に接近するまでは戦闘の心配はないということだけ分かったのだから、それで良かったのだ。

「よし。じゃあここは景気づけに、私が奢ろう」

「お、ロジャー。あつここにクソ高いビルあるからアレの最上階行こや」

「あれはビルじゃない。三ツ星貰ってるホテルだ。……というか、前に一度撮影で行ったことあるだろう?」

「おう。そんな時のご飯美味しかったから」

「君は私を破産させるつもりか」

「そんなんで破産するぐらいのヤワなお財布ちやうやろ?」

そう話しながら歩く。

ロジャーが足を向けたのは、大衆向けのハンバーガーショップだった。

「しよっぱ」

「キミだけ自腹でもいいんだぞ?」

「あ、やっぱここがええわ」

熱い手のひら返しに苦笑いしながら、一同はそこへと入っていった。



「ううう」

「……はあ。本音、そろそろ落ち着きなさい」

「だ、だつてえ」

「見送りはしたでしょう？それに、お嬢様も剣くんもいるのよ。大丈夫だから」

「……うう」

日本、IS学園。

すっかり辺りは暗くなった寮の虚の部屋で、その部屋の主と妹の本音は少し団欒をしていた。

「でも、今回は、その……本気の戦いなんですよ？」

「今回どころか、これまでもよ。今まで奇襲される側だったのが、する側が変わったの」

「それって危険なの？」

「……いえ。ただ言えるのは、相手は逃げ場がないということよ」

「そうなの？」

自分の主人でもある簪だけでなく、多くのクラスメイトたちが今回の戦争めいた物に参戦するとあって、本音は気が気ではないのだ。

それを、姉である虚が何とか落ち着かせようとしていた。

「亡国機業はアメリカにアジトを作ってるの。ということは、そこからみすみす逃げ出す訳にはいかない。しかも、メンツがメンツよ」

「あゝ。…強そうな人多いもんね」

「アジトにおびき寄せ、最高の戦力で戦い、尻尾を巻いて逃げる。そんなことプライドが許さないとはいけませんもの」

「なるほどー。だからけんけんは、いざとなったら自分がぶっ壊すつて言つてたのか」

「…え？ほ、本音…今、なんて？」

「ん〜？」

突如として本音の口から飛び出た物騒な言葉。

それに虚は思わず聞き返してしまった。

「けんけんがね、やばくなったら全員退散させてアジトを爆破するって言ってたんだあ〜」

「そ、そんなの、雷轟で出来るの…?」

「なんか、雷轟じゃないって言ってたよ?」

「え?…っていうことは、言っていないだけで新しい力が出たってこと?」

「多分そうじゃないかな〜」

意外と聡い本音と素で聡い虚。

二人が導き出した結論は、時守がさらに強くなったということだった。

「でも、けんけんもおかしいよねえ〜」

「いつもおかしいけど…どうしたの?」

「だって、私にはみんな連れて帰ってくるって言ったんだよお?それって、織斑先生もってことなんじゃないの?」

「そう、だったらいいけど…」

更識楯無のメイドであり、彼らが留守の間生徒会を任せる人間として、虚にはことの真実が伝えられている。

もし本当に千冬が自分の意思でIS学園を去り、亡国機業としての活動をするのなら、戻ってきたところで彼女に居場所はないだろうと、そう虚は考えていた。

「でもそういうことも、さっきお姉ちゃんが言った通りだよね」

「え?」

「おじようさまとかんちゃん、けんけんにおりむー、モツピーにらうらう、しゃるんにせっしー、りんりんまでいるんだよ?」

「…ああ、専用機持ちのみんなね」

本音の独特なニックネームのオンパレードにより、一瞬誰のことを言っているのか良く分からなくなった虚。

モツピーの所で把握し、一人ひとり名前を確認した。

「みんながいれば、大丈夫だよ。織斑先生もきつと、戻ってくるよ」

「…ふふ。そうね」

笑みを浮かべた虚につられ、本音もまた笑うのだった。

原作13巻 対亡国機業編
開幕一番

「てなわけで作ってきました。元俺の職場で現亡国機業のアジト」

「どういう訳だよ。まあ、腹ごしらえはしたけどさ」

「こ、この前来た施設も大きかったけど…」

「これが…倉庫…？」

「ISに関するモンを保管してるからな。それなりのサイズやないとあかんみたいやわ」

専用機持ち9人が見上げる大きな大きな建物。

コストコのめつちやデカイ版、と時守から事前に聞いていたが、予想以上の大きさに文字通り度肝を抜かれた。

「こん中やったら存分に戦えるわな。室内アリーナも何個もできるぐらいの大きさやし」

「……この中に、千冬姉たちがいるんだよな」

「そうらしいな」

時守に続き楯無、その後ろに箒、シャルロット、鈴、ラウラ。ほんの少し離れて一夏、簪、セシリアが、倉庫前の門をくぐっていく。

指揮官となっていたロジャーは近くのホテルの一室を貸し切り、そこで非常事態の指揮を行うことになっている。

「俺たちだけで、か」

「ああ。いくらロジャーが冴えるとは言え、ISを使えへん限り足手まといや。外から見てなんかやばい事があつたら俺に連絡くるけどな」

「分かった。……じゃあホントに、俺たちだけの戦いってことだな」

「ISでバトルやつって考えたらなー」

ひゆう、と冷たい風が9人の間をすり抜ける。

かなり高機能の保護機能を備え持っているISスーツを着用しているが、それでも素肌の部分にはそれなりに寒さを感じる。

「ねえ剣。アンタせこくない？」

「ん？なにが」

「そんな国連代表のウインドブレーカーなんて着ちゃってさ」

「そりゃここの代表やねんから着なあかんやろ」

だがその中でも時守だけは特別で。

国際連合旗のマークが胸元に小さく描かれた白いウインドブレーカーの上下を羽織っており、それほど寒くはしていない。

「任せろ。最終兵器や」

「あはは…。頼りになりそうだけど、ちよつと怖いかな…」

「なんでや」

「忘れましたの？今までなさってきたこと」

「怪我、骨折、心臓停止、自我の崩壊……。まだあるでしょ？」

「うん。俺が悪いわ」

ぐうの音も出ない程のやらかしっぷりに、流石の時守も黙らざるを得なかった。

「今回こそは無傷で帰りたいなあ…」

「無事に家に帰るまでが遠征よ？」

「大丈夫やて」

堂々としながら突き進む時守の後ろにつく面々の足幅が、少しずつ狭くなっている。

「……いよいよ、ね」

分かっているのだ。

今まで自分たちが交わっていた会話は、決して余裕の現れではない。

亡国機業、束や千冬たちと戦うことを紛らわせたいという一心で、恐怖を忘れたいがために行っていたことだと。

「ビビってる場合ちやうで」

「ええ。…大丈夫よ」

すでに門から倉庫の入り口までの距離は詰められ、9人は重厚な倉庫の扉の前に辿り着いていた。

「物陰の待ち伏せも、扉を急に開けての強襲も無し。本格的にこん中

での戦いを望んでるんか」

右手をそつと扉に当てる。

背後から8人の緊張を感じながら、時守はその手に力を込めた。

「開けるぞ」

ゴウン、と重々しい音を立てて少しずつ人の出入り口の扉が開いていく。

「おいしよと」

扉が全て開かれると中は暗く、何も見えなかった。

「なんや。何もなーッ！」

何もないと思い、一人中に踏み込んだ時守。

ISを展開はせずに起動だけしていた彼の視界に、大量のロックオンカーソルが現れた。

「誰や」

咄嗟に『金色』を展開する。

その光景を見て、8人も戦闘態勢を取りながら少しばかり後ずさつた。

「初めの相手が貴様とは、私も運がいい」

「ああ？」

「なあ……国連代表よっ！」

暗闇から凄まじい加速で一気に突撃してくる機体。

それを『オールラウンド』で受け止め、弾き飛ばす。

「お前か」

「私だけではない。お前の大好きなゴーレム……いや、前のものよりもバージョンアップしたゴーレムⅣが相手だ」

『オールラウンド』と『フェンリル・ブロウ』がぶつかり合っただけで火花の光で確認できた顔は、ある意味馴染み深いものだった。

「さあ、私たちの前に沈め。時守剣！」

「師匠っ！」

「剣っ！」

本来、スコールとエムのペアで来た時に対処する予定だったラウラとシャルロットが飛び出しかける。

しかし、時守はそれに待ったをかけた。

「シャル、ラウラ。ここは任せろ。先行け」

「しかし！」

「ええから。すぐ追いつくわ」

「……分かった。行こう、ラウラ！皆も！」

彼が放った任せろ、という言葉。

普段よりも強く意味が込められたそれを、シャルロットはしっかりと受け取った。

「行かせると、思うか？」

エムの指示で、多数のゴーレムⅣ達が奥へと駆けていこうとする8人へと迫る。

しかし――

「お前がどうしようと、俺が行かせると言うてるやろボケ」

――その全ての行方を、時守は8本のランページテールで全て防いだ。

「チツ……。だが、これでいい。あんな雑魚共よりも、私はお前を叩き潰したいんだからな。国連代表」

「そうか」

「だから……早く第四形態を展開しろ！時守剣！」

8人がいなくなり、この場には時守とエム、そしてゴーレムⅣ達だけ。

そんな中で、エムが叫んだ。

「……なんや。結局知られとったんか」

「私達を舐めるなよ？」

「掴んだんはお前からちやうやろ。どうせたーちゃんとかちやうか？」

時守のその言葉に、またもエムが舌打ちをする。

東がISネットワークを駆使し、『金色』がさらなるパワーアップを遂げたことを掴んだ亡国機業。

しかし、パワーアップしたという事実だけ。

「そんなに見たいなら見せたるわ」

「くっ……！」

時守の纏う『金色』が光り輝き、全体を包んでいく。

「これが俺らの四次移行した姿、『金色夜叉姫』や」

その機体から、まるで八岐大蛇のようだったランページテールは無くなり。

その代わりに、『オールラウンド』が両手に一本ずつ握られていた。

「フ、フハハ……まさか、本当にしているとはな」

「信じてへんかったんかい」

「そりゃあ、信じられるはずがないだろう。今まで、正攻法で二次移行すらも出来ていない者が大半の中、一人だけ四次移行だからな」

「……せやな」

全く無音でのホバリングという常人離れした技をしながら向かい合う両者。

「だが、その貴様を倒し、私は今度こそ……！」

「やかましいわ。来るなら、はよ来い」

「はあッ！」

二人の戦いは唐突に始まった。

大剣『フェンリル・ブロウ』を振りかざして二重瞬時加速で時守の眼前に迫るエム。

「遅い」

振り下ろされた大剣を、時守は左手に持った『オールラウンド』で止める。

『ラグナロク』

「ぐお……ッ！」

そしてすぐさま、ガラ空きの脇腹目掛けて右手の『オールラウンド』を振るう。

身体をくの字に曲げられたエムの身体が吹き飛ぶ。

「次はお前ら、か……」

エムへの追撃へ向けて飛ばうとした所、まるで覆いかぶさるようにゴーレムIV達が囲ってきた。

「鬱陶しいわ」

そのゴーレム達に向け、全身の装甲の隙間から『雷轟』を放つ。

『金色夜叉姫』は『金色』に比べ、攻撃重視となっている。

唯一の守りはスカートだけ、と言っても過言ではない。

「……興奮めやな。このままなら」

「クソがッ！」

だが、だからこそ単純に強い。

時守本来の闘争心の強さに比例するかのような高い攻撃性能。

『雷動』

「なっ……！」

『刺し穿つ死棘の槍』

「ガアアアアッ！」

一瞬で詰め寄り確実にS Eを削り取る戦法が、時守と『金色夜叉姫』の特性に適合していた。

「ようそんなんで俺を倒すとか言うたなお前」

「ふ、ふふ……。誰が、これが本気だと言った？」

地に伏し、立ち上がるうとするマドカ。

彼女の身体が『黒騎士』ごと怪しく光に包まれた。

「黒騎士第二形態、『黒狼』だ。勝負はここからだ！」

「へえ……」

大きな返しの連続刃が特徴的になった大剣『フェンリル・ブロウ・II』と三対に増えた『ランサービット』

時守の四次移行と同じくより攻撃的になった機体が時守へと襲いかかる。

「こりゃあ確かに、進化しとるわ」

「無駄口を叩けるのも今のうちだ！」

上下左右から瞬時に叩き込まれ、密接した少しの隙間から狙い済まされたかのように飛んでくるビットの猛攻。

しかしその全てを、時守は先が見えているかのように避けていく。

「でも、まだ足りひんな」

「ガッ……！」

時守へ何度も迫り、痛手を負わそうとしていたエム。

そんな彼女の行動を奪うかのように、時守は瞬時加速で近づいてき

たエムの鳩尾目掛けて蹴りを食らわせた。

「たかが二次移行如きで、俺を倒せると思ってたのか」

「はあ…、はあ…！私は、強くなったんだ…！」

「ちやうな。お前の機体の性能がほんのちよつと上がっただけや。お前自体はなんも成長しとらんわ」

「…：まれ…！」

「それにな、お前」

「黙れエエツ！」

普通ならば蹲り、嘔吐してもおかしくない程の衝撃。

それを怒りで強引に忘れ、更に強い殺意を持って時守へと突撃する。

「誰も俺が―」

「オオオオオツ!!」

逆上したエムに今の時守の言葉は簡単に届かず。

とある裏技を使い、確実に強くなれたはずの自分を完膚なきまでに叩きのめされるということが、エムには耐えきれなかった。

そんな彼女に対し、時守は―

「四次移行程度で終わったとは言ってへんぞ」

「…：な、に…？」

―逆上した彼女を冷静にさせるほどの言葉を持って、彼女の思考を止めた。

「さつきからほんまにちよつとだけ強なった二次移行でイキってたけど、その時点でお前はもう終わつとるわ」

「嘘、だ…：。そんな、ことが…」

「まあ、さらなる形態変化なんか、新しい単一仕様能力なんか、新しい武装なんかは言わんとくわ」

圧倒的な差を付けられているということを知らされ絶望しているエムに対し、時守は不敵に笑った。

「お前の目で確かめてみる」

戦意を失いつつあるエムに、時守は瞬時加速で迫った。



「剣、大丈夫かな……」

「振り返るなシャルロット。師匠も、先を私たちに託したのだ。私たちが師匠を信じないでどうする」

「……うん。そうだよねっ！」

薄暗い倉庫の中を進む8人。

巨大なコンテナの隙間を縫うようにして、とにかく奥へと進んでいく。

「剣なら、大丈夫」

「そうなのサ。アレでも一応、国連代表。それなりにはやるのサ」

「そうですね。剣さんが負ける、は、ず……ッ!?!」

まとまって走る8人の頭上から投げかけられた、語尾が独特なカタコトになる日本語。

セシリアとシャルロットが顔を上げようとした瞬間、楯無が既に飛び出していた。

「行きなさい。ここは、私が止めるわ」

「その通り。今の私は、弱い子達には興味は無いのサ」

「あら。言ってくれるじゃない」

接近した楯無が、アリーシヤに蒼流旋を突き立てる。

ガギン、という重々しい音と共に、アリーシヤの顔が歪んだ。

「事実なのサ。織斑千冬と本気で戦えると思ってたら、戦えない。拳げ句の果てには、剣ちゃんすらもない。……お前に楽しませてもらうしかないのサ、更識楯無ッ！」

「行きなさい、早く！」

「うんっ！」

楯無の叫びを聞き、真っ先に動いたのは簪だった。

姉からの指示と言うだけでなく、この場は楯無に任せるのが最善だと、簪自信が判断したのだ。

「いいの!?!簪！」

「いい……っ！あそこに、私たちがいたら邪魔にしかない！」

「そんなこと分かるのか!？」

「二人とも、単一仕様能力が範囲攻撃になってるから……。国家代表の1：1に巻き込まれてもいいなら、戻ってもいいと思う」

「っ……いや、そうだな。簪の言う通りだ。すまん」

鈴と箒の問いに少しばかり冷たく答えながら走る簪。

楯無の『沈む床』とアリーシャの『疾駆する嵐』は両方とも広範囲に影響を及ぼす単一仕様能力である。

時守の『雷轟』や一夏の『零落白夜』のように狙いを絞ることが難しく、近くに味方がいることで楯無の動きが鈍くなる、と判断したのだ。

「……ごめんなさい、簪ちゃん」

「どうしたのサ、そんな顔して。今から面白くなるっつのに」

「うるさいわアリーイ。……いえ、亡国機業のアリーシャ・ジョセスターフ。あなたさつき、剣くんと戦えなくて残念そうにしてたわね」

「そりやそうサ。お世辞じゃなく、IS学園最強は更識楯無ではなく時守剣。こんなの、国家代表ならみんなが分かってることなのサ」

「……ええ、そうね。もし本当に私がこのままで、剣くんが言っただけだとが本当ならそうでしょう」

俯きながら、うつすらを笑みを浮かべる楯無。

そこには一切の自虐も、余裕も、油断も無く。

ただ単に、更識楯無がいた。

「当然よ、それは。だって剣くんは、世界最強を下した国連代表ですもの。……でもね、私もただその剣くんといちゃいちゃしてただけじゃないわ」

「ホウ?ということは、ちゃんと代表としてもふさわしく成長している、と」

「そうかもしれないわね。それはちゃんと、貴女が肌で感じなさい。アリーシャ・ジョセスターフッ！」

怒号と共に突撃する楯無を、アリーシャは獰猛な笑みを浮かべながら迎え入れる。

それと時を同じくして。

「ガ、か…は、あ……ッ！」

「おーい、なんや。どしてん。まだ5分も経つとらんぞ？」

「だ、まれ…ッ！」

二次形態移行を果たした『黒狼』の装甲はほぼ半壊し、スラスタ―に至っては一基しか残っていない。

短時間でそれほどまでに打ちのめされたマドカは、満身創痍で立ち上がろうとしていた。

「お前…その姿は、なんなんだ…ッ！五次移行、なのか…？」

「敵にわざわざ情報を喋るほど、俺はアホやない」

ゆらゆらと揺らめく金色のオーラを纏い、時守は金属に包まれた右手を動かす。

「ただ言えるのは、これは俺のISやってことや」

「舐めたことを…」

「なら早く立ってや。初戦の相手がこんなやつたら、ほんまに残念すぎるわ」

「こ、のお…！」

歯を食いしばりながら、やっとの思いで立ち上がる。

「はああアッ！」

瞬時加速で時守へと接近し、何とか一撃を喰らわせようと試みるマドカ。

しかし。

「グッ!？」

「これで何回目やねん。そうやっておんなじ手で攻めてきてカウンター食らうん」

呆れた顔を浮かべる時守には届かず、手が届く目前で見えない衝撃が頭を襲い、吹き飛ばされる。

「ちゃんと脳みそ付いてるんやったら、考えて行動せえや」

「クソがあああッ！」

先ほどからこの謎の衝撃により、マドカの攻撃はとことん邪魔をさ

れ、ダメージを負わされるといふ形で防がれている。

これがまだ正体がハッキリとしている攻撃ならばいい。それならばマドカもここまで理性を失ってははいない。

「グウツ、カツは、あ……」

だが、全く正体が分からないのだ。

いつ、どこから、何が来るのか分からない。

相手の情報が少しだけだが分かるディスプレイも、何の変化も示していない。

目の前の相手は動かず、単一仕様能力も発動していない。なのに吹き飛ばされる。

「ゴ……あ、ああ……」

「どうした。もう終わりか？」

装甲を纏った時守の左手がマドカの頭を掴みあげる。

力なく四肢をぶらりと下げ、弱々しい瞳で時守を見る。

「ぎ、さま……！」

「残念やな。俺に「泡吹かせたいと思うんやつたら……ッ！」

マドカの頭を掴んでいた左手が離され、重力に従って彼女の身体が落ちていく。

「この圧倒的な力の差を、少しは埋めてからかかってこいや」

一閃。

叫び声すらも挙げられない程の強烈な蹴りが、雷を纏ってマドカの鳩尾に突き刺さった。

弾丸のように吹き飛ばされ、壁に受け止められるマドカ。大きなクレーターが出来たそこに、彼女は意識なく横たわった。

「さてと。……行くか」

マドカと同じく、漏電した電気を時折破損した部分に走らせながら停止するゴーレムIV達を見渡す。

少し。ほんの少しだけ本気を出した結果がこれだった。

「待ってろや、あのアホ二人……ッ！」

固く拳を握りしめ、ぐつたりと倒れるマドカを一瞬見たあと、オイルが撒き散らされた床を走り出した。

削り、削られ

「……ッ！」

「ハッ！」

「くっ、この……ッ！」

ギイン、ガンッ！と硬い音が響く。

アリーシャ・ジョセスターフと楯無の戦いは、互いに譲らぬ一進一退の攻防、という表現がこれ以上に似合う表現が見つからない程に合っていた。

「…厄介ね、『疾駆する嵐』。まともに責められないわ」

「そっちの『沈む床』の方が万倍鬱陶しいのサ。……認めるよ、更識楯無。キミは十分に国家代表として強い」

「あら嬉しい。褒めても何も出ないわよ？」

「それぐらい、知ってるのサ！」

風で作られたアリーシャの分身が楯無に向かって突っ込む。

アリーシャ・ジョセスターフとテンペスタの単一仕様能力、『疾駆する嵐』は、超高速回転している風で自身の分身を作るものだ。

自分の防御に使うもよし、今回のようにそれ自身を弾丸として相手に放つてもいい。

「学ばないわね」

しかしそれが、楯無に届く前にエネルギーを残して霧散する。

「私の単一仕様能力、『沈む床』は貴女のそれとは私にとつて相性が良すぎるわ。話にならないと言つてもいいぐらいにはね」

「分かってるのサ。でもそれは、そっちも同じだろう？」

風を操る単一仕様能力と相対するのは、超広範囲指定型空間拘束結界の『沈む床』。

ラウラのA I Cを遥かに超える拘束力を誇るそれは、アリーシャの風すらも防いでいた。

「私の『疾駆する嵐』は分身を生み出す風。それ自体が刃であり盾になる。同じ二次移行同士なら負けるはずがないのサ」

「それはやってみないと分からないんじゃないかしら」

だが、その防御の強固さはアリーシャにも言えること。

強すぎる乱気流のせいでもそももの話近づくことが出来ず、例え近づけたとしてもこちらがカウンターを貰うだけ。

「なら見せてもらおうかッー」

そこから導き出される答えとして、どちらかの守りが崩れた時が勝負が決する時、ということが挙げられる。

「フッー」

アリーシャ本人が拳を振り上げながら、そして分身2体がそのまま突進をしかけてくる。

「流石の超広範囲指定型空間拘束結界でも、これだけの質量を持った風を捉えることは出来ないのサー！」

「ええ、そうね。流石にそんな大きな空気全てを沈めるなんて、私の単一仕様能力じゃ無理よ」

『沈む床』が発動出来る場所は一箇所だけ。その一箇所を中心に相手を空間に沈め、捉えることが出来る。

しかし、今回のように相手があまりにも大きなエネルギーの塊だったり分散していると、それらを分けて捉えることが不可能となる。

「でも、何も私は単一仕様能力だけの相性で貴女を引き受けた訳じゃないのよ？」

瞬間、分身の動きが止まる。

「何……？ 『疾駆する嵐』が、止まった……？」

「何が起きたか分からないって顔してるわね。教えてあげましょうか。もちろん、貴女が負けた後で」

「要らないのサ。正体が分からない単一仕様能力なんて、当たり前のことサッー！」

再度アリーシャの突撃。

『疾駆する嵐』が止められるのならと、単騎で楯無への攻撃を仕掛ける。

「貴女、学ばないわね」

しかし、単体ならば『沈む床』でアリーシャ自体を止められる。

「学ばないのはどっちかは、しばらくすれば分かることなのサ」

「……行くわよ、アリーシヤ」

先ほどから攻撃を全て止められているアリーシヤが不敵な笑みを浮かべ、楯無へと言い放つ。

その言葉を聞き、楯無の眉間に皺がよる。

「確かに厄介なのサ。このテンペスタの攻撃が一切通用しないなんてそうそう無い。あの織斑千冬にも、現役の時の第一回大会ではそれなりにダメージを与えることができたのサ」

「なら光栄ね」

会話の間にも『疾駆する嵐』により分身が生み出され、楯無によって止められる。

アリーシヤを何度も止めている『沈む床』も断続的に発動し、時折蒼流旋のガトリングでSEを削っていく。

「ああ。もつとも、それがずっと続くのなら、ネ」

「くぅ……っ！」

だがその緻密なコントロールは、楯無の精神力をじわじわと削っていた。

「大方、『疾駆する嵐』の空気の中にナノマシンで構成された水を紛れ込ませて操作したってところなのサ。『沈む床』で私を拘束して、削る。確かにいい作戦だ」

「……素直に褒め言葉として、受け取っておくわ」

「今のうちにそうしておくといい。私のSEを削り終える前に、キミの精神が削りきられているだろうからサ」

アリーシヤのSEが先に削り切られるか。

はたまた、楯無の精神力が削られるか。

二人の勝負は持久戦かつ殴り合いという、大味なものになっていた。

「やってみなさい。後悔するのは、貴女よ」

「さあ、どうだか……」

幾度目となる衝突。

IS学園vs亡国機業の第2回戦が幕を開けた。



「……なんか、不自然なほどに静か……」

「そうね。楯無さんや剣だつて戦つてゐるのに、物音一つ無い……」
楯無とアリーシャの戦場から少し離れ、戦いの影響が及ばない所まで走つてきた7人。

体力の温存を図り現在は歩いているが、そのお陰で周囲の異常さに気づくことが出来た。

「こ、こんな所で襲つてこないよね……」

「皆には悪いが、私と一夏の出番はまだ先のようにだな」

「なんで分かるのよ、箒」

箒と一夏。

ペアで戦うのは、束と千冬。

他のメンバーの戦う相手が変わろうとも、ここだけは変わることはないと箒は踏んでいた。

「なんでだろうな……。だが、何となく分かるんだ」

「それって家族での虫の知らせつてやつ？」

「そうかも知れない。でも、何となく千冬姉と束さんなら、一番奥で待つてゐるつて思う」

箒と一夏の根拠の無い自信。

何故だと聞かれたら答えられないし、今襲つてくるかもしれない。だが、それでも。

「あの二人が、特に千冬姉がいる状態での束さんが、そんなセコいことはしてこない」

今は敵対しているが、それでも姉弟と姉妹。

嫌でも分かつてしまうことはあるし、それが勘から確信に変わることも少なくない。

「へえ、クソガキ達しかいねえわりには、ちゃんと頭回つてんじやねえか」

「っ！……オータム……ッ！」

そしてそれが一夏と箒だけの確信から、8人全員のものへと変わ

る。

「てめえらの想像通りだ。織斑千冬と篠ノ之束は一番奥にいる。二人揃ってラスボス気取りだ」

「…行つて、皆。私は大丈夫だから」

7人の前方にある巨大なコンテナの物陰から現れたのは、アメリカから強奪したIS『アラクネ』を装備したオータム。

その異様なISは、一度見たら忘れない。

「ハハハッ！行かせるわけねえ……って言いたいところだが、クソガキが流石に7人も集まつてりや面倒だ。てな訳で」

『アラクネ』のスラストが吹き荒れ、機体が一瞬にして加速する。

「望み通り戦つてやんよ、更識簪」

「…っ！」

アラクネの特徴として真つ先に挙げられるのは、その大きな8本足の武装。

形通り足としても機能するが、その先端からはエネルギー砲を放つことができ、狙いが絞りづらい。

そう、普通の人間ならば。

「……別に、大したこと、ない」

夢現を振るい、それらを払い落とす。

「これくらいなら、剣のランペイジテールとか、お姉ちゃんの『清き熱情』の方が避けにくい」

「言ってくれんじゃねえか」

自分とオータムが罅迫り合いを繰り返している中、6人が無事先に進んだことを確認した簪。

「でも、私もあなたを見くびってるわけじゃない」

いつも通りのややジト目のまま、メガネの奥の紅い瞳を光らせる。「いざとなったら手段を選ばず、任務の遂行を重視する。……京都では私達が数で有利だったけど、1:iならあんなに簡単にはいかないと思う」

「随分と喋るじゃねえか。遺言つてやつか？」

「ううん。……勝利を確信してる、余裕の発言」

ぶい。とピースサインをして、オータムに見せつける。
オータムの額に青筋が浮かぶ。

「舐めてんのかてめえ…ッ！ずっとあの時守とかいうクソガキが最前線で戦ってただろうが。その仕事が無かった後方支援に負けるほど、オレは弱かねえぞ」

「大丈夫。私は、後方支援じゃないもん」
夢現を構える簪。

その表情には、一切の驕りも緊張も無かった。

「あなたが後方支援って思うなら、そう思ってたらしい。学園祭や修学旅行と同じように、負ける未来が待ってるだけだから」

「調子に乗んじゃねえぞ…ッ！このクソガキがアッ！」

更識簪 v s オータム、開戦。

一方その頃、時守はと言うと。

「お前、なんで動けんねん」

「ふ、ふはははは…！私がそう簡単に散ると思うなよ、国連代表ッ！」
マドカと戦っていた場所から離れるように走っていたはずが、彼女に回り込まれていた。

それも、ボロボロにしたはずの装甲が完璧に治っているというおまけ付きで。

「…まあええわ。あんだけやってそれでも戦うってことは、まだ俺と渡り合えるって思っとんねんやろ」

「当たり前だ。お前は私が殺す。必ずな」
「あっそ」

彼女が展開する『黒狼』の翼が大きく広がり、粒子が吹き荒れていく。

「今のうちに言っとくぞ。手加減も容赦もせんからな」
「望むところだ…ッ！」

時守もISを展開し、いつもと同じく『完全同調・超越』を纏う。
「いつまでもゴキブリみたいに湧かれてもムカつくだけや」

その装甲と肉体に、細い雷が走る。

それに合わせて『完全同調・超過』のように濃い金色のオーラではなく、次第に薄く淡い光が包んでいく。

「な、何を…」

「これを使えるんは、今の俺やったら数分だけや」

幾分か背と髪が伸びたように見える時守から発せられる低い声。

それは復活したマドカの心に動揺を生むには十分だった。

「き、貴様…、その姿は…！」

「俺のこととやかく言う前に自分の心配しろ、や」

「ゴツ…!?!」

一瞬でマドカの視界から消え去った時守。

そしてどこからか現れた彼の右膝がマドカの顔面にI Sのシールド越しでめり込んだ。

「今更戦うのが怖いです、とか無しやからな」

「くう、この…！」

「遅いねんクソが」

「ガフツ！」

何とか形だけ襲いかかることが出来たマドカだが、今の時守には届かない。

今度は上半身が消えたかと思えば、前傾していた自分の顎が彼の踵にかち上げられた。

「隙だらけやな」

「はっ…？」

しやがみこんで攻撃を避けたのだと思っていたマドカ。

事実そうで、時守はマドカの攻撃を身を低くすることで避けた。

そして今は、彼女の背後に『オールラウンド』を構えた状態で待ち構えている。

『刺し穿つ死棘の槍』

「ガアアアアッ！」

二つの金属がとてつもない威力でぶつかり合い、凄まじい轟音が鳴り響く。

その投擲された『オールラウンド』に纏った性質によってマドカの身体は吹き飛ばされる。

はずだった。

「ガ、ハッ……グウアアアアッ！」

「いつやくん。逃げやんといてや、寂しいやつちな」

本来ならば吹き飛ばされ、その先で何とか体制を整えようと考えていたマドカ。

しかし、謎の引力により時守の元へと引っ張られそれは叶わず、ただ拘束されながらどんとSEが削られていく。

「はな、せ……ッ！」

「おっ……ええよ」

訴えると意外すぎるほど簡単に彼はその拘束を解いた。

その結果、マドカの身体は『刺し穿つ死棘の槍』の勢いそのまま、壁に突撃するかのように直進していく。

「なんちゃって」

あと少して壁に激突するという間際。時守がマドカの背中に突き刺さっていた『オールラウンド』を掴み取った。

『刺し穿つ死棘の槍』の勢いがなくなったが、そのまま慣性で移動を続けるマドカ。

「よっ」

そんな彼女の後頭部に、時守の回し蹴りが炸裂した。

雷を纏った超速の蹴りはマドカの身体をISごと地面に沈めるには十分すぎるほどの威力を有しており、地面に大きなクレーターを作って、彼女は沈んだ。

「っと。いてて……これやると筋肉痛やばいから嫌やねんな。まあその分強いけど」

そんな彼女の側に降り立った頃には時守の姿はいつもと同じようになつており、ISを解いた状態で頭をがしがしと掻いていた。

「……なあおい。せめてさ、テロリスト名乗ってるんやったらもうちよい歯ごたえある強さになつて煽つてこいや」

うつ伏せに倒れるマドカの元へと寄り、髪を掴みあげる。

そこにある千冬に似た顔は、ある種の怯えを抱いていた。

「お前、ちっふー先生に憧れてんのか？」

「……な、ぜ…おま、えなど、に…っ」

「そう言ううってことは憧れてるってことか。……んじや言うとかわ」

所々に裂傷や腫れを負い、血が滴っているマドカの顔。

そんな彼女の顔を見ながら、時守は優しい顔で史上最悪に残酷なことを告げた。

「あんな雑魚なった人に憧れんのは、もう辞めろ」

「な、に…っ！」

それはかつての師に対する、一種の暴言に近かった。

「別にこれは、俺が1回模擬戦で勝って調子乗ってるからやない。もつと他のことや。ワンサマに言うたらブチ切れてめんどなるから言わんかったけど」

「……はな、せ。もう起き上がれる」

「え、嫌やわ。襲ってくるかもしれへんやん」

「流石に私も、今までの攻防で私とお前の間にどれほどの実力差があるかは分かった。命を削る無駄な真似はしたくはない」

「ああそう」

パツと掴んでいたマドカの髪を離す。

ISの具現維持限界が来たのだろう、強制的にISを解除されたマドカが、力なく起き上がる。

「……それで、織斑千冬が弱くなった、とはどういう事だ」

「んなもんお前が一番分かつとんのちやうか？本来のあの人は自分の目標を立てる時に、誰かのためについて言い訳は使うけど、誰かのせいで、とは言わんかったやろ」

「何が、言いたい」

「つまりは、や。幼馴染やろうが何やろうが、篠ノ之束っていう一人の存在に振り回されてる時点であの人は今までの強い織斑千冬やない」

時守の言っていることは、全て正しかった。

今までの千冬ならば束の暴走を止めていたし、こんな犯罪の片棒を担ぐようなことは絶対にしない。寧ろ断罪する側だった。

それが今は違う。

「過去の英雄に憧れんのもええけど、お前はお前で強なりやええやろ」
「…お前は、何を知ってるんだ」

「なんも知らんわ。ただ自分の予想を立てて行動してるだけや。……
まあ、不幸なことにその予想は的中してそうやけどな」

時守が立てているとある予想。

最も、これが千冬と束を止める大きな手段だと確信しているからこそ、口には出さないのだが。

「勝てる自信が、あるのか…?」

「おう」

「……恐らくその程度では、無理だぞ」

「分かつとるわそんぐらい。お前も学習せえへん奴やな」

「何?」

呆れた様子でマドカを見る時守。

「お前に全力出してるわけないやろ」

「……勝てないわけだ。私は、まだまだ遠かったのか」

「せやな。まだお前みたいなクソガキには負けへんわ」

四次移行、そして先ほどの復活したマドカを瞬殺したものですら、まだ全力ではない。

マドカを倒すための本気は出しているても、ISバトルという範疇での時守の全力は全く出していないかった。

「やから大人しく今はくたばっとけ」

「なっ…っ、ガアアアッ!」

『雷動』でマドカの近くに一瞬にして移動し、『雷轟』をスタンガンの威力程度に弱め、首筋に直撃させる。

意識を失ったマドカがそのままパタリと地面に倒れる。

「さてと、ほな今度こそ向かおか」

2度マドカをボコボコにぶちのめし、意識を奪い取った時守。

その足は、再び目的地へと向かった。

陽炎

マドカと時守の第2回戦が終わり、しばらく。

「はあ…ッ！はあ…ッ！」

「…もう、やめておいた方がいいのサ。そのまま続ければ脳に後遺症ができてもおかしくない。いくら今は敵とはいえ、剣ちゃんを想い人を廃人にはしたくないのサ」

「黙、りな…さ、い…！」

楯無とアリーシャの戦いは、楯無の精神力が尽きたところで終わろうとしていた。

「良くやったのサ。私の今のSEは3桁を切っている。あれだけの猛攻をすべて凌ぎながら着実に削り、よくこの長時間戦い抜いた」

「く、う…あ…あ…ッ！」

「私に対し、そっちはほとんどダメージは無し。後数分でも攻撃が続いていたら、確実に私が負けていたのサ」

つい先程までアリーシャの単一仕様能力と武装による猛攻をただひたすらに凌ぎ続けていた楯無。

凌ぐと同時に攻撃も行い、言葉通りあと少しの所まで追い詰めたのだ。

しかし、足りなかった。

「まだ、よ…。まだ、負けてないわ…っ！」

「さつきも言ったのサ。友人の恋人を再起不能にするほど、私も鬼じゃない。ISを解け。もう戦う気がないことを示してくれば、攻撃はしない」

「…ふふ。あなた、本当に理解できていないのね、私の言葉の本当の意味を」

「何…？」

破裂しそうなほどの激痛に襲われている頭を左手で抑えながら、楯無は不敵な笑みを浮かべて立ち上がった。

「言ったでしょう？私はまだ、負けてない」

「だから何を——ッ!？」

その言葉にアリーシャが反応を示そうとした時、『テンペスタ』の右翼スラスターが轟音とともに爆ぜた。

「な、なぜ…」

「何が起きたか、何をされたか分からないって顔してるわね。でも、気づかないあなたも悪いのよ」

「何のことだッ!」

「簡単よ。もし本当に今私が何もしてないなら、これだけの頭痛があるのはおかしくないかしら。本来なら、回復していてもいいでしょう?」

「クソ…、そういうことかッ!」

楯無の言う通り、何もしていないならばナノマシンの制御のし過ぎで生じた頭痛は次第に収まっていくはず。

にも関わらずまだ楯無が辛そうにしているということは、まだ何かを行っているということ。

「でも残念。今から動き出してももう遅いわよ」

「なっ!？」

右翼に続き、今度は左足が爆ぜる。

「うふふ、油断したわねアリーイ。くだらないことをつぶやく前に私にとどめを刺しておけば良かったのに」

決して良いとは言えない顔色のまま『霧纏の淑女』を展開しながら浮かび上がる楯無。

その彼女を見上げるアリーシャの顔には、怒りの表情が張り付いていた。

「舐めてもらっては困るのサ!」

「あら。舐めてるのはどちらかしら」

残った左翼スラスターを巧みに操り、瞬時加速で楯無への接近を試みるアリーシャ。

しかし。

「無駄よ、させないわっ!」

楯無からすれば、これ以上の好機はもう無い。

相手は痛手を負い、そして尚且つ焦って攻撃に転じてきている。その中で、不意の一撃を食らう訳にはいかないのだ。

「いったい何をさせないってのサ！」

「決まってるでしょ？」

楯無が防ごうと、そしてアリーシャが何としても実行しようとしていること。それは他でもない、超接近戦だった。

互いにもう余力はほとんどない状態であり、遠距離戦に持ち込んでもジリ貧になることは目に見えている。一対一のこの状態がいつまで続くか分からない。

だからこそ、楯無もアリーシャも互いに自分の戦術を貫き通そうとしていた。

「はあああつー！」

「チツ……！」

蒼流旋のガトリングによる射撃でアリーシャへの牽制を行う。

彼女のSEが残り僅かなのは、先ほど彼女自身の口から伝えられている。あとはそれを、確実に削り切れればいい。

「ム力つく武器なのサ。槍なのか銃なのかハッキリさせて欲しいところなのサ！」

「敵にそう思わせてるのなら、いい武器じゃないかしら」

「ああ、いい武器サ。攻撃に関しては、な！」

接近戦は無理だと判断したのか、アリーシャが楯無から距離を取る。

今までよりも遥かに遠く、そしてなぜか『疾駆する嵐』を解除した。

「何を……ッ！」

「簡単サ。お前の攻撃が届く前に、私の最強の技でお前を叩きのめせばいい」

アリーシャの身体の周囲を纏うように発生していた乱気流が、『テンペスタ』の装甲内部に入り込んでいく。

彼女の左手が前に突き出され、その手のひらに風が集まり始める。

『『テンペスタ』がただ近距離だけに強いISだと思ったら大間違いなのサ。『疾駆する嵐』で周囲に分散させた風を、一気に機体内部に押し

戻し、圧縮して放つ…ッ！」

「っ、しまっ——」

楯無の反応が遅れる。

その僅かな隙を見逃すほど、アリーシヤは甘くなかった。

「遅いっ！ 風ブロイエットイレ・デイ・ヴェントの 砲 弾 ッ!!」

渦巻く風が、一塊の巨大な砲弾となり楯無に襲いかかろうとした、その時。

「な、ん、て、ね。『清クリアき熱情』！」

アリーシヤの装備していた『テンペスタ』の全てが大爆発を起こした。

「な、が…っ！」

「ふふっ。面白いほどに上手くいってくれたわね」

「何、を…！」

「いくら精密に操作したとしても、最初っから装甲の中全てにナノマシンを仕掛けるなんて、疲れちゃうわ」

「まさ、か…」

「ええ。私が苦勞して『テンペスタ』に仕掛けたのは翼と脚だけ。それ以外は、今丁度あなた自身が取り込んでくれたのよ」

爆破された右翼と左脚。

そこから判断し、『テンペスタ』の装甲全てにナノマシンが入り込んでいたと勘違いしていた。

だが、実際はそんなことはなく。楯無がただ空气中に散布していただけのナノマシンを、『風の砲弾』は放つ際に取り込んだ。

「だから言ったでしょう？ 後悔するのは貴女だっ」

「…なるほど、単一仕様能力の相性だけじゃない、ってのはそういうこと、か…」

「ええ。と言ってもギリギリよ。本当に間一髪間に合ったってところかしら」

「その油断が、命取りになるのサっ！」

最後の抵抗といったところが、アリーシヤがライフルを展開し、楯無へと向ける。

「馬鹿ね。だから言ったじゃない、間一髪間に合ったって」
「ガ…ッ!？」

そんな彼女の後頭部を、強烈な衝撃が襲った。

「待たせた、刀奈」

「ううん、大丈夫よ。剣くんがトドメを刺していなくても、避けられたから」

「ありやりや。んじや要らん手助けやったか？」

「け、剣…：…ちゃん…？」

「よおアリーシャ。悪いな。後頭部に思つきり膝蹴りカマしてもたわ」

点滅するようにボヤける視界でギリギリ捉えることが出来たその姿は、アリーシャと馴染み深い方の男性操縦者のそれだった。

見慣れたISと光を身にまとっているところから、『雷動』の移動速度のまま彼女の後頭部に膝を直撃させたことが伺える。

「な、ぜ…：…ここ、に…：…っ…マドカが、いたはず、じゃ…」

「おお、あのクソガキか。弱すぎて話にならんかったわ。俺の足止めしたかったらもうちよい強いやつもってこいつて言つといて。…もう無理やろうけど」

「ハ、ハハハ…」

彼のその言葉を聞き入れ、アリーシャは沈んだ。

「最後の美味しいところ、剣くんにかけていかれたわね」

「この戦いにそんなん無いやろ。…：…刀奈、休んどくか？」

「ううん、大丈夫よ。無防備に休んでるところをアリーシャ以外に襲われる可能性もあるし」

「それもそうか」

倒れたアリーシャに近寄り、気絶しているかどうかを確認する楯無。

意識がないことを確認すると、ISの展開を解除した。

『『テンペスタ』の装甲も内部からの『清き熱情』で完全に破壊したし、もうアリーシャは脅威ではないわね」

「ん、もう行くんか？」

「ええ。と言つても休みながら、だけど。……今の状態じゃ、さすがに足手まといになっちゃうでしょうし、体力を回復させながらゆっくり向かうわ」

IS学園メンバーの中でも屈指の実戦経験を誇る楯無だが、今は疲れ切っている状態だ。

アリーシャをブラフと技術でなんとか倒したものの、これだけ脳に負担をかける戦いをしていては絶対に持たない。

かつて隣に立つ彼が倒れたように、自らも力尽きてしまうかもしれないのだ。

「私と剣くんがこうして勝ったってことは、戦況的にはかなり有利に進めることができるわ。さ、行きましよう。……あれ？」

ふと、今まで彼がいた方向を向く楯無。

「剣、くん……？」

そこに、彼女の想い人の姿は存在していなかった。



「ギャハハハッ！おいおいどうしたよ！さっきまでの威勢のワリには随分とシケた戦いだなあ!？」

「……」

オータムのその罵倒のような叫びに一切耳を貸さず、簪は防御に徹していた。

「もつと俺を楽しませてくれや！」

「……はあ。なんであなたに、って気持ちもあるし、なんであなたがって想いもある」

「あ？何言ってるんだ？」

急に口を開いたかと思えば、突如として意味の分からないことを話し出した。

そんな簪をめまえにオータムは攻撃をやめはしたものの、臨戦態勢は解かなかった。

「ホントに、やめて」

「はあ？なんだ、ぷつ、クハハハハ！今更命乞いかあ!？」

「違う。そんな生半可な実力で、ハンデを負ってる剣やお姉ちゃんを襲わないで。万が一にでもあなたが勝っちゃったら、二人の評判が下がっちゃう」

「アア？んなもん関係ねえだろうがよ！」

「……うん。関係ない。でも、だからこそ、二人よりも弱い私があなただを倒して、二人は弱くないってことを証明する」

「だあかあらあ、かかってくるならさっさと——」

かかって来い。オータムがそう言おうとした、その時。

どんつ！と大きな音を立て、簪が『打鉄式式』ごとまばゆい光に包まれた。

「分かったの。どうすれば強くなれるか。誰かのためとか、何かを守るため、とかじゃないんだって」

「デメエ……」

「IS：専用機のコアには、人格みたいなのがいるでしょ？だから、その子と一緒に強くなれば、それでいいの」

若干の砂埃を舞わせ、その光とともに少しずつ晴れていくその姿。

簪の小柄な体に合っていた、専用機としては少しばかり小さめだったそのフォルムは消え、手足の装甲が分厚くなり、それを十全に動かすために翼も大きく。

最大の特徴であった肩を覆うようなスラスタに付随していた『山嵐』はどこかに隠れ、あるのはただ、打鉄と似たシンプルな姿。

「二次移行、打鉄式式『鎖牢鉄』……ハアツ！」

距離を取っていた簪が、瞬時加速でオータムへと急接近する。

「馬鹿が！二次移行したからって調子こいてんじゃ……！」

「秋火！」

簪がオータムに向けるのは、彼女の恋人が雷を放つ時と同じ、右手。その装甲の手のひらの部分が開き、急速に膨大な熱量のエネルギーが溜まっていく。

「っ、チイツ！……ゴレムⅢのやつか……！」

「一緒にしないで。あくまでもこれは、サポート専用。チャージ時間

もアレとは比にならない」

回避したオータムの脳裏によぎるのは、かつてIS学園に向けて放ったゴーレムたち。

そのとんでもない火力を誇るものが、相手の第二形態に取り込まれていたのだ。

「はっ！」

「くそっ……！」

再び、オータムの行く手を阻むように『秋火』を放つ簪。

ゴーレムⅢの熱戦との違いを主に述べるとするならば、その速度と威力。

速度は簪の『秋火』の方が速く、威力はゴーレムⅢの方が高い。

「ちよこまかと鬱陶しい！」

「二次移行して、速度が変わらないわけがないでしょ？」

確かに、速い。

細く一撃で沈められるような威力は擁していないが、それでも当たれば痛手になる。

しかし、オータムには一つの疑問があった。

「二次移行してその程度ってのは、無理があるぜ？」

「……ッ」

「ハッ！ やっぱ隠すつもりだったか？ 新しく出た単一仕様能力か何だか知らねえが、ぶっつけ本番で使いこなせるわけねえだろうがよお！」

「くっ…秋火！」

簪が隠しているものの正体はオータムには分からない。

しかし、何かを隠し持っており、それが戦況を左右するものであるということが分かるだけでも大きな収穫なのだ。

「ハハハア！ その熱線に大した火力がねえのは見りや分かる！ このままなら、ジリ貧だぜ！」

「……うん。その、通り。このままならね」

意味有り気に微笑む簪。そんな彼女の姿に、オータムにふとした疑問が湧く。

右手から熱線が放たれるのならば、左手は何なのだろうか。そもそも、隠しているであろう単一仕様能力の正体を本当に知らないのだろうか。

「…ツークソがアー！」

結果、オータムは攻めに転じた。

うじうじ考えるのは自分の性にあわないし、何より考えていても始まらないと察したのだ。

「かかった」

そして、簪の予想通り単一仕様能力に引つかかった。

瞬時加速で突撃してくるオータムのIS、アラクネの蜘蛛の足のような武装の一部が、切断されて重々しい音とともに落ちたのだ。

「な、に…？」

「剣が言ってたの。…確かに必殺技みたいに技の名前を叫ぶのも良いけど、こうやって何も言わずに発動する方が良い時もあるって」

一体何をされたのか、全く理解が追いついていないオータムを見て、少しだけ安堵の表情を浮かべる簪。

「でも名前だけ教えてあげる。単一仕様能力、『泡沫うたかたのいノ糸』手は、抜かない…！」

額に僅かながら汗を滲ませ、簪は覚悟を決めた。

◇ ◇ ◇

「…大丈夫かな、簪」

「楯無さんと剣さんも気になりますわ…」

「んなの気にしてる場合じゃないでしょ？アタシたちには先に進むしかないのよ」

「…鈴の言う通りだ。確かに三人のことは心配だけど、俺たちは前に進もう」

簪の戦闘領域から少し離れた通路。

かなり移動したにも関わらずまだまだ奥が見えてこず、距離感が分からないという不安もありながら6人は歩みを進めていた。

「それに、私たちも師匠たちのことを心配している場合では…ッ!?」
「ラウラッ!?」

周囲を警戒していたラウラの視界に突如として入り込んできた、爆炎。

何とかA I Cを発動させて他の5人へのダメージを無くすことは成功した。

「くっ…その金色の機体は…!」

「ふふっ。どう?あなたたちの中の最強である、あの子と同じ色の機体は」

「別に、色が同じってだけでしょ?そんなもので、僕たちの気持ちは変わらないよ」

「あら、良かったわ。彼がいないからてつきり弱い子しかいないと思ってたから」

ラウラと共にI S 『輪廻の花冠』を展開するシャルロット。

敵は、『ゴールデン・ドーン』とその搭乗者スコール。

時守の敵がマドカとゴーレムたちになった時点で、ラウラとシャルロットのペアでスコールと戦うことは決めていたのだ。

「鈴、箒、セシリア!嫁を、教官を頼んだぞ」

「僕たちも簪と楯無さん、剣を連れてすぐに合流するから!」

ラウラとシャルロットの言葉を聞き入れ、4人は走り出した。

逃げるように駆け出す4人にスコールの炎が迫るも、ラウラが止める。

「させん。…聞いていただろう。貴様の相手はこの私たちだ!」

「あら、随分と可愛らしい子達が相手なのね。ヒナから成長して、一人で飛び立てるようになったのかしら」

「…それは、戦ってみれば分かることでしょうか?」

「ふふっ。…いいえ、やっぱり戦わなくても分かるわ。今は、ちゃんと飛べるようになったのね」

煽るように上から見下ろすスコール。

そんな彼女に、シャルロットとラウラは掛け声やアイコンタクトすらせずに接近していく。

スコール v s シャルロット & ラウラ、開戦。

隠されていた力

「テメエ、何しやがった…!」

「だから言ったでしょ? 単一仕様能力だつて」

「チツ…」

切り落とされた翼部スラスタを一瞥し、舌打ちするオータム。

目の前にいる敵、更識簪は単一仕様能力を発動したと言った。しかし、それならば矛盾が生じる。

「だが、何となく分かったぜ。テメエのそれは、無条件で発動出来るほど使い勝手の良いもんじゃねえ」

「っ…」

「考えりや簡単だ。そんなもんをいつでも使えるんなら、最初っからオレのこと切り刻んでるからな」

カツと熱くなりやすいオータムだが、冷静な時には頭が良く回る。

簪に翼部スラスタを切断されたことで動きが止まり、頭に回っていた血が下がった。

「二次移行してからいきなり出てきた武装、『秋火』となんか関係でもあんのか?」

「さあ? それは自分で確かめてみて」

ゆったりと歩みを進め、簪との距離を詰めるオータム。

臨戦態勢は一旦解いていたが、その目は瞬きすらせずに簪の紅い瞳を射抜いていた。

「つうか、見れば見るほどイライラするぜ、お前。あのロシア代表に似てて、姉妹揃ってあのクソガキの彼女。ビクビクしてる割には歯向かってきて、しぶとく生き延びるってよお」

「……ありがとう?」

「褒めてねえよ。ぶっ殺すぞカスが」

「それは、あなたには絶対できないことだから、無理」

「テメエは…、とことんムカつくやつだなあ…おい……!」

簪がオータムと戦いたかったように、オータムもまた簪との戦いを

望んでいた。

以前の学園祭で楯無と一夏、時守の三人と会敵したのだが、主に時守一人にしてやられたのだ。

楯無の言動に腹が立ち、かつ時守は単純にうざかったのだ。その二人が大事にしている更識簪を自分が倒せば、多少は憂さが晴れると思っていた。

「うん。だって私は、お姉ちゃんの妹だもん」

しかし、いざ戦ってみれば簪こいつもうざい。

やる気があるのか分からない目、楯無と似た風貌、弱いのに余裕を感じさせる態度。

時守のようにおちやらかしたやつも嫌いなオータムだが、自分は勝てると思っている雑魚ほど嫌っているものはなかった。

「じゃあ、あの姉の代わりに死ねや」

『アラクネ』の足の装甲の先から放たれるエネルギー弾。

完全に不意打ち、かつ超速のそれが『牢鎖鉄』をまとった簪を襲う。

『八咫鏡』

その無数のエネルギー弾に向け、簪が左手を翳す。

「ハッ！今度は何だったんだ？」

みるみるうちにエネルギー弾と簪との距離が縮まり――

「……な、こっ！」

――簪に届く前に、その全てが消えた。

「今度は盾か、アア!？」

「だから、言うはずない……!」

その光景を目の当たりにし、中距離のエネルギー兵器では意味がないと感じたオータムが、瞬時加速で簪へと急接近する。

『秋火』の警戒も怠ることなく小刻みに動きながら、爪を振りかぶる。

「死ねやっ!!」

振り下ろされるオータムの脚部装甲。

右手で『秋火』、左手で『八咫鏡』を発動する簪は今現在一切の武装を展開しておらず、それ故の攻撃だった。

「はっ!」

しかし簪もただそれをそのまま受けるはずもない。

コンマ一秒にも満たないほどの速さで武装を展開し、オータムの爪を防いだ。

「これが『夢現』の進化系、『朧月』」

「さつきからやけにシヤレた名前ばつかだが、性能に見合ってるねえんじゃねえか?」

「まだ本気のほの字も出してないのに、何言ってるの?」

『夢現』を彷彿とさせるような薙刀と爪との鏝迫り合い。

その繋がりを強引に断ち切り、簪が距離を取る。

「考えてる通り、『朧月』を持つてる時は『秋火』と『八咫鏡』は発動できない」

「んなこと話していいのか、よっ!」

両手がふさがっている今なら、とオータムが再びエネルギー弾を放つ。

「……馬鹿。『八咫鏡』」

しかしそれなら、と簪が『朧月』を右手だけで持ち、『八咫鏡』を発動させてエネルギー弾を消し去る。

「チツ。うぜえな」

「そう?それならそろそろタネ明かしをしてあげる。ちょうど、今の^{いい感じ}になったから」

「はあ?」

そう言って、簪はオータムとの距離があるにも関わらず、『朧月』を引いた。

「先に謝っておく。ゴメンなさい。あなたみたいな人が、実験に向いてると思ったから」

「舐めた口きいてんじゃねえよ、雑魚が!」

再び瞬時加速で迫り来るオータム。

「行って、『嵐逆』!」

そのオータムに向かって簪が『朧月』を振るう。

すると薙刀の刀身の部分から、無数の白いエネルギーが放たれた。

「ハハアッ!それが二次移行の恩恵かあ!?!」

そのエネルギー弾を避けながらただそれだけか、とオータムは叫ぶ。

振るえばエネルギーが射出されるなど、すでに聞いたことがある機能だ。

現在亡国機業に身を置いている束が作成した『紅椿』には最初からある武装であり、同じエネルギーの射出なら時守の『雷轟』のような雷を放つ方が規模としては大きい。

「そうやって、見たものでしか判断できない人だから、実験にちようど良かったの」

「何……ッ！グッ、ガアアアッ!!」

大した攻撃ではない。そうオータムが判断した、まさにその時。

完全な死角となっていた背後に、猛烈な衝撃が走った。

「な……何、が……!」

「よそ見してる暇があるの?」

瞬時加速の途中で背後に攻撃を受け、思わず前のめりに倒れたオータムに、簪がそう言い放つ。

「クソッ!」

何かが来る。

その第六感を頼りに、転がるようにしてその場をなんとか離れるオータム。

その数瞬後、彼女が元いた場所に大量のエネルギー弾が降り注いだ。

「何が起きてやがる……!」

「足、もう一本」

今度は、再び脚部装甲が切り落とされた。

「……ッ！テメエッ！さつきから一体何をしてやがる!」

「……うん、もういいかな。今からならもうあなたに挽回できる方法はないし」

『朧月』を構えたままの簪が、オータムに向けていつも通りの落ち着いた口調で話す。

「まず一つ目、『秋火』の能力。別にあれは焼き切るためのものじゃない

くて、その通過した空間に攻撃を記憶させることができるの。何も無いのにいきなり切ってるのは、あなたが秋火が通過した空間を通る時に、私が頭の中でその記憶させた攻撃を発動してるから。その再発動の鍵が、単一仕様能力『泡沫の糸』 最大のメリットは二回目以降の攻撃が相手に認知されないこと」

一度『秋火』が通った空間に熱の攻撃を覚えさせ、簪の任意のタイミングで攻撃を再び発動させる『秋火』と『泡沫の糸』

「二つ目、『八咫鏡』の能力。ただ防ぐだけじゃなくて、エネルギー弾を取り込むの。いくらでも溜め込んでおくことができるし、好きな時に好きなだけ吐き出すこともできるの。最大のメリットは相手の中・遠距離攻撃の無力化」

相手のエネルギー弾を自らの弾丸としてカウンターに利用することができる『八咫鏡』

「そして最後、『朧月』の能力。ただ射出するだけじゃなくて、その後好きな方向に曲げることができるの」

放った無数のエネルギー弾を自在に操作できる『朧月』

「武装として『秋火』、『八咫鏡』、『朧月』。そして単一仕様能力として『泡沫の糸』。これが、二次移行した打鉄式の本気」

その計4種の攻撃で、相手をじわじわと追い込んでいく。

それこそが、『牢鎖鉄』の真髄。

「……ありえねえ。お前、頭ん中でどんだけのこと同時に考えてんだ……！」

「別に、元からこういう考え方は得意だったの。『山嵐』とかで戦略を組み立てるのも良かったけど、二次移行して思った。私は、こういう戦いの方が得意なんだって」

「……そ……く……が……く……そ、が……クソがああああ!!」

スコールやエムに比べて賢くはなく、そして冷静な方ではないという自覚はあるオータム。

多少、修羅場や経験も積んできた自覚もある。

だからこそ、今ここでこの相手には勝てないのだと悟ってしまった。

『八咫鏡』

「チイツ!!」

突如として現れた円形のうっすらとした盾のようなものからエネルギー弾が放たれる。

もちろんそれを避けなければならないが――

「三本目……」

――避けたところで、『秋火』の餌食になる。

「また……っ、クソ!」

それに取り除かれれば、今度は簪自身から『朧月』による攻撃が飛んでくる。

「グアアアアッ!」

その対処に追われているうちに、死角から『八咫鏡』による一撃を受け――

「四、五本目」

――その移動中にまたも『秋火』が装甲を蝕む。

オータムを纏う『アラクネ』には計8本の装甲脚があり、そのうちの五本がすでに切り落とされた。

彼女の本物の足を包む2本を除けば、残る脚はわずか1本。

「ほら、言ったでしょ? 挽回できないって」

その一本すらも、無残に切り落とされた。

「……ははっ。お前、強かったんだな」

「敵にそんなこと言われても嬉しくない。……けど、最後にいいもの見せてあげる」

そう言うと、簪はブンブンと『朧月』を振り回して『嵐逆』を四方八方に飛ばす。

オータムにかすりもせず散っていくそれは壁を破壊することなく、どこかに吸収されるように消えた。

「まさか……!」

「そう。『八咫鏡』は敵の攻撃だけじゃなくて、自分の攻撃もストックできる」

気づいた時にはもう遅く、オータムの周囲を『八咫鏡』が囲ってい

た。

「さよなら」

地面から上に半球を作るようにしてオータムを囲う『八咫鏡』

超至近距離のそこから、大量のエネルギー弾がオータム目掛けて放たれた。

◇

「はああああっ!!」

「ふふっ、可愛らしい攻撃ね」

「くっ、シャルロット!」

スコールに接近していたシャルロットの身体がぐい、と後ろに引つ張られる。

胸に巻きついたワイヤーブレードの出どころは、もちろんラウラ。

余裕の笑みを浮かべるスコールに対し、2人の表情は暗れなかった。

「最初の威勢の良さはどこへ行ったの?…弱すぎて、つまらないわ」

「好きだけ言うといいよ。最後に負けるのは、あなただから」

「そう。なら好きにさせてもらおうわ」

そう言うと、スコールはシャルロットとラウラ、そしてスコールの戦闘空域全てを覆ってしまうような大火球を放った。

「行くよ、ラウラ!」

「ああっ!」

そしてそれを見て、待ってましたと言わんばかりに2人が加速する。

「はっ!」

「っ、そう来るのね…!」

大火球の中央をエネルギーシールド『花びらの装い』を前方に掲げることで突破してきたシャルロットの手には、十連装ショットガン『タラスク』が握られている。

「これでっ!」

「でも、甘いわね」

エネルギーシールドで炎を突破してからの奇襲にスコールも少しばかり驚かされた。

しかしそれは、彼女の平静さを奪うまではいかなかった。

「くっ……」

「……理解できないわね」

シャルロットの『タラスク』による猛攻をひらりと躲し、隙ができた彼女に超高熱火球『ソリッド・フレア』を浴びせるスコール。

そんな彼女の表情は、怪訝そうな視線をシャルロットへと向けていた。

「なぜ貴女が前衛で彼女が後衛なのか、なぜこれといったコンビネーションも見せないのか、そして、なぜまともに戦おうとしないのか。解せないわ。……貴女たち、死にたいの?」

「ふんっ。あまり我々を見くびるなよ。なにもシャルロットは後方支援、私は前衛しかできないというわけではない」

「それでも、よ。前衛としての経験値もこのお嬢ちゃんよりも貴女の方が高いでしょう。いくら世界初のデュアル・コア搭載機だからと言って、それで勝てるほど私は甘くないわよ」

「その割にはよく喋りますね」

「あら。これは余裕というものよ?」

くすり、と微笑むスコール。

そんな彼女から目を切ることなく、シャルロットは一旦ラウラの元へと降り立った。

「大丈夫か、シャルロット」

「うん。想像してたよりも全然平気だよ。……それより、ラウラ」

「ああ、それこそ大丈夫だ。信じてくれていたのだろうか?」

「もちろんっ!」

「だったら、期待に応えなければならぬな」

ラウラが見上げる先には、依然として中に浮かび自分たちのことを見下ろすスコールの姿。

不敵な笑みを浮かべる彼女は先ほどの言葉通り余裕を感じさせる

雰囲気醸し出していった。

「だが、そうとなれば頼むぞシャルロット。あれは、生半可な集中力ではまともに使えんからな」

「任せてっ！5分でも10分でも30分でも、あの人を僕一人で止めてみせる！」

プライベートチャンネルでスコールに聞こえないようにしていた会話を終え、再びふわりと上昇するシャルロット。

「作戦タイムはもう終わり？」

「ええ。あなた達亡国機業を倒すための算段はもう、立て終えました」

「そう。……私、お子様の笑えない冗談は嫌いな」

「冗談じゃないのでご安心をっ！」

3度、シャルロットがスコールへと肉迫する。



「……あ。待って、やばいやばい。やばみの境地やこれ」

簪の戦いが一段落付きそうになり、シャルロットとラウラの戦いがより激化している頃。

時守は細い通路で1人、内股になっていた。

「便所どこや」

少し前にもあったが、肝心なところで腹が痛くなってしまったのだ。

「おほほう……！気になったら余計痛なってきた……出るわ……。ハイ金ちゃん。近くの便所どこ」

『スマホみたいにウチを使うな！……そこの角曲がつて5m先にあんで』

「え、ほんまにあるんや」

『ちっふーとかもうんこしたなるんちゃう？そりや、多分人間やし。てか剣ちゃん大丈夫なん？我慢出来る？』

「金ちゃん日本男児ナメてるやろ。日本のクソガキは小学校の下校時間便意我慢して成長すんねん」

『糞だけにクソガキってか』

「うっさいわボケ」

自らのISである『金色夜叉姫』の待機状態と会話しながら、内股でゆっくりと歩く。

ダムが決壊してしまわないように慎重に、それでいて手遅れにならない程度の速さで歩き、何とか辿り着いた。

「あ、そか。元々国連の施設やからちやんと男女あんののか」

『はよしーや。してるところ襲われても知らんで』

「いざとなったら金ちゃんが助けてくれるやろ？」

『……まあ、せやけど』

「それに俺がしてる時に向こうが攻撃してきたら向こうに俺のがつくやろしな。さすがにそりや嫌やろ」

『地味にめちやくそ嫌なカウンセラーやなそれ』

洋式便器に座る時守を攻撃してしまえば、その便器も粉々に破壊される。

便器が破壊されるということは、あれが飛び散る可能性があるのだ。

「漏れる漏れる」

トイレにたどり着き、すぐさま個室へと駆け込む時守。

「おひよ〜〜。すっげえ音」

人様には聞かせることのできない音を鳴らしながらスッキリする。しっかりとウォッシュレットとトイレトーパーで後処理をし、手をきっちり洗って外に出る。

「さてと、んじや……ん？……なんか聞こえへんか、金ちゃん」

『どっから？』

「女子便」

『花子さんちやうか』

「どんな所まで来てんねん花子」

そう言いつつ、隣にある女子便所の入り口に耳を傾ける。

「……イーツ!! トツキーツ!!」

「……行こか金ちゃん。ゴリラが叫んどるだけや」

「誰がゴリラだポケカスウ！」

「け、剣くん？ホントに剣くんなの？」

「え、ナタルもおる？」

そこから聞こえてきたのは、彼の知り合いのIS操縦者2人の声だった。

「どした。紙なくなった？」

「違い！ここに拘束されてんだよ！」

「なーる」

「た、助けて欲しいんだけど……」

「……周り誰も見てへんな？……よし」

そう言えば2人が捕まったということをロジャーが言っていたことを思い出し、周囲に誰も見ていないことを確認して女子トイレに入る時守。

「ここか。うーわ、めっちゃ雑に縄で縛られとるやん」

「サンキュ、助かったぜトツキー」

「なんでおトイレに？」

「腹痛なってるん」

指先だけを部分展開し、2人を縛っていた縄を切る。

当たり前だが2人ともISを取り上げられており、ナイフもなくどうすることもできなかつたようだ。

「イテテ。んでトツキー、アイツらには勝てるのか？」

「まあな。言うても雑魚としか戦ってへんから何とも言えんけど」

「ほおん。……ま、お前ならそんな軽くは負けねーだろ」

「俺としては、もうちよい戦いがいのあるやつに出てきて欲しいんやけどな。てか2人ともこれからどうするん」

「無茶しない範囲で奴らを探ってみるわ」

「そか。くれぐれも怪我には気をつけてな、ナタル」

「ええ、心配ありがとう」

「おい」

さりげなくイーリスを呼んでいないが、時守自身あのゴリラのようないーリスが怪我をするはずはないと思っっている。

「信じてんねんやん、お前のこと」

「きつしよく悪い。早くアイツら倒しに行けや
「うーい」

2人の激励を受け、時守はまた駆け出した。

時間と世界

「本当に、分からないわ。そこまでズタボロになりながら後衛の策にかけて、そんな状態から勝てるつもりでいるの?」

「はあ…、はあ…！もち、ろん…僕たちが、最後に勝つ…！」

「言っただでしょう?冗談は、嫌いなよ!」

「ぐうツ…！」

シャルロットの腹部にスコールの蹴りが深く突き刺さる。

吹き飛ばされ、壁に激突して『輪廻の花冠』の装甲が欠けた。

「う、ぐ…！」

「可哀想ね、あなたも。親友だと思っていた人間に、この状態を救ってもらえずに見殺しにされるなんて」

「なに、か…勘違い、して、るよ…！僕はラウラのことを、ずっと親友だと思ってるし…何より、今この状況を救って欲しいとも思っていない…！」

「あら、そう」

「これが、僕の役、目…だからっ！」

「ボロ雑巾のようになって這いつくばるのが役目?そんな作戦聞いたことがないわ。立案者は誰?私が怒ってあげようかしら」

「……………おい」

シャルロットが倒れたままで体力が減っていることをいいことに、彼女に浴びせられていくスコールからの罵詈雑言。

その言葉に、戦いの途中ではあるが少しだけシャルロットの心が折れかけた、その時。

シャルロットの後方で何かの準備に当たっていたであろうラウラが、無表情でスコールのことを睨みつけていた。

「何かしら。もしかして、もうあなたの出番?」

「違う、まだだ。…だが、その時になれば覚悟しておけ。私の大事な友を侮辱したことを、私は決して許さん」

「これから死ぬ子に、許してもらおう必要はないわ」

「……そうか、分かった」

それだけ聴き終えると、ラウラは再び目を閉じて集中し始めた。ラウラが目を閉じたとほぼ同時に、倒れ込んでいたシャルロットが立ち上がる。

「僕たちは、負けるためにここにいるわけでも、戦ってるわけでもない」

「そう。でも、あなたたちが勝てる未来はないわ」

「それはあなたの中だけでは、でしょうっ！」

立ち上がったシャルロットが再びスコールへと肉薄する。

世界初のデュアル・コア搭載機の『輪廻の花冠』のその最たる特徴は、二つのISが合体したことによる圧倒的なスタミナだった。

「いいえ。たとえそうであったとしても、実力の差で嫌でも理解するわ」

「はああああっ！」

「ふふ。『プロミネンス』ッ!!」

スコールの両腕に備わっている鞭が炎を纏い、シャルロットを襲う。

離れば全方位を対象とした熱波、そして近距離では火球とこの鞭が迫る。

「くっ、このおっ！」

近接デュアルブレード『ジキル・ハイド』を両手に持ち、瞬時加速で距離を詰めて少しずつではあるがスコールに迫っていく。

だがそれでもやはり、機体の性能は上がっても操縦者同士の実力差が縮まることは無い。

「哀れね。……いえ、別に貴女がどうであれ、私がすることに変わりはないわ！」

スコールの鋭い蹴りが、シャルロットの柔肌を切る。

ISスーツに守られていた部分が切れ、鮮血が流れた。

「ふふっ。絶対防衛とはいえ完璧ではないもの。血も出ちゃうわ」
「くっ……！」

「あら怖い。…あつ、そうね。貴女を傷つけちゃったら、彼が怒っちゃうわね。それは確かに怖いわ」

「……そうやっていつまでも、剣だけに怯えてた方が楽に終わりますよ」

「そう？楽しみにしてるわ」

「ああ、楽しみにしている。だが、師匠の手は借りずとも、私たちがお前に鉄槌を下してやる」

「ふふ、期待してるわね。きっと、素晴らしい力を見せてくれるのね？」

あくまでも笑みと余裕を崩さないスコール。

圧倒的な力の差。地力でも、機体の性能でも、そして機体が誇る武装でも、全てに置いて優っているという自信があるのだ。

「正直、あなた達が残ってくれて嬉しいわ。イギリスと中国の子は、負けん気に溢れていて何をするか分からないもの」

「……それはつまり、僕たちなら何をしてくるか分かる、と？」

「ええ。あなた達はあくまで考えられる範疇で動く。予想外の動きをしても、それは想定外じゃない。対応出来る範囲内よ」

その余裕はシャルロットとラウラが基本的な動きを一切怠つておらず、基礎練習をサボっていなかったからこそその、スタンダードすぎる責めのため。

「あなた達は、攻めてきても怖くはない」

シャルロットを見下ろしながらそう告げたスコール。

だが、その瞬間。

「グッ……ッ!？」

彼女の身体が、その身に纏う『ゴールデン・ドーン』ごと真横に吹き飛ばされた。

「……な、何が……？」

「ようやくだ。待たせた、シャルロット」

「ううん。大丈夫だよ、ラウラ。行けるんだね？」

「当然。辺りの空間は把握した。援護は任せるぞ」

「うんっ！」

呆氣にとられるスコールと、先ほどまでとは違って笑顔で並び立つシャルロットとラウラ。

ボロボロになっていいるシャルロットの目にラウラに対する恨みなどもちろんなく、好戦的な笑みを浮かべてスコールを見つめていた。

「さあ、これからだ……」

「……ふふ。少しは、楽しめそうね……っ！」

ラウラとスコールの言葉を皮切りに、両陣が勢いよく飛び出す。シャルロットとラウラの、反撃が始まる。

◇

「……ふふ」

地面から上の半球を全て埋め尽くすほどのエネルギー波。

眼前でそれらに覆われたオータムを見届けた簪は肩の力を抜いた。

「初実践にしては、うまくいったかな」

砂煙を巻き上げ続けるそこから目を切り、ISを解除する。

先程までの戦法は、様々な武装をまるで手足のように同時に扱うため、肉体的にも精神的にも疲労が凄まじく溜まる。

そのため、こうして適度な休息を取らなければならない。

「……お姉ちゃんは大丈夫だと思っし、とりあえず先に――」

「油断大敵火がボーボー、ってなあ。クソがキィ……！」

「――っ！」

進もうか、と考えたその時。

ISを展開はしていないものの起動していた簪の視界に、突如として警告画面が現れた。

そして、そのを聞くまでもなく簪は自分を狙っているものは分かっていた。

「くっ、まだ……！」

「詰めが甘えところは、姉にもあいつにも似てねえなあ！」

倒したはずの相手、オータムが展開していたISは、アラクネとは全く違うもの。

敵の情報を得ようと視界に映るウインドウに目をやる時間も簪に与えることなく、オータムは攻撃を開始する。

「死ねや！」

「お前がな。『雷轟』」

マシンガンの連射で確実に簪の命を狙っていたオータム。

そんな彼女を、少し離れた場所でのアリーシャの時と同じく、時守の攻撃が襲った。

「何っ!?なんで、テメエがここに！」

「おんなじ質問しかできひんのかお前ら。あのチビをぶっ倒して助けに来た。ただそれだけや」

「くそ……！」

不意打ちを不意打ちで止められ、オータムは自分が勝てないことを悟った。

ISが完全に使える状態であればどうにかなったかも知れないが、今はできない。

まして、憎たらしいがかなりの強さを持つマドカを倒してきた時守相手に、生身で勝ち目がないことを理解したのだ。

「んじゃ、眠っとけ」

「ぐあああっ！」

オータムの背後へと近づき、その首筋に電流を流すことで彼女の意識を断つ。

膝から床に崩れ落ち、持っていた銃を蹴飛ばして簪の元へと歩み寄る。

「悪い。遅なってもたな」

「大丈夫。問題、ない」

「嘘ついたらあかんで」

「あうっ」

時守が軽く簪の額を小突く。

ほんの少しの力だけしか込められていないにも関わらず、簪はそれに押されて二、三步ほど後ずさった。

「ほら、めっちゃ疲れてるやん」

「……別に押さなくても良かった」

「ん、それはごめん」

「お詫びに、ぎゅっとして」

時守に両腕を伸ばし、上目遣いで頼む簪。

彼女のその愛らしい行動を見て時守が我慢出来るはずもなく、簪が想定していた1.5倍の力が込められて抱きしめられた。

「剣、苦しい……」

「嫌やった？」

「……んーん。ヤじゃない。……怖かった。もう、帰りたい……」

「お疲れさん。俺も出来たら速攻帰ってみんなとコタツ入ってゆっくりしたいわ」

「それ、いいね。みかん食べながらアニメ見て、ボケーつとしたい」

時守の胸に顔をうずめ、ただ彼の腕に抱きしめられ続ける簪の表情は、どこか安堵したことを感じさせるものだった。

「ま、それすんのは学校帰ってからになるけど、頑張れるか？」

「……ん。頑張ろうね」

彼に向けてうつすらと笑みを浮かべて見上げる。

疲労が溜まっていることは自分でもわかっていた簪だが、こうして自分の危機を救ってくれた彼を前に、泣き言は言わなかった。

抱きしめられていた腕から自分の力で抜け出し、振り返って彼に背を向ける。

「うん。もう、大丈夫。とにかく今は、先に進もう。……あれ？」

いつもなら自分の言葉に返事をしてくれる彼が、返事をしてくれな

い。そしてさらに、先ほどまでウインドウに表示されていた彼の位置情報や機体の情報が消えていた。

不思議に思い振り返ると――

「……剣？」

――そこに、彼の姿はなかった。



「ぐうっ！そ、んな……ことが、あり得るはずがっ！」

「哀れだな。実際に、目の前で起きていることだろう」

「そんな……うぐっ、ま、また……！」

時守が簪の前から消えたとほぼ同時刻。

それまでは圧倒的な劣勢にあつたラウラ・シャルロット組が、スコールを圧倒していた。

「そこっ！」

「きやあああっ！いつまでも、調子に乗らないことねっ！」

「シャルロット、下がれっ！」

「させるはず——」

接近して大量の銃撃でスコールのSEを削るシャルロット。

しかし、二人の間にある圧倒的な実力差に変わりはなく、吹き飛ばされた勢いをうまく利用してシャルロットに急接近するスコールを見て、ラウラが叫ぶ。

その声を聞いたシャルロットが後退しようとしていたところに、スコールが迫る。

瞬間。スコールが、操るIS『ゴールデン・ドーン』ごと静止した。

「ありがとラウラっ！助かったよ」

「これが今回の戦いにおける私の役割だからな。シャルロットは攻めに徹してくれ」

「うんっ。攻めは任せてねっ！」

「——ないでしょうっ！……ま、また一瞬で……」

シャルロットがスコールの近くから離れ、ラウラの元へと戻って来たとほぼ同時。

スコールの動きが再開し、先ほどまでシャルロットがいた場所への『ゴールデン・ドーン』の尻尾による薙ぎ払い攻撃はもちろん空振りに終わった。

「だから言ったんだ。お前に鉄槌を下す、と。教官がお前たちにどういう気持ちで、どういう理由で手を貸しているかは分らん。だから、私たちはここにそれを聞きに来たんだ。その前に、貴様らは単純な敵だからな」

「ここに来ることを決めた時から、剣と楯無さんに協力してもらって、みんな強くなったんだ。簡単に負けるつもりはないよ」

「種明かしは流石にしないようね。でも、なんとなく理解できたわ」

額に汗を浮かべ、頬にも伝う。

そんなスコールの眼下では、ラウラが一切の油断を感じさせない表情で彼女を見つめていた。

「ドイツの第3世代機、『シユバルツエア・レーゲン』に搭載されているA I C。その拘束度は操縦者の集中力に依存する。……まさかとは思っていたけれど、あなたが私の周囲の空間ごと止めているのね」
「お見事、その通りだ。師匠命名『世界』^{ザ・ワールド}だ。どうやら日本のコミックに出てくるキャラの技の名前らしいが、私のこれと酷似しているようだな。A I Cをかけた対象の時を止めるかのような静止力、と考えればそれより上かもしれないと言われたものだ」

「でも、その集中力を保つことができれば止められない。そうでしょう?」

「ああ、そうだ。止めてみる。もつとも——」

ふと、ラウラとの会話の途中に違和感を覚えるスコール。

そして、先ほどまで自分と接近戦を繰り返していた人物がラウラの近くから消えていることに気づいた。

「しまっ……!」

「——リミッターを外したシャルロットについていけるのなら、な」

「はああああっ!」

気づいた時にはもうすでに遅く、背後からシャルロットが瞬時加速で一気に迫っていた。

彼女が操るI S、『輪廻の花冠』は世界初のデュアルコアのI Sとなっている。

ということはもちろん、機体のスペックや格納されている武装の性能も格段に上がっている。

唯一第二世代である『ラファール・リヴァイブ』を操っている時ですら操縦技術で穴を埋めていた彼女が『輪廻の花冠』を完全に扱えるようになれば、正しく鬼に金棒なのだ。

「く、ああああっ！……っ、に、逃げられない……っ!?」

「逃がすわけないだろう。ここで、決める！」

「うんっ！そのための、今までの守りだから！」

射撃技術以上にこの数週間シャルロットが磨きをかけていたのが、操縦技術だった。

第二世代である前の機体と比べてスペックそのものが完全上位互換と言ってもいいほどに跳ね上がった暴れ馬を、彼女はこの短い期間で完璧に扱えるようになったのだ。

それこそ、速さに自信のある『白式』や第四世代の『紅椿』にも匹敵するほどの速度を手に入れていた。

「はあああああっ！」

「なっ、く、うう……」

「……今のシャルロットの攻撃でお前のSEは0になった。お前の負けだ。ISを解除しろ」

「まさか、まさか本当にここまでやるとは思わなかったわ」

シャルロットの猛攻の勢いそのままに沈んだ『ゴールデン・ドーン』
ラウラの言葉通りそのSEは枯渇しており、動力となるISを動かすエネルギーすらも尽きていた。

半ば諦めの表情を浮かべたスコールが壁にもたれかかるようにして座る。

その体にはもう、ISは展開されていない。

「私の周りの空間を止めることで、その中の時間を擬似的にでも停止させる……。そして、最後のスパートのために、あえて余力を残すように立ち回ったあなたも、見事よ……」

「敵に褒められてもな」

「ラウラ、行こう。……もう動けないみたいだし、ISだって再起不能。他のとこの助けに行かなくちゃ」

「ああ、そうだな。鈴やセシリア、もしもう始まっているなら嫁たちのところにも行かねばならん」

くたり、と頭を垂れるようにして力なく降伏するスコール。

その様子を見てラウラとシャルロットは敵意はなく、脅威ではない

と判断し、駆け足でその場を去った。

「ふ、ふふっ……。本当に、面白い子たちね。まさかこの短時間でここまで成長するなんて」

普段は真意が分からないような言葉をよく使うスコールだが、その言葉は彼女の心の底からくるものだった。

キャノンボール・ファストの時やエクスカリバー事件の時と比べ、格段にその力、技術が向上している。

明確な目標設定があり、期限が定められればこれほどに伸びるのか、というぐらいに力をつけたのだ。

「……でも、残念ね。あの二人はもう止められないわ。あなたたちにも、私たちにも。誰にも止められない」

憂うような表情でシャルロットとラウラが駆けていった通路を見る。

そこには、先ほどまでと変わらずどこか諦めたような表情があった。

「今までの全ては、篠ノ之束の手のひらの上。あの化け物に敵う人なんて、存在しない、わ……」

そう一人零し、スコールの意識は落ちた。

それと同時に、彼女の右手の中に収まっていた『ゴールデン・ドーン』の待機状態がゆっくりと、小さく輝きだした。